

ハヤテのごとく！～another combat butler～

バロックス(駄犬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

にじファンでハヤテのごとくの小説を書いていました。 諸事情でこちらの方へ移動です。 この作品はオリキャラを混ぜた話になっています。 基本原作基準です。

pixivでも掲載中。

目次

第一章 型破り執事、旋風編

第1話く another combat butlers | 1

第2話く 俯いた心を上向きにするには常にポジティブを維持する

ことく

5

第3話く 人生の転機はいつも意外なところで

12

第4話く 一流への道もまず基本からく

31

第5話く 昔は根性と気合でなんとかなる時代だったけどく

40

第6話く 休日の過ごし方く

56

7話く 想いを忘れないことく

71

第8話く 夏を制する者は受験を制する？ 嘘だね！僕ダメだった

もんく

84

第9話く そうだ、学校へいこうく

115

第10話く 潜入の基本とは自然と一体となることく

125

第11話特別編く 不気味な執事とお嬢様の来訪く

150

第12話く 勢いに任せた行動は後に破滅を呼ぶく

166

第13話く ドラえもん の尻尾を引っ張ると何が起きるのかく

174

第14話く 情・報・収・集く

183

第15話く 出会い一つで変わった傭兵のお話く

193

第16話く 諦めることの重要性諦め無いことの重要性く

215

第17話く 男には折れてはいけないときがあるく

240

第18話く むかつくお前にアッパーカートく

253

第19話く 血のつながりよりも大切なものく

275

第20話く 鳥目の人は夜に懐中電灯忘れずにく

296

第21話〜レッツゴー鷺ノ宮〜 | 303

第22話〜RAGING WAVES〜 | 331

第23話〜不幸の度合いは人それぞれ〜 | 348

第24話〜忘れちゃうものは忘れちゃう。だってアホだもの〜

362

第25話〜第二部だけどスタートはなるべく早いほうがいい〜

381

第26話〜マラソンは楽できないスポーツ〜 | 403

第27話〜争いを生むのはいつも人の我欲〜 | 425

第28話〜人生はマラソン、もうゴールしてもいいよね〜 | 440

第29話〜執事クエスト、その執事アホにつき〜 | 451

第30話〜都合良く強いキャラが集まる訳がない〜 | 461

第31話〜暴れていいのは喧嘩だけ〜 | 481

第32話〜彼女が剣道をやめた理由〜 | 493

第33話〜ロボは永遠の男のロマン〜 | 510

第34話〜赤いからって通常の三倍早く動けるとは限らない〜

526

第35話〜そして伝説へ?〜 | 542

第36話〜それは誰かの陰謀〜 | 556

第37話〜第一回白皇学院缶蹴り大会前編〜 | 577

第38話〜第一回白皇学院缶蹴り大会後編〜 | 588

第二章 型破り執事、激闘編

第39話〜始まりが近づく、そんな事も知らないで過ごす午前午後

〜

第40話〜月の光って誰でも綺麗にできる〜 | 601

610

第41話	月下死神の調べ	621
第42話	罨には自ら飛び込む、これ馬鹿	631
第43話	人を見かけで判断しない	640
第44話	昨日の酸素は今日の敵	653
第45話	宇宙一馬鹿な執事	663
第46話	男のロマンに口出し無用	675
第47話	最後に残った大きな手掛かり	686
第48話	夢の中で、会ったようなく	694
第49話	呪いなんて信じない	707
第50話	トラウマの対処法ってのはなかなか見つからない	722

第51話	祭りではいくらお金を用意しても足りない	734
------	---------------------	-----

ない

第53話	虫コナーズでは虫は殺せない	754
第54話	叩いて被ってジャンケンポン	768
第55話	喧嘩は祭りの華	784
第56話	混迷困窮のふえすていばる	794
第57話	執事と生徒会長と小さな人形	804
第58話	意外と近くにそれはある	815
第59話	男も女もお見合いする時期は決まってる	829
第60話	職業は全身黒タイツです	840
第61話	全て遠き理想郷、そんな所に僕は行きたい	850
第62話	どこでも決まる上下関係	867
第63話	時にはアリの気持ちになってみて	873

第64話く刈り取る者く

885

第65話く旅立つ先に幸あれく

898

第66話くルール無視からの強制退出く

906

第67話く我思う故に分からずく

915

第68話く普通とお嬢様く

924

第69話く夢の中より夢のようく

936

第70話く下田温泉湯煙事情その1く

951

第71話く下田温泉湯煙事情その2く

959

第72話くどんなに時が過ぎてもく

966

第73話く来るべき対話(嘘)く

982

第74話くnobody is perfectく

989

第75話く自分の話を他人がしているのを見ると腹が立つく

1002

第76話く後悔したくなければペロに餌やりなさいく

1012

第77話く狂気と怒りの鉄パイプく

1023

第78話くその涙は誰のために流すのかく

1031

第79話く気付けば大切なものばかりく

1040

第80話くあの日々を覚えてるく

1050

第81話く黒き死神の最期く

1067

第82話く人から貰えた物はなんだって嬉しい。それが例えアレ

でもく

1078

第83話くいつか返そう。思いもこめてく

1092

第84話くどんな状況になってもキャラがぶれないのはいいこと

だく

1106

第85話くサブとメインは悩みの度合いが違うく

1118

第86話くレッツゴー鷺ノ宮、出張編く

第87話くレッツゴー鷺ノ宮、修行編く

第88話く世の不思議とは常に身近にあるものく

第89話く空を自由に飛べたらと、屋上へ行つた退職後の夏く

1155

第90話く春と義碗と新学期く

第91話く内容のない物語く

第92話く少年は練馬の河川に流れてくる人を見たく

第93話く21世紀、彼のストレスは増え続けるく

第94話く教室内の支配者（失望）く

第95話く昼食談義く

第96話く出会いの日には爆発をく

第97話くすれ違いならぬ、誤解の場く

第98話く山の空気は美味しい、山で吸えば一段と美味くなるってよ

第99話くなぜ山に登りたがるのか。山があるからじゃないの？

第100話く100話記念なんてなかったんや!!く

第101話く熊に死んだふりは効かないく

第102話く冬眠しない熊を穴持たずというく

第103話く教えて欲しいことく

第104話くお騒がせ小人、再度現るく

第105話く三千院家、女たちの夜く

第106話く夜の世直しはアイスを求めてく

第107話く風呂上りのアイスはなかなか美味いく

136713591352133613211308129812871276

1270

12491234122512151206119211791167

114711321126

第108話く王は人の心がわからない、的なく
第109話く王は人の心が分からない、けどく

第三章 裏か表か

第110話くテル、バトルドームをするく	1405
第111話くテル、バトルドームで負けるく	1419
第112話くテル、愛沢家で執事になるく	1436
第113話くテル、寂しい夜に天使を見るく	1448
くこれまでの登場人物たち、まとめくその1	1466
第114話くテル、心理カウンセリングを受けるく	1472
第115話く千里、新居とアルバイト先を見つけるく	1490
第116話く王様、ひとり暮らしに苦しむく	1510
第117話く一筆啓上“正体”が見えたく	1536
第118話くハヤテ、昔話をさせられるく	1549
第119話く一筆啓上“監視”が見えたく	1564
第120話く一筆啓上“仕掛け”が見えたく	1574
第122話くNice boatく	1587
第123話く緑の亀を蹴り上げろく	1600
第124話くその面(ツラ)を叩きに行くく	1616
第125く筋肉式和解術く	1630
第126話く後始末を任されたのは伊澄く	1644
第127話く集まる人々く	1655
くこれから先の未来く EX. 01	1672
第128話く白銀拓斗は人間を辞めたようですく	1679
くこれから先の未来く EX. 02	1689
第129話く変貌したその男く	1699

第130話	邂逅する過去と未来	1711
第131話	過去を消そうとする未来	1726
第132話	未来に立ち向かう過去	1739
第133話	闘いが終わるといふ事は、勝敗がついたということだ	1750
第134話	笑わないアイツに、笑顔を……	1759
第135話	テル・ザ・リング、執事の帰還	1769
男の旅が終わる時	END	1785
第136話	一夜だけの小さきユメ	1799
第137話	一夜だけの小さきユメ	1810
第138話	一夜だけの小さきユメ	1818
第139話	終わりの始まり	1826
第140話	終わりの始まり	1835
第141話	終わりの始まり	1841
第142話	終わりの始まり	1851
第143話	終わりの始まり	1857
エピソード	遠方あなたへメッセージを	1866
最終章	call my name	1883
第144話	ミコノスにて、メイドさんは夢を見る	1883

第一章 型破り執事、旋風編

第1話〈another combat butler〉

皆さん、知っているだろうか 東京練馬区に存在するお金持ちの屋敷を……

知っているだろうか、ひよんなことからその屋敷のお嬢様に仕えることになった

少年執事のことを……

お嬢様と執事はちよっぴり天然さんでちよっぴり勘違いしていて

それでも深い絆で結ばれているのです。

そしてそんな彼らの前に執事と呼べるか分からない、異常で奇つ怪な執事が一人……

彼の名前は……

まだない。あるにはあるがここで教えることはできない

これから始まるのは一人の少年の記憶を巡るはてなき物語、その序章である。

1月8日

まだ年始の慌ただしさと冬の寒さが漂う東京の街の中。

その道を歩く二人の男女。

「なぜ私が買い物をしなくてはならんのだ」

そう文句を呟くのは金髪のツインテールが目立つ小柄な少女。

「えっと、一応ですけど僕の買い出しに一緒について行くと言ったのはお嬢様だった気がするんですが……」

水色の短髪の少年が買い物袋を片手に苦笑いを浮かべる。

彼の名は綾崎ハヤテ。 昨年のクリスマス、親から渡された一億五千万の借金に進退極まった彼は営利誘拐を思いつく。

そして誘拐しようとして声をかけたのが三千院ナギだった。 その時に掛けた言葉は

「君が欲しいんだ!!」

(人質として)

これがいけなかった

コレを聞いた年若いナギお嬢様は……

「わ、分かったよ……その代わり、浮気はダメだからな!!」

愛の告白として受け取ってしまったのである。

その後ナギが別の誘拐犯に誘拐されてしまい、それをハヤテが救出。

そのお礼として彼は三千院家の執事として雇われることに

「お前、私の執事をやらないか?」

そして様々な困難に巻き込まれながらもそれを乗り越えたナギはハヤテに絶大な信頼を寄せている。

そして現在に戻る

「だいたい、こんな距離を歩くななんてめんどいこと限りないし、疲れるだけではないか」

ダルそうに話すナギは仕方なく歩いているように見える。

(しかし、マリアさんもなぜお嬢様と一緒に買い物に行かせるなんて) 心の中でハヤテは呟く。 元々マリアが言い出したことだった。

今日の朝、三千院家屋敷。

「買い物ですか?」

ハヤテがそう聞く相手はメイド服を着た女性。

「はい。今日の夕飯の買い出しです」

彼女の名前は三千院家に仕えるメイドのマリア。

「できれば、ナギも連れて行ってくれませんか?」

持っている箒で楽しげに掃き、ハヤテに話す。

「いいですけど、でも来てくれますかね？」

ハヤテはうーんと唸る。ナギはお嬢様で昔の不登校、現代で言う引きこもりの気があるのだ。しかし当人に話すと……………

「もちろん行くぞハヤテ！」

とナギは目を輝かさせて承諾した。

(これでハヤテ君とナギの仲が近づいてくれれば……………)

と思うマリア。これは決して遊んでいるのではなくナギがハヤテに好意を寄せているからだ。

しかしハヤテはナギを命の恩人として考えておらず、恋愛対象には入っていない。

だからこそ二人の間には大きな爆弾がある。その爆弾処理をマリアは行っているわけだが

(もしナギとハヤテ君が付き合えば……………)

これで解消出来るものなら簡単だがそれは同時にロリコン(幼女性愛者)への目覚めの可能性があるのだ。

(そうならないことを願いますが……………)

時間は戻り、そんな思惑があるとは知らないハヤテは

「ではお嬢様、今から必要なものを買うのでちよつと待っていて下さい」

マリアの思惑通りとはいかずナギを置いていく始末。

(むう……………ハヤテめ、せっかく二人だけの買い物だというのに)

すぐ近くにある店の中でハヤテが品物を選ぶのを見ながらふてくされた感じに思うナギ。

とそして……………

「なにかないだろうか……………」

楽しいことはないだろうかとナギはフラフラと歩き出してしまっ

た。

「お嬢様、終わりましたよ。 帰りますかー」

ハヤテが戻ってきて時にはナギの姿はもうなかった。

「お、お嬢様あああああああ!?!」

東京の空にハヤテの声が響く。 こうしてナギはハヤテとはぐれてしまったのである。

ーそして同時刻。

「出ていけやこのボケエエ!!」

どこかのラーメン屋から男の怒鳴り声も響き渡っていた。

第2話く俯いた心を上向きにするには常にポジティブを維持することく

ここは東京練馬区のどこかにある街。

年始の忙しさ目立つ今日この頃

「出てけやこのボケエエ!!」

東京の寒空に男の怒号が響き渡る。それと同時にラーメン屋から一人の少年が吹き飛ぶ形で放り出された。

「痛エーなコノクソジジイ!! いきなり出てけったあどどういう事だ!!」

中から放り出された黒髪、短髪の少年は体を起こして声を上げる。

「どういう事もそういう事もねえんだよ!! ラーメンの修行に失敗した奴はつまみ出すって約束しただろーが!!!」

店から出てきたのは白髪の老人だ。そのラーメン屋の店長と思われる人物は眉間にシワを寄せ、額に青筋をうかべている。

「1ヶ月で俺が認めたら雇ってやる。ってのが約束だろーが! まだ一週間すら経ってねーよ!!」

少年は今にも飛びかかってきそうな勢いで老人に近づくが、老人は怯まず返す。

「そうとも、だがテメーの作ったラーメンは……何だコレはよオオオ!! 黒いぞコレ!?!ソバじゃねーんだぞ!! 客から苦情と救急車の電話でイッパイだアアア!!」

その少年の目の前に彼が作ったラーメンを差し出す。ラーメンの麺は黒く、スープは何故か紫色だった。

しかし少年は冷静に。

「オイ、ジジイ違エーよ。それはアートだ。俺の伝説的な技術故の色合いだぞ」

「口で言ってる割に鼻つまんでんじゃねーぞガキ。だから4日で辞めさせてやるんだよ」

店長は服のポケットから何かを出すと少年の目の前に落とす。

チャリーンと寂しい音が響く。

「ナニ…コレ？」

少年は目を細めて落ちた何かを見つめる。

「何も一人で記憶喪失のお前を無一文で追い出すわけにはいかねえ。

4日間の給料だ。分かるな？ 俺の慈悲よ」

店長は煙草に火をつけてくわえる。

少年は拳プルプル震わせて叫んだ。

「五百円じゃねエエエかアア!! 記憶喪失で住む所も名前もねえ奴に五百円でどう暮らしてけつてんだアアア!!」

その怒号にすかさず店長も反応する。

「知るかボケエエエ!! こっちは慈善事業じゃねーんだよ!! これ以上ここに居座んなら営業妨害で警察につまみ出すぞクソガキイイ!!」

「チクショオオオオ!! 覚えてろジジイ! もし俺が死んだら三途の川にやってきたアンタを沈めてやるからなアアア!!」

少年は希望のないお金を握ると猛ダツシユでその場を離れていった……

事実、ここに記憶喪失で名無しの少年の無職生活が始まったのであった。

—我が輩は少年である。 名前はまだ無い。

前回の話から彼は記憶喪失である。 自分の名前は勿論のこと、両親、ラーメン屋で雇われるまでの記憶も覚えていない。

ことの始まりは九十九里浜を散歩していたラーメン屋の店主が浜に打ち上げられている少年を保護したことから始まり……まあそんな事はあとからやっても言いが少し省いて。

一週間の生活の後、ラーメン修行の話をかされ、成功すれば寝床を確保できたのだが……

彼の料理は常人よりも一線を越えており、それ故に1ヶ月の予定が4日という事になったのだ。

彼は今、絶望的な状況にある。

「あー、500円じゃ一日持たねえぞ」

店を出たのが昼過ぎだったが今はもう空は紅色に染まりつつある。

「あのジジイめ、これでどう生きてきゃあいんだ。今時500円なんて1000円より儂エーよ。俺あんま使わないもん。絶対1000円より溜め込むクチだから」

手のひらの500を見つめながら歩く。

「500円あれば10円ガム50個買えるって意味ねえか……ん？」

ふと軽快な音楽が聞こえる方に顔を向ける。

その時だ。彼の闘争心をたぎらせるものが見えたのは少年が見たのは電化製品店に売られている大きなテレビだったが、気になったのテレビの内容である

夕方の東京ニュース

「今日午前未明〇〇区で誘拐事件が発生しました。誘拐事件の現場に聞いてみましょう。結野アナ、結野アナ」

「はい、犯人は黒いリムジンの二人組、未遂事件となりましたが未だ逃走中とのことですよ」

それ以上の内容を少年は聞くまでもなかった。「誘拐」と二文字

が聞ければ後はどうでも良かった。

―誘拐。オイ、誘拐。二文字の裏にあるこの魅力はなんだ？ 一獲千金とか出来ちまうのかコレ？ 億とか貰えたらハーゲンダッツいくつ買えんだコレ？

少年は理解した。これをやり切ればまさにキャッチザドリーム。ドリームザキャッチ。

しかし心のサイレンに少年は思いとどまる

―誘拐は犯罪です。

そうだよオイ、捕まったら最後、出所しても前科持ちの人間を雇ってくれるだろうか……

―誘拐は犯罪です。

仮にも俺、メインだぞ？ メインはこんなことしていいのか？

―誘拐は犯罪です。

なんか変な声がするな……

―誘拐は犯罪です。

つーかそろそろ止めない？ イライラしてきた……

―誘拐は犯罪 r y

「うるせええええ!!」

頭のなかのサイレンをシャウトする

「男は度胸！ 挑戦心をいつも持ってってジジイもいった。だったら話は早い。そこらの店で軍手とロープを……」

適当な理由で自分のする事を正当化するのは止めましょう。

そしてロープ、軍手を揃えたわけだ。

端から見れば変人に見えるかもしれないがその瞳は確固たる決意が見えた。そんな少年の手にはヤキソバパンが握られている。

「このヤキソバパンは聖なる作戦、聖戦に勝つための景気付け品で……」

——結局ジジイみたく小さい店でコツコツやってもどうにも出来ねえこともあるじゃねえか。

追い出されたラーメン屋のことを考えながらヤキソバパンを口に運ぼうとするが

ふと目に映った光景に手の動きを止める。

「うっ、ぐす……」

「おいおい泣くなよ」

少年の視線の先には泣いている男の子とその子を泣きやませようとする少女が見えた。

「どうしたどうしたあ、自分より弱そうな奴虐めてお前はジャイオンか？」

一旦自分の目的を忘れて少年は少女に問いかける。

「なんだお前は、別に私が泣かした訳ではないのだぞって誰がジャイオンだ!! 私には三千院ナギと言う名前があるのだ!!」

金髪ツインテールの少女ナギは目をつり上げて少年に反論するが少年は続ける。

「いかんよ君、ジャイアニズムかざしてつと最終的にス○夫みたいな奴しか友達ができなくなるぞ」

「お前は少し人の話を聞けよ!!」ナギは少年に突っ込む。そして男の子の頭を撫でるが泣き止まない。

「親と離れてしまったらしいのだ。親が安物求めている間にはぐれてしまったらしい」

その言葉を聞き少年は頭を掻きながらため息をつき、

「虐めじゃなかったのか……」

「だからそうだと——」

ナギが言い終わる前に少年は泣いてる子にヤキソバパンを差し出した。

「の○太……」

「いや、お前名前知らないだろ」

ナギは突っ込むが少年は続ける。

「男の子は簡単に泣いちゃいけねえのよ。ホレ、このヤキソバパンやるから母ちゃんと思つて食べ」

「お前パンを母親に見立てるなんて無理あるだろ。最後なんて母親食えつて言ってるもんだし……」

なんだかんだでヤキソバパンを食べた男の子は笑顔になり泣き止んだ。

その後、母親も戻ってきて仲良く帰っていった。

「まったく……もう少しマシンな言い方はできないのかお前は？」

親子が去っていくのを眺めながらナギは言う。

「バカヤロー、男つてのは物心ついたらテメーでテメーを育てていくもんだ。最終的には自分が変わるしかねえんだよ」

少年はナギの言葉を素っ気なく返す。

「そんな理不尽なこと言われても分からん……ハヤテとは大違いだ」
今この場には居ない人物を思い呟くナギ。

「なに？ ハヤオがどうしたって？」

「何でもない。 お前名前は？」

少年に突っ込むのも疲れたのかナギは少年の名前を聞いてきた。

当然、少年には名前は無い。

少年はふと考え込み。

「……エドワードとでも名乗っておこう」

勿論偽名である。 ナギは変な名前だなといった感じで少年を見ると

「ふむ。 ではエドワードよ、私は帰る。 さらばだ」

帰るといつても今のナギには付き人のハヤテが居ない。 どうしてこうなったかは第1話を参照。

ナギが去って行ったのを見ると少年は自分のしたこと気づき手を顔に当てて呟いた。

「アレ？ なんて俺大事な食料あげちやたの？」

頑張れエドワード（仮）

第3話く人生の転機はいつも意外なところで

—どうしてこうなった

前回のあらすじ。 誘拐するためのヤキソバパンをあげた所から。

その後のこと、テンションが一気に下がってしまった少年はただひたすら歩いていた。

「人間ってのはなんでかなあ……ガキの涙はもう無理。最終兵器だよアレ」

少年はため息を交じらせながら自分の行動を悔やんでいた。

既に辺りは暗く、日は沈みかけている。

「どうしてこうなっちゃったかなあ……」

なんてことを言っていると、目先に自転車を停止させてうーんと唸らさせている女性がいた。

「どうしたんです—」

声に反応した女性を見た瞬間、少年は声を詰まらせた。

「えっと、自転車が動かなくなっちゃって……」

気品溢れるその声と顔立ちはあのかの聖母マリアかもしれないと少年が思ったほどだ。

実際の聖母マリアがこんな姿だったかはさて置き。

一瞬の間を置き、女性の自転車を身をかがめて見る。 動かなくなった原因はチェーンが外れていたからだった。

「あらあら、この間買い直したばかりなのに……」

とチェーンに手を掛けようとした時、少年の手が女性の手を掴んだ。

「待ってください。素手なんかで触ったらあなたの手が汚いオイルで汚れてしまいます!!」

目をキリツとさせて少年は言う。 反対に女性は突然のことに顔

を少し赤くしていた。

「ちよつと俺に任せてください」

と言うと少年はポケットから誘拐に使う筈だった軍手を取り出しチエーンを修理。

「これで良し……と」(まさか誘拐に使う軍手が役立つとは)

少年はオイルによって真つ黒になった軍手を見て思った。

「ありがとうございます。手を汚してまで……」

女性は申し訳なさそうに言うが少年はとんでもないといった表情で

「大丈夫ですよ、俺に修理させたら大したモンっすよ」

と目を輝かせて言った。

「親切にどうも、私マリアと言います」

一礼された後に向けられたのは輝かしい笑顔だった。

(こ、これは!?)

突如少年は雷に打たれたかのように硬直した。

(この痛みはなんだ? まさか恋? いや違う!)

少年はその一文字を全力で否定する。

(俺は今まで何をしようとした。そう誘拐だ。俺のしようとした罪がこの人の笑顔が俺に悟っている! 懺悔せよと悔い改めなさいと)

「あのう……」

「ハッ!! 何でしょう?」

マリアが手を目の前で振っているのが見えるとすぐに我にかえる。

「私じつは人を探しているんですが」

「どんな人ですか? 記憶力に自信がありませんけど。できれば髪型とか、身長とか色々教えて欲しいんですけど……」

先程まで誘拐を考えていたとは思えないほど少年の目は輝いてい

た。　　マリアは手でジェスチャーをしながら正確に伝える。

「女の子なんですけど、金髪ツインテールで背が低い我が儘な子なんですが……」

　　マリアは淡々と述べる。　　少年はその特徴が完璧に一致する人物がすぐ浮かんだ。

（アイツだ：夕方会ったアイツだ絶対そうだ！）

「あー知ってます。見ました俺」

「本当ですか!?　　買い物に行って迷子になったと聞いたので屋敷から出てきたんですが今頃迎えの人も行ってる筈です：どこですか？」

　　しかし会ったというのも昼の話。　　あれから数時間経っているから当然言っても意味がない。

「えーと、実はそれは――」

　　その時だった。　　猛スピードで黒い車が側を通り過ぎて行く。

「ん？」

　　通り過ぎていく瞬間、後部座席にナギがガムテープされているのが見えた。

「今のですかね？　　と言うかアレですね？　　迎えのにはガムテープされてましたね。　　なにアレ、ドメステイックバイオレンス？」

　　その隣でマリアは

「いけない！　　またあの子誘拐されています！」

　　すっかり慌ててしまっていた。　　つてか一回だけじゃないんですねと少年は心の中でツツコンだ。

「ちよつと借りますよつと」

　　少年は自転車に跨りマリアに言う。

「無理です！　　相手は車ですよ」

　　そう言えばそうだったな……と思ったが

「無理なんてしったこっちゃありません。　　それに……」

　　少年は言い掛けたが心の中で続ける。　　（俺は過ちを犯そうとしていた。　　人の大事なモノを奪うということを……今からでも変わっ

てやる！俺をチェンジ!!」

目を見開き一気にペダルに力を込め、一度ウィリー状態になるよう自転車を起こした。

「ライド○ングデュエル！ ア○セラレーション!!」
前輪を地面に叩きつけると雄叫びをあげて駆け出して言った。

「どうしましょうか……」

一人取り残されたマリアは唾然としていた。

猛スピードで走る車内の中、ナギの口に張られていたガムテープが強引に剥がされる。

「ふぎっ！ 貴様ら、もっと丁重に扱わんか馬鹿ども！」

剥がされたガムテープの痛みに口の辺りがヒリヒリするが両腕が縛られているため口でしか反撃できない。

目の前にはマスクした運転手の男。 助手席にはベレー帽を被った男。

「なあ、本当にコイツが三千院ナギなのか？」

と運転手が助手席の男に言う。

「間違いない。 金髪ツインテールで年がら年中不機嫌そうな顔……どれも三千院ナギの特徴と一致する」

「おいこら、何の話をしている？ 遺産目当てか？」

自分の特徴を言われ腹を立てたナギが問いかける。

「少し勘違いされているなこのレディは……」

振り返って答えたのはベレー帽を被った男。 顔はロシア系のような顔立ちだった。 帽子の男は続ける。

「私達はアナタを誘拐しろというのを頼まれただけですよ、前金を貰ってね」

男はフツと笑うが若干馬鹿にされたナギはすぐ睨み返す。

「貴様ら、私を誘拐して タダで済むと思うなよ！ ハヤテが黙っていないからな！」

「ハヤテ？」という名前を聞いて男は笑い出した。

「面白い！ 来れるならきてみる。 振り返ちだ」

「あのさあ」

と言うのは運転手の男。

「このお約束な展開な所悪いけどさあ」

「なんだ」

帽子の男は不思議そうに聞く。

「オレちゃんとかマスクしてんじやん。何でアンタベレー帽なの？

顔割れるよ？ どのオセロット気分ですか？」

運転手に言われた帽子の男はふう、とため息をつき一言。

「オセロットじゃない、バルトだ！」

「本名名乗んなアアアア!! 余計に顔割れるだろうがアアア!! 何で

ちよいきヤラに名前があるんだアアア!!」

「うるさい奴だな。お前には無いのか？」

バルトは男に聞き返す。男は頷き、「俺は——」と言おうとした時だ。

とその時、ドゴツと車の屋根から何かが乗っかる音がした。

「ほら、来たぞ」

ナギが不敵に笑う。男たちは顔を濁らせる。

するとフロントガラスからひよっこりと水色の髪をした少年が顔

を出してきた。

「お嬢様！ 綾崎ハヤテ、ただいま参上!!」

当然聞こえてはいないがナギが安心するには充分だった。

「どうだ！ ハヤテが来てくれたからにはもう貴様らは逃げられんぞ

！ 大人しく観念しろ！」

既に勝ち誇っているナギだがバルトは運転手に静かに指示する。

「振り落とせ」

運転手は急激にハンドルを右左に切り始めた。当然のごとくハ

ヤテは振り落とされなかったために車にしがみつく。

「速度は100キロはでてるな…そんなんでハンドル切ったら危険だ
！」

「私は狙った獲物は逃がさない」

バルトは不敵に笑いながら車の動きに揺らされる。

ナギは必死耐えながらバルトに怒鳴る。

「や、やめろ！ ハヤテに何かあったらどうするつもりだ！ 許さないぞー！」

しかし、バルトはひたたかに返した。

「フッフッフツ…… 身に降りかかる火の粉は振り払わなければなら
な……おえっ、ヤバい酔ってきた……」

「テメーはちゃんとセリフ言えエエエエ!!」

運転手がバルトに激しく突っ込む。

ナギはナギでこいつらバカなのかという視線を向けていた。

「お嬢様は絶対に助け出しますよ！」

執事として主を守ることはハヤテに課せられた最大の使命。たとえそこに危険があってもあの日誓った約束はハヤテは守らなければならぬ。

— 僕が君を守るよ

そう言ったからには有言実行。しかし、しがみついていた手から握力が無くなっていくのを感じた。

それでもハヤテは諦めない。

「まだまだあー！」

無理にでも手に力を込めしがみつく。そして顔前方に見据える
と見たこと無い人物が映った。

「エドワード？」

ナギは遠くからよく見えるわけではないが体格と髪で判断した。

「さ、さすがに車は無理だった……げ、原チャかバイクあればよ、よ
かったが…… 法律破ったらまずいと思って、先回りさせてもらった……
ぜ」

息を切らしながら言うのはまさしくあのエドワードと名乗った少年
年だった。

「エドワードなんて変な名前つけるんじゃないやねえな。 名前なんざなく

ても、真っ直ぐ生きてれば本当の自分を見つけられるかもな」
自分に言い聞かせるように少年は呟く。

「エドワードは俺が罪を犯そうとした名。これからはパピヨ―」
その名が名乗られることは無かった。

誘拐犯の車が少年を派手に跳ね飛ばしたのだ。

「あ、あ、あ、あ!! ひいちまったよちよつとオオオ!! どーすんだよコレ!?!」

運転手はパニックになるがバルトは冷静に返す。

「いいか、車は急に止まれない。取りあえず落ち着いてタイムマシンを探せ」

「お前が落ち着けエエエ!! なんでドア開けて逃げようとしてんだアアア!!」

「貴様ら、エドワードになんてことを!!」

車の中はかなりのパニック状態だった。

一方で少年は

(ヤバい、死にそう)

慣れない浮遊感を味わっていた。

(死ぬかコレ? 死ぬのか俺?)

数十メートル先にぶつ飛ばされながらもまだ考えごとをしている。

(名前無しのまま死ぬのか、まあ、バチが当たったんだよな)

諦めたかのように瞳を閉じた時、頭の中に一つ映像が映画のように流れてきた。

―この子にはどんな名前を付けようか

(誰だ?)

―そうねえ、マイケル、ルドルフとかは?

―待てよ。さすがにセンスがない、学校じゃ呼びやすいけど社会に出た時の事を考える

頭の中に浮かんだのは一組の男女だ。男の方は黒髪で女性の方

は栗色の長髪をしていた。

そして少年の視点で言えること

(なんで顔が見えない)

二人の顔は墨で塗りつぶされたようになっていた。

(これが俺の親?)

—あなたのような男の子に育ってほしいわ…でも料理ダメよ。

あなたの料理はもう劇物だから

—お前なんで前半褒めて後半叩くのいつつも……お前のように心の芯がしつかり

してれば俺は文句は言わない

—あら? じゃあこんなのはどう?………つてのは

—じゃあつて、俺の言葉と関連性ゼロじゃん

—いいじゃない決まりね! 今日からこの子は……

「そんな……」

ハヤテは目を疑った。車にひかれた少年が態勢を整えてフロントガラスにしがみついているのを見て

「ギヤアアアア!!」

「……」

運転手は血がとめどなく流れている少年を見て絶叫している。

バルトは声に出さなくても顔は青ざめていた。

「逃がすと思ったかあ?」

血を流しながら不敵に笑う姿はまさに恐怖の対象だった。そし

て少年は大きく息を吸い、力一杯叫んだ。

「テメーらみてえな子悪党はなあ! この善立 テルがあ! 成敗してやるぜコノヤロオオオ!!」

—その少年の名を善立 テル(よしだて てる)。

—善の心を奮い立たせ、道を照らす者。

—猛スピードで走る車の上。少年は悪魔のような笑みを浮かべ

て眩く。

「逃がすと思ったかあ？」

―その男の名、善立 テル。

「テメーらみてえな子悪党はなあ！ この善立 テルがあ！

成敗してやるぜコノヤロオオオ!!」

―善の心を奮い立たせ、道を照らす者。

「あわばばばば……どうするんだ……ってオメーは何してんだアアア!!」

運転手の男が目の中の悪魔から目を逸らすようにバルトを見るとバルトはドアを開けて逃げようとしていた。

「いやあ、すまんがピザ食べたくなつたから逃げるわ、冷ましたら勿体無い……あばよ!!」

バルトはそう言い残すと助手席の扉から身を丸めるように態勢をとり、車から飛び出した。

「コノヤロオオオ!! ふざけんなアアア!! 一人でピザ食ってんじや―」

その一瞬、男は前方のテルに目をやる。男はテルが右腕を振りかざしているのが見えた拳にはロープが拳を保護するように巻かれている。

「うらアアア!!」

気合いの掛け声と共にテルはフロントガラスに拳を叩き込んだ。

もの見事にガラスは砕け、ガラスを貫通した拳は男の顔をも捉えた。

ガラスに穴が空いたのを確認したテルは拳で穴を広げ、フロントガラスの半分を空けると運転手の胸ぐらを掴む。

「オイ、早く車止めろよ誘拐犯……アレ？ 止まってるのは運転手じゃねえか」

運転手を少し乱暴に揺らすが運転手は白目をむいて失神していた。

「うおい！ なに運転手の息の根を止めているのだ！」

運転手が失神しているのを見てナギが猛然と叫ぶ。

「オイオイ、別に殺してねえよジャ○アン」

「誰がジャ○アンだ馬鹿者！ ナギだ!! 三千院ナギ!! いい加減覚えろ!!」

二回も名前を間違えられたナギはテルに突っ込む。

「ツツコミは生きが良くなきゃな」

「なんの話をしている！」

「あのか二人とも大丈夫ですか？」

「うお！ ハヤテ！」

ナギが見ると助手席の開いたドアから首を出しているハヤテだった。

「よつと……」

ハヤテは軽々とドアから侵入し後部座席に移った。

ハヤテはそのままナギを抱える状態に入るがそれを見たテルが口笛を短く吹く。

「お前、大胆だなあ……」

「そ、そうだぞハヤテ……いくら非常時だからといってもコレは……」

コレというのはハヤテがナギをお姫様抱っこをしていることだ。

「そんな事言っている場合ですか!! 早くアナタも!!」

二人の言葉を振り払い、ハヤテは後部座席のドアを開け、テルと脱出をしようとしたが、

「うん？」

突然の事であった。さつきから失神していた男はハンドルに手を掛けたままでテルが手を放した弾みで大きくハンドルが切られてしまった。

車は傾きになり重量を支えきれず横転する。

「くっ……！」

ハヤテはナギを守るため、さつきよりも力を強めて抱きかかえる。来るべき衝撃から守るためだ。

—しかし

「あれ？」

一瞬の浮遊感。なぜかハヤテとナギは車から放り出される形で脱出していた。

ハヤテは数メートル上から激しく横転して電柱に激突する車を確認した。

「つと……！」

態勢を整え、コンクリートの道路の上に鮮やかに着地を決めた。

「大丈夫ですか？ お嬢様」

ハヤテは真つ先にナギの安全を確認。

「う、うむ。ハヤテのおかげでな」

「僕だけじゃ大変でした……あの人のお陰ですよ」

ハヤテはナギを降ろすと助けてくれた人物を探す。

「まさか、まだ車の中にいるのでは!？」

横転した車は危険だ。激突は以ての外、この後のことから連想するものにハヤテは嫌な感じを覚えた。

「ま、まずい!!」

すぐさまハヤテは車の方を向くが

その瞬間、大気を奮わせるほどの爆発が起こった。

衝撃までもがこちらにも伝わる。原因は横転した車がオイルを垂らしたことだった。

「お、おいハヤテ！ この展開は一体なんだ!？」

「シリアス事故は死亡フラグですが…ってなに言ってるんですか！早く助けないと！」

今は談義している暇ではない。一刻も早く助けようと車に近づこうとした。

「私も行くぞー」

ナギが車に行こうとしたとき、炎の中から一人の男の姿。

テルだった。しかし一人ではなく大人一人を背中に乗せていた。その足取りは軽い。

そして運転手を地面に降ろし、スタスタとナギに近付く。

「お…お前、平気なのか？」

ナギがこう聞くのも当然だ。テルは顔面から血を止めどなく流し、車の爆発にも巻き込まれた。心配しないほうがおかしい。

しかしテルは一方で右手で手刀を作り

「てい」

とチョップをナギの頭に振り下ろす。

「い、痛！」

パコツという軽い音がした。テルとしては手加減したつもりなのだろうがそれでも痛かったのかナギは頭を抑える。

「まったく、簡単に誘拐なんざされやがって」

「な、なに!？」

テルの言葉にナギは抑えていた手を外してテルに向き直るがテルは続ける。

「一度だけじゃなく何回もあるそうじゃねえか、不用心だったんじゃないのか？ 犯罪大国日本なめんなよ、ちっちゃいの」

「ちっちゃいは余計だー！」

「お嬢様、どうぞ」

ハヤテがナギを落ち着かせようとするがナギの怒りは収まらない。

「別に頼んでもいないのだ！」

「まあ、そんな事を言わずに……お礼をしなくてはいけませんね」

ハヤテは改めてテルと向き直る。テルは少し考えると口を開いた。

「そうだなあ、だったら俺の新しい寝床と働き場所探してくれ、今一人身で悲しいことにも放浪の身だ」

(この人僕と同じことを……)

心の中でハヤテはあの日、クリスマスの日を思い出していた。

偶然な事に、テルが言ったのはクリスマスの日にハヤテがナギに言ったのと同じだった。

「お嬢様……この人を三千院家で雇いませんか？」

「なんだと？」

ナギはハヤテの一言に驚かずにはいられない。

「この人にも何か理由が……僕と同じくらいで放浪してしまうほどの理由が」

「しかしハヤテ、全く知らない赤の他人を……」

ナギは少し戸惑うがハヤテはすかさず続ける。

「その赤の他人の僕を拾ってくれたのはお嬢様ですよね」

「うう……」

一瞬ナギはたじろいでしまう。確かにナギは赤の他人であるハヤテを拾った。しかしそれは恩人であるハヤテに好意を寄せている事からもきているが、今お願いをしているのはその恩人であるハヤテだ。

「わかった。恩人に礼をしないのでは三千院家の名が泣くからな。

だが私が雇うからにはしっかりと働いてもらうぞ！ いいな!!」

腕を組ながら憤然と言い放ったナギだが

「返事がないな……」

ナギが不思議に思ったのかそれを見てハヤテがテルの顔を見たとき、慌てて声をあげた。

「お嬢様！ この人、気絶してますよ!!」

ハヤテが驚くには理由がある。それはテルの状態だ。仁王立ちの状態で腕を組んで目を見開いたまま気絶していたのである。

「べ、弁慶だ！ 弁慶がいるぞー！」

「そんな事より早く屋敷に行きましょう！ 早く、この人が天国に行く前に!!」

その後、彼は三千院家の医療へりにより運ばれた。

—こうして、運命は動き出す

一方その頃マリアは

「あゝ、私は歩いて帰らなければならないのでしょうか……」

自転車を無くしたため、徒歩で屋敷にむかっていた。

○

—アレ？ なんだコレ、空が真っ赤だ

薄れていく意識の中、テルの瞳に映ったのは赤色に染まった空。

—アレ？ 真っ赤なのは俺じゃねーか

—アレ？ なんで俺こんなことになったんだっけ

—アレ？ コレってなんかどっかで……

「……………」

テルの視界に入った光景は天井だった。

「こりゃあいったい……」

身を起こしてみるとふかふかで高級そうなベッドの上にいることが分かった。

さらに驚くことは今いる部屋だ。装飾は西洋風、シャンデリア、ここの日本かよって言うツツコミをいれてもおかしくない状況だった。

「幻の大地って本当にあつたんだなあ」

「なにをバカなことを言っている、ちなみにお前の姿はちゃんと見えているぞ」

「うおっ!？」

いつの間にか居たナギにテルは驚き、そしてナギを目を細めてじつと見つめる。

「な、なんだよ……」

テルの視線が嫌だったのか、ナギは一步下がる。

テルはうーんと考えると顎に手を当て口を開く。

「……誰だっけ?」

ゴスツとテルの顔面にナギの拳がめり込んだ。

怒りの鉄拳をくらわせたナギは顔は静かに……だが拳はプルプルと震えている。

「お前、仏の顔も三度までっていう言葉を知ってるか?」

「どこが仏だ? 天の邪鬼の間違いじゃねーのか?」

テルの一言にナギの怒りは最大値に達した。

「お嬢様、紅茶をお持ちしましたってどうしたんですか?」

しばらくしてハヤテがティーセットを持って部屋に入ってきた。ハヤテが見たのはナギによってボロ雑巾と化したテルの姿があった。

「鉄拳制裁だ!!」

憤然と言い放つとナギは椅子にドカツと座り込んだ。そしてハヤテの淹れてくれた紅茶を飲む。

「ふう……」

紅茶を飲んで少し落ち着いたのか、ナギの顔に笑顔が戻る。

ハヤテはボロ雑巾と化しているテルに話しかける。

「大丈夫ですか？ すいません。 お嬢様はなにかと手加減を知りませんので……」

「な、何を言うかハヤテ！ 私は手加減がちゃんとできるぞ!!」

「いや、あの：お嬢様、現にここに力尽きた人がいるんですけど」

「あ、ー痛エなオイ、つかお前誰？」

ベッドに突っ伏していたテルがムクリと顔を上げダルそうに喋る。

「いや、そんな死んだ魚のような目をしないでください。 答える気が無くなるっていうか……」

困った顔のハヤテだが切り替えて話すことに

「えーと、僕はこの三千院家で執事をやらしてもらっている綾崎 ハヤテです」

「えっ？ なに？ ヒツジのハヤオ？」

「いや、違います。 シツジのハヤテです」

「バカなのかコイツは……」

テルの変なボケにナギはもうツツコミを入れるのもめんどくさくなってきた。

もう一回殴るかと考えていると、櫛の扉が静かに開かれ入ってくる人物がいた。 マリアである。

徒歩で帰っていたので少し遅れたのだ。

「すいません遅れました。 電話の人はしっかり生きてたんですね」

「あ、あなたは……」

テルはマリアを見るや否や慌てた反応を見せる。

「マリアさんですね、奇遇ですね 二度目ですね」

「ちよつと待て！

なんでマリアの時だけ態度がこうも違うのだ!!」

キリツとした目で言うテルだがナギはキャラの変わりように突っ

込まずにはいられない。

しかしテル続ける。

「なる程。このちっさいのがこの屋敷の主でお二人が使用人ということですね……ヤハリソウイウコトカ」

「ソウイウコトカつてなんで説明してないのに分かるのだ？ というより何故にオンドウル？」

一人で納得しているテルに対してナギは再び殴ろうかと思ったが話が進まなさそうなので無視して自ら話を切り出す。

「まあ、そんな事はもうどうでも良い……ところでお前、住み込みの仕事を探してるそうだな」

「まあ、そうだけだよ」

頭を掻きながら呟くテル。 ナギは続ける。

「だったらここで私の執事をやらないか？」

「へ？」

一瞬間の抜けた声を出してしまうテル。

執事とはハヤテのように屋敷の使用人の長、主人に甘いものを供えたりする人達の事である。

「本来、この屋敷の使用人は少ない方が良いのだがハヤテがどうしてもと言うのでな、私は不本意なのだが」

最後を強調するナギだが、テルは別のことを考えていた。

（ここで暮らすという事はマリアさんと一つ屋根の下ということ……イヤ、待て！ 俺は下衆な事をするためにこの人と会ったんじゃない！ 今度はこの人のために恩返しを……）

何か決意したかのようにマリアを見たテルは呟いた。

「やってやろうじゃねえか……」

フツと笑みを浮かべるテル。そしてベッドの上で立ち上がり高々と拳を突き上げた。

「この善立 テル、今日からこの三千院家の執事として働いてやろうじゃねえか!!」

「あ、テルさん！ 急に激しく動く……」

ハヤテが慌ててテルを止めようとしたがその瞬間
ズキン！

「ギャース!!」

「うーむ、バカにこの仕事は務まるのか？」とナギ。

「まあ、面白そうだから良いんじゃないですか？」

とマリアは楽しげな顔をする。

すると顔を歪ませながらテルは身を起こした。

「ではまず面接からお願いしようか」

「そんなものあるわけ無いだろうが!!」

三千院家にナギのツツコミが木霊した。

こうして、異常で奇っ怪な執事が誕生したのである。

一方。

「ふむ……作戦が失敗してしまったか……」

どこか市街地の民家の屋根の上。立っているのはベレー帽でロシ
ア系の男、バルトだ。ピザを片手に

「いかなあ〜これではまたボスにどやされるな……あつ、ヤベ、電話
だ」

バルトは右手の携帯を開いた。

「あーボス？ 失敗しました。んじや失礼」

「いや、あの、バルトさん、漠然としていてよく分からないのですが
……」

中から聞こえるのは女性の声だ。バルトはピザを食べながら

「あーピザうまい、ムシャ……ボスの所にも一枚送りますか？」

「人の話を聞きなさい！そしてなんと行儀の悪い……また情報が入り
次第に連絡します。それまで待機を……」

「ハイハイ、んでボス、何がいいです？ マルゲリータ？ トマチヨ
ビーノ？」

その瞬間、何かが潰されたようにグシャつという音が聞こえ電話が

途絶えた。

バルトはピザを食べながら一人呟く。

「またあの電話壊したな。素手で電話潰すとかどういう握力してんだ……」

携帯をしまうと最後のピザを口に運びニヤリと笑った。

「あの男、面白いな……」

頭に浮かべるのは勿論テルだ。跳ねられても車にしがみつき、燃え盛る車から運転手を救助するあのタフさ。

いずれまた会う事になるだろう。そんな事を考えていると下の窓が開いた音がし、大声が響いた。

「アンタア！ 泥棒よオオオ!!」

「泥棒じゃない、バルトだ!!」

バルトはそう言うのと屋根から下るように助走をつけ、他の屋根に飛び移った。

夜月に映えるその移動する姿はまさしく忍者のようだったという。

「忍者じゃない、バルトだ!!」

—こうして物語は始まるのだ。

—まだ見ぬ脅威が暗躍するなか

—過去と未来を巻き込んだ戦いが始まる。

「—つてお嬢様、こんな内容でしたっけ 『ハヤテのごとく!』は……」

「あるわけ無いだろ!? 誰だこんなのを書いた奴は!!」

第4話く一流への道もまず基本からく

「この善立 テル！ 三千院家の執事として働いてやろうじゃねえか！！」

そうテルが宣言した翌日。 執事としての第一日が始まった。

―現在朝の五時。

「テルさん朝ですよ、起きて下さい」

ハヤテはベッドに転がるテルを起こしていた。

「があお、っおお……」

だが、テルは豪快ないびきをかいて起きる気配が無い。

仕方なくハヤテは窓のカーテンを開けた。 眩い光がテルの顔面に当てられる。

「ん、くわあ……なんだよ、かあちゃん今日は日曜だぜエ、まったくおつちよこちよいなんだからく」

「いつから僕はテルさんのお母さんになったんですか？」

眠そうな瞳はまるで死んだ魚のよう。 目をゴシゴシと擦りながらテルはあくびをした。

「今日から執事としての仕事が始まるんですよ、そんなんでどうするんですか？」

ハヤテはふうとため息をつく。 テルは頭を掻きながら眠そうに言った。

「俺朝弱い。 朝だと頭のなかスツカラカン」

(大丈夫かなあ、この人……)

ハヤテは早朝不安に駆られていた。 こんなにもダラシがなさそうな人が執事としてやっていけるのかと。

―場所は変わり屋敷の一室。

「どうですかテル君？」

笑顔でそう聞くのはマリアだ。

「最高にピツタリですよマリアさん」

テルは今、自分の姿を鏡で見ている。

黒いスーツに似た服はハヤテと同じ執事服である。

「これはマリアさんが仕立てたんですか？」

テルがマリアに聞く。 マリアは笑顔で頷き

「はい、でも大体ハヤテ君と同じくらいだったので」

テルとハヤテの身長は大体同じで特に変える所はなかった。

マリアはやがて話を切り出した。

「では今日から執事の仕事を始めますがやってもらう事は……」

と取り出したのは一枚の紙。 テルはマリアから紙を受けとり、顔

をしかめた。

「これは？」

「この屋敷の見取り図です。 今日はず掃除から」

「あの上マリアさん？ 掃除ってこの屋敷全部ですか？」

淡々と述べるマリアにテルが顔をひきつらせながら聞く。

マリアは笑顔で

「はい♪」

と言った。

「いや、でもこの屋敷って部屋が数百とかあるんですけど……」

「やってくれますよね？」

マリアの屈託のない何かを期待している笑顔を見たテルは

「よっしゃああアア！ 掃除だろうが何だろうがきやがれてんだコ

ノヤロオオオ!!」

威勢良く叫んだテルはダツシユで扉を開けて、出て行った。

そして善立 テルの多忙な一日が始まる。

「しかし、この屋敷はどうなってるんだ？」

あれから数分、テルは屋敷のなかを歩いていた。

「部屋の多きときたらなんだコレ？ 数え切れないし、プ○ステ部屋

とド○キヤス部屋に専用部屋までありやがる」

テルは渡された見取り図を見て、改めてナギが金持ちだと思いきらされた。

「だが―」

紙をポケットに突っ込み、瞳をキリツとさせる。

「ここで働かなければ俺に明日は無い！ ラーメン屋の時みたいかないぞ！ レディイゴオオオ！」

そう言うのとテルは掃除を開始した。

しかしこれがとんでもないことになることを彼は知らない。

「で？ 実際のところハヤテ君はどうしてテル君を助けようと思ったんですか？」

「なんですか急に……」

時間は戻り、テルが部屋を出て行ったあと、マリアはハヤテに質問していた。

テルが勢いよく出て行ったので櫛の木でできた扉が開けられたままである。

「だって屋敷にはそんなに使用人は必要ないのに……まさかハヤテ君、男について手を出すようになったんですか!？」

「ち、違いますよ！ 有りもしないことを言わないで下さい！」

ハヤテは慌ててマリアの言葉を否定する。ちなみにナギはまだ爆睡中。

「僕はなんかテルさんが似たような境遇にあったからですし、お嬢様も誘拐しようとした僕をこうして雇ってくれたんです。そう思うとほっとけなくて……」

「分からなくもないですが……」

（ナギがハヤテ君を雇ったのはナギがあなたに好意を寄せているからなんです……）

心の中でマリアは呟いた。そして何か思い出したかのようにマ

リアは口を開く。

「それよりもハヤテ君はテル君に掃除の仕方を教えましたか？」

「そういえば……」

「大丈夫でしょうか？ テル君は前の店を辞めさせられたのは料理と家事のあまりのひどさときいたんですが……」

しかし、二人とも実際にテルのカオスっぷりを見てはいないのでそこまで心配はしていない。だから

「だ、大丈夫じゃないですか？ いくらなんでも……」

「高級品の扱いも知らないだろうし、何よりあの性格ですから……」

「うくん……」

年がら年中ダルそうに死んだ魚の目をしている男だ。本人はいざとなったら輝くと言っているが

「そう考えるとやっぱり心配ですね……」

さつきとは全く逆の意見になったハヤテ。それだけ不安要素は思ってたより多いのだ。

「ぼ、僕ちよつと見てきます！」

そう言うハヤテは扉を開け、テルの元へ走っていった。

「なんか嫌な予感しかしませんね……」

一人になったリアは雲行きの怪しさを感じていた。

(そうならないことを願いますが……)

そんなことを願ったがいやな予感は的中してしまうのである。

「どうしてこうなった……」

顔をひきつらせながら小さく呟いているのはハヤテだ。

……
ここは三千院家の一室。テルの掃除を心配したハヤテだったが

(リアさん、どうやら遅かったみたいです……)

ハヤテは目の前の惨状を見て辺りを見渡した。

高級品のカーペットはどんな洗剤を使ったのかは知らないが白い

固形物が付いており、ハリネズミの背中みたいに逆立っていた。

絵画は床に落ちており、その他の壺は割れてはいないが本来の壺の色ではなかった。

(この壺って確か青色の花が描かれていたのに……なんで紫色?)

これは予想以上だ。とハヤテは考え、すぐさまその部屋を飛び出した。

「テルさああああん！ 何処ですかああああ！」

もはや色々とカオスだ。このカオスがこれ以上拡大する前にテルは止めること、それがハヤテの使命だと直感した。

一方そのカオスの源はというと。

「ふう。掃除って素晴らしいな……」

輝かしい笑顔をしながら箒掃除をしていた。

「やっぱ、綺麗にするってのはいいよね〜 同時に心も綺麗になっていくみたいな……」

どうやら自分のやっていた掃除が当たり前だと思っっているらしい。

「テルさああああん!!」

「ん？ どうしたハヤテ、タンスの角に小指でもぶつけたか？」

テルは息を切らしているハヤテを見る。ハヤテはテルの目の前に手に持っている何かを差し出す。

「何だコレ？」

ハヤテが持っているものは銅の色をした塊だった。

「テルさん、これは屋敷にあったコロン像なんですけど……どうやって手入れしたんですか？」

ハヤテはテルに恐る恐る聞いた。ハヤテの手にある銅像だったものは頭らしき部分が半分以上ドロリと溶けていたのである。

「えーっと、まず汚れを落とすために拭いたんだ」

テルは顎に手を当てて思い出しながら話す。

「……何で拭いたんですか？」

「ヤスリで……」

「それじゃキズだらけですよ!!」

「え、何? 違うの? 削れば新しい面が出てきて綺麗になると思ったんだけどよオ」

テルにとつて銅像は固いからそれなりに削れるもので拭くことがベストだと思っただけらしい。

「でもこれだけじゃこんな風になりませんよ。後は何をしたんですか?」

「えーっと、拭いてたらキズができたから溶解液使って新しい面を作りだそうと……」

「もうそれ掃除じゃないです!! 掃除に溶解液使うってどんな掃除の仕方ですか!?!」

「ダメだこの人、早くなんとかしないと……」

ということを頭の中に浮かべるハヤテ。それほどテルのカオスつぷりが身に染みて分かったのだ。

「やはりそうなってしまいましたか……」

場所は変わり三千院家屋敷内。テルとハヤテがマリアにテルのカオスストーリーを話していた。

マリアは苦笑いで聞いていた。「この屋敷にはそんなに高級品があるんですか?」

テルがマリアに聞く。「そんなにか全部です。この銅像で数十万、あの植物で数百万、この壺だけで数千万……」

「あ、もういいです」

淡々とマリアが述べていく金額にテルはすぐさま話をストップさせる。

「あの部屋とか直すの大変だったんですから……」

ハヤテはふうとため息をつく。先ほどのカオス部屋は全てハヤ

テが修復した。しかしハヤテでもかなり労力を有した。

「フッフッフ……俺は細かい作業が苦手だから」

（大丈夫かなこの人……）

自慢するべきではない事を平然と言うテルにマリアとハヤテはそう思った。

「いや、でも次からは何とかなりますよ。焦らずいきましょう」

「そうだな、ここでやっていくには最低限覚えておかなきゃならんところがあるし……俺も今から心を入れ替えていくわ」

ハヤテのこれから『じつくりやっていこう作戦』にテルも仕方なくだが同意。

（先輩と後輩みたいですわね……同年で同じ仕事やっている人は少ないからハヤテ君も楽しそうですわ）

二人を見ながらマリアは心の中で呟いた。

実際ハヤテのように執事をやっているものは少ない。

特に同い年で同じ屋敷でやっているいわば同僚仲間である。

今の所の男友達もレンタルビデオ店の店長とかそのくらいか

なにせよ友達ができるのは良いことだ。とマリアは安堵の笑みを浮かべた。しかし、その笑みも数分後には崩れることになる。

「……………」

ここは三千院家の食堂。マリアとハヤテは現在のテルの行動に愕然としていた。

「……………」

ナギに関しては額に青筋を浮かべている。

「ヤベ、このベーコンうまつ、クセになるわ」

言っておこう彼、善立 テルが食べているのは自分の食事ではない。ましてやマリアやハヤテでもない。

全てナギの昼食である。

「おい、テル」

「あん？」

テルはパン食べながら体から怒気のオーラを放つナギを見た。テルとしては何故ナギがそうなってるか分からなかったのでパンを食べながら続けた。

「どーも、昨日配属されました三千院家の執事、善立　テルです。お嬢様、何か不備でもございましたか」

「不備はお前の頭だアアア!!」

ナギの怒号と共にハンマーが豪快にテルの顔面を捉えた。

衝撃でテルは乗っていた椅子ごと吹っ飛ばされた。

「イタタタツ！　鼻折れたア！　今絶対鼻折れたア！」

吹っ飛ばされた時に後頭部も打ったのか鼻と後頭部をテルは抑えながら床を転がった。

「さて、このアホはどうしてやろうか……」

ナギがハンマーを持ち替えたりしている。　テルは鼻を押さえながら

「どうしてやろうかってもうやってるじゃねーか!!　俺はまだ朝、なんも食わないで昼を迎えたんだよ!!　人間一日一回以上は食事しなきゃいけないんだぞ!!」

「誰が決めたそんな事！　一日何も食わずとも生きていけるぞ!!」

「お嬢様！　それはダメな考え方です!!」

二人の間にハヤテが割って入る。　これまでのナギを見てきているのでそんな自堕落な生活は送らないと思っっているが起きてきたのは昼だ。

その内、夜に起きてくるということもあり得る。

お互いが少し落ち着いたのを見て、ハヤテが話を切り出す。

「テルさん、主と使用人は一緒に食事はしないんです」

「な、なんじゃそりああああ!!」

テルは太陽に吠える位驚いた感じで叫んだ。　ナギは未だに目をつり上げている。

無論、彼がこうなるのも無理はない。　昨日配属されたばかりとい

うこともあるが何より彼は頑丈さを取ればそこらの一般人と変わらない。

当然、執事などという貴族絡みの世界との縁は全く無いのだ。

ちなみにハヤテとマリアはナギが食べ終わった後に食べている。

「私も堪忍袋の緒が切れた!! お前なんぞクビにしてくれるわアアア!!」

「ちよつと待てエエエ! 権力横行にも程があるぞオオオ!! どこのお嬢様だコノヤロオオ!!」

「実際に私がお嬢様だ!!」

「そうだった……世も末だなオイ」

「カーペットは汚すわ、銅像は溶かすわ、カオスな掃除にも程がある。

お前にこの仕事が無理まらない理由がこれ以上あるか!!」

ナギは指ビシツとテルに指した。

「く、お嬢様権力に物を言わせやがって……」

核心突かれてしまってテルは反論する事もできない。

だがナギの攻撃はまだ続く。

「三千院家の使用人は完璧でなければならぬ! お前は掃除すら出来ていない! 故にここで働いていく資格は無いのだ!」

「ぐぼおおああ!!」

ナギの言葉にトドメを刺され、テルのライフはゼロになった。膝ばかりか床に手をつけて顔を下げてしまっている。

「さあ、出て行くがいい」

もはや一方的なワンサイドゲーム。遊○王で言うならライフゼロからの追加攻撃だ。

ここに無惨にも一人の少年の生活が閉ざされようとしていた。

第5話く昔は根性と気合でなんとかなる時代だったけどく

「さあ、出て行くがいい」

三千院家の主であるナギからの命令。今ここに一人の新生活が終わろうとしていたが……

「待ちなさい、ナギ」

突如声を掛ける人物がいた。マリアである。

「な、なんだマリア、お前はこんな奴の肩を持つのか!？」

ナギとしてはマリアが自分の意見に反論する事に驚いている。

「なんでもかんでも簡単に決めるものではありませんよ。初めてだし、誰しもうる出来る仕事じゃありませんわ」

「ならどうしろと？ このまま奴を執事にしたら三千院家の名が泣くし、帝のジジイにも笑われる」

腕を組ながらマリアに言うナギ。いかにテルにとって初めてでも三千院家側としては三千院家の執事は完璧でなければならぬという理念が存在する。というのをナギだったか執事長が言っていた気がする。

「簡単です、テストをしましょう♪」

「テストですか？」

楽しげに言うマリアにハヤテが尋ねる。

「ええ、落ちたら失格、チャンスは一度きりの当に断崖絶壁の執事テストです」

— 執事テストとは決してロボットと戦ったり試練の塔に行つて敵を倒してくるとかそんなんじゃないやなくてただ純粹に執事的能力を試すテストである。

「まあ、今回はあのカオスな掃除をどうにかしなければいけないので試験内容としては掃除ですね」

「というか、執事ってロボと戦ったりするんすか？」

「まあテル君、それは置いといて……ナギ？ どうですか？」

テルの質問をはぐらかすとマリアはナギに聞く。 ナギはうーん
と考えると

「うむ。 確かにそれならコイツも簡単に諦めがつくだろう。 それに
私は追い詰められた鼠がどうなるのか見てみたい」

「オイこら、 人を実験台にすんな」

「とにかくこれがラストチャンスだ！ お前が明日執事になれるかど
うかはこの私が見定める!!」

その後昼からはテルの明日のテストの為の勉強が始まった。

やり方としては屋敷の掃除の仕方や高級品の手入れの仕方をハヤ
テから教わるというものだ。

ハヤテがアドバイスしては意味がないのでは？ と思われるがそ
うではない。

やり方さえ聞いてメモすれば後は当日メモの通りにすれば簡単だ
が当日はカンペ無しだ。 そして何より

「テルさん、 これは銀製なのでシルバーパウダーを使って磨きます」
「ほう」

「こちらの銅像は真鍮ブラシで汚れを落とした後、 薄い洗剤で洗浄し
て水気を取ってワックスで仕上げを」

「ほ——」

「カーペットはウール製のキリムですのでお湯を使わず、 冷水に頭髪
用洗剤と塩を加えて、 色落ちしないよう軽く……ってテルさん？」

「……んほ？」

「……今寝てましたね？」

「いんや、 寝てない」

そう言うテルだが目をゴシゴシとこすり、 大きな欠伸をしていた。

その証拠に

「ヨダレ出てますよ……」

「違う、 汗だ」

「口から出る汗なんて聞いたことありませんよ！ やっぱり寝てたん
じゃないですか——！」

とまあ、こんな感じでテルが面倒事を嫌う訳である。

ハヤテとしてはナギ以上に手を焼く存在だと考えていた。やってみれば予想通りだ。

元々、この屋敷に来たハヤテは掃除を昔から体験していたこともあり難なくこなしていたので困った事は特にない。

あるとすればナギのとぼつちりをくらうぐらいか。

ハヤテなりには考えたつもりだ。テルの性格を考慮して分かりやすく掃除を教えたのだが

「いいかハヤテ。人間の脳は記憶出来る事に限界がある。

オーバードロードフュージョンだって攻撃力倍になったら最後は自滅するだろ？ これを解決する事が人類進化の第一歩なんだよ」

と訳の分からない事を言っている。

ハヤテはため息をつく

「いいんですか？ このままじゃ本当にクビになりますよ？ お嬢様はやる事が半端じゃないですから」

実際これは嘘ではない、ハヤテはナギに出て行けと言われてたり、ロボットやトラの戦闘、ナギに一億五千万で売られたりと既に体験済み。

それを理解した上でこの男、善立 テルは頭を搔きながらまだ欠伸をしている。 本当に呑気だ。そんな事を思いながらハヤテは続けた。

「ここを追い出されたら屋敷との関わりがなくなるんですよ？」

その瞬間、テルの動きが止まる。 関わりが無くなる。 それは三千院家関係者には二度と会えないという事だ。

(つまりソレはマリアさんと会えなくなるって事なのか!?)

額に汗を浮かべるテル。 理由はどうであれ、というかかなり不可解だがテルの誘拐を止めさせて更生させたのはマリアだ。 マリアは全く知らないが

——ここからは善立 テルの妄想にはいる。

「……ついにクビになってしまったか」

最後のチャンスをも無駄にしまい屋敷を追い出されてしまったテル。

三千院家の門の前に一人たたずむが、寂しいばかりに1月の寒風が駆け抜ける。

何も言わず門を後にしようとしたその時。

「お待ちなさい」

振り返るとそこには MARIA がいた……その姿は翼がはえており、天使の姿そのものだった。

「ま、MARIAさん?」

MARIA がどうして浮いているのか分からないがテルを見下ろし、後光が MARIA を際立たせている。

しかし MARIA は悲しげな瞳で

「ああ、あなたは諦めてしまったのですね……」

「どういう事ですか!」

「あなたは確かに一度は心を入れ替え新たな人生を歩みました。あなたが諦めなかったからです。しかしあなたは今回、掃除ひとつを諦めてしまった」

「そ、そんな!」

もはや画面真っ白状態のように言葉が出ないテルだが、MARIA は最後にトドメの言葉。

「あなたはゴミムシ以下の存在、救う価値もありません…… 地獄に落ちてジャンクになりなさい」

突然手のひらを返したような冷たい口調の MARIA。その時の姿は黒い翼を生やしたどこかのドールさんだったという。

「あの……テルさん?」

「……ハッ!」

放心状態のテルが横を見ると声を掛けているハヤテがいた。

「どうしたんですか? 急にボーっとして……」

「いや、まあ……」

テルは曖昧な感じで返す。ハヤテは少し気になったがテルは頭を掻きながら続ける。

「そんな事よりもだ。勉強だ勉強。掃除の」

「え!?! テルさんどうしたんですか!?! 熱でもあるんですか!?!」

失礼な質問だが、突如のテルの変わりようにハヤテは驚かずにはいられなかった。

「ジャンクになりたくはないがここはやはり……」

「(ジャンク?) やはり?」

「あのナギにナメられたままクビにされるのは天が許しても俺が許さ
ん!!」

「な、なるほど……」(この人も負けず嫌いなのかな?)

そう思わずにはいられないハヤテだった。

カラカラ……

長大な屋敷の廊下にキャスターの音が静かに響く。キャスター付きの台の上には純銀製のポット、鮮やかな色合いのティーカップ。それらを運んでいるのはマリアだ。

(さて、テル君の調子はどうですかね……)

マリアは試験を明日に控えたテルの様子を見に来ていた。

屋敷では現在、各々がそれぞれの時間を過ごしている。学校があるのだが夜までゲーム、漫画と趣味に没頭するナギ。夜食の片付けや明日の朝食のメニュー作成、その仕込みの準備をするハヤテ。

マリアもまた様子見、疲れているであろうテルの為に紅茶を届けているのであった。

(ここですね……)

マリアはテルが居る部屋の前に到着。礼儀として扉を叩いて入った。

「失礼しますテル君……調子はどうですか?」

マリアが入ると最初に暗い部屋で執事服を着て一人ブツブツ呟く
テルの後ろ姿が見えた。

「あの〜テル君」

まだ気付いていないのか、と思ったマリアは再び声を掛けた。

「あ…マリアさん……」

ようやく気付いたのかクルツと振り向く。しかし、その時のテルの
顔は酷く痩せ痩せていた。更に死んだ魚のような瞳。暗い部屋がホ
ラー感を引き立てていた。マリアはテルの顔を見て

「キヤアアアア!! ゾンビイイ!!」

と叫びながら近くにあった箒を振り回した。

「ぐふっ!!」

テルの顔に振り回していた箒が見事クリーンヒット。あまりの
強さにテルはその場に倒れ付した。それを見たマリアは更に箒で
テルをバシバシ連打。

「悪霊退散! 悪霊退散! この! この!」

「あ、痛! ちよっ! マ、マリアさん! 俺ですよ! テルですよ!」
その声を聞き、マリアの箒を叩いていた手がピタリと止まった。

マリアが明かりを点けるとさっきより顔が腫れたテルの姿を確認し
た。

「て、テル君?! どうしたんですか? そんなに顔を腫らして……」

「いや、マリアさんがやっただけですケド……」

慌てて心配するマリアにテルは突っ込んだが罪の意識の全く無い
マリアをテルはそこまで激しく言わなかった。

「申し訳ありません……余りにも瞳が死んでいてゾンビにそっくり
だったので……」

「マリアさんのゾンビの基準は目が死んでるって事だけなんですネ
……」

「まあ、取り敢えず頑張っていましたから休憩がてら紅茶でもいいかが
ですか?」

話をそらすマリアはティーセットを運んでくる。テルの選択は

常に一択。

「はい！モチロンです！」

二人は椅子に座ると紅茶を淹れ始めた。　　マリアは自分で淹れた紅茶を一口だけ飲む。

「ふう……」

と息をついたマリアを見て、テルも紅茶を一口。

ゴクツ

「こ、これは……」

テルは紅茶を飲み驚愕の表情を浮かべた。

「なんと美味な紅茶か！　味の三千世界よオオオ！」

「まあテル君ったら、ただのレモンティーで大袈裟な」

マリアはクスクス笑いながらテルを見る。

（マリアさんが淹れてくれた紅茶ならどんな物も極上の味です!!）

などとテルは言ってみたかったが流石に言えず心の中で呟いた。

「どうですか調子の方は？」

マリアはティーカップを置くと尋ねてきた。

「まあ、ハヤテの甲斐もあってかなんとかかなりそうならないような……」

「それは随分と微妙な所ですわね……」

「それよりもハヤテには驚きましたよ。やり方も教え方もやたらと上手いですし、コレってかなりの専門知識が無いと無理なんじゃない……」

実際、ハヤテの知識はかなり精通しているものがある。　　ある意味業者よりも上手い。

それを簡単にやってのけるといえるのは何かあったのだろうか。それ以前に、16歳という若さで執事をやっている時点で普通ではない。

「ハヤテ君が借金を抱えているのは知ってますね？」

「ええ、なんか一億五千万とか借金してて、それを返す為に働いてるとか……」

「元々ハヤテ君の借金ではないんですが、ハヤテ君の両親が作った借金をハヤテ君に残して逃げてしまったんですよ。両親はかなりの遊び人で二人の代わりに年齢を偽ってバイトしてたらしいんですよ。

掃除とかのバイトは確か9歳からやってたって笑顔で言ってますし……」

「言葉の端々に笑えない苦労が滲み出る奴だなあ……」

と呆然としながらハヤテの過去を思ったテルだった。

「でもまあ、昔の苦労があったからこうして自分の仕事を見つけてるんですね」

ハヤテの過去は謎だらけだ。ナギの誘拐事件の時に見ていたが身体能力の高さはかなりのものである。あの異常な戦闘力と執事としての能力、どこで身に付けたものか疑問だったが、今の所はあんまり深く追求はしないほうがよさそうだ。

「少なくともハヤテにとってこの仕事、天職ですね」

「天職かもしれませんが昔も今も苦労しぱなっしです……」

マリアは苦笑いを浮かべながら呟いた。

「苦労か……」

「どうしました？テル君……」

突然ぼつり呟いたテルにマリアは聞いた。

「いいえ、考えてみればラーメン屋にいたときもやたら迷惑かけて出てきたなと思って、しかしアレはまづつたな〜」

テルは顎に手を当ててうーんと続ける。

「ラーメンの麺を黄色粘土代用しようとしたんですね、あの後腹痛で何人か病院行きました」

（それはもう……追い出されて当然ですね……）

もはや、料理がカオスというのが当たり前だが料理に関してはテルは常識が足りないらしい。

「追い出された事には後悔はないんですがね……けど」とテルは続ける。

「俺はあのラーメンの味、好きだったんですがねえ」

「ほらよ、腹減ったんなら俺のラーメン食いな。」

老人から差し出されたラーメンは普通の醤油ラーメン。老人は少しめんどそうな顔をしていた。

「旨いだろ？俺のラーメン。俺の魂が籠もってるからな。」

こんな細かい麺に魂とか何を言ってるかと思っただが老人は続ける。

「俺達職人はテメエ（自分）の魂を込めて何かを作んだよ。いつでもどこでも、この命が尽きるまで魂を込め続ける。」

そこまで自分の魂を込めるのは何故か？ 疑問に思った。

「それは俺の魂を他人に感じてほしいからだっつーの。俺の魂でたくさんのお客に何を与えられるのか。」

他人が何かを感じたと実感できるのはいつだ？ 作った本人はそれが分かるのか？ 老人は言った。

「難しいことは分からねえ、けどよ……」

「そいつの顔が笑ってて旨いって言わせれたら、俺は充分だと思うぜ。」

海で一人のラーメン店主に助けられた少年はまたラーメンを口にした。今度はただ旨かっただけではなく不思議と笑みがこぼれ、そして何よりも。

身も心も暖かかった。

「まあ、いつしか会いに行きますよ。 会ってあのジジイの鼻明かしてやります」

あの日交わした約束がある。 それを守るためにも今は目の前にある壁を壊さなくては

「なら、明日は頑張ってください……これ位ができなければ三千院家の執事は務まりませんよ？」

その迷い無き表情を見たマリアは安心したのか笑顔で言う。 テルは親指をビシツと立てて、

「任せてください！ マリアさんの為にも明日の試験、必ず合格して見せます！」

(……私のためではないんですけどね……)

苦笑いを浮かべてマリアは部屋を後にした。

(でもラーメン屋に戻ってどうするねでしょうか、まさかこの仕事を辞めてラーメン屋に戻るといふ事なんでしょうか……)

廊下を歩くマリアは一抹の不安を感じる。 廊下には紅茶セットの台のキャスターのカラカラという音が響いていた。

—翌日。

「むう……」

廊下を先人をきって歩くのはナギだ。 その後ろにはマリアとハヤテがいる。

「どういふことだ……」

ナギの表情が怪しいのは決して体調が悪いとか眠いとかそんな理由ではない。

数々の廊下、部屋の中を確認すると多くの家具が日の光を浴びて輝くほどに手入れされていた。

「キレイになっているではないか！」

ナギは驚きの声を上げる。隣ではハヤテやマリアが部屋の隅々をみていた。

（まあ、一人でここまでやるとはなかなか……ですがこの細かいところはまだまだですね）

（テルさん、この家具は他のよりも年代物で丁寧な手入れが必要なんですよ！まだまだですね）

（まだまだですね……）

できる使用人達の評価は厳しい。

しかし、昨日の失敗が嘘かのように掃除はできていた。カオスな状態から大きな進歩である。それを見たナギはフンと言った表情で

「まあ仕方ない、合格点をくれてやる……クビはなしだ。ところでテルはどうした？」

マリアに聞くとマリア人差し指を立ててしーつと静かにさせた。

「ナギ、あそこよ」

マリアが指をちよんとちよんと指すとその先にはソファに横になっっているテルの姿があった。

「ぐおおぐがああおお……」

「両〇勘吉並みのいびきだな……」

「本当ですね、どうして今まで聞こえてこなかったんでしょう？」

ナギとハヤテは呆れながらも言うがナギは後でフツと笑うとテルに近寄り、起こさないように呟いた。

「これでお前も立派な三千院家の執事としての第一歩を踏み出した。ハヤテよりはまだまだ格下だがな。これからも己の力を高めんと精進するがよい」

腕を組み、静かに言い放つナギ。するとテルが少しピクツと動き

「うんがあゝ」

ゴスツ

いびきと共にナギの頭に寝返りのチョップが直撃した。

「……………」

ナギは額に青筋を浮かべる。マリアとハヤテは冷や汗をかきながらオロオロしている。

「貴様に『終わりのない終わり』をくれてやる……………」

「お嬢様！レクイエムの発動は止めて下さい！」

ナギが精神体を発動しそうだったのでハヤテが全力で止めに入った。それを見ていたマリアはクスリと笑い二人に言った。

「その内起きますよ。休ませましょう……………」(これからも頑張ってくださいテル君……………今はあなたの仕事を頑張ってください)」

「うんがあ〜」

マリアの心の呟きに一瞬返事したように聞こえたがマリアはそのまま聞き流した。

こうして、ダラダラ執事のクビは免れたのである。

以下、オマケ。

「ぐおおぐ(おお〜)」

注意。今回の話はテル君が主役ではありません。

「まあ、なにはともあれクビが免れて良かったですねマリアさん」

「ええ、まだまだ荒々しい掃除ではありませんでしたがこれから頑張ってもらえればいいですね」

時は1月10日の朝。賑やかな朝の光が廊下の窓から差し込む三千院家、マリアとハヤテはナギが学校へ行ったので自分たちの朝食をとるために食堂へと向かっていた。

善立 テルのテストが終わり、一息ついた三千院家の使用人たち。

「なんだかんだでテルさん、これだけできたら普通に料理とかもできそうですね」

ハヤテは目を輝かせながら話すがマリアは顔をしかめて

「いや、掃除ができたからって料理まで上手くなるとは……」

「何を言ってるんですかマリアさん！ テルさんはやればできる子だったんです！ 一つの家事ができるようになったという事は、料理の方も上達したに違いありません！」

ハヤテは技術的にテルが成長したので料理の腕も自然と上がったと考えていた。

「はあ……そういう事になっていればいいのですが」

「はい、レベルアップは宇宙の法則です」

マリアの言葉にハヤテは頷き、食堂の中へと入った。

「……………」

いつものようにテーブルが置かれているはずだったが今回は違った光景が目に入った。

キッチンの役割を果たしているこの食堂には数々の食器や道具が置かれているが辺りは食材や道具で散らかっていた。

「こ、これは……………」

「なんですかこの惨状は……………」

二人は少し考えたが直感的に察した。明らかにテルの仕業だと。

「テルさんしかいませんよね、お嬢様も学校に行ってますし……」
「ええ、一体何を張り切って作ったんでしょう？ あら、あんな所に何か入ってそうな鍋が……」

マリアが指を示すとそこには鍋フタをして回りにはソースらしきものが飛び散っている鍋があった。

「なんででしょう……あそこだけ異様なオーラを出しているんですが……」

ハヤテは鍋から感じる緑色のオーラに嫌な感じを覚えた。何故緑色なのかは分からないが……

「マリアさん、中を確認してきます」

「ええっ!!ハヤテ君何言ってるんですか!? あのオーラ見て下さい。明らかにカオスの詰め合わせですよ!?!いくらハヤテ君でも死んでしまいます!!」

ハヤテの自殺とも言える発言にマリアは慌てて引き止めるがハヤテは目をキリツとさせて返した。

「でも、アレを処理しないことにはおちおち僕らは食事をとれません、戦わなければ生き残れないんです!」

ハヤテは意を決して鍋の中を確認する事にした。

「くっ!…なんだこのプレッシャーは……」

ハヤテは鍋へと近づく度に感じる重圧に額から汗を流した。

(一体何を作ったんだろう。マシな料理であればいいんだけど……)

ハヤテはあの惨状を見ておきながら淡い希望を持つがその希望は

一瞬にして吹き飛んだ。

「ん？」

足に何やら固いものがカツンと当たった。置いてあつた物に気付かず、足で蹴ってしまったようだ。

「……………」

ハヤテはその蹴った物を見て顔をひきつらせた。それはよく大工が使つたりするドリルだったのだ。

（一体何を削って料理したんですか！ ドリルで削るほどの食材は屋敷には置いてないのに！）

ハヤテは心の中で突っ込んだがこの程度では終わらない。次に目に入った物は

（コレはゴム風船？ うわっ！ こっちは洗剤だ！）

コレはヤバイよ、どれぐらいヤバいかっていうとマジでヤバイ。とハヤテは鍋の中に潜んでいる魔物を前にした。

「マリアさん！」

「は、はい！」

ハヤテはクルツと振り返ってマリアに言うのと親指を立てて続ける。

「後の事は頼みましたよ！」

そう言い放つとハヤテは唾を飲み込み、一気に鍋フタを持ち上げた。

「うおっ!!？」

ハヤテは思わず声わ上げてしまった。それもそのはず開けた瞬間、緑色の光が放たれたかと思うと更には緑色の煙がハヤテを包ん

だ。

そしてハヤテはしばらくすると二三歩ふらつきながら下がると

「……………」

ドサツと後ろに力無く倒れた。

「えっ!? ちょ、ハヤテ君!? ハヤテくうううん!!」

まるで死んだかのような表情のハヤテをみてマリアはパニックに陥った。

その数十分後にハヤテは目を覚ましたが何を見たのかは全く覚えていなかった。むしろハヤテは思い出したくないとマリアに言っていた。

因みにあのモンスター料理は後でSPが美味しくいただきました。何人か昇天しかけたけど……

「ぐおおぐおおぐ」

そんな事が起きているとは知らずテルは爆睡。全く無責任な男である。

結局、テルの料理の腕は全く治っていなかった。

第6話く休日の過ごし方

「うんがああごおお」

1月10日月曜日。テルが屋敷にやって来て3日目となった。無事テストに合格し、案の定疲れ果てて豪快な寝息をたてるテル。しかし……

―彼が寝ている間にも世界の時間は普通に回り続ける。

「は―。それにしてもお嬢が学校に行つて留守だと、屋敷の中も静かだね」

三千院家の広大な庭。その飾られた岩の上から気の抜けた声が発せられる。

ちなみに喋っているのは人ではない。

「最初のセリフをトラが喋るなよ。新規の読者が混乱するだろ？」

ハヤテは箒をもちながら人語を話している生物に不快な言葉を掛ける。

「久々の……いや、

この小説だと初登場だつてのにつれないねえ、借金執事は……」

悠長に人語を話すこの動物は三千院家のナギのペットのタマ。外見からして完璧虎であり、尚且つ人語を理解する。

ちなみに、このタマが人語を話すのを知っているのはハヤテだけである。

「ていうか、お前は学校はいいのかよ？」

「ここに来る前は一応、高校一年生だつたんだろ？」

「うゝ…そりやそうだけど……」

タマに学校の事を指摘されたじろくハヤテ。ハヤテは頬を掻きながら

「借金返済のために40年ここでお嬢様の執事をする僕が……今更学校なんて……」

ハヤテがこの屋敷で働いて返す一億五千万の借金返済の期間は40年。ハヤテは学校よりも手一杯の執事の仕事が優先と考えていた。

「分かってねえなあゝ借金執事は……」

タマは空を見上げてため息をつくとそのまま葉っぱをくわえながら続ける。

「いいか？学校つてのはな、別に勉強するためだけに行くわけじゃねーんだよ。友と語らい泣き、笑い……そうやって生涯の宝物を作り上げていくんだよ。思い出っという宝をな……」

「それは分かるがトラに言われたくない」

ハヤテはまともな事を言うタマに素っ気なく返す。

「身もフタもない奴だねえまったく……」

タマは薄く笑った。ハヤテはハヤテで何様だといった表情。

「ハヤテくーん。ハヤテ君どこですかー」

突如、一人と一匹の耳に聞き慣れた声が聞こえた。マリアである。こちらに向かって来ているのが見えたタマは慌ててその場を去っ

た。

「ああハヤテ君、こんな所にいましたか？」

タマが去り、今いるのはハヤテとマリアだけださつきも言ったようにタマが喋れるのを知っているのはハヤテぐらいである。

「はい。 えっと……どうかしましたかマリアさん」

ハヤテはマリアに聞くがマリアは少しとまどいながら
「いやその……ハヤテ君にちよつとお聞きたいのですが……」

「へ？ケータイ電話ですか？そーいえば持ってないですね」

「そうですか、やはり持ってませんか……」

「ええ、今時の変身ヒーローもケータイで変身する時代ですからね、ないと不便ですよね」

「まあ別に変身しなくていいんですけど……」

マリアはそう返すとハヤテに長財布を差し出した。

「不便なのは確かなので……お金は出しますから、今からちよつと買ってきていただけませんか？」

「ええっ!? い……いいんですか?」

ハヤテは渡された財布に驚く。 高級感を漂わせる革財布だ。

「ですがその……」

マリアはニコリと笑いながら

「出会い系とかそういういかがわしいサイトを見るには使わないでほしいというか……」

「つつ!! 使いませんよ!! そんな事には!!」

マリアの言葉をハヤテは全力で否定する。

「でも分かりました!! さっそくケータイ買ってきます!!」

「あ、それとハヤテ君……」

櫛の木でできた扉に手を掛けた時、マリアがハヤテを呼び止めた。

「はい?」

「いえ、最近ちよっとお疲れ気味のようなので、今日はお休みで良いので、街をぶらついてはいかがですか?」

「え?」

一瞬、間の抜けたような声を出していることにハヤテは気づかなかった。

マリアが述べた事はつまり、今日はもう執事の仕事をしなくても良いということだ。

「……僕なにか不味いことしました?」

ハヤテは恐る恐るマリアの表情を伺う。ハヤテは自分が執事の仕事で何か不手際を起こしたと思っていた。

「いや違いますよ! ……だって最近、ロボと戦ったり、ナギの学校で色々あっただろうし……何よりハヤテ君、テル君の料理を見てからなんか疲れてそうなので」

マリアの言葉にハヤテはあまり思い出したくない思いだった。

「ま、まあ少しやつれた感が……」

「詳しくは10・5話を読んでください♪」

「誰に言ってるんですかマリアさん？」

「そんな事よりハヤテ君、ケータイを買って来てください。後でテル君にも買いに行かせるので」

（あれ？ 誤魔化された？）

マリアの言葉にハヤテは心の中で呟く。

結局、ハヤテは気持ちを切り替えて屋敷から街へと出掛けた。

（さてと、私も仕事に行くところですがその前に……）

ふと自分のメイド服の臭いを嗅ぐ。実はテルの激臭がまだ残っているのだ。

（仕方ありませんね……一度着替えてから仕事に行きますか）

月曜日とは平日の始まりである。学校があるもの仕事があるものの、これは三千院家も例外は無い。

その一方で。

「うんがああ〜おお〜」

三千院家の一室。テルが大きい寝息を立てている。

「んがっ！」

静まり返った部屋の中でテルは大きく寝返りを打ち、床に派手に落ちた。

「ふあ〜あ、よく寝た……」

頭をボリボリ搔きながら口がいつぱいになるほど大きな欠伸する。

朝のエネルギーである朝食を取ってないせいか頭の回転が遅く感じた。

(ん？　なんか忘れていそうな……)

頭のなかで何かが引つかかっている。　大事な事があつた筈なのだ。約数分、ボーつとしているとようやく頭覚めてきたのか

「俺の試験はどうなったアアア！」

ガバツと起き上がり、即座にテルは部屋を飛び出した。

廊下を駆けて行くその速きはまるで加速装置の付いた島村ジョー。彼が向かうのはある人物の部屋だ。

(ゼエ…ゼエ…ここかアアア！)

息を切らしながら扉の取つてに手を掛ける。　テルが疲れているのは屋敷の中で迷ったためだ。　真っ直ぐ来たつもりなのだが

「マリアさアアアん！」

カ一杯扉を開く。　テルの目の中にはマリアがいた。　いたのだが……

「……………」

テルの目に映ったマリアは着替えようと服に手を掛けていた時だった。　若干首から肩の白い肌が露わになっていた。

マリアは先ほど、部屋に戻り、テルの作ったカオス料理の臭いが気になった為着替えをしていたのだ。

「……………」

二人はまるで鉄の塊、ア○トロンをかけたのごとく硬直。　しかし

やがてテルが口を開いた。

「こんにちわ、サンタクロースだよ（裏声）」

その瞬間、マリアは近くにあったコナン像を掴みオーバー스로でテルに向けて投擲。茂野吾郎も顔負けのジャイロボールと化したコナン像は放物線を描く事無く、テルの顔面にガツンと直径20センチ位の鉄塊が直撃した。

「ぐほっ！」

コナン像の威力に圧倒されテルは床を転がる。マリアは顔を真っ赤にさせてどこからかりモコンを取り出し、赤いボタンを押した。

ゴウン…ゴウン

「あ？」

突如、真上から聞こえる機械音にテルは上を見上げる。そこにはテルよりも遥かに大きい鉄の塊が吊されていた。

「三千院家はいつからカラクリ屋敷に？」

そんな事お構いなしに吊されていた塊がテルを目掛け落下した。

「ギヤアアア!!」

その時三千院家を揺るがす轟音が叫び声と共に響いた。

—そして少し落ち着いた後。

「いや、あのホント…スンマセンでした」

頭に巨大なタンコブを作り、鼻から血を出しているテルはマリアの前で正座をしながらひたすら謝罪。

「俺もその…久しぶりの登場だったんでちよつと調子乗ってましたスンマセンでした」

マリアはニコニコ笑いながら一本の脇差しを取り出し

「テル君、ゴメンで済むならこの世に警察と切腹なんて存在しませんわ」

白刃をテルに見せ付けた。笑顔の下で激しい怒りが感じられる。

「あの…合格とか全く知らなかったんで、取り敢えずジャンクにするのは止めてくれませんか？」

「いや、ジャンクってなんですか？」

マリアはテルに突っ込みながらも白刃を鞘に納め、フウと溜め息をつく。

「まあそれはそうとして、テル君はケータイ持ってないですよね？」

「まあ、多分……」（あれ、あんま怒ってない？）

テルは曖昧ながら返した。ケータイは記憶を無くした後には所持してはおらず、むしろ今まで持っていたのかさえ怪しい。

「俺が発見されたのが九十九里浜だったんで持っていたとしても海の中ですかね」

「ああ、ありましたねそんな設定が」

マリアはそのまま続ける。

「やっぱり不便ですから今から買って来てくれませんか？ ハヤテ君も行きましたし……」

マリアはそう言うと封筒んら取り出しテルに渡した。

「いいんですか？」

「はい。後今日はもう午後からお休みで宜しいので」

テルの言葉にマリアは笑顔で返す。それはテルにとって逆に怖かった。

「いや、あの……マリアさー」

「何ですかテル君？ 別に怒ってませんよ？」

「いや、そのー」

「大丈夫ですよ、ホントに怒ってませんから♪」

「……………」

怒りのオーラが全身から発せられているのを感じたテルはもう駄目だといった感じで顔をひきつらせて

「スンマセンでしたアアアア!!」

「あ、ちよつと……………」

逃げるかのように部屋を飛び出したテルを呼び止めようとしたがテルは風のように消えた。

「少しやりすぎましたか……………」

一人残された部屋の中でコホンと咳をしてマリアは一人呟いた。

(全く、ハヤテ君といいテル君も……何故私はこんな扱いが…………)

最近のマリアは扱いについて悩んでいた。ハヤテに入浴を見られたり今度はテルとロクなことがない。必死に謝っているテルに対してあの仕打ちには少し大人気なさを感じた。まだ17歳だが

—そんなこと知らずにテルは

「やっちゃまったよ、俺死にたいんだけどいいかな？」

私服一人街を歩くテルはあらんことを呟いていた。

（だが、やってしまったものは仕方無い、目の奉養になっちゃった事も事実！）

目をキリツとさせてとんでも無い事を言うテル。

歩くの止め、見上げるは電化製品店。 ケータイをかう場所だ。

（失った信頼は後々取り戻す！なんか買って帰ろう！）

意外と執事は前向きだった。 それでマリアの機嫌が治るのはまた別だが。 しかもそれはマリアの金である。

—数時間後。 電化製品店のスライドドアからテルが肩を落とした状態で出てきた。

「最近のケータイはちよつと色々プランありすぎだろ……」

彼の疲れの原因はケータイのプランにあった。 人よりもこういうのには少し疎いらしく数時間掛けてようやく買ったのだ。

「要は機械系がダメだったってことだよな……まあそれより」

テルはポケットから先ほど買ったケータイを取り出し画面を開いた。

「カメラ付きつてのは分かった。だが画素ってなんだっけ？」

たしか多ければ多いほど画像がキレイになる。もっと詳しく言うとうと半導体とCCDをアレする機械。

「いやよく分かんねえよ！ってか作者もうろ覚えかよ！」

一人文章に突っ込みを入れるテルだが明らかに一人言のため、周りから少しキツイ視線を当てられた。

「ん？」

テルが見たのは画面のアドレスの登録件数だ。

「え？ なに？ 今アドレス1000人も登録できんの？」

1000という数に惹かれたテルは自分のクリアレッドのケータイをいじくる。しかし改めて考えてみると

(アレ？ 俺登録できんの一人もいねえじゃん……)

テルはガクツと肩を落とした。あの不幸なハヤテでさえも学校に通っていた時代があり、友達も少なからず居ただろう

しかし、テルは友達はおろか学校に行っていた記憶もなく、ハッキリ言って友達顔や遊んだことを知らないテルにとつてかなりキツイ状況である。

(いや待て、ポジティブに考えてみよう……ケータイはメールしたり遊んだりして楽しむ為のじゃなくて電話をするための物だ！ つてアレ？ アドレスや番号なきや連絡もできねえじゃねえか……)

とぼとぼと重い足取りで家電製品店を後にした。

(そういえば朝と昼のメシを食ってないな)

数分歩いてテルはかなりの空腹感を感じていた。考えてみれば

昨日の朝と夜、そして今日の朝と昼は見事にご飯を抜かしていた。

育ち盛りの16歳には胃袋が限界だった。

(どこかで食うか？ ジジイのラーメンに行ってもいいが……)

テルは追い出されたラーメン屋を思い出し、その方角を見つめる。今は昼時だから結構混んでいることだろう。

「……めんどいからいいや」

色々考えた結果、そう呟くとラーメン屋の方角とは逆に歩き出し、更にラーメン屋から離れていった。

何分歩いただろうか、もう昼は過ぎただろうテルの胃袋は限界だった。

「ヤバい、もうムリ……死にたいんだけど」

もういつそのこと楽にしてくれという感じで目を泳がせ、足取りをフラフラとさせている。

「大体、ハヤテと全く会わなかったじゃねえか、アイツどこほつつき歩いてんだよ？ なあ、オジサン」

「いや、知らねーよ」

テルに突然と話し掛けられたサラリーマンはナンダこいつはとといった感じで返すがテルは続ける。

「いや、別にアイツが心配じゃねーんだけどさ、アイツはどっちかというツツコミじゃん？ ボケもいけるけどさ。ツツコミがいなきやこの小説成立しねーんだけど……」

「だから知らねーつつてんだろーが！ 見ず知らずのサラリーマンにそういう事聞いている時点で成立してねーんだよ！」

「今度アイツにメシ奢らせるか……」

「つて聞いてねーし……」

サラリーマンの話をスルーしてテルただひたすらに歩きつづけた。その後サラリーマンが会社に遅れてしまったのはまた別の話。

「ん？」

ふと立ち止まる。

空腹感とハヤテに何を奢らせるか考えていたからかテルはそれが自分の目に映るまで気付かなかった。

白い壁でできた巨大な施設にその施設の前に広がるグラウンド。そして侵入を許さないという金網が張られている。

「ここは……学……校か……」

その校門や風景を見てテルはボーっとしながら呟いた。

―都立潮見高校。

綾崎 ハヤテが執事になる前に過去に通っていた高校である。

(学校……か。俺もちゃんと学校に行っていたのだろうか?)

一応テルもハヤテと同じく16歳で、普通に考えればお互い学校に通っている。

「そして満喫するんだよなスクールライフを……体育祭、学園祭、修学旅行、気になるあの子は隣の席、放課後スーパ―告白タイム……ん?」

テルは言葉を止める。それは校門の所に男女が数人いたからだ。

「あれは……ハヤテか?」

中の一人に見知った顔がいること確認したテルは即近くの木に登って観察を続けた。

よく見るとハヤテは少女に腕を掴んでいた。少女は恐らく、この学校の生徒だろう。

「なんでハヤテはこんな所に……」

テルはポケットから飴玉を取り出し、口の中に放る。空腹でも我慢していたが最早そんな事はどうでもいい。

何故ハヤテがこんな所にいるかは原作をご覧ください。

そして次の瞬間、少女は衝撃の一言を口にした。

「綾崎君が好きです!!」

「あ?」

ガリツとテルは口にしていた飴玉を噛み砕いた。

(あ、あの野郎オオオ！ 何か知らんが告白されてやがるウウウ！)
目を瞳孔を開き気味にしてなぜかそこでラブコメが展開されているのを眺めるテル。

キャンデーを取り出し、口に加える。 一体いくつ持っているのかそれは分からない

「……………だから……………付き合ってくださいませんか？」

バキンツ

(あ、あ、あ、あ、あ!! ストレートすぎる！ だがア！ そこに痺れる憧れるウウウ!!)

テルは歯でキャンデーを噛み砕くきながら、視線を向けた。 憧れと殺意の視線を

(…………… 今何か殺気が……………)

突如、ハヤテの体に悪寒が走った。 しかしその殺気は吹き飛んだ。 目の前の女の子に声を掛けられて

「綾崎君……………」

「え……………あ……………その……………」

ハヤテは顔を真っ赤にさせて口ごもる。 もちろん、告白した女子高生も顔が真っ赤だ。

そして木に居る悪魔はそんなことを

(さあ言えハヤテ！ オウケエでもイエスでも言ってみろオオオ！
言ったら死刑だアアア!!)

真っ赤とは程遠いブラツクな感情を抱いていた。

しかし、テルの予想とは裏腹に

「その……………ぐ……………ぐめん」

(断つただとオオオ!!? 人生最後かもしれないその可能性を捨てたというのかアアア!)

もはやテルは驚かざるを得ない。 更にハヤテは続ける。

「実は僕……………二次元にしか興味ないんだ」

その瞬間、周囲の空気が冷たくなった。 もちろんテルの周囲も

「と言うのは冗談で、今は放っていけない人が―」

「あ……あ……綾崎君のバカ―!!」

ハヤテが言うよりも早く、女子高生の平手打ちがハヤテの顔面を捉えた。

「げふっ!」

強烈な一撃によりハヤテは地面に倒れ付す。

「やっちまったな……」

テルは地面に倒れているハヤテを見ながら呟いた。

「ああいう断り方をした方がカッコイイと思っただらろーが、お笑い漫画のキャラはカッコ良く振られたりしないのだ」

怒りながらハヤテの所を去っていく女子高生を見ながら呟くがテルには腑に落ちない点があった。

(アレは簡単に言えばただはぐらかしたって感じだ。　アイツ……他に誰か好きな奴いんのか?)

ボキッ

「ん?　なに今の効果音」

テルはアレっといった感じに襲われる。　何故か体が重力に従い落下していた。

大変迷惑な話だが要はテルが登っていた木の枝がへし折れたのだ。

「え、ちよつ、ま―」

ドスン!　とテルはそのまま垂直に頭から落下した。

「アレ?　宗谷君、今何か音が聞こえなかった?」

「いや、別に?　空耳じゃね?」

実際彼らの後ろにテルがいるのだが気づかれなかった。

(おい待て、なんで俺に不幸のスキルが……)

テルは二人の会話を聞きながら自分の意識が遠のいていくのを感じた。

7話 想いを忘れないこと

「はあ……」

ここは負け犬公園。名前に疑問を感じている人もいるだろうが気にしないで頂きたい。そのベンチに一人の少女がため息をついていた。

(どうしてあんな事しちゃったんだろう……)

彼女の名は西沢 歩。公立 潮見高校の生徒でハヤテの元クラスメート。今彼女は自責と後悔の念で深く落ち込んでいた。

(いきなり殴っちゃったんだ……もう私、嫌われてるかも)

夕方だというのに昼間の出来事を思い出す。上ではカラスが馬鹿にするよう鳴いていた。

歩はハヤテに嫌われたと思いがちだが、ハヤテ本人はそんな事は思っていない。が、歩が知っている筈もなかった。

(大好きな人なのに、あんな事したら、もう仲直りも……諦めるしかないのかな)

ただひたすらに時間だけが過ぎていく。想いを告げた時にはぐらかされた事に腹を立てて平手打ち。自分はなんという過ちをしたのか。

ふと夕日を見つめる。 紅く滲む光がやけにまぶしかった。

(帰ろう……)

と歩がベンチを立った時三人の男が現れた。

「HEY、お嬢さん何してるのオ？」

若干間延びた声で声を掛ける男はグラサンでアフロの奇抜なスタイル。

一方はピアスをしたモヒカンとスキンヘッド。いずれにせよガラの悪い人達には変わりない。

「なんか浮かない顔してるねエ、俺達と一緒に遊ばないかい？」

(うわゝ もう有り得ない位、ベツタベタな展開だよ)

流石の歩も危機を感じる。これはお誘いだ。了承したら最後、こ

の小説が電撃終了してしまうくらいマズい事に巻き込まれそうだったからだ。

「ええつと……私帰らないといけないんで……失礼しまあゝす」

トトトと二人の横を通り過ぎようとしたがモヒカンに行く手を阻まれた。

「つれないなア、ちよつとだけだつて」

モヒカンとアフロはニヒルな笑みを浮かべて迫ってくる。もはや逃げ出せる状況じゃなかった。

二人の手が歩に近づく。

(どうしようこのままだと私、知らない所に連れ去られて××な事されるんじゃないのかな?)

歩は涙目になりながら恐怖を感じる。一瞬、頭の中には笑顔のハヤテが浮かんでいた。

(だ、誰か助けて！)

歩の必死の願い。しかし考えてみてもこの公園には自分と不良達しかいない。あるとしても自販機とゴミ箱、ダンボール。救いを求めても望みは薄かった。

男が歩の肩に手を掛けようとした時

「オイ」

「あん?」

突如、モヒカンは後ろから声を掛けられ、振り向いた。

「へ?」

一瞬、間の抜けた声。戸惑うのも当然だった。なぜなら、振り向くと筒状のゴミ箱を振りかざす男の姿が目に入ったからだ。

そんな疑問もわずか一瞬である。次の瞬間には男はゴミ箱を力一杯に振り下ろしていた。

ドゴツ という効果音。男の体半分まで綺麗に収まるようゴミ箱が被され、モヒカンは体を棒にして倒れた。

被された時の衝撃が強かった為かモヒカンは気絶してしまってい

た。

「よ、よっちゃんああああん！ お、お前、なんだよ？」

慌ててスキンヘッドの男がモヒカンに駆け寄り、男を睨んだ。

その男は黒い短髪、死んだ魚のような瞳、ダルそうに頭を掻く仕事を
をするのは一人しかいない。

「ギャーギャーギャーギャーやかましんだよコノヤロー。 おちおち
寝てもらえねえじゃねーか」

善立 テル その人である。

「なんですかア？ もしかしてこの子の彼氏ですかア？」

アフロがポケットに手をつ込み、挑発的な口調で尋ねる。 歩は
彼氏という言葉に

「かかか彼氏!？」

顔を真っ赤にさせ、手をブンブン振り回した。

「オイオイ、バカ言うんじゃねーよ。 俺はそのジミーとは全く関係
ねえ」

テルはぶっきらぼうに返した。

「いや、あの、私ジミーじゃないです」

歩はテルに突っ込んだ。 アフロは笑いながらテルと向き合う。

「なにになに〜関係無いんだつたら邪魔しないでくれるマジで。 これ
からこの子とランデブーするところなんだけどさあ」

その言葉を聞き、今度はテルが微笑を浮かべて口を開いた。

「あ？ とんでもねえ所にランデブーする気じゃねーのか？ お前、
この原作何だと思ってるんだ？ そんな事してみろ、このレーベル潰し
てえのかコノヤロー」

さらにテルは指を示して続ける。

「大体、今時ランデブーなんて古イーんだよ、どうせならメガドライブ
だろうが」

「いや、メガドライブの意味が分かんねえよ！ 上級版なのかソレ？」

アフロはテルに突っ込んだ後、ニヤニヤとしながらテルに言う。

「邪魔するんなら痛い目に遭うよマジで一人で勝てると思ってるんマジで」

アフロとスキンヘッドは気持ち悪い笑みを浮かべてテルと向き合う。ただならぬ雰囲気は歩は感じていた。

（あわわわ……どうしよどうしよ、警察呼ばなきや！）

歩は状況を監視しつつポケットの携帯電話に手を伸ばした。だが、歩はその時見逃さなかった。

テルが薄く笑ったのを

「まあ一人ならなあ……」

そう呟いた後、テルは後ろを見て大声で叫んだ。

「オツサアアアン！ ソフトクリーム3つ入りまアアす!!」

「合点承知！」

テルの後方からイキのきいた声があった。歩が目を凝らしてみると見たことのあるソフトクリーム屋の山車と老人だった。

「ハイハイハイ!!」

老人は軽快なリズムを口ずさみながら3つのソフトクリームを投擲。

一本は山なりに二本はテルに向けて真っ直ぐ投げられた。

テルは二つのソフトクリームを掴むとそれぞれ不良達の顔目掛け

「そおおおい!!」

気合いの掛け声のもと、思いつきりぶちまけ、アインクローで二人の顔を鷲掴みし、そのまま地面に後頭部から激突させた。

そして最後に山なりに投げられたソフトクリームをテルは掴み取る。

(す、スゴい……)

歩はソフトクリームを食べるテルを見ながら感嘆していた。テルはゆっくりと近寄りアフロの男の胸倉を掴む。

「オイ、ちよつと腹減つてんだけどマジで。ここらで優しく奢つてくれる心優しいお兄さん達はいないかなあ」

テルは額に青筋を浮かべながらソフトクリームでドロドロ顔のアフロの体をガクガクと揺らす。男は悲鳴をあげながら

「ヒィィィー！ 奢ります！ 奢ります！ っっていうか奢らせて下さいお願いします!!」

(恐喝事件だ……ある意味この人の方が危ないかのかな?)

歩はテルに疑問の眼差しを送ったがそこは命の恩人。礼をいわない訳にはいかない。

「あの……助けてくれてありがとう」

「ああ、気にすんなよ。最近のガキは全くなつてねえ」

「いや、君も大体私と同じくらいだよね？」

歩はテルに突っ込んだ。だが歩には疑問が残っていた。

「あの……さつきは一体どこから来たのかな？ 全く姿が見えなかったんだけど……」

「ああアレね」

歩の言葉にテルは頭を掻きながら説明する。

「イヤ、ちようどダンボール箱を見たら被りたくなって、どうせやることもなにも無いからジツとしてたら寝ちやつて、そしたらうるさい声が聞こえたっていうか……」

(不審者だアアア！この人不審者だよ神様アアア!!)

「ま、まずはなんでダンボールを被つてたのかな？」

「何故つてお前、アレだよ、ダンボール箱を見たら被りたくなるだろうが」

「イヤイヤ、ないない」

テルの言葉に歩は手を横に振り即答。

(マズいんじゃないかな？ 結構危なそうな人だし、サツサと帰るのが上策!!)

「なあオイ」

歩はそそつと帰ろうとしたときである。テルが呼び止めた。

「近くのファミレス行かねーか？ どんだけ食つてもこいつらが奢つてやるってよ」

「……………」(イヤイヤ落ち着け、西沢 歩！ 罨だよ罨。 そんな手に私がのるとでも—)

「行きます！ 絶対行きます！ マジ行きます！」

歩はのった。瞳を星のように輝かせながら。

「……………」

ファミレス店内、窓際の席。 歩とテルは心優しい不良三人組の奢り(若干テルによる恐喝)でファミレスに来た。

「ん？ どうした？ 食わねえのか？」

テルは手に持っていたスプーンを止め、さほど食事が進んでいない歩に声を掛ける。

「いや…………ただよくそんなに食べられるね」

歩が食事が進んでいなかったのは別に調子が悪かったとかそういうわけではない。 ただテルの食欲があまりにも旺盛な為、唾然としていたからだ。 テルはオムライスを食べる手を止めない。

「いいか？ 男はこれ位食べなきゃ明日のエネルギーが足りなくなっちゃうんだよ。 あと俺の胃袋は宇宙だから…………そこに食べ物がある限り俺は食べ続ける」

「随分と昔のネタをやるね……分かる人いるのかな？」

歩はグラスに注がれたジュースをストローでかき混ぜた。実際、歩も食べる事は決して嫌いな訳ではない。食に興味があるだけだ。大食らいではない。

だが歩からしてテルの食欲は凄まじかった。店内に入ってから数分位の間にオムライス、スパゲティ、カレー、チャーハンを平らげており、今は二杯目のオムライスを食している。

「金の事は気にすんなって、心優しい三人が奢ってくれるってよ………な？」

とテルは後ろの席に正座している三人組に視線を向ける。

「ひっ…は、はい!!」

三人組は涙目で返答する。ちなみに三人は円椅子に正座しているので足に円角が食い込んで痛い。

「イヤ、奢りじゃなくて君が恐喝したんじゃ……」

歩はテルに疑問の言葉を掛けるがテルはイヤイヤ違うぜと言った感じで続ける。

「いいかジミー。この殺伐とした世の中、感謝されて快くお礼してくれる人はいねえのよ。遠慮なんかしたらそれでこそ失礼だろうが」

「どんな持論？ 後さりげなくジミーって言ったのは気のせいかな？」

歩はムツとしたのかテルに向ける目を細める。が当の本人はオムライスをガツガツと食べている最早聞く気ゼロだ。

「ちよっ!! 聞いているのかな？」

歩としてはかなりイラついている。テルは食べながら

「あーあ、聞いている聞いてるって、アレだよお前、俺はオムライスは半熟派だからこのオムライスはイマイチだと思う」

「全然聞いてないじゃん！」

お構いなしに食べるテルに歩は少し怒りを感じた。食べる事し

か頭に無いのかと言った表情である。

「はあ……」

ため息が思わずこぼれた。 1日に色々ありすぎたのか疲れを感じる。 ふと窓の外を見ているとテルが気になったのか口をひらいた。

「そういうえば、お前さつきから冴えん顔してんな」

「え……」

てつきりまた変な事を言うのかと思ったがまともな事だったので驚いた。

（私……顔に出やすいのかな？）

心辺りはある。 恐らくは今日、偶然再会した想い人に形として振られた事

その人を殴ってしまった事。

「……」

あまり思い出したくなかった。 できればこのまま忘れていたかった位だ。

「何かあったのか？」

テルは目を細めて歩に話しかける。 歩は少し気落ちした感じで
眩く。

「別に……初対面の人に話しても仕方ないから……」

「何か後悔にまみれた顔してっからさ、話せば楽になる事もあるかも
しれないぜ？」

テルは歩に促す。 もうテルは食べるのを止めていた。

歩の中では様々な想いが巡っていた。 実際は辛い。 心が張り
裂けてしまいそうなくらいに

「実は……好きな人を殴っちゃったんです」

気付けば口は開いていた。

本来、好きな人という単語で顔を真っ赤にしようだろう。 い

つもの歩なら。

しかし今はハヤテを殴ってしまったという大きな後悔と罪悪感が強い。

「片思いで……なかなか話した事なかったけど今日想いをつけて、断らて……」

ああ、一体何を言っているのだろうか
しきりに歩は思う。何を話しても何も解決しないのに

—もう戻ることはできないのに、いつそのことここで諦めるべきだろう。そうすればこの苦しみから解放されるだろうか。

「でも、もういいんです。諦めるしかないから……何かはぐらかされた感じだったけど……切り替えも大事ってことで—」

「最低なヤツだなそいつは」

歩の言葉はテルによって遮られた。

「え?」

歩はキョトンとした表情。テルは小馬鹿口調で続ける。

「だってよ。そいつはお前のせつかくの想いを無駄にして適当な理由であしらったんだろ? 最低じゃねーか」

「そんな……」

歩の中で何かが沸き起こる。怒りだ。ついでに言うど歯がゆい。

(この人は何も知らないくせに……)

どうして初対面の人がハヤテの事を語れるか

「だったら殴られて当然」

「止めて!!」

歩は気付けば既に口が開いていた。

「ハヤテ君は……そんな人じゃない! すごく優しいし、誰よりも頑張ってた! 私も助けられた事もあった! 君は何も知らないでしょ!!」

歩はハツとした。気付けば立ち上がっていた事に、周りには人は居なかったが突如恥ずかしさが襲ってきて、歩は静かに座った。

しばらくしてテルが口を静かに開いた。

「充分じゃねえか」

「え？」

「それだけ想ってんなら……ソイツの事を分かっているなら……諦めるには早いだろ？」

意外にもテルがさつきとは違う雰囲気ですすのに歩も戸惑った。

「でも、私は殴っちゃって……」

「理由があつたんじゃないのか？ 人に言えない理由が……誰にだつて知られたくねえモンが一つや二つあるもんだ。殴つたのは仕方ねえ後で誤りやいい」

（無茶苦茶だ……）と思う歩にテルは続ける。

「悪いことじゃねえだろ。一直線の想いってのは人間、一人の人間を想い続ける事は難しいもんだ」

歩はその言葉を聞き、思い出す。ハヤテとの出会いから今に至るまで、この気持ちは変わることとはなかった。

改めて確認する。自分はまだハヤテが好きなのだ

「だからよ、その揺るがねえ気持ち大切にしろや」

「うん……大切にする」

自然と胸に手を当てた。既に笑顔が戻っているのを見たテルは小声で聞こえないくらい呟いた。

「しかし、ハヤテも隅に置けないね」

「え？ 何かな？」

「いんや、なにも」

呟いた事を悟られまいとテルは知らんぷり。そして手を高々と挙げた。

「すいませーん、ビッグチョコレートパフェ3つお願いしまーす」

「てかまだ食べるの!？」

歩の突っ込みが響いた。

その後、テル達は店を出る。外はもう真っ暗だった。

「やべ、遅くなっちゃった。マリアさんに何も買ってねえ」

テルはダルそうに頭を掻きながら空を見上げた。

「さらばだジミー。 達者でな」

「あ、ちよつと待ってよ!」

「なんだよ……」

テルは歩に呼び止められ振り返る。

「歩だから……」

「あん?」

今度はテルが間の抜けた声。

「ジミーじゃなくて 西沢 歩。 君は?」

テルは真面目に言う歩に対してめんどくさそうに

「通り過ぎりの善立 テルだ……覚えなくていい」

そう言う一人肩に手をやり、疲れた感じで歩き出した。

「テル君か……」

歩は夜空を見上げる。 たくさん星が見えた。 色々なモヤモ

ヤ消えて清々しい気分だ。

(ハヤテ君……私はまだ……)

西沢 歩は諦めない。自分の想いの為に、自分の暗かった道を照らしてくれた人物がそう言ったように

夜空の星は果てしなく輝いていた。

(人の恋沙汰にはあんま関わりたくなかったんだが……どうも俺はとんだお節介やだったらしい……)

ファミレスを後にした夜の帰り道。テルは一人歩きながら自分について考えていた。

(記憶がなくても人間に染み付いた性格はなかなか消えないらしい。だとしたらこの性格、かなり損だな)

若干、疲れがある。1日休日のハズがとんだ残業だ。最もコレは執事の仕事とは関係ないが。盗み聞きだったが二人の事情からして放って置けなかったのだ。

(まあ、いいさ……俺はゆらりとぶらりと俺のやり方で生きていくさ)

テルが行くは何の道だろうか

今はまだ何一つ自分の道は見えない

だが、この心そのままに生きればその内、道は見つかるはずだ。

(では少し遠い場所へケーキでも買ってくるとするか)

心の中で呟くとテルは星空見上げながら歩き続けた。

―その後、三千院家。

「あらテル君、コレは?」

帰宅後、テルは台所にいるマリアに会いに行き、小さな小箱を手渡した。

「……ケーキです」

その一言。するとハヤテが入ってきて、そのケーキ見た途端に目

の色を変えた。

「ま、マリアさん！ コレ有名な翠屋のケーキですよ!? テルさん海鳴市まで行ってきたんですか!？」

「まあ、お土産がてらに……」

眠たいのか目を細めたままテルは呟く。

「わざわざ遠くまで……ありがとうございます♪」

マリアは今日一番の笑顔をテルに向けた。テルは眠気も吹っ飛び、心の中でガッツポーズをした。

(イエエエエスツ!! 喜んで貰えてるから多分怒ってないぜ!)

しかしマリアは笑顔で……しかし黒いオーラを出しながらテルに言った。

「まあ、それで今日の事が許される訳ではないですが」

「うっ!」

「ついでにこのケーキは私のお金で買いましたね?」

「……………」

もはや返す言葉もみつからない。誤魔化しきれなかった。

(今日の事って何だろう……)

ハヤテは一人疑問に思っていた。

色々とハプニングにみまわれながらも1月10日はこうして過ぎていった。

第8話く夏を制する者は受験を制する？ 嘘だね！
僕ダメだったもんく

—1月11日。

(はく、それにしても昨日は西沢さんには悪いことしたな)

屋敷の前の門で封筒を貰ったハヤテは心の中で溜め息混じりに呟いていた。

(でも今は女の子と付き合う資格ないし……でももう少し断り方が……でもああいう時、どうしたらいいのかなんて分からないし……)

屋敷の扉を開け、赤いカーペットが敷かれた階段を上がっていく。

実際、何故あんな断り方をしたのかは自分でもよく分からなかった。しかし、歩の告白を受けた時にハヤテの中で気になる事があった。

(でもなんであの時……お嬢さまの顔が……)

ハヤテには脳裏に涙を浮かべ、悲しみの表情を浮かべるナギの姿が気になって仕方なかった。

(もしかして僕は……お嬢さまの事……)

その次の言葉を考える事は無かった。

「お嬢さま、お届けものが—」

ハヤテはナギがいる部屋の扉を静かに開ける。先程届いた封筒だ。

「おお、ありがと。とりあえず封を開けてくれ」

どこからか声がする。ソファアからだ。見るとナギがふんぞり返って漫画を掲げて見ていた。13歳の体には不釣り合いなソファアにはナギが横になってもまだスペースが余る。はつきり言って姿勢が悪い。

「お嬢さま。お嬢さまも女の子なんですから……そういう本の読み方は止めて下さい」

「お？……おお」

ハヤテは見てられずナギを起こして姿勢良く漫画を読むよう促す。

ナギは訳がわからずただ頷いた。

（妹の事が心配な兄の気分はこんな感じなんだろうな……これじゃ当分恋人なんて……）

お嬢さまだけで手一杯だ。とハヤテは気を取り直してナギに質問した。

「ところでこれ何ですか？白皇学院からの書類みたいですけど……」

「ん？？」

ナギは漫画を読みながら軽く返した。

「ああ、編入手続きの書類だろ？ お前の」

「ああ、僕の——」

「ええ!? 僕のってなんですか!? 僕のって!!」

一瞬の間があつて、ハヤテはようやくナギの発言に対し大きな反応を見せた。

「だからお前が白皇に編入するための書類だよ」

「いやいや聞いてませんよそんなの!？」

「うん今、初めて言ったからな」

それは数日前。テルがハヤテ達と出会う前の話だ。ナギに弁当を届けるために超名門校・白皇学院に向かったハヤテだが不審者と間違われ、色々あつたのだ。

「で……でも僕、前の学校退学になってますよ」

昨日ハヤテは久しぶりに母校へと顔をだしたのだが、既に両親が学費の残りを奪い、ハヤテを退学扱いにしてしまったのだ。

「ああ、とつくに知ってるよ。そっちの資料も取り寄せたからな」

「僕、退学になってるの昨日初めて知ったんですけど……」

「ああ、そうなの……」

ナギは平然と呟くがハヤテは全く自分は知らなかったのにナギがとつくに知っていたことに驚いていた。やはり金持ち、情報網もかなりのものである。

「で、でも！学費はどうするんですか？ 白皇の学費なんて僕、払う自信はありませんよ？」

白皇は超名門校だ。そうなれば学費も当然高い。ハヤテにはそれを払う経済力はおろか、借金が億単位とあるのだ。

「何を言っているのだ。そんなの私が出すに決まっているではないか」

ナギはまたしても平然に返した。 お金持ちならではの考えだろうか。

「で!! でも!!」

「もくなんだよ」

ハヤテの言葉を遮り、ナギは漫画を閉じてハヤテを不機嫌そうに見た。

「私と一緒に、学校行きたくないのかよ」

「……………」

—僕がもう一度学校に

ハヤテはナギの言葉に胸から溢れるようなものを感じた。 自分の荒んだ学校生活。 バイトと、はつきり言っただけのものは言えなかった。 そんな自分が再び学校に行ける機会ができるかもしれないのだ。

ハヤテは今、正直に、ナギに深く感謝の言葉で一杯であった。

「あ……あ……あ……ありが——お嬢——」

気付けばハヤテは涙を流していることに気づいた。 何故だろう

か、込み上げるものが多すぎて上手く言葉が話せない。

そしてそんな泣いているハヤテを見たナギは突如のことで驚いた。

「わ——っ!! 何、泣いているのだ!!」

「だって……だって……」

ハヤテはぐすりながら呟く。 ナギがなんとかしようと考えていると扉に MARIA がいることに気づいた。

「……何、泣かせているんですか?」

MARIA にしてもイマイチ状況が読み取れなかったようで、ぱっと見で主人が執事を虐める、そんないけない事を思ったのだろう。

「いやいや!! 私は何もしていないぞ!!」

ナギは全力で否定するがここでまたややこしい人物が

「あん? 何やってんのお前ら……」

黒髪、死んだ魚のような瞳をした男。 善立 テルだ。

テルはナギの前で体を震わして泣いているハヤテの姿を見て、顎に手を当てて考える仕草を見せて続ける。

「オイオイ、いくら何でもまだ早いだろお前らには……」

「こら、なんの話だ」

ナギがテルに言うがテルは続ける。

「最近の若者は乱れてるって聞いてるけど、戦国乱世並みの乱れ方じゃねえか。 一応コレ全年齢版だからよ。 テルさんは認めません! 絶対に!!」

「人の話を聞けエエエエエ!!」

ナギのツッコミと共にテルの顔面にメガトンパンチがグシャッとめり込んだ。

暫くして……

「あのなあナギ、ツッコミってば声あげて殴ればイイって訳じゃねえ

だよ」

顔面から鼻血が出ているのをテルはティツシユで抑える。ナギは不機嫌に返した。

「人の話を聞かないお前が悪い」

「お前、全ての人間のツツコミがそんなのになってみる、病院行き一杯だよ？ ツツコミの世界が崩壊だよ！」

「お前を今崩壊させてやるわアアア!!」

ナギがハンマーを構えて今にも殴りかかろうとしたがマリアにより収められた。

「でもこの書類を見る限り、試験を受けなければいけないかもしれないかもしれませんね」

マリアが書類片手に呟く。

「ハヤテが受験か……ま、頑張れや」

テルがハヤテの肩をポンと叩く。他人ごとなのは確かだが、ハヤテはテルに聞く。

「テルさんはいいんですか？」

「なにが？」

「学校ですよ。通っていたんじゃないんですか？」

ハヤテの言葉にテルは頬を掻きながら

「通うも何も……俺は学校に行っていたのかすら覚えてねえの。どうしようも無いだろうが」

「なら、僕と編入手続きして……」

ハヤテが言うがテルはふうと言った感じで

「手続き書類はお前一人のだろ？」

確かにそうだ。この書類はハヤテ一人の物。一枚の書類で二人の受験は不可能。テルはそのまま続ける。

「俺はいいって、学校は多分疲れるし、ダルいし、執事の仕事と併用してなんて死んじまうだろうが」

これは嘘ではなく、テルが来て最初の頃よりポカが少なくなったのは確かだが疲労は溜まりに溜まる。そこに学校、この二つをやりこなすのは至難の業だ。本人としてはダルい方が本当の理由かもしれないが

「だからお前は頑張つて受かってこい。ま、頭の方はわかんねえが……おっと仕事に戻らねば」

テルはそういうと扉を開けて出て行った。

テルが居なくなつた部屋で三人は少し黙っていたがハヤテが口を開いた。

「お嬢さま」

「な、なんだハヤテ……」

ナギはいつになく真剣なハヤテに驚く。

「実はお願いが――」

「あくさぶ、さぶ」

現在夕方4時過ぎ、冷めきつた風がテルの体に浴びせられる。

「はあ、こんな寒空に買い物に行かせるとは……マリアさんも人が悪い」

めつたにマリアに対して愚痴を言わないテルだが、それほどに寒かった。

「まあ、このコートのお陰でかなり暖かいけど」

テルが着ているのは高級なコートで有名なカシミアというコート。

これはある国に住む羊の皮から作られたもので物によれば数百万はくだらない。

事の始まりは数時間前。

「買い物ですか？」

「ええ」

三千院家の長大な廊下、箒を持ったテルとマリアが会話していた。

「ハヤテ君の試験が明日なので買い出しが出来なくなっているんですよ」

「試験が明日って、素人がいきなり訓練無しにロケット乗って宇宙行くくらい無謀じゃないですか」

「まあ、こんな時にどうとでもしてしまうのもハヤテ君ですし、とりあえず紅茶を買ってきて下さい。あとこれも……」

マリアはテルにコートを差し出す。テルは不思議そうにそのコートを着た。寸法はバッチリだ。

「なんですかコレ？」

「三千院家の使いとして行くときはこのコートを着て行って下さい」

「……このコート高級そうですね」

「まあ、テル君よく分かりましたね」

「そりゃあ手触りが……」

テルはコートの生地を手で触る。滑らかかつフワフワした生地だ。

「いいんですか？こんな高そうなコート……」

「嫌ですわテル君。高そうではなく高いんですよ」

「……………」

テルは言葉が出ない。　　マリアは曖昧ではなくハッキリと☒高い☒と明言した。

更にマリアは続ける。

「それが百着くらいあればハヤテ君の借金が余裕で返済できるので、決して汚さないで下さいね♪」

「イ、イエツサ〜」

そのマリアが浮かべた笑顔が逆に怖かったという。

そして現在に至る。

「こんな百万する物身に付けていたら汚れ一つ付けられねえな……」

言われた店まっしぐらに道を歩く。

「まあ、ハヤテじゃねえし俺は見事汚れ無しで帰還してやろうじゃないの」

ゲラゲラ笑いながらテルは道を軽快な足取りで歩いていった。

その笑い顔からしてこれから何も起こらないというのを感じさせた。

だが彼は知らなかった。

彼にとって今日1日、一番不幸な時間が迫っていることを。

○

テルが紅茶を買いに出掛けている同時刻――

「お嬢さま!?!」

このセリフには何人か聞き覚えがあるだろうが決してナギの事では無い。

ここは東京のどこかにある屋敷。　外見は和風で昔の武士が住んでいそうな作り。かなり金が掛かっているのが分かる。良質な庭石

や松の木、美しい鯉が泳ぐ池がある広大な日本庭園が広がっている。静かで騒音とは無縁そうなその屋敷は何故だか今日はいつも以上に騒がしかった。

「おい、伊澄お嬢さまはいたか!？」

「いや、こちらにはいらっしやらない」

「くっ……! また見失ったか!!」

その和風の家には少し合わない黒スーツの男が屋敷を駆け回っていた。

「くそ! この前はスイスとかお出掛けなどで迷子になっていると言
うのに……」

「だからあれほど目を離すなど……!!」

男達が躍起になって探しているのはどうやらこの屋敷に住む令嬢らしい。となれば彼らはその令嬢の使用人、ボディガードだろう。

「おーいお前たち!!」

一人の男が手に紙切れ一枚を持ち、走ってきた。

「いたか!？」

「いや……それよりもお嬢さまの部屋にまた恐ろしい手紙が……」

男は紙切れを仲間に渡した。

「なにになに?」

男はその文章を見た瞬間、血相を変えた。手紙には達筆で三行ほどの内容が書かれていた。

くナギちゃんの家にお届け物があるので 遊びに行きます。 夕

飯までには戻ります。 く 伊澄

「……………」

暫く男達は文を見つめていた。やがて全員で顔を見合わせて 叫んだ。

「なんてこつたい！ 一人で出掛けてしまったのか!？」

「蝶々とかを追っかけてそのまま迷子になってしまう人だからな……」

「ここだけの話、先日、三千院のお嬢さまは誘拐されそうになったと聞く……」

最後の男の一言に全員が顔を曇らせた。

「さ、探せエエエ！ 迷子とか誘拐される前に探し出せエエエ!!」

「もし、誘拐されそうになっていたらその犯人をフルボッコにしてやるのだアアア！」

「♪♪♪」

テルは柄にもなく、鼻歌交じらせて歩いていた。高級コートを羽織っているため、汚してはいけないというプレッシャーがあつたが、自分はハヤテではない。不幸な事が起こるとするのはーミクロンも感じていないだろう。

「♪♪♪」

ポケットから棒付きキャンディを取り出し、口に加える。このままスキップでも加えたいくらいの気分だ。

ガチャン！

「♪♪♪」

一瞬、何かがつまずいた時の音がしたが空耳だと自分に言い聞かせる。だかその直後

「た、大変だ!!」

テルの後ろで驚きふためく声。振り返るとオツサンがいた。

地面に膝を付けてテルの方に手を伸ばして叫んだ。そのオツサンの傍らには自転車が横たわり、車輪が空を切って回り続けている。

「ああ！ カシミアについたら絶対落ちないタイプの墨汁が!!」

ふと上を見上げると、空中でバケツが黒い液体を撒き散らしながら

テルめがけて飛んできた。

「ふおっ!!」

テルはコートを下からたくしあげてその場からバックステップ。バケツは派手に地面に打ち付けられ、墨汁は辺りにぶちまけられた。

「オイ、オッサン……お前をこのバケツみたくしてやろうか……」

幸いコートには汚れは一つもついてはいない。しかし、テルにとってこの数百万するコートを汚すこと、それは自分の首が危ういということの意味していた。

(汚したら確実に殺される……主にマリアさんとかマリアさんとか……)

結局マリアしか言っていないのだが使用人の実権を握っているのはマリアだとテルは思っていた。

執事長というのがちゃんといえるのだが

テルはそのまま180度方向転換。　　気を取り直して歩き始めた

「ああ！　急にそこで方向転換されると!!　カシミアについたら絶対取れないタイプのセメントが!!」

突如、テルの頭上にセメントの入ったバケツが飛んできた。

説明するとテルの後ろでセメントバケツを運んでいた従業員がテルが急に方向転換したせいで驚いてバケツを放り投げてしまったのだ。

「ふおおお!!」

バックステップでは間に合わない。　　テルはコートをたくしあげて右足をハイキック気味に振り上げた。

ハイキックが見事バケツに決まりバケツは近くの店の壁に衝突した。

「何だっつてんだ一体……」

予測できない危険信号の連続にテルも嫌な予感を感じずにはいられなかった。

(い、急ぐか……)

と不安から逃げるようにその場を離れるテル。すると今度は

「キヤアアア！ 大変よオオオ!!」

前方から女性の声。女性の姿はない、声だけだ。人混みが広がるがその中を無理やり掻き分ける人物がいた。

「ど、どけエエエエ!!」

怒号をあげながら走る男はバッグを持ち、片手にはナイフが握られていた。強盗が逃げている途中なのだろう。

「どかねえとこのカシミアがよく刺さるナイフでブツ刺すぞ！」
「……………」

男はテル目掛けダッシュしてきた。体をかがめてナイフを構えながら

テルは回避する暇がない、というよりもしない。そろそろうざったくなってきた位だ。

テルは回避動作を取ることなく男に向かって走り出す。

(さっきからさっきから……)

テルは沸き起こっている怒りを溜める事を止めた。溜める位なら少しでも外に放出する形にしようと考えた。

テルは助走から一気に右足で踏み切る。

「!!」

犯人は向かって飛んできたテルに驚き立ち止まってしまった。

勿論、テルはそれを見たところで止まる訳がない。

「俺の邪魔すんじゃねエエ!! コノヤロオオオ!!」

叫びながら男の顔面にテルの怒りの跳び蹴りがめり込んだ。男は蹴られた威力に二転三転転がりやがて止まると鼻血を垂らしなが

ら気絶した。

「おお!! アイツやべえぞ!!」

「全くだぜ!! 勇敢な奴だ! 勇者だ!」

周りから拍手喝采が響く中、テルはダツシユでその場を離れていた。

これ以上変な事に巻き込まれないようにするためである。

「ゼエ…ゼエ…」

人盛りをかわし、テルは走ってきた疲れのためか膝に手を当てていた。

(何故だろうか…カシミアだけの集中攻撃ならまだしも、段々と俺の命に関わるように不幸がグレードアップしてないか?)

前言撤回、今日は鼻歌歌う気分でもスキップする日でもない…厄日だ。

(だが…)

テルは膝から手を離し、体を真っ直ぐにして心の中で呟く。

(この買物は何が何でもやり遂げたらア…例え雨が降ろうが槍が降ろうが…)

ドスツ!

「あ?」

後方から何か地面に突き刺さった音。また強盗の類かもしれないかとテルが振り向くとそこには長い一本の槍が

「なんで槍? ……へ?」

突き刺さった槍を見て、ふと空に視線を移すと無数の黒い点が見て取れた。遠くから見たそれは近付いてくるとハッキリと形が見えてくる。

その見えてきた物にテルは顔青ざめさせてフルスロットルで走り出した。

空から降ってきたもの…それは紛れもなく槍だった。

「ギヤアアアアア!!」

ドドドドドドド!!!

襲い掛かる槍はテルを追いかけるときに突き刺さる。一瞬でも気を抜けば串刺しだろう。

「なんでマジで槍が降ってくんだアアア!!」

く東京の夕方ニュースく

草野「どうも、草野 ひとし です。

緊急ニュースですが先ほど今年公開映画、『えいりあんvsやくざ』のセット用品を乗せた飛行機の貨物室が爆発するという事故が発生しました」

「う〜ん?」

その頃、三千院家ではテーブルを前にナギが漫画を読みながらテレビを見ていた。ハヤテは現在明日の試験に向けてもう勉強中。

草野『えいりあんvsやくざ』はストーリー上、槍や刀などの武器を使用するためそれを運送していましたが飛行機の事故により一部の荷物が落下しています。近隣住民の皆様は外出には十分お気を付け下さい。横造でも高いところから落ちれば十分危険です。尚落下場所は東京の……」

「マリアよ……」

「はい?」

ナギは後ろに立ってテレビを見ているマリアに視線を移す。

「なぜだか知らんがよく分からない内にテルが無数の槍に串刺しにされている気がするのだが……」

「まさか♪ ハヤテ君じゃないんですよ?」

「まあそれもそうか……それより伊澄はどうしたのだ?」

ナギは視線を漫画に向ける。マリアはそれを聞きながら

「まだ来ていないみたいだな……という事は迷子か……」
最早その言葉が決まって出てくるようにナギは呟いた。

一方テルは

「……………」

公園のベンチに横たわり屍と化していた。公園に逃げこんだのは人気を避けるためである。

「なんで俺に不幸がくるんだ？ 触らぬ神に祟り無しって聞くが触ってもねえのに不幸が向こうからホイホイやって来やがる」

身を起こし、ベンチから立ち上がり公園を去ろうとした。人気を避けていたとしてもトラブルはどこからやって来るか分からないからだ。

「早く帰って寝てエ……………ん？」

頭を掻きながらしんどそうに呟いていた時、テルは公衆電話に立ち尽くしている人物に目が止まった。

「……………」

公衆電話の前に立っているのは一人の少女。この都会、東京という場所では目立つ和服を着た少女だ。

「……………」

少女は公衆電話のテレホンカードを入れる口を見つめて袖から一枚の札を取り出した。

「……………」

テルは目を細めてマジですか!? といった感じで少女を見つめていた。

びっしりと梵語が書かれたお札は明らかにカードを入れる口より遥かに大きい。

(ま、まさかと思うが……………え？マジで?)

そのまさかで少女はお札をカード口に入れようとした。当然お札は入らない。

「……………」

少女はお札が入らないのが分かるとお札をしまい込んで一言。

「この機械は壊れています……………」

「壊れてんのはお前の頭だアアア！」

テルが声を上げる。少女もその声に驚き、テルに振り向いた。

(し、しまった！ 思わずツツコンでしまった……………) しまったと言わんばかりに声を掛けてしまったと思うテル。テルは落ち着こうとして少女に話し掛ける。

「そこにはお札じゃなくて専用のカードを入れんだよ」

(……………)

少女はテル見るや少しの間を置いて口を開いた。

「大変です……………」

「……………」

ゆつくりと喋る少女にテルは疑問を浮かべる。

「知らない人と会話をしてはいけないと友人に言われていたのに……………
また会話をしています」

「それは悪い事したかもな……………ってか一度だけじゃないのかよ」

「でも大丈夫。その友人は優しいのできつと許してくれます……………」

「そうかよ。 んで？見た感じ困ってそうだがどうしたよ？迷子か？」

少女はテルの言葉にゆつくりと返した。

「迷子ではありません。友人の家を目指していたら道が分からなくなってしまうたのです……………」

「それを迷子って言うんだよ！ お前ポジティブシンキングにも程があんだろ!!」

「いいえ……………迷子ではありません……………」

「意地でも迷子って認めない気だよ!! コイツ頑固だ！ こんなおつとり顔だけど頑固者だよ!!」

恐らくどんなに迷子であることを指摘しても少女は聞かないだろ

う。そう思ったテルははあ、とため息をつきながら呟いた。

「わーったよ……お前を放っておいたら間違つて核ミサイルの発射ボタンも顔色一つ変えず押しちまいそうだ。だから手え貸してやる……」

「……ありがとうございます……」

少女は袖口で口元を隠しながら礼を言った。　テルは続けて聞く。

「お前、名前は？　俺は善立　テル」

そう聞かれた少女はにこりと笑うとこれまたゆっくり口調で言った。

「鷺ノ宮　伊澄です……宜しくお願いします……」

触らぬ神に祟り無しという言葉がある。　これは厄介な事には知らん顔をするのがよいという意味だ。そうすれば厄介事に巻き込まれることは無いからである。

これまではテルは知らん顔しても厄介事に巻き込まれてきた。

これは偶然という事もあるかもしれない。

しかしテルは今回、自らからその厄介事に触れてしまったという事に気付いてはいなかった。

○

「鷺ノ宮　伊澄です……宜しくお願いします……」

伊澄は一礼し、にこりと笑顔を見せた。

「ところで……」

「ん？」

テルは笑顔で言う伊澄を見る。

「私はどこに行くのでしょ……」

「いや、きつき友人の家に行くとか言ってなかったっけ？」

第17話くホ○ミの回復量は50ぐらいく

夕陽が傾いてくる時間帯、テルと伊澄の事態は難航を極めていた。

まさか自分が何のために出掛けていたかすら忘れるとは。

(伊澄……恐ろしい子！)

テルは伊澄の目指す場所を推理する事を考えた。道案内するにはまずどんな場所か、そのヒントが必要だ。

するとテルが何かに気付いた。

「ん？ 伊澄……そりやなんだ？」

テルが一点を見るのは伊澄が片手に持つ綺麗な布で包まれた箱。

伊澄は箱を両手で添えてテルに見せながらゆっくり話す。

「これは友人に届ける物で……あー！」

箱を見つめながら話していた伊澄はあることに気づいた。

「そうです……私は友人の家に行くのでした……」

「気付くの遅ッ!! っていうか最初に俺言ったの聞こえなかったの!?!」

突っ込むテルをよそに伊澄は続ける。

「そう……友人にこれを届けるのでした……」

「なるほど……ならその目的が分かったんならなんとかなりそうだぜ」

ここに来てようやく一筋の光が見えてきた。目的が分かったのなら後はその友人の家に行けばいい話。

テルは伊澄の返事を待つ。すると伊澄は辺りをキョロキョロと見渡した。

「……………」

伊澄は一度間を置いて一言。

「すいません……友人の家はどこにあるのでしょうか？」

「いや、東京じゃないの？ 間違っても天空の城みたく空とかにあったら困るんだが……」

テルは頭を抱える。予想はだいたいたしてた。どうやら伊澄の天然には天性的な物があるらしい。

「じゃあその家の特徴を教えてください。友人の特徴とかそんなんでも何でもいいから……」

もう破れかぶれだ。テルはもうどうにでもなれといった表情。最終的には分からなければ交番にでも届けるか、と考えていた。

「えっと……」

と伊澄は話し始めた。

「家は大きくて、友人は私と同じ位で金髪ツインテールの少し我が儘な天の邪鬼みたいな子が……」

「なに？」

その聞き覚えのある言葉にテルは反応した。

「もしかしてよオ伊澄、そこには優秀な執事が居なかったりしないか？」

「まあ……テル様。よくご存知ですね……」

伊澄は袖口を口元に隠すように当てて驚いた目をしていた。

「知ってるも何も俺は今そのナギの執事をやってんだ。新米だがな」

テルの言葉に伊澄は更に驚いた。

「まあ……あのナギがハヤテ様以外に執事を雇うなんて……」

「ナギとは友達なんだな？」

「ええ、幼なじみです……」

「そうか、ならナギとはいい友達でいてやってくれや」

テルはふっと笑って言う。伊澄もまた笑顔でコクリと頷いた。

「ええ、勿論です……」

「よし、場所は分かったんだしさっさと行くか！」

「はい……」

テルの言葉に伊澄も頷いた。 やがて歩きだすとテルは気付いたように伊澄に手を伸ばす。

「……え？」

「え？じやねえよ。 箱貸せ箱。 持ってやるから」

「はい……ど、どうも……」

若干照れながらも重箱を手渡す。 テルは受け取ると肩を揉みながら

「なあに、一応執事だからな」

と伊澄に言った。

「……」

「……なんだよ、俺の顔になにか付いてるのか？」

テルは顔をじっと見つめている伊澄に声を掛けた。 すると伊澄は一言。

「どうしてそんなに気分が悪そうなんですか？」

その言葉にテルは疑問に思いながら

「今俺そんなに体調悪そうに見える？」

その言葉に伊澄はコクリと頷いて返事した。

「はい……特に瞳の辺りが……」

「死んでるってか？ 死んでるって言いたいのか？ 何？嫌味でしょ？ 俺に対する嫌味でしょ？」

おっとりとした顔で嫌味もハッキリ言う奴だと思っていた時だった。

公園の出口付近に数台の黒い車が急ブレーキを掛けてズラリと止まった。 その中からゾロゾロと黒服の男達が表れる。

(こいつら……)

目を細めてテルは只ならぬ雰囲気を感じ取ったのか

「オイ伊澄、隠れてろ……」

と静かに命じた。 伊澄は訳が分からずに木の後ろに隠れた。

テルが前方を見据えると数十人の黒服の男達が殺気立った目でテルを睨んでいた。

「おい貴様、伊澄お嬢様はどこだ？」（なんだこの死んだ魚のような目をした明らかに不審な男は……）

「なんだ？伊澄の知り合いか？」（なんだ？このいかにもヤクザみたいな怪しい奴ら……）

互いに発する言葉の中で様々な疑問がよぎる。伊澄はというと……

（あら……あの人は……）

とぼかんとした表情。そう、あの黒服達は伊澄の使用人である。

総出で探すこと数時間。漸く伊澄の所在を突き止めたのだ。

「全く……あの人も毎度の事から、こちらも仕事上大変だと言うのに……」

男の言葉にテルはハッと気づき、理解した。

（コイツらヤクザで人攫いの上に……ロリコンか!!）

テルはその発言と男達の服装、そして今にも殺しに掛かるような目を見てそう判断した。

（だったら話は早い……健全な小説が境界線を越える事はなんとしてみ防がねば!!）

テルは一つの決意の下に黒服達に言い放つ。

「おいロリコン共」

「誰がロリコンだ！」

男達は否定するがテルは肩を慣らしながら続ける。

「俺は今三千院家御案内のツアー中なんだよ。お前等に道案内は無理だ……どけ、ガイドの時間だ」

テルは言い放つが黒服達はどよめいた。

「何!! コイツ、三千院家を目指しているぞ！」

「そうか！伊澄お嬢様の次は三千院家の令嬢も攫うという魂胆か！

なんと腐った奴……」

「ならば……」

「うん？」

チャキツと男達の腰の辺りから金属の音。腰に帯びていた鞘から研ぎ澄まされた銀色の刃が抜き放たれた。

「このカシミアがよく斬れるタイプの日本刀でたたっ斬ってやるしかないな……」

「……………マシで？」

黒服達の構えた日本刀が夕陽に浴びせられて怪しく光る。どうやら取り返しのつかないヤバイ状況になってしまった。

(コート云々の問題じゃねえだろオオオ！ 死んじまうだろうが！常識的に考えて!!)

殺気立った目を止めずに刀を構えた黒服達はテルにジリジリ近付いて距離を縮めていく。

(どうすりあいい……)

徐々に心臓の鼓動が早くなる。それと同時に後ろに後ずさった。このままいけば自分は刀に一刀両断され晴れて終了。

バッドエンドしか浮かばず冷や汗を流していた

—その時だった。

—逃げるの？ 困っている人を置いて……

一瞬、頭の中に声が響く。テルが知っている声ではない。知ってはいるが、何故だか懐かしい声だった。

(車に跳ねられた時に聞いた声じゃない……)

聞こえてくる声は清廉な女性の声。だがそれは母の声とはほど遠いものだった。

—目の前に困っている人がいたら迷わず手を差し出さない。

(誰なんだよ……)

頭に残る言葉にテルは忌々しく感じた。

ふと我に帰ると数十人の黒服達が見えた。

新たな謎が浮かぶ。両親以外にいる人物。

(いきなり聞こえてきたと思っただら訳のわかんねえ事ばかり思い出しやがって……だが)

不思議と顔にニヤリとした笑み。その言葉は女が言うには余りにも臭かった。しかし、どこか力強さを感じさせるその言葉はまるで背中を後押しするように前向いて歩けよと勇気付けられるように

テルの失っていた『何か』を思い出させるように

「オイこらロリコン共」

ドンと構えてテルは仁王立ちの状態で黒服達に言い放つ。

「コイツを攫いたいなら、この俺をどうにかしてからにしろ……だが簡単にはいかんぜ？」

腕を組み、数十人の黒服達を前にしてもテルは表情を崩さない。

先ほどの動揺は無かったかのように。それは黒服達もテルの豹変に戸惑っていた。

(なんだ？この男……この絶対的不利な状況であの余裕……あの余裕は一体どこから……)

「おーい！お嬢様が居たぞ！」

黒服達の一人が高らかに声を上げる。しかしその声はどこか慌てていた。

(な、どこに行きやがったんだアイツ！)

テルは男の言葉にすぐ後ろを振り向いた。しかし、そこには伊澄は居らず変わりに重箱が置かれていた。

「なに!? どこだ！」

黒服達は一齐に伊澄の所在を尋ねる。発見したと報告した男は指を示した。

「……………」

その指差した所に全員がギョツとした。

指差された所は低地でもなければ平地を指している訳でもなかった。

「て、テル様〜」

公園の出口のすぐ近く、高らかな場所から伊澄の助けを求める声が響いていた。現在、伊澄は高層ビル最上階の屋上にいた。

「「アンタは何してんだアアアア!!」

」

公園にいた全員が見事に、息ピッタリに叫んだ。

「オイイイ！ ほんの数ページもしない間に迷子になってんじゃねーよ！ コツチがマジモード入ってたのによ！ お前はアレか!? 加速装置かワープ機能でも付いてんのかアアア!!」

伊澄の規格外の行動にテルは猛然と突っ込んだ。当然、伊澄には聞こえてはいないが。

突っ込んでいるテルをよそに黒服達は大慌てである。

「なんという事だ！ 伊澄お嬢様が危険な所に！」

「しかもどうやったか知らんが金網の外側に出ているぞ！」

「何人かは早くビルに逃げ！」

「もし風に揺られて飛び降りでもしたら……………」

「すいませ〜ん……………気が付いたらこんな所に……………でも大丈夫ですよ

」

本人が出来る限り高めに発した声は当然届く訳がない。取りあえず、大丈夫だなど安心していたその矢先。

ビュオオオオ!!と、強いビル風が吹いた。

「あら……」

一瞬にして伊澄の浮かび、気付けば屋上の足場から体が離れてしまっていた。

少しだけ宙に浮いていたがそれも一瞬。伊澄の体は重量の法則に従い、ビル最上階から落下した。

(は、ハヤテ様……)

一瞬、この場にはいない人物を頭に思い描いた。

この時、テルの体は既に動いていた。黒服達の動きは気にしない。ただひたすら伊澄の所へと。

「ぎ、貴様！」

黒服達の一人がテルの行動に気付き、日本刀を構えた。刀が振られる一瞬の間、テルの頭に再びあの声が響く。

―そして……守りなさい。

(ああ、守ってやるよ……)

―一度手を差し出したなら、自分の魂に賭けてでも守りなさい。

(テメエ(自分)の命尽きるまで! 何度でも! 守ってやらアアア!)

「でえい！」

日本刀が真横に振り抜かれた。業物から成されるその一閃は大抵の物を切り捨てるだろう。

そこに物があつたならだが。

「!!」

刹那。そこにはテルの姿は無い。一閃の下に刀が振り抜かれる瞬間、テルは男のすぐ上へと飛んでいた。

上に視線を移すと男の目にテルの姿があった。宙に浮いたテルは黒服達の体を踏み台にして黒服達の包囲網を突破していく。

そして一気に黒服達の乗っていた車の上に飛び乗った。

「逃がさん!」

黒服達は刀の間合いから遠ざかられたと感じると、懐から拳銃を取り出して発砲。

テルは待つていたかのように車の上でしゃがみ込んだ。

そして、車に一発の弾丸が当たり、次の瞬間

ドン!と車は爆発して大破。しかしテルはその爆発を利用して上へと舞い上がった。

「執事にイ! 不可能はないイイイ!!」

そして落下している伊澄をキャッチ。

「ん……ハヤテ様?」

伊澄は落下してから今まで目を閉じていた。

普通、こんな絶対的危機的な状況で普通の人間ならば救出は出来ない。出来るとすれば綾崎 ハヤテぐらいだろうか。

ハヤテには何度か助けられた事があった。だからこそその信頼から伊澄は呟く。 瞼にうやむやに映る人物を思い浮かべながら

「……ハヤテ様?」

しかし、そこに居たのは、自分を救ってくれた人物は

「悪かったな、ハヤテじゃなくて」

善立 テル その人だった。

「そうだよなあ……俺みたいな奴なんかよりああいう何でも出来る奴に助けられた方がイイに決まってるよな」

テルは嫌味たらしく伊澄に言う。

「え、いや、その……」

思わず顔を隠してしまうが明らかに顔が恥ずかしさで真っ赤だった。

「あらあら……ってアレ？」

しかしテルはここであることに気付く。

「この後どうすればいいんだっけ？」

助けたといってもテルは数百メートル高く舞い上がっていたままだった。当然何時までも上昇していく訳ではない。やがて重力の法則に従い……落ちた。

「うおおおおッ！ 落ちてるのかコレ!? 落ちてんの!？」

(こうなったら一か八か!!)

テルは片手に伊澄を抱えてコートを脱いで近くにある信号機に狙いを定めた。どうやって脱いだかは聞かないで欲しい。

「持ってくれよ！俺のカシミアちゃん！」

信号機の三色ランプの部分にコートを巻き付かせる。運良くコートはしっかり絡まった。

「よっしゃー！さすがは俺のカシミアちゃん——」

しかし、喜びも束の間。テル達がぶら下がると

ビリビリビリッ!!という音を立てて破れてしまった。

「んなっ!!」

呆気に取られていたテルはすぐさまに下へと落下。

テルのとつさの判断。伊澄をお姫様抱っこしてコンクリートへドン！

着地。脚から脳天を貫くかのような激痛がテルを襲う。伊澄はテルの腕から降りて心配そうに声をかけた。

「て、テル様……あの……大丈夫ですか？」

「あ、安心しろ……俺はどこぞの未来少年より丈夫だ」

テルは前のめりに倒れながらも親指を立てて返した。

「待て！」

着地した地点に黒服達がズラリと横に並ぶ、武器とかを色々構えて

「また来やがったか……」

テルは毒づきながらも身を起こして立ち上がろうとする。が

(やべ、体が……)

脚に力が入らない。体中が悲鳴を上げるほどの激痛。　テルの体は爆発と落下の際のダメージで限界寸前だった。

(まだまだ……)

ここまで来てテルは不適な笑み浮かべて無理にでも立ち上がろうとした。

が、その時、テルの動きを制するように伊澄が前に出た。

「オイ伊澄！」

「すいません……テル様……もういいんです……」

「馬鹿野郎が！　簡単に諦めんな！　こちとらガイドの方がまだ終わってねえんだよ！」

身を貫く激痛に耐え、無理にでも体を起こしたテルは必死の形相で叫んだ。テルの姿を見て伊澄は驚いたがゆつくりと話始めた。

「いえ、テル様は誤解しているようですが……この人達は私達の使用人ですよ？」

「………はい？」

テルはキョトンと喋る伊澄に間の抜けた声を上げた。

その後、伊澄の説明により双方の誤解が解けた。

説明を受けた後もテルに納得していなかった使用人が数名いたという。

同時に伊澄もナギと同じ、金持ちのお嬢様だという事も分かった。そしてもう一つ。

「テル様。じっとしていて下さい……」

「ん？ おお……」

テルは黙って伊澄の言葉通り黙っていると伊澄がテルの頭に手を当てた。すると

「うおっ!!」

突如、テルの全身を緑色の光が包んでいく。そして身体中の痛みや傷が癒えていった。

「お前がホ○ミを使えるとはな……」

「ナギやハヤテ様には内緒ですよ……」

ニコリと笑うと伊澄はそう言った。

その後は車の中での話となる。ついでに伊澄が三千院家に行く車にテルも乗つけて貰ったのだ。

「つーかお前、こうやって使用人達と車で来れば良かったじゃねーか。そうすれば迷う事も無かったろうし……」

「何を言うんですかテル様……」

テルの言葉に伊澄がゆっくりと反応して返す。

「私がそう何度も迷子になる筈がありませんよ……」

「お前、このお話、最初からもういっぺん見直してみ？」

「それよりも…申し訳ありません……コート……」

「う、まあな……」

テルは苦い顔をする。伊澄に体の傷を直してもらったがコートの傷は直す事は出来なかった。

(殺されるかも……な……)

テルの脳裏には薙刀を持った笑顔のマリアがよぎった。

「不幸が起こるわ、不審者に間違われるわ、コートは破れるは……結局、ロクな事が無かったな……」

「そんな事ありませんよ……私はテル様に守ってもらいました……それだけでも充分感謝しています……」

「まあ、そうかも知れねえけどよ……いや、待てよ？」

テルは何か思い出したかのように呟くとフツと笑った。

「いや伊澄、俺はもう一つ守ったぜ、大事なモンを……」

伊澄は何の事だか分からずに首を傾げる。テルはそのまま続けて一言。

「俺が決めた、俺だけのルール（決意）だ……」

「……………」

（この人、ハヤテ様とはまた違う……雑だけど決して揺るがない心、そして魂……ハヤテ様とは違った何かを持っている……）

伊澄は思った。この人のような芯の強い人間になりたい。そうすればみんなの笑顔を守る事ができる。大切な人達を守る事ができると。

「そういえばその重箱、なに入ってたんだ？」

「これは明日試験のハヤテ様に届けるうなぎの蒲焼きです……」

重箱からかすかにうなぎの香がする。テルは重箱を涎を垂らしながら見つめていたといた。

それを見ていた伊澄は笑顔で言った。

「宜しければテル様にもお裾分けしますが……」

その言葉にテルは瞳を輝かせた。

「マジでか!? センキューー! ケガの事とうなぎの借りはいつしか返すからな!」

しかし、帰ってきたテルがうなぎをすぐ食べることは出来なかった。マリアはコートと紅茶を忘れた事を聞くとなかなかテルを屋敷に入れなかったらしい。

屋敷の扉を開けると笑顔で薙刀を構えたマリアが見えたそうなの

……その時の迫力は刀を持った数十の使用人達以上だったという。

第9話くそうだ、学校へいこうく

「ギャアアアアア!!」

―朝。断末魔に近いような叫びを上げながらテルはベッドから飛び起きた。

「夢……か……」

静かな一人部屋の雰囲気を感じて何もなかったという事を実感する。

(なんか……サ○ヤ人が出てきてなんだかマリアさんが……)

なんかそこから思い出してはいけない気がした。　と言うよりも思い出したくないと言うのが正しいか。

ダルそうに身を起こし、顔を洗う。　時刻は6時。もうハヤテやマリアは起きている頃だろう。

階段を降り、台所に繋がる扉を開ける。

「あ、テルさん。お早うございます」

扉を開けたテルに気付いたハヤテが声をかけた。

「おお……」

「どうしたんですか？　そんな疲れた顔して……」

テルの顔色を見たハヤテが尋ねる。　死んだような瞳がいつもよ

り死んでいたからだ。

「なんでもねえよ……ただブ○リーが」

「ブ○リーですか？」

「あらテル君、どうしたんですか？　早くお仕事を……」

ハヤテの言葉を遮り、マリアが話に入る。　一瞬、マリアの顔を見てテルは顔を引きつらせたがすぐに気を取り直して仕事に移る。

「そうですね、ハヤテ君。そろそろ支度を、ここは私とテル君でやりますので」

何かを思い出したマリアは、パンつと手を合わせてハヤテに言った。「いいんですか？ 僕だけそういう訳には……」

ハヤテは戸惑いながらマリアに聞くがマリアは構わないと言わんばかりに返す。

「大丈夫ですよ。私が付いていれば酷いご飯はできませんから」

「フツ……俺の料理を朝から食べれば最高にhighになれるのに」

「テル君？ 自分で自分の料理を食べてみますか？」

マリアの一言にテルは自身の行動を自粛。

「ハヤテ君、早くナギを起こしてきてください。準備もありますし」「わ、分かりました」

ハヤテはエプロンを脱ぐと扉を開けてナギの元へ向かった。

「ではテル君、こちらも支度をしますか」

「了解です」

マリアとテルは手際良く準備を進めていく。

(しっかしまあ、アイツが受かるとはねえ……)

ここら最近の説明をすると数日前、受験したハヤテだがどうやら受かったらしい。

最初は点数が足りなくて不合格だったのだが、マリアの推薦状を足して合格点を貰ったのだ。

その時は何やらパーティーやってたらしく、不合格の通知を聞いた時のハヤテ失踪事件は誰もが慌てた。

それからと言うもの、ハヤテの表情は輝いている。

「えへへ……」

いや、輝いていると言うかどうかやら幸せの余韻に浸っている状態である。

今でも朝食を済ました後にもう学校へ行くだけなのだが、カバンや

ら何やら見つめている。

よほど学校に行ける事が嬉しいのか。

「おいハヤテ、早く学校行けよ」

テルはカバンを見つめてニコニコ笑っているハヤテに促す。ハヤテはテルにニコニコとしながら返した。

「あ、テルさん。実はこれから学校に行くんですよ」

「イヤ、知ってるけど……それはそうとしてナギが待ってるぞ」

テルは扉に立って待っているナギの方を指した。

「テルさん……」

「なんだよ……」

「白凰が僕の母校なんですよ」

「だーっ!! お前は一体何なんだよ! もう何回も通つてんだろうが!! いつまでも一人でふわふわ時間楽しんでんじやねえ!!」

「おいハヤテえ! 何をしているのだ? 早く行くぞ!」

遠くからナギの声。ハヤテは返事をしてナギと共に学校へと向かった。

(アイツ、学校にまた通えるから嬉しいんだろうな……ふあく寝み……)

楽しそうに学校へと向かうハヤテを見て、テルは二階の窓から心の中で呟いていた。

何故かは知らないがハヤテと一緒にいるナギも心なしか楽しげな表情をしていた。

普段から引きこもりがちでアウトドアという言葉とは全く縁がなく、学校にはなかなか行きたがらないあのナギが。

(ハヤテといい、ナギといい……一体どうしたっていうんだ?)

テルの疑問は深まるばかりだった。

そして数時間後。　　マリアからテルは呼び出されることになった。
「マリアさん。どうしたんですか？　何か問題でも？」

「はい、実はテル君に頼み事が」

マリアはそう言うのとテーブルの上に色鮮やかな二つの重箱を置いた。

「これは？」

「ハヤテ君達のお弁当ですよ。どうやら忘れてしまったみたいなんですよね」

ふう、と溜め息をつく。　　あのミスをなかなかしないハヤテが珍しい事もあるものである。

「まあ、最近アイツすごい仕事上の空でしたからね……」

「はい。　　よほど嬉しかったんですね、学校に行けるのが……」

テルとマリアはお互いに頷く。　　退学させられたり、不幸に見舞われたりとあったのだ。　　ハヤテにはこれ位の幸福は致し方ないだろう。

まあ、結果的にこういうミスが起きてしまっただけはいるが

「まったく、ハヤテの奴め……仕事と学校のスイッチのON/OFFぐらいちゃんとしろっつーの」

「生活のスイッチのON/OFFが出来ていないテル君に言われてはハヤテ君もおしまいでしょうか……」

「マリアさん、それは酷いッス」

「テル君、前なんて朝の11時に起きてきましたね？　部活の無い大学生じゃないんですからもっとしっかりしてほしいですね」

「はい……」

テルはマリアのダメ出しにはそれぐらいしか返せなかった。

テルはテーブルの上に置いてある重箱を布に包んで手に持った。

「それじゃあ俺はこの弁当を届けてくればいいんですね?」「ええ……あ、そうだわテル君」

急ぎ足で台所から出ようとしたテルをマリアは呼び止めた。

「白鳳はほんとに有名な高校なので、これを機に少し白鳳を見学でもしてみてもいいかがですか?」

「え? ああ、はい……」

一瞬マリアが何を言っているのかが分からなかったがテルは了解し台所を後にした。

台所にはぽつんと一人残ったマリア。

(これでテル君も何かしら変化があればいいのですが……)

そう心の中で呟くマリアの手には一枚の封筒が握られていた。

○

―白皇学院。

前に一度、買い物帰りに大きくそびえ立っている時計塔を見たことがある。

色んな飛び級生やお金持ちの生徒が通う『超』がつくほどの名門校。

そこにナギやハヤテは通っている。今思うが、ハヤテにとってここは場違いじゃないか? と考える。

だがまあここ数日、楽しそうに帰ってくるハヤテを見ているとそれでも無さそうだ。

「しかしまた……大きな所だなあオイ」

三千院家の執事、善立 テルは普通の高校よりも大きく、デザイン凝った門の前に居る。校門だ。

「我が家の敷地といい勝負をしてるんじゃないか? いやどうだろうか……ウチの家の方が上かも……」

率直な感想。テルは上空から見た写真を見たことがないからこんな比べ事をするのである。

三千院家の屋敷の敷地は練馬区の65%。だから実際、三千院家

の方が大きいかも

「つと、あんまり長話しているとまた不審者に間違われそう。とつとと弁当渡して帰って寝よ」

あんまり興味津々という訳でもなく、テルは眠そうな瞳をシパシパさせた。ちなみに明らかに職務怠慢の台詞があつたがこんな事すれば彼はジャンク決定である。

両手に持った弁当を持ち、校門内に入ろうとした。

その時である。

「待ちなさいこの不審者！」

「あん？」

後ろから聞こえた甲高い声に反応し、テルは振り返った。

振り返ると居たのは20代は越えているであろう水色の髪をした短髪の女性。

「誰が不審者だ。見なさいこの洗練された輝いている瞳を」

「誰が信じるかアアア！」

テルの一言に女は辞書を取り出してテルの頭を抉るかのように叩き付けた。

スコーンとはなく、ドゴツという音と共にテルは叫んだ。

「痛えなこの野郎、出血したらどうすんだ！辞書の角はなア、上手に使えば立派な凶器なんだよ！」

両手に弁当があるため頭を抑えることは出来ない。女は辞書を構えながら返した。

「いいのよアナタ不審者だから、私もう既に辞書でアナタをぶん殴ってるし、『コレで不審者じゃなかったら不味いかな』と思ってるけどそんな事は関係無いの」

「だって」と付け加えた女は高らかに言い放つ。

「もし本当に不審者だったアナタを取り逃がしたら減るじゃない、私の給料が！」

「だから俺は不審者じゃねえっの！俺のどこ見てそんな事言つて

るの!? 教えて!? ねえ教えてエエエ!?

「うっさいわね! その瞳が死んでいるのが何よりの証拠よ!」

「アンタの不審者の基準は目か! 明らかに適当な理由付けてるだけだろうが!」

テルは女に突っ込む。 なんとというデタラメな女か。

「そんな事はいいとして、私には教師として生徒を守る義務があるの」「教師?」

その言葉にテルは反応した。

「アンタ、ここの教師なのか?」

「ええそうよ、当たり前じゃない」

自信を持って言うが果たして、一般人でも自身の給料の為なら構わず殴りに掛かる人物を教師と呼べるのか。

「まあ、それはいいとして……じゃあここの生徒の三千院 ナギって知ってるか?」

「ナギちゃんを知ってるとはアンタ、何者?」

その教師は少し探るように聞いた。 さっきよりも疑り深く。

「俺は三千院 ナギの執事。 善立 テルだ。 弁当を忘れたから届けにきたんだよ」

テルは一つの安心感を覚えてた。 事情を説明したからには誤解も解けるだろうと。

—しかし。

「アナタ不審者じゃなくて誘拐犯ね!」

「なんでそうなるのオオオ!」

「だって私そんな死んだ魚のような目した執事絶対見たこと無いもん! いたら親絶対泣くもん!」

「オイイイ! お前今絶対言っちゃいけない事言ったよ!」

誤解は一向に深まるばかり。 教師は笑いながら

「大丈夫。 アナタを仕留めるのにこんな得物は要らないわ」

「ねえ俺の話聞いてり!?俺の話聞く気ある!?俺の言葉届いてる!」
テルの言葉など毛頭聞く気もない女教師はパツと辞書から手を放すと更に続ける。

「私が武器を使うのはねボウヤ…むしろ相手を気遣っているという事なのさ」

そう呟くと教師はテルと向き合いテルと同じポーズを取る。

「残念だよボウヤ…奇しくも同じ構えだ」

(なんでス〇ツク?)

テルは呆れながら心の中で呟くが近づいていく事が出来なかった。
教師の放つ凶悪極まりないオーラの為である。

お互いに距離を取りながら円を描くように動く。

(このままじゃ近づけな……ん?)

テルはここであることに気付く。二人は今互いの出方を伺いつつ円を描くように動いている、つまり現在のテルの位置は必然とそうなるわけで

「お、もう抜けてら」

間合いを取り続けていた結果、見事テルと教師の位置は入れ替わり、校門の中に入る事に成功した。

「あばよエキセントリック教師」

「あ! ちよ、ちよっと待ちなさいよ!」

叫ぶ教師を無視してもうダツシユで校内へと侵入していくテル。
教師は顔をしかめた。

(い、いけない!このままじゃ不審者の侵入を許したとして私の責任になることは必然的! そうなれば私の給料が危ない!)

真顔で言うが内容は自身の事しか考えていない。

しかし彼女にとっては死活問題である。今月の給料日の金も毎晩飲みや飲み明けてくれ豪遊した結果、既に財布の中はカップ酒とチーカマしか買えないほど寂しくなっていた。

(一体何故無くなるのかしら……)

注・理由は明白である。

教師はそんな明白な疑問を浮かべながらも指を勢いよく鳴らす。

パチンと音が鳴るとどこからともなく黒服の男達が現れた。

「雪路様。どうなされましたか」

男達の一人が雪路と呼ばれる女に聞いた。

「凶悪極まりない不審者の出現よ！ 私給料……じゃなくて、生徒を守るために不審者を捕まえるわよ！」

もはやテルを普通の一般人と見るとかの前提は存在していない。一方的な判断であった。

「了解しました」

男達は頷くと一瞬にして四方八方に散っていった。

「テル君、大丈夫ですかね〜」

場所は変わり三千院家の屋敷。台所ではいつも通りマリアが掃除をしていた。

(さすがにハヤテ君みたいな不幸体質ではありませんがここちよくちよくトラブルに巻き込まれていますし……心配ですね)

マリアはテルの心配をしていた。彼がハヤテのようなトラブル体質ではないと分かってはいた。

実際今までの失敗の中で少なくとも彼自身の失敗ではないというのはしっていた。実際、この前の伊澄の一件は伊澄本人から事情を聞き、そういった類の失敗だったと分かっている。

だからいくらかの失敗の中でも彼に落ち度ないのは知っているのである。

それでも失敗の数は多いが

(ここは以前のハヤテ君の事もありますし、電話しておきましょう)

マリアは携帯を取り出すとテルに電話をした。

すると近くのテーブルの本からバイブ音。

「……………」

マリアは本をどける。そこにあつたのは案の定、テルの携帯だつた。

（テル君、携帯電話は持っていないきや携帯電話じゃないじゃないですか！）

もはやマリアは彼の無事を祈るしかなかった。

「さくで、行きますかな」

白皇学院に潜入したテルはこれからナギ達の元へ行く。

暗雲渦巻く白皇学院。名門校に現れるグータラ執事は一体何をもたらすか。

波乱万丈奇々怪々、奇想天外ビックリ仰天。次回もお楽しみに！

「ミッション（任務）スタートだ」

後書き

次回はあの生徒会長の登場です

第10話く潜入の基本とは自然と一体となることく

白昼の白皇学院。生徒達は広場を歩き、それぞれが授業を行う場所へ向かう。

どこの高校にもよく見られる光景。

そこに行く一つの影？

カサカサカサカサカサ……

いや、影ではない。それはスニーキング、潜入の必須アイテム、ダンボール。

彼は今、ダンボールの中に入っている。

「我ながら見事な潜入だ。ここまで鮮やかに潜入を決められるのはスニークを差し置いて俺しかいまい」

ダンボールの中で不敵な笑みを浮かべる。だが彼は気づいてはいない。彼が歩く場所は広場のど真ん中、そこを似つかないダンボールが歩いていれば自然と目が向けられ事に。

(さて、一体どこにいるんだ？ 取り敢えず色々探してみるか……)

——白皇は名門校なのでこれを機会に見学してみては？

マリアの言葉が蘇る。確かにいい機会だが

「こんなヴァ○・ディール並みに広いトコ、どこから見学すればいいかわかりません！」

このバカデカさ、恐らく初めての人が入ったら確実に迷ってしまうだろう。

テルは人目を避けるために茂みの中へと移動した。

頭に木の棒を付けてカモフラージュを装っているのだが、執事服を着ているためあまり意味は無いかもしれない。

「大丈夫、自然と一体になれ……宇宙は俺の一部であり、俺は宇宙の一部だ」

何かのまじないなのか、テルは謎の呪文を唱え始めた。

身をかがめて低い姿勢で行動をしていく。

テルがものすごいスニーク気分を堪能していたその時である。

「……だ！」

茂みの奥から一瞬だけ張り上げた声が聞こえた。

「ん？」

テルはその声が気になりその場所へ近づいていく。静かに近くと段々と声の主が見えてきた。

「なんか違うんだよなあ……」

そう一人呟くのは少年だ。ナギと少し似た身長、毎日不機嫌そうな顔している。

「こんなんじゃ俺の思いは伝えられない、もう一回だ！」

少年はそう言うとは一度深呼吸して目を閉じた。

「俺は……橘　ワタルは、伊澄の事がす——」

「どうしたのワタル君……」

「うおっ!?!い、伊澄!?!」

ワタルが言おうとした言葉が言い切られることはなく、突如現れた伊澄にワタルは激しく動揺した。

(まさかの本人登場かよ)

一人隠れていたテルはその光景を見ていた。

オロオロするワタルを見ていた伊澄は口を開いて聞く。

「それでワタル君……私がどうしたの？」

「へ!?!いや、その……」

言葉を詰まらせていたワタルだったが意を決して伊澄と向き合う。

「お、俺はお前の事がす、す……」

「え……」

伊澄は表情の変わったワタルを見て顔が赤くなる。

(さあ言え少年！お前の思いを告げて見ろ！だが成功したら死刑だアアア！)

近くの茂みに身を隠していたテルは二人を見守っていた。

「す、す、酢だこー！」

「……………」

橘 ワタル。13歳。一年、いや、何年よりも長く感じた瞬間だったという。

「……ワタル君、私酸っぱいのはどうも……」

「えっ!? ああそう! 分かった! じゃあ甘い何かだったら用意できるから」

「まあ、楽しみにしてるわ……」

伊澄はニコリと笑顔を向けてワタルに言うとその場を去っていった。

(……………)

ガクツと膝を落とし両手を地面に付ける。

(全く俺はなんていう……)

「ヘタレ君」

「なっ!?!」

突如茂みからガサガサと顔を出したテルにワタルは驚いた。

「全く、やっぱり学校てのはこういうのが多々あるもんなんだよ。

気になるあの娘がいれば声も掛けずらい、自身の油断をもたらす……

正に愚の骨頂、男子!」

「お前は何様だ! どんな暗い青春送ってただよ! って待てよ……

」

ワタルは語るテルに突っ込むがここで一つの疑問に気付く。

「お前、いつから居たんだ?」

ワタルの言葉にテルは顎に手を当てながら答えた。

「えくと、『俺は、橘 ワタルは……』って所から」

「ウオオオオ!」

顔を真っ赤にさせてワタルは叫ぶ。不覚だ。見ず知らずの他人に好きな子に告白の練習するところから実行(結果・失敗)にいた

るまでを見られてしまった。

橘 ワタル。一生の不覚である。

「まあまあ」

テルは落ち込むワタルの肩をポンポンと叩く。

「若いうちは色々やってみるもんだ。大丈夫、みんなそうやって大人の階段登るのさ」

「ムカつくんだけど、その『ドンマイ』って言ってる輝かしい笑顔がやたらムカつくんだけど!」

憐れみプラス、励ましの笑顔で親指を立てるテルがこの上なくイライラしたワタルだった。

テルは続けて一言。

「まあ頑張れや平成酢だこへタレ少年」

カチン。とワタルの中で何かが弾けた。

「うるせえええ!!」

ワタルはそこにあつた石を手に持ちテルめがけて投擲。

小さい石、中くらいの石が矢継ぎ早にテルに命中。

「オイコラ! 石を投げるな! 当たると痛エんだぞ!? いやっ、あの、ちよっ、止めろって!」

それでもワタルは目をつり上げて石を投げるのを止めない。

仕舞いにテルのデコと鼻に石が命中し、テルは顔を抑えながら退散していった。

「ハアハア……」

逃げていくテルを睨みながら、ワタルは投擲で疲れたのか息を荒くしていた。

「つたく、なんなんだよ……」

―橘　ワタルと善立　テル。　この二人はいずれ思いがけない形で再開することになる。

一方、白皇学院内にあるカフェテリア。

「なにイ!?　弁当を忘れただと!」

「はい……申し訳ありません、お嬢様」

ここカフェテリアで椅子に座る一人の少女、その側に立つ一人の少年、ナギとハヤテだ。

つい先ほどの事、授業の休み時間に自身が弁当を持ってくるのをすっかり忘れていた事に気付いたのだ。

「す、すいません!　僕がすっかりしなかつたばかりに……」

「むう……ハヤテでもたまにミスるんだな」

慌てるハヤテにナギは珍しいと言った表情。

「まあいいさ、誰にだって失敗はある。幸いここで食べていってもいいんだし……」

『♪♪♪』

ナギが言い切る前にどこからともなくメロディーが、ナギの携帯である。

「もしもし、マリアか、どうした?」

「ナギ?　あなたお弁当を忘れていきましたね?」

「私が忘れたのではなく、ハヤテが忘れたのだ」

「普段から自分で持つように心掛けていれば良かったのでは?」

「うぐっ!」

マリアに正論を言われたナギは返そうにも返せない。

マリアは続ける。

「……まあ、ハヤテ君のせいにするのはよしましょう。今テル君が二人のお弁当を持ってそちらに向かっています」
「なにイ!? あいつが?」

マリアの言葉にナギは声を荒げた。

「アイツの作った弁当は食べんぞ! 白皇で食中毒事件を起こす気か? 私はハヤテの弁当以外は認めん!」

マリアはその言葉にピクツと反応し、静かに返した。

「そうですね……なら、私の作ったお弁当は食べなくてもいいですね」
「へっ!? いや、違うんだマリア、そういう事ではなくてお前が作ったなんて知らなかったから……」

ナギの言葉にマリアは呆れながら返した。

「全く……ちゃんと感謝しなさい。どこまで嫌ってるんですか」

「だってアイツすぐにバカにするし、いらなくボケるし、私をからかうし……私にとっての悪だ」

(なんとこの言われようでしょうか)

つくづくテル哀れとマリアは思いながら続ける。

「それはそうと、初めての白皇なのでハヤテ君みたいにトラブルに巻き込まれるかもしれません」

マリアの言葉を聞き、ナギは椅子の背もたれに寄りかかり、片腕を伸ばして背伸びをする。

「いやいや、流石にアイツはハヤテじゃないし、いきなり不審者扱いには……」

ピンポーン

と突然、白皇学院に響く放送の知らせ。

「え〜。現在、敷地内に不審者がいます。黒髪短髪で若干死んだ魚のような瞳をした奴です。生徒の皆さんは充分注意して下さい」

ピンポーン

と最後に締めめの音がなるとナギは背もたれに寄りかかりながら片腕で目を隠した。

「マリアよ……」

「はい？」

「どうやら手遅れらしい……」

「ええっ!？」

マリアは驚きの声を上げた。

「仕方ない、こっちはなんとかかしてみようから。私はこれから授業がある。」

「じゃあな」

「わかりました。頼みましたよ、ナギ」

最後に言っているとナギは電話を終えた。

(不本意だが少しヒナギクにも協力してもらおうか)

「全く、なぜ私がアイツの為に……全く……」

ナギはぶすつと頬を膨らませた。

「お嬢様、どれだけテルさんの事が嫌いなんですか？」

ハヤテが苦笑いしながらもナギに慎重に聞いた。

「海よりも深く、富士の樹海よりも深くだ」

「それをいつまでも貫き通すおつもりですか？」

「無論……死ぬまで」

「それは相当な悪・即・斬っぷりですね……」

テルはこの先大変そうだ。

「チキシヨオオオオ！　なんだアノふざけた放送はア！」

当然、この放送を聞いていたテルは怒り心頭である。

「いつでも言ってるじゃん。これはいざという時にダイヤモンド並みに輝くって……アレ？」

そんな事を呟きながら辺りを見渡しているとテルはひとときわ目立つ建物が目に入った。

白皇学院の時計塔である。

「なんだ……ん？」

テルが時計塔の入り口に近づいた時、立て札があった。何か書かれている。

『生徒会以外の者の立ち入りを禁ずる』

「ほう……」

テルはその文字を見て少し考えるとニヤリと笑いを浮かべた。

「ダメダメそんなんじゃないやあ、『入るな』って書いてると入りたくなくなるじゃん？　これは『押すな押すな』は『押せ押せ』っていうノリと一緒よ」

半ば強引に理由を付けて中に入っていく。

そこからは階段があつたがちようどエレベーターがあつたのでそれを利用した。　目指すは最上階。

扉が開くとやたら広い場所に出た。

広い場所にはソファや本棚、食器棚、奥にはテラス、そして社長とかが座りそうな大きな机がある。

――生徒会室『天球の間』そう呼ばれている。

そのテラスから見られる景色は絶景。

学院が見渡せ、遠くの校門までよく見える。　風が優しく吹いた。頬を撫でるかのような穏やかな風。　今日は晴天の事もあり、気持ちのよい事限りなしだ。

「良いところだ。　ココを俺の昼寝場所にしようか」

「危ないから止めときなさい。　落ちたら責任持てないわよ」

「そりやそうだ……ってアレ？」

聞き覚えのない声がテルの後ろから聞こえた。　テルは後ろを振り向く。

「ゆ、幽霊？」

「失敬な、れつきとした人間よ」

そこに立っていたのはホットピンクの髪を背中まで伸ばした少女。金色の瞳からは強い意志を感じる。

「今日はいいい天気ですな」

テルは考えた。先ほどの放送の事だ。恐らくこの学校は生徒会は

ジャツ○メントとかいう組織でテルを捕まえに来た刺客なのだと。ならば話は簡単。スルースキルを発動してあたかも何事もなく去る。これ平和的なやり方。

軽い足取りで少女の横を通り過ぎようとしたとき

「待ちなさい」

ガシツとテルの執事服の襟首が掴まれる。襟首が掴まれた事により首が締め付けられた。

しかも女だというのに引っ張る力が強い。

「あら？あなたもしかしてナギの言つてた三千院家の執事さん？」

少女は何かに気づいたかのようにテルに聞く。

しかしテルはかすれた声で

「ちよつ……痛い、マジ……死ぬ……」

「あらゴメンなさい」

パツと襟首から手を離すとテルは少し息を荒げた。

「まあ、そうだが……お前ナギを……知つてんのか？」

「まあさつき聞いたんだけどね本人から……それにしても」

少女は淡々と答えるとテルの顔を見つめる。じっと見られていたテルは少女に聞いた。

「お前もその口か……」

「は……」

「お前もこの瞳を馬鹿にしてんのかアアア！」

「え、いや、その……」

—私の新しい執事が来ているのだが、どうやらトラブルに巻き込まれてるらしい。顔はもう死んだ魚のような瞳をしていて、基本グータラとダメな汁でできた人間だから一発で分かるぞ。

ナギの言葉を思い出すとその言葉一つ一つが忠実に再現されていたと感じた少女だった。

「ここは生徒会室だから部外者は立ち入り禁止になってるんだけど」

少女は話題を逸らし、テルに言う。

「そうかい、じゃああの立派な机は」

テルは奥にある大きな机を指差す。

「ええ、アレは生徒会長が座る場所よ」

「じゃあその会長様が来る前に逃げねえとな」

「その必要は無いわよ」

テルの呟きに少女は笑いながら言った。 少女は続ける。

「目の前にいるじゃない、アナタの」

「え、マジ?..」

テルは目を丸くして啞然とした声を出す。 少女は腰に手を当て言った。

「マジも何も……私がこの学校の生徒会長、桂 ヒナギクよ」

グータラ執事は完璧生徒会長との会合を果たす。

○

―生徒会長。 それは学校に存在する魔の頂点。 全校生徒を悪の力で取り仕切り悪の行事に勤しむ。 いずれ自身が大魔王となるために人々の魂を狙っているとしてもない奴。

「……で良かったんだっけ?」

「全くもって全然違うわよ! どこの漫画の設定?」

テルのとんだ勘違いにヒナギクはテルに突っ込んだ。

「イヤイヤ、お前らが漫画とか言っちゃダメだつて」

「ちよつと、私の話聞いてる?」

「このレーベルの原作だつてな……」

「あーっ! ストップストップ! 身も蓋もない事言わない!」

「アナタ本当に三千院家の執事?」

ヒナギクが疑いの視線を向ける。テルは失敬なと言った表情で

「そうだとも、善立 テル。 この俺のどこに不安要素がある」

「少なくとも私の知ってる三千院家の執事はいらなくボケに走ることはないわ」

ヒナギクが言っているのはハヤテの事だ。 まあ出会って数日、あんまり分らないが。

「それで善立君はどうしてここに来たの?」

ヒナギクは話題を変え、テルが白皇学院に来た理由を聞く。

「ああ、そういえばこの弁当届けに来たんだつた」

テルはヒナギクに両手にあつた重箱を見せつける。 ヒナギクはふーんといった感じで

「一応執事らしい事やっているのね」

少し感心したかのようにテルに言う。 弁当を届けるのが執事らしい仕事かどうかさて置き。

「随分と大きい重箱ね……」

ヒナギクはテルの持つ重箱を見る。 両手の重箱は三段重ねの上物。 それが2つ分。

(ハヤテ君はともかく、ナギは食べきれぬのかしら……)

とてもだがナギが食べるには大きすぎるのではないかと考えるヒナギクだった。

「せつかくマリアさんが作ったんだ。 今この場で少しつまみたい」

「これマリアさんが作ったの?」

「おおよ、よく知ってるな」

「まあ知ってるわよ……それよりナギの所に行くんでしょ? 案内するわよ」

ヒナギクにそう言われ、テルは首を慣らしながら返した。

「ぜひ案内してくれ社長」

「社長じゃないから、私会長だから」

「あーあ分かった。行くぞ課長」

「なんで降格させられてるの!?!」

そんな会話を終えて二人は生徒会室を出てエレベーターの近くで止まる。

「それよりも善立君、学校は？ 執事の仕事と両立してるの?」

ポチつとエレベーターのボタンを押す。ゴウンゴウンと下からエレベーターが登ってくる音が聞こえる。

「……色々とあり、通っていない」

テルは面倒くさがったのかちやんと理由を話さなかった。

しかしそこはヒナギク。簡単には引き下がらない。

「どうして? 何か理由があるの?」

「いや、別にこれといっても……」

「だったらちやんと通いなさいよ、楽しいわよ?」

「お前は先生か! なんか不登校の生徒を学校に連れていこうとしてる先生みたいだぞ!」

だんだんとエレベーターの音が近くなってくる。ヒナギクは前を向くと呟いた。

「まあ教師になるなら絶対になっちゃいけない『反面教師』にはなりたくはないわね……」

「あ? 何だつて?」

ヒナギクの言葉は聞き取れず、テルは不思議そうな顔をする。

その時、ちょうど扉の向こうで「ちん」と音がした。

到着音と共にテル前を向く。テルが扉が開くのを待っていた時。

一瞬、殺気が感じられた。

「うおっ!?!」

突如だが、何が何だか分からないテル。

ほんの数センチ、僅かな隙間からだ。テルの頭目掛けて隙間から

伸びるのは木刀だ。

テルはその瞬間に頭を少し引いていたので辛うじて眉間に突きつけられる程度ですんだ。

「ふっふっふ……私の初撃を避けるとはね」

不適な笑い声が扉から聞こえる。エレベーターが完全に開くと中からその人物が現れた。

テルはその人物を見て嫌そうな顔した。

「お前は……エキセントリック教師……」

「見つけたわよ不審者ア!!」

まるで獲物を見つけ出したかのような歓喜の声。雪路だ。

「桂ア、コイツ本当に教師か?」

「ええ、れっきとした教師よ。あと私のお姉ちゃんの桂 雪路よ」

テルの質問にヒナギクはすらつと答える。テルは顔を歪ませて返した。

「嘘だドンドコドーン!」

まあ初見の人は混乱するだろう。髪の色とかそれ以前に性格とかその他諸々で。

「ヒナ、いいところに居たわね! ソイツは不審者よ!女の敵よ!捕まえるから手伝いなさい!」

雪路は横にいるヒナギクに気付いたのか身も蓋も無いことを言う。

「つたく、俺をいつまでも不審者扱いする気だコノヤロー」

テルはダルそうに言うが雪路は木刀を構える。

「散々逃げ回っていたらしいけどここは時計塔の最上階。孤立無援の八方塞がり、逃げ場は無いわよ」

「悪魔で俺の話はスルーか?」

「お姉ちゃん! この人はただお弁当を届けに来ただけ!」

二人のやりとりを見かねたのかヒナギクが割って入るな。雪路はそれを見て動揺した。

「なっ! ひ、ヒナ……どうしてソイツを庇うの? ハッ! ま……まぎるか!」

雪路は拳をワナワナと奮わせて叫んだ。

「不審者ア！ 私の妹に何をしたアアア！」

「何もしてねエエエエ！」

雪路の叫びを激しく否定する。

「惚けるんじゃないわよ！ あの手この手使ってヒナを！」

「オイイイイ！ ソツチの方に持つてくんじゃねえ！ 何人聞きの悪い事言つてんだアアア！」

テルは激しく否定するが雪路は聞く耳を持たない。

雪路は怒りの形相に 持つていた木刀の握る力を強めた。

「ヒナ！ 私が今あなたをその呪縛から解放してあげる！」

雪路はテルの頭目掛けて木刀を振り下ろした。 テルのは避けきれず頭にドゴツと木刀の理不尽な一撃が炸裂する。

「うがっ！」

咄嗟に両手で防ごうとしたがそれは無理だ。 両手には重箱がある。つまりテルには今、両手が使えないという大きなハンデがあった。

「懺悔なさい！」

膝をついているテルに対し、雪路は更に追い討ちをかけようと木刀を振りかぶる。

この時、不思議な現象がテルを襲った。

(なんだ……この既視感)

既視感、それはどこかで見たことあるような感覚。 以前まるでこんな事を体験したことがあるようなないような

「でやアアアア！」

しかし、不幸なことにもその謎の既視感が彼の反応を遅らせてしまった。 避けられはずの一撃を

(やべっ……)

しまったと言わんばかりに顔をしかめるテル。 両手は使えない、避

けられない、ならば選択は一つ。

一撃を耐えるしかない。

その一撃を耐える決意をしてテルは身構えた。しかし振り下ろされた一撃はテルに届く事はなく、一本の剣に遮られた。

ガキイという金属音が響き、雪路はその人物を見た。

「ヒナ!？」

「い・い・か・げ・ん・に……」

雪路が見るとそこには目をギラリと開かせているヒナギクがいた。

「しろオオオオオオ!!」

気合一閃のもと、ヒナギクは雪路の木刀を押し返した。

「何訳の分からないことを言ってるの!? そんな訳ないでしょうが!!」

ヒナギクは顔を真っ赤にしながら叫ぶ。雪路は距離を取ると近くにあった鉄の騎士が持っている装飾剣を引き抜いた。

「そう……ヒナ、あくまで私に刃向かうのね……なら私の相手が妹でも私は容赦しないわよ!」

「さつき私を救うんじゃないの!？」

その言葉を一つ紡ぐと二人は一気に近づき剣を交える。

「この前私が負けたのは私の剣が一本だったから! 二本なら負けないわよ!」

激しい斬撃の応酬。雪路の二本の得物から繰り出される攻撃は一撃一撃が容赦なく、止まることがない、例えるなら止まることもしらない暴風雨。

しかし、その暴風雨を物ともしないかのようにヒナギクは雪路の一撃一撃を剣一本で防いでいた。

そして再び三本の剣がぶつかり合い、鏝迫り合いが始まる。

「じゃあお姉ちゃん、この前、貸した一万円はいつ帰ってくるのかしら?」

クスクスとした笑顔と共に雪路の痛い所を突く言葉が向けられる。「ズ、ズルいわよヒナ! 一度ならず二度までも諭吉を人質にとるなんて! 諭吉が何をしたって言うのよ!」

ヒナギクの言葉を聞いた瞬間、力強かった二本の剣が一瞬弱まったのをヒナギクは見逃さなかった。

「はあー！」

その瞬間、バキンという鈍い音。 鏑迫り合いを解き、一つのヒナギク気合いの一撃が雪路の木刀に炸裂し、折れた音だ。

「ぬおっ!？」

雪路はたじろぐ、さっきまでの暴風雨の勢いはもう無い。

「まず妹に借金している事を恥ずかしく思いなさい」

ピツと剣を払うヒナギクに雪路はキョトンとした。

「なんで恥ずかしく思うの?」

「普通は思うのよー！」

ヒナギクは一喝し、剣先を雪路に向ける。

「まだやる? お姉ちゃん」

「むぐぐぐ……」

しかし彼女に降伏の二文字は無い。

「おおい、俺を蚊帳の外にするな」

テルを一喝見た雪路は目を光らせてテルの重箱を一つ奪い去った。

「オイ! 弁当返せ！」

テルの言葉を聞かず、雪路は一気に生徒会室のテラスまで移動する。

「待ちなさい!お姉ちゃん!」

ヒナギクが睨むが雪路は不敵な笑みを浮かべる。

「さあヒナ、ここまで来れるかしら高所恐怖症のアナタが! 試練一度とは限らないのよ!」

雪路はテラスの手すりに飛び乗るとヒナギクに言い放つ。

「はい?」

テルは目を丸くしてヒナギクを見る。よく見ると汗を垂らし、体が少し震え、明らかに動揺しているようだった。

「お、お姉ちゃん……私に……同じ手が……通用すると……でも………思っ?」

(うわ!メツチャ通用してるよ! なんだよその負のスキル!)

心の中でテルは激しく突っ込む。ヒナギクの震えは近づく度に増しているように見えた。

そう、何を隠そう彼女、桂 ヒナギクは極度の高所恐怖症である。「で……でもー」

ヒナギクは瞳を見開き一歩また踏み出す。

「私は生徒会長 桂 ヒナギク！ この名に恥じないようこんな試練を乗り越えてみせるわ！」

「フツ……」

だんだんと近付いてくるヒナギクを見て、雪路は穏やかな笑みを浮かべた。

「さすがは我が妹、その妹の決意に免じてこの弁当を返すわ」

「マジで？」

「ええマジよ」

「本当!? お姉ちゃん！」

ヒナギクもその場で止まり、笑顔を浮かべる。

「もちろんよ感謝しなさい」

その時、非常に迷惑な事に雪路は突風によりバランスを大きく崩してしまった。

「又オオオオ！」

雪路は必死にバランスを取ったが、功を結ぶこと無く真後ろに倒れた。

次第に重力が働き、雪路の体が下へ下へと下がっていく。

（やばっ、これヤバいんじゃない!?）

雪路は事の重大さに漸く気付く、しかしその時にはヒナギクの姿も見えなくなっていた。

「お姉ちゃん！」

ヒナギクの悲痛な叫び、この時既に雪路の体は見えなくなっていた。

（ダメ！ダメよ！ もう誰も勝手に居なくならないで！）

テラスの向こうから今にでも這い上がってくる雪路をヒナギクは

願っているだろう。

しかし、雪路は登ってこない。自然と涙が流れた。

(私を独りにしないで……)

「お嬢さん、あなたが落つとこしたのは何でしょう?」

突然、どこからともなく声が聞こえた。

「1. とんでももなく人の話を聞かないエキセントリック教師。 2. 人の頭を問答無用で殴る教師」

ヒナギクは辺りを見渡す。気付けばテルの姿が見当たらない。その声はテラスから聞こえた。

テルのギリギリの行動により雪路は落下を免れていた。

テルはテラスの手すりに足を絡ませることなく、足で角度を90度で床に引っ掛けて雪路の体引っ張っていた。

「正解は……人の話を聞かない妹思いの姉だコノヤロオオ!!」

気合いを入れて、背筋と腕の力だけで雪路を上へと放り投げる。

「ウハアアア!」

雪路は宙を舞い、ヒナギクの所まで飛んでいき床に転げ落ちた。

「お姉ちゃん!大丈夫!」

「いででで……」

頭から入ったのか雪路は頭をさする平気のようだ。

「全く、釣り上げるこっちの身になってみるよ」

テルがテラスから這い上がりふうと溜め息をつく。

「アンタ!もう少しやり方はなかったの!」

先ほどのやり方が気に入らなかったのか雪路は怒りの声をあげる。

「アリヤ。変だな、魚が喋ってるよ。シャーマンが釣れちゃったぜ」

「人面魚って言いたいのか、あんまりだろソレ！」

不満言う雪路の頭をヒナギクがポカッと叩いた。

「命の恩人には感謝しなさい」

頭を抑えた雪路はフツと笑い

「さすがは三千院家の執事。いいわ、ナギちゃんの所に案内してあげる」

テルに親指を立てて言い放った。

「コラ、その前に俺を不審者扱いした件を謝れ」

「さくて行くわよ！」

完全にスルー。マイペースにもほどがある。

「ごめんねテル君、こういう人だから……あと、お姉ちゃんを助けてくれてありがとう」

ヒナギクの言葉にテルは頭をボリボリと掻きながら

「おう……んじゃ弁当届けっか」

「ん？弁当？」

雪路がその言葉に動きを止める。テルもだ。

「そういえばお姉ちゃん、持ってたお弁当は？」

ヒナギクはまさかと思いつつながら雪路に聞くが雪路はキリキリと体を動かして顔引きつらせた。

「し、下に……」

そう言って示すのはテラスの向こう側。

「……………」

「……………」

「……………」

「で？ 弁当一つ無に帰してしまったと」

場所は変わり、カフェテリア。テーブルにはナギとヒナギクが周りにはハヤテとテル、雪路が立っている。

「俺のせいじゃない、全てはこのエキセントリック教師のせいだ」
テルは雪路の方をジッと見つめる。

「貴様の執事としての能力がダメダメだと言うことだ」

「いいじゃねえか幸いもう一個あるんだからさ、どうせ食べきれない
だろ」

「ぬ……馬鹿にするな！」

自分があまり食べれない事を馬鹿にされたのが気に障ったのかテ
ルを睨みつける。

「……聞きしに勝る対立っぷりね」

お互いに睨み合うテルとナギを見てヒナギクが呟いた。

「ヒナギクさんアレですよ、喧嘩するほど仲が良いっていう」

「その割にも今にも飛びかかりそうよ、アナタのご主人様」

ナギの顔は怒りの形相でガルルルと狼のような唸りを出していた。

ハヤテは取り敢えず間に入ってナギを落ち着かせた。

「お嬢様、一つでも僕には食べきれない大きさです。テルさんとも
一緒に食べませんか？」

「えー」

ナギは明らかに嫌そうな声をあげる。それに続き、ヒナギクが口を
開いた。

「私もここで食べようかしら」

そうヒナギクは言うとう自身の弁当を取り出しテーブルの上に置い
た。

「なんだヒナギクもか……」

「何だとは何よ、まだ食べてなかったんだし、それにみんなと食べれば
楽しいでしょ？」

ヒナギクの言葉にナギはそうだがと思うが、ナギにとってはハヤテ
と食べたかったというのが強い。

「ヒナ！ そのお弁当、私にも頂戴！」

突然雪路がヒナギクに目を輝かせながら聞いた。

それを聞いたヒナギクはあっさりと返す。

「お姉ちゃん、教師なんだから自分で売店で買えば良いじゃない」

「給料前の私を助けると思ってた！ もうカップ酒とチーカマしか買えないの」

「私の記憶からだ和白皇の給料まで後10日以上あるわよね」

何故ここまで金銭の消耗が激しいのかは大体分かるヒナギクだった。仕方なく自身の弁当を分けてあげた。

まあそこからは昼食タイム。ナギがピーマン嫌いだの言ったり、テルが食べている弁当から雪路がカマボコを奪い、オカズ争奪戦へともつれ込んだりした。

(なんか家の食卓みたいな賑やかさ)

不思議と騒がしい団欒を眺めていると自然に笑みがこぼれた。

その瞬間、テルの視界が再び既視感に襲われた。

今度はこの団欒から。まるでこの光景と記憶の光景がダブって見えるように映る。写真がピンボケしているようにハッキリとは分からないが。

(俺もちゃんとこうやって誰かとメシを食っていた時があつたのか?)

それは友人との時間かもしれない、もしくは家族との時間なのかもしれない。

だがピンボケしている光景と今見ている光景はどちらも賑やかさうだった。

それだけ分かれば充分かもしれない。

今日という日が何度も自身の記憶を引き出すように人の記憶は何かきっかけがあれば突然蘇る事もある。

(学校か……………)

今日という日を振り返ってロクな事がなかったが少なくとも退屈はしなかった。これは記憶ではなく、テル自身が感じた事だ。

そして一つの考えが頭に浮かんだ。それについて少し考えるとフツと笑う。

(……………それもいいかもしれないな)

―下校時間。

なんだかんだでテルはハヤテ達が帰るまで施設を見学していく事になった。ちゃんと学校側から事情を話し、許可も了解したのである。

今はそれも終わり、三人は帰宅途中。

「あのさ…テル…」

「ん？」

夕日差し掛かる帰り道でナギが突然口を開いた。

だがなかなか喋らない。

「どうしたんだよ…」

テルはなかなか喋らないナギに聞く。するとナギは顔を背けて言った。

「そ…その…一つ無くしたとはいえ、私達の為に弁当を届けてくれて…あ、ありがと…」

「あ〜？」

テルは口に加えていたキャンディをポロツと落とした。そして天を見上げてハヤテに駆け寄った。

「なあハヤテ、急いで帰らないか？ このままだと夕立がやってきそうだ」

「なっ！ どういう意味だ!!」

「そういう意味だ」

テルは素っ気なく返す。ハヤテは苦笑していた。

「普段からそれぐらい素直ならいいのによく」

「う、うるさい！うるさい！うるさい！」

テルの言葉をナギは顔を真っ赤にして打ち消すぐらい怒鳴り散らした。

まあなんにせよなかなか感謝しないナギがこうして自分で感謝す

ることを学んだのだからそれはそれで良かったかもしれないと安堵していたテルだったが。

「まあ、私はただマリアに言われたことを仕方なく実行しただけだからな」

「お嬢様……」

「あ……」

ハヤテの言葉にナギはしまったと言った表情。

「……………」

「まあ、テル……」

「お前、駄目だ！ 全然ツダメだッ！」

「ハヤテ！ 逃げるぞ！」

「りよ、了解です！」

怒り心頭のテルから逃げるナギとハヤテ。　テルはそれを追いかけた。

「待てやゴルアアアアアア！」

「ハヤテ……」

テルの猛追から必死に逃げているナギがハヤテに聞く。

「私は珍しくも本当に珍しくもだぞ！ 今日には面倒くさく騒がしくも感じましたが……」

「楽しかったのですか？」

ナギは言葉を見透かされたように驚いたが

「いや、やっぱりつまらなかつさ……」

「僕は……楽しかったですよ」

否定するナギを見てテルは笑いながら答えた。

「待てやゴルアアアアアア！」

この逃走劇。　屋敷まで続いたのである。

「まったくナギの野郎め……」

「まあいいじゃないですか、何はともあれ感謝していたんですから」
夜の片付けの中、マリアとテルは皿洗いに勤しんでいた。

「イヤ、言わなくていい真実ってのがありますよ」
テルはナギの所業をまだ忘れていないでいた。それを苦笑いで見たマリアは話題を変える。

「……それよりもテル君、白皇はどうでしたか？」

マリアの言葉にテルは少し手の動きを止めて、ゆっくりと話します。

「なんつーか……あの賑やかさ、クセになりそうですわ」
一言では説明出来なかったのかテルは端的に答えた。

「そうですか……」

マリアはそれを聞くと満足したように笑みを浮かべた。
テルは手を動かすのを止めて、マリアと向き合った。

「マリアさー」

テルが言いかけた時、それはマリアの人差し指によって遮られた。

「分かっていますよ……学校に行きたいんですよね」

まるで全て見抜いていたようなマリアの笑顔。マリアは更に続ける。

「大丈夫です。テル君にもしっかりと学生生活を楽しむ権利がありますから」

そう言うとテルに一通の封筒を渡す。

「白皇の編入書類です。ナギやハヤテ君達も了解していますよ」
テルはその封筒を受け取る。

「編入試験、ハヤテ君と同じくハードですけど、やれますよね？ 三千年家の執事なら」

テルはその言葉を聞くやニヤリと笑った。

「任せてください。入学したら白皇に旋風を巻き起こしてやりませよ」

(頑張ってください、今日も、そして…これからも…)

マリアは笑顔で心の中で呟く。自分も学生だったから分かる。しかし、マリアは一人飛び級ということもあり誰よりも先に学生生活を若い内に終えてしまった。

本来ならばまだナギやハヤテ達とも通っている年でもある。

だからこそ、仕事だけで終わるのではない、例え過去に学校に通っていたとしても学生生活という大切な時間はこれからの人生に大きく影響する。彼が学校に行くことによりどんな事が起こるか、マリアは期待していた。

普段ちゃらんぽらんとしているが彼には何か人に影響を与える力がある。

(これからが楽しみですですね…)

そう思わずにはいられないマリアだった。

「まあそれはそうとして、学校だけ集中して執事の仕事疎かにしたらタダじゃおきませんよ♪」

そう言うとマリアは笑顔でテルに磨いた包丁を見せ付ける。研

ぎ澄まされた包丁が光に反射し、キラんと光った。

「あー……イエツサ」

—数日後の話となるが、白皇学院に一人の男が奇跡の編入を果たす。

第1話特別編〜不気味な執事とお嬢様の来訪〜

―深夜、町のはずれの裏道。

そこは昼間はあまり人は寄り付かない場所。夜も寄り付かない場所。真つ暗な中で不良たちとかがタム口する絶好の場所、なのだが今日は誰も居ない。きれいさっぱりになる位に

「うう……」

その誰も居ないとされる奥の路地に低く弱ったような男の声。

「……やはり実験体が弱すぎるとあまり効果は期待できませんわね」

低く声を絞り出して倒れている男に近づくのは幼い少女。

「やはり肉体的に安定している方が効果があると言うことでしょうか」

更に少女の後方で一際大きい男が立っていた。付き人だろうか。

「そういう事かしら……ならこれは本番で試すしかないでしょうね」

ふうとため息をついた後、少女はニヤリと笑いながら倒れている男の側を通り過ぎていく。

「……本当に実行なさるのですね？」

突如、付き人は険しい表情をして少女に問い直す。

少女はそれがとてつもなく忌まわしく思ったのか男と向き合う。

「あなたに質問する権利があると思つて？ あなた如きが私に質問なんてするんじゃないやありません時間の無駄ですから……」

それはまるで敵を見るかのような瞳、誰をも信頼しないような瞳。だがそこには揺ぎ無い決意があると言うことを男は知っている。

「申し訳ありません……お嬢様」

「ふん……」

少女は低く頭を垂れる男を見向きもせず歩き出した。男もその後ろを追っていく。その場を去っていく中で少女はまたニヤリと笑った。

「見ていなさい、三千院 ナギ・・・」
そう呟くと、男が用意していた車に乗り込みある所へ走つていった。

特別編く心変わりは突然にく

皆さん、知っているだろうか 東京練馬区に存在するお金持ちの屋敷を……

知っているだろうか、ひよんなことからその屋敷のお嬢様に仕えることになった

少年執事のことを……

お嬢様と執事はちよつぴり天然さんでちよつぴり勘違いしていて

それでも深い絆で結ばれているのです。

そしてそんな彼らの前に執事と呼べるか分からない、異常で奇つ怪な執事が一人……

彼の名前は……

「テルさん、何しているんですか?」

早朝。否、既に太陽が真上に上がりきった昼。 三千院家の執事、

綾崎 ハヤテは廊下で扉を叩いている人物に声を掛けた。

「おうハヤテ、今ナギを起こしている所だ」

同じ執事服、同じ身長、違うのはその瞳。 無気力かダルい、それが感じられる死んだ魚のような瞳。

同じ三千院家の執事、善立 テルその人である。

「まだ起きてなかったんですね、お嬢様」

「そうだ。俺はかれこれここで20分起こしに掛かっているがアイ

ツは一向に起きてこない……」

テルはくあつとあくびをするとハヤテと向き合った。

「後頼むわ」

そう言うのとクルつと体を180度回転した。ヒラヒラと手を振りながら歩きだす。

しかし、ハヤテは黙ってはいない。

「ちよつ、ちよつとテルさん！起きさないんですか？」

「あ？起きない奴はどんなにやつても起きない。何事にも自然に起きさせる習慣を付けさせなきや意味ないだろうが」

テルは頭を掻きながらダルそうに返す。ナギの生活の悪さは恐ろしい。

今という引きこもり、インドアという言葉が代名詞のナギはその生活から昼に起きてくる事が多い。

「でも、これ以上寝かせるのはちよつとまずいですよ。ただでさえ朝食を抜いているのに昼まで抜いてしまうのはお嬢様の健康が……」

「バカは一度、身に染みる体験をしなきやあ己を見直す事はできない……という訳で面倒くさくなつたから俺は行く」

「テルさん、明らかに職務怠慢ですよソレ、お給料減つても知りませんよ？借金あるんですから」

ハヤテの言葉にテルは顔をしかめる。

善立 テルには借金がある。しかし、そんなじよそこの友達が行ったお金の貸し借りのレベルでは無い。

その額、六千万円也。

ラーメン屋の借金を肩代わりしたナギがテルに仕事をもつと必死になつてやつて欲しいという願いを込めてテルに借金を作った。

しかし、そんな事を考えず先程のようなセリフを言うためハヤテも困り気味だ。

「仕方ねえな、一発でナギが起きてくる魔法をみせてやろう」

テルは踵を返してハヤテに言うとなぎの部屋の取っ手に手を掛けた。

「ちよつと大丈夫ですか？ いきなり入って……」

「安心しろ、執事には主の部屋に入るときはノックなしで入れると言う特権がある」

「まあそうですけど……」

本当の事です。

ガチャ。と扉を静かに開ける。広い部屋の中で大きなベッドではナギがまだ布団を被つて寝ている。

「お嬢様、そろそろ起きて下さい」

ハヤテが扉の側で声をかける。その呼び掛けに反応するように布団がモゴモゴと動いた。

「うくん、あと8時間……」

「もう夜ですよ……」

いつもの事だがナギを起こすのは至難の業だ。言えばちゃんと起きてくれるのだがこういう日はハヤテは骨が折れると言う。

「よしハヤテ、俺に任せろ」

落胆するハヤテにテルが何か前に出る。ハヤテはテルの持っている物に疑問を抱いた。

「あの、テルさん……なんで拡声器を持ってるんですか？」

ハヤテが聞くがテルは拡声器のボリュームを調節するダイヤルを

人差し指で左から一番右へグイツとなぞった。

そして、胸が膨らんばかりに息を吸い込み……

「粉アアアア雪イイイイ!!」

部屋中に響くは悪魔的殺人ソング。所々に甲高いノイズが入り、ご近所迷惑こと極まりない。

「ヌアアアア!？」

ナギはさすがにたまらずベッドから転がり落ちる。

「テルさん！ お嬢様起きましたよ！ テルさん！」

ハヤテはテルに殺人ソング停止を求めるがノイズが響き過ぎてテルの耳には届かない。

「イエエエエエエアー」

ガツン。とテルの後頭部に何かが当たり、テルは糸が切れた人形のようにその場で崩れ落ちる。ハヤテが後ろを見ると扉のところにはマリアが立っていた。

笑顔で

「テル君？ 余りうるさくすると今度は斧でも投げちゃいますよ？」

「マリアさん、テルさん死にそうです……」

ハヤテは床でピクピクと体を動かしているテルを見る。先ほど当たったのはどうやら金槌らしい。

「相変わらずマリアはテルに容赦ないな……」

無理やり起こされたナギが目をゴシゴシさせながら呟く。

「いやですわナギ、こうでもしなきゃ扱えませんか？」

「いやいや、そんなモノを見るような発言をしないでくれ……」
(だんだんテルに対してのグレードが上がってきてる気がするが……
まあいいか)

本当に他人事なのでナギは気にせずに顔を洗いに行った。

「さ、私達も早くナギの昼食を作りましょう」

「朝食じゃないのが残念ですがね……」

時刻はすでに昼を回っている。ハヤテは肩をがくりと落とした。

「ではハヤテ君、テル君もちゃんと起こしてきてくださいね」

「あ、さすがにそのまま放置はしないんですね……」

「当たり前です。彼にはしっかりとこの執事として働いてもらう

義務があります。気絶ぐらいでは休みなどあげませんよ」

（あれ？ 気絶させたのはマリアさんだった気がするんですが……）

笑顔で言うマリアにハヤテは心の中で呟いた。

「ごちそうさま……」

ナギの朝食、否。 朝食が無事終わり、ナギが椅子から降りる。その後方にはハヤテとマリア、そしてテルの姿があった。 主人が食事を終えるまで、使用人は食事をすることはできないらしい。

「あー、ようやく終わったか、俺たちも早くメシとしゃれこもうぜ……」

「そうですね。今日の昼は僕のオリジナルのスパゲッティでいきますよ」

大きく欠伸をするテルにハヤテは気合の入った表情で返した。

ナギはそれを見て大きく背伸びをする。

「なんだ、お前たちまだ食べてなかったのか」

「オイオイ、お前がちゃんと早く起きてれば俺らも普通に食べれてんだよ」

説教垂れるテルに対してナギはむっとした表情で返す。

「ふん、私には朝はあまり必要ではないぞ。それに今日は休日ではないか、いいだろう？」

「いや、全然よくねーよ。 休日だろうが平日だろうが、朝食は一日の始まりであり、一日を健全に生き抜くためのそれはそれは大切なエネルギー摂取だろうが」

「と言っているがお前この間、私と同じ時間帯に起きてこなかったか？ 執事のくせに……」

「……………」

鋭く返すナギに対してテルは体を固まらせて返すことができなかった。

「まったく、よくそんなんで白皇の試験に受かったな……」

「……………放っておけ」

呆れ顔で言うナギにテルは素っ気無く返した。

ここ数日前、彼、善立　テルは見事に白皇学院の編入試験合格を果たす。

その道は果てしないものだった。　まず学力、これが壊滅的にやばかった。

まあどれぐらいひどかったかと言うと小テストらしきことを行つたときにその答案を見たときナギやハヤテ、マリアが口を揃えて

「「マジで?」」

と言ったほどだ。　そのときはもう皆唾然と言うか、もう無理じゃね?と思わせるほどの表情だったと言う。

まあそれからはあらゆる方法で勉強にいそしんだ。　まずは基礎を教え、公式、定理、単語をツーマンセル、スリーマンセル方式で教える。　最大の助っ人はナギ、マリア、ヒナギクだったと言うべきだろう。　天才たちの甲斐もあり何とか一般レベルまで到達できた。

もちろん、試験にいそしむ彼に睡眠は与えられない。　助っ人たちが帰り、眠った後にもテルには勉強しなければならなかった。　否、そこまで根を詰めなければホント間に合わなかった。　いや、マジで。

「もう不眠不休はこりごりだぞ俺は」

「まあ良かったじゃないですか。　僕は一応試験に一回落ちたのにテルさんは一発ですよ」

ハヤテが苦労を労うようにテルに言う。

「まあそれではまぐれと言うこともあるしな。　まだ信用するには足りんぞ、お前のこの屋敷での階級は私、ハヤテ、マリア、タマ、そしてお前なのだ」

ナギは理不尽な階級ピラミッドをテルに説明するがテルには一つの疑問があった。

「……タマって誰だ？」

「ああ、まだ直接紹介していないな。うちのペットだ。ほら、お前の後ろに居るぞ」

「にゃくん」

テルは名前からして猫を想像したがすこし疑問だった。なんか猫の鳴き声にしては少々、おっさんっぽい所があるような。

「……」

振り返ったテルに目に入ったのは真っ白い猫？ 否。 あんな丸っこい特徴的な耳とまだら模様を見たことが無い。 さらに目を引くのはその大きさ。普通の猫は1メートルかもしれないが

こいつは明らかにそれ以上。これはまるで

「トラじゃねえか！」

「安心しろテル。これはネコだ」

「いやいや、ネコ何食べばこんなでかくなんだよ。明らかに人間食えるほどの大きさだろうが！」

「大丈夫ですよテル君、タマは結構なつきやすいですから」

マリアが言う言葉にハヤテが「え？」という顔をする。テルは納得したように笑顔でタマと向き合う。テルは納

「おお、そうかそうか。ほれほれ、撫でてやる」

まるでネコとじゃれあうかのようにタマに手を伸ばす。が、その時。

ガブツ。と鋭い牙が食い込んだ音。タマが大きな口を開けてテルの頭に噛み付いたのだ。

「ギヤアアアアアアア!!」

「はっはっはっ！ タマ、よほどなついているなあテルに」「アレがなついているんですか？明らかにいたぶってますよね!」

ナギの言葉にハヤテが突っ込むがその間にもテルはタマに噛み付かれたまま振り回されている。

「おい、ちよっ！マジやばいんだけど！ 痛い！頭が痛い！ なんか

色々を持ってかれそう！」

「そうかあゝ 後で頭痛薬を出してやる」

「違いますよお嬢様！ このままだとテルさん本当に持ってかれそうです！ 主に魂とか！」

笑顔でなははというナギにハヤテは突っ込む。

「朝から賑やかですねぇ〜」

マリアはその光景を見て笑みを浮かべる。しかし、彼女らは気づかなかった。これから起こる大きな事件を。

キンコーン

「あら？ お客様でしょうか？」

その時、不意に玄関の鐘が鳴った。

あら、お客様ですわね」

「おかしいな、今日は伊澄もサクも誰も来る予定は無いのだが……」
ナギと頭を悩ませる。今日は特にこれといった用事はない。友人も学校関係者も誰もここにくるといふ予定は無いのだ。その中、テルがボソツと口を開く。

「実はこの前、ハヤテがAmazonでその手の同人誌を予約していたよな……」

「ダニィ!？」

「ち、違いますよ！ そんなもの頼んだことはありません!!」

テルの言葉にナギがものすごい剣幕で睨み付けるがそこはハヤテが全力で否定する。

「大体、三千院家ではお嬢様のためにそういった類の物は購入しないようにしているんです。在っただけでダメなんですよ」

「え？ そうなの……」

ハヤテはその言葉にテルはマジで？ といった表情になる。ハヤテはこれに少し疑問に思ったのか改めて聞く。

「テルさん……まさかと思えますけど」

「ダイジョウブだよ、キミガオモツテルコトナンテゼンゼンナイヨ」

「どうして片言なんですか？」

「……」

怪しい。断然怪しい。片言になることもそうだがここで黙り込んでしまうという所が更に怪しい。

「さくて、お客様の出迎えだ」

テルはくるつと回りながら玄関に向かって歩き出した。三人は明らかにじつと疑いの目で見つめていたという。

「まあハヤテ、取りあえずこの件は後でな。早く玄関に行こう。私もいく」

「は、はい！わかりました」

ナギの言葉にハヤテは頷くと三人は玄関へと向かっていった。

キンコーン

「いやあ、しかしさつきは危なかったな。アレで勘付かれたか？ アレはもっと分からない所に隠しておこうか……」

鳴り響くチャイムの音を聞きながらテルはブツブツと呟く。

キンコーン

「つたく、うるせえな……今でてやるよつと」

しつこく何度も鳴るチャイムに苛立ちを覚えながらもテルは階段を駆け下りる。それを追ってハヤテ達もやって来た。

『♪♪♪』

「何かしら……もしもし？」

突如鳴ったマリアの携帯。マリアはすぐさま携帯を手に取り応対する。相手を何度かコールするが返ってくるのは掠れた弱った声。

「マリア様……侵入者です……屋敷のSPは全員……突破………されました……」

それを最後に電話は途絶えた。すぐさま電話を切り、玄関の方に目を向ける。テルがすでに扉の取っ手に手を掛けていた。

「テル君！開けてはいけません！」

「え？」

「マリア？」

慌てたマリアを近くで見たハヤテとナギはキョトンとし、動くのを止める。が、テルには聞こえなかったよう

「マリアさんどうしたのかな・・・大丈夫ですよマリアさくん」
「けらけらと笑いながら、テルは取っ手に力を込めて扉を開く。

「ちゃんとお客様には粗相の無いように・・・」

テルの目に飛び込んできたのは黒。目の前は急に黒で塗りつぶされた。いや、黒だけじゃない、若干白も混ざっている。

ただ一つだけ疑問に思ったのは、ソイツはなぜ大きく腕を振りかぶっているのか。ただそれが気になっていてテルは言葉を詰まらせた。まるでこれから誰かぶん殴るみたいなの・・・

そんな殺気。

その殺気を感じ取ったのかテルは咄嗟に、無意識のうちに扉を閉めていた。しかし、

バキヤ！と何か破壊された音。拳だ。ジャンケンでも使われるグーの形。それが扉を破壊する音。

扉はまるで爆破でもされたかのように派手に破壊された。テルもその扉と一緒に後ろへと吹っ飛ばされる。

砂埃が舞、玄関が見えなくなる。ハヤテ達は何が起きたのか全く分からなかった。ハヤテ達から見れば、扉がテルごといきなり吹き飛んだようにしか見えない。

「一体何が・・・」

「イタタタタ・・・」

ハヤテが吹っ飛ばされた扉の瓦礫に目をやる。テルが扉の瓦礫を押しつけて這い出てきた。

「テルさん、大丈夫ですか!？」

ハヤテが急いでテルの元に駆け寄る。テルは首をブンブン振った。テルの頭から埃が払われる。

「大丈夫なわけねえだろ。見ろ、この辺見ろって、頭にコブあんだらうが」

「その程度で済んでるなら大丈夫そうですね・・・」

テルの意外に元気そうな姿を見て、ハヤテはひとまず安心する。後ろからはマリアとナギが続いて降りて来る。

「お嬢様、これは一体……」

「分からん。だが間違っても親切なお客ではないことは確かだ」

「オイお前ら、少し俺の心配をしろ」

様々な憶測をするハヤテとナギの側でテルが頭をさすりながら呟いた。

「ふむ……先ほど殴ったのは綾崎　ハヤテではないな……」

立ち込める砂埃から男の声。　だんだんと煙も晴れて、現れたのは黒いタキシードに身を包んだ巨漢。

身長はハヤテやテルがはるかに見上げるほどの大きさ、推定190cm前後に鍛えられた肉体。　白髪がまるで扇のように開いている奇抜な髪形だった。

「テメー……人の家の玄関をよく破壊してくれたな」

テルがハヤテたちの前に立ち、目の前の巨漢と向き合う。

「貴方は？」

男は眉を細めてテルに聞く。

「俺は三千院家執事の善立　テルだ」

「ヨシダテ？」

巨漢は首をかしげる。

「ふむ。　一体誰だろうか……この屋敷には綾崎　ハヤテ以外に執事は居ないはずだが」

「お前、全然執事として認識されてないぞ……」

ナギがテルの方を目を細めてジツと睨む。

「なぜだ！この俺が誰にも相手されていない！誰にも覚えられていないと言うことなのかアアアアア！」

テルは頭を抱えて天井に向かって叫んだ。　すると今度は巨漢が口を開く。

「私の要求はただ一つ。　ここの執事、綾崎　ハヤテ出してもらおうということだ」

「僕……ですか？」

突然の指名にハヤテは思わず自身をも指をさす。巨漢はそのハヤテを見つけるや顔を輝かせた。

「おお、こんな所に居たのですか綾崎 ハヤテ殿！」

巨漢は笑顔でハヤテに近づいてくる。その顔はまるで子供好きな老人のような顔をしていた。実際見た感じでは年はかなりいつているものだとは推測する。50前後だろうか。

「……………」

ハヤテはすぐ目の前に立つ巨漢を見上げる。近くで見るとまた違う迫力が感じられた。ハヤテは笑顔で立つ巨漢に警戒心を持ち続けた。これからどんな事を仕掛けてくるかである。

「なに!？」

「あれは……………」

ナギとテルは驚いた。彼のとつた行動に、それは初対面の人間同士が行う基本的なコミュニケーションの手段、仲直りのときなどにも用いられる……………握手。

「初対面なのでまずここから始めましょう」

巨漢の差し伸べる手にハヤテは少し戸惑う。てつきり至近距離で何をされるかと思えばただの握手だ。

彼に悪意は無い。感じられない。巨漢の行動は悪魔で紳士的だ。なんでも無い、ただ一つ気になるところがあつたがハヤテは気にせず巨漢の右手を握る。

「どうも……………」

「ふむ……………」

ハヤテの手を握るや巨漢はまた優しい笑みを浮かべる。それは新しい仲間が増えたように、その仲間を心から歓迎するかのよう

「実はハヤテ殿に折り入って頼みがあるのですが……………」

「……………なんでしょうか？」

綻ぶ笑顔にハヤテはいまだに戸惑いを隠せずいた。寛大な心。すべてを許してくれそうな広い心の持ち主。だが何か納得いかない。

「私と共に来てもらいたいです……………」

「え?」

ハヤテは言っている意味が分からず首を傾げる。だが主であるナギは見逃さなかった。巨漢の口元がニヤリと笑ったのを

「ハヤテ!」

ハヤテは主の声に気づき、我に返る。急いで彼の手を振り解こうとした。

「ぐっ・・・!」

右手はしっかりとてつもない握力によつてハヤテは振りほどけないでいた。そして次の瞬間。

「オオオオオオ!!」

168cm、57キロのハヤテが軽々と振り上げられた。片手一本によつて。

「!!」

ハヤテは自身の状態に驚く、男はハヤテを背中まで持つていくほど振り上げていた。

その時の光景を、後に善立 テルはこう語っている。

「驚いたさ・・・いくらハヤテが軽い部類に入るからって人間、あんなに簡単に振り上げられねえからな」

「その後どうしたかって? 簡単さ、『釣り』でさ、釣り人が竿を思いつきり振るうアレあるだろ? ルアーを遠くに飛ばすために竿を振りかぶるようにしてスナツプ利かせたりするときあ、ルアーはメツチャ遠くまで飛ぶんだよ」

「アレをヒトでやったんだからな・・・」

「ダアアアアア!!」

巨漢はハヤテを怒号の元に放り投げた。物凄い勢いでハヤテは飛ばされる。このままいけば階段なんて使わずに二階にたどり着けるだろう。

「くっ!!」

だが簡単にやられるハヤテではない。即座に身を翻し、二階の壁に叩きつけられる寸前に両足で壁に着地した。

「ハラシヨー……」

見事なハヤテの動きに巨漢は感嘆の笑みを浮かべた。ハヤテはすかさず階段を駆け下りる。

「あなた……一体何者なんですか!？」

当然の質問。巨漢は胸に手を当てて答える。

「名乗るほどのものではないかもしれませんが……ただ、貴方と同じ執事だと言うことです」

「執事……?」

その巨漢と同じ職業だったということが分かり、ハヤテは再び警戒態勢を取った。その時である。

「シュトロハイム!」

突如として後ろから女の声が聞こえた。その瞬間に巨漢が即座に慌てながら振り返る。

「まったく、人間一人連れてくるのにいつまで時間を掛ける気? だからいつまでたっても貴方は使えないのよ」

巨漢以外の一同は目を良く凝らして声の主を見つめた。目に映ったのは小柄な少女。身長はナギと同等、白いドレスを完璧に着こなしている。さらに目を引くのは緑の髪……いや、そんな単調な色ではないもっと明るく、輝かしい、エメラルドの髪だ。

「お、お嬢様! 今しがたお待ちを……」

「無理よシュトロハイム……私が待たされるのが嫌いなのは知ってるでしょう?」

つかつかと少女はシュトロハイムという巨漢に近づき靴で思いつきり足を踏みつけた。しかも小指の部分を

「OUCHI!!」

さすがの巨漢も小指を思いつきり踏みつけられることは苦痛のようだ。少女は足を離すと啞然としているハヤテを見た。

「貴方が三千院家の執事さん?」

「はい、まあそうですけど・・・」

「俺もいるぞ」

ハヤテの横でテルがボソツと呟く。

「そんなことより、お前ら一体何者だ？ 何が目的でここに来た？」

ナギが不機嫌な顔で少女を見つめる。少女はクスツと笑い、高らかに宣言した。

「私は日野寺家現当主、日野寺 マユミ。 コイツは私の執事のシユ

トロハイム。 目的は貴方の執事、綾崎 ハヤテを奪いに来たの」

「僕ですか？」

マユミに指差されたハヤテは訳が分からず聞いていた。そして

マユミもハヤテを見るや不敵な笑みを浮かべる。

「さあ！綾崎 ハヤテ、覚悟なさい！」

「く・・・!?!」

少女の言葉にハヤテは咄嗟に身構える。が次の瞬間。

ガツッと何かが引つかかる音。 マユミは見事足に扉の残骸を文

字通り引っ掛けて

ドタツと

コケた。

「「「「・・・え？」」」」

「「「「・・・え？」」」」

第12話く勢いに任せた行動は後に破滅を呼ぶく

前略。ハヤテたちは勢いよく転んだマユミを唾然としながら見つめている。

「……ふんっ！」

地面に倒れていたマユミはガバツと起き上がり、体についた埃を払い、顔を真っ赤にさせながらナギを指差した。

「……さすがは三千院家、こういうトラップもあるのね」

「いや、お前が勝手に転んだだけだろ？」

ナギは至極当然のように返す。

「お嬢様、大丈夫ですか!？」

マユミの心配をしたシュトロハイムが駆け寄りマユミの体の埃を払い始める。

「ッ!!」

それが不機嫌だったのかどうかは分からないが、マユミは埃を払っているシュトロハイムの腕を振り払った。その時の彼女の目は鋭く冷たく、敵意を向けるような目だったのをテルは見逃さない。

「申し訳ありません……」

「気安く触るんじゃないッ!!」

頭を深く下げるシュトロハイムにマユミは罵声を浴びせる。それを見たテルが口を開いた。

「オイオイ……随分とそいつに対しては厳しいじゃねえか。新手的

ツンデレか？」

テルの言葉にマユミはいっそう顔を陰しくさせる。

「貴方は？」

「俺もここの執事、善立 テルだ」

その言葉を聞くと、マユミはクスクスと笑い始める。

「貴方が三千院家の執事？ なんの冗談？」

「うるせえなドチビ」

「なっ！誰がドチビだ！」

「否定できねえだろうが」

今度テルがマユミをあざ笑う。するとシユトロハイムが猛然と突っ込んできて

「ヌンツ!!」

右拳を思いっきり振り上げテルの真上に振り下ろす。テルは寸前の所でかわし、地面は拳によりめり込んだ。

「お嬢様を侮辱するのは許さん!!」

目をギラつかせながら拳をゆっくりと床から引き抜く。パラパラと床の破片が落ちた。

「おーおー、こわいこわい・・・」

「今のはお前が悪いと思うぞテル」

テルにため息をつきながら言うのはナギだ。

「WHY?なぜ?」

「理由はどうであれ、お前は悩み悩む乙女心を傷つけたのだ」

「そんな豆腐みたいなやわな乙女心だったとはな・・・」

ナギとマユミには背が一緒だということもあるのか

テルのこの言動には同じく思うところがあつたのだろう。

「そんなことより・・・だ。ハヤテを奪うといったなお前」

腰に手を当て、堂々と構えるマユミを見てナギは聞く。

「ええ」

マユミはただ頷く。

「どういった手段でだ?」

「そうね・・・」

そう聞くとマユミは背中まで伸びた髪をかきあげた。

「まあ、お金で買い上げようという合法的手段でいこうと思つてたけど、こちとらそちらとは違つて財力はないの」

「人身売買は禁止だぞ」

「ナギ、あなたがそれを言いますか・・・」

マリアの言葉にナギはぎくつとした顔になる。

「簡単なやり方でいくわよ。決闘よー」

「血糖?」

テルが頭にクエスチョンマークを浮かべた。

「なんだテル、お前血糖値きにしてるのか？」

「いや、さすがにこの年でそれは無いと思うがここ最近で甘いもの摂りすぎたかも・・・ああヤベエ、言われたら気になってきた」

「そつちじゃなーいッ!!」

拳をわなわなと振るわせたマユミがテルとナギを怒鳴り散らした。

「あー・・・俺もうダメかも。ここらでいい病院知らない？ 今すぐにも行きたいんだけど」

「ええ行きなさい。そして二度と戻ってこないで・・・」

どこまでも予想外な展開にマユミは頭を抱えた。しかし、ため息の後、気を取り直してナギをにらむ。

「貴方の執事と私の執事で戦ってもらうわ」

「ふむ・・・決闘か。ハヤテなら楽勝だとも」

ナギは勝ち誇った笑みを浮かべる。ハヤテは慌てた。

「お、お嬢様・・・いいんですか？」

「ああ構わない。本気で相手してやれ」

憤然と言い放つとハヤテは苦笑いする。これはもう避けて通れる道ではない。ナギの『徹底的に叩きのめせ』という目がハヤテをそうさせた。いや、そうせざるを得ない。

「では始めましょうか・・・」

主二人が向き合い、にらみ合う。知らぬ間に熱い火花が散っていた。

「マリアさん・・・」

「なんですかテル君？」

「今回俺って空気なんですかね？」

「・・・」

テルの呟きにマリアは何も答えなかった。そんな事を言ってる間に決闘が始まる。

「では行きますよ ハヤテ殿！」

「!!」

ハヤテは驚いた。それは一瞬のことである。シウトロハイムはその体軀以上に機敏な動きでハヤテとの距離を縮めていた。

(速いッ!!)

更に驚きは続く。今度は右腕でストレートでも放つ動作。テイクバック。だがこのテイクバックが異常だ。コンパクトどころではない。体が目いっぱい開き、右腕は背中につくのではないかその瀬戸際。

(これは・・・避けなくてはならない!!)

背筋を、いや、全身が凍りつくぐらいの殺気がそう判断させた。いくら自身が車とかに轢かれても平気だという自信も吹っ飛ばすかのような一撃と感じ取った。

「メン!!」

一つの気合の声が発せられ、異常なテイクバックから繰り出された右拳は振り下ろされた。殺気を感じ取ったハヤテは本能のままにその一撃をかわし、拳は床へと直撃した。

「うおっ!!」

拳の直撃の際、まるで巨人が足踏みをしたかのような地響きが屋敷に響いた。その場に居たナギはその地響きによれよれとバランス取りをした。

「ふふ・・・さすがはシュトロハイムの破壊の方程式」

「破壊の方程式?」

ナギがマユミの不可解な単語を耳にして怪訝そうな表情をした。マユミは薄く笑うと説明する。

「シュトロハイムは握力は測定不能、体重150キロ、そしてあの体躯から生み出されるスピード・・・つまり、「握力×体重×スピード」
||破壊力という方程式が彼の戦いなのだ」

「どこの漫画のヤクザ?」

テルが突っ込むがマユミはさらに続ける。

「頭部なんかに当たったら大変よ」

その言葉にナギの背筋が凍った。

「お、お前! ハヤテを死なせてしまったら元も子もないだろう!!」

ナギの声が若干震えている。テルもナギと同じ事を考えている。確かに、あんな拳が当たったら、重症、最悪死だ。しかしそれは

同時にマユミの目的が達成できなくなることを指している。

だがマユミは冷酷な笑みを浮かべて言った。

「生け捕り目的だけど、保障はできないわよ？彼……人殺しだから」

その言葉が発せられたときにシュトロハイムの顔が若干ゆがむ。

テルはそれを見ていた。

「オイオイ、そんな奴がよく執事になれたな？」

「……」

テルが言うがマユミはその質問に答えることは無かった。

「ハ、ハヤテ……」

ハヤテを見つめて震え声が発せられる。テルはナギの横顔を見た。最初とは違い、明らかにハヤテを心配する表情だった。

見せつけられた危険な力。相手は人を殺めた人間。ひよつとしたら加減など気にせずハヤテを……

「大丈夫ですよお嬢様」

その不安はハヤテの一言によつて打ち消された。

「僕はお嬢様の執事ですから……絶対に負けはしません」

笑顔をハヤテは向けた。彼女が安心できるほどの笑顔を、何が何でも護る。そうナギに言い聞かせるような優しい笑顔。そして

ナギはハヤテに言う。

「信じているぞ、ハヤテ!!」

主は笑顔を取り戻していた。それを見て安心したのか、ハヤテはシュトロハイムと向き合う。

(おお、さつきとはまるで違う瞳だ……これは自分のためではない、誰かを護るための……そうか、あの主を護るための彼の決意かッ!!)「僕のお嬢様を悲しませる事は絶対にさせません……」

その瞬間、シュトロハイムが一步引いていた。気づかぬうちに……なぜ？

―彼が、自身よりも圧倒的に小さき者に。

―彼が、自身よりも圧倒的に華奢な体を持つ者に。

「彼が、自身よりも圧倒的な主を想う心（決意）を宿した瞳を持つ者に。」

彼は、シュトロハイムは、綾崎　ハヤテに恐怖していた。

「だが……」

小さく呟くと、シュトロハイムは再び異常なテイクバックを取る。地響きを起こさせるほどの右ストレートだ。

（私もまた……お嬢様のために戦う執事!!）

まっすぐにハヤテの体軀に拳が迫る。唸るような、何者を破壊する拳が。

その瞬間、善立　テルを驚愕させる出来事が起きた。

彼は後にこう語る。

「いや、実際人じゃないんじゃない？アイツ」

「アイツぜってーオリンピックピック行けるって、体操とかで」

「え？　なんで体操かって？　ああ、ハンドスプリングって分かるか？　体操クラブにでも行けば小学生でもやってる技。正式名称、前方倒立回転跳び」

「アレってさあ基本的に跳び箱とかにも応用が利くんだけどさ、イメージはすこし助走して跳び箱の上に両手をそえる、んで勢いを使つて前に回転する」

「イメージができなかつたらYouTubeでもなんでも見て来い。んじや本題。あの跳び箱って止まってるじゃん。例えばさあ」

「もしその跳び箱が選手に向かって移動してくるものだとしたら!?」

「もしその跳び箱が車の最高速度をを上回るほどの速さで向かってきたとしたら!？」

「・・・完璧に合わせれるのか、両手を・・・速すぎてダメ、遅すぎてダメ、そんな絶妙なタイミングを助走

も無い、立ったままの状態で合わせれるか？」

「できるとしたら、それでこそオリンピックピックのメダリスト級。だがそれでも練習は必要だ。でもなあ・・・」

「アイツなら、ハヤテならできちまうんだよ・・・」

「!!な、なんと・・・」

右腕が伸びきる瞬間、シュトロハイムは見ていた。自身の右腕に両手をそえ、右腕を使い、ハンドスプリングするのを。右ストレートは空を切った。そして

ハヤテは少しの間だけシュトロハイムの身長よりも高く上がった。

「なぜ？ そう思っちゃまうだろ？ でもやばかったのはここからだぜ・・・」

「はああああああ!!」

浮いていたハヤテは大きく体を捻り、自身の右足をシュトロハイムの頭に打ち下ろした。

「ヌウツ！」

打ち下ろされた蹴りはまるで金属のバットに殴られたかのような重い一撃。しかし、ここで終わるハヤテではない。

打ち下ろした瞬間、体を一回転させ再び右足を振り下ろした。

ドカツと同じ場所を連続的に当てられ、シュトロハイムは思わず膝を着く。

「なに!!」

シュトロハイムにとって、大きな驚愕。ハヤテはまた再び体を一回転させて右足を振り下ろそうとしていたのを見た。

「・・・ハラショー」

確実に迫る一撃を前にシュトロハイムはこんなときにも感嘆の言葉を呟いていた。

振り下ろされたハヤテの怒涛の三連撃が決まり、シュトロハイムは真正面から床に激突した。シュトロハイムは倒れたまま動かない。

そのまま気絶してしまったようだ。

「お嬢様を悲しませる人がいるのなら、僕は全力で立ち向かいます。

勝負は終わりました……」

「……」

目の前に立つハヤテの前にマユミは言葉を発しなかった。しかし、そこには動揺の様子も特別に慌てた様子でもなかった。

その時の様子を見て、善立 テルは後にこう語る。

「俺もこん時は思ってたよ、どう見てもハヤテの勝ち。勝負は終わったかのように見えたんだ。だが終わってなかったのさアイツ……マユミにとっては

「そして最後に言わせると、今回俺ぜんぜん目だってなくね？」

第13話くドラえもんの尻尾を引っ張ると何が起きるのかく

「うふふふ・・・」

それまで表情を変えていなかったマユミが唯一変えた表情。それは笑みだった。

「なにがおかしいのだ？」

ナギが不審に思ったのか、不敵に笑うマユミから一種の不気味さを感じ取った。笑うのを止めるとマユミは髪を掻き揚げた。

「いやくここまで計画通りだとフェアじゃないと思ったんだけど・・・」

「計画通り、ハヤテにいと簡単に負けることがお前の計画なのか？」

ナギはマユミの言っていることが理解できなかった。状況を見れば彼女の提示した条件通り、ハヤテはシュトロハイムを倒した。

明らかについた勝利だ。しかし、

(おかしい・・・こいつはまだなんか隠している。まるでこうなることが予想できていたように)

テルはこの異変に少なからず気づいていた。なにか嫌な予感がする。そう思ったテルはハヤテに声を掛けようとした。その時である。

「シュトロハアアアアイムツ!!」

テルが声を掛けようとした瞬間、マユミが何かを呼び起こすような大声を出した。

「おいハヤテ!!」

テルがその異変に気づきハヤテに声を掛ける。これは後ろにいるテルたちだからこそ分かる「異変」であり、マユミの目の前にいるハヤテには決して気づかない「異変」だった。

「ガアアアアアア!!」

ハヤテは後ろを振り返り驚愕する。ハヤテの真後ろで確実に気絶していたシュトロハイムが立ち上がった。その時、ハヤテの

反応がほんの少し遅れてしまう。

「しまった!!」

その一瞬を突かれ、シュトロハイムの右腕がハヤテの首にロックを掛けるように絡まり、ハヤテは身動きができなくなった。

「三千院 ナギ……いいわよねえ貴方は……」

「な、なにがだ!」

まるですべての条件が揃ったかのようにマユミは笑みを浮かべながら喋りだした。

「貴方はもつとも財力を持ち、裕福で、何もかもが与えられたその環境の中に育った」

いきなり何を言い出すかと思えば、とテルは考える。確かに、ナギは与えられた財力がある。時期的に当主になればそれでこそ莫大な三千院家の遺産が手に入るのだ。しかし、だからどうした。

「それだけじゃない。こんな優秀な執事を手に入れ、なおかつ大きな幸せを手に入れている。言ってみればこのヒトが貴方の大きな支え……」

クスクスと笑うように言うとマユミは身動きができないハヤテに近づいた。ハヤテは少しだけ浮いている自身の視点からマユミを見つめる。

「僕は絶対お嬢様の元から離れない! 連れて行けるもんなら……」
「別に私が貴方を連れては行かないわ。だって……貴方からこちらに来るんだから」

そう言うと、マユミはいつの間にか手に握っていた何かをハヤテに頭めがけて振りかざした。

ポチ。なんともやわらかそうな音が聞こえた。シュトロハイムはゆっくりとハヤテを降ろした。

「……」

ハヤテは何も言わず突っ立っている。シュトロハイムももうこれ以上危害を加えるわけでも無く、マユミの後ろへと戻っていった。

「おいハヤテ大丈夫……」

テルがまた何かを言いかけたとき、テルは言葉を失った。ハヤテの頭にあるものを見て

呆然と突っ立っているハヤテの頭には見慣れないものがあつた。

一本だけ伸びたそれは先端に赤い玉が付いていた。見た感じなんかのアンテナのような。具体的イメージをするとド○えもんの尻尾がハヤテの頭から生えている。と言った方が分かりやすいか……

「あー……なんか突っ込んだら負けなのかな」

「なんだ、あの昭和をバリバリ感じさせるへんてこ……なんだアレ？」

テルとナギが呟きを入れる。あまりにも不可解なアタッチメントの出現に驚いたが馬鹿馬鹿しくなってしまう。

「テル」

「了解つと……」

ナギに指示され、テルはハヤテに近寄る。

「おーい、ハヤテ。いいアタッチメントつけてんじやねえか。俺にも分けてくれよ」

ようやく声を掛けられた。肩に手を掛けて軽く揺さぶってみる。

しかしハヤテは動かない。

(なんか、変だ)

あまりにも不自然だったのでテルはハヤテの顔を覗き込む。

「!! お前……」

覗いたハヤテの表情にテルは驚いてしまう。何故だろうか、あれだけ決意に満ちていた瞳には全く生気が宿っていないという状態だったからだ。

「ハヤテ!!」

「なに?」

テルが声の主に思わず視線をずらしてしまう。

声の主は……マユミだった。その後、場を震撼させる出来事が起きる。

その声が聞こえたかと判断したのか、ハヤテは右肩に乗っていたテルの手を払い、その場で体を一本の軸にし半回転気味に回し蹴りをテルにお見舞いしたのだ。

「ぶっ!!」

当然、不意を突かれたような一撃をテルは避ける事ができず直撃し、ナギの所まで吹っ飛んだ。

「は、ハヤテ……お前、何をしているのだ?」

「……………」

ナギの質問にはまるで届いていないかのように何も答えてはくれない。

「今、お前が吹っ飛ばしたのはテルだぞ? 仮にも仲間ではないのか?」

「……………」

ナギの表情が焦りに変わる。何故こんな事になっているのか、その思考が追いつかない。ハヤテはナギの命令よりもマユミの命令に従っていた。

「爽快……爽快だわ」

慌てふためくナギを見てマユミが薄く笑う。

「どう? 大切な何かを奪われた気分は……帰るわよハヤテ」
「……………」

マユミが帰ろうとするとハヤテもまた、その後ろを追っていく。その瞬間、ナギの胸が急速に締め付けられた。

「待ってくれ……待ってくれハヤテエエエエ!!」

涙を瞳に浮かべ、大声で、自身の限界までに叫んだ。自分の執事の名を。自分の身を何が何でも護ると言ってくれた大好きなヒトの名を。

「こんな事でいなくなったりしないよな! お前は私の執事だろ!」
それを聞いたマユミは振り返ることなくピタリと立ち止まり、言い放った。

「無駄よ。このヒトはもう私のモノ……貴方の声は届かない」
そう言い残すとマユミは無造作に丸っこい球体を投げつける。投

げつけられた球体は床を転がり勢いよく中から白い煙が出てきた。

「煙幕!!」

テルが軽く舌打ちをするが辺りは明らかに1メートル先まで認識できないほど白煙に包まれていた。

「じゃあね三千院 ナギ。 思い知りなry・・・痛い、噛んだ」

若干涙目を浮かべながら口を手で押さえると屋敷の外に用意していた車に乗り込んだ。

「畜生が・・・」

煙が完全に晴れるとテルは忌々しげにはき捨てた。 場には既にマユミが居らずシユトロハイムもハヤテも居なかった。

何が起きた。 いつもと変わらない日常だった。 ハズだったのにだ、いきなりぶつ壊していきやがった。

状況を整理しろ、あいつ等がハヤテに何かしたんだ。 少なくとも頭に変なのをつける前までは普通だった。 まあそれよりも・・・だ。

壊れた玄関を見つめる。 これはマズイ事になった。 取りあえず玄関とか色々やんなければ。 色々と問題が山積だ。

(だが一番やっかいな問題は・・・)

テルが視線をずらすとそこには膝を着き、顔を俯かせいるナギの姿があった。

「ハヤテ・・・」

そう小さく呟く少女の顔から床に向かってぽつりと滴が数滴、落ちていった。

「一体どうなっちゃったんだハヤテの野郎・・・」

「分かりません。 あの二人が何かをしたのは確かでしょう」

数々の問題もいくらか收拾がつき少し落ち着いた三千院家。 場所はある部屋の一室。

テルとマリアは一種で言う会議をしていた。

議題はもちろん昼間に起きた出来事だ。 まあまだあれから一時

間ほどしか経っていないが

「うーん……あのハヤテ君の頭に付いていたアレ気になりますね……」

「あの野郎、ド○えもん気分になったつもりか？」

「遠くから見ていても分かりますわ。恐らく操られているんですよ」

マリアの言葉にテルは苦笑いを浮かべた。

「操るって……そんなモンまでアリなんですかこの小説……」

「テル君、よく聞いてください」

マリアがいつになく真剣な眼差しを向けた。

「この問題はなんとしても解決しなくてははいけません。今まではナギが狙われてきましたが、ハヤテ君が直接狙われたのは初めてです」「遺産目的ですか？」

「いいえ、日野寺家には三千院家の遺産相続にはまったく関係ありません。そこが一番気になるところなんです」

「そうだ、考えても見ればあいつ等には遺産を相続する権利は無い。ナギを誘拐して身代金を要求するという手段があるが、奴らはそんな誘拐犯を装うことなくハヤテを奪うと言い、堂々ときた。」

「ということとはハヤテを利用する方法があるということですかね」

それしか考えられないと推測するテル。コクリとマリアが頷く。するとマリアが口を開いた。

「それに一番の心配はナギです……今、どうしてますか？」

テルは視線を逸らし、頭を掻きながら話し始める。

それは先ほど、廊下を歩いてナギの部屋を通りかかったときだった。玄関の修理もやっている中でナギが真っ先に部屋へと走っていくのを見た。

「ナギ」

「入ってこないでくれッ!!」

取っ手に手をかける瞬間。ナギの声が聞こえ、テルは手をかけるのを止めてしまった。

「なあ、テル。 ハヤテはどうしたんだろうな……」

そう呟くナギの声はとても弱弱しかった。いつもの高く、強い声は聞こえない。

「私はアイツに約束されたんだ。私を悲しませる奴らから何が何でも護るみたいな事を……」

「ナギ……」

「それから色んなことがあって、私が色々と迷惑掛けたこともあった。それでもハヤテは助けてくれた……」

ナギにとって、これまでのハヤテとの出来事は二人の大きな信頼、つまり絆だ。

お互いが信じ合い、乗り越えてきたからこそ深い絆がそこにはある。

「だからハヤテが消えた後もハヤテは絶対に帰ってくるって信じていたのだ……」

部屋の中のナギは扉にもたれかかった。

「だがアイツは帰って来ない……私達の『絆』はこの程度のもものだったのか!?!」

今にも泣き出してしまいそうな声が響く。 仮に今ハヤテが居ればナギはすぐにでも笑顔になるだろうがハヤテいない。

(かと言って俺が代わりにはなれねえ……)

「しばらく一人にしてくれ……」

テルは何も言わない。今は今だけはこうして置くことが一番ではないかと思っただからだ。 2人の会話はそこで終わった。

現在に戻る。

「ナギにとってハヤテ君は大切な人なんですよ」

話を聞いたマリアは小さく笑うとそう言った。

「昔から遺産の事で命を狙われてましたから、最初は気を許せる人があまり居なかったんですよ」

それは初耳のテル。だが幼くても立派な三千院家の跡取り。その手の奴らから命を狙われるのは当然か。マリアは更に続ける。

「でもハヤテ君に出会ってから、前よりも明るくなって学校にも行くようになりました。まあ今でも休みがちですけど……」

「たしかに……」

テルは苦笑いを浮かべる。しかし、ハヤテがナギにとって信頼できる存在であり、マリアもまたハヤテを信頼していたのだ。

「だから今度は私達がハヤテ君を助けてあげる番です」

マリアは力強く言った。テルもまた頷いてその場を去ろうとする
とマリアが呼び止めた。

「私は日野寺家の場所を調べますがテル君は？」

マリアにそう聞かれ、テルは頬を掻きながら返した。

「俺も情報収集に白皇に」

「今日は休日ですよ？」

マリアがもつともな意見を言うがテルはニヤリと笑ってみせた。

「たぶんこんな休日でも頑張ってるマジメ君がいると思うんで」

そう言うと言葉を開け部屋を出て行った。

(さて、なんか引つかかってんだよな……)

頭に浮かぶ疑問と戦いながらテルの足は玄関へと向かう。 玄関
の修理は完了していた。

(やれるだけの事をやってみるか……)

ボタン！ と勢い良く玄関の扉を開けた。

第14話く情・報・収・集く

前略。テルは白皇学院に情報収集へとやって来ていた。これから戦うかもしれない相手の情報を一つでも集めなくてはいけない。勝負しようにもまずそこからだと考えたからである。

「で？　なんで私のところに来たわけ？」

そう言いながら長大な机に肘をつけ頬杖を突いている少女はこの学院の生徒会長、桂　ヒナギクである。

「偉大なる魔王である生徒会長であるお前なら色んなことが分かりそうだからな」

客席用のソファアームにどかっと座りながらテルはリラックス気分だ。

「なんか聞き捨てならない言葉が聞こえたけど……ていうか、今まで突っ込まなかったけど、ここは生徒会の関係者以外入れないって言わなかったっけ？」

「硬いこと言わさんな会長。　情報収集にきてるのだ」

「休日に来校して仕事している私の身はお構いなしね」

この休日、本来なら家で休んでいるのハズなのに生徒会の仕事によりヒナギクは午前中から仕事をしているのだがそんな大変な中、まさにお構いなしである。

「その情報収集ってなんの情報？」

ため息を一瞬だけつくヒナギクは手にしていたペンを置いた。

「日野寺家についてなんだが？」

「え？　日野寺家？」

ヒナギクのその反応にテルは内心、当たりを引いたと思った。

「知ってるのか？」

「知ってるけど、日野寺家は医療の方にかなり力をいれていることだから有名よ？」

「医療？」

「ええ、後は昔凄かったというかなんというか……」

「何が凄かったんだよ、お前曖昧じゃね？　お前もしかしてあんまり知らないんじゃない？」

だんだんと表現が曖昧になって言っているのが分かるテルは眉を細めた。

「だってそれは昔の話だったから。今のことは分からないのよ！」
ヒナギクは顔を少し赤くして声を張った。しかし、どうやら日野寺家には過去と現在では大きな差があるそうだ。

だがまだまだ情報が足りない。テルはうーんと唸り、頭を掻いた。

「あー……会長は今日から係長に降格だ」

「あなた殴られたのかしら？」

拳がぶるぶると震えだしているヒナギク。しかし、少し思うところがあつたのかテルに聞いてみる。

「でも日野寺家を調べることには何か意味があるの？」

テルは間違つても昼間の出来事を話してはいけないと感じた。

喋ったら絶対こいつは来る。断つても来る。そんな面倒くさいことはごめんである。

「まあ少し調べたいことがあんだよ……だが参つたな」

ヒナギクは理由は分からずとも何か困つていそうだという事だけは理解できた。

(まあ、この前お姉ちゃん助けてくれたお礼もしなきゃならいし)

と思ひ、ポケットから携帯を取り出した。

「仕方ないけど、あの娘達にたよるかあ……」

「誰か心当たりでも？」

「そういうのに詳しい友達がいるのよ。今頃、サボって遊んでるだろうけど」

そう言うとヒナギクは携帯の番号を打ち出した。電話が繋がりはなギクが話し始めた。

「もしもし私だけど来てくれない？　ちよつと聞きたい事があるんだけど。　どうせどつかでサボってたでしょ？　みんな連れて来なさい」

携帯の通話を終わると背もたれ椅子にドカツともたれかかった。

「まさか……アイツ等よんだのか？」

テルが面倒くさそうに顔をしかめた。

「知りたいんでしょ？　なら文句は言わない」

ガチャン！　とヒナギクが言い終えたと同時に生徒会室の扉が開かれた。

それと同時に強烈な光が差し込んでくる。　あまりのまぶしさにテルとヒナギクは目を隠した。

「うおっ！　まぶしー！」

「来るの早いわね……でも来るのにここまで過剰演出する必要あるかしら？」

扉から差し込んでくる光はどうやら自然的なものではなく、人工的なものが使われていた。　そのライトをバツクに三人の女子生徒がポーズをとっていた。

「ふっふっふ……待ち続けること四ヶ月、話数にしてなかなか出番をもらえず退屈をすごす日々……」

「そんな私たちにも！」

「ついに番がやってきた♪」

「二降臨、満を持して！　我ら、THEE！　生徒会役員!!」

その瞬間、後ろでドーンと爆発みたいな効果が聞こえ、三人は決まったと言わんばかりの顔だ。

「おー、いらっしやーい。　んでもって出口はこちらになりまーす」

テルが三人を入ってきた扉へと誘導する。

「そうそう、お邪魔しましたーってなるかア！」

ややブルーがかかった灰色の少女が怒って戻ってくる。

「我々は4ヶ月も待った！　ようやく出れたと思ったら特別編だぞ！
本編に関係ないではないか!!」

「そうだ！　大体、作者も女性キャラ登場させるのがあまりにも遅いのだ！　見ろ現実を！　まだ余っているキャラもいるだろうに」

「みんなく　私達の事、忘れてないよねく!?!」

黒髪の少女も自身の不満を訴える。最後の紫の髪の少女に至っては泣きそうな声だった。

「だが出れたからには」

「私達の見せどころなのだ！」

「なのだく♪」

三人は意気揚々としていた。　どうやら出番がなかったことにとっても不満だったらしい。

「美希、理沙、泉？　訳の分からない事言っていないで出番が欲しければ仕事をすればいいじゃない。　そうすれば早く出れたかもしれないのに」

ヒナギクが呆れたように言う和美希が反応する。

「ヒナは私達より早く出れたからそんな事が言えるんだ」

「「そうだそうだー!!」」

美希の後ろで理沙と泉が腕を伸ばしてはやし立てる。

「あなた達ね……不平不満言うもんじゃないわよ」

ヒナギクが落ち着いた態度で喋る。　その様子を見て、流石は会長だ。　と思っていたテルだったが

「私なんて早いと言っても出れたの20話過ぎよ!?!」

「お前も根に持ってたんかい！　つーか今ここで討論する必要ねーだろ！」

テルの突っ込みにより四人はそれもそう。　と思い落ち着きを取り戻す。

「ありがとうテル夫君。　君のおかげで目が覚めた」

「お礼に君には今余っている黄土色の称号を与えよう」

美希と理沙がテルに感謝するように言う。

「そんなスライムにも負けそうな称号はいらん。せめて黒にしろ」
「残念ながら黒は私のものだ」

理沙が自身に親指を立ててテルに返す。

それに続き

「ちなみに私、花菱 美希はブルー！」

「私、瀬川 泉はレッド！」

美希と泉がそれぞれ乗ってくる。そして再び三人はポーズを取り、

「二我ら！THEE！生徒会役員！二」

「お前ら少し黙れエエエ!!」

このままでは話は一向に進まない。取り敢えず皆の落ち着きを取り戻させた。

ぶっちゃけ、この三人娘はテルにとってとんでもなく苦手な存在だ。クラスにもいるだろう、なにかと突っかかってくる女子が。それが×3。

愉快なのは確かだが。

話は戻りようやく本題にはいる。本格的な情報収集の開始だ。

「日野寺家か？ ああ知ってるとも」

「本当かよ？」

美希がどうやらその事に詳しいらしい。

「一応、政治家の娘だ。 情報収集は得意」

美希は得意顔で言うのと更に続けた。

「しかし、そんな事も知らなかったとはテル夫君、あさはかなり……」
「放っておけ……」

「日野寺家は医療の最先端に行く家系。 その活動は国内に留まらず、外国でもその力を発揮している」

要は全世界で医療の力を拡大していったということか。

「はつきり言つてその時の実力だったら三千院家と肩を並べていたくらいだ。ま、それも過去の話」

「なんだ、過去のことだったのか」

「ああ、日野寺家はある日を境にして急激に力が衰えていった。それは前当主がいなくなつたからだ」

美希が言うにはその前当主がもつとも日野寺家の中で医療に対する情熱と知識をもっていて、よく頭のキレる当主だったとか。そもそも日野寺家の全盛期を築いたのはその前当主のおかげだと言つても過言ではないらしい。

「前当主は人望も厚かつたから色々な人間が彼を慕っていた。医療に対してはホント熱心だったらしいから紛争地域に直接赴いて戦地の人々を助けていたりもしたのだよ」

そんな前当主がなんでまた急にいなくなつたりしたんだ？

「不幸なことだが、紛争地に赴いていた時に巻き込まれたらしい。

紛争地帯で前当主は敵味方関係なく治療に当たっていたがそれを邪魔に思っていた人間が居たらしいのだ」

皮肉なことだ。助けていたはずなのにその助けた側の人間から邪魔だと思われ、命を奪われるとは。

「それからだよ。日野寺家が弱体化したのは……前当主が今まで全部仕切つてやっていたから指示する人間がいなくなつたせいで組織はバラバラ、前当主の一人娘が今継いでいるけどなかなか周りからは若いだのなんだので信頼されていないわけ」

なるほどようやく分かった。日野寺家の過去と現在。盛者必衰の理という言葉もあるくらいだからな。

でも一人娘つてまさか

「かわいそうなことに前当主が死んだときにどうやら奥さんも居たらしいからな。日野寺家は実質、その一人娘しかない……まだ十三歳だというのに」

おそらく、その一人娘はマユミだろう。だがその過去の、父の栄光を取り戻そうとするのは分かるが果たして、今回の事件となにか繋がりはあるのだろうか。

「なるほど、大体分かった」

なににせよ分かることも分かり、得れる情報はいろいろと得ることができた。取りあえず帰るかな。

「そうかそうかテル夫君。最後に私達生徒会から君へメールを送ろうではないか」

「いらんいらん。そういうメールは今の病んでる日本に贈ってやれ」

テルの言葉など意にも介さず三人娘はテルに向かって応援団のように美希、理沙、泉の順で

「あさはかなり」

「あさはかなり!」

「あさはかなり♪」

メールを送った。

「メールじゃねえよな!? 明らかに俺のことバカにしてるよな!」

「ふ・・・さあヒナも言うんだ!」

「な、なんで私までやらなきゃいけないのよ!」

美希がヒナギクに言うよう促す。ヒナギクはやりたくはなさそうだ。

「お前らなんだ、その言葉流行らせたいのか」

その時、テルの携帯が鳴る。電話の相手はマリアだった。

「もしもし、マリアさん?」

『テル君、情報のほうはどうですか?』

「大体集まったほうですよ。そっちはどうですか?」

『こちらも大体場所は特定できました。あとお客様がお見えです。』

客? マリアの言葉に疑問を浮かべたテルだったが、客の名前を聞きなり表情を一変させた。

「分かりました。すぐ戻ります」

そういうい終えると携帯をきる。三人娘とヒナギクはまだ言うか言わないかでもめている。わざわざ言うのもめんどくさいので黙って帰ることにした。

「さあヒナ! 言うんだ!」

「ヒナも気づくはずだ！ この言葉の有能さに！」

「ヒナちゃん、言ってみよ〜」

「わ、分かったわよ……言えばいいんでしょ、言えば」

三人の執拗な説得についてヒナギクも折れてしまい、深呼吸をして小さな声で呟く。

「あ、あさはかなり……ってアレ？」

当然だが、テルは四人が言い争っているさなかに生徒会室を出ていった。だれもいない所にヒナギクは深呼吸までしてまで恥ずかしさに耐えながらもおかしなセリフを言わされたのにだ。

「あらら……ヒナを放置するのはテル夫君、なかなか度胸があると見える。なら、我々もそろそろサボリという名の仕事に……」
「あら？ どこへ行くつもり？」

三人娘が何事も無かったように生徒会室から出ようとしたとき呼び止められ、振り返るとそこには笑顔のヒナギクがいた。

笑顔ではいるのだが負のオーラが大量にあふれてきている。

「さ〜て、仕事しましよ仕事♪ 今日仕事終わらすまで帰さないわよ？」

「そ、そんなヒナ！ そんな死人がでるような激務を私達にこなせというのか!?!」

美希が必死になって訴えるがヒナギクはそれを絶対に許さない。

「他意はみとめない」

三人娘はヒナギクのオーラに圧倒され、弾圧された。

「ただいまーつと……」

「おかえりなさい。テル君」

それからして、テルは屋敷へと戻ってきた。

「お客様は部屋でお待ちしていますわ」

「了解です」

そう領くと、テルは客が待っているとされる部屋へと入った。

「よう、待たせたな……シュトロハイム」

そこに居たのは紛れも無く、昼間にやってきたマユミの執事、シュトロハイムだった。

その後にはマリアも来て、よく分からんがテルが椅子に座り、その後ろでマリアがいるという状態で座っているシュトロハイムと向き合った。

「まさかお前から来るとは思わなかった。お嬢様はどうしたよ?」

なぜか今はマユミとハヤテの姿が見当たらない。どっかに隠れているのだろうか。

そう思考を巡らせているとシュトロハイムはが口を開いた。

「実は……今日付けでお嬢様の執事をクビにされました」

「……は?」

ニカツと笑って答えるシュトロハイムに二人は目を丸くした。

「いやあ『もう綾崎 ハヤテがいるから貴方はもう必要ない』と言われててしまいましたな」

「いやいや、お前無職になっちゃたのになんでそんなに笑ってられるんだよ」

テルが手を小さく振り、突っ込みを入れる。しかし、これほど主を思っている執事をクビにするとは一体何故だろうか。

「お嬢様の命とあらば致し方ありません。主の命に執事は従う、ただそれだけなのですから」

テルはふーんと言った表情。それでも従うって言われてもここまで前向きだとは全世界の無職の人々にはこれぐらいのポジティブ感が必要なかもしれない。

「お茶です」

「ありがとうございますマリア殿」

シュトロハイムはマリアに出された紅茶をグイッと飲み始める。カップが190cmの体格のせいであらと小さく見えた。

(でもマリアさんも何も警戒なしで屋敷にあげたんですね)

(ええ。でも最初見たときは警戒はしましたんですけどなんというか……雰囲気か)

お互いに目を見合わせて小声で呟く。確かに、今のシュトロハイムは玄関を破壊したときの迫力は無く、見た感じは執事服を着ただだのおじさんに見えたのだ。

「実はこのシュトロハイム、お願いがあつてこの度参りました」

紅茶を飲み終えたシュトロハイムは突如として顔色が変わり、真剣な表情で向き合う。

「お嬢様を助け出してほしいのです」

「どういうこつたそりゃ」

テルが顔をしかめる。シュトロハイムは少しだけ俯いた。

「言葉通りです。人殺しの私にはお嬢様を助けることも笑顔にすることもできません」

「その人、人殺しだから…… というマユミの言葉が思い出される。」

「お前んとこのお嬢様もそんなこと言っていたな……」

その言葉を聞くと、シュトロハイムは自身の右手を見つめた。

「ええ、実際に私は人を殺しています。それもたくさん……」

右手を見つめるシュトロハイムにテルは目を細めた。

「話さなければなりません。私がどうしてマユミお嬢様の執事になったのか。どうしてお嬢様があそこまで変わってしまったのかを……」

再びテルたちと向き合うとシュトロハイムはあの日を思い出すかのように語りだした。

「今から八年前、アルベルト・シュトロハイム四十二歳。」

第15話く出会い一つで変わった傭兵のお話く

一八年前、アルベルト・シュトロハイム四十二歳。
とある国の紛争地帯。

「・・・・・・・・・・」
ふと目を覚ました。見上げるは曇天の空。　自分は地面に仰向けで倒れていたのが分かった。

「ここは・・・・・・・・？」
体を動かそうとしたとき、下腹部に激痛。　よく見ると、体の服は下腹部だけ穴が開いており、その穴からは血がとめどなく流れていた。

「そうか、思い出した。　私は極秘任務の最中、この紛争地帯にいるある人間を暗殺するために銃弾の嵐をかいくぐっていたところを流れ弾によって撃たれたのだ。

そしてそのまま側にあつた低い崖から落ちて意識を失ったのだな。
雨が降ってくる。　ポツポツと砂にまみれた体に雨が当たり、泥へと変わる。

傭兵。それが私の家系だった。　頼まれればどこへでも行き、どんな戦地だろうが荒地だろうが金を積まれれば何でもやる。　生きるためにはやらなければならなかった。

時間がたつ度に意識が遠くなっていくのを感じる。　どうやら血を流しすぎたらしい。　意識を遠ざかれば最期、私の魂は一瞬で刈り取られるだろう。

まずい、本格的に目が霞んできた。　何かが見える・・・・・・・・これはなんだ？死の間際にみる最期の光景だというのか・・・・・・・・

思えばロクな人生じゃなかった。　生きるためといい、何度も人を殺めてそれを繰り返していく人生。　こんな人生、嫌気がさす。
いつそのまま楽になつてしまおうか・・・・・・・・そう思えば自身の人生に区切りをつけれる。

「早く、この世界から消えよう・・・・・・・・そう思っていたときだった。
「おーい、車速く回してくれ！　こっちに倒れている！」

どこからか男の声。　だがこのとき既に私の視力はほぼ全体がぼんやりして見えた。

目を閉じる前に見たのは明るい光だった。

「……………」

次に目を覚ましたとき目に映ったのは天井だった。　自身の体は丁寧な包帯が巻かれており、大きなベッドに寝かされていることが感触で分かる。

「気がついたかい?」

ふと聞き覚えのある声がある。　その声は薄れゆく意識の中で聞いた声と同じだった。

「弾丸が体の中に残っていて取り出すのに苦労したよ。　でもあの出血と怪我で生きているなんて、相当体を鍛えていたんだね」

　コーヒカップ片手に喋る男は清廉な茶色の髪に整った顔立ちで、白衣に眼鏡という地味なものだった。

「貴方が治療を?」

「おお!　日本語喋れるんだね!　これは驚いた」

　シュトロハイムの言葉に男は驚いて見せた。　すると男はカップ片手に近づいてくる。

「僕は日野寺　祐一（ゆういち）。　言ってみれば医者だよ」

　シュトロハイムはその名を聞き、驚いた。　日野寺といえば世界をまたに掛ける医療の家系。　全世界でも信頼されている医療の最先端をゆくことで有名だ。

「あら?　起きたのね?」

　扉が開かれ、入ってきたのは明るいエメラルドの髪をした女性だ。

「僕の妻の美姿紀（みさき）だよ。　ここでは一緒に活動している」

　笑顔で迎えてくれた姿紀は同じく、片手にコーヒーを持ち、白衣姿が似合っていた。

「貴方たちが私を治療してくれたのか?」

　シュトロハイムがそう聞くとミサキが両手で口を塞ぎ驚いた。

「まあ、この人日本語が上手よ」

「ミサキ、それさつき僕も同じ反応したよ。それにしても凄いな、どこで覚えたんだい？」 世界を渡り歩く傭兵は言葉の壁にも挑戦した。もちろん、情報を得るためでありその中には日本語も含まれていた。 そんなことを正直に言う必要も無かったので

「独学で覚えた」

とその場をごまかしたのだ。 それに二人はまた驚いてみせる。 そんなに珍しいのだろうか、日本語を喋る外人は

「.....」

なにかしらと視線を感じる。 扉のところから.....よく見るとそこには小さな少女が顔だけを覗かせてシュトロハイムを見ていた。

「あの子は？」

シュトロハイムが視線をその子に向けると少女は一瞬ビクツとして顔を引つ込めた。

「あの子は真弓（まゆみ）。 僕らの一人娘さ」

祐一がそう言うとマユミはたたと祐一に駆け寄り白衣の袖をつかんだ。

「倒れているのを発見したのはマユミだよ。 覚えてないのかい？」
「覚えていない。 恐らく気を失っていたときだろう。」

「まだまだ体は動かささないほうがいいよ。 傷は完全に塞がっていないんだから」

ユウイチはそう言うのと体を起こして動こうとしているシュトロハイムをとめた。

取りあえず今はそうしていた方が良さそうだ。 体の力を抜き、静かに目を閉じる。 そうするとユウイチ達は部屋から出て行った。

そして、だれも居なくなつたのを見て、目を開き自身の目的を思い出す。 そう、彼、日野寺 祐一こそ暗殺を依頼されたターゲットだったのだ。

時が経てば自身の怪我は回復する。 そうなつた時が暗殺再開のときだ。 今は体を休めよう.....

くそして現代。

「アンタ……傭兵だったんだな」

テルが目を細めて背もたれに寄りかかる。

「驚きましたか？ お嬢様の言っていたことは事実です」

淡々と述べるシュトロハイムにテルが質問する。

「まさかマユミの親父を殺したのは……」

そっくり掛けた時、シュトロハイムが口を開いた。

「続きを話しましょう……」

私は確かにあの時は傭兵として暗殺を画策していました。

「ねえ、シュトロハイムはどこで何をしていたの？」

出会って数日。シュトロハイムはベッドの上でマユミと会話していた。いや会話というよりも尋問に近い。

マユミはよりによって、何をしていたか、どうしてあそこで倒れていたのかと、正直に答えればこちらの素性がばれる様な事ばかり聞いてくる。だから会話というより、尋問に近かった。

(まさかユウイチやマユミは私の計画に気づいているのか?)

そんな考えが過ぎったがそれは無いだろう。こんなあどけない少女がそんなことをするわけが無い。

しかし、この紛争地帯の中でいくらなんでも無用心すぎではないだろうか。聞けばユウイチ達は争っている人々、関係なく治療に当たっているという。その中に私のような人間もいて不思議ではないのだが。

いずれにせよ、これは好都合だ。そのほうが私は動きやすい後何日かすれば戻る。それまで待つんだ。

こうして体の治療に専念していたとき、私は不覚にもマユミに質問してしまった。

「マユミは何かになりたいのとかあるのか？」

「あるよ、お父様とお母様みたいなみたいになりたいな優しい医者になりたい！」

やはりそうくるか。

「お父様が言ってるの『人を助けること』は素晴らしいことなんだ。お前が人を助け、命を救ったとき、その人が嬉しくなればお前も嬉しくなるんだ』って」

ユウイチよ、理想が高いことは結構だがここにお前を殺そうとしている人間がいるのだぞ。

「もし、その助けた人が悪い人だったら？ 恩とかをあだで返す人間だったら？ そういう奴らに殺されてはただの無駄死にだぞ」

つい意地悪な質問をしてしまった。だがこういう人間がいた時、その理想を貫いていられるだろうかユウイチは。

「んくと、まだ「おん」とか「あだ」とか分かんないけどどんなに悪い人も生きれたらうれしいと思う」

「それもユウイチの教えなのか？」
「違うよ。私が思ってるの」

親が理想の高いものを目指していると子も理想が高くなるのだろうか。

「お父様とお母様のすぐ隣でお手伝いすることが私の夢なの！ たくさんの人を助けて、みんな幸せになるの！」

しかし明るく振る舞って夢を語るマユミの姿はどこか寂しげで「だからあまりお父様とお母様と遊べなくても頑張るの……」

何かと戦っているようだった。

考えてみればまだ五歳。親とたくさん遊んでいたいだろう。何を思ったのか私は自分のポケットから一枚の硬貨を取り出した。

「シウトロハイム、それなくに？」

この硬貨はよく任務前にやる占い。表か裏を当ててやれば失敗することはないという自分が考えたものだ。

だが今回はそんな事には使わない。

「マユミ、このコイン、私がどっちに持つてるか分かるか？」

そう言うのと硬貨をコイントス。 やがて目の前に落ちてくる硬貨を両手で素早くわけける。 さあ、どっちだ？

「うーん、右手！」

「残念、左手だ」

マユミはまさかそっちにあるとは思わなかったという顔で

「すごい、すごいよ！ シュトロハイムは魔法使い？」

マユミは目を輝かせていた。

「はは……」

私は苦笑いをした。そこまで面白いものだったろうか？ あまりこういう遊びをやるのは初めてだったのかもしれない。

「ねえ、もう一回やって？」

何故かその後何度もつき合わされた。 全て当てることは出来なかったが。

「……………」

どうしたものか……マユミはどうやら疲れ切って寝てしまっていた。

「あら、マユミったらこんな所で寝ちやて……」

マユミを見つけたミサキが静かに近付いてくる。

「シュトロハイムさんごめんなさい。 迷惑掛けたかしら……」

「いえいえ、私が一緒に遊んでいただけです」

それを聞くとミサキは申し訳なさそうな顔をした。

「この子には申し訳ないと思っっているんです。 私達こんな仕事だからあの子と遊ぶ機会ができなくて……久しぶりに遊べて楽しかったんだと思います」

恐らくユウイチもミサキも同じくらい苦しいだろう。

「あの人も気に掛けているんだけど、医療バカだから……でも心はマユミと遊びたいって思ってるはずよ」

ユウイチは医療のことになると周りが見えなくなるのか？

「私達も頑張って時間つくるわ。 それまでマユミと遊んであげて？」

そう言うミサキは寝ているマユミを抱きかかえ自分の部屋へと

戻っていった。

子供と遊ぶなんて私は今回が初めてだ。だからこれからうまくやれる自信はない。だが私は親と触れ合ったことすらない。そういうものは私の間には無く、教えられたことといえれば傭兵としての在り方。生き方。人を殺すための技術。だが……

―マユミの笑顔をもっと見たいと思っっている自分がある。なぜだ。こんな迷いが生じるとは……

作戦の決行は今日にしよう。時刻は夜。皆が寝静まった後だ。情も薄いうちにやっておかなければ心が揺らいでしまいそうだ。

―そして深夜。

夜こつそりとベッドから降り、自身の持っていたナイフを持ってユウイチの部屋へと近づく。

息を殺せ、気配を悟られるな。ようやくユウイチの部屋までたどり着いた。

(明かりが漏れている。まだ起きているのか?)

部屋が少し開いていたのでその隙間から覗くと、ユウイチは大量の本や資料に顔をうずめ、机に突っ伏して眠っていた。

(寝ている。だがこれは好都合だ……)

今一度、自分のナイフを見つめて部屋に入る前に準備を整える。

「あれ? シュトロハイム?」

「ま、マユミ……」

真夜中にまさかだがマユミと出会うとは、また出直すか?

―あの人も心ではマユミと遊びたいって思ってる。

―お父様とお母様と一緒に遊べなくても頑張るの……

突然、昼間の言葉が蘇る。相手は命の恩人だ。それを私は自らの手で殺そうとしてる。

ユウイチが死ねばマユミは、ミサキは悲しむだろう。

―できるのか? 私に少女の幸せを奪うことが。

―できるのか? 私に親の心を踏みにじることが。

(できない。 できるわけがない……)

「リンゴでも食べるか？」

「夜にはあまり食べないけど今日くらいなら……」

なんという間抜けな提案をしているのだろうか自分は。 そのままマユミと台所に直行し、果物ナイフでバスケットにあつたリンゴを持って切ろうとしたが。

「むう……」

生まれてこの方、果物なんて切ったことが無い。 私はリンゴの皮むきすら手間取っていた。

「シュトロハイム、あまりにも下手だね。 ちょっと貸して？」

私の切り方のひどさに見かねたのか、マユミが寝ぼけ眼で私の手からナイフとリンゴをとった。

そう言ったマユミの腕は流石で、綺麗にリンゴの皮を剥いていく。

「うまいな……」

私がそう言うとマユミが切り終えたリンゴを渡した。

「シュトロハイムのナイフの持ちかたって危ないわよ？ それじゃ怪我するわよ？」

仕方が無い、今まで果物の切り方なんて知らなかったのだから。

「じゃあ仕方ないから私が正しいナイフの使い方教えてあげるわ、感謝しなさい」

そういうマユミは欠伸をしてリンゴを口に放った。

それからその時間、マユミに数個のリンゴを使って皮むきの練習をされた。 なんの意味があるのだろうか。

「あら、上手くなつたじゃないシュトロハイム。 あなた才能あるわよ」

そう言われて、ようやく気づいた。 これが人を殺さない、ナイフの使い方。 正しいナイフの使い方を教えられた。

ー私にはできない。 彼女の、彼らの幸せを壊すことはできない……

数日後に私は怪我が治り、その祝いで軽いパーティを催された。

その時、ユウイチと酒を飲んでいたときだ。私は意を決して自分の正体を明かした。

「……そうか」

しかし、ユウイチは確かに聞いたはずだ私の正体を。だがあまり驚いていなかった。

「まあ、慣れてるんだよ。一回だけじゃないからね」

聞けば、過去に难道か襲われた経験もあるらしい。

「今、僕を殺す気は？」

「ない……私はお前に助けてもらい、救われた。マユミの幸せを壊すことはできない」

そうか、と言うとユウイチはグラスの酒を飲み干した。

「確かに僕らの周りは決していい人ばかりじゃない。それでも僕は人を救いたいんだ。この身を費やしてでも」

「そうだな。もともと戦争が引き金で多くの命が奪われている。

関係の無いものまでの命がな、それをできる限り救うのがお前の役目だ」

自分のグラスも一気に飲み干そう。自分の両手を見据える。

ユウイチに私は聞いてみた。

「ユウイチよ、私は変われるだろうか」

「変われるさ、お前なら」

「だが、私はこの手で人を殺めることしかできなかった。できるのか奪うことしかできなかったこの両手で……」

「できるさ」

またしても即答。ユウイチは笑顔で言った。

「少なくともお前は一人の女の子を笑顔にする方法を知っているじゃないか」

それはマユミのことだろうか。だが、これから変わるとするならば自分自身と向き合わなければ。

「ユウイチよ私も誰かのために尽くせる人間になりたい」

この時、多分だが生まれて初めて強く思った。だれかを笑顔にした。色んな人を、そしてマユミも。

「シウトロハイム、僕と一緒に働いてみないか？」

「ああ、お前とならどこへでも行けそうだ」

2人でグラスをぶつけると向こうからマユミがやって来た。

「シウトロハイム、シウトロハイムは強いんだよね？ お父様とお母様を守ってあげてね？」

「ああ強いとも、守るさ。 もちろんマユミもな」

マユミの頭に優しく手を置き、笑顔で言った。 できる限り彼女の期待に応えてやりたい。

「えへ、えへへ……」

頭に手を置かれていたマユミはその言葉を聞くと嬉しそうだった。

それから私は今までの職務に区切りをつけ、ユウイチ達の手伝いをするようになった。

私も医療について勉強して多くの患者達を治療する立場になり、人を助ける喜びを知っていった。

不思議だ。今まで人を殺す事しか出来なかった人間が人を助ける事ができるなんて。

私はユウイチと出会う前は死んでいたかもしれない。 今初めて、生きていることを実感している。

（ありがとう、ユウイチ）

私は思っていた。 これからもユウイチの下で働いていこう。 幸せがいつまで続けばいいのに。

—だがその幸せは長くは続かなかった。

「日本に帰る?」

「ああ、紛争が収まってきたからね。明日には帰ろうと思うんだ」
お昼過ぎ。コテージでシュトロハイムとユウイチは仕事の休憩をしていた。

ここ数ヶ月で紛争は沈静化してきた。シュトロハイムやユウイチのおかげで負傷者たちはみんな完治していった。紛争の終わりが近い。数々の人々を救ってきたシュトロハイムにとって朗報だった。

「財閥にも報告してこれからの方針を決めたい…….と思ってたんだけど、本当は別にあるんだ」

ユウイチはキリツとした顔から一変させて笑顔になった。

「戻ったらしばらく日本に留まってマユミやミサキと過ごそうと思っ
てね」

「なるほど、それは良いことだな」

シュトロハイムの顔も思わずほころんだ。

「今まで仕事しかしてなかったからマユミには寂しい思いをさせてきたからね。家族との時間を過ごしたいんだ」

ユウイチは財閥の当主だが父親だ。彼も家族を支える柱にならなければならない。

(これでマユミに本当の笑顔が戻る……)

今まで仕事の時はシュトロハイムがマユミと遊んだりしていた。しかしやはり、ユウイチやミサキと過ごす事がマユミにとって最高の幸せだ。

「日本に来ないか? シュトロハイム。お前がいれば……」
「いや……」

ユウイチの言葉をシュトロハイムは静かに返す。

「私は十分、人に尽くせた。人殺しの私がこれ以上付いて行くのはな……」

「お前はもう人殺しじゃない」

「分かっている。だがこれからマユミに必要なのは私ではなく、お前だ」

正直だと別れてしまうのは悲しい。だが私は部外者、日野寺家とは本来無関係。

「決意は堅いんだな……」

「ああ、私はお前から色んな物を貰ったよ。誰かのために尽くせる事、それが他人のだけじゃなく、自分のためにもなったからな……」

自身の両手を見つめる。人を殺してきた手。それが今は人を救える手になったのだ。彼らとの出会いは確実にシュトロハイムの『何かを』変えた。

「生きていればまた会えるか？」

「会えるさユウイチ。こうして私達は会えたんだ……」

人との出会いは本当に一期一会だ。しかも大切な、自分の人生を変えるほどの出会いは本当に一握りだ。

最後に二人は拳をガツと合わせた。

「まあゲイシャガール、スキヤキの国行けないのは残念だが……」

「その日本の呼ばれ方古くないかシュトロハイム？」

(今日でユウイチ達とお別れか……)

シュトロハイムは一人最初に自分が寝ていたベッドを見ていた。

明日にでもユウイチが帰ってしまう。そうなればまた浮浪の旅だ。数ヶ月だが随分と長かったと思うと感慨にふけていた。

「あら、シュトロハイムじゃない。何していたの？」
部屋に入ってきたのはマユミだ。

(そうか、マユミとも別れなくてはならないか……)

分かってはいたが辛い事、しかし自分はマユミにとって最大の選択をした。

「マユミ、私とコイツで勝負しないか？」

そういつてポケットから取り出したのは一枚のコイン。勝負はもちろんコイントスからの見極め。

「いいよ。やろやろ！」

マユミは顔を輝かせるとシュトロハイムの勝負に乗った。

—結果。

「右手！」

「……驚いたな、当たりだよ」

「わーい！ 勝った勝った！」

マユミは両手一杯に高く伸ばして満面の笑みを浮かべていた。

「むう、強くなったのだなマユミ……」

「エツヘン、何回やってると思ってるの？」

「まあそうだな……マユミ、楽しかったぞ」

シュトロハイムはマユミの頭に手を置いた。

「楽しかったのはマユミの方だよ？」

マユミが怪訝そうに聞く。

(そうじゃない。私はお前と遊んでいて、初めて人と触れ合うことの楽しさを知った。お前が居たから私は変わった……)

「このコイン欲しいか？マユミ……」

「え、いいの？」

差し出されたコインを見て、マユミは驚きの表情を見せる。

「私達が出会えた記念の証しだ。私を忘れないですつと持っていてくれ……」

その今までと違う雰囲気にもユミは顔をしかめた。

「え？ シュトロハイム、なんて急にそんな……別れるようなこと言うの？」

シュトロハイムはしまったといった表情をしたがすぐにいつも通りの顔になり

「そういえばミサキ殿がさっき届いたケーキを食べに行かないか？」

「う、うん」

マユミはシュトロハイムの背中を見つめていた。

「ミサキ殿、先ほど届いたケーキはどこに？」

「ああ、それならテーブルの上にあるわよ？ どうしたの？」

「いや、みんなで食べようかと」

シュトロハイムとマユミは台所に来ていた。ちようどそこには

ユウイチもいる。

「なんだいシュトロハイム、そんなに甘い物が食べたいのかい？」

「まあそんな所だ。みんなで食べようか」

そう言うのとシュトロハイムは皿を並べていく。

「あら？ユウイチさん、包丁が見つからないわ」

「何だつて？ 一緒に探すよ」

そう言うとユウイチは包丁探索に入る。

シュトロハイムは座ると四角い箱を見つめた。

「このケーキはどこから貰ったのですか？」

シュトロハイムが聞くと下扉を調べていたユウイチが頭をぶつけ。

「イタタタ……それ確か退院した患者がきてお礼としてくれたんだ」

「おお、それは嬉しい限りだな」

見返りを求めてはいないがこういうのがあると活動にもやる気がわくと言うものだ。

「ユウイチ、包丁はまだかー？」

「待ってくれ、どこだ？」

ミサキとユウイチが探している中、座っているシュトロハイムの袖が引つ張られた。 マユミである。

「ねえシュトロハイム……」

「どうしたマユミ、なにかあったのか？」

「このケーキっておいしいの？」

「分かんがおいしいんじゃないか？」

「最近のケーキって『音』がなるのね」

「音？」

その単語にシュトロハイムは顔をしかめた。 シュトロハイムは箱を手に取り、自身の耳に近付ける

よく聞くと一定のリズムで何かがカチコチと鳴っていた。

(これは……?)

嫌な汗が首筋をかける。 箱を恐る恐る開けた。

シュトロハイムは開けた箱の中身を見て絶句した。

そこには白いクリームの代わりに時計が、生地代わりに五本の

筒、そしてその他の機械と繋がった配線。

—それは人を簡単に殺せる悪魔の兵器。

「どうしたんだいシュトロハイム？」

ユウイチとミサキが不思議そうに寄ってきてしまった。シュトロハイムはこの危険を大声で叫んだ。

「ユウイチ！爆弾だ！ 急いで伏せろ！」 爆弾という単語でユウイチは顔を一変させ、ミサキと一緒に床に倒れるように伏せた。

「マユミ！！」

シュトロハイムはマユミを抱きしめ何者からも守るため、できるだけ爆心地から遠ざかるように伏せた。そして次の瞬間。

大地を揺るがすような轟音。同時に空気が一瞬で熱くなり、窓ガラスは全て割れる衝撃が発生する。

「ぐっ！ クソ……」

背中に乗っていた家の木の破片をどかす。

「マユミー！」

抱きしめていたマユミを確かめる。息はある。どうやら衝撃で気絶してしまっただけらしい。

「なんという事だ……」

目に映ってきたのは衝撃で激しく荒れ、燃え盛る炎と黒煙。一つの爆弾で辺りは一瞬で惨状と化した。

「シュトロハイム……」

奥からかすれた声が聞こえ、マユミを抱え行ってみるとユウイチがいた。

「ユウイチ！」

「シュトロハイム、無事か？」

「ああ、マユミも大丈夫だ」

気絶しているマユミを見て安堵していたユウイチだったがユウイチとミサキは体が巨大な破片が乗っかっていた。

「すぐ助ける！　ウオオオオオツ!!」

マユミをそつと置き、破片を気合いの声と共に持ち上げようとするが少しも持ち上がらない。

「クソツッ!」

忌々しげに吐き捨てるが更に不幸が重なる。　屋根が落ちてきたのだ。

「なにッ!？」

落ちてきた屋根は一部だったが人を押しつぶすには十分な大きさであった。

マユミは大丈夫な範囲だがユウイチ達はそうもいかない。　シュトロハイムは身を挺して背中で受け止めた。

「又ウウウウウ!!」

身を挺して防いだのは良かったが屋根の尖った一部の破片がシュトロハイムの肩にズブツと刺さった。

「シュトロハイム!」

「だ、大丈夫かユウイチ……今助けるぞ……!!」

笑顔で背中中の破片をどけたがここで体の異変に気づいた。

（左腕が……）

左腕は完全に糸でも切れた人形のように無気力にだらんと動かなかった。

（マズいぞ……）

状況は危険だ。こうしている間にも炎は勢いを増していく。そしてユウイチ達の上にある破片、両手でも上がらなかったのに片手で上がるわけがない。

「なんのこれしき……」

ここで諦めるわけにはいかない。無理でも片手でも何が何でも持ち上げる。　自分を助けて生きるといふ事を教えてくれた恩人を

殺す訳にはいかない。

だが無慈悲に、ユウイチ達の動きを封じている破片は上がらなかった。

「うう、ユウイチ……」

炎がまた勢いを増し、煙が呼吸を邪魔する。

(このままでは……)

ユウイチは苦しそうにしながら持ち上げようとしているシュトロハイムを見た。そのすぐ近くには愛娘のマユミ。

―男は決意する。

「シュトロハイム、僕が言うことをよく聞いてくれ……」

右腕の力を緩めて、シュトロハイムはユウイチの言葉に耳を傾ける。

「マユミを連れて逃げてくれ……僕らは置いて行っついでいい」

「何を言っているユウイチ！」

突然何を言っているのか、シュトロハイムには分からなかった。

分かっていたとしても当然受け入れるわけがない。

「お前が居なくなったら誰がマユミを守る！ お前は父親だろう！」

これからマユミと家族一緒に過ごすのではなかったのか！」

「ああ、だがこの状況で、マユミを助けられる人間はお前しかいないだ」

シュトロハイムは頭を抱える。膝をつき、悲しむように。

「それに急がなければ、家のガスタンクが爆発する……家から出なければみんなの命はない……」

ガスタンク爆発を危惧したユウイチの判断、それはシュトロハイムにとって悪魔の選択。

「やめろ、止めてくれ！ 私にまた人を殺させるのか!？」

「お前は殺さないよ……救うんだ、マユミを」

炎により部屋は崩壊を始める。

「マユミはまだ五歳だ。ここで死んだらダメだ。死ねばそこまでだけど、生きていれば未来はある！ マユミが……」

身を焼く激痛に耐えながら左腕を伸ばす。

「マユミの未来をお前が守ってくれないか？」

神を……ここまで憎んだことはなかった。そこに神がいたら迷わず殺したい。

こんな自分に、小さな命と未来を託すというのか。

「任せてくれ……ユウイチ……」

涙がこぼれ落ちる。隠すつもりはない。託されたこの思い、守つていかなければならない。シュトロハイムはユウイチの手を握つた。

「ありがとう、マユミに笑顔を……」

握っていた手を離し、マユミを抱きかかえる。しかしここで

「お父様？ お母様？」

マユミは起きてしまった。マユミは起こっている事態が飲み込めない。

「シュトロハイム？ なんてお父様とお母様が危ないことに……」

シュトロハイムは無言だったが焦りがあった。その間にもマユミはシュトロハイムの手から抜けてユウイチ達に近づこうとする。

——マユミの未来を守ってくれ

「え？ 何をするのシュトロハイム……」

突如マユミの動きが止まる。シュトロハイムがマユミの腕をつかんでいた。

「熱いし、早く二人を助けないと死んじゃうじゃないの……」

だがシュトロハイムは無言で再びマユミを抱きかかえる。

だがマユミは 激しく暴れた。

「離して！ 離して！ シュトロハイム、お父様とお母様が……」

涙を激しく流し、暴れるマユミを見て、歯ぎしりをする。

悔しさと悲しさの思いで、シュトロハイムは外へと走り出した。

「お父様——お母様——！」

最後に聞いたのは愛する娘の鳴き声。ユウイチはシュトロハイムの姿を見て自然と笑みがこぼれた。

「頼んだよ……マユミを……」

気が付くと隣のミサキが手を握っている事に気付いた。

「ミサキ……すまない」

「ユウイチさん、私達は夫婦。どこまでも一緒にいるわ、でも……」

ミサキは少し残念そうな顔した。

「マユミの色々な姿を見れないのは残念ね……」

「学校に行く姿、部活の姿、卒業式、そして……花嫁姿」

最後のはユウイチも顔を沈めた。だがミサキは手を強く握る。

「でもシュトロハイムなら……」

「ああ、そうだな……」

二人はお互いに手を握ったまま離さなかった……永遠に。

その後すぐに、爆発が起こった。シュトロハイムとマユミは衝撃に吹き飛び、前のめりに倒れ込む。

「お父様、お母様……う、うう……」

起き上がったマユミはすぐ家へと戻ろうとするが家の惨状を見て、足が止まった。

「マユミ……」

「どうして……」

俯くシュトロハイムにマユミが呟いた。そして振り返り

「どうして約束守ってくれなかったの!？」

——お父様とお母様を守ってあげてね。

「……………」

マユミから向けられた瞳は怒りと悲しみだった。睨みつけられたシュトロハイムは無言になる。

「どうして…………どうしてよお……………」

睨んでいた瞳は顔を俯かせて見えなくなり、蚊のなくような小さい声で地面の草を握りしめた。

「マユミ、ここにいろ」

そう命じたシュトロハイムは真剣な顔で林の中へと走って行った。

「うう…ぐす…うあ……………」

マユミは一人、草を握りしめたままだった。

茂みの奥、三人の男が歩いていた。

「ええ、はい。任務は完了しました。これより帰投します」

男が無線を終えた。この三人は先ほどの爆弾を届けた張本人。

「おい急ぐぞ……………」

「了解」

リーダー格の言葉に反応すると三人は足を早めた。

辺りは薄暗く、木々にはカラスが何羽も止まっていた。

まるでこれから何かが起こるのを見守るように…………

カラスが一声泣いた時、それは起こった。

「貴様、何者だ」

三人の目の前に一人の巨漢が立ちはだかった。

肩には破片が刺さり、右手にはナイフが、口にもナイフがくわえられていた。

「誰だ！」

遠くから見ても感じられる、殺気。赤い眼光は狩人の目だ。

それはシュトロハイムに違いはなかった。

ナイフを構え、脚に力を込め、一気に駆ける。

男達も銃を構え向かってくるシュトロハイムに発砲した。

カラスが、木々に止まっていた鳥達が一斉に飛びだった。

―マユミの未来を守ってくれ

(ああ、守ってやるとも……)

身を貫いた弾丸の傷の痛み耐えながらシュトロハイムはマユミの元にたどり着いた。

「私がアナタをお守りします。例えこの身が砕け、死することがあっても……」

マユミは俯かせていた顔を上げ、涙を拭う。目は赤かったがその瞳は敵を見る目だった。

自分自身に向けられている敵意だとしてもシュトロハイムはひるむこともなかった。

(どんなに嫌われてもいい……アナタの側に居続けたい。そしていつか……)

―いつかあなたにまた笑顔を……

第16話く諦めることの重要性諦め無いことの重要性く

a a a

―そして時は戻り現代へ

「あれから片腕も動きません。この通り、右腕だけでの生活」

よく見ると左腕は今もだらんとしていた。今まで右腕だけ使っていたのは左腕が使えなかったからだ。

「私はその日を境にマユミお嬢様の執事になりました。といっても

執事の知識もなかったため色々と苦勞をしましたが……」

「おお、俺と同じなんだな……」

「出来が違いますが……」

マリアがボソツと呟く。

「私の勝手なことですが……お嬢様を救い出してもらえないでしようか」

頭を下げるシュトロハイム。あのお嬢様思いの執事であるこの

執事が頭を下げるとは思いは強いようだ。

「……人の玄関勝手に壊した揚句、うちの執事さらったり、うちのご主人様泣かせておいて良く言うぜ……」

「私も最善を尽くしたんです。ですがもう……」

「勝手なことほざいてんじゃねえよ」

テルは静かに呟く、先ほどと違う雰囲気を感じたシュトロハイムは頭を上げた。

「マユミの親父が残した願いを簡単に手を尽くしただ、限界だとかであきらめてんじゃねえぞ。親父さんの願い、マユミを笑顔にできるのはお前しかいないんじゃないのか」

目を細めるテルは背もたれにかかり、そのまま続ける。

「そいつは俺でもハヤテでもできやしねえ……お前が今そいつの側

に居てやんなくてどうする?」

そう言うと、テルは急に立ち上がりシュトロハイムに背を向ける。「ま、俺には関係ねえわけだけど? とりあえず馬鹿ハヤテを連れ戻さなきゃなんねえからな。お前のお嬢様はお前がなんとかするこつた」

頭を掻きながら扉を開ける。櫛の扉が閉まるとその場にいたマリアが口を開いた。

「バカはどちらかというところの子なんですがねえ……」

「はあ……」

シュトロハイムは頷く。

「普段からちやらんぽらんで起きてくる時間なんてお昼だったりするんですけど……」

(それは執事としてどうなんだろうか)

と直感的に思ったシュトロハイムだが敢えて口には出さない。

「でも……やる時はやる子だったりするんですよ」

マリアがそう思ったのは今までやってきた結果からの期待。仮にだが、彼は絶望的な頭脳を持ちながら白皇の試験に合格しているのだ。なぜか携わったあの行動力。何をしでかすか全くわからないが、一応期待はしてしまうのだ。

(私が今しなければならぬこと……)

シュトロハイムは再び思う。今自分がしなければならないこと時間が関係を解消してくれるの待つのか、ましてや人に頼るなど以外の外。

シュトロハイムもまた立ち上がった。

「ん? どうしたタマ?」

廊下を歩いていたテルはナギの部屋の前にいた白い生物、タマを見つけた。

「そうかそうか、お前も主人が心配なんだな……」

テルは噛まれぬように静かに近づく。こんなに獰猛な生き物

であるが主を想う事ができる優しいペットだとテルは感じていた。

が、その瞬間。

「気安く話かけんじやねーよ借金野郎」

ふと声が聞こえた。 奴の、タマの口から。

「お前みたいなのが俺に話し掛けるなんざ百年早えーんだよ」

「……………」

テルは目をパチパチさせた。 全国何万人が『虎は喋るか?』というテストを出しても全員がNOと答える。

だがそこに居る虎は喋っていた。

「待たせたなお嬢。 あの借金執事に泣かされたってな、俺が付いてるー」

「フオオオアア!」

「ぐおっ!」

テルは気付けばタマに跳び蹴りを放っていた。 己の幻想、『虎は喋らない』という森羅万象の掟を守るため。

「ありえないあり得ないアリエナイ。 いやいや、アリエナイ」

「いてーな。 お前調子乗ってんじやねーぞ」

タマは頭部をさすりながら体を起こす。

「そうかオレが喋れるのは初耳か? だったらお嬢達にはあんま喋んなよ。 俺の支持率低下になるからな」

「無理だ。 今の日本の政治並みの支持率の低さだからどうすることもできない」

更にテルを驚かせたかったのか目の前のタマは二足歩行になった。

「この小説のマスコットの的な能力に惹かれちったか？ いずれ俺は f i O m a で爆発的な人気を生み出すだろうよ」

タマはどこからともなく薔薇を取り出して口に加えた。ちなみに f i O m a は『よく動く、キレイ』で有名だ。

「いやいや、『よく動く、キモイ』の部類だな」

「俺をどこぞの球団のコアラと一緒にすんじゃねえ！……つとそれよりもだ」

タマはナギの部屋の取っ手に手をかけて開けようとした。

「悲しみに沈んでいるお嬢を救えるのは俺しかいねーからな」
器用にドアノブを回し、開けて、部屋に入る。

「お嬢……アレ？」

中を見るとナギの姿が見当たらなかった。どこかに行ってるのかと思っていたテルだが
(まさかあいつ……)

「テル君、どうしたんですか？」

テルが考えているとマリアとシュトロハイムがやって来た。

「マリアさん、ナギが居ないんです！」

「やはりですか……」

「やはり？」

分かっていたかのようなマリアの台詞にテルは反応する。

「先程SPからの連絡でナギか一人で出掛けたと言う報告を受けました」

「いつも思うんですけど、三千院家のSPは何やってるんですか？
こうもナギの外出を許すとは……」

「今屋敷のSPはケガ人が多いですから、ナギの行動を把握するのは難しいかと……」

「まあ誰がやったかは分かるけど……」

テルがシュトロハイムを見るとゴホンと咳をしていた。

「取り敢えずテル君はナギを追っかけてください。多分ナギは日野寺家の屋敷に行ったと思いますから……」

「アイツ無計画にも程がある……」

「ですので、地図を渡しておきますので宜しくお願いしますよ？」

マリアは手の紙切れをテルの手に押し付けるように渡した。

「……分かりました。後マリアさん、一つ聞いていいですか？」

「何でしょう？」

マリアは神妙な趣で聞くテルの質問を聞いた。

「喋る虎っていると思います？」

「……………」

マリアは一度、テルの額に手を当てて少しだけ残念そうな顔をした。

「ナギを追いかける前に病院に行く事をお勧めします」

「いや！ ちょっ！ そんなミジンコを見るような目で見ないで下さいー！」

テルが慌てているその横で不敵な笑みをタマは浮かべていた。

「誤解ですから！ 決して頭やっちゃったりはしてませんからー！」

「じゃあ私は健闘を祈ってますんで……頭の」

「いや、体を気遣うのは分かりますけどピンポイントに頭とか言わないで下さいー！」

テルが必死に弁解するがマリアは聞く耳を持たずといった感じで去って行った。

「なんてこった……俺は遂にマリアさんに『頭やっちゃった』のレッテルを貼らされてしまった……」

床に手と膝を着け、沈んでいると目の前にはシウトロハイムが。

「テル殿、何をしていますのですか？ 沈んでいる場合ではありませんぞ」

「お前までなんの用でい」

スツと立ち上がるとテルはシウトロハイムに聞いた。

「いえいえ、こんな所で時間を食っている暇はないかと。早くナギお嬢様の所へ行行って下さい。私も後で行きますので……」

先程とは違う雰囲気を感じたテルは首を傾げる。

「俺に任せるんじゃないのかい」

「アナタみたいいな人に任せていてはこのシュトロハイム一生の恥。何よりは私はマユミお嬢様の執事ですから」

ニカツと笑うシュトロハイムはまた何か決意したような瞳をしていた。

それを見たテルは頭を掻きながら背を向け、歩き出す。

「随分な言われようだな、やれやれだぜ……」

「時にテル殿、綾崎

ハヤテに勝つ算段はありますか？」

勝手にしろと言わんばかりに、テルは去ろうとした時に不意にシュトロハイムに呼び止められる。

「……ねえよ」

答えは単純、NOだ。頑丈さなら張り合えるが殴り合いはアツチの方が上と言っている。今回の最大の敵、綾崎 ハヤテをどうするか。

「でしような……ですが真つ向なやり方は避けるべきです」

「と言うと？」

テルが聞くとシュトロハイムは人差し指を立てた。

「あのアンテナをどうにかしましょう。あのアンテナがハヤテ殿を操っているのは分かっています……」

「やっぱりそうかよ……」

テルは溜め息をつく。

「アレは脳に電波を送り、人間の体を司る部位の脳を操ります。アンテナをどうにかしなければ勝機はないでしょう」

「じゃあそのアンテナをぶっ壊せばいいんだな？」

「違います」

「違うのかよ！」

テルがずっこけるがシユトロハイムは続ける。

「電波を当てられた人間はアンテナが無くなっても頭に残った電波があれば体を操る事は可能なのです」

「ホワッツ？」

訳が分からんという顔をするテル。シユトロハイムは軽く溜め息をつき

「分かりやすく言うと、私がハヤテ殿にやられた後にすぐ立ち上がった動く事ができました。あの時私は確実に気絶しています。しかし電波があつたから動けたのです。無意識で」

「なるほど」と、漸く分かった顔のテル。

「じゃあどうすればハヤテは意識を取り戻せる？」

「それは……分からないのです」

「お前……殴っていいか？」

テルは額に青筋を浮かべるのを見たシユトロハイムは慌てて咳払

い。

「あ、あれはマユミお嬢様が一人で作られた物です。私がアンテナについて知っている訳がないでしょう！」

「じゃあどうすんだ？ あのアンテナどうにかしなきゃハヤテは元に戻らないんだろ？」

それを聞くとシウトロハイムは自身の髭を摘んだ。

「実はあのアンテナは不完全なのです。これは私が屋敷にまだ居た時の話ですが……」

「ふむふむ……」

シウトロハイムから語られる言葉をテルは黙って聞いた。今は少しでも情報が欲しい。ハヤテを助ける事ができる情報が

全て聞き終えると、テルは屋敷を自転車で飛び出してナギを追いかけた。

夜の闇が……

街を覆っていく。

全ての闇を……

覆い隠すように……

だから……

「ハハハはどハハだ？」

とても迷子になりやすい。

「あのマユミとかいう奴の所へ行くにはどうすればよいのだ？」

暗い夜道、ナギは一人日野寺家目指して歩いていた。が、道が分からなかったため当然迷子に……

「うう……さぶっ！」

華奢な体に凍てつく風が当てられる。まだまだ季節的には冬みたいなものだった。

「……熱いおでんが食べたい」

この寒さを打ち消す事ができるのは奴しかないと思ったナギ。ちようどお腹も減ってきた。

しかし周りにはおでんの屋台も無ければ財布も無い。

「このままでは凍え死んでしまうのだ！ くそう、ハヤテの奴め！ 私以外の女にホイホイついていきおって！」

不機嫌な表情を浮かべながらそこにあった缶を蹴る。

甲高い音を立てながらアルミ缶はコロコロと転がった。

「まったく、ハヤテはまったく！ 私を置いて遠くに行きおって！」

さつきから怒ってばかりの理由はマユミだ。ハヤテの事を考えると高笑いをしながら自身を見下ろしているマユミの姿が頭にチラつく。

「オッホッホッホ！」

「ガアアアアッ！」

「何一人で叫んでんのお前？」

不意に後ろから声が掛けられた。気づいて振り向くと自転車に乗り、一人熱いちくわを食べているテルがいた。

「なんだお前か」

「なんだとはなんだ。お前探すのに苦労したんだぞ」

「ちくわ食いながらか？」

「いんや、こんにやくとか、はんぺんとか食ってた」

「真面目に探す気あんのかお前……」

ナギは溜め息混じりに呟くと歩き始めた。

「コラ、待て」

ガシツとナギの頭を掴み、動きが止まった。

「離せバカテル」

「バカはお前だ。場所も聞かずに一人で出るとは……浅はかなり」

「うるさいぞ」

顔をしかめてテルを睨みつける。

「仕方がないではないか……ハヤテはいないし、頼れる執事はいないし」

「俺は頼れる執事の内に入っていないのね……」

テルは頭をガクツと下げた。

「それに不安なのだ……このままハヤテが私のことなど忘れて遠くに行ってしまうことが……」

テルは表情を見た。暗く沈んだ顔。空の星眺めて気を紛らわせていたのが分かった。

「実はな……いい情報がある」

「なんだ？」

テルの言葉にナギが視線をもどす。

「実はな……」

「ハヤテ、ハヤテはいるかしら……」

「はい、お嬢様」

ここはマユミの屋敷、部屋にはマユミとハヤテがいた。

辺りには無数の本棚。机の上にも無数の本。医療に力を入れる日野寺家、周りは全て医学に関する本ばかりだ。

「ハヤテ、私の名前は分かるかしら」

自身の意の傀儡と化したハヤテを見据える。ハヤテは口を開いた。

「……ナギお嬢様でございます」

「!!」

ハヤテの至極当然のような答えにマユミは齒軋りした。

「もう下がっていいわよ……」

ハヤテは言われた通りに部屋から出て行った。

「よほど忠誠心が強いよね。前の主人が忘れられないのかしら……」

一人部屋に残ったマユミは忌々しげに呟く。

「やつぱり忌々しいわ、三千院ナギ……」

(私の名前をしっかりと呼んでくれるのあの人しかいないのかしら……)

そう呟くマユミの手には一枚のコインが握られていた。

「シユトロハイムの話によれば、ハヤテは一度もマユミの名前を呼ばないでお前の名前を呼び続けているらしい……」

「そんな、なんで……」

テルの言葉にナギは驚いていた。

「忘れるわけねえだろ。一緒にいた時間は短くてもその間にあるデケエ絆は、例え操られようが断ち切れやしねえんだよ」

ナギは思い出す。短い期間でも自分とハヤテが築いていた絆は固いと。ハヤテが信じているなら自分も信じなければならぬ。そして何より

(私にメロメロなハヤテが忘れる訳がないからな!!)

「まあそんな所だな。　　と言うわけで早く乗れ」

テルは自身の自転車を指差した。

「お前まで付いて来るつもりか？」

ナギはムスツとしながら言う。

「大事なモン取り返しに行くんだろ？　　そのためだったら俺ア何だつてするぜ？　　主殿」

何故だろうかその言葉から感じられた物は安心感だけでなく頼もしさを感じる。

「だから俺を信じろや。　　変な事は考えんなよ」

「分かった。　　信じてやる……だがその前に」

ナギはテルの持っている物を指差した。

「おでんをよこせ！　　腹が減っては戦は出来ぬう！」

ナギはテルからこんにやくやらちくわを貰い食べきると、自転車の後ろに乗った。

「さあ行くぞー！」

「へいへい……捕まってるよ！　　ラ○ディングデ○エル・アクラレー
シヨンー！」

自転車のペダルに力を込め、壊れんばかりに漕ぎ出した。

「んでもって、着いた訳だが……」

ナギが見つめる視線の先には巨大な門だ。黒い檻のような門の前には黒服二人が立っている。

「打開策はあるかテル？」

ガサガサ

「え？ なに？」

ナギが視線を移すとダンボールを被ろうとしているテルがいた。

「馬鹿かお前はアアア！」

「ぐへっ！」

ナギはテルの頭に拳を振り下ろす。

「なにすんだよ！ この作戦が信じられねえのか？」

「目の前に移動するダンボールがあつたら誰だって不自然に思うだろうが！ 信じられるものにも限界がある！」

「お前、ダンボールの有用性をなめんなよ？ 俺はこのダンボールで白皇に侵入できたんだからな！」

「なる程、だから不審者扱いされたのか……」

頭に手を当てて溜め息をついているナギをよそにテルはさらに大きなダンボールを出した。

「今回は俺とお前が入っても大丈夫なよう、スーパーLサイズを持ってきた」

「……どっから？」

目の前に出されたダンボールは確かに二人が余裕で入れる大きさ

だ。

しかし、この大きさは逆に不自然。

「よし、じゃあ行くぞ」

「は？ マジで言ってるのか!？」

「つべこべ言わず被れ」

テルは半ば強引に自身とナギにダンボールを被せた。

「うわあああ！ 暗い！暗い！」

突如ナギが叫びながらテルの執事服を掴んだ。

「お、おい大丈夫かよ……」

「暗いのはダメなのだ！ どうしてもダメなのだ！」

そう答えるナギは本当に怯えているようで暗いから表情は分からないがブルブルと震えていた。

「ああ、悪い」

と直ぐにダンボールを持ち上げる。 案の定、ナギは涙目だった。

「まさか暗いのが苦手とは……意外だな」

「誰が暗いのが苦手だと言った？」

「いや自分で言ってたじゃん」

ここで強がっていても意味がないがナギは涙目で強がってみせる。
なにがあつたかは聞かないでおこう。

「しかし参ったな……これじゃ中に入れん」

こりや参ったと言わんばかりに頭を搔く。 それを見ていたナギは考えていた。

(私が我慢すればいいのか……)

そうしなければハヤテを助け出す事はできない。 そう思ったナギは決心した。

「テル、さっきの作戦で行ってくれ」

「けどお前、暗いのは苦手なんじゃあ……」

「だが私が我慢すればいいのだ。 そうしなければハヤテを助ける事はできない」

「無茶しなくてもいいんだぞ?」

「くどい……私がやると言ったらやるのだ」

ナギの目はつり上がってテルを睨んでいた。 テルは仕方ないといった感じで溜め息をついて了承した。

「んじゃ、いくぞ」

「う、うむ……」

流星に暗闇が苦手すぎた為、ナギは目を瞑りながらテルの手を握ってダンボールの中にいることにした。

ダンボールはテクテクと歩き、徐々に門に近付いていく。

例え怪しがれても

「なんだ?」

「……………」

ピタリと動きを止めて静かにすれば

「なんだ、ただのダンボールか……」

と奇跡のスルースキルで流せた。

(すごい、上手くいっているようだな)

目を瞑っているため実感はなかったが前に進めている事が分かった。

(早く、ハヤテをたすけねば!)

想いの強さに足が早足になる。 テルはバランスを崩し

「お、お前押すな押すな!」

「うわっ!?!」

ダンボールはゴロンと転がった拍子に取れてしまった。

「誰だ!」

門番の男が気付き、テルとナギの姿が完璧にバレてしまった。

「ま、マズいぞ……」

ナギの言った通り、事態は最悪だ。 ここで人を呼ばればそく捕まってしまう。

「何者だ? 怪しい奴だな……」

男が不審な人物を見るような目でテル達を見る。

テルはスクツと立ち上がった。

「いや〜僕達、今日ピザの注文されたんですけど」

(お前それには無理があるだろうがアアア!)

心の中でのみ、ナギは激しく突っ込んだ。

見た感じ執事服の人間をピザの宅配に見たてれるだろうか。

「いや、嘘をつくなよ。ピザ持ってないじゃん。ピザ屋ならピザ出しなよ」

案の定、無理だった。

「仕方ねえな……ほらよ」

と手のひらにはいつの間にかピザが二枚あった。

(だからどっから出した！)

ナギはまたしても突っ込む。男達は驚いたがピザを見て眉をひそめる。

「イヤ、明らかに不味そうなんだけど、ピザが紫になるって何？ 紅芋でも使ったの？ 人殺せるだろコレ？」

「ああ、殺せるぜ？ 死ぬほどの極上の味だ」

「イヤイヤ、ないない」

「取り敢えずここを通す訳にはいかんな」

と二人が門に完全に立ちはだかる。

「だったら……」

とテルは思いつきりピザを構え

「とくと味わいやがれエエエ!!」

男の顔にぶちまけた。その瞬間、ジュウウウという音がしながら男達は卒倒する。

遂には動かなくなった。

「おお、あまりの美味さに気絶したか……」

「いや、どう見ても変だろ！ 明らかに泡吹いてるだろ!？」

「それはあまりの美味さに体が悲鳴をあげてんだよ……ほれ、行くぞ」

「いいのかこれで……」

二人は倒れている見張りを後目に屋敷の扉に辿り着いた。

「さくて、ここっからが本番だぞ」

「この中にハヤテが……」

ナギは自身よりも明らかに大きな扉を見つめる。

「いいか、中に入っても勝手な行動をするなよ？ 初めて来る所は迷

子になりやすいからな」

「お前は引率の先生か!？」

ナギは突っ込みを入れると扉を開けて中へと侵入。

「アリ?」

中で待っていたのは黒服の集団。

「見事にお出迎えされてるぞ……」

ナギは辺りを見渡して状況を確認する。

すると奥にはマユミとハヤテがいた。

「待っていたわよ三千院ナギ。 あなた達の動きは監視カメラで見さ

せてもらったわよ」

マユミは滑稽なものを見るように笑って見せた。

「やはりバレてたか……」

「当然でしょ?」

ナギに対してマユミは笑って返す。

「……油断したぜ」

横では苦い顔しているテルがいた。

「くそっ！ さ…さすが日野寺家だぜ！ よくぞ俺の変装をみやぶったな！」

「マヌケッ！ 一目で分かるわよ！ 客観的に自分を見れないのかしら？」

「あゝあゝ あ！ なんだコラア！ チビがいきがつてんじやねーぞゴラアアア！」

「ふう、ホントに執事なのかしら……」

マユミはテルを見ながら溜め息をついた。

「おい、ハヤテを返してもらおうぞ!!」

ナギがマユミを指差して見る。

「ええ返してやるわよ。私に勝ったらね？」

薄く笑うとマユミは男達を下がらせた。

「付いてきなさい。決着はそこでつけましょう……」

(三千院ナギから敗北を認めさせなければハヤテは私の物にならないわ)

マユミはハヤテと共に部屋の奥へと消えていった。

「ま、待てー！」

ナギはそれを追いかけて中へテルもナギに続いて中へ行く。

「なに企んでやがる……」

そこからはひたすら階段を下に降りていった。周りには沢山のロウソクが灯されており、完全とは言えないが明るかった。

そして最初にナギが階段を下りきって到着。

「ぬわっ！ 暗い！」

そこはロウソクやライトも何もなく、先が見えないほど真っ暗だった。

「思わずナギは頭を抱えてしゃがみ込んでしまう。

「うわ、なんだコリヤ……」

やっと着いたのはテル。同じようにあまりの暗さに驚いた。

「早くこんか馬鹿者ーッ！」

「ぶふっ！」

ナギは取り敢えず声のするほうに適当に頭突きを決める。テルの声が聞こえたと言うことは直撃したようだ。

そして体が地に着く。テルは不思議な感触を手に感じた。

「ん……砂？」

手にあるそれは形は分からないがサラサラしている事が分かった。そしてテルが辺りを探っている時、突然光に包まれた。

上からは無数の照明が照らしている。よく見ると辺りは砂に埋もれており、その砂場から何か逃げ出さないよう木の塀で囲まれている。

「これは昔の党首が趣味で作った闘技場よ」

向かいの方にいるのはマユミとハヤテだ。

「闘技場？」

暗くなくなった事でナギは復活したのか、マユミを睨みつけるように聞く。

「そうよ。ここでは数多くの格闘家達（グラップラー）が血と汗、涙を流した場所なの」

「オイ、まんまバキじゃん……」

テルが突っ込んだがマユミは無視。

「貴方には私の執事、ハヤテと戦って貰いましょう。勝てば私の負けでハヤテをあなたに返すわ」

「なんだと?」

ナギに突きつけられたのはテルとハヤテが戦ってテルが勝利すること。

「あら怖じ気付いたのかしら?」

「ムッ!」

と挑発してくるマユミにナギは簡単に乗ってしまった。

「テル、いけ」

「お前、俺を殺す気か?」

「このままでは私がする前から負けを認めた事になる。安心しろ、

私の思い描いた勝利の方程式は出来上がっている」

「俺は既に蹴り飛ばされる方程式なら出来上がってるけど?」

やる前からこう断言してしまうのは無理はない。

相手はシュトロハイムを倒したハヤテだ。だがナギは気にする素振りも見せず

「お前は実は戦闘民族だろ? 三回ぐらい変身できるから」

ナギは疑うことのない瞳でテルを見つめた。テルは横に手を振る。

「いやいや、俺地球人だから。ギャグでもそんな設定ないって」

それを聞き少しナギは黙ると一言。

「お前はなんだ! なんの為のオリキャラだ!」

「身も蓋もないことをいうな。オリキャラ補正にたよるんじやねえ」

「そろそろ始めたいんだけど……」

二人が言い争いしているとマユミが苛立ちを見せていた。

(ん？あれは……)

テルが一瞬だけ見た物。何か四角い箱のような物だ。

(アンテナを起動するためのリモコンか?)

テルは考える。今できる最善の方法を。やたら賭けに近いがこれにヤマを張ってみるしかない。

(ナギ耳貸せ……)

(な、なんだ?)

ナギは突然耳打ちしてきたテルに戸惑ったがテルは続ける。

(さっきマユミが明らかに怪しいのを持ってた。四角い箱だ)

(箱?)

(ああ、多分リモコンかなんかの類だろ? アレなんとか奪ってこい)

(アレをどうにかすればハヤテは元に戻るのか?)

(確証はないがやってみる価値はある。正直ハヤテとまともにやり合ったら命がゴキブリ並みにあつても足りねえ)

(……分かった。あの四角い箱だな)

一瞬だけナギにも箱が目に入る。形は把握した。

(任せたぜ……)

テルはそう言うとなギの頭に手をポンと置いてハヤテと向き合った。

「ようやく準備ができたようね……ハヤテ、いきつ! ……行きなさい」

一度噛むとマユミは静かにハヤテに命じた。それを聞き、ハヤテはテルと向き合った。

二人の執事は対峙する。周りには不気味な程に静まり返っていた。

「ハヤテ、俺達はいつかこうなると思ってたんだ……」

「……………」

テルの言葉にもハヤテは全く反応しない。マユミは目を細め、高らかに言い放った。

「ハヤテ、そのテルという執事を始末しなさい！」

ゆっくりとハヤテが動き出す。操られた人形のような動きは真っ直ぐとテルの方へ

「さーてかかってこいよ」

(ま、俺は明らかに時間稼ぎだけどな……ナギ、ハヤテ、お前らの絆は簡単に壊させやしねえ……)

テルもまたゆっくりとハヤテに近づく。強き意志を持った瞳はマユミに向けられていた。

例え命燃え尽きようとも、その身が砕け散ろうとも、その身を賭けて、善立 テル、推して参る！

第17話く男には折れてはいけななきがあるく

特にプランは決まっていなき。 どうやって殴るとか、どうやって近づくとか、 どういったタイミングとか、 気にし過ぎるだけで損だ。「どりゃあー！」

最初に繰り出したのは右ストレート。 ハヤテの顔面目掛けて一直線、 ここで決まれば楽なのだが

「やつぱり……簡単にはいかなんだわ」

無計画に考えたストレートは空を切った。 ハヤテは寸前でかわし、 ゆらりとした勢いで距離を詰める。

ドゴツ！ と、 今度はハヤテがお返しと言わんばかりのストレート。 見事にテルの顔面を捉えた。

「あゝ痛い痛い……ッ!?!」

顔を押さえながら数歩後ずさるが痛がつている場合ではない。

矢継ぎ早にハヤテが接近、 今度はジャブの嵐。

「お前、 絶対ボクシング始めろよ。 実は昔どっかで鍛えてたりとかしてた？」

「……………」

無表情なハヤテは特に気にする事もなく、 ジャブ連打。 テルは両腕でガードを固めるがジャブにしてかなりの威力。

こじ開けられそうだ。

「何時までも調子こいてんじゃねえー！」

何度も守りに回っていて苛立ちが募ったのか、 テルは数発喰らう覚悟で渾身の前蹴りを浴びせた。

しかしそれは簡単にハヤテに捕まれ動きを封じられる。

「参っちゃまうな、 ソレ結構マジだったんだぜ?」

その瞬間、テルの背筋を凍らせる程の殺気が感じられた。

「……………」

ハヤテは無表情でテルの足を掴んだまま、右足を一步引いていた。

一目瞭然、何をやろうとしているのかが分かる。

だからこそ、確信はなくとも悟ったのだ。

(来る!! 牽制『フェイント』を仕掛けるでもなく、かつ強力な、シユトロハイムを倒したあの蹴りが!!)

額に一筋の汗が流れた時、ハヤテが左足を軸に回転を活かしたミドルキックを繰り出した。

(南無三ツ!!)

ドゴンツ! と言った轟音。これが指すは直撃。テルは中央から一気に闘技場の木の壁に叩きつけられた。

「バカな……………」

ナギは青ざめている。実際のハヤテの蹴りの威力を見て。

——日常茶飯事、人を蹴る事をしている空手家。そんな彼らの「人」が蹴られた時に吹き飛ばされる距離を想像を遥かに超えるだろう。

「あの距離は車に跳ねられた時の距離だぞ?」

闘技場の中央から木の壁まで少なくとも数十メートルはある。

人間が飛ぶ距離にしては危険過ぎる。

「…………あーマジ痛えなアイツ、手加減無しかよ」

まるで車に跳ねられたかのような衝撃、激痛。

だが、飛ばされた距離に驚いている余裕があるという事はまだ自分が動ける事を確信づける。

そしてなにより、

—あらゆる一撃に耐える体に生んでくれた母……

—あらゆる一撃に耐え、決して折れない心を育んでくれた両親に
……

(感謝しなきゃならねえな……)

顔を覚えてなくても、その魂は確実に自分の中に流れている。その2人に深く感謝していたテルだった。

(この戦いは悪魔でハヤテを奪還すること。勝つ必要はない、時間を稼げればいいんだ……頼んだぜ、ナギ！)

テルは身を起こし、ハヤテを見据える。

不敵な笑みを浮かべながらテルは自身の小さな主の顔を浮かべた。

(テルは時間を稼ぐと言ったんだ。その間にあのリモコンを……)

テルがフルボッコの時間稼ぎをしている間にナギはマユミの所へ向かった。

できるだけ二人のとぼつちりを食らわなかったために避けながら近づく。

(できるだけ不審に思われないように近付かねば……)

マユミは既に目の前にいる。ハヤテとテルに気を取られているのかナギは気付かれなかった。

(あの箱だな……)

マユミはリモコンらしき物をすぐ近くの場所に置いていた。

(これでハヤテを……)

ひっそりと伸ばした手は箱に届いた。が次の瞬間。
「何をしているのかしら？」

ガシツと箱にもう一つの手。マユミの手だった。

「くそう！ 離せ！ それは私のだ！」

「何言ってるの!?! 私が作ったんだから私の物よ！」

ナギとマユミは箱を巡って引つ張り合う。

「渡せエエエエ！」

「離さなあああい！」

実力はどっこいどっこい、勝負は動かないように思えたが

「ふんッ！」

「ヌアアアアッ！」

ナギの手から箱がすり抜けていく。マユミがナギの足を踏んだのだ。

「卑怯だぞー！」

「リモコンを狙って不意打ち仕掛けた人に言われたくないわ
足を押さえるナギをマユミは睨みつける。

あの箱はリモコンで確かなようだ。

(こいつ自分で言ったからな……)

疑問が確信へと変わった。後はテルが時間を稼いで貰えば奪う事ができるが

「そんなに早くケリをつけたいのかしら……」

マユミがニヤリと笑い、箱に付いていたダイヤルらしき物を左から右へ一気に回した。

「地獄を見せてあげる、アナタとあの執事に……」

その視線はテルへと向けられていた。

「なんだ？」

テルは目の前のハヤテの異変に立ち止まった。

ハヤテがピタリと止まり、動かなくなってしまったのだ。

「ナギが上手くやりやがったか？」

テルはナギを探すために木の塀を見渡す。
しかし、その時だった。

変な殺気を感じ、ハヤテに視線を戻すとそこにハヤテは居なかった。

ドゴツ！ という音がテルの体から聞こえた。

「ぐっ……なんだ？」

気付けば体は宙に浮いていた。何も分からず激痛に襲われる。

続けざまに右、左、上、下からそれが全方位から襲ってくる。

「ハヤテの動きが……」

全く持つて見えない。テルに強烈な黒い突風が吹き荒れる。

突風の度にテルを激痛が襲う。

テルは地面の砂に叩きつけられた。

「がはっ……」

腹部、頭部、足部から軋む音。見上げるとハヤテが立っていた。

「な、なんなのだ？」

ナギは驚きを隠せない。ハヤテの動きがマユミがダイヤルを動かしてから急激に変わった。

「ハヤテに送っている電波を最大に強めたわ。これでハヤテは更に容赦なく、相手を倒すマシーンになる……」

マユミが笑いながら地面に伏しているテルを見つめる。

「それでこそ徹底的にね……」

マユミは冷酷な表情でナギを見る。ナギはゾツとした。

「何をする気だ。テルに……」

「だから、徹底的に痛めつけるって言ったじゃない……ほら」

マユミが指を差す方にナギも視線を向ける。

「ハヤテ……」

ナギは言葉を失った。ハヤテは地面に倒れているテルに対して蹴りをいれようとしている。

高々と振り上げられた後ろ足はまるでサッカーボールを蹴るような体制。

「クソツタレ、マジかよ……」

咄嗟に両手を交差して衝撃に備える。ハヤテはそのままテルの顔面にサッカーボール蹴りをお見舞いした。

体がブワツと浮き上がり、激痛と共に浮遊感が気持ち悪く感じた。倒れているのを無理やり起こされた感じがしたからだ。

テルは浮き上がった状態から砂場に着地する。

（ちくしようめ……やっぱり変身能力とか欲しかったな）

びりびりと痺れる両手はまともにも上げる事も難しかった。

（無い物ねだりしても仕方ねえんだ。お前は何が何でも止めてやる！）

テルはハヤテに反撃を繰り出す。愚直だが右拳は真っ直ぐハヤテに向かった。

（届け……）

バキンッ！ と心の中で願うテルに何か音が聞こえた。

いつもと違う鈍い音。

それはテルの右腕からだった。

「う……」

ナギは思わず目を閉じる。テルの腕はハヤテの肘と膝で力強く挟まれていた。

二の腕を確実に挟む、技名「蹴り脚ハサミ殺し」がテルに炸裂した。

「……………痛エ」

だらんとした右腕は力を込めようとしても、今までにない激痛により動かす事は出来ない。

「……………」

意識朦朧とするテルにハヤテは無情にも追撃を仕掛ける。右回

し蹴りが頭に決まり、よろついた所を更にテルの腹部にミドルキツク。

「お前、絶対俺に恨みあるだろ……」

まだ倒れないが事態は酷い。 変な汗が体から溢れ、頭部からは出血。

「あらあら可哀想に、馬鹿な主人のせいであんな酷い目に遭って……」

「わ、私のせいだと？」

「そうよ、アナタが私を怒らせたの。 ちゃんとルールに従わなかったアナタが悪いの」

マユミの一言が重い。 心にのしかかる。

「やめてくれ……」

「死ぬんじゃないかしら、あの執事……」

「う……」

すぐに否定したいがハヤテと対峙しているテルを見て言葉を詰まらせた。

体はボロボロの砂まみれ、何度も地面を転がった証拠。

だらんとした右腕、頭部からの出血、何度も打撃を受けた証拠だ。

「もういい……」

蚊の鳴く声で小さく呟く、とても見てられない。

(どうしてそこまで私の為に傷付く……何度も立ち上がるのは何故なのだ?)

「あの執事を助けたいかしら?」

「……」

笑みを浮かべるマユミは続けて言い放つ。

「負けを認めるの。 地べたに這い蹲り、頭を下げ、『わたくしの負けです』と言えばあの執事を助けてやってもいいわよ?」

マユミは笑みを浮かべながら地面を指差す。

「お前……!」

「別にいいのよ無理して言わなくても? ただ人が一人骸となるだけ

だから」

マユミがそう言う隣でまたしてもテルがハヤテの蹴りで吹き飛ばされた。

テルは立ち上がるが息づかいは今までより荒い。

「止めてくれテル……このままじゃお前、死んでしまうぞ」

またしてもテルは宙を舞う。見てられず思わず瞳を逸らした。

「いいのかしら？ 死んじゃうわよ？」

「くっ……ッ!!」

思わず拳を握りしめた。 ナギもまたプライドが高い、簡単に負けを認めない。

マユミはナギのプライドの高さに漬け込み、痛めつけられるテルを見て悩むナギを見て楽しんでいるのだ。

「……分かった」

「あら？ 簡単に折れたわね」

「私が負けを認めればいいんだな……」

歯を食いしばり、膝をつく。 本来ならば彼女のプライドがそれを許さない。

しかし、目の前の天秤に掛けられているのはいつも腹が立ち、一回は喧嘩する男。

取り返しがつかない事態は起こしたくない。それが『二度と戻らない物』なら尚更だ。

ナギはその苦しみと悲しみを知っている。

「わ、わたくしの……」

眩くナギを見下ろすマユミは勝ち誇った顔。

「ま——」

言いかけた時だった。

「ゴラアアア!! ナギイイイ!!」

怒鳴り声が響いた。 ナギは声の主を見つめる。

「オメエエエ！ 何勝手に諦めてんだアアア！」

続く怒鳴り声はナギの降伏宣言を中止させた。

(どうして立ち上がる……ボロボロになってもなんで……痛いだろ？
諦めるなら早く諦めろ！ 私の為にそこまでするか赤の他人が？)
ナギは心の底から願う。早く倒れろと。そこまでする必要はないと。

それは言葉になつて表れた。

「テル！ もういい諦めろ！ 痛いんだろ？ 死んでしまうぞ！」

「この腑抜けエエエ！ 俺が死ぬか馬鹿野郎オオオ！ ハヤテを取り返すんじゃないのかアアア！」

ナギは顔を俯かせる。確かにそうだ。だが誰かが死んでしまう悲しみは二度と味わいたくない。

「お前は赤の他人だろ!? なんでそこまでする？ 私の執事だからか？ それなら今日でクビにしてやるから逃げろ！」

ナギはついにクビ宣言まで使う。こうでもしなくてはテルは諦めてくれない。

だが

「ふざけんなよ……」

「……………」

「俺がお前の為にやるのは、俺がお前の執事だからだけじゃねえ。ここで俺が折れたら俺の何かが終わっちゃうんだよ……」

ナギは顔をしかめた。

「俺はここで折れちまったら終わりなんだよ。約束果たせない以上に、手からこぼしたら二度と戻らねえような物ができちまったら、命が助かったとしても俺は死ぬんだよ、死んでんのと一緒なんだよ……だからな」

テルは歯を食いしばり言い放った。

「俺はテメエ(自分)貫くためにやってんだよ！ お前も最後まで潰れんなよ！」

力強い言葉にナギは流れる涙を拭いた。

「バカテル！ 早くリモコン奪ってやるからな！」

途端に笑顔に戻り、マユミと向き合った。

「さあ……よこせ！」

「なっ!？」

マユミは不気味な笑みを浮かべながら近付いてくるナギに後ずさる。

「よこせー」

「ひっ!」

何故かナギの両手が怪しい動きをしている。それを見たマユミは恐怖を感じた。

「マユミお嬢様……」

「あ……」

ふと聞こえたのは懐かしい声。その声にマユミは振り返る。

「お前は!!」

マユミはその人物を見て小さく呟く。

シュトロハイムだった。

「シュトロハイム……」

「はい……」

マユミの呟きにシュトロハイムは頷いた。

「何をしに来たの？ アナタと私はもう関係ないのよ？」

マユミの言葉にシュトロハイムは目を細めた。

「お嬢様、もう止めましょう。こんな事をして、何が手に入るといえるのですか？」

「あら、いっちょ前に説教？ 執事を辞めて口だしできる立場になったのかしら?」

シュトロハイムの言葉をマユミは薄く笑って返した。

「簡単に約束を破る人間、人を平気で殺せる人間が私に意見を言わな

いどっ?」

「お前! コイツの事情を知らないで……」

会話を割って来たのはナギだ。

「コイツはお前のために……」

「ええそうよ。 その場所が場所で私しか救えなかったのも知っているわ」

「分かっておられるのなら……なぜ」

シュトロハイムは静かに言う。

「当たり前よ。だからと言ってアナタのお父様とお母様を殺した罪は消えはしないわ……」

シュトロハイムは顔をしかめる。

「お前、我が儘すぎるぞ……」

「なによ……」

間に入って来たのはナギだ。

「お前が何度コイツに痛い目逢わせようと憎み続けた所で死んだ親は戻ってこないんだぞ」

「あ、アナタに……」

マユミは今までより怒りこもった眼をナギに向けたて怒鳴った。

「アナタに何が分かるのよ！ 目の前で両親が死んでいくのを黙って見て、一緒に居ることができなくなった悲しみが！ 子供だから信用できないとかで周りからは一切認めて貰えない、次第に自分も周りが信じられなくなっていくこの苦しみが！」

「わかるさ……」

「……え？」

ナギの返しにマユミはキョトンとする。

「私も幼い頃に親が死んでな。顔も母のしか覚えておらん……」

ナギは思い出すのは辛そうだが続ける。

「周りも私の遺産目当てだから私も人が信用出来なかった……周りが敵だったよ」

幼いながら命を狙われる日常はナギの心を狭くするものだった。

「だが今は、沢山の奴らがいる。ハヤテがいて、マリアがいて、馬鹿だけど心配してくるテルがいる……私は色んな奴に支えられてると思ったよ」

「だから忌々しいのよアナタは……ッ!! 私にはそんな人は一人もいない……一人も!!」

そう吐き捨てるマユミにナギは一言。

「いるだろ……すぐ近くに」

マユミは何故か、思わずだが振り返る。そこにはシュトロハイムがいた。

ずっと憎み続けていた男。

けど私の為に涙を流しながら両親との約束を守るために私だけを助けたのも知っている。

けど、私はそれを許してはいけないんだ。

「シュトロハイム、何をしに来たのかももう一度聞かせて」

その言葉にシュトロハイムはゆっくりと頷いた。

「お嬢様を救いに参りました……」

「もう執事ではないのに？」

そうだ。許してはいけない、そうしなければお父様とお母様の無念がさまよったまま……

「お嬢様に辞めさせられても、私の心はこの身が減びようとも執事ツ
!!」

その強い決意は変えられないのね。そう私も変えられないの。
もう戻れないと分かっているから、そこまでの仕打ちをした私に

戻る場所なんて在るわけがないから……

「なら、止めてみなさい！」

「なっ！」

ナギは驚く。マユミは振りかざしていたのはリモコン。

ナギが止めに入るがむなしくもリモコンは地面に叩きつけられ粉々になった。

「正常に解除しなかったからハヤテはあの状態のまま永遠に動き続けるわよ」

「なんだと！」

ナギはマユミに近づき、肩を掴む。マユミは静かに続けた。

「……解除法はあの状態でハヤテを気絶させる事」

「え？ お前、なんで……」

自ら方法を明かすマユミにナギは驚きを隠せなかった。

「知らない……」

そう呟いたマユミだった。

取り敢えずナギはテルに報告する。

「殴りやあいいいのか？」

「まあそうだが……」

「簡単だ。それは卵を片手で割るくらい簡単だ」

「いやソレ難しいだろ」

テルは首を鳴らし、左腕をブンブン振り回す。

「テル殿……」

上から何かが降って来たのかと思うと、シュトロハイムだった。

「私も手伝わせてください」

「……構わねえけど、アイツかなりヤバイよ？」

テルが意味ありげに言うがシュトロハイムはニカツと笑って返す。

「二人ならどうですか？ ウィンナーを一から作るくらい簡単だと思いますが……」

「肉を詰める所で俺は挫折する」

溜め息をつくど頭を左手で掻いた。そしてニヤリと表情を変える。

「やるぜシュトロハイム。最後だからな？」

「当然です。お嬢様の為にも私は負けませんが」

「いや俺も負けないけど」

「いや私も負けません」

「……………」

お互いはにらみ合うと視線をハヤテに映して対峙。

ハヤテ奪還戦、その最後の幕が上がる。

第18話 くむかつくお前にアツパーカートく

「いいか？ 俺が引き付けてる間になんとかしてハヤテを殴るなりなんなりとして気絶させろ」

「分かりました。 足止め、頼みますよ」

テルとシュトロハイムはハヤテと対峙していた。 作戦の確認である。

シュトロハイムの場合、破壊力抜群のパンチがあるのだがテイクバックが大きすぎるため避けられてしまう。

要するに溜めが長いという事だ。 だがそれでも十分動作は速い、相手のハヤテが速すぎるのだ。

「俺右腕使えないからな、やれる範囲は限られてるからな」

「ご安心を……私はアナタと違い有能ですので」

「何気にヒデえ事言うねえ……」

折れた右腕を手で押さえながらテルは吐き捨てるように言った。

自身の力の無さが痛いほど実感させられる。

それはある意味、歯がゆさである。

「さあ、ハヤテ殿……終わりにしましょー」

両手を広げ、高らかに言いかけた時だった。

その時、黒い突風が吹いたのである。

ドコンツッ！

「ん？」

風が通っていったかと思うと後ろから轟音。

振り返るとシュトロハイムが壁にめり込んでいた。

「オイイイイ！ お前偉そうな事言ってる割には一撃じゃねえかアアア!!」

「……………」

壁にめり込んだシュトロハイムは物を言わぬ木偶とかしていた。

白目をむいて完全に動かない。

「お前出オチって言葉がお似合いのキャラだわ……」

頭に手を当てて嘆いたテルだが、ハヤテが目の前に現れる。

嫌な汗が流れ出した。

「や、止めないかいハヤテくん？　これ以上君の残虐さが表れると全国の男性ファンと女性ファンから嫌われちゃうよ〜」

左手でストップを呼び掛けるも、ハヤテは止まる事知らず。またしても一瞬パツと消えると突然現れ、体にキックが当たった。

「ぐおおあ……」

今度蹴られた所は水月。　大体胴体の中心に足のつま先が突き刺さるようになり込んでいた。

因みに水月、当てられるとマジで痛い。

「……………」

ハヤテは無表情で蹴り足を引き離すとまた消えて今度は後方から「がはっ……………」

振り返る時には既にハヤテは見えず、見渡している内に真横から

「ぐ……………」

止まらない猛打の嵐。　そう、どんなに一撃が強力でも当たらなければ意味がない。

どんな敵が相手でも疾風の前では無力同然。

「ハア…………ハア……」

(マジで損な役だな…………)

地面に叩きつけられた体を左手を使い、立ち上がろうとする。

今まで一番荒い息遣い。　危険信号赤灯火。　急に車は止まれない。

「……………」

ハヤテはまだ動くかとするテルの頭に足を乗つけた。　その上から押し潰さんばかりの力が加えられる。

(マジ…………一発殴りてエ…………)

屈辱、それ以外の何者でもない。　怒りが体を支配し始めるが、不意にナギの姿が目映った。

―何かを待っているような瞳。

―今は自分を信じて、必ず勝つと信じている瞳。

ならば主の為に執事ができる事はただ一つ。

諦められつかよ……

「……!!」

ハヤテは自身の右足に圧力を感じる。目を向けるとテルが左手で掴んでいた。

ハヤテは左手を振り払うと後ろに飛び乗った。

その間にテルは体制を立て直し、立ち上がる。

ふらつきながら立ち上がる体はボロボロだ。出血も酷い、多分次また食らえば落ちる。

ならば賭けるしかない……

(こくなつたら玉砕覚悟で……)

そう心で呟いた瞬間だった。

――違つがあああうツツツ!!

「うん？」

突然の声が聞こえた。聞いた事がある声……

あの時だ。伊澄を助けに行こうとした時に聞こえた声。

何故だかは分からないが、テルの頭がぼーつとしてきたのを感じた。

その時は時間をも忘れ、

辺りが真っ白になる。

「違つがあああうツツツ!!」

怒鳴り声が聞こえた。懐かしい声が

目に映るは高い天井。辺りはただっ広く、茶色の板が床の上に自

分は仰向けになっていた。

「何度言えばわかんのよ？ お前不器用すぎ！ 体だけ強くても意味

ないんだから！」

自身に向けて罵声を浴びせるのは一人の女性。顔は分からない。「理に叶った動きをしなさい？　そうすれば色々な事に対応できるわよ？」

そう言うとき女性は近づいて倒れている自分を起こすと自分の頭に手をのせた。

「お前は一度覚えたらなかなか忘れない子だから、記憶が飛んでも忘れはしないかもね」

ポンポンと叩くと女性は続けた。

「それでも忘れたら私が誰かにぶん殴ってもらいなさい？　シヨツク療法で解決よ」

自分はその時やたらと不平不満を叫んでいた気がする。主にその女性に対して……

女性は手をまたのせた。

「それが出来ればお前の約束が守れるような力になるかもしれないね」

その時、女性の顔をまた見た。相変わらず顔は見えないが

「でも無茶はしちやいけませーん」

笑っているような感じがした。

その手は優しく優しく、頭の上に乗っていたのを覚えている。

「また……」

視界が元に戻る。ハヤテを見据えるとテルは構えた。

「訳わかんねーこと言いやがって……」

この記憶はなんなのだろうか、聞こえたら理解し難い事ばかりが耳に聞こえてくる。

だがその声を聞く度に背中を押されるような感覚になるのは何故だろう

「理に叶った動き……」

目の前に集中だ。全身から力を抜き、目を細める。唾を飲み込

むのは痛みを一時しまい込むため

もう眠くなんじゃね？ というくらい力を抜いた。

その時、ハヤテが消えたのが分かる。

(あれ?)

ザシユ！ ザシユ！とハヤテが駆けて突っ込んでくる。まるで

短距離選手のような走り方で

(コツチに来てんのか?)

真っ直ぐ見据えるラインは確実に真っ正面だったがハヤテはギョツと進路変更。

目が自然とハヤテを捉える。

ハヤテは少し速さにアクセントをつけると片足になった。

蹴るのか？ 蹴りだな？

目を見開いた瞬間、自然と体は避けていた。

蹴り脚は空を切り、目標の意外な動きに一瞬だけ驚愕する。

「……………」

ハヤテが気付いた時、テルは既に懐に潜り込んでいた。

「殴り殴ってくれたな……………」

額に青筋を浮かべながら左腕を構える。

ハヤテは避けようとするが右足が完全に伸びきってしまった。ため戻すには一瞬の時間を要した。

一瞬の時間が完全な隙。

「喰らいやがれ……………」

左腕に力を込めると怒り気味に呟く。

「ア○ソリユート・パ○ーフオオオオオス!!」

テルの拳はハヤテの顎にアップカーブ気味に打ち上げられた。

ハヤテの体が少しだけ浮かぶが、まだ終わりではない。

一撃で終わらせるにはまだ一撃は軽すぎた。ハヤテは空中で右足を大きく振り上げ、踵落としを仕掛けようとする。

「……………」

ハヤテは見た。テルの口元がニヤリと笑っているのを決して追い詰められた人間がする顔ではない。

「なら、本当に重い一撃ならどうだい？」

ハヤテは瞬時に前方に視線を向ける。殺気を感じた。

その殺気の元はシュトロハイムである。

既にテイクバックが完了している。溜めは終わっているのだ。

後は撃ち出すのみ。

「……!!」

ハヤテは避けようにも空中では身動きが出来ない。タイミング的にも遅すぎた。

簡単な理屈だ。

体重×握力×スピード、イコール……

「又アアアア！」

破壊力ツ!!

ドゴツ!と顔に拳がめり込んだ。

直撃。ハヤテの体はまるで垂直に置いて発射されたロケット花火のように飛ばされていった。

壁は轟音を立てて破壊され、塀はぼっこり穴が開いていた。

ハヤテは動かない。

「テメえ最初っから狙ってやがったな？」

「おやおや、バレていましたか？」

「変な芝居打ちやがって、俺が動き止めてなかったらどうするつもりだったんだよ……」

テルが頭を掻きながら言うのとシュトロハイムはニカツと笑って返した。

「私はアナタならやれると信じていましたので……」

「お前に言われてもな……」

遠くではナギが喜びながらハヤテの方に駆け寄っていくのが見えた。

「終わった……」

マユミは一人、状況を理解すると闘技場から上へと繋がる階段に足をかける。

(さよなら……で、いいのかしら)

一瞬だけシュトロハイムを見るとマユミは笑みを浮かべて今度こそ階段を上って行った。

「あれ？ 僕は一体……」

ここでハヤテが漸く目を覚ました。

「ハヤテ！」

「うわつと……お嬢様？」

ナギはハヤテに泣きながら抱きついた。ハヤテは訳が分からず唸る。

「そうだお嬢様、シュトロハイムさんに僕は何をされたんですか？」

テルはん？と耳を疑う。　どうやらアンテナを付けられてからも覚えてないらしい。

「という事は散々俺を殴った事も？」

「あれ？ どうしたんですかテルさん？ 凄い傷だらけですよ？」

「腕を折ってさらに足蹴にしたことも？」

ゆらゆらと近づくテルにハヤテは普通に笑いながら返す。

「いやあ、なんだか僕、体が痛いんですよね〜特に顔が……」

「一発じゃ足らんわアアア！」

「グホッ！」

テルはそのままハヤテの上にまたがりマウントポジションを取る。

「おんどれえええ！ 千発ぐらい殴らせろやアアア！」

「バカテル止めろ！」

ナギがテルを必死に止めに入っているがテルは叫び続ける。

「マユミお嬢様？」

一方シュトロハイムはマユミを探していた。

だが辺りにはマユミの姿は見当たらない。
シュトロハイムはなにか嫌な予感がした。
なにかマズい、とんでもないことが起きようとしている。
執事としての勘がそう告げていて、シュトロハイムは不安感を胸に
闘技場から走り去った。

「ん？」

テルがその異変に気付いて振り返ると走っているシュトロハイム
が目に入った。

「何やってんだアイツ……」

「とう!!」

「ぐはっ!?!」

よそ見をしているテルにナギのドロップキックが炸裂した。
テルは地面を転がってナギと喧嘩再開。
しかしテルも嫌な予感を感じていた。

○

「お嬢様あああ!! 何処ですかあああ!?!」

階段を駆け上がり、屋敷中をシュトロハイムは探し回っていた。

「私も……で何年も執事をやっているが相変わらず広い……」

愚痴をこぼしつつもその表情からは焦りが感じられた。今のマ
ユミは何をするか分かったものではない。今思えばリモコンを壊
した辺りからすぐ気づくべきではなかったか。

「この嫌な予感に気付けないとは……ん？」

悔やんでいるとシュトロハイムは立ち止まった。辺りに漂う異
臭、いや、どこかで嗅いだ事がある臭いだ。

煙の臭い……

「ま、まさか……」

シュトロハイムはぞつとする。顔からは血の気がうせた。今

起ころうとしている事態に対して……

(間に合ってください!!)

その思いを胸にシュトロハイムは二階へと続く階段を駆け上がっていった。

二階、マユミの書斎。その部屋にはたくさんの医学に関する本と資料が保管されている。全てはマユミの父、祐一が集めたものだ。

その医学の空間が今、赤い炎を纏い、黒煙で満たされつつある。バチバチと炎は床、カーテン、天井へと伝ってその脅威を拡大させていた。

その中にぽつんと一人立つ少女が居た。マユミである。

「お父様も、よくここまで集めたものね……」

若干、呆れたかのように笑うと煙を少し吸ってしまったのか咳き込んでしまう。

(全ては私がやってしまったこと……色んな人たちに迷惑がかかってしまったわ)

マユミは揺らめく炎を見つめ、自身の過ちを思い出す。多くの無関係な人たちを自身の実験台として発明を作ったこと。他人の大切なものを奪ったこと。自身が恨んでいた少女が自分と同じ苦しみと悲しみを抱えていたこと。

(これが私のケジメ……お父様、お母様、今すぐそつちに……)

瞳を閉じ、激しくうねる炎の中へ身を任せようとしたときだった。

「お嬢様!!」

聞きなれた声に、マユミは一瞬動きを止め、振り返る。そこにはシュトロハイムが息を切らしているのが目に見えた。

「あら、シュトロハイム早いね……」

「いや、これでも随分かかりましたとも……それよりも早まったこととはしないで下さい!!」

「だから説教しないでよ! 私は取り返しのつかないことしたの! 命をもって償うのが当然でしょ!」

「謝りましょう！　まだ間に合うはずです!!」

「間に合わない!!　どうしてあなたはいつも私にお節介焼くのよ!？」

「お嬢様の執事なのだから当たり前でしょう!」

その言葉にマユミは齒軋りをした。

「どこまで貴方は馬鹿なの・・・」

「・・・」

そう言うマユミの表情を見たときシュトロハイムは言葉を詰まらせた。泣いている、マユミが泣いていた。

「私なんかには構わないで自由に生きればよかつたじゃない・・・最初
はたくさん憎んでたけど段々貴方のしたことが正しく思えてき
た・・・でもそうするとお父様とお母様が浮かばれない・・・だ
から今までひどく当たって追い出すようにしたじゃない!!」

これまで何度も執事のことを辞めるようなことを言われてきた
シュトロハイムはその真実を知った。全ては自分のためであった
こと、マユミは自分の父と母の十字架を背負って背負って何もかも自
分で抱え込んでいたのだ。

「私なんかのために貴方の人生が縛られるようなことはないの
よ・・・」

「違いますぞお嬢様!」

「え?」

シュトロハイムは考える。　お互い、蓄えてきたものがあつた。

ならば自分も明かすしかないであろう。　ここまできてやっと聞く
ことができたマユミの本音。

「私はユウイチの意志を受け止め、貴方の執事になることを決めまし
た。　しかし、私は不安だったので・・・」

自分の本音、この八年間で自分が思つた本音を

「ちゃんと貴方の執事としてやれるかどうか、義務感にとらわれてい
ました。　ユウイチの最期の願い、義務として受け入れ、忠実に使え
たいと思つたのです」

荒い息をしまいこみ、シュトロハイムは続けた。

「ですが貴方は以外にも朝起きてくる時間は遅い、嫌いなものは私に

気付かないように残すし、それらを注意すると必ず執事を辞めなさいといわれました。まあそれらを正すのもまた執事としての使命だったのですが……」

「う……」

悪態を突かれたマユミは涙をぬぐう。

「私も気付いたのです。これが家庭……ユウイチもこんな思いだったでしょう。マユミ様と過ごしていくうちに執事としてではなく、一人の娘……家族と見るようになりました。私には普通の家庭は分かりませんが、この心は今も変わりません……」

人を殺すことを生業とした人生、その中でシュトロハイムの心は人をいかに殺すか、その技術、心得だけを追求して生きてきた。

しかしそんな自分に新しく生まれたもの。ユウイチやマユミと過ごして来たことによつて人としての心が生まれたのだ。

「使命とかではない、本当の家族のように私は貴方を支えていきたいのです……だからここで命を投げるのは止めて下さい……」

「シュトロハイム……」

シュトロハイムの本音にマユミは瞳からあふれ出す涙が止まらなかつた。何度拭おうともこの流れる涙はなかなか止まってくれない。ほんとに信じていいのだ。この男だけは、家族と思つていいのだ。

「もう一度私の執事になってくれる？ シュトロハイム……」

その言葉にシュトロハイムは歯茎を見せるほどニカツと笑つて見せた。

「なんども申し上げますが、私はマユミお嬢様の執事ですよ……さあ戻りましょう」

そう言い、マユミに近づいたシュトロハイムは手を伸ばした。その時である。

「むっ!?!」

突如として二人の間を隔てるかのように天井が落ちてきた。ガラガラと上から大量の物が落ちてくる。全て火が燃え移っていた。

「お嬢様あああ!!」

「私は大丈夫よシュトロハイム……」

叫ぶシュトロハイムに反応する声。それは瓦礫の中からだった。奇跡的にマユミの体は押しつぶされるのを避けているが、瓦礫同士の作り出した小さな空間に護られているという事は抜け出せないことも表していた。

「クソッ！ どうすれば良いのだ……」

この状況、下手に自身の拳を使えば下敷きになっているマユミの命が危ない。

「ぬうううー！」

シュトロハイムは巨大な瓦礫をどかすために手をかけた。だが片腕では当然上がる訳が無い。

（これが私の犯した罰なの？）

必死に瓦礫をどかそうとしているシュトロハイムをかすかな隙間から覗きながらマユミは自身の運命を悟った。このままではシュトロハイムも巻き添えをくらう。

「シュトロハイム、私のことは放っておいて早く逃げなさい!!」

「な、ふぎけないで下さい!!」

「ふぎけていないわ……マジよ」

フツと笑うとマユミはそう返した。

「その言葉に従うことはできません!! たとえ執事としても!!」

「私は貴方に生きていてほしいの……私の分まで生きて
!!」

「そんな……」

一瞬、シュトロハイムの視界があの日と重なった。彼女の父、ユウイチ達を見殺しにしてしまった自分の無力さを知ってしまったあの日と……

最期にしてマユミが発したのは悲痛な願い。主としての言葉なのかどうかは分からないが聞き入れるべきなのだろうか。

「いきなさい……早く!!」

マユミは目を閉じた。早く逃げてほしい。死ぬのは一人で十分。自分の罪で誰かが犠牲になることはごめんだ。

「誰ができるかアアア!!」

だが、この男・・・シュトロハイムは諦めようとはせず。

「どうして・・・」

「お嬢様の犯したことが罪だというのなら、その犯した罪は私の罪と同じなのです!! かぶった罪ならばお互いで分け合うか、私が全て背負いますとも!! どこまでも一緒に行きますとも!」

彼女のためにできること。それはただ願いを聞き入れることではない。一緒に居ることだ。すこしでも彼女の不安を和らげてあげたい。そんな願いが彼にはあった。

「もちろんこのシュトロハイム、諦めるつもりは毛頭ありません!!」

強がるシュトロハイムだが状況は芳しくない。必死にどかそうにも一向に瓦礫が持ち上がる気配が無いのだ。

(このままでは・・・)

シュトロハイムが焦りを感じたその時である。

「おう、どうした? 火災発生ですかコノヤロー」

勢いを増した炎を駆け抜けて一人の男がやってきた。テルだ。

「テル殿・・・」

「なんかしんどそうな顔してな手伝うぜ?」

炎の熱であふれる汗を拭いつつ、テルは左腕を瓦礫にかけた。

「あ、貴方まで! どうして関係の無い貴方までもが私を助けようとするの!?!」

マユミは隙間から叫んだ。敵である自分を助けるという意味が

理解できなかつたのだ。

「そんな事言われてもな・・・うちのお嬢の頼みなんだから仕方ねえだろ?」

テルはめんどくさそうに答えた。

「三千院ナギが・・・?」

「おうよ、火の手が上がっているのが分かったらすぐ俺に『助けに行け』と頼まれてな、ハヤテは消防車呼んで消化活動中だ」

「なんで・・・貴方たちは」

マユミは呆然としてしまった。この男だけならず、三千院ナギと

その執事までもが自身を助けようとしている。

「うちのお嬢様の願いだったら致し方なしなんでね。 ついでにこの機を境に友達にでもなつてくれや、趣味は合わないかもしれないがな」

「それはいい。 私も執事として主の友人が増えることはうれしい限りですな」

シュトロハイムが嬉しそうな声で言った。

「マユミお嬢様、こんなにも私たちの為に動いてくれる人がいるのです。 人生もまだ捨てたものではありませんぞ」

「・・・うん」

ポツリと呟いたとき、マユミは涙を流しながら笑顔になっていた。そして顔を隠し、

「ありがとう・・・」

そう呟いたのだった。

「さーてさつきとコイツをどかさねえとな・・・」

「全くですな。 お嬢様の窮屈さを考えると急がねば」

二人は同時に動かせる片腕を瓦礫に持ち上げるように手をかける。

テルが口を開いた。

「アンタどいてろって、年寄りなんだからすこし後先考えろって」

「そういう貴方も考えてはいかがでしょう？ 腕一本ですよ？」

「アンタも一本しか動かせないだろうが」

「いやいや」

シュトロハイムがそう言うのと二人は互いに目を合わせてフツと笑う。

「二人合わせれば二本だ」

同時に目を見開き、全身の力を込めて瓦礫を持ち上げる。 瓦礫は一気に持ち上がりマユミの姿がはっきりと見えた。

「シュトロハイム・・・」

「お嬢様、いきましよう・・・」

差し伸べられたその手をマユミは何も言わず握った。 笑顔で。

「ちよつと心配して来て見れば……これはどういう事なの？」

日野寺家正門、そこにたたずむ一人の少女がいた。桂 ヒナギクである。 やっぱりテルの隠し事が気になり自ら調べにきたのであった。

しかし、日野寺家に来てみればどうであろうか、屋敷からは火の手が上がり、消防車が消火活動を行っている。そして何より

「ここはどこ？ 私是谁？」

「く、来るな！ ブルーベリー色のつぶらな瞳をした悪魔が襲ってくるううう!!!」

正門の目の前にいた門番らしき男二人が変な事を口走っていたのだ。

その原因は誰かさんのピザを食べたことによつて起きたことなのだとは彼女は知る由も無い。

「あれ？ ヒナギクさんじゃないですか」

「ハヤテ君!? 何してるのバケツそんなにもつて……」

ヒナギクが声のするほうに目を向けると大量のバケツを一人で持つハヤテの姿が目に入った。

「消火活動中なんですよ。 といつてももうすぐ火も消し止められませんが……」

屋敷の方も随分と火が消されてあと少しといつたところだ。

「なんだヒナギク来てたのか」

「あら、ナギまで……三千院家が居ると言うことはまさかテル君もここに來てるの？」

ナギの姿にヒナギクは不思議そうな顔をする。

「まあアイツは今救助活動中だ。 もう少しで戻ってくるだろう……あ、來たぞ」

ナギが屋敷の入り口を見ると中からテル達が出て來たのが分かつ

た。

「ごめんなさい……」

「私からもこの通りです……」

火の手も無くなり、ひと段落した場でマユミとシュトロハイムはナギに向かって頭を下げていた。

「全くだぜ……この俺の状態を見ろ。　体は傷だらけ、腕は骨折。賠償金を億まで追求できるぞ」

その瞬間、ナギがテルの右腕を軽く肘うち。　テルは叫びながら地面を転がった。

「たしかに……この私にとつともなく迷惑をかけた礼はしてもらわなくてな……」

「……」

近づくナギにマユミは顔を俯かせ、言葉が発せられない。　自分がしたことを考えると悲しくなった。

がしつと肩をつかんだ。　マユミはその瞬間、ビクツと反応し、顔を強張らせる。　ナギが口を開いた。

「お前、ポ○モンできるか？」

「へ？」

ナギの言葉にマユミは思わず間の抜けた声を上げてしまう。

「私とバトルをしないかといっている。　最近ハヤテが強すぎて困っているのだ。　他にいい対戦相手がいてくれれば私の経験値も大いに稼げるのだが……」

「許してくれるの……？」

その言葉にナギはうーんと唸り、黙って返した。

「まあ、誰にでもそう想ってしまうこともあるだろう。　間違いもあるだろう。　だが、その間違いを正してくれる奴がいるのだから。」

私はもうお前のことは許している」

「お前ほんとに十三歳？」

テルが横でボソツと突っ込んだ。

マユミは顔をまた俯かせる。　今度は顔から笑みが生まれていた。

「ポ○モンバトルがしたいと言ったわね・・・」
「ん？」

マユミは顔を上げた。

「私のユ○ノオーに勝てるかしら？」

「なんの！ 私の力○リユールが蹴散らしてくれるわ!!」

「いや！お前ポケモン持ってたのかよ!？」

テルが自然と突っ込むとシュトロハイムも割って入ってきた。

「私も持っていますよ。 使い手はケツ○ング、ちなみに既に新発売される黒と白は予約済みです」

「くそ、出遅れたぜ!! まだ俺は予約どころか！ ニ○テンドーD○すら買っていないツツツ!!」

「話題についていけないわ・・・」

ヒナギクが一人呟いた。

「ヒナギクさんも始めてはいかがですか？ ピ○チュウならヒナギクさん気に入るかもしれませんよ？」

「いやいや」

ハヤテの言葉をテルが否定した。

「ヒナギクが好きなのは多分、サルだ。 あのパワーとスピードまさしくコイツそっくり・・・」

「ふん!!」

その瞬間、テルの頭にヒナギクの鉄拳が炸裂した。 ガツンと音を立てて、テルは地面に倒れる。

「ポ○モンは分からないけど、とてつもなく不愉快なことを言われたのは分かるわ・・・」

「ま、そんなこんなでもう帰るぞ。 いくぞハヤテ、テル」

ナギがそう言うのとハヤテは帰ろうとしたがここで異変に気付く。

「あれ？ テルさんが起きませんよ?」

「え?」

それに反応するのはヒナギク。

「あれ? なんか赤い液体がいつぱい出てきて、なんか体がビクンビクン動いていて、なんかこれ以上この文章では表してはいけないよう

な程に危険な状態ですよ!!」

「そこまで追い込んだのは誰だか私は知っているが」

「わ、わたし?」

ヒナギクが自身を指差す。

「いや、ほとんどは・・・」

「誰ですかお嬢様?! そんなことをした人は! 僕が成敗しますよ!!」

「「・・・・・・・・」」

マユミとナギとシユトロハイムは深く、ため息をついていた。 テル、哀れなり。

ドスンッ!

地面に叩きつけられた。 地面というか、正確には床だった。

「いってえ〜」

体中を見るとあざだらけである。 何度も何度も投げられた証拠だろうか。

投げられた? 誰に? 決まっている。

「少し動きが良くなったかと思えばまだまだだね・・・」

自分を投げていたと思われる人物が近づいている。 女性だ。

あの時、夢に出てきたと思われる女性だ。

「どうしたのかしら? ただ突っ込んでいくだけじゃ意味が無いわよ」

笑いながら挑発するようなセリフを言い放ち、自分の怒りを買う。

また自分はその女性に突っ込んで行った。

「はい、馬鹿の一つ覚え」

女性は一瞬だけ体をずらすと足を引っ掛けて自分の姿勢を崩させる。

前のめりの体制になった自分の足に手をそつと添え、真上に押し上げた。

パァンッ! と音が響く。 体が一回転し、床に叩きつけられた音

だ。

「まったく、こんな安い挑発に乗るなんて……」

仰向けになって倒れていると女性は膝を着いて顔を覗かせた。

「鬼……」

ポツリと嫌味をこめてつぶやいて見せると女性は笑った。

「鬼で結構。でもこれでも成長したものだわ、関心関心」

女性はパンパンと膝を叩いて見せた。接し方の態度と言葉からにするにアメとムチが大好きなのだろうか、この人は……

「うふっ……じゃあ今日はここまでにしてお昼にするか」

一瞬だけまた笑い、自分の額に手を乗せた。

やっぱり何回も思ったことだがこの人の手は優しい。暖かくてどこか安心するような……

(アレ？　なんか誰かに似てる？)

心の中でそんな疑問が浮かんだ。顔は相変わらず見えないけど

面影が何故か見たことがある。

プツンと何かが切れるかのような音がした。それと同時に真っ暗になっていく……

「……」

瞼の裏から目が少しだけ動いた。どうやら気を失っていたらしい。あちこち体が痛む、すごい痛みだ。

ここで少し違和感を感じる。何故だかテルは自分の頭に何かが乗っかっている気がした。夢で感じた暖かく優しい手にどこことなく似ている。

「あれ？　マリアさん？　俺って生きてます？」

瞳を開けると額に手のひらを乗せていたのはマリアだった。

「ええ、生きてますよ？　私が死神に見えますか？」

につこりと笑うとそつと額から手を離れた。この時、テルは夢の中で感じた疑問が解決するかのよう

「なるほど……」

と呟いた。

「どうしたんですか？ 頭でもやりましたか？」

不思議に思ったマリアがテルにさりげなくひどいことを言いつつ聞いた。

「なんつーか、変な夢見てて……変な鬼の女が俺を投げ飛ばすんですよ。 何回も何回も」

その時の感覚といたら思い出したくも無い。 夢であつたとはいえ痛みと感覚が妙にリアルだった。

「知り合いですか？」

「分かんないですよ。 でも夢の中の俺はなんかその人と毎日そういうやり取りとかしてたんですかね？ 飯とかも食ってたそうっす」

マリアはへえといった表情。

「取りあえず、一歩前進という形にすれば良いんじゃないでしょうか？ 少しでも記憶らしきものが戻ったんですから」

無理して思い出す必要は無いのだから今はそれで良いかもしれない。 なんにせよ、今回彼がいなかったらナギとハヤテはずっと離れ離れのままだった。 それを繋ぎ止めてくれた、そして今はゲームして遊んでいる日野寺の令嬢との関係を間接的に直したのはテルだ。

(この子にはそういう力があるんでしょうか……)

「まあ、そういう事なんですかね……あ、あともう一つ」

テルが何かを思い出したかのように続けた。

「その人すんごいマリアさんに似てたんですよね、そっくりとかじゃなくて雰囲気か」

この時、マリアの中で何か切れる音がしたという。

「テル君？ その女性と私と同じってどういう意味ですか？」

「何って、言葉のとおりですよ」

「へえーじゃあ、私はその人と同じ鬼なんですわね？」

不気味な笑みを浮かべるマリア。 テルはようやく気付くが時既に遅し。

ただひたすら、テルはその日にマリアに謝り続けたのだという。

前夜の出来事から一日明け、テル達はいつも通り白皇学院に足を運んでいた。はつきり言っていて昨日の今日なので体は疲れていたが

「テルさんどうしたんですか？ そんなに疲れた顔をして……」

「お前はどうかんだよハヤテ……」

テルはケロッツとしているハヤテにいささか殺意が芽生えたという。

結局、ハヤテには今回の事件を深く説明することは無かった。

全てはシュトロハイムにやられたということにしてある。ハヤテが操られていたと言う事は内緒だ。そうした方が彼の為なの

だろう。本来真面目過ぎるハヤテがこの事を聞いたら辞表を出しかねない。

そう考えたテルの配慮だった。

「しっかし、この解決の仕方はストレスが溜まんなく」

「え？ 何がですか？」

ハヤテは何を言っているか分からない表情。隣にいたナギはため息をつくとき口を開いた。

「まあそんな事より、教室に入らないとホームルーム始まるぞ」

「分かってるって……」

そう言いテル達は教室の中へと入っていく。中に入るなり突っかかって来た人物たちがいた。生徒会三人娘である。

「おやおや、テル夫君。ギプスなんかして授業をサボろうという精神は私たちも歓迎するぞ？」

「あはく☆ テル夫君もサボタージユ♪」

「新手的厨二病か？ 舐めるなよテル夫君。私もその気になれば隠された右腕の力を解放して……」

美希と泉、そして理沙が順に言った。

「どうでもいいけどテル夫って何だよ。なんか一文字違うだけでネットにいそうじゃねーか」

そんなことを言っていると今度はヒナギクが

「ちよつとさっきの会話聞こえたわよ。あんた達、サボりもいい加減にしなさい」

「いや待てよ。その『あんた達』には俺も含んでるのか？」

「違うの？」

「んな訳ないだろうが！ 何でこう人の話を聞かない……疲れるだろうが」

「お前が言えた事ではないがな。 全く持つてうるさい連中だな……ハヤテ、席に座るぞ」

「そうですね」

ナギとハヤテは顔を見合わせて席へと向かう。 それと同時に勢い良く教室のドアが開いた。

「ほらさっさと席に着きなさい、日曜が明けた休み気分が抜けない生徒たちよ」

「おーい雪路先生、顔色悪いぞ。 どうしたんだ？」

「いやあく私もちよつと眠くてね、休みだからって夜遅くまで飲んじゃった」

「お姉ちゃんが一番休み気分抜けてないじゃない!!」

ヒナギクの声が教室に響き、少しばかりホームルームに入るのが遅れた。 いつも通りの光景。 ここからまた説教、授業、そして執事の仕事が始まるのだ。

テルは席に着くと動かない右腕を机の下にやり、左腕で頬杖をついてダルそうにその光景を遠い目で眺めて呟いた。

「……眠い」

彼の多忙な一週間がまた始まる。

第19話く血のつながりよりも大切なものく

——12月29日。年越し近しのこの時期に九十九里浜を散歩していたら変なのをみつけた。最初はゴミかと思ったら、よく見るとワカメやらコンブがやたらと巻きついていていたガキだった。

——その夜、ガキが目を覚ましやがった。俺はラーメン屋の仕事が終わって、そいつを看病していた時だった。

「オッサンだれ？」

——そのガキの第一声。聞いてみれば自分の名前も記憶も覚えてないらしい。

「腹が減った……なんかないのか？」

——ガキのくせに、命の恩人に対してずいぶんな口を聞くガキだった。俺は仕方なくラーメンを特別に作ってやった。営業時間外なのによくやるな俺は……

「ウメエ……」

——当たり前だ。この道五十年、伊達に麺とばっかにらめっこしてねえよ。その日あいつは三杯のラーメンを食いやがった。夜働く俺の身にもなれってんだコノヤロー。

「ごちそうさん……」

——ガキは楊枝を勝手に取り出し、口の中を掃除してやがった。このヤロー、一回ぶん殴ってやるか っと思っていた時だった。

「ありがとよ……助けてくれて……」

——ガキが礼を言いやがった。とんだ礼儀知らずな奴だと思っていたが、ガキは続けやがった。

「ラーメン、上手かったぜ……なんか礼をしなきゃならねえな……」

——その先は……なんて言っただっけな、思い出せねえや。年はあんまとりたくねえモンだ。その後からだな、急にラーメン屋で働きたいって言い出したのは、もしそれがあいつの言っただけだっけって言うんならあのガキは迷惑だけをかけてねえじゃねえか

——とんだ厄介者だったよ。

お昼時。多くのサラリーマンや従業員の人間たちが休憩を兼ねて腹の中を満たそうとする時間帯。ここ、ラーメン辰也もそれなりの客が居た。

「おい辰屋さん、とんこつと醤油ラーメン頼むよ」

「あいよ」

彼の名は辰屋(たつや) 次郎(じろう)。この「ラーメン辰屋」の店主。今年で70になる。

「そういえば辰屋さん、この前雇っていたあの子供、本当に辞めさせちまったのかい？」

「ああ、追い出してやったよ。いつまでも不祥事起こされたらたまったもんじゃねえ……」

辰屋は頼まれたラーメンを静かに置くとただ黙って答えた。

「でも大丈夫だったのかい？ あの子、聞けば住む所も何もない身寄りのない子だったんだろ？」

客の言葉を聞きながら辰屋は自分の厨房に戻っていく。このラーメン屋には元から一人だ。

「……知らねえよ。あいつなら大丈夫だろ」

皿を洗う水が静かに流れる。客の男はそんな辰屋の姿を見て呟いた。

「俺が思うに、あんたとあの子……怒鳴られもしたけど二人が一緒にいるところを見ていけば、なんてこと無い、ただの『親子』に見えたよ……」

「……」

店主は黙って、流していた水を止めた。そして何事もなかったかのようにスープの仕込みに入る。客の男は続けた。

「辰屋さん、あの子と一緒に居たときのアンタはすげえいい顔してたよ……」

「ケツ……散々店の迷惑掛けていっただけじゃねえか……あのガキが居なけりゃ、店とあんたら客の食中毒被害も無くなるってモンだ。だから追い出してやったのさ」

忌々しげに吐き捨てる辰屋。　だが客の男はそれを見て静かに言った。

「辰屋さん……俺は知ってるよ。　前からこの店にタチの悪い地上げ屋が来てるって、無茶な立ち退きを要求する連中がよく来るって、他にも付け込まれた借金があつて経営も不味いんだって」

「……………」

「辰屋さん……もしかしてアンタ、それであの子巻き込まないために……………」

「そんなんじやねえよ……………」

客の男の言葉を辰屋は否定した。　そして、心の中で続ける。

(どっちにしろあのガキは戻ってこねえ……………これで良かったのさ)

第19話　血のつながりよりも大切なもの

晴天。雲ひとつ無い青空が広がる中、善立　テルは一人歩いていった。　今回は執事の仕事で外に外出しているわけでも無く、ましてやただサボっているわけでもない。　彼が向かう場所はこの前まで世話になっていたラーメン屋である。

(せっかくマリアさんからもらったお暇だ。　あのジジイめ、店休みだったら只じやおかねえぞ)

懐から飴を取り出し、口の中にほおる。

(そういえばそろそろだよな……………)

何か思い出したのか、テルは少し歩くスピードを速めた。　そしてその後ろで……………

ササササササササ！　とテルを追う三つの影。

「拙いんじゃないですかマリアさん……………」

「なにがですか？」

電柱に隠れていた三人のうちの一人であるハヤテがマリアに聞く。

「だってこれ、れっきとしたストーカー行為ですよ？　今はまだバレてないですけどバレたらどうするんですか？」

「心配するなハヤテ」

そういうのはこの中になぜか参加しているナギだ。

「我々は今一人の執事の秘密に迫る重大な任務についている！ それにこういう風にスニーキングミッションを一度はやってみたかったのだ！ お前もそうだろハヤテ！」

「いや、別にそんな事はないですけど」

なにかと理不尽なことをいうナギにハヤテは黙って答えるしかなかった。 ナギはさらに続ける。

「それにあの馬鹿テルだぞ？ そう簡単に気づく奴ではあるまい……」

「でも、ラーメン屋に行つてどうするんでしょうか？ 前にはもう一度行くと言っていただけでしたし……目的がわかりませんわ」

マリアは小声で呟く。 大きな声ではテルがこちらに気づいてしまふからだ。

「さあ……執事の仕事でも辞めて、また働かせてもらうのではないか？」

「そんな……テルさんが……」

ナギの言葉にハヤテは言葉を詰まらせる。 同じ仕事仲間として、互いに苦労を分かち合える友が消えてしまうという寂しさからだった。 ナギはそんなハヤテを見て一言。

「だ、ダメだぞハヤテ！ リアルでそれはダメだからな!!」

「あの、お嬢様……何を誤解しているんですか？」

（本人はどう思ってるのでしょうか……まさか本当に辞めてしまうのですか？ テル君……）

ひたすら歩くテルの背中をマリアは黙って見つめていたのだった。

「ふく、昼時が終わったか……」

場所はラーメン辰屋に戻る。 お昼時が過ぎ、客足がすっかり途絶えてしまった。

その昔、ラーメン辰屋は特別なサービスなどには拘らず、味一筋のラーメン屋である。そして多くのサラリーマンや様々な人々の愚痴やその話に付き合ったりと人々に好かれていた店だった。しかしこの時代。

そう上手くはいかない、あちこちに大きな店が立ち並び、味以外の事に勝負するラーメン屋が現れ始めた。当然、味一つの取り柄であるラーメン辰屋は置いていかれる。時代の変化を大きく痛感させられた。

しかし、それでも店の暖簾を下ろさなかったのは五十年間続けてきた自分の仕事に対する誇りと今は亡き妻と子の約束だった。

「今じゃ全く見る影もなしだな……」

辰屋はがらんとした店内を見渡して呟く。過去にはこの時間帯なら少なからずとも客が入ってきたくらいだ。

朝早くから仕込みをし、暖簾を上げ、朝来る人、昼来る人に自分の魂でもあるラーメンを出し、夜は客との愚痴に付き合い、眠る。この繰り返しだった。

辰屋は一人時代の寂しさを嘆いていた。

「ハツ……五十年間守ってきたこの店には俺やお前、そして客たちによつて守られてきたんだ。だが、今となつちやあお前も客も誰も居ない……」

一人、今は亡き妻の名を呟き、その昔の光景を頭の中でフラッシュバックさせていた。その時である。

「まあまあ、簡単に終わつちやあ困るんだけどねえ」

突如、店の中に入ってくる人物。辰屋はそれを見て「チツ」と舌打ちした。

「店終わらす前に俺たちに金を払ってもらわなきゃなあ」

びっしりとした黒スーツ。キザな顔立ちや渋い顔、傷を持つ者、凶悪極まりない男たちが店内にずかずかと入り込んできた。

「誰が店終わらすって言った？ そんな気はサラサラねえ」

辰屋は強面集団に動じることなく言い放つ。集団の中の一人が

笑いながら返した。

「だったら他人が作った借金でも返してくれや。それができないんならこの店売り飛ばすっていったなあ」

「金は返してやる。だから今日は帰んな……」

辰屋はただ静かに、怒りに耐えながら返した。

「それは無理だわ。こちらにも限度ってモンがある……」

男たちはさらに店の中へと入っていく。その数は六人。

「それに……もうここらで御開きでもいいじゃないですかい？　こんな小つさい店、無くなっても誰もなんとも思いませんわ」

ドカツと椅子に座り、テーブルの上に足を乗つける。店内は今にも何かが起きそうな雰囲気だった。

「な、なんかとんでもない事になってますよマリアさん……」

「ええ、まさかこんな事になっているとは……」

「くっ！　マリアよ、あのバカテルはどうしたのだ？　何故あいつを追っていた私達がラーメン屋にたどり着いていて、テルの姿が見当たらない！」

ラーメン屋の窓からハヤテ、マリア、ナギはラーメン屋の中の光景を目の当たりにしていた。

しかし、そこにテルの姿が見当たらない。一番そこにいなくてはならない人物が。

「あのお爺さん、このままだと危険ですよ！　助けないと！」

ハヤテがナギに慌ただしく言う。

「確かにそうだな……ハヤテ、いつでも行けるよう準備を——」

(テル君、一体なにをやっているんですか……)

マリアは心の中でテルのやって来るのを願っていた。

「……とつとと帰れっつんだよ、この溝鼠が」

男達が高圧的な態度でひたすら迫るが辰屋は絶対に屈しない。いや、それ以前に彼の怒りは限界のはずだ。客が座るべき席に脚をのっ

けられる。こうも使われてラーメン屋の店主として黙っていられたかった。

その辰屋の言葉に男もついに痺れを切らしたようで、すたつと椅子から立ち上がると頭をボリボリと搔いた。

「自分の立場をわきまえない奴は痛い目に遭わなきゃ分からんらしいな」

ドスの聞いた言葉を発すると、首を動かし合図を送る。すると男たちが前へと歩み寄ってきた。

（ハツよ……五十年間、守ってきたこの店も……どうやらここまでらしい）

辰屋は近づいてくる男達を前に自分の人生の終わりを悟った。

（だがな、俺は最後まで守らせてもらうぜ……それが店主としての最後の仕事だからよ……）

——じゃあなクソガキ……

この場にはいない人間、最後に自分が追い出した少年を思った。その時である。

「お、オイ！なんだテメエ！」

外のほうから男の声が聞こえた。

「ガキはすつこんでろ——つて聞こえねえのか!？」

男の脅迫じみた静止を無視し店内へ入ってくる。辰屋はその人物を見て驚愕した。

「て、テメエは……」

死んだ魚のような瞳、気に食わない面。辰屋が忘れるはずもなかった。

善立 テル その人である。

「く、クソガキイイイ！ 何で来やがったがったアアア!!」
(なぜ、なんで戻ってきた。 お前には巻き込まれて欲しくねえんだよ。 こんな古い先短いジジイの為に前前の人生を無駄にさせたくねえんだよ!)

「……………」

テルは男達の間を顔を伏せながら黙って歩く。

「おいテメエ！ 誰だごらア！」

男達がテルに怒号を浴びせるがテルは聞こえてないかのように辰屋の元に歩く。

そしてテルは辰屋の目の前にある椅子に腰掛け、肘をつき、指と指を交差させて辰屋と向き合った。

「よう、クソジジイ。 まだくたばってねえようだな」

テルはニツと笑うと辰屋に久しぶりの言葉としてはあまり不適切な言葉を言った。

「そういう聞いている訳じゃねえんだよ！ 何で戻ってきたかって聞いてんだ！」

辰屋の言葉にテルは頭を掻きながら呟いた。

「なあに、約束を守りに来ただけさ……………それよりもラーメン出せ」

「約束ってお前……………」

「はい、テルさん。 醤油ラーメンです」

「うおっ!? お前、誰だい！」

テルの元に一杯のラーメンが出されり辰屋を見ると横にはハヤテが厨房でラーメンを作っていた。

「て、テル? まさかお前記憶が……………」

「馬鹿やろう、まだ戻ってねえよ。 だが……………」

驚きの表情の辰屋にテルは続ける。

「自分の名前と俺がやらなきゃならないことを思い出しただけさ」

じつと辰屋はテルを見つめる。外見は変わってはいない。ム力つく。いつでもぶん殴ってやりたい気分だ。だがなんだろうかこの違和感は……

「つてかなんでハヤテがいるんだよ」

今更になつて気付いたのか、テルはハヤテを見る。ハヤテは一瞬ドキッとしたが

「い、いやだなあテルさん、執事には神出鬼没のライセンスがデフォルトで備わっているんですよ」

「俺はそんなドッキリにしか使えないようなライセンスはいらねー」

「テメエ、いつまでも喋ってんだ！」

テルとハヤテの会話に男の怒号が割り込んでくる。今にも殴り掛かってきそうだ。

「あとなハヤテ、残念だがこのラーメンー」

テルはとことん男を無視する。余りにも無視されたのが限界だったのか、男は遂に殴りかかった。

「無視すんなやテメエ!!」

ガシャン！ と何かが割れる音が響く。辰屋は目を疑った。

男が殴りかかった時、テルはラーメンを持ち、殴りかかった男の顔面に丼が割れるほどぶちまけるのを見たのだ。

「……………」

男は白目を剥いて気絶している。そしてテル手を払うと首を慣らしながらハヤテに言った。

「残念ながらハヤテ、そのラーメンは俺が注文したのとは違エーな。

俺が注文したのはやたらとアホな、なんでも一人で済ましてカッコつけようとしてるバカなジジイのラーメンだ」

「クソガキ……お前エ……」

「俺が知ってないとも思ったのか？ あんたの店に客足が減っていたのは単に時代が変わっただけなんかじゃねえ、コイツらが妨害してたのさ」

テルは男達の方をクイクイッと指した。

「お前、そこまで……なんで……」

そこまで知っていないながら、なんで来たのだとその思いで一杯の辰屋にテルは背を向けながら返す。

「約束覚えてつか、このクソジジイ」

約束。恐らく、あの時だろうか？ 助けた後にガキが言った言葉。

ようやく思い出したぜ。

「なんかお礼をしなきゃならねえな」

——たしかアイツはその後に笑いながら言ったんだ。

「この恩は絶対に忘れはしねえ……あんたのこの先の人生、短いだろうが、どんな事からでも俺が護ってやるよ……」

——そうだ。こう言ったながきのクセに生意気なこと言ってたっけか。

「こ、この野郎！ テメーら、全員でやっちまえ！」

味方がやられたのを見た男が合図を送ると他の男達が一斉に迫ってきた。

「あのテルさん、どうしますか？ 実はラーメン結構作って余ってる

んですけど……」

ハヤテがラーメンを両手に構えながら言う。　テルはやれやれと
いった表情。

「しようがねえな……じゃあアツチの不躰なお客様に食べさせるとするか」

「はいー！」

ハヤテは頷いて二人はラーメンを構える。

その瞬間、男達の動きが凍り付くように止まった。　男達の視線の先には悪魔のような笑みを浮かべて目を赤くぎらつかせながら男達を見つめるテルとハヤテの姿があった。

その一瞬を見逃さず、二人はラーメンを持って男達の距離を縮めると勢い良く、顔面にぶちまけた。

4人の男達が一気に倒れる。

「よく聞けクソジジイ、確かに俺達は血の繋がりはねえがよ……そんな目に見えるモンよりでっかくて大事なモンがあるじゃねえのか？」

「少なくとも……」とテルは付け加えて続ける。

「あのラーメン食った日から、俺はアンタを親父と思ってんだぜ！」

テルは辰屋に向けて大声で叫ぶ。しつかりと耳に聞こえるように、忘れさせないために。

(ガキが……言うようになったじゃねえか……)

戻ってきた男の成長を辰屋は嬉しく感じていた。

「おーいハヤテ、弾(ラーメン)の心配はするな！　私達が作っているからな！」

辰屋が物思いにふけっているその横でマリアとナギはラーメンを作っていた。主にマリアが作ってナギがなんかラーメンにかけている。

「つてアンタら誰だよ！後俺のラーメンを弾扱いするな！」

「ハヤテ！パス！」

「オイイイ！話聞けこの野郎オオオ！」

ナギは辰屋の言葉を聞かずにハヤテにパスした。ハヤテはそれを受け取ると向かってくる男達にぶちまけた。

「ウゲツ！なんでこのラーメンはネバネバしてんだアアア！」

「熱い！熱いイイイ！ 臭エ！マジイイ！」

男達は顔に苦痛の表情を浮かべながら気絶した。

「ナギ、一体何を入れたんですか？」

マリアは隣で腕を組んでいるナギに恐る恐る聞いた。

「隠し味にちよつとくさやと長芋な……健康的だろ？」

(テル君第二号がここにいますわ……)

マリアはそう思わずにはいられなかった。

「て、テメエら……こんな事してただで済むと思うなよ！」

男のリーダー格が言い放つ。がもはや威厳もなにも無い。

「何言ってるんだか……明らかにお前らの営業妨害だろうが。普通に訴えてやるぞコノヤロー」

テルは男の前に立ち。堂々と返した。男は一步下がると悔しげ

に呟いた。

「テメエ……一体何者なんだ？」

「俺は……そうだな」

「いえいえ、テルさん。『俺』じゃなくて、「僕達」ですよ」

「まあそうか……俺達は」

ハヤテの一言にテルは言い直して声を揃えて言い放つ。

「通りすがりのただの執事だ！覚えておけ！」

言い放った言葉に男はクソつと毒づく。

「おおー。カッコ良すぎるぞハヤテエエ!!」

ナギは腕を高々と挙げて歓喜の声をあげていた。

「クソつ、だったらこの借金、どうしてくれるんだ！払えるもなら払ってみろ！」

男は勝ち誇ったかのように叫ぶ。確かに営業妨害の方は解決できても実際ある借金は消えてはいないのだ。コレを解決しない限り、奴らは何度もやってくるだろう。

「だったらその借金、俺が肩代わりしてやる」

「ハア!？」

男と辰屋が間の抜けた声をあげた。

「おいガキ！勝手なことやってんじやねえ！」

「ずかずかと詰め寄る辰屋。しかし、テルは辰屋に向かって言う。

「俺は約束は護る。絶対エ護る。つーか護らせろ」

「バカやろうが……」

(こんな老いぼれなんか知らんぷりしろってのに……お前って奴は)

「バカかお前は？」

辰屋のセリフに続くように割って入る一言。

「ナギ……」

「お前が払えると思っているのかこのバカテル」

「バカじゃねえし、俺は絶対エ払うし」

「だったらどつからその金をだすのだ？お前の経済力ではたかが知れてる。全く何も考えない奴だな」

ナギはふうとため息をついた。

「放っておけ……」

「だがそんなバカな奴、私は嫌いじゃないぞ。　オイ、そのハゲ」

ナギはリーダー格の男に言いつける。

「だれがハゲ散らかしただア！」

男はナギに怒鳴るがナギは表情を崩すことなく続ける。

「その借金、私が肩代わりしてやる。　額を見せろ額を」

男はナギに借用書を見せた。子供が見たら予想もできない額だ。後悔させてやろうと思ったのだが、ナギは受け取ると紙をパシツと叩き

「なんだこんなものか……マリア！」

パチンと指を鳴らすとアタツシユケースを持ったマリアが前にでてきた。

「どうぞ」

男の前まで歩き、ケースを差し出す。　男が開けると中には札束があった。

「全額返済です♪」

笑顔で言うマリアに男はただ驚くしかなかった。

「お、お前ら何者ンだ？　一瞬であの額用意するとは……」

アタツシユケースを抱えると男はニヤリと笑った。

「わかったよ。　お前ら引き上げるぞ！」

その言葉に仲間には不満と怒号の声をあげた。　その反応に男は頭を掻きながら

「うるせえな、金返せば大事な客だろうが」

その言葉を最後に男の仲間達は倒れている仲間を起こし、渋々去っていく。

仲間達が帰っていくなかで男は不適な笑みを浮かべる。

（ここ）までされて黙ってられるかってんだ！　終わった後でも店に迷

惑かけてやる！)

なにがなんでも後悔させてやる。といった表情で店から出て行った。なんと器量の小さい奴か。

しかし、男達の笑みも束の間だった。店から出て来た男達はピタリと目の前の光景を見て足を止める。

「な、なんだデメエら……」

男達の目の前にはおびただしい数の人、人、人。怒りの形相で睨む者。または箒や棒などの武器を持っている者。

先頭の男が口を開いた。

「アンタらか……この店に毎回毎回営業妨害してた奴らは」

「へ？」

間の抜けた声。それもそうだろう、話し掛けている男は立派に整った髭にサングラス、プロレスラーな筋肉、体長は二メートル近くあった。彼から出される威圧感は恐怖に近い。

「このラーメン屋は俺の学生時代の思い出の店よ。潰させるわけにはいかねえな……」

「俺達みたいなサラリーマンの愚痴をあんなに節介やいて聞いてくれる店主、なかなかいいぜ！」

「俺のランチはここって決まってるんだよ！上司の豪華なランチなんかクソ食らえ！……このラーメンが一番なんだよ！」

「……二度とこの店に近づけねえようにしなきゃならねえな」

筋肉質の男が拳の関節をパキパキと鳴らす。

その後はどうなったかは想像はつくだろう。何があったかを聞くのは野暮というものだ。

「アイツ等はお前が連れてきたのかクソガキ……」

一同が歓喜の雄叫びをあげているなかその光景を見ていた辰屋はテルに尋ねる。

「俺は一人にだけ言ったつもりだったんだがなあ……」

倒れている椅子を立て直し、テルはドカッと座り溜め息をついた。

「良かったじゃねえかジイさん。こんな店でも忘れないでみんなから好かれていてよ」

「お前……」

「まあ、そういう事だな。これで俺が執事としてアンタの店に来るのは……もう終わりだ」

「て、テルさん……そんな……」

まるでもう二度とここに現れないという口振りにハヤテがテルに言うがテルは「ただし……」と付け加えて続けた。

「今度は客として、息子として来てやるよ」

テルの言葉に辰屋は驚く。

「いいのか？ お前はそれで……血の繋がりも無いんだぞ」

「つたく、さつきも言ったけどよ……」

頭を掻きながらもテルは辰屋と向き合った。

「血の繋がりがなんだ？ そんな目に見えるモンより見えないモンの方が俺にとつちや大事なんだよ……」

血縁など関係無い。少なくとも、血の繋がりよりも確かな絆がここにはある。この店を訪れる客達、そして今回来てくれたテル達。絆とは広く、そして深いものだ。

「なら言わせろよ……」

テル達が帰ろうとしていた時、背後から辰屋が呟いた。その言葉を聞き、テルは背を向けたまま聞く。

「また来いよ……このバカ息子が」

テルはその言葉を聞くと背を向けたまま一言。

「あばよバカ親父。うめえラーメン出さなかったら承知しねえぞ」
「そう言い残してテル達はラーメン屋を後にした。」
「……………」

段々と見えなくなっていくテル達を辰屋は眺めていた。

（ハツ、見てるか？こんな俺を親父って呼ぶバカな奴がいたぞ……………血は繋がってねえが関係無エって……………こんな俺は幸せもんだなあ……………）

辰屋の頬に何かが流れた。とめどなく流れる冷たいが暖かい。

「アレ？辰屋さん、泣いてるんですか？」

顔を見られたのかサラリーマンが声を掛ける。辰屋は顔を上に、空を見上げた。

「バカやろ……………こりゃ新しいスープだ」

「そりゃあ随分と……………しよっぱそうな、嬉しそうなスープだねえ」

その後はみんなで後片付けをして営業再開。店主辰屋の顔には今までになかった笑顔が見られるようになったという。

「テル君、本当に良かったんですか？」

夕方の帰り道、マリアがテルに聞いた。

「何がです？」

「あのラーメン屋でまた働かないで執事の仕事をとった事です」

「何を言うかマリア……………」

と急にナギが会話の中に入ってくる。

「このバカテルだぞ？その内ラーメンで死人が出るようになるぞ」
無きにしも非ずの可能性を言うナギにテルは顔をしかめて一言。

「そう言えばなんでみんなついて来たんですかねえ？」

その言葉を聞いた瞬間、ナギはテルから離れ、ハヤテの手を掴んだ。
「は、ハヤテ！ さっさと帰るぞ！」

「そ、そうですねお嬢様！ 僕帰って早く夕食の準備をしなきゃいけませんし」

そい言うのとハヤテはナギを抱えて爆走。

「おいコラー！ 待ちやがれ！」

そう言っている間にもハヤテの姿はどんどん見えなくなっていく。
加速装置でも付けているようだ。

(また……置いてくれました)

マリアは一人自分の扱いについて呟いた。

という事は帰り道はテルとマリアの二人つきりだ。

(テル君はああ言いましたが、自分の本当の親が見つかった時はどうするのでしょうか?)

ふと疑問が浮かぶ。彼の探す両親が見つかったとする。テルはどうするのかラーメン屋の店主を父親と呼んでいられるのか。

マリアは意を決して聞くことにした。

「あの、テル君……」

「なんですか？」

「もし……もしですよ？ 両親が見つかって記憶も戻ったらテル君はあの店主さんを父親と呼びますか？」

「……………」

テルは空を見上げて少し考えると静かに返した。

「何も……変わりはしませんよ。もう俺らの間には溝も誤解もありません。喧嘩をすることがあっても記憶が戻っても両親が見つかったも俺はあの人を父親と呼ぶつもりです……あと忘れてもらっては困りますが」

テルは笑みを浮かべるとマリアを見て言った。

「俺にとつて、ナギやハヤテ、マリアさんは家族ってことにしてるんで」

「あはは、私はなんででしょうか？」

「いや、マリアさんはお母さんですよ。雰囲気的に……」

その言葉にマリアはピクツと反応した。

「……どういう意味です？」

「いやーあのー別に深い意味はないんですよ？本当に！」

「じゃあなんでそんなに汗ダラダラなんですか？」

「すいまっせーっん！」

「あ、テル君！待ちなさい！」

ダツシュで走るテルをマリアは追いかけた。追いかけていく中でマリアはある事を思っていた。

（家族……か。いつしか全て分かる日が来るのでしょうか……）

言い表せない不安感がよぎる。

—家族ですから

テルの言葉が思い出される。何故だか安心する自分がいた。少なくとも、今だけはこれでいい。核心に迫るのはまだ先でもいい。

（これから面白くなるんですから……）

不安が消え、これからの日々に期待感が高まった。

と思っていたのか!!

翌日、ナギの屋敷にて。

「オイ……」

「なんだバカテル」

わなわなと一枚の紙を握りしめるテルはナギに聞く。この紙を。否、テル宛てになった借用書を。

「なんで俺名義イイイ!? しかもナギから借りた事になってる!?!」

「なんでって……自分で払うって言っときながら……」

「お前払ったんじゃないのか?」

「いや、お前が余りにもダラケるからさ。マリアが『借金の一つでもあった方が必死こいてやりますよ♪』っていうからさ」

「マリアさあああん!」

「騒ぐなバカテル。 たったの6000万だ。私に返せばそれで済むという事にしてある」

「お前は金の感覚が狂ってんだよ! ハヤテより低いからってこんな額見たら夜逃げ所か自殺するわ!!」

「よかったな! 借金執事がもう一人増えたぞハヤテ!」

「テルさん……頑張っていきましよう!」

「やめろ! 見るな……そんな目で俺を見るなアアア!」

こうしてグータラ執事は借金を作ってしまったのである。

第20話く鳥目の人は夜に懐中電灯忘れずにく

―水。

我々が料理、掃除、補給などに利用されるこの液体は、人間の体内にも流れている。

人間の文明が今日発展してきたのは火、木、大地、水があったからだろう。

水車、ダムによる発電の働き。　水は私達人類にとって掛け替えのないものなのだ。

―しかし、人類の宝とも言える水は時に洪水、土砂災害などで人類に牙をむく。

かくいう、善立　テルの目の前に巨大な津波がやって来ていた。

巨大な波がテルの全身を叩きつけた。　体は意図も簡単に飲み込まれて泳ぐことも叶わない。

そうッ！　人類はその宝を自ら汚し、壊していたのだッ！

(ゴボゴバゴボ……)

体がどんどん沈んでいく。　世界は間違ってしまったのだ。　宝

は大切にしなければいけないのに、金庫に保管することもしない。

土壌汚染、水質汚染、宝である水が汚されているではないか、人間の手によって

人類は自然に、偉大なる自然に感謝し、見つめ直さなければならぬ。いい。

(………ツツツ)

そう感じながらテルは深く、光を灯さない、漆黒の闇へと落ちていった。

「………」

目を覚ますと、テルはガバツと体を起こした。

「おはようございませすテル様………」

聞き覚えのある声がしたテルが重たい瞼をこすり向けるとそこには伊澄がいた。

「アレ？ 俺は大自然の恐怖を身をもって体験していた気がしたんだけど……」

「どんな体験ですか？」

伊澄が神妙そうに尋ねる。

「いや、スゴいのなんの……これから地球に起こりそうな世界規模の津波が……」

ここであることに気付く。伊澄がいる事もそうだがよく周りを見る和外なのだ。

あと自分の体もビツチャリと濡れている。

「なんで俺水浸しなの？ 嘘だろ……俺もう十六だぞ……？」

「あおう、これには訳が……」

「なんだよ……あざ笑うなら笑えよ……俺は地獄に落ちたんだ……」

顔に手を当てて黄昏ているテルに伊澄が口を開いた。

「えっと……何を勘違いしてるか分かりませんが……テル様がなかなか起きてくれないので、冷水を掛けさせて頂きました……」

「なに？ お前オレに恨みでもあんの？」

バケツ片手の伊澄を見てテルはひとまず安心する。

「でもなんでここまでして起こしに来たんだ？ そんなに急ぎのようだったのか？」

改めて疑問に思っていることを伊澄に聞いた。

「えっと……そのう……」

伊澄は少しオロオロしながら続けた。

「一緒に来て頂きたい所があるんですが……」

「あん？ こんな夜中にか？」

「はい……」

伊澄はコックリと頷いた。

「んで？ 夜中に俺を屋敷から連れさらい、どこに行こうってんだ？」

場所は変わり、伊澄の車に移る。

「実は、白皇学院まで一緒に来てほしいんです……」

「白皇にイ？」

テルは顔を少し歪ませて言う。なぜこんな時間に学校に行かなくてはならないのか、理由が分からなかったからだ。

「なんで？」

テルがそう聞くと

「それは後々お話しします。了解してくれますか？」

伊澄は突然キリツとさせてテルに言うが

「イヤだ」

「え？」

あっさり断られた。

「イヤ、実際だるいし、つーか俺眠いんだけど。なんも事情を説明無しで了解しろっていうのは無理だわ」

「えーとその……」

伊澄はなんとか事情を話そうとするがなかなか言葉に出来ず、指を動かしていた。

「大体、俺の事情も考えないでそういう話をするのもどうかと思うよ普通」

「あ……すいません……」

テルの言葉に伊澄はシユンとした表情を見せる。

テルはバツが悪そうに思ったのか頭を少し掻くと

「……しゃあない、誰にだって事情はあらあ、今回は聞いてやるよ」

「本当ですか？」

伊澄はいつものようにゆっくり話すが口調はどこか明るくなっていった。

それを見てテルは安心しかのように小さく息を吐いた。

夜の学校、白皇学院。

「こ、これは……」

車から降りた伊澄とテルは白皇学院の旧校舎前に来ていた。

テルは旧校舎を見て顔を真っ青にして見ている。そのただならぬ雰囲気

「ゴメン、やっぱり無理」

「お待ち下さいテル様……約束が違いますよ……」

クルツとUターンするテルの執事服を伊澄がガシツと掴む。

「イヤイヤ！ おかしいって！ なんだよアレ!? 昼間と明らかに雰囲気が違うだろ!? 明らかにそうじゃん!? どのホーンテッドマンション!?!」

テルの言うとおり、旧校舎の雰囲気は昼間と打って変わっていた。暗い世界が洋風の校舎を恐怖の館へと変化させていた。

「まさか……テル様、幽霊が」

「イヤ、イヤイヤ、イヤ？ 違うよ？ 別に怖くなんかないよ？ 俺が別に幽霊を怖がる訳ないじゃん。何を言っているんだ伊澄君は」

「テル様……後ろ」
バツ！

「……………」

伊澄の言葉にこれまでにない反応速度を見せたテルは素早く車の真下に潜り込んだ。

「……………」

伊澄はじーっと見つめる。

「いや、これはな伊澄、ここからムー大陸に行けると思ってた……」

テルは車の真下からゆつくりと辺りを見渡しながら這い出てくる。
「……………」

明らかに恐がっている。そう確信した伊澄だった。

「んで？ その仕事ってのはなんだ？」

「えーっと……テル様に手伝って欲しいことがあります」

「ほう……」

ゆつくりと言う伊澄をテルは腕を組ながら聞く。

「私の悪霊退治を手伝ってもらいたいのですが……」

「はい？」

悪霊退治？ という単語にテルは目を丸くした。

「この旧校舎にはとても有害な悪霊が住み着いていると聞きました。

だからこれからテル様は私のサポートを……」

「ちよッ、た、タンマタンマー！」

テルは不可解な伊澄の発言に話を中断させた。

(幽霊？ マジでいるの？ イヤイヤおかしい。 いくらこの小説がなんでもアリだからってそれはないだろう？)

心のそこからテルは幽霊の存在を否定する。 伊澄はその反応こそが不思議だといった感じで

「ふつーに居ますよ？ 幽霊は……」

とテルに言う。

「おかしい、絶対におかしいッ！ 伊澄ッ！ それはイカンッ！ そんなオカルト紛いの現象を信じちゃイカンッ！ 夢を思い出せッ！ お前が望んだ世界はそんなんだったのかアアアアッ！」

テルは伊澄の両肩を掴みブンブン揺らす。 なんとしても幽霊の存在を認めたくないらしい。

(どうしよう……テル様に分かって貰える為には一体どうしたら……)

揺らされる中、伊澄はテルに自身の仕事を理解してもらおう方法を探していた。

ハッキリ言ってしまった結果、若干の、イヤ、半端ないほどの衝撃を与えてしまった。 ならばどうするかと考えていた時。

「……テル様、そこを少しどいてくれませんか？」

途端に伊澄の目が細くなり、強張った表情になった。

「なんだ？ 出たのか？」

「はい……」

「どい……」

テルがそう呟いた時、肩にガシツと何かが捕まった。 その瞬間、体が冷気を浴びたように冷えていくのを感じた。

喉を鳴らし、ゆっくりと振り返ると……

「お前の後ろにダアアアア!!」

「ギャアアアアア！」

テルの目に映ったのは鉞を構えて今にも振り下ろしそうな男。物凄い形相でテルに飛びかかった。

「はい……除霊つと……」

伊澄は幽霊の動作に全く動じず、袖から一枚の札を取り出し投げつけた。

ヒラヒラと飛んだ札は幽霊の額に当たるとバチツと音を立てる。

「オオオオオオオオオツツ！」

幽霊は苦痛の表情を浮かべてポンツと音を立てて消えてしまった。

「……………」

「信じて貰えますか？」

その光景を眺めて呆然としていたテルに伊澄はニコリと笑いかける。

「……やっぱ帰っていい？」

「ダメですよ？ 約束を破る気ですか？」

「約束？」

はて？ という表情を浮かべていたテルだったが、一つの出来事を思い出す。

—サンキューな！ 今度なんかお礼しなきゃならねえな

「アツ——！」

（たしかそんな事いってたような気がするけど！ イラン伏線回収しやがって！）

だがつと頭をブンブン振り、改めて否定する。

「

だ、だけど伊澄くん、テルさんよく分かんないから死んじゃうよ、さつきみたいなのがいっぱい居たらテルさん間違いなく死んじゃうよ〜？」

「マリアさんに『テル様をお借りしてもいいですか』と頼んだ所、『ど

うぞ、寝たまんまですが連れてって下さい♪用事が終わるまで屋敷に帰さなくて結構です♪』と言っていました……」

その言葉を聞き、テルは再び硬直した。

最早自身に逃げ道はないらしい。

目の前には幽霊の館、屋敷に帰ればマリアが待っている。

正に前門の虎、後門の狼だ。

「……ハイ、行きます……行くしかないんだろ？」

「はい……ではこちらに……」

二人は旧校舎に向けて歩いていく。テルは顔の生気がなくなり、白眼をむいてひきつらせていた。

しかし、二人は知らない。

この夜、旧校舎には伊澄とテル達だけの人間がいる訳ではなかった。

「えーっと、取り敢えずお嬢様のノートがある四階にツてアアアアアア！ 床が抜けたアアアア！」

床が抜けて下に落ちていく執事しかり……

「でも、もしかしてケガとかしてるかもしれないし、大丈夫、私オバケとか平気だから。じゃ、しっかり勉強しておくのよ？」

床に落ちた執事を心配して旧校舎に飛び込むたくましい生徒会長しかり……

今宵、旧校舎には客がいっぱいだ……色んな意味で……だ。

第21話くレッツゴー鷺ノ宮く

—あらゆる困難を科学で解決するこの平成の時代。
—人々の閉ざされた心に魑魅魍魎が存在していた。

—科学ではどうしようも出来ない、そんな奇っ怪な輩に立ち向かう、清廉で可憐な少女と胡散臭い男が一人。

—少女は鷺ノ宮 伊澄、男は善立 テル。 人は彼らを陰陽師と呼ぶ。

第21話くレッツゴー鷺ノ宮く

「悪霊退散…悪霊退散…：陰陽なんとか困ったときは…どーまんせーまん」

夜の学校、月明かりが少しあると言ってもそれでも十分暗い。

テルと伊澄は悪霊退治の為、廊下を歩いていた。

「…：テル様、さつきから何か音楽が」

眩き気味に歌うテルが気になったのか伊澄が一度立ち止まった。

「いや、悪霊退治ならこの方が盛り上がるかと…：」

テルは頭を掻きながらなははといった表情だ。

「あまり幽霊を刺激する事は宜しくないかと…：短気な幽霊もいますので」

「そ、そうなのか？」

「はい、ほら…：すぐ後ろに…：」

ゆっくりと頷く伊澄はテルの真後ろを指差す。

「…：」

テルが振り返ると三人組の男達の幽霊が完全武装で立っていた。

「フシユウウウツツツ」

「ウウウ…：ツツツ」

「ルウウ……ツツツ」

三人とも奇妙な呻きを上げる。更には目を完全に見開き、テルに視線をロツクオンしていた。

「あのく伊澄君？ やっぱり彼ら……」

「はい……五月蠅くて怒り狂っています……」

そう答えた瞬間、大体お分かりと思うが当然三人の幽霊は襲ってきた。

「アツ——!!!」

「悪霊……退散つと……」

両手を挙げて叫んでいるテルをよそに全く動じずにお札を取り出すと三人の幽霊に投げつけた。

「あべしッ！」

「ひでぶッ！」

「カペッ……」

額にお札が張られると三人はだんだん溶け出して霧散していった。

「次行きますよ……」

まるでいつもの事のように終わると伊澄はテルに奥へ行くように促した。

「ゴメン、伊澄……やっぱ帰りたいたい」

「無理です。ここで帰ったらテル様が死にます……」

「はい？」

伊澄の『死ぬ』という意味がどういう意味か分からず、テルは目を丸くした。

伊澄が加えて説明を入れる。

「ここで帰ったら悪霊に取り憑かれて死ぬ……という意味です」

「マジで？」

「はい……」

その言葉にテルは何も返せなかった。というよりも既に諦めに入っているかもしれない。

こんなやり取りが何度か続いている。テルが叫んでは伊澄が札

を投げ、除霊。テルが叫んでは伊澄が札を投げて除霊。

しかもテルは伊澄の後ろを警戒しながら歩く始末。

本来なら前を歩くのは年上のテルの筈だが、見事なまでに先頭を伊澄に譲っている……なんと情けない。

(しかし……幽霊なんて存在しねえと思っていたが……)

伊澄の後方を歩きながらテルは目の前で起きている状況を信じつつあった。

幽霊はせいぜい、本や幻覚だと思い、信じてこなかったが現状が現状だ。受け入れざるを得ない。

「しかし……伊澄」

「はい？」

後ろからテルの声に伊澄がチラツと反応してみせた。

「お前が鷲ノ宮の光の巫女だとか話されてなんとか言われても俺はどうとも思わねえけど……怖くねえのか？」

「……」

一瞬振り向いたかと思うと伊澄は黙って視線を前に戻した。

「ま、怖くなんかないよな。あんなだけ肝が座ってるなら……」

「どうでしょうか……」

続けるテルの言葉を伊澄が遮った。

「私ってそんなに強く見えますか？」

立ち止まった伊澄は今一度テルといつもの表情で向き合う。

「恐がってないように見えますか？」

「……」

いつもの表情……なのだが、なぜかそうでもないかとテルは感じ取った。

その言葉を、深く詮索するべきなのか、しないべきなのか、テルは迷ったという。

だがそんな迷いを抱えている内に

「まあ、今日は平気ですけど……それでは奥に進みましょう」

「お、おう……」

クルツと伊澄が背を向けて歩き出したのでそんな考えも無駄に終わった。

—そして数分後……

「やっぱり迷子か……」

見渡す場面、誰も居ない事が確認できた。今ここには伊澄がいない。案の定、伊澄は迷子になった。

「なあ神よ……放置プレイだろコレ？」

さつきとは打って変わってこの状況。悔っていた。仕事のなかでなら伊澄は仕事人顔負けの集中力で迷子になることはないと思っていたが

訂正。 やっぱり伊澄は伊澄だ。

(それよりも……な……)

テルが頭を掻きながら考えるのはさつきの伊澄の表情。

—怖くないように見えますか？

違う。 怖くない訳がない。 いや、一方的かもしれないが……

仮にもナギと同じ、13歳の女の子だ。 ただただ普通に今の時間帯なら寝ているはず。

その筈なのに、今こうして夜に鬨っているのだ。 鷺ノ宮の光の巫女として……

そういう責任もあるから普通より精神をすり減らす筈だ。

昔からこんな仕事をしてきたのかと思うと苛ついた。

軽率な発言だったかも知れない。 何も分からない小さき頃から光の巫女として悪霊と闘っていた。 怖くない筈がない。

テルなら完璧トラウマだ。 それを13歳の少女がやってのけている。

(光の巫女……か)

他と大きな違い。同じ13歳でこの立場の違い。酷ではないのか？普通の少女、鷺ノ宮 伊澄がナギと一緒に普通に歩き、普通に学校生活を過ごす日が来るだろうか？

「面倒くせえ……」

そう呟きを入れた時だった。

「キヤアアア——!!」

テルの耳に甲高い声が響いた。その瞬間、体を震わせて近くの壁に張り付く。

「な、なんだ？」

張り付いたテルは冷や汗を掻きながら驚く。女性の声に近いものかも知れない。

「伊澄か？」

そう呟いた時には廊下を走り出していた。

伊澄だから除霊に失敗したのかもしれない。こんな状況だ。命の危険だつてある。急がなくてはならない。

「なんなのよもうっ！」

廊下を駆ける一人の少女。ピンクの髪が特徴的で腰にまで十分届いている。

だがその長髪も今は真後ろに流れていた。

ご存知の通り、彼女、桂 ヒナギクである。

彼女もまた、この旧校舎に入り込んでしまった一人。

本来は生徒会三人娘の勉強を見に来たのだが、ハヤテが来ていると聞き、危険なので心配したとのこと。

—大丈夫。私、オバケとか平気だから

と言っていたが、今宵、彼女の世界は一変する。

彼女は見てしまったのだ。宙に浮く、無数の人魂の姿を。

そんな非科学的な現状を見て、冷静でいられる訳がない。当然即

ダッシュユ。

『オバケとか平気だったのでは?』

「あんなの平気な女の子がいるわけないでしょ!!」

『火の玉はプラズマという科学現象だという話ですが?』

「怖いものに理屈なんてないわよ!!」

『それでは最後の質問です』

「へ?」

『さっきからあなたに質問しているのは誰でしょう?』

「……………」

(言われてもみれば……………)

ヒナギクはさっきから聞こえる声に疑問を抱いた。

そして横を向いたとき、ヒナギクの顔から一気に血の気が引いていく。

カシヤンカシヤン

「……………」

ヒナギクの横で併走するその何かは半分が肌を露わにし、半分が肌より肌自体が無くなり、皮膚が露わになっていた。

人体模型。 夜の怪談話の定番である。

人体模型がヒナギクと併走するという全く持って奇妙な光景。

「キヤアアア——!!」

再びヒナギクは悲鳴を上げる。 そのまま壁にもたれ、腰も下ろした。

「あ……………」

迫り来る模型に対して、ヒナギクはもう立つことすらままならない。 逃げることも

(誰か…誰か——)

そんな時、恐怖に支配されつつあるヒナギクの脳内にある言葉が響いた。

—言ってくれば、助けに行きますよ。

それは、最近自身が出会った一人の少年。

「ハ……!!」

その言葉を信じて、名前を叫べば。

「ハヤテく——ん!!」

彼は疾風のように現れるという。

ドガツ!

ヒナギクの前に文字通り、疾風が駆け抜けた。

人体模型に炸裂した蹴りはいとも簡単に人体模型を粉々にする。

綾崎 ハヤテの蹴りだ。

「大丈夫ですか? ヒナギクさ——」

ガシツ

「え?え?え? ちよつ、ヒナギクさん……!?!」

ハヤテは自分の今の状況に戸惑う。 ハヤテの体にヒナギクがヒ

シツと抱きついているのだ。

抱きつかれたためハヤテの心臓は急激に上昇する。

上昇、上昇、上昇……

「上……昇……ッ……ッ……」

曲がり角の影からその光景を見ていたテルは持っていた花瓶にヒビが入るほど力を込めた。

(伊澄かと思つて来てみればまさかヒナギクが居て、ハヤテが居て?

何故か抱きつかれている?)

両手に力が更に込められた。 花瓶のひび割れが広がっていく。

(あー やっぱこの前のお茶会のコメント撤回しようかなー、ハヤテはとんでもない野郎であると)

完全にもう妬みしか感じられないこの心情。 流石はハヤテだ。不幸ながらにしてラツキーな野郎である。

「……ん？」

ここである事にテルは気付く。ハヤテとヒナギクの更に奥の曲がり角で隠れている人影を見つけた。

「この事は絶対に内緒だからね　ハヤテ君」

「はい？　なんの事ですか？」

視点が変わるが今はヒナギクとハヤテ。　ヒナギクの言葉にハヤテは訳が分からず返した。

「だから…その…きつきの…」

「へ？」

言うのをためらっているヒナギクの様子にハヤテはまだ分からない様子。　外ではカラスがギャーギャーと鳴いていた。

「あ、あれですか？」

ハヤテはヒナギクに抱きつかれた事だと推測したがヒナギクは首を振って否定した。

「それもそうなんだけど……」

「え？」

「その前の…後の事も含めて……」

恐らくヒナギクが指しているのは自身が幽霊に驚いて逃げ出し、最終的に幽霊を前に座り込んでしまった事だろう。

「私があんなふうに怖がっていたなんて誰かに言ったら、本気で殴るわよー！」

「まあきつきも思いつ切り殴られましたけど……」

吊り目で迫るヒナギクにハヤテは苦笑いで返す。　実は抱きつかれた際、ヒナギクに理不尽な理由で殴られたのだ。

「でもこんなの追いかけられて怖がるのは普通ですよ？」

ハヤテは自身の蹴りで粉々になった人体模型を見る。　確かに、動かないだけでも気味が悪いのに走って追いかけられたらテルなら即

失神しそうだ。

「関係ないの！」

宥めるハヤテの言葉をヒナギクはまた否定した。

「生徒会長は威厳が大事なの！ 威厳が！ ちよつと幽霊を見たからって！」

その言葉を言い終えた後、何故か口ごもった。

「あ、あんな…醜態を……」

ヒナギクにとって生徒会長に必要なのは威厳だという。生徒を纏めあげるためには大切な物だ。

それを幽霊という、普段信じれない物の前で台無しにされたと思っているのだろう。

「まあ格好良く無かったかもしれないね、いつものヒナギクさんに比べたら……」

ビキッ！

そう言うときはどうにかして慰めてやるべきだが、ハヤテは色々と抜けている。彼の発言は彼女のプライドに少なからずとも半分以上はヒビを入れただろう。

「でも、ここが旧校舎だって分かりましたから、もう用もないし、出ましようかヒナギクさん」

ハヤテは辺りを見渡しながらヒナギクに促す。もともとナギのノートを取りに来たのだが、旧校舎はノートのある場所ではなかったのだ。

しかし

「何を言っているのかしらハヤテ君」

「は？」

ヒナギクの言葉にハヤテは苦笑いしながらも振り向いた。嫌な予感がしたからだ。

「このままオバケの正体もつかめないまま……かつこ悪いまま……この私が負けっぱなしで帰るなんて……していいと思って？」

その背中から感じるオーラは物凄く怒りを凝縮させた物であると同時に、ヒナギクのなかで何かが燃えているようだった。

「いや…でも僕、お嬢様の忘れたノートを取りに行かないと…」

本当に嫌な予感しかしないハヤテはできるだけオブラートにその状況を回避するように努めた。

だがそれも……

「却下よッ！」

(……………)

ハヤテは苦笑いで諦めた。もはやこうなったヒナギクを止める事は誰にも叶わない。自身のプライドの回復のため、とうとうハヤテの拒否権まで奪取された。

「とにかくあんなものを放っておくわけにはいかないわ!! だからハヤテ君…!!私と一緒にオバケ退治よッ!!」

そう高らかに言い放つと生徒会長こと桂 ヒナギクは夜の旧校舎を突き進んで行った。

「あ、ちよつ…ヒナギクさん!!」

その後ろを急いで追うハヤテ。やがて二人の姿は暗い世界へと消えていった。

(……………)

その二人が消えたのを見計らって角から一人、粉々になった人体模型を拾い上げた。

「このままでは…いけませんね……」

そう呟きを入れるのは伊澄だ。先ほどからヒナギクとハヤテを追っていたらしい。

「なんとかしてハヤテ様や生徒会長さんにはこの場を立ち去って貰わないと……」

伊澄は首だけの人体模型に向けて一人呟く。

「なんでそんなに立ち去ってもらいたいんだ？」

「それは色々……まあ」

伊澄は手に持っていた人体模型を見て驚く。

「術を使っていないのに喋りだしました……これも悪霊でしょうか？」

「いやいや、俺だって、俺……」

「この模型も早めに除霊したほうが良さそうですね……」

伊澄はそう呟くと袖から札を取り出し、罪も無い模型にかざそうとしました。

「だからこっちじゃアアアッ!!!」

「!!」

ハツとなつて振り返るとそこにはテルがいた。

「……………」

だが何を思ったのか、伊澄は暫く見て一言呟いた。

「悪霊？」

ぐにっ！

「ふひっ……………」

半ば疑問系の言葉にテルは伊澄の両の頬を軽くつまんだ。

「だくれぐが幽霊だコラ、この目で判断してんのかコラ」

テルは額に青筋を浮かべて怒り心頭。やがて伊澄のつまんでいた頬を離す。伊澄は半分泣き目で頬をさすっていた。

「い、痛いです……………」

テルの耳に震えた声が戻ってくる。

「人を見かけで判断するからだ。後、勝手に迷子になるな」

頭を掻きながらそう言うテルに伊澄はキョトンとした。

「私は迷子になつてはいませんかよ？」

「どこまで認めたくないんだよッ!? 頑固にもほどが……まあいいや」

突っ込んでみるテルだがまたこのくだりは長くなりそうなので途中でストップした。

「んで？ 立ち去ってもらいたい理由は？」

「え〜つとですね……………」

伊澄は涙目ながらも事情を説明する。

掻い摘んで説明すると、あの二人にはまず自分の裏業はあまり知られたくはないとの事。そのために人体模型を自分の術で動かし、ヒナギクを追い出そうとしたが。

「そこにハヤテが来てしまったワケか……」

「はい、さすがにハヤテ様は一筋縄ではいきませんでした」

「まあ、アイツなら幽霊が来ても蹴りで倒すわ」

人体模型の首を持ち上げ、残りのパーツにも目をやる。これぐらいの威力が込められた蹴りだ。バラバラの人体模型が全てを物語っている。

「なんか方法はないのか？ あのと二人に簡単に帰ってもらう方法は……」

「それで先ほどから私の術でなんとか帰らせようとしたんですが……」

伊澄のいう『怖がらせて帰って貰おう作戦』はとりあえず怖がらせて帰ってもらうという、なんか小学校で使われそうな物だ。果たして、ハヤテやヒナギクにコレ以上通用するのか……

「実は一つ方法が……」

「お？ なんだ？ 言ってみなよ」

テルが人体模型の首を持ちながら聞いた。

「でもこれはちよつと……」

「なんだよ。喋ってみなきや始まらないぜ？」

テルが出し惜しみするように言う伊澄にじれったさを覚えた。

伊澄はテルの方から顔を背けて呟く。

「元々私の都合で無理に来てもらっているテル様に危険な真似はしたくありません……これは私の問題なので……」

伊澄の危険という言葉にテルは少なからず戸惑ったがため息をまた吐き、頭を描いた。

「バカ、そう簡単に帰られっかよ」

「ですが……」

あくまでテルに遠慮しているのか伊澄がまだ戸惑っている。

「俺がいなかったら誰がお前の迷子の回収に行くんだよ」

テルは更に付け加えて続ける。

「それにな……なんでも抱え込んでつと、いつかそれに押しつぶされんぞ。だから言え、その俺を巻き込んでしまいそうな作戦を。ちなみにお前に拒否権は無い」

「……………」

伊澄はこれ以上テルに何を言っても仕方ないと思ったのか、クルツとテルと向き合う。

「分かりました……その方法を教えましょう……」

珍しく伊澄がため息をつく。もう伊澄が折れるしかなかった。

○

「……………」

善立 テル、16歳。現在、『とある作戦』に参加中。

伊澄の言っていた、その危険な作戦、テルは恐れずに参加した。

……後悔はしていない……ハズである。

「暑い……………」

特に夏だからとか、そういう気温の問題ではなく、純粋に体温が暑い。

善立 テルは白皇学院の旧校舎で異形の姿をしていた。
単刀直入に言おう。

―彼は人体模型になった。

第25話く幽霊役の人が客にボコられるのは仕方ないと思うく

人体模型になった。 ストレートに言えばそうなる…が端から見れば確実に『どうしてこうなった』と疑問が浮かぶので経緯を説明したい。

―それは数分前。

「俺が人体模型に？」

「はい。 私のさっきの術を遠隔操作で動かしていました。 ですがテル様に人体模型になってもらう事で、よりキレのある動きができません……」

伊澄の言わせれば、遠隔操作は難しいとのこと。 しかし、テルが人体模型になることでテルの意志で人体模型に生き生きとした動きができるとのこと。

(でもコレってさっきの作戦とだいぶカブってる気が……)

そんな疑問をよそに、伊澄は続ける。

「それでは早速人体模型になって貰いましょう……」

そう言い、伊澄は札を取り出してテルにかざした。

「ちよつ、待て！ まだどうやって人体模型になるか方法も聞いてない！ 痛いのか!?まさか痛いのか!?!」

「……………」

「なんとか言ええええ!! 何かと不安になるだろうがあああ!」

何も答えない伊澄にテルが叫んだが伊澄は構わず札に握る力を込めた。

「いーくいつぷー!」

「うおっ!」

突然伊澄の札が輝きだし、辺りが明るくなった。

カタカタカタ……

「ん？」

テルは何かしら聞こえた方向を見て驚愕する。

「ツツツ！」

見たのは下。そこにあるのは無数の人体模型のパーツ。そのパーツが今小刻みに動いていたのだ。

そして次の瞬間。

「うおッ!？」

信じれない事が起こった。小刻みに動いていたパーツがふわっと浮かんだのだ。

更に。

「え、いや、ちよつと……」

テルは思わず後ずさる。人体模型のパーツがだんだんとテルに近づいて来ているのだ。

そして……

ガツシーンッ!

「ギャアアアア! 俺の腕がアアア!」

これまでにないほどの絶叫。テルの右腕に人体模型の右腕が重なるようにくっ付き、その瞬間、右腕が完全に人体模型の右腕と化した。

ガツシーンッ!

「俺の足イイイイ!」

今度は左足が人体模型の左足と同化。テルは更にはパニックに陥る。

「安心して下さいテル様……見た目はその姿でも中身はちゃんとテル様の体ですよ……」

「どういうこった!？」

落ち着かせようと伊澄は説明したがテルは未だに理解不能状態。

伊澄はさらに説明を加えた。

「この術は肉体強化が目的です。周りの物体を自身の肉体に武装さ

せてテル様はエ○オリユダーになるのです……」

「俺はどここの勇者王だ？」

そう言われて見ると覆われた真っ白な硬い物質の下には自分の本当の腕がある感覚が分かる。

伊澄のこの術は体に武装するようなもの。簡単に言わせれば勇

○王ガ○ガイガーに出てくるサイボーグのお兄さん。

「確かに……体自体は変化がないんだな」

体が安全だと分かって納得したのかテルは右腕で頭を搔く。いつものような感覚ではなく硬いのが頭にカツカツと当たっている感覚だ。

「ではどんどんいきますよ……」

「おう、どんどんい」

テルはドンと胸を張ってみせる。なんやかんやでテルの改造？は進んでいった。

ガッシーンッ！

ガッシーンッ！

ガッシーンッ！

「……なあ伊澄、コレはどういう事だ？」

「えーつと……」

伊澄も戸惑いを隠せないでいる。

「なんか腕と足が逆な気がする……」

「申し訳ありません」

テルの右腕はちゃんと人体模型の右腕だが左腕は右足がついている。そうなれば右足は左腕、とまあ色々と違っていた。

「あと重大なのは頭、なんで頭が後ろむいてんだよ。俺が真っ暗で何も見えねえじゃねーか」

テルは反対方向にはまっていた頭を強引に180度回転。ゴキ

ンという音とともに定位置に戻した。

「ついでに言うとボロボロなんだけど、そこんとこ何とかならない？」
よく見ると体は所々ヒビが入っており、頭なんて顔が半分割れている。

「そこはガムテープで補給ということ……」

「いや！　なんでそこだけ現代技術なんだよ!?　鷺ノ宮の術でなんともなるだろ!？」

伊澄は突っ込むテルを無視してどこからともなく取り出したガムテープをペタペタと張っていく。

「これでなんとかお願いします……!!」

突然何かに気づいたのか、伊澄は目を細めて袖で口元を隠した。

「誰かが来たようです。　ハヤテ様達でしょう……テル様、頼みます」
そう言うのと伊澄はそそそと奥に隠れた。

「オイコラッ！　待てッ！　面倒くさいとかそう言うのじゃないだろうな!？」

そして現在に至る。今はこうしてやって来る二人を待ち伏せた。

「あの……やっぱり帰りませんか？」

「ダメよ!!　絶対、正体つかんで見せるんだから」

「で……でも、危ないですし……」

「何言ってるの？　危ないから退治するんでしょ？」

「む……来たか」

テルも息を潜めた。　途中、カツカツと硬い音がした。　なんともこの姿では動きにくい。

暗い奥からやって来たのはやはりハヤテとヒナギク。

ハヤテは若干、この状況に戸惑っているがヒナギクは逆だ。　全身から殺気のオーラが溢れている。

しかし、ヒナギクが少しちらつとハヤテを見た。

「だいたいさつきから帰りがつてるけど…せっかく夜の女の子と二人きりなんだから…もう少し嬉しそうな顔してもいいんじゃない？」

（そうだ。なんせ白皇の生徒会長だ。なんせ若い男女二人が学校にいたんだ）

遠くで見守るテルの心の声。 実際若い男女はハヤテ達だけでなく、テルや伊澄もだ。

「いや、でもなんかヒナギクさんとはなしていると…お嬢様と話をしているような気がしてきて…」

「な!! なに子供扱いしてんのよ!! 私、生徒会長なのよ!!」

（いや、生徒会長をそこで誇示する理由は何だよ）

「ふん!! まあいいわよ!! 一人でも退治して見せるんだから!!」

「まあ一応ご一緒しますけど…」

二人は取り敢えず歩きます。

（はく ヒナギクさん、やっぱりお嬢様と同じで…すごい負けず嫌いだなあ）

「それにしても…冬だって言うのに、なんか暑いわね」

周りの気温に耐えきれなくなったのか、ヒナギクは胸元の服をパタパタとさせた。

「!!」

ハヤテはその行動にすぐさま顔を赤らめる。

「ん？」

ヒナギクもハヤテの顔に気付いたのか、急にニヤニヤしだした。

「なくに赤くなってるのハヤテ君？」

「べっ!! 別に赤くなんかありませんよ!!」

ハヤテは必死に否定するがその言動からして動揺しているのは分かり易い。

「何よ? 人の事子供扱いしておいて…やっぱり私の事意識してるのかしら?」

なぜだかヒナギクも楽しくなってきたので更に茶化してみる。

「別にヒナギクさんの事なんか、意識してませんよ!!」

カッチーン

何かと気に障る発言にヒナギクの顔が一気につり上がった。

ハヤテは更に続ける。

「だ…:だいたい前も言いましたけど…:ヒナギクさんは少し無防備すぎます!!」

(無防備もなにも、元からサ○ヤ人より強いじゃん…:)

隠れているテルは突っ込んでみるがそれは誰にも聞こえない。

「ヒナギクさんの事、なんとも思っていない僕だからいいようなもの…:普通の男の子前では、もう少し恥じらいを持たないと…:」

いつの間にかハヤテは説教モード。黙ってヒナギクは聞いてはいるがまるで自分がアウトオブ眼中かのような言い方に彼女の怒りのバロメータは上がりっぱなしだ。

「そんな軽い事では…:何をされたって—」

「いいわよ」

「へ?」

ヒナギクの言葉にハヤテの間の抜けた声。

「ハヤテ君になら…:何されても…:」

窓から差し込む月の光が二人を照らし出す。二人の距離は近い。

後ろにいるヒナギクの手がハヤテの執事服の背中に触れた。

細いヒナギクの手がぴとつと止まる。

そんな端から見て危険な展開を迎えている二人だがこちらも危険だ。

「野郎 そんな事を…:ッッ!!」

今なら地上最強の生物並と殺気を醸し出すテル。幽霊は絶対に近寄らないだろう。

あと、そんな事は始まってすらいない。

「—なんて冗談を言うと男の子は真に受けるのかしら?」

「うっ!!」

クルツと振り返ってハヤテの目に映ったのはヒナギクのクスッと笑った顔。

ハヤテははめられた。一手とられたと思わされた。

「ご忠告ありがとうございます。今後、注意するわ。ハヤテ君みたいな男の子には」

膝をつくハヤテを前にヒナギクは勝ち誇った笑みを浮かべる。

(ヒナギクさんの事、お嬢様と同じくらい負けず嫌いだって思っていたけど……)

ハヤテは自身の目測が誤っていたと気づかされる。

(お嬢様以上に負けず嫌いだ……)

「あー! もう面倒くせえ! 俺は出るぞー!」

テルはこれ以上待たされるのがいやだったのか、たまらず飛び出した。

「うわっ! あれさつき僕が倒した人形!!」

「え? ウソ!? あ!! ホントだ!」

ヒナギクとハヤテが若干動揺している様子。

「まったく、動きづれえな……」

カクカクと近づくテル。人体模型なので関節が固定されており、動きにくいのだ。

『帰れー!! 人間どもー』

(あれ? これは伊澄の声か?)

自分が喋っていないのに発せられた声は伊澄の声だ。多分、これも伊澄の術なのだろう。

テルは声に合わせて両手を掲げるポーズを取って威嚇する。

「ひい!!」

(お? 意外に効果あり?)

威嚇が効いたのかヒナギクとハヤテが悲鳴に近い声を上げている。

『帰らないとお前たちを……た……食べちやうぞ!!』

「そうだ帰れ帰れ」

伊澄の声に続き、テルも喋り出した。

「ところでさつきから出ているナレーションみたいなのはなんですか？」

「あと一人なのに声が二つあるのも気になるわ……」

ハヤテとヒナギクもこれにはすぐ気付いた。

『あ、これは……脳に直接話しかけているという描写で……』

「そうだ。マジ○ガーZだったかに一人で二つの人格をもつ人間もいたようなないような……」

伊澄とテルは互いにバレないように気をつける。

「へえ………てえ!!」

「ぐほお！」

ふーんという顔をしていたヒナギク。そこから一変、どこからともなく鉄パイプを取り出して不意打ちの一撃を与える。

テルの体が床を転がった。

「不意打ちはズルいぞ……」

「さつきはよくも驚かしてくれたわね!!」

「俺は関係ない……」

「このままじゃすまさないわ!! 覚悟しなさい！」

テルはなんとか体を起こすがヒナギクの一撃が重い。

「でもさつき倒したはずなのに……なんで元に戻ってるんですか？」

『そりや頑張って修理を……』

ハヤテが一番疑問に思ったことに伊澄が答える。

「え？ 修理？ 自分で？ それとも誰かが修理を……？」

「——!! とにかく!! ハヤテ様！」

これ以上詮索されるとまずいと思ったのか伊澄が声を張り上げた。

「ここから早く立ち去って下さ……いや……た……立ち去れ——!! の……呪うぞ——!!」

伊澄の声に合わせてテルはまたしても威嚇のポーズ。だが生徒会長には通じなかったようで……

「ふん!! 呪いが怖くて生徒会長は勤まらないのよ!! さっき受けた屈辱!! 百倍にして返してあげるわ!!」

「だから俺は関係ないって……ん?」

必死にヒナギクの言葉を否定しようとしたとき、テルの視界が歪んだ。

—なんだ? アレ?なんかコイツ見たことある……

—アレ? 見たことあるって言っても、違う……こんな感じの奴を見たことある……だな

なぜかだが、鉄パイプを構え、鋭い目でこちらを見るヒナギクの姿が誰かと重なって見える。

—誰だろう……

—思い出せない……

「たあ!!」

「グギャー!」

テルが呆けている間にヒナギクの鉄パイプによる一撃。

『の…呪ってしまいますよ〜』

「うるさい!」

「ギャース!」

『お…オバケは怖いから帰った方がいいですよ〜』

「あなたを倒したら帰るわよ!!」

「ギャアアア!!」

攻めるヒナギク、受けて絶叫するテル、頼りない伊澄。場はもう

混戦状態だった。一方的にヒナギクの攻めだったが。

(ハヤテ……様?)

そんな戦い？ を眺めていたハヤテは一人疑問が浮かんでいた。

(もしかしてこれは本当に立ち去って貰いたいだけの……ただの脅しなんじゃ……?)

「ぐおお……」

(この剣道バカが……こちらなんもできない無防備な男だぞ!?)

体のパーツにヒビが入ってきた。 中身のテルもダメージがキツイ。

(何とかしてあいつ等には帰ってもらわないと……特にコイツ!)

テルは震える足で立ち上がりながらヒナギクを見た。

(コイツが納得するやり方で帰ってもらわねえと……)

「ヒナギクさん！ そんな恐ろしい化け物、放っておいて帰りましょうよ!!」

「ダメよ!! 今度こそ絶対私が倒すんだから!!」

ハヤテが遠くでヒナギクに促すがそこは会長、一歩も引く気はない。

「そんな……その人形をヒナギクさんがかつこよく倒さないと、僕たちがここを立ち去れない」なんて事言わないで帰りましょうよ!!」

ズキーン!

(ソレだアアアア!!)

コオンが閃いた時にでる効果音と共にテルはすかさず伊澄を見た。
「……………」

伊澄はそれがしつかりと聞こえたようで二回ほど頷いて見せた。

簡単な理屈だった。 ヒナギクのプライドの高い人物がこの状況で納得してもらおうこと。 それはヒナギクが人体模型を完膚無きまでに倒せば、彼女の面目も立ち、満足して帰ってもらう。

(なにも怖がらせて帰らせる必要は無かったんだな、よーし後は適当にやられて……つてアレ?)

ここでテルはあることに気付いた。なら、やられる程の一撃を受けるのは誰だ？ 自分だ。そう、テルだ。

(え？ 最後までこんな扱いなの？)

バキヤ!!

「へ？」

そう声を出したのはヒナギクとテルだ。

さっきの砕けたような音は人体模型からだった。

伸びる両手、何故か飛び出している肋骨(テルのではない)、更には腕の数まで増えていた。

明らかにかかってこいやと言っているような物だ。

挑発もいいとこだ。ヒナギクがそれを見て闘志が上がらない筈がない。

(ギャアアアア 伊澄イイイ！ 俺に何か恨みあったかアアア!!)

「ふん!! そんな姿を変えたところで……」

ぐるんぐるんと手元で鉄パイプを回転させ、覇気を飛ばすかのよう
に構えると一気に踏み込んだ。

(アア——ツ！ 死ぬ——!! ……ん?)

シューウウ……

背中の部分に何かムズムズするような違和感。 背中には一枚の

札。

「コレってまさか……」

勘がイイ人はお気づきかもしれないが、この札、ナ〇トで使われて
いる……

「起爆符ツ!?!」

「覚悟しなさい！ 私が……やっつけて——」

ドツカーン!

何とも間抜けな効果音だが気にしない。

ヒナギクが鉄パイプを振り下ろす前に人体模型は爆発してしまつた。明らかにワンテンポ早い。

「……………」

「……………」

ヒナギクは訳が分からない様子。ハヤテは苦笑いだった。

『やられたー』

伊澄が必死に負け宣言。テルの姿はない。爆発と共に何処かへ飛んでいってしまった。

「え？ まだ私何もしてないのに……………」

ヒナギクは疑問の眼差しを人体模型の頭に向けた。

「や!! ああ!! ス…スゴイですねヒナギクさん!! 気合いだけで霊をやっつけるなんて!!」

『ホントホント!!』

ハヤテと伊澄が笑いながら返す。ヒナギクは首を傾げた。ハヤテは更に続ける。

「きつと今のが『気』ってやつですよ? 『覇気』とかにも似てますし!」

「でも私別に……………」

「ル〇イだって無意識に使ってたんですから!! いやースゴイなーヒナギクさんは!!」

「いや……『気』なんて普通使えな—」

「使えますよ!!」

ハヤテは両手を大きく広げた。

「いやー僕も今必殺技覚えたいと思ってるんですけど……………やっぱ必殺技は『気』とかじゃない!! 僕も修行とかして早く覚えたいな—!!」

何かを隠してそんなハヤテの言動にヒナギクはじーっとハヤテを見つめる。

ここまで来て状況が悪化したら不味いが……

「じゃ会得したら見せてね」

「へ？」

ヒナギクは笑ってみせた。

『氣』を使つて相手を倒す必殺技……ハヤテ君が会得したら必ず見せてね」

「え……？ え……？」

危機は回避した。回避したはずなのだが……

「じゃ!! ハヤテ君、いっぱい修行しなきゃいけないだろうから……帰りましたよ!!」

ヒナギクはそう言うのと楽しげに踵を返して歩き出す。

「ちよ……!! ま……!! ヒナギクさん!!」

ハヤテも後を追う。また厄介事を抱えてしまったらしい。

「ようやく帰ってくれるようですね……」

「……………」

二人が消えていった後、伊澄がひよつこりと出てくる。しかしテルは動かない。白目を向いて倒れている。

「……………ほっと」

伊澄は札をかぎすと 蒼色の光がテルを包んでいく。

「……………ブツハアアアツツツ！」

まるで死の淵から蘇ったような起き上がり方。テル復活。

「ホ○ミの次はザ○リクか、まるで賢者だな」

「……………」

「ん？ どした、伊澄」

伊澄の表情が少し沈んでいた。伊澄が頭を下げる。

「申し訳ありませんでした……危険と分かっていたながらテル様にこんな役を……」

「こんな役？」

ボロボロの体を見て伊澄が言っているようだ。

「やっぱりテル様を巻き込んでしまうのはいけません……ここからは

私が一人でやります」

伊澄は暗い表情でどこか悲しげだった。間違ってもテルを爆破させたりと危険な目には合わせたく無かったのだろう。

それほどまでに彼女は責任感が強いのだ。

責任感が強いというのは別に負のステータスではない、誰かをまとめたり、物事には真剣に取り組める。むしろ今の若者たちに必要なくらいだ。

しかし、責任というのは背負いすぎるとどこかでつまづく……そうなるとなかなか立ち直れない、人間というのは。

ずっと一人で戦うのだろう、これから先も……

巻き込みたくない、支えてやれる人がいない中、強い責任感だけを抱えて……

若いのにご苦労なこった……とテルはつくづく思わされた。

「バカが……」

ポンと伊澄の頭にテルの頭が乗った。

「巻き込みたくないなら最初から俺を連れてくんじゃねーよ」

伊澄の頭がいつぱいになるほど覆われしないが

「だが最終的にお前に付いていくと決めたのは俺だ。だったらいちいち気にしてんじゃねえ……」

どこか暖かくて、大きい。

「使うなり囮にすらなりなんなりしやがれ、まだ帰らねーぞ俺は」

誰かが支えていかなくってはならない、力不足かもしれないがテルなりの力添え。

「いいんですか?」

「あ?」

伊澄はテルと向き合いながらオロオロした感じで呟く。

「また危険な事に会っても……」

「うるせーな、ぐだぐだ言っつとまた抓るぞ」

頭を搔きながらテルは伊澄に言い放つ。

伊澄は今度は別に折れた訳でもなく、ため息をつかずに笑顔で答え

た。

「わかりました……」

「おう」

「では依頼された本物の悪霊を倒して、私達も帰りましょうか……」

「まだいんのかよ……」

あからさまに嫌な顔をするテルを伊澄がじーっと見ていた。

「わーっ！わーっ！たよー！」

面倒くさそうにテルは伊澄の後ろについて行く。

夜の旧校舎はやはり怖い。

「なあ伊澄」

「なんですかテル様？」

「この世から悪霊とかが居なくなったらお前もこういう仕事やらなくてすむのか？」

「さあどうでしょう……生き物に生がある限り、必ず死があります。

その死が受け入れられないものだったりすれば未練となってこの世に留まる輩は必ずいますから」

「うん、大体分かんない」

「でも……」

「ん？」

「私は別に悪霊や霊が別に消えなくてもいいと思います……」

「お前、案外こえーな。こんな怖い空間なくなるといいなんてよ………どういう意味だよ」

夜の廊下を二人は歩く、少ない人数だが、百鬼夜行にもまけないかもしれない。

「それは……内緒です」

第22話くRAGING WAVESく

「僕は…君が欲しいんだ（人質として）」

ナギとハヤテが運命的な出会いをしたクリスマス・イブの…出会いから1ヶ月ツ！

第22話くRAGING WAVESく

「ふむ…思ったより小さいな」

ここは東京湾。車から降りたナギは一目見たソレに対して想像とは違ったと言った表情をする。

「……………」

「……………」

「あら？ どうしました？ ハヤテ君、テル君」

ナギの隣でハヤテとテルが逆に呆気にとられていた。

鞆片手にマリアはこれと言ったりアクションをする事なく、ナギと共に歩き出す。

「あの……………これ本当に咲夜さんのモノなんですか？」

「ああ」

ナギが至極当然のように答えた。

テルは目の前に存在する巨大な物体を見上げて呟く。

「船……………デカくね？」

ポーツ

と海に浮かんでいる鉄の塊は海に似合うかのように陽気な汽笛を鳴らす。

「コレ、なんてタ○タニツク号？」

「どこかで見たことあるデザインのカルーザーですね……」

「いや、クルーザーのレベル越えてない？ 世界一周ができそうな大きさを持つてる船をクルーザーで済ますのかお前は……」

もはや驚くばかりだろう。 ハヤテやテルの言うとおり、そのクルーザーはどこからどう見ても某映画に出てくる沈む船と形が一致していた。

「つーか咲夜つて誰だよ」

「この船の所有者だ。 私の幼なじみでもある……ほら、お前等もさっさと乗り込むぞ」

テルの言葉に短く答えて、ナギは船へと乗り込んでいく。 その途中でハヤテが口を開いた。

「でも、お嬢様、なんでいきなり船旅なんですか？」

「へ？ いや……その……」

何故だか理由を探すかのようなナギ。 その場は適当な理由で凌いだが、本当の理由はコレだ。

——実は1日前。

皆さんは知つての通り、お嬢様のナギは執事のハヤテに恋をしている。

しかし、最近ハヤテが他の女になびくという事を危惧して、彼との恋愛に悩んでいた。

そんなナギにも打開策が見つかった。 それは自分の書いた漫画。

ナギの書いた漫画は一般人には到底理解し難い、多分理解すると相当ズレている証拠と言われる内容だ。 ナギが刮目したのは書いていた時の主人公キャラとその先輩。

専ら恋愛ものだが先輩のクールな性格が主人公キャラがときめいている。

「なるほど……」

ナギは書いていたノートを戻した。

(恋愛に必要なのはコレ……つれない態度か!!)

ナギに取って理に叶った要素だ。

(確かに恋愛は追いかけるより……追いかけさせた方が勝ちという……)

十三歳がこんな知識を知っていても生かせるかというのが疑問だが、それ以前にハヤテはナギの事を恋人として認識してはいない。

悪意の無いアウトオブ眼中なのだ。

ナギはコレを知らない。

そんな事を知らず知らず、ナギは『つれない態度』を生かした作戦を考えた。

こう見えて天才なのですぐ思いつくが、恋愛に関しては知識だけの素人だ。

取り敢えずハヤテがナギを頼ってしまうシチュエーションを用意するように考えた結果……

「うわ——!! スゴい——イ!!」

太平洋を突き進む船上でハヤテが喜んでいた。

「クルーザーって初めて乗りましたけど……意外と速いんですね!!」

(予想通り初めてのクルーザーにテンション上がりまくりだな、ハヤテ……計画通りだ!!)

子供のようにはしゃぐハヤテを見て、自分の描いた脚本通り事が運んでいる事に笑みを浮かべるナギ。

「テルさん!! 見て下さいよ!! カモメが優雅に飛んでいますよ!!」

「オイオイ、こんなんではしゃいでんじゃねーよ。小学生かコノヤロー」

船の手すりに前からもたれるように、テルは遠くを眺めている。

「大体な、そうやって船の上でテンション高い奴に限って後半ですつとビニール袋片手に横になるんだよ」

「でも、貴重な経験ですよ？　気分が高まらない訳ないじゃないですか!!」

どこまでも気分上昇のハヤテは修学旅行の小学生のようだ。

ナギはどのタイミングで作戦を実行するか見計らっていた。

「お嬢さま、お嬢さま！　あっちには何かがあるんですか!?!」

(ここだ——ッ!!)

まるで今がその時だと言わんばかりのタイミング。

(今回の私は一味違うぞー！　ドアを押してもダメなら引いてみるという逆転の発想に基づいた作戦を見せてやる!!)

「知らん。　いちいち私に聞くな」

ナギはぷいっと素っ気なく返した。　どうだと言わんばかりに口元に笑みが浮かぶ。

だが予想とは打って変わって……

「あ……す、すいません……」

ナギが振り返るとハヤテがしゅんとした表情でナギを見つめていた。

(ばー！　ばかもの!!　そんな捨てられた小犬のみたいな顔を……)

このままでは自分が悪いみたいだとナギはちよつとした罪悪感を覚えた。

「と……!!　取り敢えず私はあつちでコーヒーでも飲んでる!!　船の中を見て回りたいなら一人で回れ!!」

一応、突き放す事に違和感を感じたか、ナギはそう言い残してその場を去った。

「また何かあったんですかね?」

「さあ、いつもの事じゃないですか?　でもなんか落ち込んでますし……」

テルと MARIA が一人シヨボンとしたハヤテを見てあれやこれやと

考察をする。やがてテルが仕方ないと言った感じで口を開いた。

「んじや、フオローは入れてやりますかね……」

「大丈夫なんですか？」

「マリアは冷静だが不安の色は隠せない。

だがテルは不適に笑って見せた。

「ま、見ててくださいよ。手はありますから」

「マリアは苦笑いを浮かべながらもテルに任せて二人を見守った。

「……………」

立ち去ったナギを見てハヤテはテルの隣に着くように手すりにもたれかかった。

「どうしたよ？ ブルー入ってんじやん？ ひよつとしてまださっきのこと引きずってんの？」

「どんよりしたハヤテにテルは陽気な感じで話かける。

「僕、またなにかお嬢さまの気にさわるような事を……………」

「あんま気にしないほうがいいっつーの、元々あんな奴だったじやん。

「あいつお前だけじゃなく、庶務課のレジ夫もチンしてんだよ」

「レジ夫って誰でしょうか？ オフィスのOL同士による昼休みの会話の男バージョンですか？」

「マリアがその光景を見て、静かに突っ込む。

「あいつもあんな奴だからお前も好きなようにするしかないじゃん……所詮は主従の関係だぜ、俺たちは……」

「エラく込み入った話になってるんですけど」

「甘ったれてんじやないよオオオ!!」

「ぶっ!!」

次の瞬間、ハヤテにグーパンチが炸裂した。

「負けんなア!! 強くなりなアア!! 東京に…自分に負けんなアアア!!」

「……………」

テルの一撃にハヤテは気絶した。

「手は尽くしましたが修復不可能でした……」

「完全にフォロー出来てませんよね!? 気絶させる必要なんでありませんよね!?!」

マリアも猛然と突っ込む。

「しかしホントどうしたんでしょね。ウチのお嬢は……」

「まあ、10月は改編期ですから納得いかない最終回でもあったんじゃないですか?」

「いや、リアルには今10月ですけど、作中は一月なんで……」

*これを投稿したときは実は十月だったんです。

○

「しかしまあサク、なかなか作りこんだ船だな」

汽笛が海空に響く。ナギは船の上で豪華に設置されたテーブルの上でティータイムだ。

ナギの目の前でコーヒーを飲んでいるのは短髪に左の髪にヘアバンドをつけた少女。

「ああさよか。そら良かったの〜」

関西弁を使うサクと呼ばれる少女は不機嫌な表情でコーヒーを口につける。

(……………)

ナギはそんな様子を見てか一言。

「別にお前が冷たい態度をとっても私はお前に惚れたりせんぞ?」

「なんの話やああ!!」

少女は立ち上がって怒り気味に突っ込んで見せた。

「さすがだな、本場関西のツツコミは衰えず」

「まったく……愛沢咲夜をナメるなちゅう話や……しかしやな……」
咲夜はそう呟くと高らかに叫んだ。

「なんでウチがこんなに遅く登場してんのやああ!!」

「ザコキャラだからじゃないのか?」

「なんやとおお!!」

怒り気味の咲夜はドカツと椅子に座り込んで続ける。

「可笑しい話やと思わんか?　なんでウチを最初の方で登場させなかつたんや!　幼なじみの中でもウチが最後やと?　ウチを生かすギヤグパートならいくらでもあつたやろオオオ!!」
(うるさいなホントに……)

ナギは咲夜の叫びを聞きながらそう心で呟いていた。

「あーイラついたらブラックじゃ足りんかってん、巻田、国枝、アールグレイ持って来てな」

「はいよ」

ゴト。　とテーブルに一杯のカップが置かれた。

「おおきにな……ん?」

咲夜が自分の執事の顔をみて一瞬顔を歪めた。　咲夜の知っている顔の執事ではなかったのだ。

「あんた誰やねんツ!!」

「ぐはっ!!」

咲夜はどこから取り出したか分からないハリソンで相手の頭を叩いた。

パシーン!と甲高い音が響く。

「ああサク、紹介が遅れたな。　コイツがハヤテ以外にウチで働いている執事、善立　テルだ」

「へ?　コイツが?」

咲夜が驚いた顔でテルを見る。

「こんな死んだ魚の目した奴がか?」

「あんだとゴラア!!」

テルは今にも食ってかかりそうな勢いだ。

後ろでは執事の巻田と国枝が日本刀を構えようとしている。

「変わった執事やな。　だがウチは笑いが取れなきや意味がないで

？」

「ほう、そうかそうか……ならそのコーヒーを飲んで貰おうか」

「なんやねん、コーヒーで笑いが取れるかって……あん？」

「うわ、なんだコレ……」

ナギもカップの中をのぞき込んで嫌な顔をする。

カップのアールグレイは何故か異臭を放つ鼠色の液体だ。

「なんなんや……コレ」

「ふっふっふ……セメントだ」

バリーイイン！

「ブルアアアッ！」

カップが割れる音と共にテルは床を転がった。 咲夜はセメント入りカップをテルに思いつきり投げつけたのだ。

「なんつーもん飲ましてんのや！ ウチが頼んだのはアールグレイやっちゅうねん！ グレイやからか!? グレイやからか!!」

「さすが本場関西のツツコミ……威力ともに半端じゃない……」

「今ので笑いが生まれるのかテル？」

「さあな、全国の斎藤さんは笑ったと思うぞ」

ナギが静かにコーヒーを飲みながら言う。テルは腕を組ながら答えた。

「斎藤!? 斎藤って誰やねん!? なんでピンポイントな奴しか笑い取れへんのや!!」

咲夜はまたしてもハリセンを振り回す。テルはそのツツコミ力には感心したようで

「素晴らしいツツコミ力だ。 銀○でなら新○に負けず劣らずのツツコミになれるはずだ」

「誰があんな地味なキャラになるかアアア!!」

悪魔で自分はツツコミだと、新○のようにまでキャラが薄くなるのは御免と言い張る咲夜。

「しかし、ウチにツツコミさせる技量はあるってことやな……」

「単にコイツが馬鹿なだけだ……」

ナギがボソツと一人呟いた。

その呟きのすぐ、ナギは咲夜に尋ねる。

「ところで一応伊澄も読んだと思うんだが……」

「どーせ伊澄さんは迷子やろ？ この船広いし」

「一行も出ていないのにやるな伊澄」

いつ何処でも迷子になれる伊澄、そのスキルは成長するばかりだ。

「ところで……」

「ん？」

「アツチにいるのは誰やねん？」

咲夜が指をさすと近くの手すり付近で巨漢と一人の少女がいた。

何故か少女は赤ジャージを羽織っている。

「太陽が……渴いている……」

風になびくのは赤ジャージとエメラルドの色の髪。

テル達はよく知っている。

日野寺 マユミだった。

「とうっ！」

マユミは盛大にジャンプするとアクロバティックにナギの前に現れる。

「ナギイイッ!! いぎ私と勝ー」

だが勢い余ってマユミはナギの頭に頭突きをかましてしまう。

ゴチンといった音がした。

「なんやテル、知り合いか？」

伸びている二人を見て咲夜がテルに聞く。

「まあ知り合いだ。 とうか俺呼び捨てなんだな」

「まあええやないか。 ウチはハヤテの事も呼び捨てやで」

「あまり図に乗るなよチビダヌキ、関西のノリが全国で受け入れられると思ったら大間違いだ」

「誰がチビダヌキやアアア!!」

咲夜は本日何回目となるぐらいのツツコミを入れた。

「マユミお前！　なんでこんな所にいるのだ!？」

「ハッ！　言ったでしょう？　あんた達だけに主役を張らせないで私も本編に絡むってね!!」

ナギとマユミもお互いに頭を押さえながら言い合う。

「そして何より……私のユ○ノオー達のリベンジよ!!」

マユミは懐からDSを取り出した。

「ほう面白い！　私の新しいパーティーに勝てるか?」

ナギもDSを取り出して対戦開始。　咲夜はその光景を見ながら

「へえ、あのナギに同じ年の友達がねえ……」

「ま、友達というかゲーム仲間……か？　仲が良い事になんねえけど」

「まあええことなやいか、ナギが楽しいならそれで……な?」

咲夜は自然と笑みを浮かべて楽しそうな二人の姿を見つめた。

「おやテル殿、良きクルージング日和ですな」

突然、テルと咲夜の影が更に大きな影に飲まれる。

振り返ると巨漢が。テルはまた忘れてはいない人物だ。

「なんだよシュトロハイム、お前も来てたのか?」

「当たり前です。　私はマユミお嬢さまの執事ですから」

シュトロハイムはニカツと歯茎が見えるほどのスマイル。

「うわ……デカいやん」

咲夜はシュトロハイムの迫力に圧倒されていた。

するとどうだろう。シュトロハイムは咲夜を見るなり、咲夜に近づ

いてきた。

「あなたが愛沢　咲夜さまでしょうか?」

ずいっとシュトロハイムは膝を織り、低い大勢をとる。

「え?　あ、そうやけど」

膝を織つても咲夜の身長よりまだ上だ。

シュトロハイムはゆっくりと口を開いた。

「今回許可なく咲夜さまの船に乗り込んだ事をお許しください。　マ

ユミさまがどうしてもナギさま達に会いたいと……」

「私はそんな事言っていないわよシュトロハイム!!」

遠くでマユミの声が聞こえたが咲夜は無視した。

「ええんよ。ナギの友達なんやる？ だったら大歓迎やで？」

「おお、なんと寛大なお言葉……シュトロハイム、感激です……」

シュトロハイムは嬉しい表情で頭を下げた。

咲夜は腰に手を当てながら高らかに言い放った。

「まあ大船に乗ったつもりでいればええんや！」

「大船……ねえ。 それよりタヌキ」

「誰がタヌキや、なんや」

咲夜がテルに睨むように返す。

「大丈夫なのか？ その、このあからさまに沈みそうなデザインで……」

テルが危惧しているのはデザインだ。 これで沈んだらまさに呪いといしか言いようがないが。

「アホか!! デザインで船の性能決めんな!!」

咲夜は頑なに否定して続けた。

「ええか？ タイタニック号の『タイ』は……タイガースの『タイ』やねんで？ せやから無敵やちゅーねん!!」

咲夜は人差し指を立てる。 このザ・大阪ダジャレには一回が口を揃えた。

「『沈むなこの船……』」

「沈むかあ！ 沈んでたまるかあ!!」

咲夜はバンツとテーブルを叩いた。

「この船は莫大な金がかかっとなねん!!テロリストに占拠されん限り、ウチの『タイ』タニック号が沈むわけは——!」

その時青空に、それこそ船の外にいる人間に聞こえるくらいの銃声が響いた。

○

一方その頃。

雲が流れる海空に響く一発の銃声。 船の外にいたものは誰しもがその銃声を聞いた筈である。

しかし、それは逆に

「あつれ〜 おかしいな〜 ここつてすごい広いよ」

船内にいたハヤテには全く聞こえていないのも事実だった。

複雑に入り組んだ船内に翻弄されながらハヤテはさまよっている。洋風のイメージがそのまま具現化された船内はまさしくあのタイタニック号。 これなら伊澄が迷子になってしまうのも頷ける程だ。

まあそんな事は置いて、ハヤテは別の懸案事項があった。

（お嬢さまの今日の様子、僕が何かしたとしか考えられない……見当なんて全然つかないけど）

理不尽な理由で売られそうになった事もあるくらいだ。 しかし、執事として主に粗相があつてはならないという責任感がハヤテにはあつた。

（なんとしてもお嬢さまの信頼を……）

取り戻すんだー！ と言わんばかりに廊下を駆け抜ける。 決意を胸にハヤテは船内を回るつもりだ。

そしてハヤテが通り過ぎた道に隠れる人影が一人。

「あれはあの時の執事か……」

まるでコナンのシルエットのような人物だが実際は黒スーツの男だ。

「さてさて読者の皆さん、俺の事を覚えている人はいるかな？」

否。多分この小説に目を通してくれた読者は誰もが口を揃えることだろう。

—アンタ誰だ？

「……酷いとしか言いようがないな。この華麗な誘拐犯、兼工作員のバルトを忘れるとは……」

—だから誰だよ？

とまたしても眉をひそめる読者の反応が予想される。

仕方がない。なんせ彼が初登場をしたのはこの小説が始まった1〜6話ぐらいしか出てないのだ。

「だが俺とて考え無しにここに在るわけではない」

バルトはポケットから黒い塊を取り出すとペタツと壁に貼り付けた。

「この作戦を生かせば俺も出番が増えるはずだ!!」

もはや流れ作業と言ってもいいほどぺたぺたと壁に黒い塊を貼り付ける。

果たしてこんな地味な事をしていて目立つ事ができるだろうか？

「地味なんかじゃないバルトだ!」

○

さて、場所は変わり甲板だ。

「あー! あー! 乗組員に告ぐ!! たった今この船は我々デオーズ・フリートが占拠したア!」

テル達の目の前には覆面をした完全武装の男が三人。

取り敢えず先ほどの銃声が人に向かっていなかった事が幸いだ。

「オイオイ、なんかヤバい事になってんぞ?」

テルが状況を見て呟いた。

「あいつ等あんな事言っているがどうするのだ？」

「世の中には命知らずの冒険野郎がいるもんやなく」

「取り敢えずナギ、もう一回勝負よ。砂パと晴れパ、どっちがイイ？」

そんなテルをよそにナギ、咲夜、マユミは至って冷静だ。

「あー、テロリスト諸君」

「なんだ小娘！ お前のようなチビに用はないぞ！ ロリはよそに行け！」

ナギの言葉にテロリストの一人が挑発するようにあしらった。

その瞬間、ナギの怒りが頂点に達した。

「乗組員や客には手を出すな。人質なら少ない方がいいだろう？」

「え？」

このナギの発言にはテロリストだけでなく、テルもそう思った。

あれだけ言われてナギがキレない訳がない。しかもその言い方はまるで自分が人質になると言わんばかりだ。

「お、おいナギ…お前まさか……」

「なんだ小娘、お前、人質を買って出ようってか気か？」

咲夜が冷や汗を浮かべ、テロリストだけは若干バカにするようにナギを伺っている。

「ああ。適任だと思っぞ」

ナギは悪魔でも冷静だ。その瞳には確固たる決意が見受けられる。そして真顔で言い放った。

「なんせコイツがこの船のオーナーだからな」

「——って!! ウチが人質になるんかい!!!」

ナギが指差したのは紛れもなく咲夜だ。しかし咲夜はその振りに動ずることなくツツコミを入れる。

「このように小さなボケも見逃さず見事にツツこむキレのよさ……」

「なに冷静に推薦しとんねん!!」

「そうだな。この状況であのツツコミができるなら将来芸人にもな

れる……」

「テル！ アンタまでそう言うんか!!」

(……………)

いつの間にか緊張状態は溶けてしまっている。 テロリスト達は覆面で表情は分からないが啞然としているだろう。

「まあ、この船を占拠するならスーク辺りを使うんだつたな」

ナギの言葉に咲夜がうんうんと頷く。

「せやな。 ま、ここにいる奴らはヒドく言えばアンタらよりおつかない連中やからなあ」

咲夜がニツと笑うとテロリスト達は周りを見て、自分達が黒服に囲まれている事に気付いた。

「ここからは音声のみでお楽しみ下さい。

「ギャアアアア!!」

約三分後。

「ぐはあ——!!」

船の床を転がるのはテロリスト達だった。 その様子をみる限りボロボロである。

そんなテロリスト達に、三人の男が一際目立っている。

「まったく……最近のテロリストは、鉄砲を持てば勝てるつもりでいる」

そう言いながら薬莢を拾うのは白髪のカイゼルヒゲの老人。 彼の名は三千院家の執事長クラウス。

「まったくなくてないです……」

「功夫がたりませんよ」

クラウスの言葉を肯定する台詞を言っているのは咲夜の執事である巻田、国枝。

「ぐ……な、なんて強い連中だ……」

「なのにごか紳士的な態度……お……お前たちはいったい……」

テロリスト達は強さと同時に合わせ持つ男達の態度に言いようが

ない圧倒感を覚えていた。

「愚か者め。我々が何者かも知らずにこの船に乗り込んでくるとは……いいかよく聞け」

クラウスは眼鏡を光らせて言い放った。

「我々はお嬢さまを守る…一流の執事だ!!」

「お嬢さまを傷つけようとする連中は我々が全力で排除する!! よく覚えておけ!!」

去り際に拾った薬莢を親指で華麗に弾く。決まったと云わんばかりの男達の背中である。

「なーんてカッコつけても、連中の侵入を許したドジは消えへんで?」

ギクツとさつきまでジェームス・ボンドのようなクールな男達は背中を震わしていた。

「私の出番はなかったですな……」

「まあ無理しなくていいんじゃないかしら? アナタ片腕だし」

眺めていたシュトロハイムとマユミ。シュトロハイムは陽気にもははっと笑っている。

「なんや、意外と好戦的なんか?」

「いえいえ滅相も、まあこうして平和に終わったのですからいいではないですか」

咲夜が悪戯っぽく聞いたがシュトロハイムは笑いながら返した。年の功である。

「んなことより、早くこいつ等縛り上げて吐くこと吐かせちやえよ」

「まあ、それはそうね。ナギ、早くテロリスト達を捕まえなさいな。

そして今度は私と組まない? アナタと私ならスーパーマルチトレインも100連勝も夢じゃないわよ?」

「お前は早くポ○モンから離れろ」

テルは溜め息をつきながらDSを片手に持つマユミに突っ込んだ。

「!!」

その時、テロリストの一人がマユミに目をつけて覆面の下でニヤリと笑った。

「ん？」

テルが見たのは懐に手を入れているテロリストの姿だ。

ぞわっと肌が震える。銃をまだ隠していたか、またそれに準ずる

何か

「オイ！」

テルが声を上げたが、テロリストは動じることなく何かを投げた。

投げた筒状の物体はある程度の高さに浮いてからコロんと床を転がり、大量の煙を吐き出した。

「な？ 煙幕だと!!」

クラウスの声が聞こえる。周りは煙に包まれている。

「ゴホッ、ゴホッ…な、なんなのだ？」

ナギの咳き込む声。船の上だから数も少ないし煙はすぐ晴れるはずだ。

なら短時間で奴は何をする気か？

「きゃー！ ちよ、アナタどこ触ってるの？ 離しなさい!!」

やがて煙が晴れて、聞こえてきたのは聞いた事のある声。

テルはその人物を見て頭に手をやった。

テロリストに首をかけられているのはマユミだった。

第23話く不幸の度合いは人それぞれく

「コラア！ 私を離しなさいああい!!」

船の上で起きたバカ騒ぎは三千院家、愛沢の優秀な使用人たちによつて治められたかに見えた。

だが状況は一変。テロリストたちの一人が煙幕を使い人質にマユミが取られてしまった。

「お前ら、近づいたらこの小娘の命はねえぞ!!」

男はがっちり腕をマユミの首にまわし、身動きが出来ないようにしている。さらには懐からナイフを取り出してマユミの首元に近づけた。

「むう・・・卑怯な」

クラウスが眉をひそめる。流石の使用人たちもこれでは身動きができない。下手に動けばマユミの命が危ない。

完全に裏をかかれた。失策だ。

「こら！ 人質にはこいつがなると言っていたではないか!! はやくマユミを離すのだ!!」

「だからその話まだ続いてたんかい！」

指さすナギに隣の咲夜は猛然と突っ込む。

「お前らほんとに緊張感ない奴らだな」

「お前にいわれたくない!!」

テルのつぶやきを見逃さず、ナギと咲夜は二人で突っ込んだ。

「ぐぬぬぬ・・・」

マユミを人質に取っていた男が心底苛立っているようだ。まったくもって緊張感の欠片もない状況に歯をかみしめる。

「お前らアアア！ この小娘がどうなつてもいいかって聞いてんだろ
うがアア！」

ついに耐えきれなくなった男が一同に向けて叫んだ。テルはうーんと唸ると素っ気なく

「え？ いいんじゃないに？ キャラもここらで減らして人数合わせ
みたいなかんじでいいじゃん？」

「あなたを海の藻屑にしてやろうかしら!!」

テルの一言にマユミが額に青筋を浮かべて叫んだ。

「くそ! 無事に助けたいんだったら、綾崎 ハヤテを連れてこいつてんだ!!」

「なんでハヤテなんだよ……」

「おそらくあれから暫くたって知れ渡ってる頃やろうからな……」

「知れ渡ってるって……何が?」

テルの問いに咲夜が説明をもの言わせず15秒で説明した。

「なるほど。 あいつ狙われてんのか……」

「ま、不幸にまみれるのはあいつの専売特許だからな……」

ナギが隣でうんうんと頷く。

「あいつを倒すためなら手段は問わないといわれている!!」

「手段は問わない? 誰に?」

「え? そりやうちのボスに……」

テルの誘導尋問にまんまとひっかかって男は喋ってしまった。

「おいおい、証拠一つにすべて自白とはな……」

「まったくや。 今時火サスでもなかなかあらへんで?」

ナギと咲夜の言葉に男は言葉を詰まらせてしまう。 しかしそれを振り払うかのように男はナイフを振り回した。

「うわっ! 危ないじゃないの!!」

マユミが驚いた表情で身をよじる。 男はさらに興奮状態が続いている。 あまりにも危険な状態だ。

クラウス達やナギ達も固唾をのんで見守るしかないと思われた。

「あー、あーテロリスト君、早くそいつを離れた方が身のためだ」

しかしこの状況で不意にもなりふりを構わない男がいることをお忘れなく、テルだ。

「お前、言つてたのが分からないのか? いうことを聞かないならこいつの命は……」

ギリリと刃物をちらつかせテルを睨みつける。 しかしマユミは特に恐怖を覚えたような表情はない。 それはテルにも分かっていたことだ。

テルは頭を掻きながら続ける。

「いや、ほんとに考え直した方がいいって」

だからなんだと言わんばかりの勢いだった男だったが、ここでテルの背後からゆっくりと何かが現れる。

ゆっくりと動き出したもの・・・それはシュトロハイムだった。

「.....」

身長が2メートルにも達するかもしれないほどの巨漢は、まっすぐにマユミへと近づいていく。

その瞳はまるで鷹のように鋭く、気高く。

まさに狩るものの目をしている。

咲夜はさっきと打って変わったシュトロハイムに戸惑っていた。

さつきまでは陽気な温厚の執事が、今はまるで眼光を赤くしたザクのモノアイのようにギラつかせている。

「お、おい！お前.....」

咄嗟に我に返った男だが途中で言葉を詰まらせた。その畏怖をも覚えさせてしまう威圧感に、男は言葉を失ったのである。

鷹のような瞳がマユミから男へと変わる。その瞬間、背中がゾツと凍りつき、あまり寒くはないのに、汗はだらだらと流れているのに歯がガチガチと震え始めた。

「.....」

無言のままシュトロハイムは近づいていく。手袋をした右腕に力が入る。力を込めた右の拳は測定不能の握力によりさらに肥大化したように見えた。

「お.....おま.....いま.....こいつが.....どうなる.....か」

男がようやく発した声はおそらく遠くのテルたちには聞こえないくらいのものである。完全に恐怖で言葉が発せられていない。ガチガチと震えているのは口だけではない。ナイフをもっている手も小刻みに震え始めた。

本来なら人質をとっているこちらが有利のはずだと男が思っていた。しかいどうだろうか、シュトロハイムは静かに静かに呟く。

「やってみろ」

その一言はもはや警告に近い。
シュトロハイムはゆつくりと拳を、突き出すためにテイクバックをとる。

より深く、より強く、より破壊力を生み出すために。

彼の、シュトロハイムの左腕はある事件を境に全く動かなくなってしまうている。

片腕だけの執事が主を守れるだろうか？ 難しいだろう。

だがシュトロハイムは自身の決意、友との約束のために何が何でもマユミを守るために片腕だけでも守ることを考えた。

それがこの右腕だ。

「……ッッツ!!」

男は黙ってシュトロハイムの一挙一動を震えながら見ることでしかできなかった。 やがてテイクバックがとまり、ピタリとシュトロハイムの動きが止まる。

タメは終わった。

実戦空手の父。 大山倍達はかつてこう述べている……

『体重×スピード×握力＝破壊力』!!

絶対破壊の方程式!!

突き出された拳が男の顔にピンポイントに突き刺さる。 若干、ねじりを加えた拳にそって男も回転方向に捻じれ、弾丸のような回転をしながら壁に叩きつけられた。

ドガツつという破壊音。 壁はもう機能を果たしてらず巨大な穴が開けられていた。

「威力は抑えました。 死んではいませんよ」

拳を自身の息でふうと払うとマユミに駆け寄り、膝をついてかがみこんだ。

「お怪我はありませんかお嬢様？」

まるで父親のような心配のし方でマユミの体に傷などが無いか

チェックする。何事もなかったかのように確認するとシュトロハイムはため息をついた。

「まったく、日野寺の頭首が人質にとられるとはまったくもって不用心です」

今度は叱るようにマユミに言う。はたから見れば完全に父親だ。

「不用心ではないわ。だってあなたが助けに来てくれるもの」

マユミはそれに対して屈託のない笑顔で返す。シュトロハイムはまたため息をついた。

「やはり大変ですな執事というのは……」

「あなたが自分で選んだ道でしょ？」

別の意味で頭を垂れるシュトロハイムにマユミはくすくすと笑った。

「えらい仲のいいことだなオイ」

「ホンマやな、親子みたいでええけどウチなら絶対反抗期迎えられへんで？あの姿をみてまうと……」

咲夜にとつてのシュトロハイムの印象は先ほどで大きく変わってしまったようだ。

「取り敢えず、あいつ等縛り上げて吐かせるだけ吐かせるか……」

「なら頼むぞ」

ナギの言葉に頷くとテルは倒れているテロリストに走っていった。

その後、事態が収まった為に甲板のテル達はテロリスト達を縛り上げていた。

「まったく世話かけさせる奴らだな……」

シュトロハイムが一層にきつめに縛り上げている。

「イタタタター！ お前ら、余り調子にのるんじゃないぞ」

テロリストの一人が反抗的な声を上げた。

「ああ？ 今どっちがお前らの主導権握ってんのか分かってんのか？」

「テル殿、悪役のセリフがお似合いですな」

シユトロハイムが陽気に笑った。先ほどの怒りモードはすっかり無くなっている。

（くくく……完全に油断しているな、まだ最後の手段が残ってるんだ！）

男は縛られた手に隠していた握って隠せるぐらいの物を取り出し、スイツチを……………

押した。

その瞬間、耳の鼓膜が震える程の爆音が発生した。

「うおっ!?! なんだ!?!」

爆発とともにテルはバランスを崩して床を転がる。船全体が揺れているのだ。バランスが崩れて当然だろう。

「爆弾が仕掛けられていたのか!?!」

「やっぱりデザインがアレやったからかな」

「んな事いつてる場合か!?!」

頭に手をやる咲夜にナギが叫んだ。

爆発が数回続いてきた事が振動で分かることから恐らく複数の爆弾が最初から仕掛けられていたのだ。

ちなみに仕掛けた張本人は後にすぐ爆発が起きたので巻き込まれて気絶中。

「おいサク！ ハヤテや伊澄は見つかっているのか!?!」

ナギが口にはしているのは勿論この場にはいないハヤテと伊澄の事だ。

咲夜は首を申し訳なきように横に振った。

「あかん……急いで回収しないと危ないで?」

咲夜も焦りを感じてはいた。爆発直後の事なのでまだ船が沈む

とは分からないが

「問題はハヤテよりも伊澄か……」

「まあそれもあるがどっちもどっちだろ、この場合……」

テルが顎に手をやるとナギが冷静に返した。

使用人たちも救命ボートに客達を乗せたりと大慌てだ。

「ふむ。 私達も人名救助に進んで手伝いますか……マユミお嬢さまは早めにボートへ」

シュトロハイムも崩れていたバランスを整える。

「私にもなにか手伝える事はないかしら？」

マユミはシュトロハイムの言葉を無視してナギや咲夜と向き合っていた。

「お、お嬢さま!? 危ないですから早くボートに……」

「アナタなに言ってるの!？」

慌てるシュトロハイムにマユミは若干怒り混じらせて返す。

「人の命が掛かってるの! 目の前の人達を助けられないで日野寺家が復活できるか!!」

「なんや、やけに熱心な子やないかい……」

「サク、あいつはそういう奴だ……」

ナギの言葉になるほどなと頷くとポンと手のひらを叩いた。

「まあそう言わずにな、執事の言う事はちゃんと聞かんとな?」

「あなたに言われる事は……」

マユミはムツとした顔になるが咲夜は笑いながら続けた。

「アンタの心配しとるんよ。ウチらもあの執事もな」

と、咲夜はシュトロハイムに目をやった。

「……分かったわよ」

マユミは少しばかり考えて、渋々咲夜の言う事を承諾した。

咲夜はニコツと笑みを浮かべてマユミの頭を撫でた。

「うんうん。この上なくエライ子やないか、ナギにも見習ってもらいたいものやなく」

陽気に笑っているとマユミは直ぐに咲夜の手を払ってボートに走っていった。

「シュトロハイム、怪我人がいるかもしれないわ。ウチの医療スタッフを支給回しなさい」

「御意」

シュトロハイムはそう頷くとマユミの後ろをついて行った。

「上手く操ったな……」

「こう見えても家ではお姉ちゃんなんや。下の子の面倒は得意やで？」

テルの言葉に咲夜はえっへんと言った顔で言った。

「テル君、ちよつと……」

「アレ？ マリアさん？」

今までどこにいたのか分からなかったマリアがいきなりテルを呼び出した。

「マリアさん、どうしたんですか？ 今までどこに……」

「そんな事よりテル君、ハヤテ君と伊澄さんが居ないのは知ってますね？」

「はい、さつき聞きました」

「そうですか……何かが起きる前に早く二人を探してきてくれませんか？ 時間もあまり無いので……」

「時間？」

時間という言葉にテルが反応する。マリアはそれに答えるように続けた。

「犯人がわざわざパニックにさせるためだけに爆弾を仕掛けたりはしません。多分沈ませるのが目的かと……数は5から6……しかもC4なので……」

「要するに船が沈むから早く二人を連れてこいと？」

「理解が早くて助かりますわ♪」

マリアは笑顔で返すとスツと踵を返した。

「ついでに相手のボスの方を捕まえてきてくれれば文句は無いのですが……」

「いや、直接犯人達のボスが現地にいるとは限らないでしょ……」

テルが頭を掻きながら返すが最終的にはそのボスを捕まえなくてはならない。テルは唸って承諾した。

「じゃあ行ってきます……」

「行ってらっしゃーい♪」

まるで我が子を見送るようなワンカット。テルは走りながら船内へと駆けて行く。

○

ゴゴゴ……

船内の中でもかなり下の方にある広い場所が地震のような唸りを上げている。

「痛たたた……なんだ……？ 急に爆発なんて……」

爆発によって吹き飛ばされたハヤテが瓦礫の中から這い出てきた。

「まさかやっぱ氷山に当たった？ この船デザインがアレだから何かあったら……」

瓦礫を押しつけてながら歩いていたハヤテはある異変に気付く。

「アレ？ ……なんか海水が真っ赤に見える……」

何故か視界が真っ赤になっていたので目を擦ってみると、腕には夥しい程の血が……

「うあ!!なんだこりゃ!? いっぱい血が出てるよ!!」

(いやいや落ち着け落ち着け……どーせいつものように次の行では何もならないになる! 実際なんともないツ!!)

自身に自己暗示を掛けるハヤテはその場でヒンドウスクワット開始。 体の丈夫さをアピール。

しかし……

「ばふっ!!」

当たり前の事だが出血が酷くなった。

「だ——!! そんな冗談言ってる場合じゃないよ!! と…!! とにかく止血しなきゃ!!」

慌ててハヤテは辺りを見渡すが周りには使えるような物はない。

ハヤテはパニック状態を緩和するために落ち着いて状況を整理する。

爆弾の数や種類、仕掛けた意図などをどこからか学んだか分からない知識をフル使い、考察した結果は沈没だ。

「凍てつくようなこの1月末の海に……」

身を震わす程の寒気が襲ってくる。 出血状態で水の中に入るとは自殺行為もいとこだ。

(とにかくどんどん水が入ってきてる…お嬢さまが心配だ。 上に戻ろう。 幸い後ろが階段で良かったよ)

ハヤテは真後ろにある階段に足を掛ける。

(危ない所だったな……)

どんぶらっ!

(この出血でこんな冷たい水に入る事になったら…ホント…)
どんぶらっ!

「死んじや——」

どんぶらこ。その言葉が繰り返される後方に目を向けると水で溢れている場所に箱に乗った伊澄が流れてきた。

「……………」

「……………」

ハヤテは状況を理解するのにワンテンポ置いた。

「で——!! 伊澄さん!? な!! なんでこんな所に!?!」

「それは……………」

「聞くまでもなく迷子ですね!! てか大丈夫ですか!?!」

理由を聞くだけ愚問だと考えられる。今は木材の箱の上に居て浮いているがいつ沈むか分からないこの状況で危険は避けたい。

「待っててください!! 今すぐに助けを——!!」

と伊澄の所に向かおうとした時、体が急に止まった。体が危険信号を放っている。

「……………」

ハヤテが止まったのは目の前に広がる海水だ。

この辺りの冬の水温は三度だそうです。

出血で体温が下がってる時に冷たい水に浸かると死ぬそうです。

○

「ぜえ…ぜえ……………」

ナギ達のいる反対方向。テルは勢い良く船内から外に繋がる扉を開けた。

「おーい、伊澄、ハヤテー」

辺りに声を掛けるが当然返事はない。

「オイオイ、このままじゃ冗談抜きでデイカプリオの最期みたくなつちまうつつーのに」

息を整えてテルは呟くが焦りは見える。

「アイツらどつちも憑いてそうだからな……」

憑いていると言っても伊澄には幸運の女神がハヤテには死神が憑いていると言ったほうが確実だ。

「俺には一体どんな女神が憑いているっていう話だが、まあいいか……」

自分に憑いているのはなんなんだと議論をしようと考えていたがそんな隙はない。再び船内に引き返そうとしたその時だった。

テルの目に謎の光景が飛び込んできた。

「……………」

「もぐもぐ……」

テルの目に映っているのは一人船の料理だったフライドチキンを食べている女性だった。

しかし注目するべきは服装だろうか。紺色の上から下が繋がっている、さらに首から十字架を下げしており、端から見てもその姿はシスターらしい。

(なんでこんな所にシスターが……避難出来なかったのか?)

こんな状況だ。避難に遅れてしまったと考えるのが普通だろう。

テルは声を掛けた。

「そのアンタ、飯食ってる場合じゃねえぞ、早く避難しろ」

「もぐもぐ……」

「あのう……」

「もぐもぐ……」

「もしもしイイツツ!!」

「む……」

大声によく気付いたのかシスターは食べていたフライドチキンを飲み込む。

「どちら様で？」

「それはこつちの話だアア!!」

まるで今まで居なかったようにシスターは自分の世界に没頭していららしい。

「よほど食べるのが好きなのかよ。ならいつその事ファミレスにでも行ってお子様ランチを注文したらどうだ？」

シスターは持っていたティッシュで口元を拭くと

「あんなチャラついたオカズに興味はありません。どちらかと言えば、私がお金の方が大好きです」

「ぶっちゃけやがった……物欲にまみれたシスターだな」

肩を落としたテルだが気を取り直す。

「向こうで三千院家やらの使用人達が避難させてるからアンタも早く乗った方がいいぜ？」

「三千院家？」

シスターはその言葉に反応する。

「……その服から貴方は三千院家の執事と見受けられますが？」

「まあそうだな。一応三千院家の執事だけど？」

テルの言葉に、シスターはくくくと口元で笑みを浮かべる。

「もう一人の執事さんはどうしたんですか？」

「ん？ ハヤテの事か？ 今は迷子らしいが……なんだよ、お前もハヤテ追っかけ組か？」

「まさか……でも、いいんですかね？」

「何が？」

先程とは変わってる雰囲気のススターにテルも眉をひそめた。そしてススターは言う。

「今頃は海の藻屑になってるかも知れませんよ？ 私達が仕掛けた爆弾で」

「ツツツ!!?」

一瞬だけ、思考が停止した。そして数秒の思考の後、ある結論に達する。

「あんたがテロリスト達を手配した犯人か！」

ススターは笑みを浮かべた。

「バルトさんも上手く爆弾を設置したんですね。流石と言っておき

ましよう……」

「アンタを先にお縄につかせる事が今は最優先事項だな……縄という単語に他意はないけど……」

またしてもススターは笑う。次に向けられた顔は凄まじい殺気を放った笑顔だった。

「元々、正体が明らかになったところで貴方を逃がすわけにはいきませんよ……」

ア○デルセン顔負けの笑みを浮かべるススターはどこからかトンファーを取り出した。棒にはトゲトゲが付いている。

「うわ、エグいの持ってんな、ススターの癖に……」

「今すぐあなたを天に召しましょう……」

トンファーが音を立てながら回転し始める。

ススターは振り回しながら突っ込んでくる。

執事はこの状況に苛立ちを込めた舌打ちをした。

第24話く忘れちやうものは忘れちやう。だってアホだものゝ

合いと共にトンファーがテル目掛けて降り下ろされる。

バキインツという音が響く。シスター渾身の一撃はテルに届くことなく手すりを代わりに破壊した。

「どんなパワー持ってたんだよ!?!」

完全に破壊された後を見て、背筋が凍りついた。女性の腕力で成せる物だろうか。

シスターの追撃が更に続く。

右手のトンファー、左手のトンファーが交互にテルの顔面に迫ってきた。

「チツッ!」

舌打ちの後、身をかがめて右手のトンファーを避ける。だがシスターは見越していたように左手のトンファーを振り上げてしゃがんでいるテルに振り下ろした。

ドゴンツ、という破壊音が響く。テルはなんとか一撃を避けていた。振り下ろされた場所は小さなクレーターが出来ている。

お互いが距離を開けた。

「なかなかやりますね、流石は三千院家の執事と言った所でしようか……」

先に口を開いたのはシスター。トンファーをブンツと振って払うと床に血がつく。テルの血だ。

「避けても下手すればキズが増えるか……」

テルの頬から少量の血が流れている。シスターのトンファーにはトゲトゲが付いている。かすればそれだけでダメージを受ける仕組みだ。

「迷える仔羊を導くのが役目ですから、救済は速い方が良いでしょう？」

「聖職者としての職務を全うするのは構わねえがやり方がえげつねえ……」

吐き捨てるように顔の血を拭き取る。

「ここには関係ねえ奴らがいるってのにな」

「私の悲願を考えれば犠牲も致し方なし……」

祈るように両手を合わせる。その姿はまさしくシスターそのものだ。

「悲願だとかなんだか言おうが関係ねえ……最初からハヤテだけを狙えばいいのによ」

そう呟きをいれて、シスターはまた駆け出す。

何時までもやられっぱなしのテルではない

「調子のんなよ……ツツ!!」

テルは近くにあったテーブルを持ち上げてシスターに向けてブン投げた。

「そんなものが……」

シスターは特に避けるような仕草を見せる訳でもなく、投げられたテーブルに突っ込んだ。

バキインツと木製の白いテーブルがトンファーにより破壊された。

「通用するとも思っていたのですか？」

破壊したテーブルの中を駆け抜けてシスターは跳び蹴りをテルにお見舞いする。

跳び蹴りはテルの溝落ちに突き刺さるように入った。

「ぐえっ！」

苦痛の表情と共にテルは後方へ吹っ飛び、床を転がった。

着地を決めたシスターは不適な笑みを浮かべる。

「さあ息の根を止めてあげましょう」

トンファアーを回転させながらシスターが迫る。

(ダメージが深い……直るまで後何分、いや、そんな事は関係ねえ……)

今度は避けられないようにシスターは今まで以上にスピードを上げて接近してトンファアーの一撃。

ふらつくテルはマトモに食らってしまった。その気を逃さまいとトンファアーが執拗な連撃を繰り返す。

(俺はコイツを許せねえ……他人の事なりふり構わねえで好き勝手やるこいつ等を……そしてなにより)

連続する一撃に必死に耐えるが、確実にダメージは蓄積される。

(俺が折れちや……しまいだろうがよ……)

「ふんっ!!」

連撃の締めとしてシスターは頭部へ蹴りを直撃させた。

なす統べなくテルは床に仰向けに倒れる。

「武器を持っていれば良い勝負になっていたかもしれませんが……こ

「これまでのようですね」

シスターは倒れているテルにトンファーを振り上げた。

「私の一撃はコンクリートブロック三枚を軽くぶち破る位の威力があります……」

シスターにとって、それは神の宣告、否。死の宣告だ。

目の前に死という物をちらつかせる時、人間は最大の恐怖を覚える。そして死ぬ瞬間、今までの出来事が流れてくるのだ。

歯を震わせ、涙ながら顔を歪ませるだろう。

「……………」

だが、テルは引かない。

そこに絶対的な死が待っていたとしても……

「やってみろよ……」

どこかでシュトロハイムが言った一言と似ている。

鋼のような強い意志。

決して碎ける事のない魂。

だがそれを具現化する象徴がない。

「虚勢を張った所でどうしようもありませんよ？」

「うるせーな……」

例え虚勢と言いつ張られても、彼は諦めない。

「何が何でも邪魔してやるよ……」

己が己自身を通す為に……

「哀れね……貴方は」

最後にトンファアを回転させると、そう眩き、頭部へ振り下ろした。

ゴキン!と聞こえてはならないような音がした。

テルの右腕が空を掴むように震えながら伸びるが、ガタツと糸が切れたように崩れ落ちた。

「……テル君?」

ボート付近では皆の帰りを待つマリアが不安げな表情で眩いた。

○

「テル! 起きてるの? 早く来なさい!」

早朝。 やたらと五月蠅い声が部屋に響いた。

「なんだよ、まだ6時だろ? ゆっくり寝かせてくれよ……」

「あんたに拒否権はない」

寝ぼけ眼のテルを布団から引き剥がし引きずっていく女性。

朝食をとり、支度をしてみるがなかなか眠気は取れない。

「んで、どうして朝っぱらからココ(道場)なんだよ……」

くあつと欠伸をするテル。女性は腕をくんで説明する。

「決まってるじゃない。朝稽古よ」

「いや、道場に来る理由はそれしかねえけど、あまりにも時間が早すぎやしねえか？」

「そうね……」

と女性は組んでいた腕を解いた。

「アンタがこれから生きてく上で沢山の壁にぶつかると思うの、テルには鋼のように固い意志と砕けない魂を持つてる……精神論的な事を言うと、いかに屈せず立ち向かえるか……それを身に付けていく事がこれからの課題——」

「んぐがくごおお……」

「……………」

ゴキン！とテルの頭に拳骨が飛ぶ。

「なんで寝てるのよ……」

「わざわざ殴んなよ!!」

床に頭を突っ伏しているテルは女性に言う。

女性はため息をついて一言。

「アンタが誰かを守る為の力を身に付けるって言った方が分かりやすいかしら？」

「……………」

守るという言葉に、テルはなるほどと頷く。そして女性と向き合った。

「分かった…… 教えてくれ先生」

その瞳は力強い意志を宿した瞳だった。それを見て安心したのか女性も頷く。

「よろしい。じゃあ死ぬ覚悟は出来たわね？」

「へ？」

謎の一言にテルは顔をへの字にする。

「なんで朝早くからやると思ってるの？ その頭に今日からじっくり叩き込んでやるためよ」

「ちよ、ちよつと待て！ 今日からって、明日もやるのか!？」

「多分、未来永劫?」

至極当然のように女性は返す。

「後、相当な激痛を伴う事を頭に入れておいて？ 一応、湿布と薬は山ほどあるけど……」

「何がこれから始まるんだよ!？ 何が俺を待ってるんだよ!？」

「よーし、始めるぞお」（棒読み）

「無視するなアアアア!!」

最後に女性は振り向きざまに笑って見せた。

「それじゃ、私が一番得意であることを教えるね」

その笑顔をテルはよく覚えている。

○

場面は戻り、船の甲板。 シスターが目の前のテルを見つめていた。

テルは動かない。

「……アーメン」

最後にシスターは胸の前で十字架を指で作って祈った。

そして何事もなかったように、その場を立ち去ろうとした。

その時である。

「待て……」

まさかの、ここで聞いたことがある声。耳を疑った。

「ツツ!!」

素早く振り返るとそこには有り得ない光景が……

「まくだ終わってねえんだよ」

立っている。テルが立っているのだ。

「貴方は何でできてるんでしょうか？」

不気味にシスターはテルに聞いた。テルは血を流しながらも返す。

「俺は昔からガンダニウム合金でできてる位頑丈なんだよ」

いつものテルだ。シスターは戸惑うがテルの状態を見てフツと笑う。

「ですがもう虫の息……立ち上がった所ですぐやられるのは見えてます」

テルの状態ははつきり言ってマズい物だ。頭はとめどなく血が流れている。

出血多量で倒れるのは明白だ。

「言われなくても、すぐ終わらせてやるよ。丁度、思い出したな……」

『思い出した』という言葉に、シスターは顔をしかめる。

テルは一人ある所に向かう。先ほどシスターが破壊した手すりだ。

「お、コレ良い感じじゃん」

そこで拾い上げたのは破壊された一本の棒。壊された手すりが一本の鉄の棒になっていたのだ。

そして……

テルは構えた……

「なんのつもり……ッツ？」

その姿はまるで刀を持った日本の武士、サムライ。

鋼のように固い意志を持ち、自分を通す姿に似ていた。

「俺は一番大事なのを忘れてたな……」

先ほどとは違った表情を見せるテル。

笑っている。だがその内を読み取る事は出来ない。

「なら、そんな棒切れ持った所でッツ!!」

シスターは一気に駆け出す。先ほどと同じく、スピードで迫り、トンファーを殴りつけるように繰り出した。

当たった。確かな手応えがある。加えて、テルはただ水平に構えていて振り抜いていたが全て避けたのが分かる。

(ただの虚勢……のハズツツ)

勝利を確信したシスター。しかし……

バキインツ！と破砕音。シスターは目を疑う。自分の左腕の

トンファーが折れたのだ。

「~~~~ッツ!!?」

シスターは驚きを隠せない。テルはシスターの一撃も避けて、尚且つ武器をも破壊していた。

「貴方……一体何者？」

シスターが疑問の言葉をテルに投げかける。

テルはニヤリと笑って答えた。

「簡単に教えてやる……俺が三千院家の執事だ」

その強く、気高い魂、鋼の意志はより一層、輝きを増す。
その力を伝って、鉄パイプが黒い輝きを増す。

— 剣術は私の専売特許、ついてこれるかしら？

「遅くなったけど悪いな先生、ようやく思い出したしぜ……」

またテルは不適に笑った。

○

潮風が靡く。シスターがいる場では信じられないことが起こっている。

確かに奴は自分の一撃を貰い、倒れた。

なのに立ち上がった。

驚くのはそれだけじゃない。自分が見切れないまでに、奴の攻撃が自分の武器を砕いた。

「剣術……ですか？」

「ん、まあな……昔ちよいとな？」

慎重に伺いながらシスターは問うがテルは素っ気なく返す。

あまりにも可笑しい話だ。シスターにとっては……

仮にも、先ほどはパワー、スピード、どれをとっても上回っていた。それをちよつとやった程度に学んだ剣術で自分が翻弄される訳がない。

(この男は危険過ぎる……計画の邪魔にならないようにするために、

消す!!」

今、ここでツと言わんばかりに、シスターは残ったトンファアを片手に駆け出した。

「そろそろ、終わりにしようや……」

駆けてくるシスターを見て、テルもまた構えた。 といっても目つきや雰囲気が変わっただけで鉄パイプの位置はなんら変化はない。

普通なら真上に構えるか、両手で臍の辺りで構える。

だが、彼はそうしない。

それが彼なりの、テルの構え方なのだ。

「これで……」

唸りをあげたシスターのトンファアがテル目掛けて迫る。

放ったトンファアは頭から振り下ろされた。

轟音と同時に、激しい土埃が舞うがそこにテルは居ない。

「消えた……ッ!?!」

呆気に取られたシスターが真横に感じた気配に目を向けると鉄パイプを振り上げているテルの姿が見えた。

「……………」

鋭い目はしっかりとシスターに向けられている。 今までのような死んだ魚の目ではない。

完璧な隙。 タイミングを計られて避けられ攻撃される。

(ま、マズい……)

回避不可能。 そんな言葉がよぎるなか、鉄パイプが振り下ろされ

た。

バキインツ!!

「……………」

空に響く破砕音にシスターは耳を疑う。

体を殴られた訳でもない、シスターの右腕のトンファーが破壊されていたのだ。

(最初から武器だけ……を?)

「ふう〜」

武器から破壊した理由を考えている時、テルはいつものようにダルそうに息を吐いた。そして

「ハイ、終了〜〜〜」

と言い放ったのだった。

「え?」

シスターはまたしても訳が分からない状態だ。

「もう終わったんだつつうのが聞こえてねえのかコノヤロー。お前はもう戦える武器が無い……なら、もうこれ以上やり合った所で無駄じゃねえか……」

テルはシスターに対してダルそうに返す。

「……情けのつもりですか?」

シスターが怒り混じりに投げかける。シスターにとって、それは侮辱とも捉えられたのだろう。

「バーカ。そんなもんかけるぐらいならご飯にでもかけるわ……」

頭を搔きながらテルは続ける。

「俺は俺のルールを守った。ただそんだけ……」

「くっ……!!」

テルの言葉にシスターは歯を食いしばった。

一向に訳が分からない。なぜ、トドメをささないのか、そんな美意識を貫いた所で自身の得になる事があるのか？

シスターは困惑するばかりだった。

だが分かっているのは、自分が目の前の少年に負けた事。

「んじや、お縄に掛かって貰うとするかね」

自分がまだ捕まっただけとはいけないという事だ。

「簡単に捕まると思ったら大間違いですよ……とー」

シスターは一步下がると懐から丸い球を地面に投げつけた。

打ちつけられた球はバホツと音を立てて、白い煙が辺りを包んだ。

「好きだよな、煙幕……」

煙に包まれた場は何も見えない。やがて煙が晴れて辺りを見渡すと、そこにシスターは居なかった。

遠くの方でモーターボートが海を突っ切って行くのが見える。

恐らくシスターの物だろう。

「チツ……逃げられたか」

舌打ちをするが直ぐに頭を切り替える。早くハヤテ達を見つけなければマジメにディカプリオになってしまう。

「多分コッチか？」

テルは持っていたパイプをポイツと放り投げて走り出した。

○

方向をほとんど勘で走っていたテルは船内の広い場所に出た。

「俺の勘も捨てたもんじやないな……」

テルの見据える先には伊澄が、ついでに何故かナギがいた。

疑問を抱いたが悩むだけ損というやつだ。テルは二人に近寄る。

「おーいお前ら！」

「テル!？」

「テル様？」

二人が驚いてテルを見る。それもそうだ。シスターとの戦いで血だらけになったままだったからだ。

「事故にでもあったのか？」

ナギがそう言っただけでテルに聞く。

「まあ、そんなとこだ」

テルがなんともないと言った表情だ。ナギとしては相変わらず訳が分からないと言った様子である。

「なんでお前らこんな所にいるんだよ？」

「ああ、そうだ！ ハヤテが!!」

ナギが思い出したかのように声をあげた。

ナギは掻き摘んで事情を説明。

「おいおい、どうしたらハヤテはそんなファンタスティックとは程遠いトラブルに巻き込まれるんだ？」

「ハヤテが鮫を倒して沈んでから全く上がってこないのだ！」

ナギは不安そうな表情でハヤテが沈んだ海面を見つめる。

「……つたく、しようがねえな」

そう呟くと、テルは頭を掻きながら近くのコンクリートの残骸を持ち上げた。

「な、何をやっているのだテル!？」

テルの行動にナギはもはや馬鹿をやっているとしか見てはいないだろう。

「時間がねえ、早く沈めるように重りを持っていくだけだつっうの」

身の丈の半分の残骸を持つテルはふらふらと歩きながら海面を見据える。

「んじや、なんかあつたら頼むわ……」

「え、ちよつ……」

ナギが言い終える前にテルは水の中へダイブした。

—数分後。

「ぷはあああつ!!」

海面から勢い良くテルが浮かんできた。　ハヤテも一緒だ。

「ハヤテ、ハヤテ!!」

ナギが涙目になりながらハヤテに問い掛けるが返事はない。気絶しているようだ。

「流石ですね、テルさま……」

落ち着いた口調で伊澄が言うがテルは頭を描いた。

「ま、いろんな借りがあるからなコイツには……」

テルは引き上げたハヤテを背に乗せた。

「早くしねえと、見事なまでにデイカプリオの作り出したワンシーンになっちまうぞ」

「安心しろ、私達は女だ。　最後は生き残れる!!」

「バカ言つてねえで行くぞ……ん？」

テルが階段に足を掛けた瞬間、近くに倒れている男が目に入った。

「なんだあの男は……」

まるで初対面のような顔だが一度は出会っている人間だ。

「誰だじゃない！　バルトだアア!!」

ナギの声が聞こえたと男はガバツと身を起こして叫んだ……が。

「……………」

ワンテンポ。

「……………」

またワンテンポ。

「……………誰?」

「だあああ！　そこまでテンポを置いて誰も覚えてないのかあああ!!?」

「いや、テンポ、関係ないし」

ナギが素っ気なく言う。バルトは膝をガクツとついた。

「クソツ！ 爆弾配置したらすぐ目の前で爆発して気付いたらこんな所に……」

「お前が爆弾配置した犯人か……」

ナギが目を細めて迫るがバルトは顔を俯かせたままだ。

「おいコイツ反応しないぞ」

「この人誰でしょうか……」

「伊澄、そのリアクションは今やるには遅い」

バルトを除いたトライアングル会議が開始されている最中、テルが呟いた。

「とりあえず、帰るか？」

その言葉にはみんなが首を縦に素早くスイング。

皆それぞれに階段を上っていく。

「お前も早くこないのか？」

ナギや伊澄が上っていく中で、テルがバルトに尋ねた。

「フ……作戦も失敗した。上司に見捨てられ、希望も明日もないこの世界で俺が生きていく必要はない……」

まるですべてを悟った詩人のような境地を垣間見せるバルト。

「分かってねえな……」

テルが頭を掻いた。

「希望も何も、それらを見出すのはお前自身だ。いつまでも上に捨てられたとか言ってるじゃねえ、都合だ。上司にも頼らないで明日を切り開く事ができる瞬間じゃねえか……」

「……………」

紡ぐ言葉に、バルトは言葉を詰まらせた。

そうだ。今、出番が少ないとか、上司が捨てたという理由で明日を諦めるのは実にくだららない。

自分の目の前に新しい場所がある。境目を前に自分は佇んでいた。

今までに見切りを付けて、己の道を歩むまでだ。

なら……

「分かっているじゃねえか……」

境目を越えるためには何をやる？

「決まってるじゃねえか、その足は上がってんだろ？」

そうだ。今、新しい道をバルトは行く決意する。

「なら、その一歩を踏み出すのになんの迷いがあるんだよ」

気付けばバルトは立ち上がっている。

新しい決意のある顔に。

○

少年、綾崎ハヤテは海に沈んでいた。

(お嬢様、大丈夫だったな……良かった)

自身の事より、他人の心配をするのはこの少年のサガだろう。

体には全く力が入らない。瞼も重くなってきた。

(お嬢様……すいません)

そう呟いた後に何かが自分の腕を掴んだのが分かる。

それが最後に見たハヤテの映像だった。

「……おーい、謝るなら早く目を覚ませってんだコノヤロー」

「アレ？」

「アレ？ じゃねえよ。アレキサンドリアがそんなにいいかコノヤ

ロー」

臆気な眼を開くとテルがいた。更に周りにはナギが、マリアが、

伊澄が、咲夜が、マユミが、シュトロハイムがいた。

「ハヤテ!!」

「テルさんが助けてくれたんですか？」

「ま、お前をサルベージしたのはそうだけどよ。実際治療したのはマユミの医療スタッフだ。感謝しろよ」

ナギはハヤテに声をかけるがハヤテはテルに聞いている。

気を取り直して

「ハヤテ……」

「まったく、鮫と戦えるのはなア世界が変わったとしても花山薫だけなんだよ」

今度はテルによりナギのコンタクトは遮られる。

それを聞いたハヤテはシュンとする事はなく逆に

「でも、助けてくれて……ありがとうございます……」

「ツツツ!!」

突如として、ナギの全身を雷撃が突き抜けた。その電圧、約百億

ボルト、雷に匹敵する衝撃だ。

何故か素っ気なく返したテルに対して、ハヤテが胸キュンした可愛いらしい乙女に見えてしまったのだ。

「お前からの礼はいいや、不幸をもらうのと一緒にだからな」

更にテルのこの連れない態度。ハヤテの背景にはジャポントー
ンが見えた。

(いかん、いかんぞ……)

では皆さん、ここらで今回のナギの作戦の内容を思いだしてみよう。

分からなかった人は廊下に立とう。もしくはメダパニダンスを

友人に披露してこよう。

マリアは苦笑いをしている。

マユミはDS片手に厳選作業(ポ○モン用語)

シウトロハイムはクラウスと年寄り談義。咲夜と伊澄はお互いに
漫才の練習。

―何故か男はつれない態度に心ときめくという……

「ヌアアアアアツツツ!!!」

ナギは雄叫びをあげながら救助船の外に出た。
主の心配ごとがまた増えたのであった。

—え？ バルトは一体どうしたかつて？

—数日後。

ここは東京どこかにあるラーメン屋、ラーメン辰也。

今日も店主、辰也の歳を感じさせない活きのいい声が聞こえる。

「辰也さん、なんだいバイト雇ったのかい？」

「あ？ あのクソガキが押し付けて来やがったんだよ……おい新人！

早くとんこつラーメン持って来い!!」

辰也は奥の厨房にいる人物に怒鳴り声で呼びつけた。

「新人じゃない……」

ラーメン屋の服を着た男はお盆片手に現れて言うのだ。

「バルトだ。 後、好きなのはダークモカペプラーチーノな」

「お前ここ辞めてスターバックス行けエエエ!!!」

ラーメン辰也には一人、ラーメンをつくる外国人が現れて、更に賑やかになったとき。

第25話〜第二部だけどスタートはなるべく早いほうがいい〜

皆さん知っているだろうか、数奇な運命から始まり、貧乏人から執事になった少年の話を……

知っているだろうか、更にひよんな事から執事として仕える事になったもう一人の少年のことを……

「ズル……ズル……」

何かと寒いこの1月の下旬。 三千院家の執事、善立 テルはラーメン辰也にて昼食中だった。

今日頼んだのはとんこつラーメン。 香ばしいとんこつの香りが仕事疲れの嗅覚を刺激する。

「ふう……」

あらかた食べ終わると大きく息をついた。

「なあテル、一体その包帯はどうしたんだ？」

そう問い掛けるのはこのラーメン屋の店主、辰也 次郎である。

九十九里浜にて意識不明のテルを拾い、世話をした人物。

「うん？ 船に乗っていたらテロリストがやって来て襲われたりした」

「ハア？ 外国じゃあるめえし……」

「全くだな……」

辰也を肯定するように現れたのはこの店のアルバイトであるロシア人のバルトだ。

実はそのテロリストの一味だったりしたが、現在はこの通りラーメン屋のアルバイトである。

「つーか、この店大丈夫なんだろうな？」

「何が？」

辰也は頭上にクエスチョンマークを浮かべる。

「何って……地上げ屋共だよ、前に追い払ったやつ」

以前、このラーメン屋には質の悪い地上げ屋が頻繁に出入りしていた。

数々の商業妨害がラーメン屋の客足が悪くなった原因でもあった。「あれ以来全く来なくなりやがった。もう妨害される心配はねえ」「こつちの問題は解決か……俺は抱えた借金の問題があるのによお……」

テルには借金がある。しかし、そんなじよそこらの金の貸し借りではない。その額六千万円也。高校生が人生を棒に振るには充分。「お前は何も考えなくていいんだよ。元々この店が作つてた借金だ。何が何でもあのお嬢ちゃんに返してやるからよ」

辰也は黙って皿洗いをする。テルとしてもそうしたいのは山々だ。だが借金の明細が自分宛てになってしまつているため否応無しという状況。

「辰也殿に心配をかけさせるのは頂けないな、急いで借金を返せる方法を考えろテル」

バルトが腕を組ながら言うのをテルは黙って聞いていた。

しかし、この男にそれを打開できる程の思考能力があれば、アインシュタインの相対性理論もフェルマーの最終定理もいと簡単に理解できるだろう。

(しかし、六千万か……)

テルとしても何とかしたいと言うのも事実だった。

○

ひとまず屋敷に帰宅したテルはいかにして六千万の借金を返すかに悩んでいた。

街金はもつとも危険。宝くじは当たらないのは目に見える。競馬はできる歳ではない。

「臓器……」

思わず呟いてみたが慌てて首を振る。

(アレ？俺の現在の労働意欲って借金を返すだけだよな……)

借金をいかに返すというのが現在の労働意欲になっているという事に気づいたテルはなんとも17歳らしくない思考をしていると切実に思ったという。

○

「むう……」

「ん？ なにしてんだナギ」

屋敷の廊下に、とても小さい少女が一人。

「……………」

声を掛けた金髪ツインテールの少女は反応しない。何か不機嫌な事があったのだろうかとテルが察知したのはその横顔だ。

鋭い眼光、つり上がった瞳は手に握られている一枚の紙に向けられていた。

「2月1日……白皇でマラソン大会なんですか……へえ〜」

「うおっ!？」

背後からの突然の奇襲にテルは驚いて振り返る。

「ハヤテ、なんでお前はいきなり現れるんだよ!!」

「嫌だなテルさん、神出鬼没は執事の専売特許ですよ?」

水色の髪をした少年、綾崎 ハヤテは当然のように返す。

彼は、綾崎 ハヤテはテルと同じ三千院家の執事である。

ロボをなぎ倒し、トラックにひかれても死ぬことのない超肉体を持つ。最近はやメを倒している実は体を改造されたサイボーグ執事

だったり……

「そんな設定ありましたか?」

「頑強過ぎるのに越したことはない。あと、実は地上最強の生物と

肩を並べれる存在だとか……」

「だからそんな設定はありませんよ」

ハヤテは淡々と念を押すように言うがテルは頭を掻いている。

「んで? マラソン大会があるって?」

テルは先ほどのハヤテとの会話の流れを電車の線路を変更するか

のように変える。

「……ええそうですけど」

先ほどの仕打ちにいささかムツとしたハヤテだが心を落ち着かせる。

「ま、出ようが出まいが関係ないけどな」

「どうしてですか？」

「だってまず、一人は確実に出ないってのはわかってんだから……」

テルのだらけた視線の先にはナギがいた。

「よしッ!!」

ナギは大戦中、敵艦に自爆特攻する兵士のような決意したような表情になると高らかに言い放った。

「2月1日は休みだ!!」

「な?」

テルが分かっていたかのように呟き、ハヤテは苦笑いをしていた。

「なくに朝から固い決意で自墮落になってるんですか?」

「痛っ!?!」

突如、ナギの頭に馬場チョップが入る。

馬場チョップを入れたのはメイド服を着た女性、マリアである。

容姿端麗、才色兼備が似合う彼女、そこから醸し出されている雰囲気

気は大人そのもの……だが実はまだ17歳だという。

ちなみに「まだ」という言葉はハヤテやテルも口にはしない。そ

れは基本マリアにとってNGだからだ。

「な、なんだマリア! お前はこんな死人が出そうなデスマーチに参

加しろと言うのか!?!」

「そんな大袈裟な……」

まるで世界の終わりかのような顔をするナギにマリアは動じず対処する。

ようはナギは運動嫌い。しかも筋金入りの。だから主であるナ

ギのあしらい方は大体分かるのだ。

「でもお嬢さまは13歳ですから、高校生が走る距離は辛いのでは？」
「そーだそーだ!!」

ハヤテの言葉にナギが非難の声。　しかしこれにもマリアは動じない。

「大丈夫ですよ。　そのために参加する距離は自由に選べるんですから。　必ずどれか一つには出て下さいね」

ナギから取り上げていたマラソンの用紙をヒラヒラさせながらマリアが言う。　しかし、

「ハヤテ、ケガは大丈夫か？」

「え？　あ…全然平気ですよ？」

「聞きなさい!!」

マリアの説明よそにハヤテのケガの具合を聞くナギ。　明らかにわざとらしい。

「おいナギ。　何時までもだらけた生活送ってんじゃねーよ。　いいか？　運動はな、適度に行う事で免疫力が上がったり、体に良いことだらけなんだぞ？　年中引きこもりのお前が巣から出て飛び立つ時が来たんだよ」

「テル、色んな意味で頭、大丈夫か？」

「ぶちのめされたいか主殿？」

「……………」

もうマリアは言葉を発しなかった。

○

「しかし、お嬢さまのアレも筋金入りですね」

「ええ、なんとかしなくてはと思っではいるのですが……」

「アイツの場合、スポーツに対する関心のベクトルがまるで逆ですからね」

食堂にて、使用人3人は自身の朝食をとっていた。　主より後で食事をするのは使用人達のルールである。

「ハヤテはこのままでいいなんて、思っていないだろ？」

「まあそうですね……運動嫌いが無くなれば部活も始めるだろうし、外に出る事も多くなりますから」

ハヤテも執事として、主の、ナギの運動嫌いをどうにか出来ないかと考えていた。

しかし現実には厳しく、本人にその気はない。最早ナギには運動健康有害が図式化されており、まさに一方通行なのだ。

しかし、主を導き出すのもまた執事の使命。

「お任せください」

ハヤテはお腕の上に箸をパチツと置いた。

「お嬢さまの執事として僕が必ず……マラソン大会に参加させて見せます!!」

「おお、ハヤテが何か決意したような眼差しに!!」

テルはウインナーをご飯と共に食べながら熱いハヤテを見ていた。

○

そんなこんなで、ナギの改造計画が始まった訳だ。

ハヤテが大会に出るという口実で一緒に練習するというのが流れ。

最初こそ嫌そうなナギだったが、仕方ないといった感じで練習する事になった。

(大丈夫!!この練習中にスポーツの楽しさに目覚めれば……お嬢さまだっけきつと大会に出たくなるはず!!)

しかし、ハヤテのその思惑は出鼻から挫かれる事になる。

「ハア……ハア……ハア……」

「……………」

「……………マジで?」

五分後、タータンの上でぶつ倒れていたのは他ならぬ、ナギだった。うん、これは問題ない。が、問題は別にある。

ナギが五分で走破した距離、およそ50メートル!!

これはテルもハヤテも頭を抱えざるを得ない。

「あの……お嬢さま？」

「……………ムリ、これ以上は……もう……………」

ハヤテが駆け寄るもののナギは蚊の鳴くような声。まさに虫の息状態だった。

「あの、体の具合とか良くないのでは……………」

「そんな訳あるか!!」

ハヤテの言葉を、ナギは叫んで否定した。

「よき聞け！ 人間はチーターとは違うのだ!! 走るようになど出来ていないのだ!!」

これを聞いている限り、もはや全ての人間としての身体構造を否定されている。

アースマラソンを頑張っている某芸能人が可哀想だ。とテルは眠そうな表情を浮かべているが。

ナギからすれば、この50メートルが長距離だという。

「やれやれ、不甲斐ない執事っぷりですな……………」

突然背後からの声にハヤテも気付いたのか、直ぐに振り返る。クラウドスがいたのだ。

「クラウドスさん！」

「クラウドス……………」

「なんだいたのか」

「ぐっ！ まったく、主を導くのが一流の執事の務めだというのに……………お嬢さまを導くどころか危険な目に遭わせるばかり……………」

カイゼル髭が立派なクラウドスは今度は眼鏡をくいと押し上げる。

「この1ヶ月、君の仕事っぷりを見せてもらいましたが……………導くどころか、墮落させる一方ですな君は!!」

ゴスツ!! とクラウドスの頭部にナギの鉄拳が炸裂した。

「誰が墮落する一方だった？」

「お嬢さまは元氣ハツラツですな……………」

「ハヤテは執事としてよくやっている！ どちらかというところテルの方が執事として出来ていないのだ！ その点ハヤテはいつも私を守ってくれている!!余計な口を出すな!!」

「守るだけならSPにもできます！ 主を良い方向に導けなければ一流の執事とは言えません!! 善立以上、一流未満ですよ!!」

2人の正論が飛び交う。 ところら帯はどうやら戦時のような銃撃戦だ。

「なんか、さりげなく俺の悪口が言われていた気がするけど……」
「気のせいですよ」

テルの言葉にハヤテは苦笑いをしながら返した。

「ならば、ハヤテが一流であるという証拠に、今度のマラソン大会、私は一位をとるツ!!」

「ええ!!」

「ちよ、ナギ！ なに考えてんだ!？」

テルとハヤテがこれ以上ないまでに混乱している。

「よいのですか？ そんな約束をして、もしダメなら少年には執事を辞めてもらいますよ」

その提案にはナギも一瞬躊躇いが生まれた。

「できるよな？ ハヤテ……な?」

「え？ ええ……?」

まるでこの場はこう言っておけばかりのナギの熱い視線。ハヤテは戸惑いながらも頷いていた。

クラウドスは再び眼鏡を押し上げる。

「分かりました。では大会を楽しみにしていますよ」

捨て台詞を残してクラウドスは去っていった。

「ハヤテ……」

「なんですかお嬢さま?」

「ドーピングコンソメスープって作れるかな?」

「作れても飲まないでください」

「白田になりたい人、いるか？」

ナギやハヤテが途方に暮れるなか、テルの手にはさりげなく魔神探偵脳神ネ○ロのコミックスがあった。

「簡単に言えば、そう言うのは勝算がないってことだよな？」

「そうですよね」

ハヤテもテルもお互いが腕を組んで頷く。

確かにそうだ。ナギは黙っているが、言わずとしても理解してるのだろう。

一年の女子で一位を取ること即ち、アレに勝たなければならないことだ。

「くしゅん!! 誰か私の噂をしてるのかしら……」

生徒会室では椅子に座った少女がくしゅんをしながら話をしていく。

話を戻そう。アレ、とは。白皇学院の者なら誰でも知ってる。

頭脳明晰、容姿端麗、泣く子も黙らせる生徒会長、桂 ヒナギクである。

○

場所は白皇学院。テルとハヤテは時計塔にやってきていた。

扉の前ではテルが頭を掻きながら扉の前で誰かを待っていた。

ボタン。と生徒会室の扉が静かに開いた。中から出て来たのはハヤテである。

「どうだった？」

テルが聞くが、ハヤテは顔を苦笑いにして首を振った。

「手加減は無いそうで、全種目出場するそうですよ」

事の発端はナギが晴れてマラソン大会に出場する事になったのだが、ナギが一位にならないとハヤテがクビになるというデスゲーム。

更に万能生徒会長、ヒナギクを倒さなければナギもとい、ハヤテには明日は無いわけである。

ナギからの要望でヒナギクが出場しないコースで勝つつもりだったが、先程のリサーチの結果、笑顔で全て出ると言われた。

「その代わりにこんな物が……」

ハヤテが取り出したのは一枚の紙だ。

「ん？ なに、マラソン自由形？」

「はい、今年は久しぶりに行われるらしくて、2人1組で出場してゴールを目指すらしいですよ」

「なんだよその中忍試験みたいなツーマンセル」

頭を掻きながらテルは不思議に呟いていた。

「なににせよ、頑張るしかねえなハヤテ」

「そうですね。テルさんは出ないんですか？」

「え？ 俺が出ると思う？」

「まあおおよそ分かっていましたけど……」

欠伸をしながら答えるテルにハヤテは肩を落とした。

「だってダルいじゃん、寒い中マラソンなんて、体もケガだらけだぞ？」

最近俺骨折したりとか大変だよ？テルさんはね、結構平気な顔してるけどね、心の中では床を転がりたいの！」

仮にも主人公の言うセリフとは思えない。

ではナギに熱弁していたスポーツの有用性もさっきのテルの発言で明らかに歪んでしまっている。

「実はこのマラソンには賞金がでるらしいんですよ」

「ふん」

ハヤテは半ばわざとらしい口調で言うがテルは鼻をほじくり返していた。

「金額は……一億五千万だそうですよ？」

スブシュツ!!

「なん……だと……？」

テルさん大出血。鼻に突っ込んでいた指を驚きの余りに奥深く

挟ってしまうほど。

それは金額的にもテル的にも破格なものであった。

「アレ？ テルさんなんで鼻血だしてるんですか？」

ハヤテがニコニコしながら問うがテルは鼻を手で抑える。

「え？なに、別になんでもないけど……」

「いやいや、明らかに金額の所で鼻血なんて可笑しいですよ」

「……これは今朝食べたチョコレートが原因なんだよ」

「チョコレートを食べた鼻血なんてそんなベタな」

明らかな動揺を見せるテルにハヤテは確信を抱いていた。賞金が欲しいのだと。

しかし、自身のクビがかかっている以上、一位をテルに取らせる訳にはいかない。

（一億五千万の賞金があれば……借金を返せる!!）

だがテルも考えていた。

（一億五千万あれば、ジジイの借金返済して、残りは俺の物に……）

なんの因果か考えていた事は2人とも同じ、否、この学園には同じ思考を持つ人間は多数いる。

まさしくシンクロニシティ。

同じ時刻で同じ瞬間、場所は違えど他人と自分が同じ行動、思考をすることがある。

お互いが向き合い、悟っている。もう既にギャンブルは、勝負は始まっていると……

だが言葉に出さない。

「ま、出てもまさか勝とうなんて思わないけどな」

「そうなんですか、なら僕とお嬢さままで一位を目指しますよ」

「おう頑張れよ、俺は悪魔で参加するだけだからな」

「そうですか」

（否、違う！ コレは罠だッ！ 明らかな……明らかな戦略ッ！）

幼少期より様々な危険の渦中に身を置いてきた少年。その危険な経験はやがて少年に相手の虚実を見破ってしまう力が自然と五感

に備わらせていた。

(やはり気付いている……俺の嘘にッ！一点の曇り無くッ！ただ真実だけを……読み取ってやがる……)

お互いが自身の目的を達成する為には明らかに邪魔な存在だ。

(決戦は当日のマラソン大会ッ!!)

ハヤテはにこやかな笑顔でテルはいつものやる気のない瞳で目には見えない光線を飛ばす。

互いの光線はぶつかり合い、火花をちらした。

(負けられない……ッツ!!)(まさに『絶対に負けられない闘いがそこにはある』である。

○

「アレ？アレアレ？ ハヤ太くん、なんで教室に来たの？」

「瀬川さん、昼休みももう終わりじゃないですか……授業受けないと」
場所は教室。 昼休みも終わりに近づき、ハヤテは教室に戻ってきて

ていた。

「瀬川さん、まさかサボるつもりですか？」

「ふえっ!？」

泉は面を食らった。まさしく、今まさに美希や理沙とサボるつもりだったからだ。

「いや〜あのね……?？」

と、ここで泉はハヤテの後ろにいる美希や理沙いる事に気付く。見ると美希が大きなカードを持っていた。

美希が何やらカードに書かれている文字を見よと言わんばかりに手を動かす。 泉はそれを読み上げた。

『あれ？ ナギちゃんがいないけど大丈夫なのハヤ太くん』

「なんですかその用意されていたかのような台詞は……」

ハヤテも不思議に思った。明らかにはぐらかそうとしてる。

がしかし、それよりも学校に来ているナギの姿が無いことが気がかりだ。

「あれ？ どこに行っただろう……」

『早く探してきた方がいいよ。』

泉はまた棒読みに近い。これも美希達が出したカードの内容だ。

「そうですね。瀬川さんありがとうございました」

「いや〜お礼なんていいよ。それより早く探しに行かないと」

泉も照れながら頭に手をやる。今度のは泉の言葉だ。

泉の言葉を聞くや、ハヤテは急いで教室を出て行った。

「ほう、遂にハヤ太くんを言いくるめる女になったか……」

「ふえっ!? 美希ちゃん違うよこれはね……」

「お前も悪女への道を一步踏み出したか……」

「理沙ちゃん〜そんなんじゃないってば〜」

頑張れ泉。委員長の星を掴むまで。

「ま、マラソン大会も近いことだしダルいから授業をサボるか〜」

「ん、そうだ泉、少し話があるマラソンの事だ」

「え？なに理沙ちゃん」

○

「お嬢さまどこ行っただろう……」

ハヤテは学院を探し回る。各教室を隈無く探した。挙げ句の

果てには先ほどいた生徒会室に戻った程だ。

しかしナギは見つからない。あの地獄（ナギにとって）の練習の次の日に学校に来たのだ。途中で帰ってしまったても可笑しくはない。

「あ……」

いた。場所は学院の外のカフェテリア。ナギはテーブルの上に顔を伏せ、静かに寝息を立てていた。

疲れていたのであろう。

しかし、もう一つ気になる事がある。

ナギの隣で座っている女性についてだ。

「あの〜」

「……ん？ なにか」

ハヤテの声に気付いたか、女性はハヤテの方を見る。

凜とした口調に艶のある長い黒髪、なかなか鋭い目つき。

最初に言った通り、『凜』という言葉が似合う人だとハヤテは思った。

「いえ、お嬢さまを探していたんです」

ハヤテは少々戸惑いながらもそう返す。すると女性は分かっただけのように片肘をテーブルに置いて静かな笑みを浮かべた。

「ああ、君が三千院くんの新しい執事の子か……」

「はい、綾崎ハヤテです。もしかしてずっと寝ているお嬢さまについていたんですか？」

「まあそんなとこだな。ウトウトしている姿を見たから気になってしたが案の定寝てしまったぞ」

女性は笑みを浮かべると肘を外して腕と足を組んだ。

「私は奈津美（なつみ） 唯子（ゆいこ）だ。話は聞いているぞ綾崎くん、なんでも反射の超能力が使えるようだな」

「どこから聞いたんですかそんな噂……」

「フフツ、冗談だ……」

そう言うと唯子は少し笑った。

自身の噂は置いといてそろそろ戻ろう。時間的にもまだ大丈夫だが寝た状態のナギを起こすのは骨が折れる。

「はあ、では僕はお嬢さまを起こして……」

ハヤテがナギに触れようとした次の瞬間である。
ガシツ。

「え?」

ハヤテは右腕に力強い圧力を感じる。唯子が左手でハヤテの右腕を掴んでいたのだ。

「あ、あのく」

「起こすな」

「はい?」

ハヤテは唯子の言葉に耳を疑う。

ハヤテはその時の唯子の目を見た。その鋭い眼光はまさしくザククのモノアイそのもの。恐ろしい殺気を帯びている。

「君は寝ている人間を起こすことに躊躇いをもたないのだな……」

「えーっと起こし方の問題ですか?」

ハヤテは訳が分からずにそう答えてみる。

「起こし方の問題ではない、起きてしまったら……」

唯子はカツと目を見開き、言い放った。

「この可愛い寝顔が見られなくなるではないか!!」

「は?」

「だから寝顔だ寝顔!」

唯子は意味が理解出来ないハヤテに呆れ顔で説明を開始する。

「見ろ、疲れとお日様の陽気な日で生み出された寝顔はまさしく天使のものだ。この寝顔はナギ君ならではだ!!」

熱い熱弁はまだ続く。その時の唯子は笑みを浮かべているが次の発言でハヤテはその笑みの裏に隠されている真実を悟る。

「可愛い……お持ち帰りしてもいいか?」

刹那的にヤバイと思った。

「あの、そういう発言は疑われるので止めたほうが……」

「何を言っている。私は真実を隠さず君に公表している。可愛いものは可愛い、できれば愛でたい。どこに疑われる要素がある?」

「全部です!!」

ハヤテはこれまでに無いくらい素早い突っ込みを見せた。

唯子はナギの横顔をぶにぶにとつついてクスッと笑う。

「まあ頑張れよ執事くん。 マラソン大会」

「あれ、唯子さん何で知ってるんですか？」

「知ってるも何も寝言でナギくんが呟いていたが……」

「そうですか……」

「しかし自由型にでるなんてよほどの勇気があるんだろうな……」

「えーっと、そんなに凄いですか？マラソン自由型って……」

唯子の意味有り気な雰囲気にはハヤテは気になったか唯子に聞いて見る。

「そうだな。 白皇学院には五つの伝統行事がある。 その内の一つがマラソン自由型だ」

唯子は得意げに説明を進めていく。

「自由型はフリーダムだ。 勝つためなら手段選ばず、なにしても良い。 だが殆どの参加者がリタイアしてゴールすら出来ないほどの過酷な競技だよ」

「よくご存知で……」

「この学院に3年もいれば耳にも入るさ……」

「そうなんですか……って、え？」

ハヤテは耳を疑う。 先ほど唯子が言った事についてだ。

「……唯子さん、僕らと同じ一年ですよね？」

ハヤテの一言に唯子はムツとした表情になる。

「失礼な、私は二年だぞ。 今年の4月から3年だ」

「ええー!!?」

「そんなに驚くことではないだろ。 上級生が居たっておかしくないはずだ」

「いやでも、今まで上級生キャラなんて出てきてませんでしたし……」

「その内おかしな先輩も出てくるはずだ。 特に……乙葉 千里という男には気をつけた方がいい」

「はあ……」

ハヤテは少しばかり険しい瞳をする唯子を見てそう返すしかなかった。

「そんな事よりナギくんをお持ち帰りしてもいいか？」

もはや変な先輩は目の前にいる事を本人は自覚しているのだろうか。ハヤテは不意にゾクツツとしてしまう。

「あの、だから誤解を生むような発言は……」

「なんと！ もう既に飛躍した展開を迎えて、私より先にナギくんを愛でているのか!？」

「話を膨らませないでください!!」キーンコーン。

その時、学院の鐘が鳴る。唯子はすたつと椅子から立ち上がった。

「ま、頑張りたまえ執事君。君にしか出来ないやり方だな」

唯子はそう言い終えると去って行った。

「むにゃ、どうしたハヤテ？」

鐘の音で起きたのかナギが目を擦る。ハヤテは去っていく唯子を見て

「不思議な人がいっぱいですね……この学院は」

そう呟くのだった。

○

そして次の日。まだナギの特訓は続く。

今日は200から300メートルほど走っていた……がやはり耐えきれぬ事なく力つき果て、木陰に寄りかかっていた。

「本当に体力のない子ですね」

今更な事をいうのはマリア。

「そんな事はない。ハヤテの特訓がハードすぎるのだ!!」

「2、300メートル走っただけですよお嬢さま……」

「それでもハードなの!!」

ハヤテの言葉にナギは非難の声を上げた。

「でもナギがマラソン大会で一位をとらなきゃハヤテ君がクビという賭けを……クラウスさんとしているそうじゃないですか」

マリアの言葉にナギも反応する。マリアは改めてハヤテに聞いた。

「ハヤテ君もいいんですか? そんな約束……」

「大丈夫ですよ……」

ハヤテは動じる事のない表情で言い放つ。

「それでもお嬢さまは一位をとってくれると……僕は信じていますから!!」

ナギもこの発言には咄然とする。

「大丈夫ですよね〜お嬢さま」

「お? おお……」

振り返った屈託のない笑顔にナギは頷くしかなかった。ナギやマリアとしてもその根拠のない自信はどこから出てくるのか分からない。

暫くして走り込みの練習が再開される。

(しかし、一位をとれなきゃクビというのもムチャですが……あの子の運動嫌いも筋金入りですし……大丈夫かしらハヤテ君……)

「そう言えばお嬢さまって凄く体が柔らかいですよね?」

「そうか? まあこれ位なら普通に届くぞ」

ナギはその場で前屈を試みせる。膝は曲がっておらず、手は地面につくほどの完璧なものだ。

「わあスゴいじゃないですかー!!」

「そうか?」

「何もしていないのにそんなに体が曲がるなんて……スポーツの才能があるかもしれないよ?」

ハヤテは賞賛を惜しまなかった。ナギとしても次第に表情が明るくなっていく。

「じゃ、じゃあもう少し頑張ってみようかな」

「それがいいですよお嬢さま」

（へえ…あの運動嫌いを上手くのせて、自主的な練習を促すなんて……）

「ハヤテ君は意外とやり手かもしれないよ、クラウドさん」

「ギクツ!!」

マリアは木の陰にかくれているクラウドに聞こえるように呟いた。

「あんなのを見せられたらなあ……」

一方、テルは屋敷の窓から走り込みをしているナギの姿を見ていた。

ナギが頑張っている。あの運動嫌いがだ。それを邪魔しようとしている自分がいる。

（俺悪役じゃん!!）

端から見ればそうなる。だがテルとしても賞金は欲しい。辰也の困ることがないようになんとかしてやりたい。

テルは迷っていた。

んなこんなで2月1日。

マラソン大会——当日ツツツ!!

「勝つぞー——ツツツ!!」

天気は快晴。雨オチなんてことがない空に、雪路の叫びが木霊していた。

「なんだアレ？」

「桂ちゃんは今日も絶好調だね♪」

美希と泉がその光景を眺めている。

「しかし賞金が出るかどうか分からないけどマラソンなんてよくやるわね」

「あは、私は500メートル出たよ。美希ちゃん運動キライだもんね」

「マラソンなんて適当に棄権しとけばいいのに……特に自由型なんて出る人の気が……」

「あーいたいた。おーい美希ー」

二人の所にやって来たのはヒナギクだ。

後ろには理沙がいる。

「これはこれは一年女子のコースで全勝された生徒会長さまじゃありませんか」

「ヒナちゃんおめでとー」

「あら、ありがとう」

美希は淡々と泉はシンプルにヒナギクに賞賛の言葉を送る。

「これでラストのマラソン自由型も制すれば全種目制覇ね。ま、頑張ってくださいいな」

「何、言ってるの？あなたも出るのよ？」

「……は？」

笑顔でいうヒナギクに美希は間の抜けた声を上げた。

「だって生徒会で出てないのはあなただけじゃない。だから最後くらい出なさいね。私が必ず完走させてみせるから」

「ツツツ!!」

美希は慌てて泉と理沙を見る。2人とも午前の部で一つ競技に出ていたのだ。

明らかに策略だ。

「ちなみにコースは白皇の敷地一周だからかなり長いけど」

「挫けず頑張れよ♪」

理沙と泉がニヤニヤ、ニコニコと笑いながら親指をぐっと立てる。

「いやー！ー!!」

美希は断末魔の叫びを上げた。

「いやーしかしお嬢さま、思った以上に参加者がいますねー」

場所はスタート地点前。2人の周りには人、人、人の群れ。

「これは結構、大変かもしれないかもしれませんねお嬢さま……お嬢さま？」

(……………)

ハヤテはナギに声をかける。　だがナギは顔を曇らせ、聞いてはいなかった。

(わたしが負けたらハヤテがクビになってしまう……私のせいでハヤテが……私が頑張らないと……でも私が負けたらハヤテは……)

離れる事になるだろう。言葉にこそ今まで出さなかった。しかし不安は募る。

ナギは知らずのうちに迫り来るプレッシャーによりいつもより緊張していた。

(ハヤテは……………)

「お嬢さま」

ポンとナギの肩にハヤテは手を置いた。

「短い間でしたが、お嬢さまは頑張って練習しましたよ。だから僕の事は気にせず、頑張って練習の成果を發揮しましょうよ」

「ハヤテ……………」

ハヤテの笑顔を見てか、ナギも少しだけ表情のかたさがなくなる。信頼しているのだ。ハヤテはナギの事を……

ならば自分も信じるしかない。自分とハヤテを……

「二人一組、お嬢さまの足りない所は僕が補いますから……一緒に……ゴールを目指しましょう」

「ハヤテ……………」

「あのー二人してゴールを目指しているところ悪いんですが……」「はい？」

このマラソン大会の補助員らしき男がハヤテ達に声を掛ける。

「ゴールを目指す前に取り敢えずスタートしてもらえませんか？」

(……………)

二人は辺りを見渡す。

もう既に、人は見当たらず、風だけが虚しく吹いていた。

「ああ!! いつの間に」

「いえ、二人のモノローグあたりから……」

「とにかく行くぞハヤテ!!」

「はい!! お嬢さま!!」

慌ててハヤテ達はスタートを切る。　さい先は悪い。好スタート
とはいかなかった。

「ハヤテ君達……大丈夫かしら……」

遠くでは心配してやって来ていたマリアが双眼鏡で見守っていた。

「こうして……大ピンチのレースは本番へ……」

「そして当主人公のテルは……」

「アレ? 今何時?」

「寝ぼけた状態で未だに屋敷にいた。」

第26話くマラソンは楽できないスポーツく

大会、いざ始まる。

ここは大会本部。 午前の部で大会を終わらせた暇な人々が大型テレビで観戦できる場所だ。

さらにここは本部ということもあり名？解説者のおかげで実況動画と早変わり。

『さあ始まりました、マラソン自由型!! 伝統のコースを制して賞金を手にするのは誰か?』

実況者、瀬川 泉がなりきったように解説を行う。

『なおここからは各所に点在するモニターを元に生徒会放送局がゲストと共に解説を行っています。 最初のゲストは早々に橘 ワタル くんです』

『宜しくお願いします』

解説席に座っているワタルは手を組ながら冷静に答える。

『ワタルくんは今回の自由型に出場するハズでしたが……一体どうしたんですか?』

『ハイ。 出場予定でしたがペアの人が遅刻したため、どうせ今から走っても勝てないだろと思い、解説に回らせていただきました』

『あく、そのペアの人物はどうしたんですかね?』

『さあ、どこにいるんでしょうか』

淡々とワタルは解説するが、本心は穏やかではない。

『おや? スタート地点から奇妙な光景が』

泉が目を見ると既に誰も居なくなったスタート地点に一人の人物が目飛び込んできた。

『おや? あれは善立 テルくんです!』

『アイツめ、今更来やがりましたね』

『まさかワタルくんのペアとは……』

『はい、まさしくアイツです』

ワタルの言葉に泉は苦笑い。
モニターには補助員ともめるテルの姿が目に見えた。

○

「だから今来たって言ってんだろ！なんでダメなんだよ！」

「ダメも何も、君は自分のペアを連れて来てないじゃないか」

「うっせーなハゲ、その帽子取り上げて残らない髪を剃り上げてやろうか」

「なんだとオオオ！ まだハゲてねーから！ まだ28だから若いから！」

補助員とテルの揉み合いは未だに続く。テルとしては今から直ぐにスタートしたい。だが規則として、二人一組がルールの自由型はペアがいなくては参加することができないのだ。

「分かったよ。ならペアを連れてくればいいんだな？」

テルは執事服のポケットから携帯を取り出した。

「ちよつと待っててくれ」

○

『どうやらまだ揉めていますね』

『そうですね。これから何をするのか皆目見当つきません』

泉とワタルは携帯片手にしているテルに同じ意見を持っていた。

『ではレースの方に話を戻したいと思います！』

『そうですね。その方がいいです』

(一体何をやる気だ?)

疑問が浮かんでいたワタルだった。

○

「うーん。先頭からだいぶ離されましたねえ」

各地に点在するモニターを見て眩くのはハヤテだ。

「どうですかお嬢さま……まだ走れますか……って、聞くまでもないですね」

ハヤテはちらつとナギを見たが、ナギは杖を杖替わりに立っているのがやつとのように涙目を浮かべる。

「ではそろそろ……作戦開始といきますか」

ハヤテはそう言う一枚の冊子を取り出した。

「作戦って？」

「以前ヒナギクさんがくれたこのレースについての説明書ですが……これによるとこのレースは各チェックポイントをクリアしてゴールするので、チェックポイントを通過すればコースに従う必要はないんですよ」

「ほう……」

「だからお嬢さまを抱えて、チェックポイントを一気にショートカットしていこうかと」

「なるほど……え？」

途中まで納得していたナギ、しかし後の言葉を考えてみると

「やっ!!ばか!!ちよつ、ちよつと待て!!」

「へっ? なぜです? 確かにメインコース以外の道に行くものは勇氣あるものだけが行けとありますが……」

「そういう問題じゃなくてだ!!」

事の重大さを理解していないハヤテにナギは体をもじもじとさせる。

「抱えていくってお前、今体操服だし……それに走ったから……いっぱい汗かいてるし……だから……その……」

「大丈夫ですよ。 僕そういうの全然気にしませんし平気です」

「私は気にするって、うわっ!」

ナギの言葉を笑顔で聞かずに、ハヤテはナギに抱き抱えられた。

「そんなの気にしていたら優勝できませんよ」

「うわああああ!ばかああああ!!」

ハヤテは一気に脚に力を込めて、森の中に駆け出した。

○

ここは白皇学院敷地内……のハズだが、そこは見渡すばかり新世界、異常な成長を遂げた木々や苔などが溢れたジャングル地帯になっていた。イメージは死の森に近い。

そのジャングル地帯を突き進む二人の人影。

「まあ確かにあの長いコースを地道に走るのは気が抜けるので分かりませんが……ここって学校の敷地内ですよ？　唯子さん」

灰色のポニーテールを特徴とした少女が先頭たつて歩く唯子に聞いた。

「うむ。その通りだ書記くん、敷地内でありこれがショートカットのコースでもある」

「今更ながらに突っ込むのなんですが、本当に大丈夫なんですかここは？」

「大丈夫なんじゃないか書記くん。少なくとも学校の中だ。猛獣なんているわけがない」

二人はどんどん奥へと進んでいく。次第に茂みが濃くなり、奇妙な虫が現れ始めた。

「だいたい二人一組参加というのがおかしいですよ。　なんの為の二人一組なんですか？」

「それはだな書記くん、一人が遭難してももう一人が助けを呼びにいけるようにするためさ!!」

「メチャメチャ危険じゃないですかあー!!」

顔をにやつかせ、手をうらめしそうにする唯子に、書記は猛然と突っ込んだ。

「唯子さん、いくらあなたが三年の委員長としても勝手に過ぎます！私の意見はいつでも聞いてくれないし！　なんでもできるからってヒドいですー!」

書記は不満を余す事無く言い放つ。　唯子は黙ってそれを聞き、頷いた。

「確かに、いくらか私の身勝手さがある。この自由型に参加したのは単に私が面白そうだという理由がそうだ……だが」

立ち止まった唯子は振り返り、手を差し出した。

「私は全力で君を守ろう。いかなる時も、君の身を脅かす者がいれば、私は最低でも君はケガ無くゴールに送り届ける所存だ」

「あ……」

風により、黒い長髪が凛々しくなびく。

その瞳は追従を許さないかのように笑っているが意志のある瞳だった。

一瞬だがときめいてしまう自分がいる格好いいそう思った。

「……………ズルいです」

思わず手を握りしめて唯子に示すのは信頼。互いに了承したという事だ。

「さてチェックポイントはもうすぐだが……」

「へ？ ひゃ……」

グイツと左手を引つ張られて書記は唯子に抱きしめられる。

「まあ時間はあるだろうし？ 幸いここは人気は少ないので思う存分……」

「委員長！ セクハラは禁止です！」

「セクハラではないのだよ書記くん、スキンシップと言いたまえ」

「スキンシップにもほどがあります!! って、にゃああああ!!」

森の世界に黄色い声が響いていた。

○

『いや〜どこも彼処も盛り上がっていますね〜』

『どこか不健全な匂いがしますがまあいいでしょう』

『ぶっちゃけた話、「正直もうキツイからやっつてらんねー」と既にリタイアが続出との事ですが……どうですかワタルくん?』

『名門ですからね。体力ないですね』

『取り敢えず今はこんな感じになっていますね』

- 一位 先生コンビ
- 二位 ?
- 三位 ?
- 四位 ?
- 五位 ハヤテペア
- 六位 生徒会長
- 七位 委員長、書記ペア
- 最下位 テル

『波乱がありますでしょうか、誰が優勝するか分かりませんね』
『そうですね。ではワタルくんは誰が来ると予想しますか?』

『恐らく、生徒会長と委員長、三千院家の三つ巴になるでしょう。生徒会長が六位という状況に納得いきませんが……』

『なるほど……でも!!』

『はい?』

泉が突然とマイクを片手に立ち上がった。

『このレースには今回はとんでも無い人物が登場しているのです!』

『はあ……』

『白皇学院の上級生なら耳がバーストするくらい聞いているはずですよ! あ! 来ました! 来ました! 白皇学院のモンスターこと、乙葉(おとは) 千里(せんり) くんだあー!!』

○

『なはははは! 優勝は私のものだあー!!』

レースのトップを走るのは雪路と体育教員の薫 京ノ介。

『一億五千万はア! 私のもんだアア!!』

(ドンペリよ私の為に待つてなさアアい!!)

ペアの襟首を引きずりながら走る雪路は踊る欲望に身を任せ、怒涛の走りを見せていた。

このままでは雪路の優勝は堅い。

しかし、トップには邪魔という因果がつき物だ。

「そんな事はさせんぞ!!」

「む!?!」

雪路はどこからか聞こえた威厳ある声に立ち止まる。

ゴロゴロ……

「な、なに?」

向こうの茂みから聞こえる奇っ怪な音に、雪路はたじろいだ。そして次の瞬間。

「ハアツ!!」

まるで馬をかるような声と共に茂みから一台の山車とともに男が現れた。

山車は急ブレーキを掛けたように、雪路の前にドリフトで止まる。

「それ以上の横暴、この乙葉 千里が許さんツ!!」

金髪を逆立て、鋭い瞳を持つなかなか整った顔立ち、まるで王のような威厳を放つ。身長は180はあるだろうか、かなり高い。

「あなたは千里くん!? 自由型にも参加していたのね!?!」

「その通りだ! この自由型を制してこそ、俺の栄光のロードは始まる!」

千里は雪路を指差して言い放つ。

「この学院の生徒は、いや! 世界は望んでいる! 俺がキングになるということを!!」

雪路を指したかと思えば今度ははるか空を指す。まるで後光がさしたように千里が輝いて見えるのは雪路の幻覚だろう。

○

『とんでも無い登場の仕方ですね』

『そうですね〜でも男性の部では一位を総なめしたのは千里くんなのです〜』

モニターに映る千里を見ながら、泉達の状況が続く。

『どういう人物か分かりますか泉さん?』

『はい♪ 千里くんは学院屈指の俺様キャラで、あとかめ自分が王様のような振る舞いをする、他人を寄せ付けない雰囲気を持つ一匹狼！
「小手先など愚の骨頂、全ては力で押し通す。」それがモットーの二年生です♪』

『詳しい解説有難うございます。しかし、先ほどから観客が騒いでいますね?』

ワタルは後ろの観客席を見渡す。何故だかみんなため息をつき、なにやら暗い感じで呟いている。

きた…きた……

奴が…きた……

また…きた……

ざわ…ざわ……

『まあ、頭の良い学校であんなキャラがいたら当然ウザいの極みですね♪』

『多分そうかもしれない。しかしあの山車は何でしょう?』

『大方、ペアを乗せるものでしょうね♪』

○

「おい女！ 何時までもそこで寝てないでさっさと走らんか!!」

「ぐうぐう」

千里の声にひよこつと、山車の中から顔を出すのは紛れもない、伊澄だ。山車の運転により目を回していた。

『伊澄だとオオオオ!?』

マイクを持ったワタルは大声を上げた。

「おい女、せつかく俺とペアを組めたのだ！ 優勝しなければ意味がないぞー！」

「は、はい……ですが…きゆるる……」

立ち上がるとするが伊澄は再び目を回して座り込む。

「クッ！ 情けない！ あの程度の運転で根をあげるとはな!!」

『テメエエエ!! 何ふざけた事言ってたアアア!!』

その場の全員が耳を塞ぐ。ワタルの怒号が響いてきた。

『テメエエエ伊澄に謝れコンチクショオオオオ!!』

『あーあー、ワタルくん!? 落ち着いて落ち着いて!』

泉の声が聞こえる。ワタルを静めようとしているのだろう。

「ふん! とんだ邪魔が入ったな、仕切り直しといこうか!!」

「望むところよ!」

千里の言葉通り、雪路も向かい合った。

「勝負ツ!!」

○

『落ち着きましたかワタルくん?』

『ま、まあなんとか……』

まだ荒い息をついているがワタルはいつものように喋る。

『おーつと第三チェックポイントで善立 テルくんがチェックを受けているぞ〜♪』

『え?! スタートできたんですかアイツ!』

『ええーと、参加者はテル夫くんとワタルくんということになっているのですが当の本人はここにいますし……』

『最悪失格ありえますね』

ワタルがうーんと唸らせてモニターを見た。

○

「はいチェックポイントなので確認をお願いします」

「へいへい」

テルが補助員らしき人物に従う。

「ペアがいないと聞きましたが大丈夫だったんですか?」

「問題なかった。ほらほら、何隠れてんだよ。出て来いってワタ

ル、トイレで遅れてたつてなあ」

「……………」

茂みからの中から出てきた人物に補助員は目を細めた。

「そもそもお前はひ弱すぎんだよ、もつと身体とか鍛えなきや駄目だぜ」

そこに立っていたのは、身長はテルの一回りはでかい、頭にバンダナを巻いたサングラスの外人が立っていた。

「なあ、ワタルン」

「オウ、イエア」

その場、補助員がモニターを見ていた一同が口を揃えて叫んだ。

このどうしようもない気持ちえ。

「「「誰エエエエエエエエエエ!!」」」」

「おまつ、コレ誰だアアア!! 全くの別人だろうがアアア! なんなんだこのふてぶてしい外人!!」

「は? 何言ってるんだワタルンだろ どっからどう見てもワタルン以外の何者でもねーだろ」

補助員は猛然と突っ込んだがテルは不思議ながら返す。

「どこからどう見ても別人以外の何者でもねーだろ! 360度あらゆる角度から見ても一カ所たりともかぶってねーよ! つーかワタルンってなんだ なんでルンだけ英語発音なんだ!?!」

「オイオイいちやもんつけるのはよせよ。カブるも何も本人だからね丸カブリだからね 思い出してみろ、ワタルンと言えばあのフラン Span のようなリーゼント……………」

「ただ手にフランスパン持っているだけだろーが! そんな生徒じゃないだろー! リーゼントの学生はここにいねーよ!! つーかなんでフランスパンなんだよ!」

「タイムイズマネー」

その時、ワタルンが一言呟いた。テルが思い出したかのように頷く。

「おお そうだな、こんな事してる場合じゃないな 早く行かなきゃな」

「今完全に英語喋ったよね!?もう全然モノマネとかするつもりもないよね フランスパン食べてるし!!」

補助員はフランスパンをむしゃむしゃ食べているワタルンに指差し突っ込んだ。

「二時間一万円 二時間二万円 ソノ間私ワタルン、オーケイ?」

「そっちの金かよ!完全に雇ってんじやねーか!!」

そして今度はテルがうんうんと頷く。

「オーケイオーケイ、三時間フランスパン三本、四時間フランスパン四本、オーケイ?」

「なんで三時間以降の報酬がフランスパンになってんだよ!結局二万円しかもらえねーだろーが!!」

補助員はポケットから何かを取り出す。無線だ。

「これは明らかな不正だ!替え玉以外の何者でもない!大会側に報告させてもらー」

ゴンツ!

突如、鈍い音がして補助員は倒れる。ワタルンが補助員をフランスパンで殴ったのだ。

テルが頭を掻きながら辺りを見渡す。

「あぶねーあぶねーバレる訳にいかねーからな、アレ? カメラがある。ワタルン」

「オーケイ」

木の枝に吊されているカメラにワタルンがフランスパンを振りかざす。解説側の画面で最後に映ったのはフランスパンを投げつけたワタルンの姿だった。

○
ブツン。

『え!?アレで壊れたんですかカメラ!? 固ッ!フランスパン固ッ!!』

画面が真っ暗になった為に泉が驚く。

『フランスパン以前に俺はあんな姿じやなアアアイ!!』

ワタルは怒りの形相で叫ぶ。もはやテルのやり方は滅茶苦茶だ。

『これは失格だろ!!』

ワタルが泉に向けて言うが、泉が苦笑いしていた。何やら紙を一枚補助員から受け渡されたようだ。

『えくと、ただいまリアルタイムで見てる理事長からの伝言で、「面白いから許す」とのことです!』

『えええええっ!!?!』

驚くワタルをよそに、泉は更に読み上げた。

『あと、「橘　ワタルはあんな感じじやなかったか?」とあります』

『なんでだアアアアアッ!?』

○

一方そんなコントが行われているのとは知らずに、熱い戦いを繰り広げているペアがいた。

「ハアアアアアッ!!」

「ちよ、雪路!　俺を武器にー」

雪路が薫を千里に叩きつける。

千里は両腕を交差させ、その一撃を受け止めた。「そんな物を使つてでしか攻撃する事ができないとは……拍子抜けだな!!」

大人一人の質量を持った一撃を難無く受け止める千里。

「私のシークレットソードを受け止めるとは……さすがというべきかしら千里くん」

シークレットソード(薫)を引き離し、一旦距離を取る。　薫は既にげんなりとしていた。

「俺にそんな小細工が通用すると思ったのか!!　見せてやる!小細工なしのパワーの戦いを!!」

「望むところよ!!」

再び雪路は薫を振り回し、遠心力を生かした一撃をお見舞いする。が、千里は動じる事無く、その薫を受け止めた。

「くっ!!」

またしても、と顔をしかめさせる雪路。

千里は今度はガツシリと掴み、逃がさないように腕に力を込める。

そしてー

「オオオオオッ!!」

持ち方、握り方、そんな技を使うのではなく、ただ力任せに、雪路ごと持ち上げる。

遠心力を使うのではなく、まるで棒切れを扱うかのように投げる。

「ツツツ!!」

投げられた雪路は空中で身を翻して見事に着地する。

投げられた作用でズザザザ!と砂煙が起こるがなんとかその勢いに負けず留まった。

「なかなか、どうしてー」

パワー負けした雪路は案外と不敵に笑っていた。

「人生には壁がつきものなのかしら……」

堂々と仁王立ちで千里は構える。

「いかなる場合でも世の中は絶対強者により支配されるー」

「そうだとも、強者により、支配される事が世の常……俺はその支配する側になっている……」

明らかに自身が上、世界を手に入れるという高い……自信。

「だけど、革命を起こす権利は私にはあるわ。　　まだまだ終わらないわよー!」

「ああそうだ!　　そうでなければ、面白くないッ!!」

互いに構え、少しずつ円を描くように距離を縮める。

緊張の一瞬。

まさに闘い。

「!!」

悟ったか、二人は一気に真横に走り出す。　　顔を見合わせながら不

敵に笑うのだ。

「勝つのは俺（私）ダアアアアツツ!!」

まるでこの世の命運を掛けたように熱い戦いだ。なんの漫画だと突っ込まれても仕方がない。

しかし、二人は見落としていた。

この先に待ち構える大きな弊害を。

「む?」

一瞬、真横に走る事ができない……いや、足は動いているがその割にはゆっくりだ。

遂に二人は音速の壁を超えてしまったのか。 いや違う。

二人は気付かなかったのだ。 その先は崖になっている事に。

「……………」

空中で走っているという奇妙な感覚に気付いた二人はお互いに確認した。

「アレ? これヤバくね?」

「アアアアアアツツ!!!」

二人は重力に従い、崖の下へ下へと落下していった。

『ちなみに、千里くんは少しドジをする人なんですよね〜普段王様気分分の裏にある 隠しスキルと言っておきましょうか♪』

『なるほど、要はバカなんですね』

泉やワタルは解説が終わると、係員の持ってきたお茶をズズツと飲みだした。

『いや〜お茶は落ち着きますね〜』

『全くですね。 ちなみに、白皇の安全管理の方は完璧です。 名門ですからね』

○

一方、ショートカットを目指すハヤテは意外な相手と対峙してい

た。

「くっ!!」

顔を歪ませ、辛うじてハヤテは相手に投げられた何かを回避。

投げられた物はドドドド!! と地面に槍が突き刺さったかのような音をたてた。

「動きが悪い……どこか痛めて居るのかな?」

突き刺さったのは薔薇。

整った顔立ちで薔薇を片手に持つ。

彼の名は、冴木 ヒムロ。

彼もまたハヤテと同じ白皇学院の執事である。

「ヒムロく頑張れ!!」

遠くでは主である大河が扇子を和気あいあいと振っている。

「何時までも避けていられるかな?」

ヒムロの言葉にハヤテは顔を曇らせた。

いくら頑丈な肉体と言っても人間。この前の怪我のダメージがしつこく残っていた。

(何とかしてヒムロさんを倒していかないと……でも一体どうすれば……)

ハヤテとしてはこれ以上足が止まるような事では時間が足りない。早くゴールにたどり着かなければならない。

しかし此方は手強い、あちらは強敵、現状は厳しい。

「ではおとなしくー」

ヒムロの携えた薔薇が高く振りかざされる。

ーしかしその時。

「お待ちなさい!!」

ヒムロの薔薇を持つ腕がピタリと止まる声。

その人物達は風のように現れた。

「弱気を助け、強きを挫く! メイドブラックマックスハート!!」

「お…同じくメイドホワイトマックスハート…」

「……………」

咄嗟の謎のメイド登場にハヤテは目を丸くした。

(あ…あれ、マリアさんとサキさんだよな。何だろう……突っ込んだらダメなのかな)

ハヤテは一目見ただけで二人がマリアとサキだという判別がついた。

なんせメイド服にただのグラスンを掛けただけだ。

これで分からない方がおかしい。

「あ…あの……………」

「マックスハートです!」

「二人でキュアキュアなんです!!」

ハヤテが尋ねようとしたところ二人は若干恥ずかしそうにしながら声を荒らげた。

(やっぱり突っ込んだらダメか……しかしあの格好は…………)

「かつこいい……………」

「え?お嬢様?」

訂正。 分からない人もいるらしい。

「とにかくここは私達マックスハートに任せて、あなた方は先へ!!」

マリアは取り敢えず早く先に行くように促す。

「はい!!ありがとうございますマックスハートさん!!」

「……………」

ナギの輝いている顔にハヤテは何も突っ込まないようにした。

「あの…本当に行つてもいいんですか?」

ハヤテが最後に聞くがマリアは背を向けて

「行つて下さい!!むしろできるだけ早く行つて見なかった事にしてください!!!」

と返す。 ハヤテは苦笑いし、その場を去って行った。

「なるほど…身代わりとはね……しかしあなた方で僕を倒せるのかな?」

ハヤテ達が居なくなつた場でヒムロが薔薇を携え、呟く。

「さあ それは…やってみないと分かりませんわ♪」
観客が居なくなつた為か、いつもの調子に戻り笑顔で返す。
だがそれは逆に不敵な笑みともとれた。

「では行くよー」

ヒュルルル……

「む?」

何か、空気を駆けるかのような音にヒムロが気づき、振り向いた瞬間。

ガンツ!と鈍い音と共にヒムロが崩れ落ちた。

「……………え?」

突如の事態にマリア達は何が何だか分からない。

「……………フランスパンですかねコレ?」

気絶したヒムロの側を転がっていたフランスパンをサキが拾い上げた。

「あんれ〜 何やってんですかマリアさん?」

マリアが聞き覚えある声のする方を振り向くとそこにはワタルンに肩車しているテルがいた。

「テルくん!!」

「スイマセン。結構急いでるんですけどハヤテ達来てませんか?」

「ええ、ハヤテくん達なら先ほど通っていききました」

「そうすか。なら随分距離を縮めたな……………」

テルは高い位置から遠くを見つめる。

「というかテルくん、その人は……………」

マリアが聞いているのは勿論ワタルンの事だろう。

「え? ああ、ワタルンですよワタルン、サキさんも分かるでしょ?」
「イヤイヤ、ワタルくんそんなに大きくないし、そんな外人みたいな顔してませんよ!」

マリアが至極当然、突っ込んでくる。

「サキさんも何か……………」

マリアがサキの方を見たとき、サキはプルプル震えていた。

「若、若が……こんな、髪を染めて……うっ…悪い子に……うっ…！」

ブワツとその場に泣き崩れた。『サキイイイイイ!! なんて分かんねえんだアアア!!』

その場でワタルの絶叫が響いたのは言うまでもなく。

「にしてもマリアさん……その格好……」

「な、なんですか……」

テルが流石に気になったか、マリアとサキの服装をじーつと見つめ、

「マリアさんがコスプレ好きだったとは……」

「いや違います!」

「分かってます!!」

「何がですか!!」

マリアの言葉を制して、テルは続ける。

「人の趣味とか、そういう領域には俺は何も言いません! 全てを含めてマリアさんだと思ってるんで、ハイッ!!」

「凄い勘違いしてますよ、話を聞いてください!」

「人間のプライバシーを考慮してますんで、俺!」

カシヤ。

「え、ちよっ!」

突然のフラッシュにマリアは目を隠す。

マリアは気付かなかった、テルが携帯のカメラを使っていることに。

「なにちやっかり撮影してるんですか!! 返しなさいテルくん!!」

「おし、保存完了。ワタルン、さあ行くこう、立ち止まることくなく」

「歌ってればごまかせると思ってるんですか!?!」

マリアが下から物凄い剣幕で睨むがワタルンは急に走り出した。まるで百メートルランナーのような華麗な走り。

「流れる時に〜負けないように〜」

ドドドドドド!!

テル達の姿はあっという間に見えなくなってしまった。

「見事に誤魔化されましたね」

サキが苦笑いを浮かべながらマリアに駆け寄る。

「まったく、困ったものです……」

マリアは溜め息をついた。

「ハア……」

更に大きな溜め息をつく人物が木の裏に一人。

「私の出番がない……」

溜め息をついた人物、それはアタツシユケースを持ったクラウドだった。

○

「美希、急がないと巻き返せないわよ!」

「ま、待てヒナ、私はちゃんと走っている! ヒナが速すぎるの!」

コースを走る二人の人物、ヒナギクと美希だ。

「現在六位よ? 私も想定外だったけど、まだ間に合うわ!!」

「そ、それは分かるが! 私はヒナほど体力が……」

「その時は気合いよ気合い!」

「根性論は私には合わない!!」

二人の口論が走りながら続く。現状、ヒナギク達は六位。今まで安心してコースペースで進んでいたが、その結果だ。

ヒナギクは焦っていた。

「この薔薇も渡された意味が分からないわ……何よ散らされたら負け……」

ヒナギクが自身の胸に付けてある薔薇を見る。大会のチェックポイントで渡されたのだ。

ペアの内、どちらかが散らせれば負けというルールである。

「誰かと闘うんじゃないかヒナが」

「誰か……って誰よ」

ヒナギクは走りながらこれから当たる敵について考察する。

(この先のトップだったのはお姉ちゃんだったけど、トラップに掛かっているから多分出くわさない、だとするとハヤテくんかヒムロくん辺りかしら……)

一応自身の剣道があるとは言ったものの相手はなかなか手強い人々ばかり、ちなみにテルは入ってはいないだろう。

「ヒ、ヒナ！ ペース！ ペース！」

「あ、ごめん」

ヒナギクは急ブレーキを掛けたように止まる。知らぬ間にペースが上がっていたようだ。距離としては50メートルほどはあった。

(なんにしても、負けてられないわね……)

そうヒナギクが闘志を燃え上がらせた矢先。

「とうっ！」

突如ヒナギクの眼前に真横から一人の人影が現れた。

鮮やかに着地を決めて、スツと立ち上がる。

「ふむ、コースに出してしまったか……」

長い黒の髪を揺らし、凜とした表情で辺りを見渡すのは唯子だ。

「ま、待ってくださいよ唯子さくん」

「遅いぞ書記君、まだまだ走れるだろう」

後から書記がヨレヨレの状態で林の中から現れた。

「唯子さん……」

「む……」

ヒナギクの呟きに気付いたのか唯子がヒナギクの方を見る。

「おお、ヒナギクくんじゃないか」

「唯子さんも出ていたんですね」

ヒナギクの言葉に唯子は腕を組んだ。

「当然だ。私は面白そうな事が好きだからな」

唯子は笑顔で答える。さながら冒険を楽しんでいるような、楽天家みたいだ。

「さて、ここに居るといふ事はお互い優勝を狙っているといふ事だな？」

「まあ、そうですね……」

「私と楽しい事をしないか？」

「またセクハラですか？」

「違う違う、いくら私でもそこまでスキンシップに及んだりはない」
唯子は腕を組んだまま少しだけフツと笑う。

「聞いてますよ唯子さんのセクハラ被害が下級生にも及んでるって……」

「まったく、スキンシップと言っているのに……」

分からん奴だなと唯子は溜め息をついた。

「勝負しないか？」

「え？」

一瞬、ヒナギクは唯子が何を言っているか分からなかった。

「勝負だよ勝負。書記君、私の竹刀、持ってきているか？」

書記はサササツと近寄り、唯子に竹刀を渡す。

「いや、ちよつと唯子さん、いくらなんでも……」

(……ヒナ?)

美希はヒナギクが何故か気遣うように接しているのかが分からなかった。

「いいじゃないか、私が一手仕合いたいと頼んでいるんだよ」

唯子はまるで楽しみが始まるような瞳だ。しかしヒナギクの表情は冴えない。

「で、でも——」

それを見たか、唯子の表情が少しだけ曇る。

「なんだその怪我人を見るような目は、私も簡単にやられるような女じゃない」

唯子は竹刀を持ち替えたりしながら続ける。

「それとも恐いのか、負ける事が……」

「む！」

一瞬だけヒナギクの眉がっり上がる。

「そうだな、君は一番じゃないと気が済まないんだよなく この私に負けて一番を取れなくなる事事態が恐いのか？」

「……………」

勝負において、ヒナギクは妥協を許さない。いつだって真剣に全力で取り組んでいる。

だからこそ、これ以上の暴言は許せない、例え先輩であってもだ。

「怪我をしても知りませんよ！ 美希！ 竹刀！」

美希は慌てて、どっからか出したか竹刀をヒナギクに渡した。

（そうだ。それでいい……）

唯子は竹刀を構えたヒナギクを見て、笑みを浮かべる。

そして唯子もまた左手に竹刀を持って構えた。

（久しぶりだな……）

向かってくるヒナギクに唯子はまたクスリと笑みを浮かべるのだった。

第27話く争いを生むのはいつも人の我欲く

マラソン大会中盤。ゴールへと続く道のりの中、竹刀を打ち合う乾いた音が響いていた。

「うおつ、ヒナ、頑張れ!!」

「委員長!、ここで時間を食っていたら優勝できませんよ!」

美希は応援し、書記は鏝迫り合いの最中の唯子を見て少し焦り気味だ。

「まあ、そんな事を言うな書記くん……」

バシツと唯子は鏝迫り合いから逃れ、一旦距離を取る。

「私がやりたいようにやるのだ。この勝負は、ある意味ではマラソンの優勝以上に重要な事なのだよ」

その時の唯子の表情は笑っていただろうか、書記は感じる。

別に怒っていたのではない、悲しんでいるのではない、ただいつもと違う感じがしたのだ。

「勝てばヒナギクくとウハウハだぞ!! 優勝より大事ではないか!!」

「どこがですか!! めっちゃくだらない理由じゃないですか!!」

唯子に対してキレながら突っ込む書記。

「唯子さん、真面目にやりましょうよ……」

そのやり取りを見てかヒナギクが若干声色を強める。

唯子はそれを見て不敵に笑みながら

「済まないな、だが私は色々と楽しみながらやるのが好きなんだ……それは君が良く知っているだろう?」

「……はあ」

ヒナギクは一旦考えて短い溜め息を漏らし

「相変わらずなんですネ……」

ポツリとヒナギクが呟いた。

「ツツツ!!」

ヒナギクが気を緩めたその瞬間、唯子が左手の竹刀を構えて一気に距離を詰めてきた。

唯子は流れるような動作で竹刀をヒナギクに振り下ろした。

「まだッ!!」

だがヒナギク、どんな事態にも冷静に対応する。いとも簡単に唯子の一撃を防いだ。

「ほう……ッッ」

「引つかかりませんよ!!」

ヒナギクは唯子に不敵に笑みを浮かべる。そして受け止めている竹刀に力を込め始めた。

「ああ、委員長ッ!!」

「ヒナ！ 押せ押せ!!」

ゆっくりだが、ヒナギクの竹刀は次第に唯子の竹刀を押し返し始めた。

「……………」

(そうか……………)

唯子はその状態を見て少し目を細めた。

そしてフツと笑うとまたしても竹刀を横に弾いて距離を取った。

「次で終わりにしよう……ヒナギクくん」

「はい……………」

唯子の目は真剣そのものだ。今までのようなお茶目な様子は全くない。

まるで一人の剣士……

ヒナギクは生返事などせず、真剣に返すしかなかった。

「……………」

一瞬の静寂の後……

二人の剣士は地面が抉れるぐらいの力で地を蹴り駆け出した。

互いが己の武器を、最も高速で繰り出せる動作を模索する。
ヒナギクは正攻法、真つ正面から両手で竹刀を持ち、居合いのよう
なスタイル。

唯子はまるで左手で持った竹刀をレイピアのように突き出すよう
な構え、牙突のスタイル。

この魂とも呼べるそれぞれのスタイル、二人の鼓動が……

「だああああツツ!!!」

ガシツツツ!!!

今、交差した。

「……………」

互いが走りながら素通りしたかのような光景。

ヒナギクと唯子はゆっくりと振り返り、お互いを見た。

「一体……どっちが？」

美希が手に汗を握る。しかし空から何かが落ちてくる事に気付
いた。

ガチャン。

と乾いた音をたてながら落ちてきたのは竹刀だ。

見ると、唯子の竹刀がない、更に……

「い、委員長ツツ」

書記が声を上げる。唯子の胸の薔薇が静かに散ったのだ。

「…………君と戦って、初めて…負けたかな？」

静寂の中、最初に口を開くの唯子。

「久しぶりだったので、楽しかったです唯子さん」

ヒナギクが小さな笑みを浮かべる。しかしどこかやるせない感じだ。

それを見て、唯子はいつもの凜とした表情に戻る。

「さあ早く行け、ヒナギクくん。急がないと負けてしまうぞ?」

いつものものだ。唯子の凜とした表情は自然と相手の背中を押すような力強さがある。

ヒナギクは軽くお辞儀する。

「優勝しろよ。私はいささか疲れた」

唯子は最後にそう呟いて反対方向に歩き出す。

ヒナギクは美希と共に走り出した。

「委員長、委員長」

「さあ書記くん、どこかのモニターでこのマラソンの結末を見守ろうではないか」

唯子を追いかける書記の姿を見て、美希は何か腑に落ちない事があった。

「なあヒナ、唯子さんの噂はよく知っているが、あの人とヒナはなんかあったのか?」

ヒナギクはその質問に対して遠くを見るような目で答えた。

「唯子さんは私が入部したての時の剣道部の部長よ……」

「ええ!?!」

「そんな事より、早くしないと巻き返せないわ、スパートかけるわよ美希!!」

美希の体力考えず、ヒナギクは猛ダツシユ。美希は更なる恐怖に顔を青ざめさせたのだった。

○ 唯子・書記組み、リタイア。

一方、テルチーム。

「走れ！ ワタルン！」

「オーケイ」

テルを肩車していたワタルンがスピードを更に上げる。

スピードを上げに上げて、二人は何やら休憩所のような場所にたどり着いた。

元々白皇の敷地にあつて作られたインテリジェンスの造り。

そこには一組の男がいた。

「おやおや・・・誰かいなかったと思つたらあなた方ですか・・・」

一人は長身で顔も整つた執事服の男。紙は少し長めのライトパープル。

「野乃原、こいつは・・・」

もう一人はその主だろうか、どこにでもいそうな一般生徒Aのような雰囲気醸し出す少年。

「アレ？ お前は確かあの、えーつとだな・・・」

テルが何か思い出しそうな表情で唸りだす。

「僕は――」

「あー待て待て、何もいうなよ、今思い出しそうだから、今喉のところで魚の骨が出掛かつてるから・・・えーつと・・・」

何か閃いたように手を叩く。テルが考え考えに導き出した答えはこうだ。

「へタレくんだ!!」

「ちつがーっう!!」

少年は額に青筋を浮かべながら突っ込んだ。

「東宮 庚太郎だ!! 全然違うだろう!!」

「だってよく、間違えるも何も俺お前知らねーし」

「じゃあ何でへタレだけ当てやがるんだ!!」

「いや、もうナンカ・・・ね？」

「どういう意味だよオオオオ!!?」

ただひたすらに、東宮の絶叫が響いた。

「あなたは・・・確か三千院家の・・・」

今度は野乃原という執事が口を静かに開く。

「テルだ。善立 テル。覚えてもらえて光栄じゃねーの」

名前が知られていたことにテルは若干笑みを浮かべた。

しかし、野乃原はクスリと笑みを浮かべながら続ける。

「死んだ瞳というのはほんとですね。後、結構白皇を騒がせている

問題児とか・・・」

「オイオイ、どんな噂が流れてるんだよ・・・テルさん泣いちまうよ」

テルが頭を掻きながら沈んだ声で呟く。野乃原は更に尋ねる。

「君もこの大会に参加なのかな？」

「まあな」

テルは当然だろ？ 言わんばかりの顔で答える。

「先ほど、三千院家の執事くんを逃してしまっただけ・・・」

「ハヤテか・・・」

野乃原のその言葉にテルは若干の反応を見せた。

「アレは野乃原が・・・」

「お黙りください坊ちやま・・・」

野乃原が竹刀をビシッと地面に叩きつけた。東宮がヒツと体を震わせる。

「言い訳など言語道断。そんな事では真の男になることはできませんよッッ!!」

笑顔で東宮に迫る野乃原は地味にホラーだ。テルはそんな光景を見ながら欠伸をする。

「スパルタもいいけどねーま、ヘタレにはいい薬になるんじゃないの？ 行くかワタルン」

テルは本当に他人事のようにその場を去ろうとするが、野乃原が目をギラツと光らせた。

「待ちなさい。私が簡単に逃がすとお思いですか？」

「ん？」

テルは思わず立ち止まる。向こうはかなりこちらを敵視してい

る。こうなると戦いは避けられないか。

「戦ってもらいますよ・・・坊ちやまとツツ!!」

「え?」

そんな素っ頓狂な声を出したのは例外なく東宮だ。

「主の成長を促すのが執事の務めでもあります。だから坊ちやま、強くなってください!! 戦いを越えて!!」

「ちよちよ、待て待て!!」

と思っていた東宮だが、一度テルを見て考えてみる。

(確かにあいつは綾崎ほど怪物臭はしないし・・・あんなやる気のない顔だ。きつと僕より弱いやつに違いないツツ!!)

これなら僕にも勝てる。そんな自信は一体どこから生まれたのかと突っ込んでみたい。

いかに容姿は戦いにおいて相手に影響を与えるかの問題だ。

「よーし! 相手になってやるー」

「まーった・・・」

戦意向上した東宮にテルが待ったをかけた。

「執事と主が戦う・・・戦いにおいて、相手が誰であろうと関係ない弱肉強食の世界においては別に間違っているワケでもない・・・だがあえて言おう、アンフェアであると」

「まあ確かに・・・そうではあります」

野乃原がふむといった表情で頷いている。そしてテルは言ったのだ。

「ここはフェアにするために、主と主で戦わせてみるってのはどーだ?」

テルがにやつと笑みを浮かべる。野乃原はよい提案だと言わんばかりに竹刀を東宮に手渡した。

「そうですね。いかにどちらの主を教育できているか、それを競い合う」

「そうだ。不公平な点は何一つないだろ?」

「その前にあなたの主は誰ですか?」

野乃原はやはりといった感じで聞いてくる。だがテルは堂々と

答えるのだ。

「この・・・ワタルんだ。今だけはこいつとペアを組んでるからな。一時的に主にしてくれ」

ワタル。その言葉を聴いて、東宮がニヤツと笑みを浮かべた。

（しめたツツ　ワタルなら武術もなんもやってないし、その点に関しては剣術を習っているこつちに分があるツツ!!）

武術関連のスポーツを習っている者とそうでない者ではえらい違いが出てくる。その点では明らかに東宮が有利だろう。

ズシ・・・

しかしだ。

ズシ・・・

絶対という言葉がないのが世の常。

「頼んだぜワタルン」

「オーケエイ」

「お前誰だアアアアアアアツツ!!」

東宮は、目の前の、自分より明らかに背の高い外人を前にして思いつきり突っ込んだ。

「ワタルはこんなんじゃないだろ!!　明らかに別人だろ!!　もっと小さくてなよなよしてるへタレじゃなかったのかよ!!」

「おい、ワタルはへタレなんかじゃねーよ」

テルは失敬などといった感じで東宮を睨む。

「いいか？　マラソンはな、人生と同じなんだよ。長い長いゴールを目指すということが、彼を立派な大人にさせたんだよ・・・」

「こんなワープ進化があつてたまるか!!　明らかに大人じゃねーかアアアア!!!」

東宮は今度は野乃原を見た。

「野乃原、明らかに不正だ!!　僕じゃなくてお前が成敗しろ!!」

「なりません」

「な、なんでだ!?!」

静かに返す野乃原に東宮は驚いた。

「これは大事な試練なのです・・・坊ちやまが、これからをどう生き、人生を行くのか・・・それを見極めなければならぬという仕事執事にはあります」

野乃原は更に続ける。

「それでもしなければ、想い人を射止める男にもなれはしません」
「ツツツ!!」

その瞬間、東宮の中で何かが変わった。

(そうだ。僕は・・・桂さんに認められる男になりたい!! 逃げちゃだめだ・・・逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ!!)
「だああああ!!」

東宮は果敢にも竹刀を構えて、ワタルンに突っ込んでいく。しかし・・・

ガシツ

ワタルンが東宮の頭を鷲づかみする。当然、背の低い東宮の振るう竹刀はワタルンの胸の薔薇すら掠ることなく空を切った。

やはり「絶対」なんてこの世にはないのかもしれない。

「france paaaaahn!!」
バシーン!!

「ぶはっ!!」

今度はワタルンの攻撃。フランスパンを東宮の頭に軽く当てた。

「cream paaaaahn!!」
ベチャツ!!

「あべしツ!!」

ワタルンはどこから出したのか、今度はクリームパンを東宮の顔に投げつけた。既に東宮の顔はクリーム塗れである。

「pizza paaaaahn!!」
ベシーン!!

「ひびぶツツ!!」

まだまだワタルンのターンは終わらない。またしても出所不明

のピザパンを取り出し、東宮に叩きつける。

「坊ちやまアアアア!! ウオオオオオオオオ!!」

「お前、結構馬鹿だな……」

ハンカチ片手に涙を流しながら見守る野乃原に対してテルが細い目で見た。

数分後。

「……………」

東宮はクリームまみれのピザまみれのフランスパンまみれの、取り敢えずパン塗れになって倒れていた。

既に胸の薔薇はクリームやら何やらで原形とどめなくしている。

勝敗は明らかだろう。

「坊ちやま、あなたは頑張りました……坊ちやまは真の男に一步近づいたんですよツツ!!」

そう賞賛を評する野乃原はパン塗れの東宮を担いだ。

「おいアンタ……」

「はい?」

立ち去ろうとした野乃原がテルに呼び止められ、足を止める。

「そいつの剣術の太刀筋だけだよお、荒いから直しとけよ。怪我するからな」

テルの言葉に野乃原は一瞬驚いた。

「分かるんですね」

「まああんだだけ見境なく振り回してればな?」

首をコキコキと鳴らし、テルはワタルンと共に野乃原に背を向けて歩き出した。

「……………これは面白い、やはり噂どおりでしたね」

誰もいなくなった後でフツと笑いながら野乃原は呟いた。

野乃原・東宮ペア、リタイア。

「お嬢様、なんだかんだで僕たちトップですよ」

「むう、私もここまで上手く事が運ぶとは思わなかったぞ」

ハヤテはナギを抱えながら走る。ナギもこの態勢には慣れたようでもう気にはしていないかった。

「この橋を渡れば、後はゴールまで一直線です!!」

ハヤテの目の前には一本の橋が。下は谷底、真っ暗で何も見えな
い。

(ここを渡りできれば勝てるのだな!!)

本来なら、いつも高すぎて怖いと思ってしまうナギも「優勝」という二文字の前に興奮を抑えられなかった。その興奮が、一時的にも恐怖とは無縁にさせている。

だがしかし、こういうシチュエーション。

「待ちなさい、そう簡単に行かせる訳にはいかないわよ!!」

ラスボスが付き物だ。

「ヒナギクツツ!!」

橋を目の前にして後方から追ってくるように現れたのは息を少しだけ荒くしたヒナギクだった。

「ひ、ヒナ……み、水……もう無理……」

「あ、はい美希」

しかしその側の岩場に寄りかかるようにペアの美希が涙目でヒナギクより荒い息遣いで座り込んでいた。

ヒナギクは慌てて給水ボトルを手渡す。

「と言う訳で、ここを通すわけにはいかないの!!」

(人選ミスじゃないか?)

ナギとハヤテもこのヒナギクの誤算は一目見ただけで分かった。

「そんな事よりハヤテ君、あなたこのレースが終わるまでずっとナギを抱えたままにいるつもり?」

ヒナギクが呆れたような表情でハヤテを見る。

「まあそのつもりですけど……」

ハヤテはゆっくりとナギを地面に降ろす。

「でもハヤテ君が全部ナギを抱えてゴールしたとして……それはナギ

の為になるのかしら？」

ハヤテの言葉にヒナギクはナギ自身に問いかける。

(お嬢様の為……そうだ、もともとこれはお嬢様の運動嫌いを少しでも無くす為……)

ハヤテは今更になって気づかされた。最初こそはナギの運動嫌いを無くすためのキツカケを作り出そうとしていたが、自身のクビもかかってしまっただけからは自分の為に、と目的が変わっていた。

「だ……！ だが走れないのは走れないのだ!! みんながヒナギクのように完璧ではないのだ!!」

流石にナギの意見も一理ある。ナギとヒナギクの運動力を比べるのは、まさに天と地の差だ。

「……それでも」

ヒナギクはすこし神妙な顔で続ける。

「苦しくて、辛くて、死んでしまいそうな思いのその先に、何者にも変え難い喜びがあったりするのよ」

ヒナギクは言う。もう駄目だ、できない、その境地を乗り切った場所に大きな喜びがあると。それは抱えられたままのナギには決して味わえないものだ。

これを聞いて戸惑うのはもちろんハヤテだ。

(確かにこのままではお嬢様の為にならない……でも負けてお嬢様に借金を返すことができなくなってしまったは……!)

「それでも一位にこだわる姿勢は嫌いじゃないわよ？」

(どっちだー!!)

付け加えたヒナギクの言葉にハヤテは更に困惑するが、すぐにもとの冷静な顔つきに戻り、ナギに言った。

「この橋を越えれば後は元のコースに戻って、そのままゴールへ一直線。先に行ってください……」

ハヤテはどこからともなく箒を取り出す。

「僕がヒナギクさんを足止めします……」

「へえ、でもナギの体力で辿り着けるかしら？」

ヒナギクが今度は挑発するように薄い笑みを浮かべる。なんか

さつきと言っている事が逆な気がするが。

「大丈夫です。 僕の鍛えた（二日間ほど）お嬢様ですから!!」

（ハヤテ・・・）

ナギも自身の顔を両の手でぱしっと叩き、渴を入れた後、走り出した。

「じゃあグズグズしてられないわね・・・一気に行くわよハヤテ君!!」

ヒナギクが竹刀を構えて地を駆ける。 鋭い剣筋でハヤテをわき腹めがけて切りつけた。

「分かりました! いくらでも向かってきてください!!」

ハヤテは体の痛みを押し切ってヒナギクの一振り一振りを紙一重で避けていく。

『おーつとここで燃えるようなラストバトルが勃発だーっ!!』

『もうコメディー小説じゃないですね・・・』

実況側も最早お手上げといった感じである。

しかし、そんな実況たちを置いてけぼりにして戦いは続くのだ。

（大丈夫、幸いにもこの戦いには一つの勝機がある!!）

ハヤテは柄にもなく薄く笑うとまるでヒナギクをある所へ誘導するかの様に距離をとり始めた。

ヒナギクは逃がすまいとハヤテを追いかける。 そして・・・

「ただし・・・」

ハヤテがヒナギクを誘導した場所。

「つり橋の上ですけど・・・」

「・・・」

それはつり橋の上だった。

皆さんもお分かりと思いますが、ヒナギクは極度の高所恐怖症である。

「・・・」

どこまでも続く暗黒の世界、ヒナギクは石のように固まってしまった。

「・・・ちよつと揺らしてみたりして」

「キヤーー!! バカバカ動かないですよ!!」

悪戯っぽく端のロープに手を掛けるハヤテを見てヒナギクは涙目になりながら崩れ落ちた。

「ヘンタイ！ バカ！ いじわるーっ!!」

「なんとでも言ってお下さい。 僕はお嬢様の為なら鬼でも悪魔でもありませんよ」

その時のハヤテは悪魔の笑みを浮かべていたという。

（お嬢様、後は頑張ってください!!）

ハヤテはナギの走り出した方向を見てその無事と成功を祈った。

『いや〜ここまで来てまさかの三千院家とは・・・』

『ええ、やはり自分の予想通りでした・・・』

『ですがまだ終わってないらしいですよ?』

実況側もなぜか盛り上がっている。

その時、ハヤテも気づいたのか橋の入り口に視線を戻した。

「ラスボスを倒したその先の・・・真のラスボスってのは知ってるか?」

黒い短髪の髪に死んだ魚のような瞳。

善立 テルその人である。

「テルさん・・・」

ハヤテも真剣な表情でテルと向き合った。

「巻き返してやったぜ・・・そこ、通してもらえねえか?」

「できません・・・」

ハヤテは返す。そして箒を構えた。

それが合図だったかのように、テルも野乃原から拝借した竹刀を構える。

「簡単な理屈だ——」

「同じ目的を持ったもの同士が競い合う時、この場合は——」

「即勝負だろ?」

互いが不敵に笑う。

「多分、初めてテルさんと戦うんじゃないかと思っています・・・」

「まあそうだろうな・・・」

（一回だけあるけどあんなときは踏んだりけつたりだったけどな）

思い出すだけでもイライラが湧き出てくる。 うんホント、その借

りをテルは返さなければならぬ。

「一瞬だ」

「？」

テルの言葉にハヤテは疑問を浮かべる。

「多分、打ち合いにはならぬえ……一回きりの……それで決まる……」

「なら、始めましょう……」

ハヤテは先ほどのテルの言葉が気になっていたが、すぐに雰囲気に戻した。

互いが武器を構えて……

「行くぜ……」

テルが呟いて、ハヤテに向かって走り出した。

ボード表。

一位 三千院家

二位 生徒会

三位 テル

四位 先生ペア、千里（リタイア？）

そして戦いは最高潮にツツツ!!

第28話く人生はマラソン、もうゴールしてもいいよね

——神は言っている……ここで負ける運命（さだめ）ではないと……

この勝負を見ていた花菱 美希（白皇学院生徒会役員）は後にこう語っている。

○

—あの時の勝負？ ああ、覚えてるよ。 私は給水しながら休んでたけど……

「ホラよッ」
「ツツツ!!」

—投げたんだ自分の竹刀を、テル夫くんが。 ハヤ太くんに向かってな……

—今思えば何やってんだアイツは？ って考えたなく。 だって戦う武器が無くなればどっちが有利か明白……

武器をもった相手には複数で仕留めるっていう鉄則があるくらいだし。

「くっ……!!」

—ハヤ太くんか？ 勿論弾いたよ、箒で上手く真横に……な
—奇襲攻撃のつもりだったのか知らないけど、アレは無い。

—だけどソレが狙いだっただよな……竹刀を投げたこと事態が。

「あ……」

—ハヤ太くんも『しまった!』って思ったんだろうな。

—いつの間にかハヤ太くんの目の前にいたんだ。最初のは悪魔で目眩まし……

(マズい……)

—ハヤ太くんは動かないままだったよ。こんな古い手を使われるとは思ってなかった……って感じだな。

—だけど不思議な事に、彼は攻撃しなかったんだよ……次の瞬間、音が響いたんだ。

パシイイン!

「……………ツツツ!?!」

—パシイインって、そ、蚊を両手で潰す感じでハヤ太くんの顔の前で叩いたんだ。

—そ、コレが真の狙いだった。ねこだまし……ハヤ太くんは簡単に引つかかってしまったんだよ。フェイクのフェイクに……

「しまった!!」

—んで、慌てて振り返ったらテル夫くんは橋の出口にいたわけだ……ある意味マジックだわな。

—え? 冗談でしょ? いいえ、一秒一秒を細かく説明しているだけ、全て真実です!!

○

「テルさん!!」

ハヤテが叫ぶ。橋の出口にいるテルに向かってだ。

「言ったら、打ち合いにはならねえって……」

テルはニヤリと笑った。

「一回切りのソレで決まるってよ」

ハッキリと言えばズルい。真剣勝負を自ら挑んでおいて蓋を開ければ武器を直接交えずねこだまし。

だがソレで道を開けてしまったのは紛れもない事実。

ハヤテは自分がペテンにかけられた事に歯をぎしりと鳴らした。

「勝負つてのはココよココ」

テルは頭をトントんと指でつつく。

「まだ!」

ハヤテはまだ間に合うとテルに迫る。だがその時、

「カモン、ワタルン!!」

テルの掛け声と共に橋を飛び越えて現れた人物は地をズシンと鳴らした。

(ワタルくんが?)

聞き慣れた名前を聞いてハヤテがそう思ったのも束の間。

「後は任せたまぞワタルン」

「オーケイ」

「……………」

一瞬の静寂の後。

「誰だアアアアアアアアアツツ??」

グラサンの外人を見て一同がそうツツコンだのだった。

「んじゃ、マジで任せたぜ」

テルはワタルンに親指を立てて、改めて走りだす。

ワタルンは頷くとフランスパンを取り出した。

「アレは何をしているのかしら……」

「さあ？食べて巨大化……ですかね？」

ハヤテとヒナギクが考察するなか、ワタルンは大きく息を吸い……

「f r a n c e p a a a a h n!!」

パシイインとフランスパンを思いつきり叩きつけた。

バキン！

「え？」

何か支えていた金属の部品が破壊される音に、ハヤテ達は耳を疑った。

そして次第に橋が重量により落ち始める。

マズい。落ちている。

「ヒナギクさん!!」

「え？な、なに？」

「捕まっつててください!!」

この間、僅か一秒に満たないだろう。この間にハヤテはヒナギクを抱えて橋の入り口に跳び戻った。

「大丈夫ですかヒナギクさん？」

スタツと地面に着地するハヤテはヒナギクの安全を確認する。

「……………」

返事がない、ヒナギクは目を回していた。 顔色も悪そうだ。

「……………」

遠くではワタルンがじーつとこちらを見つめている。

「な、なんですか……………」

グラサン越しで睨んでいるかわからないが、雰囲気からするに確実に睨んでいるだろう。 ワタルンはこちらに歩み寄って。

ベチャ。

ハヤテの顔にクリームパンが直撃した。

「……………ペツ」

と谷底に唾を吐き捨てる。 そうして彼はその場を去っていった。

「あの…僕なにか悪い事しましたか?」

「さあな、分からん」

顔がクリーム塗れのハヤテに対して美希はそれしか答えられなかった。

(お嬢さま……………テルさんより先に、ゴールへ!!)

だがそんなことより、クリームまみれのハヤテはナギの心配をするのだった。

○

テルはひたすらゴールに向けて走る。

(まさか一回きりの騙し討ちが通るとは思わなかったな……………)

正直、ハヤテの体の怪我のお陰で上手くいった訳だ。

(後はゴールへ向かうまで、待ってるよ賞金よ!!)

テルの頭の中で札束の世界が浮かんだ。

ズリユツ。

「ん？」

ドゴツとテルは前のめりに転んでしまった。

「オイオイ、こんな事してる場合じゃねえつてのに……アレ？」

テルは体を起こすために腕で地面を押そうとする……が動かない。

「アレ？ ナンダこれ？」

気付けば辺り一面真っ赤つか、頭部から凄い出血。

「え”え”え”え”っ!?! ちよ、え”え”え”え”っ!?!」

テルは突然の事態にパニックだ。

説明しよう。何もハヤテだけが怪我をしている訳ではない。

テルもあの日、大怪我していた人物の一人なのだ。

「やっぱりガンダニウム合金で作られた方が良かったな……」

なんて言ってる場合ではない。彼にはこの大会で優勝しなければならぬ。

自身の借金を払い、ラーメン辰也の不安を取り払ってやることだ。

もはや意地しかない……。

交わした約束のもとにあるのは男の意地だ。

「オオオオオツツツ!!!」

立った。　テルが立った。

○
ゴール付近。

『さあマラソン大会もいよいよ大詰めだア!!』

『名だたる強豪達を下してきたのは一体誰だ!!』
実況の泉とワタルがマイクを片手に総立ちだ。

「ハア…ハア……」

『おおーつと！ 競技場一番乗りは、三千院家だア——!!』

「ハア…ハア……」

(あ、あと500メートル!!)

ナギは荒い息遣いながらも安定した走りを見せていた。

「待てえエエエ!!」

競技場の入り口からの声にナギが振り返った。

「げっ！ テル!!」

「ナギイ！ 優勝は簡単にさせねえぞオオオ!!」

しかしその足取りはかなり重い。走っていてもナギよりちよつと速いぐらいだ。

『何かジジイみたいな走りですね泉さん』

『まず私は血塗れの経緯を説明してほしいんだけど……』

『また誰か来ましたよこの競技場に』

『アレ、本当ですな!!』

「オオオオオツツ！ やらせはせん！ やらせはせん

ぞオオオーツツ!!」

怒涛の叫び声を上げながら走るの崖に落ちた千里だ。

『崖からどうして無事に帰って来れたのかとツツコミたいですね』

『それは言わない約束なのだよワタルン♪』

『いや、あの泉さん、僕はワタルンではなくワタルです』

「なんだアイツは……………」

必死の形相で走る千里を見て、テルがそう呟く。

「キングが負けるなど決して有り得ないツ！」

走る千里は怒涛のチャージング。 少したがテルを追い越した。

(オイオイ、ここまで来てソレはねえだろうがよ…………)

走り、追い越していった千里の背中を悔しく見つめた。

(ここで負けたら、ジジイの借金返せなくなっちまう…………ん?)

テルはここに来て一つ気付いた。

—今回、借金がどうかでなんか俺らは騒いでるが負けた場合、ハヤテはクビなんだよな?

(クビっていうのは、離れちまうって事なんだよな…………)

それは勿論、ハヤテは承知している。 もしハヤテとナギが離れて

しまったらと考える。

…………考える事を止めた。

(一番頑張ってるのはナギだよな…………)

そう思い、先頭を走るナギの小さな背中を輝いているように見る。

(走ってきたんだよな…………ここまで)

ここで自身の過ちに気付いた。 頑張ってるのはナギだ。俺じゃない。

(俺の借金はまだいい。けどあいつ等は離れちゃったらダメなんだよ……)

少しばかりため息をつくるとテルはスピードを上げた。

(誰かと一生会えなくなるなんて嫌だもんな!!)

「又オオオオオオツ!!」

力を振り絞ったテルは千里の体に思いつき飛びかかった。

「な、なに!?!」

『おおーっとここでテル夫くん、千里くんが転倒だアーーーーツ!!』

倒れたテルは千里の足にしがみついていた。

「貴様、俺の邪魔をするのか!!」

「ああそうだ。邪魔してんだよ邪魔ア、あいつ等はな、一緒にいなきやいけねえんだよ、離れちゃったらダメなんだよ!!」

これでもか言わんばかりに千里はテルを引き剥がそうとするがテルは意地でも離さなかった。

「行けえエエエエエエ、ナギイイイ!! マラソンキングになれえええええ!!」

その声は主に向けての最大のエール。

(スマン、テル!)

ナギにはしっかりと届いていた。テルに対する気持ちをぐっと堪え、そのままゴールへと向かう。

(辛いけど……さつきよりは息は荒くない……)

後100メートル。

(足も・・・軽くなってきた・・・)

後80メートル。

(ああ、これがヒナの言っていたことか・・・)

後30メートル。

(みんなありがとう・・・スポーツもそんなに悪くは・・・)

後5メートル。

遂にナギがゴールテープを切る瞬間がやってきた。目の前の白いテープは今までの自分とはまったく持つて無縁。この大会をやるまでは憎たらしく間で感じていたが、今ではこの湧きあがる高揚感を心行くまで実感している。

ゴール付近のスタンドからはマリアやクラウス。委員長の唯子達はその瞬間を見ようと集まっていた。

——神は言っている・・・ここで負ける運命(さだめ)ではないと・・・

「優——」

ナギがゴールテープを切ろうとしたその瞬間。ナギの横を小さな風が吹いた。

「二等賞——————ツツ!!!」

ピシッ!とその場の全員が凍りついた。

残り一メートル、つまりゴールテープ手前でナギを抜き返した人物は・・・

「賞金はあたしのもんじゃあ——————い!!」

桂 雪路だった。

「「「エエエエエエエエエエエエエエエエツツ!!!」」」」

競技場が揺れた。それはもう大激震。果ては大暴動でも起きるような勢い。

「・・・・・・・・・・」

これを見ていたハヤテたちは、口をあんぐりとして、一人で万歳している雪路が目に映った。

それは美希やヒナギクも例外ではなく。

唯子はため息をつき、千里は競技場にて天高く吼える。

「……マジで？」

テルは最後にそう呟くと、力尽きたのか瞼を閉じて、意識を失ったのだった。

第29話く執事クエスト、その執事アホにつきく

マラソン大会後日――。

「ぬおりやああああああ!!」

三千院家邸にて、一人の男の雄叫びが響きわたる。

「ヒッ!」

物語は冒頭部分に相応しくない様な破壊音から始まる。ここは執事長のクラウスの部屋。

その部屋は今ほとんどもない光景に見舞われていた。

執事長の机に一本の竹ぼうきが貫通して突き刺さっている。それを見て、クラウスが身を震わせていた。

「オイオイオイオイ、俺は聞いてねえぜ。いつの間にハヤテがクビになったなんてよお」

目を覚ましたテルが最初に聞いたこと、既にハヤテが屋敷から出て行ったという情報だった。

突然だっただけにテルはそれを聞くや否や箒をもって、クラウスの所へ・・・といった感じ。

「ち、違うんだ善立!!」

「なあにが違うってえ・・・?」

堂々と執事長の机に立ち、ドスを利かせた声でテルは言う。

「テルくん落ち着いてください!!」

マリアが離れた場所で沈めるように促すが

「このとんでもねえ不景気の中で、アイツが一人でやっていけるってのはまず無理だ。目的達成できなかつたら『君もういらんよ』と言われたサラリーマンの気持ちか teme には分かるかアアア!!」

「善立! 落ち着いてくれ!! イヤ、マジで!!」

「世の中不景気三昧の社会人たちの怒りを、俺がお前にぶつけてやる!!」

「いやもうソレ八つ当たりの何物でもないからな!!」

クラウドスのツツコミも構わず、テルは突き刺さっている竹ぼうきを引っこ抜くと執事長に一撃を食らわそうという執事最大の暴挙にでる。

ガツンツ!!

しかしその暴挙はマリアのカナツチの投擲により止められた。

「ま、マリアさん・・・カナツチの使い方を間違えてますよ?」

頭部に見事クリーンヒットしたか流石に痛がるテル。

「人の話をよく聞いていないからですよ? もう一発、あげましょうか?」

「いや、もう、勘弁してください・・・」

笑顔でカナツチを構えるマリアを見て、もう抵抗する気はないといったテルだ。

「テルくん、まだハヤテくんはクビなってますんよ?」

「え?」

その一言に、ようやくテルは耳を傾けて動きを止めた。

「だから、もう三日もたってるんですよ? マラソン大会から・・・」

「マジすか?」

テルは髪の毛をクエスチョンマークに変えて何がなんだか分からない状態だ。

掻い摘んで説明、実はテルは気絶した後、見事に三日間は眠っていたのだ。船の事故の怪我がまだ完治していない状態での無理な運動。これが原因だというのは言うまでもない。

その三日間の間にも当然のように物語は進んでいく訳で、ハヤテは執事復帰を目指して「執事とらのあな」に出かけている。

「なるほど、要は再教育センターに送り出されたようなもんですね」

「まあそんな感じですね・・・」

「んで、ナギが居ないのはそれですか?」

「はい。何でも急に執事とらのあなに行くと言い出して早一日。

一緒に今居ると思うんですよね」

「なるほど・・・」

ふむ、といった感じでテルはゆっくりと部屋から出て行くこうとする

が……

「待ちなさい」

ガシツとテルの首を掴むのはもちろんマリアだ。

「あの、マリアさん、ちよっ……痛いッス」

「まずはダメにしてしまったクラウスさんの机を片付けてください……」

「いや、その前に……このままだとヤバいんじゃないですか……つて」

「何がですか？」

「なんかこのままだと咽喉切断とかに、なりそう……です」

「ついでに肋骨も開放性骨折にしましょうか？」

その笑顔は今までで一番恐ろしかったという。

その光景を見ていたクラウスはある疑問を抱いていた。

(アレ……私はクラウス、執事長。でも部下の執事にキレられてるのにそのハウスメイドに頭が上がらない……え？私執事長なのに?)
クラウスはこの上なく自身の扱いを嘆いたそう。

○

取り敢えず、片付けが終わった後にテルはその足を白皇学院に向けていた。

マラソン大会から数日あけてとのこともある。もうあの時の盛り上がりは微塵も残っていなかった。

テルがマリアに命じたこと。まず、執事とらのあなに赴き、ハヤテ達の様子を見てくる、と言った所だ。

しかし、学院に来たところで何も無いわけだが。

「イヤこれは別にハヤテ達が帰ってくるまで白皇で時間を使うとか、そんなことを考えている訳ではないよテルさんは」

明らかに、本音が発せられていたのは言うまでもない。

「おや、三千院家の執事くんではないか？」

「ん？」

突如の声にテルは耳を疑う。振り返るとそこには

「どうしてしまったのか執事くん。　　気絶してから三日目だぞ、大丈夫か？」

凜としたその顔、黒髪。　　テルには全く覚えがない。

「誰？」

「体に良いものはちゃんと摂取しているんだろ？　　執事くん。　　そうだな骨を丈夫にしろ。　　そうすれば粗方の不祥事には耐えられる肉体になる」

「いや、アンタ誰？」

「む？　　顔色がよくないな、目もどちらかと言えば死んでいる。　　これはビタミンが足りていないと見た」

「オイコラ、悪口だろ？　　明らかに悪口だろ？」

もはや止まることのないエンドレス。　　それを打ち破ったのは相手だ。

「というか、君はだれだ？」

「オオオオオオイ！！　　明らかに知ってるように話しかけてたよなア！？　　それで今更他人ぶるなよ！！」

「あまり怒るでない、ストレスが溜まっているな。　　カルシウムだ、カルシウムを尚更とるんだ。　　そうすれば万事うまくいく」

「話を聞いてくれええええ！！　　話が進まないんだヨオオオ！！」
んでもって。

「まあ冗談はよしとして、私は奈津美　　唯子だ。　　君じゃないもう一人との執事も知っている者さ」

「最初からそんな感じで話してくれよ……」

若干疲れ気味のテルはげんなりとしたため息をついた。　　それを見て、唯子が口を開く。

「まあそういうなテルくん、ハヤテくんの情報なら私は知っているぞ？」

「……マジで？」

テルのその反応を見てか、唯子もにやりと笑った。　　そして続ける。

「執事とらのあなは知っているな？」

「まあ……」

屋敷で聞いた単語を再びここでリピートし、テルは頷く。

「どうやらハヤテくんは『執事クエスト』にて最終試験を受けるらしいが、その仲間集めをしている真っ最中らしい……」

「まさかそれはあの四人でパーティを組んでダンジョンを進んでいくというトルネコも真っ青な伝説的な……」

「流石は三千院家の執事くん……なかなかの推理力」

唯子はそのまま続ける。

「その試験だが、何やらおかしな噂が流れていて……」

「おかしな噂？」

「ああ。何か、過去にとらのあなは確かに存在していた……が、もう既に存在していないらしい」

「あ!?　なんでだよ」

唯子の発言にテルは目を丸くした。唯子はきよとんとした顔で

「そりゃ、執事ってあんまり居ないからだろ？」

「言い放つのだった。」

「んで、君がこの話を知らないということは、当然、外部からの情報をシャットアウトされてるハヤテくん達も知らないわけだ」

確かに、とテルは思う。この不審な動きを、マリアやクラウスたちが知らないはずがない。あの二人が気づかないとなると

「まるで何か誘い込まれたかのよう……な」

唯子の一言にテルが反応する。

罨。そんな言葉が頭を過った。

「これはもしかすると……」

「うむ、大事なのは間違いない。既にハヤテくん達はパーティも決まっっていて、もうクエストの試験に向かったそうだ」

「遅かったか……」

「そこで……だ」

唯子がこの時を待っていたかのように笑みを浮かべる。

「当然、君も行こうと考えているわけだ」

「まあ、罨だとわかっていようがいまいが、様子を見て来いと言われて
いるからな」

先ほどその職務を放っておいた人間とは思えない。

「その罨だが、敢えてその罨にかかってみないか？」

唯子の意味不明な言葉に、テルはん？と唸る。

「その罨を打ち破るんだよ。 中から直接入って堂々とな」

「アンタも来る気なのか？」

「無論、そのつもりでいる。 その方が私的には面白いからな」

まるでこの出来事を楽しんでいるかのようだ。 まるで動じてい
ない。 気ままに動くマイペース、楽道家とはこのことか。

「どうなっても知らねえぞ？」

テルは当然のことのように言う。 三千院家を罨にはめる。 それ
は殺しの類の人間側が絡んでくるはずだ。 怪我しに行くようなも
のだ。

「大丈夫だ。 こちらも集めるのだよ。 エ○ンの戦士たちを・・・」
こうして仲間集めが始まったのだった。

○

「・・・んで？ 私のところに来たと・・・」

「その通りだ会長」

テルたちは生徒会室に直行した。

何故か、理由は簡単である。 その強さだ。

ヒナギクはもはや初期の状態からでもバトルマスターにつき、果て
は勇者の職業に就くこと間違いなしの能力をもつこの人物を、仲間
にしないわけではない。

「まあ、バーサーカーも真っ青のその戦力が欲しいというわけだ」

「それはどういう意味かしら」

ヒナギクが額に青筋を浮かべている。

「でもまあ事情はわかったわ・・・」

しかしここで、テルも一つの疑問が浮かぶ。 ハヤテもヒナギクの

戦力はのどから手が出るほど欲しいはずだ。同じ行動をしたのではなかったのではないかと。

「でも吊り橋一つも渡れない私が力になるかしら?」

ヒナギクの言葉にテルが顔をしかめる。

「だって大変なんでしょ? それなのに……」

「あの、会長さま?」

改まってしまふのはヒナギクの目だ。

笑っている、笑っているのだけれど……

「吊り橋一つ渡れない女よ?」

——なるほど、ハヤテがコイツをスカウト出来なかった理由が分かった。でも俺なんかしたっけ?

どこまでその話で押すのか。

「ねえ……」

(恐エエエエツ!! やべーよ、なんでこんなに怒ってるんだよ!)

その瞬間、唯子がテルの襟首を掴みヒナギクに背をむけるように引っ張りよせた。

「時にテルくん、ヒナギクくんに何か怒られるような事をしたのか?」

「知らん、まったくもって……」

「じーっ……」

ひそひそ話を眺めるヒナギク。

「こえーよ、なんであんなオオカミみてえな目になってるの? やべーよ、狩られちまうよ、ジ〇オウガも真っ青だよ。俺なんかした? なんかついたのか俺、というかもう一人の……俺……」

「ヒナギクくんの心の傷みたいなものに触れたとか、襲ってしまったとか? 男はオオカミだというし……」

「いや、俺はアイツを襲うなら確実に重火器が必要だと思う。後、オオカミは多分、俺じゃなくてアツチだろ色んな意味で」

「コソコソ話してんじゃねえーよ」

え？ と唯子とテルは耳を、自身の聴覚を疑い、ヒナギクが声を不良のごときドスのある声を利かせているのを確かに聞いた。

「ゴホン・・・冗談よ」

(これだツツツ!!)

二人は目を合わせ、ある作戦を思いつく。

「ヒナギクくん!!」

「ひゃ、ちよー！ 唯子さん！」

咳払いしたヒナギクに唯子が涙を滝のように流しながら抱きついた。

「冗談でも止してくれエエエ！ 君はありのままの君でいいんだ！

君は大○ 涼子ではなく、桂 ヒナギクだろう!!」

「冗談ですって唯子さん……」

「いや、冗談じゃ済ませられないかもしれないぜ？」

そう言うのはテルだ。

「簡単な話だ。これはギャップ効果によく似ている……」

テルは頭を掻きながら続けた。

「本来の人格が定着している人間が、突然別人のような振る舞いをする……しかしそれは不思議な事じゃない……が」

少しばかり間を置いた。

「確実にパターンある反応を見せる人間がいる……ある者はギャップ萌し、ある者はその人間の裏の人格を知る……」

「一般生徒ならあまり気にはしない……が君は生徒会長だ。 トップ

の人間が与える影響は計り知れない——」

ニヤリと唯子とテルはお互いに浮かべた。

「どうする、作者が感想ボックスを開けた瞬間、今回のお前の言動に対して抗議の感想がやって来るかもしれないんだぜ？」

「そ、そんな……私ってそんなに影響力あったなんて……」

(自覚無かったのかよ、人気投票連続1位……)

「まあ、我々に協力してくれれば忘れよう。水に流そう。記憶喪失にもなろう。だが——」

唯子は腕を組ながら続けた。

「協力しなかった場合、君の知人、家族、果ては一般人に明かそう！

ヒナギクくんは泣く子も黙るオオカミさんだという事を!!」

「ちよつと、それは脅迫ですよ!!」

ヒナギクが抗議の声をあげるが、唯子とテルの物凄い悪い顔に言葉を詰まらせる。

(ダメだ……この2人には何言ってもダメな気がする……)

そう結論つけたヒナギクだった。

「よし、急いでハヤテくんの所に行くぞ。彼のクビが掛かってるからな」

「え?クビ?」

その言葉を聞いて、キョトンとしたのはヒナギクだった。

「アレ? あんまり事情を聞いてない?」

テルの言葉にヒナギクは戸惑った感じで頷く。

—事情説明。

「そうだったの……」

まさかここまで大事に話が進んでいるとは知らなかったヒナギク。

だから先ほど、自分を頼ってきた理由に気付いた。

「困ってるなら素直に困ってるって言えばいいのに……」

むくと瞳を吊り上げるヒナギクはそう呟いた。

「なんだヒナギクくん? 彼が気になるのか?」

「ゆ、唯子さん！ 違いますって！」

「あく、やはり君は素直じゃない！ 素直じゃないなアアア!!だがそれがいい!!」

唯子は顔をニヤニヤさせてヒナギクに後ろからもたれかかるように抱きつく。

なんだコレ。

「オーイ、もう行くこうぜ？」

テルは溜め息をつきながら呟いた。

第30話く都合良く強いキャラが集まる訳がないく

「準備は整いましたか?」

「ここは教会、もとい執事とらのあな。」

巨大な門の前に立つのは一人のシスターだ。

「まあ集まりましたけど……」

苦笑いを浮かべながらそう言うのはハヤテだ。 現在、執事復帰を

目指すために執事とらのあなにて実習中。

「おーい、こんな地下にデカイ門があるって所はスルーか?」

そう不機嫌そうに割って入って来たのはナギである。

「え? なに? 何が始まるのコレ?」

辺りをキョロキョロさせているのはワタル。 何故か知らないう

ちにこんな所へ……という感じだ。

「お宝はどこにあるのかしら……」

ワタル以上に目を輝かせて辺りを見回しているのは雪路。

すでにお宝散策モードになっている。

そう彼らは今回、執事クエストの為に集められた最強の战士们なの
のだ。

「ではこの執事クエストの説明をしましょう」

シスターがメンバーが集まったのを確認すると説明を始めた。

「この執事クエストではあなたがこのダンジョンのなかに入って執事
のメダルを持ち帰ってくれば試験は合格です」

「え? それだけなんですか?」

「てつきり魔王とか出るのかと思ったよ……」

ハヤテとナギがお互いの目を見合わせる。 ただ一枚のメダルを
持ってくればいいという難易度の低さに意外といった表情だ。

(ククク……掛かったな!!)

そんな2人を見て、シスターは裏で不気味な笑みを浮かべていたの

は誰も気付いていない。

「この向こうが地下迷宮なんですか？ シスター・フォルテシア」

「はい、その通りです」

シスターはそう答えると近くにあつたレバーをガクンと下に下げる。

「では皆様、ご健闘を祈ります……」

レバーを下げた瞬間、門が低い音を立てながら開いていく。

ハヤテ達は中に入っていくのを見て、シスターはまた一人呟いた。

「さあ、死のゲームの始まりですよ……」

シスターの笑顔はア○デルセンも顔負けする狂気の笑みを浮かべた。

「……………」

そしてそのシスターの背後の暗闇の中で、まるで人間のような目がこれから起きる何かを予知するようにギラリと動いた。

○

「結局、連れてこられてしまったけど……」

ハヤテ達が入って数十分。　こんどは教会の前にヒナギク達がやってきていた。

「そんな言い方するなよ会長。　乗りかかった船だ。　楽しく行こうぜ？」

テルが先頭を切りながら歩く。

「そうだな。　我々もこれらの祭り事には積極的に参加したいものだな……」

「唯子さん、祭り事って……」

楽しそうな笑みを浮かべる唯子に、ヒナギクは溜め息一つ。

マイペースが主体のこのメンバーに頭を悩ませていた。

「だがまだ足りないのがある……」「そうだな。冷静に考えれば、RP Gにおいて必要な役職……」

テルと唯子が呟いた。

「えーっと、何なのか分からないんだけど……」

「なんだ分からないのかヒナギクくんは……」

ヒナギクだけが困惑している中で唯子が説明する。

「こういった類のゲームはどんな時でも回復役が必要なのだよ。薬草で地道に回復しては埒があかないからな」

事実上、シミュレーション系のゲームではお決まりと言ってもいいほど回復役がいる。

ゲームにおいて、戦う側も体力が回復できることは戦力的には優位に立てるのだ。

「でもそんな魔法使いみたいな人いるかしら？」

ヒナギクが至極当然なことをいう。しかしテルにはいささか心当たりがあった。

（伊澄が一番適任なんだろうけど、他言無用って言われてるからな……）

そう思いながら教会の前に行くと一人の少女がいた。

無論、伊澄であった。

「つてオイッ!!」

「あら、テルさま……」

突然のツツコミに伊澄はゆっくりと振り返りテルたちを見て言う。

「知り合いか、テルくん？」

唯子が不思議そうに尋ねてくる。

「まあな……」

「そうか……」

テルが頷くと唯子はそのまま黙り込んだ。

「また迷子なのか？」

その問いに伊澄は首を振って見せた。

(えーつとだな、こういった場合は……)

テルは考える。伊澄が迷子以外の事で、このような場所に来るといふ事はだ。

一つの案が浮かんだ。

「あまり近づかない方がいいですよ、皆さん……」

言う前に伊澄が袖で口元を隠す。

「あらどうして？」

「それはここが危険だからです……」

伊澄があからさまに危険だと、目を細めてヒナギクに言う。

(またか、またお前は悪いクセを……)

ちよつと勘弁してくれといった感じのテル。伊澄の一人でなんでも抱え込む、頑固はなかなか治りそうにない。

「だったら尚更引けん……」

「そうですね。危ないんなら尚更助けに行かないと行けないし……」

「……」

ヒナギクと唯子の言葉に伊澄は面くらったようだ。

「危険なので近づかないで下さい」

「「いやだ」」

三人が同時に即答。

「実は危険じゃないよ……」

「「なら問題ない」」

またしても即答。伊澄も流石に言葉詰まる。

「皆さんはナギと同じあまのじやくです……」

「オイオイ、あいつと一緒にするなよ」

伊澄もテルも同時に溜め息をついた。

「今回はそういう仕事なんだろう？」

伊澄は何も答えない。だがしかし、一瞬だけ首を上下に動かしたように見えた。

「俺達にも引けない理由があるからな……前回同様、巻き込まさせてもらうぜ」

「はあ……分かりました」

今回も伊澄が折れるしかないようだ。

○

「ゲームだったらここで『賢者伊澄が仲間になった！』みたいなのができそうだな」

伊澄が仲間になったのを見てか、唯子が呟く。

「まあ、この戦力なら大丈夫だろ。バーサーカーが二体いれば……」

ゴキン！

即座にヒナギクの鉄拳がテルの後頭部に炸裂する。

「不愉快な事を言ったかしら？」

「会長。なんでもかんでも暴力で解決するのは良くないかと」

頭をさすりながらテルが言うがヒナギクは無視だ。

「ふむ。私が狂戦士だというのは頂けないな、こんなにも可愛らしいというのに……」

「唯子さん、自分で言いますか……」

「しかし実際見るヒナギクくん。この集団はどう見ても女の割合が高いぞ？ 両手に華じゃないか？」

「トリカブトとハエトリ草がいるパーティーじゃねえか」

バキッ!

「不快極まりない言葉よ……」

「私もその言葉に気が障った。殴ろうヒナギクくん」

2人はテルに対し、怒涛のラッシュをかける。跳び蹴りから関節技、更にはテルを天高く放り投げ、空中ツープラトン。

ドゴッ!という轟音とともにテルは地面に頭から突き刺さった。

「息がピツタリですね……」

「息がピツタリですね……」

感嘆の言葉を贈る伊澄。テルはもはやライフが1という瀕死に限りなく近い状態になっていた。

「さて、そろそろ中に入ろうではないか」

唯子が髪を片手でバツと靡かせる。

一同もやる気のある表情を見せる。

今まさに彼らの冒険が始まろうとしていた。

とその時。

「貴様ら、こんな所で何をしている?」

不意に後ろから聞こえたのは聞き覚えのある声。

乙葉 千里である。

「まあ千里さま……」

「む、女はあの時の奴か……」

千里は伊澄の存在に気付いたのか、視線を伊澄に向ける。

が、やがて興味を失ったかのようにフンツと鼻を鳴らすと視線を背けた。

「むっ、貴様は!!」

次に視線をテルに向け、怒りの表情を表した。

「俺の邪魔をした奴か!」

テルはいきなり指を指されて頭にクエスチョンマーク。

「え? 誰? あ、斎藤くん? なに、まだあの金魚デカくなってるの?」

「ええい! しらを切るか! 忘れたとは言わせんぞ!」

事実、テルは千里の事をあまり覚えていなかった。

理由、あの時は無我夢中だったためだ。

「今ここで貴様を殴らなければ、俺の気が収まらない!」

千里がくわつと目を見開いてテルに殴りこもうとする。

「下がれこの下衆が……」

その毒づきに反応したか、千里が拳を緩めた、いや、止めた。

「貴様、何故此処にいる……」

千里は先ほどより不機嫌な表情になり、その声の主を睨みつける。

視線の先、それは唯子だった。

「私が言った事が分からんか、下等生物」

普段、凜とした態度をとっているだけにそのセリフは今までの唯子とはかけ離れていた。

「貴様が呼吸するだけで世界中酸素の無駄だ……温暖化の原因になっていることが分からないのか木偶の坊」

「貴様こそなんだ、俺の視界に入らないようにするべきだ。今すぐ消えてくれ」

二人が火花を散らす。まさに一触即発状態。バルカン半島みたいだ。

「会長」

「なにかしら……」

テルの一言に黙って反応することしか見せないヒナギク。

「奴らの関係はなんだ？」

「白皇である二人を知らない人は居ないわよ……悪い意味で」

若干、呆れたようにヒナギクが続ける。

「千里さんと唯子さん、何かとケンカが起きるのよ。日常茶飯事なくらい。唯子さんの常識論が通じないのよ、千里さん、基本アレだから……」

アレとは恐らくバカ、若しくは自己中な所だろうか。

「簡単に言い表せば『犬猿の仲』ね」

「なるほど、分かりやすいな」

テルも頷く。

視線の先では、未だに二人が睨みを利かしていた。

「ふん、まあいい……ヒナギクくん。さっさとこの中の用事を済ませてしまおう」

「むっ……」

くるっと翻した唯子に千里は眉をひそめた。

「貴様らはこの教会に入るといのか……」

「ああそうだとも。その方が憎いあんちくちちょうの顔を見ずに済むからな……」

「それは俺の事か、ならいいだろう……俺も貴様らについて行ってる」

「はっ」

一瞬の静寂の後、唯子が目を細めながら首を傾げた。

「貴様の邪魔なら俺は大歓迎だ。それに俺はキングだからな」

「最後が意味わからん。私は貴様のその意味不明な所が気に入らないのだ……………」

「俺もだ。貴様のその無駄に上から見下ろしているような態度、このキングを差し置いている……………気に入らん」

この二人は何かと相容れぬ物なのだろう。

「流石に唯子さん、もうこの際勝手にしましよ。時間も無いんですから……………」

罅が明かないと思っただか、ヒナギクが唯子に声をかける。

唯子も少しばかり考えて頷いた。

「……………分かった」

「ふん……………」

千里も鼻を鳴らして収めた。

相変わらず二人は顔を見合わせない。

「会長」

「どうしたの？」

「なんか……………大変そうだな」

「大変なのよ……………」

深い溜め息一つ。唯子はいつもの表情に戻り、一同も教会へと踏み出す。

今まさに、勇者達の冒険が始まる……………。

○

過去数千年前、古の大地より生れし王国の秘宝を手にしたその悪意

は欲望のままに生きた。そして、その欲望は肥大化し、世界のバランスを大きく崩し、世を混沌へと導きだした。

これはそんな欲望を阻止しようとする果敢な勇者達の物語――
」。

「つて、そんな設定のある内容でしたっけこれ？」

闇深いその迷宮ともいえる廊下を歩くのは勇者達一行。

彼はその一人。

まあ変に肩つ苦しいのも何なんでスマートに進んでいきます
と……

このダンジョンを乗り越え、その奥にある執事のメダルを手にして
綾崎 ハヤテは三千院家に復帰できるのだ。

――これは彼にとって負けてはいけない、勝たなくてはいけない
戦いなのだ。

――心をつないだ仲間とともに必ず勝利を手にしなければなら
ない戦いッツ

では紹介しようッ！ 彼ら三人こそ!! 志を共にする彼の心強い
勇者たちだッツ!!

「あ―――！ お宝はっけーんっ！」

勇者その1 雪路

職業：世界史教師

特性：ダメ人間

必殺技：常時バーサク状態

「ダリーなあ早く帰ろうぜー」

勇者その2 ワタル

職業：ビデオ屋店主

特性：へそ曲がり

必殺技：全52話のアニメ一気鑑賞!!

「なんか……ダンジョンつてすごい暗いんだけど……」

勇者その3 ナギ

職業：ひきこもり

特性：不登校

必殺技：働いたら負けかなと思ってるツツ！

「…………あれ？人選ミスった？」

押し寄せるのはもうビッグウェーブ並みの不安。

「…………でも大丈夫、多少の欠点は補えているハズだ。」

「ギャー！ー！ トラップ！！ うわー！ー！！落とし穴だー！ー！！」

「先生がまた崖に落ちていったぞ？ ま、平気だろうけど…………」
「だって勇者だし。」

「な…………暗いけどお化けとか出ないよな？な？」

余りある人選のはず！！

最終的には僕がカヴァーすれば万事…………

勇者その4 ハヤテ

職業：借金野郎

特性：不幸

必殺技：超不幸

「ダメあー！ー！ー！ー！ー！！」

ダンジョン内部にハヤテの絶望に近い叫びが木霊した。

○

「……………」

「……………」

場所は変わりまだ教会に入りたてのヒナギクたち。先頭は伊澄、その後ろにはヒナギク、隣にはテルが、後ろには唯子と千里が付いてきている。

なにかと重苦しい雰囲気だ。

「会長。いや、もといリーダー、もう冒険は始めながらにして終わっている気が…………」

「それは言わないで」

続けるな、と言わんばかりにヒナギクが肩を落とす。

原因となっていてるのは唯子と千里。この二人は戦時のバルカン半島、ちよつとしたいざこざがあったら即戦争、のようなぐらいの仲の悪さであった。

「くそ、なぜキングであるこの俺がリーダーになれんのだ・・・」

「適任者はヒナギクくんが決まっているだろうが・・・クス」

千里の呟きに唯子が最後にぼそりと毒突く。

もちろんこれを千里が聞き零す筈なく・・・

「貴様・・・小さくそのように俺を侮辱するとは・・・」

「はっ、事実を述べたまでだ。いやいや失敬、君は木偶の坊だから私の言葉は片方の耳から入って片方の耳から流されているのかと思っただよ」

お互いが不敵に笑いながら睨みを利かせる。このような状態が先ほどから続いているのだ。パワーバランスもとい、パーティの機能は果てしなく機能しない。

「だいたい、四人パーティなのにすでに五人いることになっているのがまずアレだろ？ 即効あの王様野郎を馬車に突っ込ませるべきじゃねえか」

「馬車なんてないわよ・・・」

ヒナギクがテルに対して的確な突っ込みをいれる。

そんな険悪なムードのなか、一同は長い階段を下り、広い場所に出た。

どこことなく、寒気がする。窓なんてないのに、冷えた風が周りを駆け抜けた。

「寒・・・」

「フン・・・」

テルが自身の服をさすり、千里は鼻を鳴らして耐える。

「・・・生徒会長様」

「はい？」

なにか感じ取ったのか、伊澄がヒナギクに声をかけた。

「生徒会長様に渡さなければならぬものがありました・・・」
「？」

一同が注目する中、伊澄がヒナギクに手渡したのは一本の木の棒。
「木・・・刀？」

手触りといい、独特のにおい、色を見て剣道をやっていたヒナギクは一目で分かった。

「ここから先は危険な予感がします・・・それをしばらくお貸しします・・・」

「ふーん」

軽く木刀を泳がせてヒナギクが呟く。

「これはかの天才刀鍛冶・・・名匠・正宗の作った最強の一本・・・」

伊澄は続けて言い放った。

「木刀・正宗です」

「・・・名匠も随分悩んだなオイ」

テルが木刀を見て呟いた。

「会長。ちよいとその木刀、貸してくんね？」

テルがヒョイとヒナギクの正宗を掴み取る。

「あ、テルさま・・・止めておいたほうが・・・」

伊澄が言うのを聞かず、テルは正宗を手を取った。その瞬間……

バチッ

「ん？」

体に走る謎の光。

バチバチバチッ!!

「え？」

先ほどよりも光の量が増していく……そして、

バリバリバリバリバリバリバリバリバリ!!

「バリバリダー……ッ!!」

弾けたようにテルが紫の電激に包まれた。

「正宗は適性のある人物を選びます。今は生徒会長さまが主として

いるようです」

「ダメだったら電撃拒絶反応かよオオオオ!!」

ゴトツと電撃が止んだ瞬間、テルは地面に倒れ込んだ。

「フンツ、面白いな」

テルの手から零れた正宗を広いあげた。

「さあ正宗よ！ キングであるこの俺を選ぶがいいッ!!」

高々と正宗を突き上げ、叫ぶ。だが当然……

バリバリバリバリバリッツツ!!

「ウオオオオオツツツ!!」

千里もまた紫の電撃に包まれ、轟沈。

「ふ…馬鹿だな……」

「私も思いますね……」

丸焦げ状態になった二人を見て、剣士二人は呟いた。

「まあテル様用にちゃんと用意してますが……」

「マジで?」

ゴッそりと何かを取り出した伊澄を見て、テルが仮死状態から跳ね上がる。

「はいどうぞ」

「おお!!」

と感嘆するテルが手に持つの布に包まれた棒。テルが持っただけでもずっしりとくる質量。

テルは布を外し始めた。

「これは、伊澄家伝統のオリジナル霊媒刀…撃鉄（げきてつ）くんです」

「……」

きりつとした目つきで伊澄は言うが当のテルはその物体を見て目

を点にしていた。

布から解き放たれたのは一本の黒い棒。それは伊澄は撃鉄と
いった。

「伊澄……」

「はい……」

テルの言葉に伊澄が応える。

「これどう見ても鉄パイプじゃねえーか？」

「撃鉄です。 霊剣です」

「いやでもなんか先っぽ明らかになんかの一部だったみたいにボルト
の穴あるし……」

と棒の先っぽはいい感じにくの字に曲がっており、あからさまにそ
こらから拾ってきた感がある。

「あと錆びくせーぞこれ？ 大丈夫か？」

「霊剣なのでご心配なく……」

「どう見ても紛いもんだろオオオオオオ!!」

テルは鉄パイプもとい撃鉄を地面に叩きつけた。

「一応主人公だぞ俺!? なんで会長にはとっておきのジエノサイド
キャノンで俺はそこらへんの鉄パイプなんだよ！」

「ふひ……ひ、ひたいれふ……」

額に青筋を浮かべてテルは伊澄のほっぺをつねった。

伊澄は涙目を浮かべる。

「君は何をやっている……」

即座に唯子がテルの頭を殴りつける。テルはごろんと地面を転
がった。

「あれ、唯子さん……」

ヒナギクは唯子の手握られている正宗を見て啞然としていた。

「ほう……なかなかの名刀だなこれは……」

「唯子さまもまた正宗に認められる素質を備えていたということ
でしょうか……」

正宗を眺める唯子を見て、伊澄も少し考えたような表情だ。

「だったらこれは唯子さんが持った方がいいですよ。 私はそれが一

「唯子さんに相応しいんじゃないかって思いますよ」

ヒナギクが笑顔で唯子に言う。別に悪いことではない。こうすることで、唯子も持ち前の剣術を活かせるし、パワーバランスを揃えることができる。

「……」

しかし、唯子はすこし考えるとその手に持っている正宗をヒナギクに手渡した。

「これは……一番キミの手にあるのが似合っているよ……」

「え……」

呆気手に取られるヒナギクをよそに、唯子は軽く笑うと身を翻した。

「うむ。それがいい……そうすれば鬼に金棒というものだ……」
「ちよ、それどういう意味ですか!？」

はっは、と高らかに笑う唯子。一瞬だけ和んだかのような雰囲気だ。

「オイオイ……主人公の武器が錆びた鉄パイプって……」

「ふむ。時にテル君よ、そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない……ってんな訳あるかアアア!!」

と唯子に見事な突っ込みを見せるテル。

「こりやあれだな。『そんな装備で大丈夫か?』と聞かれたイー○ツクが『一番いいのを頼む』と言ったことに対して武器がうなぎパイだったみたいな……」

「……!!」

テルが一人ぼやいているさなか伊澄だけがその場の異変に気付き、目を細めた。

「む……」

やや遅れてなぜか千里が辺りを見渡す。

「皆様……来ます」

「そのようだな……」

「オイオイ、伊澄はともかくなんで馬鹿王子まで異変に気付くんだよ」
「キングの感だ」

テルの言葉に対して、千里が当然のように返す。

「一体、なにが来るっていうの?」

ヒナギクも思わず正宗を構えた。

「……………ボゴ。」

「ん?」

そんな奇怪な音がした。 地面から。

地面から突き出たもの、それは腕。

「うげ……………」

テルは思わずその光景に顔色を悪くする。 地面から出てきた腕はさらに伸び、やがて頭、胴体、足とそれぞれ部位があつた。 肉はなかつたが。

「……………ゾンビか?」

「見てるこつちは勿論のこと読んでいる読者たちも気味悪だと思つてますよ」

唯子とヒナギクはしかめた顔でなお冷静だ。

「伊澄、これが仕事の内容か?」

「はい。 どうやらこの教会には昔から悪霊の類が住み着いているらしくて……………」

テルの質問に伊澄は頷いて答える。

「悪霊つつつても前みたいなの幽霊の類じゃねえよ。 つーか生きる死者の代名詞のゾンビじゃねえか」

「さあ、そこら辺は分かりませんね……………」

「オイオイ……………」

なんともアバウトな伊澄に対してテルは深くため息をついた。
「……………」

(確かに悪霊と死者は関係がない訳ではない…………でも依頼内容と異なる。 なら、この教会にそれ以外の脅威がこの異常を引き起こしている可能性がある)

伊澄はただ冷静にこの異常な状況の分析をしていた。

しかし、目の前にいるのは異なる依頼内容だとしても人々に迷惑をかける恐れのある脅威。

「……」

冷静な顔つきで懐から札を取り出し構える。戦闘モード体制だ。しかしその伊澄の前を遮るかのように一本の刀が前に現れる。

「ふむ。流石に驚いたがなんとか理解したぞ伊澄くん」

そう言つて竹刀を構えるのは唯子。

「唯子さん一体何を……」

ヒナギクが驚いた顔で肩を鳴らしている唯子を見る。

「無論、時間稼ぎのつもりだが？　ここは我々が食い止める」

「そんな！　唯子さんでもこの数は!!」

ヒナギクは目の前のゾンビを見る。地面から出てくるゾンビは数を増し、すでに数は百を超えたようなものだ。

「なに、強い戦力がここで足を止めるわけにはいかないだろう。それに、この状況はここだけではな……」

「……ツツツ!!」

ヒナギクも伊澄も、この言葉にはつとなる。この現象が起きているのはこの場所だけではない。自然とナギやハヤテたちの方でも同じ現象が起きてる可能性がある。

「そうだな」

今度はテルが前に出る。

「幸い、先に進む道はあのゾンビどもの後ろとかにはねえ、あのすぐ横だ」

「しかしテル様……!!」

伊澄が小さな声を上げる。伊澄も流石に心配だと思っっているのだろう。

「誰も死に行くわけじゃねえんだ。生きてりやまた会える……俺の実力は知ってんだろ？」

決めるかのようにテルは親指を突き立ててみせた。伊澄はそれを見て

「ええっと……分かりません……」

「ああ、そうだよね……」

オロオロしながら応える伊澄にテルはまた肩を落とした。

「まあいいや、取り敢えず行け、ついでに会長、お前は伊澄の護衛だ」
「なんで私？」

「こいつはなにかと無茶するんだよ。とくにこう言ったことに対してはな・・・後、ハヤテたちは狙われている。」

「だったら目的の奴等はこれ以上の危険に巻き込まれてる可能性がある」

ヒナギクもそのことには納得して頷く。

「その勢力を蹴散らすためにその刀はお前にあるんだ」

「・・・わかった」

ヒナギクは再度頷き、伊澄とともに先に行く。伊澄も渋々納得したようだ。

「・・・君もなかなか頭が冴える様だな。今の状況の予知は、私が言う予定だったのに」

腕を組んだ唯子はそう呟いた。

「別に・・・ぼやけた記憶なんだが、その経験が生きてるだけだ」
「・・・？」

一瞬だけ見えたテルのその横顔を見て疑問を浮かべる唯子だった。
「んで？ どうするよこの数？」

テルは目の前のゾンビの大群に指をさす。もう数は増えてはいないようだ。

「ふむ。一人約50といったところか・・・」

「なら二人でだいたいやれるな」

「いや！俺が100だツツ!!」

「アレ？ バカ王子？」

「ふん、貴様らだけに死に行かせるわけにはいかんのでな！」

腕をぐるんぐるんと回して気合いを入れる千里。前をいく千里に対し、唯子が呟いた。

「別に死ぬつもりはないのだが・・・できれば貴様だけこの場で消えてくれ」

「なにイ!？」

またしても睨みあう。そんな事をしている場合ではないというの

に。

「まあそろそろあいつ等の相手してやんねえとな。待ちぼうけてるぜ?」

目の前ではゾンビたちがうめきながらこちらを見つめている。非常に気味が悪い。

「そうだな。そろそろ行くか・・・と、言いたい所だが」

「あん?」

「もう既にバカが突っ込んで行ってるぞ」

「ウオオオオオオツツ!!」

視線を戻すと、千里が雄たけびを上げながらゾンビの集団に突っ込んで行くのが見えた。

「・・・」

テルは頭をぼりぼりと掻きながら一つため息をついた。

「見なかったことにしよう・・・」

そう言い、彼は構えるのだ。自分のこれからの相棒を。

「ふむ」

唯子もまた竹刀を構える。

「さて、楽しい楽しいド○クエもびっくりの戦闘の始まりだ」

3人の戦士たちは一つの戦いの中へ・・・

第31話く暴れていいのは喧嘩だけく

「うおおおおおっ!!!」

地下迷宮内、ハヤテ達一行はゾンビの大軍に追われていた。

「ハヤテー！一体何なのだ!？」

ハヤテの横を走るナギが叫ぶ。

「はぐれゾンビですよ！しかも骸骨の！なんか人の道からだいぶはぐれてた感じでしたし！」

「つーかはぐれてんのは現世からじゃねーか!？」

すぐ横で走るワタルが突っ込んでいる。すかさずワタルは付け加えた。

「気をつけるよ！さつき先生が散々引つかかっていたトラップが色々あるからな！」

「先に言えよく……」

カチツ。

そんな事を言っているナギが床のスイッチを押してしまった。

後ろから矢が発射される。

「お嬢さま!!」

割って入ったハヤテはナギの盾になるように立ちはだかった。

ドシュツ!

「ぐっ……!!」

「ハヤテ!!」

矢がハヤテの肩を貫き、ナギの悲鳴が木霊した。

○

場所は戻りテル達。

「オオオ……」

ゾンビ達は唸っている。数は大体100を越えているぐらいだ。

様々なゾンビがいる。 刀を持つもの、槍を持つもの、弓を持つもの、素手のもの。

その大軍の中で大立ち回りをする無謀な奴らがいた。

「ふんっ！」

気合いを込めた一撃により、竹刀によって切り上げられた頭は軽々と宙を舞う。

頭と言っても骸骨だからそんなグロくない。

そして即座にその胴体を袈裟斬りし、粉碎する。

足を止める事無く、大軍の波に飲まれる事無く、斬り倒す。

ある時は避け、的確に突きを繰り出す。

唯子は例えるなら漆黒の蝶が蜂のような獰猛さを兼ね備えているようだった。

「オオオ……」

今度はゾンビの反撃、何故か縦一列になり唯子に突っ込んでいく……ジ○ツトス○リームアタックのつもりだろうか。

「セイイイッ!!」

唯子の後方で怒号が聞こえた。 チラツと振り返ると巨大な元○玉、もといゾンビを丸く固めて作った塊を唯子が居ることを承知で投げつける。

「…………ふう」

一瞬小さな溜め息をつくとき唯子は真横に素早く飛ぶ。

大玉はゴロゴロと転がりながら縦一列のゾンビを巻き込んでいく。

ゴンッ！ と音をたてて、壁に激突した。

千里ならではの力業である。

「なかなかの芸術だ……」

一人感慨に耽る千里。

「……………」

唯子はその千里の頭部に竹刀の一撃をお見舞いした。

「私まで巻き込むつもりか……」

「ああ、そうか。あまりに小さすぎて分からなかったぞ」

「……木偶の坊が」

またしてもお互いが睨みをきかせる。

だが不意に、唯子の視線が遠くのゾンビに移る。弓を構えたゾンビが次々と矢を放ってきた。

ドスドス！ と、地面に数発当たり、二人は当たらないように走りだす。

「厄介のがいるな……」

唯子は忌々しげに呟く。

「確かに厄介だ。お前が盾になれば、その間に俺が蹴散らしてきてくれる」

「それはむしろ貴様の役目だろう……」

走りながらも続くこの言い合い。こいつら何処でも喧嘩ばかりだ。

「さて……テルくんはと……」

唯子は辺りを見渡し、テルを探す。自分たちの周りには常にゾンビがいたが、一カ所に群がるようゾンビ達が見たのを見た。

○

時にテルは思う。此処最近、嫌な事ばかりであったと。

「どけどけエエエ!!」

派手に宙を跳び、ゾンビの頭目掛けパイプを振り下ろす。

「次イ！」

両断したゾンビに目も暮れず、力強い足運びで立ち回る。

「オオオ……」

刀を持ったゾンビが背後から切りかかる。

「肉がありませんよオ！ カルシウムしか見えませんよオオオ！」
即座に振り返り、刀をパイプで受け止め、刀にパイプの先を引っ掛ける。

くの字になつてゐるパイプは相手の武器を奪う。

そして頭部目掛けてのハイキックがゾンビにヒット。

「最近ムカつく事ばかりですよ……」

敵の腕を文字通り叩き折り、無力化した後、胴体ごと斬る。

「ストレス発散させろやアアア!!」

彼は止まる事を知らない。

進む事に全てをなぎ倒していく台風のような。

進む道には屍の道のみ。

「オオオ……」

今度は槍を持ったゾンビ達がテルを囲むように現れた。

「……………」

一瞬考えるのも束の間、ゾンビ達は同時に槍をテルの腹部目掛けて突く。

しかし、その槍達は空を斬らざるを得ない。

グサツとゾンビ達の腹部にお互いの槍を食らわせる羽目になった。

テルは真下に体を小さく屈ませていたのだ。 槍が通過した瞬間

を狙い、素早く前方へ転がり込むついでに間を挟むゾンビの脚を叩き

折った。

だが次の瞬間、足場に数発の矢が突き刺さる。

「チツ……」

すかさず第2射。 甲高い弦の弾く音とともにまた数発。

「遠距離は相変わらず嫌いだぜ……」

二発ほどパイプで弾き、怪訝な顔を浮かべ目に入ったのは倒れてゐるゾンビ。

「ソレ借りるぞっと」

ゾンビの輪から抜け出したテルは倒れているゾンビの槍を拾いあげた。

目指すは弓を放つその集団。

ブウンツ！ と腕を振り抜いた瞬間、風を切るように槍は飛んだ。

それは避ける事は不可能なほど……

グサツ！

「オオオ……」

槍は見事に集団の内、二体を貫いて見せた。

だが残りの弓兵がすかさず構える。しかし……

「遅い……」

竹刀を構えた唯子が一気に距離を詰める。

バシツという甲高い音が響き渡ったその余韻に浸かるまでもなく、ゾンビ達は崩れ落ちた。

「君はなかなかやるようだな……」

唯子が軽く笑いながらテルと合流する。

「アンタもやるじゃねえか……」

その言葉に二人はニヤリと笑う。お互いを讃え合う、などではなく、同じ剣の道に通ずる者としてだ。

「もう敵も居なくなったな……」

どこからか千里が現れ、辺りを見渡す。先ほどまでいた弓兵で最後だったようだ。

しかし……

ボゴツ！

「む……」

唯子が目を細める。　またしても、ゾンビ達は地中から現れてきた。

「さつきより数が多いぜ……」

「倍ぐらい、いや、それ以上だな……」

口に指を当て、考える仕草をする唯子。

「フン！　貴様らはそこで見ているがいい！　キングの真の力と言う物をツツ!!」

千里は後先考えず、ゾンビの大軍に勝手に突っ込んでいく。

「粉碎・玉砕・大喝采イイイ！……又オオオオ!!」

見事にその波に飲まれた。

「バカだ……」

額に手を当てる唯子は仕方ないと言った感じで何かを取り出した。

「よし、爆破しよう」

「ちよつと待て！」

テルがすかさずストップ。　唯子を取り出したのは箱。　中には

大量の筒状の物体がある。

ダイナマイトだ。

「なんで持ってるんだよ!!」

「なに。　そこにあつたから拾ったまでだ……」

「なんで地下迷宮にあんだよダイナマイトが！」

物凄い見幕で突っ込んでいるがその間にもゾンビ達は増え続けていく。

「キリがねえな……」

テルが舌打ちの後、吐き捨てるように呟いた。

「だから構ってる暇はない。君は早く行った方がいいぞ……」

「ヒナギクと合流しねえのか？」

「……………」

その言葉に何故か黙り込んでしまう唯子。

「後からでも追いつけるさ……」

そう呟く。

「一ついいか……」

「なんだ？これからよもや私が、自爆特攻でも仕掛け、あたかも果敢に戦った戦士になろうとしている手前に」

テルは頭を掻きながら一つ聞いた。

「……………アンタ、ヒナギクと何かあったか？」

「……………」

最近、会ってみて分かったが正宗の会話からなにかとヒナギクは唯子に遠慮がちだ。先輩としてだけでは無い何かがある。

そして黙り込んだと言う事は何かがあったと言うことだ。

「彼女と私では……………器が違いすぎる」

「……………」

「今も彼女は戦っているだろう。自分の中の正義を通し、その力を正しく使っていく……………」

楽しそうに語る一方でどこか悲しげな表情の唯子。

「眩しいのだよ。彼女の色は……………私はそんな色合いは持ち合わせていない……………灰色だ……………」

唯子は竹刀を地面につけて続ける。

「灰色は……………どれだけ虚しい色か分かるかテルくん？」

「……………」

今度はテルが黙った。分からないと言ったところか。

「……昔、剣道をやっていた」

「昔……？」

初耳だ。さらに昔という単語がテルのなかで残る。

「君は、私が左利きだと思っっているだろう？」

「違うのか？」

テルの言葉に、唯子は首を縦に振った。

「本来、私は右利きなんだよ。だが右は……」

ヒュンツ!!という風を切り裂く音。唯子は何故か、テルに向けて右手に持ち替えた竹刀を繰り出した。

「うおっ!! なにしやがる……え？」

驚きの後、テルは間の抜けた声を出した。

恐らく、テルだから反応した。しかし、利き手の速さは左手から繰り出される一撃より明らかに速かった。

少しでも反応が遅ければ、テルは食らっていたかもしれないだろう。

「……この通りさ」

カシヤン。と竹刀が落ちたのと同時に唯子が笑みを浮かべていた。

しかし、それは苦痛の表情から上乘せしたかのような笑み。

額からは汗が出てきている。

「医者の話では……もう昔のように振るえないらしい」

苦痛に耐え、唯子は右手を押さえながら続ける。

「痛みも酷い……まるで焼き鏝を直接手首に当てられたようなものだ
よ……」

手首をさするがまだ苦痛は解けないらしい。

「何故彼女があんなに私に気を使うか分かるか？」

「知るかよ……」

テルはしかめながら答える。　彼女とはヒナギクの事だ。

「この怪我は、私が彼女と試合をしたときにできたものだ……」

―彼女、奈津美　唯子が語り出すあの日。

それは約一年前、春盛る、桜が舞い散る4月の事。

「剣道部ってここよね……」

渡された一枚のかみ切れ、入部届け。

予め、貰った部活の歓迎。その中でヒナギクは剣道部に足を運んでいた。

「おや、君は？」

「わっ！すいません!!」

突如後ろから声を掛けられ、ヒナギクは驚いてしまった。

「新入生か？」

入学当初、ヒナギクの前に現れた唯子は今より若干、髪が短い。

しかし、凜とした態度は変わらない。　威厳はあった。

取り敢えず、これが二人のファーストコンタクト。

思えばこれが始まりだった。

「……………」

剣道部の道場は意外に部員が少なかった。　中では10人に満たるか満たないかのような感じだ。

床ではヒナギクがちよこんと座っており、見学している。

そして目の前では先ほどの唯子が防具をつけ、男子部員と模擬試合をしていた。

「始めッ!!」

審判の部員がその合図をした瞬間。

パシイッ!

男子部員の竹刀が床を転がる。そして

「勝負ありッ!!」

その声が響いた。

「え……?」

ヒナギクは目を疑う。一瞬だ。始まった瞬間に勝負がついている。まさに電光石火の業。

隣の座っている部員がヒソヒソと会話しているのが聞こえる。

(出た! 奈津美先輩の神速!)

(相変わらず見切れないわ! 二年生で部長をやるだけあるわ)

(これで次の大会、優勝間違いなしだよ!!)

座っている部員からは尊敬を込めた会話が聞こえてくる。

「次!」

唯子は次の相手をする。全て連戦だ。そして全て勝つ。圧倒的な強さで。 圧

「ふむ。終わろう、みんな」

唯子がそう言うのと部員達が整列して、挨拶を挟み、解散していった。

「どうだった? 桂 ヒナギクくん」

「凄いですよ……ってあれ? なんで私の名前を……」

「うむ。一年の名前は大体ココに入っている」

そう言いながら自身の頭を指した。

「よし、剣道部に入ろう。君は筋がいい……」

「いや、あの、私まだやってないのに分かるんですか？」

ヒナギクの言葉に唯子は勿論と言った感じで答えた。

「瞳を見ればだいたい分かるんだよ。君は強くなりそうだ……」

「はあ……」

理由がよく分からず、ヒナギクはそう言うしかなかった。

しかし、先ほどの試合に釘付けになっていたのは紛れもない事実であり、剣道というものに惹かれていたのもまた事実。

「ふむ。しかし君はなかなか可愛いな……」

「へ？何を……ひゃ！」

唯子はうつとりとした表情を見せてヒナギクの背後から抱きついた。

「ちよ、止めてくださいよ！」

「ふふふ……良いではないか」

「良くないです！」

その後、なんだかんだでヒナギクは学業と部活を両立するために剣道部に入部した。

——彼女の成長は凄かったよ。まるで剣道をするために生まれてきたのではないかと思っただくらいだ。

「うむ。やはりヒナギクくんは成長も速いし、スジもいい……」

「まだ唯子さんには勝てないですが……」

「そんな事を言っつて、数カ月で私に白星をつけさせないようになるとは……」

彼女の成長は数カ月で私の連勝を止めていた。

だがそれでは終わらないと思っただよ。まだまだ彼女は伸びる。

どこまでも行けるな……とな。

心強い味方だったが、逆に私も新しいライバルが現れたと思って練習に打ち込んだよ。

私は負けず嫌いだからな。

だが、不幸な事にソレが災いしたんだ。

第32話く彼女が剣道をやめた理由く

「そこまでッ！」

道場内に、試合中止を促す声が響き渡る。

交えていた2人は竹刀を下ろし、互いに礼をする。

「また引き分けだな……メキメキと腕をあげおつて……」

「唯子さん、ありがとうございます……」

お互いに防具を外す。物凄い汗の量だ。

外した瞬間、湯気が出来るほどである。

「むう、私の速さに追い付くのが構わないがここ数カ月、私は君に勝つ事すら出来ていない……」

「引き分けばかりですから……」

汗を拭った唯子は不満げに呟く。ここ数カ月というもの、ヒナギクと唯子の試合はヒナギクが言った通り引き分けだけだ。

最初こそ唯子が勝ちを納めていたものの、ヒナギクがメキメキと力をつけ、男子顔負けの実力を身に付けた。

「だが私もそろそろ勝ちたい……という訳で、負けてくれないかヒナギクくん」

「嫌ですよ。そんな八百長みたいなこと」

その一言に一蹴された唯子は「冗談だ」と笑いながら返した。

そして一瞬、唯子が右手首をさする。ヒナギクが不思議に思ったか尋ねた。

「どうしたんですか唯子さん？」

「いや、大会もあるから……今日はこのぐらいにしておこう」

まるで気にしなかったように、唯子はタオルで汗をふく。

その日の練習はそれで終わった。

―練習後。

(何だったたださっきの違和感は……ちよつとピリツとしたぞ)

帰り道、自然と右手首に目がいく。練習中、ちよつとだけだが何か違和感があった。

それは痛みとも言えない微々たるものだったが。

(……ラーメンでも食べるかな)

その時はあまり気にせず、そこにあつたラーメン屋に入っていく唯子だった。

—唯子宅。

「ふんっ！はっ！」

自宅の庭で一人竹刀を振るう唯子。

ただひたすらに、見えない敵を浮かべて自分の型を暗闇に向けて繰り出す。

(見えない敵と言っても、明確な敵はいる……)

それは最近の新生であるヒナギクだ。

体に染み込ませるように鍛錬を重ねる。

その鍛錬はどれほどの物だったかのか？

あの数ヶ月では計り知れない。

(どうしてあそこまで強いのか……才能の差なのか)

ライバルとでも言っていていいが、相手は年下。

仮に部長である唯子がそれを見て、焦らない筈はない。

だが顔には出さないようにはしていた。

この力の拮抗を崩すにはこちらの鍛錬を増やすしかない。

だから唯子は今までの倍の時間、竹刀を振るう時間が増えた。

全てはヒナギクに勝つため。

—翌日。

白皇の二年の教室で、唯子は一人自分の机で本を読む事に没頭する。

「唯子さん」

「ん？なんだ書記くんか」

灰色のポニーテールの少女が用紙一枚を持ってやって来た。

「何読んでるんです？」

「剣豪、宮本武蔵の本だ 君も見てみたまえ、これを読むと最終的には戦わないで敵に勝つ方法がわかるぞ」

「変わったのを読んでるんですね……」

「何を言う、剣道を志すなら誰でも一度は彼を知りたいと思うだろう。」

まあ好んでこの本を読む人間は私くらいだが」

「たしかに剣道好きでもそんな活字だらけの分厚い本を読む人はそうそう居ないかもしれませんね……」

「ふむ。それより、私に何か用か？」

「ああ、そうでした」

書記はそう言って一枚の用紙を差し出す。

「委員会の要項ですよ」

「分かった。 後で……ッ」

用紙を右手で握った瞬間、唯子の右手首に痛みが走った。

昨日より若干だが強い。

(……むう、アイシングはしたんだがな)

ここで一抹の不安が生まれた。

そして時間が経つにつれて不安は確実な物となっていく。

「やあッ！」

ヒナギクの突きが唯子の胴目掛け繰り出されるが、唯子は竹刀で横に弾く。

バシッ！

「……ッッ」

右手首が痛んだ。 思わず、顔を苦痛に歪める。

防具越しには余り見えないのが救いだ。

今、弱みを見せてはいけない。

(私は剣道部の……なんだ……)

部長だろ。と自分自身に言い聞かせた。

繰り返されるヒナギクの一撃を竹刀で受けながら防ぐ。

今は部長という理由が彼女を突き動かしていた。

「そこまで！」

結局、今回は唯子が攻めに転じる事はなかった。

「……………」

唯子は防具を外す。歪んだ顔はない。

しかし、今までにない激痛があった。

だが弱みを見せる事はなかっただろう。

しかし、

(唯子さん、今日は攻め切れてなかったな……)

(ああ。桂さんに防戦一方だった)

(桂さんココ最近実力つけてきたからな……唯子さんを抜く日も遠くはないぞ)

ヒソヒソ話が聞こえた。傍観者達は私が弱くなっているという事実だけが目に映っていたのだ。

それは歯がゆいものだった。

「唯子さん、大丈夫ですか？ 汗凄いですよ？」

「汗が多いのはいつもの事だよ」

確かにいつもの事だが、苦痛に伴った汗もある。

（弱くなったな……私も）

虚勢なんて張る人間ではない。

出来ることは大抵やって見せた。

そういう人間だったから、自分は。

怪我は酷くなる一方で、唯子は自宅の鍛錬を止めなかった。

鞭に鞭を打つ。

今止めたら、自分は死んでしまうのではないか……そんな思いに駆られながら。

今は負ける事が怖い。

失うことも……だ。

そして事件は起こる。

それはヒナギクとの模擬試合の時だ。

その日は三本勝負であり、その日の勝負で団体戦の大将を決める物だった。

俄然気合いが倍入った。

試合は始まり、激痛を伴ってでの勝負。

「小手ッ」

「ツッ!!」

開始直後、ヒナギクの小手に唯子の素早い竹刀の技。
見事な小手である。

その一発で頭が冷えたか、ヒナギクも二本目から凄まじい攻めを見せる。

そして……

「小手ッ」

「ぐっ……!」

ドクンッー。

心臓が跳ね上がるかのような激痛が右手首を駆ける。ヒナギクのお返しとも言える小手。

今の唯子の右手首は焼けるように熱い。
激痛が支配している。

その右手首に小手だ。悪意は全く感じられないが、やり方としては頂けなかった。

「やるな……」

だが唯子は平然を装わなければいけない。
ズキズキと右手首が痛む。意識が朦朧としてきた。

ヒナギクが三人になる。周りが白く、ぽーっと溶けていた。

「始めッ」

最後の勝負……だが、唯子は完全に上の空だった。

「……………」

景色が、視界が定まらない。それが唯子を動かさかった。
それを好機に、ヒナギクが踏み込んでくる。

唯子は漸く視界が定まったか、目の前には今にも面をねらうヒナギクがいた。

(私は負けたくない……)

意識がはつきりした時点で彼女の覚悟は決まっていた。

(ここで負けたら……何も、何も……)

振りかざされた竹刀を、先に弾く。

「え……」

振り下ろす前に弾かれた為、ヒナギクが一瞬仰け反った。

これだ。この瞬間だ。

痛みなど忘れて、一気に踏み込む。

(せめて……これだけは!!)

願いも加えた一撃。何を願ったのか？ 失う事を拒んだか、勝利をか？ または別の何かか？

通じたのか、

パシンという音が道場内に響き渡る。

見事に唯子の面が決まったのだ。

(勝った……)

漸く手に入れた勝利。 搦んだ大将の座。

周りは歓声に満ちていた。 唯子完全復活を祝うもの、大会の予想など。

弱いというイメージを無くさせるように……

「唯子さん…完敗です」

防具を脱いだヒナギクが寄ってくる。負けはしたがとても清々しい顔だ。

「私も負けませんよ。また強くなりますから」

「うむ。では楽しみ…に？」

「……？」

その時、痛みが全身を駆け巡った。痛いのは比ではない。雷くらったかのような……

ドサツ。

「唯子さん!？」

倒れた唯子を前にヒナギクが悲鳴を上げる。

(……私は、どこへ行くんだ?)

暗闇の世界は光をささないのだ。生き甲斐なんて見付けられるだろうか。

夢であってほしい。

その瞬間、唯子の意識は完全に閉ざされた。

○

「私の思った通り、医者は私の右手首は手遅れと申告した」

そして現在に至る。

「明らかな私の自業自得だ。管理の悪さだ……」

「だが彼女はそれを自分のせいだと思ってる。説明はしたんだが」
ヒナギクは責任感が人の倍強い。それがあの関係を作り出して

しまったのだろう。

「もう剣を握れないのなら、居る必要はないだろう？ だから……」

「退部した……」

テルが答えるように言った。

「結局、私が最初から我欲だったただけだ。 いざ自分の身が危うくなると、その身を守ろうとして、周りが見えなくなる……」

そう言うと、唯子は竹刀を拾い上げ、地面に刺した。

「つまらん話をしたな」

「お前の人生にどうこう言うつもりはないが……一つだけ言わせてくれ」

テルが口を開いた。

「世の中には似たような奴らがたくさんいる」

頭を搔くとテルは鉄パイプを肩に担いだ。

「諦めるなよ。必ず追ってこい……」

そう言い残すとテルは走り出した。

「不思議な少年だな……」

走りながら目に入るのはテルの背中。

彼は何を背負っているか、今は誰も知らない。

当の本人もあまり知らない訳だが……

「さて……」

唯子はスツとダイナマイトの導火線に火を点けようとライターを取り出す。

だが……

ジュツ！ジュツ！

虚しく火打ちは小さな火花を作り出すだけで点火に至らない。
ジュツ！ジュツ！

「……………」
完璧な燃料切れ。ライターは 最初から使い物にはならなかったのだ。

「「オオオ……………」」
目の前にはゾンビの大軍が迫っている。

「……………」
唯子はポイツとライターと箱を投げ捨てる。

「これは逃げるのではない……………」
そのまま後ろを向き
「敵に背を向け、全速力で走り出すツ!!」

世間一般ではそれを『逃げる』という。
「お前エエエツツ!!何格好良く決めようとしたのにすぐ戻って来
んだアアア!!」

「フハハハハ！ まあ問題ない問題ない」

唯子はあの場で一分と時間を稼げず、テルと共に併走していた。
「追い付いたぞ」

「こんな形で追い付いて欲しくはなかったよ！」
愚痴りながら2人は走る。 幸いにもゾンビ達はテル達よりペー
スは遅く、このままなら振り切れそうだ。

「では、改めてハヤテくん達の救出に向かう。 さきほどの2人は遠
くに行っていないはずだ」

「ハヤテ！大丈夫か？」

「ええ…でも気を付けて……これ、なんか毒が塗ってあるみたいで…」
「毒!!」

ゾンビ達を振り切り、一先ず安全な場所に身を隠したナギ達だが、ハヤテは先ほどくらった矢に毒が塗ってあると言う。

「あ、でも全然平気ですよ。あれ大丈夫ですかお嬢さま、なんか固くなりましたね……」

ハヤテは大丈夫そうにナギに触れるがハヤテが実際に触れているのは狸地蔵だ。

はつきり言うと言ババい。

(いかんハヤテがなんか壊れてる！)

「セ○セタの花を!! 不治の病も一瞬で治るあの花を探さない」と

「落ち着け!! ここはイー○じゃない!」

ナギが慌てるがそれをワタルが落ち着かせた。

「そうだ。まずは落ち着きたまえ」

「え?」

不意に声が聞こえ、その人物は現れた。

その人物は額に傷があり、首からは十字架を下げ、神父が着そうな服に身を包んでいた。

「お前は……?」

「この教会の神父、リイン・レジオスターです」

そのリインという若い男は、基調ある言葉で話す。

「呼びにくいなら秋葉のロード・ブリティッシュとでも呼んでくれ」

（絶対嫌だ!!）

ナギとワタルも御免被るといふ表情だ。

リインは更に続ける。

「その毒は弱いがあまり動かさない方がいい。一歩動けばHPは一つずつ減っていく」

「ドクエかよ」

「セ○セタの花は迷宮の一番奥だ」

「あるのかよ」

もはや驚く事をしないワタル。

「なんにしても、私が仕掛けた毒で少年が死ぬのは忍びないので……
急いで取って来た方がいい……」

ガツンツツ！

言い終わると同時にナギのパンチがリインの顔に炸裂した。

「ああ、そうさせてもらう。責任持ってお前はハヤテを看病してろ

!! ハヤテに何かあったら殺すぞ!!」

「ひ……引き受けた……」

わなわな震わしていた拳を解き、ナギは先に進もうとした。

「だ!!ダメですよお嬢さま!! お嬢さまだけをそんな危険な目に遭わすわけには!!」

当然、ハヤテは主人の無謀とも呼べる行動を黙って見過ごせない。

「心配するなハヤテ。主には、仕えてくれる物を護る義務がある。

その義務を果たさなくては……」

「ですがお嬢さま……」

「いや、それ狸地蔵だから……こつちだつっの」

相変わらずハヤテは幻覚を見る始末。

「とにかく急ぐぞワタル!! 解毒剤をとりに行くのだ!!」

「おお!!」

ナギとワタルがハヤテの解毒剤を取るために更に奥へ進んでいく。

「お、お嬢さま……くっ、くそ……」

ハヤテも慌てて追うとするが体の毒のせいで上手く動けない。

「あまり無理はしないほうがいい。その毒は一応猛毒だ……私も一度食らってね。君のように助けてくれる人が近くに居なくて困り果てたよ」

「え?でも……」

リインの話に一つだけ疑問が浮かんだハヤテ。

「助けてくれる人がいないのに……どうやって解毒剤を?」

「ああ、だから……」

リインは岩場にもたれかかっている何かに指を示した。

「私はこの通り死んだ」

「ええ!? 死んだの!？」

指差したリインだった骸骨は、見事に頭に矢が突き刺さっている。

(これって即死なんじゃ……)

頭部に矢が刺されれば毒の効果も関係無いのではないかと思ったハヤテであった。

「だがそれ以来この教会には悪霊が住み着くようになってね……」

「いやいや!! 悪霊はあなたが悪霊なんじゃないですか!？」

「違う、悪霊は……あいつ等さ」

更に神父はある方向を指差して言う。

そこにはゾンビの大軍と、水木し〇るが描いたような百鬼夜行が

……

「正直まずいが……逃げられそうか？」

「ぐ!!そ……そんな!!」

リインの提案に顔を苦くするハヤテ。

まだ体の毒がハヤテの自由を奪っている。 動けそうにない。

「でも、お嬢さまの所にも悪霊が!？」

「いや、悪霊はあいつ等だけだが……」

ハヤテの問いにリインが続けて答える。

「迷宮の奥には私の配備した全長3メートルのA〇B〇型ロボットが……」

「先に言ええ——!!」

絶叫するハヤテ。リインは平然と続ける。

「どうか来たぞ」

「ひい!!」

口論を展開している間にゾンビと妖怪の大軍が押し迫ってきていた。

○

「わあああああ!!」

一方ナギ達。 ハヤテの解毒剤を求めて迷宮奥へ来ていたのだ。

最初こそ順調だったものの、リインが言っていたように妨害ロボットに追われていた。

「SONYの技術は世界一イイイ!!」

「うおおおっ!!」

ロボットの迫る拳を寸前で回避するナギ。
しかし、外れた拳は地面をえぐり、轟音を響かせた。

人間が食らっては溜まりもない。

「なんなのだアイツは!？」

「巨像じゃねーのか巨像!!」

「あんな神聖な雰囲気のない巨像があるかアアアツ!!」
ガツツ。

「うわっ!」

「ナギ!!」

話をしながら走っていた為か、ナギは石に躓いて転んでしまう。

「そこに痺れる憧れるう!!!」

そこへロボットの容赦ない一撃。

無機質な機械の腕が振り上げられ、ナギに振り下ろされる。

「ナギ逃げろ——ツツ!!」

ワタルが叫ぶが、ナギは完全に恐怖で動けないでいた。

「ひっ!!」

（ハヤテ!!）

（お嬢さま!!）

場所は離れていても危険な場面に変わりはない。

お互いが名前を心の中で叫んだ。

そして次の瞬間。

ナギに拳はいつまで経ってもやって来なかった。変わりに……

ガシャンツ!!

無機質なロボットの腕がキレイに切断され、ガラクタ同然に地面を転がる。

その人物はナギ達もよく知る人物だった。

○

「オオオ……!!」

ハヤテ達に遅いかかった悪霊達はハヤテ達に襲いかかる前に極太の紫の光に包まれた。

光が無くなるとそこには元から何もなかったように悪霊達は消滅していた。

「あなたは……う？」

ハヤテが尋ねた人物は和服姿に札を構える。

そして言うのだ。

「通りすがりの……」

ハヤテの場には伊澄が。

「正義の味方♪」

ナギ達の場にはヒナギクが居た。

戦いは、ここから更に激化する。

○

「あく、お宝ないかな？」

場所は変わり、迷宮のどこか。お忘れかと思うが一応メンバーの

桂 雪路。

お宝求めて、メンバー達など目も暮れず一人単独行動。

まあ、メンバー達もいつの間にか居なくなっているという認識しかない。

一応、彼女もヒナギクの姉。そのスペックもまたヒナギク譲りなのだ。

まあ結果的にヒナギクが圧勝するのだが。

「ほんとこんな所にお宝なんてあるのかしらね？ なんもなかったら私これからチーカマだけで生活しないといけないわ……」

近場にあった石を蹴る。可哀想な石はサッカー選手も顔負けのスピードで宙を駆ける。

—カツン。

それは遠くで何かに当たった。

「ん？」

そしてその瞬間、眩い緑の光が雪路を包み込んだ。

「オオオオツツ!?!」

眩い光の中で雪路が見たもの、それは巨大な機械の顔だった。

第33話くロボは永遠の男のロマンく

「たあー！」

ヒナギクが正宗を構え、腕を斬られたじろいであるロボットを頭から一刀両断。

ロボットはパチパチと電気を放ちながら崩れ落ちた。

「ふう。二人ともケガはない？」

崩れた拍子に飛んできた小さな破片を弾きながらヒナギクが近寄る。

「ヒナギク：お前どうしてここに？ その持つてるものは一体？」

ナギはヒナギクの手にある正宗に視線を移す。

「ああ、これねく」

ヒナギクは正宗を伊澄から渡された。しかしこれはナギ達には内緒である。

少しだけ考え、ヒナギクは言った。

「天使からの贈り物かしら？」

—あげてませんよ？あげてませんよ？あと天使ではないですし

……

ここには居ない伊澄がオロオロしている姿が浮かんだ。

「ところであなた達：こんな所で何してるの？」

話を元に戻し、ヒナギクがナギ達に聞く。

するとナギは慌てて自分の役割を思い出し、

「ハヤテの：！ハヤテの解毒剤を取りに行かなきゃ：！！」

更に奥へと走り出した。

○

「これでまた少しは動ける筈です。でも毒が消えたわけではないので、無理はいけませんよ」

青色の光が伊澄がかざした手からハヤテを包むように溢れる。
光が無くなるとハヤテの体が立ち上がった。

「あ…!! ありがとうございます!!」

立ち上がったハヤテは今までのようなつらい表情はない。 体は
先ほどより動き、体の各部位に力が行き渡る。

「でも伊澄さん…その力は？」

「え!?! あ!?! ……これはその…」

やはりと思っていたが実際聞かれると、伊澄は慌ててしまう。
取り敢えず両手を広げて言う。

「ハ…ハンドソープです…」

(ハンドパワーって言いたいんだろうな…)

なんとか伊澄の意図を察知したハヤテ。 伊澄は続ける。

「でもナギには内緒にしておいて下さい。 ナギは私がこういう力を
使える事はしりませんから…その…」

そう言ってまた両手を広げる。

「ハンドソープを…」

(絶対ハンドパワーって言いたいんだろうな…)

伊澄の姿に少し苦笑いのハヤテ。

「しかし少年、気を抜いてはいかんど」

後ろでリインが話掛ける。

「悪霊はまだたくさん居る…」

「まあ、あなたもですけどね」

真剣な顔のリインにハヤテは真顔でツツコンだ。

「あの…悪霊退治なら残って私がやりますから…ハヤテ様はナギ達

を…」

伊澄はいつもの表情で言うがハヤテは驚きの表情だ。

「でも伊澄さん……!!」

「私なら平気です」

伊澄はそう言うのとクルツと背を向け、袖で口元を隠す。

「ハヤテ様…私…ナギやワタル君の言うマンガやアニメはよく分からないのですが…変身ヒーローだけは好きなんですよ?」

「へ?」

伊澄の口からはあまり聞き慣れない単語にハヤテはキョトンとした。

「ヒロインがピンチになったら現れて…必ずその子を助けてくれる…そんなヒーローが好きなんです…」

伊澄はハヤテに見えない小さく微笑むと、ハヤテと向かい合って言った。

「ハヤテ様はナギのヒーローだから…ナギの所へ行つて下さい…」

「伊澄さん」

「それにこちらの方が邪魔で大きな力が使えません」

伊澄が札を翳した瞬間、近くにいたリインの姿が霧のように消えかかっていく。

「ああ…あれが三途の河か」

消し飛ばされそうなリインの目には渡つてはいけない河が見えるらしい。

「分かりました。では伊澄さんも気をつけて…」

そう言うのとハヤテはリインと共に去って行った。

(……………)

走り去るハヤテの背を伊澄は目で追っていた。

(……………)

本当は初めて会った時……ハヤテ様なら私のヒーローになってくれるかもって思ったんですが……)

あの日を思い出す伊澄。その背後に、身長2メートルぐらいの鬼が二体現れた。

「ガアアアアツツ!!」

(どうやらヒロインは私ではなかったようですから……)

いつしかそう思ったその幻想はここで終わる。仕方がない、運がなかったと諦めるのだ。

いつしか現れるだろうか。

「さて……早めに終わらせましょう……」

手慣れた動作で札を構えた伊澄。しかし次の瞬間。

ドゴンツ!

まるで鈍器に殴られたような音が響く。

慌てて振り返ると二体の鬼が倒れていたのだ。

「ハツハツハツ。　どうやら間に合ったようだが、ハヤテくんには先に行かれてしまったようだな……」

笑いながら竹刀を肩に担いだ唯子が鬼の上に立っている。

「アイツもタイミング悪いな……それより伊澄、大丈夫か？」

鉄パイプを持つテルが倒れた鬼から降りる。

「追いついてやったぜ……ちやんとよ」

「はい……」

この人は約束を守ってくれた人物。

「ここからは危険だ。これからは俺も側にいてやる……」

「え？ あ、あの？」

その言葉をテルがどういう意味で言ったのか、少なくとも伊澄は履き違えている。

顔は赤くなり、あたふたする。

そんな時ふと思ったのだ。

(もしかしたら……ヒーローは……)

自分自身が思い描くヒーロー。実はすぐ近くにいるのかも知れない。

この人だろうか？と伊澄は思った。

「むむ。 そんな空気をぶち壊してしまつて悪いがテルくん……」

「あん？なんだよ……」

腕を組んだ唯子が割つて入ってくる。

「ふむ。 先ほどのゾンビ達がやって来たぞ」

「マジで？」

「マジだ」

そう見据える先ほどテル達がやって来た道からゾンビ達がわらわらと溢れてきた。

何故か某軍事国家のような後進をしながら。

「なんでゾンビが後進してんだよ」

「結束力を高める為だろうか？ 集団の中で独断行動は危険だからな」

「なんでそんなシ〇ミド的な事を……アレ？」
テルがひとつ気付く。後進の横で二体のゾンビが会話をしていた。

『隊長、やはりこれ以上戦いを続けるのは……』

『サムソン一等兵、甘い事を言うなれば貴様には死が待っている』

「いや、死んでるだろ」

「つかゾンビが喋っている所はスルーか？」

唯子とテルがツツコンでいく中で会話は続けられる。

『隊長、家族が心配ではないんですか？ 私には娘が居ます！ もうすぐ誕生日、隊長にも子供が……』

『居らん』

『隊長……』

『君はソマリアの出だったか……』

隊長の言葉にサムソンは黙って頷く。

『私は若いときに息子を亡くしてね……可愛い元気な子だった』

懐かしむような目で語る隊長は心なしか気を張った表情も緩んでいた。

『名前は……サムソン』

『え……』

『思えば些細なきっかけがああ悲劇を生み出したかも知れない。ああそう言えばあの日は……』

目に涙を浮かべ……いや、骨だけだからイメージで浮かべる隊長。

『トマトケチャップが……』

『完熟トマト使用ですか？』

『ああ、その日トマトケチャップが……』

ゴオオオオ!!

隊長がその話を続ける前に、隊長、集団諸共が極太の光に包まれた。

勿論、その元は伊澄。

放たれ光が消え去ったあとは何も残らない。あたかもそこには誰も居なかったように……

「つて、ちよつと待てエエエツツ!!」

テルの怒号が飛ぶ。

「なんだよ!? 最終的にはトマトケチャップがどうしたんだよ!? 息子どうしたんだよ!? トマトケチャップでテロでどう繋がるんだよ!?」

「まあこれ以上続けるのも何だったので……」

札をしまった伊澄が静かに呟く。結果的には敵を全員殲滅できたというのものだ。

「結果おーらいです」

「いや良くねーよ伊澄ツ! ヤベーよ、トマトケチャップが気になって今すぐにもトマトケチャップを確認してエツ!!」

「意味がわからん」

唯子が自然にツツコンだ。

「どうすんだよオオオ!! もうトマトケチャップが頭から離れねエよ!! もう夜寝れねエよツツ!!!」

「くだらないな。 さっさと行こうか伊澄くん」

「はあ……」

伊澄と唯子がテルを無視して歩き出した。

「いや待てつて! 誰かアツ! あの後、結末を教えてくださいエエエツツ!!」

ダンジョン内にテルの叫びが木霊したのだった。

○

くダンジョン奥深くく

「へえ…執事とらのあなねえ…」

ナギ達と共にダンジョン奥深くにやって来たヒナギク。

辺りをナギが解毒剤を隈無く探している。

「あのマラソン大会から随分と深刻な状況になったのね……」

「ああ」

ナギの話はヒナギクは元々テル達から聞いていた事もあったが、改めて聞くとハヤテがかなり深刻な状況にいたことが分かった。

「でも今はそんな事はどうでもいいんだ!! ハヤテが毒にやられて…!! 一刻も早く解毒剤を手に入れないと…」

ナギは崩れた建物や柱の影などにも目を向ける。

「ヒナギクも一緒に探してくれ!早く見つけないとハヤテが……」

ヒナギクも頷くがここで『毒つてなにかしら?』という疑問が頭に浮かんだ。

「おーい見つけたぞー」

ワタルが目当ての物を見つけたのか、ナギが急いでその場へ。

「見つけたんだけど……」

「けど?」

ナギは怪訝そうな顔をしているワタルを見て顔をしかめる。

ワタルが見つけたのはなんも変哲もない岩場に咲いている花だった。しかし、その近くにある小さなプラカードにはこう書かれていた。

『枯れてると効果ないよ』

「そ…そんな……」

絶望的な状況にガクツと膝をつくナギ。

「枯れてても効くのかな？」

「さあ私に聞かれても……」

「分からないか、生徒会長でも」

「ちよつと待って、今ググるから」

ワタルやヒナギクがあれこれ考察するなか、ナギが立ち上がる。

「リタイアしよう」

「へ？」

「リタイアしてハヤテを……ハヤテを病院に連れて行く!!」

「え!? だけど……!!」

ワタルが戸惑いの表情。

執事とらのあな、最終試練執事クエスト。ここにはルールがある。

リタイア可能、しかし、メダルを持たず外に出ればその時点で執事失格なり。

ナギ達は現時点ではメダルは持ってない。

つまりここでリタイアを選択するという事は、ハヤテの執事復帰を諦めるという事だ。

「リタイアしたらもうあいつはお前の執事に復帰は……」

「いい!!」

ワタルの言葉にナギが声を張り上げる。

「ハヤテが無事なら私はそれでいい……!!」

(……………)

「ナギ……………」

ワタルもヒナギクも涙目を浮かべているナギの姿にこれ以上は何も言えなかった。

しかしその時だ。

「でも、それでは僕が困ってしまいます」

暗闇から声が聞こえた。

「僕はお嬢さまの側以外に、帰る場所がありませんから……………」

「ハヤテ…お前どうしてここに!? ていうか毒は!?!」

ナギはハヤテがここまで立って歩いてきたという事実を疑問に思っていた。

「へ!? あ…いやそれは…………!!」

ハヤテはこの質問に決して伊澄の事がバレるような返答をしてはいけない。

「それはその…………?」

「?」

ここには居ない伊澄が必死で秘密にして欲しいと慌てる姿が自然と浮かんだ。

「ぐ…偶然葉が落ちていたのでそれを拾って……………」

「ええ!?! 落ちてた物を拾って食べちゃったのか!?!」

ハヤテの発言にナギは苦い顔をする。

「ダメだぞハヤテ、落ちてた物なんか口に入れるなんてテルみたいなお事を…………人としてプライドに関わる問題だぞ」

「え……ええ……」

流石にテルはそこまでしないのではないかと思ったハヤテだが。

「おいおい、落ちてたものを拾って食べたのかよ……」
とワタル。

「ああ。俺に3秒ルールなんていらぬ。エライ人にはそれが分からぬのですよとパクパクと……」

トリインがあらぬ事実を言いふらす。

「ハヤテ君、いくらなんでもそれはマズいわよ」
とヒナギク。

一同はドン引きだ。

(ああ…僕の人としての尊厳が失われていく……)

ハヤテはそんな事を思いながらある疑問に気付く。

「ていうか、あれ？ ヒナギクさんがなぜここに？」

「へ!? いやそれは……」

慌てるヒナギクにハヤテは続ける。

「あ!! もしかして僕の事、心配して助けに来てくれたとか? うわ
—うれし—」

後半の台詞は正宗によりかき消された。

「勘違いしないでくれる? 私はただ通りかかっただけ! 私が綾崎く
んの心配なんてするわけないでしょ」

鼻先に正宗を構えたままヒナギクが言い放つ。

「あ…はい、スミマセン…本当にスミマセン……」

それを言うや否やそんなの絶対有り得ないといいたげな顔で正宗
を下ろす。

「でも無事で良かったですね」

今度はハヤテの背後から声が。

「え？ その声はシスター・フォルテシア？」

後ろに居たのはまさしくシスターフォルテシア、しかしその姿は何か災害に見まわれたかのような姿である。

「なんだか随分とボロボロですね」

「ええ…色々ありまして……」

ふうと溜め息をつくシスター。まさかゾンビや悪霊に襲われてたとは言えない。

「ですが後はあの神殿の中にあるメダルを取ってくるだけ。 さあど
うぞ」

シスターが指す先にはもうダー○の神殿のような建物が。

「最後までいいは主と執事、二人で行くのがいいかと」

「そうだな」

「そうですね。ではお嬢さま、一緒に……」

ハヤテとナギもノリノリで階段を上っていく。

(まあ…それが最後の罠だけどね……)

それを見て計画通りだとも言える悪の顔を浮かべるシスター。

だがその時である。

「誰だ？」

そう言うのはリインだ。

「え？」

その言葉に、一同が動きが止まる。シスターでさえもだ。

「お前は誰だ？ なぜフォルテシアの名を語っている？」

シスターはゆっくり振り返る。笑顔だ。

「いったい何を……」

「とぼけるな」

リインが口調を強めた。

「本物のシスター・フォルテシアは60超えたばあさんだ。しかもばあさんのクセに興味じゃオーズの追っかけという年甲斐のないばあさんだ」

その事実を驚きを隠せないハヤテ達。だがリインはすかさず続ける。

「しかも最近ではジャオーズだけでは飽きたらず、アトベさまにまで手を出して…テ○プリミュージカルにまで出掛ける神の使いぶりなんだぞツ!!」

((そんなプライベートをばらしてやるなよツ!!))

一同、そんな情報どこから仕入れたと言いたげにリインにツッコむ。

しかし、シスターは笑みを浮かべる。

「まったく…つまらない言いがかりをつくる人ですねぇ……」

「シスター?」

「そんな言いがかりをつけなければ……」

自身の髪をかきあげて更にクスクスと笑うシスターは懐から何かを取り出した。

「痛い目に遭わずに済んだのに……」

そのボタンを押す。

ドゴツ!!

「くくくくツ!?!」

ハヤテ達は驚愕の表情。なんと機械音と共に地面から犬型ロボットが数体現れたのだ。

「こいつらさっきの……」

「まだいたの？」

ヒナギクが正宗を構える。

「当然だ!! なぜなら私が教会の寄付の大半をつぎ込んで買ったからな!! ついでにさっきの5倍強いッ!!」

(……………)

「とりあえずあいつをどうにかした方がいいんじゃないの？」

ワタルが目を細めながら言うが、それでは全く解決に繋がらない。

「まったく……ここまで計画して最後まで実力行使とは……我ながらスマートじゃないですね」

不敵に笑うシスターはゆっくりとロボットの方へ歩く。

「シスター!?! いったいこれは……?」

「いったいこれはって……」

ハヤテがシスターに聞くがシスターは笑みを崩さず言う。

「私がこの教会の本当のシスターではないって事ですよ。綾崎ハヤテ君」

その言葉にハヤテは分かったのか手をポンと叩く。

「まさか男で神父（ブラザー）というオチ……」

「違います」

シスターはハヤテの言葉を即否定した。

「この前あなた達が乗った船がテロリストに襲われたでしょ? あれを手配したのは私ですよ」

(まあ失敗に終わりましたが)

最後に戦った一人の執事を思いだし、顔を歪める。

「ならいっただいあなたの目的は!？」

「金……というのがありますが……」

シスターは突然真剣な顔になった。

「一番の目的は三千院家への……」

その時、地面から巨大な手が現れその手にシスターは飛び乗る。

「復讐だぁッ!!」

ゴゴゴゴッ!

と地面を鳴らし、現れたのは巨大なロボット。

今までのより数段デカイ。

「え……コレって」

ハヤテ達が視線を向けるロボット。目を引くのはそのデザインだ。

「ゲッオーロボじゃないか？」

「え、ちよっ!コレマズいですよ!!サ○ライズさんがブチギれますって!!」

飛び出た2本の角、そして白と赤のボディ、そして顔は獲物を逃さないような鋭い目だ。

「しかもこれアレだろ、初代じゃないぜ! 『真』のヤツだ!!」

「というか、読者が分かりづらいネタを取り入れても仕方ないのでは!？」

何故か一人テンションが上がるワタル。

シスターはその手のひらの上で言い放った。

「まったく甘いですね!! ワナとも知らずこんな所へノコノコと出てきて!!」

「でも…あなたは執事とらのあなの教官では!? もしかしてこれも含めて試験ですか!?!」

ここまで来てハヤテはまだわかってないのか、シスターはクスリと笑った。

「勉強不足ですよハヤテ君!! 執事とらのあななんて…とうの昔になくなっていきますよ!!」

「そんな…なぜ!?!」

シスターの言葉にハヤテは驚きの表情だ。

シスターはそんな質問するのかといった表情で言い放った。

「なぜってそりあ…!! 執事ってあんまないのに…やっていけるか!!」

(納得の理由だ——!!)

「なんにしても全員まとめてここで…死んでもらうツ!!」

シスターからの死の宣告が主と執事に降りかかる。

これを止める事はできるか。

執事クエスト、終盤戦へ……

「私は既に死んでいるがな」

「威張らないでください神父さん……」

第34話く赤いからって通常の三倍早く動けるとは限らないく

「さあ、そろそろ終わりにしましょうか!？」

まるで裏ボスのような台詞を手のひらから言い放つシスター。

地響きと共にゲッオーロボが両腕を掲げる。

「いやあ、それにしても見事なゲッオーだな……」

腕を組ながら大きく立ち聳えるゲッオーロボに感嘆の意を送るワタル。

「ほんと、どうやったら倒せるのかしらこんなの……」

せめてコンセントとかで動く類の物ならどうにかなると思ったが、見たところそのような物はない。

「さあ行きますわよ!!」

高らかに腕を掲げたシスターはゲッオーロボの胸のコクピットに入った。

「これであなた達も終わりにしてあげます……ゲッオーウィーディング!!」

ゲッオーの背中から悪魔に似たような翼が生え広がる。

「凄い! 見事に翼の部分も再現されている!! まるで悪魔のようなアノ顔も!!」

「ワタルくん、どうしてワタルくんだけそんなテンションが高いの？」

「私分らないんだけど……」

ヒナギクが呆れた感じでワタルを見る。

ゲッターロボは大きく翼をはためかせ……飛んだ。

「さあ覚悟―」

ハズだった……。

ドゴツ！

しかし、ここは巨大であるロボットが活動するにはデカすぎた。

豆知識だが真ゲッ○ーロボの全長は55メートル。ガンダムの全長の平均が大体20メートルと考えると二倍以上。

Zガンダムシリーズのサイ○ガンダムやデステイニーシリーズのデス○ロイガンダムよりもデカいのだ。

そんな機体が勢いよく飛び上がったらどうか？

ここは地下だ。ゲッ○ーが飛び回れるスペースはあまり無い。

見事天井に激突した。

『なああああ!?!』

中からシスターの叫び声。ゲッ○ーロボは地面に落ち、崩れてきた瓦礫に埋まってしまった。

「もしかして三千院家の人達ってマヌケ人に命を狙われたりするんですかね？」

瓦礫の隙間から出ている赤い腕を見てハヤテが呟いた。

『まっつっつだああああッ!!!』

瓦礫が一気に持ち上がる。ゲッ○ーロボが再び現れた。

『見せてやるわ本当の力を!!……チェンジ! ゲッ〇ー2!!』

ガコンツ!!

「うわ! 分離した!!」

とハヤテ。

「スゲー! イーグル号とライガー号、ジャガー号まで完全に再現されてやがる!」

ゲッ〇ーロボは新たな合体時、三つの機体に分離する。

ガチャン!ガチャン!ガチャン!

三つの機体が合体して現れたのは先ほどよりも細い機体。

しかし目を引くのは先ほどの機体になかった腕についてある巨大なドリル。

『ゲッ〇ーの中では最速のこの機体で今度こそあなた達を!!』

ゲッ〇ー2がドリルを激しく回転させる。

地面から離れ、宙を激しく飛び回るゲッ〇ー2。

「は、速い!」

「目が追い付けないわ!!」

ハヤテとヒナギクは目で追うが最速の機体を捉える事はできない。

『アゝハツハツハ!! 見えないでしょ見えないでしょう!? さあ迷える子羊よオ! 今救いの手を―』

ドゴオ!!

ゲッ〇ー2、壁に激突。

そのまま地面に大の字に倒れ込む。

更には近くにいた犬型ロボットまでも下敷きにしてしまった。

「……………」

その光景を目の当たりにしたハヤテが呟いた。

「やっぱり三千院家って……………」

「違ーう!!」

言いかけた所でナギが否定した。

「おいそこのお前!!」

「あ…はい!!」

カパッとコクピットが開き、シスターの姿が見える。

「復讐とか言うんだから私の命を狙うには、凄い理由があるんだよな!!
もし無かったらただでは済まさんぞ!!」

額に青筋を浮かべシスターに質問するナギ。

シスターはたじろぎながらも立ち上がる。

「い…言われなくても…! 私の復讐理由は父の——」

「あの…そんな高い所でふんぞり返るとスカートの中が……………」

「~~~~ツツツ!」

慌ててスカートを隠すシスター。

「…………チツ」

「おい……………」

ラインの舌打ちにナギがドスの利かせた声をラインの後ろで呟く。

「す…座ってれば見えない？」

「はい…じゃ…続きを……」

赤面しながら聞くシスターに苦笑しながらハヤテも頷いた。

○

—私の家は代々シチリアでマフィアを営む家計だった……だが父にマフィアの才能はなく、せいぜいアイスの当たり棒偽造が精一杯の小悪党。

「ほんとに小さいな……」

とナギ。

「黙ってなさい」

シスターは更に続ける。

—そんなある日。父に暗殺の仕事が入った。

「これが成功すれば父も立派なマフィアだぞ!!」

「わー、すごいお父さん!!」

—父に与えられた任務はミコノス島で三千院ナギを暗殺する事。

父はゴミ箱に隠れチャンスを待った……しかし

「父は敗れた……三千院家の執事と思われる執事に」

思い出したか目に涙を浮かべるシスター。ハヤテも険しい表情になる。

「なるほど……その時の恨みというわけですね？」

「違う!! 肝心なのはここから先!!」

「「え?」」

—父はマフィアを辞めてしまい……

「やっぱりマフィアは良くないから父さん日本で板前になるよ」

—そして日本でフグを免許なしで調理……魚に当たって……。

「まさかフグに毒があるとは……」

「父さーん!!」

父は死んだ。

「……………」

シスター以外の一同は笑う事すら出来なかった。別の意味で。

「あの時…敗れつ改心しなければ父は……父は死なずにすんだハズ……」

「は、はあ……」

「だからツツ!!」

そして瞬間的にシスターの目の色が変わる。

「私は父に誓った!! 絶対に三千院家に復讐すると!!」

いきなり立ち上がったかと思うと、シスターはトンファーを取り出しコクピットから飛び上がった。

「え!? ちょ…待ってください!! 僕はシスターと戦いたくなんか……………!!」

—ガクン。

(え?)

シスターの一撃を避けようとした瞬間、ハヤテは膝に力が入らないのを感じた。

一瞬だけハヤテの動きが止まる。

「スキアリイイイ!!」

「がは!!」

ハヤテの頭部にトンファーの一撃が命中。 ともに食らったハヤテは簡単に地を転がり石柱に叩きつけられた。

「ハヤテ!」

ナギが振り返った時には既にシスターが迫って来ている。

「さあ父の仇! 今こそまとめて——」

振り上げたトンファーを容赦なくハヤテに叩きつけ……られなかった。

「な!!」

「まったく……あまり手を焼かさないでくれる?」

トンファーは木刀により見事防がれていた。

「ヒナギク!」

ナギが鏢迫り合い状態のヒナギクを見る。

「だいたい動きが鈍いわよ綾崎君。 毒でも盛られた?」

「はは……そう言えばまだ消えてませんでした……」

涼しげな顔のヒナギクに対して苦笑しながら返すハヤテ。
シスターは顔をしかめながら聞いた。

「く!! あなたは?」

「桂ヒナギク。 白皇学院の生徒会長よ」

笑顔で返すヒナギクにシスターの表情が一層怒りを露わにする。

「ふん…学生風情が……」

ギリリ……と腕に力が入る。そして何かが弾けたかのように

「なめるなアアアツ!!」

ヒナギクの正宗を弾かれた。

直ぐにバックステップで距離をとるヒナギクだがシスターが間髪入れず踏み込んでくる。

「わっ!!」

目先に迫ったトンファーを寸前で避けしすが、真後ろにあった石柱は粉々に吹き飛んだ。

「なによあの腕力!? 人間ができるのあんなこと!?!」

粉々になった石柱を見てヒナギクが距離を取った。

「それに……剣を持つてる奴を見ると……無性に腹が立つわ!!」

「し、シスター… 目が……」

ハヤテは息を呑む。シスターの目の色が妖しい緑色を放っていたのだ。

同時にそれと呼応するかのよう倒れていたゲッ○ーロボが身を起す。

「なかなかやるじゃない……」

ヒナギクが改めて正宗を構えた瞬間。

「加勢してやろうかシスター?」

どこから途もなく声が聞こえた。

「なっ……」

見上げると石柱に見知った人物。

千里と雪路だった。

「千里君!? お姉ちゃん!?!」

「千里などではない。俺はMr. ハヤトだ」

「お姉ちゃん? それはこの体の持ち主のようだな……俺はMr. ムサシ」

二人が自身に指を差してヒナギクに言う。

そしてシスターまでもが

「俺はシスターではない……Mr. リョーマだ」

自身を指して言い放った。

「え!?! なんなの!?! 一体何が……」

もはや状況が理解できないヒナギク。

シスターが石柱に飛び上がった。綺麗に飛び乗り、不気味な笑みを浮かべる。

「リョーマ、ゲッオーロボは三人で戦わないとパワーが落ちるぞ、忘れたか?」

千里ならぬハヤトがシスターに言う。

「分かっただよそんなことはな!」

「まあまあ、取り敢えずゲッオーチームまた再結成だ!!」

雪路ならぬベンケイが二人を沈める。

三人がフツと笑い合う。

「行くぞ!!」

三人はゲツオーロボに飛び乗った。

ゲツオーロボは元々三人乗りである。胸から順にコクピットが開き、シスター、千里、雪路とそれぞれが入った。

「ウオオオツ!! なんて感動を呼ぶシーンなんだ!!」

ワタルが輝かしい瞳をゲツオーロボに向ける。

「ワタルくん! そんな事言っていないで早く逃げなさい!!」

ヒナギクが正宗を構えてワタルに叫ぶ。

「神父、シスター達は一体……」

「ああ。どうやらこのダンジョンに潜む悪霊に体に乗っ取られたようだ……」

これまでの状況を考察するハヤテと神父。ハヤテが続ける。

「大丈夫なんですか?」

「ふむ。これらを除霊できる人間がいれば早い話だが簡単だ」

「いや、著作権とか……」

「目を瞑ろう……」

そっちの心配か。と心の中でツツコンだリンだった。

『ふむ。久しぶりに暴れてやろう、まずは出始めにこいつ等だ!!』

「え？」

ゲツ〇ーロボの視線がハヤテとリインに向けられる。

拳を振り上げ……

「アレ？ ヤバくないですか？」

「そうか？ 私は既に死んでいるから問題ないが……」

「だから威張らないでくださいって!!」

キョトンとするリインにハヤテがツツコむが、ゲツ〇ーロボは構わず拳を……

一気に振り下ろした。

「なあああああ!!」

ハヤテが目を瞑る。しかし、巨大な拳は迫って来なかった。代わりに……

ドサツ！ とゲツ〇ーロボの腕が砕け落ちる。

「あ……」

ハヤテが、一同が目を見開きその人物を見た。

まさか、来るとは思わなかった。

「たくよオ、相変わらずトラブルに巻き込まれるのが好きみてえだな」

先が曲がった黒の鉄パイプを肩に担いだその男。

「おやおや、ヒナギク君も苦戦のようだな」

竹刀を左手に携えた女性。

「ようやく……追いついてやったぜ？」

善立 テルと奈津美 唯子、只今推参。

「テルさん、どうしてここに――」

ハヤテが言いかける前に、テルの右手がハヤテの顔面を鷲掴み。

ギリギリ……

「コノヤロウ、お前のせいだな、俺はもうマリアさんにお前を連れて帰るまで帰ってくるなってみたいなこと言われたんだぞ……どうしてだ。 どうしていつも俺がこんな目に合わなくちやならねえんだコラ」

「あの……テルさん、痛いです」

「しかもマリアさんだから尚更断れねエツ！ 拳句の果てに執事の仕事外だからこれ多分時給ない！」

（この仕事って時給でしたっけ……？）

と言いかけたが心に留めておく事にした。

「……しかしまあ、随分と厄介な事に巻き込まれてんな」

目の前に立つ巨大ロボット、ゲッ〇ーロボを見上げるテル。

「中にシスターと桂先生と千里さんがいるんです！ なんぞ操られてるとかで……」

「操られてるって……何に？ ゲッ〇ー線に？」

頭にクエスチョンマークを浮かべるテル。

「悪霊に憑かれてるとの事ですが、伊澄さんは居ませんか？」

「うーん、伊澄ならなあ……」

頭を掻きながら唸るテル。

「迷子ですか……」

「うん……」

二人は同時にうなだれた。

伊澄はどこかでまたオロオロしているに違いない。

「取り敢えず、コイツぶち壊せば止まるんじゃないか？」

「ダメですよ！ 先生達が傷ついてしまいます！」

「私は馬鹿王子以外無事なら別に構わんが……」

唯子が真顔で言うがとてもじゃないがそんな恐ろしい事は出来ない。

「一体どうしたら……」

「悩む必要はないぞハヤテ」

ハヤテにそう言うのはナギだ。

「お嬢さま？」

「唯子さん、ワタル。お前らはヒナギク達を連れてさっさと地上に戻れ」

「わかった」

「ちよつと！ 何勝手に決めてるのよナギ！」

ワタルは親指を立てて返すがヒナギクはそうはいかない。

「ヒナギク君……」

しかし後ろから唯子が肩を掴んだ。

「ここはあの者達任せよう。これは試練だ。ここから先、彼等の運命を決める別れ道の……」

そう言われて、ヒナギクも納得したか、それでも不機嫌な顔でハヤテに言った。

「ハヤテ君……不本意だけど任せるわ……あとお姉ちゃんを……」

「分かってますよヒナギクさん……」

助け出してという言葉を想像したのだが……

「死なない程度にボコボコにしてあげて……」

「え？」

一瞬だけ耳を疑うハヤテ。ヒナギクは続ける。

「人様に迷惑かけるのはいけないことだって何度も言ってるのを今回は実力行使で分からせてあげて」

「イ、イエッサ……」

思わず敬礼したくなるような威圧感だ。

「ふむ。 私からも頼むぞハヤテ君」

今度は唯子が。

「あの馬鹿王子を死なせるぐらいにボコボコにしてくれ……ちやんと心停止してるかも確認だ」

「唯子さん、めっちゃ怖いんで止めましょう……」

ハヤテは顔を真っ青にして笑っていた。

ヒナギク達は言い終えると急いで走り去って行く。

残ったのはハヤテとナギとテル、ラインだ。

「テル、お前も行け」

「イヤだね、俺はなんと言われようが残る」

ナギがテルに言うがテルは拒否。

「簡単に言うなよな。俺も一応執事なんだぜ、三千院家のな……」
頭を掻きながら続ける。

「ま、馬鹿な先輩方やら先生らも助けなきやなんねえからな」
「勝手にしろー!」

ナギは不機嫌な顔でそっぽを向いた。

「オイオイ、お前みたいな奴が油断して先に捕まったりするんだよ」
「仕方ないと言った感じで溜め息をついた。

『ふん、見上げた覚悟と言った所か。だがこの中には貴様の仲間がいる! 果たして容赦ない攻撃ができるかな?』

ゲツ〇ーロボの言葉にハヤテは顔を曇らせる。

(確かに桂先生は僕達の先生! 攻撃なんて……)

まずハヤテはこれまでの雪路との出来事をリピートする。

不審者に間違われたり。

不合格にさせられたり。

今もこんな状況に巻き込まれてたり。

「……………」

一方、テルも同じ事を考えていた。

不審者に間違われたり。

木刀でぶん殴られたり。

マラソン大会で空気読めない行動されたり。

コンプレックス(死んだ目)を馬鹿にされたり。

「案外できるんじゃない?」

「そうですね」

ハヤテとテルが互いに相槌を打つ。

「くっ!ならば!」

ゲツ〇ーがその腕を伸ばし、ナギにつかみ上げた。

「コラア! 離せエツ!!」

「お嬢さま!!」

「オオオイ！ 見事予想が的中しちゃったじゃねーか!!」

「ハヤテ！バカテル！早く助けるオ！」

ナギはひたすら腕の中でもがく。しかしロボットの力はやはり桁違いだ。ピクリとも動かない。

「ふふふ……我らも守るべき者達を守れず朽ち果てていった怨念の塊！ さあ執事達よ、主を守る為に試練に挑め!!」

ゲツ〇ーロボの肩の小さな穴から一本の鉄の棒が飛び出る。

「ゲツ〇ートマホオオオク!!」

棒を手にした瞬間、棒は突如変形し巨大な斧と化した。

「……さて、どうやら気味悪いゾンビより本番はここからのようだ。どうするよハヤテ？」

ニヤリと不適な笑みを浮かべ、鉄パイプを構えるテル。

「そんなの決まっています！ お嬢さまを必ず助けます！」

闘志を瞳に宿し、覚束ない足取りで立ち上がるハヤテ。

執事クエスト、最後の闘いの火蓋が今切って落とされる……

第35話くそして伝説へ？く

執事クエスト最終試練。

ゲッオーロボがナギを手に行っている。

迎えるは手負いの執事と未だ力が未知数の執事2人。

「ハヤテ、確認がてらに聞いておくけどよ。お前動けるか？」

「体の具合は大分良くなりましたが、完全ではないです……」

ハヤテもまだ体の状態は完全ではない。テルはそれを聞くと鉄パイプを構えた。

「なら最低限避けることだけ考えろ。アイツは片腕だけでまともな攻撃なんてできはしない」

確かに、ゲッオーロボは今は片腕だけである。一本は破壊され、もう片方はナギを掴んでいるため使えないのだ。

『甘いぞ……』

だが、敵もまたテルの予想の範疇を遥かに越えていた。

『フンヌウウウ!!』

バキャン!

「ウツソーン……」

目を疑い呟く2人。なんとゲッオーロボの折れた腕から新しい腕が緑色の光ともに生えたのだ。

「ゲッオーなら何でも有りなのか」

悪くなった状況を即座に理解するテル。

ゲツ〇ーロボは片腕だけで地面に突き刺さっていた斧を掴んだ。

『死ねエエエツ!!』

身の丈程の縦に振り下ろす。

「だが断る!!」

「うわ!」

舌打ちと共に、テルがハヤテの襟首を掴んで横に跳ねる。

豪快な音を立てた一撃はいとも簡単に地面を破壊した。

『逃がさアアアン!!』

悪魔のような瞳を光らせ、今度は斧を横に薙ぐ。

「背が少しでも高かったら即死だった」

「がふっ」

すかさずテルは斧と地面の数センチの隙間に滑り込む。

ハヤテは強引に地面に顔をぶつけた形になった。

「ん? どしたハヤテ。アホ毛でも刈り取られたか?」

「いや、刈り取られそうになったのは首でした……」

冷や汗をかくハヤテの表情は苦笑이었다。あと少しタイミン
グがズレていたら確実にハヤテはくびちよんぱされていただろう。

「ハヤテはもう動けるか?」

「ええ、大体は……」

そう聞いたテルは鉄パイプを構え、ゲツ〇ーロボと対峙する。

「俺がアイツの動き止めっからその間にナギを助けろ」
「ええ!？」

ハヤテは何を言ってるのか、テルの言葉を疑った。

「お前しか居ないんだ」

テルは振り返る事無く続ける。

「アイツはお前を待っている、その役は俺じゃねーんだよ……」

「テルさん……」

「その代わりだ……」

両手で構えていた鉄パイプを肩に担ぎ、一度振り返る。

「ハーゲンダッツ奢れよな」

「ハーゲンダッツですか？」

「そうだ。 バニラもいいがチョコクッキーのほうが俺は気に入ってるからな」

「……分かりました。 絶対に奢ります」

ハヤテは顔を両手で叩き、気合いを入れてゲッオーロボを見た。

『逃げる気力も失せたか……』

ゲッオーが薄い笑い声で2人を見る。

「ああそうだな」

テルはあっさりと肯定した。

「もう逃げる気力はない。 後は立ち向かうだけだぜ」

へつと笑い、テルは足踏みをした。

「ここからは一歩も動かねえ」

首を鳴らし、堂々と構え、見上げる。

・・・来いよ。

と言わんばかりだ。

『小癩なアアアッ!!』

どうやら一種の挑発だと感じたのだろう。怒りのオーラを醸し出し、斧を振り下ろした。

『終わりだ……?』

豪快な一撃が響く。砂塵を上げた先に何か影が。

「人間ナメんなよ鉄クズさんよ……」

斧が震える。金属同士がせめぎ合うようにガキガキと。

「オラア! ハヤテエツ! 早く行けエツ!」

「テルさん!!」

テルの後ろにいたハヤテがテルに近づこうとしたがテルが叫ぶ。

「もう迷うな……とつとと行けえええ!!」

「ツツツ!!」

その言葉で我に返る。ハヤテはゲッオーロボに向かって走り出した。

『ゲッオーの武器を受け止めるとは……物理法則もあつたもんじやねえな』

「お前がいうなお前が!!」

テルが突つ込むがこれは事実で、ゲッターロボがなしてきた事はまさに物理法則を無視することばかりである。

地球が出来たのもゲッオー線のおかげだったり、生命が進化したのもゲッオー戦のおかげだ。

ちなみに、投げたトマホークにゲッオービームを当てるとワーム

ホールが出来ます。

『囿になって目当ての人物を助けようという三段だろうが……させん！ ゲツ〇ービィイム!!』

ゲツ〇ー頭部が光り、弾ける。その瞬間、緑色の光がハヤテの目の前を駆け抜けた。

その光が通った後は、焼き尽くされたように地面をえぐり出していた。

「ハヤテ!!」

ナギが吹き飛ばされたハヤテに悲鳴を上げた。

『ふふふ……無駄だ。人間は私に勝てない』

「ググググ……」

テルも踏ん張っているが、足は震えていた。更に足が沈んでいく。

(一体どうすれば……こんな時、必殺技でもあればいいのに……)

ハヤテは体を起こす。が打開策が見つからない。

—ならばイメージするんだ。

(え?)

—君の心が主を守る力になるから……あとはイメージだけ……

—そのイメージを形にするんだ。それを実現させる力を君は既に持つてるだろう?

聞き覚えがある声。 リインの声だ。

「イメージを力に……」

自分の思い描く力。

—守りたいんだ……誰よりも速く……誰よりも速く……

—誰よりも速く、君の元に駆けつけて!

その瞬間、風が舞った。

しかし、それは風なんて優しいものではない。

言いなれば突風。 いやそれも違う。
それは言うなれば文字通り……疾風。

―疾風（はやて）のごとく！

テルの視点からハヤテが消える。 これはゲッオーの方も同じ事
だろう。

ハヤテが目追い付けないスピードでゲッオーロボに突っ込んで
行く。

「あ。 悪霊発見」

と、ここで伊澄登場。 迷子の果てにようやく辿り着いたようだ。

「では除霊つと……」

目的を見つけるや、伊澄は札をかざす。 一瞬だけ青白く光ると
ゲッオーロボの内部に変化が起きた。

「あれ？ あたしは何を……」

「いつの間に……」

「ここは……どこだ？」

雪路、ソニア、千里が順に意識を取り戻した。

しかし三人が次に目にしたものは。

ギロツ!!

赤い眼光で三人の眼前に迫るハヤテの姿だった。

「……え？」

三人は同時に間の抜けた声を出した後、ハヤテが駆け抜ける。 文
字通り駆け抜けたのだ。 ロボットの体は有り得ない力で出来た穴
がある。

空中のハヤテの腕の中にはナギの姿があった。

ハヤテが地面に着いた瞬間、ゲッ〇ーロボは一瞬光って爆発した。

「ヨッシャ!! やったぜハヤテ!!」

テルがハヤテに駆け寄る。ハヤテはその場で立ち尽くしていた。

「どうした?」

「いや、なんか体中の骨が……」

どうやら先ほどの必殺技のおかげで体中にダメージができたようだ。

「そんな事よりこれで終わったのか?」

ナギが呟いた。確かに悪霊は退治したはずだ。テルやハヤテもそう思っていた。

しかし、そう思っていたのはその三人だけである。

「……………!!」

伊澄が何か感じ取ったか、険しい目をして辺りを見渡している。

『オオオオツツツ!!』

地の底からの声に一同が反応する。

緑色の光が一本の柱のように伸びたのだ。

「オオオ……」

「ツツ!？」

ハヤテ達は目を疑う。 辺りからゾンビが現れ始めたのだ。

「なんだこいつら……急にわらわらと……」

(テルさま……)

(ん?その声は伊澄か?)

テルの耳に聞き覚えのある声。 以前のように、念で声を届けているのか。

(物凄い妖力です……あの緑色の光は冥界の扉をこじ開けてる可能性があります)
(なるほど、だから死者が生き返ったりしてた訳か……)

(全ての原因は……あの光の源……)

テルが光りの柱に目を向けるとその場所には大きな緑色の結晶があった。

「え? アレってたしかゲッ○ーの心臓——」

(アレの放つ光りが全ての原因です。 ですが……)

「伊澄?」

途端に伊澄が会話を止める。 テルが不思議に聞いた。

(壊すしか方法がないんです。 でも破壊すれば危険な事に……)

どうやらあの心臓とも呼べる結晶は、膨大なエネルギーの塊のようだ。 伊澄は破壊する事により生じる危険を恐れているのだ。

(テルさまも早く逃げてください。 後は私が——)

「えっ、テルさん何やってるんですか!？」

途中間こえたハヤテの声に、伊澄は目を向ける。

大変な事に、テルは伊澄の言葉を無視して、結晶の上によじ登っていた。

「よいしょ……ハヤテ!!」

結晶の上に乗ったテルは腕を回しながらハヤテに言った。

「今からコイツぶっ壊すから！ 体低くしてろ！」

『えええ!!?』

結晶から声が聞こえる。 どうやら悪霊は完全に成仏してなかったようだ。

『何言ってるんのお前？ コレ俺の心臓だよ？ どうなるか知ってる？ 俺らの心臓ね、壊すと地球の半分は破壊できるよ？ 知らないの?』

「あん？ んなの知ったこっちゃねえんだよ。 アレな、ちゃんと武蔵がやらないとダメなんだよ」

『いやいやダメだって！ 考え直して！ 3000円あげるから!』

「だーかーらー、知ったこっちゃねえんだよ」

テルは高々と鉄パイプを振り上げた。

「俺はな、決めてんだよ。 大切なモン護る為ならいくらでも、この命、くれてやるって!!」

一呼吸おいて、テルは叫んだ。

「ゲッ〇ー線は！ 俺らと共にあるツ!!」

振り下ろした鉄パイプは見事結晶にヒビを入れ、そして……

○

「♪♪♪」

同時刻。西沢 歩は、呑気にパフエを食べながら道を歩いていた。

「あゝこのロイヤルプリンセスパフエ最高♪ 朝から並んで買った甲斐があつたよ〜」

幸せそうにパフエを頬張る歩はスキップしながら道を行く。

「あゝ幸せえ♪ 幸せスパイラルう〜♪」

クルクル回りながら空を見上げたその時であつた。

ドゴオオオオンツツツ!!!

まさしくそんな感じの爆音が、歩の横で起こつた。

先ほど隣にあつた教会から巨大な爆発とともに、崩れ去っていく。

歩の横に建っていた。神聖な教会は一瞬にしてジーザスとかした。

「ななな何が起こつたのかな!? こんな場所で爆発って…ア——
——ツツ!?!」

歩が叫ぶ。自分の足元には朝並んで買ったパフエが……

「あ、あたしのロイヤルプリンセスパフエが……」
地面に膝を着き、orz。」

第二部初登場の割になかなか酷い扱いである歩だった。

○

「あのく悪霊退治を頼んだのですが……教会ごとなくなるとは……」

「スイマセンスイマセン」

荒れ地となった場所で、伊澄と本当のシスターフォルテシアが伊澄と会話している。

「おいハヤテ、大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない……とはいかないようです。体中の骨が……」

「ま、自爆だし、修行あるのみだな……」

「そのようだな」

直立で体を奮わせているハヤテにナギが溜め息をついている。
ラインも一緒だ。

「百万円は!? 私の百万円はどこ!?」

「お姉ちゃん、仕事サボってんだから早く帰るわよ」
血眼の雪路がヒナギクにより引つ張られている。

「あの……そろそろ離れて欲しいんだけど……」

「まだ体調がちよつと……」

何故か岩場により添うワタルとシスター。このいきさつは後ほどに。

「ゴホツゴホ……はあく散々な日だったな」

体の上ののしかかる部品を押しのけるテル。

這い出て来たや直ぐにハヤテ達の元へ。

「おお、テルよ。普通に無事だったか」

ナギが少し残念そうにするがテルがすぐさまナギの頭にチョップ。

「い、痛いぞ!!」

「この馬鹿やろうめ。少しは感謝したらどうだ……なんで？コレは一応クリアした事になるのか？」

「元々仕組まれたものだし大丈夫なんじゃないか？」

「まあ……それもそうだが……」

テルも少し考えて頷く。

その後、三千院家の救急車でハヤテは運ばれていった。

全身の骨がどうだのと言っていたが、ハヤテは超人的な回復力を持つので深く考えないようにする。

「結局、あんま俺が来なくても良かったんじゃないか?」

小さく呟いたテルだったが。

「そんな事はないぞテルくん」

「おおう!」

後ろにいた唯子に飛び退くテル。

「君が来なければ、あの2人は状況を覆す事は出来なかったと思うぞ。最後の爆発も恐らく君がやらなければならぬ事だったんだろ?」

唯子には恐ろしい洞察力があるらしい。推理小説とか読んでそう
だ。

「ま、これも未来の一つだ。 これからも君は、君のしたいことだけを
すればいい」

凜とした態度で言う唯子。とここで……

「オオオオツ!」

地面から千里が現れた。

「貴様ら!俺を置いて先に進むとはそれでも人間か!!」

「しつこい奴だな……生命力はゴキブリ並だな」

唯子の目が細くなる。

「貴様に褒められても嬉しくないぞ!!」

「別に褒めてなどいない、消えろ、筋肉しか頭のない脳筋ゴキブリデカ
男」

「貴様アツ!今日こそ決着をつけてやるツツ!!」

「望むところだ……」

竹刀を構えて唯子がニヤリと笑う。

また2人は戦い始めた。

久しぶりに見たこの騒がしい風景。これで日常に戻るわけではない。ハヤテはこれからも狙われ続けるだろう。

その度にハヤテが敵を倒すかもしれない。自分はあまり必要はないかもしれない……だが。

—君は君がやりたいことだけをすればいい。

「言われなくても……」

頭を掻きながらテルは空を見上げる。

「俺は最初からそういう事しか考えてねーよ」

白い雲を眺めながらテルは言った。

そしてポケットから何かを取り出す。

「これはあっても給料にはなんねーからな……」

手にあるのは一枚のメダル。先ほど拾ったものだ。

「ま、ゲームクリアにはなるだろ一応」

へっと笑うとその小さなメダルを親指で弾き、空に打ち上げた。

第35話くそして伝説へ？く完

第36話くそれは誰かの陰謀く

「ふい〜」

高そうなソファアールにどっかりと腰を掛けるテルは優雅にカップに入っているコーヒーを飲み干した。

「うーん。やはりこのこのコーヒーは最高だな。全部が高級豆で味の種類も沢山ある……」

窓から入ってくる風のせいもあってか、一層コーヒーの風味が増す。

「授業なんて無ければもっと最高だ……」

「なくになギみたいなの事言っているの？」

「お、会長」

ソファアールの後ろにはヒナギクが細い眼差しを向けていた事にテルは気付く。

「否定はしない……俺のリラックスタイムはこうやって休み時間にくつろぐ事なんだよ」

「だからってわざわざ生徒会室でくつろがないでくれる？ 他にも場所はあるでしょうに……」

確かにヒナギクの言う通りだ。学院内にはカフェテリアや日向のかかったまさにくつろいだりする場所はいくらでもある。

「理由はなんとなくだ。ここなら俺のストレス、疲労が抜けると思ったんだよ」

「馬鹿は高いところが好き……と」

「あ？ なんだとテメエ、触りまくって馬鹿移すぞ」

そんな感じのジェスチャーをした瞬間、テルの鼻先に木刀が突きつけられた。

「斬りたい？」

「ハイ、スンマセン」

名刀正宗を構えるヒナギクの目はもはや一人の武士（ものふふ）である。

「つーか、まだ持ってたんだその木刀……」

「なんか気に入られちゃってね……」

この木刀は元々鷺ノ宮家の物なのだが、前回の執事クエストの際に、正宗がヒナギクを偉く気に入ってしまった、持ち主は現在ヒナギクという事になっている。

「鷺ノ宮さんが困ってたけど、仕方ないわね……」

ふうと溜め息をつくとき、ヒナギクの手から正宗が消える。なんと正宗はヒナギクが呼べば簡単にその場に現れてくれる万能武器なのだ。

「つーかこれ以上お前、そんなに強くなっちゃって、木刀も使い道あるの?」

テルの言う事も一理あり、鉄をも切り裂くこの木刀、前回はロボットの切るのに使っていたが、これから先にそういったのが現れるか甚だ疑問である。

「んくそうね……宇宙人とか、新しい敵とか来るのかしら?」

「まさか……な」

ヒナギクの言葉に苦笑いのテル。2人の脳内には人の体内から孵化して飛び出る宇宙生命体や、宇宙生命体や人間を狩る狩人が浮かんだ。

「まあそれはそれとして、そろそろ教室に戻ったら? 昼休みも終わっちゃうわよ?」

ヒナギクがテーブルの上に置いてある時計を指差す。

テルはカップをソーサーに乗せ、ソファアールから立ち上がった。

「あーあ、いつそのこと時間なんてスイッチ一つで永遠に止めればいいのに」

「くだらない妄言を言っていないで早く戻りなさい」

「へーい、生徒会長様は厳しいツスな」

「なんか言った？」

「なーんも……ん？」

テラスから学院を見渡していたテルは奇妙な光景が目に入った。

学院内の廊下にテラスから分かる程の人集りがあったのだ。

「なんだか祭りでもやってるのか会長」

「ああアレ？　ただの喧嘩よ」

ヒナギクはトントンと書類を整え、さほど問題なさそうに言う。
が、これはテルも驚いていた。

「この白皇で喧嘩ねえ、こんな頭良い学校でもあるんだな……まあそれぐらい若さがないと」

名門白皇でも喧嘩などの青春じみた事があることに少しばかり安心したテルであった。

「どらどら、その熱い青春を謳歌しているヤツらを見てこよう」

「ああ、ケガとかするから止めておいたほうが良いわよ」

「なんで？」

「その喧嘩があなたが思ってるまさに青春謳歌の喧嘩だったら良かったけど、それは間違いよ」

ヒナギクが笑顔で続ける。

「一般生徒も巻き込んでしまい、挙げ句の果てには学校のガラスも壊しちゃうような危険な喧嘩よ」

「そんなクローズみたいな学園生活を送る輩がいるのか？」

「いるのよ」

ヒナギクが急に真顔になった。

「また誰か巻き込まれてるのかしら……」

最後に一つ溜め息をついたのだった。

○

その喧嘩が起こる数分前。

「なんか上級生のいる廊下ってなかなか新鮮な感覚があるなあ」

辺りを初めて見るかのようにキョロキョロする人物がいた。ハヤテである。

実は昼休み、白皇学院の探索をしていたのである。

取り敢えずこの校舎、有り得ないくらい広い。

「やっぱり違うな」

「何がだ少年」

「うわっ！ 唯子さん!!」

背後からの声に慌てて飛び上がるハヤテ。

「なんだ、化け物が出たみたい……」

「後ろから気配なく現れないでくださいよ」

「すまん、気配を消すのはクセなんだ……それで、何が違うんだ？」

フツと笑うと唯子は話を戻す。

ハヤテは笑いながら答えた。

「上級生のいる廊下ってなんか雰囲気が違うな」

「確かに君の言うことも一理あるな。我々も一年の廊下を通る時はなんとも言えない懐かしさを思い出してしまっからな」

笑いながらハヤテの言葉に頷く唯子。長大な廊下を2人は歩いていく。

「そうだ」

やがて唯子がパンツと両手を叩いた。

「ここで会ったのも何かの縁だ。私が学内を出来る限り案内してやろうか?」

「え、でも唯子さんに悪いですよ。せつかくの昼休みを――」

「黙れこの与太郎が」

「え?」

唯子の突然の言葉に、ハヤテが目丸くした。

「この私が案内してやろうと言うのだ。不服か? この美人なお姉さんと隣を歩けるのだぞ? イヤなのか?」

最後に唯子は首を傾げた。ハヤテは慌てて両手を振って否定する。

「べ、別に嫌なんかではありませんよ! むしろ嬉しいくらいです!」

「ふむ。素直でよろしい」

何やら慌てているハヤテを見て少し笑うと

「君は執事である前に、紳士としての自覚を持ちたまえ」

とハヤテに言うのだった。

「では行こうか、まずこの学内の名物を紹介していこう」

「名物なんてあるんですか?」

もう観念したか、ハヤテが抵抗なく聞く。

「勿論」

唯子はそう言うと言をさした。

「アレ」

「アレ？」

2人が見据えるのは一人の男。

なかなかの大柄の男だ。そして白皇学院では珍しい金髪。

乙葉 千里である。

「千里さんですか？」

「ああそうだ。 まあ見てろ」

言われるがままに千里を観察しているとやがて窓際から千里が動いた。 教室に戻るのだろう。

(大きい人だよなくあんなに背が高かったら入り口に頭ぶつけそうだな……)

ハヤテがそんな考察をしている間に、千里が教室に入ろうとしたその瞬間だった。

—ゴンツ!

「……………」

唯子とハヤテがその音に沈黙。 その光景を見た教室内も一気に沈黙した。

千里が入り口に頭をぶつけたのである。

「……………」

千里は一步下がり、廊下から教室内を見渡す。

鋭い眼光が獲物を睨みつけるように、教室内はいつものように活気を取り戻した。

みんな何も見なかった事になっているのである。

「……………覧の通り、なかなか入れない男の悲劇という名物だ。どうだ?」

「どうと言われましても……………」

「……………ツツツ!」

その会話が聞こえたか、千里が素早く踵を返し、唯子達を視線に捉える。

そして怒りの形相で指をビシッと唯子にさし、叫んだ。

「勝負だアアアツツツ!!!」

「ええええええっ!!」

突然の宣戦布告に思わず叫び返してしまったハヤテ。

「貴様ア、さつき笑っただろう? キングであるこの俺を!」

顔を真っ赤に、いや、怒りの形相に染め上げた千里はドカドカと唯子に詰め寄る。

「は? 誰が貴様なんか見て笑うかゴキブリ」

鼻をならしながら返す唯子に千里は更に怒りが募る。

「イヤ、俺の本能が告げている! キングである俺の本能がな!」
「いいがかりもよせ、と言いたいが話をして分かる脳細胞ではないからな」

フツと笑うと、その顔は冷徹極まりない、冷めた表情になった。どこからか竹刀を取り出し、構える。

「断罪してやろう」

唯子が不敵に笑う。いつの間にか周りは野次馬で溢れかえっていた。

後にハヤテが知ることになるのは、この情景がいつも通りの事であること、意味不可解な理由で千里が唯子に喧嘩を売るのはいつもの事だった。

「そらそらそら！」

唯子が竹刀を薙ぐ。鋭い一撃が横腹に決まると、すかさず千里が拳で応戦。

「片腹痛いわ!!」

ぶんツ！と振るが、拳は空気を掴むのみだ。

唯子がいつの間にか千里の後ろに移動していた。

「ほらほら、私はここだぞ」

「ぬう！」

唇を噛み締めた千里が手招きで挑発する唯子に拳を伸ばす。

今度も唯子を捉えられなかったが

バリーンツツ！

代わりに窓を捉えたのだった。

「つたく、2人もよくやるよな……」

ハヤテの耳に野次馬の会話が聞こえた。

「あの2人のせいで毎回窓ガラスが壊れるんだよな」

「まあ、見てて面白いからいいけど」

ある意味、この喧嘩は他の生徒達にとって一つのイベントと化していた。

(この人達、もう無茶苦茶だよ)

そう苦笑いを浮かべたハヤテだった。

轟音が響く。左右から絶え間なく響く。

教室では机の上にある書類を整える書記の姿が。

「今日も平和ですな」

トントんと書類を整え、呟くのだった。

○

「ん？ 会長よ、つかぬ事をお聞きしたいのだが」

「何かしら」

「今までスルーっていうか、放課後にここに寄ったらお前のテーブルには昼までなかったご丁寧に包装された小箱がたくさんあるんだが……なんだ？」

「……………」

ヒナギクはテーブルの上に山積みされている小箱を眺めて一言呟いた。

「……バレンタインのチョコ」

「俺が思うに、バレンタインは確か女が男にチョコを上げるイベントじゃなかったのか？」

耳を疑い、山積みのチョコをじーつと眺める。

「私だってそれくらい知ってるわよ……」

パキッとヒナギクがチョコを食べる。

「毎年毎年こうなのよ、何故かしら、年々量が多くなっているんだけど……」

「ヒナは男子よりかつこいいからモテるのよ」

いつの間にか居たのか、美希が説明する。

「いつかいたんだ？」

「最初からいたのよ」

そう会話をしているとヒナギクが眉を細めた。

「でもおかしいわ。ていうか陰謀よ。私、こんなに女の子らしくしているのに……」

「え、お前マジで言ってるの?」

バキヤ!

テルの言葉の返答はグーパンだった。

「確かに昔に比べたら……」

「止めてよ、一応、反省はしてるんだから……」

2人して昔のヒナギクの武勇伝を思い返しているらしい。

「でもこんかに食べたたら太るわよ?」

美希が話を元に戻し、ヒナギクに言う。

「わかってるけど捨てられないじゃない……」
食べるのを一旦止め、山積みのチョコを見た。

「一つ一つ……女の子の想いがこもったものなんだから……」

「なんなら幾つか俺にくれ」

「却下」

テルの言葉をヒナギクはピシヤリと切り捨てた。

「畜生！ バレンタインデーにチョコ貰うヤツらなんか爆撃されて死
んじまえ——!!」

「少なくとも、テロに遭わない限りはなさそうね」

叫びながらテルは一直線にエレベーターに転がり込んだ。

ガコンツとエレベーターが降りていく音が聞こえた。

誰も居なくなり、ふうと美希が息を漏らす。

「じゃ……私からも……」

「な!!」

ずいっと美希から差し出された小包を見てヒナギクの表情が曇る。

「いじわる……」

「はは。でも太ったりしてはダメよ」

涙目のヒナギクを面白く笑いながら美希は言った。

「ヒナは……どんな時でもかつこよくなくちやいけないんだから……」

ドアノブに手をかけた所で振り返る。

「ところでヒナ。今日は誰かにチョコとか渡したのか？」

突然の質問にヒナギクは戸惑いながらも

「い、いえ……渡してないわよ?」

と返す。

「ホントに?」

「ホントよ」

「ホントのホントのホントに?」

「しつこいわよ……なんか怖いわよ」

「なら良かった……」

最後に笑顔を浮かべるとボタンとドアを閉めた。

そんなこんなで本日はセントバレンタインデー。

——白皇学院校門。その巨大な門はがらんと開け放たれている。千人の生徒を出し入れしたりするのだからこれくらいの大きさがあって当然だろう。

その巨大な門の前に一人たたずむ少女がいた。

「噂以上じゃないかな・・・この規模は」

制服姿からして学生、しかし白皇の生徒ではない。県立潮見高校のジミーこと西沢 歩である。

（しかし義理と本命の二つのチョコを持ってきて：告白、どうしようかな）

もはや地の文にすらツツコム余裕もないのか、片手にもつ紙袋を広げては中を覗き、また閉じて、また覗くを繰り返している。

（と、とりあえず中に入ってみるか？ 門も開いているし・・・いいよね？）

周囲をくまなく警戒しながら門の内側へと足を踏み入れる。スニーカーが平らな地面に触れた瞬間。

「お嬢さん、不審者ですね？」

「・・・」

茂みの中から黒服で強面の男たちがぞろぞろと現れてきた。

いつか体験したことがある。たしかあれは三千院家を訪れた（不法侵入）時だったか。見つかった時、同じような男たちに捕まったのだった。

西沢 歩は瞬時に悟る。またこのパターンかよ！と。

言葉を発するより早く、歩の体は動いていた。身を翻して颯爽と逃げようとする：が、それよりも早く、黒服は歩の右腕を掴み取っ

た。

その瞬間、持っていた袋が地面に落ち、中からチョコが二つ飛び出す。

「は、はなして!!」

(このままだと私、この小説では決してやってはいけないような展開を迎えてしまうのでは!?)

もはや身の危険以外感じられないと思い、この際に相手の腕をかじってでも逃げるかと考えていた矢先。

「どうかなさいましたか?」

その言葉に、黒服の男たちの動きが止まる。

「こ、これは桂お嬢さま……いえ、不審者を捕まえたので……」

「不審者?」

男が頷くと、ヒナギクの視界に地面に転がった二つのチョコが入った。ヒナギクはそれを見て、その少女がここに何をしに来たかをだいたい察することができる。

「こんなかわいい不審者ならウチの男子生徒は大歓迎よ?」

転がった袋とチョコを丁寧に拾い上げ、袋に再び入れる。

「とにかく、後は私が引き受けますからその子を放してあげてください」

「まあ、桂お嬢さまが仰るのなら……」

ヒナギクの言葉に男は頷くと、男はパツと歩を手放した。

(すごいなこの人……)

先ほどのしゃべり方、黒服の男たちを簡単に退けるほどの人間だ。相当偉い人に違いない。

(おまけにすごいキレーだし……)

「はいコレ。まったくバレンタインだって言うのに気の利かない人たちなんだから……」

「あ……ありがとうございます」

手渡された紙袋を受け取り、お礼をいう歩。

「でもチョコ二つも持つてるみたいだけど……もしかして二人に?」
ヒナギクがクスリと笑って冗談めかしく聞くと、歩は両手を振って

否定した。

「ち、違います!! ずっと一人!! 一人だけです!!」

顔を真っ赤にして答える歩にヒナギクは少し、冗談を交えて聞くのは止めようと考えた。かなり本気の想いを感じたからだ。

「でもココ結構広いから探すの大変よ?」

「うっ……」

ヒナギクの言葉に歩は顔をひきつらせるを得ない。本気で悩んでそうなのでヒナギクはその少女にある提案をした。

「なんだったらその幸せ者と二人つきりになれる場所にその子呼び出してあげましょうか?」

「え?」

歩はその提案に遠慮することはなかった。

「じゃ、じゃあお願いします! 一年生の……綾崎 ハヤテくんを……!!」

「え?」

その幸せ者の名前が知っている人間だったのでヒナギクは驚いていた。

——生徒会室、天球の間。

「ス、スミマセン……ヒナギクさん……」

「……何をいきなり誤っているの?」

生徒会室に呼び出したハヤテが最初に言った第一声は謝罪の言葉だった。

「いや、分かりませんが……また怒らせるようなことを僕がしたんじゃないかと……」

「なんだか遠まわしにバカにされてる気分だわ」

目を細めて、ハヤテを睨む。

これ以上イライラが募る前に、早々に要件を言い渡すことにした。「それよりも向こうの部屋でお客様がお待ちよ」

指をさして言ってみたものの、ハヤテはさらに困惑している。

「あの……やはりなにか怒らせるようなことを……」

「うるさい!! つべこべ言わず行きなさい!!」

イライラが頂点に達したか、戸惑うハヤテの背中を押し、無理やり生徒会室の客室へと入れさせ、扉を閉める。

「に、西沢さん・・・」

「ハヤテ・・・くん」

ほどなくして、お互い顔を確認したのだろう。これ以上聞くのは野暮というものだ。

「下へ行つてようつと」

扉から手を放し、エレベータを起動させる。エレベータを待つている間、ヒナギクはポケットから小包を取り出した。

女の子の気持ちがかもった大切なものだ。実際自分も受け取っているから分かる。しかし、本気の想いを目の当たりにしたとき、この2月14日と言う日を改めて考えさせられる。

「女の子が・・・男の子にチョコを渡すイベント・・・か」

ちん。という音がして、エレベータが開く。乗り込もうとしたその時であった。

「えっ？」

突如として客室の間が開き、一人の少女が駆け込んでくる。見間違えるはずもない。先ほどの少女だ。

「・・・」

エレベータの扉が閉まり、下の階へ移動していく。ヒナギクは乗り込むことができなかった。

ヒナギクは何が何だか分からない状況だ。

「・・・どうしたの？」

部屋から出てきたハヤテにヒナギクは聞く。

「へ? いや・・・別に何も無いっていうか・・・義理チョコ貰っちゃいました」

戸惑いの笑みを浮かべながら渡されたそのチョコの形は・・・長方形の箱。

「・・・? 義理?」

「はい。ずっと友達でいようって・・・そんな気を使わなくてもいい

のに……」

ヒナギクは聞いたハヤテの説明から少女のある言葉を思い出す。

——ずっと一人!! 一人だけです!!

(なるほど……そういうことか……)

まったくもってこの少年はバカだ。ヒナギクは拳を握りしめる。そんな事を察知もできないのか、鈍感すぎる。

まだ間に合うはずだ。 なら自分に出来ることは一つしかない。

「今すぐ追いかけて、交換してもらいなさい」

本当は今すぐにもぶん殴ってやりたいという気持ちを抑えてヒナギクは言う。

「へ?」

キョトンとするハヤテ。 まだ分からないのかと、ヒナギクは怒声を飛ばした。

「つべこべ言わず追いかきなさいーい!!」

「は、はいーいーいーいー!!」

ハヤテが慌ててエレベータに乗って下に行くのを見ると、ヒナギクはため息をつきながらイスにドカッと座り込む。 残った仕事を片付けるためだ。

(選択は正しかった?)

自問自答しながらもヒナギクは書類の整理にかかり始めたのだ。 た。

○

校内を飛び出し、歩を追いかけることにしたハヤテ。 しかし、途中で彼女を見失ってしまう。

「くっ! 一体どこに行ったんだ西沢さん!」

もうダツシユで町を駆ける中見知った顔を見つけた。

「あれ、ハヤテじゃねえか」

善立 テルである。

ダツシユを止めて激しい土ぼこりが舞う。 そんな事を気に留めずハヤテはテルに聞いた。

「て、テルさん……さつき、西沢さんを見かけませんでしたか？」
「ゴホツゴホツ……いや、見てねえけど」

土ぼこりを払いながら、ハヤテに答える。ハヤテはしゅんとした顔になるが改めて顔を引き締める。

「ありがとうございます。ではこれで」

「ちよつと待てよ」

再び走りだそうとしたところをテルは呼びとめる。

「俺に任せな」

そう言うなり、テルはどこからか持ち出したか鉄パイプ、撃鉄くんを取りだす。テルはその場に撃鉄を立てて一本の指で鉄パイプを支える。

「ほいっつと」

その支えていた手を放すと、鉄パイプはコロんと音を立てて転がった。

その倒れた先を確認してその方向に指をさす。

「あつちだ」

「いや、それただの勘ですよ」

「大丈夫だ。こいつは見た目は腐った鉄パイプだが、実質霊刀だったらよかつたのになあ」

「途中からただの願望になつてるじゃないですか!!」

「人間は時に勘に頼る一瞬つてのがあるのさ……」

フツと笑うテルにハヤテはえーという表情。

「つべこべ言わず行けよコノヤロオオオ!! 俺はどうせ負け犬だろうがアアア! この

負け犬の意見ぐらいたまに聞けつてんだよコノヤロオオオ!!」

「は、はあああ!!」

ヒナギクに似たようなことを言われたが後半は明らかに殺意がこもつたので慌ててその方向へと駆けだした。

「つたく……バレンティンなんて中止になつちまえよ」

頭をかきながらテルは歩きだした。

○

場所は変わり、歩は橋の下の壁に手を当てて頂垂れていた。

(ていうか・・・私はバカなんじゃないかな?)

その姿はまるで上杉勝也が死んだときの朝倉南の姿によく似ている。

(せめてもう一度想いを伝えるくらいのは・・・こんなチャンスはもう・・・)

ないだろう。これで自分の青春は終わった。後悔が残ったまま灰色のまま終わるのだ。

そう考えていた時である。

「西沢さん……」

振り返るとハヤテがいた。

なんとテルの感も捨てた物じゃないらしい。

しかしビルを超えたり走っている車も飛び越えてきたというのは秘密だ。

「……ハヤテ、くん」

その顔を見たとき、ハヤテはどう言ったものか戸惑った。

歩が涙を浮かべていたからだ。

「あの……その……」

ハヤテが何から話したらいいか、そう思っていた瞬間。

がしっ。

「えっ?」

ハヤテの体が少しだけ後ろに傾く。歩が前から抱きついてきた

のだ。

「え……にし……」

「返事は……言わなくていいから……ただ……想いを伝えたいだけだから……」

しつかりとハヤテを抱きしめていた歩は本当にその場でハヤテの

口から聞きたいことを言わせずに一つの小包を渡した。

「これを……受け取ってください……」

○

(私はきつと正しい選択をした……正しい選択をした……)

なんとこの会長。仕事始めてから帰宅までの道中、自問自答を繰り返していた。

小包のチョコを取り出し、チョコを少しだけ眺めるとひとかじりした。

(……にが……)

「あ、あの!!」

急に呼び止められたので振り返ると、そこには息を荒くしている歩がいた。

「さつきは……ありがとうございます!! それで……その……あの……」

疲れているから言いにくいのか、恐らくはハヤテにチョコを渡す手引きをしてくれたことの感謝だろう。

そうヒナギクは考え、笑顔で向き合う。

「想いは伝えられた?」

「は……はい!! それである……お礼がしたくて来たんですけど……その、渡せるのがこれしかなくて……でもこれ……一度人に渡したので……その……」

チョコの形を確認して、ハヤテが最初に貰ったものだと確認して少し安心するヒナギク。

「お名前は?」

「あ!! 西沢です!! 潮見高校一年 西沢…歩…」

ヒナギクはそのチョコを受け取る。

「私は白皇学院一年、生徒会長の桂 ヒナギク。これ有り難く受け取っとくわ西沢さん。ではごきげんよう」

その凛々しい姿に歩は見とれてしまう。ヒナギクはそう言い終えると髪を翻して去っていく。

「……え? 生徒会長? 白皇の?」

2、3秒ほど遅れて歩が聞き返すが、すでにヒナギクは既に遠くまで歩いていたので。

(でもかっこいい人だな……あんな風にカッコ良くなれたら…ハヤテくんも振り向いてくれるかも……)

そんな願いが生まれ、自然と笑みが浮かんだ歩。

「そんなふうにも男らしいところを見せるから、年々チョコが増えるのよ?」

「はっ!!そういうことか!!」

今までの一部始終を見ていたか、美希に言われてヒナギクはしまったという表情。

実は本日のこの歩とヒナギクのやりとりにおいて大きな誤解が生まれているのを二人は知らない。

一方主人公ズ。

「テルさん、愛ってなんですか?」

「……知らん」

一方ヒロイン。

「ナギ？これはなんですか？」

「鉄鍋のチョコレート包み……」

「食べごたえありそうですね……」

朝から学校を休んでまでチョコ作りに励んでいたお嬢様は失敗したようでした。

2月14日は過ぎていったのだった。

第37話〈第一回白皇学院缶蹴り大会前編〉

それは白皇学院、昼休みの出来事。

「あくあ、最近暇だなあ……」

太陽も真上に登り、弁当も食べ陽気な眠気がやって来る昼休み。教室にてナギが指でペンを回していた。

「どうしたんですか？」

ハヤテも少しばかり気になったかナギに訪ねる。

「ん、学校の昼休みってさあ、こんなつまんないとは思わなかったんだよ」

「そうですか？ 僕は楽しかったですよ？ 色んな事をやらなきゃならなかったんで大変でしたけど……でもその中で楽しさを見つけたというか……」

「な、なにをやってたんだ昼休みに……」

「別に大した事じゃありませんが、昼休みには暇があれば街の飲食店のアルバイトやってみました」

「お前昼ぐらいちゃんど食べるよ!!」

ナギが突っ込むがハヤテはケロッツとして、苦にも思わなかったような表情だ。

「あとはですね……」

「いやもういい」

まだ話の続きをしようとするハヤテをナギが手を翳して止める。

「昼休み……か。 青春時代はそこで決まるという」

「いや、そういうのなら運動とか部活動にも青春を駆け抜けられる要素はありますって」

「えー、運動はいやだな……」

体を動かす事はナギにとって嫌いな部分に入る。

この前のマラソン大会だって練習しても300メートルしか走れなかったのだ。

ちなみにマラソンは白皇の敷地内一周である。

「マラソンして少しは体力はつきましたよ?」

「だろうな。 そうだと思つてこの前のダンジョンは走りまくったさ。 でも体力が上がった所か、以前より落ちた気がする」

「簡単な話だ」

ナギの後方で声がした。

「なんだテル。 一時間目から寝てるから、昼も寝てると思つたのに……」

「なんか平和な学生談義してるから俺も乗つかろうと思つてな……て
いうかいつの間にか昼なんだな」

涎を拭き、体を捻って関節からポキッと音が鳴る。

「それでテルさん、分かるんですか?その体力低下の理由」

「おう」

ハヤテが話を戻し、それにテルが頭を掻きながら答える。

「そういう持久系はな、少し間を開けるとすぐ元の体力に戻っちゃうんだよ。 つーかお前、アレからまったく走ってないだろ?」

「う、うるさい！」

ナギは事実を突かれ、声を荒らげる。

陸上競技において一流の長距離選手達は常に走り続ける練習を行う事で長期的負荷に体が耐えられるようになる。

しかし例え1ヶ月走る練習をしてその時体力が上がっても、1ヶ月まったく練習をしなければ体力は必然的に落ちる。

プラスマイナスゼロだ。

「まったく、マラソン大会を機会に脱ニートすれば良かったんだよ」

「私は運動できてなくても、家に居ることが多くても、最終的に人を助ける事ができればいいと思っっている」

「なんだその、平成ライダーの主人公にありがちなニートを人助けでごまかすやり方」

「バカ者！ライダーは世界を守ってるんだぞ!!偉いではないか!!」

「あいつ等たしかに人助けしてるよ？ 偉いよ？ 平和守ってるよ？

でもさあ、あいつ等さあ、怪人くる以外の午前中とかホントになんやってんだよ？ 五代 ○介もなにしてるの？1000個以上必殺技考える以外に就職さきに考えるよ」

「いや、確かに平成ライダーはフリーターとか、修行とかやってる人多くて仕事してる描写あまりないですけど……」

ハヤテが冷静に突っ込むがテルは続ける。

「キャラ付けだかなんだか知らないけどさあ、子供が仕事なんかしない『俺ライダーだから関係ねえし』みたいな事になっちゃ困るんだよ。少しは探偵とか新聞記者とか万事屋を見習え!!」

「Wと龍騎ですか？でも万事屋はライダーじゃありませんよ？」

「たくよオ……イケメン揃えればなんとかなると思っただけが——」

「つて一体なんの話だア——ツ!!?」
グサツ!!

「ア——ツツ!!」

ナギはテルの額に思いっ切りペンを突き刺した。

「何してくれてんのお前！ ちよつとハヤテエ！ 血出てないコレ!?
脳みその的なものとか中から出てないコレ!？」

「あわわ……」

額を両手で抑えながら床を転がるテルにハヤテが慌てる。幸いにケガはなかった。

「それぐらい動ければ大丈夫だろ」

「なんかこのやり取りも久し振りに感じますね」
腕を組んでフンツと鼻息を鳴らす……そして

「話を戻さないとな」

——閑話休題。

「昼休みかあ……」

額に絆創膏を貼ったテルが腕を組んでうーんと唸る。

「なんでしようね……」

「ふむ……テルよ、何か楽しい事を提案してくれないか？」

「そうだな……」

ナギとハヤテも唸る。テルは少し考えていたが、教室を見回し、何かを見つけた。

それを拾い上げる。

「なら」

テルはその拾い上げた物体をナギの机に静かに置いた。

カタツ。

置かれたのはアルミ製の缶。

「缶蹴りをしよう」

「……………」

「昼休みは缶蹴りだな。コレ決定」

「はい？」

しばらく沈黙していたハヤテとナギが同時に聞いた。

「昼休みいっぱい使って缶蹴りだ。いいじゃねーか。小さい頃はよくやったもんだろ」

「テルさん。三人でやるんですか？」

ハヤテが恐る恐る聞く。テルはまさかと首を振った。

「いや、知ってる奴ら全員だ」

「また大規模な缶蹴りですね。まあ人数は多いほうがいいです……」

「エエエツツ!? お前らマジでやる気してんのかよ!?あとさりげなく私も入ってるし!!」

なにかとやる気なハヤテにナギが猛然と突っ込む。

「いや…お前以外に誰がいるんだ？」

「テルよ。私もやらなければならぬのか？」

「昼休みがつまらないと言ったのはどこのどいつだ」

「いや、私はあんまやったことないし」

「僕が教えます。楽しいと思いますよ」

「むう……」

ハヤテに言われてナギは眉を寄せながらも了解した。

「よし、じゃあメンバー集めねえとな。昼休みは有限だし」

「でもどうしますか？ 僕らの知り合いつて……」

「あのやかましトリオとかワタルとかいるだろ」

テルは缶を片手にダルそうに言った。

まあそれぐらいしかいないのもまた事実。

「じゃあ僕が言ってきましたけど、どこに集合するんですか？」

「いや、外しかないだろ……」

ナギが当然のように言うが、テルは口元をひきつらせてニヤリと笑って床を指差した。

「……」

「え……」

ハヤテが目を丸くするなか、テルは薄気味悪い笑みを浮かべて高らかに叫んだ。

「第1回缶蹴り大会は……白皇学院の校舎にて開催だアアア!!!」

○

「缶蹴り大会をするそうだなテル夫くん」

数分後、暇人たちが見事集まってくれた。

「やはは、缶蹴りなんて久し振りだよ〜♪」

「うむ。久し振りに血湧き肉踊りそうだ」

泉と理沙が腕をブンブン回す。お前ら生徒会はどうした。

「つーか、なんで学校の中で缶蹴り?」

ワタルがしかめっ面で床にある缶を眺めている。

「その方が楽しいからだ。よし、ルールを説明する」

テルは楽しそうに説明を始めた。

ルールその1、範囲は校舎内。

ルール2、鬼は三人。

ルール3、鬼以外は逃げるもよし、集団でかかるのもよし、隠れるもよし。

ルールその4、缶を置く場所は鬼が決める権利がある。

ルール5、鬼に捕まったら誰かが缶を蹴るまで捕獲状態となる。

「ルール2は鬼が一人だとあからさまに不利と見てだ。ルール4に
関しては、あらかじめ缶がある場所が分かっってしまうと、鬼側が対策
を立てにくいからだ」

突然缶を見つけたらどうするか?判断力を試される場面だ。

その場で蹴りに行くか、仲間に連絡して作戦を考えるかだ。

「案外頭を使うな……でも鬼が結構不利だろ」

ワタルの言う事も一理あり、あらかじめ隠れていれば、鬼が居なくなつたのを確認して蹴りに行けばいい。

「ふっ、甘いぜ。それを無くすためにこの鬼の接近を伝えるセンサーがある」

だがテルはこれについて既に解決していたようだ。

テルがポケットからセンサーらしき物を取り出した。

「委員長、これを持って離れてみる」

「ふえ？了解だよ」

離れるごとに電子音の間隔が緩くなる。

「有効範囲は3から4メートルつとこだ。隠れてるだけじゃ面白くないしな。じっとしていると速攻見つかるようにしておいた」

「また凝つたのを用意してきましたね……」

ハヤテは苦笑いしているがテルはふつと笑う。

「ちなみに提供は牧村先生だ」

よく見るとセンサーには小さくby牧村の文字が。

「これは燃えてきたな……」

とナギ。

「……………」

ハヤテもなぜか屈伸運動。

「へっ、こういうのも悪くねえな」とワタル。

みんなやる気満々だった。

「あら、面白そうなことやってんじゃない。私も混ぜてよ」
廊下の集まりに加わってきたのは雪路だ。

「雪路……たしか昼はテスト前の講習があるんじゃない」

美希が言うが雪路はフンツと鼻を鳴らす。

「んなの他の奴にやらせればいいのよ。しかし懐かしいわね缶蹴りなんて」

「ほんとにアンタ教師か？」

すでに呆れ顔のテル。

「ふむ。それなら私は追いかける側に回るとしよう」

いつの間にかハヤテの後ろにいた唯子がテルからセンサーを受け取っていた。

「好んでハズレくじを引きたがるな、アンタは……」

突然現れた事を意にも介さず、テルは言うが唯子はクスリと笑う。

「ハズレとは思わんよ。ただ、このほうが面白そうだ」

その言葉を聞くや、テルも少しばかり考える。

「なる程……それもそうだな。俺もやろう」

「なんとという組み合わせツツ!!」

ナギが異質を見るような目を向ける。

ちなみに残りの鬼は泉という事に。

「テル夫くん、質問があります！」

元氣良く泉が手を上げる。

「なんだ委員長隊長」

「アレ？ 私委員長なの？ 隊員なの？」

戸惑いながらも泉は続ける事にした。

「こういうのはやはりヒナちゃんが許さないとはいま—す」

(((たしかにそうだ——!!!)))

一同が気付いたかのように心の中で突っ込む。

「そういえばヒナギクがいねーな、仕事か？」

「そうであります隊長！ 仕事は昼休みいっぱい使うという話をしました。ヒナちゃんなのでそれまでに終わらせる可能性がありますです！」

「なんかかなりきつてるよ泉さん!!」

軍隊口調の泉に対してハヤテが突っ込む。

「なら、それもアリだ」

テルの言葉に一同（唯子以外）が驚きの声を上げる。

「見つからないか、見つかるか、まさにスリリングの連続だ。まさに

バイオハザードの追跡者、まさに大人の階段のぼるだよ」

「階段は関係ないだろ」

ワタルも突っ込みに入る。どうやら止める気は一切ないらしい。

ちなみにヒナギクが昼いっぱい仕事をしなければならなかった原因は明らかに別にある。

「それじゃあ缶を置いたら随時メールを入れよう。その次のメールが開始の合図だ」

そしてみんなが散っていく。

「でも見つかったらどうなるんだろう？」

廊下を歩くハヤテはそんな疑問を考えていた。
そしてメールが届き、缶が置かれたという情報がくる。
次のメールが開始の合図だ。

『~~~~』

ほどなくして二回目のメールが届いた。

こうしてハラハラドキドキの血みどろ缶蹴り大会が今……始まる。

第38話 第一回白皇学院缶蹴り大会後編

前回のあらすじ。

突如として始まってしまった白皇学院、第一回缶蹴り大会。

主催テルの元、多くの暇人たちが集まってくる昼休み。 たかが昼休み、されど昼休み。遊ばなければもつたいない!!

しかし彼らは知らなかった。この缶蹴りが後に血みどろの缶蹴り大会に変わることを・・・

「ついに始まりましたか・・・ん？」

廊下を歩いていたハヤテは自分のポケットに入っている携帯が震えていることに気付いた。

「あれ？花菱さん？」

『ハヤ太くん、電話したのは情報交換をするためだ。ここから先はメールなどで鬼の動き、缶の位置をお互いに報告したりしよう』

「たしかにそうですね」

「うむ。では私はこれで切るぞ。あと奈津美さんとテル夫くんには気を付けた方がいいぞ？」

それを最後に美希からの通信が切れる。 たしかに、あの二人はいまだ実力が未知数だ。

ピピ・・・

「ん？」

そんなことを考えているとハヤテのセンサーが微弱の反応を見せた。

(だ、誰だろうか？取り敢えず近場の教室に!!)

慌てながらハヤテは近くの教室に入り込んだ。そして教卓の陰に身を隠す。

やがて・・・

「見つけたよ、桂ちゃん!!」

ハヤテは声だけで反応したが、どうやら泉はここにもともといた雪路を発見したようだった。

は変わり、ナギだ。

センサー片手にナギは廊下を歩く。とくに動き回るわけでもなく、缶を蹴りに行く訳ではない。あきらかに職務を放棄していた。

「いやあさすがにハヤテは負けんだろ」

そういつた安心感からその役目を果たそうとしないナギ。そのハヤテが捕まったとも知らずに。

ナギはふところからPSPを取り出し、近くの教室に入る。そして人目も気にせず、テルがとった作戦、ロッカーに入るといふ荒業に入る。

そうナギはほとぼりが冷めるまでここで過ごすというのだろう。

(完璧だ・・・なんといい完璧な作戦ツツ)

おそらく彼女の脳内の中では自身の才能の恐ろしさに恐怖しているに違いない。

幸いPSPの光があるため、少し暗くても問題ない。

「ではさっそくジン○ウガでも狩りに行くとしますか・・・」
電源をつけようとした瞬間だった！

ピ・・・

「ん？」

ポケットの中に入れていたセンサーが微弱な反応を見せる。

しかし、気づかないままここを通り過ぎていくだろうと考えていたナギ。

ピ・・・

(まさか・・・)

ピ・・・

(ここに・・・)

ピ・・・

(来るというのかツツ)

身に迫る危険を感じながらナギの手には次第に汗が浮かんでいた。

そして次の瞬間。

ーブツンッ!!

何故か知らないが、充電が満タンだったのにも関わらずPSPの電

源が切れてしまった。

(な、なにが起きたんだ!? え、電源が入らない!!!)

もはやスリルというよりはそれ以上にまずい状態なんではないかと察知したナギ。そして更に追い打ちが。

ドゴツ!!

「ひっ……!!!」

突如としてロッカーを轟音が襲う。思わず声を出してしまった。

ドゴツドゴツ!!

さらにロッカーは激しく音を立てながら揺れる。誰かが殴っているのか、それはナギにはわからない。狭い空間で少しの薄暗さはナギの精神にダメージを与えていた。

「だ、誰だこんなことをするのは……」

若干涙目になりながらも、ナギはロッカーを開けようとした。しかし……

「あ、開かないだど?」

片腕から両手まで、さまざまな方法をやってみたが扉はあく様子がない。

ドゴツ!ドゴツ!ドゴツ!ドゴツ!ドゴツ!

ピピピピピピピピピピピピ!!!!!!

止むことのないロッカーを鳴らす音とセンサーの音が、狂気的な空間を作り出す。

「あ……ああ……」

狂気的な空間に耐えられる力はもはやナギには残っていないかった。

「うわああああああ!!!」

恐怖のあまりに全身を使って扉に体当たりしようとした瞬間だった。

ガチャリ。

目をつぶっていたので何が起きたかは分からない。しかし次はボフィン。

なにやら二つの柔らかな感触がナギに当たった。

「自分から敵の中に飛び込んでくるとは……」
顔を上げて確かめてみるとそこには唯子の姿があった。

「どうしたんだ泣き顔なんて君にはあまり似合わないぞ?」

そう言われてナギは自身が顔がとてもひどい状態だということに気付く。慌てて顔をもとに戻すと当然の疑問を口にした。

「お、おまええ! そこまでやる必要なんてあるのか! たかが遊びだぞ!? ロツカー叩いて揺らして、挙句の果てには閉じ込めるかキサマアアア!!」

「ん?」

唯子は何が起きたのか全く理解していない。すこし考える仕草をして答えた。

「私はロツカーを叩いたりしてはいない。あと、押さえつけたりもしていないぞ」

「え?」

ナギはその瞬間、思考が停止した。自身は確かにロツカーを揺らされ、閉じ込められるという状況になったのだ。夢であるはずがない。

「ところで……そろそろ離れてくれると嬉しいのだが……別にイヤなわけではないのだがな」

ナギはいまだに自分が唯子の胸に顔をうずめていることが分かった。

「……………でかい」

「む……」

少しばかり遺憾が残るような表情になるがすぐにいつもの凜とした表情に戻る。

「さてさて、そろそろ戻ろうかナギくん。君で最後なのだ」

「マジでか」

まさかといった表情。自分が最後の一人とは思わなかったのだ。

「くそおう……………」

と悔しそうにしていた時だった。

ガタツ。

「ふおおおおお!!」

その小さな物音にナギは振り返る。よく見るとただ筆箱が落ちただけだった。

「どうした？ どこぞの芸人のようなオーバーリアクションをするとは……」

唯子は即座にナギの状態と対処を計算した。何があったかわからないが、からかわないでいた方がいいらしいと判断したのだろう。右手を差し出してきた。

「ほらほらおねーさんと一緒に戻るぞ」

「む、むむむ……」

ナギも恥ずかしそうだったが、力強く手を握った。

その後、何故か手をつないでみんなの場所に戻ってくる唯子とナギの姿があった。

結局、残りの昼休みの時間の半分の時間を残し、全員は捕まってしまう。しかも、それはほとんどテルと唯子の手によるものである。

「だらしねえなテメエら」

テルが勝ち誇った笑みを見せつける。

「まだ時間も残ってるし、仕方ないからもう一回くらいやろうじゃねえか」

その言葉にみんなも簡単に同意。しかしテルは知らなかった。みんながこの時。

(（鬼になつたらコイツを地の果てまで追いかけてやる!!!）)
みんな違う意味でやる気だった。

その後はチーム決めとなり鬼は唯子、ハヤテ、花菱、ナギとなった。鬼の数が増えたのは少しばかり時間が押しているのと、さっきのよう
うに力が偏らないためだ。

そして第二回戦スタート。

廊下の踊場にて少し作戦会議をするテルたち。

「大分実力が別れたね♪」

「そうね。綾崎くんと奈津美ちゃんが相手だけど後はアウトドアのナギちゃんと花菱さんだからね！」

「いや……」

盛り上がる泉と雪路をテルが静かに否定した。

「今回マークすべきは……花菱だ」

「どういうことだ？」

「まあ、始まれば分かることだな。アイツ、実は五感のト○ズ使えるからな」

「んなワケねーだろ」

ワタルが冷静に突っ込んだ。

それを言い終えるや否や、テルたちは各自分かれていった。

「つたく、なんだってんだよ」

残ったワタルは少しばかりかテルの言葉が気になっていたか、少し顔をしかめる。

数十分後。ワタルの携帯電話に一通のメールが入った。差出

人を見ると、泉であった。

『桂ちゃんが捕まったよ〜』

「早いな……」

なんとここで早々に雪路が捕まったという情報だった。おそろしく、一番最初に厄介だと判断され唯子とハヤテが二人掛かりで捕まえに入ったに違いない。

そして続けて泉からメール。

『一階の階段付近に缶があるよ〜缶蹴るからみんなきてね〜♪』

「なかなかアグレシブだな委員長・・・こんなキャラだったか？」
「けっこう大胆な作戦だがこういった缶蹴りは我先にと缶を蹴ってしまえばその蹴った人間が英雄になれるのだ。少しばかり大胆になってもなんら不思議ではない。」

「いつも活躍できない子も東北新幹線並みのスピードと便利さで英雄になる。これぞ缶蹴りマジック。」

（取り敢えず、一人だと心もとない・・・援護に行くか？）

「と考えつつも、積極的に缶を蹴りに向かい、英雄の座を狙おうというのが彼の腹だ。」

○

ワタルは一階の階段につながる廊下へと足を運んだ。

「あれ？」

とワタルの後ろで声が。

「あれ、先生？」

そこには捕まったはずの雪路がいた。

「なんでワタルくんがここにいるのよ？」

「先生こそ、捕まったんじゃない？」

ワタルの言葉に雪路は頭にクエスチョンマークを浮かべる。

「あたしはワタルくんが捕まったって聞いたから・・・」

お互いに話が噛み合っていない。

（なんかおかしいぞ・・・）

ワタルが不安の色を濃くしているとき、一通の電話が入った。

電話の相手はテルだ。

『逃げる！ そいつは罠だ!!』

「な、なに!?!」

ワタルがテルの言葉を聞いたとき、

「見つけたぞ!!」

なんと雪路の後方から唯子が現れた。

「なんだと!?!」

「さらに・・・」

「逃がしませんよつと・・・」
前方からハヤテが登場!!

(こ、これは一体・・・)

よく見るとハヤテの後方には缶を守るナギの姿が。とワタルが考えている間に一通の着信が。

『ふっふっふ・・・フアフアフア・・・やーい、引つかかったな!!』
まるでダークサイドに落ちた戦士のように笑うのは美希だった。
近くの教室から現れる。

「はめられたのか・・・」
「そうだ。メールもものすごく泉っぽかったろ？」

高らかに笑う美希とは対照的にワタルは苦虫をつぶすかのような表情。

「こんなところで簡単には捕まらないわよツ!!」

雪路が素早く間を抜けようとするが・・・

「もちろん通しませんよ?」

ザ○のモノアイのような赤い目をぎらつかせながらハヤテと唯子が立ちふさがる。

「くっ!! 最初からこれが狙いだっただのね!」

「そうですよ。まあ僕は昔よくやられていたのでその作戦内容はすぐ理解できました」

「自慢げにいうが、君は昔何をしていたんだ」

唯子が尋ねるがハヤテは笑うばかりだ。あまり追求しない方が

よさそうだ。

「ほいタツチ」

「うぎゃ!! しまったツツ!!」

いつの間にか接近していた美希に、ワタルが簡単に捕まってしまった。

「どうだ。たとえ缶蹴りといえど世の中情報社会ツツ 情報を制する者が、この缶蹴りを制すのだツツ」

最後に高らかに笑う美希をワタルは悔しそうな表情になる。

「ちくしょう・・・ここまでかよ」

「あきらめるな!!」

ワタルがあきらめかけたその時、はるか遠くの廊下に、テルが立っていた。

「やはり攻めに転じてきたかッッ」

唯子が目を鋭くさせ、臨戦態勢に入る。

テルは廊下を走り出した。

「いまだ!!」

雪路がその間を突いて二人の間を抜けようとするが。

「させません!!」

「ぐはあ!!」

そんな小さな油断もするわけもないハヤテは簡単に雪路を捕まえる。

「蹴りにきたよ♪」

「いいところどりで行こうか」

集団を遠くから挟むように泉と理沙が現れた。もはやこの缶蹴

りは誰も勝者が分からなくなる混戦状態と化した。

「勝負だテル君!!」

「オウよッッ」

テルは止まることなくむしろスピードを上げて突っ込んできた。

(どっちだ・・・右か? と見せかけて左か?)

一瞬の判断。唯子は全身の神経を張り巡らせる。そして彼の

出した答えは。

ばしいん。

「くっ!!」

一瞬何が起きたか分からなかった。ただ瞬間的にテルが両手を唯子の目の前で叩いたということ。そして・・・

「はくはっはは!! アバヨオオ!!」

そこには唯子を横から抜いたという事実ッッ。

「不覚ッッ!! 猫騙しか」

拳を握りしめる唯子は頼みの綱をハヤテに託した。

「テルさん!!」

「勝負だツツ!!」

ハヤテには経験がある。一度はテルに猫騙しを食らっているのだ。奇襲は奇襲、二度目は通用しないという自信がある。

「ハヤテエ!!」

しかし、テルのとった行動は……

「叩いてエ、被ってエ、じゃんけーん……」

「え?え?え?」

右手を大きく振り上げてきたテルに対して、ハヤテは戸惑いながら右手を差し出す。

「ポンツツツ!!」

結果、ハヤテがチョキ、テルがグー。

「し、しまった!! な、なにか……なにか被るものを……」

ハヤテが辺りをキョロキョロしている間に。

「ギャハハツハハハハアアア!! 引つかかってやがんのー!!」

無防備になった横を簡単に抜いてしまった。

「卑怯クセエエツツ!!」

遠くでワタルが怒声を響かせる。

突っ走るテルの前にはナギが守る缶だけだ。

「こ……来いツツ!!」

珍しく強気のナギだ。自分からテルに向かっていく。

「終わりだああああ!!」

ナギ勝利を確信したか、テルに思いつきり手を伸ばした。しかし、次の瞬間。

「な……ツツ」

ナギがつかんだと思ったテルの姿はまるで霧のように霧散した。あたかもテルがナギの体を突き抜けたように……

「デビ○バットゴーストツツツ!」

「いや、ただ普通に抜かれただけだろ」

遠くで唯子が静かに突っ込んでいた。遠くからなら普通にテル

が伸ばしてきたナギの腕をひよいとかわしてその上でナギを抜いていると分かっているからだ。

結果的にテルの独壇場。目の前には無防備な缶が。

「貫つたあああああ!!! 雷獣シユウウウウウト!!!」

かん。

「音はいたって普通だ!!」

ハヤテのツツコミをよそに、蹴られた缶はきれいな放物線を描きながら廊下を駆け抜けていく……。しかし、これがいけなかった。

「ふう……。結局昼休みいっぱい使ってしまったわ……」

「げっ!!」

なんとビックリ。角を曲がってきた人物はヒナギクである。

そして。

ーカツン。

見事にクリーンヒット。

「……………」

「……………」

しばしの沈黙。ヒナギクは無言で落ちていた缶を拾い上げた。

「……アンタたち、生徒会はどうしたのかしら?」

少しばかり顔を俯かせているのでヒナギク以外の人物は表情が伺えない。だが、それが逆に怖い。

「あと……。いったい何をやっているの?」

「か、缶拾いですよヒナギクさん……」

額に汗を流し始めたハヤテが笑顔で対処する。

「缶蹴り……。なら、その善意ある行為の中で、人に缶をぶつけたのは誰かしら?」

「……………」

全員が一斉にテルを指差した。

「オオオオオイ!!! テメエら、簡単にバラすなよ……。あ、やべ言っちゃった」

慌てて口を両手で押さえるが時すでに遅し。

「……………」

ヒナギクの手にはすでに正宗と竹刀があった。

「ヒナギクさん！ 二刀流ツスか!!」

テルは汗をだらだらと流しながら訳の分からないことを言い出す。

一方のヒナギクは正宗を肩に担ぎ、獣を狩るかのような瞳でテルを睨み付けた。

「そこ動くんじゃないわよ!!! 覚悟しなさいあああ!!!」

「ギャアアアアアアアアアアアアア!!!」

その日、断末魔とともに一つの伝説が生まれた。

缶蹴りをして人に缶をぶつけると赤い悪魔が出るといふ伝説が。

みなさん、昼休みの遊び方は安全に行いましょう。あと、缶を人にぶつけてはいけません。

第二章 型破り執事、激闘編

第39話〈始まりが近づく、そんな事も知らないで過ごす午前午後〉

ここは東京都練馬区にある三千院家。

その広大さは練馬区の60%を占めるという。

ただブルジョアジーなんだと言われるかもしれないが、ここに住んでるお方、三千院 ナギは生粋のブルジョアジーである。

そこに奇妙な人間関係を持つ人間か分からないが、執事である綾崎ハヤテ。

そしてメイドさんことマリアさん。腹黒いプラスにその大人びた佇まいから本当に17歳なのか……おっと誰か来たようだ。

そんな個性溢れる人間が使用人がいる三千院家の屋敷。

そう言えばここ最近、更に奇妙な人間が使用人になったようである。

「流石だぜ……」

三千院家の台所。黒煙が立ち込めるなか、三千院家の執事 善立テルは薄ら笑いを浮かべていた。

朝から続いていた自分の運の良さを改めて確認する。目覚めよし、気分よし、タマが襲ってこない。この3拍子が彼に自信を持たせていた。

「朝ご飯の完成だ……」

皿に乗ったその物体をテルは動じる事無く食堂へ運ぶ。むしろその表情は誇らしげだ。

本日、自分は絶好調……なのだが。

「馬鹿者がアアアアアツ!!」

「ぐっふっ!」

この屋敷の主人、もとい、三千院 ナギのアッパーカートがテルに炸裂していた。

「ハヤテよ。テルに料理を作らせるなどあれほど言っただろ」

「申し訳ありませんお嬢様……」

床に倒れているテルを一瞥し、後ろにいるハヤテは申し訳なさそうにだが、苦笑いで言う。

「えーとテルくん、この料理はなんなんですか?」

目を細めてその料理なのか分からない物体をマリアが聞く。

「何って……ミートソーススパゲティに決まってるじゃないですか?」

「一言言わせてもらう。ミートソースは少なからずとも黒くはないはずだ」

ナギの言う通りでテルの作ったミートソースはとてつもなく黒い。そして鼻を詰まらせるかのような異臭。パスタは伸びきり、全体からは黒い煙が出ていた。

「キッチンも爆破しおって、一体なにをしたらあんな爆発が起きるんだ?」

「台所を見てきましたが薬品が転がってました。あと……これも……」

小さなビンを抱えたマリアが差し出したのは……墨汁。

「マジでか……」

呆れてそれしか言えないナギ。

「イカ墨をいかそうと思ってな。イカ墨がないから仕方なく……」

「もはや料理と呼べませんよ！ 兵器ですよ兵器!!」

ハヤテが猛然とツツコむが、テルは頭に手をやり

「ふっ……よせよ、テレるぜ」

誇らしげに言うのであった。

「お前の料理のセンスはもはや人外と言わざるを得んな……」

「いや、お嬢様も言えませんよあまり……」

ハヤテの小さな呟きをナギは聞こえないように咳払い。

「生まれついでスキルだ。どうしようもない」

テルが開き直ったか、両手を広げて言う。

「ならお前はアレか？ その料理で世界でも破壊するつもりなのか？」

「逆だ。俺の料理は新たな始まり、生命の誕生を表してんだよ……食って見ろって、そうすればお前は万物の法則を理解し、人間を越えた存在に——」

「ならば お前 が 食べ!!」

ベラベラ喋るテルに対してナギは限界だったか、テルの後頭部に手を当て、顔をダークマターにぶちまけた。

その瞬間、テルの全身が痙攣を起こしたようにビクツと震える。

そして3秒後。

「……………」

「あー、テルさーん?」

ピクリとも動かなくなったテルをハヤテが揺ると床に大の字に

倒れる。

目は白目を剥いていた。

「自分が食べるまで作った料理は最高級だと思ってますからねえ……」

マリアがふう、と残念そうに溜め息をつく。

「これは遺伝子レベルでヤバいですよ……」

白目を剥き、テルはついには黒い泡まで吹き出す。

「まあ、なにはともあれハヤテよ、お前が変わりにミートソーススパゲティを作るのだ!!」

「は、はい！ 分かりました!!」

(というか、朝ご飯はそれで良いんですね?)

そんな小さな疑問を考えながらせつせとキッチンへ戻る。しかしキッチンには絶望と破滅をセットにした状態なのだ。まず最初に行うことが掃除であると思うとハヤテはトホホと先が思いやられるのであった。

○

―私立、白皇学院。

神々しい名前から察する通り、名門である。

在学中の生徒が殆どブルジョアジーであるため、校舎内にはカフェテリア、時計塔、美しい池などの立派な設備がいっぱいである。

「……………」

テルは1限目からずっと机に突っ伏していた。原因は明白である。

(頭んなかで黒いパスタがぐるぐる回ってら……)

顔色が悪いのは確かなこと、それでもその状態で学校まで来たその根性、見上げたものである。

(授業もまともに受けれたモンじゃねえわな……)

グツタリした表情の裏はなかなか腹黒い。堂々と授業中眠る事ができるからである。

最も、普段の授業態度とあまり変わらないが……

「かの策士、竹中半部衛は言いました。『己を知る者を守る』と」
黒板にチョークをガツガツと音を立てながら語るのは、我らが担任、桂 雪路である。

今は世界史の時間なのだがマイナーな日本史の話が出てくるのはなぜだろうか。

「先生、今は世界史の授業です」

雪路が次に織田信長の話をしかけた所で生徒の一人が手を挙げて指摘する。

ホットピンクでよく目立つ長髪の生徒、桂 ヒナギクは雪路の妹だ。

外見からして似ても似つかない、規律を乱さない、生徒会長を勤める生徒の模範的姿である。

「良いことヒナ。己を知るとい言葉だけでも胸の中に刻んでおく

べきよ！ 特に今の荒んだ日本にはツツ」

再び黒板にチョークを走らせ、『己を知る』と書き散らす。

それを見てか、ヒナギクも溜め息を少しばかりつき、これ以上は何も言うまいといった表情だ。

(姉の教師とその妹が同じ教室にいるって誰もツツコミ入れんのだな……おえ……)

一瞬ゲロを吐きそうな気分になるがなんとか持ちこたえる。

テルはこのままトイレに直行したい気分だが体が動かない。否、動かせない。

虚ろな瞳で黒板の文字を凝視した。

『己を知る』

(そう言えば俺って自分の事、全然知らねえや……)

皆さんお忘れかと思うが、テルは記憶喪失である。

自分の生い立ちから両親の顔、その友の顔は本人のテルは誰も覚えていないのだ。

(ただ一つだけ……)

そう一つだけ、分かった事があるのだ。

かつて自分は、「先生」なる人物と暮らしていた『らしい』。

その人物はテルになぜか剣術を教え、鍛えさせていた。

(恐らく俺のことを知っている数少ない人物の一人……)

しかしその人物はどこに居るのか分かった物ではない。

最低限の関係性は思い出しても、顔は全く思い出せないのだ。

(と、考えると逆に俺のことを知ってるヤツって今の知り合いを除いたらゼロなのか!?)

なんとということか。　自分は友達ゼロ人という寂しい人生を送っていたのだ(仮定)。

(はあ……鬱だ。　自殺してしまいそうな危機だ)

死ぬ前にゲロの危機を抱えているが……

(やば、色々考えすぎたから更に気持ち悪くなってきた……)

焦点はもう合わず、力尽きたテルは視界を完全にブラックアウトさせた。

しかしテルは思う。さほど悪い過去ではないのではないかと。少なくとも、『今』あるこの光景は楽しい。　それだけで充分だ。

あの時を迎えるまでは……。

ここは都内の高層ビル……の屋上。

そこに設けられた貯水タンクに携帯片手に立つ一人の少年。

帽子を被り、ジーンズ、左手の真つ黒な手袋。

ジャケツト姿の少年は誰かと会話しているようだった。

「あーあー　東京都練馬区に到着しましたあー、どうぞ?」

音声チェックも兼ねてか若干、間延びした声をだす。　しかし相手からの返事はない。

「もしも〜し」

立て続けに相手をコールする。

「黒羽（くろはね）さくん、聞いてますかあ？ 木原（きはら）ですよ〜」

だが答えない。 男、木原は携帯の画面に向かって叫んだ。

「ダァー！！ このストトコドッコイ！！ 返事ぐらいしやがれよ！ ちゃんと言葉分かる!? ユアダスタン!?!」

木原は息を切らしながら言い終える。 だが結局返事は来なかった。

「くそっ!!」

仕方なく携帯の通話を切る。 まあこれは今に始まった事ではないが。

（まあ何日も前からここにきてるし、業務連絡もしてあるから大丈夫か……でもアイツ、早ければ今夜にでも動きそうだな）

その懸案事項を色々考える。 どうやら木原という男は心配症のようだ。

「おっと」

ビル風に煽られて帽子が飛ばないように押さえるが、体のバランスが崩れて地面に落下する。

「ほいっ」

しかし空中で体を回転させ、体操選手顔負けの宇宙返りを決めて、地面に着地。

木原は立ち上がると空を眺めて一人呟く。

「またアイツ……どこほつつき歩いてんだらうな」

そんな謎の脅威が迫る中、主人公は……

「おぼろろろろ……」
一人トイレにて吐き気と格闘中であつた。

第40話く月の光って誰でも綺麗にできく

場所は変わり、ここはラーメン辰屋。 テルの行きつけのラーメン屋である。

香ばしい豚骨ラーメンの香りが漂う店内。

放課後、テルは体調も良くなり、体調不良のせいで取ることができなかった朝と昼の分を取り返そうとしていた。

テルが箸を割り、さあ食べようとした時である。

「翼を生やしたお化け？」

麺を半分食べようとしていた時、辰屋のその言葉にテルは箸を止めた。

「そうだ。 なんでもココ数日、夜になると翼を生やしたお化けが現れるって話だ」

ロシア人のアルバイト、バルトが続ける。

「ふーん、どこぞのアニメ好きの坊ちゃんが見た幻じゃねえの？」

墮落しきったかんじでテルは構わずズルズルと麺を口に運んだ。

「まあそうだな。 確かに目撃したヤツはかなりのアニメ好きだ。 しかし他の奴らも口を揃えて天使だの鳥人だの言う……1人はたしか隣近所の大塚さんだったか？」

「いや辰屋殿……たしか大塚さんではなかったか？」

「バルト、ダメだ。 俺はもう点が付いてるかどうかも区別できなくなったらしい……」

「どーでもいいけどよ、アニメとかに振り回されて現実と二次元の区別つけられないとなるとは……日本も未だなあオイ」

他人事のようにテルが呟く。 バルトも腕を組みながらウンウン

と首を縦に振った。

「まったくだな……これでは荒んだ日本になってしまいうのも時間の問題……」

「さりげなく俺のメンマ奪ったなテメエ……」

テルはバルトの口の動きに注目一体、腕を組みながらどうやって取ったと疑問を浮かべながら睨み付ける。口をモゴモゴと動かしているバルトは動じることなく言った。

「違う違う。これは飴玉だ。疲れたときは糖分、働いているときもまた糖分……」

「黙れエセ外国人、飴玉はシャキシヤキと音はたてねーよ」

「エセじゃない！ バルトだ!! 生粋のロシア人だ!!」

「テメエーら黙りやがれええ!! 周りの客に迷惑だらうがアアア!!」

ゴキン！ と、テルとバルトの両方の頭に辰屋の鉄拳が飛び、しばらく二人は大人しくなった。

「お化け……ねえ……」

鉄拳制裁の痛みに耐えながらテルは残りのスープを一気に飲み干す。実際、そのようなSFじみた世界とはもう既に繋がりを持っており、さほど驚いたりはしなかった。

——そして、夜。

「んじや、ちよつくら行ってくるわ」

「アレどこ行くんですかテルさん？」

夜の八時頃を回ったあたりか、仕事を終えたテルが何やら支度をして玄関に向かったのをハヤテが発見。声を掛けられる。

「お仕事だ」

テルは力なく言うと、ハヤテは分かったかのように手をぽんつと叩く。

「ああ、伊澄さんのお手伝いですね？」

「まあそんな所だ。多分おれは今日は屋敷には帰れないだろう……」
眠そうなテルだが仕方がない。悪霊退治はたいに夜に行われる。

しかも不定期であり、伊澄からの連絡があり次第問答無用で駆り出されるのだ。そのため、テルは朝帰りを余儀なくされている。

「僕も行きましようか？」

ハヤテが心配そうに言ったがテルが手をかざして制する。

「いんや、構わない。どうせ伊澄が一人で片付けちまうし必要ねえだろ。それに最近生きのいい新人さんが仲間になったからな」

そう。たいていの荒事はほとんど伊澄に任せている。テルは何をするのか？ 聞くまでもない、ほとんどが伊澄のサポートだ。

そう、囃役という名の。

ちなみに、最近入った新人というのは某関西人だ。

「咲夜さんも大変ですね・・・」

「まあそうなんだがな？ 確かに半分強制だから、幼馴染だから結構な頻度で咲夜が伊澄と居ることがあるよ？ でもテルさんはポジシヨンチェンジなんて全然気にしてないよ？」

「本当は気にしてるんですね・・・」

「んな訳ねーじゃん？ テルさんそこまで寂しがりやな訳ないじゃん!？ 遅刻が多いからって左遷されたわけでもないし？ 今日だってもう既に一時間くらいもう遅れてるから機嫌直しにハーゲンダッツあいつ等を買ってやるけど別にいつも遅れてるから左遷された訳じゃないんだからね!？」

「原因は明白ですね・・・」

その様子を見た限り、ある程度の察しがついたハヤテはやれやれと言った表情だ。

「ヤベエ・・・もう俺の財布には五百円玉しか存在しない・・・ハヤテ、ちよつくら貸しry」

「嫌ですよ、僕だっぴりギリギリですからよ」

最近ではハヤテもテルに対して扱いが変わってきたようである。

場所は変わり、どこぞの神社。

鳥居を抜けたそこには大きく空間

が広がっている。夜の神社は怖いという風評もあつてか、人はいない。

そこを生業としている者たちを除いてだが。

砂塵と爆発が起こり、辺りは散らかされたと言うよりは戦争でも起きたのかという惨状。

あちらこちらの地面はクレーターを作り、神社の犬神の像は原型を留めていない位に崩れている。

「ぶはっ・・・しんど」

突如、土の中から一人の少女が這い出てきた。テルの言っていたもう一人の新人こと、愛沢 咲夜である。

「相変わらずど派手にやりおつたな」

「ごめんなさい咲夜・・・大丈夫だった？」

砂埃を払う咲夜の前には和服を着た一人の少女が立っていた。

鷺ノ宮 伊澄である。

「この惨状を見る限り大丈夫なんて言える訳ないやないかい!!」

パシン！ と咲夜お手製のビックハリセンが伊澄の頭に炸裂する。

「あう・・・」

あまりにも決まってしまったのか、少しばかり頭を押さえる伊澄。

咲夜は腕を組みながら続けた。

「しかし今回はかなり手こずったんな」

「すみません・・・なかなか手ごわかったので・・・ごほっ」

と手を口に当てて咳払いする伊澄に咲夜が気づいたか心配そうに聞いた。

「なんや自分、体調でも悪いんか？」

「そんなことないわ。少しだけ疲れただけよ・・・」

ふうと咳が収まったのを確認して、いつものようなゆったりした喋り方になる伊澄。

「そうか、ならえんやけどな・・・ところでコレどないするん？」

咲夜がそう指すのはこの荒れ果てた神社だ。一応明日にも来るか分からないが参拝客、つまり一般人だって来るのだ。この荒れよ

うは流石にマズイ。

「大丈夫よ咲夜、こういう時はあとで式神をつかって直しますから……」

「出たな陰陽師の特権……」

キラんと目を光らせる伊澄に咲夜がぼそりと呟いた。

「ところで……テルはまた遅刻かいな」

首に手をやる咲夜はこの場にいないもう一人の人物の名を呟く。

「まったくです……咲夜が来てからというもの、最近は仕事もサボりがちで……」

「いや、それじゃまるでウチが来てから来なくなっただけみたいになってるやんか……」

袖で口元を隠しながら不満を言う伊澄に咲夜が冷静にツツコム。

ふと気づいたかのように咲夜が伊澄に聞いた。

「そう言えば伊澄さん、テルの事どう思ってるん？」

「え？」

その言葉にか、伊澄は一瞬思考を停止したかのように動きを止めた。しかし言葉の意味を理解したか、慌てて咲夜に聞き返す。

「どう……どうって、どういうことかしら……」

「ん？ いや別にな？ この仕事してて分かったんやけどな、テルの隣に立っている伊澄さん、メツチャ楽しそうな顔してるからなく」

ちよつとばかり小悪魔じみた笑みを浮かべる咲夜に対し、夜だというのに薄暗くてあまり顔色が分かりづらいのだが、伊澄の頬は紅くなっていた。

「そ、その……」

「ん？ 実際どうなんや？ ん？ん？」

面白がって咲夜は続けるが伊澄は一向に恥ずかしそうにして、話そうとしない。

しかし、ようやく伊澄が口を開いた。

「なんと言えればいいのか……分かりません……」

「……そっか」

(これは……相当やで)

伊澄に気付かれることなく笑うと咲夜はこの話を切り上げることにした。

(しかし、あの万年金欠しそうで死んだ魚の目をしたあの男にそんな価値があるんかいな・・・)

その点だけを見るととても他の女に声を掛けられるようなことはない。第一印象で決めていた咲夜は不思議に思っていた。

(はあ・・・これじゃホントにワタルが可哀想になってきたで・・・)
またしてもため息、どこぞのレンタルビデオ店の子供店長のことを考えていた咲夜だったが

「まったく咲夜は・・・ごほっ」

伊澄の咳に反応して思考を中断した。

「なんや、熱でもあるんやないか自分？」

よく見ると、伊澄の顔は熟れたリンゴのように赤かった。どことなく息遣いも荒い。目も少しばかりか覚束無さそうだ。

「実際立ってるだけでも辛いんとちゃうんか？」

「だ、大丈夫よ・・・疲れてるだけで・・・」

そう言つて、伊澄は笑顔を浮かべる。しかしそれが作り笑顔だ。こののは見て分かった。

「ま、もう少ししたらテルも来るしな。責任もって負んぶしてもら

わなあかんなく」

「も、もう〜！　咲夜〜!!」

「嫌なん？」

そう言つと、またしても黙り込んでしまう。今度は頭から湯気が出てきていた。ここまで来ると正直すぎて笑えてくる。ますますワタルが可哀想になった。

結構この生活にも慣れてきていた咲夜はこの状況下でも笑い飛ばしてくれる度胸があった。彼女の中ではどんな時でも『爆笑』を心がけているからだ。

(今はもう・・・一人じゃない・・・)

伊澄は思う。光の巫女として悪霊と戦う日々。ずっと一人だった。誰かに話しても信じてもらえないだろうから、信じたとしても

自分のいる世界は楽しいことはない、逆に危険だけが満ち溢れている。

それでも彼は逃げなかった。

そばに居てやると言った。

自分はそれに応えられているだろうか。

少なくとも……彼女の中で、守らなければならない者が増えたのは確かだ。

だからこそ誰も傷つけない。させない。それだけの決意が彼女にはあった。

「私は幸せだったんですね……咲夜」

少しばかりブーツとした眼差しで呟く。　咲夜は笑いながら返した。

「ちやうちやう、幸せなんやで？　伊澄さん」

「そうね」

そうお互いにクスクスと笑う。　あとはこの場所にもう一人来ればいいのだが……と考えていた時だった。

「……？」

風が……吹いた。

「おお、寒い寒い。　これは風も引いてまうわ……ってどないしたん伊澄さん？」

咲夜が両肩を押さえながら咲夜を見た。　普段見せない、悪霊退治に見せる険しい表情。

「……これは？」

伊澄が辺りを見回す。　勘という以前に、脳が認識するよりも早く肌という器官が察知した。

その気配を探り、その『何か』の場所を特定する。

「……!!」

それが自分の後方にいるとは最初は分からなかった。　ちようど

雲がかかり、月が隠れていたからだ。

後方の鳥居の上に『そいつ』は立っている。

「あなたは・・・？」

次第に雲に隠れていた月が姿を現す。と、同時に月明かりに照らされその姿が明らかになった。

『そいつ』は伊澄の意を介さず、地面に降りた。

「うわっ」

咲夜が声を上げる。鳥居は少なくとも6〜7メートル位あるだろうか。そこから直立姿勢のまま飛び降りた。

ストツ。

と静かな音だけを立てて『そいつ』は着地した。

月明かりに照らされたのは一目見れば分かる位の黒が目立ち、若干の白のラインが入ったローブを着た『人』だ。

(・・・人?)

それでも伊澄は疑念を巡らせていた。目の前にいる奴は少なからずとも『人』だ。黒のローブの袖からは白い肌をさらして、黒のブーツがあるところ足もあるのだと理解できる。

しかし、この背筋からくるものは何だろうか。生まれてこの方、背筋が凍るほどゾツと感じたことはない。

(悪霊?・・・いったいこれは・・・)

渦巻く疑念を振り払おうと札を構えたその刹那。相手が右手を翳してきたのが見えた。

その瞬間、伊澄は本能的な反射で前方に結界を張った。

その判断は正解だったようで伊澄の結界に『何か』がぶつかる。力と力の衝突により、地面の砂が舞い上がった。

「これは・・・」

砂埃が晴れてきて目に入った光景に伊澄は驚愕した。

結界にぶつかってきたのは先端が尖った黒い物体まるで槍だ。

しかし驚くのはその出所。それは細く伸びてフードの翳した右の掌から出てきていた。

「・・・」

フードの人物は何かが自身の『攻撃』を阻んだのが分かったのか、その槍を自身の掌の中に『戻す』。

「う、腕の中に消えたで……」

咲夜もその光景をみて啞然としていた。

「咲夜、私から離れないで……」

「え？ 何を言ってる……ってまた来た!!」

咲夜が言いかけたところでフードはまた右手を翳して黒い槍を放つ。

「同じ手……ツツ」

と、同じく前方に結界を展開した。だがそれを図ったかのように槍は結界に直撃する寸前に枝分かれした。

「うわっ！ 色んな所から来る……!!」

「くっ!!」

前方に結界を張っていたために虚を突かれたが、伊澄は即座に全方位に結界を展開。激しい衝撃音が四方八方から襲ってきた。

「はあ……はあ……」

黒い槍はまたしても貫けず、主の元へ戻っていく。ここで咲夜があることに気付いた。

「伊澄さん……息が荒いで？」

「え？」

そう。先ほどから、伊澄は自身の体調の変化に気付けないでいた。頭がぼんやりして集中力が足りず、額からは異常なほどの汗が出ていた。

「……」

それを見たフードの人物は同じように黒い槍を放つ。しかし今度は両手だ。

二本の両手から放たれた槍は同じく枝分かれし、無数の槍と化する。その量に空一面が漆黒の色で塗りつぶされた。

「耐える!!」

その決意のもと、防御意識して、全方位ほ結界を作り出す。次の瞬間、槍の雨が襲いかかってきた。

何千何万という槍の衝撃に結界は耐えてくれるだろうか。

(なにがなんでも・・・守って見せるー！)

辛い体力の中、それだけを想い、力を込める。

先ほどとは尋常ではないほどの砂埃が舞い上がる。

襲ってくる衝撃がなくなるのを確認すると伊澄は安堵した。

「耐えた・・・」

荒い息を吐きながらフードの人物を見据える。しかしその目に映った光景を見て、伊澄は目を見開いた。

大木が浮いている、否、持ち上げられているのだ。今度は黒い腕が肩から伸びて、その大木を持ち上げていた。

「うわああああ！ 伊澄さんまた来るで！ 結界結界!!」

振りかざしているのを見てその大木を叩きつけてくるのは明白だろう。しかし同じように結界を使って守ればいいと咲夜は簡単に言うが、伊澄は顔をしかめた。

「この結界は霊的な攻撃の類を完全に遮断するけど・・・それ以外は」
そこから先は言わなくても分かった。つまり、物理にはめっちゃくちゃ弱いということだ。

「ぬおおおおお!!」

大木が動きを見せた瞬間、咲夜が叫び声を上げながら伊澄の手を引いてその場から退避。振り下ろされた大木は轟音を上げて地面に叩きつけられた。

「どわあああ!!」

地を揺るがす威力に、二人は見事に地面に伏した。

「なんか無いんか伊澄さん!! マジヤバいこの状況を打開する術とか!!」

手をばたつかせながら伊澄に聞くが、肝心の伊澄には聞こえてなかった。

(ああ、マズイ・・・)

目の前の景色が歪む。

(力が……)

歪んだ伊景色を少しだけはつきりさせると右手を翳しているフー
ドの姿が見て取れた。

この状況、何かしないと確実にやられる。しかしその手段すら考
えられないのだ。

まさに絶体絶命。

(テル……さま！)

その名を心の中で叫んだ時、黒い槍が二人に向かって放たれた。

「なあああああ!!」

咲夜も覚悟して目をつぶった時だった。

べちや。

と、何かぶちまけたかのような音が聞こえる。恐る恐る目を開け
ると、そこには槍に貫かれたアイスがあった。

「……………」

フードの方にもアイスは投げられていたようで、肩から飛び出てい
た槍がそのアイスを貫いている。

「あくあ、オレの小遣い全部無くなっちゃたよ。どうしてくれる?」

月明かりに照らされた男は残念そうに頭を掻いていた。

「テメエら、ご近所迷惑つてのが分かってねえな、特に関西! 叫びす
ぎて耳が破裂しそうだったっの!!」

ダルそうに答えると、右手に携えていた鉄パイプを肩に担いだ人物
は……

「さて……お前は何モンだ?」

善立 テルその人であった。

第41話く月下死神の調べく

夜の神社に異形、現る。

「お前……何モンだ？」

テルはそのフードの人物と改めて対峙する。テルも相手の佇まいから何か感じ取ったか伊澄に聞いた。

「伊澄……こいつア、悪霊なのか？」

伊澄の違和感にテルも感づいたようだ。伊澄は分かる事を伝える。

「分かりません……ただ、これだけは分かります。危険だと……」
「なるほど」

そう聞くとテルは一層険しい顔になる。伊澄がここまで追い詰められた事があっただろうか？

「ま、何にしてもとつと追っ払ってやらないとお前の体が心配だ」
少しばかり笑うと鉄パイプを構える。

「まったく、テメエもテメエでその格好は何なんですかア？キン〇ダムハーツの13機関ですかコノヤロー」
「……………」

テルの軽い挑発にも相手は同時ない。その不動さ、まるで山のごとし。

(チツ、気味悪いぜ……)

心の中で呟いた瞬間、相手が動きを見せる。右手を翳した。右手の掌から黒い槍が飛び出した。

「テル様！ 避けてくださいッ！」

その伊澄の言葉が聞こえ、反射的に横に跳ぶ。

そしてテルの居た場所に黒い槍が真つ直ぐ突き抜けた。

「なんだ、ゴ○ゴムの実でも食べたのか？」

突き抜けた槍は奥の木を貫いていた。凄まじい破壊力である。

「伊澄、助かったぜ！」

「い、いえ……」

相手と対峙したまま礼を言うテルに伊澄は満足いく返事は出来なかった。体力の消耗が激しい。

「なあテル！もしかしたらアイツめんどくさい攻撃する分だけで、生身はそんな強くないかもしれないで!？」

矢継ぎ早に放たれる槍を鉄パイプで弾くテルに咲夜が叫んだ。

「確かに！RPGでは魔術師は物理に弱い……その考え乗ったぜ関西!!」

「関西やない!!ちゃんと名前と呼べボケェツ!!」

怒る咲夜を無視してテルは相手の懐に接近を試みる。

「……………」

フードはそれを見るや左手も翳して黒い槍をテルに向けて放つ。

「邪魔くせえなホント!!」

枝分かれした無数の槍が迫るが、鉄パイプで体に当たる最小限を弾いて前進をしていた。

「アイツ…何者なんや?」

その光景を見て、咲夜が思わず呟く。恐らくテルについてだろう。

「私も詳しくは分かりません……でも、これなら……」

伊澄の知らずの内に笑顔が戻る。

これなら倒せるのではないかと。

一方でテルは確実にフードの距離を縮めつつあった。

迫ってくる槍の横腹を軽く当てて軌道をズラす、それを繰り返す。

「ゴノヤロ……今その化けの皮剥がしてやるぜ!!」

そして槍を弾いた瞬間、本能的に彼は相手の懐へのルートを見いだした。

ここからは防衛不要。一撃の元に沈める所存だ。

強く地面を蹴り、一気に駆ける。途中体を槍が掠めるが止まる気はない。必殺の一撃をお見舞いする為にテルは地面を飛んだ。

「……………」

フードもすぐさま右手の槍を引き戻すが、タイミング的に間に合わない。

「ちよいと痛エーぞ!! 治療費は出してやんねーけど!!」

飛んだ姿勢から鉄パイプを構えて、相手の側頭部目掛けて振り込む。

バキッ!

「き、決まった……………」

明らかにヒットしたのであろう快音を見逃す事無く咲夜が呟く。

しかし、テルは違っていた。鉄を通して感じる違和感はなんだ?

疑問を胸にテルは次に目に映る光景を信じられなかった。

先ほど放った一撃は、手加減したのもあるが相手の意識を奪うのは充分だったとテルは認識していた。

だがその一撃が、相手の素手に止められていたなんて、信じられなかった。

「……………ツツツ!?!」

その真実に気付いたかで咲夜と伊澄が唾然としている。

(オイオイ……なんだよ、俺は鉄でも殴ったのか?)

鉄パイプを通して伝わる違和感にテルの頬に冷や汗が浮かんだ。

「……………」

フードの人物は鉄パイプを掴むと、フードの中からテルを見据える。

「……ヤベ」

そう呟いたテルが見たのは相手の肩。

その肩から黒い物体が現れる。それが鎌のような形になるとテルの首目掛けて襲ってきた。

「ちい……ッツ!!」

その鎌が首に掛かる瞬間、相手の腹部に蹴りを入れ、その反動で後方へ飛び退いた。

程なくしてヒュンツ! という風を斬る音がする。鎌が振り抜かれた音だ。

「オイオイ、クビちよんぱは勘弁だぜ……」

飛び退いたテルが自身の首が繋がっている事にふうとため息をつく。

「オオオイ関西ツ!! 話が全然違エーじゃねえーか! 危うくクビ無しになる所だったぞ!!」

テルが咲夜に向けて猛然と叫ぶ。その言葉に咲夜は怒鳴り返した。

「うっさいわボケェツ! 悪魔で予想の話やアホンダラアア!!」

その突っ込みよう、まるでこのシリアスな雰囲気をも感じさせない。テルは改めて向き直る。

「つたく……鉄パイプ殴られてピンピンしてんだけど……どこの夜兎族ですかコンチクショウ」

テルが再び鉄パイプを構えたその時である。

「……………」

もう片方の槍を引き戻した相手は、自身のフードに手をかけた。

そしてゆつくりと、フードを脱ぎ始める。

月明かりがまたしてもいい仕事をして、フードを脱ぐ動作に演出がかかる。

「冗談じゃねえ……」

テルはその現実を直視できずにした。

フードの中で隠れていた黒い長髪がその手により姿を表す。

その髪は腰辺りまで伸びる。癖つ毛もないストレート。

黒衣に身を包んだ人物の正体は……空色の瞳をした少女だった。

「な、なんやと……う？」

咲夜も相手が少女だった事に同じく驚きを隠せないでいた。

一方で伊澄も。

(謎の術、有り得ない防御……どれに關しても情報がない。でもここはテル様に任せるしかない……)

まだ分からない未知の力。今の自分では抵抗も虚しい。目の前のテルに頼るほかなかった。

「つたくよ……そういう事になると、ますますへこんじまうぜ……」

勿論、テルとしても黙っている訳がない。仮にも鉄パイプの一撃

を片手で止めるといふ屈辱を味わわれたのだ。

しかし、意外な事に今度は相手が仕掛ける。

それはゆつくりと倒れるようで、次の瞬間、タンッと跳ねるように踏み込んできた。

そして着目すべきは相手の右手、今度の右手には槍はない。しかし代わりに黒い刃物らしき物が生えている。素早くその刃を振るう。

それを素早く反応し、テルもまた鉄パイプでその一撃を防ぐ。互いの獲物が鉄をぶつけたような鈍い音が響いた。

少女の攻撃は止むことない。その一振りを防がれたのを確認して体の姿勢を低くした突き、下段斬り、武器を弾いて首を狙うという流れるような舞の動作でテルを追い詰める。

「調子乗るんじゃ・・・ねえツツ!!」

一方的に攻められるのは好きではないテルは、首を狙った突きを体を捻って躲す。少女の真横に對面し、横薙ぎに鉄パイプを一閃。

今度はしっかりと捉えた筈だった。しかし、その攻撃は空振りに終わる。

少女は超人的な反応を見せて、真上へとジャンプしていたのだ。

「なんじゃそりゃあああッツ!!?」

咲夜が驚くのは無理もない。その少女は地面から7、8メートルの高さまでジャンプしていたのだ。

とても人間が助走なしで跳躍できる高さではない。あり得ない。しかし、その『あり得ない』ことは続くのだ。

それは見上げていたテルが最初に気付いたことで、流石に夢でも見てるんじゃないかと一度目を袖で擦った位だった。

少女の背中から翼が生えていた。

「なるほどね・・・」

この時テルは辰屋から聞いていたあの言葉を思い出す。

——口を揃えて鳥人だ天使だの言うんだよ

「冗談じゃねエ．．．鳥でも、むしろ天使ですらねえ」

目の前のこの光景に、自分が思い浮かべた一番のイメージはこうだ。

「悪魔だろうが．．．」

その眩きを入れた瞬間、少女はその翼を広げて一気に急降下。

「くそ．．．」

滑るかのように降下した少女は黒い刃物をスピードを生かして切り込んでくる。それに対してテルは鉄パイプで弾いて応戦した。

しかし、今度はスピードという力が働いている。下手したら押し切られる可能性があるため、弾くと同時に真横に跳んで回避する。

「．．．．．」

だが少女はすぐさま身を翻し、テルに向かって刃を振るう。先ほどとは違って、またスピードを上げている。回避などさせない気だ。

地面と空、縦横無尽に対応した戦い、相手は戦いを知っている。テルはそう思っていた。

「チートっていうレベルじゃねえぞ．．．」

弾き際、いったん距離を置いたテル。しかしその足場には自身の血が少しばかり流れていた。

「だ、大丈夫なんか．．．」

その姿を見てか、遠くの咲夜が心配そうに伊澄に聞く。だが伊澄は動じることなく答えた。

「大丈夫よ咲夜．．．テル様はやる時はやる人です」

それはお互いを信頼しているから発せられる言葉だった。

「．．．．．」

どうやらテルが何か閃いたか先ほどとは違い、冷静な顔で相手を見据える。

相手はまたしても空からの滑空攻撃を仕掛けてきた。ここまではテルの予定通り。

体を静め、頃合いを見計らったのを見てテルは片腕でゴルフボールを打つ要領で地面を穿った。

「オラアアア!!」

鉄パイプにより生み出された砂埃が少女を包む。少女は砂埃でテルを見失ったか、滑空をやめてその場に降りた。

「喧嘩は真正面だけじゃねえーんだぜ!!」

その背後から砂埃に紛れてテルが現れる。これは完全に隙をつけた。相手はまだ気づかないでいる。

これで終わらせる。そう決めて鉄パイプを振り下ろした……だが。

ガチンツ。

と、金属同士の衝突による鈍い音が響く。

「な……ッ」

鉄パイプは少女に触れることなく防がれていた。両肩から生えた黒い腕によつて、鉄パイプは防がれていたのだ。

これにはテルも啞然とせざるを得ない。相手はこちらにまったく気づいていない状態でガードをしたのだから。

「……」

その一瞬の隙を少女は好機だと感じたのか、黒い刃物をさらに変形させる。

今度は黒い剣。しかし、武士の使う刀とは比べ物にならない長さだ。西洋でいう長剣の類だろう。

少女は片足を軸に、まるでコマのような体を捻りながら不向きざまに真横に長剣を振るった。

「やべ……」

反射的に体を鉄パイプでガードしたまま後方に飛び退く……だが。

バキンツと聞きなれない音がした。それは自分の右手にあるパイプが発した音である。

鉄パイプが真っ二つに折られていた。

まともに鉄パイプで受けたのが原因か、テルの体がまるで紙のように吹き飛ぶ。地面に転がったテルは頭を押さえながら上半身だけを起こして体制を立て直そうとした……その時。

バシユツ。

何かが自分の体から勢いよく吹き出す。最初はまったく分からなかったが血だ。それはまるで噴水のごとく飛び散り、地面には真っ赤な血がべつとり。

胸から一閃させられた傷は思ったより深く、そこからは物凄い勢いで血がドクドクと流れていた。

心臓が波打ったびに血の出る量が変わる。それを見ていたテルは青ざめた表情をしていた。

「オイオイ……これマジヤベエって……!!!」

恐らく、この瞬間が最大の好きだったであろう。こともあろうに、テルは少女が眼前に迫るまで気づいていなかった。

翼を広げて地面から動けないテルのすぐ上で黒い長剣を構える姿が目に入った。

当然、反応することも叶わなかった。

ズブツ。　　といテルの腹部に長剣が深々と突き刺さった。それは体の肉の影響を全く受けにくいくらい滑るように体を貫き、地面にも突き刺さる。

ズドンつと衝撃が体を駆け巡ったとき、テルは盛大に口内からは血を吐き出した。その少女にもその血がかかる。

しかしべちや、と顔についても少女は血をふき取るどころか、その無表情を崩すことはなかった。

全てを吸い込んでしまいそうな空色の瞳を持つ少女はこの時は死神と呼ぶに相応しい。

地面に縫い付けられるように動けなくなったその姿は串刺しという言葉がピッタリなぐらい、残酷な絵図だった。

「あ、ああ……」

咲夜が目をそらす中、伊澄が肩を震わせる。そして変わり果てた自分の大切な人の姿を見て神社に悲痛な叫びが響いた。

第42話く罫には自ら飛び込む、これ馬鹿く

「かつ・・・は・・・」

体を貫く激痛に耐えながら、テルは意識を保っていた。見上げればすぐそこには自分を貫いた少女がいる。

「・・・」

まるで慣れているかのような冷静さ。いや、冷静すぎる。まるで感情が全く機能していないような機械のような表情だ。

体を動かそうにも、見事なまでに地面に串刺し状態、とても動かして反撃とまではいかなかった。

その時。

p r r r r !

少女のローブのポケットから無機質な電子音。　　どうやら携帯を所持していたようだ。

空いている片手でポケットから携帯を取り出す。

『黒羽・・・今どこにいる』

電話をかけてきたのは男の声。

「・・・神社」

『例の物は見つかったのか?』

「見つからない・・・少なくとも、私のいる場所に『石』の気配はない」
トーンも全く変えずに静かに応対する黒羽という少女。

この隙に逃げ出せないかと画策していたが、視線はずっとこちらを見ており、動けない状態は変わらない。

『あー、分かった。オレの方でだいたい目星がついたからいったん戻って来い・・・誰かに見られたか?』

男の言葉を聞くと、黒羽は辺りを見渡して一言。

「・・・三人」

『そいつらは?』

「口封じ」

プツ。と携帯を切ったのを皮切りに、黒羽は長剣を抜こうとする。完璧に首から切断し、その命を消すつもり・・・だった。

「……」

抜けない。さきほどから力を込めて抜こうとしているのだが微動だにしない。

「オイ……」

と、小さな声。視線を向けるとテルが長剣を両手で握っていた。刃の部分を掴んでいるため、手からも血がドクドクと流れる。

「こんなもんで……俺の心は折れねーよ……」

「……」

抜けない。一体どこにこんな力があるだろうか。もはや相手は虫の息のはずなのに。

それなら……と、もう片方の手を刃物に変形させてトドメを与えようと構える。

「八葉六式……撃破滅却!!」

黒羽が振り返ったとき、巨大な光線が直撃した。

咄嗟に羽でガードしたが突き刺さっていた剣ごと吹き飛ばす。

「これ以上は……やらせません!」

鬼気迫る口調だが顔は涙目の伊澄は限界な体力を使って札を構える。

「……」

黒羽も地面を転がってムクリと起き上がる。羽は伊澄の術を受けても少ししか効いていないようだった。

その表情はどうやら痛みを知らないというぐらいに平然としていた。

羽を広げて空へと飛び上がった黒羽は伊澄に目を向ける事無くその場を去っていった。

「……帰った?」

静まる場の中で咲夜呟く。すると倒れていたテルが消えそうな

声をだした。

「へへ……ありがとよ伊澄ちゃん、お前はやればできる子だって信じて……たぜ」

ここまで傷を負いながら笑いながら返すテルはそう呟くと目を閉じてしまう。

「テル様!? さ、咲夜どうしよう! テル様が死んじゃう!」

「おおおお落ち着けえ! アンタも結構ヤバいんやから!」

「た、タイムマシンを……」

「ボケとる場合かアア!! 応急処置イ! 取り敢えず伊澄さん家に運ぶで!!」

病人である伊澄にツツコミを入れるとすぐさま咲夜は携帯を取り出す。

こうして、テル一時的に鷲ノ宮家に運ばれることになった。

○

その翌日。テルが襲撃されたことがまだ誰にも知らされていない三千院家。

「あれ? テルさん今日は帰ってこないのかな……」

ハヤテもこういう日があるのは承知していた。テルが朝見かけないのは仕事の影響であると。

普段はこういったときはハヤテの方からうまく話をしているのである。伊澄の仕事は一般の人物には公にできないことであり、内密にしなければならぬからだ。

ナギやマリアにうまく説明するのも一苦労だったがなんとか言いくるめてナギとともに学校へ登校。

「ふう、あのバカが居ないと何とも静かな登校となるな……」

「ハハ……」

そんな登校道、ため息をつきながら歩いていると……

「ほい」

突如、ナギの視界が真っ暗になった。ハヤテが振り返ると

「おはよう少年」

ナギの背後にいたのは黒い長髪で凛々しい顔立ちの先輩。見た目はものすごいナイスバディ、自称ちよっぴりお茶目な姉御肌、奈津美 唯子である。

「唯子さん、おはようございます」

「うむ」

唯子は頷くと、ぱっとナギの目を塞いでいる手を離す。

「何をするのだ!!」

「フツ・・・スキンシップだよナギくん」

腰に手を当てて軽い笑みを浮かべながら唯子は言った。

「まあもつとも、私のスキンシップは多くの種類が存在するが——」

「あ、唯子さんおはようございます」

唯子の台詞に割って入るように、後ろからヒナギクが挨拶をしてくる。それを聞いた瞬間、唯子は180℃回転、その場で飛び上がるとそのままヒナギクに抱きついた。

「ハーハッハッハアアアアアアアアアアアア!! ヒナギクくウウウウン、おはようだアア!!」

「なんてダイナミックな朝の挨拶ツツ!!」

「私のスキンシップは百八式まであるぞ!!」

ハヤテが遠くでツツコム中、唯子の高笑い。ヒナギクは抱きつかれたまま戸惑っていた。

「あの、唯子さん。一応公共の場でもあるのでこういったのは止めてください」

「なんだ? なら誰もいないところならオウケエイイなのか?」

「いいわけないです!!」

ヒナギクが顔を真っ赤にさせながら否定。仕方ないといった感じでヒナギクから離れた。

そう、何を隠そうこの唯子先輩、かわいい女の子なら誰でも抱きついたりしたりと度を越えたスキンシップをする人なのだ。

「おや? 今日はテル君がいないのだな?」

唯子が一人足りないということに察したのか顎に手を当てて呟く。
「なんか自分探しの旅に出ているらしいぞ」

ナギが素っ気なく答えるとヒナギクがマジで？　といった表情で聞いた。

「自分探し？　職探しの間違いじゃないかしら？」

その言葉にハヤテが説明を加える。

「なんでも『おれは世界の崩壊を止めるために様々な世界を旅しながら自分の記憶の究明に務めるぜ!!』って言ってました」

「デイ○イドじゃないんだから・・・」

しかし、これはすべてハヤテのアドリブである。　もう少し、まともな言い訳を考えられなかったものだろうか。

「そういった理由で学校を休むとは・・・取り敢えず減給は免れんな・・・」

ナギが言えたあ言葉か？　と一同が視線を向ける中、ますます生活がひどくなるテルであった。

○

そして時間は早く流れて放課後、その帰り道にハヤテとナギはいた。

「疲れた・・・こんなことならテルと同じく世界をめぐる旅に出れば良かった」

ため息交じりにそう呟くナギに苦笑いのハヤテ。

「ああ、そう言えば足橋先生の『もうなんだかんだ憂鬱』の新巻がもうすぐ出るじゃないか……」

「あ、近くの本屋で買いますか？　ちょうど僕も買いたい物が――」

prrrr!

「あれ？」

ポケットの携帯が震える。　ナギも早く出ろと言わんばかりにアイコンタクト。

「もしもし……あ、咲夜さんですか？」

「ふあ……ん？」

長い話になるかと思つたナギが大きく欠伸をする。そして何かを見つけたか地面を見ると一冊の本が……

「これはツツツ!! 『もうなんだかんだ憂鬱』の新巻ツツ?!」

ナギが肩を震わせるほど歓喜するその本はナギが先ほど呟いた新巻だった。

(なぜこんな所に……いやそんなことはどうでもいい!!)

小さな疑問よりも目の前の大きな欲望が少女を突き動かす。

手を伸ばして掴もうとした瞬間。

―その時、不思議な事が起こつた! (仮面ラ○ダ○b○l○a○c○k R

X風に)

ピヨン。

「又ツツツ?!」

ナギ掴む瞬間、風が吹くと同時に本が動いたのだ。

なんだ風かと思ひ再び手を伸ばす……が。

ピヨン。

「なに!?!」

ピヨン。

「待てー!」

ナギはたびたび動く本を追いかけてハヤテからドンドン離れていく。

しかも不幸な事にハヤテは電話をしているためそれに気付いていない。

気付けばナギは誰もいない路地に入っていた。

「取つたア!!」

漸く、念願の本を掴んだ。しかしナギは表紙を見て啞然とする。

ピラッと表紙が剥がれる。テープで接着していたらしい。

新しい表紙には……

『幸子の憂鬱く昼と夜の愛憎劇』

「偽モンじゃねえええええええか!？」

勘に障ったか勢いよく地面に幸子は叩き付けられた。

「……いや、でも大人の本って……いや、待て待て、まだ早いだろ？」

いやいや、行けるって行けるって。大丈夫大丈夫、何が大丈夫かっ

て分かんないけどとりあえず大丈夫……ちよつとだけ」

まだ踏み込んだ事のない境地……というのもハヤテやマリアがそういう物を見せないからだ。

「そうだ……この見たいという欲望……誰にも止められないツツ」

そのページを開こうとした時。

ガシャ。

「へ？」

突如真上からナギを覆うようにザルが振ってきた。かなりデカイ。

「なんでザル!？」

闇雲に突っ込むがただのザルではないらしく、中についていたセンサーらしきものから煙が吹き出る。

「………」

そのままナギはパタリと倒れて寝てしまった。

暫くして。

「はっ………」

今度飛び降りてきたのは人だ。ザルをどけるや本を摘んで咄く。

「マジでこんな手に引っかかりやがった……三千院家、恐るべし」

男はヒョイトナギを抱えるとポケットから紙切れを取り出し近くに捨てる。

「ま、いずれアイツにも嗅ぎつけるだろ……」

ナギを抱えた少年 木原はその場を歩きながら去っていった。

「分かりました……テルさんを宜しくお願いします」
『わかった。ハヤテも気を付けてな、次狙われるのは自分かも知れへんからな?』

そう言い残すとプツンと電話を切った。

「……お嬢さま、お話が……ってアレ?」

ハヤテが振り返るとナギの姿はない。

「お嬢さま——! どこですか——!?!」

返事をする気配がまったくない。そして近くの路地にまで搜索範囲を広げた所、あの紙切れを拾った。

「これは……ツツ!?!」

それを見て、ナギが誘拐されたのに気づくのに時間は掛からなかった。

○

——雨。それは見るだけ嫌になる天気だ。

その単語だけで人を鬱々とさせる力がある。

そんな雨の道を一人歩く小柄な影があった。鷺ノ宮 伊澄である。

(私が未熟だったばかりに……テルさまが傷ついてしまった……)

傘を差し、フラフラな足で歩くその姿は後悔の念が見て取れた。

またやってしまった。

大切な人を傷つけてしまった。

(もう繰り返さない……何がなんでも)

無理をしてはいけないというのは分かってる。しかし、こうする意外に何か方法があるのか。

大きな決意を胸に秘めて伊澄は歩く。
「なにがなんでも……倒します。 例え相討ちになっても」

第43話く人を見かけで判断しないく

「はい注目ー！！」

『3人』しかいないその道場にて女性が大きなボードをばんつと叩く。

「今回は人体の効率の良い破壊の仕方を教えるよろ？」

「先生、軽い気持ちで人体壊されたら溜まりません。できればもう少し雰囲気だしてくださいさーい」

テルが眠そうに、そしてダルそうに先生と呼ばれる人物に手を上げて要求。

「そうねえ・・・今回は人体の効率の良い破壊の仕方を『お前たち』に享受してやる。まずは顎をのどを切り裂き、目を抉り、肋骨を破壊し中の臓器を・・・」

「おーい、怖くすればいいってもんじゃねえぞおー」

テルが静かにツツコムが女性は頭を手にやり、フウ、とため息をつく。

「どこまでレベルを落とせばいいのかしら・・・やれやれだぜ」

「こつちがやれやれだよ」

授業なのにこのグダグダ感。女性は竹刀を構えて不満を言い始める。

「だーったら、アンタらが門下生連れてくればいいじゃない。いまやこの道場は門下生が二人なのよ？」

「先生、隣の奴はすでに受ける気力ゼロです」

テルは隣でスースーと静かに寝息を立てる同じ少年のことを指差した。

すると女性は持っていた竹刀を机にバシンツと叩きつける。

「よおしく聞けや小僧ども!!」

その怒声にたたき起こされたかテルの隣の少年が素早く上体を起こす。

少しばかり間を開けてから女性は口を開いた。

「・・・この世界に生まれたからには色々な事を知って生きていかなきゃいけない。でもアンタたちはまだ子供だから、誰かが教える役

を担ってやらなきゃいけない……私もできる限りのことは教えるわ」
今までよりも一番真剣な顔で女性は続けた。

「いつかはアンタたちが自分の意志で自分の道を歩いて行けるように……」

笑顔で言うとその手にある竹刀を肩に担ぎ、テルたちに言った。

「最初に教えることは——」

○

「……」

目を覚ますと最初に天井が視界に入った。辺りは薄暗く、雨音が

ザーツと聞こえてくる。

「……たこ焼きがなんやちゅうねん……」

小さな呟きが聞こえたかと思うとテルの側にはうつらうつらと寝言を言う咲夜がいた。

(なるほど……看病してくれてたのか)

体に巻かれた包帯を見してみる。上半身は痛みが走る所を見ると重症らしい。

「……うん？ おお！ 起きたか!!」

テルが起きていたことに気付いたか、咲夜が笑顔を浮かべる。

「なんとか命は助かったようだな……あの黒髪野郎は？」

頭を掻きながらテルは咲夜に聞く。咲夜はあの子の事を全て話

した。

「……なるほどな。体制を整えに戻ったというところか」

ぬく、とテルは身を起こして立ち上がろうとしたのを見て、咲夜が慌てて止めに入る。

「何してるんやテル!! 寝てなきゃあかん！」

「電話を聞いていたところ、他にも仲間がいる可能性がある。『石』
がどうだのなんだの言ってた……」

「なんか心当たりあるんか？」

咲夜がテルに聞くが、テルは首を振った。

「いや、きつぱりだわ・・・」

「わからんのかい!!」

咲夜がビシツと突っ込んだところ、テルが顔をしかめながら呟いた。

「なんかな・・・胸騒ぎがする」

「何を言うて・・・ん?」

聞こうとしたところで咲夜の携帯が鳴る。

咲夜は席を外し、その

電話を聞いて何やら驚いた声を出している。

再び戻ってくる咲夜は慌てながら一言。

「ナギがまたさらわれたで!!」

その言葉を聞いてテルはまたか、と頭を押さえる。

「まさか・・・あいつ等がやったのか?」

そう推測することは容易いが、確実にあの黒髪の少女が絡んでいるという可能性はない。ただ何となくだ。その可能性がテルの頭から離れない。

「そう判断するのはまだ早いで・・・とにかくアンタのやることは傷を早く治すことや」

「オイオイ冗談じゃねーぜ・・・これ以上職務放棄したらオレの給料が――」

ズドンツツ!

「・・・」

テルが立ち上がるうとした時、テルの顔の真横に槍が突き刺さった。

「アンタに動かれたら困るんや、マリアさんに言われてるからな」

「なんて?」

恐る恐るテルが聞くと咲夜は笑顔で返した。

『無理させずに一歩もそこから動かさないと下いね? 場合によっては実力行使で止めに入っても構いません』ってなあ!!」

そして咲夜はどっから持ってきたのか分からないがその手には巨大なドリルが握られていた。

「お前実力行使って・・・何を止めるの? 俺の息の根?」

額に冷や汗を浮かべるテル。 咲夜はドリルを稼働させながらテルの眼前に構える。

「ナギのことは大丈夫や。 ナギに関しても大丈夫や、ハヤテもおるしな」

「この野郎、スペックの差に物を言わせやがって……」

テルがそう呟いたとき、咲夜がドリルを止めていった。

「これは伊澄さんからも言われてるんや……」

「あ？」

ピクリと反応したテルだが、咲夜がそのまま続ける。

咲夜の話聞いたところ、今は伊澄は眠っているとのことだが、テルの体が落ち着くまではずっと泣きながら謝っていたようだ。

——ごめんなさい、と。

「……」

「ウチも怖かったんや、あの時のテルはホンマに死んでしまうんやないかって不安だったんやで……」

その言葉を聞くと、テルは黙り込んでしまう。

「アンタが死んでまったら、ハヤテが悲しむ、ナギも悲しむ、ワタルも悲しむ……伊澄さんだって」

「わ、分かった分かった!! もう何も言わねえよ!! どこにも行かねえから!!」

そう言い終えると、咲夜も自然と笑顔を取り戻す。 少しだけ笑うと立ち上がり

「そんなら、もう心配あらへんな……んじゃ、ええ子にしとるんやで？」

「お前オレを小学生かなんかと勘違いしてるだろ!? んなことよりジャンプ買ってこいジャンプ!!」

「はいはい、ジャンプでもサンデーでも買ってくるさかい」

「言っとくけどなア、間違つて赤丸とかスーパーの方を買ってくんないよ!! 母ちゃんみてえな間違いすなよな!」

怒鳴りながら要求を言い渡したテルを見て咲夜は笑いながら障子

を静かに閉じてその場を去っていく。

「……」

廊下が軋む音が遠ざかっていくのを確認してテルは被っていた布団をどかした。

「すまねえな……」

「フン、結局行くつもりだったんじゃない……」

スツと立ち上がるうとした時、幼い声が聞こえた。テルが天井を見ると、仮面をつけた白い着物の人らしきものがぶら下がっていた。

「……ずっと居たんだろ」

「ほう、気づいておったのか……」

ケケケと笑うと小さい白い着物が畳の上に降りてきた。

「お前が寝ている間に伊澄は先に行ってしまったぞ？ もっとも、ワシが最初に気付いた時には既にいなかったのじゃがな」

仮面から聞こえる薄ら笑いにいささかイラツと来るものがあつたテルだが、ため息をつけてそのイライラを押し殺す。

「あの野郎目、やっぱり行きやがったか……」

「分かっていたのか？」

「アイツがあり得ないほど負けず嫌いなのは知ってたんだろ？」

頭を掻きながら確認するように聞き返す。仮面の人物は首を縦に振った。

「誰に似たんだか気になるがの……しかしお前、本当に行くつもりなのか？」

今度は仮面が聞く。テルは当然のように返した。

「当たり前えーだろ」

テルはさらに続ける。

「俺がこうしている間にもアイツは……伊澄はまた抱え込んじゃって居るかもしれねえ、無茶するかもしれねえ。俺はよお、この手で救える人間が目の前にいるなら手を差し出さずにはいられねえんだよ……」

「ふーむ。お人よしといふかなんというか……」

仮面は少し考えてフツと笑った。

「分かった。ならお前に良いものくれてやる。この鷲ノ宮 銀華からの贈り物じゃ」

そういつて銀華と名乗る人物は袖から一本の得物を渡される。黒い鞆に金色の鍔。まぎれもない真剣のものだった。

「またパチモンとかじゃねーよな?」

一瞬、折られた撃鉄の件もあり、こう言ったものには少しばかり抵抗のあるテル。銀華は少しばかり唸って説明。

「これは紛れもなく鷲ノ宮の霊剣。名は無いが得体のしれない連中と戦うには普通の刀じゃ勝てんよ」

取り敢えず分かったことはこの刀は高性能ということだ。

「やっぱり昨日俺らが襲われた奴が絡んでるのか?」

テルの問いに、銀華は小さく笑う。

「恐らくはじゃがな。 気を感じてはおるがワシも伊澄より霊力があるわけではないのじゃからの」

腕を組んだまま言い放つと

「取り敢えず、かわいい孫娘を頼んだぞ」

そう言い残して去っていった。

最後一人になったテルは渡された刀を持ってひとり呟く。今までのようなただの鉄の塊とは違い、ずっしりとした重みが伝わる。

「任せろ」

決意を秘め、テルは玄関へと向かった。上半身は包帯だけ、下半身は執事服のものがまず上をどうするか、と考えていた時、玄関に自分の執事服が置かれていることが分かった。

「……」

そしてその横に添えるように置手紙と傘が一通。

書かれていた内容はこうだった。

——アホテルへ。一応ウチのお気に入りの傘や、壊したら承知しないで!!

「……参ったな」

その手紙を握りつぶすと傘を広げて雨の道を歩き出す。そして

心の中でこう呟くのだ。

(バカな女・・・)

「・・・」

鷺ノ宮家の別室の窓から咲夜は、雨の中を傘をさして歩くテルの姿を眺めていた。

「マリアさんの言うとおりであったわ・・・」

『でもテル君は無茶してでも仕事に戻ると思うんですが、その時はテル君の意地なんで止めないでやってください』

これがマリアからの電話の続き。ここまでする人間だったのだろうか。ここまで片意地を通して命をかけてくものだろうか。

多分それは違うだろう。意地もあるだろうが、これが彼の、善立テルが決めたルールなのだ。

咲夜から言わせればここまで面倒くさい男だろう。

(だけど、伊澄さんが気になってしまうのも分かる気がするなあ・・・でもホンマに)

そして心の中で細めながらテルを眺めて呟く。

(バカな男や・・・)

○

「ここは・・・どこだ?」

場所は変わり、ここは薄暗い建物の中。ソファーには誘拐されたナギは目を覚ました。誘拐されたというのに手足にはロープは結ばれておらず、体の自由は利いていた。

天井に穴が開いており、そこから水が降っていたので、外が雨だと言うのが分かった。

「くそう・・・幸子に騙された」

自分のこの状況を見て、悔しそうにあざ笑う幸子の姿が脳裏に浮かぶ。そして横たわっていた体を起こした時、一人の男が現れる。

「ん? なんだ、起きたのか」

そう言う男はナギの近くに寄るが、ナギはその顔を見て絶句した。まずは顔である。特徴的な三白眼作り出す目つきの悪さがどう見てもヤンキー、ヤクザをイメージさせる。なんだかいつも機嫌が悪そうなの。というのを一目で分からせる。

(や、ヤバイ・・・めっちゃくちや怖いんだけど！ あれ明らかに極悪人ではないのか?)

「なんだよ。人を化け物みたいに・・・」

と彼が一步近づくと共に

ズリ・・・

ナギが一步横にずれる。彼から距離を置くように。

「・・・」

スツ・・・

一步。

「・・・」

真横にまた一步。

「・・・」

ナギが冷や汗を浮かべながら男の方を見る。誘拐とかには慣れていたので、そういった強面にも慣れてるのだが今回はいかんせん。普通の不良とはまた違うというイメージがあるので、ほんとに食われるのではないかと思っていた。

「・・・」

しかし、意外なことに男の方はガクツと膝をついてorzしていた。

「な、なんだよ・・・」

ホントにどうしたとナギが恐る恐る尋ねて、男が顔を上げる。表情は少しばかり沈んでいた。

「なんだってお前ら・・・顔で人を判断するんだよ」

「はっ!?!」

「俺だってヤクザでも不良でもないんだぞ!! 窃盗なんてこのかた、

ましてや煙草だってやってねえのによ!!」

「でも誘拐はするんだな」

「うっ!!」

シャウトする男にナギが冷やややかなツツコミを入れる。痛いところを突かれたらしい。

「だ、だけど俺は優しい! 誘拐犯だったらお前を縛ったりして動かさせないでいるだろうからな! それをしてない、毛布までかけてある! うん、俺は優しい!!」

「まあ確かに、銃とかロープを使わないでいたのは私に対する礼儀だと受け取る。いままでの奴らに以上になかなか気の利いた奴だ。そこは評価してやる」

「だろ? だろ?」

ナギが腕を組みながら言うのと、途端に男の口調が明るくなる。しかしナギは続けて言い放った。

「だが誘拐は誘拐だ」

「ノオオオオオオオオオウ!!!」

男は頭を抱えて叫んだ。

「それにお前は人質に対する礼儀がまだなつとらん。取り敢えず紅

茶だ紅茶、紅茶を買ってこい」

「な、今度はオレをパシリに使う気か!」

「それができなきや私はお前を一生誘拐犯と言いつけるぞ? それでもいいのか・・・」

薄ら笑いを浮かべると男は顔をしかめた。そして仕方がないといった感じで出口へと向かう。

「分かったよ。紅茶だな? 紅茶をご所望してるんだな?」

「ああそうだ。ていうかここはどこだ?」

辺りを見回しながらナギ聞くと、男は普通に返す。

「ここは廃ビルだ。あまり人目に付くことがなさそうだからここを選んできた」

「うん、分かった。とりあえず行け、犬」

「ぐほっ・・・お前、一応人質だろうに・・・あと俺は木原竜児（きはらりゆうじ）という名前が・・・」

そう言い放つてもナギは受け流すように一言。

「そうか、行け木原犬」

「だあああああ!!」

耐え切れなかったか、木原は叫びながら走っていった。

(暇だな・・・寝るか)

特にすることもなくなつたナギはまたしても夢の中へ・・・とも行かなかつた。

「コラ、買ってきたぞ」

「げ！ 早ッ!？」

ちようど目を閉じたと思つたときに木原の声が聞こえた。思わず飛び上がってしまったナギである。 思わ

「ホレ」

ポイツとその缶を投げ渡す木原。 ナギは納得がいかない様な顔をしていたがまあ仕方ないといった感じで缶を開ける。

「まあ迅速な動きで主の要望にこたえられるとは大したものだ。 その従順さ、まさに犬といわざるを得んな」

「結局オレは犬のままだったのか!？」

ずっこけながら突っ込む木原。 この光景を見る限り、とても誘拐の現場だとは思えない。

「ん？ なんて片方だけ手袋をしているんだ？」

ナギが気になつたのは木原の左手。 真っ黒な手袋を片腕で摩りながらちよつとばかり間を置いて答えた。

「ん、まあちよつと怪我してんだよ」

「あゝ」

木原の言葉にナギ頭に手をやって少しだけ悟つたような顔で、哀れみを含めた視線を木原に送った。

「お前は犬だけではなく、厨二病の称号も手にしているのか」

「ぶふっ!!」

ナギの素っ気無い一言に木原は吹き出してしまう。 さらに大きなダメージ。

「まあ厨二病は一時のアレだ。 時間が全てを解決させてくれる。 だからその・・・頑張れ」

「いや、なんで両手合わせてんだよ!? 明らかに『ご愁傷様』って事だろうが!! あとその哀れみに満ちた視線を送るのやめろ!!」

もはや泣きそうな木原は涙目になりながら突っ込んだ。

「いやマジでどうでもいいいけどさあ、お前が買ってきた飲み物、紅茶じゃなくてコーヒーなんだけど・・・」

「しよがないだろ? 紅茶なかったんだよ」

「ばあああああかものおおおおお!!!」

「おう!?!」

木原のその一言にナギは激昂した。その迫力には、思わず身を引いてしまうほどにだ。

そんな木原を睨みながらナギは続ける。

「コーヒーを選ぶにしても味が濃すぎる! 私がコーヒーを飲むときはカフェラテだ! お前はブラツクの飲めない主人に、衆目の前でたっぷりのミルクとお砂糖をいれるという屈辱を与えようというのか!!」

ブンツとその手にあるコーヒー缶を投げた。その缶に飛びつくように木原が缶に向かってダイブする。

ズザザザーッと床をすべるが、コーヒー缶は無事だった。

「おまつ、勿体無いだろう!! しかも人質の癖に犯人にダメ出しするな!!」

ストレスが頂点に達したか、木原が抑えていた感情を叫びにらせて不満をぶつける。しかし、ナギは平然と腕を組みながら答えた。

「私は自分を誘拐した全ての誘拐犯にダメ出しをしている」

「なんて嫌な人質なんだ!!」

まさしく誘拐犯殺しの落ち着きである。例え銃を突きつけられなくてもナギは動じないだろう。ある意味迷惑な人質である。財布の中が磨り減っていくことが心配な木原だった。

「まあ取り敢えず本命が来るまで待ってろよ。お前はアイツを誘き出すために誘拐したんだからな・・・おっと誰か来たようだ」

それは背後に感じた殺気に近い物が会話を中断させた。木原がくるっと振り返ると出口付近に一人の少年の姿が目に入った。ナギ

もそれを見て、笑顔になる。

最初に木原がその少年に聞いた。

「一応聞いておくけど、何モンだ？」

「執事ですが・・・お嬢様は大丈夫ですか？」

端と返して今度は執事、ハヤテが聞く。木原はナギを指差して一言。

「この通りで」

「どうも・・・ではこちらに返していただけませんか？」

鋭い目つきのハヤテが木原を睨む。木原は少しだけたじろくと、口笛を一瞬だけ鳴らした。

「怖い怖い。 だけど簡単に返す訳にも・・・いかねえ」

「ハヤテえ、もう思いつきりやつちやつてもいいぞー。 手加減はいらんからなあー」

間延びするような声でナギが言う。その言葉にハヤテも頷いた。

「そうですね、その『目つきの悪い』凶悪犯から早く離れてもらいましょう！」

「・・・」

その言葉に、木原の眉間がピクツと寄った。

「お前・・・ソレ俺の顔を見て判断したなあ・・・」

「え？」

「そうやってお前は第一印象で決めてしまうのか。 いいよいいよ、俺はどうせ目つき悪いさ、俺は光を求めちゃいけないんだ・・・どうせ俺なんか」

「どこの地獄兄弟だ」

ナギ後方で突っ込むが木原の鬱モードは簡単に終わりそうにない。だからんと両腕をぶら下げて、顔は俯かせたその姿は不気味だ。

「イテエ思いをしても、俺は責任持たねーぞ」

ゆったりとした動作で構える。 ナイフを使うわけでもなければ、銃を使うわけでもない。

ごく一般的な格闘家の構えだ。 簡単に言わせれば、ボクサーのような構えだといったほうが早いだろう。

「さあ、ラウンド1と行こうぜえ!!」

今まさに、執事と異質の格闘家の闘いが始まる。

「……………」

その光景を黒羽はビルの屋上から無機質な瞳で見下ろしていた。

第44話く昨日の酸素は今日の敵く

弱まりそうのない雨道を、善立 テルは歩いていた。 決意と武器を渡された彼が向かうのはナギが誘拐されたとされるその場所。

その場所は情報屋のバルトが大いに役に立ってくれた。 さすがもとスパイというべきか、短時間で情報を集めてくれたため、粗方の場所を特定することに成功している。

あとはその場所に向かうだけなのだが・・・

「あく！ テルくんだ！ おーい！」

突如、背後からの声にテルは振り向く。 そこには傘をさした見知った女子がいた。

「なんだ、ジミーか」

「じ、ジミーとはなにかな？ 歩だよ歩!? まさかこの短期間で私の名前を忘れたとか言うんじゃないよね!？」

「冗談冗談、 んで？ お前は何をしてんの？」

その言葉に歩はハッ！ と気づくとポケットから何かを取り出す。

「実は今日はたい焼きが安い日だったんだよ！ 場所は隣町だけどそこは気力でカバーした」

そういいながら歩はたい焼きを食べ始める。 物凄い笑顔で。 テ

ルはそれを見ると大きいため息をついた。

「うん、君は平和だなジミー君。 君はまるで別の世界にいる人間のようだ・・・んじゃ」

「ま、待ってくれないかな!？」

「ぐえっ！」

去ろうとしたテルの襟首を歩ががっしりと掴む。 そのせいで一瞬呼吸が止まったテルである。

「とても気になる台詞を吐いていくね？ どうしてなのかな?」

「どうにもこうにも、お前は世界をもものともしない最強の普通の女子高生だ。 と思ったほどだ」

「さ、最強!?! でも普通なんだよね? でも最強なんだよね? アレ

!?! 最強で普通で普通で最強で・・・アレ!?!」

「うん、そうやって考えていてくれジミー」

今度こそその場を去ろうとしたテルだが・・・

「ハイ、ストップ!!」

ガシツと首を掴まれてしまった。

「だからなんだっつーの!!」

そう言うテルに対して、歩は差し出したのはたい焼きだ。

「はいこれ」

「あん?」

「なにやらお困りのようだから素直に上げようかと・・・」

その一個のたい焼きを見つめると、黙ってテルはそれを受け取る。

そして一言。

「別にもらったからってお前の家来にはならないぞ。あと、これじゃ足りないからもう一個」

「別に桃太郎の話を意識してないよ!? あと、さりげなくもう一個追加しないでほしいかな!」

仕方なく、歩がもう一個渡そうと近寄った時。

「あれ?」

「む?」

二人同時に感じたことである。歩がつまずいてしまってテルに向かって倒れこんできた。

ここからの一連の内容は、わずか一秒あるかないかの世界で行われたものである。

(アレ? なぜか前のめりに倒れちゃってるよ私・・・アレ? でもこのままだと計算すれば確実にテル君にもたれかかるようになってしまったかな?)

徐々に近づいていく二人の距離。テルもぼーっとしてるせいかな、反応できないでいる。

(でも避けられちゃったら私が地面に倒れることになるよね? それは嫌だけど出来ればそういうのはハヤテくんを受け止めて貰いた

い………だからツツ!!)

そして彼女の決断した行動はこれだ!!

「だっ………」

前に倒れこむと同時につまずいている足とは逆の足を前にだして地面を踏ん張る。そして……

「シャアーーーーーッツ!!」

ズドツ! と勢いを利用したその右ストレートはテルの腹部打にち上げる形で見事直撃した。

「ぶっ………」

最初はまるで神経が通っていないような平然としていたテルだが、次第にじわりと効いてきたらしく……

「ギヤアアアアアア!!」

カツ! と目を見開いて血を吐き出した。

「うわあああ!! テル君が血を吐き出したよおお!!?」

突如のテルの吐血に歩は慌てる。しかしテルは手を翳して制した。

「お、お前違うからな? これ……な? 朝飲んできたトマトジュースだ……てゴバアツ!!」

平然を装って苦笑いでアピールするがまたしても吐血。

「のわあああああ! 私の拳が致命傷に!? 私ボクサーデビューできるかも!?!」

「気にするところそこかよオオオ!? お前がデビューする前にオレが先に天国デビューするわツツ!」

重症に重傷を重ねられ、もはやテルは戦う前からボロボロだった。

「……じゃあそれはトマトジュースだってことでもいいんだよね?」

「ああ、そうだ……そしてお前は家へ帰る途中で、お前は『何も見なかった』!!」

ボロボロの体で歩を指差すテル。歩は敬礼するように手を構えた。

「りよ、了解であります!!」

とお互いに了解した所で歩は走ってその場を去っていく。テル

は空を仰いで叫んだ。

「オデノカラダハボドボドダァー!!!」

なぜにここでオンドウル語なのか、あまり突っ込まないでいただきたい。そして、テルはポケットから携帯を取り出す。めんどくさそうにボタンを押していき、電話をかけた。

「おう、俺だ。ちよつとお前、俺の危機を助けるために手伝ってくんね?」

○

そして場所は変わって廃ビル内。その場所ではハヤテと木原が対峙している。その場所で激しい戦いが始まろうとしていた・・・ハズだった。

「あ、ちよつと待って」

「へ?」

突如の待ったにキョトンとするハヤテ。相手の木原が片手を翳していたのだ。

「コーヒーが残ってんだ。これ飲ませて・・・」

「は、はあ・・・」

出鼻をくじかれ、取り敢えず木原が飲み終えるのを待つ。片手で持っていたコーヒーを思いっきり飲み尽くす。

「ぶはあ・・・カフェインはいいな」

コーヒーのうまさに肩を震わせながら木原が笑みを浮かべながら立ち尽くす。

「コイツはバカなのか?」

「緊張感の欠片もありませんね・・・」

ナギとハヤテがグダグダ感を否めない中、木原がふうとため息をついて続ける。

「誰かさんが投げたコーヒーだ。どうしようとオレの勝手、しかし地球にエコを心がけていないのはいただけない」

「なんか地球環境規模で語り始めたぞ」

「実はイイ人ですかね？」

なかなか奇妙な光景だな・・・とハヤテが考えていた瞬間。

ヒュン！

「え・・・？」

ハヤテの顔面に何か投げつけられる。先ほどの空き缶だ。

それを掴もうとした時であった。

「ハヤテ！」

ナギの声が飛ぶ。だがそれに気づくにはあまりにも遅すぎた。

既に真横には大きく腕を振るう木原の姿があった。

「シュッ!!」

まるでボクサーのようにステップを利かせた右ブローがハヤテの腹部に炸裂した。

「がはっ！」

身を貫いたような激痛が腹部を襲う。木原というと打ち込んだ瞬間にバックステップでハヤテとの距離をとる。この一連の流れはやはりボクサーだ。

「おまえ！ 卑怯だぞ!!」

ナギが後ろで抗議の声。しかし木原は頭にクエスチョンマークを浮かべて返した。

「バカめ、これはスポーツじゃねえんだ。ルールなし、助けなしの喧嘩よ」

行つた行為にまるで悪びれる様子もなく、木原は構えてハヤテに突っ込む。

「大丈夫ですよお嬢様・・・」

腹部の痛みを押さえながらハヤテが構えた。先ほどとは全く違う真剣な表情だ。

「三千院家の執事は・・・」

「ヒュッ！」

左右に揺れながら迫る木原の右拳がハヤテの顔面に迫ってきたが

その右腕の軌道をずらすように右足の蹴り。

軌道を見事にずらされた拳は当たることなく空を切る。

「この程度では負けませんッツ!!」

ハヤテは今度は左足で木原の顔面に突っ張るようなキックを打ち込んだ。

「ぐっ……!!」

当たった場所が顔だったこともあったか、スピードも利いてた分、反動で吹っ飛んだ。

(や、やはりハヤテはカッコイイな……)

ナギにとつて今更分かったことではないが、とナギは感嘆する。

蹴りを決めた際にナギに向けた笑顔にまたナギは胸を打たれたのだ。

「いたたたた……」

地面を転がっていた木原がムクリと体を起こした。 起きたと思うと、突然笑い出す。

「いいね、いいねいいね! 嫌いじゃねエゼエそういうのさあ!!」

再び構える木原。 しかし、ハヤテは疑問を浮かべた。

「さつきと違う……だと」

その構えは先ほどと大差ないがハヤテには分かる。 ボクサーの握りではない、握っていた手は軽く開かれている。 まるで柔道の構えだ。

「ほっ」

と、木原が素早くハヤテの懐に接近。 そのままハヤテを掴もうとしてきた。

「くっ!!」

ハヤテもただやられるだけでは無く、掴みかかる腕を先ほどと同じように足で裁こうとしたが。

「甘エツツ!!」

パシンッ!

と右手と左手で受け流され、逆に隙を作ってしまった。

力強い握力で執事服の袖と胸倉を掴まれる。

(ま……マズイッ!!)

この態勢にハヤテはどうしようもない危険を察知する。何とかして振りほどこうとするが、ほどけない。

「どっせええええい!!」

ぶん。と木原が掴んでいた状態から素早く切り返し、ハヤテを投げた。見事な一本背負いである。

「がはっ!!」

ハヤテの体が地面に打ち付けられる。下はコンクリだ。受け身が取れない。受けるダメージは必然と高い。

だがハヤテも人外を超えた防御力を持っている。ダメージが高くて一発KOとまではいかなかった。

「URYYYYYYYYY!!」

しかし、木原はまったく動揺することなく某吸血鬼のような雄たけびを上げながら追い打ちを仕掛ける。

今度は空中へ飛び、体をグルグル回転させてハヤテの顔面向けて踵落とし。

これはマズイと思ったか、ハヤテは床を転がってそれを回避。勢いついた踵落としはハヤテに当たることなく地面に打ち込まれた。

「チツ・・・」

外れたことに小さく舌打ちして素早く木原が距離をとる。

危機的回避をみせたハヤテ。しかし追い詰められていることには変わらない。

(まるで掴みようなない攻撃方法、隙がない戦法だ。色んなジャンルの格闘が混ざってるツツ!!)

縦横無尽に攻撃方法を変え、隙を作らないような距離の作り方。先ほどの踵落としの動きもまるで中国のカンフーにも使われてそうだ。

相手はおそらく、多くの格闘技を習っているのだろう。しかも全てのレベルが高い。

「なかなか頑丈な奴じゃねえーか。アンタは鉄でも出来てるんですかー?」

敵である木原もここまで攻めながらもハヤテのしぶとさに疑問を抱いていた。

最初の一撃のパンチもその一発で終わらせるつもりだった。しかし相手は怯むどころか見事な反撃を与えてきた。

「どうなのよ・・・実際?」

その真実を問うや否やハヤテは胸を張って言い放った。

「鍛えてますから・・・」

まるで平成ライダーの一人のようなセリフを放つハヤテ。そして今度はハヤテが仕掛ける。

「行きますよ!!」

タンツとステップを踏みこみ、目にもとまらぬスピードで接近した。

(あれ? 消えた・・・)

率直な感想。木原も仰天していた。小さなステップを踏んだ

瞬間、ハヤテの姿が消えたのだ。

これがハヤテの絶対的強みともいえるスキル・・・それは速さ。

木原が瞬きをした瞬間、眼前にハヤテが現れる。しかも宙に浮いたまままだ。

「これが綾崎家の奥義・・・」

「へ?」

ハヤテは両足で木原の首部分をしっかりとホールド。木原もこの行動にまずいものを感じた。しかし時すでに遅し、脱出不可能。

「木の葉落としイイイイーーーーーッッ!!」

ホールドした状態からハヤテが体全体を捻る。木原も危険を察知し、ハヤテの動きに合わせて体を捻られる方向へ浮かす。そうした結果、木原は顔面から地面に激突した。

「ふう・・・」

素早く距離をとったハヤテが安堵の息をつく。

「ふう・・・じゃない。なんだ木の葉落として・・・」

「僕の考えた必殺技です。なかなかの威力でしょ?」

笑顔で答えるハヤテは親指まで立てて見せつける。

「いやいや、アレ木の葉落としじゃないから関係ないから・・・アレただのプロレスと大差ないから」

ナギの冷静なツツコミにハヤテは笑うばかりである。

「オオオ・・・首と顔面が・・・」

埋まっていた顔を持ち上げると、木原は顔についているその汚れを払った。これにはハヤテやナギも驚いていた。

「まさか・・・アレをくらっても倒れないとは・・・」

「アイツこそ鉄でできてるんじゃないか？」

実際ハヤテが仕掛けた技、木の葉落とし（ハヤテ命名）の時に咄嗟の判断で木原は体をハヤテが捻る方向に合わせて体を浮かせていた。

これが功を奏し、顔面だけのダメージで済んだのである。

もし木原がタイミングを合わせて体を捻らなければ、首はへし折られていただろう。

「イタタタ・・・顔に似合わず、えげつない技使うのねホント・・・」
首をさすりながら木原が呟く。

「だったら俺も似たような技を使ってやろうじゃねえの・・・」

木原がそう言い終えると、木原は立ち上がって構える動作に入った。
た。

「・・・？」

ハヤテが目を疑った。構えに入ったのはいいだろう。しかし、

木原の構え方が妙だ。

まるで体全体から力を感じないかのような状態。両手はだらんとして、顔も若干力が抜けている。

（な、なんだ？）

ハヤテは相手の謎の行動に緊張感を感じていた。

「問題・・・」

木原が突然呟く。

「この世で人体にとって最も有毒なガスはなんだと思う？」
「え？」

刹那。一瞬の間に木原がハヤテの顔面に蹴り上げた砂をぶつけてくる。ハヤテは防御するがその時に巻き上がった砂煙で視界を失ってしまった。そしてこれが大きな隙。ばちん。

と、ハヤテの口と鼻を覆うように木原の平手打ちが決まる。これがなんなんだと思っていたナギだが、次の瞬間にハヤテの体が大きく揺れるのを見て目を疑った。

「……………」

ハヤテは視界が定まらないのか、足元が覚束無い。そして大きく地面に…………倒れた。

大の字に倒れたハヤテを見下ろして、木原が呟く。

「はい、時間切れの不正解だ。ついでに答え合わせを言うとな……………」

肩を鳴らして、少しばかり笑みを浮かべながら一言。

「答えは『酸素』…………分かった時にはもう遅い……………」

第45話く宇宙一馬鹿な執事く

「酸素……だと?」

「そうだ。普通に俺達の周りにある酸素だ」

ナギ達のいる廃ビルでは異様な光景が広がっていた。

大の字に倒れているのは紛れもなくハヤテだ。トラックに跳ねられても、洗剤入り料理を食べても無事だったハヤテがだ。

「お、おい! ハヤテ、しっかりしろ!!」

今まで見たことのないハヤテの姿にナギは驚くばかりだ。

「酸素は俺達が生きていくには必要不可欠……しかし、使い方次第では……人体にこれほど有毒ツツ」

木原が勝ち誇った笑みを浮かべた。

「二つだけ豆知識を教えよう……」

——人間の体はとても不思議な物であり、酸素を取り込まないと生きていけない。

しかし大気中にある酸素濃度が6パーセントを下回った時、コレを吸い込んだ人間は意識を失うツツ。

「俺はこの手のひらに濃度6パーセント以下の酸素を集め、コイツに吸わせた……」

大の字に倒れているハヤテを見下ろしながら木原は続ける。

「まともに食らったんだ。半日は起き上がってこれねえ……」

「だ、だが掌で作った大気を別の大気と混ぜさせないように相手に吸わせるなんて……」

頭のいいナギ。その点に対してはすぐに疑問が上がった。

たとえ掌で毒の大気を作ったとしても、その大気に大気中の酸素が混ざってしまつては意味がないのだ。

不純物を混ぜずに相手に与える技にしてはとてもリスクが高い。

「だが俺は克服した」

ナギの疑問に打ち消すように木原が答えた。

「それでこそ、自身を発狂寸前までに追い込むほどの修行だったがな……」

その右手を見つめる木原。 技ひとつ磨くのに対しても、武人は自身を発狂寸前に、自分の気がくるつてしまうほどまでに荒行に励むという。

彼も若いとは言えそれを体験したのだろう。

「しかしアレだな、毒が『酸素だ』と言つておきながらその実態はただの『酸欠』なんだな……」

「そこには突つ込まないでいただきたいね……」

ナギの言葉に咳払いをする木原。

「だけど、動けない相手をどうするか、ここ重要」

途端に木原の顔に笑みが宿った。

「動けない相手を生かすも殺すも俺しだいだ……」

「ま、待て!!」

ハヤテに近づこうとした木原の前にナギが両手を広げて立ちはだかる。

「へっ……なんのつもりだよ?」

「主は執事の身を守るといふ義務がある! お前にハヤテは傷つけさせない!!」

それを見た木原は

「……ハア!?!」

頭を掻きむしやりながら声を上げた。

「いや、なにも俺は——」

木原が何かを言おうとした時だった。

「ナギ! 下がってッツ!!」

突如、ナギの耳に聞きなれた声が聞こえた。

その人物は木原の真横に現れると横腹目がけて長物一閃。
バキツと音を立てて木原は地面を転がった。

「怪我はなかった？ナギ」

「ひ、ヒナギクなのか？」

そこにいたのは紛れもない白皇の生徒会長、桂 ヒナギクだった。

○

一方で屋上にただ一人だけ立ち尽くしている人物が一人。

背は160あるぐらいか、黒衣のローブに身を包んで黒い長髪の少女、黒羽である。

雨を気にしないのか、黒羽は傘をさしていなかった。先ほどから雨も弱くなっているのですけど必要でもないのだが。

「.....」

特にすることも無く、黒羽はその無機質な瞳で虚空を見つめ続ける。下で何やら新しい人が来たようだが黒羽が加勢に行くようなことはなさそうだ。

「見つけましたよ.....」

黒羽の後ろで、なにやら聞いたことのあるような声がする。

ふと、振り返るとそこには番傘をさした伊澄がいた。

番傘をたたむと袖から札を構える。

ここでもまた一つの激闘が始まるのだ。

○

「ヒナギクはなんでいるのだ？」

場所は戻って廃ビル内。ナギが突然現れたヒナギクに聞いた。

ヒナギクは木刀正宗を肩に担いで答える。

「何でって、だいたい事情を聴いたから助けにきたのよ」

「お、お前・・・単身木刀一本で乗り込んでくるとか、もうお前戦国無双の世界でも行け」

「ちよ、それどういう意味!？」

ナギに意味ありげに言われたヒナギクは少しばかり口調を強めた

声を出す。

「ちよつとちよつと・・・なんなんですか?」

床に伏せていた木原が立ち上がって笑ったような声を出した。

そしてヒナギクを見て一言。

「スケ番じゃねーか!!」

カチン。 出会って数秒、ヒナギクの中で何かが切れた。

「あ?」

「のわああああ!! 落ち着けヒナギク!! お、おいお前、前言撤回しろオオオ!!」

「だってお前、セーラー服に木刀って、やっくんスタイルにもほどがあるだろ!!」

「うわああああ!!!」

頭に怒りマークを浮かべたヒナギクを見てナギは必死になって木原に先ほどの言葉を撤回するように促す。もう遅いのだが。

「ねえナギ・・・あの人ってナギを誘拐した人なのかしら・・・」

「あ、ああそうだが・・・」

顔を俯かせたヒナギクの低音ボイスがナギの体を震わせる。なんか後ろから鬼っぽい見えるし、体から負のオーラ見えるよ、なにこの人、コワイ。

「本気でやってもいいのかしら? さっきは峰で吹っ飛ばしたけど、今度は刃の部分を使うわよ」

「殺傷沙汰は勘弁してください、マジで」

あまりの怖さに敬語になつていたナギである。

「てか、なんでそんなに怒ってんだ?」

ようやくヒナギクの負のオーラに気付いたのか、木原が額に汗を浮かべる。

それにヒナギクは笑顔で答えた。

「あら、味の利いた嫌がらせするわね? 無自覚なのかしら? それともワザとなのかしら?」

「待て待てヒナギク! そこで手を出したら終わりだぞ! ストップ・ザ・イジメ!」

「うん、それ無理♪ テルくんとハヤテくん以上にボコボコにしたい気分だから」

ぶんつと正宗をその場で構えて一言。

「というワケでそこになおれエエエー！ ツツツ!!」

怒声とともにヒナギクが正宗を構えて物凄いスピードで木原に斬りかかる。

「ちよつと待て！ 俺は女と戦う気はこれっぽちもねえ!!」

「女だからって舐めないでよね!!」

攻撃意識がないように木原はアピールするがそれは逆にヒナギクを逆撫でする結果になってしまう。

怒りながらも正宗が描く軌跡はしつかりと真つ直ぐでブレがない。

しかし、木原もただでやられる男ではなく、その太刀筋を読んだうえでしつかりと避ける。

(あ、当たらないツツ!?)

「ホント勘弁してくれ！ お前は一体何なんだよ!？」

避けながらそう言う木原に対してヒナギクはさらに踏み込んで答えた。

「白皇学院の生徒会長・・・桂 ヒナギクよ!!」

バシンツと正宗の峰の部分で右腕を捉える。 かすつた程度だが、

木原の動きを一瞬止めるには十分だった。

(もらった!!)

一瞬の隙を突いてヒナギクが正宗を振りかざす。 木原はしまったという顔で退避を試みるがもう間に合いそうにない。

峰の部分を脳天目がけて振り下ろす。 木原はなりふり構っていられず左腕で翳した。

次の瞬間。

ガキンツ!!

「ツツツ!？」

ヒナギクは耳を疑った。 それもそうだろう、まさか相手の腕から金属音の音がするとは思わなかったからだ。

ヒナギク自身も正宗の力は十分発揮しており、ロボットだって関係ないぐらいスクラップにしてしまう戦闘力を有する。

正宗も鉄をも切り裂く切れ味はもっているので相当の名刀だということとは自覚していた。峰で殴っても腕の一本は軽く折れるだろうと思っただけだが……

「あぶねっ!!」

「あ、しまった!!」

正宗で叩いた違和感に気を取られてヒナギクは木原に距離を取らせるといふ行動を許してしまった。

離れた木原は左腕を摩りながらつぶやく。

「こいつじゃなかったら折れてたな確実に……」

ヒナギクの一撃により、ボロボロになっていた手袋を木原は脱いだ。

「なっ……」

「あ、あなた……」

ナギとヒナギクが目を驚愕の表情で見る。その男の左腕を……その腕は普段の人間の皮膚の色をしておらず、黒い。いや最早人の腕ではないのだ。

「そ、義手なんだよ。俺の左腕」

左腕だけが機械の腕だから。

「よほどのことがない限りはへこみもしないし、錆びることはない……ちよつといいところを使った奴でさ」

左腕を摩りながら木原は言う。

「なんということだ……お前、人体錬成でも行つたのか？」

「ここでそのツツコミはどうかと思うわよナギ……」

呆れ顔でヒナギクが呟くが、木原が真剣な顔で答える。

「そう……持ってかれたのさ……」

「いや、わざわざ乗って答えなくても……」

ヒナギクも相手のおかしなボケに突っ込んでいく。どういふことだろうと、この人はホントに悪い人間なのかと疑問を抱いてしまうほどに。

「じゃあ、その恐い木刀は没収だな!!」

まるで不意を突くかのような切り替え。木原は姿勢を低くしたままヒナギクに接近。ヒナギクは正宗を構えて応戦。

避けるだけだった木原が今度は転じて攻めに。剣と拳の激しいぶつかり合いが始まる。

(ほとんど片腕でいなされてる・・・この人、武器を持った人との戦いに慣れてるツツ!!)

その見事なまでの対処法は、単純にヒナギクの剣戟一つ一つを鋼鉄の義手の部分で当てる、受ける、流す。という物だった。

しかし、ヒナギクなどの上級者になるとそう言った防御は繊細な動作、タイミングが必要になってくる。それを平然とやってのける木原にヒナギクはひとつの危険を感じた。

そしてついに。

「とったツ!!」

「くツ!!」

その左手に正宗が掴まれてしまう。そして左手で刀身を捻った。

「し、しまった・・・!!」

ヒナギクが一瞬の痛みに顔をしかめる。木原が正宗を捻ったのは簡単に言えばヒナギクの間接を痛い方向に捻って手を離させるのだ。

「よし、没収完了」

目的の物を手にしたかを確認すると、木原は正宗を遠くへ投げた。暗闇に投げられた正宗はカランカランと床をすべる様に転がる。

「あ、あなた・・・一体」

この鮮やかな敵の武器の奪い方。ヒナギクは疑問を抱かずには居られない。この男の正体を・・・

「俺は木原 竜児・・・伊達に世界最強を目指してはいないさ」

笑みを浮かべながら木原がそう答える。そして続けざまにこう言ったのだ。

「・・・まだやるかい？」

武器を奪い、明らかに戦力は逆転した。こうする事で相手を無力

るように起きた。

もちろんソレを見て木原くん青ざめながら絶叫。

「エエエー………ツツ!？」

ムンクのように顔を両手で押し合ってこの世のものとは思えない表情だ。

「ど、どうしてヒナギクさんがここに?」

眠りから覚めたハヤテが当然のようにヒナギクに聞くがヒナギクは前を向きながら答える。

「今はソレを議論するよりも、目の前の事件を解決することが先よハヤテ君」

ヒナギクの言葉に、まだふらつく体を手で叩いて渴を入れる。それをを見て木原が聞いた。

「ありえない木刀を使う女に、半日は起きれない毒を喰らってもたったの数分で起きる執事……俺は夢でも見てるのか!？」

「いいえ、紛れもない現実よ」

「悲しいけど、これって現実なんですよね……」

「畜生、なんなんだお前ら! 一体何なんだよ!!」

木原が怒声を飛ばすとハヤテがキラんと光らせて呟いた。

「なんだかんだと聞かれたら……」

「いや今もやってるけどそのネタはどうかと……」

冷静沈着なナギのツツコミ。それに代わってこたえるようにヒナギクが笑顔で言った。

「んく簡単に言えば、『宇宙一バカな執事』の仲間の一味ってトコかしら?」

「え……それってまさか……」

宇宙一バカな執事という単語にハヤテが反応した。

○

場所は戻って屋上。ここでも激しい戦いが繰り広げられていた。黒羽と伊澄である。

闘いの構図は至ってシンプルだ。黒羽のあの伸縮自在の『黒い槍』を伊澄が結界で弾く。

そして伊澄が反撃に札を飛ばす。

ほぼ伊澄が攻撃をしているという点を除けば、あの神社での闘いと変わらない。

「……」

黒羽が黒い槍を伸ばす。伸びた槍は一直線に伊澄の元へ。

「くっ……!!」

対する伊澄は結界で対応。槍は見えない何かにぶつかって、拒絶されたかのように弾かれる。

実力拮抗……まさにそう思わせる戦いだが。

「はぁ……はぁ……!!」

如何せん、伊澄の体調はベストではない……いくら互角に戦えているといってもその体力の消耗の差が明らかであった。

「……」

荒い息を吐く伊澄に対して黒羽は汗ひとつ掻いていない状況。

この女の体力は無尽蔵か。

「……」

槍をいったん戻すと右手に黒い短剣を生やして伊澄に接近。遠距離から接近戦に切り替えたようだ。

「はっー!」

即座に札を構え、結果を展開。

ほぼ展開したと同時に短剣が衝突。

電気のような物が散り、短剣は弾かれた。

だがまだ油断してはいけない、そう神経を尖らせて結界をまだ解かない伊澄。

相手はまだそこにいるのだ。何かしてくるかもしれない。

案の定、それは的中する。

「やはり来ますか!!」

「……………」

冷徹な瞳で構えるはまたしても黒い短剣。

違うのは右と左の手にあるという事だ。

黒羽はタンッと勢いをつけて前に飛ぶとまるで独楽のような回転で伊澄の結界に突進。

「ぐっ……………これはー」

まるでチェンソーで木をガリガリと削られるような感覚。

それは疲労している伊澄にとってボディブローのように効いてくる。

やがて黒羽の独楽攻撃は勢いを失って止まってしまう。またしても直接ダメージを与えられなかったが。

「か、体が……………」

膝を落とし、洗い息をつく伊澄。

それを見れば効果は充分だった。

(もう視界がはつきりしない……………だけど負けたら……………)

何人も見える黒羽の姿が伊澄を追い詰める。黒羽は既に短剣を長剣へと変化させていた。

テルを刺したあの長剣だ。

(…悔しい、誰も護れないまま消えるなんて……………)

長剣を床に引き吊りながら迫る黒羽に対して、伊澄は悔しさと無力さでいっぱいだった。

このまま自分は無抵抗のまま消えるのだ……そう思っていた。

「……………」

振り上げていた長剣を黒羽がピタリと動きを止めていた。

その視線も、伊澄には向いていない。

遙かその後ろ……

「よお………」

昇降口から一人の男の影。

腰には一本の刀を携えた男はその姿を現した。

そしてその男の現れと共に、曇天の空の隙間から光が差し込んだ。

「ラウンド2開始だぜ……お嬢さん」

へらつと笑ったその男は伊澄がよく知る男。

善立 テル、意地と面子と覚悟の為、今ここに推参！

第46話く男のロマンに口出し無用く

廃ビルの屋上に彼は現れた。

以前、自身の刃によって貫かれた男。

致命傷の筈。助かったとしても動ける体ではない筈だ。

そこまでしてここへやって来た理由は？

分からない。しかし、今の彼は何故か輝いて見える。

黒く塗りつぶすそうにもそれ拒もうと更に輝こうとする・・・

それは例えるなら・・・銀色。

第46話く男のロマンに口出し無用く

「どうして・・・来たのですか」

伊澄が小さく呟く。これは最早自分だけの戦いだと思っていたのに・・・

「私のせいだから・・・誰も巻き込みたくなかったのに・・・」

テルが傷ついてしまったのは自分が弱いから。やはり自分は甘えていたのかもしれない、その現状に・・・仲間ができるということ。はこんなにも辛いことだとは思わなかった。

「簡単な話だろバカめ」

ゆっくりと歩いてくるテルは伊澄の近くまで来てこう言った。

「仲間だからだ」

視線は黒羽に向けたままテルは続けた。

「誰かが怪我したからって一人無茶をする大馬鹿野郎、それを止めるのが俺の役目だ」

「でも・・・！」

「それ以上言うな・・・何度だって言っつてやる。お前は一人じゃない」
その言葉に涙を流した。最初から一人と決め込んでいたのは自

分だ。

「ただどこに仲間と言ってくれる人がいる。

「もう休んでな。ここからは俺の一人舞台だ」

コクリと伊澄は頷く。そしてテルは伊澄を見ないまま続けた。

「後ねえ伊澄くん。テルさんはこの世で一番『負ける』という言葉が大の嫌いなんだよ」

カチャ。

その手に鞘を持ち、テルは鞘から刀をゆつくりと抜き放った。

その刀身、光を受けて輝く姿は何物に染まることのない美しい銀色。

「……」

何かを悟ったのか、黒羽も右手に黒い刃を展開させる。形は長

剣、テルを刺した武器だ。

お互いに武器を構えたということは、準備OKだということだ。

ここから先、二人にはあまり言葉というものは必要ないだろう。

全ては剣劇の中で語られるだろう。

誰しもが凶ったわけでもなく、ほぼ同時に二人が踏み込んだ。

二人の刃が同時に一太刀、それは体に触れられることなく互いの刃と激突した。

激しい火花を散らすほどの鏢迫り合い。全力でお互い押し合っているがギチギチという金属の音が響くだけだ。

(……！)

仕掛けたのはテルだ。鏢迫り合いの状態から刃を滑らして踏み込む。

近くなった距離で今度は黒羽の別攻撃。肩の部分から黒い槍を

出現、顔面目がけて放つ。

「チィッ！」

即座に鏢迫り合いを一步下がって解除し、迫ってきた黒い槍を『斬る』。

「……」

黒羽は槍を戻して斬られた部分を凝視した。　　バツサリと真つ黒な断面が見えるほどの切れ方。

この槍は弾かれることはあつたが、『斬られる』ということは今までなかった。

そういうのを斬ることができる刀なのだろう。　　そう黒羽は分析した。

そして繰り出す次の一手。

両肩から黒い槍を多数展開、一本の槍から二本の槍、どんどん数を増やしていく。

「数で決めようってかい・・・面白れえ！」

刀を握り、不敵に笑うテルは敢えてその突っ込んだ。

黒羽はその場で動かないまま狙いを見定めると、弾丸のように槍を放った。

だが・・・

テルは斬る。　　自分の道を阻むものを排除するように。

自身が進むのに必要な槍だけを斬る、もしくは受け流す。

「.....」

距離を近づかせているテルを見て黒羽は長剣をテルに向けて構える。

どうやらここまで計算だったようにその長剣を槍に変えてテル目がけて突き出した。

「ツツ!!」

気づいたテルはすぐさま真横にズレることにより二度目の串刺しの刑を回避。

そしてこの間を一気に縮める。

「.....」

すかさず黒羽が右手横に振るうと全ての槍がテルに追いかけるように迫ってきた。

「いいねいいね!!」

迫る槍を振り返ることなく、テルは黒羽に突っ込んでいく。　　そしてそのまま真上へジャンプ。

しかし、槍は飛んでいるテルにも容赦なく追撃。

これは大きな隙。と黒羽は思っただろう。

しかし信じられないことに、テルは黒羽の頭上を越えていく中で、その黒い槍を見事に捌き切っていた。

ストンツと低く着地するとともに振り向きざま一閃。

黒羽は左手に展開させた短剣でかろうじてガード。

再び金属音が鳴り響く。

(相変わらずの馬鹿力だぜ・・・!!)

テルとて加減してゐるわけがない。片手で刀を受け止めるといふその怪力ぶり、本当に人間なのかと疑ってしまうほどだ。

そんな疑問が浮かんだ瞬間。黒羽は右手に戻した長剣を真横に振るった。

危険を感じたテルが後ろへ下がりがりながら刀で受ける。刀が折れてしまうかという重い一撃に数メートルほど吹き飛んだ。

「へっ・・・」

ムクリと体を起こしたテルは刀を杖代わりにして立ち上がる。口からは血が出ていた。黒羽はそれを見ていて無表情を通し続けた。

「テル様・・・」

見守る伊澄も心配そうだ。それほどまでに相手の力は圧倒的である。しかし次の瞬間。

バシユ!

何かが噴出したような水の音に黒羽は自身の右手の違和感を覚える。右手を見ると。

「・・・」

手から血が出ていた。幸いそこまで深い傷というわけではない。

それを見たテルが一言。

「どうした・・・血が出てるぜ?」

「・・・」

再び武器を構えて素早く踏み込んでいく。テルは転がりながらそれを避けた。

「さて、盛り上げるために付いてきな！」

テルは起き上がるとすぐさま近くの下の階につながる穴の中に入ってその姿を隠した。

まるで誘っているのか・・・という行動。

「・・・」

しばし考えた黒羽は一瞬だけ伊澄を見る。

「え？」

戸惑った伊澄だったが黒羽は武器をしまうと穴の中に飛び込んでいった。

○

(ここからが本番だ・・・)

そう考えたテル。今は近くの壁に身を隠して敵が来るのをひたすら待つ。

わざわざ内部を選んだのは理由がある。まず暗さ。外が晴れているとはいえ、中は十分暗い。それはあの黒い槍でこちらを狙うことは難しいだろう。

そして残るはあの空中能力。敵に空が飛べる能力がある以上、狭いところに引き込んでソレを活かせなくするしかない。

(来たか・・・)

壁から少しだけ頭を出し、穴から黒羽が降りてきた。

結構な高さだが、問題ないかのようにストンツと着地。

「・・・」

辺りを見渡し、テルを探しながら取り敢えずといった感じで適当なところに槍を放つ。

テルの方から暗くてよく見えないが、響く轟音から察するに全く見当違いの場所に放たれていると考えて間違いはないそうだ。

黒羽はテルの位置が分かっている。

「全ての環境は使えるだけ使う・・・先生もよく言ったもんだぜ」

後はどう攻めるかというのを考えていたその時である。突如黒羽に変化が起こった。

(なんだ?)

テルがよく見ると、黒羽の手から何かを作り出していた。黒い物体が掌からどンドン溢れ出し一つの形を作り出す。

「……………」

出来上がったのはなんか漫画とかに出てきそうなレーダーだった。

簡単なイメージで言うと、サ○ゲツチュにでてくるピ○サルレーダーに酷似している。

(なんじゃありや!?)

目を見開いて驚くテル。しかし驚き反面、とても極めてシユールなシーンだ。

テルは黙ってその光景を見続けることにする。

「……………」

ウィーンウィーンとレーダーが回転します。本当にあのタイプのレーダーってあったんだなと思うテルである。

『ウィーン……ピポポポ!!』

「なんでピ○サルレーダーアアアツツ!？」

気づかれないように突っ込んでみるが今のでこちらの位置がバレてしまったとテルは考える。

キュイイイイイイッツツ!!

出来るだけ遠くへ離れようとした時である。テルの耳に奇妙な音が聞こえた。

恐る恐るテルが再び壁から黒羽を見て彼は口をあんぐり、目が点状態になっていた。

「へ、へえ……そういうのもアリなんだ」

テルが見据えるその先には右手の武器を構える黒羽の姿。先ほどの奇妙な音、それはその武器から発せられていた。

黒く、尖っていてどんな壁をも削りとおす、そして同時に男のロマン。

それはドリルツツ!!

右手には大きな、彼女の身の丈のほどの巨大なドリルが装着されていた。

モーターが回転する音とともに巨大なドリルが回転しだす。それを構えて黒羽は壁に突進。

その瞬間、厚い壁が簡単にドリルにより破壊された。しかもテルは目と鼻の先。

「やべっ!!」

ドリルを回転させてこちらに向けていることから瞬間的に背を向けてダツシユ。

勿論黒羽は追ってくる、壁ごとドリルで貫いてだ。

「おおおおおおお!! ホントにアイツなんでもありだよ! 調子乗って一対一なんて申し込むんじゃなかった!!」

全速力で走るテルだが予想以上に黒羽の移動速度が速い。もはや背中にジェットでもつけてるんじゃないかと疑っているが、あの巨大な物体を持ってダツシユしている。

ほんと何でもアリだ。

○

「黒羽のヤツ・・・派手にやってるな」

上からの振動音で黒羽が暴れているのだということを感じ取る木原。しかしコチラの戦況は芳しくない、目の前にはチートキャラが二人。ここは猫の手でも借りたい気分である。

(と言っても、アイツは今まで助けに来てくれた事なかったからな・・・トホホ・・・)

「ハヤテくん! 私の動きに付いて来れるかしら!?!」

「任せてください! いかなる時でも即座に対応するのが執事ですツツ!!」

まるでス〇ロボで言う合体攻撃前のキャラの掛け合いに木原は身構える。

ハヤテとヒナギクが同時に駆け出す。最初に仕掛けたのはハヤテで、木原に向けてとび蹴りを放つ。

「甘いぜエー!」

その蹴りを真横にずれて躲すと少し離れた場所でヒナギクが走り

ながら正宗を振りかぶった。

「せいやー！ー！ーっ!!」

力を込めた叫びとともにヒナギクは正宗を投擲。まるでブーメランのように回転して向かっていく。

それも木原はしゃがんで対応。正宗は木原の真上を通り過ぎていく。

「武器を手放したツツ これは勝機ツツ!!」

「まだだアアア!!」

その声にすぐさま木原は振り返る。真後ろに居たのはハヤテだ。ハヤテの方向には先ほどヒナギクが投擲した正宗がある。ハヤテはそれをサッカーボールのように右足で蹴り返す。

「な、んだとツツ!?!」

驚愕する木原、再び木刀は回転しながら向かってくる。まさか二段構えとは思わず一瞬判断が遅れてしまうが間一髪、体をマトリックスのごとく回避。

(残念だったな・・・ん?)

木原が完全に安心しきっていた時である。木原の目の前に迫る一人の人影。

「残念だったわね!」

回避した正宗を掴みとったヒナギクだった。ヒナギクは気合一閃、木原を思いっきり真上に上げる。

「ふっ!!」

避ける間もなく完璧に食らった木原は更に思い知ることになる、この二人の恐怖を・・・

気づくのはさほど時間は掛からなかった。暫くして木原の更の上をいくハヤテの姿が見えたからだ。

「.....」

その目を見てさほど恐怖を感じただろう木原君、その時のハヤテの

目はまさしくザク。ザクのモノアイのような妖しい輝きを放っていた。

「せいやー………ツッ!!」

ドズン! と空中に居る木原のどてっばらにハヤテの断罪のギロチンともいえる踵落としが炸裂。木原は叫ぶ暇もない、このまま地面に叩きつけられるかと思いきや……

「まだまだ終わらせないわよ……」

下には地獄が待っていた。

木原の着地地点であろうその場所にブンブンと殺る気満々のヒナギクが正宗を振るっている。

そして正宗を構えるとニヤリと笑うのだ。

(……ヤベエ、こいつら容赦ねえ……)

木原は確信する、悪魔は本当にいたんだと。これは今年のベスト3に入るくらいのネタだと感じたほどだ。

「ハアアアアツッ!!」

ハヤテも木原の腹に食い込ませている踵に込める力を強める。

「これが私達の……」

「二力だアアア……!!」

ヒナギクの正宗の一撃が木原の背中に炸裂。もちろん叫ぶ暇もありません。

締めとばかりにハヤテがトドメの空中人間オーバーヘッドキック。まるで人がサッカーボールのように吹っ飛んで行った。

(アレ? ……これ本当にハヤテのごとく?)

最早どこぞの戦闘漫画になっていないかと心の中で思ったナギである。

吹っ飛ばされた木原は飛ばされた先にあるドラム缶の山に突っ込んだ。

しかしそのまま動かないというか動けないのか、ドラム缶から出てくる気配はない。それを見て二人は勝利を確信し、お互いにハイタツ

チ。

「流石ねハヤテくん、一瞬であの動きに付いて来れるとわね・・・」

「ヒナギクさんも、僕の正宗のパスに対応できるのも流石です・・・今の技はランページ・ゴーストと名づけましょう！」

「え・・・ちよ、ちよつとハヤテくん!?!」

「あ・・・」

咄嗟に目を輝かせてヒナギクの手を握るハヤテ。ヒナギクはそれが恥ずかしかつたのか慌ててハヤテは手を離す。

「なんか凄い自然とやってくるのを見ると・・・ワザとやってるのかしら?」

「ま、まさか! 僕がヒナギクさんなんかにそんな命知らずなことをするわけ無いじゃないですか!」

プチン。

「バカモノオオオオオツツ!!」

「え?」

ドゴツ!

本日何回目となるこのプツツンタイム。だが今回はハヤテの軽はずみな行動から激怒したナギも参加し、ダブルプツツン。ハヤテは怒りのヒナギクとナギの鉄槌により再び沈んだ。

「まったくもう・・・」

「まったく、ハヤテときたらまったく・・・!!!」

床に轟沈しているハヤテをよそにため息をつくヒナギク。ナギは怒りを露わにしながらボソボソと呟いている。だがその時である。

突如天井から轟音と共に落ちてくる二人の人影。

「テル君!」

刀を持ったテルが落ちてくるのを見てヒナギクが正宗を構える。テルと黒羽はお互いに地面に着地した。

黒羽はともかく、テルは息が荒い。

「よう・・・会長、みんな無事か」

「ええ、なんとか・・・それよりその人は?」

ヒナギクは黒羽の方を見てテルに聞くがテルは刀を振ってニヤリ

と笑いながら言うのだ。

「野生のマウンテンゴリラもとい、グ○ンラガン……」

「どういうこと?」

不思議そうなヒナギクは訳が分からない状態だ。

「おーいどうしたテル、爆撃されたのか?」

「コレね、イメチェンだよイメチェン。最近流行ってんだよ」

「どんなイメチェンだ!」

ナギがテルのボロボロの姿を見てどうしたのかと聞いているがテルは悪魔でボケる。すかさずナギが突っ込んだ。

「手伝いましょうか?」

覚醒したハヤテがテルの援護に向かおうとしたがテルが「いや」と答える。

「こいつは……俺が決着つけるさ……」

手に持つ刀を握る力を強めてその先の黒羽の姿を見据える。相手は先ほどのドリルをしまい、元の腕から黒い長剣へと変化させた。

どうやら相手も一撃で決めるらしい。その準備か、初めて相手が構える。

「……」

静まり返る中、テルも刀を構えてその決戦のタイミングを図る。

そして黒羽が長剣を構えたまま、テルに向かって走り出した。

テルは居合の構えのまま全く動かない。

一瞬の隙が命取り、それは十分承知しているため、全身全霊をこの一太刀に賭ける。

——やがて。

——一瞬とも取れるその瞬間、二人は交錯した。

——たった一つの金属音を響かせて。

第47話 最後に残った大きな手掛かり

互いの勝負は一瞬だった。それはハヤテやヒナギクには見切ることも難しく、捉えることはできなかった。

静寂だけが響き、両者はまったく動かない。そしてやがてハヤテが呟く。

「一体・・・誰が？」

その時、上から何かが落ちてきた。銀色の刀の破片がくるくると回りながら地面に突き刺さる。

テルの刀だ。

まさか。とハヤテ達が顔を歪めたときである。

ピキ・・・

何かがヒビ入る音が聞こえた。皆がその音の出所を見る。

それは黒羽の持つ武器からだった。

そのヒビはやがて腕までに達し、形を維持できなくなったその剣は崩れ落ちる。

「・・・」

同時に黒羽が右腕を押さえながら膝をついた。右腕からは機械がショットしたかのように火花が小さく弾ける。

「・・・」

ゆっくりと立ち上がり、テルを振り返る。その表情は全く変わる事のない無表情だった。

まるで痛覚がないかのような平然さにテルは悪寒が走る。

「黒羽！」

「なにッ!？」

突如、ドラム缶の山から一つの丸い球が場に投げ込まれる。テルは「まさか」とデジャヴュ感否めない展開を予測した。

ボシユン。

と丸い球からあふれ出る白い煙が場を包み込んでいく。

「うわ！　なんか悪党どものお約束の煙幕だー！」

「ちよ、なんも見えないじゃない！」

「誰か！ 鳥系のポ○モンを！ 早く『かぜおこし』をツツ!!」

「二誰もポ○モンなんて持ってないわアアア!!」

テルのボケに一同が突っ込みながら叫んだ。確かに何も見えな
い。お互いが誰かというぐらいにだ。

一方で煙幕を投げ込んだ木原はドラム缶から一直線に黒羽のもと
に。

「黒羽・・・大丈夫か？」

「・・・大丈夫、問題ない」

「涼しい顔でイー○ツクの真似なんてやるもんじゃねえよ」

もちろんその類のネタを知ってるわけではない、自然と出た返答で
あることは木原も承知している。

「片腕の黒曜の機能が80%ダウンした・・・でもまだやれる」

腕を押さえながら黒羽は言うが、片腕はバチバチと音を上げながら
プルプルと震えている。

「機会はいくらでもある。今は無理してまでやることはない！」

「・・・」

無理するな、という木原の言葉にしばし考えていてコクツと頷いて
か、黒羽はその場を走り去っていく。

「やれやれだぜ・・・」

一瞬にして消え去ったのを確認する木原。いくら煙で周りが見
えなくても彼女の力をもってすれば簡単に出口まで逃げれるだろう。

木原もそろそろこの騒ぎに紛れて廃ビルを後にする。黒羽と
違って特殊能力は全くないが一つの感覚が彼を導いていく。

その白い煙の中を何も道しるべ無く進んでいく木原。

「へ・・・これなら楽勝で——」

だが、どうしてそのに足を止めてしまったのだろう。

どんな時でも逃げる時は全力で逃げ、ノンストップを心がけていた
彼が。

「ん？」

偶然だ。偶然だった。惚け顔のテルと木原が鉢合わせになっ

てしまっていた。

「なんでお前が・・・ツツ!?」

そう呟いたのは木原だった。その発言にテルも顔をしかめる。

木原は明らかに動揺していた。まるで『居ない人が目の前にいるかのような』、幽霊でも見たかのような。

「なんでお前が居るんだよ!!」

思わず叫んでしまう木原。テルは疑問に思いながら返していた。

「お前・・・どつかで会ったか?」

「ツツツ!?!」

その言葉を聞いて木原はまさか・・・と驚愕の表情だ。忘れてしまっているのかという顔だ。

「チィー!」

「あ、オイこら!!」

やがて木原が舌打ちするとテルの真横をそのまま走り抜ける。

テルは一度は叫ぶがその後は追っても無駄だと判断し、黙ってその背中を見続けることしかできなかった。

やがて白い煙が晴れて、二人が居なくなっただことを確認して一同が騒然とした。

「くっそう、逃げられたか・・・」

「まあ何事もなくて良かったですけど・・・」

逃げられたことに悔しがるナギだが隣でハヤテが宥める。

「いや」

隣でテルが小さく呟く。

「俺はなんかあったぜ」

その言葉にはみんながよく分からないでいた。

アイツは俺のことを知っているようだった。

大きな進展だ。

「という訳でお前ら先に帰ってるよ、俺屋上に忘れ物したから」
「わ、分かりました・・・」

頷くハヤテに同意して、ヒナギクやナギも後に続いていく。

テルはそれを見送ると屋上へと向かっていった。

○

テルは帰り道を歩いていく。その背中には伊澄がいた。最初

は嫌がっていた伊澄だがテルに

「お前に拒否権はない」

と断言されてしまい背中に乗せられてしまっている。

今は鷺ノ宮家まで帰る途中だ。

「あーだるい、どれ位だるいかっていうとんでもなくだるい・・・」

そんなことを言っていると伊澄が降りそうになるが慌てて冗談と
言って歩き続けた。

「テル様・・・」

「ん？」

伊澄の言葉にテルが相槌を打つ。

「あ、ありがとうございます・・・」

「気にすんな。ただ、もう簡単になんでもしよい込むなよ？ いぎ

となつたら高性能関西人がいるんだからな？」

「・・・はい」

戸惑いながら答える伊澄の言葉には嬉しそうな感じが混じっていた。
た。

これならもう大丈夫だろう。取り敢えず一安心したテルだった。

ちなみに高性能関西人とは咲夜のことである。

どんなシリアスな雰囲気を作り上げても持ち前の関西パワーでその
雰囲気中和することから名づけられた。

その関西人はというと。

「あーはっはっはっ！　なんかまだ伊澄さん達帰ってこんなあ！」
お笑い番組を見ながら平和に過ごしていた。

○

「……………」

とあるビルの屋上に黒羽と木原はいた。　無事退却をし、今はその屋上から町全体を見渡している。

すると黒羽が珍しく口を開いた。

「石は……？」

「久しぶりに喋りかけたと言えはソレかよ、もうちよいまともな会話をしようぜ」

ふうため息をつく木原は人間らしい会話を黒羽に求めるが、再度問い詰められて無理と悟ったか両腕を交差してジェスチャーする。

「チャンスはあった」

その一言をいう黒羽の表情はいつもと同じ無表情。

「だからどうした、まさか殺してでも奪えって話なのかよ？　そんな大切か石が」

「……………」

それを言うと黒羽は黙り込んでしまう。　木原は続けた。

「別に命まで取らんでも気絶させてる間に奪うっていう手もあるんだろうが」

失敗したのを棚に上げる訳ではないが、少しばかり口調を強める。

木原も感じていた。　この少女、黒羽には人間らしい感情が見受けられない。　その謎の力を使い、他人を傷つけることを躊躇わない。

まず、本当に人間なのだろうか？

だが黒羽は木原の言葉に全く動じることなく、いつものように無表情を通し続ける。

それを見て小さく舌打ちすると

「取り敢えず、しばらくこの街に潜伏することにしよう。　そうすればあいつ等だつて監視できるしな」

「……」

それを聞きうけると、黒羽は翼を広げて東京の空へと姿を消していった。

(あいつのあだ名は今日からミス・ポーカフェイスだ!!)

そう決めると前方に広がる景色を眺める。しかし彼は少しだけその虚空を見つめた。

「本当にお前なのか・・・テル」

その眩きは風と共に消えていく。

○

その次の週。善立 テルは元気？ 良く白皇学院に登校していた。

怪我を理由に休もうという算段だったが、なんと土日を含んでだいぶ良くなってしまい(それでもまだ怪我人)、休もうという野望が打ち砕かれてしまった。

「あー、ダルイ・・・世界よ、なぜお前は俺に対して残酷なんだ・・・」
一人机の上に頭だけに乗せて理不尽をつぶやくテル。隣では休みの最中にできなかつた宿題を急ピッチで片付けるハヤテの姿が。

「テルさん！ 時間が刻々と迫ってきていますよ!! ああの宿題、今日の一限目に提出なんですから!!」

「んなこと言われてもなあハヤテくん、俺は今にもこのまま死んで死後の世界で新しく人生をやり直した気分だよ」

「口を動かすより手を動かしてください！ 僕だって過去に戻りたいですよ！ タイムマシンが欲しいくらいです！」

「机の中を覗けばあるかもな」

「ちよつとあなたたち、あの宿題終わってないの？」

絶望を感じている二人の間に現れたのはヒナギクとナギだ。

「あんなの数分あれば終わる」

「あり得ない。お前らの頭はどうなってるんだ？ 改造でもされた

のか？ どこだ？ どの組織だ？ ショッカー？」

物凄いだるそうな表情のテルは鉛筆を手に持つ気力すらないらしい、持つては机をころがし、持つては転がす・それを繰り返していた。

とそこへ・・・

「ヒナちゃん！」

「ノートを！」

「見せてー！」

「却下ツツ!!!」

この話では初登場となる生徒会三人組、泉と美希、理沙が現れた。しかしヒナギクはその三人の明らかに手抜きを見て習いバツサリと切り捨てた。

さらに・・・

「うわー！ 唯子先輩と王華 千里が喧嘩でこっちまで来たぞーーー!!!」

一人の生徒が叫ぶ。その瞬間、両側のドアを蹴破って千里と唯子が入ってきた。

「待たぬか貴様アア!! もう一度言ってみろオオオ!!」

「ハッハッハッハ！ 何度でも言つてやるぞ木偶の坊！ 貴様のようなキャラは使いにくいから最後の方でしか一生使われないとな!!」

「ふぎけるなアアア!! キングである俺様がこれ以上の侮辱を受けるとは、貴様八つ裂きにしてくれる!!」

「望むところだ陶片僕。 口から2リットルの血を吐き出させてやろう！」

千里は飛びかかりながら、唯子は竹刀を構えながら応戦。 朝っぱらから、この2年生たちは何やってるんだろう・・・そう思えてならないハヤテのクラスだった。

「ああーもうっ！ 朝から騒ぐんじやなあああああい!!」

ヒナギクが叫びながら喧嘩を止めるように呼び止めるが、二人は聞く耳持たずといったところであり、戦闘はさらに激化。 ほかの生徒

も巻き添えを食らう。

「おっ！ 喧嘩か？ いいねいいね、青春だね！ 先生も混ぜろーろー!!」

「ギャーローロー！ 雪路も暴れてきたぞーロー!!」

更に雪路も加わり、教室内はカオス状態に・・・

「俺様キヤラなんて古いのだよ！ いい加減目を覚ましたらどうだ!?

そんな事だから友達ができなのだ!!」

「貴様、これ以上の無礼は許さん！ キングは一人、この俺だツツ!!」

もうこいつらは気が済むまでやらせないと事態の収拾はつかない、アレ、今正宗を持ったヒナギクが突っ込んでいったぞ。 なら後数分と言った所だ。

とその喧騒を物ともせず惰眠を貪ろうとしていたテルだったが、千里の投げた机がテルに直撃。

「・・・もう勘弁してくれ」

遠のく意識の中、テルはそんなことを呟いていたのだった。

第48話く夢の中でさ、会ったようなく

「お誕生日おめでとうございます・・・ヒナギクさん」

「へ？ ハヤテくん？」

ちよつと読者の皆さんの思考を当ててみよう。 ずばり、読者のみなさんは次に・・・なんだこの展開は・・・と言う。

「ヒナギクさんの16歳の誕生日、どんなプレゼントがいいかずつと考えていました・・・」

ヒナギクの目の前に現れたのは様々な種類の花束を手に持ったハヤテだ。

「そりやどうも・・・」

と素っ気なく返すが、反面顔を少しだけ赤くなる。 嬉しさは隠せない。

「そして考えた結果・・・」

がしっ。 とハヤテの両手がヒナギクの両肩に優しくかかった。 そしていつになく真剣な表情、かつ笑顔を浮かべるハヤテはそつと顔を近づけ・・・

「僕からのプレゼントは・・・」

「え？」

距離はだんだんと近づくにつれて、その心音は高ぶりを隠せないでいた。 しかしその心の隅で彼女は思う。

この突発的な展開、そしてデジャヴユ。

そして決定的な瞬間に彼女は悟った。 これは・・・夢なのだ。

「なんて頭の悪い夢を見てるんだ私は……」

ベッドの上で目を覚ましたヒナギクは溜め息をつきながらその日の朝を迎えた。

―最近、私には気になる男の子がいる。

毎晩毎晩私の夢の中に現れて、私はその子の事が気になっている。

そのせいで仕事もうわの空。

もしかしてこれは・・・この気持ちは・・・

第48話〈in my dream〉

「だーっ!! また負けたーっ!!」とある一室、ナギの悔しそうな声が響く。ここは前回の話にでてきた会議室。

「さて、みんな集まったようだな」

教卓の上でバンと唯子が手を教卓に叩きつけて注意を引く。

「スイマセン唯子さん、僕たちはなんで呼ばれたのか分からないんですが・・・」

「そうそう、いきなり『放課後に集まってほしい、来なければ君の帰り道は恐怖で満ち溢れることになる』なんて言うから帰ろうにも帰れねえじゃねーか」

そんな脅され方をされたのか、と恐怖するハヤテ。そう、テルもハヤテもナギもこの会議室に呼ばれたのだが、今日は変わった顔ぶれもある。

いつもの3馬鹿、もとい、生徒会3人組の美希や理沙、泉もいた。

「せんぱーい、私達ってなんで呼ばれたんですかー?」

泉が手を上げて言う。お前ら生徒会の仕事はどうした。そんな突っ込みのタイミングを無視して、唯子が答える。

「ふむ、君たちをここに呼んだのは重要なことを伝えるためだ。君たち、3月3日は何の日か知っているかな?」

「3月・・・」

「3日・・・?」

「必中、ひらめき、不屈、熱血、努力、幸運・・・これで負けるはずがない・・・」

ハヤテとテルはお互いに顔を見合わせて唸る。ナギに至っては最近買ったPSPのゲームを熱心にプレイしており、聞く耳をも持たない。

だが、3人組だけは思い出したかのように声を上げていた。

「あーっ！」

「ヒナちゃんのーっ！」

「誕生日だーっ！」

美希、泉、理沙と順に声を上げる。相変わらずコンビネーションは抜群である。

そうだったのか・・・と改めて驚くハヤテとテルである。

「そこでだ。彼女の為に、プレゼントを用意してやろうと思う。

日ごろの感謝を込めてだ・・・特に生徒会の3人組はな」

笑顔を途端に変えて、凜とした表情で3人組を見る。

「君たちは毎度の事ながら仕事をサボっているだろう。特に泉君」

「へ？」

「君は学級の報告書を毎回サボっているせいで、ヒナギク君の負担を増加させているそうだな？」

「そ、そうなのか泉！」

「この薄情者ーっっ!!」

「ええええええ!!? なんで私だけーっ!!?」

泉は突然、裏切られたかのような状態になる。

「その二人もだサボりの常習犯。ほとんどのヒナギク君のストレスの原因は君たちと雪路によるものだ」

きつぱりと言い切る唯子。確かに、今回の呼び出しの間にも話の中心であるヒナギクは3人の仕事を驚異的な速さで消化しているのだ。

「用意すると言っても、何を用意すればいいのが問題だな・・・」

「そうですね。いったい何を用意すればいいんでしょう？」

「ガアアアア!! なぜ勝てん! このMAP難しすぎるだろ!!」

ドゴッ!

「ギャアアアアア!!」

テルとハヤテが頭を悩ませる中で隣のナギはPSPに自身の怒りを何故かテルにぶつける。

「私も悩んでいてな・・・だからこうしてヒナギク君の誕生日のプレゼントを皆で考えようと思ったのだ」

唯子も悩んでいたのだろう。ヒナギクのプレゼント、簡単そうだが難しそうだ。

○

その話題の中心にいるヒナギク。仕事を終わらせてふうくと息をつきながら教室までの道のりを歩いていった。

「はあ・・・どうしてこうあの子たちは手伝ってくれないのかしら・・・」
勿論、そのあの子たちというのは生徒会の3人組だ。こちらは人には言えないような悩みを抱えて仕事がなかなか捗っていないというのに。

「この際あの子たちにははっきりと言った方がいいのかもね・・・」
と怒りを押さええながら、早速説教するための内容を考えていると。

「うーん、しかし難しいですね・・・」

「そうだな、難しい」

と聞きなれた声が聞こえてきた。

(あれ、今のハヤテくんと唯子さんの声じゃ・・・)

と、通りかかった一室から聞こえた声にヒナギクは足を止めた。

そして、ドアに近寄り少しの隙間から室内を見渡す。

(な、なんであの子たちが一緒に?)

中に泉や美希、理沙の姿を見てヒナギクは疑問を思っていた。さらにテルやナギなども一緒にいるため、状況がさらに分からなくなる。

「まくヒナギクさんがプレゼントされて喜ぶものですよね」

(え・・・まさか、誕生日の?)

ハヤテの一言にヒナギクは考える。3月3日、そうだと確かその日は自分の誕生日。

「かわいいぬいぐるみとか良いと思ったんですけど」

(えー? えー? ぬいぐるみつてーちよつとうれしいかも・・・)
そのぬいぐるみを想像して、期待に胸を膨らませるヒナギク。だがそんな気持ちも次のハヤテの一言で一瞬で崩れ去る。

「ほら、ヒナギクさんって子供っぽいところあるじゃないですかー」
「あーあるね」

ピキン。と背後のガラスにひびが入るイメージだ。

「バラとかどう? そういうのだったら喜ぶかも」

「いやいや、案外うっかりさんだからトゲで怪我しちゃうかもだぞ」

「なら私は彼女に白百合の花を贈ろうではないか・・・」

フフフ・・・と笑みを浮かべながら唯子が答える。

「メリケンサック」

「テルさん、後でどうなっても知りませんよ?」

「木刀」

「お嬢様・・・」

とテルとナギの危険な発言にハヤテは冷や汗。するとそれに賛同するかのようには美希がつぶやいた。

「たしかに、あの声でボクシンググローブなんてつけてたら完璧な大

○ 涼子だからな・・・」

「黒いセーラー服着させて髪をいじればいけるかも」

「ちよつと、みなさん! 真剣に考えてくださいよ! 本人が居たらどうするんですか?」

とハヤテが慌てて真剣に考えるように言うが、その本人が既に扉の向こうにいるという事実。

「まあ、なんだかんだで見た目は女の子、でも中身は実質男の子みたいなもんだし・・・」

「誰が実質中身は男の子ですつて?」

と、その発言に耐えきれなかったヒナギクが中に入ってきたことにより、一同は慌てて騒ぎ出す。

「うわ、ヒナ!」

「ち、違う! 今のはカルガモのヒナの話で・・・!!」

「嘘言いなさい嘘をツツ」

ブオン！ とその手に竹刀を構える。 それを見た唯子が叫んだ。

「いかん！ みんな、今日は撤収だ!!」

「了解!!」

「え、ちよ!? なに!？」

わーわーと子供のような声を上げながら一同は一目散に逃げている。

唯子は窓から飛び降り、その他は反対側の扉から逃げて行った。

「まったくもう・・・仕事をさぼって何してるかと思えば・・・」

ふうとため息をついてしまいが満更でもなかった。 秘密にしながら自分に対してこういうことを考えてくれることがなにより嬉しかった。

だがその裏で、やはり去り際にハヤテの方に目が行ってしまった。

何かを気にしているのだ。

何かを・・・。

○

そして次の日・・・の放課後。

(またしても現れたわね・・・)

朝の出来事を改めて思い出すヒナギク。 流石に何日間か続くと自分を変なんじゃないかと思ってくる。

一人考えながら学校の道をトボトボと歩く。

(夢にまでみるのはいかがと思うが・・・気にしているのは確かだ)

(そして気になる点があるとするとするなら・・・あの一点・・・だと思う)

——親が子供に借金を押し付けて逃亡。

前に、友人の美希から聞いたことがある。 ハヤテのその素性を。

そしてその情報からヒナギクは一つの過去を思い出していた。

『ねえお姉ちゃん・・・お父さんとお母さんはどこ?』

その問いに当時小さかったころの自分は確か姉に聞いたはずだ。だが姉は答えてくれず、自分はひどく不安に駆られていたということとは覚えている。

(気になっている事にわけがあるなら・・・)

そうして考えていくうちにどんどん考えが偏っていく。しかしそんな時だった。

「あれ？ ヒナギクさんじゃないですか？」

「あ……」

振り返らずとも、分かる。声からして確実にハヤテだった。だからなのだろう。

ヒナギクは振り返ると同時に、ファイティングポーズを構えていた。

「へ？」

と驚くのはハヤテ達である。ナギやテル、唯子もそこにいたが、どうした？という表情だ。

急に自分が何をしているのか分からなくなったヒナギクは苦悩の末に一言。

「わ、私の背後をとるとは……やるじゃない」

「どこのゴルゴですか……それは」

ハヤテが冷静に突っ込んでくると、ヒナギクは構えを解いた。

「それにしてもあなたたちにしては帰りが遅いじゃない」

「ええ、お嬢様と唯子さんが自室で僕とワタル君とテルさんに勉強を教えていたんですよ」

「フツ……テストか」

とその単語に反応したのはテルだ。

それを気にすることなく、ヒナギクは続ける。

「え、勉強って……試験の？」

「はい、まさかあんなに難しいなんて思いもしませんでした……ハハ」
なんとということだ。確かに期末試験が近いのは分かっている。

そんな忙しい時期に昨日はプレゼントの話をしていたのか。

「だったら私のプレゼントの話なんてしないで帰って勉強……しなさいよ。無かったって別に大丈夫なのよ？」

嬉しさ反面、本人の大事な試験の期間を費やしてまで考えることではないと思っただか、すこし突っぱねる感じで答えるヒナギク。ハヤテはへらへら笑いながら返す。

「いや、でもホント白皇の問題がこんなに難しいとは思わなくて…
難しいってしつたのも最近ですし…。」

「あそこまでできないとは正直驚いたぞ」

「右に同じく。特にこっちに関して…。」

ナギの言葉に続くように唯子がテルに視線を向ける。テルは燃え尽きた真つ白な灰のような状態だった。

「フウ…テストか」

とその言葉にはまるで生気が感じられない。

「またもう特訓する羽目になるかしら…つてハヤテくん、そんなんでテスト大丈夫なの？ マズいんじゃないの？」

白皇の試験は難しい、問題文が英語だったり、そのレベルはもはや鬼。テルや、ハヤテにとつては危ないものだろう。

「えー。ほんとですなぁ、全然大丈夫じゃなくて…どーしましよー？」

「…。」

分かっている。分かっている。彼がこういう性格なことくらいは。

しかし、危機感というものがまったく感じられない。

「いや、どーしましよって…。」

（なんで私は毎晩、この人の夢を見るのかしら…）

その時だ。ヒナギクの中で沸々と怒りが込み上げてきたのは。

（夢でうなされ、気を取られ…頭を悩ませているといのにこの人は…ツツ）

「くくくツツツ!!」

その場にいたハヤテ達はヒナギクの体から醸し出される怒りのオーラに身の危険を感じていた。

（もう少し…シャキツとしなさいよシャキツと!!）

今なら、霊感ゼロの人たちでも分かるかもしれないその怒りのオーラに一同は身を震わせた。

（お、お嬢さま！ なんですかあの後ろにあるオーラは!? サイヤ人とかが出すオーラによく似てるんですけど!?!）

(いやハヤテ、どう見てもディスプレイションフィールドじゃないのかアレ?)

(いや、待てよナギ。あれは螺旋エネルギーだ・・・ヒナギクは螺旋の民だったんだよ!)

(二人とも、そこはATフィールドって言った方が読者には分かりやすいのではないのでしょうか?)

(そんな事より執事くん、君はヒナギクくんに何かした記憶はあるのか?)

(した覚えはないですがしたのかも知れません!したような気がします! いやーきつとしたに違いありません!)

(なんと!そんなことが・・・ッ)

「とにかく! 私のプレゼント選んで落第したら許さないわよ、分かった?」

「は、はい……」

物凄い剣幕で怒鳴り散らすと、ヒナギクはその場を去っていった。

「……お嬢様」

「なんだハヤテ?」

「これは僕の勘なんです、このままではマズい気がするんですよ」

「まあそうだな……」

「ちよつと僕…謝ってきてもいいですか?」

「いや、別にいいけど……何を?」

真剣な表情で聞くハヤテに一同が同じ言葉を発した。

「わ…分かりません……分かりませんが……」

しばしの沈黙の後、ハヤテは拳を握りしめる。

「男として何を謝るかは……!! 土下座してから考えます!!」

まるでこれから爆弾を抱えて敵地を駆けるかのような勇ましい姿。

しかし、物凄いカッコ悪いことを言っている。

「まあ…傷はどれぐらいの物か分からんが、謝るのは大切だ。もつとも、取り返しのつかないことなら意味はないが……」

「……アンタ、スゲエ勘違いしてるだろ？」

ぶつぶつと違う方向の展開を考えていた唯子にテルが突っ込んだ。

○

（やっぱりこれは私の思い過ぎしよ！ 私がハヤテ君の事が気になっているなんて事、あるわけないわ）

軽い足並みで道を歩くヒナギク。

しかし、そんな考えとは裏腹に一つの気掛かり。

『お父さんとお母さんは？』

（いや、気になっていることがあるとすれば一つだけ——）

「ヒナギクさん!!」

突如背後からの声に振り返ると、そこにはハヤテがいた。

「綾崎君？」

「あ……と……えつと……その……」

なにやらハヤテは言葉が詰まっている様子。

なら、先ほどの疑問をハヤテにぶつける。

「ねえ綾崎君……一つだけ聞いていい？」

「へ？ なんですか？」

とききなりの質問され、ハヤテは首を傾げる。

「あなたの……」両親の事なんだけど……」

ハヤテの両親、ハヤテに莫大な借金を押し付けたその親の事。

「ご両親が借金を押し付けて居なくなった時……どう思った？」

「へ？ いや……どうって……酷い親だなくって……」

割と考える事はなく、きっぱり言った。

「子供捨てるなんて人として最低だし……こんなろくでなし、他にいないっていうか……」

確かに、その境遇は他人から当事者からの目からでもそういつた見解に至る。

「ま、人間失格ですよぬ。人間……」

「理由が!!」

だが、非はあるのは明らかでも、ヒナギクはその見解に納得できていなかった。

「理由があつたんじやないかって……思わなかつた?」

「理由……ですか?」

「そうよ! あんなに優しくかつたのに突然いなくなるなんて……! 何か仕方ない理由が……!理由が……!」

何時もより口調が強くなっている自分がいる。認めたくないのだ。あの日の出来事を……

「はは……そんなのいいですよ。あつたとしても……逃げた事には変わりないですし……」

ハヤテがそう答えるのは当然だろう。ハヤテの両親も彼には酷い事をしたのだ。

「そうね……」

言葉は納得したように返したが、内心は出来ない。

「ごめんなさい……変な事聞いて……」

ヒナギクは、目の前の少年にどんな答えを期待したのだろう。

聞いた所で……仕方ないのに……

そんな寂しげな表情の彼女を見たハヤテはさらなる危険を感じていた。

何かを言わなければ、もう何もかもが終わってしまう予感が少年にはした。

だから！

「ヒナギクさん!!」

「へ？ な…何？」

呼び止めた時とは、また違う気迫を持って迫るハヤテにヒナギクはたじろいだ。

「え!? あのツ…そのツ…でツ!! ですから…ツ!!」

「ですから?」

ハヤテはいざ思いを口にしようとするが、なかなか言葉がでない。

だが言わなくてはならないのだ。何かを……。

(僕が言うべき事!僕がここで言うべき事!!土下座ではなく、今!!ヒナギクさんに言わなくてはいけない事!!それは——!!)

意を決したハヤテはその真剣な瞳でヒナギクを見つめ、言った。

「クジラとイルカの違いは……大ききだけなんですよ」

「……………」

しばしの沈黙。

「だから何？」

言うべき事はトリビアではなかった。

「え!? いやだからその!! 励まそうと思っただけですけど……!!」

「励ます手段が豆知識なんだ」

「はうう! そんな人が殺せる冷たい視線を浴びせないでください!」

自分の言葉が凄く恥ずかしくなったか、ハヤテは顔を赤らめるのを必死に両手で隠す。

(気になるわけはなんだろう……)

「ま、プレゼントは楽しみにしてるわ」

今、この場で明確にするのが馬鹿らしくなる。

何故か彼を見ているとだ。

そんなことさえ、どうでもいい気がしてきた。

「じゃ、今日はこれでねハヤテ君」

「え、あ……はい……」

急に振り返ったかと思うとヒナギクの表情晴れやかだ。

そして何事もなかったように笑顔で去っていく。

「んで、結局何だったんだハヤテ？」

「テルさん、コレ多分死亡フラグです……」

「マジか」

「僕、何かしたんですかね？」

「それは多分……」

「多分？」

「次回にならなきゃ分からない！」

という訳で次回に続くツツ!!

第49話く呪いなんて信じないく

―鷺ノ宮家、物置。

「なんやコレ？」

物置にて伊澄の手伝いをしていた咲夜はある物をつけた。

咲夜が見つけたものはヒナ人形、だが奇妙な事にそのヒナ人形はおヒナ様が2つあるのだ。

「明日がヒナ祭りやからヒナ人形飾るのは分かるけど……」

「不良品じゃねーの？」

その場にはテルも居た。無論、強制手伝い出歩き。報酬は無し。

「むやみに触ってはいけませんよ2人とも」

伊澄が奥の方で注意をしながら続ける。

「それは呪いのヒナ人形…下手に触って封印が解けたら大変なことになるわ」

伊澄が言うにはそのヒナ人形は危険である代物だということ。

「ふーん……」

しかし咲夜は既に手に持ち、ヒナ人形を弄っている。話を聞いていたのか……

「呪いのヒナ人形？ コレがかい？ 笑おうにも笑えねえな……」
びしっ びしっ。

「ちよ、何やってんテル？」

テルはあろうことかヒナ人形にデコピンをかましていた。

そして次の瞬間。

ベキッ！

「……………」

快音と共にへし折れた……首が。

「……………」

テルと咲夜はお互いを見合わせる。

そして伊澄が一言。

「特にありえないけど、首をもいではダメよ。首をもぐと封印が解けて……………」

くるっと振り返った伊澄は目を光らせて言い放った。

「この辺で一番、運のない人に……恐るべき呪いがかかるから!!」

そして言い放った直後、伊澄は硬直した。言っていた側から、ヒナ人形の首がもげている姿を目にして……。

「……………」

それを見たテルは咲夜からヒナ人形を取り上げてた。

「……………」

そして無言のままヒナ人形を地面に置き……

「悪霊退散んんんっ!!!」

地面に置いたヒナ人形向かってプロレス式エルボーが炸裂した。

バキヤッ！

「なにしとんじやああああ!!!」

咲夜が叫びながら突っ込む。

テルが体を退かすと、そこには原型

を留めなくしたヒナ人形の欠片が残されていた。

「あ？ 見て分かんないのかよ、除霊だよ除霊」

「除霊どころか逆に霊をキレさせるような事してどうすんねん!? オーバーキルにも程があるやろ!!」

「あわわわわ……」

しかし、咲夜が振り返ると伊澄が恐るべき表情で震えていた。

「どうしたんや伊澄さん？」

「全身を壊してしまったのですね……」

「なんかあるんか？」

震えながら言う伊澄に咲夜が恐る恐る聞いた。

「全身を壊すと……」

「壊すと？」

その震える口から絞り出した言葉は……

「体の欠片が残らないくらいに爆発するという恐ろしい呪いにかかってしまいます……」

「……………え？」

その言葉を聞いた瞬間、彼は硬直した。

その時間約1分間。

「エエエエエエエエエエエエツツツ!!」

そして目をカッと見開き叫んだ。

「どうしてこんな事に……」

鷺ノ宮家の手伝いを終え、帰宅途中のテル。

「まあまあテル、元気出しいや？　まだ死ぬって決まった訳やないんやで？」

「そうですよ。　余り悲観的にならずに行きましょう」

その重い足を引きずるように歩くテルの後ろを咲夜と伊澄が歩く。

「んなこと言われてもよお……ってか、なんでお前ら付いて来てんの？」

「テル様の呪いの不幸も捨て置きませんがテルさま以外にも不幸な人物がいるんですよ」

「誰だそりや？」

「分からのか自分？　アイツしか居らんやろ」

と咲夜が言った矢先、テルが足を止める。　三千院家に着いたのだ。

「まさか……」

とテルが思い浮かんだ人物の名を口にしようとしたときだった。

「ぬああああ!!　な!!　なんですかこれは——!!!」

聞き慣れた叫びが耳に入った。

三人が中に入ると、そこには信じられないかのような光景がそこにあった。

その場に居たのはハヤテとマリア。

いたって普通の組み合わせ、だが今回はハヤテが異常だった。

「お、お前……自らメイド服を…」

「違いますよ違いますよ！ 断じて違いますからテルさん！」

よほど気が動転しているのか、涙目になっているハヤテだった。

そう、目の前にいるハヤテは着ていたのだ。メイド服を……それも完璧に着こなしていて……。

「手遅れでしたね……」

「そのようやな……」

「え、お前ら……どういうことだつてばよ？」

2人だけ事情を知っている事にテルは戸惑いながら聞いた。

「ヒナ人形の呪い？」

「そうなんです。誰かが壊したせいで迷惑を掛けてしまい、申し訳ありません」

チラツ。

「ホントすまんなく誰かが壊したせいでなあ〜」

チラツ。

「お前ら、そんな視線を向けるなよ。俺もつい出来心でだな」

「そうかそうか、出来心で星になってしまうんならそりやしやあないわな〜」

テルの言葉にケラケラ笑いながら言う咲夜。

「え……咲夜さん、何です？」

しかしその言葉に疑問を持ったハヤテが聞いて来た。

「実はやな……」

「そんな……嘘でしょう？ テルさんが爆弾になってしまったなんて……」

「嘘だと俺も信じたいが、伊澄が言うにはそういう事らしい……」

頭を搔きながらテルは呑気に答える。

「よくそんな呑気にしてられますね。一応僕の呪いより酷い物なのに……」

「もう割り切るしかねーよ。俺一度憧れてたんだよねー人間爆弾」

「いや、割り切るにしても無茶じゃ……」

「ほら、何だっけ？ どっかの漫画の爆弾使いも『芸術は爆発だ！』とか言って前向きに自爆したじゃん。アレぐらいの気構えでいきやな」

「それはまた斬新ですね」

「テル様の呪いもですが、ハヤテ様の呪いも恐ろしいですよ？」

と伊澄が割って入ってくる。その言葉を聞いたハヤテは反応する。

「どういう事……ですか伊澄さん？」

「その呪いを3月3日のヒナ祭りまでに解かないと……」

重い雰囲気醸し出す伊澄にハヤテは思わず喉を鳴らす。

伊澄の口が開かれた。

「一生女装が好きな男の子になってしまっうんです！」

「……………」

伊澄の口から出た呪いの内容に、一同はうーんと首を捻った。

「微妙な呪いですね……………」

「だな」

テルも目を細めて頷く。

伊澄から聞いた話によると遡る事、時代は江戸時代になる。そこにはどうやら変わった……………有り得ないくらいの変人がいたそうだ。

その人物はお雛様を作る腕の良い職人だったが、事あろうかその職人は女装が好きだった。

『はーッ！ 何故女の子に生まれなかったんだ俺はッッ』

そしてある日間違ってお内裏さまに十二ひとえを着せてしまう。

それが超キモイと仕えていた城内で話題沸騰、運悪くその職人の横領事件もバレてしまい職人は……………斬首。

しかし今わの際でも職人は……………

「ああ…ッ 一度でいいから女の着物を着たかった……………ッッ」

その強い想いが呪いとなり、以来運の悪い物を女装させる呪いがかかったのです。

「キモイな……………」

「それに横領ってあまり同情できませんね……………でもなんでよりによってメイド服なんですか？」

話を聞き終えたテルとハヤテ。 結局は自業自得みたいなものだ。

「それはおそろく……………」

伊澄がハヤテの問いに袖で口元を隠しながら言った。

「その職人の……趣味です」

その大昔にメイド服があったのかといったツツコミは無しだ。

「まあ……ビツクリするほど似合うとるんやから……無理せんでも工
エンちゃう?」

「いいわけないじゃないですか!こんなな……!」

突然の咲夜の一言に伊澄とマリアは改めてメイド服のハヤテを見
つめる。

確かに、そんじよそこらの女が着るよりも遥かに着こなしている。

だが女装が好きではないハヤテにとって良いものではない。

「でも意外と好評やで?」

「まあ♪」

「よし、今の内に写真に収めてその手の奴らに売りつけるか……」

「マリアさんもテルさんも恐ろしい事考えないで下さい!!」

「それと自分、ウチのささやかな疑問を聞いてもらってもええか?」

「な、なんですか?」

咲夜の怪しい視線にハヤテは嫌な予感がした。

「自分……スカートの下はどうなってるん?」

嫌な予感的中。その瞬間、ハヤテの背筋が凍りついた。

「な……何がいたいんですか?」

「いや……だからほら」

わきやわきやと危ない笑みを浮かべ両手を怪しく動かしながら咲
夜はその距離を詰めていく。

「な……ちよつとでエエから」

「わー!!わー!! 何やってんですか——!!」

咲夜はあろうことか、ハヤテのスカートの部分に手を掛けてきたのだ。

いかん、このままではこの小説的にも危ない。 そう思ったのか。

「親父かお前は……」

グイツと咲夜の体が引つ張られる。 テルが先の曲がった鉄パイプを咲夜の襟首に引つ掛けていた。

「う……うう……」

「オイオイ、ギリギリだったっつーの。 泣くなよ」

「だってそんな事……されたら……僕は……俺は……私は……」

「ゴメンゴメン、ウチが悪かった」

「余りの恐怖に自分の一人称が混乱してますね……」

息を荒くしながら涙目のハヤテに、少しやりすぎた感があった咲夜は笑いながら謝る。 マリアはその光景を眺めていた。

「えー、ゴホン。 それで呪いの解き方ですが……」

顔を少しだけ赤くした伊澄がわざと咳をする。

「呪いは3月3日のヒナ祭りが終わるまでにと言いましたが、具体的にどうすればいいかという……」

「というと？」

「ヒナ段のおヒナ様……つまりこの辺で一番高い場所の主を……倒す事です」

(たとえば……たとえばの話だ)

場所は変わり、ここは白皇学院。 時計塔がそびえ立つその近辺を桂 ヒナギクは歩いていった。

(そんな事は百歩、いや二百歩、いやいやもつともつとずくつと譲って……有り得ない事だが、たとえ話の一つとして……)

このヒナギク、現在絶賛不調である。

(私が……ハヤテ君のことをす、好きだとしよう……)

その瞬間、体温の上昇とともに顔をの周辺がなにやら熱くなるのを感じてしまう。 自分でも何を言ってるのだらうと気恥ずかしい仮定。

(だから悪魔で仮定の話として!! 万が一、億が一、そういうことだとしても!)

最近出会った真つ直ぐな気持ちの少女のことを考えるとその気持ちを全力で日てしなければならぬ。

ヒナギクはその少女を応援すると決めたのだから。

(だから……これはもう……)

「ずいぶんと悩んでいるようだね」

と背後から懐かしい声。 ヒナギクが振り返るとそこには黒い神父の服を着た男……リインが立っていた。

「あなたは……あの時の神父さん?」

「いかにも、俺の名前はロックオン・ス○ラトス、成層圏の彼方まで狙い撃つ男さ……」

「へ?あなたってそんな名前だったの?」

「冗談、これはこの世界ではない私の名前だよ……まあ冗談はさておき、あのダンジョンにいた人ぐらいにしか私の姿は見えない。 悩みがあるなら神父らしく相談に乗るが?」

「そんな……相談だなんて……」

フツと笑うとリインはヒナギクにその聞くがヒナギクは戸惑う、自分でも何で悩んでいるか分からないのだ。 いや、ホントは分かっている。

「それでも……」

「え……?」

その内を察したかりインが続ける。

「それでも何を悩んでいるか分からないときは、目を閉じて考えてみるといい。自分の心に素直になれば、なすべきことは見えてくるはずさ……」

(……)

珍しく冷静に悟るリインの姿はやはりその本職である神父であった。その言葉の通りにヒナギクは瞳を閉じて自分の心に言い聞かせる。

(自分の心に……素直になれば……)

「しかしこの辺で一番高い場所って……もしかして白皇の?」

「時計塔(ガーデンゲート)でしょうね」

またまた場面は変わり、三千院家屋敷。一同は呪いの解決方法について談義していた。

「てことはヒナ段の主って……」

「まあ生徒会長さんということになるでしょうね……」

ハヤテの予想は見事当たっていたようで伊澄がヒナギクの名をあげる。

「よかつたなく 知り合いなら事情を説明すりやわぎと負けてくれるやろ?」

「ええ。 とてもいい人なので大丈夫だと思います」

咲夜とハヤテもこれで事件は解決といったかのようにほっとしたようだ。

「ていうか、俺の呪いもハヤテと同じ解除方法でいいの?」

「ええ。 テル様の呪いももとは同じヒナ人形からです。 だからど

ちらかが先に解除すれば同じくして呪いも解かれるかと」

テルの呪いも、ハヤテと同じように解除すれば簡単に爆発はしなくなるらしい。しかもハヤテかテル、どちらかが条件を満たせば呪いは二人とも強制解除。割と簡単だ。

「そうか・・・ならこの呪い、ハヤテに任せてもいいな。俺はなにもしねえ」

「ざらりと仕事をハヤテに丸投げしよったな自分・・・」

不安の色も消えたテルの小言を咲夜はぼそりと呟く。よほど面倒くさいのだろう。

「では事情の方は私の方から手紙でお伝えしましょう」
「せやな」

伊澄の提案に咲夜がうんうんと唸る、だが。

「いや、それは俺がやろう」

意外な事にその手紙を書く作業を受け持つと提案したのはテルだった。

これには一同もビックリだ。

「な、なんやテル。」

別に手紙書いたからって特別手当でなんて出るわけやないんやで？」

「そうですよ。一銭にもならないんですよ？」

「まあ何という事でしょう。明日は雪なんですかね？」

「お前ら・・・俺を守銭奴とか思ってたんじゃねーか？」

テルは怒りの気持ちを抑えながら続ける。

「コイツの事だ。文をとったしても内容とトラブル付きでややこしい事になるに違いない・・・」

「たしかに・・・」

「む、むう・・・」

咲夜が同意するなか、伊澄は少し膨れていた。

「ややこしいのは嫌いだからな。下手して俺、爆☆殺なんてことになつたら大変だ。だから頼むわ伊澄」

「わ、分かりました……その代わり、ちゃんと書いて下さいよ?」

と両手を合わせて頼むテルに伊澄は渋々と同意した。

「フフ……」

「どうしたんですか咲夜さん?」

ハヤテが横をちら見すると伊澄とテルの光景を見て笑っている咲夜が目に入った。

「ん? あの二人見ると面白くてなあ〜」

面白がって見ている咲夜にハヤテはふーんと言った顔で見っていた。

○

「まあでもこの姿で会うのは恥ずかしいですけど……他の生徒に見られるのもアレなので夜にでも生徒会室に来てもらって……」

「ですがハヤテくん……」

とマリアがハヤテの話に割って入ってくる。

「明日の夜には白皇学院五つの伝統行事の一つ、「ヒナ祭り祭り」があるので夜も人がいっぱいですよ?」

「……え?」

そのマリアの一言にハヤテは固まった。

「え? そんなに人が……?」

「はい、結構。前日も設営の人が一日中いっぱいです」

あくま冷静に答えているマリアであるが、ハヤテにとってはもはや絶望に近い。

「ヒナ段の上で倒さないと呪いは……?」

テルが伊澄に視線を移しながら聞くと伊澄は冷静に一言。

「解けません」

もう、どうあがいても絶望。　そう簡単に物事がうまく運べる訳がない。

「ヤイサホオオオー……!!」

今回で何度目のサイドチェンジになるんだというツツコミは遠慮していただきたい。ここはとある高層ビルの上。一人の男が屋上の貯水タンクの上で遠くに向かって雄たけびを上げていた。

「ヤイサホオオオオ!!」

その男の名前、木原 竜児という。以前ナギを誘拐した少年である。

「……」

その男の後ろで立っているのは黒い長髪の黒衣に身を包んだ少女。名を黒羽という。

彼女もまたナギ誘拐した木原に協力をしていた人物だ。

「ヤイサ……ホオオオツツ!!」

視線を感じたか後ろを振り返ると木原は驚いたかのように叫んだ。どうやら今まで黒羽が後ろにいたのが気付かなかったようだ。

「……」

「お、おおう！ 黒羽さん！ もう戻ってきてたんスか!? い、一体いつからそこに!?!」

「……最初から」

と空色の瞳で木原を見つめながら黒羽は静かに答える。音もなく背後に迫る……まるで忍者のようだ。いや、もしくは竜児がただのバカなのか。

「ふう……こいつは恥ずかしいところを見せちゃったぜ」

と額の汗を拭いながら木原は呟く。

「……」

その木原を黒羽はじーつと見つめる。

「いや、その……なんだ？ 暇だったから、一人だったからその……叫んでみたかっただけなんだからな？ 別にさびしかったわけじゃ……ん？」

とセリフを中断するかのようになり、木原の言葉が途切れる。黒羽が何かを差し出してきた。白い肌の色の手に摘ままれ差し出された

の一枚の紙。

それを取り、木原は読み上げる。

「なになに・・・白皇学院伝統行事、ヒナ祭り祭り？」

再び視線を黒羽に向けると黒羽は小さな声で

「仕事」

と言った。

「行くの？」

「そう・・・」

と、黒羽は首を縦に振る。それを見てか、木原は後頭部に手をやりやれやれと言った表情になった。

こうして・・・誰も知らないヒナ祭りがやってくる。

第50話くトラウマの対処法ってのはなかなか見つからないく

テルのちよつとした事からハヤテとテルはそれぞれ女装してしま
う、人間爆弾になってしまふという恐ろしい呪いにかかってしまつた
!

その呪いは! 3月3日のヒナ祭りが終わるまでに、ヒナ段の一番
上の主を倒さなければならぬ!

だがヒナ段の上、つまりその主とは、あの生徒会長、桂 ヒナギク
だった!

ハヤテは思っていた! ヒナギクなら事情を説明すれば分かつて
くれる! 分かつてくれるハズだと・・・だが!!

「わかつたわ」

「わかつたかね」

「ええ、どうして……今までこんな簡単な想いに気付かなかつたのか
しら……」

神父、リインに言われた通り心のままに瞑想を終えたヒナギク。

「人は……自分の素直な気持ちを認めるのがなかなか難しい」

悟るリインの神父としての本領を見事に発揮している。

「しかし、それが恋心という……」

「決着がついてないからよ」

このままリインの納得する形で解決かと思つたが。

「……決着？」

二文字なのは合っていたが、聞こえた単語はラインの思っていた単語とは程遠い単語。

「そう！ あのマラソン大会での1対1での勝負……あのうやむやに終わった勝負の決着……」

まるで喉のつまりがなくなったようにヒナギクはスッキリした表情だ。

「斬新な結論だな」

ラインも最早何も言うまいとその一言だった。

「そっかそっか。おかしいと思ったのよね。勝ち逃げされたみたいになつてるから、悶々としてたのね。 うんうん♪」

「あ……あの……」

意気揚々と納得しているヒナギクに声をかける人物がいた。

「ん？ あなた……鷺ノ宮さん？」

振り返るとそこには白い封筒を持った伊澄がいた。

伊澄は少しオロオロしながらその封筒を差し出す。

「なに？ 手紙？」

「はい。 上手く説明できないので要点を文章にしました」

「へえ、どれどれ……」

その封から白い紙を取り出すとヒナギクはその文を読み上げた。

○
　　ゝ実は頼みがあります。勝負してほしいんです。

できれば2人の方がいいと思います。場所は時計塔最上階です。

ま、勝つのは僕ですけどね。

武器は持参でお願いします。その方が平等ですからね……ま、勝つのは僕ですけどね。

胸の大きさが戦力の決定的差ではないという言葉がありますけど……ま、勝つのは僕ですけどね。

夜九時、楽しみにしていますよ。

最後に一応言っておきますけど、勝つのは僕ですけどねゝ

○

「……………」

「あの……えっと……詳しくは現地で………」

暫くしてヒナギクは黙ったままその手紙の内容を見つめていた。

そして手紙をふわりと投げ出すと……

「ダッシャアアアア!!!」

その手に正宗を出現させ、手紙を細切れにした。

「果たし状かアアアア!!!」

「え？ あれ？」

伊澄は慌てふためくがソレ以前にヒナギクの表情。

額には怒りマークが浮かび、正宗を振り回しながら荒々しい息を吐いている。

「ふ、ふふ……さすが三千院家の執事。既にこちらの心はお見通しだったとは……やはりできるわね」

「え？ それはどういうことですか？」

伊澄は原因を探るが唯一の手掛かりの手紙もヒナギクが細切れにしてしまったため真実を知る術はない。

「でも勝つのはこの私イ！ お互い正々堂々と戦おうじゃないの！」

そして正宗を高く突き上げて叫んだ。

「あは、あはは……首洗って待ってなさいよオオオオ!!!」

笑いながらそう叫ぶ姿に、伊澄は悪霊よりも恐怖したという。

「全く……本心に気付くのも伝えるのもなかなか難しいな。それよりもアニメイト行こう、初音 ミクのねんどろいどを買わなくては!!」

リインは目を輝かせてその場を去る。神父としての職務を見事に放棄した。

―そして次の日。

時は3月3日、ヒナ祭り祭り……当日ッ！

○

「うん……確かにこれはかなりの規模ですわね」

見晴らしのいい丘の上で、ハヤテが白皇学院の現在の様子を見ていた。

祭りの熱気もあつてか、普段はあまり動かない生徒も感化されて走り回っている。ぼんぼりが光り、屋台が並んで祭りの雰囲気が出ている。

「この人込みの中を誰にも見られないで潜入するのは至難の業ですよね……」

「せやけどなんやねん、その恰好は……」

険しい表情になっているハヤテをよそに咲夜が目にしたのはハヤテの服装。何故か白いコートを羽織るといふ姿。一般に見つかったら異質の目で見られること限りなし。

「アレ？　ところで伊澄は？　俺はあいつが来るからって祭りに来たんだけど……」

どうやら伊澄でつられてきたワタルはこの場で伊澄がいないことに「立腹の様子だ。」

不意に、ワタルの肩を咲夜が叩く。

「残念やったなワタル……伊澄さんは1コマも一緒に出ることなく迷子や……」

「記録更新だなオイ」

「しかしこのヒナ祭り祭りってなんなんですか？　前のマラソン大会に比べて随分と楽しそうですわ……」

「そりゃあ五大行事が全部命をかけるようなヤバい行事なわけないだろ」

ハヤテの疑問にワタルが答える。

「バレンタイン逆さ、男が女を誘って一緒に踊って思い出を作る祭りなんだとき」

「なるほど。 やっぱ夏は盆踊りっちゅうわけやな」

「いや、今は3月ですけど・・・」

「ブツブツブツブツブツブツ・・・」

まあ季節ネタはさておき、ハヤテ達の後ろで膝を抱え込んで負のオーラを醸し出している男が一人。

「どうしたんですかねテルさん・・・朝からずっとあんな感じなんですけど・・・」

テルには聞こえないようにハヤテは咲夜に聞く。

「ウチもようわからん。 昨日のテンションとは全く逆やないか」

「ギャアアアアアア!!」

いきなり立ち上がったテルはものすごい形相でハヤテに掴みかかってきた。

「ハヤテエ・・・お前、絶対に作戦は成功させろよオオオ!!」

「え? ま、まあもちろん善処はしますけど・・・」

「善処どころじゃねえ! 命を持って全うしろおおお!!」

その表情はまるで死刑を待つだけの罪人が浮かべる絶望の表情のようだ。

ハヤテ達はまるで訳が分からない。 昨日まで人間爆弾になることさえ夢に見ていたと豪語していたテルがいったいどうしたことか。

いまさら自身が人間爆弾になることを恐れている理由はなんなのか。

「チクショウ・・・俺は見ちまったんだよ・・・」

「見たって・・・何を?」

その理由は、昨日の夜に遡る・・・

ヒナ祭り祭りを前日に控えたテルは鼻歌なんて歌いながらナギの部屋に紅茶を届けに行っていた。

本来ならハヤテがその役を担うのだが、そのハヤテは今はメイド姿、テルたちがナギの部屋に行けと言ってもハヤテはナギのようにテコでも動かんと感じた感じだったのだ。

「という訳でお邪魔しまーす」

「ようやく来たか、遅かったじゃないかバカテル」

「バカは余計なんだよバカは・・・それと夜中に紅茶なんて飲むもんじゃねーぞ」

カチャツ。と紅茶を置き、キャスターの上にあるポットからカップに紅茶を注いでいく。

「珍しく執事の仕事をしているな」

「一応執事なもんでな・・・ん？」

紅茶を注ぎ終えたテルが気づいたのはナギの机の上。これも金持ち使用の豪華な作りなのだがその机の上にはデスクトップ型のパソコンが置かれていた。

「なんだよ。お前パソコン持ってたのかよ」

「当たり前だとも、この世は常に情報との戦いだ。私の暇を見事潰してくれる・・・じゃなかった。その情報社会を制するために必要なものだパソコンは」

「本音が少し聞こえたぞ」

「ふん、息抜きにニコニコ動画やヒマワリ動画や東方をやっているのが悪い」

「遊んでしかねーじゃねーか」
「むう」

とテルに突っ込まれたナギは眉を吊り上げてデスクトップパソコンに電源を入れる。

「ふん。ならば貴様に目に物を見せてやろう」

「お？ なんだ？ その手のものなら大歓迎だが、あいにくその手のものをお前が毎晩に見ているとなれば、それをハヤテに報告しないとイケねエな」

「その手のものってなんだその手のものって!!」

怒鳴るナギは手早く自身のウィンドウを起動させ、ニコニコ動画サイトに入っていた。

「貴様に昨日見っていた鬱動画をみせてやろう」

「ほう、この超ポジティブ形態の俺にそんな生クリームのように甘い鬱動画が通じるかな？」

「まずは見てから言え」

ナギはマイリストからその動画を取り出し、カチツとクリック。

「アレ？　これって昔のロボットアニメ？」

テルがよく見ると、画面に映し出されたのは昔の、ロボットアニメだった。

なぜこんなものが鬱なのか、と疑問に思ってしまう。

「ああ。昔にしてはかなりの鬱使用になっている……この作品の見どころは人々が敵に捕らえられて体を爆弾に改造させられてしまうのだ」

「……」

爆弾。その単語を聞いた瞬間、テルの体が固まる。

「その爆弾に改造させられてしまった人々はいつどの時間帯で爆発するかも分からない。そう思った人々の中には主人公たちの仲間もいるのだ。んで、その仲間は主人公たちの為に爆弾になってしまった人たちと一緒に主人公たちから離れていくんだよ」

これがその時のシーンだ。と言わんばかりにまたしてもナギはクリック。わざわざ大画面で見せてきた。

人間爆弾に改造させられてしまった人たちと、主人公の仲間が離れていくシーン。

「どうせ……父ちゃんも母ちゃんもいなくなっちゃったんだ……俺だってもうすぐ、母ちゃんの所へ……」

と下を向きながら歩いていった主人公の仲間は急に立ち止まった。

「お、俺……いやだ」

「父ちゃんも母ちゃんもいない所で死ぬなんて……一人で死ぬなんて……い、嫌だ！」

死を目の前にした少年はその恐怖に耐えきれなくなったか、ほかの人々の方とは別の方向に走り出した。

「な、人間爆弾の子を人様のところにやるでない！　誰か止めないか！！」

一人の男の声に応じて、四人の男が走り出した少年を捕まえる。動けない少年はその場で叫んだ。

「い、いやだああああ!! 母ちゃん死にたくないよ!! 父ちゃん! 助けてくれよ!」

何度も大人たちの拘束から逃れようとするが、大人の力には敵わず、ただただ泣き叫ぶ。

「父ちゃん、母ちゃん!! 何でも言うこと聞くからよお・・・助けてくれよー!!」

その時だった。彼の、人間爆弾となった少年とそのほかの人たちの体が輝きだした。そして次の瞬間・・・

ドゴオオオオ!!

彼らはまばゆい光と共に爆発した。

「.....」

それを見ていたテルは目を見開いて体中から滝のような汗を流していた。

「フッフ・・・これが朝の時間帯から流れていたんだぞ? 子供たちが普通に見える時間帯からだ」

腕を組んでいたナギは勝ち誇った表情を浮かべる。

「だがまだこんなのは序の口だ。黒富野の歴史を貴様に脳髓に刻ませてやる。次は伝説巨神の方をだな・・・ってアレ?」

ナギがテルの方を向いた時には、既にテルはナギの部屋から居なくなっていた。

「ほう、逃げ出したか・・・ま、いつか」とカチツとパソコンをいじり始める。

「うるさいのが居なくなつて良かった。流石に私も鬱気分を払しょくするためにポジティブな動画を見てから寝るか・・・」

と言いつつ、彼女は夜更かしなんてしてしまい寝不足になつてしまふのは目に見えた結末である。

○

「そんなことがあつたとはな・・・」

「なんだってそんな状況下でザ○ボット見るんですか!？」

「知るかよそんなもん! 誰だって生きたいんだよ! 爆裂四散なんて嫌なんだよ! もうあの動画見てから人生黒色だよ! どうかしろコンチクショー!!」

咲夜とハヤテの一言一言にテルは地震の恐怖を叫ぶ。この感覚はアレだ。寝る前に怖い動画を見てしまうと怖いシーンが脳裏に焼き付いて夜眠れなくなるというあの現象だ。

「ヤベエよオイ……爆発ってどんな感じなの? もう凄いグロイの? なんかこう……もう色々吹き飛ばんじやう系?」

「あかん……ハヤテ、もうコイツダメだわ。色んな意味で……」
「そうですね……まだ時間じゃないのに地面に大の字に寝転がっているのを見る限り……かなりの精神状態かと……」

「芸術は爆発だ! 畜生が! リア充なんて爆発しちまえよ!!」

もはやテルは自身の人生に限りを付けたかのように、てかヤケクソ状態で地面に寝転がって空に向かって訳の分からんことを叫んでいる。ほんとにヤヴあいようだ。

「とにかく、善は急げです! 早く僕はヒナギクさんに会いに……」
「あれれ? 何をしてるのかなハヤ太くん?」

ハヤテは声の主のいる方向に振り向く。するとそこには委員長レッドこと、瀬川 泉の姿があった。

「せ、瀬川さん!？」

突然の泉の出現に慌てるハヤテ。それもそのはず。ハヤテの女装の事情はごく一部の人間しかわかっていない。そのため、瀬川などの一般の人間からこの姿を晒してしまうのはただならぬ誤解を招くのである。

「あれ? そのコートどうしたの? なんかのコスプレ?」

基本好奇心旺盛な泉はすぐさま普段のハヤテと違う服装に気づいて聞いてくる。なんとか隠そうとしていたハヤテだったが……
「な!! なんでもありませんよ!! 別に隠し事とかあるわけじゃないんで!!」

「はへ? 隠し事……?」

うつかり、ハヤテは喋ってしまった。そんなことを言われたら人間気になって気になってしまいしょうがない。

「ダメだよハヤ太くん．．．こんな真夏にコートなんか着ちゃ．．．」

「いやあ．．．だから作中では三月ですって．．．」

じりじりとその距離を縮めてくる泉。なぜだろうか、彼女の耳からは某アニメのような動物の耳が生えているように見える。

「その下どうなってるのを見せてー！ー！！」

「わー！ー！！　ダメですー！ー！！」

時を待つことが出来なくなったら、泉はハヤテに跳びかかってくる。ハヤテは即座にその場をダッシュで去ろうとするが泉はそれを追いかけていった。

「行ってもうたな．．．」

「んで、あの下ってどうなってるんだ？」

事情を知らないワタルは何も分からないままである。

「そーいやテルの姿が見当たらないで？」

「なんかスゲエへこんでたからな．．．帰ったんじゃねーか？」

辺りを見渡す咲夜だがテルの姿が無いことに気付く。ワタルは帰ったかというが、人けのないところでひっそりとしているのではないかと咲夜は感じた。

（うーん．．．これは気にかけてやったほうがええんやろか．．．）

一応バカな執事だがこれまでの事も、心配はしていた咲夜だったが。基本彼女は樂觀的な性格である。

「ま、えっか。それよりワタル、ウチらも祭りに行こ♪」

「は？　お前、俺は伊澄と．．．」

「多分伊澄さんは迷子で出てこんとちゃうか？　大丈夫やって、祭りの中で伊澄さんとバッタリ会った時にはウチは手を引かせてもらうからな」

「ば、お前！　別に．．．」

「ほらほら、さっさと行くで行くぞ♪」

グイグイとワタルの手を引っ張っていく咲夜と、それに渋々従いな

がら連れて行かれるワタル。
色んな所でそれぞれのお祭りが始まるのだった。

第51話〱祭りではいくらお金を用意しても足りない
い〱

「はあ〱 今日が俺の命日になるのか・・・」
人間爆弾こと、善立 テルは歩いていった。 光輝く祭りのその道
を。

辺りは屋台、周りを明るく照らすための雪洞がいくつも吊るされて
ある。 そしていつの間にか陽気な雰囲気にと釣られて人々は集まっ
てくる。

それが祭りだ。

「まあ、今日死ぬことになるんだからな・・・目いっぱい色々遊んで
みるのも悪くないかもな」

もう自分が死ぬことが確定しているかのように、現在のテルはマイ
ナス思考気味だ。 それで最後にするのが祭りで遊ぶこととは、な
かなか殊勝である。

「アレ？ お前、テルじゃねーか」

「ん？」

と道を歩いている中、テルを呼び止める男がいた。 振り返るとそ
こにいたのは二人組の男。 声を掛けてきた男は老人だ。 浴衣を
着ていて下駄を履いている。

「なんと。 ここで会ったが何話振りだろうか・・・」

もう一人は白人の男だ。 身長はそれなりに高く、同じく浴衣を着
ている。

「辰屋のジジイにバルトじゃねーか。 久しぶりだな」

久しぶりに見た辰屋の顔を見てテルは自然と手を振る。

「なんでえなんでえ、祭りだったのにシケた面してんじゃねーか」
「シケた？ 俺が？」

「おうよ。 お前はこの祭りの雰囲気の中、一人だけ溶け込めてい
ねえ。 言っちゃわりいがよ、今日は死ぬるみてえなそんな顔をして
やがる」

「そうだ。以前のお前ならこんな事に屈することは無かったはずだ。俺より先にクビになんかならなかつたはずだ!!」

「いや、まずお前と俺じゃああの店に居た時期が全く違エんだけど」「まあ聞けよ」

話すバルトを黙らせて辰屋は話を続ける。辰屋は読み取ったのだろう。テルのその雰囲気から不安の色を。

「……」

「何も聞く気はねえが……人生の先輩として俺から一つ教えておいてやる」

そう言った辰屋は険しい顔をして一言。

「死ぬ日がいい日なんて……死ぬまでねエゼ……」

辰屋はそのまま続けた。

「死ぬなんて簡単に受け入れていいもんじゃねえ……そう簡単に物事を諦めるな。男なら、お前ならこういう時でも踏ん張って見せろよ」

その言葉にテルは聞き入ってしまった。久しぶりに話をして説教なのかと思つたが、今の自分の状況を理解はしていなくても善立テルの本来のあり方を聞かされた。

「へっ……俺には熱血成分なんてないから熱くなったりはしねえけどよ。今のはなかなか効いたぜジジイ」

「へっ、伊達にお前より長生きしてねエンだよ」

「ふむ。日本人とは改めて不思議なものだ。言葉一つで悲しみ、燃え上がることができる……それより辰屋殿、せつかくの休暇なのだ。楽しまなければ」

「ま、そうだな。じゃあなクソガキ、また店に来いよ。あと溜まったツケ払え」

「取り敢えずツケといて、お前の麵あたりにな」

「お前またそうやって逃げ出す気かオイ」

辰屋もいままで温厚な表情を保っていたがそろそろ限界のようだ。

眉間にしわを寄せ、微笑みながら怒りマークが複数出現している。

「それよりテル殿……」

その雰囲気をもしめないように入ってきたのはバルトだ。何やら手を動かしてこちらに來いと言ってるようである。

「なんだよ」

そう言うとき少しばかり戸惑うバルト。そして意を決したように小声で聞く。

「あ、ああ・・・そのだな。ソニアさん・・・いや、元隊長は元気でやっておられるか?」

「あ? あの暴君シスター? 知らねエよ。あの船の事件の後一回だけ会ったけどな、それつきりだ」

「そう、そうか・・・」

テルの言葉を聞いた後は少しばかりバルトは残念そうな顔をしていた。一旦、ふうとため息をつく。

「なら、いいのだ。では行こう、辰屋殿」

そう言ったバルトに頷いた辰屋は二人で下駄を鳴らしながら屋台を回るために歩いていく。

「大人も大変だね〜」

そんなことを考えながらテルも首を鳴らしたところでまた歩き出す。

「さてさて、今日はとことん楽しんじゃうよ。祭りの暴君とは俺のことだからね」

独り言だがさつきまでのようなネガティブな思考は無く、純粹に今は祭りを楽しむかのような表情だ。

財布を取り出してテルはその道を走り出したのだった。

○

テルのいる場所とは変わって、祭りの光景を歩きながら眺める男がいた。

その表情はひどく冷めたものであまり興味を持っていないようではない。

「祭りか・・・まったくもってくだらんな」

彼こそ白皇学院の王様キャラ、乙葉 千里である。

「このような催しは、俺様の為に用意されるべきではないのか」

千里がつぶやくのは不満、王たる自分がこのような場であがめられることなく、全員が興じる今日の祭りにひどく不満を持っていた。

何とも身勝手な男である。

「当たり前だ。自分の器も理解していないのか陶片僕」

その背後から聞こえた罵声に、千里はくりりと振り返る。そこにいたのは二人の女子だ。一人は千里が最も知っていて最も嫌いな女性。

「奈津美ツツ」

言葉には怒気がこもっており、相手を威嚇するように千里は唯子を睨んでいたが唯子はフフ・・・と小さく笑う。

「まったく・・・静かに祭りを楽しんでいるかと思えばただ一人で寂しく歩いていたのか・・・」

侮蔑するような視線を千里に送る唯子。そう、何を隠そう千里、その自分勝手な性格が災いしてか友達が少ない。

「寂しいとは思っておらん。王とは群れず、孤独なるものだ」

「ならばこの前の放課後に、私の雑談の場に居たのはなんだ？ 気まぐれか？」

その言葉に千里は一瞬だけの間を開ける。いつだったか、唯子が行っている雑談の場に一度だけ千里は居た。普段群れをやることのない彼がなぜあの時あの場にいたのか。 普段群れをやること

千里はあまり困った顔をすることなく答える。

「・・・決まっているだろう。 気まぐれだ」

「ふーん・・・まあどうでもいいが」

腕を組みながら考える唯子だが、あまり深く考えることないように組んだ腕を解く。

「暇だったら私と一緒に回ってみようか？」

「な、なにツツ!？」

突然の唯子の提案に千里は驚く。普通のお誘いならまだ理解はできる。だがその誘ってくる相手に問題があるのだ。

「フフ・・・こんな美人と一緒に祭りを回れるのだぞ？ 嬉しいとは思

わないのかボツチくん」

「くう・・・」

せせら笑う唯子の言葉には明らかにバカにするような感情がこもっていた。

「それとも何か？ 美人な唯子さんと一緒になるのは純情なこのぼくちゃんは、唯子さんの隣を歩くには道頓堀のヘドロのように醜く哀れな存在のため一緒に回ることはできません・・・とか？」

「き、貴様アアアアア!!」

「今だツツ！」

痺れを切らした千里が大きく口を開けた瞬間。唯子が機を凶つたかのように右ポツケから何やら小さなパックを取り出す。そして千里の口の中に向けて中身を射出。

「む、むう・・・ツツ!!」

パックから飛び出た赤黄色の物体を飲み込んだ千里は次第に広がるその味に表情を強張らせていく。

千里が飲み込んだ物体。それはタバスコと辛子だった。

「ぐああああああああああああ!!」

「あくはっはっはっはっ!! 逃げる逃げる書記くん！」

高らかに笑い声をあげると、唯子は一緒にいたもう一人の女子生徒と共に千里のいる場所から逃げ出した。

そして振り向きながらあつかんべーの状態で唯子は言った。

「ばーか。誰がお前なんかと祭りなんて回るか木偶の棒、私には祭りのすべての屋台を回りきるといふ重大な使命を担っているのだ」

「う、ウオオオオオオオ!!」

顔を真っ赤にしながら千里も叫ぶ。辺りの生徒含めた一般人が注目するが千里は人目を気にせず唯子を追いかけて走り出す。

「許すか・・・許すものかアアアアア!!!」

こちらもまた別の意味での祭りが勃発した。

○

「まったく祭りですか・・・くだらない」

別の場所でも、千里のように祭りにあまり興味を示していない男がいた。身長はそれなりに高く、髪はライトパープルで片手にコーヒーを持ちながら校舎の窓から祭りを眺めている。

「いいじゃないですか虎鉄くん。僕は好きですよ？　そういうばそちらの主は？」

笑顔を絶やささない細めの男、野乃原 楓が虎鉄という男に言う。

「お嬢ならその辺を走り回っているんじゃないですか？　ウチはそっちほど過保護じゃないんで」

嫌味を込めてそう言う虎鉄に野乃原は軽く笑ってあしらう。あと、虎鉄が敬語を使っているのを見て、上下関係は野乃原が上のようだ。

「だいたい男が女を誘う祭りってなんですか。　そんな不純異性交遊を後押しする祭りなんて・・・さ・・・誘う勇氣もない漢（おとこ）達は一休どんな夢を見れば・・・ツツ!!」

（不純異性交遊関係ないですね・・・）

と心の中で突っ込んでみる野乃原。　声に出さないのは彼がこの手の話題に敏感だからだ。

「じゃ、私は坊ちゃんが降られて慰めなきやいけないのでこれで・・・」

「あ・・・東宮の坊ちゃんは告白できるのか・・・すごいな」

それに比べて自分は・・・と比べてしまう虎鉄だ。　東宮も頑張っているのだが報われない。　哀れな男である。

一人になった虎鉄はふうとため息をついた。

「ああ・・・私にもあんな勇氣があれば・・・」

自分はある得ないくらい臆病だ。　しかし言いたいときは言う。　それだけの覚悟はある。　だがその機会すら自分には巡ってこない。

虎鉄は強く願いながらその思いを口にした。

「どこかに転がっていないのか運命ツツ!!」

「キャ!!」

両手を大きく広げた瞬間、虎鉄の背中に軽い衝撃が走る。　相手は虎鉄の体格に負けて軽く床に転んだようだ。

「あ!! スイマセン——」

「いたた・・・」

ズキユウウウウンン!!

それは一瞬の事だった。彼にとつてはそれを認識するまでにさほど時間は掛からない。その姿を見た瞬間、体の心臓が跳ねたのだ。

彼はこう思う。

(運命が・・・来たぜぬると——)

だがお気づきかと思うだろう。虎鉄がぶつかった相手はメイド服を着こなしている綾崎 ハヤテであるということに。

「おおおおおお名前はなんですか御嬢さんツツ!!」

「え!?! な、名前ですか!?!」

言葉を発するのが早いか虎鉄はすぐさまハヤテの手を取り、地面から立たせる。

しかし、最初に聞いた言葉が大丈夫ではなく名前を訪ねていたことにハヤテも戸惑った。

「な・・・名前は綾崎ハ・・・!!」

ハヤテは思わず自身の本名を口走ってしまう所だった。慌ててその一文字で止める。

なんせここは校舎の中、相手は一般の生徒? 相手は完璧に自分を女の子と勘違いしている。

それでハヤテの名前がバレてしまうと後々、いや、ハヤテが生きていくこの先、非常に面倒なことになるのは目に見えている。

「綾崎ハ? ハ? なんですか!?!」

「だからその、あ・・・あつと・・・!! あ・・・あ・・・」

ハヤテは自分の脳内のギアを急速に回転させた。この場で最も効果的で窮地を乗り切るための手段を。

そして一言。

「綾崎 ハーマイオニーです」

「なんか魔法使いたみたいな名前ですね」

その場で浮かんだ偽名にまんまと騙される虎鉄。取り敢えずは

乗り切ったという所だろうか。

しかし、彼とこの虎鉄という男の果てしない闘い？　ここから始まるのだった。

一方そのころで。

「はいはいちよつと止まってくださいよキミ」

白皇学院校門前。一般人の人々が出入りしているこの校門で呼び止められている少年がいた。

「なんですか。なんすかなんなんですかあ？」

呼び止められた少年、木原 竜児はもはやこんなことは慣れたかのような口ぶりだ。

「キミちよつと怪しいよ？　ちよつとここではそういった人は入れないんだよね」

「えーつと・・・まず何を見て判断したのか知らねえけどさあ。ちよつと失礼じゃないの？」

木原のその言葉に校門で警備している男は一言。

「いや、あんたちよつと危ない顔しちゃってるじゃん。中に入ったらなんかドンパチやらかすんでしょなんかさ」

「オイコラ、顔の事を言うな。人を見かけて判断するんじゃないやねエ」

毎度の事ながら言われてきている言葉だが、怒りが溜まることには全く耐性が付きそうにない。少しだけ怒気がこもった言い方になった。

「だいたい、俺はちゃんと連れがいるんだよ」

「ほお、その連れさんはどこにいるんだ？」

「どこって・・・アレ？」

さつきまで隣にいた黒羽の姿がない。急いで辺りを見渡す木原。しかし周りは人人人、入る人出る人で埋め尽くされている。

（仕事を優先させて中に入ったって考えた方がいいのか？）

うーんと考える。今回の仕事の内容、ターゲットはこの祭りの中に居るのだ。しかし、黒羽もすぐ中に入って爆発とか火事が起きていない所を見ると、まだドンパチはやらかしていないようである。

そのことに少なからずとも安堵した木原であった。

(取り敢えずは、俺も早く中に入って黒羽を探さないとな・・・)
まずそのためにはこの門番さんをどかさなきゃならないが、腕づくでやるのは簡単だがなんせ人が多いことに迂闊に派手なことはできない。

(どこかに別の道があればな・・・おお!!)

木原が考えた結果、ある考えが木原の脳裏に浮かんだ。　すぐさまその校門からダッシュで逃げ出した。

全速力で走る木原がやって来たのは壁。　そう、白皇学院を囲っている壁である。

「はっはっ、最初からこうすりゃ良かったんだよ」

自分の考え出した策に酔いしれているのか、笑う姿は不気味だ。ただでさえ怖い顔にさらに拍車がかかっている。

登る・・・といつても、この壁はアスレチックのように凸凹している訳ではない。　それに問題なのはその高さ、どう考えても普通に30から40メートルぐらいまではあるだろう。

「うん、筋トレにもなって素晴らしい」

だが、彼は登るのだ。　まるで手が壁に吸いつくように、お前の手はドラ○もんのペタリハンドにでもなってるのかと突っ込んでみたくなるみたいに。

「よっと」

スツと音もなく登り切り、音もなく着地。　最早潜入任務において彼の右に出るものはいないだろう。

「さて・・・黒羽はどこにいったのか」

侵入した場所が林の中だったこともあり、辺りは暗い。　だが遠くを見ると屋台の光が見えてくる。

(まだ行動を起こしたりはしないでくれよ黒羽・・・)

その賑やかな光の場所へ木原は走るのだった。

次回、さらに祭りが加速するツウ!!

第52話くあの日落とせなかつた景品の名前を僕たちははまだ知らないく

白皇学院ヒナ祭り祭りの会場にて、色んな人々が集まる今夜。

ラーメン屋の店主にメイド執事、人間爆弾執事とほんと厄介な事態に見舞われている中で普通に祭りをエンジョイしてる奴らがいた。

パコツ。

「お!! 当たった!! 当たったでおっちゃん!!」

普通に祭りをエンジョイしているのはワタルと店を回っていた咲夜だった。咲夜は今、自身が打ち込んだ射的の球が人形を撃ち落とすことにはしゃいでいる。

「はは 上手じゃねーかお嬢ちゃん」

「やっぱり? ウチ何やらせても天才やねん。 こう見えても前世はスナイパーで成層圏の彼方から狙い撃ってたんや」

その話を聞き、どこの武力介入組織だと心の中で突っ込んだワタル。

「んじゃ可愛いお嬢ちゃんにサービスだ」

「うわーありがとーおっちゃん♪」

麦わら帽子のおっちゃんから落とした景品とは別に、もう一つの人形を手渡しされる咲夜。

それにも満面の笑みを浮かべている。

(なんか・・・スゲエ楽しんでんな)

自分とのテンションを比べても明らかに咲夜が上だ。 あんなにはしゃいでいる咲夜をワタルはここ最近見たことがない。

「へへへ 見てみワタル。 おまけしてもろたで♪ ウチが可愛いから♪ ウチが可愛いからおまけやで」

「そこを強調すんな。 ところで借金執事×2は探さなくていいのかわ」

「ん〜」

ワタルが言っているのはメイド服を着たハヤテと人間爆弾になつ

てしまったテルの事だ。

咲夜は両手を後ろに組みながら答えた。

「巻田と国枝に探してもらってるけど、ウチ、この学校の事よー分からんし」

「まあそうだけだよ・・・」

ワタルもその点では納得している。　咲夜はもともと白皇学院の生徒ではない。

咲夜はもともと白皇学院の生徒になるはずだった。　本来なら、今ここで白皇制服を身にまとい白皇学院の生徒として祭りに参加しているはずである。

ではなぜ咲夜は白皇にいないのか。　その原因は一人の少年にあった。

「でも工工学校やなあ白皇ちゅうのは。　おおらかで・・・」

「あ?」

歩きながら立ち並ぶ出店を見渡す咲夜。　何を思ったか一度立ち止まる。

「こんな工工学校って知つとつたらナギらと通うんも・・・悪くなかつたかもしれないなあ・・・」

「・・・」

その表情を見てワタルは少しばかりか申し訳ない気持ちになる。

そうだ。　本来なら咲夜は白皇の生徒になるはずだった。

しかし、一人の少年の我儘の為に。

一人のバカな少年の恋心の為に。

その特待の席を譲ってしまったている。

取り敢えずこんな低いテンションのまま回られても仕方ないとワタルは財布を取り出した。

「咲夜、綿菓子食いたくねーか綿菓子。　おごつてやるよ」

「ホンマか?　欲しい欲しい!」

一応幼馴染で年長の咲夜なのだが、この時見せる咲夜の嬉しがる様子は子供だ。

「あと、あつちで金魚すくいしたくねーか金魚すくい。　おごつてや

るよ」

「なんや？ なんや？ 自分、今日はぜひん太つ腹やなく！」

「いつも世話になってるからな。 あとここれくらい楽勝だ。 俺はこう見えても店長だぞ？」

しかし、その経営の実態は危うく、今回の財布の中身も伊澄と共に回るために用意したなけなしの金なのだ。

ま、そんなふうには．．．少年少女がお祭りを満喫している頃．．．借金執事（女装の方）は。

「いやしかし．．．御嬢さんにケガがなくてよかった」

「あ．．．はあ、そうですか？」

見事に女の子だと勘違いされていた。

白皇学院の自販機売場、ハヤテは校舎内でぶつかつた虎鉄という男と共にいた。

別に大丈夫だといったのにも関わらず、虎鉄が「飲み物をおごらせてください」と言うので仕方なくと言つた所だ。

（いかん．．．まさかこの姿を人に見られるとは．．．まあ幸い女の子だと思われているのでいいけど．．．男とばれたら）

もしばれたら、彼はこう名付けられることになるだろう。 女装して夜な夜な学校に来る変態と．．．

（だめだ!! そんな勘違いを許すわけにはいかない!! 少年漫画の主人公として!! 三千院家の執事として!! ここは無難に乗り切らなくては!!）

身も凍るようなその結末を回避するべく、ハヤテは決意する。一刻も早くこの場を去らなければならないと。

「じゃあちよつと忙しいんで．．．」

「あツツ!! 待ってくださいツツ!!」

「．．．何か？」

少しばかり興奮気味に引き留めてくる虎鉄にハヤテは振り返って聞く。 そして虎鉄の口から一言。

「ですから・・・その・・・私と一緒に踊ってくれませんか？」

(絶対嫌です)

顔を赤くした虎鉄を一蹴する台詞をハヤテは心の中で呟いた。

虎鉄が言うのは向こうでは祭りとはばかりに男女が楽しく踊っている。それに混じりたいというのだろう。

確かにこの誘い、正式に男女なら受け入れられるだろう。正式な男と女ならばだ!!

そして何より、この虎鉄という男。なんか別の意味で危険な感じがする。

ハヤテは心の言葉を口にしないよう。慎重しく丁寧に返した。

「もう行かなくてはならないんで、踊るなら他の人とどうぞ」

「ああ!! そんな冷たくあしらわなくても!! だがそれがいい!! それがいいったらそれがいい!!」

「どっちなんですか・・・それに別に繰り返して言わなくても・・・」

ハヤテがこの男から逃げるか考えていた時、虎鉄はハヤテの肩をガシツと掴んだ。無理やり虎鉄とハヤテは正面を向く。

「突然なんですけど・・・私はあなたのことがスキなんです!!」

「・・・へ?」

何を言われたか分からなかった。情熱的に告げられたのは愛の告白。

「ちよ!!何を言ってますか!! 冗談はよしてくださいよ!!」

「冗談でこんな子という訳ないでしょう!!」

いや、あるかもしれない。たとえば、学校で行っていた罰ゲームで強引に誰でもいい女子に告白させるというトラウマのゲーム。

虎鉄は距離を更に詰めて続けた。

「本気なんですよ私は!!」

「そ・・・そんな・・・困ります。そ・・・そんな事急に言われても・・・」
おい、ハヤテ。 どうして顔が紅潮している。 とナギがその場に

居たらとび蹴りが飛んできそうだ。

「僕は・・・」

と思わず情熱的な虎鉄の視線から逃れるべく、ハヤテが目をそらした時だった。

「わくわく……」

「……」

ハヤテの視線の先に居たのはなんて泉。ハヤテを追いかけ追いかけて、ようやく追いついたのか。

「瀬川さん!!」

「ん？ あれ？ お嬢？」

隣にいた虎鉄もそう眩く。

「あはははくごめーん邪魔してー」

まるで展開を楽しむかのような笑顔。そして笑顔のまま続ける。

「ま、私の事は気にせず……続きをツツ」

「では……」

「では、じゃなくて!!」

グイッと掴んでいた両手でハヤテの体を引き寄せる。

当然ハヤテは拒否した。

しかしここで泉が一言。

「いや〜まさかハヤ太くんにそんな趣味があったとはね〜」

「ち!! 違うんですよこれはツツ!!」

顔を真っ赤にしながらハヤテが答えるがここで虎鉄がある疑問に気づく。

「ん？ ハヤ太くん？」

その謎のワードに気付いた虎鉄は泉に聞いた。

「なんですかお嬢。そのハヤ太くんって……この人にはハーマイオ

ニーさんという女の子で……」

「男の子だよ♪」

「……はっ？」

即答された虎鉄は処理落ちを起こしたパソコンのように遅れて一言。

その事実を肯定するかのようにながれ続ける。

「だからハヤ太くんは男の子なんだって。綾崎 ハヤテくん。私

のクラスメートで三千院 ナギちゃんの執事さん♪」

「はは・・・何言ってるんですかお嬢・・・え？ 男の子？ こんなに可愛いのに？」

「だったら自分で確かめてみればいいじゃない」

笑顔でそう答えた泉。 虎鉄は自身の手をハヤテの胸に押し当てた。

「ツツツ!! な、なにをするんですか!!」

例え自分が男だと分かってもこの行為は抵抗がある。 ハヤテは虎鉄の腕を払い距離をとった。

「だいたい勝手に勘違いしたのはそっちなんですから!! 僕は・・・!!」
「裏切ったな・・・」

「え？」

ハヤテの弁明をかき消させるほどの低い声がハヤテの耳に聞こえた。

「お前もまた・・・今までの女みたいに・・・私を裏切ったな・・・」
ゾンビのように暗い雰囲気をもった虎鉄は何やら訳の分からないことを呟いている。

「うちの虎鉄君は全然モテないんだよ♪ 超強いけど思い込み激しいし、切れるとヤクザだし、鉄道オタクで時刻表ばかり読んでるから」
「は？」

それを見た泉がいつもの事のように、見慣れた光景のようにハヤテに説明する。 ハヤテは少しばかり分からないでいたがもしそうならこの男は面倒くさい男だ。 色んな意味で。

「お前みたいな奴がいるからなあ・・・戦争が無くならないんだあー!!」
「知りませんよそんなの!!」

虎鉄は背中から隠していた竹刀を取り出し、いきなりハヤテに斬りかかる。 ハヤテはすんでの所でかわすとその場を去ろうと走り出した。

「貴様は歪んでいる!!」

「どつちがですかー!!?」

叫ぶハヤテに虎鉄は竹刀を構えたまま追いかける。 い7つどこ

でもハヤテの不幸は厄介だ。

○

「.....」

人が混む道の中、ただ一人だけ異質の雰囲気を出している少女がいた。周りは生徒なら制服、一般客なら私服、または浴衣。

黒いローブ。それを着こなしていた少女は見事にその集団から抜け出ていて目立っていた。

黒羽。名前をそう言う。以前、夜の神社にて伊澄を襲い、救出に来たテルでさえもその少女は退けた。彼女は木原と共に行動し、同じ目的の上で組んでいる。仕事仲間と言った方がいいだろう。

「.....」

黒い長髪をなびかせ、黒羽は何かを探すかのように辺りを見渡す。

そう、彼女の狙いはただ一人の人物、ハヤテだ。

「お嬢ちゃん、どうだい？ 綿あめなんて買っていないかい？」

と言う店員の声にも耳を傾けることなく無視して歩いていく。

無表情でだ。

彼女は自身の任務以外に全く興味を持たない。テルの一撃を受けた時も、痛がる様子もなく、無表情を貫き通した。木原からつけられたあだ名はミス・ポーカーフェイス。もとい鉄仮面。

彼女の特筆すべき所はその強靱な身体能力以外に、伊澄とはまた違った異能の使い手という所だ。

彼女の能力、「黒曜」。

体を自由自在に変化せることができる。翼を広げれば空を飛べるし、邪魔なものは腕を剣にして切断。

それ以外にもロボットアニメのようなドリルまで出現させて攻撃可能。

戦闘に関しては万能である。冷酷な彼女は、その力を他人に振るうことをいとわない。それが彼女、黒羽だ。

「あれ？ あれあれあれ？ もしかして？」

と、黒羽の背後から少女の声が聞こえた。その声に黒羽が振り返

る。

「あー！ やっぱりそうだ！ あの時の！」

この高校の生徒ではないだろう、と彼女の姿を見ればすぐわかる。黒羽が振り返ったのはその声の主に聞き覚えがあったからだ。

「あ、名前言ってなかったよね？ 私の名前は西沢 歩！」

「……」

そう笑顔で声を掛ける歩に無表情を貫き通す黒羽。 それを見てか、少しばかり歩は戸惑ってしまう。

「あれ？ 覚えてないかな？ あの、スーパーで助けてくれた時の子だよな？」

歩は以前、スーパーの前で怖いお兄さんたちに絡まれているところを黒羽に助けてもらっている。だが、黒羽は歩を助けたという認識はなく、ただ自分の任務に弊害をもたらすだろうと思いお兄さんを追い払ったのだ。

「別に……助けてはいない」

低く、冷え切った声で言う黒羽。 大抵の人間ならば、この台詞を聞いた後にはくるっとUターンして逃げ出してしまうだろう。大抵の人間＝普通の人ならば。

「じゃ……」

「MATTER!!」

とまた視線を前方に移して進もうとする黒羽の肩が掴まれる。

「こう見えても私は受けた恩は必ず返す人間なの。 取り敢えず私の気が済むまでお礼をさせて欲しいの！」

「……？」

そう聞く黒羽に歩は笑顔で言い放った。

「私と一緒に出店を回る！」

「……」

それはちゃんとお礼になっているのだろうか。 ほとんど歩が楽しむものではないだろうか。

黒羽はそんな笑顔を向ける少女を見て考える。 ここで時間を食う訳にはいかない……と。

断る。それだけを言おうとした時だった。

「お、いたいた。　　おーい黒羽!」

遠くから響く声に黒羽が反応する。　　彼女が反応するときには自分が知っている人間の声に反応するらしい。

「探したぞ。　　走りに走り回ってわそこの出店にて物を食い漁り・・・っと、別に遊んでいたわけじゃないんだがな」

しかし、木原の両手にはいかにも先ほどのたこ焼きの箱と水風船がある。　　どう見ても遊んでいたとしか考えられない。

「ん?」

と、木原が黒羽の隣にいた歩に視線を合わせる。

「あれ?　　何この子、知り合い?」

どうやら木原はあの時スパーでその場にいたのにも関わらず、歩の事を忘れてしまったらしい。

「.....」

と、黙っているようだったので木原も少しばかり考える。

(別にターゲットに關係があるってわけじゃなさそうだな・・・どう見ても普通だし)

やはりツその一言に尽きるツ!　　歩の姿を見て、木原は彼女が全く無關係だということをし・・・確信ツ!

(このまま黒羽を連れて作戦やるのもいいけど、俺もうちよつと遊びたいし・・・)

任務に忠実で他人を傷つけることをためらわない黒羽と違い、木原はこまめで優しい。　　しかし、人相が災いして他人からは怖い目で見られることがある。　　それが災いして先ほども検問に引っかかったくらいだ。

(そうだ!)

ここで木原ツ　　閃くツ!　　勝手な言い分、自分勝手な正義ツ!　　彼は閃いたツ　　道を切り開く一手ツ!

「ああ、なるほどね。　　お前も祭りを楽しみたいという訳か」

「.....?」

「そうだよな。　　いつもいつも仕事ばかりじゃあ疲れるもんなウ

ン」

「どういふつもり……」

腕を組みながら続ける木原に黒羽も疑問に思ったか、その真意を聞く。

木原は手招きで呼び寄せ小さな声で黒羽に耳打ちする。

「ここは名門白皇学院。 お偉いさん方のガキどもが通っている場所だ。 俺たちがここから派手に動けばただじゃすまない。 中には政治家ぐるみの奴もいるはずだ」

つまり、その手の連中から狙われると今後の活動に支障をきたす……と木原は言いたいわけだ。

「そこで、お前はできるだけ一般市民に成りすましてここを探る、そんなターゲットを見つけたら人気のないところまで移動、そこからはお前の好きにすればいい……だがな」

と木原は静かに一言。

「無関係な人間を巻き込むんじゃねえぞ……」

「あわわわ……」

とその台詞を言っていた時の木原の表情を見た歩が脅えだす。

歩から見ても、今の木原の顔は怖いお兄さんに匹敵する……もしくはそれ以上の迫力だったからだ。

それを聞いた黒羽が返した答えは。

「状況を確認、今回はあなたの作戦に同意」

(けっこうマジだったんだがな……)

本気で蹴落としにかかった木原だったが黒羽は動揺するどころか、顔色一つ変えずに返した。

木原としては黒羽が暴走しない方がいい。 無関係な人間を巻き込むのは彼の主義ではない。 黒羽が自分の作戦を承諾してくれたことに感謝しよう。

「という訳でだそのニフラムで消えそうなキャラよ。 こいつをヨロシクな」

「え!?! ちょっと何がどうなってるのか分からないんだけど!?!」

歩はグツと親指を立ててその場を去っていく木原を追いかけようとするが木原は風のように走り去っていった。

「……………」

「……………」

再び二人になったところで沈黙。そして、その沈黙を破ったのは歩だ。

「あのさ……お店、回る？」

先ほどのやり取りを気にしながらも歩は意決して黒羽に再度聞く。

これで断られたらそれは歩も落ち込んでしまうと心に残りそうだが……

「……………」

黒羽は何も言わずだが、首を静かに縦に振った。つまり、OKだということだ。

「よーしーじゃあ取り敢えずあの店から回ろうかー！」

心の中でガツポーズを決めながら歩は黒羽の手を握り、向かう店を指差しながら意気揚々と駆け出した。

第53話く虫コナーズでは虫は殺せないく

「ほう・・・なかなか賑やかではないか」
「ですな〜」

祭りの道中をナギとマリアが歩いていた。 ナギも一応白皇学院の生徒である。 義務ではないが一応参加したのだ。

「一応ってなんだ一応って・・・」

「仕方ないじゃないですか、最近ちゃんと学校に行っている描写もなくなっているせいでそう捉えている方も多いんですから」

ナギの不満の声にマリアが根も葉もないことを言う。 まあ結構休んでいたりするのでそうとらえられても仕方がないのだが。

「それよりもさつきからなんだこいつら、私たちをじろじろと。 なんか珍しいものでもあるのか？」

「さあ・・・？」

二人は分かっているようである。 ナギとマリアが感じていたのは視線。 それもかなりの人数だ。

理由は簡単である。 ナギたちの周りには黒服の強面なSPが5〜6人付いているのだ。

護衛とはいえこの人があふれる中人目を引くのは仕方がないことである。

「それより、マリアも白皇通ってたんだろ？ 祭りなんて見慣れたものなんじゃないのか？」

「まあでもお祭りは何度来ても楽しいものですし」

ふーんと言った表情でナギがある店を指差した。

「じゃああの店はどう楽しいのだ？」

「あれはお面屋さんといってお面を買って楽しむんですよ？」

「・・・」

ナギはその複数あるお面の中から一つだけ手に取り自身の顔に装着。

そしてお面を取り、一言。

「マリア・・・これあんまり楽しくない」

「ま・・・まあそれは人それぞれですし・・・」

ふーっと息を吐くナギにマリアは苦笑いだ。それにしても全国のお面屋さん、子供にこんなことを言われては涙目である。

しかしナギの問答無用の滅多切りは始まったばかりだ。

「あつちの金魚すくいはどうですか？ あの破れやすい紙ですくうのはコツがあつて・・・」

「買えばいいではないか。なぜわざわざ紙ですくわにやらんのだ？」

全国のお金魚すくい屋、ぶった切られる。

「じゃあ、綿菓子は？」

「砂糖だろアレ？」

全国のお綿菓子屋の叫びが聞こえる・・・気がする。

「射的・・・」

「あんなおもちゃの銃で落とせてもポツキー辺りが限度だろ。どうせなら本物の銃で商品はPSSな」

「商品手に入れたいのか壊したいのか、取り合えず日本のお祭りを端から否定しないの」

ナギのお祭り批判に淡々と突っ込みながら誰かがナギの頭に手を置いた。

「ヒ！ ヒナギク!!」

振り返るとそこにはヒナギクがいた。

「まったく・・・少しは純粹に楽しみなさい。純粹に・・・」

制服姿のヒナギクは腰に手を当てながらため息をつく。

「お前はどうかんだ。純粹に楽しんでいるのか祭りというものを・・・」

「生徒会長は見回りもしなきゃならないし、あまり気が抜けないのよ」
ナギの問いに平然と答えるヒナギク。　　どうやら生徒会役員は今回の祭りの運営、警備もかねて行っているらしい。

三人娘は見事にサボっているが。

「でも珍しいわね。　　あなたがこんな人の集まる場所にわざわざ来る

なんて」

「なんだ、人を引きこもりみたいにな」

「え？ 違ったんですか？」

とナギに対してマリアはツッコんだ。

「今日はお前の誕生会をここでやるって聞いたから、わざわざ来てやったのだ!!」

「へ？」

ナギの咄嗟の一言にヒナギクは首をかしげる。初めて聞く内容だったみたいだ。

「あの・・・それ初耳なんだけど・・・」

「ん？ でも唯子さんと生徒会の他の人が・・・ええい！ もうめんどくさい！ お前のプレゼントは今私が渡してやる!!」

考えるのも嫌になったかナギはポケットからなにやら小さな箱をヒナギクに渡した。

「ん？なにこれ？ 随分と高そうな時計だけど・・・」

ヒナギクが箱の中を開けると中には時計が入っていた。

（うーむ。一応ブルガリなんだが・・・そういうのはあまり知らないんだな・・・）

どうやらヒナギクは今時のブランド物にはあまり知識はないらしい。

そんな事は些細なこととして、ナギは話を進める。

「安物だが・・・気に入らないっていうなら別に受け取らなくてもいいけど・・・」

「え？ いや、そうじゃないわよ!!」

慌てて手を振るヒナギクはニコリと笑って返した。

「ありがとう・・・大事にする」

その笑顔のお礼を見たナギは

「ふん。 どうせすぐに壊すに決まっている」

と鼻で笑いながら呟いた。

「な!!そんなことはないわよ!!」

「分かった分かった。早くみんなが待ってる時計塔に行ってやれ」

怒るヒナギクをあしらい、ナギはヒナギクを時計塔に行くように促した。

「分かったわよ・・・ナギもちゃんと学校来なさいよ」

そう言っただけヒナギクはその場を去って行った。そして、ヒナギクの姿が見えなくなったところでさきほどのヒナギクに答えるように一言。

「だが断る」

「ごらごら」

「ところでマリア。ハヤテはどうしたのだ？」

「ハヤテくんですか？」

ナギがマリアに今は虎鉄に追われてるであろうハヤテの事を聞く。

うーんと考えるマリアだが二人ともハヤテが今どういう状況に居るかまったくわからないので

「さあ？ 伊澄さんと一緒に迷子になっているんじゃないんですか？」

そう答えざるを得なかった。

「まったく・・・しょうがない奴だなハヤテは・・・」

「ハヤテ？」

ナギの呟いた一言に、どこから反応する声があった。

その声に気付いたか、ナギが立ち止まる。

「お前・・・綾崎ハヤテの知り合いか？」

「ん？ まあハヤテは私の執事だからな・・・」

その瞬間、木の上から黒い影が飛び降りてくる。物凄いスピードでSPの間を抜けるとナギを抱えこんだ。

「ならば来い!!」

「ぬわ!!」

口調からして男だろう。その男はナギを抱え込むとその一声と共に大きくジャンプした。

「綾崎ハヤテに伝えろ！ 執事だったら主を迎えに来いと！ そこの貴様の正体を衆目に晒してくるわーーーーー!!」

「ナギーーーーー!!」

マリアが離れていくナギに叫ぶ。突如現れた男、虎鉄はそう捨て台詞を置いてナギをさらっていったのだ。

「オイオイ、一体何が起こったんだ？」

その一部始終を目撃していた木原はホットドッグを食べていた。完全に任務放棄状態である。

「あの御嬢さんは攫われグセでもあんのかよ？　しかし世も末だな、ロリコンで誘拐とかよ」

そう一言の後、木原は食べていたホットドッグを一気に口の中に放り込んで飲み込んだ。

「ちよっと追ってみるか」

ほんの興味本位で彼は虎鉄の後を素早く追い始めた。

○

一方その頃ヒナギクは・・・

「お誕生日おめでとうございまーす!!」

「え・・・ちよっとこれは・・・」

白皇の校舎の扉を開けたヒナギクは、カラフルなクラツカーの音で迎えられた。見渡すところには白皇の生徒、生徒、生徒。テーブルの上には豪華な料理がずらりと並び、一人の女子高校生を祝うにはやたらと豪華な会場のつくりになっている。

「どうしたヒナ？　今日はヒナの誕生日会なんだぞ」

これは一体何が起きているのかと戸惑っているヒナギクに、美希が寄ってきた。

「誕生日会って・・・なぜこんな派手に？」

「忘れたのか？」

「え？」

真顔で聞くヒナギクに理沙が答える。

「この前一緒に買い物したとき、誕生日会はどうするか聞いたじゃないか。そしたら・・・」

——誕生日会？　そうね・・・あまり派手なのは苦手だから・・・
家族と静かに食事とかかしら

「・・・と言っていたので、可能な限り派手にしてみました」

「どこまで天邪鬼なの・・・」

と呟くヒナギクだがこうやってみんなから祝福されるのも存外悪くないと感じている。

「まあいいじゃない。こっちの方が楽しいし」

「あ、お姉ちゃん」

右手に肉を持ち、左手に一升瓶をもった雪路が駆け寄ってくる。

「そうだ。ヒナ、ちよつと待って・・・はあひ、ふれへんほ」

「お姉ちゃん、物を食べながら喋らないでよ・・・これって？」

肉を口に含みながら雪路がヒナギクに小さな箱を手渡す。そして雪路は口の中の肉を飲み込んでこう言った。

「お誕生日、おめでとうヒナ」

「あ、ありがとうお姉ちゃん。お姉ちゃんからプレゼントなんて、な、何かな・・・コレ？」

ヒナギクは期待に胸を寄せてその箱の中を開けてみることにした。するとそこには・・・

「・・・」

箱の中身を見てヒナギクは固まった。中には数十枚の紙が入っている。雪路は親指を立てた。

「肩たたき券よ！ 大丈夫。私肩たたきには自信があるの！」

一瞬でも期待してしまった自分が恥ずかしい。と思ったヒナギクであった。

「しかしいきなりこんなパーティーして大丈夫なの？」

「大丈夫だ。問題ない・・・政治家の娘だからな」

美希は慚然と返す。政治家の家は何かと毎日が大変なのだろう。

「まあ・・・問題なのは・・・」

と、ここで美希が立ち止まる。

「東宮の坊ちゃんみたいにな・・・一方的な好意ならいつものことで良かったんだけど・・・万が一、二人きりでパーティーとかになったら・・・」

「・・・？」

発している美希の言葉の意味を読み取れないでいるヒナギク。
やがて美希が話題を変えた。

「そういえばハヤ太くんからのプレゼントは？」

「え？ いや、そんなのは全然……」

と答えるヒナギクだが、ここであることを思い出す。 あの手紙だ。

（そういえば……誕生日の日に素敵なプレゼントをくれるって言うてくれたわね……いつだったか）

そして更に渡された内容の意味をヒナギクなりに詮索してみる。

（ん？ だったらこの手紙……もしかして遠まわしに二人きりになりたいという手紙なのかしら？）

つまり、あの文面をヒナギクはこう捉えてたのだ。

実は頼みがあります。 勝負してほしいんです↓恋愛的意思で

できれば2人の方がいいと思います。 場所は時計塔最上階です↓
さりげなく二人の空間づくり

ま、勝つのは僕ですけどね↓自分が告白して勝つという自信

武器は持参でお願いします。 その方が平等ですからね……ま、勝つのは僕ですけどね↓いざとなったら力づく

胸の大きさが戦力の決定的差ではないという言葉がありますけど……ま、勝つのは僕ですけどね↓ここで念押しして自分が勝つということアピール

夜九時、楽しみにしていますよ。

最後に一応言っておきますけど、勝つのは僕ですけどね↓最終的に自分が勝ち、ヒナギクがハヤテのものになるという絶対勝利宣言

(え? や・・・そんな・・・え? え? そ・・・そうだったらどうしよう・・・そ、そんなの・・・)

自然と顔が紅くなり、自身の体温が上昇していることに気付いていた。

はい、どう考えても行き過ぎた妄想です。　ありがとうございます。

そんな妄想に動揺しているヒナギクの背後に忍びよる影。

「ヒナギククウウウウンン！」

「ニャアーローロー!!」

突如、ヒナギクの背後に思いっきり抱き着く人物がいた。　いったいだれか?　答えは少しだけ考えればおのずと簡単である。

「ゆ、唯子さん?」

「はっはっ　誕生日おめでどうヒナギクくん」

スツと離れた唯子はビシィとポーズを決める。　その立ち方はまるでジ○ジヨのようだ。

「いやあ出店も全部回りきったことだし、君の誕生日をこうして祝いに来てみたのだ。　そしたらどうか?　こんなパーティーが開かれているではないか」

笑いながら唯子はお面を被りながら手に持っていた水風船で遊ぶ。

腕には救ったであろう金魚の袋、綿あめの袋、その他もろもろ。

「見事にお祭りを満喫していますね唯子さん・・・」

「当たり前だ。　こんなに楽しいこと、私が見逃すわけないだろう・・・と」

何かを思い出したか、唯子がひよいとヒナギクに箱を手渡した。

「フフ・・・可愛い後輩へのプレゼントだ。　ありがたく受け取ってくれ」

「あ、ありがとうございます」

札を言いながら受け取ったヒナギクはさっそく箱の中を確かめ始める。　雪路と違ってこの人のプレゼントは期待してみてもいいかもしれない。

なんせわざわざラッピングまで施されているのだ。　自然とヒナ

ギクに笑みと期待感がよみがえる。

「これは……」

と箱を開けた瞬間、目に入ってきたソレを見てヒナギクは目を一回、二回……と瞬きした。

中に入っていたのは白くて丸み帯びた形二つの物体……そう、アレだ。

「……唯子さん、まさかこれって……」

箱をワナワナ震わせたヒナギクの反応を楽しむかのように唯子は言い放った。

「そうッ！ 豊胸パアアアアアアアアアッ——」

「わああああああああああ!!」

手遅れかもしれないが、言い切る前にとヒナギクが唯子の口を塞いだ。

「なんでこんなものをプレゼントするんですかよりによって!!」

「ん？ なんだ？ 無いものがなくて困っているのではないかと思つてな……」

この笑いかた、明らかにワザとである。ヒナギクは顔を赤らめていた。

「べ、別に困ってなんかいません！」

「そうなのか？ 私は困っているぞ？ 動くときに特にな。むしろ邪魔だと感じている」

とヒナギクより主張の強い胸を見せつけるように胸を張る唯子。

「むむむ……」

「おっと。そんな顔をしないでくれたまえ。これでは私が悪者みたいじゃないか」

「十分悪者です!!」

とヒナギクが目を怒らせたとき、扉が再びドンッ！ と開いた。

「奈津美イイイ!! どこだああ!!」

目を真っ赤にさせた千里が突如乱入してきたのである。

千里は堂々と叫びながら入ってくるとそのままステージに上り詰

めて叫んだ。

「奈津美イイイ！ 貴様から受けた屈辱の数々！ ここで晴らさせてくれるぞ！ 大人しく出てこい！」

拳を握りしめながら千里は叫ぶ。 どうやら相当ひどい目にあつたようだ。

「フン……そう言われてわざわざ出てくるアホが居ると思うかバカめ……さらばだヒナギクくん」

と唯子が颯爽とその場を後にしようとしたその時だった。

「千里くーん！ ここに唯子さんがいるわよー！」

「なっ！」

大きく手を上げたヒナギクはその場で千里に場所を伝えた。 そ

れを見た唯子は驚くばかりである。

「さっきの仕返しですよ唯子先輩」

「そんな、君はそんなことをする人間じゃなかった筈だ！」

「自業自得ですよ！」

「オイ貴様ア！ もう逃げる事は出来んぞ！ 大人しくここに来い！」

とわざわざマイクを使って叫ぶ千里に、唯子は仕方ないといった表情でステージへと上がる。

そして二人が対峙した。

会場の生徒たちもその成り行きを静かに見守っている。

最初に言葉を発したのは唯子だ。

「……私、なにかしたか？」

「いまさらとぼけても無駄だぞ！ この俺の目を見ろ！」

と千里が怒りの形相で自身の真っ赤になった目を指差す。 唯子

はうーんと考えながら

「結膜炎？」

と答えた。

「違うッ！ 貴様に辛子とさまざまな香辛料のエキスを直接目にかけてられたからだアアア！」

「なるほど。だからあんなに目が赤いのね」

と遠めだがソレを聞いたヒナギクはポンツと手を叩いて納得していた。

「ほかにもあるだろうが！ 激辛のリンゴ飴を食わせたり、挙句の果てには納豆まで投げつけてくるとは！」

「まあ・・・そんなこともあったなく」

まるで思い出話のような唯子の口調に千里が更にキレた。

「この俺様にこれほどの無礼！ 愚行！ 反逆にもほどがある！ この場を借りて土下座しろ！」

ざわ・・・ざわ・・・と会場がざわめきだす。このままでは千里が暴れだすのも時間の問題だ。何故なら、あの唯子がそう簡単にこれに応じる訳がないからである。

そうなれば後はリアルファイト、その結末は誰もが予想できた。

「わかった」

ざわ・・・ざわ・・・その一言に一同がさらにざわついた。

しかし、唯子は手を差し出して制止するように一言。

「ただし条件がある」

口調を完全に切り替えた唯子は憮然と言い放った。

「お前、歌え」

「な・・・ツツ」

千里はその提案に激しく動揺した。

「乙葉家の英才教育には確実に歌の教育もあるはずだ。ましてや貴様は世界に名を轟かせるキングなのだろう？ それで私を感動させてみる。無論この生徒たちもだ」

「貴様・・・本気で言っているのか？」

「本気も何も・・・それが出来たら土下座でもなんでもしてやろう。」

何だったらアツアツの鉄板に座って土下座する『焼土下座』でもいい」と自信ありげに、というかその自身はどこから生まれてくるのかと疑いたくなるくらいの表情だ。

「ヌウ・・・」

堂々と出された提案に動揺を隠せない千里。その様子を見てか、

唯子が再度聞いた。

「どうした？　まさか今更になって歌うのが怖くなったというのではあるまいな王様？」

「ツツ!!　いいだろう!!」

普通ならあり得ない提案だろう。　明らかに負は唯子にあるのだ。

このような提案は明らかに通らない。　むしろあり得ない。

だが、唯子は彼のキングというそのプライドを利用した。　そうすることによりこの提案を通すことに成功したのである。

「ようは・・・」

「底なしのアホだったって訳だ」

唯子の話術的な効果もあるかもしれないが何より、千里という男はかなりのアホなのである。

ステージではマイクを手に持った千里が生徒に向けて叫んだ。

「貴様らに聞かせてやる！　大地と銀河を突き動かすこの俺の歌を・・・俺の歌を聞けエエエエ!!」

○

「ひゃっほーい！　こんなにおいしいモグツ　食べ物が食べられるなんて・・・幸せなんじゃないかな！」

場所は変わり外にいる人たちに変更。　道端で物凄い幸せそうな顔で出店の食べ物を片っ端から食べているのは西沢　歩だ。

「・・・」

一方でその後ろにて沈黙を守り続ける少女が居ることを忘れてはならない。　黒羽だ。

「黒羽ちゃん黒羽ちゃん！　さつきから黙ってばかりだけどコレ食べない!?!」

と笑顔で差し出したのはリンゴ飴。　細い棒の先には見事な赤いリンゴがその輝きを放っている。

「・・・どうも」

静かながら礼を忘れない黒羽。　歩と違ってそのテンションは真

逆だが、歩はまったくそんなことを気にしない。それぐらいに超ハイテンションなのである。

「祭りつてのは楽しむのだよ黒羽ちゃん！身も心も江戸の風情に任せてこの体が燃え尽きるまで楽しむの！」

と言いながら歩は笑いながら仮面ライダーのお面を黒羽に被せる。

黒羽も嫌がるという仕草を見せる訳でもなく、されるがままにお面を被った。

よく見ると、黒羽には歩と行動する前よりも所持品の数が若干増えていた。リンゴ飴、金魚すくいの金魚、綿あめの袋、景品、そしてお面。

「それにしても黒羽ちゃん、射的と金魚すくい凄かったね！なんで一度に六匹も金魚とれたの？お店の人あまりにビツクリして顎外れてたよ？」

「・・・全て計算した」

と一言。木原ならそっか。と一言で決着がつく。だが・・・

「へえ、計算したの!? 頭いいよ黒羽ちゃん！私なんて数学苦手だからそういうの出来ないよ！」

と物凄い興味深く聞いてくる。

「あ、そうだ。ヒナさんにプレゼント渡してこないと・・・ちよつと待っててね黒羽ちゃん！」

歩は慌てて思い出したかのように周りをキョロキョロしながら走り出す。途中、道を訪ねてたりとしながら校舎の方に向かっていった。

「・・・」

黒羽は歩の姿が見えなくなると、被っていたお面を側面へと移動させた。

トサツ。

と軽い音とともに黒羽の手から何か落ちる。落ちたのは金魚の入った袋、そして綿あめの袋やリンゴ飴。

否。黒羽は落としたのではない。手放したのだ。自身の任務の妨げになると思っただろう。

作戦をともにしていた歩という少女はもういない。ならば、自分の判断で作戦を行う。そう考えた黒羽だった。

ピチャピチャ。と袋の中の金魚が抜けていく水に慌てて袋の中で跳ねる。

「……」

そんな金魚に目をくれながらも冷ややかな瞳を向けたのはもの数秒。何事もなかったかのように歩きだした。

その時である。

「待てよ」

黒羽は不意に振り返った。その声が黒羽が知っていた人物だったからである。

「……いくらジミーがくれたものだからってお前、食べ物とか粗末にしちやいけねえよ」

振り返るとそこには少年がいた。少年は地面に落ちていた金魚の袋を含めた祭り一式の品を拾い上げる。

「また会ったな……」

「……」

リング飴を勝手に口にふくんだ男、それは善立　テルであった。

第54話く叩いて被ってジャンケンポンく

様々なイベントが行われている白皇学院ヒナ祭り祭り。

男女が燃え盛るようなテンションで祭りを盛り上げる中、二人の人物がついに対峙した。

黒衣の少女と黒羽と三千院家の執事、善立 テル。

この二人の再開はこの祭りをどう変えるか。

血の舞い散る凶事へと変わってしまうのか・・・

「久しぶりだなオイ・・・こんなところで劇的な再会しちゃうなんて、これって運命なのか・・・？」

「・・・」

ニタアと浮かべた笑いに黒羽は視線をテルから外すことなく対峙を止めない。

「なんて言うと思ったかよ」

だが、テルはふざけた笑いを止めていつもより少し険しめの表情へと戻る。

「お前が居るってことは、当然仲間のアイツもいるんだよな？」

「・・・」

「返答は無し・・・か。　だが大抵の狙いは分かるぜ、どうせまたハヤテだろう」

まるで分かっていたかのようにテルは会話を進めた。

「もしかてお前もハヤテのコレか？」

真剣な顔でテルは自身の小指を立てる。　黒羽は首を傾げながら呟いた。

「貴方のその小指は一体何を表しているのかしら」

どうやら黒羽にはこの手の話題は通用しないようだ。　テルは少しだけホツとしたようである。もし本当にこいつがハヤテの追いかけるならテルはハヤテを締める必要があるのだ。

「流石にまだ敵にフラグを立ててはいないか・・・」

「私は綾崎　ハヤテを探している。　前回同様、私の邪魔をするとい

うのなら——」

黒羽の右腕が妖しく黒く光るとその袖の先から黒い刃が伸びてきた。

(オイオイ！ こんな場所でおっぱじめようってのかよツツ!!)

咄嗟にテルは黒羽の戦闘行為に対して身構える。まだ人が大勢いる中、こんなところで戦闘なんてあったらこの会場はパニックになるのは目に見えていた。

(やむを得ないか・・・)

とテルが武器をポケットに手を突っ込もうとしたその瞬間である。

「おー！ テル、こんなところでなにしてるんや？」

突如聞きなれた関西弁が耳に飛び込んできたかと思へば、お面やら金魚やらの祭りグッズを大量に抱えた・・・ワタルと、何も持っていない咲夜だった。

「はあ、はあ・・・咲夜、もう十分楽しんだろ・・・俺にばかり荷物を持たすな！」

ヘロヘロになりながらもワタルはその大量の祭りグッズを持ちながら咲夜に不満を言う。

ワタルの顔は全く見えなかった。その両手にはワタルの顔が隠れるのに余裕なほどの大きな箱があったのである。

「ふふ・・・ワタル、夜のお祭りはこれからなんやで？ そんなことで息を荒くしているんか？ だらしないな」

(あゝ、ワタルってばなんて不幸な・・・)

ここまで来ると咲夜にこき使われるワタルを見てると同情をしなくなる場面だ。

「ん・・・？ アレ、もしかしてこの人・・・」

急に咲夜の表情が変わる。さっきまでのギャグモードが嘘だったかのように顔を微妙に歪ませた。

——その瞬間。

「——ツツ!!」

咲夜の顔を見るや、黒羽は即座に刃を構えてゆっくりと咲夜へと歩み寄ろうとする。

咲夜も恐怖で顔を変えてすぐさま刃を避けようとするが、その刃は途中で阻まれた。

そのテルの左手によって。

「オイオイ・・・問答無用だな、前に見た人間は情報を漏らされるのが怖いから口封じか?」

ポタ・・・。

とテルの素手で押さえられている黒い刃を伝って赤い液体が地面へと零れ落ちる。

「テル・・・アンタ」

「そこまでだ咲夜・・・これ以上はこの領域に踏み込むには、それ相応の覚悟がいるぜ?」

「あ? 咲夜? おいなんで足止めてんだよ。何か起きてんのかよ?」

咲夜のすぐ後ろでは状況を把握できていないワタルがいた。

「ここは俺に任せてくれ。大丈夫だ、私にいい考えがある」

「どこのサイバ○ロン戦士の司令官やお前は!」

「心配すんなって、別に伊澄も呼ばなくていいからお前らは黙ってこの祭りを楽しんで来いよ。二人とも意外に似合ってるんだぜ?」

「こ、こらあ! 茶化してる場合か!」

状況が状況だけに咲夜はいつもと雰囲気が違う。だが、テルはその時でもいつもと変わらないその姿は不安を払ってくれていた。

ましてやこの男の事だ。なにかしら策があるのだろう。どこか抜けていてもすっかり約束を果たすと信じていると咲夜は悟った。

「もうウチは知らんで!? 爆発でもなんでもしてまえばええんや!!」

「ハッ! その設定忘れてた!! オイコラ! なんて思い出させるんだよ! こっちは漸く忘れかけてたところなのによお!」

そんなことを叫びながら咲夜に訴えるが咲夜は顔を少しだけ赤くしながらワタルを引き連れてその場を去って行った。

二人の姿が見えなくなってから、意外にも黒羽が呟いた。

「・・・なぜ」

「あん?」

「・・・なぜわざわざ二人を逃がすようなことを。あの少女の力を借りて、私と戦うことも出来る筈」

戦術的思考において、彼女黒羽の能力はその手の類のものでなければ対抗するすべはない。だが、その伊澄とのつながりがある咲夜を逃して、しかも増援を要求しないその行動に、黒羽は理解ができなかった。

「・・・老若男女、日ごろの疲れも忘れて楽しんでいる華やかな舞台に刃は・・・無粋っていうんだよ」

その台詞と共にテルは黒羽を睨み付ける。そうすると黒羽は握られたその刃を腕の奥へと仕舞った。

「どうせなら誰も居なくなつた時間帯にやろうぜ・・・一般人を巻き込むなんて真似は、俺がさせねえ」

——別に無関係な奴を巻き込む必要はないだろ!!

「・・・同じこと言う」

「あ?」

「彼も、あなたと同じことを言った」

黒羽が思い出したのは、以前木原に言われた言葉だ。無関係な人間を巻き込むことを極端に嫌う木原。木原とテルは似た言葉を発していた。

「それは珍しいな。俺と同意見の奴なんて、同じ匂いがしやがる・・・俺と同じくて、偏差値が低いのかもな」

フツと小さく笑うとテルはポケットから一枚のハンカチを取り出し、その傷ついた左手に巻きつけた。

ギョツと縛って止血。

「だがどうしてもお前が我慢できず勝負がしたいというのなら・・・一つだけ手がある」

「・・・何?」

「それはだな・・・」

一方その頃……。

「まづつたな……まさか崖から落ちるなんて……」

頭を摩りながら体を起こすのは、まぎれもなくハヤテだった。

少し前に、彼は虎鉄という変態に追われていた。しつこく警察に通報してしまいたかったが相手も変態なら現在の自分も変態のように女装をしているため通報返しを食らう場合があったためだ。

そして運よく彼を巻くことができたのは、たまたま崖の下に転落したからだろう。ラッキーだ。

「これでどうにかあの人も巻くことができたし良か……うわああああああああ!!」

言葉を言い切り安堵するのもつかの間、彼は自分の姿を見て驚いた。

何故だろうか、一体なんの力が働いて彼はこんな姿になってしまったというのか……。

先ほどのメイド服姿にウサギの耳とふりふりのミニスカートに変わっておりさらに恥ずかしい仕様になっている。

(どうしよう……服を隠すマントもなくしちやったし……こんな……ミニスカなんて……)

顔を恥ずかしさで赤くするハヤテ。 災難に災難が重なった結果、超ど級の災難がやって来た。

「一体どうすれば……」

「ハア……ハア……」

ハヤテが悩んでいた時、近くで荒い息が聞こえてきた。 その聞こえる方に視線を向けると……

浮いた小さな人形がそこに居た。

ドゴツ!

「ぐはっ!」

と人形の頭部をすかさず殴るハヤテ。 殴られた人形はよろよると浮かび上がった。

「ななななんなんですかあなたは一体!?!」

「この時代の奴はパンチを食らわしてから人に名前を聞くのか?」

「え?」

その人形からはオツサンじみた声が感じるのを聞いたハヤテは落ち着いて人形の言葉を聞く。

「そう、いかにも! お前に散々女装をさせているヒナ人形の呪い、人形師のぜぺつとじゃ!!」

ガシツ!

「むぐっ!」

そう言い切ったのを皮切りにぜぺつとの顔がハヤテの手に掴まれる。

「そうですか・・・あなたを絞め殺せばこのバカな呪いも解けると・・・」
ミシミシ・・・と人形に加わる握力が強くなる。

「ぬおおおお待って待ってー!ー!ー!」

「誰が待つか! ヒイイイイイトオオオ! エー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

ハヤテが某方〇ダムの真似でぜぺつとを握りつぶそうとした瞬間であった。

ピロロロロ!!

突如ハヤテの携帯が鳴る。それを聞いたぜぺつとは慌てた様子でハヤテに尋ねた。

「ほれ!! 電話じゃ。電話が鳴っておるぞ!!」

と苦し紛れにぜぺつとは言う。ハヤテも出ないわけにはいかないのでぜぺつと片手に携帯電話を開いた。

(マリアさんからだ・・・)

「はいもしもし・・・」

この電話でハヤテはナギが誘拐されたことを知る。

けんか……それは男に限らず、女でも、人外でも行われる争い。
ケンカ……道中歩く男たちのストリートファイト。

喧嘩……昔の人はよく言いました。喧嘩は祭りの華だと。

「さあ張った張った！」

「今日もこの祭りでスゲー喧嘩が始まるって!？」

「しかも組み合わせはなんと男と女!？」

「不公平じゃねエのかい!？」

「ところがどっこい！ その女がべらんめえにつえのよ!!」

「なんでも女と対戦した奴が一発でKOにされちまったんだとさ！」

「ホントかい!? コイツは祭りらしくなってきたじゃねエか!!」

白皇学院の敷地内では、一組の男女を囲んで人だかりができていた。何やら、ワイワイ騒いでいる。

「む？ 辰也殿、なにやら辺りがざわついているようであるが……」

「そうだなバルト……江戸に喧嘩は祭りの華とはよく言ったもんだ。

見物してこうじゃねエか」

もとい、出店を回っていたバルトと辰也。喧嘩の噂を聞きつけた

二人もその人だかりの中に加わっていた。

「どれどれ……どこのどいつだ……」

と辰也が身を乗り出してその中心の人物を見て、彼は口をあぐりと開けた。

何故ならそこにはテルが黒羽と向かい合っていたからである。

「さあてと……そろそろ始めようじゃねエか」

「……」

テルが静かに動かない黒羽にとニヤリと笑いながら言い放った。

「俺たちの喧嘩……叩いて被ってジャンケンポンを!!」

『叩いて被ってジャンケンポン！』とは？

用意するもの・ピコピコハンマー、ヘルメット。

①ジャンケン

←

勝った方がハンマーを持って殴りかかり↓ヘルメットで防がれたらセーフで再びジャンケン

←

ヒットすれば勝ち

と、祭りには全く持つて関係ない遊びである。

「喧嘩、関係ねえーじゃん!!」

と遠くで辰也の突っ込みが冴える。

「お、なんだジジイ、今回は見物人かよ。ま、見てくれよ俺たちの意地と誇りを賭けた闘いをな」

「スнгеーキメ顔使つてるとこ悪いけどやってることはただの遊びだからな!？」

「むう・・・これが日本のKENKAというものか・・・興味深い・・・」

バルトはバルトでコレが日本文化だと勘違いしていた。

この全く持つておふぎけとしか言いようがない遊びに、テルは一つの光明を見出していた。

（奴は根っからの戦闘好きだ・・・当然、勝利に対する使命も、その覚悟も半端じゃない・・・）

普通に戦えば血の流れるのは防げない。だが、このピコピコハンマーはプラスチックであり血はおろか、殺せても精々ゴキブリ程度だろう。

いや、ゴキブリだって殺せないかもしれない。

とにかく、自身の安全も考慮したクリーンな喧嘩をテルは望んでいた。

「私がこれをする必要があるの?」

黒羽が無表情でテルに聞く。テルは冷静に返した。

「お前が俺とやり合うには絶好の場だ。それにお前は・・・俺が邪魔で仕方ない。そうだろう?」

「・・・」

「来いよバイオレンス女、意地もプライドも捨ててかかって来い」

まるでコ○ンドーの某少佐の台詞を吐くテル。黒羽は用意されたハンマーとヘルメットを見つめ、一言。

「わかった」

戦闘受諾。その言葉を聞いた瞬間、周りから歓喜の音が響き渡った。

すると目の前に審判らしき男が現れ、マイクを持ってしゃべりだした。

「では、ルールは簡単。一発勝負ではなく、誰もが楽しめる三本先取です」

手際良く説明を終えると審判はマイクを握っている手の小指を絶たせながら高らかに叫んだ。

「それでは始めましょう! 叩いてエ! 被ってエ! ジャンケン・・・」

テルと黒羽が右手を構えた。そして・・・

「ポン!」

出された手はチョコキとパーだ。

黒羽がチョコキでテルがパーである。

「おつとセーフ!」

とすかさずテルはヘルメットに手を伸ばし、完璧ともいえる速さでヘルメットを被った。

「なんと! テル殿のあの身のこなし、まるで水が流れるごとくツツ!」
「お前はなにのんきに解説なんてしてんだよ! 外人だから日本の文化に疎いはずだろうが!!」

意気揚々と解説をするバルトに対して辰也が素早くツツコむ。

(さあこの超絶鉄壁にお前は勝てるかな・・・ってアレ?)

ヘルメットの下で笑っていたテルが顔を上げると、そこには信じられない光景があった。

「……」

黒羽がピコピコハンマーを上へと振りかざしていたのだった。

「オイちよつと待て！ よく見ろこれを！ セーフだセーフ！ 攻撃しても意味ねえーから！」

とテルはヘルメットを指差しながら黒羽に伝えるがその黒羽のピコピコハンマーを握る手がギリツ！ と力強く握られるのを見るとどうやら問答無用らしい。

そいて次の瞬間。

ドゴツ！

まさかのピコツという弾んだ音ではなく、大衆の耳に聞こえたのは豪快な破碎音。ピコピコハンマーはへし折れながら、テルのヘルメットを粉々に砕いていた。

そして当のテルは見事に首だけ地面に突っ込んでいるという実に奇怪な光景だった。

「ウオオオオオオオオオオ!! やりやがった!!」

「ま、まさかの相手粉碎！」

「アイツ気絶してるぞ！」

「こいつはスゲエ！ 最高の祭りだぜ！ ヒュー！」

「FHOOOOOOOO!!」

その場で見えていた観客たちも総立ち。お祭り気分楽しんでいた彼らは事の重大性を知らなかったため、この光景を見て驚きを隠せない。

「オオオイ！ こんなルール全然関係ねえじゃん！ つーかあのお嬢ちゃん何者だよオオオ!!」

「むう……これで祭りの女王が今宵誕生したという訳ですな……」

くわばらくわばら・・・」

「お前はさつきからふざけてんじやねええ!!」

その場は新しく生まれた伝説を前に驚愕の渦に包まれていた。

辰也とバルトが変な漫才をしながら、テルは一撃で埋まったまま。

「.....」

その輪の中から黒羽はひっそりと抜け出していた。特に何も変わった様子はないといった涼しい様子で。

○

一方その頃、誘拐されたナギお嬢様はというと・・・

「だーかーら・・・何度言わせれば気が済むのだアアア!」

ここ、人気のない物置にナギは居た。そのナギは何やらふてぶてしい顔でなにやら怒鳴っている。

「私がコーヒーと言ったらカフェラテを持ってくるのだ! お前はブ
ラックが飲めない主人に衆目の前でたつぷり砂糖とミルクの入れる
という屈辱を主人に与えるのか!!」

「で、でも・・・!」

「でもじゃない! 今までどんな教育を受けてきたのだ!? 貴様それ
でも執事なのか!」

戸惑いながらも呟いたその言葉でさえ、ナギによってさえぎられる。
変態こと、虎鉄はこの状況にとてもイライラしていた。

「いいか!? 主がグミを所望したら何も言わずにまず果○グミグレー
プ味、そして楽しさいっぱいもぎゅもぎゅフルーツ、お口直しにはシ
ゲ○ツクスをポケットに忍ばせておくのが基本だ!」

「ば、ばか! そこまで気が回れるかよ! しかもお前、人質という手
前、そんなにダメだしされる覚えはない!!」

と怒りを爆発させ、ナギに自身の立場を自覚させようとする虎鉄。

しかしナギは腕を組みながら言い放った。

「ハヤテなら完璧にできるし、私は自分を誘拐したすべての誘拐犯に
ダメ出しをしている」

(なんて嫌な人質なんだ・・・)

(アレ・・・? なんかデジャヴを感じる・・・)

同時に天井にて張り付いていた木原も前回のナギと自分との扱いに似たのを思い出していた。

キリツと言いつ切るナギに虎鉄は一言も言い返すことができなかった。それを見てかナギが聞いてくる。

「・・・ところでお前、なんでハヤテ呼び出そうと思ったのだ?」

「・・・お前に言われても分からんだろうが、持てない私が精一杯の勇気を出してアイツに告白したんだ・・・」

と虎鉄は少し声のトーンを落としながら続ける。

「一目ぼれだったんだ・・・本当に・・・可愛い女の子だと思って・・・でもアイツは・・・私の気持ちを・・・本当の気持ちを裏切ったんだ!!」
「ふむ・・・」

「だからこそ私はあいつを捕まえてギツタンギタに・・・」

「あーもういい、だいたい分かった・・・まったく、随分と薄っぺらい愛だな・・・」

途中で台詞をさえぎったナギの発言は虎鉄の怒りをさらに上昇させる。

「な、なにい!?!」

「だってそうだろう? 所詮それは形だけが好きだ問うことだけ・・・心はどこにもないではないか」

ナギは怯まない。そして決定的なことを虎鉄に言い放つ。

「もし今度ハヤテがなんかの原因だ真の女になってみる! そうなったらお前は掌返してまたハヤテの前で愛をささやくのか!?!」

(あれ・・・三千院 ナギって年齢いくつだっけ・・・?)

天井に張り付いている木原唾然としたままその光景を眺めることしかできない。

「いいかよく聞けこの愚か者メガ! だから貴様はモテないのだッッ!!」

ズキユウウウウウウウウウン!!

(たしかに・・・そうだツ)

虎鉄の中で・・・何かが弾けた。

(俺は愛という言葉・・・全く理解していなかった・・・海よりも深く、空よりも広く澄み渡るこの言葉・・・それが愛・・・ツツ)

「ありがとう・・・目が覚めたよ」

「へ？」

ナギも突然の虎鉄の豹変ぶりに驚く。先ほどのような荒んだ瞳はどこへやら。今はまるで星屑をちりばめたような気持ち悪いぐらいの輝きを放っている。

バタンツ!

「お嬢さま!!」

と、扉が開け放たれ、外からハヤテが入ってきた。

「ふん、ハヤテ。来るなど言っても来るとは・・・しょうがない奴め・・・」

フフ・・・とナギは軽く笑った。そしてハヤテは虎鉄と向き合う。

「虎鉄さん! おじゆ様に何かしたら・・・そのときは絶対に——!!」

「待っていたぞ綾崎!!」

「へ？」

突然の虎鉄の豹変ぶりにはさすがのハヤテも驚いていた。

「たしかにその通りだ・・・男と分かった途端逆上して、本当に愚かな男だ・・・だが今分かった! A型の私には、センチメンタリズムを感じられずにはいられない」

いきなりバツと両手を広げて、虎鉄はさらに続ける。

「初めて見た時から感じていた・・・やはりお前と私は、運命の赤い糸で結ばれていたようだ!」

「ちよ、ちよっとどうしたんですかあの人?」

「わからん・・・分かっているというのは、アイツがどうしようもなく残念な人間になってしまったということだけだ」

「zzzzzz・・・」

困惑しつつあるハヤテに呆れ顔のナギ。天井はもう眠りたくてしょうがない男、木原が待機していた。花提灯たれながら・・・「だからこそ言わせてくれ・・・この胸の異常な高鳴り・・・まさしく、『愛』だ！」

「あ、愛!?!」

物凄い台詞を平然と言った虎鉄は一気にハヤテに歩み寄り、手をガシツと握る。

「同性婚が認められているオランダに移住して・・・結婚してくれ綾崎イイイイ!!」

ブチンツ!

「ばあかかお前はアアアア!!」

「ぐはあああつ!!」

ドゴツウ!

と、キックボクサーも認めざるを得ない見事なミドルキックが虎鉄の腹部に炸裂した。

「ハヤテはなあ! 身も心も全て私のものなのだ!! お前なんか髪の毛一本だってやるものかバカたれえええ!!」

(り、理不尽だ・・・私を説得したのって・・・あなたじゃありませんでしたっけ?)

薄れゆく意識の中、そんなことを思っていると天井から何か落ちてきた。

ドゴツ!

「げべらッ!!」

「うわ! 天井から人が!」

天井から落ちてきた物体は倒れ行く虎鉄の腹部にとどめと言わんばかりに激突した。

土ぼこりを上がるがそれが晴れていくとそれは木原だった。

「む、誰かと思ったらロリコンではないか?」

「ん・・・? なんだよ父ちゃん・・・まだ5時だぜ、もうク熊肉は飽きたぜよ・・・」

「なんで昔の人の言葉が入ってるんでしょっか？」

「しかもあの高さから落ちて起きる気が無いとは・・・取り敢えず、コイツは放っておき、帰るぞハヤテ！　とても不愉快だからな！」

とナギは頭を掻きながら不機嫌そうにその場を後にしようとする。

「え？　でもお嬢様、僕はまだ・・・この人形師がかけたヒナ人形の呪いが・・・」

そう、ハヤテは昔の人形師のぜぺつとにより女装させられるという呪いを受けている。　その条件もまだ満たしていない中、帰るわけにはいかない。

「だったら・・・」
がしっ。

「へ？」

と目を丸くするぜぺつと。　ナギがその手でぜぺつとを鷲掴みしたのだ。

「お前もわたしのハヤテになにかちよっかい出す気か・・・オイ」
ギリギリ・・・

「あ、ちよ！ヤベ！　スイマセン！　スイマセン！　特に何もありません！　しません！　そんなことしません！」

「だったらさっさと・・・ここからいなくなれえー！！」

とZガ○ダムのパイロットを沸騰させるように叫ぶナギは握りしめたぜぺつとを遠い空へと投げる。

そうするとぜぺつとは啜り泣きをしながらしゅぽん、と何処かへ消えてそれと同時に

ボフィン！

「うわー！」

先ほどまでのウサギヘアーもミニスカのメイド服も消え、いつもの執事服をハヤテは身にまとっていた。

つまり、納得はいかないが呪いは解除されたのだ。

「さてハヤテ・・・そろそろ帰るか」

「は、はい・・・お嬢さま」

と主に促されてハヤテも屋敷へと足を向ける。　呪いもなくなり、

これで自由の身だ。 わざわざ時計塔に向かうという条件もなくなつた。

(これでテルさんも爆発せずにすんだし・・・ま、いつか)

と心の中で納得して、彼は主の後を追う。もう祭りも終わりを迎えるそうだ。このまま帰っても何ら問題はない。

しかし、彼は一つだけ・・・とんでもない事を忘れていた。

そして次回の話は今から数時間前に遡る。

第55話く喧嘩は祭りの華く

時間はハヤテの呪いが解呪される一時間前になる。

「…………ふう」

生徒会長桂 ヒナギクはグツタリした表情で椅子に座っていた。

「いやあ見事な歌いっぷりだったなヒナギクくん」

ぐったりと疲れているヒナギクにクスクスと唯子が笑みを浮かべていた。

「なんで私まで歌わされるハメになってしまったんですか……」

「しようがないだろ、あのバカ千里は見事に三十曲も歌い続けた結果ノドを潰してしまったんだ。しらけた場を盛り上がらせる必要があつたのだよ」

「それで私が何曲も歌わされるハメになったんですね」

ヒナギクは紙コップに入っているジュースをちびりと飲む。

「いいじゃないとても可愛かったわよ♪」

「おや……ヒナギクくんの母上様じゃないですか」

唯子が反応したのはエプロンを身にまとったふつুকしい女性だ。

「あら唯子ちゃん！ 唯子ちゃんも来てたの？」

「ええ、そうですよ。 可愛い後輩なもんですから」

ヒナママの表情はとても穏やかだ。 それは唯子も同じである。

どうやら二人は面識があるようだ。

「ところで唯子ちゃん♪ 新しいフリフリのドレスがあるんだけど着てみない？」

「謹んで遠慮させていただけますか？」

「もう、連れないわね。 こうなったらヒナちゃん！」

「私も右に同じ」

と唯子に続いてヒナギクも却下した。 二人に拒否されたヒナママはぶうくと膨れていた。

「海外から帰ってこれなかったパパの悔しい顔が目浮かぶわ」

「絶対に内緒だからね」

とヒナギクは釘を打つようにそう言った。あまり知られたくないのだろう。

(まあ、ヒナギクくんのコスプレ・オン・ザ・ステージは私が完璧に撮影済みだがな……)

ヒナギクの見えない所でうししと笑う唯子。これを他の人間(ヒナギクファン)に売りつけるといふ外道技があるが必要なものは大切に保管しようと考えていたりする。

「そういえば今日はヒナギクくんの誕生日だっていうのに王子様のハヤテくんはどこにいるのやら……」

「あらやつぱりそう言うことなのかしらヒナちゃん？」

唯子のその一言にいち早く反応したのヒナママは瞳を光らせてヒナギクに迫る。ヒナギクは慌てて手を振ってそれを否定した。

「もう！ 唯子さん、誤解招くようなこと言わないでください！」
(あ、そうだ……あの果たし状)

突然とコナンのようなSEがヒナギクの脳内を掛けたのを機にヒナギクはハヤテに渡されたあの手紙を思い出した。

内容は酷く挑発的、しかしその文面にはなにかしら別の意味があるのではないかとヒナギクは考えているのだ。

(あれはやはり果たし状……？ もしかして二人きりになりたいだけの口実……?)

「あまり悩むのではないぞヒナギクくん」

と考察してるヒナギクの耳に声が聞こえた。唯子の声だ。

「昔の人は言っていた。女は知力や腕力より、だいじにしなければならぬ者があると……」

腕を組みながら唯子はその偉人の言葉をヒナギクに伝えた。

『女は行動力』……だ」

と最後に親指をビシツと立てる唯子はどこか誇らしげにヒナギクに微笑みかけた。

ヒナギクは少し考えた後、何かわかったような表情で

「唯子さん、ありがとうございます。お義母さん、今日はもう先に帰っていて……」

「え？ なにか用事でもあるのヒナちゃん？」

疑問をヒナギクに投げかけるとヒナギクは振り向いてキリツとした表情でつぶやいた。

「私は・・・決着をつけなくてはいけないから」

その瞳はまるで川中島の合戦を前にした上杉謙信、武田信玄の『今日で決着をつけてやる』という雰囲気みたいだった。

もはや武士を前に何も言うことは無い。唯子とヒナママはヒナギクを見送った。

「いやあお義母さん、それにしても以前お会いした時よりも若々しくなられましたな・・・」

「そうなのよー美容院ってすごいわね！ これからも行こうかしら！」

○ 二人はどうやらとても気の合う二人らしい。

「・・・」

グッ。

「・・・モガッ」

ググッ。

『おい早く起きなよべらんめえ・・・いつまで埋まってるつもりだ』

一方で地中に埋められたままのテルは土の中で誰かの声を聞いた。

「ぶはーっ！！！！」

ボソッ！ と地中から勢いよく顔をだしたゾンビ・・・ではなくテルだ。

「ぺっ！・・・ぺっ！・・・くそう、あの野郎手加減なしかよ・・・ってアッーっー！！」

口の中の土を掃出しながら辺りを見渡した。テルはあたりを見渡して絶句する。

「祭りもう終わってんじゃん！ 何この真っ暗な夜!? 俺あのままずっと放置されてたの!? 誰も助けてくれなかったのかよ!? 放置プレイもいいところじゃねエかアアア!!」

そう。彼が地に深く眠りについたあと、何事もなかったかのよう
に祭りは再開されたのだ。土の中に埋まったテルよりもどうやら
周りの人たちは驚異のスルースキルを発動させてあたかもそこに誰
も居なかったかのようにふるまい続けた。

「なんとというシチュール・・・そしてイジメ、ヨクナイ」

『べらんめえ・・・もともとお前が負けたのが悪いのさ』

「そんなこと言ってもお前、あの女絶対人間じゃないって。プラス
ティックのハンマーで一人埋めるか普通・・・ん？」

と違和感なく入り込んできたその声にテルは気づいた。そして
その声の出所である真下を見ると・・・。

黒い塊がそこにはあった。

「ん？」

お互いが視線を合わせて同じ声を出す。

『べらんめえ・・・お前がこの俺に呪いをかけさせた愚かもんだな？

俺はお前に呪いをかけた・・・』

「ボム兵？」

とテルが呟く。その黒い塊にはかわいらしい某配管工の出る
ファミコンゲームの中に登場する爆発物に酷似していた。

その証拠に足もあるし、後ろには起動用のネジがある。

「べらんめえ・・・俺の名前をそんなのと一緒にされちゃあ困るぜ・・・」

「いや、どう見てもボム兵だろ？ ス○パ○リ○オに出てくるあのボ
ム兵だろ？」

「いや、お前どこまでマ○オにこだわるんだよ!? 確かにこんななり
だけどボム兵なんて名前じゃねえから!!」

「じゃあなんて言うんだよ」

とテルが聞いた瞬間、ボム兵はきりつとした雰囲気醸し出しなが
ら渋い口調で言った。

「慕夢（ぼむ） 平田（へいた）・・・」

「名前もそれっぽいじゃねーか!! もうボムって読むからな!? すべ
ての読者さんたちもお前の事はボムって認識したからな!!」

とテルが思いつき突っ込んだところで「チツ」とボムは舌打ちを

した。

「てめえ……自分がどんな状況に置かれたか分かってねえようだなあ……べらんめえ……」

「どういうことだ……?」

と突然と態度を変えたボムが小さい体でテルに向かって言った。

「この俺が現れたってことは……お前が爆発する時間がもう少ししかねえってことなんだよ!!」

「なん……だと……?」

某ジ○ンプ漫画のようなりアクションのテル。

「まさか……ハヤテも?」

「残念だがそいつは関係なしだ。もともと呪いは二つで一つじゃあ無かったワケよ……俺とあのぜぺつとは、別々の呪いであのひな人形に憑いていたんだからなあ!!」

「なん……だと……?」

またしてもこのリアクション。それだけにテルは意表を突かれてそれしか言えない。

「ぜぺつとの野郎はもう逝っちゃったか……数百年間奴の趣味について語られたが……全く持って理解できなかったなあべらんめえ……」(ということはハヤテの呪いは解決したのか……野郎だけ先に解決しやがって……)

心のどこかで憤怒の炎を燃やすテル。当然その矛先はこの場に居るボムへと向かっていた。

「んで? このボムはどうすればなくなるのかな? ネジ巻いて動かせばいいのかな? それともスマブラみたいどこかにブン投げればいいのかな?」

ガシツとボムを掴んだテルは握りつぶすかのような勢いだ。だがボムは平然としていた。

「残念だったな小僧……俺はお前に憑いている身だ。たとえお前が世界の果てまで投げ捨てようと俺はお前のもとに戻ってくるってえワケよ……べらんめえ」

「チツ・・・どうすれば離れてくれるのかねえボム兵」

「フフ・・・動じないんだな・・・簡単なことだ。俺の願いを叶えてくれればいい。とても簡単な願いだ・・・」

「・・・いいじゃねえか。その願い叶えてやるよ。だが俺は魔法少女にしろといってもできねえからな?」

「誰が魔法少女になるかべらんめえ!!」

とボムがツツコむと話を戻して、ボムが願いを口にした。

「俺の願いは妬ましきクソカップルを・・・爆殺させてくれ・・・そうすればお前の願いは解除・・・」

ドゴツ!

とテルはボムが台詞を言い切る前にその足でボムを思いつきり踏みつけた。

ボムは見事に地に埋まる。

「なあにしやがるこのべらんめえ・・・俺の言ったことは分からなかったか?」

「まったく分からん。なんでそんな悪魔の手引きをわざわざ俺がしなきゃならんのだ」

「だって仕方ないじゃん! 俺生前彼女誰も居なかったんだよオ!

アイツらア・・・仲をいいことに人の目の前でイチャイチャイチャと・・・リア充爆発しやがれってんだアアア!!」

なんとも・・・なんともくだらないことだろうか。まさか生前に

彼女ができなかったという無念からこの呪いは生まれたとは流石にテルでも呆れてしまう。

「ダメだこいつ・・・早く・・・なんとかしないと・・・」

もうこのままコイツを伊澄の所へ持って行ってしまえば解決してしまうのではないかとテルは考えていた。しかし・・・。

「だがその願いも今日中に果たせなければお前は爆死する!!」

「ハア!?!」

まさかの真実。ぜぺっととは一緒に呪いじゃなくせに今日中に願いを果たせなければテルは爆死すると言いついてきた。

「さあどうするううう・・・タイムリミットはもう一時間もない

ぞおお・・・」

深く低い声が唸る。ここから伊澄の所へ行つて、果たして間に合うものだろうか？

その時だった。

「あれ？ テルさんじゃないですか？」

後ろから聞きなれた声。そこには呪いを解かれ、執事服姿になったハヤテの姿があった。

「どうしてこんなところに居るんですか？ 屋敷の方に帰ってるものだと・・・」

とハヤテがテルに尋ねるが、テルは目をぎらつかせてハヤテの顔面を鷲掴みした。

「あの・・・テルさん、なんか・・・すつごく痛いんですけど？」

「なあなあ、お前俺に不幸の霊とか憑かせた？ なんでお前が俺より先に呪い解呪されてんの？ だいたいなんでこの時間帯でお前がここに居るワケ？」

「それは・・・説明しますんで、取り敢えず離してください・・・」

ギリギリと軋む音を立てながらハヤテがそう懇願するのでテルはアイアンクローを解除して話を聞くことに。

んで・・・。

「ヒナギクとの約束をすっぱかしてた？」

「はい、もう何もかも普通に終わるものだと思ってベッドに入った瞬間・・・まるで僕のS○E Dが砕けるように思い出しちゃいました・・・頭に手をやるハヤテ。とても簡単に笑いながら言っているがそんな軽い気持ちでいいのだろうか。」

「それよりそのボム兵はなんですか？」

ハヤテがテルの肩に乗っているボムに気付いたのか、指をさして聞いてきた。

「あゝ。俺に憑いている悪霊だ・・・」

ここからはテルからもすっかり説明しなければならない。そし

てすべてが説明し終わった時、ハヤテは理解したかのように頷いた。「なるほど・・・その霊の願いである『リア充を爆発させる』を実現させなければテルさんは爆発すると・・・そういうことですね?」

「その通りだ。理解が早くて俺はとても助かる」

とここでボム兵が割って入ってきた。

「どうでもいいけどよお小僧、タイムリミットはあ・・・もう迫っているんだぜエ? もたもたしてていいのかよお?」

テルは時計に目をやる。日付が変わるまであと三十分。どうにかして解呪する方法を考えなくては・・・。

「やはりここは伊澄さんでは・・・」

とハヤテが一つ提案を出す。

「俺もそう思っていた。取り敢えずアイツにはメールを送っておく・・・ってお前はいいのか用事」

「ああ、そうですね。あまり待たせるとヒナギクさん怒っちゃいますから・・・」

(いや、もう死亡フラグビンビンだからなハヤテ)

敢えて口には出さず、心の中で突っ込んだテルだった。

その会話を聞いてか、ボムが口調を明るめるながら聞いた。

「もしもし君は・・・これから女の子の子に会いに行ったりするのかな?」

「? ええ、そうですが・・・」

とキョトンとした表情で答えるハヤテ。それを聞いたボムの頭の中では・・・

(年頃の男女があ、夜の校舎で会う約束う・・・高校生、あまくい青春・つまりい)

その思考に至った時、ボムの瞳はカッと見開かれ猛々しい大声が叫ばれた。

「よおおおうううしいい!!! おめえリア充だあああなあああ!?!」

「はっっ」

ものの見事に頭にクエスチョンマークを浮かべるハヤテだが、ボムは喋るのを止めない。

「隠すんじゃねエよべらんめえ・・・高校生の男女が夜の校舎でするこ

とと言ったらあ……愛の告白う、そしてそのあとは若さに任せてにやんにゃくん……って相場が決まってるだろうがアアア!!」

「何を勘違いしてるか知りませんが僕は別にヒナギクさんとはそういう仲では……」

「とにかくだあ! 貴様は今すぐ爆破する必要があるって……アレエ!?!」

勢いよくハヤテに飛びかかろうとするがテルの手によってそれは失敗に終わる。

「今度余計なことをしたら口を縫い合わずぞコラ」

「口なんてねえんだよべらんめえ!!」

と返した後、けらけらとバカにするように笑うボム。

「じゃあ僕もうヒナギクさんのところに行きます。呪いの方はテルさん、頑張ってください」

「完全に他人事だなオイ……分かったいけ——」

——ゾクリ。

テルが言葉を言いかけたその時だった。

あの背筋を凍らせるかのような嫌な、記憶に嫌でも刻まれた寒気がしたのは。

「……」

林の奥からコツコツと現れたその黒衣の少女は軽い足取りで彼らの前に姿を現した。

「あなたは……ツツ!!」

ハヤテは思い出した。あのナギの誘拐事件。伊澄の術とは違った能力を持つ少女……黒羽だ。

「今度こそは本命ってワケかい……」

テルの目つきがすぐさま戦闘態勢になる。キリツと目つきは鋭くなり、自然とポケットに手が入った。

「ハヤテ……ここは俺に任せてくれねえか?」

とテル。　ハヤテは驚いて言葉に詰まってしまうがテルは続けた。

「アイツ、お前狙いなんだとよ。　お前の追っかけなんだとよ」

「そんな無茶な・・・伊澄さんがいるならともかく、一人でだなんて」
それを聞くとテルはケツと笑った。

「バーカ。　俺がこいつに遅れなんて取るかってんだ」

「・・・分かりました。　でも無茶はしないでください」

とテルに告げた後、ハヤテは後者に向かって走り出した。

それを逃がすまいと黒羽が右腕を刃に変え、物凄いダッシュを利かせてハヤテに詰め寄った。　距離を一気に縮めて一太刀――。

ガキインツツ！

だがそれを阻んだのは金属音。

「お前の相手はこの俺だ・・・」

黒羽の刃を受け止めたのは細長い黒い鉄の棒。　それが黒羽の一太刀を受け止めていた。

「そう言えばじゃんけん大会では世話になったなあ・・・アレの続きと行こうぜ。　俺はなあ、この世で勝ち逃げされることが大嫌いなんだ」

ニヤリと笑うと、一度パイプで刃を弾いて一度距離をとった。　テルの背後には白皇学院の校舎。　その前にたたずむ彼は最後の砦だ。

今回は以前のように霊刀があるわけではない、加えて伊澄の援護なし。　ハヤテもいないという孤立無援の状態だ。

「さーて、本気の喧嘩としゃれ込もうぜ・・・」

店は閉まり誰も居なくなつた静かな学校で、もう一つの祭りがまた幕を上げる。

第56話 く混迷困窮のふえすていばるく

「うわぁ・・・もう1時半だけどヒナギクさん大丈夫かな？」

時計塔の最上階、生徒会室を前にしてハヤテは一抹の不安を感じていた。完璧主義者のヒナギクのことだ。呼び出しておいて遅刻という宮本武蔵と佐々木小次郎の巖流島の戦いを再現している訳ではないが。

取り合えずお怒りと言うレベルを簡単に超えているだろう。

(もしかしたら扉を開けて一気に突き・・・とか)

しかし、時間をロスしている暇はない。意を決してハヤテは扉を開けた。

「・・・ヒナギクさん？」

櫛の扉を開くとハヤテの目に飛び込んできたのはソファに横になって寝ているヒナギクの姿だった。

「あ、えっと・・・ヒナギクさん・・・？」

「ん？」

その声に気付いたのか、ヒナギクの瞳が開かれた。

「あ、綾崎くん・・・」

——賑やかな祭りも終わり。静まり返った夜・・・

——二人つきり？の誕生日会が静かに始まる・・・。

ドオオオオオオオオンツツ！

「なんか外がうるさいわね・・・」

「そうですね・・・」

この世界で誰よりも青春している時計塔の二人を余所に、こちらの夜の祭りはさらに過激さを増していく。

「ちくしょう、またそれかよー！」

舌打ちしながらもテルは足を動かして黒羽の狙いを定めにくくする。黒羽は動いているテルに対して黒い槍を一斉掃射。

『おういいい・・・あのお嬢ちゃん、なかなか別嬪さんじゃねエかあ？さてはテメエの女かア？』

「この世界のどこに恋人に槍をぶつ放す彼女がいる？」

ニヤリと笑っているかのようにボムが尋ねるがテルは冷静に返答。

物凄い勢いで襲いかかる槍は勢いよく地面に突き刺さっていく。

以前テルを串刺しにするほどの威力だ。当たればすなわち一発

KOだ。

「守りから転じて・・・ツツ」

躲しきつたのを確認するとテルは即座に黒羽の懐に飛び込んだ。

そして愛刀・撃鉄くんMRK2を振りかざした。

「同じパターンはツツ!!」

ガキインツ!

と響いたのは金属音。黒羽に放った一撃は見事に左肩から飛び出た黒い物体に阻まれてしまったのだ。

(クソツ・・・またかよ!!)

一撃が通らなかつたことに苛立ちを募らせるテル。そしてその直後だった。

ドゴツ!

「かはっ・・・!!」

腹部に強烈な激痛。見れば足。黒羽は左手の刃でテルの武器を弾くと、そのまま体を反転させ強烈なミドルキックを炸裂させたのだ。

その威力は絶大で男であるテルを4、5メートルは軽く吹っ飛ばす。

「げほっげほっ・・・やってくれるじゃないの」

猛烈な腹部の痛みにせき込みながらテルは相手を睨み付けた。

あの変幻自在の攻撃と防御。

(相手も間違いなく闘い慣れしてる・・・まる生まれてからその役割であることを命じられたかのように・・・)

まるで戦闘マシーン。それがピッタリかのような力だ。　こちららは前回のような霊刀では無い分、有効打は見つからない。

「・・・なぜあなたは彼を守るの？」

「あ？」

突如として黒羽が口を開いた。

「彼は・・・あなたとは関係はない。　また以前のように邪魔をするなら無駄に傷つくだだけ」

「決まってるだろうが」

黒羽が紡いだその言葉をテルは答える。

「アイツはダチ公だからだ」

「ダチ・・・？」

「ダチってのはかけがえないもんなんだよ。　くさい台詞かもしれないが・・・命の次に大切なものであり、時には命より大切なものだ」

『・・・』
『ようはあコイツがれっきとしたアレよ、ホモなのよ』

ブンツと鉄パイプを振るってテルは構えた。それと同時にボムにも危害が及びあらぬ方向へと飛んでいく。　そんなことも気に留めずテルはポケットに手を突っ込んで何かを探り出した。

「お前にはあんまゆかりのある言葉じゃないようだな・・・だったら見せてやるよ」

そこから取り出したのは1枚の札。　梵語がしっかりと刻まれたそれを鉄パイプに巻きつけていく。　梵語がしっかりと刻まれた

「今日は命の次に大切な日だ。　その覚悟、よく見てろや」

ニヤリと笑みを浮かべたそれを皮切りにテルは駆け出した。　黒羽は同じくけん制のため、黒い槍を発射する。

それをテルは同じく躲していく。　ここまでは先ほどと同じだ。
「オラアッ！」

そして遠心力を利用した一撃が放たれる。　縦のけさ切りが迫る中、黒羽は冷静に左手の刃を翳して受け止めようとする・・・だが。
ガキッ！

「ギツキとは違うぜエー！」

鈍い金属音とともに黒羽の刃は弾かれていた。先ほどは簡単に防ぐことができたテルの攻撃が今度は通っていた。

テルが作り出したこの状況、これは先ほどテルが黒羽に作り出された状況だ。

武器を弾かれてノーガード状態。これを見逃すテルではない。

「ボディーがから空きだぜエー！」

見つけた餌に飛びつくようなハイエナの笑み。それに同等のものを感じた。

脇腹へと放たれる一撃。重く、確実に当たったとされる鈍い音と共に黒羽は後ろへと吹き飛んだ。

「チツ・・・まるで効果なしだよ」

舌打ちをし、その状況を見る。確かに当たった。だがその感触は明らかにクリティカルにはほど遠かった。

「.....」

黒羽は冷たくテルを見据えたままだ。先ほど自身の体を護るように展開された黒い盾は確実にテルの一撃を防いでいた。

「さつきよりも効いただろ？ コレが俺の秘策よ」

スツと見せつけるのは鉄パイプに張り付けた1枚の札。実はコレ、伊澄がいつも使っている札と同じもの。

テルの鉄パイプに張ることにより一時的だが武器を強化できるのだ。

以前使っていた真剣の威力の比ではないが、それなりに霊とかもぶん殴れるようになる。

まあ例えるなら木の棒からキープブレードになってハートレスを倒せるようになったというぐらいか。

「へっへっへ・・・もう簡単にやられたりはしないぜえ、前にも言ったが慰謝料は取ってくれるなよ？ 給料が少ねエンだ」

すかさずテルは再度攻撃を仕掛ける。真上から頭に向かってパイプを振り落としかかると、黒羽は一気に飛び退き距離を取った。

だがその行動を読んでいたかのようにテルはさらに踏み込んで黒羽を追撃。

鉄パイプを横に構えてニヤリと笑った後に、強力な一閃が黒羽に迫る。

「……………！」

右腕と左腕から刃を伸ばした黒羽はその両腕をクロスさせてテルの一撃を防ごうとした。そして……………。

バキーンツツ！

金属の碎ける音が響く。折れたのはなんと黒羽の刃だった。

少しの間宙を舞った後、地面に力なく突き刺さる。黒羽は防ぐことは叶ったものの勢いを殺しきれずに後ろへと吹き飛んだ。

そして翼を広げて空中で受け身を取り、着地する。両腕からはダメージの為か、機械がショートしたかのような電気がバチバチと走っていた。

「ケツ……………外したか　だが次はそうはいかないぜ」

「……………」

悪役顔のテルだ。見事なまでにその笑みはヒール役だ。しかし、状況が状況だけにテルの勢いはまさに破竹の勢いそのものだ。

黒羽は両腕を確かめると傷を確認してそれほどの被害が無いことを知ったのか、両手を降ろした。

「ん？　なんだ？　降伏するなら手をまず上げろって……………」

テルが言葉を切らしたのは目の前の黒羽の体に変化があったからだ。そして先ほどの笑みが消える。

「戦術を切り替える」

そう呟いた黒羽が両腕を前に突き出すとその腕はその変化を遂げた。

「な、なななななあ！　お前、銃だとオオオ!?」

テルはその形状を見て驚愕する。黒羽の腕は真っ黒な銃身の長いライフルのような姿へと変化していた。

「……………攻撃開始」

「なツツ」

向けられたその銃口から火花が飛出し、テルの頬をかすめる。堪らずテルは標的にされないよう走り出した。

「逃がさない」

と続けざまに第2、第3と狙いながら放つ。機械のようなその動きはまるで未来から来た某サイボーグ戦士。

「チクシヨウー！ 卑怯だぞー！ 飛び道具なんてよー！」

反撃したいのは山々だが銃弾が飛び交う中で突っ込みに行くのは流石に自殺行為か。

「ん。 そうだ」

何か一つ策を思いついたか、テルは近くの木の裏へと隠れた。

「.....」

銃撃を一時停止させ、黒羽は様子を見る。一向に動く気配はない。

その銃撃が止んだのを図っていたか、空高くへと何かが飛び上がる。黒羽は即座にその物体に連射。

「かかったな!!」

と、黒羽に向かつてテルが向かってくる。ならば上は何かと確認すれば、なんとそれはテルの執事服だった。

「.....」

穴あきにされた執事服が落ちると同時に黒羽は銃を前方へと構える。

しかしテルは止まるどころかその勢いを殺さず突っ込んだ。

「うおおおお!! 死なば諸共オオオオー！」

ズダンッ！ と放たれた銃弾はテルが間一髪首を動かすだけで躲す。もうテルは鉄パイプを振り上げていた。

続いて第2の銃がテルに向けられる。この時の二人の距離は5メートルもない。

黒羽がトリガーに指を掛けた。

「ハアッー！」

バキッ！

と金属音。トリガーが引かれる前にテルの鉄パイプが黒羽の銃に当てていたのだ。銃の位置はズラされ、引いたと同時に飛び出た銃弾はすぐ近くの地面へと当たる。

「剣が銃より弱いなんて誰が決めたア？」

絶対的優劣を決めている、どの時代だってそうだった。

銃〉剣の凶式。

これは遠距離の型の攻撃が主体の銃に比べて近距離の剣が圧倒的不利なためだ。

しかし、銃はその遠距離の攻撃を可能とする代わりに近距離にめっぽう弱いのだ。

銃が強さを誇るのには相手を近づけさせないという前提がある。

余程の柔軟な思考の持ち主でなければこの状況を打破することは難しい。

だが相手はあの黒羽だ。

「……」

カチャ。

と弾かれると同時にその勢いを利用して回転していた黒羽は再び銃を構える。今度の銃はライフルのような長い銃身ではない。小さな拳銃だ。

ここは勝負の分かれ目、引くか引かずに突き進むか。

——その賭けに勝ったものがこの闘いを制する……ハズ。

パアンツ！ と拳銃の乾いた音が響く。

「ツツツ!!」

その音が響いた瞬間、テルの左肩に衝撃が駆け抜けた。黒羽の撃った弾は軌道を外れテルの片腕に直撃したのである。

だがこんなことで怯んでいるテルではない。

「オオオオオオオオオ!!」

まるで痛みを感じないかのようにその体を更に前へ、前へと進める。

歩みを止めることなく構えたその鉄パイプを深く握りしめながら。

バキッ!

そして渾身の一撃が……決まった。

その一撃は見事に黒羽を吹き飛ばし、その体を地面へと叩きつけ

た。展開していた片腕の盾も破壊して貫通。

「・・・ふう、勝負ありだろ」

左肩を押さえながらテルはそう呟いた。

『おめえさん・・・それってある意味フラグだぜえ』

「あ？ 何言ってるやがる？」

突然のボムの忠告に顔をしかめるテル。だがそれを確証づけるようにボムは向こう側を見た。

「なん・・・だと？」

「・・・」

確かなその一撃を与えても黒羽はまだその無表情を貫いて立っていた。これにはもはやホラーに近いものがある。

パシッ、パシッ・・・

どうやら前回の武器を破壊した時のように両腕から回路がショートした機械のように火花が走っている。無傷ではない。

——叩くなら今。

そんな言葉が彼の脳裏をよぎる。確信はないが相手は顔には出していないが弱っている。無表情では隠しきれないほどのダメージを負いすぎたのだ。

その証拠がああ傷ついた両腕だ。

——相手はハヤテやナギの敵だ。

テルを急かすようにその言葉が脳裏をよぎる。これほどの好機を見逃すわけにはいかない・・・だが。

「もう勝負は付いたろう？ さっさとここから引け」

なんとテルの口から出たのは黒羽を見逃すという言葉だった。

「・・・どうして？」

これには黒羽も疑問を投げる。誰がどう見てもこの状況はテルが有利だ。その状況で黒羽を見逃すことはあり得ない。

テルは忌々しげに吐き捨てた。

「ソナことはどうでもいいんだよ。お互いにできることあねえ・・・

引き分けでいいだろ」

傷の方もテルも左肩を撃たれている。やるせなさそうに鉄パイ

プをしまった。

「……」

「いいからとつとと帰れ。早く俺の前から消えてくれ、俺も早く帰りたいん——」

ガチャ。

「ん？」

聞きなれたその音にテルも思わず見直す。黒羽は性懲りもなく銃をテルに向けて構えていた。

『べらんめえ……小僧、オメエさん油断したぜえ……』
パァン！

ボムのその言葉を皮切りに銃が火花を吹く。テルも下唇を噛んでその来るべき激痛に備えた。

だがその激痛はいつまで経ってもやってこない。

目を閉じていたテルが開くとその光景を確認した。

「……」

「……え？」

どうやら黒羽の銃は不具合を起こしていた。銃声こそなかったものの、銃弾は発射されなかったらしい。

——だが、問題はそこではない。そこではないのだ。

拳銃から何かが飛び出している。なんか小さなモノ。

ぐったりと飛び出しているのは何やら人形のようなものだ。

「何が飛び出してくると思ったら人形かよ！」

『つてかそこは花とか国旗が飛び出してくるのがベターじゃねエかべらんめえ……』

テルとボムがそれぞれ思ったことを呟いていると、その銃口から飛び出していた人形はポロつと地面へと落ちた。

その人形の姿は物凄い黒羽に酷似していた。いや、もはやねんどロイドくらいの大きさの黒羽と言ったあげた方が分かりやすい。

あの長い黒髪もその黒衣のローブもすべてソックリだ。

「どうするよソレ？ ヤフオクにでも売りつけるか？」

『そうだなあ、意外な値段で売れるかもなあべらんめえ・・・』
などと談義していた時だった。

——ピクツ。

なんとその人形の指が動いた。

「え?」

前のめりに倒れていたその人形は起き上がり、体に付いた土を払うとテルたちの方を向いた。

そして右腕を上げて・・・

「やー!」

「・・・・・・・・」

『・・・・・・・・』

テルとボムはしばらくその光景を凝視して沈黙したのち。

『「キエエエエエアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」』

あり得ないくらいに大声で叫んだ。

第57話 執事と生徒会長と小さな人形

「あ、綾崎くん……?」

「あー、えっと……まず、こんばんわですヒナギクさん」

寝ぼけた眼を擦りながらそう呟くヒナギクに対してハヤテは苦笑いで返した。その表情を見てか、ヒナギクは少しばかりひび割れた時計を見る。

「……十一時半?」

少なくともその時計が故障している可能性を覗けば、嘘を言っていないというのも分かった。しかし、その現在の状況を理解したヒナギクは右手に正宗を召喚した。

「へ?」

呆氣にとられるハヤテが驚くのも無理はない。ヒナギクはハヤテに向けて正宗を振りおりしていた。寸でのところでハヤテは正宗を白羽どりする。

「9時に来るんじゃないかったのかしら……綾崎くん?」

「スイマセンスイマセン!!」

物凄い剣幕でハヤテを睨むヒナギクはまだ正宗をハヤテに押し付けていた。まるでこのまま両断してかねない勢いである。

「まあ要するに宮本武蔵気分ってことね……わざと遅れて相手を油断させるっていう……」

「違いますって! その……なんていうか」

「なに? 納得いく理由があるなら聞くけど?」

「その……素で忘れてたというか……」

——ブチイン。

「ダッシャアアアアアア!!」

「のわあああああああ!!」

方向と共にハヤテはヒナギクによって後方へと吹き飛ばされてしまった。

「いたた……ヒナギクさん! どうしたんですか?」

「武器をとれ」

うな大きい瞳と普段の黒羽とは全く想像ができないような天然顔が特徴だ。

『これもまたあ、SONYの技術ウ・・・』

「しかしなんでまたねんどロイドチックな顔だよオイ。これもまたフイグマの策略だろ」

見た目はどう見てもあの某人形会社の作りが一緒なのである。

これではあの某球団のマスコットキャラの立ち位置が危ない。

「やー!」

「なんだ？　もしかしてアレしか喋れないのか？」

「やー!」

『コレもお嬢ちゃんの攻撃と思ってもいいのかねエ・・・』

ボムも推測するかのようには黒羽を見つめる。この小さな人形も黒羽の攻撃の手段と考えたのだ。一方等身大の本物の黒羽はと言うと。

「・・・」

この奇想天外な状況にも眉ひとつ動かさないでいた。

「どうやら違うようだな。コレだけはアイツも予想外だったわけだ・・・」

『やー』

とひよこひよここと歩いてきた小つちやい黒羽はボムの目の前までやってきていた。

『あん？　なんでえ嬢ちゃん・・・』

笑顔の黒羽（人形）に対して挑発するように窺うボム。

『言つとくけどなあ、この作品のマスコットキャラはもうこの俺様に決定したんだよオ！　この座はテメエが末代かかってもお、ぜえつていに渡さねえええつて・・・あるうえ!?!』

ボム兵が舌を巻きながらしゃべっている間に、黒羽（人形）に持ち上げられていた。

『やー!』

『オイ！　テメエ、離しやがれこの野郎ッ　ああつくそう！　足が短くて身動きができねエ!』

短い脚をバタバタと動かしながら抵抗するが全く効果なし。人形の方は笑いながらボムを持ち上げたまま走り回っている。

「えーっと、コレはもう突っ込むっていうレベルじゃねエな」

『んなこと言つとらんで早く助けろおい！』

「はいはい」

とボムが助けをコールしたため仕方なくボムを取り上げた。

ひよいと取り上げられた人形は頭に？マークを浮かべて辺りを見回す。

『・・・？』

「ったく。ここは遊び場じゃねえんだ、これ以上ここに居られるとト○・ストーリーの関係者に訴えられちまう——」

とテルがしやがみこんで人形を指差した瞬間。

「よ」

ガブツ。

人形は口を開けてテルの指に噛みついてきた。

「ぎゃあああああああああああ!？」

『ガウウ！ ガウウウ!!』

「いでででででで！ やべーよコイツ！ マジ痛エマジ痛エ！ 指取れるって！ 指取れるからやめてお願い!!」

指をブンブンと揺らしながら人形を離そうとするが一向に離れない。ならば力づくでもう片方の腕を使うが、大きさに似合わず物凄い力のため引き離せない。

『おい小僧！ 前を見ろイ！』

「うおう！」

ボムの声に気付いて前を向いたとき、黒羽が片腕を剣に変えて襲ってきたのだ。辛うじてそれを横に跳ねて躲す。

『また来るぜエ・・・』

ボムが言うとおりに、黒羽はそこからツーステップを踏んでさらに追撃、テルは片方の腕で鉄パイプを構えようとしたが。

『やー！』

ガブリ。

「ぬおおおおおおお！ コイツ鼻まで噛みやがった!! 離れねえー!!」

その間にも黒羽が問答無用で距離を詰めてくる。またしてもテルは何も出来ずにその攻撃を躲すしかなかった。

「この野郎め！」

と、ようやく噛みつきが終わったのを見計らってテルは人形をぽいっと投げ捨てた。その人形は黒羽の掌にスポツと収まった。

「チクショウ・・・散々だぜ！ おいボム、俺の鼻大丈夫？ 取れてない？」

『ああ、大丈夫だ。むしろそこら辺噛みつかれたせいで美形になったんじゃない？』

「え？ ウソ!? どのへん？」

と緊張感がないのはいつものことだが、テルは改めて黒羽の方を見た。人形の方は掌で腰に手を当てて笑っている。

『やー!!』

「なんでドヤ顔なんだよ。可愛い顔してエグイことしてくれるじゃないの」

テルも鉄パイプを構える。今度は本気のような。

『やー!!』

ソレを見てか、黒羽の人形もどこからともなくあるものを取り出した。

「な、洗濯バサミ？」

『野郎・・・どっから出しやがった』

などと突っ込んでいる二人。人形はニヤニヤと笑いながら洗濯ばさみをバチンバチンと鳴らしている。スプリングが強く、なかなかの締め付け具合がありそうだ。

『やー!!』

「・・・なんて言ってるのアレ？」

『任せろ。同じマスケット同士、言語は違えど心は通じる。翻訳してやるぜ』

ボムが人形の言葉の翻訳にかかった。

『やー!』

『なになに……』この姿で私の居場所をかく乱して奴を驚かしてやるぜ!』

「く……あの小さいサイズは見つけるのが厄介だからな」

『やー!』

『「ついでにこの洗濯バサミでお前の股間を挟んでやってもいいんだぜ!』』

「な……なんだと?」

なんと小っちゃい黒羽（もう後半はチビハネでいいや）は事もあるうに男の急所を容赦なくギロチンするという計画を立てていた。

「こいつ……なんて恐ろしい奴だツツ」

股間をひそかに抑えるテル。もはやチビハネは小さな死刑執行人だ。

恐怖の所業をテルは防ぐことができるのか!?

「取り敢えずカバデイだ!」

『なんでそうなる!?! この小さなちびっこもやるわけが……』

『やー!』

『やるのかよカバデイ! もう何が何だか分からねエ!』

テルの提案に元気よく手を突き上げたチビハネにボムが突っ込んだ。

「……」

もうシリアスな雰囲気がぶち壊されているこの状況で黒羽はじーつとその光景を眺めていた。

○

場所は変わり、鷺ノ宮宅。 和式の豪華な日本庭園ではきれいな満月を見上げるラインと伊澄の姿があった。

「しかし、祭りももう終わってしまったのか。 祭りにしかない限定品とか欲しかったのだが……」

「もう、また今度の祭りに行けばよいのでは? しかし……呪いが解

けてしまうのがハヤテ様だけと言うのは誤算でした」

「ああ、まあ呪いが掛かっている少年執事の方はそんな危険に巻き込まれることは無いだろうからな」

「ええ。まさか今日中に爆発と言うのはありえませんか」

「いやはや、そのまさかの可能性を見逃していた伊澄であった。そしてリインがふと気づく。」

「そう言えば、決闘のときどうして武器持参なんてことをかいたのか……」

「それは……その、武器勝負なら相手の武器を落としてそれで決着がつきますし……そ、それに……」

そういう伊澄は次の言葉を発するのになんか少しだけモジモジしながら説明した。

「それに……素手だとほら……肉体的接触があるというか……」

「なるほど……君は意外と……」

「い、意外とってなんですか意外って！ 成仏させますよ！」

と、顔を赤らめて伊澄はお札をブンブンとふるう。それに反応してリインの体が少しばかりか薄くなった。　すぐさま伊澄が冗談と札をしまう。

「すまん、冗談にしてもやりすぎだと思う」

「スイマセン」

謝る伊澄。　そして、話題を変えるようにリインが伊澄に尋ねてきた。

「そういうえば、時計塔で二人が無駄な争いをしているようだが本気で戦うと勝つのは一体どっちなのか？」

今行われているもう一つの戦い、テルと黒羽の事なんてこれっぽちも考えることもなく、ハヤテとヒナギクの話題になった。

普通に考えてみれば片方は完全無欠の剣道娘、片や、車に轢かれてもロボットに攻撃されても全然だ異常な執事。

武があるのはハヤテだろう。　しかし、伊澄の見解は違った。

「武器での戦いになれば、恐らくハヤテ様が負けます」

「ほう、それは彼が女性相手に本気を出せないということだろうか？」

「まあそれもありますが、生徒会長さんには木刀・正宗を渡していますので……」

木刀正宗、それは所有者の潜在能力を最大限に引き上げる鷺ノ宮家の宝具。どのくらい能力が上がるかと言うと……

「00ガンダムがピンチの時にトランザムを発動した時くらいの上昇っぷりです」

「ふむ。なるほどな、分からん」

取り敢えずめちやくちや強くなるんです。

「なので、木刀正宗を持っている生徒会長さんにはハヤテ様の動きがすべて見えます」

○

「そこに直れエエエエエ!!」

ブンツとヒナギクが正宗を振るうたびにハヤテを吹き飛ばすほどの剣圧が発生する。周りの物もいくらか吹き飛んだ。割れ物がないのが奇跡だ。

「まったく！ あなたのお嬢様はしっかりと覚えていてくれたのに！

ホントにうっかり者の執事さんねエ!!」

「のわあああああ!!」

怒りのままに横へ正宗を薙ぐ。風が巻き起こり、ハヤテもそれに巻き上げられた。後方へとバランスを崩しながら着地する。

(どうしよう……物凄い怖さだ……この怖さは原作を超えている！
一体どうすれば……ツツ)

まさに絶対絶命。今は辛うじて躲すことができているが、いずれは捕まってしまう。そうなってしまうえば痛いという痛覚的なものは済まされない。それほどの地獄が待っている気がすると感じた。

その時だった。

『そんなときは必殺技だ……フ○ースを継し者よ』

(え……誰ですか?)

まるで脳内に話しかけるような、男の声がハヤテには聞こえた。
『ほら、俺はここだぜ?』

と声のする方へと目を向けると・・・居た。

良い体つきの青いつなぎの男の姿がそこにはあった。

「・・・いや、だから誰ですか?」

『フツ・・・俺はあれだよ、漫画で言う心理描写の天使と悪魔の葛藤みたいな、まあ必殺技の化身みたいな? 俺ははってん場の化身だけだ』

「いや、はってんばってなんですか? 突っ込んだら負けってやつですか?」

『まあ、そんなことはどうでもいいんだよ』

「無視かよ」

つなぎのいい男はハヤテに構わずどんどん話を進めていく。

『いまこそお前は使うべきだ・・・いい男のみが使うことを許される秘儀のテクニックを・・・』

「いや、何勝手に名前つけてんだよ。 僕の必殺技蹴りだけど」

『合言葉はウツホ、いい男』

「いや、それ自分が言いたかっただけじゃん!」

『胸の大きさが戦力の決定的な差であるということを教えてやりなよ・・・それよりもお前、男だってわかればなかなかいい男だな・・・どうだ今度時間があつたら一緒に——』

——ボギヤ!

いい男が台詞を言い終わる前にヒナギクの死の一閃が男に炸裂した。

『アツーーーーー!!』

男は謎の奇声を上げながらはるか彼方へ飛んで行った。

「うわー! どこへ行くんですか謎の人オオオ!!」

「勝負の最中、何ごちやごちやと話をしているのかしら・・・?」

正宗を払うと、ヒナギクはその距離を縮めてくる。

「だいたい誕生日の約束をしたのは綾崎くんの方じゃない!!」

(アレ? なんだろうこの感じ・・・?)

ふと正宗を握っている手にいつもより力が入るのが感じた。しかし、同時に体の奥でもやもやとしていたものがうずいてくる。

「ここ数日、私がどんな気持ちでいたのかも知らないで!!」

(あれ?)

「すみませんすみません! ですが、ホントに色々とあつて・・・!!」

「色々とあつたからつて・・・なんで・・・私との約束は・・・!!」

(ちよつと・・・何を口走っているの私?)

何故だろうか。その疼きを静めるかのごとく、自分の口からは思っていたことがどんどんと湯水のように溢れてくる。

「そりゃ女の子らしくもないし、可愛くもないのかもしれないけれど・・・!!」

(感情のコントロールが・・・効かない!!)

ため込んでいたすべてが吐き出されていくように、それを止める術は自身であるヒナギクも知らなかった。

「ただ謝つていれば済むと思つてる!!」

気づけば正宗を振り上げ、ハヤテの脳天目がけて振り下ろしていた。

「すみません! ホントすみません・・・つて、アレ?」

と痛恨の一撃がやつてこないのに気付いたハヤテはヒナギクを見ると、ヒナギクは泣いていた。

そして一瞬だけぐずるとハヤテの胸にヒナギクが倒れこむように顔を押し当てる。

「二年で・・・一年で一番大事な日なんだから・・・それくらい・・・覚えておきなさいよバカア・・・」

——カラン。

と力をなくした手から正宗が落ちる。そのまま姿を消してしまった。ひたすらハヤテの胸の中でなくヒナギクに対してハヤテは。

「すみません・・・ほんとにすみません・・・」

ただ謝ることしかできなかつた。

○

一方その頃……。

「カバデイカバデイカバデイ」

『やーやーやー』

なんと時計塔の雰囲気をぶち壊すかのようにマジでカバデイを繰り広げていた。

『もうお前らマジでカバデイ繰り広げるな』

「カバデイカバデイカバデイ……」

『やーやーやーやー』

『ダメだこりや、このちびっこ……もしかしてアホの子か？』

「……」

黒羽と共にその光景を見つめるボムはもうどうにでもなれという感じのため息をついた。

第58話く意外と近くにそれはあるく

前回のアナコン！前回のお話で起こった3つの出来事ッ！

一つ、黒羽から小さな人形が生まれる！

二つ、テルは闘いをそっちのけで人形とカバディを始める！

三つ、ハヤテとヒナギクの争いは意外な結果に。泣き崩れるヒナギクにハヤテは……。

第58話く意外と近くにそれはあるく

「はい。紅茶が入りましたよヒナギクさん」

静まり返った生徒会室、ソファに座ったヒナギクの前のテーブルに紅茶の入ったティーカップが置かれる。

「……」

「あ。お腹とか空いています？ 材料も軽くあるみたいですし何か作りますよ？」

無言のままのヒナギクに対して、ハヤテはにこやかに作業を進めていく。ヒナギク本人にその言葉に返答する余裕がないとは知らずに。

そんなヒナギクはハヤテに見えない所で顔を赤くしていた。

(ふ……不覚だわ！一生の不覚ツツ)

ヒナギクが心の中で思うのはつい先ほどの喧騒の中で、敵のハヤテの目の前で泣き崩れたのだ。

(あんな事、私としたことが……あんなことを——!!)

常に勝ち続けて上に立ってきたヒナギクが戦いの中で泣き崩れて戦意喪失……それ相応の屈辱だろう。

「いやあ、怒られておいて言うのも何なんですけど……ヒナギクさんにもああいう、乙女チックな一面があったんですねく」

(いっそ私を殺して……)

テーブルに突っ伏して拳を震わせるヒナギク。ライフがゼロの状態ですらにダイレクトアタックを食らった気分だ。

(だ、ダメよ！ このままでは負けっぱなしだわ！ 何に負けてしま
うのか分からないけど、とにかくこのまま負けてはいけないのよ！)
もはやここまで来ると負けず嫌いも通り越してしまっている気が
する。

「で!? プレゼントは!? プレゼント!? 素敵なプレゼントとやらをくれ
るんでしょ!?!」

と口調を強めながら飛び出た言葉はもはや逆切れ気味だ。

「へ?」

ハヤテは質問もそ

うだが、ヒナギクがなぜ切れているのか分からなかった。

ヒナギクはさらに勢いをつけてナギから渡されたプレゼントを見
せた。

「ちなみにあなたのお嬢さまは・・・この・・・!!」

「・・・この?」

「・・・えっと、なんだっけ・・・ブ、ブル・・・」

と時計の名前を言おうとしたが、それらの知識に疎いことが災いし
たかそこで言葉が詰まってしまった。

「なんか読めないけど可愛い時計をプレゼントしてくれたわ!! 果た
してこれに勝つことができるのかしら綾崎くん!?!」

一体何の勝負なのか、その意味が分からないままのハヤテであっ
た。

「まあどんなルールなのか分かりませんが・・・」

そしてハヤテがポケットを探り出す。

「むっ!・くる気ね!!」

とヒナギクが何故か戦闘体制をとる。 はてはて、一体何が飛び出
てくるのか期待しているのか。 きつとナイフ、ワルサー、ロケラン
とかが飛び出てくると予想しているのか。

「はい♪ どうぞぞ」

「え・・・?」

と差し出されたのは重火器とかでもない、小さなかわいらしい袋

だった。

「これ……は？」

「クッキーですよ。手作りです。 ケーキは他の人がもつと豪華なものを用意すると思ったので。 あえて裏を狙った感じで……って、あのヒナギクさん？」

「へ？あ……なに？」

ハヤテが説明を中断したのはもらった後のヒナギクの反応だった。クッキーを見て、何故か少しだけさびしそうな雰囲気が見て取れたからだ。

頬をかきながらハヤテが聞く。

「ルールはよくわかりませんが、これはもしかして負けでしょうか……？」

「い……いや、そんなことないわありがとう。 ありがとう!!」

と慌てて返事するヒナギク。 そしてすぐに視線をクッキーへと戻した。

「ただ……ちよつと思い出しただけで……」

その表情からはあまり思い出さなことを思い出したかのような表情。 ハヤテは気まずくなつたか話題を振った。

「ちなみに僕の家はバカみたいにビンボーだったから……ケーキの代わりにクッキーのひとつかけらという絶望感漂う誕生日もありました」
ヒナギクの脳内では暗い部屋でろうそく一本の光でクッキーを前にしてしくしく泣いているハヤテの姿が浮かんだ。

「これはなかなか悲惨な絵面ね」

とヒナギクがそれを聞いて、またしても表情を曇らせた。 視線はやはりあのクッキー。

「でも……わたしもあつたわ」

「え？」

「ケーキの代わりにクッキーひとつかけら。 プレゼントはちっちゃなヘアピン一つなんて誕生日が……」

その話を聞いて、ハヤテは思ってしまった。 白皇の生徒はみなお金持ちの生徒だ。 ハヤテはいつしかヒナギクの家に行ったときも

一般人が住むには立派な家だったのでその部類ではないかと思っ
いたからだ。

「い……意外ですね。 あんなお金持ちなのに……」

「ええ。 だって……あの親は」

（私……どうしてこんな話を……）

別に今はさっきの喧騒のような感情の高ぶりがあるわけではない。
なのにこの話をしてしまうのは一体なぜだろうか。 その謎をヒ
ナギクは分からなかった。

そしてヒナギクから放たれた一言。

「私の……本当の親ではないから……」

「……え？」

ハヤテはその言葉を聞いた瞬間、何を言っているのか分からなかつ
た。 しかし、やがてその意味を理解する。 それだけにヒナギクが
言った言葉がある意味信じられなかった。

「私の本当の両親はね、私の六歳の誕生日前に、8千万の借金を子供に
押し付けて居なくなってしまったの」

またしても、ここで話し出してしまう自分がいる。 どうしてか、
思い出したくはない記憶なのに。

「まあお姉ちゃんがあの性格で借金はどうかしたんだけど。 その
あと引き取ってくれたのが今の桂家の人たち。 私のお義父さんは
お姉ちゃんの小学校の先生。 今、先生はやっていないけど……ずつ
とお姉ちゃんの事きにしてくれていてね……」

——何か……理由が理由があるんじゃないかって思わなかった
？

（あ……それである時）

あの放課後のとき。 ハヤテはヒナギクが自身に聞いてきた質問の
意味がようやく分かった。

「一緒に連れて行ってもらえなかったのは……何か仕方ない理由
が……」

その時に幼かったヒナギクを連れて行かなかったのは、もしかした
ら巻き込みたくなかったのかも。 ヒナギクは感が続けて

いた。数年間、自分の親が置いていったのには理由があったのではないかと。

「・・・あの、ヒナギクさんは今のお母さんの事・・・」

この意外なヒナギクの真実に、ハヤテは質問を投げかける。ヒナギクはすぐ反応した。

「好きよ！大好き！　大好き・・・だけど・・・」

声の力強さからしても、表情から伝わる必死さは本当の思いだ。しかし、すぐに言葉に詰まってしまう。

「・・・本当のお母さんのことも・・・大好きだったから・・・」

自分を置いていった親の想い出は忘れがたい。しかし、今自分を支えてくれている義理の母もまたかけがえのない存在だ。どっちが好きかと聞かれたとき、選ぶことはヒナギクにはできないだろう。

（私も・・・一体どうしてこんなに話し出してしまったんだろう。どうあがいたって時間が戻る若じやないのに・・・解決するわけがないのに・・・バカだ）

一人でヒナギクはここまで秘密を喋った自分を責めていた。

「・・・世の中にはいろんな人がいるんですね、ヒナギクさん」
「え？」

ヒナギクも突如のヒナギクの言葉に戸惑う。ハヤテはそのまま続ける。

「僕は自分の親がどんな理由があつたとしても一生許せないことには変わりません。でも自分の事も分からず、自分の親が何処に居るのか、その親がどんな人だったのか、分からない人だっています」
「・・・それって」

「でも・・・」
とヒナギクの言葉をハヤテが止めた。

「僕もヒナギクさんも、自分の親に対する想いは異なるかもしれませんが、覚えていらっしゃるですよ。それは忘れてはいけないと思います。

過ごした時間、そこから生まれた思いは尚更・・・」
「・・・」

と、ここでハヤテがゆっくりとカーテンを開き窓を大きく開いた。同時に夜風が中へと入ってくる。

「あの・・・ちよつとこつちに来てもらえますか？」

「へ？」

そつとその先へと誘うように優しくハヤテはヒナギクの手を取る。

「え!? ちよつと!!ダメよ!! テラスは! 私・・・!!」

この人は自分の高所恐怖症を知らないのか。当然のようにヒナギクは抵抗した。

「はは。大丈夫ですから」

何が。と言いたくなるがヒナギクは目をつぶりながらも少しづつテラスの方へと歩んでいく。

「ダメよ!! 知ってるでしょ!! 私が高いところ苦手なこと!!」

「僕がしっかりつかんでいますから。目を開けてみてください」

そんなに怖がる自分の姿が見たいのかと、怒りを抱くヒナギクだったが。勇気を出して、そのハヤテの言葉を信じてゆっくりと瞳を開いた。

「・・・すごい」

そこに広がる景色。都会を照らす東京のネオン。それだけでもこれほどもない絶景だというのに、空には宝石をちりばめたような星が輝く。

それは目に映る景色がプラネタリウムのようなようだった。

「この風景は初めて会ったとき、ヒナギクさんが僕に見せてくれたものです」

勿論覚えている。あの時は弁当を巡っているいろいと大変だった。

「理由はあつたかもしれませんが、無かつたのかもしれない」

空を見上げるハヤテは少し視線を上へと移した。空には数えきれないほどの星。

「人から見ればずいぶん不幸に見えるかもしれませんが、心に深い傷もあるのかもしれません」

(どうしてだろう・・・私、高いところに居るのに、全然怖くない・・・
なんでだろう)

彼が支えてくれているからか？ 話を聞いてくれたからか？

「でも・・・今いる場所は(ここ)は・・・それほど悪くはないでしよう？」

「・・・」

(あ・・・今、ようやく分かった・・・)

どうしてこんな簡単なことに気付かなかったのか。

(私・・・この人の事がスキなんだ)

親の事を話したのは単なる気まぐれとかではない。

ただ単に怖いところが克服されたからではない。

全ては自分の隣にいるだけで安心する人がいるから。

好きな人がいるから。

(スキになると・・・居なくなってしまう気がする。 そんな思いが何処か怖くて・・・)

その見えもしない恐怖から自分は目をそらしていたことに気付いた。

「私・・・バカだな・・・」

「へ？」

「この景色と同じ。 側にあつたのに・・・怖くて見れなかったなんて・・・」

自分が求めている素晴らしい景色は。 こんなに近くに。 その手を伸ばせばすぐにでも手に入る距離にあつたのだ。

「今も・・・怖いですか？」

とハヤテも落ち着いた物腰で、優しい口調で聞く。 ヒナギクは少しだけ下を向いてハヤテを見ると微笑を浮かべながら答えた。

「怖いわ。 でも・・・悪くない気分よ」

夜の風と共に・・・ヒナ祭り編も終わりを告げ・・・
ない。

○

一方、ハヤテ達がテラスへと顔を出したその下ではもう一つの祭りがおこなわれていた。ごく小規模だが。

「よっしゃ勝ったアアー！！！！」

『やーーーーー！！！！』

とここで主人公、テル、大きく両手を突き上げてジャンプ。チビハネは頭を抱えながら地面を叫びながら転がっていた。

「ついに……俺は……勝ったんだ」

荒い息を吐きながら、テルはその熱い戦いを振り返る。なんでこいつらカバデイしてんの？ と思った方々は前回を読んでね。

『ようやく終わったか……』

「おうボム。ああそうだ。俺は勝ったんだ、あの長い戦いから、俺がこの戦いで得たものは大きい。これから先の人生で大いに役立つことだろう……」

と小さな棒ファミコンゲームの爆弾の形をした物体、ボムにテルは親指を立てる。それを見てか、ボムはため息を小さくついた。

『おーい小僧、オメエさんがカバデイやっている間にタイムリミットはもう迫ってきてるぜえい』

「……え？」

『いや、え？じゃねえよ。冗談でもないし嘘でもない』

「いや、ちよつと待てよ。え？ それって俺の命があと数分くらいの灯ってことか？」

『正確にはあと2分だ』

「いやああああああああああああああああ！！」

頭を抱えてテルは空へと向けて叫んだ。いや、明らかに自業自得だろ。

「なんてこったツツ 俺はどうしようもない、救いようのない男

だツツ！ 簡単な・・・簡単なレースだったのにツツ!!」
チクシヨウが!! と思いつきり地面を叩きつける。しかしその過程はあまりにも馬鹿らしい。

『悔うしいいだろうううう・・・お前は俺の為の花火となるんだよう・・・』
フツフツフ・・・という笑いがテルをイラつかせた。だがここで熱くなっても仕方ない。もてる限りの知力を生かしてこの危機を脱することに努めた。

「さて、ここで読者に問題だ。この絶望的な状況でどうやって呪いを解くか？」

最後のくらい自分でやれと言いたくなるが、ここで皆さんに三つの選択肢。 ぜひこの中から当てていただきたい。

答え①ハンサムなテル君は突如呪いの方法を咄嗟に思いつく。

答え②伊澄が来てくれて助けてくれる。

答え③呪いできない。 現実是非情である。

「俺がマルをつけたいたいの②だが期待はできねエ。あの伊澄が、俺がこんな状態になっていいるなんて気づいている訳がないからだ。まず白皇たどり着けない。」

ちなみに②はもはや説明しなくていいのではないか。上の奴らもいまからこつちに来るのに間に合う訳がない。
つまり・・・

「答え——③、現実是非情である・・・あばよみんな」
『やー』

『ん？なんだアまだいたのかこのクソガキイ。マスコツトの座はぜってえい渡さねえって・・・ん、あるうえ？』

キイキイ・・・

とボムの背中では何か金属が鳴る音。一定のリズムで発生するその音はボムの背中の中のネジだった。

チビハネがまるで珍しいものを見たような笑顔でボムのネジを回していく。

「こ、このクソガキイイイ!! 俺のネジになにしやがる!! ちょ、マジでやめて! それやられたらオイラ……」

『やー!』

——カチツ。

ついにネジは回るのを止め、何かの合図のように歯車がかみ合った音がした。

「……?」

数秒経たつと、ボムの体に変化が起き始めた。小さな黒い体がプルプルと震え、下の部分からは煙が噴き出してきた。

「お、オイ! いったい何が起きてんだ!？」

『このクソガキ! 俺の唯一の解呪方法を何故知ってやがったアアア!!』

テルが声を言う前にボムの体はゆっくりと上昇していく。まるでロケットがゆっくりと上がっているようだ。

『やー!』

下を向いたボムは手を振りながら笑顔ではしゃいでいるチビハネを見ていた。

『やー! じゃねえんだよ! テメエ末代ま呪ってや——うおおお おおおおおお!』

ボムが怒鳴る前に吹き出していた煙の量がさらに多くなり、物凄い勢いでボムは上昇していった。

テルが下からボムを眺めていくとだいたいたい時計塔の上を越えたあたりで。

『ぶるああああああああああああああ!!』

ボムの叫び声が響きわたる。そして次の瞬間。

どっぱーん。

夜空に満点の光の花が咲いた。

しかも一度ではなく、数十回ほど弾けて多種多様な広がり方と美しい色合いだ。

「そういえばアイツ花火師だったんだっけ……無茶しやがって」
美しく咲き誇る花火を見ながらフツと小さくテルは笑った。彼はこれで成仏されたいらしい。

そして時計塔の上を見ると光に照らされてハヤテとヒナギクの姿が見えた。二人とも突然の花火をみて楽しそうに見入っているようだ。

「あー、そういえばアイツのプレゼント買ってなかったわ。ま、これでいいだろ」

「……」

と皆さんここで思い出していたきたい。

背後霊とも呼ぶべき存在がいるということ。テルとチビハネがカバディを始めてからずっと無口を貫き通してきた黒羽だ。

「んだよ。またやろうってのか」

とテルがやるせなさそうに言う、黒羽は花火を見ながらワイワイと騒いでいるチビハネを両手ですくい上げた。

「今日はここまで」

『やー！』

とチビハネがテルに向けて指をさす。黒羽はゆっくりと踵を返すとそのまま姿を消していった。

取り敢えず今日は帰ってくれたということなのだろうか。

「んー。全然ワケわかんねえんだがいいのか？……つと」

とテルの足がふらつく。そのまま地面へと座り込んでしまった。

「はあく疲れた。尋常じゃねエなこの札」

テルはため息をつきながら鉄パイプに張られていた札を一枚はがしていく。実はこの札、都合よく貼った物体を強力な武器に変えるだけではない。

当然その武器を扱う人もものすごい霊圧にあてられるのだ。しかしその反動はすさまじく、テルでもこれだけ疲弊してしまう。 霊感

もなく、特に特別な力もないテルが黒羽に対抗するにはもはやこれしかなかったらしい。

簡単に言えばドーピングを使っていると言うことだ。副作用は体にかかる負担。

ちなみに一枚にかかる負担はだいたい一般人がフルマラソンをしたくらいの疲れ位で済むと伊澄は言っている。

「ま、なんとかなるって・・・さて帰りますか」と少しばかり重い足取りながらもテルは帰路についたのだった。

○

——翌日。

「で？ 結局ヒナギクにプレゼントは渡したのか？」

「はは、でもクツキーですよ？」

ナギと昨日の話をしながらハヤテ達は登校していた。そのハヤテの隣には寝ぼけ顔のテルがいる。

「はあくこっちはまだ昨日の疲れが残ってるっていうのによお、翌日授業つてもう死ねって言ってるもんじゃねエか」

大きく欠伸をするテルは夜中に帰ったのはいいが体の傷や改造鉄パイプの疲労がまだ残っているようだ。

「いやあでも何事もなくて良かったですよ。それにしても昨日凄い花火があがったんですよ、物凄い綺麗で・・・一体誰がやったんですしようね？」

「さあな」

空を見上げて散っていったボムの姿を浮かべる。よく雲を見ると、その雲は偶然ボムの形をしていた。

「アイツ・・・無茶しやがって」

「え？」

「いや、なんでもない」

「おっはよっ!!」

と感慨にふけっているテルをよそにハヤテは後ろの女子に背中を叩かれていた。笑顔のヒナギクであった。

「ヒ、ヒナギクさん……」

「相変わらず朝からさえない顔しているわね〜」

「ほっとけ」

とテルがダルそうに返した。

「朝からそんな景気のない顔していたら、いいことないわよハヤテくん……じゃ、またね!」

「アイツ俺は無視かよ」

「ああそう言えば……」

と一応不幸枠のテルが少しだけ表情を曇らせていた時ピタリとヒナギクが止まった。

「テル君……あの手紙の事なんだけど……」

「手紙……?」

ハッ! テルは思い出す。ヒナギクに送ってしまったあの恐ろしい内容の手紙を。

思い出した瞬間、テルの体からは尋常じゃないほどの汗が流れてきた。

「いやあもうほんと大変だったんですよ。ちよつと乱闘沙汰になってその誤解を解くのにビックリしました」

ハヤテがあははと笑いながら言うが、対してテルはとんでもない状況に陥っていた。

「お前……まさか全部……」

「はい、喋ったらスツキリしたように機嫌がよくなりました」

こ、コイツ……やりやがった。

「手紙の事を思い出したらなんかすごいイラついてきてきちゃったダメだな私」

「いや、イラついてるとかの次元じゃねエよそれ! なんで笑顔なんだよ! その笑顔逆にコエーよ! それになんでいつの間にも正宗だ

してるの？ 何に使うのソレ？ 芝刈りにでも使うんだろ？なあ會長!!」

「だからここで・・・その場に直れエエエツツ!!!」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「大丈夫！ 命なんて取らないから！」

襲いかかるヒナギクは血走った・・・いや、もはや悪魔に目覚めたかのような低い笑い声をだしながら正宗を振るう。

「お前忘れてると思うけどそれ真剣並みの切れ味だから！」

「峰打ちで済ませるから止まって！」

「止まれるかアアア!!突きばつかしてきてるのに峰打ちとか関係あるのかよオオ!!」

そんな死にももの狂いの逃走劇をナギとハヤテは何も見なかったというようにその場をそそくさに去っていく。

今日も白皇学院は平和です。

——後日。

「何してるのヒナ。 テラス付近で体を震わせて・・・」

「美希・・・いや、治ったんじゃないのかと思って・・・」

結局、いまだに高いところは苦手である。

ヒナ祭り編・・・完ツ!!!

第59話　男も女もお見合いする時期は決まってる

）

時間は朝の8時。　三千院家で物語は始まる。

「お見合いすると・・・絶対に結婚するのかな!？」

「・・・どうしたんだ一体?」

ワタルがナギに慌てた表情で問いかける。　ソファにて向かい合っている二人は片方は焦り、片方は目を細めていた。

「いや・・・その・・・」

そう呟くワタルはとても思いつめた表情である。　そして一言言い放った。

「サキが明日お見合いするって・・・」

時は遡り2日前。　これはワタルが知らない出来事。

一軒の飲み屋で起きた話だった。

「「かんぱーい!!」」

と日ごろの疲れ、ストレスを忘れさせるような意気揚々とした声と共にグラスがカチンと音を立てた。

「で?　どーなのよサキ?」

「そーそーどーなのよ最近さあ・・・」

と二人の女性に詰め寄られる人物。　まぎれもなくサキだ。　おそらく3人は同級生か女友達かそのどれかだろうか。

そして話は戻り、質問されたサキは目を細めながらビールをテーブルに置く。

「どうなのって・・・秋子さんに静子さん、それはこっちの台詞ですよ。

お二人とも就職はどうしたんですか?」

「な、ニートが犯罪者ともいう気!」

「私たちは自分探しの旅をしているの!!」

と見事的を射ぬかれたように二人はサキに反論した。　　どうやら二人は職が無いらしい。

「そんないつも親に言われているようなことなんてどうでもいいのよ!!」

「女が集まって『最近どーよ?』って言ったらさあ・・・」

静子が意味ありげにニヤニヤしながら言った。

「男の話に決まってるでしょ?」

「は?」

「どうなの、彼氏。　いるの?いななの?」

疑問を浮かべたサキ。　いわゆる一つのガールズトークである。

まさしくそう言った類のお話。

「何をそんな・・・彼氏なんていりません。　だいたい仕事が忙しくてそれどころでは・・・」

「ずいぶん生活くさいセリフねエ・・・」

と二人は少しばかり興ざめしたかのような視線を送る。

「まったく・・・そんなんじやイイ男に相手にされないわよサキ。　ア
ンタ十分眼鏡でメイドっていう属性があるんだからいい線イケるつ
て」

「静子さん、属性とかは関係ないですよ。　それにご心配なく。　イ

イ男には十分相手にされてるはずですから」

「ほう・・・」

ビールを片手に放った先の一言。　それに食らいつかない大人の女ではない。

気づけば二人とも物珍しいものを見つけた猫のような目になって
いた。

「え!?!　なにになに!?!　その発言!!　やっぱ彼氏いるの!?!」

「詳しく聞かせてー!　言わなきやアンタには吐くまで付き合ってるわよ!!」

「い!!　いや、それはその・・・!!」

これにはしまったとしか言いようがないサキであった。その後、何とか理由やらを並べてその話題を切り抜けることには成功したものの……

(しまった……こんな遅くなるとは……この時間では中野坂上に帰る電車が……)

店を出て帰ろうとした時には既に終電を迎えていた。とても間に合いそうにない。もはや日をもまたいでいるという状態だった。(仕方ありません。若に心配化かけないように電話して……今日は実家に泊まりましょう……)

とポケットから携帯を取り出して、ワタルへと電話をかける。そしてそのことをワタルへと伝えた先だったが。

『あつそ。帰ってこないんだ』

と、何とも温かみもない返事であった。

(……)

「あの……なんか嬉しそうですね」

『別に？ 夜遊びしても怒られねーとか思ってたねーよ？』

ワタルの言葉からは少なからずとも心配と言う感情はあまり感じられなかった。今日中に帰ってこないサキをいいことに、電話の向こうで笑っているワタルの姿が容易に浮かぶ。

まあ男なんてそんなもんですよ。

「まあとにかく心配かけてすみません」

『は!?! 心配なんてしてねーよ?』

と帰ってきた返事はなんとも冷たい。

あまりにも露骨……というか、もう少し言い方というものが無いのだろうか。

「いや、でも……女の人がお酒を飲んで……あ……朝帰りというのは……」

『ん? ああ……そうだな……』

少しでも心配させてやろうという気にさせるために先が言った一言はワタルを少しだけ考えさせた。 やったと思ったサキであった

が。

『今日は静かに寝れそうだよ。　じゃ!!』

ブツツ!! ツーツー……。

(……)

鳴り響いている電話の電子音がむなしく感じた。

これはいつもの憎まれ口と言う奴だろうか。　店の中ではよく聞いている憎まれ口だが、電話と言うのはとても怖い。　相手の表情を見ながら行っている普段の会話と違って相手の表情を見ないで、相手の声だけで話を進めるといのはまた違ったイメージを生まれさせる。

「なんともだらしねえ……」

「ほんとです。　なんだかサキさんが可哀相になってきました。　こんな我儘な店主をもって……」

「お前ら……どっから湧いた」

場面は三千院家のナギの部屋になるが、いつの間にか部屋にはナギのほかにテルとハヤテが現れていた。

「だってお前、サキさんに朝帰りするって言われたときにその台詞はねエよ」

とテル。

「そうですね。　ただでさえ日ごろのストレスとかもあって疲れているのに……気遣いになつてませんよ」

とハヤテ。　それに対してワタルはむぐうと唸るだけだった。

「ただ理由がその電話だけだとは限らねエな……」

とテルが考える。　その電話の内容がいかにかにひどいものだったか分かっていてもどうしていきなりお見合いと言う形になるのか、とてもお見合いに絡むような要素は見当たらない。

「なあワタル……」

テルがワタルの肩を掴んだ。

「別の理由とかないのか？　俺にはほかにもお前がやらかしたとしか

考えられねエンだけど・・・」

と言うテルにワタルはうーんと考える。すと思い出したかのよう
うに、あっ！と声を出した。

「実はこの前・・・」

ワタルが語りだした内容はこうだ。

——その翌日。

朝の電車を使って、サキは無事に実家からビデオ屋へと帰ってくる
ことができた。店のドアから店内へと入るとワタルがDVDの品
出しを行っていた。

と、こちらに気づいたか、ワタルが作業を止めてこちらを見る。

「お？ なんだ。 もう戻って来たのかよ。 もう少しゆっくりして
ればいいのに・・・」

そう言うや否や再び作業を開始するワタル。 サキは呆れたとい
う表情で会話を続けた。

「いえ・・・和歌に心配かけるのも何なので・・・早目に戻ってきまし
た」

「だから別に心配してねーって・・・」

昨日の会話を覚えているようにワタルはサキの言葉に答える。

これに少しムツとしたか、サキもここでウソを交えてみた。

「ちなみに一緒に飲んだ人の中には男の人も居て・・・」↑ウソ

「知らねーよ、そんなの」

まるで興味なし。

「あと実家の母からお見合いを進められました！」

ここでサキは実家に戻った時に話の中で持ち出されたお見合いの
話を出した。 これならワタルも少しは驚いてくれるだろうと思っ
ていたのだが。

「は!! そりゃよかったな!!」
プチッ。

サキの中で何かが切れた。 すぐさまポケットの中から携帯を取
り出して短縮でダイヤルをかける。

「あ、お母さんですか？お見合いの話、最速で進めてください。ええ全力で」

「ん？」

とワタルが気づいた時には既に電話は切られていた。話は既にまとまっていたようでポケットに携帯をもどすサキ。

「え？ おい・・・サキ？」

何故か話が凄い方向へと飛躍していることに気付いたワタルだが、もう遅い。ここにきてワタルは初めて動揺した。

「一体どういう・・・」

とワタルが声を掛けようとした時に振り返った先は表情を少しだけ強張らせていた。

「と言うことで明日の金曜日明日の日曜日お見合いすることになりました!! なのでお暇を貰います!! いいですね!!」

結局、ワタルはこの状態のサキに何も言い返すことができずサキは準備やらなんやらでそそくさに帰っていった。

○

「ソレだろうがアアアアアアア!!」

「ぐふう!!」

理由が分かった途端、ナギとテルは仮面ライダーのようなとび蹴りをワタルへとお見舞いした。

「仮にも身内でもあるサキさんに対してお見合いの内容すらも全く興味なしと言う愚か丸出しの行為・・・」

とどめとばかりにテルがワタルの顔を鷲掴み。キリキリと音が鳴っていくのが分かる。

「よううし、お前はこれからサキさんの目の前で焼土下座だ」

「テルさん、鉄板の用意はできました!」

「ちよ、待て! 俺は真剣にサキの事を相談してんだよ!!」

「まあ、サキさんがお見合いするというのは意外な話だが・・・結婚する意志があるからお見合いするんだろ？」

「・・・」

ナギの一言に黙り込むワタル。確かに、お見合いと言うのは結婚を前提に行われるものだ。サキもそういうこと考えたってなんら可笑しくない年齢である。

「ずいぶんと自分勝手な不満が顔に出ているな……」

「べ、別に俺は……」

ワタルの表情を読み取ったかのようにナギが放った一言はワタルの考えを浮き彫りにした。

「ワタルよオ、お前はサキさんにどうして欲しんだよ。悩んでるばかりじゃ男は示しがつかねえぜ？」

「お、俺は……サキに……」

テルの言葉にも黙り込んでしまったワタル。ナギもふむ。と考えて何か思いついたか、窓越しに見える外の風景を見つめながら言った。

「ま、そんな心理状態では試験勉強にならんから……しよがない。手伝ってやるか」

「え？もしかして邪魔するなんて気じゃないでしょうね？」

とハヤテ。ナギはふっと笑った。

「まさか。そんな底辺じみたことはせんよ。ただ相手は確認したっていいではないか」

「なるほど。それがサキさんに見合う男なのかどうなのか……それを知ってからでも遅くはないか」

テルも納得したかのように驚掴みしていた手を離れた。

「ていうか今ってテスト期間中だったんだ」

「おいバカテル、学校居られなくなっても知らないぞ」

○

「そんなわけでやってきました。サキさんとそのお見合い相手が居るとされているそのお見合い会場ですー」

「フフフ……見事なペースだ。小説ならではの高速移動だ！」

「コラコラ、根も葉もないこと言うんじゃない」

ハヤテとナギ、そしてテルが茂み隠れながらお見合いの場所となっ

たホテルの周辺を探索。当然ワタルも付いてきました。

「ここがお見合い会場か・・・日本庭園じゃないのか」

「いつの時代の話だ。近年では地域社会が崩壊しつつあるからな、お見合いもわざわざ豪華な場所でやらなくても近くのファミレスとかでやることも多いぞ」

ホントです。ちなみに普通はホテルとか料亭である。

「知るかバカ！そんな事よりサキだ！」

ナギの解説なんて必要ないといったようにワタルは物凄い目でサキを探す。

真剣なのがよくわかる。

「へっ、なんだかんだ自分の女が他人に渡っちまうところなんて黙ってられねエよな」

とテル。ワタルは顔を照れ隠しなのか、顔を下へと向けた。

「なっ！ お前、そういうのじゃねーよ！」

「へいへい、ツンデレ乙。最悪サキさんを魔道に落としそうな輩だった場合、結婚式をブレイクしてもいいんだな？」

「ああ、許可する」

「みなさん、何しに来たんです？」

ハヤテが苦笑いを浮かべながら突っ込んだ。

「だって結婚って人生変わるようなもんだろ？ 当然、旦那さんのおかげで性格一変しちまうかもしれないだろ？」

双眼鏡を構えているテルがそう呟くとワタルの中であるイメージが生まれた。

(もし結婚なんてしてサキの性格が変わったら・・・?)

イメージ！

旦那「おいサキ、帰ったぞー！」

サキ「キヤー！ ダーリンお帰りー！」

旦那「はは、サキは今日も可愛いなあ」

サキ「もう！ ダーリンったら！」

ワタル「・・・おいサキ」

サキ「あ、若。 いたんですか？ スイマセン、ごはんは出前か台

所にあるカップめんで！」

ワタル「ちよ、お前どこ行くんだよ！」

旦那「僕はこれからサキと一緒に出かけさ！」

サキ「ちよつと遅くなるかもしれないから」

旦那「ああ、もしかしたら朝とかに帰って来るかもね！」

サキ「ダーリンだったら・・・もう！」

旦那「A H A H A H A H A H！ さあ行こうか！ 僕たちの愛のミッドナイトだよ！」

ワタル「さ、サキイイイイ！！」

サキ「大丈夫です。朝帰りなんてなんも問題ないですよね？」
ワタル「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

と、本来生真面目で面倒見のいいサキがワタルを放置するという性格に。

「——ル・・・ワタル！」

「ハッ!？」

妄想を浮かべていたワタルはナギの言葉で現実へと戻ってきた。

「どうしたんだ一体、10年後からタイムリープしてきたみたいに呆けて」

「お嬢さま、今何年か知ってます？」

ハヤテがナギに突っ込むと同時に、ワタルがその場で立ち上がった。なんだなんだと一同がワタルを見る。

「俺に非があるというのは分かった。このお見合いもアイツがもし望んでいるなら・・・俺は」

拳を握りしめるワタル。それを見てか隣であんぱんを食しながら呟いた。

「ま、本人の意思もしっかりと尊重しなきゃな。お、どうやら出てきたぜ・・・二人で散歩してるみてえだ」

「相手は誰ですか？」

とハヤテが聞く。テルも双眼鏡のピントを調節して更なる解析に臨んだ。

「えーつと待てよ．．．なんか細いな．．．それでいて長身で．．．ん？」
ここでテルが何かに気付いたか、双眼鏡から顔を外した。

「どうした。出来立てのカレーを床にぶちまけた顔をして．．．貸してみろ」

とナギに言われるとテルは何も言わず双眼鏡を渡した。そしてナギも見るや、双眼鏡をハヤテに手渡した。

「どうしたんですか？」

ハヤテも続いて双眼鏡を覗き込む。そして二人同様に黙り込んでしまった。

「なんだよ？ 急に黙り込んで．．．おら貸せ」

半分強引に奪い双眼鏡を奪うとその中を覗き込んだ。

「．．．え？ ちよつと待って、アイツって．．．」

○

ワタル達の場所ではサキ達の声は聞こえないため、ここでサキ達の視点で行う。

「えーつと．．．今日は宜しくお願いします．．．えーつと」

私服のサキは目の前のその男に緊張しながらもあいさつした。

目の前の男は少しばかり細めの体格で、頭は珍しいことに白かった。しかも肌も白い。つまり白人だ。

「あ、どうも。サキさん．．．今日は宜しくお願いします。あと名前はバルトなんで．．．」

「あ、スイマセン！ まさか外人さんとお見合いすることになるなんて思いもせませんでしたからー！」

「いえいえ、こちらこそ。私も今回が初のお見合いと言うことになります．．．」

「じゃ、取り敢えず歩きますか．．．」

見事にお見合いと言う雰囲気に対応しい光景だ。バルトとサキ

はぎくしやくしながらも歩き出した。

これを見て観察団（ワタル達）は・・・。

「「お前かよオオオオオオオオオオオツツ!!!」」

さてさて、このお見合い・・・一体どうなるか。

第60話く職業は全身黒タイツですく

お見合い。それは紳士と淑女が出会いを求める行事。

お互いの合意のものとで場所を指定して親族と共にお食事に行ったりして親交を深めて、もしお互いが気にいるような場合だった時に、二人はゴールインすることもある。

そんな出合いの行事だ。

時々、お見合いなんていったい誰が考えついたんだろうかと思うようになる。 そんな作者の戯言。

彼の名前はバルト。 ロシアの優秀(もといバカ)なスパイである。もともとシスターソニアの部下であったが、(クルーザー事件を参照)その一件からソニアの部下を辞めて自分の道を歩んでいくようになる。

現在、テルが最初にお世話になっていたラーメン辰屋にアルバイト中。

「すみませんね。今日はこんなところに来てもらって」

「い、いえ・・・こちらこそ・・・」

まるで素人が初めて試合をするかのように緊張していることを隠すことを知らないバルトとサキ。

(どうしよう・・・勢いでお見合いとかしちやってるけど・・・結婚する気なんてないのに、相手になんて悪いことを・・・)

もともとワタルにまったく相手にされてなかったサキが起こしたお見合いだ。 当然そこには自分の主観混じりのものしかなく、つい物の弾みで、キャッチボールをしていたら窓が割れたみたいな感じの勢いなのだ。

そこにサキは少なからず公開していた。

(そうだ・・・バルトさんって何してんだろう。 せっかくだしいろいろ聞いてみよう)

「あとう・・・バルトさん」

「なんです?」

「バルトさんの趣味ってなんですか?」

「し、趣味ですか?」

とサキの質問にバルトは少しばかり緊張していたようで聞き返す。

「はい。　せっかくのお見合いなんですしお互いのことを知らなくちやいけなじゃないですか」

「ああ、そうですね」

いつになくして丁寧口調のバルトにサキはしたたかに質問した。

(バルトさんの趣味って一体何なんだろう・・・なかなか見た目も爽やかだし、家庭菜園とかかな?)

と心の中で暑日差しの中、ガーデニングやら自分で植えた野菜の手入れをしているバルトの姿を思い浮かべたサキ。　だがその返しには反した答えが返ってくるのは当たり前前のことである。

「趣味はスパイです」

「へ?」

「得意なのは情報収集とスニーキングです。　あ、スニーキングっていうのは相手にバレないで行動を監視して追跡するのがスニーキングです」

「は、はあ・・・」

至極、淡々とバルトによるスパイの話が続けられる。　基本的な用語やスニーキングの動作など。　格闘戦になったときのその対処法など。

「まあ私の場合、あくまで情報収集が主ですので格闘はあまりやったところはないんですがね・・・あ」

と、突然しまったといったような声を出すバルト。　それがあまりしゃべってはいけないことだということを忘れていたみたいだ。　そしてひたすら聞いていたサキに対して一言。

「そういえばメ○ルギアソリッド4まだクリアしてないんだった。

あのスパイの醍醐味ともいわれるゲームをクリアしてないのにスパ

イを語るとは・・・不覚」

「そのゲームをクリアすればスパイをクリアする資格が手に入るんですか？」

「そうですね。何を隠そう、私はスパイ検定は2級まで持っている。ちなみに、メ○ルギアソリッド1をクリアすることで4級、メ○ルギア2で3級、メ○ルギア3で2級を取得できます」

（スパイ検定ってなんですか！メタルギアクリアするだけで資格取れるんですか!? っただけこの人スパイに興味持ってんですか!? ス○ークもドン引きですよ!!）

「そんな自分の夢は最高のラーメン屋になることなんです！」

「スパイとは全く関係ないですね！」

○

「スゲーなオイ。あいつは最初っからクライマックスだな」

「ホントですね。口調がいつもとちがうけど、いつものバルトさんですね」

「く、くそ・・・サキのやつ、まさか本気で・・・」

ちやうど二人が笑っているところを見た一同。ワタルの焦りはさらに高まっていた。

「ていうか、バルトの奴なんで口調が優等生みたいに改まっちゃって・・・」

「テルさん。さすがにあの喋り方じゃあダメなんじゃないですか？」

これには一同が疑問を抱いているのではないか。バルトの口調は本来は昔の武士のように堅物のような喋り方だ。そのはずなのにあの丁寧すぎるのはなぜか気味が悪い。

「ところでワタル、ものすごい質問するけど・・・お前、伊澄のことはいいの？」

「ああ!? なんでここで伊澄が出てくるんだよ! 関係ないだろ!!」

ここまでサキのことに対して夢中になっているワタルへと質問。だがその返事はワタルにとって意味がなかった。怒鳴りながら

返される。

「お前、ほんとどっちなんだよ」

ナギがこう言うのは当然である。伊澄に対して好意寄せているワタルがサキに対する感情は何か違うのである。明らかに使用人としての目ではないのだ。

「黙ってようぜナギ。この選択が後に後悔すんのかしないのかはコイツ次第だから」

「ふむ」

テルの言葉に黙って頷くナギ。そして話を戻し、再びバルトとサキの方へと視線を移した。

「うくむ・・・なんと云ってるのかわからんぞ。どうにかしてくれハヤテ」

「確かに、ここからでは距離が離れすぎています。ご安心くださいお嬢様。こんなこともあろうかと、S○kで読心術を学んできましたから！」

「もう君のスペックには突っ込まないことにしたよハヤテくん」

一流の執事はどうやら読心術も出来るとかなんとか。

そんなことを考えていたテルであった。

○

「詰まるところ、私は今年で26になるんです」

「はあ・・・」

歩いていた中、バルトの言葉にサキが頷く。

「母国の母が五月蠅くて、バイト先の人も結婚しろ結婚しろって五月蠅くてですね・・・」

あれ？　とここでサキが感じたのは共鳴・・・とも呼ぶべき感覚。

相手が考えていることが同じなような感じがしたのだ。

(も、もしかして・・・この人！)

「本当のことを言うと、仕方なくお見合いに来てしまったというか・・・」

「あ、あの！　実は私も!!」

「え？」

「無理やりというか勢いというか・・・スイマセン」

「いや、いいんです。お互い大変ですな」

「ですな？」

「あ、失敬」

（いかん。素が出てしまうところだった・・・）

慌てて口調を元に戻すバルト。実は日本のお見合いに合わせてために、自分の口調を少し変えるという努力をしている。

「それじゃあ今は好きな人っていないんですか？」

「好きな人ですか？」

サキの言葉に少しばかり考えるバルト。うーんと唸るように考えていたが

「居ませんね。仕事るときは私情を挟まないようにしているので」

「その仕事ってスパイですか？ ラーメン屋ですか？」

「もちろんどっちもですね」

きつぱりとバルトはそう言い切った。

「というのもスパイの仕事のときはとんでもない上司の元で働いているたもので・・・」

「上司？」

「はい、素手で電話機を握りつぶし、トンファーを振り回して銃弾をよけ、拳銃の果てには爆弾を設置させてその工作兵ごと爆破する滅茶苦茶な上司です」

「ものすごいヴァイオレンス！ えーつとということは本国の方ですか？」

「いいえ。実は同じ生まれでもなければ幼馴染であるというフラグ要素もないわけで・・・しかも日本にいるという」

「は、はあ・・・」

（フラグ・・・？）

と専門用語を出し始めたバルトに対してサキは啞然とした。構わずバルトは続ける。

「でも滅茶苦茶な性格だからもの凄い無茶するんですよ。自分が

しつかりしないとどっかで怪我するんですよ」

「……」

「まあその人の元でコキ使われながらもその人の理念とか、目的とかそれにかける理由とか聞いてたらなんか放っておけなくなつたというか、その野心あふれる姿がカツコ良かったっていうか……スイマセン、年甲斐もなく」

「そんな事ありませんよ……それは好きっていう感情とかではないんですか？」

「いや、それはない絶対……」

とすぐさま即答。そんな上司にこき使われた日々を思い出した。……わずか三秒で思い出すのも嫌になってきた。

「でも、放っておけないという気持ちがあるということは……」守りたい」とかそういう気持ちがあるからじゃないんですか？」

「守るですか。もしかしたらそうなのか……も」

サキの言葉に考えさせられるバルト。その人の前で別に誓つたという訳でもなければ、自分で決めたものではない。心のどこかでそう思っていたことだったのだろうか。

「サキ殿もお若いのにやりますね。どっちが歳上なのか分かりませんな」

そう言いながら笑うバルトにサキもつられて笑うのだった。

「あ、もう口調無理して丁寧にしなくてもいいですよ？」

「あ、バレてましたか？」

「そりやもう、バレバレですよ。バルトさんところで素が出てましたから」

「そうだな。これが一番しつくりくるな」

その一方で……。

○

その光景を見ていたワタルはものすごい形相で二人を見ていた。当の本人からしてみれば特に変な感じではない。だがそう捉えさせる要因が隣にいたのである。

「ハヤテ、嘘じゃねえだろうな。バルトがサキさんに「実は一目見た時から気になってました・・・サキあなたです」って言ったの」「ええテルさん、バッチリですよ。しかもサキさんもどうやら同じようです。実は私も気になってました」って行ってましたし・・・」

「しかもそのあとは『実は私、その手の店で働いてたんですけど、どうですか？ できれば今夜・・・』だしな」

「でもサキさんも凄いですよ『それは良いことです。人知れず私を好きにry・・・』」

「うるせえええええええええ!!」

怒号と共にワタルのどつから持ってきたのかわからないハンマーがテルとハヤテに炸裂。そのまま二人は撃沈してしまう。

「も、もう我慢できるか・・・さ、サキイイ!!」

「はい？ なんですか?」

と、ワタルが叫びながらその場へといざゆかんとした瞬間、ワタルの目の前にはサキが居た。

これにはワタルは急ストップ。慌てて尻餅を付いてしまう。

「お、お前どうして・・・」

「いや、それを言うなら若だっただけでどうしてこんな所にいるんですか?」それを聞かれてギクツとなってしまうワタル。だが逆にワタルは聞き返した。

「そ、そんなことはどうでもいいんだよ! お見合い相手は?」

「ああ。バルトさんはもう帰りましたよ、お見合いはもう終わりです」

「そ、そうなのか・・・」

と、その言葉を聞いて心の中でホツとしている自分がいた。その様子をどう思ったか、サキがじーっとこちらの方を見つめている。

「な、なんだよ」

「い、いえ・・・」

二人ともなぜか言葉が詰まってしまふ。昨日のこともありなかなか気まずい雰囲気だがワタルは男だ。ワタルはサキの手をつかんで歩きだした。強行突破にでる。

「み、店が忙しいんだ！ さっさと帰るぞサキ！」

「え……あ、ハイ！」

その手を引かれて嬉しそうにしながらサキは元気よく返した。どうやら仲直りは出来たようである。

○

「ふう〜疲れた……」

（お見合いも終わったし、早く店に戻って仕事に戻らねば……）

大きく疲労の色を強めた息を吐きながらバルトは歩く。もう言葉を取り繕う必要はないため、普段の口調に戻した。

そして特に時間も取ることもなく店へと戻ったバルトはそのままバイトを開始。

「え？ 結局お前見合いでなんもなかったの？」

「うむ。 辰也殿や母上殿には申し訳ないが……」

「もったいねえの。 これを機に身を固めちまえば良かったのよ」と笑いながら冗談をかますその場へ……。

ガラツ。

「いらっしやーい」

景気良くこの店へと入る客がいた。今はだいたい夜の客がくるのには少し早いか。 珍しいと考えていたバルトであったが。

「ああ。 こんなところにラーメン屋が、これも神のお導き……」

「……何やってるのですか？」

「あら？ バルトさんじゃないですか」

そのラーメン屋へ入ってきた客。 それはシスターこと、ソフィア・シャフルナーズであった。

「お元気そうでなによりで……」

バルトがいるということを認識するや否や、ソニアはスツと席へと座る。

「さ、何を食べましょうか……取り敢えずこれとこれで大盛りで……」

とメニューを開いてろくに見ないでとにかく選ぶ。 それを見たバルトは慌てて声をかけた。

「ソニア殿、払う宛は・・・？」

疑問に思ったバルトに対してソニアは笑顔で人差し指をバルトへと指した。

「お、俺ですか!？」

「私はあなたの上司、あなたは部下、上司に払うのは当然では？」

「いや、そんなこと言われてもそれは逆の発想でソニア殿が俺に払うという場合もあるという」

「どうして私があなたに奢らなければならないのですか？」

「それは先輩が後輩のお代を持つのは当たり前で・・・」

「しようがないですね。この店少しかだけ全壊させちゃいますよ？」

「少しだけの意味が分からんぞ！結局全部壊すのでは!？」

ニツコリとしながら懐から取り出したトンファーを見せるソニアにバルトが猛然とツツコム。

「それに私のことは隊長と呼びなさい。契約は切れてもあなたにはあれこれと働いてもらわなければなりませんから」

まだこき使うつもりでいるのかとジト目でソニアを見るバルト。

店が壊されるのも良くない。これ以上長話される前に仕方なく

バルトは折れることにした。

「分かりましたよ。来月は絶対に払いに来てください」

「あら？ 今回は随分と早く折れましたね」

あつさりバルトが折れたことに対して違和感を覚えたソニアだが、テーブルの下ではがっちり拳を握っていた。

「まあなんというか、気分が良いという話なだけなので」

（今日ぐらいいは別にいいだろう。また無理されて倒れられたら大変だからな）

「バルト、それお前の今月の給料から引いとくからな」

（しかしこの人の胃袋はなんだ、まるで昔のフードファイターを思い出させる食べっぷりだ）

「

ズルズルと麺を口へと運ぶソニア。その表情は喜喜としている。

「はあ・・・」

(母上殿、こんな元上司にこき使われながらも俺は元気でよくやっ
ている。今不安があるとしたらそれは俺の今月の給料だけだ)

脱力を表した溜息と同時に、ソニアはまた注文を重ねた。 今月い
くらの給料が自分の手元に残るだろうか。

そんなことを考えていたバルトだった。

第61話く全て遠き理想郷、そんな所に僕は行きたい

「あゝダルい……」

小さな商店街の道をゆく少年がいた。 買い物袋を手下げて少しばかり

重い足取りでいるのはテルだ。

「そんなこと言っていないで早く済ませましょうよ。 三千院家はなんか今日パーティとかあるって話なんですから」

その怠惰なセリフに答えるように隣の少年はテルに苦笑いで答えた。 ハヤテである。

「だって俺たちが参加するわけでもないだろそのパーティ。 どうせお偉いさん方が顔見せ程度の気持ちでやってくるつまらないパーティイだろう?」

「テルさんパーティじゃないなくてパーティです」

「いちいち突っ込むな馬鹿」

と二人はパーティで使う食材を買い込んでいく。

「しかし、こうまで労働して給料もらうっていうその繰り返して俺たちの人生は満たされるのだろうか」

「どうしたんですか急に……」

テルがため息をつきながらの一言にハヤテも聞く。

「いや、ここらへんでなんか特別休暇とか欲しいなって」

「ただサボりたいだけではないんですか?」

「オイオイ、俺をそんな程度の低い人間と決めつけるんじゃないよワトソン君」

「ワトソン君じゃないですよ……でもお嬢様のことですから気まぐれに『どこかの温泉にでも行くぞ!』とか言いかねませんね」

ナギの性格上、突発的に自宅の自家用ジェット機とかもちだしてハワイ諸島に行くとも言い出す可能性も十分あるのだ。 それだけの財力がある。 そう思つてのハヤテの発言だった。

「ま、そんなにわかの話があるわけないんだけどな」

「そうですね」

そんな簡単においしい話がある訳がないと思う二人であった。

「さて、じゃあさつきと返って色々と準備に入りますか」

と気持ちのネジを占め直して三千院家の屋敷を目指そうとした時だった。

「あれ？」

それはハヤテが少しばかり横の上のほうから気配を感じて目を向けた時だった。そこには誰しもが驚く奇つ怪な光景があった。

「あれおつかしいわね、こっからぐらいしか入れなさそうなのよね・・・」

ちようど家のブロックに乗っかっている人物がハヤテの目の中に入る。思わず立ち止まってテルの肩を叩いた。

「テルさん、モノっすごい怪しい人物がいるんですけど・・・」

「なんだアハヤテ、まさかこの平和な近辺で泥棒が居るなんて言うんじゃないんだろうな？」

「じつはそのまさか・・・」

とハヤテはそのブロック塀の上に乗っかっている人物の方を指さす。

「マジかよ・・・俺こんな状況初めてかも、どうしたらいい？」

「取り敢えず警察に連絡するというのが常識でしょう。怪しい人物を見たら即通報、これ常識です」

ハヤテがケータイを開こうとしたとき、その手をテルが止めた。

「おい待てよハヤテ。ここで通報なんてしたらあいつのこの先の人生真っ暗だ。前科ってのは内心書とかにはモノっすごい響くんぞぞ」

「まさかテルさんは見逃すって言うんですか？」

「バカ、そう言ってねえよ。だってそうすればさあ・・・」

とニヤリと笑を浮かべて一言。

「通報しないことをいいことに恩を売りつけれるじゃん？」

「ゆするきだこの人！ 主人公が言っちゃいけないセリフを簡単に

言っちゃったよこの人！」

「綺麗事だけじゃこの世界やっていけないんだぜハヤテ」

「なんかすごい悟ってるように言ってますけど内容は至って最悪ですからね？ そこんとこ理解してます？」

「ん？ なに？ 誰かいるのー？」

という二人の会話が聞こえたのか、ブロック塀に乗っかっていた人物がこちらの方に顔を向けた。

「……アレ？」

「……先生？」

「ちよ、二人ともどうしてこんなところにいるの？」

ハヤテとテルが固まった表情で見た人物は、白皇学院の教師、桂雪路その人だった。

「逆に聞こう、どうしてあんたはそんな所にいるのかと……」

「私は別に……」

「いや、言うまでもないですよ桂先生。 わかっています。 分かっていますから……早まらないでください！」

何かを言おうとした手前、ハヤテの声によって遮られる。 しかしハヤテの表情はとても悲しそうな表情だった。

「いつかやると思ってたんだよ……いや、マジで」

「先生！ 泥棒なんてやめてください！」

「ちよ！ あんた達、私がそんなことにする人間だと思ってるの？」
「思ってます！」

二人が同時にシンク口した瞬間である。 この発言に雪路は面食らったかのようにガクつと肩を落とす。

いかに雪路が普段どんな感じで思われているかが分かった。

「今ならまだ間に合う。 会長の耳に入る前に俺たちがなんとか揉み消してやらア」

「そうですよ。 さっさとそこから降りてください！」

と言うやいなや、ハヤテとテルは雪路が乗っかっているブロック塀に上り寄った。

「ここら、勘違いしてるようだけど私はそんなことしないから。間違ってもヒナにシメられるような愚行はしないわよ」

雪路の行動を何時もキツく制限させているのはヒナギクの監視の元によるものが大きい。しかし、それでも雪路が無駄遣いをするため結局は意味がないという。

なんせひと月の給料を飲み代と麻雀で使い果たすという恐ろしい人間だ。

「麻雀なんてアレよ、もう少しで勝てそうだったの。けどついカアアーっと熱くなっちゃって・・・」

「聞きたかねえんだよ！ そんなアホの常套句！ お前はどこのカ○ジだ!」

「テルくん、取り敢えず二人ともちゃんと私の話を——」

雪路が言いかけたとき、雪路の体が大きく傾く。なんとバランスを崩してしまったのだ。

体を横へと傾けた雪路はことあろうに、近くにいた二人の服の袖を・・・

ガシッ。

「は？」

掴んだ。

——ドズン。

と重々しい音と共に三人は見事に地面へと落ちてしまった。しかも落ちたところが家の敷地内という最悪な状況でだ。

「いたたたた・・・」

「どうしていつも僕は巻き込まれてしまうんですか？」

「お前ら、いい加減俺の上から降りてくれ」

二人の下敷きとなっていたテルは苦痛の言葉を絞り出していた。

「・・・は？ お届けもの？」

「そうよ、そう言ってるのあなた達が変な勘違いをするから・・・」
その後、雪路から言われた一言にテルはまの抜けた言葉が出る。雪路が言うにはこの家の生徒に届けものをするために来というのだ。

「本当ならいつもの先生が届けてくれるんだけど、『もう無理です・・・雪路先生なら大丈夫です』っっても凄いい青ざめた表情で私にこの書類を任せてきたのよね」

雪路はめんどくさそうに手元の書類をパンつと叩く。相当厚い書類のようだ。

「しかし・・・結構な広さだな。伊澄の家くらいの広さはあるぞ？」
辺りを見渡しながらテルがつぶやく。テル達が入り込んでしまった家の敷地はかなりの広かった。

伊澄の家が和式の日本庭園に対してこちらは生粋の洋式。家はまるで某合衆国のプレジデントの白い家を少しだけ小さくした位だが、十分にブルジョアジー感を醸し出している。

「ここに住んでる奴はずいぶんと金持ちと見た。結構ヤヴァイ臭いがするんだが・・・」

「ヤヴァイってどうしたんですテルさん？」
険しい表情のテルを見てハヤテが聞く。辺りを先ほどとは違い辺りをきよろきよろとする動きが激しくなる。

「俺だって仮りにも三千院家っていうブルジョアジーの家で働いてんだ。こんな金持ちが住む家に必要な存在があるはずなんだ・・・コーラを飲んだら確実にゲップをするくらいに確実にツ！」

そのテルの言葉にハヤテがハツと気づく。そうだ。自分の屋敷の方でも度々目撃されてるじゃないか。なぜ気付かなかったのか。

「警備システムですか・・・」

「そうだ。正門から入ってこなかった俺たちはどう考えても不審者。疑われても文句は言えねえ」

「なんで私を見るのよ」

といつの間にかジト目を向けられていた雪路は反論の声をあげるがテルは構わず続けた。

「早いとここから離れたほうが良さそうだな。じゃないとオレらマジで前科食らっちゃま——」

——ガリツ。

「アレ？　なんだ今のオノマトペ・・・アレ？　どうしたお前ら、なんでそんなこの世の終わりみたいない目で俺を見てんの？」

「こころなしか、頭の方に何かすごい重みを感じる。何かに乗っかっているかのように重いのだ。」

そしてテルは次第に自身の視界が変わっていくことに気づいた。

「アレ？　俺の視界が真っ赤に・・・って血？　どうして？」

その瞬間、雪路とハヤテが一斉にダツシユをしてテルから離れていく。テルは驚きながらも二人を追いかけた。

「なんでお前ら逃げてんだよ！　コラ！　振り向かないで全速力で走るな!!」

「テルさんんん!!　後ろ！　後ろオオオオ!!」

「後ろって・・・」

テルが後ろを振り向いた瞬間、彼は絶句する。彼の真後ろにいたものはいるはずのない存在だったからだ。

巨大な体軀をその太い四肢で支え、爪は捕まえたら決して離れないように食い込む。そして雄雄しくも気高いその鬣が印象的だ。

「ここまでいえばもう分からうだろう。テルを追いかけているのは紛れも無く、百獣の王、ライオンだった。」

「ガオオオオオツ!!」

犬とは違うその迫力、こんな屋敷にいるタマとはまったく比べようがない。

「ええええええええっっ!?!」

ようやく危険な状況を理解したテルは叫びながら走るスピードを上げる。が、ライオンは獲物を見つけたかのように走るのをやめな

い。むしろスピードを上げる。

「なんでこんな所にライオンがいるんだアア!!　ここはサファリパークかなんかアア!!」

「知りませんよ!　こっちが知りたくらいです!!」

走るハヤテとテルは何がなんだかわからない。一つだけわかっていることは、足を止めれば死が待っているということだ。

「ガアッ!」

獲物を求める狩猟本能のままにライオンは叫び共に飛び上がった。

「ぎゃあああああ!　今まさに命の危機が!　ハヤテくん!　俺の盾になつて!　1000円やるから!」

「いやですよ!　100万積まれてもその手にはのらませんから!」

「私は構わないけど!」

迫り来るライオンを前に、三人はもうパニック状態だ。

今まさに三人の命がその生態系の頂点に食されようとしていた……その時だ。

「待て!」

急にライオンがその声の方へと向きを変えた。

ライオンは方向転換すると共に男の声の主へと猛然と駆け出す。

「ハアアア!!」

声の主はライオンを前にひるむどころか、声を上げながらそのライオンを受け止めた。百キロなんて目じゃないライオンの体躯による突進でその人物の体は後ろへと倒れることはなくとも、その重量で押されていく。

「フンッ!」

と男は気合を入れた瞬間、ライオンの動きがピタリと止まった。

完全停止。その男がライオンを完全に押さえつけたのだ。

「おお。客人、無事だったか?」

ライオンはその男に手懐けられているようにその場へ体を伏せた。その豪快なターザンもどきの視線はテルたちへと向けられる。その男を見てテルたちは愕然とした。

「お前……王様？」

そのライオンを受け止め、なおかつひれ伏せさせた男は白皇でも名を轟かせている男。

乙葉 千里だった。

○

3LDkに住む。それが僕の将来の夢だと言った少年が確か居た。

純粋なその少年の願いを、授業参観で聞かされた先生、生徒たち、保護者のみなさんは見事に泣いてしまったという。

ここだけの話。私も実はその子と同じ夢を見ていて、3LDkに住むことが夢なんです。

リビングとダイニングとキッチンがあれば私は何も要らない。

だが、高望みをしてあえて言うならば、犬が欲しい。庭で嫁、犬と戯れる息子の姿を見ることが私のささやかな夢だ。

「いや、だからってライオンはねえだろ」

「なんだ、ヘラク羅斯のことか？ 奴はお茶目な奴だ。許してやってくれ」

頭のケガをタオルで覆いながら腕を組んでいる千里に向けてテルはむっとなる。家の中へと案内されたテルたちはリビングにてくつろいでいた。

「ここが千里君の家だったのか……」

「なんかいかにもお金持ちって感じよねえ……」

ハヤテと雪路もほおーとその千里の家の立派さに驚かざるを得ない。

「フン。　こんなの、俺の実家ではない。　俺の実家の方がまだ大きいぞ」

「あ!?!　お前まだ家もってんの?　つーかここ実家じゃないのかよ!?!」

テルの言うことも最もである。　この広さ、リビングの広さは五十人は普通に入れるという無駄な広さを持っていて、これが実家ではないのだ。

「当然だ。　ここは俺が白皇を卒業するまでに与えられた家：いや、宿といったところだろうか」

「くっ、このでかくて豪華な家をそんな安っぽい言い方で片付けるなんて・・・冒頭で謳った作者の夢がさらに薄くなっていくわ・・・」

「え!?!　あの冒頭作者だったんですか!?!」

マジな話をするとそうです。

そんな小さな人間の小さな夢をもはるかに凌駕、超越してると言ってもいい現実が三人の目の前にはあった。

庭はもの凄い広い、サ○エさんの家なんて全然目じゃない。　その家は家というには余りにも大きすぎた。

この男の家はアメリカ風に仕立てているのか、家の見た目は見事に大統領のホワイトハウス。

「オイオイ、これなんて高いんじゃないのか?」

「どれどれ・・・うわあこのツボとかめっちゃ値段張りそう・・・」

「フン、そこにあるのは大したものではない。　せいぜい百万程度のものだ」

お金持ちの感覚ってやつはとんでもない。　彼らはおそらく、百円の価値なんてそこらへんにある十円ガムの価値もないのかもしれない。

いや、もしかしたら十円ガムも知らないかもしれない。

『グルルルルウ・・・』

「む、ヘラクロス。　腹が減ったか、今出そう」

と真後ろから千里に先程のライオン、ヘラクロスが擦り寄ってきた。

「ねえ、なんだろう。俺たちって家でも一応タマっていうトラを飼ってるけどここまで違うのかな」

「僕も・・・普段見慣れているはずなんですけど、やっぱり百獣の王は違いますね」

とテルとハヤテの頭で、なかなか本編にすら出てきていない白いペットの存在を思い出す。

「そういえば最近、アイツもさらに出番を奪われつつあるな」

「最近はお嬢様もシラヌイに夢中ですから」

シラヌイというのは、最近やってきた黒猫である。まあそれは置いていて。

「それ、ヘラクロス」

ごと。と床に置いたのは巨大な皿。しかしただの皿ではない。

皿の上にはライオンの主食である肉が山積みとなっていた。ヘラク罗斯は嬉々としてその山積みのお肉に食いつく。

「やべえよ。なんでこの家、小規模なライオンの小屋になってんの？ 信じられるかよ、こいつ、さっきまで俺を殺す気だったっていうに」

「ヘラクロスが人を襲う？ バカを言うな、あれはちよつと珍しい客人が来たからジャレ付いただけだ」

「あれのどこがジャレ付きだ！ ジャレつかれて殺されたんじやたまったもんじゃねーよ!!」

あんなもの日常茶飯事だと済ます千里に対してテルが猛然と突っ込んだ。

「しかしなんでまたライオンなんて飼ってるんです？」

「ふむ。そうか、少し興味があるか？」

ハヤテの問いに千里が少し笑を浮かべる。

「王というのはな、民たちを従えるために絶大な権力を持ち、振るわなければならぬがそれは人間という人種に限ったことではない。

もちろん、動植物も制圧だ」

「すなわち、動物の頂点であるライオンを従えることも入るわけですね？」

「まさしくその通り・貴様、なかなか物わかりが早いな、俺様の家来になれ」

堂々と腕を広げて言い放つ千里は悪魔で上から目線でハヤテに自身の家来になれという。

「いや、僕には三千院家で自分の借金を返さないといけませんから・・・」

ときつぱりと断るハヤテ。すると千里は感心したように

「ふむ。その謙虚さが逆にいいな、気に入ったぞ。マラソン大会のことは水に流そう」

「お前、まだ根にもつてたのかよ」

「当たり前だ。この俺様に敗北という名の泥を塗らせたのだ。だが、こいつの人間としての品格に免じて許すでしょう。王というのは寛大でなければならぬからな」

「辞書引いて意味を調べてみよう王様、そしてお前のいままでの人生を振り返ってみる。そうすれば自分の言っていることの矛盾に気づくはずだ」

とテルの言葉に反応してか千里が睨みを利かせてテルとの距離を縮める。どうやらこの二人はもの凄い仲が悪いらしい。

「二人とも、喧嘩なんてやめましょうよ」

「そうですね。千里坊っちゃん」

争いをとめるかのごとく、その人物は現れた。体は細く、少しばかり猫背で片目だけメガネをしている老人だ。

「ど、どなたですか？」

ハヤテが戸惑いながらも老人に聞く。老人はくいツとメガネを持ち上げた。

「どうも、私は千里坊っちゃんに仕えている執事、加賀美でございます・・・」

「ど、どうも・・・」

とても丁寧な挨拶をする加賀美に対し、ハヤテも返す。この男、加賀美は千里の専属の執事であるようだった。

「む、爺やか。もう買出しからは帰ってきたのか？」

千里の加賀美の存在に気づいたのか、声をかける。加賀美はゆつくりとおじぎをした。

「ええ。本日の必要な食材を買ってまいりましたが・・・こちらの方々は？」

と、加賀美はハヤテたちの方に視線を移す。千里は腕を組みながらテルとのにらみ合いなど放り出し、ソファにどかっと座る。

「・・・客人だ。内ひとりは白皇の教師だ」

「ほう。これはこれは、いつも坊っちゃんがお世話になっております」

「いやいや、こちらこそどうもご丁寧・・・」

と雪路に挨拶する加賀美に雪路本人も丁寧に戻した。

（（出来た執事だなあ・・・））

この場にいる誰もが思ってしまうことだ。普段、千里のような傍若無人の人物を見ているとこういった出来た人間は新鮮なのである。

「この馬鹿王子に見習わせたいな・・・」

「なんだと貴様ッ」

テルの一言に千里がすかさず反応する。だがテルはひるむことなく続けた。

「しかもお前、いくらそのでかい図体で坊っちゃんねえだろ坊っちゃん・・・」

「貴様ア！もう許さんッ!!」

ついに千里がキレた。どうやらテルの一言一言については彼の怒りの沸点は限りなく低くなるらしい。

すかさずテルに飛びかかるが、テルは急いでその場から離れる。

「逃げるなこの卑怯者ッ！」

とテルと千里はリビングを離れて家の中を走り回り始めた。なんだらうかこの低レベルな喧嘩は。

「・・・この絵、売れば相当な価値になるわね」

雪路は雪路で乙葉家の高そうな品物をいくらかくすねようと品定めをしている始末。

雪路を除いて、リビングにはハヤテと加賀美だけになった。

部屋の外から叫び声と騒音が鳴り響く中、先に加賀美が口を開く。

「坊っちゃんがいとも迷惑をかけております。申し訳ありません」
「え？」

ハヤテは驚く、執事である加賀美の口から出た言葉は意外なことに謝罪の言葉だった。

「坊っちゃんの学院での噂は十分に聞いております・・・その被害にあったというのであればこの加賀美、土下座でもなんでもする所存ですが・・・」

「いや、そんな・・・迷惑をかけているだなんて・・・」

このときハヤテは苦笑いながらも申し訳なさそうにする加賀美を咎める。 実際困って入るのだが・・・。

「坊っちゃんは物心ついた時から父上殿から『王として振る舞う』ことを叩き込まれてきました。この時代の子供に帝王学など教えたことにより、坊っちゃんは『王』ということにこだわるようになりました」

「・・・」

それは家系によるものなのか、家訓からなのか定かではないが、千里もまた特殊なケースの環境の中で育ってきたのだとハヤテは理解する。

「どうやら貴方は坊っちゃんの知り合いのようだ。少なくとも、坊っちゃんをよほどのことがない限り蔑んだりはしない・・・優しい少年だ」

「そんな・・・照れますよ」

と頭を書きながらハヤテは答える。そして言い忘れたのか、加賀美は付け加えるようにつぶやいた。

「そして・・・あの少年も」

「テルさんですか？」

「言葉では上手く言えませぬが、心の中で坊っちゃんの胸のうちを感じ取っているかもしれませんな・・・」

○ 「つたく、しつこい野郎だぜ」

三千院家に劣るものの、この家の廊下は長い。そして部屋の数も多い。テルは鬼の千里から逃げるために数々の部屋を転々としていた。千里は扉を開けるときに「ここかあ!」とわざわざ叫ぶので、なかに入つたのを確認すると、その部屋から出て移動するのだ。

「馬鹿正直といふかなんというか・・・」

と部屋を転々とするうちにある一室に入つた。暗かつたので手元にある電気を付ける。

「ここは・・・」

そこはどの部屋よりも広い一室だつた。書物このように本が置いてあるだけでなく、壁の方に立てかけられている絵画のその量に度肝を抜かれる。

「かつて、この世界に君臨していた名だたる王たちだ」

「うわっ! 脅かすなよ」

「拳が来なかつただけでもありがたく思え」

と前触れも無く入ってきた千里にテルは驚く。

「この壁に立てかけられている絵画全てが歴史に名を残した王たちだ」

ようは千里の偉大な王コレクションといったところか。なかなかマニアックである。

「あれを見る」

「ん?」

と千里がひとつの絵画を指す。その絵画は玉座に座つた王らしき人物が、ライオンを膝に寝かせているという絵だつた。

「あれはメソポタミアの王、ギルガメッシュ。まだ大陸がひとつだった頃の偉大な王だ。彼の宝物庫には各地で名を残す伝説の武器の原点が全て備えられていたという・・・」

なにやらいきなり語り始めた。そして続けざまに。

「あれは伝説の騎士王、アーサー王だ。剣を抜いたことにより王と

なつて戦つた王だ」

「エクスカリバーの話？」

「そうだ・・・俺は知りたい。このひとりの人間が、ひとつの大国を引つ張るだけのその力を持つ、その王たる所以を」

そのまつすぐな眼差しは遙上にある一枚の絵画へと向けられていた。面影がどことなく千里に似ている、おそらく千里の父親だろう。

「人を惹きつけるというのはなんだ。人を従えるというのはなんだ。なぜひとりの人間がそこまでの力をもつのか・・・俺は、俺自身になりたい王とは・・・なんだ？」

それは確かかわからない、わからないが、少なくとも今のテルには千里が悩んでいるように見えたのだ。

「・・・」

そんな千里をテルは黙つて見ているしかできなかつた。

○

「ホントのことを言うと、私は坊っちゃんには『王』だとかに固執して欲しくはないのです。ただ、普通に学校生活を送ることができれば十分」

加賀美は千里という人物をよく知つている。知つている人間だからこそ、千里に託す願いがある。

「しかし、坊っちゃんが変わるには邪魔な障害が一つあります。ハヤテさん、なんだと思いますか？」

突然の質問にハヤテは迷う。千里だからこそ、他人のことを考えることをしない人間である千里だからこそ、何不自由ない生活を送る人間というだけでハヤテは簡単に分かつた。

「お金・・・ですか」

と、当たり前だと言わんばかりに加賀美がにこりと笑う。

「お金は坊っちゃんが生きるための物であり、坊っちゃんを守つてくれるものであります。縛られることを知らない坊っちゃんが、人の上に立つことはまず難しいでしょう」

それに対してはハヤテももの凄いい同意を得る。 実際には自分の主がそれに少しだけ近いものだからだ。

「ふふ．．．しかしそれも、しばらくすれば変わるかもしれません」
「どういうことですか加賀美さん？」

と意味深なセリフをつぶやく加賀美にハヤテが怪訝そうに聞いた。
そうすると加賀美はにこりと笑ってこう返した。

「それはあとひと月もしないうちに分かることですよ」

○

なんだか釈然としないまま、三人は千里の家を後にした。 雪路は千里宅から出ると、ふらりふらりと「今日は飲みっしょ」と姿を眩ませたのだった。

「テルさん」

「ん？」

帰宅の最中、ハヤテが呟いた。

「千里さんは自分のなりたい王になれるんでしょうか？」

「さあな。 誰かを惹きつけるとか、従えるっていうのは、そんな簡単なモンじゃねえし、色々あるんだよ。 そいつのカリスマ性とか、人間性とか」

「今挙げたなかで千里さんに当てはまるものがありませんね．．．」
「だけど、あいつの中で何かが変われば、人を惹きつけることが出来るかもしれない」

少なくとも今はそんな姿が想像できないが、いつしか、彼が気づくときが来るかもしれない。 王とは本来、なんのためにあるのか。

「でもアイツ馬鹿だからなあ．．．一生気づかないかも」

「果てしないですねえ．．．」

「アイツ、俺が『アーサー王は実は女だ』って言ったらマジで信じやがった」

「元ネタを知らない人が聞いたら誰でも驚きますよテルさん．．．」

終わり。

第62話くどこでも決まる上下関係く

ガチャ、ガチャ。

「え？ 潜入捜査がしたい？」

皿とスプーンが鳴り、食事をしていた木原は目を点にした。

その木原の言葉に黒髪の少女、黒羽が答える。

「現在の三千院家の内部を詳しく把握しておかなければならない」

「三千院家詮索、大きく出たもんだな。確かにこれからの為に少な

くとも必要な情報だからな……」

何度も奇襲を繰り返していくのは得策ではない。

攻めるだけが戦いではないのだ。相手の住んでいる場所から行

動パターンを割り出すことも重大な要素だ。

戦闘狂の黒羽にしてはなかなか名案である。

「それじゃあ今すぐ潜入しに行きますか」

「待って」

久しぶりにやる気を出す木原を黒羽が止める。

「潜入は基本単独、しかもあの屋敷には強力な執事が二人、極めて危険」

黒羽が言うのももつともである。三千院家には高い金をかけた

セキユリテイがあるが、それよりも厄介な執事が二人いる。

「確かに、あの二人が居ればS・O・C・O・Mも必要ないしな……」

「だから潜入に適任な人材を派遣する」

「え……」

その一言に木原は固まる。自分と黒羽を除いて、仲間と呼べる人

物は一人しかいないのだ。

『やー！』

「オウフウツ！」

直後、木原の体が突然と現れた小さな黒い影の衝撃により大きくよ

ろめいた。

『やー!』

健気な声とともに黒羽の頭へと着地したのは身長10センチほどの物体、チビハネであった。

「私はこの子が適任だと思う」

木原を空中廻し蹴りしたチビハネを特に咎めることもなく、黒羽は頭からチビハネを降ろした。

「・・・どうして床に倒れているの?」

黒羽は地面を転がって返事もしない木原をじーつと見る。木原はゆらりと身を起こした。

そしてチビハネの頬をぐいっとなつかんで引っ張り上げる。

『にゃー!』

「このチビ人形があ! 俺よりちっこいくせに生意気なやつだなこの野郎!」

グイグイと頬を引っ張る木原だが、チビハネも木原の親指にかぶりつく。

『ぐぎぎぎぎいぎぎぎぎぎい!!!』

お互いに声を痛いという声を挙げずに唸るだけで済ませる。だがその我慢比べもすぐ終わりを告げた。

黒羽が二人の間に割って入った。

しかしここでみなさんにしないで頂きたい。ここで黒羽が平和的介入をするのかというところではないのだ。特に話し合うということをする訳もない、彼女が行うその介入の仕方は・・・。

「やめて」

「ぎやつふつ!!」

バチン。乾いたような音が響く。悲鳴を挙げたのはまつさきに木原だった。

黒羽が行なった介入方法。それはただのデコピンである。ただのデコピンではなく。一人が軽く吹っ飛ばすほどのデコピ

ンだ。

「黒羽サン、ゴメンナサイ、許してください。悪気があったわけではないです。ただちよつと調子に乗ったつていうか・・・すみませんでした」

なかなか強力な一撃を受けた木原は少し涙目になりながらその涙を見せることなく土下座で隠した。上下関係はこれを見れば明らかである。

『やー!』

一方のチビハネは黒羽の肩の上で大いに笑っている。『やー!』という言葉が『ざまあWW』と浮かんでくるのは容易に想像ができた。

このちっこいの、もといチビハネはヒナ祭り祭りに参加した夜から黒羽の作り出した、謎の人形である。

見た目はもう黒羽がねんどろいど化したとしか言いようがない姿だ。正確は黒羽本人に似ておらず、酷く元気、酷く五月蠅く、酷くわがままである。

ちなみに、身体能力もバカみたいにあり、木原との引っ張り合いも互角である。

「一体なんなんだよ、コイツ・・・」

「わからない。黒曜が起こしてしまったバグ、イレギュラーの可能性が高い」

本来、黒羽が使用した黒曜の武器はほとんどが発動した後に残ることなく消滅する。だがこのチビハネは何故か消滅しないのだ。これが明らかに異常な状態だということを物語っている。

「この人形は自身の自我をもって行動している。これは極めて奇妙」

「人形・・・ああ、まあ確かに」

人形と二人して言わしめているが、なぜか肌は人の肌のように柔らかく、生きているように見える。だがこのチビハネ、心臓の音がしないのだ。

それがこのチビハネを人形と言わせている理由である。

「しかし、これは小さいという利点を生かした情報収集活動が可能と
いうことを表している。だからこの子が適任だと判断した」

「なるほどね。分かったよ、そこまで言うなら、コイツに任せるしか
ねえわな。おいチビ、無理して帰ってこなくてもいいんだぜ？」

嫌味たらしくチビハネに言い放つが対してチビハネはジト目で木
原を見た後。

『ベッ』

べちや。

「.....」

無言のまま、顔に吐かれた唾を拭き取る木原、そして。

「調子乗ってんじゃねエエエぞ三下アアアアア!!」

この抗争はこちら側ではお決まりのものとなりそうだ。そして
再び、黒羽がワンシヨットキルのデコピンを発動させて事態は事なき
を得たのだ。

AM8:00 三千院家。

「テルさん、そのフォークとってください」

「ほい」

朝の小鳥も囀る声が聞こえてきそうな清々しさ。 三千院家食堂
では使用人であるマリアやハヤテ、そしてテルが自身の食事を済ませ
ていた。

ナギは使用人たちよりも食べるのが必然と先になるので既に終え
て一室で日曜のテレビをダラダラと見ているに違いない。

「おお、今日の朝食は結構力入ってるな」

「そうですかテル君、お代わりはありますから遠慮なく食べてくださ
いね？」

テルは箸の動きを止めることなく、三千院家の自家菜園から作られ
た漬物を口へと運ぶ。

ハヤテは三千院家の広大な湖から釣れている紅鮭を食べていた。

ここで言うのもなんだが、野菜や魚介類などの食材は三千院家の敷地内ならば困ることはないのである。

何故か湖には全4・5メートルは超える淡水魚だっているのだ。

「こーやってしつかり食卓に並んでいるご飯も今だけだと思おうと切ねえな」

「そうですね。 そのうち自分一人で用意しなきゃなりませんからね・・・どうして今そんな話を？」

ハヤテの問いにテルはたくわんをかじりながら続けた。

「いや別にな？ 現役高校生が大学に行くために地元を離れて一人暮らしをするとか自分の作った料理と大量に並んでいたあの頃と比べちゃうんじゃないかと思ってるな」

「うーん。 僕は別に困りませんが、確かに一人暮らしの人って自炊大変そうですから」

「そうなんですか？」

ハヤテの言葉にマリアが反応する。

「まあマリアさんはあんま知らないと思いますけど、大学生にとって三千円は一万円と同じくらいの価値へと変わってしまうほどの環境の変化があるんです。 買い物も自分一人でやらなきゃいけないし、チーズの価格が低いのを狙って別のスーパーを巡るのも当たり前になるんです」

「ところで大学生って・・・まだ先のことを言われても仕方ないんですけど」

「そう言うなよ。 俺もお前も後二年くらいすれば白皇卒業するんだ」

「まあ、テル君はちゃんと三年間在学できるか際どいラインですけど・・・」

「そ、それは・・・努力します」

向かいでのマリアの呟きにテルがぎくりと固まる。 この前の期末テストも、実は一週間徹夜で望みなんとか赤点ラインギリギリを死守したのだ。

「あの時はさすがに死ぬかと思った。 当日自分に自己暗示かけたの

が明暗を分けたな」

「それだったら普段から授業で寝ないで勉強してくださいよ。テスト期間間近になってノート写させて苦労するのは僕なんですから」
「涼宮ハ○ヒはポーツと黒板を眺めていれば頭に自然と内容は入ってくるって言ってたぞ」

「テルさん、それは頭のいい人の天性的な才能ですよ」

どこまでも勉強というのが嫌いなテルに対してハヤテはふうと呆れながらも突っ込んだ。

「まあ、こうしてテスト明けな訳ですよ。これで俺を縛る鎖ってやつはもうないわけですよ。俺はフリーダムなわけですよ！」

テスト明けの高校生はもの凄いテンションが高いというのがこれが典型的である。

「だから今日はぐだって寝ます！ 二人とも、掃除は任せた！」
「待てい」

同時にマリアとハヤテの手が食器を片付けてさっそうと部屋から出ようとするテルをキャッチする。

「またあ☒ 逃げちゃダメですよテル君、そんな身勝手なことが使用人の分際でできると思ってるんですか？」

人をも殺せそうな笑顔がテル心臓を射抜く。胸キユンの意味でドツキリしたわけじゃない、ドツキリはしたが、思わず呼吸も止めてしまいそうな状態になるマリアの笑顔は・・・怖い。

「い、嫌だなあマリアさん俺は最初から冗談で言ってたんですよ・・・ハハ」

絶対的上下関係にあるマリアにそんな願いも叶うはずも無く、力なく笑うテルであった。

しかし、そんな日曜日の三千院家。

テルは自身の身に降りかかる『不幸』を未だ知らない。

『やー・・・』

そしてその『不幸』の源は既に侵入しているのだった。

第63話く時にはアリの気持ちになつてみてく

ジーツ誰かに監視されていると視線を感じたことはないかい？

実はそれ、一匹の虫の視線だったり幽霊の視線だったりするんだ。

まあそれは人形とかも例外ではなくてね。

みんなが寝ている間にもカサカサと動いている輩もいるわけですよ。

ゴキブリとか。

今回はそんなおもちゃとかあんま出ない普段は考えられない小さな世界の話。

朝の食卓を囲んでいる使用人達をアサシンのような静かさでドアの隙間から覗いている小さな物体。

名をチビハネという。

小さな台風の二つ名を持つこの謎の物体。

本編では『やー』しか言わないコイツですが……………

『アレが三千院家の使用人たち……………』

今回は普通に喋ってもらいます。（『やー』だけだと全く伝わらないので）

『私に課せられたのは三千院家の偵察……………だが』

少しの隙間からその眼差しはテルへと向けられる。

『こんな無防備な状態を晒しているというのにツ！ みすみす仕留めないというのは実に勿体無いツ！』

ギラリと瞳に炎を写すチビハネ、拳にギユツと力が入った。

『何よりもあのクソ野郎には前回のカバデイの事もあるのですよツ！』

詳しくはヒナ祭り祭り編の終盤をご覧ください。

『こうなつたらこの屋敷にいる人間たちを全員私の手にかけてやるのデス！ デス・オブザ・デスなのデス！』

ニヤニヤと笑いながら不吉な言葉をしゃべるチビハネは小さく誰にも聞こえないことを良いことにまるで地を這うゴキブリのごとく物陰を移動していく。

『ようし、まずはこの男からヤツテヤルデス！』

意気揚々と狙いに定めたのはハヤテだ。 現在位置はハヤテの椅子の真下。 見事に見つからず、敵の死角に入ることができた。

『フン、案外簡単なモンです。 こうして食べ物をお留守な男か・・・朝ごはんかあ』
その地面とテーブルの隙間から見えるハヤテの口へと運ばれている魚を見て、思わずジュリと涎を垂らしてしまうチビハネ。

イカンイカン、と首をぶんぶん横に振って我を取り戻す。 早速チビハネは準備を始めた。

手始めにハヤテの足元に忍び寄る。

『まるで女みたいな足ですね・・・マスターの足の曲線には及びませんが』

靴と執事服の間から微妙に見えたハヤテの肌はすべてで男のものではないように綺麗である。

『ここを・・・こうしてつと・・・』

気づかれないように仕掛けるチビハネ、あらかた終わったので暫くハヤテが動き出すまで待機した。

「御馳走様でした」

そしてようやくハヤテが動き出した。 食器を持ち、椅子を下げて動こうとした瞬間にそのトラップは発動する。

「うわっ！」

ガシャッーン！

食卓の場に響く割る音、ハヤテはバランスを崩して、派手に食器を床へとぶちまけてしまった。

皿は見事に割れてしまっている。

「オイオイ、大丈夫かよハヤテ？」

まだ食べきつていなかったテルがハヤテに声をかける。ハヤテも何が起きたか分からなかった。

「ええーつと・・・なんか急に足が動かなく・・・つてアレ!？」

自分の足を見てハヤテは驚いた。なんと、ハヤテの靴の紐が両方とも交互に結ばれていたのだ。

「一体誰がこんなことを・・・」

「決まってるだろ？ キ○スパーだよ」

「いや、確かにこんな感じのシーンが2あたりで有りましたよ?」

「これは伊澄呼んだほうがいいのかもしれないな・・・」

と様子を見るため少しばかり腰を浮かせていたテルが勢い良く椅子に座った瞬間――。

ザクツ!

「アツ――!!」

この世の終わりとも言えるような叫びが上がった。

「ど、どうしたんですかテルさん!？」

ギャグ漫画のように椅子から飛び上がったテルにハヤテが恐る恐る尋ねる。テルはお尻の方を摩っていた。

「だ、誰だツ！ 俺の椅子に剣山なんて置いたヤツはアアア！」

テルの言うとおりに、座っていた椅子の場所には三千院家の生花室にある剣山が何故かあった。

「ま、まさかお前なのかハヤテ！」

「ぼ、僕じゃありませんよ！ なんで僕のせいになるんですか!？」

「先輩イジメだ！ 自分の方が長くこの屋敷に仕えて安定した暮らしをしていたのを新入りの俺に脅かされるのを恐れて俺にやったんだろ！」

「なんで僕がそんなことしなきゃならないんですか!？ テルさんこそ僕の靴紐、結んだんじゃないんですか!？」

「どうやってお前の真下にわざわざ潜って靴紐結ばなくちゃならねえんだよ！」

と怒鳴りながら二人は言い合う。 実はお前が、違うお前がやつ

た、いいや俺はやってない。その台詞回しが続いていく・・・その一方で。

『キヤハハツハハハ!! バツカでえ! 簡単に引つかかってやがんのお!!』

机の真下では悪魔が盛大に笑っていた。

『しかし、この状況はとも見えていて気分がいい。仲間割れ、これほどに戦術的に有効な手段があつたであろうか・・・』

今でもまだテルとハヤテは言い争いを続けている。

『このまま使用人の仲を引き裂けば、あの男の戦力を削ることがデツキる!』

最後にパツチンと指を鳴らすチビハネ。最初と全く違う任務になつている気がするが・・・。

『ククク・・・いいつぞいいつぞ! ほら右拳を突き出せよジョー、お前のパンチはなんの為にあるんだ! さつさとその重い拳を野郎の拳に叩け付けちまいな!』

まるでストリートの喧嘩をはやし立てる野次馬のように二人の争う光景を眺めるチビハネ・・・と、そこで。

「はい!・・・もうそこまでにして!」

と間に割つて入る高い声。　　マリアだ。

「二人とも、こんなことで争っている時間はないでしょう?　ご自分の仕事を思い出しなさい」

「むう・・・」

「納得がいきませんが・・・」

と二人が唸つて喧騒が収まったときにマリアが手をパンつと叩いて鳴らした。

「じゃあもうこれでおあいこにしましょう。　さあさあ、早く仕事に戻つてください」

とマリアの仕切りっぷりにテルとハヤテも渋々応じていく。　　そしてここでマリアがはつと気づいた。

(お、思わず年長者としての力を見せつけてみましたが、こんなことだから年増だと思われてしまうのかしら)

メイドさんは今日もまた悩んでしまう。

「つたく・・・こんな早い時間帯から酷い目に遭うとはな」

朝食を終えた使用人たちはそれぞれ自分の仕事をするために持ち場へと足を進めた。

やってきたのは屋敷の庭。　もはやここにきてからは日課となっている庭の手入れだ。

「そんじやあさっそくお手入れでも始めつか・・・この雑草をハヤテと見立てて」

さっきの奇妙な気分を払拭するために気持ち切り替えてテルはまず草むしりから取り掛かった。

そしてその10メートルくらいの草むらの影では。

『どうやら仕事に取り掛かり始めたようですね・・・では早速ツツ!!』と、ニヤリと笑った黒羽は身の丈以上の容器を取り出した。

ザシユ、ザシユ。

「ぬん・・・と」

珍しく今日は天気がいいためか、麦わら帽子をかぶっているテルである。鎌を使って雑草をスムーズに刈り取れるのは想像以上に楽しい。

そしてだいぶ進んできたところでちよいと大きく成長した雑草を見つけた。　雑草狩りをしているときにこういうひときわ目立つ雑草を見つけてしまったためか、途端に意識が向けられる。

「なかなか立派なヤツだな、下に大根でも埋まってんじゃないかって位だ・・・だがこの厳しい世の中、雑草魂なんてこの鎌にかかれば一瞬だぜ」

根っこからつかんで、ちよつと趣向を変えて引っこ抜こうとテルは力をいれた。　だが雑草は微動だにせず。

「コイツは見事な雑草魂、この停滞しきった世の中に踏まれても折られても燃え尽きない魂というのを」

教えてくれている」

仕方ない。　ここは立派な彼（雑草）の強靱さに甘んじ、潔く鎌を使うことを選択したテル出会ったが……。

「アレ？」

ゴム手袋ごしに感じる密着感。　手が動かない。　テルの両手は雑草の根元をつかんだまま動けないまままで到。

「な、なんで……？」

どうしてこうなってしまったか。　雑草の呪いなのかと考えていたとき、雑草自体を見てみると奇妙な液体が目を取れた。

「この液体は……？」

と、今度は足元に転がっていた容器を見つけた。　その容器にはこう書かれていた。

『超特性・スーパー瞬間接着剤DX』

「だ、誰だこんなことしたやつは……」

辺りを見回してみたが誰かがいたという形跡がない。　このとき、テルはどうしようかと酷く悩んでいた。

「まあ誰か呼ぶしかねえよな、流石にこの雑草……動きもしねえし。

おい、誰かいるかあ？」

ギユオオオオオン!!

とテルの呼びかけに答える声があった。　うん？と反応し、テルが声のした方へと視線を向ける。

ギユオオオオオン!!

「……え？」

そこに居たのはマリアでなければハヤテでもナギでもない。

テルのもとへと向かっていったモノはエンジンのはいった芝刈り機であった。

「ハアアアアアアアアアアッ!？」

テルは猛然と叫ぶ。　なぜこんな所に芝刈り機があるのか。　と疑問に思うさなか、恐怖は加速する。

「え？　誰もお前呼んでないんですけど！　いや、これやばくね!？」

その芝刈り機は担い手がいないままでもエンジンさえ入れればまっすぐ走る代物だ。しかも誰がやったのか知らないが、芝刈り機にはロープで二つほどのチェンソーがくくりつけられている。

「なんなんだよあの魔改造っぷりは!! D O A D or R O S I N G に出てきそうな殺戮兵器が今俺の目の前に!!」

このままでは確実に命を刈り取られてしまう。テルはただがむしやらに抵抗した。接着剤は非常に強力であり、一度張り付いたら車で引つ張っても取れない代物である。

「ぐおおおおおお!!」

迫り来る芝刈り機を前にテルは思いつきり力を込めた。問答無用に芝刈り機は唸りを上げる。そして次の瞬間。

「燃え上がれ俺のコスモ（小宇宙）オオオオオ!!」

ズポオ!

「ぐっふっ!」

勢い良くテルの体が後方へと吹き飛んだ。幸い、体がつながっているのを見ると自分はまだ生きているらしい。

「あー。抜けた、抜けたよ。魂も抜けかけた・・・」

どうやら芝刈り機がテルを切り裂く前にテルが雑草を根っこごと引き抜いたらしい。さっきまでは全然抜けなかったのにあっさり抜けてしまった。これが火事場の馬鹿力というやつである。

「もう、誰かに呪いをかけられているとしか考えられない・・・もうダメだ。お暇をいただいて今日はもう休みてえ・・・」

朝から続く不幸にテルは打ちのめされていた。取り敢えずは目の前の仕事を片付けよう。そう思っつて芝刈り機を使つて手入れを始めたテルだった。

○

テルが芝刈り機を発動して手入れを始めたとき、その光景を眺めるようにチビハネはコ○ン像の影に隠れていた。

『チツ・・・仕留め損なつたです。まさかあのトラップを回避できるとは。だが効果は充分・・・』

項垂れるように芝刈り機を扱うテルを見る限り、身体のダメージよ

りも精神的なダメージの方が高いとみられた。これにチビハネはうつすらと笑う。

『次の準備に入るために移動しますかね・・・』
チビハネは笑いながらその場を後にした。

普通の人の目からして足元辺りまでしか伸びない雑草も、10cmほどの人形からすればその光景は広大な草原である。チビハネはその道を辺りを見渡していた。

『とてもとても広いのです。いつもマスターという場所とは比べ物にならないですね・・・』

屋敷の門からして普通にデカすぎるだろうと思っていたが、中の広さもかなりのものだ。自分の住んでいるところと比べると天と地の差を感じた。

『ではこの屋敷の使用人を始末してマスターにこの場所を提供すればいいのでは・・・アレ？ これすごくね？ 私って天才？』

と、新たな欲望を浮かべたところで・・・。

ドポッ！

『・・・』

一瞬、チビハネは自分の体に何が起きたのか分からなかった。いつの間にか頭の上から重みを感じると、いつの間にか自分はびしょ濡れになっていた。

『・・・天気は晴れでは？』

そして空を見上げた瞬間、黒羽は大空を覆う無数の飛来物を確認した。

水だ。だがただの水ではない。一粒一粒の大きさが自分の頭よりデカイのだ。

そりゃあ、そんなの自分には訳ないが空が晴れているのにこの現象は奇っ怪だと感じられずには居られない。

『ク・・・まさか私の存在が気づかれた？ これは私に対する攻撃ツ？』
実際はというと・・・。

「☒〜☒」

マリアが家庭菜園に水やりをしているからであった。

「あら？ 間違つて水をストレートにしてしまいました。これでは野菜たちが傷んでしまいます」

ホースの先につけられている摘みを切り替える。すると先程は一直線だった水が綺麗なシャワーへと形状を変えた。

「ま、マリアさん……」

「あらどうしたんですかテル君？ 魂でも借りられたような顔して……」

その場へとやって来たのは先程の殺人芝刈り機に命を狙われたテルだった。やつれたかのような表情である。

「俺って呪われそうな顔してますか？」

「どうしたんですか急に……まあ年中不幸、というよりもヤル気を感じられないような顔をしているのは確かですが……」

「そ、それは今の俺の精神状態ではかなりキツイっす」

「まあ、そんなことよりこちらの仕事を手伝ってもらってもいいですか？ 水一緒に撒いてください」

自身の今起きている事を「そんなこと」と簡単に流されてしまったテルは渋々としながらマリアから渡されたホースを受け取る。

「あく、水はいいなあ……何もしなくても流れていくし、管さえあればどこへでも行けるんだから」

そのセリフは「もう何もかも放り出してしまいたい」という逃避行を表していた。

○

『カモが二匹、飛んで火にいるなんとやら……』

なにやら色んな格言が混じっているがここではあまり気にしない。

『奴らが放水攻撃をしているわけですか……水攻めとはなかなか考えてやがりますね』

お目当ての人物を見つけたかチビハネは水やりをしているマリアとテルの姿を確認した。ちなみに今はトマトの上に乗って頭に降りかかる雨はそこら辺に落ちていたペットボトルのキャップを頭に

被せて凌いでいる。

『なんか良い方法はないですか・・・ん?』

と、チビハネの目に写ったのは地面を貼っているホースだった。よく見れば、そのホースはテルの持っているホースへと繋がっている。

『オオウ?』

TRICKの上田次郎のような声を出すと、何か思いついたかのようにはトマトの上から降りてホースへと近づく。

『ちよいと面白いこと思いついちゃいました・・・ヌオリヤツ!!』

ホースを両手で持つと力任せにホースをくの字にする。水が通っているとはいえ、チビハネの腕力を侮ってはいけない。するとその結果だが。

○

「あれ?」

突如水の勢いが弱くなったかと思うと、水は完全に止まってしまった。テルは唸りながらホースを叩いたりとするが水は出てこない。

「マリアさーん、水が止まっちゃったんですけど・・・」

「本当ですか? 自分でホース踏んだりしませんか?」

「そうかと思っただんですけど踏んだりしませんでした。見てくださいよコレ、ウンともスンとも言わないんです・・・」

と、ホースの先をマリアへと向けてトリガーを何度か引くが水は出てこない。

「あらら・・・ホントですね。壊れちゃったんでしょうか・・・」
そしてその諸悪の根源はというと・・・。

○

『ぐぬぬぬ・・・』

力の限りホースの水を止めていた。

最初は余裕だったものの、流星にこんな力のいる動作を長くは続けられない。限界がきたのだ。

よく見ると腕はふるふる震えている。

『も、もう・・・限界ッ!!』

バツとホースを手放したチビハネ。すると、後ろで気付かなかつたがホースを通えなかつた水が溜まりにたまってホースの形状はタコの頭のように大きくなっていた。

それが通えるようになったことで、ホースは唸る蛇のように荒ぶりながら動く。

『Oh・・・』

○

「壊れちゃったんだったら仕方ないんじゃないですかね・・・でも新しいしすぐ壊れるなんてないんですけど・・・」

とマリアが唸るようにホース先を覗いているとホースがガクガクと震え出していた。気づいたときにはもう遅い、ホース先からもの凄い勢いで水が飛び出した。

「これがリアルハイドロポンプ!？」

と、人の全身を覆ってしまうくらいの水が飛び出したことにテルは驚く。マリアは見事に水に包まれた。

「うわぁ・・・」

見事なまで決まったハイドロポンプにより、マリアは全身びしょ濡れになってしまった。

「だ、大丈夫ですかマリアさん・・・!？」

心配をしていた矢先、テルを殺気が包み込む。その殺気はマリアから放たれていた。

「テル君・・・人にホースは向けなくてもよかつたんじゃないですか・・・」

「た、たしかにそうですけど・・・はい、ええーっとマリアさん・・・怒ってます?」

もの凄い笑顔で投げかけるプレッシャーにテルは恐怖する。

「別に怒ってないですよ? でもこれなら呪われて仕方ないですよね・・・」

と、立ち上がったバツがついたかのようにマリアは慌てて顔の水を拭き取った。

「と、取り敢えず……ここはもう終わりましたので次の場所に行っても大丈夫ですよ……あ、あとそれから……」

「は……」

急に喋りづらそうになったマリアにテルが聞き返す。マリアは恥ずかしそうにしながら。

「あ、あんまり見ないでください……じゃないと社会的に抹殺します！」

「あ、スイマセン！」

今のマリアのメイド服はびしょ濡れだ。これは恥ずかしいというのも無理はない。個人的にまだ見ていたがこれ以上は本当に抹殺されかねないので慌ててクルツとUターン、すぐさまその場を走り出した。

「……くしゅん」

と誰もいなくなったところでマリアが寒さのためかくしやみをした。

ため息を深く付いたマリアである。

「はあ……さっきのはラッキーだったのか、不幸だったのか。少なくともこれからの生活、またしても気まづくなっちゃうのは確かだな」

ラッキーがあつた反面、これからのことを考えたときに死にたくなくなるという思いがさらに強くなったテルだった。

○

『クッククック……進行はとても順調なのです！ この調子でジャンジャン行きますよ!!』

チビハネはチビハネでもの凄い調子に乗っていた。

次回へと続く……。

第64話く刈り取る者く

本日の三千院家はお客さんが珍しく来ています。

屋敷内を歩いているのはひとりの少女。　白皇学院の生徒会長、桂ヒナギクである。

「なんか誰もいないから勝手に入っちゃったけど大丈夫かしら……？」

現在、使用人たちはそれぞれの仕事に付いている。　テルはうなだれながら屋敷内で、マリアは着替えるために一度お風呂場へと、ハヤテもどこかで仕事に付いているだろう。

「別にこれはハヤテ君に会いに来とかさそういうのじゃないの。　ただ今回は届けものをしてくるようにお義母さんに言われただけで……」
少し前のヒナ祭り祭り、ヒナギクの誕生日の白皇で来た人たちに少なからずともお礼をしなければと小さな紙袋をもって来たのだ。

祭りと言えば、ちよつと変わった事がある。　彼女はその祭りでハヤテのことが好きであるというのを自覚してしまったのである。

という訳で、ハヤテがいる屋敷に来ることに少なくとも緊張してないとは言いい切れない。

「別に緊張とかもしてないから……」

いや、酷く緊張していた。　その証拠に辺りをキョロキョロしながら。　もはやいつもナギの家に遊びにくるといふ軽い感覚ではなくなっている。

「それにしてもみんなな仕事に夢中になっているのかしら……適当にこのソファでも座っていいようかな」

立っているのもなんだったので、その客専用のソファに腰をかけることにする。　しかし、ヒナギクが背にもたれた瞬間。

バキッ！

「ひゃっー」

ソファの一部が鈍い音を上げた。　ヒナギクの体がゴロンと後ろへ投げ出される。

「な、なんでソファァー壊れてるのかしら・・・」

べつきりと折れてしまっている背もたれを見てヒナギクが身を起す。よく見ると、ソファァーの背もたれにはノコギリで削られた後があつた。

これでは簡単に背にもたれただけで折れてしまう筈だ。

「なんだかテル君の仕業のような気がするけど・・・まさかね」

今考えられる可能性は家事が一番できなさそうな彼ほかならないとヒナギクは踏んでいる。実際は違うのだが。

と、一步踏み込んだ瞬間。今度は足に何か引つかかる感触がした。ピンツという音を立ててキレたあとに、何処からか殺気を感じ、振り返る。

勢い良くヒナギクの元へ飛んできたのは長方形型の何かだ。何かと識別するより早く、ヒナギクは右手に政宗を呼び出してその物体を斬り捨てる。

「・・・こ、これは・・・まな板?」

ゴトツと落ちてきたモノをよく見るとそれは台所で使われる一般的な道具、まな板だつた。

「どうしてこんなものが・・・誰からかの悪意を感じるわね・・・」

と、まっぷたつになつていたまな板をよく見ると、大きく字が書かれていた。まっぷたつにしたせいでなんと書いているか分からないが、二つを合わせる大きな字でこう書かれている。

『このまな板女』

そしてその裏には数字で「72」と書いてあつた。これは意味がよく分からなかつたが。

ブチ。

「ホント・・・悪意しか感じられないわね・・・」

「アレ? ヒナギクさん。来ていたんですか?」

とそこへタイミング悪く、ハヤテがやってきた。しかしその瞬間、ヒナギクは政宗の矛先をハヤテに向ける。

「ハヤテくん？ 私今すぐく機嫌が悪いの。 ちよつと悪者がこの屋敷にいるから一緒に捕まえるのを手伝ってくれないかしら？」

「へ？ それは構わないんですけど・・・なんで怒ってるか教えてくれませんか？」

「な・ん・で？ こうあなたはデリカシーっていうのがないのかしら？」

「スイマセン。 もう聞きませんから取り敢えず政宗を首筋に近づけるのは止めてください」

とても素敵な笑顔で居る時のヒナギクは本当は般若並みの形相をしているに違いない、想像したくもないが。 そんな先頭を切り始めたヒナギクを見ながら心の中で、また何か自分はやらかしてしまったかと思っているハヤテだった。

『またなんか一人増えましたね・・・即席のトラップを作ったとはいえ、あの女、悔れないです』

廊下を歩くチビハネは先程のヒナギクの超人的な光景を見ていた。 今後、これからの自身のマスターの驚異になることは間違いないだろう。

『さて・・・あの男はどこに行ったのか。 探すのもいいですが、こう広くては疲れます』

確かに、こうも屋敷ないが大きく広くては一部屋を行ったり来たりするだけかなりの時間がかかる。 今だけ等身大でないことを悔やんだ。

何かないかと辺りを見回していると。 角を曲がろうとしたところである物を発見した。

『あれは・・・』

チビハネが発見したのはティーセットや食事などを乗せてあるキャスター付きの台だ。 ひとりの老人が押してこちらに向かっているのがわかる。

それを見てチビハネは閃いた。即座に身を潜めて老人が横切るのを待つ。

『どうッ！』

と、台が丁度横切る瞬間にチビハネは素早く飛び出してキャスターの間をすり抜けて真下へと滑り込んだ。そのまま真下の部品に張り付く。

『これで楽に移動することができます・・・』

どこかで見たことのあるようなシーンだが取り敢えず突っ込まないで置いて、軽快な速さで進みながらチビハネは真下から隙間から見える空間を眺めていた。

ある程度距離を稼いだところでチビハネは張り付くのを止めて床を転がった。服に付いた汚れを払うと少しだけ空いている部屋を見つけた。

その隙間を覗くとチビハネはニヤリと笑みを浮かべた。

『ビンゴなのですよ・・・』

そこに居たのは部屋掃除をしているテルであった。しかしその表情はぼーつとしており、何か遠くを見つめるような虚ろな状態である。

「はあ・・・どうにかしてくれ。この状況から抜け出せる方法を教えてください」

モップを扱いながら、ヨレヨレとした動きで床をきれいにしているテルがつぶやく。今日は朝から散々な目にあっている。それが彼をここまで疲労させていたのだ。

『ククク・・・弱音を吐きまくっているのですよ。もはやヤツは虫の息・・・』

タンスの上によじ登り、気分だけ見下ろした気分をチビハネは味わっていた。

『しかし、ヤツもまた怨敵でありながらも私の好敵手だったわけでありますが・・・ここで殺るのはちよつと気が引けますね』

今までの戦いを知っているわけではない。テルを好敵手と呼んでいるのもチビハネの勝手だ。

『私が本気を出せばこんなもんですよ。 あっさり過ぎましたがね……』

ふんと鼻を鳴らすチビハネは内心では多少興ざめしてしまっているといったところか、その言葉には高ぶりはない。

しかし、ここでチビハネの予想外の展開が起こる。

「おや？ テル様、なにかお困りのようで？」
『なッ!?!』

と、いつの間はこの部屋に現れたんだと思ったチビハネだ。 その驚愕の視線の先には和服を着た少女がいたのである。

「オイオイ伊澄、一体どこから入ってきたんだよ」

テルはだいたいの察しは付いているが、突如現れた伊澄に向けて問う。 伊澄はいつものようにポケーつとしながら

「ええーつと、いつものように歩いていたら……いつの間にかここに」
つまりは迷子。 この伊澄が所有している天性のスキルだ。

F○t eのサーヴァントで表せるなら、必ずともEXランクとも言っても過言ではないのである。

「まあ、ちよつと聞いてくれよ伊澄。 実は今日は朝からだな……」
と、テルは朝から今までの出来事を伊澄に聞いてもらうことにした。

伊澄は霊能力者であり、恐らく呪いの類の知識はあるはずだと思つたからである。

「……今話を聞く限り、呪いという可能性もなくはないのです」
話を聞いていた伊澄の言葉の感じが少しだけ変わる。 やはり、これはその類の呪いなのか。

「しかし、それは人本来の持つ幸運の要素にも入ります。 ハヤテ様の不幸が乗り移つたのかしら……」

「さすがにそれはねえだろ。 断言できないけど、あの不幸はケースが違う。 なんかこう、あいつが都合が悪くなるような不幸しか起きてないからだな」

ハヤテの場合、不幸はいつものように訪れているが、それは決まつてハヤテが行く道を阻むかのように都合を悪くするものだ。 テルのように、直接命まで狙われるような不幸ではない。

「……まあ尽力はします。 これでもそういった類のモノにはなれてますから」

(だいたいの検討はついていますし……)

と心の中でつぶやいた上で伊澄は袖から札を取り出した。 表情が一変し、いつものおっとりから仕事人の顔へと変貌する。

「ではこれでその呪いとやらを捕まえましょう」

伊澄が取り出したのは一つの小さな箱だ。 色柄は素晴らしい、だがその箱の形を見てテルは目を細めた。

「ええーと、なにこのゴキブリホイホイ……」

「これは鷲ノ宮の悪霊捕獲用具、捕異捕異(ほいほい)です」

「やっぱりゴキブリホイホイじゃねーか！ 名前もそうだしこの横に空いたそれらしき穴もあるし！」

テルの言うとおおり、その捕獲用具と言われた箱の側面にはどうみても小さなあの黒い虫専用の通り抜け穴が数個ほどあった。 どう見てもゴキブリホイホイである。

「しかし、この効果は絶大です。 そのうち一家に一台ぐらいの需要が出てくるはずですよ」

「んなわけあるかよ……」

と突っ込んだテルをよそに伊澄は箱をその場に置いた。 そして何かを箱の中に入れたあと、蓋をしてテルと共に部屋を出る。

「これで完璧です。 あとは数分の後に悪霊はあの箱の中にいることでしょう」

「俺の見間違いでなければだけどなあ、あの箱の中に入れたのってどう見てもケーキだよな」

「はい、ついでにチョコレートとかもいれてみました」

「そんなのに引っかかる奴がいるのか？ そもそも俺に呪いをかけてる悪霊がいるのか？」

「まあ……それはお楽しみです」

袖口で口元を隠しながら自信アリ気につぶやく伊澄にテルはなんとも言ふことはなかった。

……そして数分後、扉を開けて入ってみると。

『わーい！ このケーキマジで美味しいですー!!』

箱の中でケーキにかぶりついているチビハネをテルたちは見つけた。

「コイツはあの祭りの時の・・・」

「知っているのですか？」

「ああ、なんか知らないがああ黒い女と戦ったときに出てきたやつだ」

テルの『黒い女』という言葉に、伊済の表情が険しくなる。

「・・・ではこれは使い魔ということでもいいのでしょうか？」

『ハッ！ お前はマスターの怨敵！ まさかこの箱は罠ッ!?!』

いまさかよと言いたくなるが、ようやくチビハネは自身が罠にかかったということに自覚したようである。

『オラアこっから出せえ！ このインチキ魔術師があ!!』

「なんと言っているのでしょうか？」

「さあな。 コイツ『ヤー』しか言わないから分からん」

チビハネがなにやら騒いでいるが二人には『ヤー』という言葉しか伝わってはいない。

「では早めに片付けてしましましょうか・・・その前に」

と伊済が箱を持ち上げて怒りの顔のチビハネを凝視する。

「アナタを使った人物はだいたい予想は付いています。 その人はどこにいるか教えていただきたいのですが・・・」

「伊澄?」

テルはチビハネに言葉を放つ伊澄に何か違和感を感じる。

『なッ!? コイツ、何を言ってるのです!?!』

チビハネは驚いた。 伊澄が聞いたのは自分の主である黒羽の場所。 当然、チビハネは知ってはいるが、教えることはない。 そのまま座り込んで白を切ることにする。

「やはり教えはしてくれませんか。 多少の意思はあるようですね・・・」

「伊澄・・・一体何をするつもりだ」

低い声でテルが伊澄に聞く。 明らかに仕事人の顔だ。 だがそ

れ以上に感じる違和感、これはなんだろうか。

「この使い魔から主の場所を聞いていたんです。場所が分かればその場へと私が赴いて戦うつもりですが……この使い魔は話してくれそうもなかったのよ」

「ここで始末します」

続けて放ったその一言に、テルは驚愕した。いや、これも仕事として割り切ってしまうえばそうなのだが、とテルの顔が困惑の顔へと変わる。

「何もそこまでする必要はないだろ。確かに実害を被った俺からすれば、無視はできないけどな」

「……私たちに脅威となる存在は出来るだけ取り去っておいた方が良いかと思っただのですが。それでも貴方は敵にまたしても逃げるチャンスを与えるのですか？」

「……」

伊澄の一言にテルは黙り込む。事実、テルやナギ達を襲ってきた相手をテルは倒しはするが捕まえるまではしない。現に、黒羽の時だってそうだ。ヒナ祭りの時も何故か仕留めずに終わっている。

「その甘さは戦いでは命取りです……ましてやこれは使い魔、人形といても過言ではないです」

伊澄がテルに対してこのような態度を取るのは初めてだ。戦いで甘さが招く危機。伊澄も経験があるから言えるわけだ。

「ふん」

それに対してテルは鼻を鳴らして返す。

「ご忠告感謝する。けど俺は必要のない戦いはあまりやりたくねえのよ。敵が挑んできたら気の済むまで潰してヤル気をなくさせてやるだけだからな」

テルはよほどのことがない限りは相手の命をとったりはしないだろう。しかし、敵に情けをかけるどころか、相手に手をさし伸ばしたりと普通は考えられないような考え、はたから見れば偽善だ。

「わかりました。今回は見逃します……ですが、今度会ったら」

「ああ、その時に俺が居なければ煮るなり焼くなり勝手にすればいい。

遠慮なくやれよ」

その言葉で納得したか、テルにその箱を手渡す。

「すまねえな。今回は俺の顔を立たせてやってくれ」

それで敵を見逃せというのか、あまつさえ、自分の命を一度は取られかけたその手下相手に。

伊澄の心の中は複雑だ。

「まったく……いったい誰の為に言ってるとおもってるんですか……」

「ん？なんか言ったか？」

「なんでもありません！」

と顔を少しだけ赤くしながら伊澄は去っていった。テルはなにがなんだかわからない。

「さて………」

ヒョイと箱を持ち上げてテルはチビハネを取り出した。

「今の会話を聞いたら大体分かんذار。これからは気を付けな」

『自分の命を狙う相手を助けるとは愚かな奴です』

「だからなんて言ってるんだよ」

口ではそう言ってもテルにはヤーとしか伝わっていない。構わずチビハネはテルの肩に跳び、近くの窓に降りた。

そして窓を指差す。

「窓開けろってか？ホレ」

ぱしぱしと窓を叩くチビハネを見て、テルが仕方無く窓を開ける。

『こう簡単に敵を見逃すとは浅はかな奴です。私から言わせれば

『ちよろい』です。まあ一応感謝しますが……』

最後にビシツと指をさして言い放った。

『それではまたケーキを食べに来ます。ごきげんよう、チョロ助』
当初の目的とは全く違うセリフを残してチビハネは飛び降りていった。結局『ヤー』としか言っていないが。

「もう来んなー」

ヒラヒラと手を振ってテルは窓を閉めた。少しばかりため息をつくと再び仕事に取り掛かろうとする。しかしその瞬間。

——パツンツ。

「あれ？」

なにか張り詰めていた糸が切れたような音とともに天井から白い粉が溢れてくる。

「なんだこれ・・・小麦粉？」

目線から見えるその袋にはそう書かれていた。 どうしてこんな所にあるのかという疑問を浮かべる前に、テルの視線はそのすぐ横へと向けられた。

なにやらたくさんのものでこの原理を利用したオブジェが設置されており、ピタゴラススイッチのようにボールが動いている。そしてそのボールの終着点にはライターがあった。

さて、小麦粉という粉末物質を密室にした状態でなおかつそこに火を付けてしまうとどうなるか、みなさんはご存知だろうか。

「やべ——」

ボールがピタリと止まった瞬間。一瞬の閃光と共に部屋が吹き飛んだ。

テルはこの日を境に、小麦粉が少しだけ嫌いになってしまったのは言うまでもない。

○

『帰ってきましたよマスター!!』

夕方になった頃。汚れた姿でチビハネはビルの屋上へと戻って

きた。 ビルの屋上では黒羽と木原が居る。

「お、帰ってきた。 ずいぶんと汚れてやがるなオイ」

『五月蠅い豚に興味はないのです！ マスター！』

木原がつぶやいてるのに目もくれず、まっさきに黒羽の肩へと飛び乗る。

「……ご苦労さま」

黒羽がその手のひらにチビハネを乗せた。 木原は何をしているのかと視線で問いをかける。

「情報の共有。 この子が見てきた情報を私が触れることで共有することができる」

「あらとつても便利なこと」

要は触るだけでチビハネの情報が黒羽に全て渡るといふものだ。 驚きの性能である。

「で？ その成果はどうだったよ？」

早速その情報に期待する木原。 黒羽は情報を一度整理して簡潔に述べた。

「ただっ広くて、ケーキが美味い」

「え？なんだそりゃ？」

そのふざけているのかと思う内容に木原は疑問を浮かべながらチビハネをつまんだ。

『触んなこのゲスやろう』

もの凄い殺気をこめた瞳で木原を見るチビハネ。 負けじと木原もにらみ返す。

「……」

『あ、マスター……』

二人のにらみ合いをよそに黒羽はその場から離れていく。

『マスター。 私はマスターの役に立っているのでしょうか？ 生まれたばかりの私が言うのもなんですが、私はマスターに笑って欲しいです』

チビハネは端で空の彼方を見つめる黒羽を見ながら胸のなかでつ

ぶやいた。

初めて見たその日から感じていた違和感。なぜそんなにも無表情なのか。

何か過去に悲しいことがあったのかもしれないし、チビハネがそこに入ることは出来ないだろう。

だって自分は：「使い魔」もとい人形のような、ものなのだから。『ちくしょう、あの小娘の一言にいちいち氣を立てている暇はないというのに・・・』

あの忌まわしき箱の中へと誘った和服の少女の事が脳裏を過ぎった。

『しかし、私が必ずやマスターに笑顔を取り戻させて見せます!』

熱い決意を表した拳が天を穿つ。と、そのチビハネの真上から白い布が被せられた。若干湿ったそれは百均にでも売ってそうな白い使い捨てのタオル。

「ほら。なんかスゲー汚れてるからコイツで拭け」

どうやらタオルを渡してきたのは木原だった。湿ったタオルを持ち上げて顔を確認する。

『ケツ、なんかムカツクやつですけどこれは氣の利いた奴です』

「ケツ、せっかく労を労ってやってるのに・・・ん？ どうした黒羽」
そんなやりとりをしている時、いつの間にか黒羽がすぐ側に立っていた。まるで氣配を殺した家政婦のミ〇のように。

「言い忘れていた」

「言い忘れてたって・・・何を？」

頭に疑問形を浮かべている木原に黒羽が答える。

「この子の記憶から、次の三千院家の目的の場所を特定した。来週には、そこに向かうらしい」

『あー！ それは確かかれんだーとかに書いてあった奴です!』

チビハネが騒いでいるが、木原は黙らせて続きを聞いた。

「三千院家が次に向かう場所は・・・伊豆半島」

その言葉を聞いた瞬間、木原の顔が歪んだ。

「マジかよ。どうしてもいかなきゃいけないのか？」

「強制はしない。ただ、作戦の効率が低くなるだけ、目標の達成には充分」

木原がいなくても、黒羽が一人で行けば成功率が下がるもの目標は達成できるといったところだろうか。

「分かった。行こう、お前一人だけ行かせるのはなんか不安だ。」

いろんな意味で」

そこには別の目的があるのだろう。木原の表情はそういうものだった。

『わ、私も行きます！ 行きますとも！ マスターとなら地の果ても！』

チビハネも遅れて意気込む。木原は真上の空を眺めた。

(あの場所に行くのは・・・何年ぶりかね)

もうすっかり夜になりかけてきた頃、一つだけ浮かんだ星を見て木原は心のなかで懐かしんだ

第65話く旅立つ先に幸あれく

「おーいテルウ、さっさと来いよ、置いていくぞ」

朝から早く、三千院家の玄関には三千院家の次期当主、三千院 ナギの姿がそこにあつた。 普段引きこもりである彼女が珍しく外に出ているのはとても珍しい。

「待ってるの、ったく・・・遠足前の小学生じゃねえんだから」
やる気のなさそうな顔で玄関から現れたのは善立 テルであるというの言うまでもない。

頭を掻きながらテルはそうつぶやいていた。

「まあ、テルさん。 せっかくお嬢様が外に出てるんですから、本当なら嬉しいくらいなんですよ?」

「どーせ今回だけだハヤテ。 次の話になったらいつものニートお嬢様に逆戻りだ」

テルに続くようにもう一人の執事、ハヤテが笑みを浮かべていた。
そんなハヤテにテルはふんつと鼻を鳴らす。

「ごめんなさーい、遅れてしまいました」

最後に扉を開けたのはマリアだった。 テルの視線がその姿に釘付けにされる。 今回のマリアはメイド服ではなく、私服だったのだ。

「んー。 今日もいい天気ですね。 皆さん準備はできましたか・・・つて、どうしたんですかナギ」

気付けば、ナギがマリアをジロジロと見ながら何か考えていた。

少しの間を開けて一言。

「いや、お前も寝巻きなんて冗談はよして、早くメイド服の準備を・・・」

「このオシヤレ服が寝巻きに見えますか」

「だっていつもメイド服だから違和感が・・・」

「まあまあ皆さん。 早くいかないと予約の電車に間に合いませんよ?」

話を終わらせたのはハヤテだった。 使用人が運転する車が門の近くで停車している。

「ふむ。では行くうか、皆のもの。いざ伊豆半島へ!!」

第81話くクリスマスだけど特に予定なんてなかったんだぜく

——東京駅。

「ってアレ?」

「さつき車乗ったと思ったらもう駅かよ!」

「ふっふっふ、残念だったなテル。この小説ではよくあることだ。場面の切り替えなど、話の区切りが付いたら一段落でかえることが出来るんだよ」

「なん・・・だと・・・」

まあ驚いているところは放っておき、話を戻すことにする。

「しかしまあいきなり伊豆半島に行くことになるとはな・・・」

そう。彼らがこれから向かうのは伊豆半島だ。それは昨日、突然と言われたことだった。

なんでも、ナギの私用とかで行くことになったのだが、詳しいことは伝えられていない。

「でも今回は変わってますね。出かけるにしてもお嬢様だったらこの駅ごと買い取ってしまうかと思っただのに」

ハヤテが思うのももつともだ。三千院家の財力なら、一つの駅を丸ごと借り切ることも出来る。だがナギはそれをしなかった。

普通に予約をしてチケットをもらい、人ごみあふれる駅のなかで普通に立っている。

「そんな無粋な事はせんよ。今回はただ普通に旅を楽しみたいとおもったからさ」

というナギ。実は今回の旅、特別なことということなのでSPの方々も付いてきては居ないのだ。誘拐の危険率を上げているという自覚はあるのか。

「だから誘拐されんじやないのかよ」

「まあ、今回はテル君とハヤテ君がいますので頼りにしていますよ」
笑顔でテルにいうマリア。 使用人嫌いのナギに自分たちは信頼に足る人物になったのだろう。

「まあ、失態を見せればどうなるかわかってますよね？」

これも笑顔で言うマリア。 その笑顔からはダークネスなオーラが滲み出ている。 あの目はなんだ、見ただけで人を支配下に置ける目だ。 けっしてギ〇スとかじゃないよ。

「い、イエス・マイロード」

「いや、お前らの主は私だから」

震えながら忠誠を誓っている二人に対してナギが静かに突っ込んだ。
だ。

「おお、そういえば私たちの乗る列車はどれだったか？」

「確かスーパービュー踊り子号でしたっけ？ どこにあるんでしょう？」

ナギとマリアが辺りを見渡す。 こんなところはたから見られてはただの田舎者だと完治がされるのではないかと思つたハヤテである。

(おいハヤテ・・・)

(なんです？テルさん)

(俺の勘が正しければ、ナギとマリアさんは世間知らずと常識知らずの塊だ。 とても俺は安心して電車に乗せることができるか心配だ)

(まあ、確かに心配ですけど。 ただでさえ厄介なことに巻き込まれるのは通常の三倍のスピードですから・・・)

(そうだ。 だからこそ、お前がしっかりしないと二人を守れないぞ？)

(いや、テルさんも手伝ってくださいよ。 同じ執事でしょ？)

(イヤ、無理。 昨日スパロボZやってたら夜を明かした。 だから今眠い。 同じクラスの哲夫くんは今週中に返さなきゃならないのにまだクリアしてねえんだよ)

(だからって僕に丸投げしないでくださいよ。 しかも今まで言いませんでしたけど、この会話の描写、お互いにチラ見しながらコンタク

トとってるだけですからね！」

(ほら。そんなことを言ってる間に・・・)

「えーつとこのグリーン車ってなんなんですかね？」

「きつと緑色なのだろう。旧ザ○的な感じで」

「じゃあ適当に空いている列車に乗りましょうか」

「そうだな」

隣では二人だけで危なっかしい発言をするナギとマリアの姿が。この二人をこのまま放置していたらろくなことにならない。ナギに関しては爆発オチが目に見えている。

「あーもうっ！ 全席指定なのでチケットなくさなければ全く問題ないです！ ささ、出発ですよ！」

最終的にすべての仕事を丸投げされたハヤテ。その二人の手をとって誘導していく。まるで引率の先生だ。

「計画通り!!」

某主人公のセリフを言葉にしながらテルもあとを追っていった。

○

時間は少し遡る。時刻はだいたい六時ごろ、まだ夜が明けて浅い時間帯だ。

「うーん。 やっぱ無謀だったかな？」

道路をマウンテンバイクで駆るひとりの少女の姿があった。

ジャージ姿にリュックサック。そしてそのオーラから醸し出される普通感。

西沢 歩その人である。

「まだ出発して一時間・・・この時間からかけて行けば余裕だと思ってるんだけど・・・」

足のペダルに力を込める。彼女の言う目的地まではまだ遠い。

「伊豆半島って遠いなあ・・・」

一般人の常識で考えてみよう。東京都内から伊豆半島までどれくらいの距離があるのか。常識的に考えて一日でというのはありえない。しかし、歩は学生だ。普通の女子高生なので電車賃などはまったく蓄えがない。そして何より最近親の会社の事情を聞くとかワガママが言えない状態であつた。

その結果がこれである。これならまだ伊豆行き of 電車に張り付いて目的地に行つた方がまだ早いのではないか。

「おお、その作戦なんかイイな」

「そうそう、もうそこらへんで走ってる列車でもいいから捕まえてひとつ飛びたいなあー……って」

突如心の声に割つて入ってきたその人物は自身の隣にいたのだ。しかもこの自転車に併走している。

「よう。ハムスター！」

「なんか違うよ！ 伸ばしが無いだけでなんか全然違うよ！」

隣にいた人物は前回のヒナ祭りに会つた人物、木原 竜児だつた。

「なんだハムスタ。今日は体を鍛えるためにサイクリングか？」

「え、えーつと……」

（どうしよう。まさか自転車で伊豆に行こうだなんてあんま言えないし……）

勢いに任せて自転車を漕いでいるとはいえ、その道は険しい。万里の長城くらいの果てしなさがある。

その絶望感からちよつとだけ目的を伏せている歩だつた。

「ちなみに俺はこれから伊豆に行くつもりだ」

「はい？」

一瞬、耳を疑つてしまった。この男、木原 竜児は今なんと云つたのだろうか。

伊豆に行く。それは問題はない。問題があるとすればその行く手段だ。

「え、伊豆って、どうやって?」

「いや、どうやってって・・・走ってだけど」

（は、走って!? この人、ここから伊豆までどれくらいの距離があるかわかってるのかな!?)

自転車で行くとうとしてるあなたも人のことは言えません。

「だって体を鍛えなきゃな。黒羽はもう飛んでっちゃったし・・・」

「あ、黒羽さん。元気にしてる? この前はゴタゴタしちゃっていつの間にかはぐれちゃったんだけど」

木原の口から聞い黒羽という名前に歩が反応した。ヒナ祭りでは黒羽と共に店を回っていたのである。

「飛んでっちゃったって・・・あの人も伊豆にいつてるの? もしかして飛行機とか?」

「いや、まあ間違っちゃいねえよ。ただな、飛んでいくとき黒羽は・・・」

黒羽『私が空を飛ぶために必要なこと、それは私自身が飛行機になることだったんだ』

「って言ってたんだ・・・」

「なんでそうB〇EACHっぽくなるのかな? 黒羽さんは最後の正解でもしたのかな!? というかそんなキャラじゃないよね!」

思わず突っ込んだのはその異常な内容からだけではなく、あの鉄仮面がそんなギャグのセリフを放つなどというのは歩の中のイメージとかけ離れていたからだ。

「当たり前だ。あいつがギャグをかますようになったらそれでこそ世界の消滅、地球の終わり、アルマゲドンだよ」

「最終的には隕石まで落ちてくるくらい危険!」

淡々と述べる木原に歩は突っ込んでいくことしかできない。少しだけ会話が収まると、木原が口を開いた。

「なあ・・・」

「何かな?」

「やっぱり長くね? 伊豆まで」

ずっこけた。近くに石があったわけでもなくずっこけた。

「トレーニングだつて言つてたあのポジティブさはどうしたのかな!？」

「いやあ、だつて人間出来ることとできないことがあるじゃん。現実的に考えたら無理だつた。うん、無理」

キラんと笑顔で返す木原に歩は呆れる。そんな歩を尻目に木原は次なる行動をしていた。何故か近くの線路の近くへと移動する。

「じゃあ簡単な方法で俺は行くことにする」

「いや、どうやっていくの？」

その時、ちょうどそこから離れたところで大きな音がした。列車だ。列車が来たのだ。

「ハムスタのアイディアをもらおうと思つてな、こつちの方向へ行けば伊豆にも近づけるんだろ？」

間違つてはいない。その方向に行けば大まかにも伊豆方面へと向かつていくのは確かだ。しかしやり方が間違っている。

「止めたほうがいいよ！死ぬつてホント考え直して！いや、マジで!!」

「はっはっは！何驚いてんだよ。これくらい簡単だつて」
歩の忠告をけらけらとあしらう木原は遂に準備に入った。後ろ

に下がって助走を付けて一気に線路にダイブする。

次の瞬間、時速200を超える貨物列車がちょうど歩たちの横を通り過ぎていった。

「ほーらかん た ん だつ つて——」

「全然言えてないからあああああ！」

通り過ぎたのはものの数秒、木原のセリフが歩に完全に届くことはなかった。まあ当然といえば当然であるが。

「本当に飛び乗っちゃったよ・・・」

常人なら体の骨折では済まない。色んな体の場所が吹っ飛んでいてもおかしくないだろう。

だが歩は確かに見たのだ。時速200を超えるスピードで動く貨物列車の取っ手の部分をピンポイントで驚掴みしている木原の姿

を。

よほどの筋力と握力がなければすぐに腕がちぎれてしまう。そしてあの絶対的な自信。まるで恐怖心なんてないかのようだ。

「つていうか、私置いてけぼりにされちゃったよ！ちよつと急がなきゃ不味いんじゃないかな!？」

ぽつんとその場に残されていた歩は急いで自転車を立ち直すと、ペダルに足をかけて駆け出した。

第66話くルール無視からの強制退出く

「おおハヤテ！ やっぱり列車は速いな！ 見ろ、景色がすごい勢いで変わっていくぞ！」

遠足に行く小学生のような無邪気さを全面に押し出しているナギ。同席に座っているハヤテはその光景を見て笑みを浮かべていた。

「やべえな、マジやべえよコレ。 小さな悩みもぶっ飛んでっちゃう・・・」

窓に一緒に張り付いているテルを除けばもつと良い笑顔を演出できたが、彼のせいで半分苦笑いだ。

「しかし、まあなんだ。 伊豆っていったらなんだ？ うまい食べ物なんてあつたっけ？」

窓に張り付いていたテルが景色を堪能したか、席へと座る。 それを聞いたマリアはお茶を飲んで答えた。

「テル君、あれじゃないですか？ 昨日やっていった温泉ですよ」「ああ、あのテレビでやっていった温泉ですね？」

ハヤテの言葉にテルも昨日の夜のことを思い出していた。 行く前日になってのことである。 テレビをつけていると、伊豆の特集を行っていたのだ。

内容は近くに隕石が落ちてその近くの温泉になにやら怪奇な現象が起きているという。

なんでも元気が湧いてきたりと滋養供給に優れたりというのもひとつであるがそれだけではないのだ。

『他にも、女性は胸が大きくなります』

「なん・・・だと・・・？」

これを同時刻見ていた某学院の生徒会長様は思わず風呂上りに飲んでた牛乳を飲むことを忘れて食いついたりしている。 まあそ

んなことはハヤテたちは知る由もないが。

『頭がよくなって主に数Ⅰを中心に理数系の成績がアップします!』

「なん・・・だと・・・?」

これに反応したのは普通の高校の女子高生。　思わず目の前に広げていた教科書の問題よりもそちらの方に食いついたのは言うまでもない。

『それと何らかの理由で神秘の力を失った人は力を取り戻せるのか・・・そうなんですよね?』

『はい、俺は失ってた死神の力、取り戻すことができました』

「な・・・に・・・」

もちろんこれに反応したのはどこかの陰陽師みたいな少女。　飲んでいたお茶を一度置いてその画面に食いつく。

『そしてなにより体が発達しましてね・・・見てくださいよこの女の子、こう見えてもこの子まだ六歳』

『ショウガクセイニナツタラトモダチヒヤクニンデキルカナ?』
「なん・・・だと・・・」

何よりこの食いつきからして言うまでもないがこれは某お金持ちのお嬢様。　明らかにおかしな体型をした六歳児の体型をガン見していたのは言うまでもなく。

『実はココだけの話・・・死ん魚のような瞳が水を得た魚のようにキラキラと輝き出すんです!』

「なん・・・だと・・・」

もちろん、その屋敷に仕えている借金執事は誰よりも早くその話題に食らいついた。　彼の人生はここで変わるのだと思ったのかもしれない。

○

「俺もこのコンプレックスからついに抜け出せる時がきたんだよ。入っただけでこの辛さからおさらばできるんだぜキヤツフウウウウ!!」

ドスツ。

喜びを声にして表していたテルに対して即座に MARIA がテルの鳩尾へと抜き手を繰り出した。繰り出された抜き手はテルの溝尾へと突き刺さる。

「静かにしましょうね？ 騒ぐのはいつでも向こうについてからでもいいじゃないですか」

「・・・はい、す、ずみばせん・・・」

呼吸困難のような辛い息のしづらさに言葉を上手く発せられないテル。みんな、電車の中ではあまり騒がないようにね。

「まあ、お嬢様にはお嬢様の良いところがあると思うので僕はあまり気にしませんが・・・」

「ば、バカもの！ 別にそういう訳ではないのだぞ！ ただアレだ！ せっかくの伊豆だ。そういうパワースポットとかあつたらちやんと寄って行きたいではないか!!」

ハヤテの言葉が凶星だったのか、ナギは慌てて言い訳した。そこへテルが腹を抑えながら割って入る。

「お前はいいよな、あまり深い悩みとかなさそうで」

「僕にだってありますよ。 悩みくらは・・・」

そのセリフを聞いてテルは顔をしかめて鼻を鳴らす。

「お前が抱えている悩みってアレか？ 女絡みの悩みだろ？ いいだろうがコノヤロー、日本中の俺みたいな人間が、お前のような人間を全国の男子が殺意を込めた瞳で見ていることを忘れるんじゃないやねえぜ」

「いや、そんなことないですって。僕はこの不幸体質をどうにかして欲しいです」

「お前は自分のその体質をまるで理解していない。お前のその不幸体質はなくしちゃダメなんだよ。そう、それはもうネタをのせていない寿司のように意味がねえんだ・・・不幸をとつたらお前はもうただの女たらしになっちまうんだよ!!」

「テルさん、訳がわかんないです!」

「もう、二人とも旅を盛り上げるような話もしないでどうするんですか?」

二人の話にうんざりしたか、マリアが割って入った。列車の醍醐味と言えば、目的地に着くまでの景色をのんびり見ながら堪能するというものだ。

「それなのに近頃の若い子と来たらやれトランプだの、PSPだの全く景色に目を向けることもしないで・・・」

「はい、全くおっしやるとおりで・・・」

なにやらブツブツと続けているマリアに二人は苦笑いで答えていた。説教をくれるマリアの姿はもうオカんにしか見えない。

「ん? ハヤテ、そのお前が膝の上に乗せているソレはなんだ?」

ふとナギがハヤテの膝の上にあつた四つの箱を見て聞いていた。

テルは分かっていたが、ナギやマリアはこのようなモノには縁がないのだろう。首をかしげてこちらを見ている。

それを見てハヤテは中の袋から取り出して見せた。

「これは駅弁ですよお嬢様」

「駅弁?」

「はい、駅で売られている弁当です。車内でお嬢様たちがお腹を空かせると思ったので買っておきました。皆さんの口に合うかわかりませんが・・・」

「その駅弁はどこでも売っているんですか?」

まじまじと駅弁を眺めながらマリアも興味津々だ。

「たいていの駅で売っていると思いますよ。駅一つ一つに特色が

あつて旅の一つの楽しみですよ」

「ふーん」

普段見ない駅弁というものに興味が沸いたのだろう。ナギは席を立ち上がった。

「ならば私も自分用に買ってくる」

「おう。じゃあ迷子になるなよー」

ふん、と鼻を鳴らしてナギはそこを去っていく。今のは遊びでテルが放ったものだ。さすがにここで迷子というのは有り得まい。

「どうしても自分用に欲しいんですね。僕が買ってきた弁当なんて興味がないんですかね？」

弁当箱を抱えたハヤテはまだ開いていた列車のドアから出ていくナギの姿を見てハヤテがさびそうな目をしていた。おおかた、また勘違いをしているのだろう。

「まさか。どうせ物珍しくなつて欲しくなつただけだろう？ 変に落ち込むなつて」

「僕見捨てられたりしてませんよね？」

「それは考えすぎだバカ」

もう知らん。ここまで変にネガティブになられるとこちらの対応も困るというものだ。

——数分後。

「なあ、アイツ遅くね？」

「そうですね。お嬢様、まさか迷子に？」

「いやいやいや。まさか、やめろつて、フラグなんて俺は立ててはないぞ」

『それでは発車いたします』

車両内に発車を告げる放送が流れた。さすがにこれはいけないと思つたテル達だったがちょうどその時に。

「おーい、ハヤテエ！」

「お、お嬢様!？」

ようやくナギの姿を確認することができたハヤテだが、そのナギは窓の向こうにいた。ナギはなにかこちらに呼びかけている。

「おーい、財布を忘れてた。駅弁を買いたいから早く持ってきてくれ。ものすごくいいのが見つかったのだ。イクラがのっけておるのだ。すごい高級感が溢れているだろう!!」

注意。ナギの声はハヤテたちには聞こえません。

ものすごく今の自分の置かれている状況を理解していないアホがハヤテたちの前にいた。

「おおお嬢様!! 何しているんですか! もう発車する時間ですよ! 急いで乗ってください!!」

「とうかナギの財布とかは中身はカードなんですからあんま意味ないですよ!!」

当然だがハヤテとマリアの言葉も向こうのナギにはまったく聞こえていない。ナギから見てわかるのはなにやら中であうだうだといでいるというだけだ。

「まったく。中の奴らは何を騒いでおるのだ。このとおりハヤテから言われた切符はもちあるておるし、これがあれば安心——」

ガチャン。

どうどうとチケットを見せびらかしているナギの目の前で自動ドアが閉まった。時間が来たのである。

列車がゆっくりと動き出し、窓に見えていたハヤテたちの姿もゆっくりと遠ざかっていく。

「.....」

やがて列車全体が駅を過ぎ去っていくと呆然としていたナギが目をぱちくりとさせた。

「あつれー?」

自分の置かれている状況がどういものか全くわからないナギはただ立ち尽くしていた。自分が置いて行かれたという悲劇に気づかない、これもなんとという悲劇かな。

はい、迷子の出来上がりです。

○ 「うおおおおおおお!! 燃えるんだ僕のコスモオオ——!!」
ナギが目の前で置き去りにされているのを黙って見ているハヤテではなかった。 すぐさまに救出に向かおうとしているハヤテであるが、その方法がまさかの列車の扉を無理やり開かせるという行爲だった。

「お、落ち着くんだハヤテ! お前、いくら主人公だからってこんな暴挙許されると思ってるのか——!!」

「放してくださいテルさん! お嬢様が危ないんです! お嬢様が通常の三倍のスピードでトラブルに巻き込まれるのはテルさんもよく知っているでしょう!」

「そりゃあそうだけどいくら主の為だからって救出するために法まで犯すか!!」

「だったら一回列車を止めてもらったほうがいいんじゃないでしょうか?」

慌てるハヤテとテルを前にマリアが冷静にその一言を告げる。

その一言にハヤテが反応する。

「なに言ってるんですか! 列車なんて止めたならそれでこそ何千万という借金が!!」

「俺もこれ以上借金増やすのはゴメンですよマリアさん!!」

列車にはダイヤという時刻表があるため基本列車はその時刻表通りに動かなくてはならない。 早すぎても遅すぎても駄目なのだ。

列車のダイヤというは固く、ダイヤモンドのように守られなければならない。 これが時刻表をダイヤと呼ぶ理由である。

そんな物を簡単に止めてるといふことはすべての時刻を丸々変えるということである。

だがマリアは言った。

「そのくらいの損害で住むのなら別に止めてしまっても構わないんで

すけど・・・」

(忘れてた!! マリアさんにはこのての常識が通じないんだつたツ!!)

やはり金銭感覚の根本的違いだ。一般人たちの常識をはるか超えている。

ここで絶望的状况に立たされたハヤテはテルとアイコンタクトを取った。

(テルさん! こんな状況ですし、マリアさんをここに一人で置いていくのは危険だと僕は考えています!)

(たしかにそうだな。いや、ちよつと待てハヤテ。俺はお前に連れていかれることは確定なのか?)

(当たり前ですよ! 探す人は多いほうがいいに決まっています!!)

最近のテルには拒否権というものが無いらしい。だがここにマリア一人だけを残していくのはいささか問題があるのではないか。

「あれ? テル君にハヤテ君にマリアさん・・・どうしてここに?」

その時だ。二人の目の前に救いの女神が現れた。

「ヒナギクさん!? どうしてこんな所に!」

ハヤテたちの前に現れたのは私服姿のヒナギクだった。

「え、なんでって言われても・・・べ、別に温泉とかの効能の話聞いて家族旅行の場所を伊豆とかにした訳じゃないんだから!!」

(いや、嘘だね。俺にはわかるぜ会長)

一瞬でその動向からヒナギクの虚偽を見極めたのはテルだった。なぜなら自分も同じく温泉の効能を求めるものなのだ。同じ目的をもつ人間の頭の中など分かってしまうものだ。

「でも良かったですよ。ここでヒナギクさんに会えるなんて・・・」

「え・・・そう・・・?」

ハヤテの一言に少なからずとも嬉しそうな仕草を見せるヒナギク。「でも一緒には居られませんので、まりあさんをよろしく」

まんざらでもなさそうにしていたヒナギクに続けてハヤテは真顔

で言い放った。

そして気合を込めてドアを一気に開けるとテルの首根っこを掴んだ。

「もう俺に拒否権なんてないのかよ！ お前、後で覚えておけよチクショーロー!!」

テルの怒号に耳を貸すことなくハヤテは車両の外へと軽く飛んだ。投げ出されたのではなく、飛んだのだ。

「良い子このみんなは絶対にマネしないでねえええ!!」

時速百キロを超えている列車から飛び出しているテルは空中で雄叫びを上げながら地面を転がった。普通死にます。

アスファルトを変に受身を取ることなく直接叩きつけられたらろうに大の字で倒れて重傷を負っているテルをよそにハヤテはむくりと立ち上がってガッツポーズを見せていた。

「……もう人間じゃないですね」

「……そうですね」

(え、というか……私とそんなにいたくないのかしら……?)

少女の悩みはまた増えたのであった。

第67話　我思う故に分からず

「迷子になってしまった……」

無人と言つてもいい駅で一人佇むナギは辺りを見渡しながら己の状況を整理していた。

「えーと。ちゃんと切符を持っていたのに電車が発車、ハヤテたちは見事に置いていった……」

冷静に考えている間に時間は過ぎ、虚しさの風だけが吹いてく。

「ま、まあ時々こんなサプライズもある!! それになんら問題ない! このとおり、切符はしっかりと持っているのだ! これさえあれば取り敢えず何とでもなる!!」

右手に持っていた切符を掲げるナギは見事に前向き思考を展開していた。確かに切符さえあれば取り敢えず次ある電車に乗り込むことが出来たはずだ。

そう願いつつこのままここで時間が経つのを待っているようにしたが。

「そう、なんとかな——」

その瞬間、手から握っていた切符が風に攫われた。

「うわっ! ちよつと待てエ!」

風に攫われた切符はゆらゆらと空中を泳いでいる。ナギがぎりぎり手を伸ばそうとするとその時だけ風はいたずらをしてナギの手は空を切るのだ。

「そ、それがないと私は……待つのだこの切符ツ!!」

渾身の力を込めてジャンプをしてようやくのことでナギは切符をつかむことができた。これで帰れると思ったナギだがその掴んだ物を確認して目を疑った。その切符らしきものにはこう書かれていたのだ。

『偽物の切符を掴まされることを……強いられているんだ!!』

「知る kannamо——ん!!」

怒りのスイツチONとともに強いられシールを破り捨てた。

そして破つて少しだけ冷静になったか、辺りを見たときには自分は

駅とは程遠い、森の中へとワープしていた。

「え？　どゆこと？」

気づかぬ内に切符を追いかけていたらこんなところまで来てしまったようだ。　どこの森も深く入ってしまうと昼ごろだというのに薄暗い。

「は、ハヤテ・・・ど、どこだあ〜」

その薄気味悪さを感じたか、ナギはふらふらと出口を求めて歩きだした。　一つのアドバイスを言うならば、雪山などで遭難した時の対処法はどこにも行かず、その場にとどまることである。

「どこなのだあ〜」

対処法はどこにも行かず、その場にとどまることである。　大事なことなので二回言いました。

「ガルルル・・・」

「へ?」

さらに言えば、こういった山などでは野生の動物もいるわけで、よほどのことをしない限りだがたまに襲ってくる野犬がいるのだ。

「ちよ、待て！　突然ここで犬が出てくるなんて聞いてないぞ!!　誰も望んでないし私だってなにも望んでいない!!」

バウツ!

とナギの言葉に答えるように野犬が吠える。

「吠えられる事を私は強いられているんだ!」

恐怖に煽られたナギは完璧にパニックに陥っていた。　黒い野犬は低い唸りを上げながらゆっくりとナギに近づいていく。

「や、やめろ・・・私はそんなに美味しいものじゃないぞ・・・ホントだぞ」

いつもならハヤテが簡単に追い払ってくれるのだが、今ハヤテはここにはいない。　今は電車の中にいるのではないかとナギはさらに自身の状況が詰まれていることに気づく。

「う、嫌だあ・・・怖いぞ・・・ハヤテエ!!」

「ガアアーーーーッ!!」

助けを求めたナギの叫びを皮切りに野犬はナギに襲いかかった。

(もう、ダメだ・・・多分ここには誰も来ない・・・)

ナギはその瞬間、あの鋭い牙が自分の体に食い込まれるのだとナギは目を閉じて覚悟した。

だがその時だ。

「ギャウンッ!!」

「え?」

その犬の鳴き声を聞いたナギが目を開けた時、そこには信じられない光景があった。

「・・・」

「ガルルル・・・」

自分を襲うはずだった野犬が今度睨みを利かせているのはやけんの遙か小さな物体だった。

小さな物体はナギが目を疑うほど小さい。大きさはわずか10

〜15cmほどの人形の大きさ。黒い服を着ていた。

『ヤーツ!!』

その小さく黒い人形、チビハネは野犬に向かって声を上げながら構えを取った。

チビハネが構えた瞬間、野犬は2度チビハネに突っ込んだ。上か

ら奇襲である。大きく口を開いてチビハネに噛み付くつもりだろう。

だがチビハネの反応は早かった。すぐさまバックステップで攻撃を交わす。野犬の噛み付きは音を立てて空を切る。

その瞬間を逃さず、チビハネは脚部に力を入れて犬の頭付近まで一気に踏み込んだ。

『ヤーツ!!』

その気合と共に踏み込んだスピードを最大限に活かしたグーパンが野犬の額に炸裂した。犬からすればまるで人間の蹴りを食らったかのような衝撃だ。

野犬は泣きながらその場を去っていった。

『やー……』

まるで格闘家が呼吸法をするかのように息を吐くと改めてナギを見た。

『無事だったかいお嬢さんよ……俺がアイツに同廻し回転蹴りを叩き込まなきやお嬢さんは今頃アイツの胃の中だったな……』
「……?」

渋い声で言うチビハネだがナギは首をかしげていた。当然である。チビハネの声は主である黒羽にししか理解ができないのだ。他人からはほとんどが「やー」としか聞こえないのだ。

(えーつと……これ、なんなのだ?)

目の前の現実離れた現実になギは何度目をこすったことだろうか、しかし何度現実逃避しようとちび羽の姿が消えることはなかった。

『しかし、俺もマスターの懷で寝ている間にこんな所に落ちていたみたいだな……』

「取り敢えずお前なに言ってるかさっぱり分からんな……だが、助けてくれてありがとう」

ひよいとチビハネを拾い上げるとナギは笑顔で礼を言った。この状況はあまり驚いていても解決するはずがない。だからあまり驚かず受け入れることにしたナギであった。

「しかし、妖精の類にこの年で出会えるとは……良い、良いぞ！ 漫画のネタに出来そうだ!!」

『ええ!?! あの世紀末チックな漫画に私のネタを盛り込む要素がどこにあるですかー!?!』

「あ? なんか言った?」

思わず素に戻ったチビハネだが睨みを利かせたナギに瞬時に黙り

込む。

(あつれー、オカシイですね。私の言葉ってマスター以外は解らないはずだったんですけど)

恐らくナギは表情で読み取ったということだろう。恐ろしい子である。

「まあ、私はともかく・・・お前は迷子か？」

『いや、状況からするにお前が迷子じゃないですか？』

あくまで自分の迷子を認めたらならないナギにチビハネが突っ込む。

「私はそうだな・・・空飛ぶ切符を追いかけていたらいつのまに知らないところへ・・・」

『それを迷子と言うんじゃないですか!？』

チビハネは前回三千院家に侵入した際にナギの姿は寝ていた状態を確認していた。だが情報で聞いていた負けずらいという部分だけであるが、アホの項目を増やしてもいいのではないかと思ったチビハネである。

「しかし困ったな・・・」

『むう、私もマスターとの早期合流を望んでいるわけですし・・・ここは敵の親玉だろうが手を貸してやるです』

と己の考えに結論を付けるとナギの肩に乗り出し道を指さした。

「お前、私をバカにしているのか？ こっちなわけが無いだろう。こっちだ」

とチビハネはナギを誘導しようとしたのだがナギもこの状況でも往生際が悪く、他人の意見に従おうとしない。チビハネの指した逆方向の道を歩いていく。

ガシッ。

「あいたたたたたたッ！ こら、髪を離せバカ！」

『コイツの方向に従っていたら一生この森から出れる気がしないです。だから力づくで連れていきますです!』

ナギのツインテールをがちりつかみ、力づくでチビハネは自分の方向へと歩いていく。ナギはなんとか逆らおうとしていたが体格差と力の差があり、後ろ髪を引かれていった。

といつても、チビハネも勘で歩いているわけだが。

○

自分の主がこんな状況なわけだが、その頃の列車にいるマリアたちはというのだ。

「こうしてマリアさんとお話するのも久しぶりですね」

「そうですね。今回は家族旅行なんですね・・・お姉さんは居ないんですね？」

「はい。仕事で来れなくて・・・でもお義父さんが誕生日に行けなかったからどうしてもって」

「はは、相変わらずですね」

ハヤテとテルが（テルは強制）この列車を飛び出してから談笑を交えて数十分が立つ。もう二人なんて居なかったかのような状態になっていた。

（ハヤテ君とテル君ってどんな扱いになってるんだろう・・・）

ちよつとそんなところが気になったヒナギクだったが、今回こうしてわざわざマリアと話をしているのは世間話をするためではない。

「で？ 私に深刻な悩みを聞いて欲しいって言ってましたけど」

そう。ヒナギクはマリアに一つ相談があったのだ。それはごく最近起こったと言っても過言ではない。

「もしかして胸のことですか？」

「違います!!」

マリアさん、温泉の効能求めに私がきたとまだ思っているようだ。と、ヒナギクは頭を悩ます。まあ当たらずとも遠からずだが。

「私はそういうのはあまり気にしないほうがいいと思いますよ？ 女性というのは発達だけに魅力を求めるわけではありませんし、それに温泉なんかに入っただけで変化があるとは到底・・・」

「いや！ なんか違う方向に話が変わり始めていますよ!!」

アレ？ なんか今日のマリアさんきつぱり言い過ぎな気がする。

るのだった。

○

快晴の空、日本海上空はどこまでも澄んでいた。

だがその雲一つなき空を一点の黒。

「……………」

黒い翼を拡げているのは鳥でもなければ飛行機でもない。人間だ。

無言のまま空を悠々と飛んでいる黒羽はその翼にて伊豆を目指していた。

木原とは別ルートで向かい、後にある場所で合流する手筈となっている。

何時もなら一人で向かう黒羽だが今回は小さな連れがいるのだ。

それはヒナ祭りから自身から生まれたチビハネである。

黒羽の命令に忠実に動くあの物体の正体を黒羽は掴めないままだった。

自分のイメージに近い物を作りだし、武器として使うのが黒羽の黒曜だがあのチビハネだけは完全に黒羽の思考から外れていた。

何より考えたのはチビハネの行動だった。木原 竜児という男と同じく笑い、泣き、怒る。

——それはどれも自分には全くない。

あの姿が自身の写し身ならば、あのチビハネは自分と一緒に機械のような存在だと思っていた。

が、現実にはあの様である。まるで意志があり、生きてるように。

だから黒羽は疑問する。自身とチビハネの相違に。これは悩みではない、チビハネの存在など取るに足らない、が自分のイレギュ

ラーな事態が起きている事は隠せない。

原因があるとすればただ一つ。

あの男から貰った一太刀ではないかと黒羽は考察する。

テルの放った強化版撃鉄が自身の体に当たった時、確実に何か起きた。恐らく過度なダメージの上で使用した黒曜の力がエラーを起こしたのだとすれば。

悪魔で予想だがこれが一番の節だろう。

どうやらあの系列の武器は自身に脅威となるものらしい。

次なる対策を打ち出して置かなければと黒羽は考えていたが、ここであることに気付く。

いつもなら五月蠅いとも言えるチビハネの声がない。

「……………」

今まで自身の肩に張り付いているものだとばかり思っていたがそこにチビハネの姿は無かった。

今、現在で黒羽はチビハネが居ないという事に気付いたのだった。

恐らく飛んでいる間に寝落ちしたのだろう。チビハネはよく寝る癖がある。

直ぐ気付くのが遅れたのは考え事をしていたためだと黒羽は断定。

無駄な思考は判断を鈍らせる。

黒羽はそのまま見捨てても良かったがそのチビハネの存在が余りに引つかかる。

彼女は旋回し、飛んでいたルートを飛び直すのだった。

第68話く普通とお嬢様く

さてさて、空の人外も陸の執事、列車のメイドと生徒会長の話を一旦止めて、別の場面へと切り替えたいと思う。ここは海沿いの一般道路である。午前中だというのに車が一台も通らないのは何か理由でもあるのかと思うくらい静かな道だ。

その道路を進んでいるのは一台の自転車だ。オレンジ色のスポーツ型の自転車、マウンテンバイクはマナー悪しの二人乗りを行なっている。

ナギと西沢 歩だった。

『やー』

(こら、お前はもう少し静かにしてろ)

小さな声でナギは自身の背中につぶやく。 現在旅の同行者だったチビハネは歩のバックの中に入っている。 チビハネの存在を歩は知らない。

「・・・ちよつと」

後ろでそんなやり取りしていると前にいる歩から声をかけられた

「さっきからの凄い黙り込んでるけどさ、大丈夫なの？ どこか気分悪かったりする？」

「するか馬鹿。 ただぼんやりと海の方を眺めていただけだ馬鹿者め」

「な！ そんな言い方はしなくてもいいんじゃないかな？」

しれつと返すようにナギは言う「と今度は歩が不機嫌となった。

「迷子になっていたところを私が拾ってあげてなかったらどうなっていたことか・・・」

「別にお前がこなくてもハヤテがやってくるから別にいいのだ。 お前が来てすごいショックを受けたのだぞ？ そうだ。 その時の気持ちを確認に表すならこうだ。 大物芸能人が来るみたいな広告を見て小さなホールに行ってみたらやって来たのはまさかのゲッツだったみたいだ」

「な、なんかよくわからないけどもの凄いがっかりさせちゃったのは

確かなようだね、うん」

ことの始まりはこうだった。何キロ漕いだのだろうかと疲れていた歩がラーメン屋に来たとき、そこにはナギが居たのだ。

ちようどラーメンを食べ終わった後だったのか、店主からは『まいど』と声をかけられていたのを覚えている。

そしてぞんざいに扱われながらもナギの事情を聞き取るとこれがなかなか放っておけなかった状態なので今しがたナギを自転車に乗せて運んでいるという状態である。

「まったく、もう少し早めに言ってくれば前の駅で家の人と合流させるとかできたのに・・・もう戻ることなんてできないよ?」

「う、うるさいなく、いいだろ別に、私だって別にただドジツたわけじゃないのだぞ? あの時はもう目の前の駅弁に目が眩んでいてだな・・・」

「はい」

自分の失態をなんとかごまかそうとしていたナギに歩むが後ろを向きながらあるものを手渡した。黄色いオープン型の携帯だ。

「これでお家の人と連絡取りなさい。携帯の使い方くらい分かるでしょう?」

流石にそれくらいできる。馬鹿かこのハムスターは・・・。

と思っていたナギだが改めて歩に聞いた。

「なんか意外だな。ここまで気が利くとは思ってなかったぞ」

「なんか良いこととしてお礼言われてるのもの凄いい怒りたくなるのは気のせいかな?」

まったく。と歩がため息をつくそのまま話を続ける。

「だって放っておけないんだもの。今頃ハヤテくんだって心配してるだろうし、自分のお嬢様の安否が一番気になるものじゃないの?」

執事つてさ」

「む、むう・・・」

「それに放っておいたらなんか爆発騒ぎに発展する気がするんだけどね?」

「私はテロリストか!? . . . いや、そうじゃなくてツ!!」

そしてナギは少し言葉詰まる。この合間に歩が疑問に思っ
てゆつくりと後ろを振り向くと丁度ナギが口を開いた。

「あ、ありがとう・・・」

なんかもの凄い顔を赤くしたナギがそこにはいた。ぞんざいに
扱う相手だとしても助けられたらしつかりと礼を言うナギである。

「・・・普段からそれくらい素直ならもっと可愛げがあるのに」

「なんだと——!!」

「わあ——！　後ろで暴れないでよ——！」

身を揺らされたことにより自転車は右往左往とバランスを失うが、
なんとか歩が自力で平常運転へと復活させる。

「もうっ！　さっさと電話したら？」

「ふん！　ハムスターに言われるまでもないわ!!」

と、反抗するようにナギが携帯を開くと画面の下側に一枚のプリク
ラがあった。

ん？　まあハムスターも一応女子高生だしプリクラくらいやって
いるか。

と考えていたナギだったがそのプリクラに写っている少年を見て
思考をフリーズさせる。なぜならそのプリクラに写っている少年
は自分の執事、綾崎　ハヤテに他ならなかったからだ。

「これはどういうことだ——!!」

「わあああああ!!」

突如の大声に歩は身を震わせて驚いた。歩は慌てて振り返る。
そこには鬼のような顔をしたナギがいた。

「これだコレッ！　このプリクラだッ！　なんでお前がハヤテのプリ
クラを持っているのだア！」

「わー！　なに人のプリクラ勝手に見てるのよー！」

「この際だから言っておくが、ハヤテは私の物だからな！」

「ふ、ふーんだ！　わがままなお嬢様のことなんてすぐに忘れちゃん
じやないかな!？」

「な、何をー！　お前はアホの類だからな、なんせ自転車で伊豆まで行
こうとしてるくらいだからな！　ハヤテはアホの女は嫌いだぞー！」

「うるっさーい！ いいから早く電話しなさいよー！」

歩が吠えるとナギはようやく大人しくなり渋々と電話をし始めた。歩はそれを見て深い疲れを込めたため息をついた。

（はあ、そう言えば懐かしいな。 はやて君とプリクラ撮ったの・・・）
先程の口論の元となっていたプリクラのことを思い出していた歩。そう、確かあれはバイトに行く途中のハヤテを無理に引き止めてまで撮った一枚だったはずだ。

今のところ世界で一枚しかないものである。

（あの時はバイト行っちゃう記念とかで無理に撮ってもらったんだよねー。 さつき三千院ちゃんにはああはいつたけど私のこの壊滅的な頭脳・・・やっぱ頭悪い女は嫌われる運命にあるのかな？ その為に温泉の効能にすがりに来てるなんて・・・誰にも言えないじゃない！）
大丈夫です。 温泉の効能に釣られてノコノコとやってきているアフォ共はあなたただけではありませんよ。

「おおー！ 流石だなハヤテ」

「え？」

え？ 今ハヤテ君って言った？ 言ったよね？

過去を振り返っていた歩はナギの電話の言葉に一瞬で現実へと戻ってきた。

「ちよっと、もしかしてハヤテ君ここに来るの？」

「ん？ 当たり前だろう。 ハヤテは私の執事だ。 私のピンチには

すぐに駆けつけるさ・・・途中で電車から身を投げたらしいけどな・・・」

「ええー!? 怪我してないの!?!」

「うーん。 まあハヤテは大丈夫だったが、もう一人は・・・重症だ」

「ああー」

なるほど。 と、歩は理解する。 多分、重症なのはテルの方だろう。だがそれよりも気になることが歩にはあった。

（しまったな〜ハヤテ君に会えるのは嬉しいけど私ジャージだよ・・・もう少しマシな服来てくればよかったよ!!）

ああ、もうこのままこの目の前の海の中に飛び込んで死にたいと考

えていると歩たちの側を黒い車が通った。

(・・・?)

歩はこれに違和感を覚えていた。見た感じは普通の黒い車だ。しかし、普通なら通り過ぎていくところをわざわざ速度までこちらに合せて尚且つ横に付くようにしている。

これが俗に言う不審者ではないかと思っていた時に、不意に車の窓が開いた。

ゆつくりと開いていく窓。その窓越しに見えたのは細長い黒光したモノ。

どう見ても銃にしか見えない。　　というかこれ銃だろ。

「うおおおおおおおおお!!」

「あー！　こらー！　いきなり飛ばすな！　携帯が!!」

「電話なんかしてる場合かー！　つーかなんぞアレエ!!」

歩は気付けばすでにペダルを漕ぎ出していた。　　いや、漕ぎ出すというより逃げ出していたというほうが正しいか。　　ただその爆発力は凄まじく、今なら世界で名を馳せたウ○イン・ボ○トに匹敵するくらいのスタートダッシュだった。

その一方で、自身の携帯が犠牲になってしまったということ歩は分かっていいるのだろうか。

「いや、私はお前が何を見たのかさっぱりだ・・・アレって?」

と、丁度速度を上げて追いついた車が再びナギたちの横に付く。

中にいたのはまあ不審度Maxの覆面、全身スーツの男四人。

写ったのは四人組の男たちだった。　　何故か帽子を被って顔が分からないように黒い覆面を付けていた。

——わーい、ビックリするほどの殺し屋ルックなんだけど仮装パーティの帰りかなんかかなー?

——きつとそうじゃない?　　手にもっている銃がもの凄い気になるけどアレきつと手品の道具だよ。　　うん、中から鳩とかでてくるんじゃないのかな?

「あの一、スイマセン・・・我々、殺し屋なんですけどもー。　　三千院

ナギはどちらで？」

言っちゃった。言っちゃったよ！コイツら自分で自分のこと殺し屋だつて言っちゃったよ！ 隠す気 zero だよ！ 証拠隠滅どころか、足跡付ける気満々だよ！

と、二人は同時に心の中でこの殺し屋たちにツツコンでいた。一方で、殺し屋の四人はなにやら話し合っている。きつと良くないことに違いがないが。

「おいおい、特徴はツインテールって書いてあるぞ・・・うーん。でも両方ツインテールだしな・・・」

「でも片方のツインテールって微妙じゃね？ どっちかという和金髪の方がナギじゃね？」

「いやいや、お前ツインテールの何かを理解してねーよ。ツインテールはツインテールなんだよ。髪結んで二つに分ける。そこには長さも何も関係ない。ツインテールに境界線なんてあつてはならないんだ」

「うん。取り敢えず・・・二人ともやつちやうか!!」

「どつちにしろ殺る気満々——ツツ!!」

最後に☆マークがついたような気の軽さで男が発言したとき、歩は本日二度目の世界最速のスタートダッシュをして逃亡していた。

(流石三千院家のお嬢様！ どうしよう！本当に殺し屋に狙われてるんだ——!!)

(ていうか携帯落としちゃったけど・・・)

(うわーん！ 本当にどうしようー!!)

生死をかけたカーチェイスの始まりである。

○

「テルさん、早くしまししょうよ！ この道をまっすぐ走ればお嬢様たちがいるんですよ!」

「お、おい、お前・・・今の俺の状態に本気で言ってるのか?」

ナギたちがデッドチェイスを繰り返している中、ナギたちが通った道路をたどっているハヤテとテルの姿があった。

「さつきマリアさんから電話があつたんです！　とても親切な人の自
転車に乗って運んでもらっているって！　だから急ぎましようよ！」
「……………」

もの凄い急ぐのはわかる。　何といつても自分の主だ。　しかも
ナギのことなのでいつ殺し屋に襲われているかも分からない。　執
事である自分たちがいかにないことに何ら間違いはない、間違いはない
のだが……………」

「というかテルさん、さつきから生まれたてのヤギのような歩き方し
てますけど…………それに頭からそんな血を出すなんて。　どこか調子
でも悪いんじゃないですか？」

——コイツ、この状況見て何ら思うことがないのか。

キョトンとした表情のハヤテを見て、心の中でテルは明確な殺意が
湧いた。　電車を無理やり降ろされて（超強制物理的）、コンクリに叩
きつけられて無事に済むはずがない。　ハヤテは無事でもテルには
ハードルが高すぎた。

そんなオーバーキル状態にある彼にハヤテはこういった。　さあ、
走って行きましよう、と。

まず最初は歩いていたが、ハヤテは遅いと見たかテルの手を取って
走った。　もの凄いスピードのために一緒に走っていたテルは遂に
力尽きて、最終的にはテルは強引に引き摺られるように移動してい
った。

それでもめっちゃ早い。　だけど早い分、テルに当たるダメージは
本当は深刻だった。

どうやらナギのことになるとハヤテは周りが見なくなるらしい。
こんなことで実害を被っていたらこちらの身がもたない。

「もしかして…………僕のせいで結構ヤバイ状態だったりしますか？」

「当たり前だよオオオオオ!!」

「いや、テルさんは僕と同じ次元の人間かと…………刺されても平気でし
たし…………」

「メツチャ痛いからッ！　アレ実はただの痩せ我慢だから!!　撥ねら
れても飛び降りてもケロツとしてるお前の方が別世界の人間なんだ

よ!!」

いかんせん、テルとハヤテでは耐久力が違う。ハヤテが耐久振りのハピナスであるならば、テルは何も耐久ふりしていないゴローンぐらいの耐久の違いがあるのだ。

「分かりましたよ・・・じゃあ少しペースを落としますね」

「そういう問題じゃねんだよ」

「あ、マリアさんの電話番号が表示された携帯を見つけました!」

「聞く気もzeroか。 よろしい、後で覚えてろよ」

最近テルに対してハヤテの扱いが酷い。なんかハヤテが外道と化している気がするが気のせいだろうか。

そんなことを考えている間にハヤテはその親切な人間の携帯を調べ始めた。こいつ、本当にデリカシーがない。

(このプリクラってたしかあの時の・・・ってことはこの携帯って西沢さんのだよな・・・)

画面の下の方に記憶あるその一枚にハヤテは動きを止めた。少し考えてそこで携帯をしまう。

「持ち主はわかりました。それではすぐにもお嬢様のところへ・・・」

『待てー! 綾崎 ハヤテーッ!』

どこからも聞こえた甲高い声にハヤテとテルが同時に聞こえた方を見た。見たのは平面ではなく、空だ。

響いた叫びとともにこちらに飛来する物体が見えた。空を切り裂くような勢いで飛来してくる物体はでかい。慌ててその場を離れる。

『チツ・・・外したか』

飛来した物体はなんと電柱だった。二本の電柱を抜き取ったかのようなあとを残している。そして恐らくその電柱をこちらへと『飛ばした』であろう人物は静かに電柱の上に降り立った。

「あなたは・・・伊澄さんのところの!!」

そこに現れた小さな人物は鷺ノ宮 銀華であった。

「おお、いつか刀渡してくれたやつじゃん」

「アレ？ お前あの時の小僧？」

お互いが顔を合わせて驚愕する。以前、黒羽との再戦のときに対抗策を講じてくれた人物だった。

「あの時は顔を見せてなかったから知らなかったけどお前がガキだったとは……」

「いいえテルさん、あの人は見てくれはアレですが実質は御婆ちゃんなんですよ？」

「え？ マジで？」

はい。とハヤテは頷いた。実はハヤテ、下田に行く前に一度だけこの銀華と遭遇している。襲われた上に血を限界ギリギリまで吸われるという被害を食らったのは今では良い思い出だ。

（そう言えば一回だけもの凄いやつれて帰ってきた時があつたよな……）

そんなことを思い出していたテルであつた。今思えば、あれは献血というレベルを超えていた気がする。

「なにやら急いでいるようじゃないかえ？ 三千院の執事よ」

銀華が右手にクナイを構えるのを見るとハヤテは身構えた。しかし、ハヤテ本人に戦闘の意思はない。

「お嬢様と西沢さんが大変なんです！ だから退いてください！ ここで足止めをされるわけには……ッ！」

ハヤテの「ナギ」という言葉に銀華は反応したがフツと笑い。

「帝のあの孫娘か。あのクソガキの孫など知ったことか……それよりも今日こそお前の血を伊澄に……」

ジャラ。と銀華の袖口からクナイが数本垂れる。ゆらゆらと揺らしながらこちらを伺いながら笑みを浮かべている。

（くそっ！ こんなことをしている場合じゃないのに……!!）

焦ったハヤテは考える。出来るだけ早くナギたちの所にたどり着かなければならない。話し合いで応じる相手ではない。もうその時点で半ば戦闘は避けられないものとなっている。そうなれば時間がかかるのは必至。

仕方なく戦闘に応じようとしていたその時だった。

「なあババア。　なんで伊澄に血を飲ませる必要があるんだ？　何？
そんな趣味あるのお前ら」

テルだった。　さらつと告げる一言に銀華は笑って捨てる。

「なにも殺すまではいかん。　今回は伊澄が元気になるにはコヤツの
血がどうしても必要なんじゃないや・・・」

なにやら深い事情が関わっているようだ。　そして銀華は向き合
い言った。

「なんとしても、伊豆にいる伊澄に届けねば!!」

え？　とハヤテとテルが反応した。　そしてハヤテが銀華に言う。

「えつと・・・僕たちも今日そこに行く予定なんですけど・・・」

「なぬ？」

ハヤテの言葉にキョトンとするのだった。

「あれ、ババアも伊豆いつてんの？　じゃあもう解決策は出てんじや
ん。　俺らがコイツの血を献上させる代わりにちよつとババアに手
伝ってもらうってことでいいんじゃないやね？」

「え？　なんかもう僕が生贄にされること前提にしてませんかソレ
？」

「うん、冗談抜きだぜ」

まるでこれまでの仕返しをするようにテルはニヤリと笑みを浮か
べる。　それももうもの凄いどす黒いやつだ。

「まあ今回は俺の顔を立ててくれないか？　この前は大事な孫娘を
ちゃんと手助けしてやったんだからな」

「クツ、なかなか外道なやつ・・・普通主人公はそんなこと自分で言わ
せないで他人に言わせるものだぞ!!」

銀華が悔しそうにクナイをしまった。　テルはへらつと笑って返
す。

「生憎、俺は普通の主人公じゃないんで」

自分で言うことじゃないだろう。　と思ったのはハヤテだけでは
ないだろう。

納得してしまったか、銀華は嘆息ついて地面へと飛び降りる。
「よつと・・・では向こうにつくまでは休戦という訳で良いな」

「ああ、それでいい。早くやればそれだけコイツの血が早く飲めるからな」

「二人とも、なんか僕の事はお構いなしに話を進めていますね」

もうこれ以上は何を言っても意味がないと感じたか、ハヤテはその光景を黙ってみているだけであつた。

○

「ぜー！ぜー！な、なんとか逃げ切つた・・・」

息を切らしながら自転車をこいでいた歩は一つの危機感を覚えていた。先程の殺し屋たちを撒くことには成功はしたものの、この通りに体力をかなり消費してしまつていた。

果たしてこのまま伊豆・下田までたどり着けるだろうか。

「お前、大丈夫か？ そんなに疲れていて本当に下田までたどり着けるのか？」

「うるさいな——行くつていつたら行くの！」

ナギに頭の中のことを勘ぐられ歩は似つかわしくない意気地を張つた。しかし、撒いたと言つても相手は車だ。すぐに追いつかれるかもしれないために油断も出来ない。

「まったく、こんな自転車なんか捨てて電車で行けば良いものを・・・」
「そういうわけにも行かないの！！ この自転車、高校入学の祝でお母さんに買ってもらつたものなんだから」

お母さん？ というその単語にナギが僅かに遅れながらも反応する。

「女の子の入学祝いにマウンテンバイクっていうのはどうかと思うけど・・・一応大事にはしてるのよ？」

——何かあつたら私が星になって、お母さんがあなたをちゃんと見守っているわ。

(そうか。これはハムスターと親の絆か・・・)

歩の言葉にナギは昔に自分の母が言っていたことを思い出した。

「あなたにだつてお母さんくらいいるでしょ——？」

と、歩が言ったとき。自転車のペダルに掛かる重みが一気に軽くなった気がした。後ろ振り返った歩が見たのは自転車から降りたナギの姿だった。

「な!! ちよつと、急に何を——!!」

「私のことはもう気にするな。だからもうお前は行け」

突然として言われたことに、歩は訳が分からなかった。だからこの反応は必然となる。後ろの方にはさきほど撒いた殺し屋がいるのだ。迂闊に待っていれば危険だというのがわからないのか。

だが、歩が言うより早くナギが言った。

「私を狙う者との争いに巻き込まれたら大事な自転車が壊れちゃうだろ? 親から貰った大事な自転車だからな」

それとも。とナギは付け加えて

「その小汚い格好をハヤテに見せたいか? ハヤテは服とかのセンスには詳しいぞ。お前のジャージは流石にないよなあ」

「うっ!!」

自分が気にしていることを明確に当てられたのか、歩は反撃できなかった。そしてナギは右手を振って告げる。

「だからさっさと行け。ハヤテが来るから・・・お前はもう不要だ」

ナギの高圧的な態度は明らかに歩の反感を買っていた。

しばらくお互いが黙って見つめていったところで歩が動いた。

「あっそ。分かったわよ、せいぜい気を付けてよね」

「ああ。お前こそせいぜい頑張れよ。無駄な挑戦に栄光あれ」

ナギの言葉を聞いて、歩はペダルを漕ぎ始めた。視界から居なくなるのを確認してから、ナギは近くの防波堤にストンと座り、どこまでも青い空を見上げてこう呟いた。

「お母さん・・・か」

第69話く夢の中より夢のようく

「……………」

もう何分立っただろうか。この防波堤に座り込んでからは歩むが先ほど口にした母という単語が頭から離れなかった。

(母親か。そう言えばちゃんとハムスターにもいるんだったな…) 誰にでもいる母親、子がいるなら親がいるのは確かだ。それがいないのはちよつとそこ子供が特別な境遇になつてしまつた場合だろう。

(ハヤテやマリア…テルの親は…)

今ここにはいない三人のことを考える。そう言えば三人とも現在事情から親が居ない。なんだろう、三千院家はそう考えると偏つた事情を持つ人間が使用人(同居人)になるのだろうか。ピタ。

「ぬおおおおおおお!!」

と突然左頬にももの凄いい冷氣を帯びた何かがあたつたのがナギには分かつた。

その刺激に体を仰け反らせてその人物の顔を見る。

その人物は先ほど先に行つたかと思われていた歩だつた。

「何をするだーツ!」

「ん? 喉でも乾いてるんじゃないかと思つてね…わざわざ買つてきてやつたのよ?」

ホイと、ナギに手渡した飲み物はポ〇リ。それを手に取るのを見ると歩は自分用に買つておいたジュースの蓋を開けて飲み始めた。

その姿勢にナギが歩に聞く。

「お前…人の話を聞いてなかつたのか?」

ん? と歩が反応するが歩は半目で聞いて答える。

「なんで私があなたの言うこと聞かなきゃならないのよ」

それに。と歩は加えて続ける。

「私は物わかりも諦めも悪い女なんだから」

「ほう、物わかりも悪いから成績も悪いし、ハヤテのことも諦めきれな

いというわけか・・・」

「ハッキリ言うなあ！ 確かにそうだけどさあ！」

と言ったところでお互いが何か納得したように見合った。その表情はお互いが晴れ晴れとしたように爽やかである。

「ま、飲んだら熱海まで行くわよ——」

パンツ。

その瞬間、歩の手にもっていた缶が音ともにその場を転がっていった。右手にかかった力。まさにもっていかれたという表現が正しい。

転がった缶にはまるで弾丸が撃ち抜かれたかのように丸い穴が二つできていた。その間からは中身が溢れ出してきていた。

いや、違う。これは弾丸だ。

と歩が判断したときに後ろの方でトリガーを引く金属音が聞こえた。

「いやあ、いつも缶を撃ち込む練習ばかりしてたから思わず缶を撃ちちゃったよ。 テへ☆」

「おいおい、馬鹿いってんじゃねえよ」

「OKOK, 次は外さねえぜ」

目に写ったのは黒い不審者と四人組の覆面男たち。 悪夢再びである。

「は、早く乗ってエ！ さっさと逃げるわよオオオオ!!」

「お、おおお——!?!」

二人は自転車に乗ると、歩は再びスーパースタートを切り出した。みるみる殺し屋達を突き放していく。

だが。

「ぜえ！ ぜえ！ 流石にもう体力が・・・」

「お、おい！ 大丈夫か!?!」

ナギが見たのは今しがたスタートを切ったのにすでに息を荒くさせている歩の姿だった。

そう、歩にはここまで体力を使い果たしていたのである。

「もう私を降ろせ！ お前だけでも・・・!!」

「良くない！ さっきも言ったでしょ!? 私はあきらめの悪い女だつて!!」

ナギの捨て身の提案を歩は受け入れる気は無かった。この状態でナギを降ろしたりすればそれでこそナギの命はない。

(駅の近くに行けば・・・)

自分が少し頑張れば良い話だ。流石にひと目に付くところならば殺し屋たちも迂闊には行動を起こせないだろう。それまでの辛抱だ。

「なるほど・・・だがそろそろ諦め時だぞ・・・?」

だが追いついてしまった。いくら漕げども車はその速度を上げて迫ってくる。横にべったりとつかれてしまった。覆面を被つた男が顔を見せて、アサルトライフルの銃口をこちらへと向ける。

(このままじゃ・・・ハヤテッ!)

もう終わりだ。とナギが心の中で叫んだ時にそれは起きた。

「なんだっ!」

覆面の男たちが真上を見た瞬間、ナギが釣られて上を見た。上空には二つの飛来物がこちらに向かってくる。

その二つの物体はコンクリの地面に轟音と共に突き刺さった。

それは電柱であり、ナギと車の間に割って入るように刺さったそれは車の前に立ち塞がり、車は大激突する。

「な、なにっ!」

突然の事に驚いた歩が急ブレーキをかけて自転車を止めた。

振り返ったその視線の先には電柱二本が壁となり、車を大破しているという状況だった。

そして電柱のてっぺんに立つひとりの少年の姿を見て歩とナギは同時に声をあげた。

「ハヤテ君!」

「ハヤテッ!」

「お嬢様! 西沢さん! 無事ですか!」

ハヤテがすぐさま電柱から降りると二人のもとに走っていった。そしてあとから続くように電柱にしがみついていたテルがその場

に倒れ込む。

「ああ、もう・・・なんでこんな強引な方法しかないんだよ」

「ふん、ワシは移動術はないもんでな。しかし小僧、お主ずいぶんと弱っているように見えるが・・・」

後から降り立った銀華が倒れているテルを見た。ここまで来るにいたつてのテルの過程を知らないためである。

「さて、これで約束通りに綾崎　ハヤテの血を頂くことにしよう」

「わかったわかった。このゴタゴタを早く終わらせればその分早く貰えるぞ?」

倒れていた身を起こしながらテルは銀華に言うと、銀華は不気味に笑うと仮面を頭なおした。

「なら、この先はオババに任せてさっさと先に行くがよい!　小僧、貴様は残つてろよ!」

「へ?」

「面白そうなのがこちらに来る・・・」

はあ。とテルは何がなんだか分からずに立ち上がった。銀華の言葉を聞いてハヤテたちは先に進んでいる。まあ近くには駅がある。そこでみんなが落ち合うことになるだろう。

「終わったぞ?」

程なくして殺し屋たちの掃除が終わった。終わったと言っても殺したりしたのではない。車の中から犯人を引きずり出し、出どころ不明の鎖付きクナイで犯人たちを縛り付けている。

「それで?　何が来るつて?」

「まあ、待て。ホレ、噂をしてたらこつちに来たぞ?」

どこに。とテルが辺りを見渡していると、刺さった電柱の上に一つの影が現れた。翼を纏ったそれはゆっくりと電柱の上に舞い降りて静かな瞳をこちらへと向ける。

黒羽だった。

「あの野郎・・・こんなところまで来やがった。とんだストーカーだな」

「フェフェエ・・・コヤツがお前さんの手こずった相手かい。　実際

に見るのは初めてじやのう」

まるで獲物を見つけた狩り人のような瞳を銀華はしていた。まさに今にでも食って掛からんとする状態だ。

その証拠に既に袖からは何本かの鎖付きクナイを垂らしている。

「オイオイ、そんな喧嘩腰にしてどうするよ。そんなことだからすぐふけるんだぜババア」

「あいつより先にお主を冥土に送ったほうがよいかもな」

静かにクナイを構えた銀華を見てテルが慌てて止めた。

「アイツの目的は今回は、少なくともここでドンパチ起こそうっていう腹じゃないらしいぜ?」

ほう? と銀華が黒羽を見るとそれがすぐに理解できた。こちらもただ武器を見せるだけでなく殺気というものを相手に感じさせている。それなのに黒羽は動じず、武器も出さないでただ立っている。

殺気も感じられないのだ。いったいどうしてなのか。

その理由はすぐ分かった。テルたちの横を走りながら抜けていく物体が一つ。それはチビハネだった。いつの間にか歩のカバンから抜け出していたらしい。

『マスター!』

やー。という声を上げながらチビハネは黒羽の元へとジャンプした。それを黒羽は両手でキャッチする。

『うおおおおおマスター! ようやく会えたですよー! 落とすなんてあんまりでーす!』

少し涙を浮かべながら頬ずりしてくるチビハネに黒羽は優しく撫でる形で返事をする。

そして一度だけこちらを見た黒羽は翼を広げると飛び立っていった。

「・・・な?」

「ふむ・・・」

銀華は立ち去っていったのを見ると少々残念そうにクナイを仕舞った。

「小僧、相手の気を理解できるとはなかなか良い目を持っているな・・・」

「なに、昔からの教えで戦う相手と戦わない相手の見極めをできるように叩き込まれたからな」

「ほう。お前さんにそれを教えた師は誠に良い師だったのだなあ・・・」

「・・・まあな」

と言葉に詰まるテル。実際にこれを教えてくれたのは自身に剣術を教えてくれた先生。だが、その人物と自分がどんな関係だったのかをテルは何も思い出せていない。

（しかし、あの女がこっちに来てるってことは・・・あの野郎もこっちに来てるってわけか。なんだかこの旅行、ただの旅行で終わる気がしないな・・・）

この行先にたどり着いた下田で一体何が起ころうとしているのか、テルは一抹の不安を覚えたのだった。

○

「ああ、もうナギ！ 心配かけないでくださいよ」
「す、すまんなマリア」

その後、一同は駅にて一度集合することとなった。出迎えにいたのはヒナギクとマリアである。ナギが来るとマリアは心配していたようですぐさまナギの元へと駆け寄った。

「でも二人とも無事で良かったですよ」

「ああ。それもこれもコイツのおかげだ・・・」
と指で自分のことを指された歩が少しむすっとした顔で返す。

「こ、こいつって・・・私には西沢 歩っていう立派な名前があるんだからね三千院ちゃん」

「ナギで良い」

へ？ と歩は言葉を一度それがどういう意味か分からなかった。聞こえていなかったと判断したのか、ナギがもう一度言う。

「私の名前は三千院 ナギ。だからナギと呼べ馬鹿者」

「・・・え?」

それ以上は何も言わなかった。しかし、ハヤテの方を見るとハヤテはそれを見てとても笑顔の様子。

(まあ、打ち解けられたって思えばいいのかな?)

と、心の中でつぶやく歩。まあそれでも年下に馬鹿呼ばわりされることには変わりないが。

「ああ、そうだ。この携帯、西沢さんに返しておきますよ」

とその場で歩に携帯を手渡すハヤテ。歩はどうして自分のかと思分かったのが気になっていたが。

「その、すみません。誰のかわからなくて・・・中身を」

と、行つた瞬間に歩は開いた携帯の画面の下の方にその理由があつたのだと理解した。

「うわああああ! あのね! これは、その!」

一気に顔の色を赤へと変化させた歩はなんとか誤魔化そうとしたがその姿を見たハヤテも自分の事なので思わず顔を赤くする。

「・・・チツ」

「ナギ、ちよつとアイツの飯にこつそり毒盛らね? 俺最近、イイ毒売ってる場所見つけたんだ」

「ちよつとそこ! 何物騒なこと考えてるんですか!」

黒い野望を渦巻かせていたナギとテルに対してハヤテは慌てる。

その間を仲介すべく、マリアが西沢にお辞儀をした。

「それにしても西沢さん。本当にありがとうございます」

「いやいや、そんな大したことありませんよ」

そう? とマリアは頬に手を当てながら続けた。

「この子ったら勝手に歩き回るわ、他人をぞんざいに扱うわで大変でしたよね? その気になればこの子、家一つ爆発させる子なので」

「だから私はテロリストじゃないって——っ!!」

マリアの言葉にナギが顔を真っ赤にしながら突っ込んだ。

その光景を見て、歩は思う。流石にこれ以上いられると向こうの人たちに迷惑だ。あつちの都合を考えるにこちらもこの場を去るべきだ。

「じゃ、じゃあ私はここで・・・」

「お前・・・本当に自転車で下田まで行く気か？」

とそそくさに去ろうとしたときにナギが呼び止めた。

「む、話の解らん奴だ。お前の力じゃ無理だというのが解らんのか？ それ以上無理したら死んじやうかもしれないのだぞこのバカハムスター！」

「む！ バカじゃないもん！無理じゃないもん！絶対に無理じゃないもん！」

「無理だ無理だ無理だ無理だ無理だ無理だ!!」

「無理じゃない無理じゃない無理じゃない無理じゃない！無理じゃないー！」

この二つの無理の応酬。お互いが息を切らすほど言い合ったころ、これに区切りを付けたのはナギだった。

「ええい無理だと言っているだろうが!! —— だからハヤテ!!」

「は、はいー！」

いきなり呼ばれてハヤテは身を固くする。

「こいつを後ろに乗せて・・・代わりに下田まで漕いでやれ！」

「へ?」

「ま、こいつなら確実に下田まで付くしな。そこらへんの列車よりだったらコイツの方が断然早いし」

テルがきよとんと惚けている歩の肩を叩く。

「ちよつと待つてくださいい！ そしたらお嬢様たちはどうするんですか!?!」

声の主はハヤテだ。

「そうよ！ そんな事しなくても私は自力で!!」

(そりやあハヤテ君と一緒に行けたら嬉しいけど・・・)

だがそんな良い話、簡単に通るはずがない。

「それにまたあなた達が迷子にでもなったら・・・」

と再びナギとマリアの方を少し見たが・・・。

「えっ?」

「いや、『そんなバカな』みたいな顔しなてくださいいよー！」

とツツコんでみる步だ。それにハヤテと二人乗りなんてそんな都合のいい話、叶えてくれるのならそれでこそ女神による導きが必要だ。

「ナギとマリアさんは私とテル君が連れていくわ」

だが、その女神は目の前にいた。ヒナギクである。

「私も下田に家族でいく途中だし・・・テル君も暇でしょ？」

「へいへい、暇ですよ。そうです暇ですよ。暇で暇で仕方がありませんよ会長」

と、隣でテルが手をヒラヒラしながら了承する。

「ね？だから大丈夫。ハヤテ君は彼女を送ってあげなさい」

「で!! でもヒナギクさん!」

と、ハヤテが未だに事の意味に気付かないのにヒナギクも遂にブチ切れたか、ハヤテの足の甲をブーツで思いつき踏み付ける。

「——ツツ!!」

「うわあ・・・アレめっちゃ痛いだろ」

声にならない悲鳴を上げながらハヤテが身を震わせているとヒナギクがやれやれといった表情で言った。

「ハヤテ君、あなたバレンタインのチョコもらったんでしょ!? ホワイトデーだって近いのよ!!だったからお礼くらいはしなさい!!」

その言葉にはもの凄い意思が込められていた。恐らく女間でしか理解できない、入ることもできない不可侵領域というやつだろう。

「そうですね。分かりました。ではお嬢様を宜しくお願いしますヒナギクさん」

「あれ? ハヤテ君? テルさんは入ってないの?」

「では西沢さん・・・」

「また無視イイイイ!」

どうせあなたは寝るに決まってるよとハヤテは判断したのだろう。

「ではしっかり捕まっていますね、西沢さん」

「う・・・うん」

と恥ずかしさを隠せずに歩は後部座席に乗った。

（うわー、よくわからないけどハヤテ君と二人旅なんて・・・なんかこ

れって青春って感じじゃないかな?)

そして始まる二人旅。

○

青いそらと青い海……。沿道には春の訪れを告げる桜の花が咲いている中……。

好きな人と二人、自転車に乗って優雅な旅を――。

「つてえ――!! ハヤテく――ん!!ちよつとスピード出しすぎじゃないかな――!!」

――してはいなかった。

沿道をとんでもないスピードで突っ走る自転車がここにある。

「でもこれくらいじゃないと下田には着きませんよ?」

「だけど――!!」

言葉もあまり聞き取れない。そしてしつかりハヤテを掴んでいないと命がない、そんな気がしたのだ。

「あ、お嬢様たちの電車ですよ。手振って見ます?」

「無理――!!」

(ていうか電車追い抜いてますよ――!!)

――注意、この小説は法定速度をギリギリ守っています……多分。「はは、じゃあしょうがないですね。では少しスピードを落とすて……」

とハヤテがペダルに込める力を弱めてスピードを落とすとき、後ろから一台の車がきた。また殺し屋の類かと思つたが、今回は普通の車のようだ。オープン型の赤いスポーツカーである。

中の外人がハヤテと歩を見てなにやら言っている。

「へい、ハニー見てごらん、こんなところを自転車で走ってる男女がいるぜ」

「まあホント、自転車に二人乗りだなんて……なんてビンボー臭いのかしら」

見た目があのデイランの芸人に似ている人物、そしてもう一人のキャサリン似の女性からの一言に二人は胃の部分にある何かがキレ

た音がした。

「H A H A H A H A!! オイオイハニー。それは違うよ、彼らは本当にピンボーなんだ」

ブツツン。

「やっぱこんな日はオープンスポーツカーだよね!!」

「ということだ少年君も買ったためえ、一万と二千年後に。 H A H A H A H A!!」

「.....」

「.....」

ギアを一気に変えてその場を爆走していくスポーツカー。そのスピードにより舞い上がった煙がハヤテたちを包んでいく。

「ハヤテ君.....」

「ええ、分かっていますよ西沢さん」

煙が晴れたとき、二人の思いは決まっていた。ハヤテはペダルに力を込める。二人が目指すのはあのスポーツカー。

そして息を合わせる。

「絶対に許さない」

その瞬間、遠藤における謎の二人乗り自転車の最速伝説が生まれたのであった。

○

「はあ.....ようやく着いたか」

貨物列車に捕まっていた木原は連結器の上で絶妙なバランスを取りながら座つてた。

「まったく、黒羽の方が先に付くと思ってたのに出迎えはなしかよ。

アイツどこかで油売ってるな」

さて、と。止まった列車が降りた木原は悠々と歩いて近くの倉庫を通っていく。そして奥の非常口について扉を開けると、人が多い場所に出た。

「.....帰ってきたぜ」

ちようどそこは駅の近くだったのでそこにある看板を見て改めて

理解した。　　ここが下田なのだ。

「・・・」

『遅いのですこの野蛮人!』

看板を見ていると、横から見知った顔が近づいてきた。　黒衣のローブはこの地で来ているのは恐らくこいつだけ。

「あれ黒羽?　なんだよ。　やっぱり最初に着いてたんじゃん。　俺はてつきり俺が最初に着いたのだと・・・ってそれ何?」

木原の目に写ったのは黒羽の手にある一冊の本だった。　黒羽はそれを木原に見せる。

「下田のガイド」

「なんで?」

「ユニーク?」

「疑問形で言われても・・・それよりも今日の宿はどうする?」

と木原が提案したときに黒羽の肩で騒ぐ物体が居た。　チビハネだ。

『オツシヤー!　下田じゃ下田じゃーい!　下田といったらなんだあー!?　温泉だろうがべらんべー!!』

「五月蠅い」

と木原がてしつとチビハネを叩いて鎮めた。

「さて、今日から忙しくなるな・・・」

と、楽しそうに拳を片方の手に合わせる木原だった。

○

「あはははははは——!!　ハヤテ君!　スポーツカーって大したことないねー!!」

「あんなの楽勝ですよ楽勝!!」

こちら、場面戻って沿道の二人。　狙いに定めたスポーツカーは気の済むまで思い知らせることができたのか、ハヤテと歩は高笑いしていた。

「カーブで抜かれた時の外人の顔!!　溝落ちカーブだっけ?　アレは

凄かったよ!!」

「隣の女の人も起こってましたねー」

「あんなチャライカップルなんて別れちゃえばいいんじゃないかな!?」

「あはは、そうですね!」

いつぶりだろうか。こんな風にハヤテと会話し、笑いあったのは。

もしかしたらこれが初めてなのか、それにも関わらず歩の心は暴走するわけでもなく、とても澄んでいた。

(空が青い。 風が輝いているみたい)

駆け抜けて行く中、咲いていた桜の花びらが舞う。

「ハヤテ君」

「はい?」

歩に呼ばれてハヤテが答える。

「私・・・ハヤテ君とこんなふうに笑える日が来るなんて思わなかったよ」

「・・・」

この時にハヤテは迷っていた。このことを話すべきか、話してよいものか。

だが、意を決して話すことにする。それが彼女の為にもなることであるからだ。

「・・・実は夢の中で、西沢さんに会ったんです」

「え?」

過去にハヤテは夢の中で歩と会っていた。歩としてはかなり嬉しくも恥ずかしい話だ。なんせ、好きな人の寝ている中まで自分が現れたのだから。

ハヤテは続ける。

「その中でいろいろ話して・・・僕は西沢さんに、何かプレゼントするって決めたんですけど・・・」

「・・・」

ハヤテにはとても真剣な話だ。だが、歩はその話を聞き、一つの疑問が頭を過ぎっていた。

『好きな男の子から何か心のこもった物を貰えれば……嬉しいっていうか……』

——あれ？ 私は何が欲しかったのだろうか？

『ただ、想いを伝えたいだけだから……』

——何が。

『綾崎君が好きです!!』

(ああ。そうか……)

分かった。自分は今まで大切なことを見失っていた気がする。

この、時間。この時間こそが大切なのだと。好きな人と一緒にいられるということ。

プレゼントもした。告白もした。そうしてきた相手がこうして同じ時、場所ですられるだけで……。

「それで……西沢さんはホワイトデーがどんな……」

だから歩は言った。

「いないよ」

え？と疑問を浮かべたハヤテが振り返ると、そこには笑顔の歩が。

「もういないの。だって……」

立ち上がって体に当たる風は透き通るように心地よい。その暖かい風は自分の心を満たしていくように。

「もう、十分……もらったから」

両手を広げてさらに風を感じる。全ては、思えばあの坂での出来事から始まっていたのだ。

多分それはこれからも終わらない。終わらせたくない。

春の風に、桜の花びらが舞っている。

それはひとりの少女を祝福、または後押しするように。

「さあハヤテ君、下田まで全速力だ——!!」

「お————飛ばしますよ西沢さん!!」

——君と一緒に、また新しい季節が始まる。

第70話く下田温泉湯煙事情その1く

色々な騒動に巻き込まれながらもテル達一行は無事に伊豆・下田へと到着していた。宿泊場所は駅から歩いてわずか十分ほどというお手軽な場所にある。

恐らくナギのことを考えて作られた要素が存在しているだろう。

「へえ、ここが三千院家の別荘・・・」

テルが立ち止まって言葉を止めた。暫く別荘を遠くから眺めて唸りながら何かを考えている。

「? どうしたんですかテルさん」

気になったハヤテがテルに聞くとテルが「ん?」と気づいて答える。

「いやさ、この別荘なんか屋敷と似てね?」

「ああ。確かに・・・」

ハヤテもよく見てみるとその作りからどこかで見たことがあると思っていたが、目の前の正門、そして玄関、窓の配置までどこからともなく東京の屋敷そっくりであった。

「馬鹿だなお前たち、そんな訳ないじゃないか。気のせいだろ?」

「そうですね。 けっして手抜きとかじゃないんですよ?」

ナギとマリアが笑いながら言っている。この領域にはあまり踏み込んではいけないと相場が決まっているのだ。

「それに見ろ、その証拠にだ! 窓はなんと・・・」

ナギが屋敷の中から窓の外を指さす。その先にはなんと・・・。「うわっ! 太平洋じゃん! っていうかやっぱりそこだけかよっ!!」

この別荘の窓の景色は三千院家の広大な庭ではなく、広大な太平洋が広がる。 まあそれだけ。

「しかし流石に熱海からここまでの二人乗り自転車は疲れました」

「ていうか私たちとほとんど同時だったな・・・どんだけスピードだしただんだ?」

「やっぱりお前人間じゃないね」

ハヤテが苦笑いを浮かべて話すが結局は苦笑い程度で済ませているのだ。テルとナギがそれぞれありえないといった表情だ。

荷物も置いて、あらかた片付いたところでナギが言った。

「ま、せっかく温泉地にきたのだから、その辺の温泉にでも入って疲れをとってくればいい。この場所には三千院家の経営する温泉があるからな」

「え？ いいんですか？ そんな気を使わなくとも」

ハヤテの言葉にナギは首を振った。

「マリアも行きたがっていたし、私は疲れたのでお昼寝をする。テルも連れて旅でもしてこい」

「そういうわけだハヤテ、行くぞ」

「つて、テルさん！ なんでもう執事服から浴衣になつてるんですか?! 風呂道具一式なんてもって！ 一体どこにあったんです?!」

ハヤテが驚くのも無理はない。テルは完璧なまでに職に対する心構えを捨てて、目の前の温泉のことに頭がいっぱいだった。

テルはハヤテの背中をバシンと叩く。

「細けえことはいいんだよ！ 俺の、俺の……この顔が素敵仕様に変化するっていうんだぜエ——ッ

！ これがおちついていられるかよオ——!!」

凄いハイテンションのテルは道具を振り回したりとまるで子供のようだ。それを見てマリアがハヤテの肩を小さく叩く。

「どうやらテル君は温泉のことで頭が埋めつくされてますよ。だからあまり気にせず私たちも温泉へと行きましょう?」

「はあ。分かりました……ではお嬢様、僕たちは温泉に行つてきます」

「うむ。存分に楽しんで来い……ふあ……」

と、屋敷から出ていったハヤテの言葉にナギはあくびを混じらせながら返したのであった。

○

「立派な場所ですね……これも三千院家所有の温泉なんですか？」

ハヤテの驚きマリアに聞くとマリアは笑みを浮かべながら答えた。「はい、あとこの先には二三軒くらいはあるかと、取り敢えず近場のここを選んだんですけどね」

屋敷、もとい下田の別荘からわずかな時間を掛けることでその場所にたどり着けることができた。

大きな場所である。のれんには大きな字で『三千院の湯』。

三千院家は温泉事業にまで手を出しているのかと、その経営力を改めておも知らされたテルであった。

さて、とテルが暖簾をくぐり入っていく。靴を下駄箱の中へと入れてそのまま窓口へ・・・という流れになるはずだったが窓口の所で三千院家の関係者というのをマリアが店主に教えるとなんとその場でタダになった。

マリア曰く、これが職場の特権ってヤツです。とのこと。

「お、なんだ。テルくんたちもこの下田に来ていたのか」

と、急に後ろから名前を呼ばれて振り返るとそこには見知った顔が居た。

「あれ？ 唯子さん？」

「いかにも。奈津美 唯子とは私のことだ」

自己紹介は別にしなくても、というハヤテが心の中でつぶやくがいったいどうして唯子がここにいるのか分からなかった。

「ふむ。その様子だと、私がここにいるという理由が分からないと見たが・・・」

心を読まれた！ と心の中で驚くハヤテ。唯子はふつと笑い

「なに、今回は私の小旅行だよ。君たちと同じだ」

「そうなんですか？ 家族旅行とかですか？」

その言葉に唯子はマッサージチェアに腰掛けたまま両手を広げる。「いや、一人だよ。突然と下田に落下した隕石の効能で有名になった温泉の効能に惹かれてやってきた哀れな人間の一味だと君は笑うかい？」

「哀れ・・・だと？」

とテルの目が細くなるがハヤテは構わず返した。

「いえ、決してそんなことは思いませんよ。それに唯子さんは別に悩むことなんてないんじゃないですか?」

「はっはー。その通りだ。私は常に楽しいことを良しとする、故に悲観的な考えや特に考えて悩むことなんてないからな!」

「そういう意味で言ったんじゃないと思うんだけどな・・・まさにポジティブの化身だ」

「まあそういうな。君たちだけなのか?他に連れは?」

唯子が団扇を揺らしながら聞いてくる。テルはそう言えばこの場にはいないが確かヒナギクや歩が来ていたのを思い出した。

「そういえば会——」

「なにイ!? ヒナギク君が来ているだとオ——!!?」

会長と言い終える前に唯子は下田にヒナギクが来ていると分かっ
てしまったらしい。恐ろしいもはや変態の域だ。いや、変態か。

「クソツツ!! 私はなんという過ちをツツ!! どうして私はッ 先に風呂に入ってしまったのかツツ!!」

「.....」

うん。 やっぱり変態だ。

ところで。 と残念そうに髪をかき回していた唯子が落ち着きを
一気に取り戻してハヤテに聞き返えす。

「君たちもこれから温泉に入るのか?」

その問いに、ハヤテは首を縦に振って答える。 そうすると唯子は
少し固まって

「.....まあそうだよな」

と言った。

「いや、気になるんですけど。 さっきの間は一体何だったんですか
? 教えてくださいよ!」

「いやーべつにわたしはなんもしらないよ!」

「棒読みになってますよ!」

ハヤテが気になって仕方ない。一体この先に何が待ち受けているというのだ。

最後に唯子は髪をかきあげるとつぶやくようにこういった。

「・・・不幸だな」

「・・・」

「・・・」

その小さなつぶやきをハヤテとテルは聞き逃すことなかった。

いや、唯子はあえてギリギリ聞こえるか聞こえないのかのギリギリの大ききさでつぶやいたのだ。

明らかにこちらの反応を楽しんでいる。テルとハヤテは暖簾をくぐった。

「ハヤテ、少し覚悟して行こうか」

「そうですね。ここからは・・・アレ？　なんか、凄い寒気がしてきました」

ハヤテが両肩に手を当てて何やら不穏な空気を肌で感じ取っていた。一体向こうの世界はどんな危険が待ち受けているというのだ。

意を決して二人は浴場へと続く戸を開けた。

「やあ——」

衝撃的な出来事だった。扉を開けた瞬間、ハヤテは足場の悪いタイルの上を難なく足場にして目の前に現れた男をテルが気付かない内に殴り付けていたのだ。

「ん？」

テルがそれに気づいたのはその何か豪快に湯の中へと落ちた時だった。

「え？　どうしたんだいハヤテ君？　え？　なに、なんかゴミのように飛んでいったけど・・・」

「テルさん『ゴミのよう』ではなく、『ゴミ』なんですよ」

淡々と述べるハヤテの目は酷く冷め切っていた。すぐにいつもの表情に戻るが・・・。

「そんな冷たいこと言うなよ綾崎イ——！！」

間髪いれずにそのハヤテが呼称する『ゴミ』が湯船から奇声を上げ

て飛び上がってきた。

それにまるで思うこともないハヤテはそのゴミと呼ばれる男に前蹴りを顔面へと叩き込んだ。

「ごう。 という言葉と共に男は一度沈んだ。

「おい、これ誰？」

「ああ、たしかヒナ祭り祭りにでたお嬢様誘拐事件の犯人ですよ」

「え？ ていうかそんな事件あったの？」

テルの言葉にハヤテは無言になる。 まさかマリアさん、テルさんには連絡してなかったのか。

と、直後、男は突然起き上がった。

「そんな、綾崎！ 俺という男、虎徹という男を忘れてしまったのか！？」

冷たいじゃないか!!」

「なんで風呂場にいるんですか!？」

「別にいいじゃないか！ 一緒に入ったって何もしないし！」

「そのセリフは絶対何かする人のセリフですよ!! ていうか、警察に捕まったんじゃないですか!？」

ハヤテの言うとおり、この男、虎徹はナギを誘拐未遂してしまったために一度警察に送られている。

「ふ、各地に赴いて謝罪と労働と反省文を永遠と繰り返し、今回は未成年の初犯ということであるとなんとか助かったよ・・・ますかアレがギャグに済まされないとね・・・」

「なんでもかんでもギャグで流そうっていう考え自体が甘いんですよ・・・いつそのこと永遠に捕まっていればよかったのに」

「おい、ハヤテ・・・お前黒いぞ」

このままではソウルジ〇ムが真っ黒になって魔女化してしまうくらいにハヤテの発しているオーラは黒かった。

「だが、一度監獄という場所を体感しながらもお前へのこの気持ちが萎えることはなかった！ この愛は本物だア——!!!」

虎徹の会話を聞いて、テルはちよつと白い目を向けていた。 それはもちろんハヤテも例外ではなく。

「お前ら、もしかしてそんな関係なの？」

「そんな訳ないじゃないですか!!」

「あのさあ・・・そういうのはホントコミケとか、そつちの方面の薄い本でやってくれよ。これ一応全年齢対象版だからさ」

とテルが言ったところで。

「貴様ら——！　ここにはキングであるこの俺様がいるのだぞ！

静かにせんか——!!」

湯船から立ち上がった人物が居た。　少々湯けむりが濃くて今ま

で気付かなかったのだ。

「うげ！　バカ王子！」

「ぬっ！　貴様らか！　なんでここにいる!!」

この独特な口調で話す人間など、テルたちの知っているなかでは一人しかいない。

乙葉　千里そのひとであった。

「バカ王子、それはこっちのセリフだ。　なんでお前がここにいるんだよ！　って俺は取り敢えず質問をそのまま聞き返すぜ!!」

「俺は今回、爺やが何やら伊豆・下田のほうに行ってお休みをして来いと言っていたのでこちらに湯に浸かりにきたまでのことよ」

爺やとは千里の専属の執事、加賀美のことであろう。

「見るがいい！　下田の温泉効能、そして絶景なるこの場所で静かに浸かり、ここの温泉卵を食べて体を癒す・・・まさに至福の一時ッ」

と言いながら千里は高笑いした。　そばにはバスケットの中に温泉卵があるが大きさが桁違いだ。　明らかにあれはダチヨウの卵のである。

温泉卵ひとつにとつても金を持つ人間は桁が違うと思ったテルたちであった。

「なるほど・・・唯子さんがため息をついていたのはこの人の事も頭に入っていたのか」

そうだな。と、テルが頷く。　なんか嫌な予感はしていたけど、まさかこれがその嫌な予感だったとは。

「さあ、そんなことよりッ綾崎！　俺と一緒に愛を語り合おうじゃないかッ！」

調子に乗った虎徹は空へと飛んだ。そして両手を合わせてハヤテへと一直線。これが有名なルパンダイブである。

「誰がッ 語るかこの変態ッ！」

当然、ルパンダイブはほとんどの確率で失敗するためこれも例外ではない。ハヤテの空中の虎徹へと合わせたハイキックが虎徹を蹴り飛ばすと同時に湯に入ろうとしていたテルも湯へと叩きつけられた。

「な、なんで俺まで巻き込んだーっ！」

「ん？」

勢い良く水面から顔を出したテルが叫ぶとちよつと隣で声が出た。どうやら他にも先客がいたらしい。

「あ、スンマセン。 僕らちよつとはしやいじやつて・・・修学旅行のテンションみたいなモンなんですよ・・・」

と笑いながら湯けむりで隠れていた人物に説明する。

「いや、俺は別に構わねえけど一般の人にも来るから少し静かに——」

と言ったときに風が吹いて湯けむりを吹き飛ばした。そしてお互いに顔を見合わせる結果となり、その瞬間、二人は顔を見て思った。

「ん？」

ほぼ同時。

（アレ？なんかどっかで・・・）

とテル。

（あばばばばばばばばば・・・）

と、男はテルを見た瞬間に凍るように固まった。

（・・・？）

（な、なんでエエエエエ!!）

その風呂場に居合わせた人物、それはなんと木原 竜児であった。

第71話く下田温泉湯煙事情その2く

鉢合わせ。 という言葉を皆さんご存知か。

言葉の意は思いがけなく出会うことである。

これらを極めて特殊なシチュエーションで解説するところなる。

『借金取りと家の出口で鉢合わせ』 by ハヤテ

『サボっていたら屋敷でマリアと鉢合わせ』 by テル（後にぼこられる）

『歩いていたらインド人と鉢合わせ』 by 伊澄（迷子）

そして今回のケースは。

俺は夢でも見ているのだろうか。 今回、自分で言ってもなんだがこの話では一応重要な役をやるうとしていているんだよ。 以前からコイツ（テル）との因縁がなんだかとか話の中で色々とやっていたけど・・・なんで。

（え・・・ええええええええええええ!?!）

なんでこんな所でこいつと遭うんだよ!

（いやいや、ちよつと待てつて、少し早すぎだろ! なんでここで遭遇イベント起こさなくちゃならないんだよ! こんなギャグあふれるような空間になんで俺がいなきゃならないんだよ!）

頭を掻きながら欠伸をかくテルに対して背を向けながら木原は心の中で絶叫していた。

時間の余裕が出来たことにより、各自は自由行動ということになったので木原は湯へと浸かりに来ていた。 しかし、来てみたらどうだ。 なぜこんな所にこの男、善立 テルがいるのか。

（オイオイどうすんだ? こんな所でドンパチやらかすつもりもないし、俺だつて全く心の準備をしていないんだぜ!?!）

「なあ・・・もしかして」

と、悩む木原に声がかけられた。 その相手は言わずとも隣のテルであった。

いかん。と心の中でつぶやいてゆつくりと振り返るとテルは一言。

「五月蠅くて気に障ったか？」

(コイツ忘れてるうううううううううううう!! 俺のこと完全に忘れてるうううううううう!!)

思わず握っていた拳をすぐさま湯の中へと沈めた。

簡単に言くと、テルとこの木原、顔を合わせていたのもたったの一度である。しかも一瞬。

そんなんでテルが覚えられる筈がなかった。当然のことである。

「いや、悪い。連れがああいうのに巻き込まれるとんでもない奴なんだわ。だからちよつと我慢してくれよ」

「へえ、そうなんだ」

(お前だよ! どうしようもなくとんでもない奴はお前ツ!)

表面でさらつと言うが心の中ではツツコミ。しかし、面識がない中でこの会話は当然だ。出来るだけ他人の振りをしてやり過ぎす。

この手に限る。

(そう言えばコイツは馬鹿だということ忘れてた)

などと思いついていると地上では変態が暴れていた。

「綾崎イ! 俺の愛を、愛を・・・ツ!!」

「ホモはだまって帰って。どうぞ」

この面子の中で、唯一木原の顔を知っているのがハヤテだが、突如として現れた変態貴公子、虎徹とのやりとりでこちらに気づいていないのが幸いだ。

(その間にここを御暇するか・・・)

と、考えを浮かべる。なぜならここには三千院家の執事が二人、そしてなんか知らないけど変な人物が二人、しかも仲間らしい。この状況はまさに敵の巣窟なのだ。

「じゃ、俺はこれで・・・」

「おいおい待てよ」

湯船を離れようとしたところでテルが呼び止めた。まさか遂にバレたか。と内心で焦る木原だったが。

「五月蠅くしちまったからな。 ちよつとこの温泉卵を食べねえか」

とテルの右手には温泉卵・・・というには余りにも大きな卵。

「いや、これダチヨウの卵?」

「そう。 さすが金持ち、温泉で食べる温泉卵も規格外つて訳だ・・・まあ、けつこうあつたからいいんじゃないか?」

「さすがに他人の食べちゃあmazインじゃ」

と、その時だ。 木原の後ろで誰かが吠えた。 見ると後ろでは先程から争っているハヤテと虎徹の前に立つ千里の姿があつた。

「貴様らア! 俺様のプライベートを怪我した罪は重いぞ! ここで湯に沈めてくれる!!」

「ちよ、千里先輩! 前かくしてから言ってくださいよ! 紳士としての自覚がないんですか!?!」

と、千里に言及するのは虎徹だ。 この男が言えることではないというのは誰もが思っていることだ。

「王というのは堂々としているもの! 故に、隠すというその行為こそが姑息なことなのだ!!」

堂々と手を腰にかけて言い放つ千里。 タオルなんてまかれていない。 この温泉は少々湯気が多いのか、誰も見たくないが千里のブツはモヤがかかつていて見えない。

まあ好んで見たいという人間はいないだろうが。

「先輩分かりました! 愛する人間にも! 身も心も全てさらけ出すということですね!」

何故か千里の言葉で感化されてしまったバカがいた。 感化された虎徹は腰に巻いていたタオルを外してハヤテの元へと走り出した。

「綾崎イイイイイイ!!」

「来るな——!!」

「待てエ! 俺様を無視して話を進めるな——!!」

「・・・な?」

「・・・」

三人の男たちが湯船に入ることなく暴れている。

木原は思った。この男たちは底知れない馬鹿なのだ。
今に分かったことではないが。

○

「いやあ・・・極楽極楽」

湯につかること数分。テルはこれまでの疲れをなくすくらいに温泉を満喫していた。染みる湯加減、上を見上げれば伊豆の空。これほど風味を堪能できる瞬間はないのではないか。

「ああ、普段の嫌なことも忘れられる・・・」

隣の木原も左肩に手をやって湯を堪能する。

「嫌なことってなんだよ？」

と木原の言葉にテルが反応した。あまり話さないようにとじていたがバレないようにと心がけて話す。

「いや、俺の友達がもの凄いドメスティックバイオレンスな奴なんだよ。自分の妹分（チビハネ）に俺がちよつとちよつかい出すと物理的に止めに来るんだ。いつも無口なくせに行動力は半端ない」

木原はそう言うと言った。その人物はもちろん言わずともわかるであろうが黒羽のことである。

「他人の妹なんてちよつかい出したらそりゃ報復だつてくるわ。それにしても妹想いなお姉ちゃんなこと」

なんも不審に思わず話を進めるテル。木原の会話を聞いてその話を面白そうに聞いているのは気のせいだろうか。

しかしまあ、一瞬チビハネを黒羽の妹と略してしまっただがまああんな気にすることなくそれで通すことにする。大体似たようなモンだからな。ほんと。

「実は俺も・・・」

「お前もか」

と、続くようにテルがため息をついた。

「俺の仕事場の上司も結構キツくてねー。ミスした時の罰が鈍器を投げてくるんだよ。最近じゃ喉仏切断しようと俺の喉を鷲掴みしてくる・・・悪い人じゃないんだけどさ、綺麗だし」

「職場変えたほうがいいんじゃないか？ 他人の俺がどうこう言える立場じゃないけどさ」

(コイツ、今けつこうとんでもない所で働いてるんだな・・・)

心の中で敵ながらも木原は同情した。そしてお互いに大きくため息をついて。

「お互い、苦労してるな〜」

と力なく笑うのだった。

「でも悪いことばかりなわけじゃなかった」

ため息の後、木原が上を見上げて呟いた。 湯気の先に見えるのは伊豆の空である。

「もの凄いバカな奴が居てさあ、どこか抜けてて、後先を考えないで走って。途中でめんどくさくなつて放り投げるようない加減なヤツ・・・そいつと一時期一緒だった」

「ほう・・・」

なんか、共感できる話だな。 とテルは心の中で思う。

だけど。 と木原は続けて

「他人の事になると身一つで相手がデカくても立ち向かってく、やっぱり馬鹿な奴だった・・・正義の味方気取りかよ馬鹿か。 って言つてたけどそいつは」

木原は目を瞑つて思い出す。 たしかその男はこう言ったのだ。

『これも他を寄せ付かせねえ大馬鹿野郎の性分なんぞね。 知ってるか？ 大馬鹿野郎は学がなくても自分の性根には正直だ。 だから言える。 俺が実行できるのは俺が全身で心のままに反応してるからだ』

・・・だから俺は、お前を見捨てない。

「・・・今はどこにいるのか分からないけどな。 引つ越しちゃったし」

「そうか。 でもそういう馬鹿なことを言う奴は、どこに行っても同じことを繰り返してるに違えねえな」

岩盤に背をあずけて、同じく空を見上げるテル。 その男の話を聞

いて親近感が湧いた。

「そうだな・・・馬鹿は繰り返すよな・・・分かっているでも繰り返すよな」

最後に、よかった。

心で納得したように湯から上がる。心配をしていたが、そんな必要はなかった。喉のつかえがなくなったような気分で木原は晴れ晴れとしていた。

「あん？ もう行くのかよ？」

テルが呼び止めると木原はその緩んだ笑みを向けて頷く。

「ああ。連れと来てるんだ。もう少しここで下田を堪能していかな・・・明日には帰るけど」

「そうかよ」

ふいー、と息を空へと吐き出して手を振って、テルは最後に一言。

「じゃあな、失礼なことをいうけど言わせてくれ、捕まるなよ。なんかアンタ、顔で結構苦労しているクチだろ？ あとその腕とか」

その言葉を聞いてまた木原は笑った。上がったときにタオルで隠しておいた義手がバレたらしい。だがそんな事にしても何も気にしないといったところか、手を振って湯を後にした。

バカ王子と執事二人はまだ無駄な争いを続けている。一般の客にも迷惑がかかるというのがわからないのだろうか。

テルの水面に写った顔がすこしだけ変だった。何やらさっきの男の話を聞いてから、胸の当たりに、そして頭の当たりに引っかかるものがある。

水を掬って顔にかけた。熱い水が表面の皮膚を刺激する。

「・・・なんか、忘れてる気がする」

○

「・・・」

『遅刻だコノヤロー！ 遅い奴には罰金だ！ 罰金罰金！ バツキンガム!!』

一人、暖簾から出てきた木原は目の前にいるひとりの少女に出会っ

た。肩にはそれに似た小さな物体もいる。今までなら気配だけで誰なのかわかるのだが、今回だけはその人物の顔を見るまで黒羽とは分からなかった。

「どうやら自分はかなり浮かれていたらしい。」

『バッキン、バッキン、バッキンガム!!』

「おう、そっちも終わったのか?」

『ぶぎや——!!』

右手でチビハネを握って黙らせる。木原の問いに頷いた黒羽は頭にタオルを乗せていた。どこかのオッサンか、と心の中でツツコンだ木原である。

「じゃあ、ぼちぼち準備でも始めますか」

ポケットに手をつ突っ込んで牛乳を手取る。先ほど買ったものだ。やはり入浴の後にはこのいっぱいだろう。

「・・・どうしたの」

牛乳の蓋を開けようとした時だ。黒羽がこちらを見て言った。

「今日は、どこか・・・上機嫌」

そうか? と返すと黒羽はまたしても頷いてみせる。一本の牛乳を飲み干して、その問いに答えた。

「なに、いつまで経っても変わらないっていうのがあるのはやっばいもんだよな・・・ってね」

牛乳瓶を箱に入れ、黒羽と向き合ったときには木原の纏うものが別なものへと変わっていた。先程の上機嫌さはなくなり、逆に不機嫌な表情へと変貌を遂げる。

「行こう、作戦は今日の夜だ。直接綾崎ハヤテのいる場所へと乗り込んで、『石』を奪い取る」

(もし、その時にアイツが俺の前に立ちふさがった時は・・・その時は・・・)

第72話くどんなに時が過ぎててもく

「見てごらん、ナギ」

「なんですか、母よ」

夜の出来事だった。幼きナギがテラスにて夜空の星をある女性と見上げていた。

「あの大きな星がお母さんの星よ」

「お母さんの星？」

自分よりも背が高く、亜麻色の髪にストールを羽織った女性はナギに頷いて続ける。

「どんな夜空でも光輝くお母さんの星よ。あれと同じで、何があっても空を見上げればあの星のように、お母さんはずっとあなたを、見守っているわ・・・」

優しい口調でそのナギの母は言った。しかし、すぐさまナギは自身の母親に返した。

「でも母よ・・・」

「んん？」

「今指さしたのは大犬座のシリウスだ。この前、同じ話をしたときに指さしてた牛飼い座のアルクトウルスとは違うぞ」

「・・・」

なんと、十代もいかない年頃からナギは既に天才の域だった。その見事までにナギの母は間違いを指摘されて言葉が出ず、額からは汗がでる。

「お母さんは空よ。すべての星を包み込んでずっとあなたを見守っ

ているの・・・」

「母よ・・・」

最終的に、ごまかした。

第86話く時はどんなに過ぎててもく

(・・・ずいぶんと懐かしい夢を見た)

三千院家の別荘、その大きな一室にてナギは目を覚ました。目を

覚ましたと同時に目に入ってきたのは柔らかい感触、そうだ。自分はみんなが温泉に行ってしまったので昼寝をしたのだった。

「うわ・・・服のまま寝ちゃった」

到着してからすぐ寝てしまったのか、ロクに着替えることなくベッドに入ってしまったため汗を掻いてしまっている。すこし気持ち悪い。

（あなたがなくなってからもう八年・・・私は十三歳になりました）

布団から降りて部屋の時計を見る。時計は三時を回っているが、ハヤテやマリアたちが戻ってきたような様子はない。

（今でもあなたは星とか空になって私の事を見守っていてくれるでしょうか？ まああの母のことだから見落としてが多そうだけれど・・・）

窓の近くまで歩いて、その目の先に映る太平洋を眺めた。伊豆は見事なまでに海まで綺麗であった。

「しかし服のまま寝ちゃったから・・・汗かいたし、風呂でも入ろっかな」

と自ら動いてそれを実行するかのような発言だが、普段はマリアが髪を洗ってくれる。そのため今回は自分でやらなければならない。

「あ・・・でもこの別荘だとタオルとか下着の置いてある場所が分からない」

「ならいつもの屋敷なら分かるのか？」

「いや、そっちでも分からないけど」

「なさけないやつちやなく」

「な!! なんだと——!! って咲夜、お前何しにきたのだ——!!」

先程からナギに問うように語りかけていたのは咲夜だったことにナギは気づいた。咲夜はナギの問いに頬を掻く。

「何しにきたらって、毎年のことなんやから決まってるやろ？」

「ん・・・あ、そうか」

その毎年のことを言われてナギはようやく理解した。しかし、誰も呼んでもいないのに入ってくるとはなかなか根性の座っている。

「なんや、人を泥棒みたいになんや？　三千院家のお嬢様は風呂にも入らず小汚いままか？」

「小汚いとはなんだ——！！」

またしてもナギが吠えた。

「フ……！！風呂に入りたくないんじゃないか？　お！温泉に入る為にとつているのだ！温泉に入るために！！」

「どつてるって……何を？」

咲夜がまっ先に疑問を述べるが、ナギはすぐには答えなかった。

すこし戸惑って

「えくつと……フロ力？」

「溜めるとどんな魔法が使えるようになるんや」

「一応最後はフロガとかになるかも」

「なんやソレ？　宇宙の法則がみだれるとかそんな魔法なんか？」

まあいい。　と咲夜がそこで話を切ると話を切り替える。

「だったら夕飯まで時間あるし……行ってみよっか？」

「へ？」

「鈍いやつちやなくここ最近の下田ですることといったら一つやろ！

秘湯巡りや！」

「おお！」

咲夜の提案にナギは簡単な声をあげた。

○

「え？　咲夜さんと一緒に温泉巡りに？」

「はい、そのように連絡を受けました」

一方で使用人たちは屋敷へと戻ってナギたちが居ないことを知った。　すぐさまマリアが情報を聞きつけたので大事になっていなかったのに胸をなで下ろす。

「しかし、咲夜も伊澄とかも来てるんだな……これだけの知り合いが集まってこの旅行、別の意味があるとしたか感じられねえな」

「僕も気になってましたよテルさん」

まあ、ご都合主義みたいなお約束展開とは言わないでこれだけの顔見知り伊豆に集まるのは何か別の意図があるのではないかと思っ

た新米執事。　　マリアはその様子を見てくすくすと笑った。

「それは明日になればナギが教えてくれますよ」

「え、教えてくれたっていいじゃないですか」

「ダメですよテル君、先に知っちゃってもそんな得することはありませんよ。　　こういうのはその当日に聞いてこそ価値があるんです」

「そこまで価値がなかったら？」

「その価値を理解できないほどの脳の持ち主だと私は思います、ハイ」
「酷っ！　　マリアさん、優しい口調でブラックジョークをかますのは止めてくださいよ!!」

マリアのブラックジョークがテル胸を軽く抉り意気消沈としている中でハヤテがマリアに言った。

「じゃあ僕たちはお嬢様の所に迎えに行つてきます。　　帰りが遅くなるような気がしますので・・・」

「そうですね。　　お願いします」

「ん？　　アレ？　　なんで俺も問答無用で連れて行かれることになってるの？」

「それはですねテル君、ハヤテ君が自転車をこいでるときに私たちよりも早く眠りに落ちてましたよね？　　これって一種の職務放棄じゃないですか？」

笑顔だが、背後の黒いオーラに貫かれてテルはたじたじになる。

「いや、でも、一応旅行ですし・・・体を休めるのも大切なのは・・・」

「ああ、そうですね。　　その間に私たちが連れ去られちゃっても仕方ないですよ・・・」

「ハイ、分かりました。　　もう口ごたえしません」

まるで上司に頭が上がらない部下のようだ。　　ハヤテは思う。

テルがマリアよりも優位になる状況は多分一生かかっても無いだろうと。

○

「はあ・・・しかしこりゃホントエエ湯加減やんかー」

その頃のお嬢様がたちは既に入浴へと洒落こんでいた。　　露天風呂の形式をしたその温泉で咲夜がほっこりしながらつぶやく。

「けどまあ、ここの温泉に案内してくれた婆ちゃんにはビックリしたで、まさかこの温泉案内してくれるだけで一人四千円とか・・・」

そう、秘湯巡りに出かけたのはいいものの、どこの温泉に入るか迷っていた。温泉街ではどこの温泉に入ればいいのか迷うほど多かつたのだ。しかもナギが人見知りのために人があまり居ない静かな場所を限定してた。

そこで会ったひとりの老婆にこの温泉を紹介されたがまさか一人四千円と、かなりの額を取られることになった。

「ボツタクリもイイところやっちゅーねん!! なあナギ?」

と、募る話を肴にしている咲夜がナギに振るとそれを聞いて振り返ったナギを見て昨夜は驚いた。

そこには瞳をぐるぐるにしているナギの姿だった。

「ああ!? スクールウェアが1000ゲイツポイントってどーいうことなのだ!! メールアドレスくらいだでよいではないかああ!!」

「おわ!! な・・・なんやねん!! どないしたんや」

突然のナギの豹変に咲夜は心配するが当のナギはこれがあたかも普通のように振舞う。

「どうしたとはこつちのセリフだ。なんで咲夜が五人もいるのだ?」

「へ?」

その一言を聞いて思わずジト目を向ける。だがナギはまるで気に止めることもなく。

「によほほほほ〜! なんかごきげんなのだ〜!!」

まるで酔っ払いのような状態で泳ぎ出した。温泉で泳いではイケマセン。

「まさか効能って・・・この酔っぱらいみたいになることなんか? しかもそれならなんでウチは平気なんや」

このナギの豹変っぷりは明らかに温泉に入ってからだ。ならばなぜ一緒に入っている自分は同じ状態にならないのか。真剣に考えている咲夜にナギが力ない顔でつぶやく。

「感覚も庶民派で美容院の事をパーマ屋さんとかいう大雑把な関西人には効かないんじゃないやねーの？」

「なんやとう！ 今全国の関西人の事を敵に回したで!!」

「によおおおおお〜」

「ちよ!! とにかくこのままやとあかん!! ちよつと待つとき!! 人呼んでくるから!!」

体が思うように動かなくなったのか、ナギの体が水面下へと沈み出した。自分の体がまだ動くがこのまま浸かっていたらそのうちナギのようになるのではないかと咲夜は直感で判断した。

すぐさま自分も上がろうとしたその時である。この浴場に入ってきた人物がいた。

「あらら、どうしたのかしら。 お嬢ちゃんたち、困り事？」

「あ、あの・・・！ 連れがのぼせちゃって・・・」

そこに入ってきたのはひとりの老婆だった。浴衣を着たその老婆、髪は白髪でメガネをしていた。 まっすぐこちらへと向かってくる。

「あら大変。 このままじゃ危ないからすぐ上がらせないと・・・誰か他にいる?」

「え・・・」

咲夜は思わず口を閉じた。この温泉はいくら露天風呂の形をしていて湯気が立っていると言ってもこの狭い浴槽を見渡せないほどみえない訳じゃない。自分たちがここにいるのは分かっているが、ほかの人物たちが居ないのかと聞いてきている。

これはもしかして。

「ごめんね、声だけで判断したんだけどね。 私もうよく目が見えないの・・・力もないし、お嬢ちゃんを引っ張るほどの力も無いわ」

「ああ、スイマセン！ なんか悪いことしちゃったみたいで・・・」
「いいのよ。 年にはやっぱ勝てないわね」

と、笑った。 不思議な人だ。 と思っていたがナギの状況を思い出して再び慌て出した。

「そ、そうや！ ナギをどうにかしないと・・・!!」

「あくたしかにこれはまずそうですね」

「ぐほう!!」

咲夜は湯から上がろうとしたときにすぐさま体を湯の中へとリターンすることになった。なぜなら、目の前にはいつの間にかハヤテがいたからである。

「なんで借金執事がここにおんのやああ!!」

「いや、だってここ……一応混浴ですし、お嬢様の叫び声も聞こえてきましたし……」

顔を恥ずかしさのあまりに、ゆでダコのように真っ赤にさせる咲夜の言葉にハヤテはなんら罪の意識もないそうり返した。

「まあ、とにかくお嬢様は僕が介抱するので。咲夜さんは服を着てください」

とハヤテは湯の中に沈んでいたナギをその裸のままお姫様抱っこ。

そう、裸のままである。

「あら、知り合いの人？ よかつたわね」

「あ、おばあちゃん。もう大丈夫やで」

「はい、執事綾崎 ハヤテが参りましたから」

ハヤテの声を聞いた老婆が状況を理解したのか、安心そうに笑顔を浮かべていた。

しかし、改めてハヤテの声を聞いて困惑した顔になった。

「あら？ 何故かしら……あなたって男よね……保護者にしては若すぎるし……犯罪の臭いがするわね」

「いや、僕をそんな風に呼ばないでくださいよ誤解です」

「なんていうのかしら……ロリコン？」

「だから違いますって!!」

「このお婆ちゃんやるなあ」

見た目に寄らずハヤテに対してこのなかなか笑いのセンスを感じた咲夜であった。

「ん？」

終始お笑いムードが続くかと思った一同だが、ここでナギが目覚

ました。

「あ、お嬢さま気がつかれましたか？」

「……」

ぼくつとしながらハヤテを見るナギの目は未だに視点が定まっていなかったのかゆらゆらと泳いでいた。そしてナギにはどう映ったのか、ハヤテの顔を見て

「あれ？母？ どうしてこんなところに？」

「へ？ お母さん？」

それは聞き間違えではないだろう。ナギは明らかに自分の事を母と言った。 なにか夢でも見ているかと思ったハヤテは笑顔で返す。

「違いますよ。 僕はお母さんじゃなくて、ハヤテですよ」

「……ハヤテ？」

ハヤテ。とその名を自分で口にしたとき、ナギの脳完全に覚醒した。そして今いるこの状況を理解するのに時間があまり関わらなかったのはまさに不幸である。

「ぬおおおおお何をやっているのだお前はあああああ!!」

「ぐは!? お!! お嬢様さま!! 痛いですって!!」

やはりと言わんばかりにナギの攻撃を受けるハヤテ。 咲夜もやはりこうなってしまうたかと飽きれる始末だった。

「ほほ。 面白い子だわ……。でも犯罪はダメですよ？」

「だから違いますってえええええ!!」

ハヤテの叫びが露天風呂で木霊するのであった。

○

「な？ だから言っただろ？ もうちよつと考えてから行けって」

「いや、そんなこと言われても……」

ナギの温泉騒動が収まって秘湯から出た一同。 ハヤテはテルから説教じみたことを食らっていた。

「だいたいお前は原作の教訓を全然生かしていない！ だから見ろ！ ほらー！」

テルの指さす向こうではナギがいた。しかし、いつも以上に不機嫌でこちらを向くと

「ブン!!」

と顔を赤くしてそっぽを向いた。

「このざまだよ！ 軽率だっただよ！ お前は！ 俺にはそんな天然な経験は一度たりともなかったぜ!!」

この男も多分ノリで言ってるためか、マリアの着替えなどを覗いたりとしているので人のことを言えない。

そんなやりとりが続く中こちらは。

（くそう！ まさかハヤテにまたもや裸を見られるとは・・・）
裸を見られるのは二回目。もう羞恥心でナギは一杯だった。

（しかし、まったく照れたりしないではないか！ あの態度はいかんだろ！常識的に考えて!!）

拳を握り締めて殺意を醸し出すナギだが突然頬に冷たい何かがある。この経験は一度ある。下田に行く途中に歩が自分にジューズを差し出した時のことだったか。

「あ・・・」

そんな事を思いながら振り返ると、先程の老婆がいた。

「しつかり水分とらないとね。もう大丈夫かしら？」

差し出されたポカリを受け取ると

「あ、ありがとうございます」

とギクシャクしながらだがナギは礼を言った。

「ふふ、素直でいい子で可愛いのね」

「そないことあらへん、いつもは根暗で融通のきかないめんどくさいやっっちゃやで」

「こ、こら——!! へんな事いうなあ——!!」

と、そのやりとりを見てか老婆の顔が綻んだ。

「うふふふ、面白い子達ね。 姉妹なのかしら？」

（凄い・・・）

（当てた・・・）

遠くで見ていたテルたちは驚きを隠せなかった。 しかしまあ、と

ても落ち着いた老婆だ。

「すいません、飲み物まで買っていただいて・・・お礼は必ず」
礼を言うハヤテだったが老婆は笑った。

「いいのよ。それに私なんて全然役に立ってなかったわ。最後に助けたのは貴方よ変態さん」

「違いますから！ 僕変態とかじゃありませんから！」

「おいおい、この婆ちゃんやるな」

「そう思うやろ！ このお婆ちゃん笑いのセンスめっちゃあるで！
こんな所に逸材がいるとはうちも思わなかったわ」

咲夜とテルがうんうんと頷く。 咲夜と同世代だったら間違いない
くお笑いコンビを組んでいただろう。

「それじゃ、私はこれで失礼するわね」

「あ！ 待ってくれ！」

「・・・？」

不意にも老婆を呼び止めたのはナギだった。 少しカミカミになりながらもナギは言う。

「こ、ここであたで帰ってしまったては、三千院家の名折れだ!! という
訳でテル!!」

「え？ 俺？」

「お前はこのお方を家まで丁寧に送って差し上げろ。それが終わる
まで帰ってくるな」

「なんでさー！」

突然のことにテルは当然のごとく声を上げた。

しかしナギはテルの扱いが分かっているのか耳元に近づき。

「安心しろって、後でハーゲンダッツやるから。あと、マリアには内
緒にしているよ」

「もちろんチョコチップだろうな」

（コイツ、落ちるのはえ——!!）

耳打ちの内容がこちらまで聞こえてきたか、ハヤテと咲夜はそのテ
ルの軽さに呆れ、絶望した。

結局、テルがこの老婆を家まで送っていくことになった。

「別にいいのにねえ。私は一人でも帰れるのに……」

「別に気にしなくてもいいぜ。主の頼み事だからな、まっすぐな精神をもつ執事は従順なんだ」

「ホンマかい、糖分で簡単に釣られる精神をもつ執事やん」

「コラ、身も蓋もないことを言うんじゃない。それとなんで咲夜まで来てるんだよ」

林の中を進んでいくテルたちの後ろには老婆の手を引いていく咲夜の姿があった。

「なに、すっかりアンタの仕事っぷりを監視しないといかんからな」

「くそう、俺の信頼度ってどんくらいになってんの？ お前らの中で」

「地の底まで落ちてると言ってもええで」

がくりと頭を垂れるテル。ここまで歯痒いことがあっただろうか。

マリアとかハヤテや咲夜までもがこういう評価。途端に自信が無くなってきた。

「あら、私はそんな悪い人じゃなさそうに見えるわ。私にとっては信頼にたる人物よ」

老婆にニツコリと言われてテルは頭を掻きながら照れくさそうにした。

「そんなついさつきあった人間を信頼するとか……婆ちゃん、いい人すぎるだろ」

「うふふ、目が見えなくなると代わりに別のものが見えてくるのよ。

その人のこととかね」

「つまりは直感やな」

「そうかもね……あ、次の場所は右よ」

しかし、このお婆ちゃん凄い。これだけ足場が安定していない林道を目が見えない身でありながら迷うことなく歩いている。

よく体の一部が破損したり、目が見えなくなったり、耳が聞こえなくなったり人はその失った器官を補うために別の器官が異常に発達するらしい。このお婆ちゃんもその例のひとつだろう。

「でもこの道はなれちやつてるのに体はとても疲れてるの。歳をとつちやうのはホントイヤね」

腰を摩っている。やはりこの年齢ともなると体力的にキツいのだろう。

それを見てか、テルは深くため息をついた。

「はあ、俺も何十年もしたらこんな髪の毛の色になっちゃうのかなあ……」

「ふふ……この髪の毛はね、地毛なの」

はい？ とこの場にいたテルと咲夜はまさかというくらいに驚いた。若いときからこんな髪だったのかと思うと、ちよつと聞くべきではない内容だったかもしれないと思った。

それを雰囲気を感じ取ったのか、老婆はこちらを向いて慌てて手を振った。

「あまり気にしなくていいのよ？ 私はもう悩んでなかったからいいの。この髪の毛は私の一家の遺伝であり、証みたいなものだから」
そう言った老婆は笑顔を崩さなかった。昔は悩んでいたに違いない。だがそのコンプレックスをどこかで振り切った。そんな前向きさが感じられた。

「テルもこんくらい前向きだったら良かったのになあ」

「俺はいつだって前向きだ。コンプレックスをバネにして成長していい——」

「前向きだったならこんな温泉の効能をバカみたいに信じてここに来たりはせん」

咲夜の一言にテルが唸る。結局、温泉の効能とやらでテルの顔は全く変化が無かった。

どこか変化があったわけでもなく、挙げるとすれば体がさらにだるくなった位だった。

そのやり取りを見てか老婆はくすくすと笑った。

「ふふ……仲が良いのねあなた達、恋人だったりするのかしら？」

「なっ!! 何を言うてんねん!! そんな訳ないやないか!!」

老婆の一言に顔を真っ赤にする咲夜。そしてこの男テルは動じ

ることもなく。

「そうだけ婆ちゃん。こんな庶民派で美容院のことをパーマ屋さんとかいう大雑把な関西人と付き合う訳が——」

「おどれはウチのことをそんな目で見てたんかい！ つーか温泉での会話聞いてたやろおおお!!」

「ぶへらあああああ!!」

振り向きざま右ストレート。そこらへんの素人にも通用するくらいの一撃がテルの顔面を直撃した。

○

咲夜とテルとのコントを経て、老婆の家へとようやく到着することができた。レンガ造りの家だ。聞けば、生まれてからこの家にずっと住んでいたという。結構な実質数百年以上は立っている家らしく、とても古いとは言えない。

「いててて!! 鶏が！ 鶏が襲ってくる!!」

どうやらこの家には鶏が飼育されていたらしい。何羽かが外に出ており、その鶏たちがテルの頭へと群がり始めた。

「ごめんね。この子達元気がいいからね」

「いや、元気が良いからって・・・こら！ 俺の頭を苗床にするのは止めろ！ 俺の頭は決してそんな髪型をしているわけじゃねー！」

と、テルは鶏から逃げ出すがその後ろを鶏たちは追いかけていた。

テルは動物にも大人気らしい。

「それでね咲夜ちゃん、ちよつと私の話に付き合ってもらえないかしら」

「ええで。あっちのバカテルも色んな意味で手が付けられなさそうだし・・・」

家の中へと入るとなかには暖炉があった。まだ寒いこともあり、老婆はすぐに暖炉に火をつける。

「ここで一人で暮らしてるんか？」

「そうよ。夫はもう三年前になくなっちゃって、そこからはずっと一人なの」

「寂しくないんか？」

「そうね・・・とても寂しいわ。でも失った人たちとの何もかもが今の私を支えていてくれて、それは私と一緒にまだ生きているっていう証だと思ってるの」

これが人生経験の差なのだろうか。笑顔から感じられるにこの余裕に咲夜はかっこいいなとも思ってしまった。

「孫娘だっていたのよ。ほらこの写真、確か右が私で左が夫、したがその孫娘よ、可愛いでしょ？」

と懐から差し出された写真には老婆の言うとおり、写真に映る老婆とその夫の間にはひとりの白い髪をした少女が写っていた。咲夜たちと同じ年齢だろうか。

「それでいて優しい子だったのよ・・・髪のこととかでよく不仲になったりしたわ」

「・・・」

咲夜は先程からの老婆の話はほとんど『だった』というのが多い。察するに、その孫娘もこの世には居ないのだろう。

なぜだろうか。この人の周りには悪霊でもついているかのようには不幸が起こっている。

大切な人がどんどん減っていくというのはさぞ悲しいだろう。

「結婚はしてなかったけど、幸せな人生だったと思うわ。あの子は剣道とかがすごくて門下生がいたほどだから・・・その子達のことを本当の家族みたいに接していたらしいけど」

女性のみでありながら指導する身になるのはかなりの腕だと判断してよいだろう。老婆は湯呑をテーブルの上に置いた。

「ほんとお婆ちゃんは・・・悲しくないんか」

という咲夜。老婆は少しも考えることなく、答える。

「悲しいくない分けがないわ。だけど、私の心の中にいるから・・・それに、願ってももう時間は戻らないし」

過ぎた時間は決して戻ることはない。時間は溝を埋めたり深めたりとできるが、命だけはどうしようもない。

「んー。やっぱお婆ちゃんかっこええな。あのバカみたいやわ」

咲夜はそう言って庭を走るテルを見て眩いた。まだ鶏に追いか
けられている。なぜか途中から鶏の他に野ウサギもやってきてい
るが。

「でもあの子、とても人から好かれるような心を持っているわ・・・お
嬢ちゃんは嫌いかしらっ?」

「べ、別に嫌いではあらへんけど・・・ただなあ・・・」

(・・・もうちよい人の気持ちを察することができればええのになあ)
老婆の問いにまんざらでもなさそうに答える咲夜。だがいかん
せん、その男はどうしようもなく馬鹿なのだ。他人の明らかな好意
にまったく気づかないほどの鈍感やろうなのだ。

○

話を終えた咲夜たちは自分たちの別荘に戻ることにした。流石
に、これ以上居座り続けるとマリアとかのお説教をくらいそうだった
からだ。

「そんじゃあ邪魔したでお婆ちゃん、また遊びにくるさかいな」

「俺はもう来ないぞ・・・鶏とうさぎには絶対には遭いたくないからな」

そんな不適切発言を咲夜は見逃すことなく、制裁の鉄拳をテルに浴
びせた。老婆は手を振って答えた。

「またいつでも来てもいいわよく変態さんによろしくね」

と最後まで笑顔だったが、最後まで誤解を解くことができなかつた
ハヤテは不幸である。

最後にテルは頭を掻きながら大きく手を上げて言った。

「なんかあつたらいつでも呼んでもいい、この俺、善立　テルはいつで
も会いに行くからよ!」

「・・・え?」

途端に老婆が笑みを止めた。テルたちは既に向こうへと歩きだ
している。老婆はその名を確かに聞いた。『善立』と。

もうテルたちの姿は見えなくなっていた。もう夜に近い。夜
中の林道はいくら自分でも危険だ。これ以上は動くとはできな
かった。

誰もいなくなった空間で老婆は再びその写真を手に取り出して、震えながら呟いた。

「大変よ・・・百合子」

第73話く来るべき対話（嘘）く

「・・・で結局、温泉の効能なんて全くなかったんですね皆さん・・・」
コンツ、と軽い音共にマリアがラケットを振るう。

「はい。　どうやらこの話はデマだったとしか言えないですね・・・
この通り、効能らしきものは現れていないですから」

ナギたちや老婆の件を片付け、テルは三千院家別荘へと帰宅していた。
テルが帰ってくると、卓球で遊んでいるハヤテとマリアの姿があった。

「ま、体を少しでも休めることが出来ただけでも良しとしますか・・・」
「・・・僕は少しも休むことができなかったですけど・・・」

嘆息と共にハヤテがマリアのピンボールを打ち返す。

「そう言えばあのホモ疑惑で君のお知り合いはどうした？」

「ああ、あの人ですか。　余りにしつこいんで少々きつく黙らせました」

あの人物というのは温泉で散々ハヤテに付き纏っていた男だ。

ハヤテが上がる頃にはその男は一緒に上がってこなかった。　その時に何かが起きたのだろう。

「で？　テルよ。　あの新鮮な老婆はちゃんと送ったのだろうか？」

マリアとハヤテの試合を眺めていたナギが牛乳を飲みながらテルに尋ねた。　二人の試合が退屈だったのか、目をこすっている。

「おう。　ちゃんと送ってきてやったぞ。　動物サファリパークみたいな場所だったかな」

そのセリフにナギたちは頭に？のマークを浮かべざるを得なかった。
あの場所に行ってみなければ分からない。

マリアが思い出したように口を開いた。

「まあ、話を戻すんですけど。　本当にこの場所に隕石が落ちたんでしようか・・・？」

「え？　それはどういうことですか？」

「さつきテレビを見ていたんですけど、隕石が落ちた場所に行っても落ちた痕跡はあっても落ちたモノは何もなかったんですって」

その話は初耳だ。となると、その隕石がオチがこと自体がデマなのかもしれない。結論づけるのも早すぎる気がするがこういう話を利用した経済効果を狙う輩もいるのだ。

「なるほど。では、私たちはとんでもない勘違いをしていたようだ・・・」

「なんですかお嬢様？」

ナギは片手の掌で顔を隠して言い放つ。

「隕石が落ちた現場に何もなかったというのは落ちてきたものがUFOだという証拠ツ！つまりこれは宇宙人による侵略第一歩だったんだよ!!」

「な・・・なんだって——!?!」

と、MMRばりに驚くテル達。

「しかし・・・今更宇宙人とか出てきてもなあ？」

「そうですね。妖怪とかロボットとかも出てきてもうそんなのなれちゃってますし・・・でもそれは流星に・・・」

「それにこの小説の原作って魔法とかそういう超常現象は普通に存在する設定なんですから」

「ここらこらー！マリア、メタ発言をするんじゃない！そういうのはあくまで秘匿しなきゃならないのだ!!」

説得力皆無であまり驚いていない一同にナギがでも、と言葉を続ける。

「よくある話だろ!? 落下地点にないってことは移動したってことだよ!!」

「いや、そんな話ないだろ。常識的に考えて」

「いや、あるさ! きつと宇宙の母星が終末を迎えてこの地球をあらたな住処にしようとして金属生命体が出てくるさきつと!!」

「なるほど。俺たちはそのあと金属生命体とトラ○ザムを用いた対話を行わなきゃならないのかくキツイな」

「ええいテルよ! お前はまったくもって夢がない! 夢がなければ古い地球人になってしまおうって確かジユドーは言ってたぞ確か!」

そんな曖昧なことを言われても・・・とテルは思う。そんな非

日常にはもう慣れてしまっているのだ。

夜の校舎に現れる妖怪、ボ○兵の悪霊、体を自由自在に変化させる化け女、オーバーテックノロジーで動くロボット。

常軌を超えた存在にはもうこれ以上会わなくていいよ。と言ってもいいほどテルの知的好奇心はそのレベルに達していた。

「ああくそ！ 会えないかなく宇宙人!! そして会ったら・・・会ったら!!」

ナギは拳を握りしめる。なぜなら、宇宙の革新的技術による自身の体を改造させたいという願望があつたからだ。

「そんなの会つてもしようがないじゃないですか」

「誰のために会いたいと思つているか——!!」

某神父の得意とする八極拳の肘内がハヤテに炸裂した。

またこの男は、その目的が最終的に誰の好意を引くためにやろうとしているのかを全く理解が及んでいない。

「もおいしい!! やっぱり私は寝る！ ハヤテはもお絶対入ってくるな!!」

ボタン。 とナギは乱暴に扉を閉めた。 ハヤテは打たれた腹部をささずる。

(・・・母よ、空だか星だかになっている母よ。 もしも母が空から私を見守る存在になつていいるのなら、どうか私を下田の宇宙人に合わせてもらえないだろうか・・・)

扉の内側、部屋の中へと入ったナギは深く息を付きながらテラスへと向かう。 もう外は真つ暗であり、その母がなつたであろう夜空に両手を祈るように握つた。

(この際、姿かたちは美形じゃなくていいから、言葉が通じない金属生命体でもいいから・・・なんかこう、超科学アイテムで私を悩殺ボディーにしてくれる宇宙人を・・・)

という思いを綴つた時、それは激しい轟音と共に起きた。

「へ?」

ナギがその現象に気づくのは少し時間がかかった。 間抜けな言葉を発すると同時に真後ろを振り返り、その何かが自分が気づかない

ほどの速さで突っ込んできたことに漸く気づく。

「窓の外から・・・まさか本当に、宇宙人？」

床を転がっていた物体を見てナギは恐怖よりも体が震える感覚を覚えた。興奮だ。

つい先ほど、頭の中で思っていたことが今まさに自分の目の前に現れたことに対してだ。これが本当なら歴史に名を残すことが出来る。

(いや、それよりも誰もがうらやむスーパーボディに・・・)

と、その時に物体が動いた。やはり生きている。その物体はこちらをゆっくりと振り返った。

「うい？」

「え・・・」

ナギは啞然とする。振り返ったその姿はまさに。

「子供・・・？」

ナギよりもはるかに小さい。だいたい五歳時くらいの体型だろうか。ナギの身長のお半分かくらいだ。

頭は黒い団子のように纏まった髪が二つ。服はなにか歴史を感じさせるものがあり、どこかヤマト時代とか奈良時代の帰属が来ている服装に似ていた。

「お、おい・・・お前は一体なにものなのだ」

「・・・」

ナギの問いかけに子供は慌てているようだった。辺りを見渡している。ここがどこかわからないのか。まず、こちらの言葉が伝わっているか怪しい。

(へんな副来てるけどやっぱ宇宙人じゃなくて普通の子供・・・か?)

「オイ、お前どこから・・・」

「うい？」

こちらに気づいた子供の視線がナギの視線と合致した。大きな目だ。ぱちくりとした瞳はまるでなんの淀みも知らないかのように澄み渡っている。

その瞬間、子供の団子型の髪がぎよろりと眼らしきものを開眼させ

た。

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

思わず後ずさりするナギ。まさかアレが髪の毛ではなく、本当の眼であるとは思ってもよらなかった。

「お嬢様!?! どうしました!?!」

「は・・・!ハヤテか!?!」

扉を叩く音が聞こえる。恐らくナギの声を聞いたハヤテが来たのだろう。

「あの・・・!!」

と、事情を説明しようとしたときナギの視線がカーテンへと写った。そこにはカーテンにくるまって涙目を浮かべる子供の姿があった。

「お嬢様! 入りますよ!!」

「い、いや! なんでもないから入ってくるな!!」

「へ?」

「もおいいから!もおいいからとにかく下がってる!!」

「わ、分かりました。では・・・」

ハヤテも困惑したがナギが言うのであれば深く探りを入れるのは良くないと思い部屋を後にした。

「あ、ありがとう・・・」

「む?」

子供が礼を言ってきた。自分でも理解できる当たり、どうやら宇宙語をしゃべっているわけではなさそうであった。ちゃんと日本語だ。

「あまりその星の原生知的生命体に見つかるのは良くないから・・・」
私に既に遭ってるのではないか。というツツコミを入れたくなかったが抑える。

「ということ、お前はやはりBOTA?宇宙人?」

「お前たちから見ると、そうなる・・・私はマヤ、お前は?」

「わ、私は三千院 ナギだ」

まさか本当に宇宙人に会えるとは思わなかったと驚くナギだった

が、宇宙人だったらそれはそれで浮かぶ質問をぶつけてみることにする。

「地球には何しにきたのだ？ 対話を求めて征服しにきたのか？ それとも無限質量にモノを言わせて地球を蹂躪しに来たか？」

「せ、せーふく？」

と何故か宇宙人マヤはどこからともなく某赤い彗星の制服を取り出してみせた。

「いや、そういう本当に宇宙人かどうか疑うボケはいいから」

咲夜がここにいたら確実にハリセンが飛んでくるだろう。

「そうじゃなくて宇宙人なら持っているだろう？ いわゆる宇宙ならではのオーバーテクノロジー的な技術が！ たとえばのむだけでナイスバディーになれるの？ そういうひみつ道具っぽいのがあるだろう？」

「うい？ ああ、だったら・・・」

マヤは思い当たることがあったのか、猫型ロボットのような道具を取り出す仕草で服の中から何かを取り出した。

「おお、やっぱりあるのだな!!」

(こ、これで私も超絶グラマラスボディーにツ!!)

「うい」

と差し出されたのは小さい小瓶。なかには謎の白い液体が入っている。いかにもという感じだ。

「これを飲めば大人っぽい感じになれるのだな!!」

「うい。牛乳は体にいい」

その白い液体の正体が牛乳だと知った瞬間にナギは既に口に含んでいた牛乳を噴いた。

「違うわああああ!! そんなローテクな原始的技術じゃなくてもつと画期的な宇宙技術が欲しいのだー!!」

「けどマヤは宇宙船と離れたのでそういうのはあんまり・・・」

「宇宙船とはぐれた？」

宇宙船と、またロマンあふれる単語にナギの耳が反応する。

「うい。マヤ、このへんに置いた宇宙船を探している」

と、ここでマヤによる地球にやってきた経緯が明かされた。マヤの宇宙人としての任務は五万年に一度の温泉調査にやってきていた。

マヤは真面目に働きストレス疲労悩まされる人々の為によりよりいで湯を探すため勤務していたが。

「とても悲しいことにどうやら居眠りしている間に緊急脱出装置を押ししてしまい、宇宙空間に投げ出されてしまったわけでして・・・」

「まあ、いろんな悲しい話だ」

「こちらの方に落ちたということを知って早めに回収しようとしてやってきた。宇宙船は少なくともこの環境に慣れていないから何らかの影響を与えるかもしれないから」

なるほど。とナギは心の中で納得する。温泉での体の妙な変化はそのためによるものだったのかとここで理解することができた。

そしてナギの理解したことはこれだけではない。

(その宇宙船のなかには未知の技術が!! つまり、私の体を劇的に変化させる装置もあるということだ!!)

「だいたい分かった。お前の宇宙船探しを手伝ってやろう」

「え? 本当に?」

「ああ、任せておけ。そういった宇宙規模でオオボケをかます奴がおつてな、多分そこにあると思うんだ」

これでもうお子様ボディに悩まされることはなく生きることができると思うとナギは笑いが止まらなかった。その様子をマヤは不思議に思っていたが構わずナギの手を取る。

「だったら今すぐ行こう!! 宇宙船を探しに!!」

「え? どうやって・・・?」

と、マヤの頭の二つの眼がゆっくりと変化し始める。黒く広がったそれはまるで羽のように変化を遂げた。

「マヤの背中に乗るといいよ」

「お、おう・・・」

と背中にナギが乗ったのを確認するとマヤは耳の頭の羽を大きく羽ばたかせて空を飛んだ。

第74話く nobodies perfectく

下田、三千院家の別荘から数十分といった距離に鷺ノ宮家の別荘は存在した。その有名な技師により作られた日本庭園に二人の執事服を着た男が歩いている。ハヤテとテルだ。

「お邪魔しまーす」

「どうも。伊澄さん」

「あらテル様にハヤテ様。こんな時間に何かご用でしょうか？」

中へと上がり、障子を開けるとそこには和服の少女、伊澄の姿があった。

今回、ハヤテたちが鷺ノ宮家にやってきたのは理由がある。

それは伊澄の身に起きた能力が使えなくなるという異常だった。

ある日突然、自分の能力が使えなくなってしまったのである。伊澄の祖母、銀華によればハヤテの血を飲むことによりその力がもとに戻るといふのだが、これを伊澄が拒否。

しかしテルたちはナギたちが殺し屋に襲われた時に銀華に血を飲ませるといふ条件で助けてもらっていた。その話をすれば自ずと伊澄も理解してくると踏んだ。

ようやくすれば、交渉だ。できれば伊澄の機嫌を取るわけではないが、交渉が不利に傾かないように慎重に会話をしなければならぬのだが。

「しかし、力が使えなくなっちゃったらそれはそれでいいんじゃないの？」

「あろうことかテルは初っ端から空気を破壊するようなことを言った。」

「私がこの身に宿した力が使えなくなってしまつては口クに妖怪を追い払うことができませんが・・・」

「まあ、そんな低いテンションになるなよ。俺はそのほうが普通の生活を送る上での邪魔もなくなるし、晴れて普通の女の子に戻れるわけじゃん？」

「確かにそうですけど・・・」

と伊澄が言ったところでハヤテは伊澄の表情を伺う。今は特に険しい顔になったりするわけでもなく現状維持といったところだ。

「ですが心配には及びません。ですからはやて様はナギの所にお戻りください、大叔母様のお約束とはいえハヤテ様の手を煩わせるわけにはいきませんから……」

「で……でも伊澄さん……」

「お戻りください」

こちらの顔を見ないでの返答。そうとう意思は硬いようだ。

以前ナギが伊澄について言っていたことを思い出す。

——だから意外とアレで頑固なんだよ

その言葉が今更ながら理解できる。

「おいおい、ハヤテどうすんだよ。コイツ超頑固だよ。あのざわ

ざわ森のガンコちゃんよりも頑固だよ」

「テルさん、そのガンコは違います。テルさんも少し頑張ってください、あの大叔母様のことですから、うまくいかなかったら強引なこととしてくるかもしれないですよ?」

「た、たしかに……なんかさつきから変な視線を感じるし……」

「何をこそそそとしているのですか。用がなければ……」

「い、いや! 用ならある! お前を説得することだ! だからそんな冷たい目で見つめるなよ伊澄イ!」

あたふたしながらテルが言葉をつなげるがこれといった打開策がない。しかし、そもそもなんで今で伊澄がこんな状態になってしまったのか。

「でも伊澄、わざわざハヤテの血を飲まなきゃならないのか? 俺とかの血ならいくらでもやるんだが」

「それでは意味がないのです。何故かそういう条件になっているのですから……そもそも、仮にテル様の血が治る条件になったとしても私の気が変わるとでも?」

うーん。なんて意思の硬さだ。ダイヤモンド並みの硬さだ。

「テルさん、ちよつと……」

と、ハヤテがテルを招いて耳打ち。

「そんな方法でいいのかわ？」

「はい。多少強引かもしれませんが・・・」

（何か考えついたようですがどんな事をされても私には揺るがないこの決意がある限り、決して屈したりは・・・）

伊澄はテルたちを睨むように見つめた。自分を動かす事が出来るならどんな方法でもどんと来いである。

「・・・なあ伊澄」

「・・・ダメですよ」

ズイ。

「どうしてもダメか？」

「・・・どうしても、です」

（・・・あれ、なんかテル様の距離がどんどん近くなってきた感じが）
伊澄は最初はそれが錯覚だと思ったが正座していたテル位置が微妙に変わっているからにして明らかにこちらに近づいていた。

「頼むぜ・・・」

数十センチ。

「う・・・」

（ハヤテ様！ 外道にも程があります!!）

そんな事を思っている間にまた迫まれた。もうテルと伊澄の距離はもう十センチ位である。

こんな近くにテルの顔があるのだ。伊澄としてもこの状況は初めてであり、近づくとたびに顔の色がどんどん真っ赤へと変化していった。

（しかしハヤテも変な作戦立てるよなあ、ただ伊澄に顔を近づけるだけでもいいっていうんだから・・・）

この男もハヤテのことは言えない。デリカシーのなさは一級品であった。

「あ、あう・・・」

（れ、冷静さを保ってられない・・・）

もう体温まで上がってきてしまい視界もなんだかボヤけてきた。
このままではいけない。落ちてしまう。

それを見ていた作戦の考案者は。

「計画通り……」

拳を握って悪い顔をしていた。一応主人公です。

「うちの孫娘になにしとるかあ——！！」

「ギヤアアアアアアアアアア!!」

だがこういった悪巧みはうまくはいかないのだ。さつきから張っていたであろう銀華が障子を突き破り、トゲのついた鉄球二つをテルとハヤテの頭へと直撃させる。

「この外道……伊澄大丈夫か？ 何も悪いことされてないか？」

「は、はい……」

一瞬の間にテルを鎖で縛りつるし上げた。血がぽたぽたと、あと色々流れてきたりしているが彼なら大丈夫だろう。

「ぶ、ぐふう……頭から血が出るのに逆さ釣りはヤバイだろ……」

「そこで一生縛られてろ外道。孫娘に手を出した罰じゃ」

「手をだしてねえし、出すつもりもなかったっのツ！ 頭いかれてんじゃねえのかこの白髪BBA!!」

「ほう……いい身分だな小僧……」

ジャラジャラと懐から鎖付きクナイがテル顔の前で揺れていた。

しかも銀華の目もマジである。

殺す気だ。

「さあ伊澄よ。ここに綾崎 ハヤテの血があるぞ。早く吸うのじゃ」

「早くするのは止血の方です大叔母様……大体、こんな事をして私が喜ぶと思っっているのですか？」

さつきとは一転した冷たい目が銀華を射抜いた。銀華の体が震え出す。

「あ……あ、伊澄のバカアあ——！ せっかくこんなに頑張ってるのに——！！」

銀華は泣きながらその場を走り去っていった。銀華としても実の孫娘を思った行動をその孫娘に否定されるとは思わなかったのだろう。

「すいません。テル様ハヤテ様、大丈夫ですか？」

「俺はなんとか：しかしまあ、婆ちゃん大切にしろよ。お前を思つての行動だったんだからな」

鎖から開放された二人は伊澄から渡されたタオルで頭を抑えて止血。

「でも、ここまで大事になるものなんです。能力の喪失っていうのは」

「それはもちろん、妖怪退治や除霊を専門としている人間が減るというのはやはり痛手というものです。能力がなくなつたのではなく、一時的に使えなくなつただけですが」

「しかしまあ、なんで能力とか使えなくなつちまつたんだよ。なんか理由がありそうだけどな・・・」

「・・・」

テルが発したその一言でその場の空気が凍りついた。いや、ハヤテまで凍りついたわけではない。しかし、伊澄の放つその冷気がその空間にいる全てを凍りつかせたのだ。

(いかん。じらい踏んだ・・・)

しまったというテル。すると伊澄は口を開いた。

「八年前の一月・・・初めての友達ができました」

八年前。というと、伊澄が五歳のころだろうか。伊澄は続ける。

「その人は私の母が姉のように慕っていた人の娘で・・・その子はお日さまみたいに笑うかわいい子で・・・私はパーティーで知り合いました」
(よかつたくなにか地雷じゃなくて助かつたぜ・・・)

「でも、その年の三月、彼女は笑わなくなりました」
(やべ、やつぱり地雷だったよ)

テルが内の焦燥が半端ないが、今は黙って伊澄の話を聞く。

「私は彼女の笑顔を取り戻したかつたんですが——」

——ナギ、お母さんにもう一度会いたくない？

——え？　できるの？

「ですがその頃の私は今より未熟で・・・逆に彼女の傷つけるだけでした・・・」

その墓標の前で泣いている彼女を放っておけなかった伊澄は、自分の力を使用した。だがうまくいかず、更にはその彼女には小さなトラウマまでも植え付けることになってしまう。

「結局、今回の能力のことも自分の未熟さが原因なんです。だから他人の力を借りることは私はいつまで経つても未熟なまま。だからお二人にはお帰りいただいて欲しいのです」

「……」

その話を聞いたハヤテとテルはお互いに目を見合わせて伊澄から顔を逸らした。

（オイオイやべーよ！ 話が抽象的過ぎてなんの話か全く分からなかったけどこれじゃ提案なんて出来る雰囲気じゃねーよ！）

（ど、同意見です。まさかあんなちよつとしたところからトラウマスイッチが入ってしまうなんて……）

だが、これで一つ分かったことがある。これまでの伊澄の無茶な言動とんでも一人で抱え込もうとする原因はその過去の失敗によるものだ。

「だが伊澄、この前の戦いでわかってるはずだ。一人でやるにしては限界があるってことが……」

「……」

テルの言うことに伊澄が黙り込む。そうだ。前回の黒羽との戦いは体調が悪かったとはいえ、絶望的な状況まで追い込まれた。

だが、あくまで体調が悪かった時の話だ。

「本調子になれば、私一人でも大丈夫です。私が力を取り戻せば、仕事もなんなくこなせるんです。テルさまだって、たいていの事は一人で片付けているではありませんか」

「いや、違う。俺は一人で何もかもやっているわけじゃない」
伊澄の意見はテルに即否定される。

「俺がなんでも出来る男だと思ったら大間違いだ。掃除、洗濯、勉強、執事業なんて出来ないに等しい……料理以外は」
「テルさん、料理もです」

ハヤテの密かなツツコミもテルはスルーして続ける。

「簡単にいえば、俺は執事とかそういう細かいことする仕事は向いてないこった。そこらへんは理解してんだよ」

これにはハヤテと伊澄が少し驚く。まさか自分で理解しているとは思わなかったからだ。

「この前の化け女のときだってそうだ。俺はお前ん家の霊刀が使わしてもらえなかったらアイツには一生勝てなかっただろうよ」

そう考えれば、テルは剣術が出来ること以外は何もできないのかもしれない。白皇の編入試験もラインスレで合格だし、料理が得意でない。

言われてみれば完璧な人間なんて一人も居ないはずだ。ハヤテでさえ、他人の気持ちには果てしなく鈍感だという弱点があるのだから。

「そんな高い人間像を俺に抱いていたとすれば、それはお前の間違いだ伊澄」

No body's perfect (完璧な人間なんていない)
「俺の生活を支えてくれてるのはハヤテやナギたちのおかげだし、白皇を退学しないでなんとかとどまっていられるのはヒナギクやマリアさんのおかげだ」

「こう言葉だけ並べるとテルさんが駄目人間と言ってるようなものですが……」

「そこ、黙らっしやい」

ハヤテに淡々と述べられてテルはいささか不機嫌となった。気を取り直してテルは結論を言う。

「自分は一人で頑張ってたっていう奴に限って結構、周りから助けられてる事が多いんだよ……だからお前は少し反省してコイツの血を飲め。それで全て解決する」

反省させて地を飲ませるとは、かなり強引にもって言っている気がするが。伊澄はその言葉を聞き、険しい表情をしながら立ち上がった。

「……新しいタオル、持ってきます」

と、その部屋を後にして障子を閉めた。

(この前のことでもうこりたと思っただがな……なかなか性根つて
いふのは変わらないもんだ)

それは自分にも言えたことではないが。 とテルは自分で少し半
笑いする。

「しかし、困りましたね……」

「そうだな……俺もなんか体中がスнгеエ痛いんだよ」

ヨロヨロと体を揺らしながら言うテルの表情は良いものではない。
タオルの布地は真っ赤に染まり、止血の役割を果たすことはない。
傍から見たら赤いタオルと言えるほどだ。

「わー！ さつきより血が出てますよテルさん！」

「あー、無理して温泉はいるんじゃないやなかつた。アレで治ると思つた
のに……」

「なんでわざわざ体をさらに痛めつけるようなことをするんですかつ
て、わ——!!」

○

「うわあ——!! 本当にあつた——!!」

同時刻、その鷺ノ宮家の別荘の入口で歓喜の声を上げるマヤ。そ
の喜々とした表情の先には、まるで昭和時代のアニメに出てくるよう
な宇宙船のような建造物があつた。

「ふ……だから言つたではないか。 この三千院家にこんなことは造
作もないと……」

一緒にマヤとナギも自身のあまりの直感の良さに思わず恐怖して
しまうところだった。

(まさか、鷺ノ宮家が宇宙船を使って温泉を経営しているとは……)
鷺ノ宮邸に置かれたそのマヤの宇宙船は、大きな看板を付けられて
いた。『鷺ノ宮温泉』。 鷺ノ宮家は見事にこの建造物を利用した
経済を展開していた。

「さあ宇宙船は見つけたぞ！ これで私はピルマピルマテクノロ
ジーでアダルトタッチな悩殺メロメロボディーになるのだな!!」

「……ん。魔法のステッキとかはないけどなんとか……」

その言葉を聞いてナギはニヤリと笑みを浮かべる。 叶う。 叶うのだ。 今まで叶わなかった夢へと、届くことのなかったその頂へ！ 「よし！ それでは早速宇宙船へ・・・」

ナギが動きを止める。 ぴたりとだ。 マヤが気になりナギを見ると、その視線はある方向を指していた。

「な、なんでこんな所にハヤテとテルが・・・？」

ナギの瞳に写ったのは紛れもなくハヤテとテルだった。

（テルはともかく・・・なぜハヤテがこの鷺ノ宮の別荘に？）

ナギは自分の別荘では窓からそのまま宇宙船探しに出たため、そのあとの別荘の動きを知らない。

ハヤテとテルは鷺ノ宮の別荘の中へと入っていった。

考えられることは以下の点だ。

- ・ハヤテが伊澄と逢い引き
- ・テルが伊澄と逢い引き
- ・ハヤテとテルが逢い引き

「ちよつと待ったア——！！ 一番上はわかるけど一番下のはなんだコレエ——！！ こんなのやらされて誰が得するといふのだアアアア！！」

（落ち着け・・・ここは旅館だ。 相手が伊澄だとは限らない・・・ならばやはり相手はテルなのか！ いや、それよりハヤテは私にメロメロのはずだ！！）

明らかに一番下の選択はありえない。 しかし、いや、まさか・・・思考を巡らせているとマヤが肩に手を置いた。

「じゃ、取り敢えずマヤの宇宙船へ・・・」

と、その瞬間。 マヤの頭がナギの右手により驚掴みにされた。

「あんな宇宙船のことなど後でどうとでもなる。 だからもう少し私に付き合え・・・」

「う・・・うい？」

指にかかる圧力とは別の黒い圧力に圧倒されたマヤは頷くしかなかった。

すぐさまハヤテのあとを追い、鷲ノ宮邸に潜入する。まるでスニーキングみたいだ。心が踊る。

廊下を歩き、二人はどこかと探していると。

「わ——!!」

「むっ！ この声はハヤテ？ ハヤテはここなのか？」

通り過ぎようとした臥間の向こうからハヤテの声が聞こえた。

ただ事ではないと踏んだナギは思い切って障子を開ける。

「ごおらハヤテ！ こんな所で一体何をしているのだ——!!」

障子の向こう側にナギが見た世界は。

「……………」

「……………」

「……………」

ナギは目を見開いてその光景を見つめていた。確かにその部屋にはハヤテは居た。しかもテルも。問題なのはその二人の状況だ。

なぜ血まみれのテルが血まみれのハヤテを押し倒しているのだろうか。

(ほ、本当に……何をしているのだろうか)

啞然。その一言に尽きる。まさか、一番恐れていた事が起きているとはナギも予想外の展開であった。

「お、お嬢、違うんだ。ちよつと血糊で滑ってハヤテの所に倒れ込んでしまったな……」

テルがなんとか弁解を求めるがナギの目は完璧に別方向に走っていた。

「お、お前ら！ 男同士だったら何でもありなのか!? ハヤテも女の気持ちに疎いくせに男の前ならなんでもいいのかあ!？」

「酷い誤解ですよお嬢様!! 本当にこれはテルさんの言うとおりにただ滑って転んだだけで……」

「その前にそんなに血だらけになっている事を説明しろ！ まさかそういう趣向なのか!? お前らそんなアブノーマルな輩だったのか!？」

「・・・腐ってやがる。 早すぎたんだ」
テルがボソリと呟いた。 もちろん腐っているというのは頭のことを指しているのは言うまでもない。

「ようするに、私の裸を見て何も思わないのは・・・そ、そういうことだったんだな——!!」

「ど、どういうことだったんですか!？」

ハヤテとしては早くこのわだかまりを解消させたいという一心だったが、ハヤテはこういう時にはわだかまりを逆に増やす事をしてしまうのだ。

「だいたいお嬢様の裸を見て何も思わないのは、お嬢様がまだちっちゃな子供だからという正常な反応で・・・」

ポチツ。 ナギの怒りのスイツチオン。

「だ・・・だ・・・誰がちっちゃな子供だバカ——!!」

（くそう！ こんなやつだとは思っていなかった！ ハヤテはそんなことはしないと絶対に思っていたのに!!）

泣く仕草も見せずその場を走る。 障子が勢い良く開かれ

「お前はそこで血生臭く仲良くやってろ!!」

そして閉められた。

「お、お嬢様!! 確かにここ血でいっぱいですけどおおお!!」

「まずいな、このままじゃナギが違うトラウマを持つちまう、んでもって紛れもない腐女子の完成だ・・・」

「そんな悠長なこと言っていないで早くしないと——」

その瞬間、ハヤテは一つの殺気を感じ取った。 それは閉められた障子の向こう。

その夥しさに二人が気づくのはさほど時間は掛からなかった。

「——!!」

テルはハヤテの前に立ち、懐から鉄パイプ撃鉄を斜め上に振り上げた。 ハヤテには何かわからなかったが、ガキン、という金属音と共に天井が突然として轟音を立てて破壊された。

「こ、これは・・・？」

「・・・」

その天井にあったのは黒い槍だった。刺さっている黒い槍は二人にとつても、そしてテルにとつても忘れられない物だ。

「・・・このクソ忙しい時にッ」

恐らく投げられたものだろう。そう判断したテルは向こうを見据える。投げられた際に障子は破壊されてしまい外から中の様子は丸見えだった。

「・・・」

テルの視線にはやはりあの黒衣の少女、黒羽の姿があった。そして同時に。

「お前、昼間の・・・」

「よう。また会ったな」

黒羽の隣には温泉で居た木原 竜児の姿もあったのだ。

「テル様！ハヤテ様！何かあったんですか!？」

異変に気づいた伊澄がやってきた。そして黒羽の姿を見て顔が一層険しくなる。

「いきなり強襲かけてやったぜ綾崎 ハヤテ。お前に一つだけ言っておく、三千院ナギは俺たちが捕まえて隠した」

「な、なに!!」

ハヤテが木原の言葉に反応した。恐らく出ていったところを捕まえられたのだろう。格下と聞いていたが一体どこに隠されたのか、ここから早く飛び出したいところだがこの状況で動くことができない。

「無事に返して欲しかったら、俺たちの要求に従うんだ」

木原が突きつける条件は恐らく、この前から狙っていた石のことだろう。

テルは鉄パイプを構えて二人に言った。

「なんか今回はちゃんと考えて来てんじゃねえか・・・お前ら、一体何もんなんだよ」

そのセリフを聞いて、答えない訳にはいかないと思ったか、木原が薄く笑って答えた。

「・・・お前の事を昔から知っている人間だよ善立 テル・・・俺の名前は木原 竜児」

「木原・・・竜児・・・？」

——どこまでも馬鹿なクソヤロー、俺を信じたお前が馬鹿だったんだ・・・

(な、なんだ・・・い、いまの)

一瞬、脳裏をよぎった場面。突然の出来事に、テルの視界が荒れる。

「そして・・・」

木原はゆっくりと構えて、言った。

「お前の記憶を消し去った男だ」

第75話く自分の話を他人がしているのを見ると腹が立つく

「俺の記憶を消した？ どういう意味だそりゃ」

「言葉の通りだつてば」

木原の鋼鉄の義手とテルの鉄パイプが激突する。 激しい金属音を放ち、響いた。

「いったいそれはいつのことなんだか、ぜひ教えてもらいたいところなんだけどな」

「そんな暇があると思うか？」

鏢迫り合い状態の拳と鉄パイプはお互いに弾かれて二人は距離を取った。

その後ろからは新たな敵、黒羽の二段攻撃である。

「……………」

黒羽は右腕を短剣へと変化させてテルの目の前へと踏み込む。力強い踏み込みが生み出した一撃は鉄パイプで受けたテルの右腕しびれさせた。

短剣を受け止めてまたしても鏢迫り合いに持ち込まれたがテルの側面に気配、そして衝撃。

「がっ……………!!」

衝撃と共にテルは吹き飛ばされた。 いや、殴り飛ばされたのだから。 あまりに体が浮き上がったため、吹き飛ばされたと錯覚してしまったのだ。

「流石に二体一はキツそうだな。 黒羽を相手している間にほかのことに気を回している暇はないだろ」

木原がテルを殴った右手をスナップを利かせて払った。 状況は今現在、圧倒的に不利な状況であることは間違いない。

「く……………このままじゃテルさんが！」

ハヤテも体を動かかそうとするのだが、先程の銀華の鉄球を食らったダメージがあるためか体を動かすのがキツイ。 だがこれは同時に

テルもかなり追い込まれている状態だった。

「卑怯・・・なんて言ってくれんなよ？　俺はお前の事を認めてるんだぜテル。　二体一の戦法なんてのは叩きのめす相手が本当に強いから数で圧倒することを基本としているんだからな」

木原の言うとおり、実力差のある相手を倒す方法とはなんだろうか。　ここで言ったとおり、それは数だ。　ここにはかつてのテルに勝った黒羽と、一体一ではあのハヤテをも追い込んだ木原がいるのだ。　それがタッグを組んで戦われたらその戦力さは歴然。

「お前を片付けたら綾崎　ハヤテ、次はお前の番だ・・・すぐに終わらせてやるよテル。　お前の悪夢も、そして俺の悪夢も」

「俺の悪夢？」

「そうだ。　ずっとお前は思ってきた筈だ。　自分の名前が分かるまで、思い出すまで、自分とは一体なんなのか。　この世で自分はただ一人ではないかってな・・・」

孤独。　その言葉がすぐ浮かんだ。　ラーメン辰屋に拾われて自分の名前を思い出すまで、自分が何者かを疑わなかった日はなかった。

自分が生きている意味かさえも疑ったくらいだ。　朝も、昼も、夜も息を抜く暇なんてない。　常に背後には孤独の言葉が纏わりつく。「そして名前を思い出したあとでも、自分の肉親のことすらも思い出せなかったはずだ・・・」

時間をかけて思い出せたことは結局自分の剣術とその剣術を教えしてくれた師のことだけであった。

「不安に駆られて、自分はこの世界では誰とのつながりをもてないでいるんじゃないかって」

勢いを付けて、木原が飛んだ。　体を大きく捻って豪快にアクロバットのかかと落としを振り下ろす。

「ナマいってんじゃないやねエ・・・腐れヤクザボーイ」

テルが睨みつけたその瞬間、木原のかかと落としは受け止められなかった。　誰に？　少なくとも人ではない。

(なんだ？　これは・・・鎖？)

足に巻き付かれたのは銀の鎖。先程の空中での勢いを完全に鎖に殺されて、そのかかと落としはテルの頭には至らなかつた。

「温泉にいたときはなんら気の合う奴かと思つただけだな・・・」
目の前には鉄パイプを真横に構えたテルの姿があつた。

「別にそんなことなかつたぜ!!」

「マズツ——」

木原が防御を試みるも、その防御を突き抜けたテルのひと振りには、木原の顔面を深い音と共に抉つた。

体が三回ぐらい回転しただろうか、そんな滞空時間、木原は確信したことがあつた。

(気に入らねえけど・・・変わんねえ・・・その強さ)

体を背中から打ち付けて、モロに受身を取ることが出来なかつた。砂利は弾け、木原は即座に起き上がる。

起き上がると肩に鉄パイプを担いだテルがあつた。

だがそこに、いつもの表情はない。

「俺が知らない俺のことを他人にとやかく言われるのは腹が立つな。どうやらお前は本当に俺の事を詳しく知ってるようだ」

ブンと鉄パイプを払い、懐から伊澄が普段使っている梵語がしつかりと刻まれた札を取り出して、鉄パイプに巻きつける。

「その頭一回カチ割ってみるしかなさそうだな」

(それ俺を殺すつもりだろ)

と心の中で突っ込む木原。もちろん、頭をかち割られる予定はないが。

「フェフェフェ・・・まず助けてやった礼ぐらいしてはくれんかのう」
声が出た。テルの背後からだ。ゆらゆらと白い着物を着て、仮面を被つた異様な何か。

「誰のせいでこんなに苦戦してると思つてやがる」

「誰のせいじゃ?」

「お前の鉄球のせいでこのクソババア!!」

悪びれる様子もなく、銀華は無視した。そして改めて木原と黒羽を見る。

「・・・こやつらの目的は綾崎　ハヤテのようじゃな。　そしてあの小僧は、お前か・・・」

「そんな感じだ。　なんか俺は女運より、男に付きまとわれるのが多いんだが」

「今はそんなことを言ってる場合ではなからう。　ここからはワシも助太刀してやる。　あの黒い娘には伊澄がお世話になったらしいからのう」

ジャラ・・・と袖から鎖付きクナイが姿を見せる。　完全にやる気だ。　鷲ノ宮の戦闘狂とはコイツのことか。

「まあ、いくら老婆心だからって無理すんなよマジで。　俺婆ちゃん
の扱いはマジで苦手だから」

「テル様、大叔母様・・・お気を付けて・・・」

伊澄にそう言われ、銀華は小さく笑うと黒羽の所へと真っ直ぐ走り出した。

「・・・これは予想外な展開だな」

一部始終を見ていた木原は表情を歪ませた。

「俺もまさかの展開だ。　アイツは勝手に来ただけだ」

テルが再び鉄パイプを構える。

「なら、もう一ついいことを教えてやるよ。　俺はお前の記憶を消そうとしたわけじゃない。　嘘だ。　そんな事が出来るんなら俺はこんなところで血を流したりするよりはずっといい商売できる気がするからな」

軽く笑った木原の言葉に眉を動かす。　そして木原は一息ついて。

「俺はお前を殺そうとしたんだ」

冷めた表情でそういったのだった。

○

鷲ノ宮邸別荘は、もはや温泉旅館としての姿をしてはいなかった。そこは既に戦いの場と化していた。

今対峙しているのは鷲ノ宮　銀華と黒羽である。

「この前はウチの可愛い孫娘を可愛がってくれたそうじゃのう」

「……」

「ワシは伊澄ほど甘くはないぞ。多少のケガは覚悟することじゃな……もつとも、ケガじゃ済まないかもしれないがのう」

「……」

「……お前たちの目的はなんじゃ？」

「……」

無言。さつきから一方的に銀華が喋ってばっかだ。これではこちらの方が逆に恥ずかしい。まるで人間ではなく、人形に話しかけているようだった。

「気味が悪いのう……まあまずは……」

ジャラ。と袖からクナイが姿を現す。

「小手調べじゃ!!」

投擲。袖から出したクナイを慣れた手つきで黒羽に投げつける。その数六本。

投げられた六本は確実にこのまま動かなければ黒羽に当たる軌道だった。黒羽はよける動作も見せないが。

「……」

その六本のクナイは金属音と共に、黒羽に当たることなく、宙を舞った。

「ほう、それがお前の力か……」

銀華がうすら笑いを浮かべる。やがてそのクナイは地面へと力なく落ちた。

そのクナイは黒羽が取り出した黒い槍により防がれていた。

「ならば……!!」

もう一度、と。銀華はクナイを投げつけた。今度は鎖付きで自由自在に方向を変えられる。四方八方からのこの攻撃はどう防ぐか。

「……」

黒羽は特に慌てることもない。いや、慌てるという概念すら、この黒羽には必要ないのだろう。

左手から黒い棒が伸びてきた。先程の黒い槍だ。

これで黒羽は先ほど出した槍を合わせて二本持っていることになる。

二槍を携えた黒羽は、鎖付きクナイの包囲網のなか。

クナイがついに黒羽へと襲いかかる。最初は人間の死角とも言える真後ろ。

「……………」

右手の槍を後ろへノールックで振って弾く。一本目。

次、右斜めからの時間差付きの二本。これを左手の短い槍で弾きながら体を捻って右手の槍でクナイの横腹を叩く。二本、三本目。

真上からのクナイは横一步踏み込んだだけで躲されて地面に突き刺さった。同時に来た横と前のクナイは右手の槍を軽く回して弾いて五本、六本目。

(こやつ……人間なのか?)

銀華はただ啞然としていることしかできなかつた。十を超える数のクナイをたつた二本の槍で軽くないなされているのだから。

最後の一本はハエたたきのように真上からクナイを叩きつけられた。叩きつけたと同時に、クナイは愚か、地面の砂利が激しく舞う。

「……………やりおる」

「……………」

黒羽は二本の槍を音を立てて振ると、銀華に向けて踏み込んだ。
(速い!!)

バックステップで距離を取る。あの近接力、変に近場まで持ち込まれたら厄介だ。

自分の能力と戦闘方法では近接に持ち込まれたらかなり不利だ。

だがそれでも黒羽は速い。たった二歩で銀華がとつた距離を詰められたのだ。

「うお——!!」

無言で繰り出された長槍のひと薙ぎを小ジャンプで真上へと飛んで躲す。だが今度は左手に持っていた短槍が銀華に迫る。

突き出された短槍をクナイを滑らせながら銀華の体は真横へと飛

んだ。

(正攻法はキツイか、相性は悪いようじゃの・・・なら)

歳を感じさせない二回、三回の跳躍を重ねて距離を取る。黒羽もそれを追うが。

「・・・？」

黒羽の動きが止まる。両足には先ほど黒羽が撃ち落としたクナイの鎖が黒羽の足元に巻きついていた。

「今じゃー！」

動きを止めている今が好機。銀華はありつたけの鎖付きクナイを地面へと突き刺した。

「どりゃあああああ!!」

気合の一声と共に鎖が地面を引つ張ると、どういう原理か分からないが巻き付いた地面の一部が見事に浮き上がったのだ。

大きさ4、5メートルはくだらない大岩が黒羽めがけて投げつけられる。

「どうする!?! 槍で弾くには今度は大きすぎるぞ!?! それとも鎖を引きちぎって逃げるか?」

対する黒羽は鎖を引きちぎるところか、よける動作も行おうとしない。ただ変わりに槍を構えたのだ。

そう、普通にやり投げの選手が槍を投げるようなフォームを作つて。

投げる。大岩めがけて。

投げられた長槍はまるで豆腐を突き抜けるかのように岩の面を激しく突き進む。そして次の瞬間、大岩は派手に碎け散った。

「・・・!!」

突き抜けた槍は銀華の頬をギリギリかすめることなく消えていった。あと右に一センチでもいたら見事突き刺さっていただろう。

「・・・」

再び槍を作り出した黒羽は銀華の鎖を軽く薙いで破壊する。銀華は啞然とした。黒羽は最初からよけようと思えば、簡単によけられたのだと。

だが、敢えてやらなかったのは相手の力を完膚なきまで叩き潰すため。

「くっ……小僧！　ちよつと手を貸せ！　コイツ、訳が分からんわ!!」
荒々しく吐き捨てる銀華は戦意を喪失しては居なかった。精神力が少しでも低かったら、ここで戦意喪失していただろう。
「ぐへっ!!」

銀華の返事に答えるようにテルが地面を転がってきた。

「おいこら小僧！　何を手こずつておるのじゃ！」
「いてて……んなこと言われてもなあ　アイツの攻撃のやり方、めっちゃやりにくいんだよ」

頭を抑えながらテルは起き上がって構える。　テルと銀華は背中を合わせた。

「……お互いに、まずい状況なようじゃな」

「やな感じだな……」

どこかのアニメのキャラのセリフを吐きながらテルは生唾を飲んだ。

「ふん、だがこんな時でもお前は冷静なんじゃな。　お前の考えていることがなんとなくわかるぞ」

「なんだよ。　お前はエスパーにでもなったか？　じゃあ当ててみろよ。　当てたら後でコラーゲンたっぷりの皇○でも買ってやるよ」

「そんなもの食ったらワシが老いているの認めるようなものじゃ！　要らんぞ、せめてお前の血を寄せせ」

背中越しにニヤリと二人は笑った。

(何をやる気だ?)

木原は警戒心をとかない。　この時に何か考えつくのがテルだ。
コイツはそういう男だ。

(早めに……潰す!)

ほぼ同時に、黒羽と木原は飛びかかった。　銀華には槍が。　テルには鋼鉄の義手による抜き手が迫る。

だが、お互いが見たその二人の表情は……不敵に笑っていた。

「せくの」

と、ノリノリな合図で二人は反転。こうすることで、二人の位置は完全に入れ替わり、黒羽の前にはテルが、木原の前には銀華が退治する形となる。

「しまっ——」

これが狙いか。と気づいた時にはもう遅い。銀華は鎖を放つと突き出された腕にそれを巻き付かせた。

テルは向かってくる一本の長槍を対妖怪用に強化された鉄パイプで横腹を叩いて弾くと黒羽の懐に潜り込む。

「しやあああああ!!」

二人の気合が響く。木原はとんでもない力に鎖で固定されたまま投げつけられて地面へと叩きつけられる。

黒羽はテルの袈裟斬りが炸裂し、防御をしつつもその防御を貫いて飛ばされる。

「よく気づいたな。お互いに相性が悪かったら、相性のいい方と入れ替える」

「お前はワシを脳筋かなんかと勘違いしているのか？馬鹿にするでない。ま、お前にしては上々策じゃったがな・・・フェフェフェ」

これほどまでに上手くいったと奇妙な笑い声を上げる銀華。とった作戦はただお互いを入れ替わっただけ、だが結果は二つの脅威を見事に対処することができた。

黒羽と戦闘経験があるテルは黒羽と相対し、基本拳や従手を用いて遠距離が有効な木原は銀華と相対。

一瞬の判断で一気に戦況は変わる。これがいい例だ。

「つて！。ただのBL〇ACHネタじゃないですかああああ!!」

「あ、なんだハヤテ居たのか！」

「いましたよ！。凄い戦闘してたんで会話に入れなかっただけです!!」

「わ、私もいました・・・」

ハヤテに続いて、伊澄が恐る恐る手を上げる。

「だってネタねえんだもん。一般ピーポの頭の容量じゃ戦闘のバ

リエーションに限界が・・・」

「メタ発言は禁止禁止!!」

シリアスな空気を見事に破壊される。まったく戦闘のなかだというのに、全く緊張感がない連中である。

だがこの時、一同は気づいていなかっただろう。

「・・・」

ただ一人、吹き飛ばされた黒羽がじつとハヤテを見ていたのを。

第76話〜後悔したくなければペロに餌やりなさい

あれは十二月に入った頃だった。雪がまだ降っていて初めて来た東京の街で俺は久しぶりにアイツと再開した。

「お前・・・竜児？」

暫く会っていないからか、アイツの・・・テルの髪が少しだけ伸びていた。

「なに？ お前まだ最強目指してやってんの？ ポケモンマスター目指すかのごとく？」

口調も態度も全く変わっていないかった。

その時に俺の片腕はもう義手だったが、テルには何も言わず義手も手袋で隠した。火傷してちよつと見せたくないと思魔化して。

その日はテルと久しぶりに東京の街を回った。東京といっても広い。だが、昔いた山のなかよりずっと新鮮だった。

店を周り、トラブルに突っ込んでやんちゃして、久しぶりに再開できたことに俺は嬉しさを覚えていた。

少なくとも、ここまではだ。

その夜、どこかの港。何故か俺はテルをここに呼び出していた。

海は静かで波はどこまでも平面を維持している。

防波堤際にテルは棒立ちしていた。しかし未だに分からない。なぜ俺がここにテルを呼び出していたのか。

ちよつと待て、俺はなぜこの右手にバットを持っている。

おい、ふぎけるな。体が勝手に動いてるぞ。振りかぶるな、テ

ル、頼むから気づけ。

「……………」

テルは気付かない。 思えばアイツがあの時反応しなかったのは俺がまさか攻撃してくるなんて思っていなかったからだろう。

降りおろされた金属バットはテルの頭を直撃した。 鈍い音共にテルが崩れ落ちる。

その場に倒れたテルは頭から血を流していた。 いけない。 早く治療しないと。

だが、俺の体はまたしても思考と合わなかった。 今度は奴の体にロープにくくりつけて一緒に石を巻きつける。

(待てよオイ。 俺は何をやってる？ これじゃ海に投げでもしたら一生浮かんで来れなくなる重量だぞ?)

肩にその体を担ぎ、防波堤の先まで歩き出す。 もう海面は目の前だ。

(ふざけるな。 やめろ、 やめろやめろやめろやめろ!)

心の悲痛な叫びもその時は無情だった。 投げられたそのテルの体は水しぶきを上げて沈んでいく。

浮かんでいた泡がやがてなくなる。 これが夢なのか、夢じゃないのか・・・夢ならはつきりさせて欲しい。

そこで俺の意識は途絶えた。

数時間後、俺の意識は完全に戻っていた。 頭を振って起き上がるが同時に自分の今まで見ていた光景がフラッシュバックする。

「なんだよこれ・・・」

それを確信づけるように、一部の地面には血がつき、夢の中でテルに振り下ろした血のついたバットがそこにあった。

「なんだよこれ!!」

目が開き、体が震える。 では全て夢ではなかったのか？ いや、夢だ。 夢なら覚めて欲しい。

「夢じゃない」

後ろで声がした。 薄暗くてよく見えない。 どこかで聞いたこ

とがある声。声からして男の声だ。

『お前が殺したんだ。頭を少し弄らせてもらったがな』

『どこにいやがる！ 隠れてないで出てきやがれエ!!』

拳をふるって構える。怒号を発し、その体は怒りと共に熱くなっていた。

『私に当たるのは筋違いな話だ。お前が殺した』

突き刺さった。胸にぐさりと。

この男が言うように、俺は信じたくないが、操られてテルを手にかけたことになったのだろう。

だが、それはこれ、これはこれだ。

『紛れも無く、お前が殺したんだ・・・もう数時間経っているぞ？ あれだけ重石をつけたんだ。浮き上がってもこれまい』

男の声は笑っていた。あざ笑うかのような。人間の感情を弄ぶことが趣味のような声だった。

『お前が殺したという事実が消えない。それを許してくれる人間さえもういないだろう?』

そうだ。その俺を叱ってくれる人間も、友人も、もはやこの世には居ない。

友人はついさっき俺が殺してしまったからだ。

「俺が殺した・・・殺した・・・殺した」

何かが、支配していく。心の中をどす黒い何かが。

男の声はいつの間になくなっていった。誰もいない。俺は今、

防波堤に一人座り込んでいる。

拳を握り締めて、俺は叫んだ。

朝日を迎えていたときには、俺はブーツとその登る太陽を見ていた。もう流す涙も枯れている。

だが一つだけ決めたことがある。俺は、決めた。

(もしここで俺が死ぬなんてことしたらアイツはキレルだろうな・・・)

そんな確信があった。なぜだか、そういう言葉を発したら右手でグーパンが富んでいきそうな気がしたからだ。だが心の中では「でも」という決して消えない事実で繋げて。

(俺がしてしまった罪は消えない。消えはしない、誰かに許してもらって権利がない)

だったら、俺はアイツの命を殺めてしまった事を忘れず、後悔を背負ってずっと生きていくことを誓う。

そして・・・復讐しなくては。

俺にテルを殺させたアイツに。俺という個人を殺したアイツに。

まずはアイツの部下を探そう。確か、俺はその部下を知っている。

俺の片手を切り落とした女だ。

後に俺は黒羽を見つけ出して、奴の組織に入ることに成功した。

○

俺がああ男の組織に入って数ヶ月、俺は任務を行なっているときに信じられない光景を見た。

「・・・テル?」

三千院家のお嬢様を誘拐して、石を奪う任務。その任務中にまさか、自分が殺した人間が目の前に現れたのだ。

(幽霊・・・じゃないのか?)

見間違えがなかった。あの死んだような魚の目。誰が忘れるもんか。

「ん・・・? お前、どっかで会ったか?」

だが代わりにアイツは俺のことを忘れていやがった。

その場を撒いて、俺は一人、思った。

(生きていて・・・よかった)

その思いだった。　アイツが、俺が殺したと思っていた人間は生きていた。

だからと言って、俺のやったことが消える訳がない。　そしてアイツは俺の事を忘れている。

見たところ、記憶喪失の一種だろうか。　頭をバットで殴ったのが原因か・・・なんとベターな。

俺は他人の振りをすることにした。　さっき言ったとおり、俺のアイツをあんな目に合わせたという罪は消えないからだ。

(今更・・・顔向けができるかよ)

アイツが俺の事を忘れてるのがいい機会だ。　俺の正義を貫くと決めたその拳は真っ黒に染まっている。

もう握手すらも出来ないのだから。

○

「・・・とんでたか」

冷たい地面だ。　漸く本当の現実に戻ってくることが出来たのだろうか。

三十秒ほどだけ、意識をなくしていたらしい。　そんなに時間はたっていないかったのだろう。　口の中の小さな砂利を吐き出して起き上がる。

(他人の振りを決めたのに・・・こうして手を出してしまっているのはなんでだ?)

現に木原はテルに自分がテルの関係者だということまで明かしてしまった。

見据える先にはテルが膝を地面に付けて荒い息をついている。

「クソ・・・体動かすの、キツイな」

「小僧、その札を使うのはもう止めろ」

銀華が言っているのは、テルの鉄パイプに巻かれた一枚の札のことだろう。

「なんでだよ？ さては俺に手柄とらせたくないからか？」

「自惚れぬなよ。 その札は鷲ノ宮のみが使うことを許された札。

適応者以外の者が使えばそれ相応のリスクがある、現にお主は立っているのがやつとであろう？」

その通りだった。 銀華の鉄球を受けたダメージのこともあったが、この札を付けて戦うと更に体は悲鳴を上げていた。

この札は銀華の言ったとおり、適応者意外のものが使えばそれ相応に負担となってやってくる。

負担のレベルは一枚ならば全力でフルマラソンを走るほどの疲れ。

「これくらいどうってことねえよ。 それに、これしかあの女に通用する、手段がねえ」

リスクをもとに得られるものは黒羽の能力と互角に渡り合えるようになること。 これが突破口だ。

前みたく、霊刀のようなものがあれば良いが既に折られており、この捨て身の技しか残っていない。

「そうか・・・お前の体はボロボロか」

木原が笑った。 チャンスだと思ったのだろう。 もう一度構えてこちらへと迫ってくる。

「ババア、やっぱりあの女を足止めしてる。 アイツは俺が決着つけないきやならねえ・・・」

「ふん。 そうだろうな。 なら、手早く済ませておくれよ。 ワシはあの女を、別に倒してしまっても構わんのじゃろう？」

それは有名な死亡フラグだが、大丈夫だろうか。 気の利いたことを言う前に、銀華は黒羽へと突っ込んでいく。

テルは前を見た。

「さーて、殺る気で来いよ。 もとからそのつもりだったんだらうけどな・・・」

鉄パイプを構えて、駆け出す。

○

その戦いを見守っている一同がいた。ハヤテと伊澄であった。

「ハヤテさま・・・あなたの血を飲まさせてくれませんか」

「いきなりの提案ですね？」

伊澄の突然の提案にハヤテが戸惑う。よく見ると、伊澄の手は震えていた。

「私は、テル様や大叔母様が危ない目にあって取り返しがつかなくなる前に、後悔はしたくはないんです」

「でも・・・」

と伊澄の提案にハヤテが呟いた。

「テルさんのほうはもう少し、あのままで」

「どうしてですか？」

伊澄が聞いた。今すぐにでも力を取り戻して、そのまま二人を助け出したい。なぜそれが許されないか。

「テルさんは今、二人だけの戦いをしているんです。これだけは、邪魔してはいけないんです」

「・・・」

伊澄が少しだけ黙ると納得したのか、ため息をつく。

「よくわかりませんが、無粋・・・というわけですね。ですが、いざとなったらお願いします・・・もう誰かが傷付くのは見たくありませんから」

と決意の表れた表情でハヤテに言った。

○

木原は距離を詰める。テルは体を大きく開いて、懐に木原を呼び込みながら真横に鉄パイプを滑らせた。

だが片手を添えて起動をそらすだけで鉄パイプは空振りし、空いた脇腹に綺麗なボディブローが抉るように入る。

「くそっ」

モロに入ってしまったためか、胃袋のなかにあるものが全て吐き出されそうな気持ち悪さが押し寄せてきた。しかし、ここは勝負どころだ。ゲロを吐いている余裕はない。

「わかってんだよ。お前とのやり合い方は一番俺がよく知ってるだ。それも忘れちゃったかよ」

「ああ、忘れてるよ」

きっぱりとテルが木原に言った。迫る拳と足をなんとか鉄パイプを使い、逸らす。

だが全ては逸らしきれず、隙ができてしまう。距離をガンガンに詰めてくる木原の戦い方は長ものを利用したテルにとって、相性は最悪だった。

「八極拳ッ！」

体を低くし、テルの体の真ん中、丹田に肘を当てる。その瞬間、テルの体を衝撃が突き抜けた。

「かつ……!!」

木原の繰り出したのは単なる肘打ちではない、古来より気を使って相手の急所にその力を内部に流し込んで体内で爆発させる六大開頂肘。

一瞬で気を持ってかれる寸前で踏みとどまる。だがその間に足を払われて地面へと叩きつけられた。

その体の腹部に向かって、木原が踏み込んでくる。足を振り上げたのを見てそう理解したテルは体を捻って回避した。

「どうした？ 息が上がってるな。札の副作用ってやつが来たのか？ このままじゃ俺に殺されるぞ？」

木原が見たテルはさっきよりも息が上がっていた。体からは嫌な汗が出て、血の流れも激しい。

だが、テルは痛みを噛み殺して苦笑いを向ける。

「はあ、はあ……殺す、気もねえくせに……よお」
「あ？」

何を言っているのか。とテルを睨む。普段で怖い顔しているのに、更に顔が鬼のように歪んだ。

「きつきから感じねえんだよ……殺す気も、やる気も、覚悟も、何もかも……」

「……」

馬鹿な。と木原は思う。覚悟も、全て決めていた。それが他人から見たらなっていないというのか？

テルは口から溢れていた血を拭き取って言った。

「なんでそんなクソみたいな目してやがる」

テルの言葉に、木原は動きを止めた。テルは続ける。

「お前は……誰かに許して欲しかったんじやねえのか」

「ま、まさか」

「だったら、なんで明かした。お前は俺に、自分が俺の関係者であることをべらべらと」

そうだ。何も言わなければ、それで木原はただの三千院家を狙う悪党であるという事実のまま有り続けられたはずだ。

「お前は気づいて欲しかったんじやないのか？俺は……お前とダチか、バカやつてるような関係だったのかもしれない、勘だけだな」

テルは指さして言い放った。

「そんな男が、なんでだか助けて欲しいという目をしている。そんな時、俺はどうするか、俺のことを知っているお前は分かるかもしれないけど」

分かるとも。と、木原は心の中で答えた。

(お前はそういうのにはじつとしてられない男だよな)

「だが、俺には助けてもらう資格がない……ないんだ」

「バーカかテメエは」

テルが木原に怒鳴った。

「俺が許すと言ってもか？許すわけねえだろ。ここまでどんな苦労を重ねてきたと思ってるやがる。借金まで作っちゃまって、もう一生執事なんかやってなきやならねえんだぞ!!」

だから。と続けて。

「俺がお前を叩きのめして、助ける人間に値するっていう事を証明してやらア」

「無茶苦茶だ!」

尋常じゃない。自分を殺した相手を勝負で叩きのめしてそれでチャラにしようと言うのだ。

簡単にいえば、憂さ晴らしに近い。

「勝負しろオ!」

同時に駆け出す。テルはまっすぐに鉄パイプの突きを繰り出した。鋭い突きは同じ方法で躲され、木原は素手の手ではなく、鋼鉄の義手を突き出した。

爪先までとがれたその抜き手は腹部の皮膚を貫通し、中まで入り込む。テルの口から血が出た。

終わったか。と思つた木原だったが。

「目玉ひん剥いてよおしく見てやがれ」

テルの目は死んでいなかった。まさかの鉄パイプを投げ捨てて、右拳を作り出す。

「これが俺だあああああああ!!」

力任せに、フォームも糞もない、でたらめな力ませの右拳は木原の頬をえぐつた。

(んなあこたあ、知ってるよ)

激痛よりも、その心に響いた。

地面に倒れた木原は体を動かさそうにも動かせない。限界のようだった。

「許しやしねえよ。俺は根に持つタイプだからな……だけど、その事はハーゲンダッツ奢つたら許してやる……竜児」

「……お前、記憶が」

その名前は、忘れもしない当時の呼び方と同じだった。テルは笑つて答えた。

「お前のことだけはなんとか思い出した。あとはさっぱりだけだな……」

「そうか」

と、テルが膝をつく。かなり体力を消耗したようだった。

「俺の勝ちだ……竜児」

その言葉に木原は思い出す。昔、最初に出会った時の喧嘩で言われた言葉だったか。

「ああ、そして・・・俺の敗北だ」

満足したような表情で木原はそう言った。

「後できつちり聞かせてもらおうぞ・・・お前が今まで何してたか全部だ」

分かっている。と言おうとしたその時だった。

「小僧！突破された！」

遠くで銀華の声があった。突破された、という意味は。

驚異的なスピードで迫ってくる影がある。黒羽だった。

「チィッ！」

テルが応戦しようとするが、足が動かなかった。今までの疲労と一瞬の油断が隙を生み出してしまった。

(まづい・・・!!)

確実に、あの槍に突き刺される。と痛みを覚悟したテルだったが突然、体が押されるのを感じた。

後ろへ飛ばされて尻餅をつく。

「悪いな・・・色々と、バチが当たったみたいだ・・・うん、悪いことするんじゃないかなかったな畜生め」

声のする方向を見て、テルは目を疑った。だが現実だと認めざるを得ないだろう。

黒羽の槍が、木原の体を貫いているということ。

第77話 狂気と怒りの鉄パイプ

「ふっ……」

「……」

黒羽の突き刺さした槍が木原の体から引き抜かれた。力なく膝をついた木原は口から血を吐き出す。

「くそ……」

悔しそうに腹部を抑えて黒羽を睨む木原。完全に自業自得というやつか。

「テメエ、仲間じゃなかったのか!!」

テルが黒羽に叫ぶ。当然、返す意思も見せない黒羽は更に驚愕の行動を見せる。

あろうことか、再び木原に向けて槍を構えたのだ。

殺す気だ。目が語っている。コイツは一度決めつけたら機械のようにこなす。冷徹にだ。

「まさか……味方に裏切られるとはね……全部お見通しだったって訳かよ。俺がお前らをいつか裏切ることも」

痛みに顔を苦痛に歪める木原が苦笑い。目の前には構えた槍を突き出されて今まさに槍が迫ってきている。

だがトドメを刺そうとしたその瞬間。黒羽は殺気を感じた。とても雑な、それでいて明確な殺意を。

目の前にいたのは、さっきの男だった。だが、今はさきほどとは全く違って目は血走っている。ひたすらこちらを睨み殺すように見る男は、鉄パイプを振るった。

食らう。まともに。黒羽の体は遠くへと飛ばされた。まるで紙が軽く飛んでいくようにだ。

「……」

いつもなら避けられた筈だった。だが、なぜ避けなかったのか。違う。避けられなかったのだ。彼の、テルの纏った『何か』に蹴落されたのだ。

テルは追撃を試みる。走り、走り、徐々に距離を詰める。

だが黒羽もただ追撃を許すわけがない。右手から今度は大量の槍を作り出してテルへと放つ。

「おおおおおおお!!」

その大量の槍を前にテルは怯むことなく突っ込んだ。途中何度も槍が体をかすめる、だが致命傷を与える位置の槍は全て鉄パイプで防いでいた。

「……………」

このままでは押し切られる。黒羽は直感していた。この男の潜在能力を。以前から思っていた。この男の力は誰かの為という状況になったときに格段に強くなっている。

そこから計算するに、この今の物量では倒すことができないと感じていた。

そして黒羽が繰り出す次の一手。

まず、片手で槍はこのまま放出し続ける。もう片方の腕は一本だけ作り出して放出する。

だがこの一本は特別だ。先端はドリルのように尖らせて極限まで空気抵抗を減らし、速度を優先とさせた一本の槍。

狙いを定め、走る来るテルに向けて、放つ。

「……………!!」

無数の槍をたたき落としている中でテルは別の殺気を感じた。

この襲いかかる槍がまるで囷のような感覚がしたのだ。

(マズイッ！)

直感で危険だと悟ったテルだが、顔を逸らそうとした瞬間テルの顔面に何かが突き刺さる。一瞬だけグサツという効果音を残して、後に……………。

「がああああああ!!」

激痛。苦痛に体を地面へと激しく転んだ。立ち止まらなかつただけで良かった。結果、転がったことにより後から来た槍がテルに当たることはなかった。

もし立っていたらまたしても串刺しにされていただろう。

前回よりも穴が多いというおまけ付けでだ。

「テル様!?!」

転がった伊澄は叫んだ。しかし、状況がよくわからない。伊澄たちから見れば無数の槍が邪魔をしてテルに何が起きたかわからなかったからだ。

だがこれだけはわかる。かなり危険な状況なのだ。伊澄はハヤテの顔を見て言った。

「ハヤテさま! もう我慢できません! 血をお願いします!」
「分かりました!」

と了解したハヤテに伊澄が手を伸ばそうとしたときだった。
「きやつ!?!」

伊澄の体が後ろへと引つ張られた。訳が分からず伊澄は地面へと尻もちつく。

「そんな、伊澄さんにはあざといドジっ子属性はつかないと思っていたのに!」

「これは・・・一体何が・・・」
と身を起こそうとしたとき、自分のお腹の上に小さな物体が表れた。

『私は・・・この時を待ってたんだ・・・です!』
ニヤケた笑みを浮かべたチビハネだった。

『この前の借りを返してやるですよ! よくもやってくれましたです。ね覚悟しやがれヒヤツハー!!』

どこぞの世紀末モブキャラのような奇声を上げながらチビハネは起き上がろうとする伊澄の髪を下へ引つ張るこゝろ見えてチビハネは力持ちなのだ。

「くう・・・! 力がないと・・・こんなに!!」

『ヒヤツハー! これなら肩パット付けて髪もモヒカンにしたほうがもつと雰囲気出る気がするです! ヒヤツハー!!』

「伊澄さん・・・ツツ!?!」

ハヤテが伊澄の救出に向かおうとした瞬間、ハヤテは身を凍らせた。さつきまで向こうにいた黒羽が目の前まで迫ってきていたのだ。

「石を・・・もらう」

「がはっ！」

腹部に向けてグーパンチ、ハヤテは身をもつて知る。こんな自分よりも小さい少女からこんな破壊力ある拳が生まれるものか。

あのハヤテでさえ腹部を抱えて体を前に倒れ込む。その拍子にいつも身に付けているペンダントらしきものが溢れ出た。

「……………」

それに目が行ったのか、黒羽がすかさずそのペンダントを拾い上げる。

「し、しまった・・・!!」

「……………」

拾い上げた石のペンダントを見つめる黒羽。その石はまるでどこかのジ〇リ作品に出てくる石のような形をしている。

「……………」

ペンダントを握ったまま、黒羽は槍を取り出してハヤテたちへと向けた。

「これで……………」

冷やかな視線を向ける黒羽にごくりと生唾を飲んで覚悟をハヤテたちは決める。

だが槍がこちらに迫る前に。

「オイ……………無視してんじゃねえぞ」

声のする方向に振り返ると、狂気の顔を浮かべながら鉄パイプを振りかぶったテルが目の前にいた。

本能で悟つたのだろう。槍を構えて防御の姿勢を取るが、力強いそのひと振りはその槍の防御をもともせず枝のようにへし折る。

一瞬のことであつたがために、黒羽は次の動作に移れない。テルはここぞとばかりに追撃を試みた。

槍をへし折った動きに続いて体を沈ませて鉄パイプを逆手に持ち変える。そして、相手の足元から鉄パイプを滑らせて振り抜く。

地面を巻き込んだその一撃は惜しくも両腕に素早く展開された剣により防がれたが防御に使われた剣は粉々に破壊され、黒羽は吹き飛

ばされる。

吹き飛ばされた際に落ちたハヤテのペンダントをテルが拾う。

「はあ、はあ・・・これはなんだか知らねえけどよオ、アイツの大事なもののなんだよ。パクるなんて趣味が悪いぞコラ」

「テル様、血が・・・」

伊澄が心配したような表情でこちらを見る。テルの顔からは血が垂れていた。目の部分から血が流れている。

「心配するなよ。目の上の部分が切れただけだから」

と片目を瞑って笑顔で答えてみせた。伊澄もそれを聞いてかホッと安心する。

「石を・・・よこせ」

直後、黒羽が再び二本の槍を構えて襲ってきた。

降りおろされた槍を真正面からテルは受け止める。

「随分この石にご執着じゃねえか。さてはお前は石マニアか？」

と、テルが笑っている。今度は左手に持っていた短槍が水平になぎ払われる。

当たる前に・・・とテルが下がって距離を取るが。

「ん・・・？」

胸を一文に切り裂き、テルの血飛沫が舞った。

「おかしいな。よけたと思ったのにな」

続けて黒羽が長槍を一直線に突き出す。

「このやろツ!!」

突き出された槍を打ち払おうとしたのだが・・・。

「あら？」

テルのひと振りや槍に当たらず、空振りする結果に終わる。

そのため、槍がテルの肩に思いつき突き刺さった。

「・・・いつてエエエ!!」

(テルさん・・・さつきから様子が・・・)

二人の戦いを見てハヤテはテルの異変にすぐ気づいていた。さきほどからテルは避けれそうな攻撃にあたり、当てれそうな攻撃

を当てられずにいる。

たしかこういう変化が訪れたのは、一度テルが声を上げて転がった時だ。

あの槍を弾いている時に、何かが起こったのだ。

ハヤテは目を凝らしてテルの顔を見る。そして気づいた。その顔に理由があった。

テルの左目の血は止まっている。テル自身がぬぐったのなら、テルは多少なりとも目を開けられるはずだ。

なのに、未だに目を開けないでいる。よく見るとまぶたの部分には傷がない。

(距離感が掴めていない・・・まさか、テルさんはさっきの攻撃で・・・) 全てを理解したときにハヤテは地面にテルが転がるのを見た。

「て、テルさん!!」

鉄パイプを杖代わりにしてテルが体を揺らしながら起き上がる。かなりキツそうだ。

(やっぱりハヤテには気づかれたか・・・だけど、片目になろうが何になろうが・・・)

両目を閉じて深呼吸。落ち着かせて神経を研ぎ澄ませる。

(次は・・・当てる)

懐から、更に札を二枚取り出した。それを鉄パイプに貼り付けていくのを伊澄が見て目の色を変える。

「テル様！　これ以上体に負担をかけるような事をすれば・・・!!」

本来、一枚でもかなりの負担を課す鷲ノ宮の札を三枚も貼ってしまったら一体どうなってしまうのか。

破壊力は言わずとも上がる。だが、それに見合うリスクはあまりにも高い。

だが、そんな悠長なこと言ってもらえないのだ。今、目の前にいる相手はそれほど相手なのだ。

テルにとっても最後の攻撃。

そして、相手の黒羽にとっても最後の攻撃になる。

先程のダメージが重なっているのか、両腕からは火花を放ってい

た。それでも表情を変えない黒羽だが次に作り出した武器を見て、
そう判断せざるを得ないだろう。

「……………」

作り出したのは黒いドリル。デカイ。2、3メートルはあるか
もしれない巨大なドリルが機械音と共に回転を始めた。

空気が震えて、テルの背筋に今までとは比べ物にならないほどの威
圧感。

「勝負」

お互いが静かに呟いて、地面を蹴った。速度を上げて、距離が近
くなるにつれてお互いが武器を突き出す。

次の瞬間、激突。

激しい火花と共に二つの獲物が互いを削り合う。

「お、おおおおお!!」

三枚の札を使っていたテルでも黒羽のドリルはこれほどまでの気
迫と攻撃力を兼ね備えていた。

だが、テルには引けない理由があった。

(ここで負けられるかよ……こいつ自身仲間である竜児を、俺のダ
チを殺そうとしたこいつを……)

押される体を足を踏んで留まる。ドリルの進行に止まった黒羽
が向こうにみるテルの姿。こちらを睨み、片目を失いながらも戦意
を失わないその姿。

「許せるかアアアアアア!!」

全身が震える。激痛だ。心臓が、脳が、四肢が、五感が狂って
しまいそうになるくらいに悲鳴を上げる。

それでも無理を通してでもやらなければならない。仲間のため、
友のため、そして、自分の為にも。

だが、ここで不測の事態が発生する。削り合っていた二つの獲物が
一つの輝きを生み出したのだ。

「うわっ!」

それは遠巻きに見ていたハヤテたちでさえ目を瞑ってしまうほどだった。

「こ、これは・・・一体・・・」

光が全身を包んでいく。この体までもが輝き、体も別の場所へと運ばれていくような感覚。

「・・・え?」

やがて光が収まるとハヤテは目を見開いて絶句していた。

「テルさん・・・?」

何故なら、そこには激闘を繰り広げていたテルも黒羽も存在していなかったからだ。

第78話 その涙は誰のために流すのか

ハヤテたちが困惑している頃にテルたちは。

「な、なんだここ・・・」

目を開けた時にテルの目に飛び込んできた光景は信じがたい光景だった。

「花畑・・・か？」

さつきまでいたところは下田という場所で、少なくともこんな花があふれた場所はない。

何故か夜だったのも夕方に変わっており、その夕日によって照らされた花がまるで黄金の輝きを放っているように美しい。

そしてテルが遠くを見ると、西洋の城らしきものがあった。片目であり識別が難しいが不自然な崖の先にぼつんと立っているのがわかる。

「あ、ありのままに起こったことを話すぜ！ 俺は戦っていて突然光に包まれたと思ったら次の瞬間には見知らぬ花畑にいた！ 何を言っているかわからねーが、次元転移とか転生したとかそんなモンじゃねえ、もつと恐ろしい地獄の片鱗なるモノを味わったぜ!! ネズミの国ではないのは確かだけだな！」

こんなことすれば即にも外国のネズミの王様がお怒りになってやってきそうだ。

冗談を言っている場合ではないが、この突然連れ込まれたかのような状況でテルは先程まで張り詰めていた緊張が解れてきていた。

「あの女は・・・？」

と、先程までテルと戦っていた黒羽の事を思い出す。 ヤツもここに来ているのか。

探そうとしたテルだったが時間は掛からなかった。何故なら自分の4, 5メートルの後ろにその少女、黒羽はいたからだ。

「・・・」

「おい、勝負の途中だけど、ここはどこだよ？ 新手のネズミの世界か？」

テルの問いに、黒羽はただ突っ立っている状態だった。先程まで鬼神の如き戦いを繰り広げていた人物とは思えないほど戦意も、殺気も感じられない。

まるで普通の人間のようにだった。

「……なんとか言ったら——」

無言の雰囲気には耐えられなかったテルが思わずセリフを切ったのはその黒羽の表情を見たからだだった。

泣いていた。

「……」

いや、正確には無表情の顔でその瞳から涙を流していた。叫んだり、嗚咽を含めた「泣く」というモノではない。

「……見つけたよ。見つけたよお父さん」

涙を流しながら両手を広げて黒羽は一人つぶやく。

「これで、あの人も……」

そう言葉を終えたときに、テルたちはまたしても光に包まれた。

同じ感覚だ。体が光になって意識も体も全てが飲み込まれる。

「……なんなんだよ一体……」

一瞬だった。目を閉じて、開いたら、見慣れた日本庭園が飛び込んできた。

最初は東京の伊澄の自宅に戻ったのかと思ったが伊澄やハヤテ、そして木原がいるのを見てここが下田なのだということに気付いた。

「て、テルさん！　なんで急に目の前に!?!　どこに行ってたんですか!?!　そんなことより大丈夫ですか!?!」

ハヤテがこちらの存在に気づいて泡を食っている。いきなり自

分がここに現れてありえないといった表情だ。

「取り敢えず落ち着けハヤテ・・・一体なにがどうなってるんだ？」

「それはこっちのセリフですよ。急に消えたと思ったら、いつのまにか目の前に現れたんですから!!」

その言葉を聞いてテルはハヤテに一つの質問をした。

「俺は・・・どれくらいお前らの前から居なくなっていた？」

ハヤテが首をかしげて、答えた。

「大体2、30秒位だったと思いますけど・・・？」

ハヤテの答えに、テルは考える。確か自分が飛ばされた場所にいる時の時間は大体5分位だったはずだ。

明らかかなこの時間差。自分が行ったあの場所とこの場所では時間の流れが違うとでも言うのか。

「いや、でもなあ・・・流石にこの歳でアリスみたいなワンダーランドの中に入ったとしてもなあ」

顎に手を当てて考える。そういったファンタジー体験はもっと幼い頃に体験しておきたかった。

「そんなことより、テル様。あの女の方はどこに？」

伊澄に聞かれてテルは思い出したかのように辺りを見渡した。少し離れたところに黒羽が一人立っていた。

『マスター!!』

いつの間にか伊澄の元を離れていたチビハネがすぐさま黒羽の肩にぴよんと飛び乗った。

「・・・・・・・・」

その表情からはあの場所で流していた涙はもうない。いつもの無表情で冷徹な黒羽に戻っていた。

ダメージが激しいのだろう。火花が腕にとどまらず体の隅々に渡って発生していた。

「テルさま！　今が好機です！」

伊澄が叫ぶ。この弱っているというのが今の伊澄にはわかるのだろう。確かにこれが最大のチャンスだ。ぶっちゃけた話、ここにいる全員でかかれれば今の黒羽には勝てる確率が高い。

伊澄も力を取り戻せば、この場で決着を付けることが出来るのだが。

「よせ伊澄。アイツはもう限界だ・・・能力を使う余力が全然残っていないねえよ」

「ま、また貴方は！ 目の前に敵がいるのに!!」

「だからって手負いの状態で狙うっていう行為は、好きじゃねえ。

それになあ、こっちも・・・限界だ」

途切れ途切れになりながらも言葉を終えたテルはその場に膝を着いた。

「やっぱ、これ・・・キツいなあ。アレえ？ ハヤテくん？ いつから三人になったんだ？」

「あ、ヤバイですよ。テルさんなんか幻覚見えちゃってますよ！」
「・・・」

その光景を遠くで見ていた黒羽は翼を広げて空へと飛んでいった。
(あの人は・・・私が必ず!!)

去っていく黒羽を終始睨みつける伊澄は握りこぶしを密かに握っていた。果たして、また力をぶつける時はあるのだろうか。

だが、その心配をするよりも目の前の重傷な人物がいる。まずはこちらからだ。

「テル様！ 治療を始めますから少しお待ちを——」

言葉を言い切ろうとした時、地面が震えるのを一同は感じた。

「な、なんだ？」

「ねえ！ その人たち！」

地震が始まったのと同じ時、テルの上空から何かが降りてきた。突如表れたその人物に一同は身を構える。

「誰だお前は、ネズミみたいなみみしやがって！ アレか!? デイ○ニーマニアかコラー！」

「ち、違うよ！ マヤはそんな権利関係で訴えられるような格好してないよ!!」

「うるせえ！ シルエットで見たらお前は どう見てもミツ——」

「ああもうっ!! テルさん話をややこしくしないでくださいよ!!」
ハヤテが割って入ってその場を収める。

「それで君は?」

「あ! そうだった! 僕のことより、ナギが!」

「お嬢様が!?!」

ナギの名前を出されてハヤテが反応する。 たしか、ナギは木原達
が現れてから捕まってどこかに隠されたはずだ。

すると、突然上空へと上昇していく物体が現れた。 あのUFO
だ。 鷺ノ宮の温泉の客引きにもなっていたあのUFOだ。

「な、なんでオブジェが浮いてるんだ?」

「あ、アレにはナギが乗ってるんだ!!」

マヤの言葉に、一同が驚愕する。 あの宇宙船にまさかナギが乗っ
ているとは信じられなかった。

「ほ、本当だ・・・」

と、後ろで傷を抑えていた木原が起き上がる。

「おい竜児、無理すんな。 お前重傷なんだからよ」

テルの言葉に軽く笑って見せると木原はそのまま続ける。

「もう一人の組織の一員があのお嬢様をあの建造物に隠したんだ。

だがまさか・・・あのUFOが本物だったとはな」

と、今度はマヤが慌て出した。

「うわわわどうしよう! マヤの羽じゃあそこまで飛べないし、あの
まま飛んだら飛行船が亜高速飛行に突入して、二度とナギは地球に戻
ることが出来なくなる!!」

「え?」

マヤの言葉に、ハヤテの顔から血の気が失せた。 ハヤテがマヤの
肩をつかむ。

「ちよつと君! 今の話・・・本当なの!?!」

肩をつかまれ揺らされるマヤはハヤテの問いに答える。

「うい。 動いた理由は分からないけど自動操縦だから宇宙船は亜高
速飛行に入ればウラシマエフェクトで時間の流れるスピードが変わ
るから・・・宇宙船の一日は地球での数年分に相当する」

その言葉を聞いて、ハヤテはマヤの肩をつかんでいた手を離した。

「そんな……なんの冗談だよそれ、いきなりそんな話を信じるだなんて……」

だが執事としての本能が告げていた。このままでは二度と、ナギには会えない気がする。

「このままお嬢様が居なくなるなんて事があってたまるか!! 何か、何か手はないんですか!?!」

「そ、それは……」

「どんな危険なことでもするから!! 僕の命くらいなら、いくらでもあげるから!! 大事な人なんです!! 失うわけにはいかない人なんです!!」

ハヤテは叫んでいた。それでこそ、願いが叶うならば自分の命を投げ捨てる覚悟であった。目が語っている。

その意思は本物だ。

「つたく、お前はアイツのことになるとホント取り乱すよな」

テルがため息を付いて、震えながら立ち上がる。続けてマヤの瞳を見た。

「こいつの命がなくなることはアイツにとって死ぬことと同じだ。

だから、使つてなくなる命は俺にしろ」

「ちよ、ちよつと待ってよ! マヤはそんな術とか知らないよ!」

二人の真剣な顔に、マヤが手を振った。確かに、マヤも宇宙人であつても、その技術はほとんどが宇宙船の機能のことであり、自分が持っている力なんて羽を広げて飛ぶくらいのだ。

「くそ! どうすりゃいいんだよ……」

「……」

悔しげに拳を握るテルを見て、伊澄は思った。

（他人であつても、自分が出来ることがあるならば自分の身の危険を顧みず手を差しのべる。貴方はそういう人ですね……例えそれが敵であつても）

伊澄が何かを決めたように顔を上げると、ナギの救出方法を考えて

いるハヤテのもとに近寄る。

「ハヤテ様……」

と、一度声をかけてハヤテがこちらを向いた。ハヤテが思わず反応して振り返ると、ハヤテの頬に伊澄の指がチョンと触れていた。流れていたハヤテの血を指に当てて、その指を口に添える。

そう、伊澄はハヤテの血を飲んだ。伊澄の体が青白く輝き出す。「ハヤテ様はナギのヒーローです。どんな所にいても、ナギのピンチに駆けつけるのがハヤテ様の役目です」

「伊澄……お前」

「テル様も、一応三千院家の執事なんですから。ハヤテ様と一緒にナギを助けるサブヒーローです……」

「俺、サブなんだ……」

とテルがふっと笑った瞬間、伊澄の手が輝き出した。

「だから私がお二人をナギの元へ送って差し上げます」

どん。と、煙と共に何かが現れた。

「こ、これは……」

テルがその何かの正体を知った瞬間、テルは目を丸くした。

「バイク……?」

ハヤテも頭にクエスチョンマークを浮かべる。なぜ疑問形なのかというと、そのバイクはなぜか発射台のような機械の上に垂直に設置させられていたからだ。

「オイイイイイ!!! これどう見てもフォーゼじゃねえーか!! いつから俺は仮面ライダーになったんだアアア!!」

「安全な方法はこれかと……もしそれで我慢できないならこちらの方が」

と、伊澄が後ろを指さすところかで見たとのことのあるグラサンをかけた男がバットを振っていた。

「ヘイ、オニイサンイマナラチョウキョリワープ、フランスパン一本でイイヨ」

「なんでワタルンここに居るんだア——!!!」

二人が同時に突っ込んだ。皆さんお忘れかもしれませんが、あのマラソン大会のワタルンです。

「なんでお前がワープ機能やってんだよ!! お前もう出ないはずだったろうが!!」

「しかもワープ一回フランスパン一本とか! どんだけフランスパン好きなんですか!?!」

「この人、一応鷲ノ宮家で使い魔やってますら・・・」

「短期バイト、ヨロシク」

ブン、とバットを振るうとそこにあつた大岩に直撃して、ワタルンの二倍はあるだろう大岩が木っ端微塵に吹っ飛ぶ。

「・・・」

パラパラと飛び散る破片が頭にあたりながら、その光景を見てハヤテが呟いた。

「テルさん・・・もうこれしか」

「無理無理無理!! 絶対無理!! ライダースーツもねえのにどうやって宇宙に行くの!?! 生身で宇宙に行ったらオレら破裂すんだぞ!?!」

知らねえのかよ!!」

確か、そうなるはずです。

「そこらへんはノリでなんとかしてください」

「無茶だろ・・・伊澄、嘘だと言ってよ伊澄」

と伊澄までもが投げやりな状態。そして、強制的にワタルンによりバイクに二人は乗せられた。

「なあハヤテ・・・」

「なんですかテルさん」

「点火しまーす」

伊澄がのんきな声を発すると、バイクの後ろに付いていたロケットの噴出校らしき部分から煙が吹き始めた。

「もう少し、ワープ的な物を期待してたんだけど・・・」

「もう、どこからツツコンでいったらいいか分かりません」

哀れ、絶望の表情を浮かべてテルたちは空へと向かっていった。

二人の命の輝きが、今銀河の歴史に、新たなページを刻む。

「いや、別に死んでないので次回も続きます」

「ジカイモヨロシク、OK?」

残った伊澄、ワタルンは親指を立てて言うのだった。

第79話 く気付けば大切なものばかりく

宇宙。無限のコズミックエナジーを秘めた神秘の世界。そこは空気がなく、光がない。

その世界は謎に包まれていることが多い。どこまでが終わりなのか、どこからが始まりなのかすら分かっていないのだ。

科学的に解明されている宇宙の謎は、今書いていたらキリがないだろう。

その暗黒の世界にひとりの少女が居た。

「ほ、ほんとに来ちゃったよ・・・宇宙」

宇宙船に隠されたナギが、目を覚ますと目の前には人がいた。その人物がドアを閉めたのを堺に宇宙船が動き出したのだ。

「あの時の人は一体誰だったのだ？ そんなことよりも・・・だ」

宇宙船の窓から見えるのは自分が生まれた星、地球。初めて宇宙に來たナギにとってこの経験は貴重なものだった。

だがしかし、ひとつ忘れていたことがあった。

「私（ここ）（宇宙）において、ハヤテが地球にいるのか・・・」

来る前に、ハヤテとナギは喧嘩したばかりだった。テルとハヤテの腐った光景（断じてそんなことはない）を目撃してしまったばかりか、それに対するハヤテの理由に絶望して飛び出してきたのだ。

「うう・・・私は、とんでもない過ちをしてしまった・・・ハヤテエ」

窓に手を置いてその名前を呼ぶ。だが、助けは来ない。その約束の名前を呼んでも暗黒の宇宙に吸い込まれていくように消えていくだけだ。

「頼む・・・喧嘩して会えなくなるなんて・・・そんなの母だけで十分なのだ・・・だから」

涙を流しながら崩れ落ちる。もう、自分のわがままで誰かを失うという後悔だけは絶対にしたくない。

「だから・・・頼む、ハヤテ——！！」

「お呼びになられましたか・・・お嬢様」

不意に、後ろから声がした。今ナギがすぐに会いたくて、謝りた

くもある人物である。

「は、ハヤ——」

ナギがその名前をもう一度言おうとする前に、ハヤテがナギを抱きしめた。

「ふ、ふえ?」

力強く、抱きしめられているその腕は言わずとも語っていた。もう二度と離さない。

「このまま・・・もう二度と会えなくなるのではないかと、本当に心配しました」

「いや、あのちよつと!! 分かったからハヤテ!! 苦しいよ!!」

ナギの頬がだんだん赤くなっていく。ここまで情熱的に抱き締められたらそりやもう沸騰するしかないだろう。

「あー、なんか俺来ない方がよかったかもな」

「て、テル!? お前も来てたのか!」

後ろからゆつくりと現れたテルにナギが気付いた。

「ていうか、お前らどこから来た!」

ナギが真剣な目で聞くが二人は揃って返す。

「バイクで」

「はあ!」

まるで某チャンネルに出てきそうな表情のナギ。テルが頭を掻きながら続ける。

「あんまり色々聞くんじゃねえよ。バイクでどうやって入ったんですか? とか、お前ら免許持っていないだろ、とか。そんな大人の事情だつーの、大人の事情」

「いや、どう考えてもネタに詰まったご都合主義展開だろ」

一体どうやってこの二人が宇宙に来たのかナギには皆目見当がつかない。テルやハヤテもこの理由を簡単に話すことはないだろう。話されたら伊澄が困るのだから。

「ま、うちのお嬢様も無事に確保出来たことで、せっかく宇宙にいるんだからここでしか出来ないネタでもやっておこうぜ」

「そうですね。人生で宇宙に来れるなんて貴重な体験ですから・・・」

「何をするのか大体分かってきたが・・・これ、原作の雰囲気ぶち壊してるよな」

ナギがジト目で突っ込みながらやれやれといった表情で応じる。

三人は横一列に並び、両手を目一杯上へと広げて叫んだ。

「宇宙キタ

—— ツツ!!」

第79話く気づけば大切なものばかりく

「ネタをするのもこれくらいにして、操縦室へと行きましょう。多分、急に宇宙船が動いた原因が分かるはずですよ」

「もしガチで宇宙人とかだったらヤベエな。俺、サインの準備をしておいてもいいか?」

「のんきな奴らだなお前ら。もしかしたら宇宙を侵略してきた別の生命体の仕業かもしれないのだぞ?」

三人は船内の通路を走っていた。この場所には船内の地図のようなもの存在していないようで、現在は行き当たりばったりに探している状態だ。

「それよりもテル。お前、目なんか片目瞑って・・・どうかしたか?」

ナギが先程から片目をつぶっているテルに聞いてきた。

「ああ? なんでもねえよ。ただ片目しているのがウインクを常にし続けているという理由じゃないのは確かだ」

「うわ、ちよつと引くわ・・・」

ナギが顔を引き攣らせる。心の底から引いているようだった。

「ハヤテ、こいつ宇宙空間に放り投げてきてもいい? 俺もう限界だわ、助けに来るんじゃないか?」

走りながらナギの頭を驚掴みするテルにハヤテが慌てて制止させる。

「や、やめましようよテルさん! ほら、操縦室らしき場所がなんか見えてきましたよ!」

ハヤテ達が走る通路の奥にはひととき大きな部屋が見えた。その部屋の前にたどり着くと自動でドアが横に移動して一同は中に入ると。今回、宇宙船が勝手に動き出した元凶がいた。

「うおおおおお!! 飛んだぞ——!!」

声だけで分かった。例え後ろ姿であろうとこの快活な声の持ち主が桂 雪路であることに気づくのは簡単だった。

「桂先生イー! なんでここに居るんですかー!! 今は仕事で東京の方にいたんじゃない?」

ハヤテが雪路を揺さぶりながら聞く。すると、ハヤテの足元に何か当たった。

「・・・酒?」

テルが缶を一つ拾い上げて中の臭いを嗅ぐと、アルコールの臭いが鼻をつついた。

「ねえ! これ凄くない!? これ飛んだよ!? イー○だよ! イー○!! ホントびっくりだよ!!」

「「ビツクリしてるのはこっちだアアア!!」」

三人が声を上げて雪路にツツコンだ。

「ということは、宇宙船を動かしたのは先生なんですか?」

「うーん? そうよお、さつきから言ってるじゃない」

つまり、この雪路が宇宙船を動かしたということになる。雪路は

酒が入って口調が可笑しくしながら続ける。

「いやあ、あの生徒会三人組の赤点補習で休日出勤の仕事をサボって下田に来たけど、まさかこんな所で酒を飲みながら宇宙旅行に行けるなんて最高だわあ!!」

この雪路の発言にテル達が眉間にシワを寄せる。この女教師は、

休日出勤の職場を放棄して、あまつさえ酒を飲んで飲酒運転までやらかしているのだ。

「あらどうしたの三人とも、目が怖いけど?」

テルたちの怒りに漸く気づいたか、雪路が口調を改める。三人は

口調を揃えて

「「燃え上がれ僕・(私)の小宇宙(コスモ) オ——!!」」

「ペ○サスファンタジイイイイイイ!!」

三人同時のアップパーに倒れる雪路。この女が居る時は大抵ろくなことに巻き込まれるなど、改めて思い知らされるテル達だった。

「なあ、一体どうやって地球に戻るんだ？」

「はっ!! そうでした!!」

ナギの言葉にハヤテが遅くながらも気づく。なにせ、この宇宙船を動かした雪路は自分たちが盛大に殴って気絶させてしまったのだ。

「やばいよやばいよ。誰かアス○ロスイ○チのパラシュートのヤツ持ってこい!!」

「大気圏突入の問題はどう解決するんですか!？」

「無駄な抵抗はもう止めよう! ここで大人しく宇宙の藻屑となるんだ!! なあハヤテ? お前はどこに落ちたい!？」

「お嬢様! 諦めないでくださいよ!!」

操縦方法が分からない一回はパニック状態。ナギでさえこの状況に諦めをつけてしまう始末だ。

すると、テル達が通ってきた扉が開いて誰かが入ってきた。

「ういゝ、やっと追いついたよ」

「あ、変なガキ」

「ま、マヤではないか!!」

操縦室に入ってきたのはマヤだった。マヤはナギを見つけるやすぐさまナギに抱きつく。

「ごめんナギ、マヤ、ナギ助けようとしたけど・あの二人、すごく怖くて・隠れてた」

マヤはナギが攫われていくところを見ている。近くにいたのだから当然だ。だが、木原や黒羽に恐怖して、助けることができなかったのだ。

そのマヤにナギが笑ってマヤの頭を撫でる。

「いや、謝るな。そもそも、私がもう少し冷静だったらこんなことにはならなかっただろうしな・・・」

「ありがとう・・・ナギはやっぱ優しい子だよ」

ナギに許されたことによりマヤの顔に笑顔が戻った。抱きついていたナギから離れる。

「でもキミ、どうやってここに？」

ハヤテの質問を聞いてマヤが嫌なことを思い出したように顔色を変える。

「・・・察してよ」

と一言。多分、テル達と同じでバイクで飛んできたのだろう。

実際、あの移動の仕方、かなり体に来る。

ここに来るまでに体が茹で上がるかもしれないくらいまでに体温が上昇した。あの熱さはもう大抵味わいたくはない。

あの温度では宇宙人であるマヤも嫌になったのだろう。

「まあ取り敢えず、あとは任せてよ」

「え？ お前操縦できんの？」

ゆっくりと翼を動かして浮いたマヤがコックピットに座ると胸を張って「もちろん」と頷く。

「でも、ナギもほかの二人も無事でよかった。これでマヤも安心していけるよ・・・」

「なんだよ？ まるでもう会えないみたいな言い方じゃねえか」

マヤの言葉に、テルが違和感を覚える。まるでマヤの言葉がもうこの先会うことのできない、最後の言葉のような気がしたのだ。ゆっくりと顔だけをこちらに振り向かせたマヤはニコリと笑うと最後に一言。

「ありがとう」

その一言を告げた瞬間。何かが割れる音がした。まるでガラ

スが割るような音。

光が辺りを包んで何もかもが見えなくなる。ハヤテも、ナギも、雪路も、テルも自分の体すら認識できなくなるくらいに。

○

「ハハ・・・は？」

目を開くと、テルの視界は真っ白な空間があった。

どこを見ても白。 上を見ても白。 下を見ても白。

「テルさん!!」

「ハヤテ! 無事だったか!? なんなんだよここは……」

「分かりません。 あの後、目を開いたらここに……」

後ろからハヤテが居たという事に気付いたテル。 次々と起こる異常な事態にハヤテも困惑気味だ。

だが、その時だ。

——呼べば本当にどんな所にも、来てくれるのね。

何もない、白の空間から声がした。

「へ?」

「おいハヤテ、今……」

それは、聞き覚えのない声が囁いた気がした。

——あの子はわがままで自分勝手に、そのくせ淋しがり屋で泣き虫だけど……

優しそうな声が、どんどん近くなる。 それが後ろだということに気付いた二人は同時に振り返ると、そこにはひとりの女性が立っていた。

——私はもう、見守ることしか出来ないから……

亜麻色の髪、紫のストールを羽織ったその女性の面影が二人の脳裏にある人物を思い浮かばせる。

「……ナギ?」

「お嬢様……?」

そうだ。 あのナギが、大人になった三千院 ナギが笑った気がした。

「ナギの事、よろしくお願いね」

女性はその言葉を二人に告げると笑顔を残して消えていった。

「今の人……もしかしてナギの……って、アレ? ハヤテ?」

テルが横を向くと、さつきまで隣にいたハヤテの姿が無くなっていった。白しかないこの空間では隠れる場所なんてどこにもない。つまり、考えられることはハヤテがこの空間から消えたたということだ。

「放置なんて酷すぎるぜ・・・俺に恨みであんのかあの野郎・・・」

頭を掻きながらむしゃくしゃする気持ちを抑える。ふう、と息をついた。だが、一つだけ分かったことがある。この空間は誰かが何かを伝える為に作られた空間だ。

先程の女性はハヤテに伝えることを伝えていた。結果、女性も消えて、ハヤテも消えた。

つまり、自分が残ったということは、まだ何かがあるということだ。・・・その伝えるべき思いが相手に伝わらない限り、俺は元の場所に戻れないってわけか……。

——その通り！

「え・・・?」

また、声がした。今度は、聞いたことのある、懐かしい声だ。

直感的に振り返ると、テルの視線の先にはひとりの女性。

「そこに気付くとは、アンタの成長ぶりが久しぶりに見れて私は嬉しいよ」

肩くらいまで伸びた白い髪が揺れた。目を見開き、覚えのある姿にテルの視線は目の前の女性に奪われていた。

「あ……」

「ん？　もしかして、記憶喪失？　もう、冗談やめなよー　テル」

冗談ではない。と、テルは心の中でつぶやく。声は覚えているのだ。この声の人物に、何度助けられてきたことか。

だが、肝心のテルの記憶は混乱していた。

「え？　まさか、マジなの？」

「……」

再度質問されてテルが黙り込んだのを見ると、女性は少し口を開けて沈黙した。

だが、それも数秒。　女性はゆっくりとこちらへ歩み寄ってテルの肩を掴んだ。

「ちよつと……歯ア食いしばれエエエエエエエ!!!」

ゴリツ。

鈍器に直接殴られたかのような衝撃にテルの体が大きく後ろへ飛んだ。

だが、倒れ込んだ拍子にテルの頭に頭痛となって流れてくる光景があった。

——　——　アンタの名前はね……テルよ。

それは自分がまだ幼子だった頃の光景。

——　——　ほら！　腰が入ってなきや強い一撃作れないよ!!

それは古びた門下生のいない道場で。

——　——　あの子はあの子で、アンタはアンタ。　誰もそれを否定す

ることはできないし、する権利もない。

殴り合った相手の子との仲介に入ったあの路上で。

——　——　アンタ達の母親で……私、本当に良かった。

涙を流しながらそう言った布団の上で。

「思い出せるまでぶん殴るよ。次はどこを殴って欲しい？ 腹部？ 頭部？ 喉？」

大の字に倒れていたテルを胸ぐらつかんで引っ張り上げると右拳を構える。

そうだ。 思い出した。 なんで忘れていたのだろう。

決して忘れてはいけな人だったのに。

「お、思い——」

ゴキン。

テルが言うより早く、女性の右拳がテルの顔を抉った。 女性は鼻血とともに飛ばされていったのを見たあとで。

「……あちゃく」

バツが悪そうに苦笑いするのだった。

彼女の名前は、神崎（かんぎき） 百合子（ゆりこ）。

テルに剣術を教え込んだ人物でもあり、テルの母親とも呼ぶべき人物でもある。

第80話くあの日々を覚えてるく

「いや、あの、忘れてて・・・スンマセンデシタ」

白い空間にて、テルはひとりの女性の目の前で正座させられていた。

顔は酷く腫れ上がって、鼻からは血が流れている。

「誤って済むなら本当に警察なんてこの世には必要ないの。罪を犯した人間には罰を・・・それでも言うことを聞こうとしない人間には罰以上の苦しみを・・・」

「人の話を聞かないで殴っておきながらよく言うぜ先生」

「なんか言ったか？」

「イイエ、ナニモ」

殺気こもったその睨みに、テルが体を硬直させる。昔からだ。

この人物には逆立ちしても、どんなに高いところに立っても勝てる気がしない。

「でも、本当にあんまり変わっていないのね？」

「まあ・・・」

百合子がふーんとテルの体を見る。気になったのだろうか。

肩なり腕なり急に触り出してくる。

「スンマセン先生、セクハラは止めてくれ」

「誰がセクハラか！ 弟子でもあり、息子の成長を喜ばない師匠がどこにいるんだ!!」

「十代後半の男子に行うスキンシップじゃねえことくらい分かってんだろうがアアア!!」

「酷い！ でもこれが本格的反抗期なのね!! ちょっと新鮮だわ!!」

「なんでそう捉えるんだよオオオ!!」

何故か涙目を浮かかべる百合子に、テルが頭を抱える。

「あら？ その目・・・」

百合子がテルの顔を見て気づいたか、テルが目を手で隠す。

「これは・・・名譽の負傷だ」

「また誰かのことで首突っ込んで痛い目見たって感じね？ そちらへ

んも変わってないわ」

呆れながらも笑顔を向ける百合子の顔をテルは直視しない。だが百合子は続けた。

「私がいなくなったらあとで竜児ともちゃんと仲良くやってた？ あんた達暇さえあれば喧嘩するから気になってたのよ？」

「アイツとはまた殴り合った。俺が勝ったぞ」

「自惚れるなこの馬鹿者め!!」

百合子はそう言ってテルの頭を引っぱたく。強力すぎる故か、テル体が地面へと叩きつけられる。

「殺す気か!？」

「あ、ごめん。ツツコミのつもりでやったんだけど」

「こんな調子で突っ込まれてたら命がいくつあっても足りねえよ!!」

テルが必死に訴える。が、百合子はまるでいつもの事のように笑ってごまかしていた。

そう、いつもの事だったのだ。

剣術に一日中明け暮れて。

力加減が下手な百合子のツツコミに体を痛めたり、それが原因で喧嘩したりした。

「忘れちゃいけないことだったのに、なんで簡単に忘れていたんだか・・・」

その楽しかった日々を全て忘れていた自分が許せない。唇を噛み、悔やんでいると百合子は軽く笑って頭に手をやった。

「気にしないの」

添えられた手がテルの髪をクシャクシャにする。だがそれをテルは拒まない。

「それで、アンタ達と一緒に過ごした日々が今回のことでいかに間違っていないかったという事に改めて気付いたわ。忘れてみて、思い出して気づく大切さっていうのもあるのね」

いかに自分がその日々を支えられて今を生きていられるのか。

その大切さが、今のテルには染みるように分かった。

今まで過ごしてきた日々があつたからこそ自分を見失わず、立つて
いることができた。

「貴方はこれまで通り、アンタの道を突き進みなさい。『もし』とか『たら』とか『れば』みたいな後悔しないようにしなさい。アンタの導き出した答えが、アンタだけの真実になるんだから」

「ああ、そうだな・・・」

もう、二度と迷いもしないし。するつもりもない。新しく刻んだその決意にテルは笑みを浮かべて応える。

すると、百合子がテルの頭に添えて、今度は手を少しだけ手を浮かして水平に動かしてきた。

「何してんの？」

「いやあ、いつの間にか背、抜かれちゃったなあつて」

「ホントだな」

二人の身長を確かめ合うと、テルと百合子の身長差は頭一つ分くらいの差が出来ていた。

それだけで、二人は笑う。

「そろそろ・・・お別れか。行けよ、このバカ弟子」

「バカ弟子じゃねえ、アンタの・・・息子だ」

その言葉に、テルという息子の言葉を聞いて、百合子の顔は涙を流しながらも笑っていた。

表情は語っている。

『ありがとう』

思いは全て伝えられた。

○

「テルさん！ 起きてくださいよ!!」

揺さぶられ、聞き覚えのある声にテルが目を覚ました。目に入ってきたのはハヤテとナギ。

「戻ってこれた・・・のか？」

「はい。僕は気づいたらここに・・・テルさんだけ目覚めるのが遅かったんで」

少々時間差が生じてしまったがどこも異常がないのは確かだ。

「アレ？ テルさん・・・目が」

ハヤテが驚いた表情で目の部分を指さす。

「あれ・・・治ってる？」

見えなくなっていた片目が開いた。痛みを感じない・・・が。

(ちよつと視力、落ちたかな・・・)

その瞳は傷を治していたが、肝心の視力は安定していなかった。

目の前のハヤテも、かなりぼやけて見える。

遠くの景色に限っては、青と緑しかわからないのだ。

「一体どうして・・・」

「さあな」

よく自分の体を見れば、あれだけ傷だらけだったのに対して今はどこも痛くもないし、傷一つ見当たらない。

「謎だな・・・」

「謎ですね」

二人は頷いて口にするが、あまり深く考えることはない。恐らくだが、あの空間を通して何かが起こったのだろう。それだけの解釈にとどめておいた。

「それにしてもここはどこだ？ 伊豆の端っこか？」

テルが辺りを見渡すと、そこには太平洋が広がっていた。丘とも言えるその場には先端に一つの墓がある。

「これは・・・私の母の墓だ」

ふと、ナギが答えた。墓の名には、『YUKARIKO SANZ ENIN』と表記されている。

「命日なんだ。今日は」

「ほう、最初から温泉目的で下田に来たんじゃなかったのか」

「当たり前前だ！　そう言っていただろう!!」

ナギがテルに怒ったが、その人物についてナギの口から語られる。ナギが言うには、ハヤテのような人だったようだ。体が弱く、一人っ子であったが笑顔がかなり似合う女性であり、まさに天真爛漫といった感じらしい。

伊豆に墓が建てられたのは、新婚旅行で思い出に残ったのがこの伊豆だったからとか。

大富豪なのになぜか昭和のサラリーマンのようなハネムーンである。

「父は私が物心ついた頃にはもうなくなっていて、母が私の全てだったんだ。病気になったけど、治ったら一緒にこの場所で星空を眺めようって約束したんだ」

だが、約束は守られなかった。

「一旦は退院したんだけどまた悪くなって、それで行けなくなったから私が駄々こねて・・・喧嘩して・・・」

しゃがんでその墓を手でさすりながらナギは続けた。

「母は申し訳なきそうな顔して、仲直り・・・できたらよかったけど、まさかその直後に亡くなるなんて・・・」

「あの、お嬢様——」

暗いムードが続いて、ハヤテが声をかけようとするが、実際どんな言葉をかけてやればいいのか分からない。だがその時。

「暗いわアアア!!」

「ぶはっ!!」

ノリのいい関西こと咲夜、雰囲気クラツシャーのテルによるダブルハリセンがナギの頭に炸裂した。

「何をするのだお前らアアア！　人がせつかくシリアス前回の雰囲気を作っているところなのにイ!!」

「うるせえんだよ！　ここまでシリアスにされるとなあ、こっちまで鬱になってきそうなんだよ!!」

「こんあ天気のエエ日にしんみりしとったら太陽もやりがないっちゅーねん!!」

「太陽のやりがいなんて知るか——!!」

特に咲夜がここにいることに突っ込むことはしない。多分、怒りで忘れていただけだろうが。

「そんな顔してたら、伊澄のように深海魚なみの表情しかできなくなるぞコラ」

「それはどういう意味ですか?」

まさかテルも目の前に伊澄がいるなんて思わなかったのだろう。慌てて手で口を覆うがもはや手遅れである。

「いや、だから・・・年中お通夜みたいな顔っつていうか」

「お通夜・・・?」

どんだん状況を悪化させていくテル。伊澄は今まさに能力を開放しそうな勢いだった。

「まったく、皆さん心配しましたよ」

「アレ? マリアさん?」

後ろからマリアがやってきていた。突然の事に一同は驚く。

「目が覚めたら二人とも居なくて・・・知らない間に宇宙人にでも誘拐されたんじゃないかと思いましたよ」

「でもハヤテ君なら宇宙人にも勝てちゃうんじゃないかな?」

「けど最後は敵と一緒に太陽に突っ込んでいって死んじゃうんじゃない?」

「いっ!」

さらにマリアが来たのに続くように歩とヒナギクが。

「あれ? ハムスターに会長? なんでここに?」

ハムスターという単語にむっと反応した歩だったが、歩が言うより早くヒナギクが答えた。

「決まってるでしょ? ここにあなたたちが居るから迎えにいつてあげてって・・・あれ?」

と、何故かその自分の言っている会話の内容が違和感を孕んでいることにヒナギクは気づく。

「私たちってだれに言われたのかな? 分かる歩?」

「ええーっと・・・全然分からないかな? これは迷宮入りのミステリーだよ!!」

「そう言えば、私も誰に・・・」

どうやらマリアもどうしてこの場所にテル達がいるということを知ったのかわからないようだった。

「まあいいじゃないか!!」

「人が集まってそこに桜があるのだから!!」

「もうお花見するしかないでしょ——!!」

いつの間にかやってきていのか、生徒会三人組の美希、理沙、泉もやって来ていた。

「当然、私から愛のこもった弁当がこんなに・・・」

「おー! 虎鉄くんすごい!!」

ハヤテの隣に颯爽と現れた虎鉄は大量の重箱を引つ提げているのを瀬川が目を輝かせる。

「・・・」

「ホモは黙ってお帰りください」

テルとハヤテが呆れを超えた視線を向けていた。

「おおおおおおお!! 海だア——ツツ!!」

「ありや、バカ王子もここにやってきちゃってるよ。こりやあ早目に締めた方がいいんじゃないか?」

崖の大海原に向けて、千里が大声で叫んでいた。

「フフ・・・今日は最高のお花見日和だなあ」

と、テルがジュースを飲んでいるときに真後ろからの声に反応すると、焼き肉の串を手を持った唯子の姿もそこにあった。

「そう思わんか?」

「真後ろから気配消して近づかなければな。マジで心臓止まった」

唯子はフフフと笑みを浮かべながら肉に食らいついた。

「私は誰かを驚かせることと、自分を楽しませることを信条としている。驚かず、私が楽しくないことをしてしまったら私という人間が終わる気がするのだ」

「そこまで重要かよ・・・ってか全部自分勝手じゃねえか」

海を前にした花見は順調に行われている。鷺ノ宮の使用人も愛沢家の使用人も瀬川家の使用人も仕事を忘れてみんなが酒に食らい

ついていた。

「オオオオオオ!!! その焼き肉をこの俺様に献上しろオオオオオ!!!」

そこに千里が乱入してきて楽しいお花見から大乱闘に発展したのは言うまでもない。

「カオスになっちまったな・・・」

「ですねーなんだかすっかりお花見モードになっちゃいました」

「はは、まあいいんじゃないか？ 母も賑やかなのが好きな人だったし・・・」

その乱闘の一部を眺めるようにテル、ハヤテ、ナギが同時に紙コップのジュースに口をつける。

「それに会いたかったんだろ？ きつと」

ナギが振り返るとその先にはナギの実の母、三千院 紫子の墓があった。

「私が今、どんな人たちと一緒にいるのか・・・」

夢から覚めた時にナギにかけられていた紫のストールが墓には掛けられていた。 風邪でなんどもストールが揺れる。

その墓を見るナギの横顔がどこかせつなげに見えたか、ハヤテが思い切って聞いた。

「あの・・・お嬢さまはもう一度お母様にお会いしたいですか？」

その質問に、ナギも突然のことで面食らったようだ。 うくと唸りながら少し考えてナギは答える。

「私はさ、ばかみたいにお金があつて・・・買えないものなんてほとんどないと思うんだ」

実質、練馬区の65%を占める大富豪の令嬢。 その言葉は嘘偽りなく、値札のあるものなら簡単に手に入れることができるだろう。

「けど・・・どれだけお金を積んでも、母はもう戻ってこないって・・・分かってるから・・・」

ナギは『もつとも』と付け加えて一言。

「そんな事も分かっていない奴が・・・どこかにいるかもしれないけど・・・」

○

く 三千院家、本家く

ここは三千院家本家。辺りは森で囲まれており、その中心には日本には似つかわしくない西洋の巨大な城がそびえたつ。

「・・・」

その城の一部屋。一人の老人が壁に掛けられている壁画を眺めていた。

壁画の人物は女性だ。特徴的なのは紫色のストールに、亜麻色の髪。

だが、老人の表情はその人物はもうこの世には居ないということを語っていた。

「・・・紫子」

そう言つて握りしめていた右手から見えたのは一つの石。これはハヤテが所持している石と酷似していた。

○

「だけど、その人との過ごした日々は覚えてんだらう？」

「テル・・・」

二人の会話に、一人の人物が入ってきた。テルだ。

「いなくなつちまったのはしょうがねエ。どんなこととして戻つてこねえのも現実だ・・・だけどよお」

ハヤテの手に、黒羽から奪い返したペンダントを渡して続ける。

「その人との笑った大切な日々とか、泣いたこととか、怒ったことから全部含めてお前が覚えていれば。お前の知る母ちゃんは、お前の心

の中から消えたりはしねえんじやねえか？」

「もつと分かりやすく言え」

「臭く言えば、お前の中で一生生き続ける」

「それくらい分かっているわバカテル」

「可愛げのないクソガキだ」

「ふん、せいぜい言ってる・・・だが」

——母よ。あなたが亡くなって8年。私に好きな人がで
きました。

「あんだよ。 やんのかコラ」

——バカだけど、変な奴も一緒ですが楽しく過ごしています。

——しばらくはそちらへは行けそうもないので、星となり空と
なり、これからも見守っていてください。

「では、私たちもあの乱闘騒ぎに混ざって来るか。 行くぞハヤテ!!」

「ハイ!!お嬢さま!!」

——これからもずっとずっと・・・

○

——時刻。 気づけば、カラスが鳴き、夕日が1日の顔出しの
役目をを終えようとしていた。

お花見の乱闘騒ぎは思わぬ結末により幕を閉じた。 千里により
引き起こされた大乱闘は、唯子に足を引っ掛けられた千里がアツアツ
のバベキューセットに激突し、あわや火災騒ぎになるところだった
が。

一人の少年が夕日の弱い光りに照らされている道を歩いている。

右手に花束を携えたテルの姿があった。

ずっと歩き続けていた足を止める。 たどり着いたのは、ナギの母の墓があった真逆の場所。 ここにも、同じように丘があり、先には墓が立っていた。

テルの見据える先には墓が見えるが、その墓には先客がいるようで誰かが花束を置いている最中だった。

「あら・・・？」

振り返るとそこに居たのは、昨日に家まで送っていった老婆の姿だった。

「どうも・・・」

頭を下げるテルだが、その礼儀は目の見えない老婆には伝わらない。 だが、老婆は見えないはずなのだが、こちらが挨拶をしたのだろうかと感じ取ったようで挨拶をり返してきた。

「珍しいわね。 ここには私くらいしか来ないのだけれど・・・」

「墓参りにきました」

テルの一言に、老婆は表情を変えた。 複雑にだが、どこか柔らかく、嬉しそうな笑顔。

「あなたが・・・テルくんなのね？」

「はい」

「ああ・・・百合子が言っていた子だね、ようやく会えた」

そう、この人物こそがテルを育てた神崎 百合子の祖母。 その白い髪の毛が何よりの証拠なのだ。

「そう、記憶喪失だったの・・・よくわかったわねここがああ娘の墓があるって」

テルはこれまでの経緯を粗方説明した。自分が記憶を失って何もかも思い出せていなかったことと、今日全てを思い出したことを。

——先生の墓はこの下田にある。

病院へ直行される前に木原がテルに言った一言。この言葉を頼りにテルはこの下田を歩き続けた。

「あの娘とは、よく電話していたけど。いつも言っていたのよ。」

『馬鹿で元気な二人も子供ができたって』

それはテルと、木原の事だ。

「最初は疑ったわ。あの娘は事情で子供が産めない体だったから、冗談じゃないかって・・・でも、写真を渡されて色んな事情を聞かされて分かったの。あの娘、幸せだったのね・・・」

そう言って、老婆は涙をぬぐった。

「記憶が戻ったってことは、覚えてるの？ 百合子が死んだときのことを・・・」

「はい、全部」

そう、テルを、木原を育てたその恩師でもあり親の神崎 百合子はすでにこの世にいない。

飛行機事故だった。

「百合子が言っていた通り、優しくて、いい子だわ・・・あの娘も、きっと天国で笑っているでしょうね」

老婆は涙を隠すことなく流していた。だが、その表情は笑っていたのをテルは覚えている。

墓参りを終えた老婆は笑顔で帰っていった。「またいつでも来てね」と残して。

「……」

花束を墓に添えたテルは何も考えず、百合子の墓の前に座り込んだ。

夕日もすっかり落ちて、その風景は夜の下田へと姿を変えていた。風が少し吹いて、なんともいえない静けさを感じる。

その時だ。不意に後ろから近づいてくる人物がいた。

「……マリアさん」

「ごめんなさい」

返しの一言がまさかの謝罪の言葉だった。

マリアは先ほどの老婆との会話をすべて聞いていたのだった。

「盗み聞きするつもりはありませんでした……」

「気にしなくても……いいんですよ」

テルは座り、マリアは立ったまま会話を続ける。

「大体分かっていると思いますが、俺は正式に神崎 百合子の息子ではありません。俺がまだ赤ん坊の頃、引き取られて、育てられた子供なんです」

その言葉が示す意味とは。だが、マリアはできればその先は聞くことは控えたかった。もしかしたら、テルのトラウマを刺激するだけかもしれないからだ。

だがテルは続ける。

「俺が13の頃に、先生から俺の両親がもう既にこの世にいないという事を教えてくれました」

「……」

聞いてしまったマリアは胸に置いて服を握りしめた。

「俺の親は学者さんで、勤め先の事故で死んだと言っていました」

その時に俺が生まれてすぐだった頃だったから、両親は俺を当時の両親のガードに預けていた先生に預けて」

テルの両親は当時、とある研究に励んでいて色々と事情を抱えていた。その二人を守るために派遣されたガードが、神崎 百合子だった。

た。

この事故に関しては、誰かが巻き起こしたものだと思われる。施設はまるで爆撃されたかのような悲惨な状態になっており、もう跡形も残っていないが。

「まあ、その育ててくれた先生ももういません」

骨休みの旅行中の旅客機に突如のエンジントラブルが発生。飛行機はそのまま空港に到着することなく、海へと不時着。この事故による死者がたったひとりだったのは奇跡と呼ばれている。

だがそのたった一人の死者が神崎 百合子であった。

遺体は今でも見つからない。 専門家からもあの状況で見つかるのは飛行機の破片くらいであり、そもそも、一人浮いてこないのはもうそういう結果になり、捜索も打ち切られた。

「あの時は、恨みました。この世界を・・・なぜ先生だけが死ななきやならなかつたのか・・・」

数百の人間の中で百合子だけが。 まるで世界が、百合子の存在を認めないかのような結末だった。

そうして迷いながらも住んでいた場所を飛び出して、さまよい続けた。 憎しみはあつた。だが、憎しみをぶつける相手すらいない。

事故なのだから。

「それでも復讐とか考えなかったのは、そういう復讐心に囚われることを一番先生が望んじやいなかったんじゃないかって思ったから」

その百合子と過ごした日々が、彼を、テルを止めてくれた。

「俺がそこで復讐とか、道を外れることはあの日々を否定することになる。 先生たちと過ごしてきた日々を、『なかったことにはしてはいけない』。 それだけはしたくなかった」

だから、彼は百合子が死んでからも自分を守り続けた。 記憶を失った後でも、その心が変わることなく彼を道を誤らせることをさせ

なかった。

「俺はこれからも、先生から教わってきたことを忘れない。過ごした日々を忘れない。それが、俺にできる先生へしてあげられることだから」

そう言つて振り返つたテルの顔を見てマリアは思う。自分もまた、親の居ない人間だ。クリスマスの日に外に捨てられていたのを三千院家に拾われる。

昔は考えたこともある、自分を置いていった両親は一体どこにいるのだろうか。

だが、17年経つた今でさえ名乗りを上げてくることはない。

どこかで生きている可能性は高いのだ・・・だが。

(もう、テルくんの場合は・・・)

育ての親が生きている可能性すら存在しない。世界がひっくり返つても死人が生き返ってくるなどありえないのだ。しかも死んだのはテルが生まれてすぐだ。つまり、テルは自分の本当の親の顔を知らないということになる。

ハヤテもヒナギクも、ナギも、親の顔は覚えている。

だがテルは知らないし、二度とこの世界で会えるという事もない。絶対。

「強いんですね・・・」

それでも自分を変えず、心のままにしたがって生きているテルにマリアは一つの強さを感じた。

だがテルは首を振って否定する。

「そんな事ないっす。流石にその話を聞いたときは泣いたし、記憶を失っている時は一回だけ犯罪を考えました・・・けど」

少しだけテルは頭を掻いて、照れくさそうにマリアから視線を逸らした。

「そんな時に出会った人の御陰で自分が道を誤ることなく、こういう仕事をやってられるんです」

それは記憶をまだ失っていたテルが愚かにも望みの薄い犯罪に手を染めようとした時だ。

その出会いだけで自分を気づかせてくれた事を、その女性は覚えているだろうか。

「いい出会いがあったものですね、しかも一目見ただけで心変わりとかテル君らしいです」

「俺が女にコロコロ態度を変える軽い男とだとも!？」

やっぱり覚えていなかった。

だが、そのほうがいいだろう。　　こういう言葉は本人の前にはあまり言わないほうがいいのだ。

言葉で伝えるといらぬ誤解を生む。　人間とは不器用だ。

「冗談です。　記憶が戻って、テル君が変わってしまったのかと・・・本当は心配しました」

胸に置いていた手を再び握る。　それを見たテルは笑みを浮かべて返した。

「変わりませんよ、それはこれからも。　一度受け入れたことですから・・・だけど、これで記憶を失っていた善立　テルの人生は終わりです・・・まあ心機一転みたいなの？」

「ふふ・・・だったらこの先、執事的能力が上達することを期待してもいいんですね?　特に料理とか」

「もう料理は完璧じゃないですか?」

(一体どこからその確固たる自信が生まれてくるのでしょうか?)

自分の料理をあれだけ食べて何度も泡吹いて倒れているはずなのにどうしてそんな自信が湧くのか、マリアには理解できなかった。

ある意味、ナギよりタチが悪いかもしれない。

「んじやそろそろ帰りませんか?　明日には出発ですからもう寝たくて」

「待ってください」

大きく欠伸をするテルをマリアが止めた。

「私も、お参りします・・・」

そう言っつまりが膝をおって手を合わせる。　この方式が正しい

か分からないが、要は死者を敬う気持ちが現れていればそれで良いのではないか。

(これから、見守っててください……彼のことを)

—— テルが生きている間はアナタにお願いするわ。

ふと、声が響いた。 目を見開いて辺りを確認するが視界にはテルと丘の風景しか映らない。

—— バカ息子がこれからも迷惑かけるけど、よろしくね。

「お任せ下さい、慣れてますから……」

「あれ？ マリアさん、ひとりごとですか？」

「テル君には関係ありません。 それではこれからも宜しく願います」

「いきなりなんですか？ 改まって」

合わせていた手を解いて、立ち上がったマリアから差し出された手に若干疑いの目を向けながらも言うテルだったが、マリアが半ば強引にテルの手を引き寄せて握手させる。

「じゃ、じゃあまあ、よろしくです」

握手の意図があまり理解できていないテルは深く考えずに握り返した。 使用人たちの絆がまた深まる。

これでひとりの少年の記憶をめぐる物語が終を告げた。

しかしこれは始まりでもあるのだ。

新たに真実と向き合った善立 テルの人生は新しい幕を開ける。

第81話く黒き死神の最期く

雨が降っていた。最近はどうも雨が多い。梅雨でもないのにここ2く3日雨が続けていた。

その雨の空を飛び続ける鳥がいた。否、鳥のような何か。

『あー、雨なんかずつと見てると鬱になってくるく』

漆黒の羽を羽ばたかせたソレは、確かに羽以外は、人間の少女の姿をしていた。黒いローブを着て、黒の長髪を風でなびかせているのは黒羽だ。

『マスターく このままじゃカゼひいちゃいますですよ』

先程から喋っていたフードの部分に隠れていた黒羽の分身、チビハネがひよいと顔を出す。

『あの下田に行ってからあのクソバカはいなくなりやがるし．．．』

チビハネが言っている人物とは、木原 竜児のことである。勝手に居なくなつたのではなく、居なくならせたというほうが正しい。

『でもあの野郎がいなくなつたおかげでこちらとしても邪魔になる要素がなくなつて丁度いいです！ 食費も浮くのです！ 節約万歳！

一人暮らし万歳！』

「．．．．．」

フードの真後ろで歓喜の声を挙げられても黒羽は嫌がる素振りも見せず、無言だった。

『マスター、最近．．．疲れてませんか？』

黒羽は心配そうに見てくるチビハネを横目で見た。寒さもあつてか、少しでも手が震えている。

『この前の傷が全然ふさがってません．．．いつもなら一日で完全に治つてるハズなのに』

そう、前のテルとの戦いはこれまでの戦いの中では最も過酷な戦いであつたことは黒羽自身も自覚している。

だが今まで一日も掛からない傷の回復がこれまで遅れた事があつただろうか。

原因は、あのテルの鉄パイプに巻かれた札の力にあった。

どうやら、あのパイプに巻かれた札は黒羽の力にとつて天敵となるらしい。その分、札の使用者には相応のリスクが備わうらしいが。『ま、マスターの力になることだったら私はなんでもやりますよ！だから、今は傷を直すことだけに専念しますですよ！ マスターが居なくなったら、わ、わたじ・・・』

小さくフードの後ろで嗚咽が聞こえてくる。このチビハネは黒羽に対する忠誠心は本物だ。

「大丈夫」

黒羽が一言だけ、黒羽に向けて言った。このように気遣いをされたのは恐らくこれが初めてだと、チビハネは目を丸くする。

『は、初めてマスターに気遣われたです！ 何か不吉な予感がするです・・・』

「・・・」

フードの中は『え？ うそ、マジで？』などという言葉を繰り返しているが、黒羽本人にはどうでもよかった。

しかし、自分がさっきのような言葉を口走ってしまうのはなぜだろうか。

思えば、最近になって地震の言葉数というのが増えてきた気がする。その原因は恐らく、あの鉄パイプをもった執事だ。

あの男が持つのは強さだけではない。まだ他に持っている。自分にはない大きな力を持つ武器を。

『しかし、今日は川の水が荒れてますねえマスター』

丁度、黒羽達が飛んでいる場所からは雨のせいで水位が上がり、濁流と化している川が見えた。その川をまたぐように線路が伸びている。

『こんな日はさっさと帰ってあったかいココアでも飲むに限りますですよ!!』

と、その時。

——掛かりました

突如、黒羽の半径五十メートルを淡い紫色の光が囲んだ。

『な、何ですか——!?!』
「……………」

紫の光の柱が合わせて六本。まるで黒羽をここから逃がさないかのような現れ方だ。六本の柱が立つと、霊力がはじけて、ドーム状に展開される。

「……………結界」

『け、結界ですか——!?! いったい誰が? なんのために!?!』

黒羽の一言にチビハネが慌てて身をフードの中から現す。この状況では仕方ないことだろうが、もう少し冷静にならないだろうか。そう思いながら構えていたとき。

「——ツ!?!」

黒羽が背中に衝撃が走った。強力な霊力の塊が自身の背中を直撃したのだ。角度からして、地上から狙われたのは確かだ。と、落ちながら分析する。

『のわわわわわわ!!』

分析の最中、体から離れたチビハネを手につかむとそのまま線路の上に着陸した。

『あ、ありがとうございますマスター』
「……………」

チビハネの助けしてくれた黒羽に対するお礼の言葉は恐らく黒羽には届いていないだろう。何故なら、その瞳には既に別の何かが映されていたからだ。

『お久しぶりです……………探しましたよ』
「……………」

雨の中、番傘をさした伊澄は睨みつけるような瞳を黒羽たちに向けた。

「この結果は、設置式のもので閉じ込めるものをここまで誘い込まなければなりません。その効果は強力です。恐らく、あなたが出るにはかなりの時間がかかりますよ?」

「.....」

くるりと首を捻って黒羽は辺りを見渡す。光の柱に囲まれたこの場所では伊澄の霊力が満ちている。それは空まで届いていることが分かった。どうやら逃げ場はないらしい。

「ここにくることを予想して正解でした。私が望むことはただ一つ」

伊澄は袖から一枚の札を取り出して、黒羽に向けて構えた。

「あなたともう一度、戦いたい」

「.....」

突きつけられたのは伊澄からのリベンジマッチだった。

「再戦の意味もありますが、もう一つ・・・あなたを、私の大切な人たちに近づけさせないためです」

力強く、言った。恐らく、こちらの方が本当の理由だろう。

「これ以上、私の大切な人たちに危害を加えるようであれば、私は私の持てる力をもってあなたを全力で叩き潰します」

これにはどうやら明確な殺意を感じた。まだ幼い年頃がこのような殺意を出せるのだろうか。それと同時に肩に乗っていたチビハネもカタカタと震え出す。

『ま、マスター。は、早く逃げたほうがいいですよ・・・ってしまつた! 逃げられないんだつた!!』

どうやらここからは逃げられないようだ。ここで戦うしかなさそうだ。

「.....」

黒羽は黒い剣を構えた。左右の腕から生やした腕を構えて素早いスピードで伊澄へと迫る。

『先手必勝です! 行けエ! マスター!』

チビハネは馬にでも乗ってる気分なのか。

黒羽の振りかざした剣が伊澄に届く前に、伊澄の覆うように光の壁が現れる。

金属音が響く。黒羽の剣は届くことなく、その壁に阻まれた。

「……………」

「……………」

お互い近い距離に、防御の壁を一枚挟んで対峙する。この壁は前回は何度も攻撃することにより壊せるはずだ。

と、考えた黒羽は連続で攻撃を仕掛ける……だが。
パキイン。

『これは……!?!』

チビハネがまつ先に驚いていた。なんと攻撃を仕掛けた黒羽の剣が砕けたのだ。

「……………」

構わず、ともう片方の剣でも攻撃を仕掛けるが、同じく簡単に砕けてしまう。

『ま、マスター！前、前!!』

自身の剣が砕けたことに呆気にとられていたとき、チビハネの声で我に帰った。だが目の前には激しい光。伊澄が札を構えている。

「八葉六式……撃破滅却ツ!!」

右手から展開された五芒星から紫の極太レーザーが黒羽の体にほぼ至近距離で直撃した。なすすべなく、黒羽の体が吹き飛ばされる。

『ま、マスター!!』

チビハネの悲鳴にも似たような声が耳元で響く。体を震わせながら起こすと立ち上がった黒羽は、右手から槍を出現させて伊澄に向けて飛ばした。

「これくらい……!!」

迫り来る無数の槍を展開した光の防御で全てを弾いた。

「この前は体調が万全ではありませんでした。これが今の私の全力!!」

札を構えて何か術式を唱え出した伊澄の体から一層霊力の波長が強くなる。

持っていた札を投げ捨てると、その札は一つの光となり、空へと浮かんだ。

「術式八葉・・・建御雷神（タケミカズチ）ツ!!」

浮かんだ光が一層輝きを増した瞬間、光は空気を裂く豪雷となって黒羽に降り注いだ。

当然、まともに防ぐことも叶わず、その豪雷をまともに食らう。

『わあ——!!』

チビハネが激痛を覚悟して頭を隠したが、建御雷神を食らう前に黒羽が体を使って庇ってチビハネのダメージを殺す。

「・・・」

『ま、マスター！ 私を、かばって?』

弱っていて、ダメージも回復していないこの状態で戦うことは危険なことだと、黒羽は自覚していた。だが先程から食らってはいけない攻撃を何度も受けている。

「・・・」

黒羽は反撃を試みるが、ダメージをもらい過ぎたためか、剣を作っても形をなすだけですぐに崩れさってしまう。

「もう、限界のようですね」

その様子を見た伊澄が札をしまった。

「ここであなたがもう手を引くのであれば、私は貴方を倒しませんし、二度と貴方を追うなんて考えません」

（テル様がやっていった。戦うだけでない、言葉で分からせる戦い方・・・私にも出来るはず）

伊澄はただ戦ってねじ伏せるのではなく、テルのように相手にそれ相応の力の差を見せつけて、こちらに勝負を挑む気力を削ごうという作戦を望んでいた。

無駄に血を流すことなく、相手にとってもさほど悪い条件では無いはずだが。

「なぜ・・・戦うのを止めないんですか」

黒羽が示したのは白旗でもなく、戦闘続行の意思だった。

「無駄だつて分かっているはずです！　これ以上自分を殺すようなマネをしてどうするんですか!？」

『そ、そうですよマスター！　あの女の言うとおりです！　ここは条件を飲んで逃げましょうよ!』

伊澄の言葉に拍車をかけるようにチビハネもこの場の撤退を望んでいた。だが黒羽は聞く耳を持っていない。両の手から剣を作り出して構える。

『もう止めましょうよ！　これ以上力を使ったら・・・本当に死んじやいますよ!!』

肩に雨とは別の水が落ちる。横目で肩の部分を見るとチビハネの瞳からは大粒の涙が流れていた。その悲しそうな声に戦いの瞳をしていた黒羽の表情が一瞬だけ緩む。

『わらじ（わたし）・・・わらじ、マスターが死ぬなんて、考えたくない”っ!!』

顔の涙をローブの袖で拭いながらチビハネは泣く。自身の主を失うということだけは何としてもやめて欲しい。

そのチビハネの手に、大きな手が添えられた。撫でる手は主である黒羽の手だ。

『・・・マスター』

そして表情をもとに戻して再び伊澄と向き合った。

（これは・・・覚悟を決めた顔）

伊澄も黒羽の顔を見てそのプレッシャーを肌で感じ取った。もう相手は長くない。次の一撃で全てを決めてくるだろう。

『マスターの決めたことにはもう反対しません』

チビハネが肩で涙をぬぐった。こちらも覚悟を決めたようである。

『そして、死ぬときは一緒ですよ!!』

拳を握り締めて、伊澄に向かって『かかってこいやゴラア』と挑発している。

「だったら、私も手加減できませんよ」

(この・・・分ならず屋が)

伊澄も本気だ。札を新たに取り出して、膨大な霊力を開放する。
「……………」

黒羽は持てるだけの力を振り絞り、巨大なドリルを作り出した。右手に作り出したドリルはテルとの戦いで作り出したドリルとは比べ物にならないほどデカイ。もしかしたら十メートルくらいはあるかもしれない。

その重さをもともしないのか、持ち上げて構えると伊澄に向かって突っ込んでいった。

『突貫じゃあああああ・・・え？』

威勢良く叫んでいたチビハネが急に叫ぶのをやめた。黒羽も急に走るのをやめる。

二人の目の前に現れたのは、巨大な竜だった。

大きく、そして見た目も恐ろしい。昔の竜のイメージを具現化したものだった。オイこらそこ。バ〇ウ〇ケルガとか言うな。

「術式八葉上巻（じゅつしきはちようかみつまき）・・・神世七夜（かみよのななや）」

竜の口が開かれて、その口は真上から黒羽を捉えていた。猛々しい吐息を吐きながら、神世七夜は黒羽めがけて突っ込んできた。

黒羽も、ドリルを真上に向けて応戦する。二つの最大の技が今、ぶつかりあった。

地面と空が震えて、激突の衝撃は轟音を呼ぶ。

最初は互角だったが、後にジリ貧で黒羽の方が押され始める。だんだんとドリルの面にヒビが入ってきたのだ。

同時に意識が薄れてくる。

『ま、マスター！頑張ってッ』

そんな意識を何度も呼び戻してくれていたのは肩に乗っているチビハネの存在だった。

『まだ、押し返せますよ!』

なぜ、この小さき者はこんなにも自分を応援してくれているのか。黒羽は理由が分からなかった。その一方で右手のドリルはほぼ半壊状態になり、腕からは血が出始めた。もう限界である。

「はあああああああ!!」

伊澄の気合の声と共に神世七代が勢いを増した。拮抗状態にあったドリルを噛み砕き始める。

強力な靈力の塊。これを喰らえばいくら黒曜の力をもつてしても防ぎきれるかどうか。何より、ただ少しだけ力が強いだけのチビハネが耐え切れるだろうか。無理だろう。

(気づけばそんなことを考えている)

『マスター! ファイトオ!』

黒羽は決断した。

ドリルがほぼ砕かれて神世七代が目の前に迫ってきたその瞬間。

『え?』

黒羽は肩に乗っていたチビハネを鷲掴みすると、出来るだけ遠くに投げ飛ばした。

『マスター、なんで――』

「.....」

――何か。忘れていたものを・・・思い出した気がする。

チビハネはこちらを横目で見ている黒羽を見た。いつもと変わらぬ無表情。だが、その表情は確かにチビハネに伝えていた。

『生きて』

――だが気付くのが、あまりにも遅すぎた。

黒羽の目の前には巨大な口を開けた伊澄の最強の術がある。

視線を直した黒羽は、次の瞬間には巨大な竜の一撃に飲み込まれた。

激しい爆発音と共に、チビハネの体が遠くへ飛ばされる。一回、三回とぬかるんだ地面を転がった。

泥でぐちやぐちやになった体を起こしたチビハネは自分より高く吹き飛ばされていた黒羽が目に見えた。

『マスターアアアア!!』

その呼びかけにももう返す気力もないのか、もはや意識も失われているのか、黒羽は動かない。

吹き飛ばされていった黒羽はそのまま激しく荒れる濁流の中へと落ちていった。

『うわああああああああああ!!』

慌てて駆け出したチビハネが近づいたときには黒羽の姿は見るこ
とができなくなってしまっていた。

あの傷で意識もなかったのだ。無事でいられるはずがない。

膝を地面へと落として、自身の主を失った悲しみ暮れる。

「.....」

そしてその後ろから伊澄が歩いてきた。今は涙を流して、こいつ
をすぐにでも亡きものにしてやりたいという気持ちで溢れている。
すぐにでも飛びかかろうと振り返った瞬間、既に札を構えられてい
た。

『.....』

もう主を失った。ならば自分の存在価値なんてない。ここで
いつそのこと死んでしまえばいい。

「.....私に止めをさせとでも?」

チビハネの目がそう語っていたのか、伊澄の理解力にチビハネが不
敵に笑った。だが、伊澄は構えていた札を袖へと戻す。

「あの人の最期、貴方を助けることだけを考えていた。つまり、ここ
で死ぬことは貴方にはこのまま生きていて欲しいという主の願いを
無駄にするということですよ」

『……………』

不敵にも笑っていた顔が、また涙で崩れた。目の前には敵。自分を窮地にも追いやり、マスターである黒羽を倒した敵。

チビハネは悔しかった。この敵はに屈辱にまみれて生きろということをや遠まわしに言っているような気がしたのだ。

「それでも……あなたが望むというのなら……」

と袖から再び札を取り出そうとしたが、チビハネが動くのを見て伊澄は動きを止める。

『まだ……死ねない』

拳を握り締めて、チビハネは唇を噛み締めながら目の前の荒れ狂う濁流を見つめて一言。

『生きているマスターを見つけるまでは!!』

次の瞬間、チビハネはその濁流の中に飛び込んだ。飛び込んだ瞬間、小さな水しぶきが立つ。

「馬鹿なことを……ツツ」

元が小さいだけにチビハネの姿はもう見えない。この濁流の中にあんな小さな者が入って、主同様に、無事で済まされる訳がない。

「結局……私は力を振るうことしかできないのですね。やはり私は……無力」

目を閉じて、思う。この力に頼らなくても、同じ人間ならば言葉で分かってもらえるものだと思っていた。

だが、テルのようにはできなかつた。そして、あの二人を説得することも出来なかつたという己自身の無力さ。

戦いで荒れた光景が切なさを呼び、最初にさしていた傘を拾ってさすこともなく少女は一人雨に打たれ続ける。

第82話く人から貰えた物はなんだって嬉しい。それが例えアレでもく

3月14日。今日はホワイトデーである。

(そういえば・・・今日つてホワイトデーだったな)

3月にもなり、だんだんと気候が暖かくなり始めた頃、執事綾崎ハヤテは悩んでいた。

(ホワイトデーのお返しは西沢さんにいらなんて言われたけど・・・やっぱいっぱいお世話になってるしお返ししなきゃ失礼だよなあ人として・・・)

先日の下田旅行の際、桜の散る道を歩と自転車で駆け抜ける中、ハヤテはバレンタインデーのお返しについて聞いた。だが歩はきつぱりと笑顔でいらないと答えたのだ。

「しかしなんであんなに笑顔で断られたんだろうか・・・」

やっぱりなにか悪いことしたんじゃないか、とハヤテはいつものように妄想を膨らませる。この悪い方向にいつでも考えてしまう癖をとにかくなんとかしたいものだ。

「テルさんはどうしたらいいと思いますか？　ホワイトデーのプレゼント」

ティーセットのカップに紅茶を注ぎながらソファアに天井を見上げながら座る男に聞くと、男は上げていた首を平行に戻してこちらを見た。

「あのう・・・なんで睨んでるんです？」

「別に睨んでもねえーから。プレゼントだっけ？　カエルの変死体でも入れればいいんじゃないかね？」

「いやいやいや・・・」

歪んだ笑みを浮かべた男、善立　テルは言った。プレゼントはカエルに限ると。当然のことながらハヤテは否定する。

「なんで小学校の悪戯の類をホワイトデーにプレゼントしなきゃならないんですか？　こっちは真剣に悩んでるんですよ!?!　真面目に考

えてください!!」

「真面目にだあ?」

ピクリと動きを止めて、テルはハヤテをギロツと睨んだ。

「そんな嬉しいことを悩むなんて、こっちには考えられないね! 大体3月14日って何!? ホワイトデーって何!? バレンタインデーのお返しって何!? 糖分に対して糖分でお返しするって何!? 俺にとっちゃ全世界の3月14日はただの『普通の月曜日』に過ぎないんだけど!!」

「なんでそんなにキレてるんですか!!」

「キレない理由があるかこの女たらしの変態野郎があー!!」

「まだ僕にホモ疑惑があると!? だから誤解ですって!!」

気付けばハヤテもテルに合わせてヒートアップしていた。テルがキレている理由はただ一つ、ハヤテはバレンタインのチョコを貰えていて、テルはチョコを貰ってもいないのである。

まあチョコもらった男子がホワイトデー当日に『プレゼントになあげたらいい? 悩んじゃうんだよねー毎年さあ』ってチョコももらえていない男子に聞いてきたらそらあキレる。

本来嬉しいことであることを『悩み』と捉えているのだ。

「それに貰ったチョコは手作りなんだろ!? ってことは『そういうこと』なんだからお前だったら何あげても大丈夫だろうが!! 何悩む必要があるんだよ!!」

テルはハヤテにチョコを渡した歩がハヤテに思いを寄せていることを知っている。なので歩にとってハヤテが渡したものならなんでも良いはずだ。

「その何をあげるっていうところで詰っているんです! 何を渡したらいいか分からないんですから!!」

「もう馬にけられて死んでしまえエ!!」

「僕がいつ他人の恋路を邪魔したんですか!?!」

「ひとりの少女の恋を邪魔してるんだよ! お前自身が!」

「僕に誰が恋してるって言うんですか!?! いませんよこの世に!!」

「もう馬にけられなくてもいいから死んでしまえ!!」

「結局死ぬんですか僕——!?!」

第82話く人から貰えて嬉しいものはなんだって嬉しい。それが例えアレでも!く

○

月曜日、そう旅行から帰ってきて楽しいムードはなくなったが、学校は無くならないのである。

だが今日はテルにとっても嬉しい日であった。テルだけでなく、日本中の学生たちがこの日を待っていただろう。

白皇学院全校集会にて。

「以上で三学期の生徒総会を終わります。皆さん、白皇の生徒としての自覚をもってよい春休みを過ごしてください」

ヒナギクがお辞儀をして一言終えた瞬間、白皇学院時計塔の大広間は拍手喝采に満ち溢れた。そう、この日から白皇学院は春休みに突入する。

「いやーさすが生徒会長さんは立派だな。よくあれだけの人を前に落ち着いて喋れるものだ」

「ヒナちゃんすごいー!」

式台から降りると美希、泉、理沙の三人がヒナギクを迎えた。

「もおからかわないの。一応、緊張はしてるんだから」

「でもなあ〜」

「ねえ〜☒」

ニヤニヤとこちらを見ながら笑う美希と泉にヒナギクはため息を漏らす。こっちは本当に忙しくてプレッシャーもかかるからなかなか休めないのに。

と思いつながらヒナギクは手にもっていた紙袋を取り出すと小さな包を取り出した。

「美希、はいこれ」

「ん?」

差し出されたその箱を美希は戸惑いながら受け取る。中からはかすかに甘い匂い。

「なにじゃなくて・・・ホワイトデーよ。チョコこの前貰ったじゃない・・・そのお礼だから、手作りクッキーよ」

「お、おお!! そ・・・そう!! わざわざ悪いな!!」

美希が嬉しきで照れていると、周りの女子もそれを見てか寄ってくる。

「わーずるーい」

「会長のクッキー私も欲しいー」

「あーもう、分かったわよ! こんなので良ければいくらでも上げるわよ!!」

(去年より多めに作ってきて良かった・・・)

去年の経験からか、年々チョコは増える一方だ。ヒナギクとしても今日のこういった事は初めてではないため、お返しのお菓子も年々増えていつているのが悩みである。

どんどんと寄ってくるヒナギクのチョコ求める女子たちをヒナギクは嫌な顔せず対処していく。

「私もー」

「私もー」

「私もー」

「私もー」

「ん?」

最後の声に対し、ヒナギクは眉を寄せて渡すのをやめた。最後に聞いた声が少しどこかで聞いたことがある男口調だったからだ。

女子の群れの中から顔をひよいと出した人物は、テルだった。

「なんでテル君がチョコもらおうとしてるの?」

「いや、それだけあつたら俺ももらってもなんら罪はないかなーと」

「あなたにチョコを渡した記憶はないのだけれど」

「ま、そんな事は気にせずお一つ」

と、テルが包に手を伸ばした瞬間。テルの腕に鎖が巻かれた。テルが隣を見ると、鎖を持っているのはその場にいた女子だった。

「会長のお菓子をもらう資格のない輩が！ 簡単に会長のお菓子に手を出すなー!!」

「え？ ちょ、なんで皆鎖とかもってるの？ 会長？ コイツら明らかに校則違反してまーす!!」

とヒナギクに取り合ってもらおうと冷や汗を浮かべるが、ヒナギクはクルツと背を向けて。

「それじゃあ残ってる仕事の調整に入りますか。 行きましょう、千桜（ちはる）さん、愛歌（あいか）さん」

「はい。会長」

「分かったわ」

同じ生徒会役員とも見られる少女が頷いてヒナギクたちはその場を去っていく。 テルの目の前には様々な得物をもった女子が殺気だった視線を集中させていた。

数分後。 鎖を全身に巻き付かせられたひとりの男子生徒の姿が時計塔の大広間にあったという。

「ほんと、女の敵よね」

「まったく、女子力なめんなって話よ」

女子力（物理）、怖るべし。

○

「クソ・・・酷い目にあった・・・」

集会も終わり、一段落した白皇学院校舎の廊下をテルは歩いていった。 先程の女子力の嵐に見舞われた体があちこち悲鳴を上げる。

「あんれー？ ーこって二年の廊下かあ？」

周りの生徒の上履きにちよつとだけ変化がある。 そして教室の上には2―Aと書かれていた。 どうやら歩いている間に二年の廊下に入り込んでいたようだ。

どうやら終業式が終わったために、午前中で学校が終わりだ。 もうほかの生徒は下校をしようとする生徒がちらほら見て取れる。

すると廊下の窓際にひとりの大男が寄りかかって外の景色を見ていた。金髪で身長が高い、自称キングで定評のある乙葉 千里だ。(あんま関わりたくねー。ここはスルーに限るよなオイ)
「む・・・貴様は」

見つかつてしまった。ものの数秒である。声をかけられてしまったからにはしつかりと対応しなければならない。

「王様・・・ちよつと空気読めよ」

それも善立流な訳だが。

「貴様、王に向かつてそのいい草はなんだ。それに、空気を読めとはどういうことだ？ 気象の流れを理解することか？」

そこまで読まなくていいよ。と心の中でツツコミながら、テルは千里の手が二つとも空いていることに気がついた。それを見てテルはニヤリと笑う。

「ま、そうだよなあ王様」

「ん？」

テルは思っていた。この厳つく、問題児でもある自分主義の塊が世界が何度生まれ変わったとしてもチヨコをもらえているはずがない。

いや、貰えるはずがない、故に渡す相手が居るはずがない、と。

「お前も俺の仲間だなあオイ。別に悔しがる必要はねえさ。人間の人生つてのは汚点は付きもだつて、そう例えチヨコが貰えていなくたってなあ！」

ぱしっ、ぱしっ、と千里の高い肩を叩きながらテルは笑うが、当の千里はテルの言葉に思い当たることがあったか。

「ん？ 菓子か？ あるぞ。ここにいな」

「へ？」

ヌツと何処からか取り出されたのか分からないが、少し大きめの箱が千里の手のひらに乗っている。

もちろん、テルは人間が死んだ時に見せる死後硬直のように体を沈黙させた。と、次の瞬間。

「なんでダアーーーーー!!!」

彼は叫んだ。この世の理不尽さを。相当ショックだったようで、

膝を床に付けて、立ち上がるうとしては膝をつき、立ち上がるうとしては膝を付くという行為を繰り返している。

「誰だ・・・コラ、一体だれにやるんだコラ」

「ああ、それだが、もう少しでこっちに来るはずなのだがな・・・」
「おーい千里くんー！」

時計を見て確認しているときに向こうから間延びした声が出た。走ってくるのは少女。それはテルがよく知る少女だった。

「あれ？ テル夫くん？ どうして二年の廊下にいるの？」

「い、委員長だと・・・？」

そう。何を隠そう、千里がホワイトデーにお返しする相手はクラスの良いinchよさんレツドこと、瀬川 泉だった。

「やーやー。 千里くん、今年もありがとねー☒」

「む、もらったらちゃん返せと爺やが五月蠅くてな」

「今年も・・・だと？」

泉と千里のやり取りにテルは息を飲んだ。 つまりだ。 千里は去年のバレンタインも泉からチョコを貰っているということになる。

これは何かの見間違いだろうか。

「受け取れ。 もう俺には渡さなくてもいいんだぞ別に、供物としてなら別だが」

供物？ と泉は一瞬唖るとにぱりと笑って返した。

「別にいいよ、受け取れるものは受け取ってもいいんじゃないかな
〜王様」

最後に笑顔を残して泉は去っていった。 テルにとっては謎が深まるばかりである。

「なんで？」

「いや、何がだ」

「いや、なんで貰えてるのお前？」

テルの疑問を解決するために直接本人に聞きたです。 だが千里は腕を組みながら言い放った。

「わからん」

本人もまったく思い当たる節がないようだ。 とするとこれ

は……。

「おお、テル君にバカ王子ではないか!!」

凜とした声に振り返ると千里と同じ二年の奈津美 唯子の姿があった。

「ふむ、バカ王子は今年も瀬川嬢からか。その様子を見るとテル君は……フツ」

「あーっ！ 今鼻で笑つたらろ！ あんま構うなこの野郎！ あっち行け！」

唯子のはっはっはと笑い出す。完全にこちらの反応を楽しんでいたのは見て分かった。

「ま、私もあまり長いことはないさ。今日の私は、かなり足取りが重くてね……」

「ん？ 体重？」

その言葉を発した瞬間、テルの顔面に見事なハイキックが炸裂した。

「お、おま！ 顔面の骨が砕けるだろうがッ！ 手加減っていうのを知らねーのかよ！」

「レディーに対して重さの話を持ちかけるとはいい度胸をしている。

どうだ？ ムエタイ選手直伝のキックだ。次はどこを狙って欲しい？ 言ってみろ」

足のつま先を床にトントンとさせてリズムを取る。それを見て千里の後ろに隠れた。

「ん？ それって……」

千里の後ろから見えたのは唯子の後ろ2, 3個ほどの袋を乗せた台車があった。

「ああ、この時期になると本当に困るのだよ。作るのも大変だ」なるほど。 とテルは納得する。 この人物のことだ。 恐らく

バレンタインデーの日にしこたま貰ったに違いない。

その点ではヒナギクと一緒に状況を迎えているのだろう。

「しかし、ホワイトデーは男が渡すのではないのか？ 女からしか貰っていないのだが……」

と唯子は袋の中から一つの箱を取り出した。青と白のラインでラッピングされたシンプルな包だ。

「どうだ？ やろうか？ 贈り物だぞ」

「そんな哀れみに満ちた贈り物なんていらねー」

テルは額に青筋を浮かべながら拒否した。唯子は少しだけまた笑って箱をしまう。

「まあそう腐るな。もしかしたら君だってもらえるかもしれないぞ？」

「どこの女から貰うって言うんだよ。まず、貰うとしてもそれは来年の話で……」

「誰が女といった？ それに今日はホワイトデーだ。男が相手に渡す日でもあるのだぞ？」

「え？ ま、まさか……」

唯子の意図を理解したテルは一瞬で顔の表情が冷めていくのを感じた。

「そうだ。男からだ」

凍る。背筋が凍りつく。これほどまでに嫌悪感を露わにしたことがあっただろうか。

「幸いわいにも君の周りには美少年とホモの執事が二人ほどいるじゃないか」

「ねえーから！ 断じてそんな展開ねえーから！ カモが白鳥になるくらいねえーからー！」

「はーっはっはっは！ それも一つの愛の形、存分に青春を謳歌したまえ!!」

その言葉を残して盛大な高笑いを発しながら台車を転がして唯子は去っていく。

その唯子の言っていた事が本当に起きないことをテルは祈っていた。

○

(しかし・・・ホワイトデーか。　そもそもホワイトデーって男があげるもんじゃないの?)

帰り道、ヒナギクは二年の同じ境遇の人物と同じ思考を巡らせながら帰路についていた。

(まあそれは・・・好きな人から貰えたらさぞかし嬉しいでしょうね)　街はもうホワイトデー一色だ。　店頭にはホワイトデー用のグッズやお菓子類を売っている店で溢れている。

(どうせなら手作りでしょ。　男で料理ができないからお店で妥協して相手に渡すなんてどうかと思うわ)

と、ヒナギクが自分で結論づけていたところで一つの小さな菓子屋に足が止まった。　ガラス張りにされた店頭にはホワイトデー商品が並んでいる。

「ヒナギクさん」

不意に声をかけられてヒナギクが振り返るとそこにはハヤテの姿があった。

「あ、ハヤテ君・・・」

「この前は助けていただいて有難うございました・・・」

「助けたって、わたし何もしていないけど・・・」

「いえ、あの下田に行く途中で西沢さんとゆつくり話が出来ましたし・・・」

ヒナギクはハッと気づく。　そういえば自分の計らいでその時はハヤテと歩を一緒にさせるように仕向けたのだ。

だが、下田の温泉でヒナギクが歩と色々と話し合ったのをハヤテは知らない。

「そ・・・そう!!　良かったわね!!　大事にしなきゃダメよ!　とっても優しい子なんだから!!」

「ええ。　それでちよつとヒナギクさんに相談があるんですけど・・・」と苦笑でハヤテは続ける。

「西沢さんにホワイトデーのプレゼントをしようと思っっているのですが、どんなものがいいでしょうか?」

「え?」

と、ヒナギクは一瞬だけその言葉に身を固まらせた。

「こういうのって男の意見より、女性の意見の方が大事だと思うんですよ。そう、男なんかより女性の方が!」

「なんか今日男に聞いて失敗だったみたいない方だけど・・・やっぱりそういうのってクッキーとかじゃない? こういう可愛い感じの」
「あーこういう感じの奴ですか?」

ハヤテとしては装飾の凝ったクッキーの詰め合わせがバスケットに入ったものだった。ハヤテとしてはデザインもよくて誰かが貰えば絶対に嬉しいと思うものだろう。

だが、それは最初にヒナギクが見ていたものだった。それもただ見ていたのではない。

自分が好きな人から貰いたかった商品だった。

「そ・・・そうね。そういうのを貰えば、女の子は喜ぶんじやない?」
その時は、一般論を出した。恐らく、こうやって言っておけばある程度は大丈夫だと思われる言葉をだ。

ヒナギクの勧めもあつてかハヤテも納得したようだ。

「有難うございますヒナギクさん! やっぱり男の人とは違いますね!
! ホント、男の人とは!!」

(さつきから・・・朝から男でトラブルでもあつたのかしらね?)

「ま、まあこのプレゼントは私が選んだっていうのはNGよ? 分かった?」

「え? なんですですか?」

あ、呆れた・・・。とヒナギクは改めて思う。それではまったく意味がないではないかと。

(あーもう、説明することもめんどくさい!!)

「とにかく! ちゃんと自分で選んだっていうのよ! 早く買いに行きなさい!!」

「は、はい!!」

若干怒り口調でハヤテを急かし、ハヤテが店の中に入ったのを見てその場を後にした。

(ま、チョコを渡していない私になんてもらう資格なんてないけれど・・・)

思えば、あの時は自分の気持ちがハッキリしていなかった。だが今は気持ちに素直になればハヤテのことは好きであり、こういったイベントの時に貰いたいという気持ちが無いと言われたら嘘になる。

(それとも、あの時にチョコを渡していれば・・・私も貰えたのかな・・・ハヤテ君から・・・)

肩を落として一気に気持ちが下がった。思えば、自分は恋愛において常に後手に回っている気がする。

「な・・・なんてね!! そんな暗いこといっててもしようがないわ!!」
ヒナギクは強引に声を高くして、携帯電話を取り出した。

「下田では結局ハヤテ君の事は話せなかつたけど、アユムからはバレンタインのチョコを貰ったんだから話すきつかけが・・・」

歩の電話番号を電話帳から探してダイヤルする。コールが2, 3回ほどなってメッセージが耳に響いた。

「あ、歩——」

『Jud. この電話は現在ぶっ壊れております。具体的には自転車に乗っているところを暗殺者に襲われた時、思わず落として壊れています。メッセージも残せません。そのまま切るかキレてください。——以上』

携帯電話から聞こえるどこかの自動人形のような音声を聞いてヒナギクは携帯を閉じる。そして・・・。

「も——!! なんなのよこれは——!!」
キレた。

○

数十分後。 買い物物を済ませたハヤテは買った商品を片手にと負け犬公園に足を運んでいた。

「お返しも買ったし・・・後は感謝を込めてこれを西沢さんに渡すだけだな!!」

しかし、歩いていた足を止めてハヤテは或ことに気付いた。そ

う、簡単そうに見えて実はすごく難しいアレ。

「どうやって渡そう・・・」

そう、相手に渡すという行為だ。 一見簡単そうに見えるが、これは様々な条件や想定される会話やタイミングを考える必要がある、最大の関門でもあるのだ。

(あれ? なんか凄い緊張してきたぞ・・・まずい。 落ち着け自分・・・)

そして深呼吸を始めるハヤテの後方の茂みで蠢くものがあつた。
帰宅途中の西沢 歩である。

(ハヤテ君、なんであんなところに? しかもあの手に持ったものは・・・まさか・・・私へのホワイトデーのプレゼント? いや、まさかね。 いや、でも・・・)

今朝から今さらになつて貰いたくなつたということもあり、歩も期待せずにはいられない。 願っていた事がなくなつてしまうとは。

と歩の顔がうつすら赤くなつていく。

(取り敢えず・・・声だけでもかけてみようかな? 声だけでも・・・ヤイサホ——つて・・・)

と、恐る恐る声をかけようと決意したとき、ハヤテはというと。

(よ・・・よし、こんな時はまず予行練習だ予行練習・・・心を落ち着けて・・・そして・・・そして・・・)

心の揺れを水の波紋と例えてそれがなくなるまで精神を統一させる。 そして水の波紋がなくなったとき、目の前に歩がいるとイメーჯさせてシユミレーション通りに持つていたお菓子を両手で差し出した。

「これを・・・受け取ってください!!」

(んゝこんなものかなあ・・・アレ? 見たことある靴だな・・・誰だっけ?)

お辞儀するような姿勢をとっているため、ハヤテにはその下の地面しか見えなかった。 そして直感的にこれはどうもマズイ予感がすると思ひ顔を上げると。

「・・・え?」

「……………」

見慣れた靴の正体……そして同時にハヤテの言葉を聞いていた人物は、なんとテルだった。

第83話くいつか返そう。思いもこめてく

(あ、ありのままに起こったことを話すぜ！ ホワイトデーの日は公園に来たと思ったらハヤテにチョコを渡されていた!! 恐怖なんて代物じゃねえ、もつと別の何かの片鱗を味わったぜ・・・)

お昼真つ盛りの公園で善立 テルは混乱していた。まさか、人生初のホワイトデーのお返しをマジでもらうとは思っていなかった。

これが MARIA とかなら テルはもう嬉しいこと限りのだが。

渡した相手は見た目は童顔で良く女らしいともいわれる・・・。

「えーつと・・・俺貰っていいのかなあ・・・」

(だが男だ)

テルが相手の尊厳を傷つけないように丁寧に対応する。 そうだ。

間違ってもソツチ系の意味でこれを貰うんのではない。 別の方向性でもらうことが大切だ。

ハヤテは体を震わせている。 この状況が事故だというのはハヤ

テ自身も分かっている。

(どうやってこの局面を凌ごうかな・・・)

身も心も財布の中身も極限状態のハヤテは様々なパターンを脳内でシミュレートさせていく。 その中でこれが一番妥当だという考えを採用した。

「だ、大丈夫ですよ！ ホラ、テルさんには日頃からお世話になってるわけですし・・・そう言った理由ならこういったホワイトデーもありだっただけ誰かが言っていましたし！」

どんと一歩足を踏み込んで拳を握る。

「だから・・・男が男に渡すホワイトデーは！ 別に不純なモノなんかじゃないんですよオオオオオオオ!!」

「お、おお・・・なるほど・・・ね。 うん、分かった。 じゃあ貰っておくぜ。 ありがとうな」

(世話になってる人に、感謝する日か・・・)

震える手を頑張つて働かせてバスケットを受け取る。そんなことを想うが、相手が男なだけに複雑な思いだった。

なぜだろう。ちよつとハヤテの目が潤んるように見えるのは気のせいだろうか。しかし、これを深く追及することは間違いなくハズレだ。そう思い、公園を後にするのであった。

「ま、マズイ……とんでもないミスを犯してしまった。もう新しく買うお金もなければ手作りで何かをつくる時間もない。困った……どうしよう……」

その場を歩き回りながら考えていると。

「……」

「……」

幸か不幸かと聞かれたら間違いなく不幸だと考えるこの場面で、まさか本人の歩とぼったり会ってしまった。

「うわああ!! ににに西沢さん!」

「い、いやあ! こ!! こんなところで奇遇じゃないかなハヤテ君!!」
ハヤテは驚いている。だが歩は先程からの一部始終を全て見ていたのだ。だからこそ、尚更ここを今通りかかったかのような演技をしなければならぬ。

(ど……!! どうしよう!? まさかこんなところで西沢さんと出会ってしまうとは!! いや、ここで引いたら男じゃない!! ここは……!! ここは……!!)

「きよ……今日の六時にその公園に来てください!! 西沢さん!!
ちよつと……渡したいものがあるからああああ!!」

「え……!」

ハヤテの叫びにも近い約束に歩も一瞬だけ混乱したが流れになんとなく乗る。

「は、はい!! わかったわああ!!」

「絶対に!! 絶対に来てくださいいよおお!!」

「OK!! バッチリさああ!!」

ハヤテは自ら背水の陣を張つて自分を更に追い込んだ。

「は？ プレゼントを渡す練習してたら、そのまま別の人に渡しちゃったですって？」

「ええ．．概ねそんな感じですよ」

ハヤテの目の前には小さな鬼の角を出現させているヒナギクが居た。彼女が若干怒り気味の理由はもちろん、ハヤテがやらかしてしまっただけのことについてだ。

「ハヤテ君はただドジを踏めば気が済むのかしら．．．」

「あうう．．スミマセン、スミマセン．．．」

「だいたい間違えたんならその場で言えばいいんじゃない。なんでそんなことも言えないのよ、そんなことも!!」

「スミマセン、スミマセン。 ホント、スミマセン」

「それに新しいのも買おうにも他人に費やしていたせいでもう買うお金がないって？ 今まででけななしのお金を渡してたんだ。お人好しにもほどがあるわよハヤテ君」

「スミマセン、オカエシスルコトバモゴザイマセン」

(まったく．．．なんで私、この人のこと好きなのかしら?)

ヒナギクは今更ながら思う。片言で涙目を浮かべているハヤテは、間違いなく自分が思いを寄せる相手なのだが、こういったドジな面を見てしまうと何故自分がハヤテのことを好きなのかと疑ってしまうくらいだ。

「まあいいわ。 そのいい加減な正確を少しは直すために、失敗は．．．体でなんとかしなさい!!」

「え？ 体．．．ですか．．．」

「なんでソツチの方で解釈するのよ！ 殴るわよ!!」

最早お約束ともなっているハヤテの受け答えにヒナギクは拳を握り、それをハヤテの前にちらつかせながら強めの口調で言った。ハヤテも反省したようで、咳を一つ挟んで改めて聞く。

「一体、どうするんですか？ 手作りしようにも材料もないし、そう言った物を作る場所は屋敷くらいしか．．．」

「それなら問題ないと思うわ。私のバイト先の厨房を少しだけ使わせてもらうくらいは良い筈だから」

○

一方その頃、テルもまた別の意味で混乱していた。

「まさか・・・本当に男からもらうことになるなんて・・・」

右手にもあるバスケットがその混乱を生み出している。学校で唯子に言われた通り、男から貰うとは思わなかった。

「こ、こんなの人生初の体験だぞ。でも人生初だから、逆に新鮮だぞ・・・」

百合子や木原と山で暮らしていた時はお約束の『お母さんからのバレンタインチョコよ』を貰っていたため、親以外の誰かからこういったものを貰うのは人生初である。そう言った面では新鮮な気分だ。決してソツチの意味ではない。

「んゝこのまま喰ってもいいんだけどな・・・」

別に空腹にうなされている訳でもないし、すぐ食べたいわけでもない。ただ一つ考えることがあった。

「誰かに感謝する日でもあるかあ・・・」

ハヤテの妄言なのだが、テルは少し真面目に考えてみる。思えば、自分はそう言った形式的な礼をしてはいるのをも、直接何かを渡したり形に残るものを渡したりすることをしてはいない。

「あら？ テル様？ こんなところでごきげんよう」

「お、伊澄」

お菓子を手に持ちながら歩いていると伊澄とバツタリ会った。

ぺこりとお辞儀をして挨拶をしてくる。

「今日はどこに迷子になる予定なんだ？」

「別に迷子になる予定はありませんよ。ただの散歩ですよ？」

その散歩自体が迷子の元なんだぜ。とテルは心の中で突っ込むが、伊澄はプライドが高い。なるべく口にしないようにするが。

「つい先ほどオランダから帰ってきたところです。これがまた歩い

ていたらいつの間に・・・」

「さらっと海外旅行してんじゃねえか！ その感覚で海外に飛ばされるお前んとこの使用人の事を考えろよ!!」

と、やはり口に出してしまっていた。この少女伊澄は、歩いていくだけで迷子になるといふ歩くワープ装置。

気づけば東京からちやうど反対側のブラジルにまで勝手に行ったりする。その行動力は計り知れない。

「そういえばここ2、3日いなかったな。迷子だったのか？」
「・・・」

てつきり怒って喰いかかって来るかと思ったが伊澄が黙り込んだのを見てテルは首を傾げる。伊澄は視線をそらして言った。

「ちよつと、遠出の依頼をやっていたもので・・・」

「なんだ。2、3日もかかる妖怪退治だったのか。それならそうと、俺も呼んでくれればよかったのに・・・」

「いえ、そんな：別にそれほど難しい依頼でもありませんでしたし：それに」

そういうと伊澄は袖で口元を隠して小さく言った。

「もうその相手には二度と会うことはありませんし・・・」

その言葉に思うことがあつたが少しだけ考えただけでそれ以上は深く詮索しないようにした。

「なるほど。じゃあ依頼の帰り道だったわけだ。だったら報酬がてらにコイツを受け取ってくれよ」

と伊澄に先ほどハヤテから受け取ったお菓子の入ったバスケットを手渡した。

「これは・・・？」

「えーつと。なんだ：普段お世話になつてるわけだしな、別にチョコとか貰つていなくても感謝の気持ちがあらわせるなら相手に渡してもいいらしいぞ。ホワイトデーは」

「ほ、ほ、ほわいとですか？ しかし、これを貰うのは・・・」

慌ててバスケットを返そうとしたがテルが無理やり伊澄の手に押

し込んだ。

「俺はいつも鉄パイプ振り回すことしかしてないから。　こうやって直接的な礼とかやったことないから分からねえけど」

受け入れてくれたかバスケットからテルの手が離れる。

「命とか助けてもらってるお礼が糖分・・・なんていうのもなんか変だけどよ」

「い、いえ！　変じゃないです！　む、むしろ・・・嬉しいくらいで「ん？」」

最後の方だけ凄いい小声だったためか、旨く聞き取れず耳を立てるが伊澄が顔を袖で全体を隠した。　なにか恥ずかしいことでもあったのだろうか。

「で、では・・・私も来年の二月十四日にお返しします」

「あ？　別にいいのに。　俺がお世話になってることが多いのによ」

「そ、それとこれとは話が違います!!　わ、私は・・・!!」

伊澄が両腕を振って何かを訴えようとするがその時、テルのポケットの中から着信音が鳴った。

「あれ？　マリアさん？　あ、はい。　空いてますけど・・・わかりやしたすぐ行きます」

携帯を閉じる。

「悪いな。　なんかマリアさんが手伝ってほしいことがあるんだだよ。　じゃあな！」

そう言い残してテルは去っていった。

「も、もう・・・テル様ったら・・・」

伊澄はバスケットを抱いて表情をつんとさせて帰った。　だが時々ま顔が笑みを浮かべていたのを伊澄本人は知らない。

○

「な、なるほど・・・こいつのホワイトデーのお返しのお手伝いを・・・だいたい分かったんすけど、なんで喫茶店の手伝いを？」

ここはヒナギクがバイトしている銀何商店街の喫茶店『どんぐり』。中の厨房ではマリアとヒナギクが料理の仕込みを行っていた。

「まあかいつまんで説明しましたが、全部説明すると多分遅くなってしまうので都合のいい解釈でお願いします」

「はあ、時にマリアさん。俺は何をすればいいのか教えてください。料理なら喜んで……」

「い、いいえー！ 流石にそれだと死人が出かねないので……マナーを守れていない客人の取り締まりとメニューを運ぶ仕事をお願いします」

マリアは慌ててテルの暴挙を止める。そりやそうだ。テルに厨房を任せた暁にはどんな暗黒物質を含んだ料理が出てくるかわからない。なんせ何度も屋敷のキッチンを破壊している張本人だ。毒物を出してもおかしくないのだ。

テルがメニューを持っていくと途中でハヤテとあった。

「あれ……テルさん……」

「あ、ああ……」

お互いがなんとなく目を合わせずらい雰囲気になる。やがてテルが口を開いた。

「ハムスターにやるホワイトデーのことだったらその時に言えば良かったじゃねーか」

「は、はは……ですよ」

力なく笑うハヤテにテルが続ける。

「ま、まあ俺が発端になっちゃったようだしな……ちゃんと手伝ってやるよ」

「テルさん……」

「うん。それでお前がホモだということは隠しておいてやる」

「だからホモじゃありませんから!!」

怒るハヤテを背にテルはニヒルな笑みを浮かべながらメニューを運んで行った。

「なんか色々誤解を孕んでいたみたいですけど解決したようです」

ね」

「そうですね。ほんと、一体どんな誤解だったのかしら・・・」

高速で包丁を動かしてまな板の上の材料を切り刻んでいく姿からは想像もできない笑顔を浮かべるマリア。そんな忙しそうな素振りも見せず、マリアはヒナギクに聞く。

「ヒナギクさんは、今日はどうだったんですか？」

「えっ?」

とヒナギクの手が止まる。変に慌てたのが気になったのかマリアは加えて言った。

「いえいえ、バレンタインのことですよ。ちゃんと男の子から貰えましたか?」

「ああ、えーっと。やっぱり女の子からのがいつもより多くて・・・遂に三ヶタをマークしちやいました・・・」

苦笑いでヒナギクは答えた。三桁となると全部とかして500mのビンにいったとして十個くらいはいくのではないか。

「そうですね・・・でも、男の子からだって渡したい人はたくさんいると思いますよ? ただヒナギクさんが立派すぎてなかなか渡そうとしても一歩引いてるからだと思います。いっそのこと生徒会長をお辞めになつたらどうですか?」

「そ、そんなことはできませんよ。私、文武両道を三年間貫き通すつて決めたんです・・・マリアさんも今年はどうだったんですか?」

負けじとこちらも聞き返すヒナギク。あまり傷穴をいじる事はしたくなかったがこれくらいはしないと同等にならない。マリアは少しだけ包丁さばきを緩める。

「いつも期待していませんよ私は・・・あげた人とかも別にいませんし、もしあげたいって思った人が居ても私の性格上、大体もう渡しそびれちゃいますから。だからこの時期はあまり期待はしていないんです」

「・・・」

再び包丁を動かし始めたマリアをヒナギクは黙って見た。少しだけ後悔の念を感じたのは気のせいだろうか。もしかしたら、渡し

たい人がいたのかもしれない。でも2月14日の時にはその人に渡せず時間が流れて、今日を迎えた事で改めてその人に渡しておけば良かったと。

(マリアさんがそんなに渡したかった相手って……)

忙しさが増す喫茶店『どんぐり』。生徒会長は雑念を抱きながらも仕事をこなしていった。

○

「ハヤテ君……くるかな?」

午後六時。公園では寒さで両手を合わせて待つ歩の姿があった。(もう約束の時間だけどやっぱり人間の欲張りってあまり良くないな。都合がうまくいくようにお願いすると全然叶わないんだから……)

両手に向かって白い息を吐き、時計を眺める。もう来ないのではないかと思ひ、その場を去ろうとした時だった。

「西沢さん! 待つてくださーい!」

その声にいち早く振り向く。そこには息を切らしながら先程まで全力疾走でここまでやってきたであろうハヤテの姿。

「ハヤテ君……?」

「お待たせ……しました……。今までのお礼だつて、あります。

お嬢様のこととか、他にも……あと、なにより」

膝に両手を添えて前かがみになっていたハヤテは顔を上げる。

「バレンタインの時、西沢さんから貰つて……嬉しかったから」

息を整えて、心臓の音が一定を極めてハヤテは歩と向き合う。

「そういうのも……全部ひっくるめての……お礼です」

差し出されたのは小さな小袋。先ほど出来上がったのだろうか、二人しかいない空間に若干甘い臭いが流れてくる。

(相変わらずだね……もう少し色々理由を行つて欲しかったけど) わがままな自分の無理な欲張りを叶えてくれた愛しき人に歩は笑顔

顔を向ける。

「ありがとう……ハヤテ君」

○ 「なんか今日は一日中バタバタして疲れちゃったなあ」

すっかり日も暮れ、暗くなつた路地をジャージ姿のヒナギクが歩いていた。空を見上げながら歩いて月を眺めながら一日を振り返る。

今日、自分はどんな一日を送つたか。

(これで良かったのよね・・・これで)

そうだとも。歩はあの時にチョコを渡した。私は渡せなかつた。だけど、貰いたかつた。

「さっさと帰って寝よ寝よ」

体を伸ばして欠伸をこらえながら歩く。明日からは春休みだ。長い休みである。バイトも始まつて、どんどん忙しくなるだろう。

そうすばこの悶々とした気持ちも少しは晴れるだろうか？と思っていた時。

「ひ、ヒナギクさん・・・」

「え？ ハヤテ君？」

ちようど向こうからダツシユで走つてきた黒い閃光。キキーツとギャグ漫画のようなブレーキ音を立てながら止まつたのはハヤテである。

「どうして・・・」

「どうして・・・喫茶店の方に行つたらもう帰つたつて言つてたもんですから」

いや、そうじゃなくて。とヒナギクが心で突つ込むが声には出さない。何故ならハヤテが凄い息を切らしていたからだ。結構探したのだろう。額からの汗や服を通しての蒸気がゆらゆらと浮かんで見える。

「ヒナギクさんにはもお、試験とか、ヒナ祭りとか、下田の時もお世話になりましたので・・・受け取ってもらえると嬉しいのですが・・・」と、不意に小袋を渡される。下田の時は何かお世話になつたとい

うのか良く分からないが、ハヤテ特性のクッキーをヒナギクは受け取る。

「あれだけしてもらって・・・お礼はクッキーで済ますつもりなんだあ・・・」

「え!?! いや、そういうつもりじゃ・・・!!」

「くすつ、冗談よ冗談。ありがたく受け取っておいてあげるわ」

その言葉を聞いて最初はうろたえていたハヤテがホッと胸をなで下ろす。

「じゃあ来年はバレンタインのチョコをあげるわね」

「え?」

「ば、馬鹿ね! 義理よ義理! 変な期待はしないことね! 別に深い意味はないんだから!!」

「はは・・・わかってますよ」

力なく笑いながらいうハヤテにヒナギクもまた息をついた。

(馬鹿ね・・・私、ほんと素直じゃない)

ここは普通は素直に変な上からの発言をせずに受け取るべきだった。

「あー。ハヤテ君、お月様が綺麗よ」

「ホントですね」

今はこんな形でも、いつかは好きな人に対してもつと素直な自分になれていたなら、何か変わるだろうか。

来年のバレンタインデー、しっかり応えなくちゃね。

○

「へえ・・・やっぱりテル君はホモだったんですね」

「ちよつとちよつと!! いい感じで場面が変わってそんなみんなの俺に対するイメージが一転しちゃう発言しないでくださいよ!!」

ここはヒナギクたちが通っている道とは別の路地。マリアとテルがコーヒー缶を片手に歩いていた。喫茶店でお手伝いをしてくれたお礼に、喫茶店のマスターから貰ったのである。

「でも男の子からホワイトデーにもらうっていうのもなかなか新鮮な

体験だったんじゃないですか？ 内心嬉しかったとか？」

「いや、確かに新鮮な感覚ありましたよ？ なんかこう、自分の中で何かが開いたような・・・扉が、ええ」

「それはときめきですよ」

「いや、違います！ 断じて違いますから！ いつも思いますがマリアさんの俺に対する扱いって時々ひどいと思いませんか？」

「本人の目の前でその質問はどうかと・・・それにテル君はなんか出来の悪い弟をもった気分ですわい・・・」

そんな、出来の悪い弟なんて・・・。その軽く落ち込むテルを見てマリアはふふ、と笑みを浮かべるのだ。

「そりゃあなんでも超出来るマリアさんから見れば超出来の悪い弟かもしれないけど・・・」

「別に私はなんでも出来る訳じゃないんですよ？ 出来ることしかできません。自分のしてきたことに対して間違いをすることだってありますし、何より・・・後悔だつてするんですから」

かつては白皇の生徒会長の座につき、三年間優秀成績保持者である証の銀時計をもっているが、ひとりの少年の苦しみを、悲しみを分けることができなかった。

「私、たまに思うんです。自分って結構馬鹿だなーってことが」

その人には何度も助けられてきたというのに。自分は助けることすら出来なかった。逆に、彼の生き様を見せつけられる。

「だから私は『頭の良さ』人生で有利になる』っていう訳じゃないってことを理解してるつもりですよ。だからテル君も頑張ってくださいよー！」

パンツ。と背中を叩かれる。ちよつとだけよろめきながらもテルは苦笑いで体制を整えた。

「その・・・マリアさんは、今までホワイトデーに何かを貰ったことは・・・？」

「・・・」

気落ちしながらも発したテルの言葉にマリアが黙った。すると少しだけテルの一步前を歩きだす。

「私、バレンタインも誰かにあげたことがなくて・・・あげようと思つた相手も居ないんです。だからお返しなんて見込めませんし・・・私の青春、灰色でしょ？ 笑いますか？ テル君は」

その言葉にテルは首を振った。

「笑いません。でも自分で自分の人生青春を灰色という人には一生そのままかもしれないですけど」

「・・・言いますね、テル君」

「フフ、ようやくマリアさんから一本だけ取れた気がします」

と笑うテルはポケットから探り始める。

「でも良かったス。 てつきりマリアさんたくさんの人からもらつてると思いました」

「はは、また傷口抉る気ですか——」

と一発小突いてやろうかなとマリアが振り返ったとき、目の前に一つの包が差し出された。

「俺、いつもマリアさんに苦労かけまくってますから。 お礼言うにも全然相手に伝わらないし、あまりこういうの渡したことないっすからよく分かんないっすけど」

「私、もらう資格ないですよ？」

「そんな事ないっす。 逆に俺が渡す資格がないっす。 いつも期待に応えられてませんから・・・でも相手には、感謝したい人にお礼がしたいからっていう自分の我儘を許してくださいっす」

と言われて、今まで下ろしていた手を動かしてマリアはテルの小包を受け取った。 バレンタインに渡してもいない分不相応なホワイトデーのお返し。

「・・・ちゃんと来年、待つててくださいいよ？ バレンタインのチョコは誰よりも美味しくできる自信がありますから、それまでに色々あつて退学したり、三千院家から居なくなったりしたら許しませんから」

「いやあ、流石に借金を返すまでは居なくならないかと・・・じゃあ期待してますからね？ ワリとマジですからね」

「もちろんですとも」

スキップを踏みながら数歩またさきを歩いて振り返った時のマリ
アの笑顔はいつもより輝いていた。

これにてそれぞれの少年少女に色々と衝撃を与えたホワイトデー
のお話はおしまい。

第84話〜どんな状況になってもキャラがぶれないのはいいことだ〜

——朝。 どうかの庭にて大きな動物が深い眠りについていた。

その動物は全ての動物の生態系の頂点に立つ存在、ライオン。 鬣がついた立派な雄ライオンであり、名前はヘラクロス。

乙葉 千里のペットだ。

もともと野生から千里が力強くで従えてこちらに連れてきたものであり、その他の手続きは全て親が行なっている。

ヘラクロスがパチリと目を開くと、その瞳に強い陽の光が当たる。前足で顔をこすると大きく欠伸をした。

「おお。 今日も良い目覚めだなヘラクロス」

その隣でパジャマ姿で佇む大男がいた。 この屋敷の主、乙葉千里である。

千里は目覚めのコーヒーを口に含む。 使われているのは今朝とれたての豆から抽出したエスプレッソコーヒーだ。

『我が主、主はいつも朝にコーヒーを飲むという行為を続けているな。これは習わしなのか・・・』

と、心の中でヘラクロスは千里が口に行っているコーヒーを見つめる。

「先日、伊豆の地で秘湯に浸かってきたからだろうか。 体の調子がいい。 お前も連れて行ってやれば良かったな」

『我を置いて、主はそんな所に行っていたというか。 なんとまあ贅沢なことか・・・』

両前足を組んで顎を乗せたヘラクロスはまたしても目を閉じた。自分の主、千里と暮らして早三年になる。 最初こそ互角の戦いを

見せて張り合っていた一人と一匹だったが、今年に入ってはまったく勝てなくなってしまった。

『今まで散々戦いを申ししているが、主はこれをじゃれあいと勘違いしてしまっているようだ』

そう。実は今までの突進や飛びかかり行為も、全ては千里の隙を付いて命を奪い取ってやろうという気でいたのだ。だがその自分の下克上が届くばかりかじゃれ合いと認識されてしまっている。これは百獣の王にして最大の屈辱である。

「お前とも、長い付き合いになるな。最初こそ暴れて手が付けられなかったが、これからも俺の栄光のロードを共に歩んでくれるな」と、寝ていたヘラクロスの頭に手を乗せると優しく撫でた。本来ならその栄光の道はヘラクロスが先頭を切って歩くはずなのだが。

「しかし、今日は加賀美の奴が遅いな・・・いつもならもう来ているはずなのだが・・・朝六時だからか？」

加賀美とは、千里の専属の執事だ。結構な年寄りだが、ハヤテやテルも尊敬する執事の手本となる人物である。

「まあ、今日はこの俺が自分で料理を作るということになるのか？　なんとということだ。いくら加賀美と言えどこれは厳罰ものだぞ」

と、腕を組んでいた千里に目もくれず、隣のヘラクロスが起き上がっていた。眠そうな瞳は何かしら危険を察知したような野生の鋭い目つきへと変わっている。

「・・・？　どうしたヘラクロス」

ヘラクロスの感じ取っている異様な雰囲気気づかない千里。こちらへんが野生の違いだろうか。

不意に、玄関の方からインターホンが鳴り響く。千里はただの客だと思いきや玄関の門を開けた。

「ヒヤッハー！　朝早くスイマセン!!」

「ヒヤッハー!!」

「ヒヤッハー!!!」

「な、なんだ貴様ら!!」

門を開けると、そこには世紀末のモヒカンをした黒服の男たちが居たのだ。

「はいはい、ちよつと失礼しますぜヒヤッハー!!」

一人目の男が入っていくと同時にあとの男たちもぞろぞろと中庭

になだれ込んでくる。これを黙ってみている千里ではなかった。「貴様ら、王の中庭でこのような狼藉、いい度胸をしている。万死に値される覚悟はあるか」

千里が睨むと同時に、隣にいたヘラクロスも唸りを上げる。威嚇だ。男たちがそれを見て数歩下がる。

「ちよ、ちよつと待て！ 俺たちに何をするつもりだ！ 俺たちは公務員だぞ！ 公務員!!」

「公務員……か？」

「あ、今馬鹿にしたなお前！ このモヒカンを見て差別したろ！ こう見えても公務員なんだぞ!!」

と、後ろの方ではモヒカンの軍勢が四人がかりでヘラクロスと挑むが叶うはずも無く、追いかけて回されている。

「……」

「えーい！ ライオンに追いかけて回されてる公務員なんているかお前らー！ 早く仕事にはいれー!!」

「ピヤッハーツ！ わかりましたぜ班長!!」

男たちは勝手に屋敷の中に入り込み、家具や物品を物色し始めた。

「き、貴様らー！ 一体なにをしているのだ！ 答えろ！」

千里の怒りが爆発する寸前だ。朝から堂々と屋敷内に勝手に上がってきたと思えばそれを勝手に荒らされているのだ。

「あれ？ 知らないんですか？」

それをモヒカンの班長格の男が首を傾げていた。

「これですよ。今日の朝、こんなニュースやって……」

「ニュース？ 知らん。昨日から電波の調子が悪くてテレビがつかんのだ」

千里は昨日の夜、急にテレビの電源が落ちてしまっただけでテレビが見れなくなったのを思い出していた。

ここ2、3日酷い雨が降っていたためか、その雷でアンテナが壊れてしまったのだろうか。

「あれのせいでムツ〇ロウ王国の再放送、見逃してしまったではないか」

「知らねーよ！　なんであんな昔の番組見てんのアンタ!!」

「馬鹿にするでない！　己の身ひとつで野生の凶暴な動物たちと向き合い、従える姿はまさしく野生の王！　尊敬の念を贈らずして何が王か!!」

「だから知るかアアアア!!」

と、男は心を落ち着かせてわざわざ車に戻って千里に何かを突きつけた。

「今日の新聞だよ。　これ見て現実見やがれてんだ!!」

「現実を見たほうがいいのは貴様らではないのか?」

と黒サングラス、金髪モヒカンの公務員に一言申しながら新聞を開いた。　その文面を見て、千里の表情が一瞬で凍りつく。

「なん・・・だと・・・」

そこに書かれていたのは。

○

結野アナ「昨日発表された、乙葉グループの会社が事業に失敗して倒産してしまったということですが、解説の草野さんはどう思いますか?」

草野「そうですね。　これは政治界にも激震が走りますよ。　乙葉グループの重役には政治にも関係している人物も何人かいるらしいですからね」

結野アナ「乙葉グループの負債は公式的には一切明らかにされていませんが、この事業失敗を機に多くの乙葉の事業が撤退を始めているとのことですか」

草野「恐らくありえないくらいの負債を抱えてしまったんですねえ。　あまりにも負債を抱えすぎて、自分の持株とか別荘とか売り飛ばしてるんじゃないですかねえ。　しかし、乙葉グループの社長、乙葉　源蔵氏も行方を暗ませてどこにいるかわからない状態なんでしょう?　まったく、ふざけたロスタイムですねえ」

結野アナ「以上、東京ウミテレビでした」

○

「オイオイ、マジかよ。あの王様の会社が潰れたってマジかよ？」

三千院宅でこのニュースを見ていたテルたちは騒然としていた。ナギは食べていたパンをくわえたまま硬直し、ハヤテは箒を掃くのをやめ、テルは飲んでいたコーヒートを下に垂らしていた。(サボリ)「これで政界の歴史も、日本の歴史もまた新しい歴史が刻まれるのか・・・悲しいな」

「お、お嬢様・・・意外とドライですね」

「別に。だが経営に一つのミスを許さない乙葉グループが事業に失敗するなんて、なかなかドジな一面を見せてくれるもんだ」

寝ぼけていた目で再びパンを食べ始める。この手の話題には興味を示さないのは分かっていたが知人の名前が出たのだ。もう少し関心はもたないのだろうか。

「しかしまあ、テレビで言われていた事がマジだったら今頃王様の家は大騒ぎだろうな」

「ええ・・・リアルで 12月のハヤテ君みたいに差し押さえ、身売り、夜逃げ、からのトラブルで執事とかやったりして、不幸で哀れな道を歩むことになるんでしょうか？」

「マリアさん、そんな僕のこの人生を否定するような言い方を・・・ちよつと涙出ますよ」

ハヤテが肩を落としてため息をつく。だが、こうしている間にも千里の家が大騒ぎしていることは変わりない。

「ま、これからアイツも大変だな。学校で会ったらちよつとは哀れんで毎日人参くらい送ってあげようぜ」

「そうですね。じゃあテルさんは野菜担当、僕は糖分担当でいきます。僕はチョコとかでいいでしょうか・・・」

「お前ら・・・私にドライとか言っておきながらお前たちが一番ドライ

「なのではないか？」

ナギがパンを食べ終わるとマリアが用意した牛乳を受け取ると一気飲み。ふはつと息を吐いた。

「まあ私たちにはあまり関係ない話なのは確かだ。さてハヤテ、今日は是非とも読んでもらいたいものがある。私の新作だ。ジャンルは王道を外れた邪道の——」

ナギが言おうとしたその瞬間。無防備な状態でいたこの一室で、彼らは衝撃的な光景を目撃する。

居間の窓を巨大な何かが突き破ってきたのだ。窓のガラスは砕け散り、辺に飛び散った破片からハヤテがナギを守った。

「な、なんだア？ 朝っぱらからこの三千院邸に堂々と侵入してくる奴はア!? 咲夜くらいしかこんな度の過ぎた事はしねえぞ!!」

反射的に鉄パイプを取り出して構えたテル。だがその次の瞬間にはテルに向かって何かが飛びかかってきた。

飛びかかった物体は口を大きく開けてマウントポジションを取り、テルの顔にかぶりつく。

「ぎゃああああああああ!! 生暖かい感触がア!! 牙が!! なんか牙が頭蓋を砕いてる音がするウウウウ!!」

「こ、コレって・・・千里さんの家のペットのヘラクロスじゃないですか」

生きるか死ぬかの瀬戸際でハヤテは冷静だった。その後続くように一人のお男が入ってくる。

「こらヘラクロス。そいつは食べ物ではないぞ。噛むのを止めんか」

「あ、千里さん！ 一体どうしてここに？」

「うむ。俺も今一体どうなっているのか混乱している。朝から黒男が家を押さえたり、マスコミに追われるわで・・・困ったものだ」

千里が腕を組んでいる間にもその後ろにいるテルの頭はもはや規制ナシでは公開できないような惨状へと発展していた。

「ちよつと二人とも！ テル君の心配もしてあげてください!!」

○

「それじゃあ、やっぱりあのニュースは本当なんですか？」

ヘラクロスをテルから引き離してハヤテたちは千里を椅子に座らせて状況の確認を行っていた。

「そうだ。最近はずいぶん経営が傾き始めていたのだが、たかだか一つの事業が失敗しただけでこんな事になるとは思っていたなかったのだ」

と、千里はマリアから出されたコーヒを一口ふくんで続けた。

「父上に電話してもまったくつながらない。母上も恐らく父上と一緒にいるはずなのだが・・・今日の朝に自宅からの立ち退き願いが出されてしまった。俺は納得いかなかったがマスコミ達が押し寄せてきて混乱してしまった」

「いや、それで俺たちの所に駆け込むのはなんで？」

包帯ぐるぐる巻のテルが言う。三千院家の医療はそれなりの設備があるはずだが、先程まで瀕死だった人間にこんなアバウトな処置はいかがなものだろうか。

「ここではなくてはならないのだ。俺のヘラクロスが自由に動いているのは隔離されたあの屋敷のような場所だけだ。それは同じように広大な敷地を持つここだった・・・それが理由だ」

そんな理由で瀕死直前まで追い込まれてしまうのは勘弁である。

しかしその理由は分かる。この三千院家でもタマと言う名の白いトラがいるのだが、それが外に出回ったときは三千院家で東京のあちこちを探す羽目になったのだ。

無事見つけることができたのだがそれまで誰にも見つからなかったのが奇跡なくらいである。

こんな我侷な千里でも一応ペットの事は考えているのだとちよつと考えを改めさせられる。と思っていたが。

「そこで・・・だ。俺が命ずる。ここに暫く住まわせる」

「は？」

「え？ 何・・・それは」

ハヤテとテルが目を何度か見開いた。

「えっとテルさん。 僕は何か聞き間違いをしてはないでしょうか。」

僕の記憶が正しければ今千里さんは『俺をここに住ませろ』と」

「いや、ハヤテ。 俺も何が起きたのか分からない。 どうやら間抜け時空に囚われてしまったようだ」

「マリアー。 耳掃除お願いしてもいいかー」

「ちよつと待っていてください。 今耳かき持つてきますから」

ハヤテやテルだけでなく、後ろにいたマリアとナギも千里の一言を疑っていた。 千里は咳を一つ挟んで。

「俺をここに住ませろ」

「無理無理無理!! マジのライオン連れた暴虐暴君をこの屋敷に住ませるなんてぜってー無理ツ!! つーかなんで命令口調なんだコラ!!」

「俺が王（キング）だからだ」

「堂々としてるなコイツ。 だからめっちゃむかつくんだけど」

先程までの好印象を一瞬でナシにさせてしまった。 やはりこの男、ダメだ。

取り敢えず理由を聞かせてもらおうと思ったのか、ハヤテが千里に聞いた。

「えーつと。 一応聞いておきたいんですが、誰からも連絡がないんですよね？ ちなみに、ご自分の所持金とかは・・・？」

「最初に自分の通帳を開いてみたのだが、カードも自分の資産も何もかもが凍結されていた。 確か二千万くらいはあったはずなのだが・・・」

妙だな。 とテルは思う。 たかだか事業が失敗したからって千里の資産やカードまでもが差押になる訳がない。 まず事業の撤退から千里の両親の行方を暗ますまでの流れが自然だ。 自然すぎるのだ。

誰かが作ったとしかような考えられないような流れ。

と思っていたとき、外が騒がしい事に気がついた。

「なんだか外が・・・」

「恐らく俺の事を追ってきたのだろう。いつも世の中は大手の会社のスキヤンダルには鼻が利く・・・だから嫌いなのだ」

テルは割れた窓から外の景色を見て唾然とする。三千院邸の前に大きなワゴン車が数えても十台。カメラやメモ帳を手にもった人間が50はいた。

「やっべえ人多っ！ 気持ち悪いくらいに多っ！ でもちよつとハリウツドのスターになった気分!!」

ちよつとだけ心臓がドキドキしてるテルをよそに、ナギは外の光景を見て顔の表情を歪ませた。

「オイオイ。こんなんじや落ち着いてくつろぐ事もできんぞ。テル、ちよつと追っ払ってこい」

「なんで俺なんだよ。 こういうのはやっぱハヤテとかじゃないの？ もう『カメラに向かってごめんなさい』方式でいいじゃん。

ぱーってハヤテが扉開けて出て、メイド服になったハヤテが『皆様の需要にあまり答えられなくてごめんなさい』って言えば万事解決」

「なんで僕なんですか！ メイド服きてその台詞を言うことになんの意味があるんですか!! 需要とか男に求められても困りますって!!」

思いつきり手をばたつかせているハヤテの声が飛ぶ。この問題、いったいどうやってい解決したものか・・・。

○

数分後、三千院家の広場でのマスコミたちはざわめきを更に大きくさせていた。

「しかし、なんでこんなところに千里氏は逃げ込むようなことを」

「もしかしたらあの日本で有数の三千院家に取り合ってもらおうってことじゃないのか？ だけど、今の乙葉グループで三千院家が吸収する価値があると言ったら・・・」

「うーん。頭髪用のシャンプーくらいか？」

なぜだか、シャンプーの売上で乙葉グループが開発した頭髪用シャンプー、「王の輝き」は抜群の人気を誇っている。

キャッチコピーは『世界の全てが従うような髪へ』だ。どこかのシャンプーのキャッチコピーと似たようなものがあつた気がするが突っ込んではいけない。

「おい、誰か出てきたぞ!!」

と、一人の男の声に皆が動いた。見上げるは三千院家のテラスだ。一人の男が布団をもって佇んでいる。

「スイマセーン！ 海テレビのものです、乙葉グループの嫡男、乙葉千里くんは三千院家と何か会談を行なっているという情報ですが、それは本当なのですか——!？」

正確にはそこでちらほらと耳で聞いたことを記者の一人は大きな声で告げた。これはマスコミのなかでの予想なのでそんな事は全くない。だがマスコミというのはどんな情報でも拾ってネタとして扱ってしまうのだ。それが例え嘘の情報でも。

「そこんところどうなんですか——!!」

周りの記者も乗せられて大声で煽る。だがその多くの煽りに動じることなく、男は布団を手すりにかけてハタキを構えて叫んだ。

「う——っさいんだよ！ いい加減にしろってのがわかんないかねエ——!! そうやってまでウチらを悪者にしたいかア——

!! それがマスメディアかア!!」

その男、テルはハタキをパンパンと一定のリズムで叩き出す。

「かっえっれっ！ かっえっれっ！ さっさとかっえっれっ！」

「そんなことしてたら近所から孤立しますよー。いったいいつのネタやってるんですか——！」

「うるせー！ もうこの広い敷地のせいではぼ孤立してるようなもんだー！ 籠城なんてお手の物よー！ ニートお嬢様にホモ執事、真っ黒メイドじゃーい！ これだけの人間に囲まれて孤立しない方が可笑しいんじゃない！」

「スゲー言われようだなこの家！ ここまで自分の働いてる職場に文句言う使用人見たこと無いぞ!!」

記者がもの凄い勢いでメモ帳に内容を記していく。だが、記して

いる途中で。

グチャ。

「え?」

記者の持っていたメモ帳が突如黄色い液体を被った。半透明で、その中心は黄色というどこかで見たことある物、それは卵。

「うわっ! 卵投げてきやがった! っていうか臭ッ! これめっちゃ臭ッ! 腐ってるだろうコレッ!!」

「二ヶ月、倉庫のところで腐ってた卵だコラ! 噛み締めろよ!」

秋田比内地鶏だー もって帰らなきゃ損するぜー!」

「だ、誰がこんな腐った卵持って帰るかよ! 逃げろー!」

投げつけられた記者たちはその臭さ故か鼻をつまんで、あるいは涙を流しながら正門へとダツシユ、来る前へと逃げ込んで三千院邸から離れていった。

「ふー。一回やってみたかったから試したけど結構爽快だなあマスコミ追い払うの・・・アレ? ナギにハヤテにマリアさん? どうしたんですかこんなところで。マスコミ、追い払ってやりましたよ。アレ?なんで三人とも俺の肩の上に手を置いてるんだ?」

次の瞬間。 三千院邸の執事長クラウスは、黄色い液体にまみれて腐乱臭のする広場に横たわるひとりの少年の姿を目撃した。

○

「それじゃあ親とかから連絡がくるまで・・・ということだ」

「うむ。心得た」

千里が腕を組んだままうなづいた。 結局のところ、その千里の使いや親からの連絡が取れるまでの間にこの三千院家に住まうという事になった。

「ホラ、その執事さん。早くしないと今日の仕事終わりませんよー。 その仕事、今日の時給分には含まれませんからねー」

「すみませんでしたア——! ホント、すみませんでしたア——
——!! オエエエエエエエエエエ!!」

マリアは外にいる黄色い腐乱臭のする広場を鼻にティツシユを詰
めながら懸命に掃除するテルに声を飛ばした。ブラシで丁寧にか
すりながらテルは鼻から僅かに伝わる激臭に涙を流す。

「それにしても・・・なんか引つかかりますね」

「そうですね。　なんでこんな息子を置いて行くようなことを・・・？」
「・・・わからん」

ハヤテの問いに、千里は戸惑いながらそう答えた。　何故千里だけ
がこの地に取り残されたのか、何故捨てるような事をしたのか。　未
だに連絡が来ないことが不思議である。

(どうしてだ・・・父上)

千里は胸の内に宿る複雑な思いが消えないままでいた。

こうして、三千院家に新たな入居者（仮）が増えたのである。

第85話くサブとメインは悩みの度合いが違うく

「うくん・・・」

朝、三千院ナギは窓から指してくる陽の光に目を覚ました。と
いっても完全に覚醒というわけではない。目だけが開き、体は全く起
き上がるわけでもない。 まだ体は寝ていたいという状態なのだ。

「お嬢様くそろそろ起きてくださいよく」

扉が開き、ハヤテが入ってきてナギの名を呼んだ。 だらけていて
も朝はしつかり起きて欲しいため、自分の主を起こすというのも執事
の仕事に入っている。 今更説明する必要もないが。

「地球が後一周したら起きるくおやすみ・・・」

「一周したらまたその理由で寝るんですね。 わかります」

無理やりでも布団をひっぺはがしてでも・・・という行為に及ぶの
は流石に控えたか、布団の上からさする程度にして起床を促す。

「私も本当は起きたいのだ。 でも私の起床をあの太陽が邪魔してい
るのだ。 ハヤテ、お前があのだ太陽を壊して永遠の夜をくれるとい
うのなら私は起きてもいいぞ」

「取り敢えず、地球破壊爆弾が何基必要になるんですかね・・・」

とハヤテも毎度のことながらだが、このパターンには呆れていた。
いや、もう呆れるを通り越してしまっているようなものだろう。

「そう言えば王様先輩がこの屋敷に住み着いたのだったな。 今どう
してる？」

ナギは昨日付でこの屋敷に住まうことになった新たな住居人、乙葉
千里の事をさした。 ハヤテはナギの質問に淡々と笑顔で答える。

「千里さんはもう朝から起きてます。 なんでも朝の六時前に起きて
外に出るのが日課だとか・・・朝食も採ったんですが・・・今は」
「ん？」

と、ハヤテの表情が苦笑いに変わったのを見てナギは首を傾げた。
実はという・・・。

「ぐおおおお!!」

三千院家には数箇所ほどトイレが設けられている。広すぎるため、どこでも用を足せるようにとの考えだ。この食堂を出てすぐの場所にあるトイレもその一つだが、今は一人の男がそのトイレを占領していた。

「ぬおおおおおお!!」

三つある大専用の用をたす場所の一箇所から苦痛とも捉えられる叫び声が聞こえていた。

「王様ー。大腸の具合はダイジョブですかー」

タイル式の壁に寄りかかり苦痛の叫びを発する場所へとテルが声をかける。右手にはコップと錠剤があった。

「き、貴様!! この俺をなんだと思ってるのだ!! この屋敷は王である俺に毒物の入った朝食を食べさせるというのか!!」

こらえる。ひたすら来る便意に千里は腹を抑える。

「失礼なー。俺の料理をそんな風に言うとは、王様も食わず嫌いですなー」

「食った結果がこの結果だこの馬鹿者めツツ ぐうおおおお!!」

またしても腹部の奥から唸りを挙げたのに反応して千里が唸った。

もう大抵の人間はわかると思うが、千里がお腹を壊した原因はほとんどこのテルの仕業である。

「王様? アンタがいつも王様だっていうもんだから洋中心の料理がいかなーって思ってた。だから色鮮やかなフレンチトースト、最高級の卵を使ったスクランブルエッグ、サラダ、その他もろもろを用意してやったじゃねえか。何が不満あったんだよ」

(不満もくそもあるか・・・!!)

千里は思い出す。自分の食卓に出された毒物と言うあの料理を。

まず始めにテルの言っていたスクランブルエッグだが、ほぼ固形の状態で銀色で出来ていたのは何故だろうか。パンにしてはどう見ても焦げたとしか言いようのないトーストをチョコトーストと言って差し出す。サラダにしてはあのみずみずしさはどこに行ったのかと思うくらいに辛かった。

そんな物を食わされれば腹を壊すのは当然である。

「取り敢えず、なんでこんな事になったか分からねえーけどさ。ここに胃薬置いておくぞー俺は仕事戻るから」

「誰のせいだと思ってるのだ!! 待て・・・おおおおお」
ニヤリと顔を歪ませたテルはその場を後にするのであった。

○

「というのが・・・現状でして」

「ふーん」

と、話の一部始終を聞いた上でナギは布団を被ってくるまった。

「何やってるんですかお嬢様？ そんなに丸くなって、ビスケット・オリバじゃないんですから」

「もう起きたろー。 いいじゃんか、それで一日終了しても」

「良くないです！というか、千里さんのこと他人事ですねその対応」

「当たり前だろ。 他人以外のなものでもないのだからな」

○

「漸く起きてきたかこのねぼすけは」

「五月蠅い」

数十分たつて、ようやく三千院家の主、三千院ナギが起床してきた。

寝巻きの姿で髪はボサボサ、顔はもう寝起きで半分まだ寝ているように目が細かった。

「そういえば咲夜の奴がさあ」

朝食を取り終えたナギがソファに腰を下ろしてリモコンを動かさうとしたのを中断した。 どうやらこの場にいる使用人たちに話しかけているようである。

「なんか最近、新しい使用人雇ったらしいんだよなあ」

「そうなんですか？ どんな人なんですか？」

ハヤテが聞くとナギは頭に手をやりながら思い出した。

「確か一人がメイドで名前が『ハルさん』って言うんだよ。 これがえ

らく美人でってアイツが凄い自慢してた」

「咲夜さんも女の子ですし、それくらいの方が居てもおかしくないんじゃないでしょうか。そう言えば以前に咲夜さんの専属の執事さんとお会いしたような」

「ああ。そう言えば巻貝と佃煮だっけ？」

うーんと唸るハヤテにテルが掌を叩いて思い出したかのよう口を開く。どこからそんなネームが浮かんできたと突っ込んでみたくなつたが今回ナギは冷静になつて指摘する。

「いや違うだろ。海苔巻きとドクダミだ・・・アレ？」

「あの、ナギ？ 全然違いますからね？」

ナギもどうやら忘れていたらしく、この場に最終的に突っ込んだのはマリアだった。

「巻田さんと国枝さんですよね？ 手を叩いたらテーブルとケーキを用意することに定評のある」

「ハヤテ君もそれしか印象残ってないんじゃないんですかね？」

結局のところ、誰一人詳しく覚えてる人物が居なかつたのだ。

「しかしまあ、そんな人たちの名前、俺久しぶりに聞いたかもなあ。でも実際原作でも凄いハブられてるし、空気状態になつてるんだろうな」

「空気で悪かつたな!!」

その居間に突如として二人のメガネをかけた若い男が現れた。

一人は白、片方は黒い髪の色だ。

「・・・え？」

あまりのことに一同騒然。白い髪の男が慌てて声を飛ばす。

「いや、『え?』ってなんだ!!」

「その『アンタら誰?』みたいなリアクション止めてくれ! つとつか、名前まで分かつておきながら顔は覚えてなかつたのですか!」

今度は黒い髪の男が騒いだ。テルがその様子を見て告げた。

「まあこの小説でも実際に出たのなんて一回くらいのはずだし、もともとの小説もオリジナルの話と変に登場人物が偏っちゃうからサブの方々との絡みが少ないという作者の未熟な面による犠牲。ウ

チの執事長とかもそうだし」

「いやですねテル君。クラウスさんはもう居ないようなものじゃないですか☒」

さらつと言ったその何気ない一言を扉の後ろで聞いていたクラウスは辞表を考えたという。

○

「それじゃあ少し落ち着いた所で。 私が巻田」

「国枝だ」

一息つき、慌ただしさもなくなって二人が自身の名をあげた。黒い髪が国枝。白い髪が巻田ということらしい。

「なんか凄いウォーターライダーの流れと勢いで自己紹介が始まったけど・・・」

「しーっ。テル君は少し静かに・・・」

とマリアが指を立てて注意したのでテルは大人しく話を聞くことにした。

黒い髪の男、国枝がメガネを動かして話を続ける。

「私は愛沢家にお仕えして十六年、巻田は十四年だ。 咲夜お嬢様が赤ん坊の頃からお仕えしているということになる」

「実のところ、新しいメイドを雇おうと言ったのは我々なのだ。 理由は、最近のお嬢の体の急成長によるもので・・・」

「ああ、なんかわかるぞソレ。 咲夜のやつの最近の成長っぷりには私も驚いたくらいだ。 別に羨ましいともなんて思っていないぞ？

ただ藁人形を作ろうと思っただけだ」

巻田の言葉にナギが深く頷いた。 巻田は続けて

「この間も、我々の前に普通にあられもない姿で現れたときは流石にもうまざいと思つて・・・」

「ああ。 我々ではもう手に負えないと考えたのだ」

「いい大人が十三歳の少女に欲情してらっしやる」

「コラ！ 誤解を招くようなことを言うなそこ！」

「そうだ！ 本来ならばこのお嬢様の成長は喜ばしきこと！ だがお

嬢様もお年頃であるため、そういうデリケートな所に気を使うのもまた執事の仕事だからだ！」

テルの言葉に二人が全力で否定しつつ、曲解なき理由を説明した。「そうだと。だからそのメイドが凄い出来る子だとしても、お嬢様がなかなか相手してくれなくなっても、この気持ちは決して嫉妬とかではない!!」

「いや、もう嫉妬の塊バリバリですよ。もう、そうやって口に出てる時点でこれでもかって位に嫉妬全面に出してますよ」

マリアが言うが、この二人の語りもガチである。巻田に関しては鼻水を垂らして涙が滲んでいる。マリアはそつとティッシュを差し出した。

「でもまあ、アンタがどれだけ悩んでるかは大体分かった。新しいメイドが入って大活躍なのは仕方ないとして、アンタらがこれから何を一番に考えなきゃならないかわかるか？」

突然テルがニヤリと笑い、巻田と国枝に問いかける。

「な、なんだ・・・？」

生唾を飲み込み、喉を鳴らした二人はテルの答えを待った。テルはそして告げた。

「再就職先」

この四文字が巻田と国枝の胸を槍となつて貫いた。

「この先、いつお二人がお払い箱になるか分からないから。だから今のうちに新しい仕事場を見つけておく必要があるんじゃないか？でも今はただでさえ不景気で職難の時代。ハローワークには浪人した学生と退職、派遣切りされた人間で満ち溢れるのが近年の傾向だ」「テルさん。なんか時代が色々先のことになってますけど・・・これ、一応時間軸は2004ですから」

「んなもん関係ねえんだよ。原作だつてなあ明らかに時代そんな進んでねえのにipodとか明らかに2010年以降のアニメとかの話やってんだから。お前はそこらへん暗黙の了解考えろよ。お前も最初の作画と現在の作画に文句言う口じゃねえだろうな？これだから女たらしは困んだよ！」

最後はほとんど関係ないじゃないですか。

と心の中でそう思っているのはハヤテだけであるのは分かっているだろう。 自覚がないジゴロはほかの男たちから見ても暴力だ。

そんな話はさておき、と。 涙に暮れる二人に箱ティッシュを差し出す。

「この子のお話はあまり真面目に聴かない方がいいと思います。 お二人だって今までの長い経験とかがあるんですから新しい子がいくら出来ても知らないことだってあるんですから、そこはお二人の出番じゃないですか。 だからやめることなんてないと思います」

二人は、天使を見た。 笑顔を向けて、優しくアドバイスをくれるマリアに、二人は救われたのだと思った。

が、マリアはその笑顔を崩すことなく次の言葉を告げる。

「まあ捨てられたらいつでもこちらで雇っても大丈夫ですよ。 フリーの主さんが一人いるのでこちらの王様の専属執事になるのがい再就職先かと」

「加賀美ほどの執事とは思えないが、まあこき使ってやろうではないか。 喜べ、王である俺の下に共に歩めることを」

いつの間にか腹痛から復活していた千里に示した。 実際千里の執事はいるにはいるが一連の事件の流れで音信不通。 よって実質フリーなのだ。

「そんな上げて落とさなくても!!」

「しかも笑顔で言うなんて! 『諦めるな』か、『諦めろ』のどっちを促してるかハッキリしてください!!」

愛沢家の使用人はマリアの内側に少しだけ触れた気がした。

暫く経って。

「では、我々はこれにて・・・」

「なんだよ。 結局帰るのかよ、何しにきたんだ。 帰ったってまたストレス貯めるだけだぞ」

テルが聞いて、国枝が軽く笑ってみせて答えた。

「我々は咲夜様にお仕えする執事。 お嬢様から不必要と言われるま

でこの身はお嬢様に捧げるつもりだ」

「居場所なんてなくなっちゃったいい。お嬢様の為になるのであれば……」
ついに開きなおりやがったか。どこか悟りに近いようなこの状態の二人を見てテルもふーんと首を捻って。

「歳を取るとああいう性格になって色々つまんなくなるのかなー？

嫌だなー」

「くっ、皮肉をいうな。新しく来た執事も君みたいだなだったな、そう言えば」

マキタが表情を崩して言った言葉。新しい執事？ なんのことだろうか。

「新しいメイドの他に、もう一人の執事も雇ったのだ。いや、執事というよりも実質ボディガードっぽい男だ」

続けて国枝が説明する。

「もの凄いわ変わった奴だ。皮肉屋で結構反感買う奴だが、どこか憎めない奴で咲夜お嬢様が結構気に入ってたりするのだ」

ほー。と一同が口を揃える。テルはこれまでの一連の流れと内容を把握した上で二人の肩の上に手を置いて言った。

「やっぱ再就職先考えた方がよくね？」

サブキャラ執事の明日はどっちだ。

第86話くレッツゴー鷺ノ宮、出張編く

この世には未練というものがある。

生前でやり遂げられなかったこと、思い残しなどのことだ。そういった未練があるからこそ、この世にただならぬ形で残り、人様に迷惑をかけている幽霊がこの世にはいるのだ。

たかだか未練、されど未練。未練で人を殺したりもできる。

まあ今回はそんな殺伐とした話じゃなくて勿論ギャグパートなんですけど。

「成仏しようと思うんだ」

「……………」

「……………」

二人の執事は、前回にも引き続き困惑中。最近は突然全く知らない人物が話しかけてくることが多いようだ。目の前にいる神父、リイン・レジオスターは生きている人間ではない。もともと、執事とらのあなの執事クエストのダンジョン内に巣食っていた幽霊なのだ。

そんな男が今更何を言うかと言えば、成仏がしたい。と言ってきた。

「なあ、いきなり登場するのってやめてくんない？」

「ふん。何も私だけではないだろう。こんな突拍子もない登場の仕方をしたのは。私が一人だけ批難にさらすのはやめてくれないか？」

テルが目を細めてリインの頭部を鷲掴みする。この霊体は何故かテルとハヤテ、そして靈感のある伊澄などにしか見えなくなってしまうている。最初はナギやワタルたちにも見えていたのだがリイン曰く、だんだんと見えなくなる仕様らしい。

「それで、いきなり成仏したいというのはどういうことなんですか？」

「そりゃあなあ。そろそろ天国つてところに、私も行きたくなくなってしまうってなあ……いつまでもここに居てプラモとかを作っている訳

にもいかないと、急に真面目になりたくなつたのだよ」

「・・・なんかニートの奴が急に働こうと思つた流れを見ている気がする。」

「じゃああのプラモ、全部売つ払つてもいいのか？ あれ結構邪魔でさあ」

「ふ、ふぎけるな！ あれは貴重にして重要な宝！ 私がこの世に居たという証明だ！ 間違つても売つ払つてもらつては困る!!」

テルの言葉にリインは慌てた。テルが言っているプラモというのは、このリインがこちらに来てから勝手に買つて作っているプラモデルの数々である。その数はもはや机の上に収まらず、テルやハヤテの押入れの中を隙間なく侵食する程である。

「あれ誰の金使つてるの？ かなりの数だよな。どこから使つてんだ？」

「・・・」

テルが笑いながら行つた一言にリインが黙り込む。不審に思つたテルは自身の財布を確認した。この場に持ち合わせているのは何故だ。

「アレ!? 昨日入つてた俺の五千円が二千円になつてるぞ!? え!? どういうこと!?!」

これを見てハヤテも慌てて自身の財布を確認。青ざめた表情で「ぼ、僕の二千円が・・・ない」

こちらに関しては何もなっていない位だった。その光景を見てか、そろりと忍び足でその場を去ろうとしているリインに対してテルは勿論黙っているはずがなく。

「なあ？ 確か成仏したんだっけ？」

「い、いやあ、もう少し後にしようかと・・・」

テルが続いて、ハヤテがリインの肩をつかむ。

「遠慮しないでいいですよ？ 丁度ここには幽霊さんに触れる霊媒師さんが二人もいますから」

笑顔で迫る二人にリインは素早く土下座した。この二人に金の事でやらかすと後々が辛いとリインは初めて知つたのだ。

「そうだ。最初の目的を思い出そう」

リインの震える声に当初の目的を思い出したか、テルがボロボロになったリインをその場に座らせる。このリインが言い出したこと、それはこの世から成仏したいということだ。

「いや、だからこのまま送ってやるから」

と、テルは鷲ノ宮家の悪霊退治用の札を鉄パイプに巻きつける。

唯一悪霊などの類に直接殴る事ができる武器であり、これで冥土に送ってやろうというのがテルの考えだ。

このままでは消されるかと思ったかリインが手を両手に振った。今の二人なら確実にやりかねないからだ。

「そんな物理的な成仏を望んではない!! 貴様ら人の話を聞かないと神に呪われるぞ!!」

まずそんな迷信地味なこと、どっから出たのかと思った二人だが内一人の執事、ハヤテはいくらか冷静だったようだ。

「テルさん、ちゃんと話を聞いてみましょう。何も考えないで行動したら呪いでしっぺ返し食らうのは経験したことがありますよね?」

「む・・・それもそうだな」

と、テルは持っていた鉄パイプをしまう。そのヒナ祭り編の人間爆弾の件に関してはあまり思い出したくないのだが。

リインがこほんと咳を挟んで話し始めた。

「私って、見える相手にしか触れられないじゃん? キミ達とか鷲ノ宮の人とか」

「そうだな。だから?」

冷ややかに返したテルにリインは動じず。

「つまりは私は君たち以外の人間には見えないというわけで、これを活かせばメイドさんとイチチャイチャが——」

金属音。

「さて、辞世の句は用意できたかベイベ?」

「鉄パイプで殴ってから言うことじゃないんじゃないかな?」

頭に出来たたんこぶを見て、テルが殴るのに使用した鉄パイプを再

びしまう。

「ようはコイツ、ただメイドとイチヤイチャして欲求満たしたいだけだ」

「でも見えないからそのイチヤイチャとかしようがありませんよね。まずそれだけで条件が・・・」

姿が見えない。 という言葉に反応したリインが閃いたかのように手を叩いた。 それをテルがバックドロップで地面へと叩きつけてホールドする。

「お前、マリアさんのところ行くつもりだったな？」

「な、なぜそれを・・・!!」

「分かるんだよ。 俺がお前だったら絶対そうするからな」

「コイツの方が結構問題なんじゃないのか執事君!!」

「しかし参りましたね。 いったいどうやってメイドを用意すれば・・・」

「お前がなればいいじゃん。 結構好評だったらいいからな。 なんだかんだ人気投票で票稼ぎに貢献してたわけだしな」

「い、嫌ですよ！ アレすつごい恥ずかしいんですから!!」

いや、そんな乙女モード全開で反論されても。 テルは冗談で言ったのだが、ハヤテにとってもはや女装などはトラウマになっていた。

「他人にやらせる・・・そうか!!」

リインがまたしても何か閃いたようだ。

「君たちがダメだというなら別の人間にやらせればいい！ しかもあまり被害がない人にだ！ 私が見えるて触れられる人にメイド服を着せればそれでいいじゃないか!!」

歓喜にも似た声でリインが言うのと、テルも少し考えてか納得したように腕を組んだ。 二人としてもこの案には納得がいったようだがハヤテがまだ不安要素を指摘する。

「なるほど。 ですがどう簡単にいるんですか？ そんな安請け合いをしてくるような人材が・・・しかもどうやって用意するんです？」
「呼ぶ」

ポケットから取り出した携帯の短縮から「ゴーストバスター1号」

登録した番号を選択して発信した。

数十分して。

「て、テル様・・・おおかた事情は理解しました。この世に迷える魂を正しき道にお送りするのも鷺ノ宮の役目、ですが、ど、どうして・・・この姿と、いうのは・・・」

鷺ノ宮邸からわざわざ足を運んでくれた伊澄に申し訳ない気持ちでいっっぱいだが、とテルは両手を合せる。

「ああ、まあこうしないと受け入れてくれないんだよこの神父」

テルは別の意味でも両手をしっかりと合わせた。この通り頼むと懇願する。メイド服の伊澄に。

もう一度言う、メイド服を着た伊澄だ。

「いやあしかし、結構似合ってますよ伊澄さん。このままメイドに転職してもいいんじゃないですか？」

「ほら、ハヤテもこう言ってんだし・・・という訳で一枚」

と本人の了解なくテルは携帯のカメラ機能を発動させてメイド伊澄を激写する。

「な、なんで撮るんですか——！！ 撮ったのはどうするつもりなんですか——！！」

「いんやー。 なにもしねえよ」

テルはこういつているが実際は違う。このイイネタを理由にワタルを釣る最高の餌が出来たなんてテルは微塵も思ったりはしていない。

ロングスカートタイプのメイド服を着た伊澄には和服以外でも似合っていると思った。これなら私服の方もなかなか期待してもいいのではないかテルはまたしてもワタルの餌が増えるとニヤリ。

「まあ、伊澄さんはそんなに頑張らなくても良いですよ。適当に『おかえりなさいませご主人様』って言ってあげればこの神父も納得しま

すって」

「さあ、お前のその欲望、開放しろ!!」

どこのウヴァだと思いなながらも、一同は神父の方を見る。手が震えている。想像のあまり興奮しているのだろう。これで潔く成仏――。

「ちつが――――う!!」

「ええ――――!?」

しなかった。予想とは違う反応に一同が戸惑う。

「違うんだよ!何か違うんだよ!彼女は単にメイドの服を着させているだけで・・・メイド魂が籠っていない!!」

なんだソレハ。と理解不能な理由を並べられてはこちらも困る。

「だとしてもなあ、これ以上は伊澄の負担になるだろうしな。見た感じ嫌そうだし・・・お手上げじゃないか?」

とテルが手を上に上げて降参ポーズをしようとした時だった。

「いいえ、やります」

伊澄が言った。キリツとした目付きで神父を見据える。

「鷲ノ宮の名にかけて、そのメイド魂とやらを身に付けて・・・必ず貴方を成仏させてあげましょう」

(何か別のスイツチが入った!)

とテルは頭に手をやる。伊澄の頑固さがまたしてもこの場面でも出てきた。どうやらこの頑固性はなかなか治らないらしい。

これ以上面倒事に追われたくないのだが、伊澄がとてもやる気なのでテルは仕方ないといった表情で。

「しゃーなしだな」

と、深く頷くがその右手には出どころ不明のカメラが握られていた。

こうして、伊澄のメイド魂会得の長い道のりが始まったのである。

第87話くレッツゴージャノ宮、修行編く

前回のあらすじ。メイド魂がまったくこもっていないとダダを捏ねるリインの為に伊澄のNO13のガンコスイッチが入ってしまった、伊澄がガチでメイド魂を身につけようと登竜門を叩こうとしたところから。

「メイド魂か。しかしどうやって身につけるべきか・・・」

沈黙。ただその場に座り込んで、腕を組みながら一回は考えていた。リインに至っては横になって新作の同人誌なんて見ている。いつの間にか買ってきた。そんなテルに一つだけ疑問が生まれてくる。

まず、メイド魂ってなんぞ？

これだ。メイドというのはどういうものか、そこから理解できていない。そこらへんに関してはハヤテやテルも全く範囲外だ。

「参考書とかかってないんですかね？」

「うーん。ありそうでなさそうな」

昔からメイドのあり方に付いて記した五輪の書で存在するのだろうか。そういうものがあるのならば別だが。

寝そべっていたリインがせんべいを齧りながら一言呟いた。

「こういうのは、やはり物知りな人物から聞くのがいいんじゃないかな？ 誰かいないのか？ メイドについてかなりの知識を余すことなく熟知した知人は・・・」

知人か。そのキーワードを頼りにテルは頭を回した。首を三百六十度くるりと回す。途中で何度か関節がポキポキと鳴り響くがお構いなし。

一周して何か閃いたか、ひととき大きな関節の音が鳴った。

「ああ、いたなあ。この上なくすごい熟知してそうだな」

「え。居るんですか？ そのメニアックな趣味をお持ちな人が・・・」

ハヤテの首を傾げた言葉にテルは頷き、携帯を再び取り出して。

「呼ぶ」

数十分後。

「んで？　なんで俺が呼ばれた訳？」

「いやあ、ちよつとお前に聞きたいことがあつてな？　これは多分メニアツクな趣味を持つているお前にしか頼れないことなんだよ」

面倒くさそうにワタルが頭を掻きながら言うと、テルは両手を合わせて協力して欲しいと頼む。ワタルはこの男のことだから疑って仕方がない。

「変なことに巻き込むなよ？」

「だいじよぶだいじよぶ。　お前は答えてくれるだけでいいから。報酬は弾むぜ」

報酬。という言葉にワタルは眉をひそめるが考えるだけでも損だと考え、さつさと本題に入ることにする。

「じゃあなんだ」

「ちよつと聞くけどよ。　あの純粹無垢な幼妻にメイド服を着させ小さい頃から侍らせているお前にちよつとメイド魂について語ってもらいたいと思つてなあ？」

「こらー！　人聞きの悪いこと言うんじゃねえよ!!」

ワタルは断固として否定して、「だいたい」と付け加えて続ける。

「あのメイド服はサキの趣味だつーの。　それで俺がメイド服オタだなんて決めつけるのはまさに愚かの極みだぜ」

キリツとした表情で言うからには彼自身に恐らく、本当にメイドに對して詳しくはないのだろうか。　そんな懸念がその光景を見ていたハヤテが抱くが。

「ああ、そうか。　なら悪かったな。　実はウチのナギが今度メイド喫茶を新しく建てようとしてさあ、メイド喫茶って高校の修学旅行の先生が入ってしまうほど流行つてる訳じゃん。『いらつしやいませ〜ご主人さま』って」

「ふん。　流行つてるかどうかは知らねえけどさ。　勝手に作ればいいじゃねえか」

ただ・・・と、背中を向けたワタルが一言。

「そんな上っ面だけなぞったメイド喫茶が流行るかどうか・・・」

ワタルのその一言にテルの目が光った。そう、これは全てワタルの本当の内面を引き出すための餌だったのだ。

「へえ。じゃあ上っ面だけじゃないメイドさんの良さって言う
と・・・?」

テルによる第二の煽り、もとい餌。ワタルは声のトーンを高くして。

「べ!! 別に興味なんざねえけどよ!! 強いて言うなら、強いて言う
なrあメイド魂てやつはさあ!!」

釣れた。こうまでも簡単に。その手の話題に敏感なワタルは
いとも簡単にメイドについて語りだすのだ。

「もちろん、こう、くるってターンした時の・・・ブワツと広がるスカー
ト!! これが大事なんだよ!!」

「えー、その程度?お前もメイドリストとしてはまだまだ浅いんじゃない
かい」

煽る。

「ばっ!! その程度なわけねーよ!! 他に言うならつま先立ちだよ!!」

こう、高いものを取る時に「クツ」て上げるあの感じ!!」

「はーん?もう終わりかよ? 実はお前にわかなんじゃ?」

煽る煽る。

「いや、まだあるね。後は市政だな。背筋がピンと伸びてない
と、話にならない!!」

なるほどなるほど。と、ずっとワタルによるメイドに関する演説を
要所要所メモしてするように見えるテルだが、実際このメモ帳、ただ話を
聞いてペンをめちやくちやに走らせているだけである。

「あとはさあ——」

「あー、おっけおっけ!」

ワタルがこれ以上語っては多分朝が来てしまうのではないか
と思ったか、テルがメモ帳を閉じてここで打ち止めとした。先ほどか
らだが、テルの横には大きなダンボール箱がある。テルがそのダン
ボール箱に手をかけて持ち上げると。

「だーつてさ。伊澄くん、少しは勉強になったかな？」

「なるほど・・・」

「なっ!!」

ダンボールの中にいたのは、なんと伊澄だった。突然の出来事にワタルは口をあんどりさせる。

「ワタルくん、アニメとかにも詳しくてメイドさんにも詳しいのね：マニアックな人だわ」

「うわあああああああ!! ちよつと道頓堀に飛び込んでくる!!」

顔を羞恥で真っ赤にさせたワタルはたまらずその場を飛び出した。檜の木で出来た扉が勢い良く閉まられるとテルがニヤリと笑った。

「大成功」

「悪魔ですか貴方は」

まさしく、ノートを手にして記憶を取り戻した主人公のごとくのテルの悪役っぷりにハヤテは苦笑い。しかし、このあとのワタルへの救済措置も用意してある。テルとしてはこれまでの伊澄の写真を見せれば機嫌を戻してくれる筈だ。

「まあ漸くして言うと、メイド魂っていうのはクルツと回ってターンしてってことだろ？」

「色々と端折りすぎです。他にも色々と言ってた気がするんですけど」

というハヤテの言葉をテルはケラケラと笑って返した。

「んなもん知るかよ。アイツの妄想をこちらに垂れ流されたとしても俺たちにはさっぱりだからな」

ホント悪魔のような人だ。とハヤテは思った。

「分かりました。では、神父さん!」

これまでのワタルのレクチャーにしたがい、伊澄が神父の前に立った。その立ち姿、そして放つオーラは伊澄が妖怪退治に出向くときの物だ。

「これを見て・・・神父さんも、成仏してください!!」

流れる動作で一步踏みだす。手の動き、表情、緩やかにかつ意思を込めてその真剣さがうかがえる。だが。

「いたっ」

びったん。

「……」

「……」

時が止まったかのような、そんな空間が出来上がった。伊澄は回る前に踏み出した足でスカートの裾を踏んで前のめりに転んでしまったのだ。

「回れて……ないッ」

「そしてあざとい……だが、それがイイ」

リインは密かに拳を握り締めていたという。

○

「ふう……ああ、もう。一体どうすりゃあいいんだ」

屋敷内に入ったテルたちは卓上のテーブルを囲んで頭を悩ませていた。執事の仕事は一体どうしたのだと、突っ込みたいほどの光景である。

「やっぱりハヤテ、お前がメイド服きて手本を見せてくれないことは……」

「お断りします」

きっぱりと、即答。ハヤテは手を前に出してNOの意思を示した。実際リインもふくんで座っているのだが、はたから見れば野郎が向かい合ってお話しているシチュエーションである。腐つてやる。

「このままじゃ……ジリ貧だな」

「ジリ貧ですね」

あれだこれだと案を出してもダメになる。消去法で行なっていくたらいずれこちらの手がなくなるのが見えていた。どうしたものか。とテルが悩んでいると。

「どうぞ」

二人の下に一つのティーカップが添えられた。そこにいたのは先程から姿をく라마せていたメイド服の伊澄である。

「おお、なんだ。本格的にメイドやってるな」

「ええ。せっかくなので、それにそれらしい事をしていればメイド魂に繋がる何かを会得することができるかと・・・」

にこりと笑って伊澄は答える。　楽しそうにしているのでこちらは別に構わないが。　と、テルは渡された紅茶を飲む。

その瞬間、テルの頭の中の何かが弾けた音がした。

「そうだ！　マジのメイドさん呼ぼう！」

「え？」

テルが突然立ち上がったことよりも、立ち上がってから発した言葉にハヤテは驚いた。　テルは驚いている一同を構わず続ける。

「いいかあ、俺たちはもうバカの類でしかなかった。　レクチャーでも難しいこの内容、だったら、マジでメイドやっている人に教えてもらうしかねえじゃん!!」

「灯台・・・デモクラシー」

「伊澄さん・・・」

伊澄のボケに、ハヤテは特に突っ込むことはなかった。　確かにテルの言うことにも一理ある。　ワタルの知識も、内容を理解して結論づけるならまさしくオタの知識だ。　幸いにもこの屋敷には優秀なメイドさんが一人いるではないか。

「んじゃあさっそくマリアさんに——」

その時だ。　不意に玄関のほうでインターホンが鳴り響いた。

玄関と近いこの部屋にいたこともあり、テルがまっ先に玄関へと向かう。

「つたく、いったい誰だよ。　こんな時間に」

「いや、まだお昼ですから」

テルとハヤテが愚痴をこぼしながらも玄関の前に立ち、テルがドアノブに手をかける。　そして、開けた。

「あの・・・どちら様？」

扉の向こうに居たのは、メイド服を着た少女だった。　グレーの

ショートヘアー、そして際立つのはその笑顔だ。

極めつけはそのメイド服にあり、清純派なマリアがロングスカートの部分をこの少女はショートスカートにしているということだ。

「どうも・・・って、え？」

一度、こちらを見てその少女は明らかにテルを見て驚いていた。

そして若干だが、口元が歪んだ気がするが気のせいだろうか。

「ええーっと・・・」

テルが返答に困っていると少女は再び笑顔で答える。

「どうも、はじめまして。 咲夜さんのメイドのハルでございます」

「ういーっす。 借金執事二号」

ハルと名乗る少女の後ろで手を上げて存在を示すもう一人の声。

これは咲夜だ。

「おう路面芸人、もしかしてこれがお前の言ってた新しい使用人か？」

「そうやねん。 結構美人やろ？ な？」

なっはっは。 と快活な笑い方をする咲夜にテルが眉をひそめる。

そういうえば新しく雇ったのはメイドだけでなく執事もいたはずだが。

「もう一人いるんじゃないのか？」

「なんや、もう知れ渡ってるんかい。 今日に来てないで、自宅警備し

てもらってんねん」

それはなんだ。 その四文字を聞いただけでニートを浮かべてし

まう。 だが、そんなことより咲夜とその新しい使用人が揃ってこの

屋敷になんのようにだろうか。

「なんか面白い住居人が増えたらしいやないか。 ハルさんも紹介し

たかったし、なんか伊澄さんもおるやないか。 どうしたん？」

「なんだ。 あの王様のことか、あいつなら今中庭のほうで筋トレしてるぞ」

テルが親指を立てて中庭の方を指すと向こうから声が聞こえてきた。

「ふん！ ふん！ 筋肉！ 筋肉！」

声と共に千里が自身のペット、ヘラクロス、そして三千院家のタマ

を担いでヒンドウスクワットをしてるのが見えた。

「なかなかシユールやん」

「ああ。 これまで以上でないシユールだ」

「じゃあ、一瞬で千里さんを紹介できたところでこちらも本題へと入りますかね」

○

テルはこれまでの事情を説明した。 主な理由は伊澄がメイドの魂を必要としているということ。 表向きはそうだが、勿論リインの事は伏せている。

「なるほど。 おおむね状況は理解したわ。 つまり、真のメイドさんになるために俺は登り始めたばかりだからな、この果てしなく長い男坂をよ．．．って感じなんやな」

「ええっと、大体そうですね」

またしても簡単にわからないネタを．．．。 と心の中でハヤテが思うが、ここであまり考えることではないだろう。

「な？ んで、どう思う？ ウチのハルさん。 結構美人やろ？」

咲夜がハヤテに駆け寄り、目を細めて言う。 伊澄そっちのけで自分のメイドの感想を聞くのはどうかと思うが。 ハヤテが少しだけ唸ると率直に思った事を言った。

「．．．一体おいくつなんですか？」

この男は。 どうして最初に女性の年齢を聞くのか。 失礼にも程があるだろ。

と、まあそのハルという女性も一瞬だけ目を細めているが嫌な表情なんてひとつもせずハヤテの鼻先に人差し指を指して。

「秘密もメイドのたしなみなんですよ。 綾崎君」

へえ。 とハヤテは頷く。 別に自分が変に気を悪くさせてしまった訳ではないのだ。 しかし、ハルの丁寧な対応力と一つの仕草で男性を引き落とそうとするメイド力はかなりのものである。

「んで？ テルはどう思うんや？ ん？」

「顔近づけるなバカ。 キャピキャピ系は俺の趣味じゃねーんだけど。 俺はやっぱり清純派なんだよ」

と咲夜を押しつけながら言う。と率直な感想を述べた。彼の言う清純派というのは、恐らくマリアのようなメイドなのだろう。

「まあ、人それぞれの解釈があつて仕方ないと思いますが。でも私の場合には別にそういうキャラを狙っているわけではありませんので」
これまたハルは丁寧に対応した。：かのように見えたが拳がちよつとだけ握られてプルプル震えていたのが気になる。

そしてまた本題に戻るとして。

「実は私、メイド魂をこの身に宿そうとしているのですが、友達の子が『クルツとまわつてぶわつとなつたスカートにメイド魂が宿る』と聞いたんですけど」

「酷く偏つたメイド魂ですね・・・」

ハルが始めて苦笑いを見せた。やはりメイドであるこの人も自身の本職であるメイドについて詳しく知っているようだ。

「それで・・・私、スカートの裾を踏んでしまつて上手く回ることができなくて。 いったいどうすればいいのでしょうか」

「なるほど。だつたら話は簡単です」

本職ならではの余裕か、ハルは少し考えただけで解決策を思いついたようだ。

「短いスカートを履けばいいのです」

語尾にハートマークが付くくらいの笑顔でハルは言った。

「スゲエな、根本的解決方法を提示してきたぞ」

「なんか必死にみんなで株を引っこ抜こうとしている隣でブルドーザーで簡単に根元から刈り取られた気分です」

「あまり気にしなくていいんですよ。 それじゃあ、コスチエ〜ンジ」
☒

ハルはパンツと手を叩くところからともなく簡易衣装試着室を用意して伊澄をその中へ案内させた。

「はい、じゃあコレ着てください☒」

「え!?! こ、こんなのを着るんですか!?!」

「そうですねにか?」

「ちよ、つと、これは・・・恥ずかしすぎて・・・」

「いやいや、そんなことありませんって充分似合いますから。ほらほら来てきて☒」

「あ、わわわわ！ そんな引つ張らないでください・・・!!」

揺れる。 試着室の中でのやり取りに、試着室が軽く揺れる。 一体中で何が行われているのだろうか。 細かく描写も、それは危ない。 下手をすれば両手に縄をかける羽目になる。

数分経って、試着室のカーテンが開かれた。

「どうです？ とてもお似合いですよね？」

「・・・」

ハルがそう言ってこちらに尋ねる。 先程までマリアのような長いスカートはハサミでも使ってちょんぎられたかのように短くなっていた。 先程まで見られなかった大腿部の白い肌が丸見えである。 当然のように伊澄の顔は沸点を超えていた。 体が小刻みに震えてスカートの裾を掴んで必死に下へと引つ張っている。

「それじゃあ、やってみましょう!!」

伊澄が落ち着くまもなく、ハルによるレッスンがスタート。 パンツという合図とともにハルが組んだ動作に伊澄が真剣に取り組む。

「ほら、紅茶運び！ 右ひじの角度はカップの水が常に水平になるように意識して!!」

「は、はい!!」

「スカートつかまない！ 恥ずかしがらない!!」

「は・・・はい」

「笑顔を忘れない！ スマイル、スマイル!! だいたいのメイドさんは作り笑顔があればどんな事にも対応できます!!」

「う、うう・・・」

ハルによる熱い指導に最初は気合で対応していた伊澄だったが、普段から慣れていないことをさせられていることと、ハヤテ、そしてテールにその光景をジロジロと見られていることによりその動きはどこかぎこちない。

「ああダメだ。 健気すぎて、一生懸命すぎてとてもじゃないけれど応援せずには居られない。 という訳で一枚」

「応援するか、写真撮るかどっちかにしてくださいテルさん」

「私は動画を撮らせてもらう。さきほどの転んだ動画よりもイイものが撮れそうだ」

「はひゃひゃひゃ!! あゝ、すまん伊澄はん、でも・・・クック・・・」
自分の目的の為に固執する二人、そしてその光景を見てひたすら笑う咲夜にハヤテはため息。一応リインの為に体を張っている伊澄が可哀想に見えてきたハヤテである。

時間が経って、先程まで色々指摘されていた伊澄だったがだんだんと動きが良くなってきた。顔の硬さも、動きのちよつとしたぎこちなさはまだ抜けきれてないが確実に良くなった方である。

「しかしまあ、ぎこちない動きや作り笑顔も見ていてもなんかちよつと見ていて恥ずかしいものもありますかね?」

ハヤテが苦笑いを浮かべて隣にいるリインを見た。しかしリインは伊澄を見て少しだけ笑みを浮かべて一言。

「ああ、だが・・・それでも、私は満足だ」

どこか悟ったかの表情。何か自分の中のものもやもやなくなり、思い残す事はないと言った表情だった。そして見えないリインは伊澄に近づいて声をかけた。

「ありがとう、伊澄くん」

「はい?」

叩きを持っていた伊澄が振り返るとそこにはサムズアップをしているリインの姿があった。

「いい、メイド魂だったぜ・・・」

「神父さん・・・」

その言葉に笑みを浮かべた伊澄が続けて尋ねる。

「では、これで成仏してくれますか・・・?」

対する神父はちよつと黙った。

「お前・・・消えるのか?」

テルも、短い間だったとはいえ身近な誰かが消えるというのには少なからずとも悲観な事を考えずには居られない。

ハヤテも複雑な表情だ。

リインは遂に黙るのを止めたのか、閉じていた瞳を開きうつすらと笑みを浮かべて。

「ウ・ソ」

言った。

「ん？」

数秒の沈黙の後、テルが首を傾げた。　なんだろうか。　危機間違いでなければ彼は何か言っていた。　たしか嘘と。

「いや、だって今日エイプリルフルじゃない」

「え、いや・・・ええ——　ツツ!!?」

リインの言葉に、テルが叫んだ。

「だってメイド以外にも私には未練はまだまだあるのでね。　当分、私は成仏するつもりはないのだよ。　散々恥ずかしい格好をしてもらって悪いがね」

淡々と言うリインだが喋る言葉の全部の後ろに（笑）が付いているような感じだった。　その事に腹を煮えていたのはテルではない。
「.....」

もちろん、それは言うまでもなくメイド服やミニスカチェンジ、知人に写真に収められという羞恥プレイまでさせられていた伊澄だった。

「いいぞ伊澄。　お前は今、キレていい」

テルの言葉を合図に伊澄が右手に持っていた札をリインの肩に叩きつける。　ぱしいんと軽い音が鳴ったかと思えばその瞬間に札が弾けてリインの体が壁へと叩きつけられた。

「アレ？　こんなところに人の形をした汚れがありますね？」

「あんま気にせんでええよ」

ハルが壁に出来た明らかなくぼみを汚れと捉えている。　見えないうハルにはリインが壁にめり込んだ一連の光景を認識できていないのだ。　ちなみに、咲夜はリインのことがちゃんと見えている。　ハ

ヤテやテルがそのことを知らないだけだ。

「わ、私は神の使い・・・秋葉のロードブリティッシュ・・・こんな所で死にはしない」

勿論、リインは死んではない。伊澄がキレイながらも力をセーブしたのか、死なない程度に彼は天罰を食らったのだ。これぞ天罰肩パンである。

「あの・・・状況がよくわかりませんが。私はこれで失礼しますね？」
「おお、おつかれさーん」

咲夜が手を振るとハルが慎ましく一礼。ハヤテやテルを見てこちらに笑顔を向けた。

「それじゃ善立くんに綾崎君、今後とも・・・うちの主をよろしくね」
パタンと静かにドアを閉めたハルはそう言って去っていった。
どこかつかめないような感じの人だと思っていたテルだが一方で。

「なんで俺たちの名前知ってたんだアイツ」
「そういえば・・・」

疑問点は今に起こったことではない。会話の中でも、ハヤテの名前を言った事は確か一度あった。だがこちらは初対面だ。今日以外に会ったことなんてないし、誰かに噂されても直接名前がバレるということは今まで無かった。

そしてハヤテだけでなく、テルの名前を知っている。やはり、謎だ。あのメイド、ハルは謎に包まれた女性なのかもしれない。

○ 「ふう・・・まさか咲夜さんが、三千院家や最近、会長といつも一緒にいる綾崎君たちと・・・親しい間柄だったとはな・・・」

銀杏商店街の道を一人の少女が歩いていた。グレーのショートヘア、後ろの髪を結って歩く少女はため息まじりに今日のサプライズを思い出す。

「おっと、メガネ掛けるの忘れてた」

少女は思い出したかのように立ち止まるとカバンの中に入ってい

たメガネを取り出し、掛ける。彼女の名前は、春風千春。白皇学院に通う、生徒会役員の書記である。

(バイトだからと言って油断してた・・・これからはもっと慎重にいかないよ。周りの人に私がこんなキャラに合わないことやってるなんて知られたらマズイ)

彼女、春風千桜は白皇学院生徒会書記としての顔とは別に、もう一つの顔を持っていた。それは表で使っているクールな顔とは真逆な、超のついた明るい笑顔を振りまくメイドの顔だ。

きっかけは道端で見たメイドのバイト募集。周りからクール、無表情の名で噂されている彼女だが、誰よりもこの専門の知識に彼女は長けていた。だから父の会社の倒産騒動でこの看板と待遇を見て、彼女は絶対に素性がバレないようにここで働くときはクールな生徒会書記のお面を捨てて、『ハル』という超明るいメイドのお面を付けることを決めたのだ。

「おーい、ハル子」

「あ、会長。お疲れ様です」

そんな彼女に声をかけるのは同じ学校の生徒会長、桂 ヒナギクだ。

「会長じゃなくていいわよ。外なんだからヒナでいいって」

ここで素直に言うとおりに「ヒナ」というのは千桜にはできない。それは、自分、この時の春風千桜という人間はそのような事をいうキャラではないからだ。

あくまでも真面目で、従順な人間。今はそういう人間だ。

「今帰りなの？もしかしてバイト？」

「まあ、そんなところです」

ふーんと、ヒナギクはこれ以上探ろうとはしなかった。ただ単に聞こうとしなかったただけなのだろうか。なんにせよ、身近な人物と普通に生活するだけでも少しも油断してはならない。

彼女は春風千桜。別名、千の仮面をもつ女性・・・多分。

○

後日談。

「へい、どうだいお兄さん。今回はかなりの上玉だろ？」

「うおおおおおおおおお!!」

ここ、レンタルビデオショップ。ワタルが経営するビデオショップである。そのビデオショップの店長、橘ワタルが歓喜に似たような叫びを上げていた。

「ほら、こいつもどうだ？ え？」

「おおおおおおお!!」

テルが渡している写真は屋敷で撮った伊澄のメイド姿の写真だ。

伊澄大好きワタルにとっては喉から手が出るほど欲しい物である。名付けて、ワタル一本釣り。

「若……」

伊澄の写真を見ながら凄い興奮を抱いているワタルを壁に隠れて涙を浮かべながら嫉妬の炎を燃やしていたのは言うまでもない。

そして、全てが終わったテルが家に帰ると、花壇の土を指でつつく、これまで以上にいじけた状態のマリアが待っていたのも言うまでもない。

第88話く世の不思議とは常に身近にあるものく

夜の校舎というのは、人を寄せ付けない異様な雰囲気にも包まれている。人体模型、増える階段。　鳴り響く無人のピアノ。　怪談七不思議は一体どうやって生まれているのだろうか。

「時は20XX年。　世界は核の炎に包まれた」

「どうも、歌丸です☒」

「ここは白皇学院校舎・・・の裏にある林の入口。　普通じゃ有り得ないほどの敷地を持つこの校舎ではこのような珍しい場所も多くあるのだ」

林の入口を前に佇んでいるのは三人の少女だった。　右から花菱美希、瀬川泉、朝風理沙のいつもの生徒会三人組だ。　

「んで？　突然オレらを呼び出して、なんのようなんだお前ら」

「僕これから明日の宿題しなきゃいけないんですよ。　明後日までじゃありませんでしたっけ？」

テンションの高い三人とは裏腹に、テルとハヤテがやる気なしと言った表情で訪ねた。　それを見てか、生徒会三人組ブルーの美希が指を振って答える。

「チツチツチ。　甘いよハヤ太くん、宿題なんて堂々と『やってませんでした☒テヘペロ』って答えれば、放課後の居残りですむのだよ」

「いや、それ以外にも成績表にも確実に響いていると思うんですが」「バカが！　宿題なんてやってる暇なんてないんだよー！」

「そうだそうだー！　今は春休みだぞ！　遊ばずに何をすればいいのだあー！」

「楽しいことしようよ☒」

　一気に三人娘に反論されてハヤテは思う。　よくこの人たち、進級できたな、と。

「ええい、貴様ら。　一体何がしたいというのだ！　王であるこの俺の時間を潰させるほどの価値のある興じなのだろうな？」

勿論、この場所に呼び出されたのはテルやハヤテだけではなかった。　三千院家に居候している千里もこの三人組に呼び出されたの

である。

「ふん。 いい加減、自分の事を王と呼ぶのは、痛いということに気づかないのか？ この失脚王」

と、その後ろには黒い髪をなびかせた奈津美 唯子の姿もある。

この千里と唯子の一触即発しそうな状況をなんとか抑えつつ、話を進める。

「実は、この白皇学院の林のなかには昔から伝わる『ある噂』があつてだな」

急に美希の顔が真剣なものとなり、周りにいる者も聞く態度を改めた。 美希はそのまま続ける。

「いわゆる『神隠し』みたいな話でな？ この林中に入ったものは消えるという話だ」

と、美希は持っていたポーチからかなり古びた記事を取り出した。

日付には1980年。 つまり30年以上も前である。 記事の見出しにはこう書かれていた。

『失踪していた子供、生存確認』

「ある日、子供がこの場所にやって来てそのまま迷子になったという話だ。 見つからずに一週間、そして一年。 一時は事件とも考えられたのが、この記事を見る限り無事に子供は見つかった。 めでたしめでたし・・・と行けばよかつたんだが」

ここでこの話が終わるはずもない。 更に美希はペラリと記事のある部分を指さした。 その部分には二つの顔写真があり、一つが幼い子供、もう一つが20代を超えた大人のような写真だった。

「すごいことに、この行方不明になった子供。 当時は10才くらいだったらしいんだが、見つかったときには推定で26才になっていたのだよ」

へ？ と周囲にどよめきが起こり、テルがまっ先に反応した。

「え？ じゃあこの写真、同一人物かよ!？」

「そうだ。 おかしくないか？ 経過した時間は一年。 だが少年の中で過ぎた時間は明らかに一年で収まる時間じゃない。 その少年は『今まで一体何をしてきたか分からない』と言っていた。 わかるか

？ 何もかもが謎なんだ」

テルに記事を差し出し、美希は腕を組みながら当時の事を考察する。

「これは神隠しだ。まさに超常現象、我々の知らない未知の世界が彼を時間の流れが遅い空間に引き込んだのだと私は考える」

「いやいや、そんなファンタジーみたいな事は起きませんよ」

「いや、オレら散々ファンタジーな事に巻き込まれてんじゃん」

テルがやれやれと言ったように肩を落とす。宇宙人や宇宙船で宇宙に行ったり、変なロボと戦ったり、体を武器に変えたりする女と戦ったりだ。これほどまで現実から離れた出来事に出くわしているのだ。

「しかし、貴様この記事をよく見つけたな」

「ふふ、政治家の娘だぞ？ こういった貴重な情報には目がない。

ま、たまたま自宅の資料室から見つけた記事なんだがな」

千里の問いに美希が胸を張って答えてみせた。

「それではこれから不思議発見に行こうと思うのだが、かたまって探すのは効率が悪いので定番のクジを・・・」

ひよいと手からのぞかせたソレは数本の割り箸だ。持っている数字には番号が書いてあり、同じ数字を持つ人間がペアという非常に簡単なクジである。

「この先には多くの危険があるだろう。それを打開するのは同じ仲間の方が必要だ。諸君らの健闘を祈る」

「パーティゲームみたいだな」

親指を立てている美希に唯子が冷静にツツコミを入れた。

○

搜索隊その1。

「しかし、こんな場所にそういう逸話があったなんてな。そういった噂が流れたんなら白皇学院に影響は出なかったのか？」

「二十年も前の話でしょ？ たしかこの辺ってまだ白皇学院が出来て

なかつた筈だよ」

くじ引きによつて決まったペアの一つ。テルと泉が細道を通つて探索を開始していた。美希が探索に向かう際に全員に渡したランプを右手に持ち、暗くなつてゐる足元を照らしていく。

「それにしても、千里くん三千院家に住むことになつたんだね。」
学校も辞めずに済んでるらしいから良かったねえ」

「まあな。白皇の学費は入学時に全部払つていたらしいから。最初に騒いでたマスコミも今は結構落ち着いてるからアイツのストレスもなくなつてきた。けどこつちのストレスが無くなるわけでもないんだがな」

泉から千里の話題を振られ、テルは一つ思い出した。それはホワイトデーに泉が千里から受け取つていたチョコのことだ。経緯がわかるように、泉がバレンタインデーの日に千里にチョコを渡していた事が分かる。だが、その理由が分からない。

（あの唯我独尊、傍若無人の我侷王子になんでチョコを渡したのか・・・）

横目で泉を見るが本人はこちらに気づいていないかのようにスキップしながら歩く。ランプの明かりが明るすぎるせいか、暗い事に全く恐怖してはいないようだ。

よし。とテルは意を決して口を開いた。

「なあ、泉。お前、千里とどういふ関係なんだ？」

「ふえ!？」

スキップしていた泉の動きがピタリと止まった。

「ど、どういふ関係つて・・・？」

首をカクカクとこちらにぎこちなく動かして向ける泉には明らかに動揺の意思が見て取れた。テルは冷静に続けて聞く。

「いや、この前のホワイトデーの時にあの王様からチョコもらつただろ？ それつてつまり、バレンタインの日にチョコを渡したつてことだよな。なんで？ そこんとこ詳しく」

「なんでつていわれても・・・うーん」

問われたことにすぐ泉は答えることができない。テルとしては

これが本当にそういう話なのかと喉の唾を飲み込んだ。

「恩返しかなあ・・・？」

一言。人差し指を頬に添えて泉はそう言った。

「恩返し？」

「うん。私が白皇に入学した時のことなんだけど、私が美希ちゃんたちと待ち合わせしてる時に凄い大きな野良犬に襲われてね」

懐かしむように泉が続ける。

「怖くて走ってたら登校中の千里くんにつつかちやってね？ 私が倒れて振り向いたらそこには犬がガオーつと。んでそれで犬が噛み付く瞬間に千里くんがパンチでどーんと」

ジェスチャー付きでやっているのだが、泉の説明がとても抽象的なので頭のイメージが固まらない。大筋は分かったのだが。

「そんなこんなで助かって、命の恩人みたいな人だからその返しきれないお礼を誕生日とか特別な日にお返ししてるだけだよ」

なるほど。とテルは心の中で納得した。この泉が抱いているのは決して千里に対しての恋心とかではない。命の恩人に対してのお返しだ。

「なんだ。てっきりアイツの事が好きなのかと思ったぜ」

「ふえ!? そういうんじゃないよ!! 千里君は恩人だよ恩人!! ごごくごくご誤解だつて!!」

テルが発した言葉に泉が顔を真っ赤にして否定した。そういう答え方をされると千里に対してもちよつと哀れみをかけてやりたくなる。

「もう・・・なんか私の人生って犬絡みの出来事が多いなあ。ここに小さい頃遊びに来てたときも子犬に襲われちゃってたし・・・」

深くため息をついた泉。どうやら話には続きがあるらしい。

「その時は知らない男の子に助けられたんだよねえ。私と同じ年頃の子だったんだけど素手で子犬を撃退してたよ。そのことはそれっきりで全く会ってないんだけどね」

ふーん。とテルは空いている片手で頭を掻いた。この学院には奇妙な体験をする人間が集まるように仕組まれているのだろうか

思いながらもそれは一つの偶然と決定づけた。

「ま、生きてりやそのうち会うことが出来るはずだ。　なんたって世界は狭い。　案外そいつも身近にいるかもしれないぞ」

「まっさかー」

泉は有りもしないそんな偶然に笑みを浮かべながら探索を続行した。

○

「へくちっ」

「ん？どうしたハヤ太くん。　なんか噂話をされたかのような昔の安ிரリアクションをしているじゃないか」

搜索隊その2。　ハヤテと美希と理沙ペア。

「安ிரリアクションかどうかはともかく、本当になんか昔のことかなんかで噂されているような気がしまして・・・」

言い表せないような違和感にハヤテが顔をしかめる。　だが美希と理沙は笑って返した。

「この世で君の噂話をする奴と言えば、君の命を狙っている奴らのことじゃないのか？」

「今頃君の体の臓器の部分がいくらするのか、そういう勘定を行なってるかもしれないな」

「もしそうだとしたら僕の周りって黒い話が絶えませんね・・・」

「いやいや。と美希が首を振った。　まるでフオローするかのよう
に、ハヤテの肩に手を置く。

「君には揺るぎないホモ疑惑だつてあるんだ。　それだけで十分なネタにはなってると思うぞ」

「なんで無理やりホモネタにもつててるんですか!!　僕は断じてホモ
なんかじゃありませんから!!」

ちつつち。と指を振る理沙と美希はまるで「甘いぞハヤ太くん」
とでも言っているようだ。

「残念ながら君のその顔は多くの腐女子の的になっているのだよ。」

白皇学院の同人サークル部なんて君と虎徹君の薄い本で溢れてるら

しいからな、歪みねえな」

「ああ。最近だらしねえな」

「・・・ちよつと校舎内に行つてきていいですか？ 同人サークル部を燃やしてくるだけなので」

と、ここでハヤテがどこから持つてきたのか赤いポリタンクをゆさゆさと揺らす。水の揺れる音がするから中には何が入っているのか大体想像がつく。

「ま、それだけは止めておけ。リアル警察沙汰は勘弁だぞ」

「そうだぞ。流石に君のお嬢様も、刑務所の方まで面倒は見えてはくれないだろうに」

美希と理沙の説得にハヤテはポリタンクを地面へと置いた。これ以上、主に迷惑をかけることは自分への信頼を疑わられることになる。もしここでこの溢れ出る激情のまま動いたらそれでこそ自分に待っているのは紛れもない破滅だ。

「でもどうして僕ってホモ疑惑が湧くんでしょうか・・・」

「決まってるだろう。いつもテルくんや虎鉄君とかと一緒に絡んでるからだろ？」

と理沙に言われ、ハヤテは苦笑い。確かに工作上、テルと一緒に行動を共にすることが多い。虎鉄の場合は言わずとも、勝手に絡んでくるのだ。だが、テルのことに関してはそれだけで疑われることはこちらとしても困るのだ。

「まあ、あんだけ仲良さそうにしてれば疑われるのも無理ないんじゃないか？」

「へ？」

美希の一言にハヤテが間抜けな声を出した。その反応に疑問を思った美希が聞き返す。

「ん？ なんだ。仲悪かったのか？ 君とテル夫君は友達ではないのか？」

「いや、そういう訳じゃないんですけど・・・なんか今まで友達いるのか？ って言われてきたもんですから、その・・・なんか」

頭の後ろに手を回してハヤテは笑みを浮かべた。前にいた高校

でも普通に男友達がいたが、白皇に来てから男子よりも女子と話すことが多い。今更ながら同じ仕事場に居て日常生活を送っているテルのところを今更友だちと呼ぶことに一種の照れを感じていた。

しかし、美希や理沙はそれを違う意味で捉えたようで。

「やっぱりこいつホモだよ」

「なんだよ。 やっぱりホモじゃないか」

「だから誤解ですって——！！」

少年は一刻も早く記憶から抹消したいと思ったのだった。

第89話く空を自由に飛べたらと、屋上へ行つた退職後の夏く

搜索隊その3。 千里と唯子のペア。

「なに？ 瀬川からチョコを貰っていたのかだと？」

「そうだ。 ちゃんと私に納得のいく理由を説明してもらおうか」

搜索活動のその道中。 千里は唯子から一つの質問を受けた。

それはここにはいないテルと泉が口にしていたホワイトデーとバレンタインの話である。

「あの瀬川嬢が、お前みたいな出来ていない人間にチョコなんてあげる訳がない！ 私の見解ではお前がモテない寂しさに耐え切れず金で瀬川じようを買収するという蛮逆・・・」

「そんな事するわけないだろうが!! 王であるこの身は、決してそのような女々しい事はしない!!」

顔を真っ赤にして千里が吠えた。 拳を既に握り締めており、今にも殴りかかってきそうな勢いである。 流石にここで殴り合う気は無いのか、唯子は両手を上げてその意思を示す。

「落ち着け。 実際のところはどうなんだ？」

唯子が真顔で聞いてきたので千里は一度呼吸を整える。 だがその一方で腕を組んで黙り込んでしまった。

「なんだ？ よもや、原因が分からないとは言わせないぞ」

「そのまさかだ。 原因が分からない」

は？ と唯子は顔を渋らせた。 この男にチョコを渡すなんてもの好きな女は恐らく世界広しといえど一人の居ないのだと唯子は思う。 だが、現に千里に渡している女子がいる。 天然である瀬川が渡してしまうのだ。

何はともあれ、理由があるはずだ。 あのバカ王子に渡すほどの理由が。

「そう言えば」

と、千里が一つ思い出したかのように口を開いた。

「チヨコとかが渡されるようになったのは、たしかあの時からだった気がするぞ」

そこで唯子は初めて、泉が入学当初、野犬に襲われていたのだという事を知った。

「なるほど。その襲われていた野犬を退治して瀬川嬢を助けたと」

「いや、助けたかどうかは知らん」

またしても唯子の眉間がつり上がった。今度は明確にイライラが募ってきている。そんなことをお構いなしに千里は続けるのだが。

「あの時は身に降りかかる火の粉を払っただけだ。それ以上の解釈はない」

ほう。と、唯子は自身の顎に手を付けた。要するに、千里は自分

に襲いかかるであろう野犬を当然のごとく防衛する為に撃退した。

泉はただそこにたまたま居たというだけ。

千里は誰かを助けたという認識がどこにもないのだ。

「だから何故俺が毎年あいつから菓子を買っているのか、未だに理解ができません。瀬川家とは乙葉家も色々と仕事の関係で交渉する間柄だ。無理に突っ返すこともできません・・・正直、困っている」

一連の内容を聞いて唯子は即座に取り出した竹刀で千里の顔面をぶつ叩いた。竹のしなりと共に甲高い音が林に響く。どこかで

他の捜索隊もこの音を聞いているだろうか。

「な、なぜ叩くのだ貴様アアア!!」

「黙れ木偶。少しでも貴様の人格を格上げした自分が愚かの極みだった。これを瀬川嬢が聞いていたら確実に泣くぞ。お前は失脚王から屑王に格上げだ喜べ」

「上がってはないだろう。それは喜べん!!」

「貴様がツツコミを行うとは・・・これもまた悲劇の幕開けか」

「三千院家にいると、こういった事は日常茶飯事なのでな。最初は髪の毛が何本か抜けた気がするのだが」

思い出される屈辱の日々に千里が怒りを込めた拳を深く握る。

普段の性格と経験した事のない環境での生活は千里が思っていた以

上のストレスを受けている。よく今日までストレスで倒れなかったと自分を褒めてやりたい位だ。

「・・・まあ、住むところがあるだけで良いと思え。三千院家が衣食住を提供していてくれるおかげでお前は普段と変わらない生活を遅れているのだ。これ以上求めるのは罰当たりなものだ。求めようとするといらないものまで手に入るからな」

竹刀をどこかに投げ捨てて顔を抑えて悶える千里を置いて歩き出す。しかし、数歩だけ足を雨後した唯子はいきなり立ち止まった。

「なあ、馬鹿木偶王子。お前は自分が置かれている状況を、どう考えている」

背を向けたまま静かに言う唯子に千里は顔をあげた。

「どうもこうも。いきなりの事で今もまだ混乱している状態だ。父上とも、加賀美とも連絡が取れず、今まで住んでいた家もなくなり、知らない家での生活だ。世の流れとは時として俺の意を無視して動いているらしい」

「そんなことは・・・。どうでもよい、私からの質問はひとつだ。もし、もしもだぞ。今までの事を全てなかったことにしてくれる、なんて胡散臭い魔法のような力を手に入れたらお前はそれを使うか？」
「は？ いきなり何を言い出すかと思えば、貴様もついにそんなカルトじみたことを言うようになったか」

と、笑おうとしたが振り返った唯子の目を見てそれは未遂に終わる。その目はいつになく真剣で無駄な回答を求めずこちらの意思を素直に話せと命じているかのようだったからだ。

「・・・どうもこうも、そんな幼稚なことに頼らずとも、俺は必ず父上を探し出し、会社をもう一度再建させてみせる。それがこの俺、乙葉千里に与えられた王としての責務だ」

強く言い放ったその一言に、唯子はうすら笑いを浮かべた。黒い長髪をなびかせた唯子は前へと歩き出す。

「たかだか戯言に何を本気の回答をしているのか・・・だが、今はそういうことしてお前がどうなるか見ておいてやろう」

「もの凄い上から目線なのが気に食わんな・・・この俺が上の人間だと

いうのに」

これまで以上に苛立ちを覚えた千里だったが、それとは別に一つの違和感が生まれた。彼女、唯子が一瞬だが見せたあの目は一体何だったのか。そして持ちかけてきたあの問いかけは何を意味するのか。

それは今の段階で理解する必要もないだろう。ただの唯子の妄言だ。と話に区切りを付けて千里は構わず前を向いて歩き出す。

○

「おーい瀬川ー。どこ行ったー？」

搜索を始めて大体三十分経ったというところだろうか。テルは一人で暗い道の林を歩いていった。

「参ったな。まさか瀬川と迷子になっちまうなんて・・・こんな死亡フラグがビンビンじゃねーか」

咄嗟に頭の後ろを搔いた。恐らく白皇の敷地内から出ることはないだろうが、この夜中で一体どんな遭遇するか分かったものではない。実際某探偵アニメも、死ぬのは必ず一人になってからである。

「大変だなあ。別に探さなくてもこの場合なら朝になって見つかるのがパターンなんだけど。こりゃ不思議探しの場合じゃねえーわ。気付けば俺もどこにいるのか分からなくなっちまってるし・・・」

見回しながら状況を分析すると、迷子を探しているうちにいつの間にか自分が迷子になっていたという。どこのポルナレフ状態だろうか。

「しかし、結構奥まで進んだと見るぜ。なんか木とかの形もスゲーー変わってきてるし・・・なにこれ？ 迷わずの森？」

きつとどこかで野生のデジモンでもいるのではないか。いつもどおり歩いていたら最初の敵、アグモンとかが出てくるかもしれない。さつきから肌を感じる寒気のようなものは一体何なのだろうか。

「うーん・・・ってアレ？」

とテルが顔をしかめる。いつのまにか右肩が上がっていた。

正確には何かにもたれかけられるようにしている状態だ。コツコツと何か骨のように硬い、その感触が背中に走る悪寒を加速させる。

「……………」

横を向き、テルが肩をかけていたその物体は、まさしく骨だった。

そう、骸骨の。

「ギャアアアアアアアアアアアア!!」

手を払いのけてエビが危険を察知したように後方へとテルは跳ねた。ホラーの映画のように現れたそれは間違いない骸骨。理科室によく置いてありそうな物だった。ケラケラケラと、歯を鳴らしてこちらを見る様は気味が悪い。

「又オオオオオ!!」

しかし、ケラケラと笑っていた骸骨にとってテルの次の行動はまさしく不意打ち以外のなにものでもないだろう。まるでルパンがベッドにダイブするかのように高々とジャンプすると、テルはそのまま骸骨めがけてバックドロップ。対幽霊用の御札を用いることなく、純粋な肉体技でその骸骨を叩き潰した。

「な、なんかのトリックかコレ、べ、べつに俺はビビってないけど!!」
バラバラになった骸骨をテルが震えた声を出しながら足蹴にしていた。絶対にビビっていたのだろう。

ここで何かに気づいていたか、テルがただならぬ雰囲気放つている骨を拾い上げた。

・・・なんか違うんだよなあ。

と、纏わり付いている雰囲気にかすかな違和感を感じる。確かにこの骸骨は悪霊とかのその類だろう。だが、これまでのとは違いうまく説明できないが雰囲気違った。

まるで誰かに作られた、もしくは無理やり連れてこられたかなうな。

「誰だ。そこにいる奴」

小さく枝が鳴った音をテルは聞き逃さなかった。すぐさまその方向に振り返る。

そこにいたのは一人の少女だった。

「・・・今日は変わった人がここに来ているのね」

姿を見せた少女は縦ロールの金髪、黒ドレス、片手に黒扇子と見ただけでどこかのお金持ちのお嬢様だということが分かった。

だが、テルが分かったのはそこだけではない。ナギや、千里などの今までのお金持ちとは全く違った存在。テルの感覚では貴族、もしくはもっとそれよりも上のような存在に感じた。

「ただのお嬢様って・・・訳じやなさそうなの」

「あら？ 冴えない顔をしている割に勘は良さそうね。アレを倒すくらいだから当然なのかしら？」

常に余裕の笑を浮かべる少女は扇子を開いて自身を扇いだ。日本生まれの外人なのか、日本語が流暢だ。スタイルもナギに見習わせたいくらいのナイスボディだ。だが。

・・・なんかあの上から目線がむかつく。非常にだ。

まだ出会って数分と立たないうちに目の前の少女に怒りを燃やすテル。テルの言い分はこうだ。相手が常にこちらを見下しているというそんな感覚が彼を目を細めさせる。

「フフ・・・よく見ればかなり荒削りな鍛え方をしたようね。その御陰でかなりの域まで達しているけど、未熟で効率の悪い成長の仕方ですわ」

「ファーストコンタクトに相応しくないなこの会話。他人の体の成長具合を把握して楽しいかよ。つーか、気持ち悪いフツーに考えて」「別にあなたに興味はありませんわ。昔、私が鍛えてやったらもっと強くなったでしょうに」

少女は軽く笑ってみせた。さつきからこの少女の言っている事が理解できない。

「もしかして、これが会話のドツチボールなの？」

「二応投げ返してはいるわ。それよりも、こんな所で何をしているのかしら・・・？」

仰いでいた扇子を閉じて、少女は質問する。漸く会話らしくなってきた。

「ここに昔の失踪事件の不思議を今更ながら探しに来ました・・・って

「言えば分かるか？」

「随分と昔の話ですわね。今更調べて一体どうするのかしら？」

少女の返しにテルは頭を掻いた。別に大きな目的があった訳ではなく、ただ三人娘の暇つぶしという娯楽に付き合っているだけなのだから。

「ただの暇つぶしだったっの。それともう一つ．．．一つだけ質問させてもらってもいいか？」

テルがそう言うと、少女が首を傾げて見せた。テルは口元をにやけさせながら続ける。

「お前は確か言った．．．『アレを倒すくらいだから当然』と。つまり、お前は俺と意味不明な骸骨との一部始終をしっかり見ていたわけだ．．．」

「．．．」

「お前、何か知ってるな？」

探りを入れて、テルは少女を問い詰めた。だが少女はさほど凶星のような驚く仕草をひとつも見せず小さく笑った。

「さあ？　どうなのかしら。それよりも面白かったわ貴方。骸骨相手に予想以上にビビりまくってたのだから」

そんな馬鹿な。とテルは腕を組む。少女は息をつくど、改めてこちらと向き合った。

「骸骨の事も勿論、私には関係があるわ。ただ、今回はちよつとテストしてみただけなの。あの「石」のレプリカの能力をどれだけ本物に近づけられているか。結果はまだまだだったわ。ま、こんなこと話しても貴方にまったく分からないことでしょうけどね」

「うん、解らん」

首を傾げて答えたテルに少女は整った表情に少しだけ眉間にシワを寄せた。

「こんな人間がハヤテの隣に居るなんて、あの人はどれだけ不幸なのかしら．．．」

「うん？ お前ハヤテの知り合い？」

テルの言葉に少女はうつかりしていたと気づく。そしてこちらを向くと少しキツめに睨みつけてきた。

・・・アレ？　なんか地雷だったのか？

これには少しだけテルも覚えがある。　うつかりNGワードをしゃべってしまった時の起こった時のマリアのような感覚だ。

「えーっと、友達とかだったのなら連れてきてやろうか？　一応今ここらへんにいるだろうから」

「今この場所にハヤテがいるの？」

「居るけど。　あ、待ってる、今電話しておいてやる。　ここ電波悪いけどつながるかな」

と、テルが携帯電話を取り出した時だ。

「待て」

冷酷な声が聞こえた。　その声の出どころは間違いなく目の前の少女。　まるでキャラが変わったかのような暗い声。　その声に打ち出していたボタンをテルは止めた。

「ハヤテが・・・いる。　つまり、アレが、近くに・・・!!」

「お、おい大丈夫かよ」

・・・なんだこの嫌な予感。　新手の中二病かよ。やべえよ、やべえよ。

テルが少しばかり焦りを感じた。　目の前の少女から感じた別の存在のようなものが今少女の体に乗っ取っているかのような。　そうでもなければこんな殺意丸出し、しかも狂気レベルの類の物を放ちはしないだろう。

気付けばテルは目の前の少女に対してか、腰に付けている鉄パイプに手を伸ばしていた。　明らかに自分は何かに感じている。　得体のしれない何かに。

「ぐっ！　石・・・石さえあれば・・・!!」

・・・石？　なんかそんな風に石に執着するやつ久しぶりに見たな。

そう言えばあの変化大好き石マニアの女はどこかで元気にやっているだろうか。

などと呑気に構えていたとき、目の前の少女の雰囲気が一変変わった。その瞬間、前方から背中を突き抜けるような衝撃が体を駆け巡る。

テルの体は後ろへと吹き飛ばされていた。

「……ふッ」

激痛と共に地面を転がったテルは身を起こした。見据える先には膝を付いて頭を抑える少女の姿がある。

それよりもだ。

……何が起きた。

頭を振ってテルは身を起こす。確かに自分は何か物体に殴られたような感覚を味わった。だが、その姿は目で確認することができない。目の前に迫った風圧を感じてなんとか鉄パイプを盾にして防いだものの、それでも体が激痛に震えている。鉄パイプがなければ意識を手放していただろう。

「あの石は……どこだ？」

目の前の少女はまるで何かに乗り移られたかのような豹変ぶりを見せていた。余裕のある声とはほど離れた声色。まるで中に別の人間が入ってしゃべっているようだ。

「貴方は少し知りすぎたようね。ここで退場してもらいましょう……」

少女は右手を掲げる。その時、テルは一瞬だがその眼球を見開いてありえない現実を見た。

「おいおい……なんの冗談だよ」

少女の背後から薄い巨大なそれは明らかに腕の形をしていた。骨の腕。先程の骸骨の骨とは比べ物にならないほどの大きさ。

……この吐き気を催すような邪悪さは!!

先ほどとは全く違い、全身が氷の中に埋められたかのような物理的寒気と、突然とした吐き気に襲われる。少しでも気を抜いたらとても立ってなんて居られない。

「……けど、簡単にやられたりしないんだよな、男の意地的な？　そもそもやられるつもりもねーし、って撃鉄が折れてるウ——

!？」

テルが武器の鉄パイプを構えた時だった。テルの武器である撃鉄の持っている手から先の身がない。

先程の一撃で完璧に折られている事にテルは全く気付いていなかったのだ。

・・・やべつ。

見上げて見れば既に真上には巨大な骨の腕が拳を握り締めて狙いを定めていた。テルは当然反応することが出来ず。

「私の名前をまだ教えていなかったわね。私の名前は天王洲アテネ、『アテネ』とは、この星でもっとも偉大な女神の名前よ」

・・・誰も教えてなんて言っただけーし!!

テルがその少女の名前を覚え事も、防御をする間もない次の瞬間、白皇学院の敷地内に巨大な轟音が響き渡った。

○

「はあ、はあ・・・」

だいぶ落ち着いたのか、大きく肩を落としたアテネという少女。

ついさっきまで出現していた骨の腕は今は消えており、目の前には一人が埋まるくらいのクレーターが出来ている。

そのクレーターにはテルが目を閉じたまま沈んでいた。

「・・・」

まるでサイバイマンに自爆を仕掛けられた後のヤムチャのようなポーズで沈む彼は生きているのか分からない。アテネはテルの側まで近づいて首元に手を当てて見た。

「生きてる。良かった・・・完全に気を失っているようね」

と、一命を取り留めていた事にアテネはホッと胸を撫でおろした。だが、一応あれだけの攻撃を受けてしまったのだからダメージは有るはず。

「これくらいはやっておかないと・・・」

右手から一つの光が表れ、人差し指をテルの頭につける。一瞬光が弾けたのを見て、アテネはすっと立ち上がった。

「ちよつとだけ貴方の記憶、弄らせて貰ったから。昔の人のように・・・ね。 といつても、この説明も今の貴方には聞こえていないでしょうけど」

軽く笑みを浮かべるとアテネは踵を返してその場を離れていく。その足取りは少しだけ重い。

・・・今年になってからほとんど意識が蝕まれてる。早く石を見つけ出さないと。

「アテネ、ここにいたのか」

ふらつくアテネの前に一人の男が現れた。タキシード姿のその男は色黒の肌に白い髪をした中々のイケメン。

「マキナ、遅いわよ。 主人が呼んだのに執事のあなたがこれだけ遅れるとは・・・全くお馬鹿な子ね」

「な、なんだとお!! 遅れたのはちよつと日本のモスの方に行つててだな!!」

マキナと呼ばれるこの少年はどうやらアテネの執事らしい。どこか子供じみた印象を持つマキナに対してアテネは笑うことなく歩むのを続ける。

「今日は少し疲れたわ。早く戻りましょう」

「なあ、アイツはどうするの?」

マキナが指で示す先にはクレーターに沈んだテルがいる。

「別に放っておいてもいいんじゃないかしら? 手当はしたし、記憶の方も少しだけ弄ってるから。それに、その子はある人の友達らしいからやめておきなさい」

「はあ〜い」

気の抜けるような声にアテネはやれやれといった表情でその場を後にした。

・・・もしかしたら、貴方に会う日が近くなっているということなのかしら。 遠目で眺めるのではなく、目の前で会うという日が・・・ハヤテ。

アテネの嘆きに近いその心のうちの声は誰にも悟られることは無い。

「おーい！テル夫くん、起きてー!!」

「ヤムチャヤー！ 起きろヤムチャヤー!!」

「あん？ なんだよ一体・・・」

テルが目を覚ましたのは五月蠅い泉と理沙の目覚ましのせいだった。テルはクレーターに埋まっている体を動かして立ち上がる。

・・・なんでこんな所で寝てたんだ俺？

テルは自分がクレーターに埋まっていた理由が浮かばない。 思
い出せないのだ。

「こんな所で何してんだよヤムチャヤー、もう探索は終わりだぞ。 結
局なんも見つかんなかったんだがな」

「いや、それはどうでもいいんだけどよ。 ヤムチャっていうのやめ
てくれない？」

「ヤムチャさん、こんなところで寝てないでそろそろ帰りましょうよ。
なんか凄い地響きが起きたんですけど、それでコツチに関係者の人
とかが来るみたいなんです」

ハヤテが流れに便乗しているのでテルはその腹にボディーを決め
た。 少しでも痛がってハヤテは体制を低くする。

「恐らく、宿直の雪路だろう。 皆のもの、今日は撤収であるぞ」
「仕切んなバカ王子」

唯子がドヤ顔で指示を飛ばす千里の頭を叩いた。 仕方ないと
いった表情で一同はその場を去っていく。 ただ他の人が去って
いってテルは頭に手を乗せて考えていた。

何かが浮かぶわけでもないのだが、どうしようもない違和感のよう
な、引つ掛かるようなものがあるのだ。

・・・なんかガシャドクロの先祖返りを見たような。

こうして、多くの謎を残して不思議探索活動は終を告げたのであ
った。

第90話く春と義碗と新学期く

春の風が吹く。それは四月特有の暖かい風だ。

女の子のスカートをめくってくれる、俗に言う春一番も春の風である。

そんな事はさておき、ここは三千院家。

「ゴホツ・・・」

寝巻きの姿で壁にもたれるようにしているのはナギだった。咳き込んでいるが、どこかわざとらしさを感じさせる。彼女にとつては今日は重要な日なのかもしれない。

「ゴホツ・・・ゴホツ！ あ、なんだろコレ、カゼじゃないかな？ うん、きつとカゼであろう」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

その演技を見て三千院家の使用人たちはもはや定番となったこのやりとりに呆れながらも、じーっとナギを見つめた。

「が、がはっ！ こ、これはかなりの重症だ！ 体がだるいし、体が動くことを拒否している！ マラリアにかかったに違いない！」

どうして南米とかの病気にナギがかかる要素があるだろうか。というツツコミをすることも使用人たちは無かった。

そして一度だけため息をついて。

「じゃあ一通りナギの迫真の演技を眺めたところで学校行きますか」

「うおい！ なんだその言い草は!! それでは私がまるで仮病みたいではないか!!」

「それだけ叫べるなら病気で学校に行けこの野郎!!」

「えええ!!」

第90話く春と義碗と新学期く

「あー、ダルイ・・・新学期、超ダルイ」

白皇学院の職員室、朝の朝礼の十分くらい前だろうか、桂 雪路は虚ろな目で自身の机に突っ伏していた。

「お前なあ、それが教師の言うセリフか？」

インスタントコーヒーを片手に、白皇学院の体育教員、薫 京ノ介がため息混じりにだるそうにしている雪路に言った。

「うるさいわねえ、怠いもんは怠いの。怠いっていうことも怠いわく。これからはまばたきを三回したらダルイを共通の合図にすべきね」

「そんなやる気のないお前に、理事長からこれだ」

声もほとんど生気が感じられない雪路の机に、京ノ介が何かを置いた。

「え？ なに？ お金？」

誰かから贈られたものであればこの人物はなんでもお金だと勘違いするのだろうか。 お金と偽った時限爆弾をもってどこか走っていつてくださいと頼んだら、喜んで時限爆弾を抱きしめてそのまま爆発してくれそうだ。 と、京ノ介は呆れる。

「ちげーよ。生徒名簿だ生徒名簿！」

顔を上げて見るその黒い本を見る。 京ノ介の言うとおり、その黒い本には生徒名簿と明記されていた。

「ん？ 担任？ 私が？」

更に雪路は下の部分に担任、桂雪路と書かれた文字を見つける。 それには京ノ介が答えた。

「そ。 新学期から副担任から担任に格上げだとき」

「ああ、あつたわねそんな設定」

オイ。 と京ノ介がツツコムが、雪路はこれまで後輩の天才教師、牧村により雪路の受け持つクラスの担任を副担任の役職に落とされていたのだ。

「ってことは、私の給料がUP!？」

「お前、ほんとお金のことばっかだよな。 頭の中」

この女はもしかしたら生前もお金の亡者だったのかもしれない。 と、京ノ介は思った。

「そういえば、早速だけどここの学校に転入生くることになったぞ？
しかもお前のクラスだ」

「え？ 転入生？ それはまあ、珍しくもないんじゃないかしら？」
「いや、善立といい綾崎といい、立て続けにこうも転入生って増えるも
んなのか？ それにこの生徒、かなりやばい臭いが」

どれどれ？ と雪路は書類を受け取って、見る。写真に写っていたのは一人の少年の姿。京ノ介は生唾を飲み込んだ。

「ど、どうだ？ け、結構危ないような気がするだろう!? この生徒、
ちゃんと試験通ってきたんだってな」

ふーん。と雪路は頭を掻く。

「っていうか、アンタなにビビってんの？」

「だってコイツ怖いだろうが！ 見た感じでもうゴツツ不良じゃん！
俺ちよつと変なことしたら夜道で後ろから狙われるかもって思っ
ちまってんだぜ!」

「じゃあかしい!!」

ドスつと京ノ介の右の脇腹に雪路の肘内が抉るように入った。
一瞬折れたのではないかと心配する間もなく京ノ介の体が崩れ落ち
る。

「そんな第一印象で全部決めるもんじゃないわよバカ。そういう決
めつけてかなりの確率でイジメとかに繋がるもんよ。本人が気に
してることもかもしれないじゃない？ アンタそれでも教師なの？」

「お、俺は・・・ちよつとは心配してんだぞ!」

「他人の心配する暇あんのか。それにいちいち見てくれにビビって
いるようじゃ教師なんて職業、務まるわけないわ馬鹿ノ介」

「ば、馬鹿にするなあ！ み、見てろお！ ビビらずにちゃんとコミュ
ニケーションして且つフレンドリーになってやる!!」

その意気込みかけるや、戦時中の爆弾三勇士が最後の特攻を仕掛け
るための決意の顔。しかし、その表情は一気に崩される事になるの
だ。

「失礼しまーす」

職員室の扉が開き、一人の生徒が入ってくると同時、京ノ介はすぐ

さま自身の机の中に身を隠したのだった。

○

朝のHR、新学期早々に善立テルは机に両肘を付けて頭を抱えていた。

「えー皆さん新学期、進級おめでとう。あたしが二年のあんたたちを担当する桂 雪路よ。さてさて、春眠暁を覚えず、春は出会いを呼ぶ季節。なんて言葉があるように、君らに新しい転入生をご紹介しましょうか」

雪路が笑顔で教卓に出席名簿を置いて隣の一人の少年をさした。白皇のブレザーを着た少年は雪路に促されて姿勢を正して言った。

「どうも。この度、転入してきた木原 竜児です。年齢は17、趣味は体を鍛えること」

・・・なんでだよ。

とテルは机に倒れる込むように頭突きした。ゴツという音と共に机が少しだけ前へ傾く。

このクラスの生徒に凜々しくも挨拶する男、木原 竜児は一度九十度の角度で体を折り曲げた。一礼のつもりであったが。

・・・オイオイ、前列の東宮が失神してるじゃねーか。

不幸な事に丁度木原の目の前に居た同じクラスの東宮は一礼の時に迫ってきた木原の表情に恐怖してしまったのだ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

教室内に沈黙が流れた。気絶してる東宮は放っておいて、一同は声を発することもできないのだ。

その理由はただ一つ。

彼の、木原の表情がとても怖いのだ。

「色々とび迷惑を掛けると思うけど、皆ヨロシク」

木原が笑う。だが、その笑い方はもうただの悪人が人を殺すときに浮かべるニタついた笑だ。

・・・ご迷惑をかけるって、つまり現在進行系で？

・・・ヨロシクっていうのはこっちの夜露死苦でいいのかしら・・・

・・・きつと服の下に武器持つてるよ。

・・・多分目を見たら即死だよ。

木原のガチのスマイルを見た生徒がざわつき始めた。　こそこそと話す者と、東宮と同じく口から泡を拭いている人だっている。

「はいはい、盛り上がるのはそれまでにして。　木原君、じゃああの空いている席に座ってね」

「分かりました」

会釈して、雪路に示された空いている席へと歩いていく。　やはり歩いているだけでも周りの反応は著しい。　彼が歩くその道の机が一センチくらい移動している気がする。

・・・ああ、なるほど。　この席ってそういうことなのね。

テルがチラツと横目で見ると、そこには主人のいない机があった。

「・・・」

その主のいない机の横に、木原がつくと無言のまま座った。

「なんでよりによって俺の隣なんだよ」

「この理事長さんはどうやら俺たちの事を知っているみたいだったぜ。　それでこういう組み合わせにくれたらしい」

ヒソヒソと、二人は周りに悟られないように会話する。　この理事長は、白皇学院の理事長は何人かの人間によって構成されているらしいが、その中の誰かがこちらの事情を知っている人間だとテルは考えたが、木原を放っておくということには特に害はないらしい。

「でもお前、自己紹介で「体を鍛える」ことはねーよ。　それ絶対一番最初の自己紹介で失敗したパターンだって」

「そうか？　体を鍛えることは大切だぞ？」

木原の自己紹介がなんなく終わり、新学期の初授業がスタートした。　なんなく授業を終えて、既に四時間目が終わったあとのことだ。

どこで昼食を取ろうかと考えていたところにハヤテたちがやってくる。

「あ、テルさん。今日は皆で食べますか？　木原さんとも色々話とかをしておきたいですよ」

と言われて、一同は白皇学院のカフェテリアにて昼食を取ることにしたのだ。

○

「しかしまあこの白皇学院ってこんなにデカかったんだなあ・・・たまげたなあ・・・」

カフェテリアにて椅子に座った木原の後ろには巨大な白い時計塔、それを囲む壁が一キロほど続いている。そのどこかの有名な宮殿並みの規模に木原は心底感嘆していたのだった。

「なんだお前、一回くらいここに潜入とかしておるのであろう？　今更驚いているのか」

ナギが木原の方を見ると木原はナギの方を見る。ナギは特に怯えることはないのが木原にとって少しだけ救いである。

「まあな。あの時は凄いい祭り騒ぎだったし、ここを詳しく回る暇がなかったんだよ。なんか俺途中で寝落ちしてたし」

「ヒナ祭りですか・・・なんだか懐かし響きですね」

「ホントだな。あれからそんなに経っていない気がするんだけどな・・・思い出したくなかったのに」

「人間爆弾と女装か」

「ナギ、それは言うな」

ヒナ祭りの話は色々ところらの気が重くなるな、とテルは思う。

二人にとって生死の狭間を歩かされた火だった。ハヤテは体面上の『死』とテルはリアルな『死』である。

「それにしても、今まで争っていた人間同士がこうやって食事するなんて夢にも思いませんでしたねお嬢様」

「そうだなハヤテ。大抵のロープレものの敵が仲間になるのは物語の終盤か、ラスボスと戦う時だ。それをお前らそんな型破りも大概にしろ」

「オイオイ、悪いけどオレらはそんなユーザ達の期待に応えられるような事は出来ねえんだよ。そんな王道ご都合の話じゃねーんだ」

「そうだと。それにリアルとゲームをぶっっちゃにするな」

テルと木原が同盟を組んだかのように腕を組んで返す。コイツらかなり仲がいいのではないかとナギは思った。

「そう言えば、今木原さんはどこに住んでるんですか?」

ハヤテが話題を変えて木原に聞いた。木原は購買部で手に入れたパンをひと齧りして、それを飲み込んでから口を開いた。

「今は住み込みの仕事しながらやってる。たしかホラ、学年主任の牧村先生だ」

その話を聞いて木原以外の一同は身を固まらせた。木原はそのまま続ける。

「俺の義手に目を付けた牧村先生が手を直してくれる代わりに研究所で手伝いしてくれて頼まれてさ。見ろよコレ、もうほとんど人間の肌に近い素材で出来てんだぜ?」

と木原が見せる右腕は以前のように黒い鋼鉄の義手ではなく、普通の人間の手になっていた。

「やべえよ、コレ。マジで感激した。今でも腕は簡単に取り外しできるけど、これでサビとかの手入れには困らねえぜ」

・・・めつちや嬉しそうだなオイ。

とテルは右腕をさする木原を見てそう思う。やはり重いだけのただの鉄の義手では色々と不便があったのだろう。と、木原が思い出したかのように手を叩いた。

「そう言えば牧村先生が俺の為に特別なアタッチメントを付けてくれたんだった。見たいか? 見たけりや見せてやるよ」

「別に見せてとも言っていないのに見せる辺、相当自慢したいようだな」

ナギが呆れたように頬杖を着く。木原はニヤリと笑みを浮かべながらその義手の腕に手をかけた。どうやら外すには仕組みがあるらしく、半分くらい腕を回すと音が小さく鳴り、外れた。

「どうだいコイツは?」

外された義手の中に隠されていた物を見て、一同は口を開いた。

「アウトだろアウト——!!」

ナギが手を上げて叫びを上げる。対して木原は両手を平行にして構える。

「なんでだよ。どこがアウトなんだよ。セーフだろセーフ」

「いやいや、アウトだからお前! それアレだろ? 某宇宙海賊が腕に付けている精神力を弾にして撃つやつだろうが!!!」

木原がドヤ顔で見せつける異形の物体を示してテルが突っ込んだ。

右腕から飛び出た筒丈のそれはどう見てもあの某週刊少年誌で連載をしていた宇宙海賊の男の銃ではないのか。

「やっぱ男の憧れだよなサイコガンは。でも出るのはなんとベタに花束なんだわ、残念」

「いや、俺は内心ホッとした。これで海賊ギルドに追われる羽目になるのはゴメンだからな」

ため息と共に、木原が右腕を付け直した。この場面を見かけられていないことを祈るばかりである。白皇学院に宇宙海賊の銃を付けた男がいるなど、人気者になること間違なしだが。

「まあ絶対に他人には見せないけどな。俺も面倒なことは好きじゃねえし」

そこらへんの自制心は持ち合わせていたようだ。これにはテルやハヤテたちも笑みをこぼす。

「それと。俺が白皇で学園生活を送るにあたって牧村先生から一つだけ条件を提示されてる。さつき言ってた研究の手伝いのヤツなんだけどさ」

その言葉を聞いてその場にいた一同の髪の毛が逆立った。

「ま、まさか研究の手伝いを良いことに牧村先生にエロいことするかよ!!」

「そ、それはしてはいけません!! してはいけませんよ・・・!!」

「マジで死ねばいいのに。取り敢えず警察を呼ぼうじゃないか。

お前の罪状は強制猥褻行為だ。取り敢えず暫くは私たちに話し掛けないで」

・・・えらく曲りに曲がった誤解を受けてるよなあ。

と木原は肩を落とす。確かに自分の顔は明らかにその手の人間の顔だが。内心はとても穏やかな人間だと木原は自負している。ここまで曲がった、むしろ悪意に満ち足りた解釈を受けられるのは御免だ。

「お前ら、取り敢えず落ち着けて。俺がやっている研究の手伝

いは、ある実験データの収集だ」

「実験ッ!？」

その言葉に一同が首をかしげる。まさか本格的に体をサイボーグにして宇宙海賊からターミネーターのクラスにジョブチェンジする気なのか・・・と思いを馳せるナギだったが。次に木原が口にした言葉は。

「戦闘・・・だそうだ」

次の瞬間、目を丸くしている一同の数メートル先の地面に何かが轟音をたてて墜落してきた。

「な、なんだあ!？」

慌ててテルが椅子から立ち上がる。墜落した砂煙のあがる場所から、機械音と共に何かが近づいてきた。

「おっと、そろそろ時間のようだ」

缶コーヒーを飲み干した木原はテーブルの上に静かに置くとゆつくりと席を立った。

『ウオオオオオ———!! 木原アアア!! 今日こそぶち殺してやるワアアア!!』

物騒な事を叫んでいるのは見た目がまるで昭和の遺産とも言えるようなボディをしたロボットだった。その姿を見るやハヤテがこの姿に見覚えがあった。

「あつ。このロボット、僕たちの家に来たロボットのエイトじゃないですか?」

「おお、そう言えばそんな気がするな。今まで出てくることもなかったから忘れてたぞ」

「え? 何あれ? ちょっと教えろよお前ら。俺だけ取り残されて

んじゃん、放置プレイやるのって良くないと思いまーす」

テルだけが話について行けなくなり、右手を上げて主張する。説明を求めるテルにハヤテが色々とはづって説明を行う。

「あれは牧村先生が作ったロボットのエイトですよ。最初は僕と戦ってたんです・・・確か廃棄処分に向った筈なんですけど」

『俺の先生への愛は誰にも止められなアアイ!! 俺と先生の愛の巢を邪魔しようとする輩はこの俺が直々にデストロイ!!』

アームを動かして殺意を振りまく様を見ると元気に帰ってきている。だがテルが細めでその体の数字の横に何か小さく書き足されている事に気付いた。

8 v e r 3 . 1 .

・・・なんか良くわかったけど。 修正パッチ当てられただけじゃあ・・・不遇だなオイ

不覚にも心の中でテルは、あのロボットに軽く同情してしまった。あのロボットも序盤の勢いが無くなって他の出番が減ってきたストーリーのテコ入れみたいな扱いで登場するという不遇の扱いを強いられているのだと。

「なんか俺が住み始めた頃から凄い俺に突っかかってくるんだよ。

適当にぶん殴り続けたら先生が『なんかキミ面白いし、次の重火器の構成の研究に役立ちそうだから続けてて〜』って」

「つまりアレか。 戦闘データの収集ってそういうことか」

テルが納得すると木原は軽く笑って見せた。

「いやあ、俺の事を面白いつて言ってくれた人久しぶりだぜ。 世の中捨てたもんじゃねえな」

「よく考えろ、お前最終的に人体実験のサンプルにされてんだからな」
テルが言うのを喜びで聞こえていないのか木原は腕をくるくると回しているやる気が満々のようだ。

と、突然木原の動きが止まった。

「そうだ。 もう俺を飯とかに誘わなくてもいいぞ」

「あ? どういうことだよ」

木原の突然の言葉に、テルは眉を潜めて返す。 対する木原はやる

せなさそうに続けて。

「どういうことって、俺みたいなガラ悪そうな生徒とつるむところ他の生徒に見られてたらマズイだろ。金持ち令嬢の体面上、そういうの良くねえだろ」

拒絶の言葉を詰まることなく述べる木原。彼は今日の自己紹介の時点で自分がこれまでと変わらない批難の目で見られていると理解した。別に彼自身はそのことには慣れていたので耐えられる。だがその彼とこうやって話をしているテルやハヤテたちも同じような人間と見られるのではないのか。

木原は自分の批難により知人が巻き込まれるのを避けたかったのだ。巻き込まれれば、テルたちも自分のように今まで普通に接してきた人間から一線を置かれるかもしれない。下手すればイジメなども。

それだけは避けなければならなかった。

彼はこうしてテル達と共に学園生活を送ることができると。それだけで良いのだと思っているのだ。

だが、そんな彼を見てテルは頭を掻いた後、言った。

「オイオイうちのお嬢様。なんか言ってる奴がいるけどさあ・・・そこんどこどうよ」

「いんや、別にいいいんじやないか？ もうすでにやばい奴と一緒にいるようなモンだし」

「まあそうですね。はっきり言ってテルさんは色んな意味でヤヴァイですから」

ナギとハヤテのダブルパンチにテルは苦笑い。

「・・・とまあ、こいつらも言ってるんだ。あんま見た目やらなんやら気にすることもねえと思うぞ。一番お前が言ってたことじゃん。」

『人を見かけで判断しない』ってよ」

それにさ。 とテルは続ける。

「俺はまた、お前と一っテーブル挟んで飯を食えればいいと思ってる。

それでもお前が嫌だっけ言うんなら仕方ねえ、こつちも無理に言わねえよ？ でもこつちはいつでもウエルカムだぜ？」

その言葉を聞き、木原は目柱が少しだけ熱くなるのを感じた。寸でのところで超えてはいけない見せてはいけない一線で踏みとどまることができたが。

「実はテルさんもホモなんじゃ・・・」

「あーこわいこわい。　そういうのはハヤテとかでも十分間に合ってるのにな。　あれ？　ハヤテはメイド要因？　ホモ要因だっけか？」
「そこ、場面を台無しにするようなことを言うな」

そのやり取りを見て、木原は安堵した。　そして同時に心の中でこう思った。

・・・あの時よりもいい場所に來たな、俺。　ああ、間違いなく。

「ま、俺と同じくらいにヤヴァイ奴が言うんだから、な。　後悔すんなよ？　遅いからな？」

「ま、お前より酷い奴の方が多いしなこの学校。　ほら、さっさと行けよ。　待ってるぞ」

テルに促されて、木原は無言で向かう。　殺気立ったエイトが待ち構え、お互いが対峙した。

・・・取り敢えず昼休みまでには終わらせよう、うん。　しかしまあまだ小腹がすくな。

ランチが少なめだったので少し食べたりになかった。　今度はちやんと一杯持ってこないといけないなと木原は思いながらエイトに向かって駆け出した。

彼の止まっていた時間が、漸く動き出した気がした。

第91話く内容のない物語く

これはある少女の漫画家としての成長を描いた物語。

挫折と苦悩を味わいつかむことが出来た栄光。その礎となったのはあの特訓の日々。辛くも楽しいあの日々。

その名は。

「第二回！ チキチキ、唯子さんの放課後語りタイムく☒」

広い教室内で唯子の声が拍手と共に響いた。拍手の後に生徒会三人組の一同は和気あいあいと両手を上げてわーいなどとやっている。

「またなんか始まったぜえ。無理やり放課後タイムが」

所々席が空いている教室の中で一つの席に座ったテルがだらしなさそうに両足を机に乗せている。

「え？ なにこれ？ え？ 俺なんでこんな所にいるの？」

そのテルの席から右に二つ席を開けて木原が辺りを見回していた。

「フッフ・・・君にとっては初めてだったかな？ 木原二年生」

「うおっ。この人俺の名前知ってるよ、初対面なのに・・・」

「あんま気にすんな、気にしてたら心の疲労は積もるばかりだ。ハゲるぞ」

驚きを隠せない木原にテルが諭した。テルの三つほど席を空けて座っているナギがPSPを弄りまくっている。

「別に今更・・・というか久しぶりだなこの企画って」

「それにしても今回は豪華に二年の教室でやるんですね？」

いつもは相談室と言えるような場所で行なっているのだが、今回はそれよりはるかに広い事にハヤテが気付いた。

「うむ。なんと今日はいつものところが使えなくてな、逆に吹奏楽部の活動は休みらしいのでどうせならここで豪勢に使ってやろうと思ってるな」

「ふん。どうでもいいことに毎度この俺を巻き込みおって・・・俺にこんな暇はないのだ」

「まあまあ王様。 いいじゃんよ、そんな頭硬いと色々と大変だぜ？
家を追い出されて色々わけわかんないこんな時にこそだつてば
よ」

「もはやなんのキャラかわかんなくなってきたぞ。 善立」

教室の端の席に座った千里が悪態をつく。 だが実際、ハヤテたち
とほぼ帰りは一緒なので部活も何もしていない千里は完全に暇を持
て余していた。

「じゃあ今日のお題は・・・」

手を一度叩いて注意をこちらに向けさせた唯子が黒板を白チョー
クで文字を書いた。 しかし、何故今日に限って唯子は白衣姿なのか
よく分からないが。 それを問い詰めると、どうせ気分の問題だと言
われそうだと一同は突っ込むのをやめていた。

『死亡フラグ』

「今日のお題は、漫画でよく使われるこの言葉に付いて考えてもらお
うと思う」

第91話く内容のない物語く

「はいはい」

「どうした瀬川女子。 質問なら受け付けよう」

開始数秒といったところだろうか、唯子がチョークを置いた時に固
まっていた生徒会三人組の一人、瀬川泉が手をあげた。

「そんなのハヤテ君とテルくんを例に出せば簡単だと思いまーす」

「泉！ オレらをいつもどんな目で見てんだ！ ていうか、内容がマニ
アックすぎるだろー！」

「僕だつて好きで立ててるわけじゃないのに・・・」

「ふむ。 死亡フラグの製造機野郎、ではなく善立くん、良い質問
だ・・・まずこの質問の答えに移る前にみんなに見てもらいたいもの
があるのだ」

唯子が教卓の上に用意されていたリモコンのスイッチを押すと真

上の天井の隙間から授業で使われるスクリーンが降りてきた。そして向かい合うようにテルたちの後ろに設置された映写機が光を照らすとある絵が映し出されてきた。

荒れ果てた荒野にて厳ついオツサンがフリルの魔法少女服を着て、棍棒をもったペンギンと戦っている場面だった。

『くっ、さすがはドクターベルクサンシャインの新発明、絶対防御ペンギン將軍ツ！ 今までの敵とは訳が違う・・・』

『フッフ・・・我が砂糖防御の前には貴様の魔法ももはや効かんわ。』

貴様を亡きものにして貴様らの基地にある最強銀河エナジー東京復刻版を我が惑星サンシャイン109の封印を解かせてもらう・・・死ぬがいい、南極大陸ペンギンウェーブ!!』

『ぬわ————ツ!!』

『フッフ・・・他愛なし・・・』

『そう言えば今日のアタイには死亡フラグが立っていたな、だからか・・・ガクツ』

「また私の漫画を勝手にイ！ ぬわあああああ!!」

「お、お嬢様！ 落ち着いてください！ あの人の手に渡ったしまったものはもうどうしようもありません、諦めてください!!」

唯子の手に渡った個人情報を取り返すことなどできない、渡った時点で諦めるのが筋というものだと一同は分かっていた。

「まあそんな事は後にして、私はこの漫画をあらかた見ていたから言わせてもらうがこの話の中で一度もその死亡フラグが立っていたようなコマは存在しなかった」

ビシィツと指を指されたナギは目を泳がせながら

「あ、あれはだな・・・一応ギャグというか、シリアスの中に存在する笑いというか・・・」

「お嬢様・・・流石にそれだけだと読者のみなさんは解釈しきれませんよ」

「ああ・・・俺にも何を言っているのか分からなかったぜ。あえて言わせてもらおうなら気づいたら主人公が死んでいたッ」

「ぐっ・・・ハヤテ、テル お前らまで・・・!!」

「まあまあ喧嘩するな・・・さて、問題の解決を考える前に先程の二人の質問に答えよう。 ずばり、これは物語の構成、伏線についての知識を改めて得ることでこういった意味不明な展開を防ぐことにあるのだ」

「意味不明だとおお!! このあとブリトニーは超聖天使のパワーを授かり、ナチュラルコズミックパワーを得た最強デストロイ形態へと進化する為の布石なんだぞ!」

「未来に繋がる・・・という結果では出来ているかもしれないが、これでは読者はなんか勝手に死んで次回でいきなりパワーアップしてきたように見えるだろ。 そしてなによりキャラに感情移入ができない。 伏線とはうまく使えば、そのキャラクターを一気に人気キャラにすることだって可能だ」

「まあ、ジャ○プの某スリーポイントシューターの元不良も、喧嘩するお話が終わったら普通に本編に絡まないでモブキャラとして終わる予定だったのが、作者の感情移入とか過去の話が評価良くて人気投票に入ってそのままスタメン入りしちゃいましたし・・・」

「伏線ってば大事なんだよな・・・まあ伏線がない漫画なんてカレーをかけていないカレーライスみたいなものだからな」

「ちよつと黙れテル」

腕を組んで考えていたテルに木原の腕に仕込まれていたサイコガンから豆が放たれてテルの額に当たった。

「だから今回は死亡フラグ・・・もとい、伏線を君らに実践してもらう」

「え? 実践するの? 伏線を?」

「ああ、死亡f・・・間違えた伏線の場面をだ」

絶対死亡フラグやらせるつもりだったろ・・・と一同が目を細めて

唯子に視線を送るが当の唯子は髪をかき上げて言い放った。

「やるぞ」

ニヤリと笑いながらそう言う唯子の笑顔を見た一同は思った。

今日はもう嫌な予感しかしない・・・と。

○

「シーンその1！ 『帰ってきたら一緒にサラダ食おうぜ』と言って出撃した彼女が一生帰ってこなくなる死亡フラグ！」

「ハヤテ君！ 帰ってきたら一緒にサラダ食べようね！」

「ははっ、それじゃあ最高のドレッシングを撃墜期待と一緒に持つてきますよ泉さん！・・・ってこれじゃあただの死亡フラグシーンの再現だけですよ!!」

広大なグラウンド、放課後の部活動で賑わっていると思いきや、辺りはガランとした。 どこも休みで部活動の姿がないグラウンドに唯子たちの姿があつたのである。

そこで泉とハヤテがなにやら不思議な上のやり取りをしていたのだ。

「いけないか？」

「いや、いけないとかという問題じゃなくて・・・読んでる人たちに対してこれほど意味不明な展開はないかと」

「ならば死亡するほうのシーンも付けておいてやろう。 ほとんど爆発オチが見えているだろうけどな・・・」

と、懐から出てきたのは小さな爆竹の箱だった。 いくら本物の爆弾が使えないからといって爆竹で代用するだけでも充分危険だ。

「他にないんですか？ 爆発をスモークとかで誤魔化すとか!!」

「ハヤテ、逆にそっちの方が無理があるだろう・・・それと宇宙であんな風に爆発は起きないらしい」

ハヤテの問いにナギが答えた。 そもそも、最初とやろうとしていたことすら出来ていないのではないかと思ってきた一同である。

「よし、次から本気出す」

唯子が大きく手を上げる。それは新たな授業再開の合図だった。

○

照りつける砂漠の太陽が軍服から露になった腕の素肌に降り注ぐ。

ハヤテが率いる一個中隊は砂漠の戦いに駆り出されていた。隊は全員で六人。全員が前線へと向かいはや三日。昼はひたすら敵地を目指し、夜はテントを張り、交代方式で見張りをする三日だった。

「ハヤ太くん、目的地まではあとどれくらいなの？ 私疲れちゃった・・・」

紫の髪をした泉が歩いている最中に膝をついてしまった。隊長であるハヤテは手を差し伸べて立ち上がらせる。

「泉さん、あと少しですよ？ 二、三キロ先には敵の基地が見えますから。今回は奇襲作戦ですから相手はこちらの場所がバレてはいません。そのための準備もしてきたわけですし・・・」

「ほ、ホントか？ まあ司令にとって情報を漏洩させるようなへまだけはほしくないと思うけど・・・」

後ろの理沙がボトルに入っている水を飲む。口に流そうとした時だったが一滴しか出なかった。

「み、水がもう無いぞ・・・」

隊員の衛生兵、木原が疲れた表情で言った。ここまでの三日間の旅路でもう水や食料は少なくなってきた。

「あと少しは我慢しててください。作戦が終了すると数時間後には本部から救援隊がくることになっていますから」
(ハヤテ隊長つとでも頼りになる人だなあ・・・)

ハヤテの言葉に一同は銃器を掲げて声をあげた。士気は上々である。瀬川隊員は熱い羨望の眼差しとは別の意味の視線をハヤテ隊長に向けていた。

実際このクセのある隊をまとめあげているのは彼だけだ。ここまで来るのに食料を計算してきたのも彼だし、何よりその笑顔や優し

さに何度も助けられたのだ。

そう、彼女は戦時でありながらも自身の隊長に恋をしていたのである。

「それじゃあ皆さん・・・行きますか」

とハヤテが足を進めた瞬間だった。不意にハヤテのポケットの中から落ちたものがあつた。ペンダントだ。泉がそれを拾い上げると拾い上げた拍子で閉じていたペンダントが開いたのだ。

「これって・・・」

中に写っていたのは一人の女性だった。金髪の、ツインテールが似合う女性。

「あ、見つかってしまいましたね。すみません・・・」

「あ、あの隊長、これって・・・」

「実はこの人・・・僕の婚約者なんですよ。作戦前にプロポーズされて、この作戦が終わったら式を挙げる予定なんですよ」

(そんな・・・)

泉の中で何かが崩れた。実際、この写真を見ているだけでもハヤテ隊長の顔はとても穏やかな顔をしている。

「さて、変な話はここまで・・・行きますか」

数十分後、一同は敵地の目の前へと来た。だが不思議な事に、

敵が誰もいなかった。見張りの人間すら見当たらない。

「おかしいですね・・・一人くらいは見張りがいても」

目を凝らした瞬間、ハヤテは遠くの屋根の上に太陽の光で何かが光ったのを感じた。

「しまった！ 皆伏せて!!」

それを言うにはもう遅く、次の瞬間には衛生兵の木原が大きく後ろへ倒れていた。

「て、敵だアーーーーー!!!」

「スナイパーだああああ!!!」

「木原くうくうくうくん!!」

三人娘が叫んだが木原が起きてくる気配はない。ハヤテが駆け寄ると木原の頭に大きな穴が空いていた。

「クソツッ！ まさか情報が漏れいしていたなんて・・・」

「ハヤテ隊長！ 後ろからも敵が！ 完全に挟み撃ちです！」

美希の声に喉を鳴らしながら振り返ると今まで歩いてきた道、横一列には多数の敵が並んでいた。

絶望的だ。一同は思った。ある者は震えて、ある者は祈る。どう考えてもこの状況を覆す事はできない。

「も、もう何も怖くない・・・」

「せ、瀬川さん！」

ハヤテが気付いた時には目を虚ろにさせながら無防備に歩きだした瀬川の姿があった。

瀬川はあまりの恐怖に一種の錯乱状態に陥ってしまったのだ。遠くではスナイパーの照準が瀬川を捉えている。それは周りの人間が容易に理解できていた。だが助けように体が動かない。誰も。

次の瞬間、単発の発泡音と共に瀬川の体が大きく揺れた。浮いた少女の体は柔らかい砂にバウンドする。

だが、彼女には意識があった。彼女は無傷だったのだ。だが代わりに。

「た、隊長オオオオオ！」

彼の、ハヤテの左胸には打たれたであろう大きな穴があったのだ。「どうして私をかばって・・・」

「僕は・・・貴方に、生きていて欲しい。それに・・・分隊は家族、兄弟、なにものにもかえられないもの・・・」

そう言つて彼は目を閉じて、その短い生涯に幕を下ろした。瀬川は彼のペンダントを取り、ポケットに入れると立ち上がった。

「みんな、生き残るよ・・・何があっても・・・戦わなければ、生き残れない」

そして、この伝説は後世に語り継がれることになる。隊長、衛生

兵を失った三人の兵士は孤立無援の状態で無事全員生還するという伝説を……。

○

「どうだった？」

「いや、どうだったって言われても……」

「蛇足感丸見えじゃねえかよ!! 前半めっちゃ本気出して後半のあぐだぐだ感はなんだありゃ!」

一通り謎の劇が終わり、みんなは疲れたかのように地面に座り混んだ。

「というか、瀬川が綾崎に恋をしているとは知らなかったぞ」

「バカ王子、全て演技の中での話だバカ。ああ、もう、お前には何回バカといっても足りないな」

千里の一言にいちいち物を申す唯子。千里が立ち上がるもテルとハヤテが行く手を阻む。

「この話って一体何なんだよ。主人公である俺が出てこないでどういうことだよ」

「尺がなかったんだ」

「嘘つけ。単に考えるのがめんどくさくなっただけだろ」

「テル、俺はまさか一番最初に死ぬとは……思わなんだわ」

後ろで横たわる木原が唸っていた。どうやら最初に死んだ不遇さにうなだれているようだ。

「まあ私とハヤテが結婚することの展開は当然といえば当然なのだが。しかし殺すのはまさかという展開だった。虚を突かれた」

ナギがうんうんと頷いてみせると終わりよければ全て良しなのか、唯子も腕を組んで頷いていた。

「しかしまあ死亡フラグの話がとんだ内容になっちまったな……このお話に内容なんてあるのか?」

テルの言葉に唯子は腰に手を当てて、沈みゆく夕日を見た。

「内容のある物語なんてあつてたまるか。物語に内容なんてないの

だよテル君、物語事態が意味を持っていないんだ。結局は読む側にどんな考えに到らせるかだな」

「深いですな先生エ。今日もまた勉強させていただきました!!」
格言らしき言葉にナギは目を輝かせていた。

・・・まあ、ナギがなんか凄い納得してるからいいのか？

と心の中で小さくため息をついたが結局これは最初から内容を一貫していない。最終的に死亡フラグについては全くわからなかったのだが。

「ええい、考えるのもめんどくさっ」

テルはそこらへんにあった石ころを蹴り上げた。綺麗な曲線を描いた石ころは十メートル先の地面に落ちると思いきや。

その先には人がいた。ピンク色の少女の姿があった。

石ころは見事、少女、ヒナギクの脳天を直撃した。足元に落ちた石を拾い上げ、震えているテルたちに顔を向ける。

「うふふ・・・皆さん、何をしているのかしらねえ？」

凄い笑顔だった。とんでもなく邪悪さを孕んだ笑顔だった。

「か、会長！これは違うんだ。ええーっとこれはだな。人類にはちよつと早すぎる漫画の作成中で」

「私も混ぜてくれませんか——」

右手が石を握りつぶしたのを皮切りにピンクのバーサーカーが政宗を構えてテルに襲いかかってきた。

「またこのパターンかよおおおおお!!」

唯子教室はこれにて終わり。白皇学院は今日も平和である。

○

それは騒ぎが一段落着き、唯子の講義を受けていたハヤテたちが全員帰路についた時のことだった。いつも通り、彼、善立テルはハヤテとナギ、千里と共に帰る予定だったのだが。

「ちよつと説教させてくれないナギ？　大丈夫。　ちよつとただけだから」

と、某ピンクの悪魔にこっぴどく叱られていたため、個別で帰ることになったのだ。

「畜生・・・会長めえ、ちよつと言つときながら何も喋ることなく一時間正座とかひどすぎるだろ・・・」

正座の影響が張ってしまった足をさすりながらテルは歩く。

ちよつど今は河川敷を歩いている。夕日に照らされている景色は思わず立ち止まってしまうほどだった。

白皇学院に入学して早三ヶ月。多くの出来事が起きた。下田での出来事がきっかけで多くの物を取り戻すことが出来た気がする。

・・・と言つても、元通りに戻っただけなだけだな。

マイナスだったのがゼロになっただけである。しかし、今知りうる全てで漸く本来の自身の生活を始めることが出来る。そう思っていた。

・・・しかしまあ、これから一体何がやってくるのか、ちよつと楽しみになってきたぜ。あの石を追いかけて回す女もその内現れるかもしれないねえしなあ。

本来では絶対に会いたくない相手なのだがこんな学園生活を満喫しているとそのうちいきなり現れて油断居ているところをグサツとすることも有り得る。しかし。

・・・大丈夫だ。

慢心などではない。今はこちらにはドーピングソードと最強の霊媒師さんがいる。これで負けるような事はまず無いだろう。

・・・だけどドーピングソードは伊澄から最近使うの控えるって言われてんだよなあ、三枚張りしてからなんか体が怠いしなあ。軽くヤバイのかな？

下田での戦いで使用した三枚同時の札を使ったあと、テルはこつてり伊澄に怒られたのを思い出す。実際一枚でも負荷が強いのを三枚も使用すれば当然のことだろうが、あれ以来テルの体からダルさが抜けなくなった。簡単に言えば疲れが抜けなくなってきたのだ。

・・・何コレ。軽く老化現象起きてんの？ マジかよ、俺心は十代、体は二十代後半を迎えてんのかよ。

だが、これ以上気にしていても仕方ない。と思ったのだろうか。ふと、下の方を見ると河川を見る。夕焼けに当てられて河川は美しく朱を帯びて流れていた。

・・・あれ？
だが、この時に河川敷の岩に気になる光景が目に入ってきた。

・・・え？ 何アレ。 え？ マジ、人？

それは、しつかりと人の形をしていた。溺れて、流されてきたのか、と体はすぐに動いておりテルは芝を滑り降りて一気に河の中に入った。

・・・どうするよ、俺。 これでトラウマとかになったりするのかな

よく、強烈な場面に出くわすとそれがあとまで引き摺るといふ現象に陥る。河に溺れた人が後に泳げなくなったりとあるわけだが。

川の流れが緩やかなこともあつてか、テルは難なく人のいる岩までたどり着いた、すぐさま人を抱えて川から引き上げる。どうやら気絶してるらしく、触った心臓の部分からは僅かだが音が聞こえていた。

・・・うん？ この細身とやわらかさって……？

身に余るほどの感触。それは腰と不可抗力で触ってしまった胸のほうだ。柔らかな感触にテルは目をぱちくりとさせて慌てて離れた。

・・・不可抗力ね、ウン。

持っている体制の関係でこの少女の顔を見ることは出来ない。

わずか数十メートル距離のため苦なく引き上げることができた。そして少女の体を地へと横たわらせ、呼吸を確保するために少女の体を仰向けにさせた瞬間。

┌

絶句してしまった。よく見たら、この少女はどこか見覚えがあったのだ。黒いロングヘアーに、修道服のような黒いローブ。そして、陶磁器のような白い肌。

テルは忘れはしない。神社での串刺しや、片方の目を一度は潰された相手。仲間を裏切り、刺した相手だ。

以前の木原と一緒に行動を共にしていた少女、黒羽。

テルやハヤテたちにとって最大の敵の姿が、そこにあった。

第92話 少年は練馬の河川に流れてくる人を見た

「オイオイ・・・こいつア、どういふことだつて」

前回の続きを説明してみよう。グダグダな放課後の戯れからの帰宅途中、テルは河の中で人を見つけて人命救助の為に河から引き上げる。だが、その引き上げた人物がなんと。

——石を、もらう

神社でテルを串刺しにし、

——お父さん、ようやく見つけたよ。

木原をも裏切り下田での大きな騒動を作り出し、ハヤテの持つ石を執拗に狙うテルにとつても凶悪な敵、黒羽だった。

・・・河から流れてきたのは桃ではなく、いつしか僕を串刺しにしたにつつきあん畜生だった！

心の中でしようもないノリツツコミをしながらテルはこの異常な状況に対応できないでいた。

目の前にいる黒羽は今まで自身を、その彼の仲間であるハヤテやナギ、伊澄、そして木原などに物理的に危害を加えた張本人である。

普通、そのような宿敵に遭遇した場合、主人公格のキャラクターは即戦闘、という展開になるのだが。

いかんせん、相手は何故か気絶した状態でまさかの川をどんぶらこしてきたのだ。これでは戦闘どころではない。これで戦闘に持ち込んだら明らかにこちらに悪役の称号が与えられるだろう。

・・・というかコイツ、なんでこんなにボロボロなんだ？

それがテルが一番に疑問に思ったことであつた。見たところ、彼女の衣服は泥や木々で体をひつかいたような小さな傷が多々ある。

黒羽がまずこのような状態になっていることがまず考えられない。つまり、この変態的なスペックを持つ黒羽をここまでにする人間が

居たということ。

彼女、黒羽は何者かによつて勝負を挑まれ負けたのだ。そして現在に至るのだとテルは推測する。

・・・コイツを倒した奴が気になるが、それよりもコイツに声を掛けるべきだろうか、でも目を覚ましていきなりグサツはやだからなあ。

体を揺すつて起こしてやろうと肩に手を触れようとした瞬間、テルは動きをやめた。相手は生粋の殺し屋（テル曰く）だ。石のためだったら仲間の木原君もぎっくりと後ろから刺す。残忍極まりない人物なのだ。

そんな間拔けな死に方はまったくもってゴメンである。咄嗟にテルは近くにあつた木の枝を拾い上げ、約六十センチほど離れた所から彼女の頬をつついてみた。

「い、いいか。おれは別に卑しい事をしているわけではないからなあくまで身の安全を確保するための・・・」

ぷに。と柔らかい白い肌の一点が圧力で沈む。意識があつたら結構痛い奴だが、反応はどうだろうか。

「・・・ん」

効果が少しはあつたらしく、小さく彼女は眉を動かした。慌ててテルは懐から鉄パイプ、撃鉄くんを取り出して臨戦態勢を取る。目の前の黒羽は、むくりと体を起き上がらせると辺りをゆっくりと見回して遂にはこちらの方を視界に捉えた。

「・・・」

「な、なんだよコラ。や、やろうつてののか？ おおおお、俺はビビってなんかねえからな？ うん、刺されたからって大丈夫だからね俺は・・・多分」

黒羽がゆっくりと立ち上がったのを見てテルも合わせて立ち上がった。声からしてビビっているのがまるわかりである。やはり串刺しのトラウマはなかなか消えないようだ。

「・・・」

相変わらずの無口で黒羽はテルに一步一步と足を進めていった。

このあとだ。とテルはより意識を尖らせる。

・・・そのまま一気に太い剣を作ってまたしても串刺しか、それも槍と取り出して遠距離からの串刺しか。

この男、どこまで串刺しにされることを恐れているのか。確かに未だにあの時の串刺しが影響で焼き鳥とか何かが串に刺さっているものが食べれなくなっているらしいが。

「……………」

一歩、一歩を踏みしていた黒羽の動きが変わる。歩調が変わり、一気にこちらに前に倒れ込むように身を低くしたのだ。

いよいよか。とテルが鉄パイプを上を構えた瞬間。ぽふっ。

「ん？」

テルは自身の右側の半身に何か当たっているのを感じた。ちらりとその右半身を見るとそこには。

「な、なん……………」

そこには自身の体に倒れ込んできた黒羽だった。あまりの出来事にテルの小さな頭は混乱する。

「どういうことだよ……………」

黒羽の体は完全にテルに対して体を預けている状態だった。そのまま力なく下の方へずり下がっていくのをテルは慌てて抑える。

「お、お前……………」

最初は驚愕はしたものの、その中でテルは集中を切らさない。まだどこかでこの少女が自分を串刺しにしてくるのだろうと恐怖にも似た感覚が付き纏っているのだ。

だがそれは漸く開けた黒羽の口の一言で一気に変化していくことになる。

「………は？」

「あ？」

「あなた……………」

「……………」

その問いに黒羽が小さく頷いたのを見て、テルは黒羽から目を逸ら

した。さつきから異様に距離が近かったためである。

「・・・ま、まさかコイツも記憶喪失とかかあ？」

若干の動揺を含みながらもテルは一つの自身と同じ記憶喪失の可能性が脳裏を過ぎった。　　といってもこれはあくまで仮説に過ぎない。　　これが罨である可能性が高いのだ。

意識を尖らせる四方八方、いつでもどこでも殺気に対応できるようにしろ。

「・・・がくっ」

「エエエ・・・」

まるでこちらのヤル気を削ぐかのように黒羽はかくつと首を力なく倒した。　　これはもう戦闘どころではないのだろうか。

○

「・・・あれ」

黒羽が目を覚ましたとき、彼女は自身の視線が若干高めであるということの気づく。

「気付いたのか」

と、今度は下からの声に黒羽は自分がこの少年に背負って貰っているという状況を理解したのだ。

「いつまでも寝てやがるから死んじまったのかと思ったぜ」

「わたしは・・・」

言葉が続けようとしているがあとが出ない。　　無理に声を出そうとしてはいるのだが。　　疲れているせいだろうか。

「もう喋んな。　　なんかお前、ボロ雑巾みたいな状態だったからな。

今、ウチに送り届けてやる。　　ケータイも充電ないから俺がタクシーだ」

よつと、とずれ下がっていた体位を持ち直して歩を進める。

「・・・コイツ、なんて軽さしてやがんだ。

最初に担いだ時から思っていたが、黒羽の体重は有り得ないくらい軽かった。　　その軽さに少しだけぞつとするような気分に襲われる。　　ここまで軽いと、今度は命の危機とかに関わってくるのではないかと

「うほど不安に駆られる位にだ。」

テルの両肩にかかっている両の手はまったく力を感じない。掴んでいるのだが、とてもそんな風には見えなかった。よくぞこの細い腕でテルの鉄パイプを片腕で防いだものだ。

「しかしまあ、テルさんはこんなに心が広いからこんな状況に対応できているものの・・・ハヤテやナギとか分かってくれるかなあ・・・」
特にどこのゴーストバスターは何故かこの女にはとんでもなく執着しているのでここで出会うのはまさに危険な状態である。

「あ、の・・・」
「ん？」

不意に別の事を考えていたからか黒羽の言葉に立ち止まり、ちよつと間の抜けた返事をテルはする。

「名前・・・は」

搾り出すように彼女はそう口にした。テルは地面に映る土手の道を細めで見つめながら歩くのを続ける。

「善立 テル」

恐らく、初めて敵の人間とこうやって普通の自己紹介をしたことだろうとテルは思った。なんせ今までいきなり現れては突つかかっできて、名乗ることすらできなかったのだから。

「て・・・る」

「おお。ちよつと言い回しが古いけど、善の心を奮い立たせて道を照らす男だ。俺の親がそう名付けたらしい」

「かわった名前・・・」

そして一瞬だったが聞こえるか聞こえないか程度の力で彼女は言った。テルはならばと彼女に問う。

「お前は・・・？」

今度はテルが相手の名を尋ねた。木原との会話から黒羽という呼ばれ方をしていたがテルが気になったのは黒羽に続く下の名前だ。

「黒羽・・・舞夜（まいや）、踊る方の舞に夜でマイヤ。名前の由来とかあまり分からない・・・」

「まあ、あまり無理に教えてもらわなくてもいいんだけどな」

少し上を見上げて考え始めた黒羽を見てテルは苦笑をこぼす。だがその一方で敵であるこの少女とこのような会話をしているのだろうかという考えが浮かんだ。

しかし、今まで発せられていた殺意すらも全くもって感じられない。果たしてこの子が今後ろから刺されても文句は言えないはずなのだが、この状態のコイツならそういう事は出来ないだろうと断言できてしまっている自分がいる。

「なあ、お前なんであんな所にいたんだよ？」

テルは少しだけ核心に迫るような質問を黒羽に投げた。

○

「光を・・・見た？」

彼女の、黒羽の証言はとても考えられないようなものであった。

聞くにはどうやらもの凄い紫色の光が自分を包み込んだのを覚えているという。そして気づいたら先程の河川に流れていた。

「その光景しか覚えていない。自分が何故あの場所に居たのか、そして私は何よりも何を目的にして生きていたのか分からなくなっただ・・・」

「なんか急に話が重くなったんだが。取り敢えず落ち着けよ、思い出そうとしても簡単に思い出せるなら苦労はしねえ」

これは自分の経験から得たものだろう。焦ったってしようがない、こういつた自身の問題は時間をかけてじっくりと解決していかなければならぬ。かつての自分がそうだったように。

初めて自分の経験が生きたと心の中でこの記憶喪失になっていた時期に感謝したテルであった。

「ごめんなさい」

「なんで謝った？」

「なんだか急に貴方には色々とし訳ないことをしたと」

「いや、別に。困ったときはなんとやらってヤツで・・・」

・・・そりゃあ色々やられてるが。串刺しにした恨み、忘れるで

置くべきか。

心の中でテルはつぶやく。本来ならかなり許されるべきモノではないのだが、今の目の前の黒羽はテルが知っている黒羽とは全くかけ離れていた。まるで別人。例えるなら夫の皮膚の中に地球を侵略してきたバグ星人がいるのではないのかとう豹変ぶりだ。

「まだ家まで遠い——」

果てしない距離を嘆いていた時だった、言葉を遮るようにテルの肩を掴んでいた黒羽の手がギュツと握るように強くなったのだ。

「どうした?」

背負ったまま振り返り、黒羽の視線の先には一人の少女がいた。

和服を纏った一人の少女が。

それはテルもよく知る人物だった。そう、それはその手の業界では屈指の実力をもった妖怪退治屋であり、今まさにその目付きは仕事に取り掛かる怖い目付きだ。

「テル様、すぐさまソレから・・・ソレから離れて下さい!!」

袖から多数の札を取り出した伊澄は、宙にそれを投げ捨てるど靈力の込められた光の球を多数展開した。

○

突然の出来事に、伊澄は混乱していた。

「テル様・・・これは一体どういうことなんですか?」

帰宅途中、否。それは口実であり、いつも通り道が分からなくなつて気の向くまま歩きまくっていたら中腰状態のテルを見つけた事から伊澄は声をかけようとしたのだが。

なぜか、いつしか撃墜したはずの宿敵も一緒に居たのだ。

「どうしてその人がテル様に背負ってもらっているのですか?」

危険察知もさることながら、何やら別の衝動にかられながらも伊澄はテルに真実を問いただそうとした。

「何って・・・川をどんぶらこしてたから人命救助に及んだだけだ」

「人命救助って・・・」

敵に、しかも自分を串刺しにした相手を助けるなど。この男、テ

ルはどこまでお人好しなのだろうか。

たしかに以前にもこのような場面を見たことがあるが、今回は余りにも二人の距離が近すぎる。

・・・これでは相手に攻撃してくれと言ってるようなもの！ それほどまでにテル様は串刺しになりたいと？ なにやら別の衝動に目覚めてしまったのでしょうかテル様は？

だが、いくらテルがそのような別の何かに目覚めることは気にすることではない。とにかく、あの危険な敵をテルから引き剥がさなければならぬ。

「・・・テル様、ソレは敵です。放っておいたらナギや、ハヤテ様、そして何よりテル様に危害が及びます。一刻も早く離れてください」「ちよつと待てよ伊澄！ 話せば分かる!!」

「なんです？ 昔の政治家の死に際の文句を言っても事態は何も変わりませんよ？ 話して何が変わるんですか？」

少し口調を強めて言ったためかテルが慌てて待ったを掛けた。少しばかり後ろにいる黒羽をテルは気にしながら言葉を続ける。

「・・・コイツ、理由はわからないけどそこでぶっ倒れてたんだよ。なぜか今はお前や、俺が知っているあの全身を凶器にする力も使えてねえ。何もできないのにも程がある。俺だって恨みが無いわけじゃねえよ？ そりゃあれだけ見事に刺されたりしてたら敵わねえさ」

「テル様、それは罠ですよ。テル様の隙を伺っているんです」

即座に伊澄が断言した。特に確信や、明確な意図はなく。

「目的のためならどんなことでもするのがソレです。テル様が少し抜けているところがあって気づいていないのかもしれないかもしれませんが、私の目は誤魔化せません・・・」

「いや、抜けてるのはお前だろ」

と、テルに突っ込まれたが伊澄は気にせず会話続行。テルの方に反論させてもまともに取り合わないつもりだ。

「だったら・・・」

伊澄は右手をかざして一つの球体を動かして見せた。伊澄の手

に合わせて動いたそれは真っ直ぐテルの足元へ。

「なっ!？」

テルの足元に閃光が走り、小さく音を立てて球体は地面にぶつかり爆発した。威嚇の為だろうか、テルが一步も動かなくても当たらないようにしたようだ。

だが、その威力は無視できたものではなく、地面には五十センチほどの穴が空いていた。人に当たっていたらただでは済まない。

「おい、伊澄！ ガチで怪我させるつもりかよ!? どうしてそこまでコイツにこだわってんだよ」

焦りを感じたテルは数歩下がって伊澄から距離を取る。それを感じ取ったか、伊澄が今度は両手を動かした。ゆっくりと動かすのに合わせて複数の球体がゆらゆらと動き出す。

「どうしてって・・・わからないんですか」

「何がだ!!」

ぎしっ。と伊澄は歯を食いしばった。自分が感じたのは半端ない怒り。これはこれまでのテルに対しての怒りでもベスト3に入る勢いだろう。

・・・誰の為にしていると思ってるんですか……全部。

無意識に力が入る。伊澄はあの日から、テルが黒羽に刺されて自分を助けてくれた、自分が無力だと思ったあの日から強くなりたいたと、この人の力になりたい、この人を守りたいと。

ならば、テルを守るためにしなければならぬことはなんだろうか。それは脅威となる存在を排除することだ。

・・・今日の私は、一体どうしたんでしょうか。

何故か、心の中で何かが渦巻いているのを伊澄は感じていた。いつもの冷静さを欠けさせ、感情のままに動かしたくなるこの渦巻きはいつもの自分を忘れさせる。

それはあのテルの背中に乗っている黒羽を見るたびに沸き上がるのだ。テルと一緒にいるという図式だけでこみ上げてくるのかもしれない。

「だったら・・・力づくですよ・・・もう。強制的に離れてもらいますから!!」

伊澄は腕を振るった。二つの腕を交差させ、光の球体が十発同時にテルへと襲い掛かる。数発ほど地面へと逸れた球体は激しい土煙をあげた。

・・・少し、やりすぎました。

心の中で反省したが既に遅い。土煙は目の前を完全に隠してしまふほど巻き上がってしまった。これでは爆音に気付いた人たちここにここを見つけれられる可能性がある。

二人はどうなったのかと考えていた伊澄が次に見たものは。

「痛エーンとするじゃねえか伊澄・・・」

煙から出てきたのはボロボロになったテルだった。黒羽を背負ったまま。

「熱いなあオイ。なんで俺は今日に限って体にダメージを貰うような出来事に遭遇するんだ?」

「ど、どうして・・・そこまでして」

「それは、こつちが聞きてえくらいだ。なんでここまでするんだよ」
少しだけ睨みを利かせたテルの視線が伊澄に当てられる。それを見た伊澄は後ずさりしながら言った。

「わ、私は・・・テル様の、為を思って・・・その」

「俺を思って・・・か。確かに、コイツが未だにこれが演技だっていうのは保証がねえ。それを思っているからお前も考えていたんだろうけどよ」

「だったら・・・分かっているじゃないんですか?その人が敵だって」
「震えてたんだよ」

不意にテルが言葉を放った。その言葉の意味に伊澄は戸惑う。
「震えてたんだよ。お前が来てからさつきまで。今はもう気絶しちゃってる。いつものアイツが罠として隙を狙ってるなら、途中で気絶することなんて有り得るか?」

「・・・」

一度顔を伏せて、無言になった伊澄は周りに存在していた光の球体

を全てかき消した。

「今のコイツはな、ただの女の子だ」

ボロボロになった体を無理に動かしているのが伊澄には分かった。若干、体が揺れているのを見て、そう思ったのだ。

「治療を——」

「なあ伊澄……」

袖をたくし上げて治療するために寄りかかろうとした伊澄にテルが止めるように言った。

「誰かの為に力を使うのは、イイことだよな？　けど、他人を怖がらせてまで為になることって、それは本当にいいことなのか？　正しくて、曲がっていないことか？」

すれ違いざまに、伊澄の動きは完全に停止してしまっていた。理解できない。その一言である。

テルはそのまま歩いて伊澄の居た場所から去っていく。その後ろ姿を、伊澄はただ見送ることだけしか出来なかった。

「私は……何を間違つて……」

——それは曲がっていない信念か？

「当たり前ですよ。大切な人を守りたいこの気持ちは、決して曲がっていません」

だが、先程のテルの言葉が伊澄の胸にチクリと痛みを帯びて刺さる。見送った先に見える夕日はいつになく虚しく赤く輝いていた。

……このどうしようもない気持ちは、一体。

○

場所は変わり、ここは三千院邸。住む人間が増えたとと言っても部屋が多いことには変わらず。この家は下手すれば百人くらいは泊まれるくらいの部屋の数があった。

その数ある部屋の一室にて、大きなベッドを囲んで三千院家の面々が集まっていた。

「なるほど。大体分かりましたわテル君、川から流れてきた女の子

をキャッチして重傷だからここで治療をしてくれないかと・・・そういうことですね？　今度は男だけでなく、女にも手を出すようになりましたか」

「マリアさん。　前半の解釈は非常に有難いんですけど、後半のだけで俺がホモじゃなくてももうガチ両刀のような風に捉えられちゃうんでそだけカットしてもらってもいいですかね？」

医療セットを抱えているマリアがベッドの脇のテーブルにそれを置く。　周りには千里やハヤテ、ナギとこの住人が揃いぶみ。

「間違いじゃないじゃないですか。　実質、ここのとこのテル君とハヤテ君の絡み率はもう異常ですし、ナギの漫画がBLの類のものになったらどうするんですか？」

「お嬢様、念の為に漫画の方を見せてもらってもいいですか？　それっぽいのがあったら僕が責任をもつて焼却処分しておきますので」
「誰が書くかこのボケエエ!!」

ハヤテの真剣な問いにナギが返したのはハリセン一閃。　弾ける音が響いてハヤテが顔を抑えながら卒倒する。

「それで？　事態はおおかた理解できたのだが、この女は一体どうするつもりだ？」

「王様、嘘言っちゃいけないぜ。　お前、さっきの説明じゃ全く理解できてないだろう。　どこか抜けてるからなお前」

テルの指摘に頭に血を登らせた千里はテルの頭を両腕で縛りヘツドロックをかけて締め上げる。　メキメキと骨が音を立てるのはとても痛々しい。

「ストップ、ストップ！　王様！　マジで頭壊れる！」
「この無礼者がああああ!!」

だが次の瞬間、千里の喉元に一本のメスが突きつけられる。　目の前にはメスをもったマリアが居た。

その冷気にも似たような雰囲気とは別に、笑顔をマッチングさせたマリアは二人に一言。

「う・る・さ・い」

その後、二人は黙り込んで何かに震えるようにしていたそうなの。

「王様の話の続きだけど、この後どうしようかなんて決まってるじゃない。だけど、このまま放っておくのも出来ないな、同じ記憶がないヤツだからな。なんかこれで放置して野垂れ死にでもされたら後味が悪いというか・・・」

「でも記憶を取り戻して、また襲ってきたらどうするんですか？ その可能性もなきにしもあらずですよ」

ハヤテの言うことももつともだ。記憶喪失である間は黒羽は手は出してこないだろう。だが何かの拍子で自分の事を思い出したりしたらこちらが油断しているときにグサリとされる可能性もあるのだ。

「そんな時ア、そんな時だ。簡単に記憶なんて戻る訳がないんだけどな。

まあいつでも刺されても大丈夫なように腹と背中には鉄板でも仕込んでるかねえ」

「凄い動きずらそうですけどね・・・対応策が凄いしよばい」

楽観視しているテルにハヤテは苦笑いだ。なんにせよ、油断せず注意していれば咄嗟の攻撃に対応できると信じる。

「さて、じゃあこの子が寝ている間にちよつとズブ濡れになった服を取り替えようかしら？」

マリアが言うのと、目線で何やらこちらを見つめている。男性陣に向かつて何やら訴えかけているようだ。

「あの、皆さん。分かっていると思いますがここは女子の絶対領域にあたる空間となりますので・・・」

「ああ、なるほど・・・よし、いこうぜ王様」
「うむ」

マリアがこほんと咳きこんだのを見てテルと千里が頷いた。だが、何故かこの状況を的確に理解できていない輩が一人いるわけで。

「じゃあ僕も手伝いましょうか」

「馬鹿かオメエは!!」

「え!? なんですですか？ 一応お手伝いとかもしないと・・・」

ハヤテの一言にテルが激怒しながらハヤテの首根っこを掴んで部屋から引きづる。

「あのさあ・・・デリカシーって言葉知ってるかゴラ。それとも何か？ 女性の裸はその天然で見慣れてるから平気だと思ってるの？ いっぺん死んでみる？」

「うむ。王からも一言お前に申しておこう。今のお前は軽率すぎるな・・・」

二人ハヤテを引きずりながら部屋を後にしていった。

「それじゃあ作業に取り掛かりますか。ナギ、あなたもたまには手伝いなさい」

「えー」

「手伝わないと今日の夕飯ナギの嫌いなものばかり入れるわよ」

「なんだその昔の嫌がらせ!!」

ナギはため息をつきながらもマリアの手伝いをする事になったのだった。

第93話く21世紀、彼のストレスは増え続けるく

世の中は時として、予想もしない異常な流れを作り出している。

「知っているかハヤテくん。 敵になったキャラが仲間になるとそのキャラが死ぬ確率がかかり高いということを」

あからかに機嫌が悪そうにキャンディを口に含ませているテルがキャンディに付いている棒を上下に動かしていた。

「なんで今そんな話を・・・？ 工作中ですしまたマリアさんに見つかるるとまた怒られますよ？」

勤務中に悪態、愚痴、おフザケをするテルの光景はもう慣れきったものであったハヤテがため息を着いた。テルはそれに対して指を横へと振る。

「ここは俺とハヤテがまかされた仕事場。 マリアさんは例によって買い物に出かけてんだよ。 よって、ここにマリアさんがくることはないし、怒られる可能性はない」

・・・うわあ、この人最低だよ。

と、心の中でテルを批難の声をつぶやくと扉を開けてナギが後ろから竹刀をテルの頭に叩きつけた。

「マリアがいらないからって、主である私はここにいるのだ。 おいテル、さっさと私に麦茶買ってこいよ、五秒な」

「このチビィ・・・最近調子乗ってんじやね？ なあハヤテくんよお。 ここは少しだけ使用人からお嬢様に対するオシオキを施したほうがいいんじゃないか？」

彼の言い回しがとても犯罪の方向へと向かっているのは気のせいだろうか。 いや気のせいではないだろう。 そのうち、年下の人間に手を出してしまうのかもしれない。

「お嬢様。 離れましょう、最近のテルさんは少しだけ危ない臭いがしてるので。 気付かないうちに変な子とされないように今日は自分のお部屋に籠っていてください。 ええ、多少の籠城は大丈夫です。 昼と夜を食べに来てくれたら・・・」

「お前ら、どこまで俺を危険分子扱いしてんだよ」

箒を激しく振り回しながらテルは荒々しく掃除を再開した。これで少しは収まったと安堵するハヤテの耳にナギが耳打ちする。

「なあ、本当最近のアイツは荒れてないか？」

「でも何故か仕事で失敗する確率が少なくなってきたんですよ……不思議なことに」

ナギが言った通りに最近のテルはどこか気が立っていた。寝不足もあるのだろうか、目にクマができたり寝癖で髪が全然決まっていない。だが不思議なことに、今まで失敗していた執事の仕事でありミスをしないうようになっていた。

「うーん。アイツにしか見えない世界とかあるんじゃないか？ 加速世界とか」

「いや、意外に猿に投与するアルツハイマーの薬を摂取したのかもしれないよ？　なんか凄い集中できていますし……」

「アイツもストレスを感じることもあるんだな。てつきりそういうのには無縁かと……まあそのままハゲてくれた方が私としては面白いしこのまま放置でいいかもな。太陽拳ツ！　とかネタでやってくればなー……つまんねーけど」

と、二人はあれこれ考察するわけだが、実際のところハヤテにはテルのストレスの原因が分かっていた。あのテルがストレスを感じる原因それは。

「ただいま帰りました〜」

玄関の扉が開き、マリアの声が聞こえてきた。その瞬間、テルの体が一瞬だけ固まる。

「いやあ、今日は色々安い食材を揃えることができましたわ」

マリアの両の手に食材の入った大きなビニール袋。スーパーのセールにでも勝ってきたのだろうか。なかには安い野菜やら肉が多く中に入った。

「マリアさん今日はタイムセールスとかやる日でしたね。いつもの店でやってたんですか？」

「ええ、いつもなら凄い混むんですけど今回は不思議と二人で行って

きたら凄い簡単に食材GETできましたよ」

至福の笑みを浮かべるマリアの後ろの扉が少しだけ動くと同時にもう一人のメイド服を着た少女が入ってきた。黒髪で小さなビニール袋をもった少女は中に入ると小さな声で言った。

「ただいま戻りました」

それを見た瞬間のテルの反応というと、何故か箒を剣のように構えていた。明らかに警戒している。

「あ、お帰りなさい黒羽さん」

黒羽のビニール袋をハヤテが受け取ると黒羽は小さく頷いた。

無表情で常に変化することない瞳の彼女はすたすたとマリアの後ろに下がった。

「・・・テル君、そろそろその箒を下ろしたほうがいいかと・・・」

マリアが後ろで固まりながら箒を構えているテルを見るに耐えないと思ったのか、ため息混じりに言うのとテルはぎこちない動作で箒を下ろした。

「しっかりとしてくださいよー。これじゃあいつまでたつても黒羽さんに物事教えられないじゃないですか。この子の世話係はテル君なんですから」

「ま、マリアさん頼みます・・・これ以上は俺の胃がマツハの速度で縮んでいく・・・」

そう、何を隠そう。最近テルを蝕んでいる原因は全てこの新人のメイドさん黒羽 舞夜によるものだった。テルによって拾われてきた彼女は三千院家に住む人間となり、同時にマリアの提案でメイドになることが決まってしまったのだ。

実際これがテルのストレスに直結してると言ったら全くそうではない。全てはテルの過剰反応によるもので後ろを取られていると黒羽が敵であった時の感覚を思い出してしまい串刺しにされてしまうのではないかという危機察知してるためだ。結局のところ、黒羽は全くもって無害である。テルのストレスの出どころは自分であり、自分の首を自分で締めているという言葉がまったくもってお似合いな状況であった。

『刺されないように腹部に雑誌でも詰め込んでやるぜ（キリツ）』

と前回は世話役を自信満々にヤル気を出していたのに、この様はなんだろうか。

・・・本当、情けないっいたらありやあしない。

テルのことだろうからこれくらいの特ラウマは克服できているはずだと思っていたハヤテだがこれでは世話役を任せられた意味がない。しかし、結果的にはテルにとっては集中力を高めさせているプラスの要因になっているので面白いと感じていた。

「なあ、ハヤテよお お前今この状況を少なからずとも楽しんでやがるだろ」

「いいえー?」

間延びするような返事にテルが眉間にシワを寄せた。ここで悟られてはいけない。耐えろ耐えるんだ。

「あの・・・マリアさん。私はこのあとどうすれば」

「あ、そうですね。じゃあ今日は夕食まで上がっていいですよ」
マリアがそう言うのと黒羽はペこりとおじぎをして階段をゆつくりと登っていった。

「もの凄くいい子じゃないですか。いつまで怖がってるんですかテルくんは」

「ホントですよ。仕事の飲み込みもはつきり言わせてもらいますけどテルさんより遥かに良いですよ。これじゃあ先輩ポジションが乗っ取られるのも時間の問題ですね」

マリアやハヤテの言うとおりで、黒羽の仕事の吸収力はまるでスポンジが水を吸い上げる如き様だった。一度習ったことは何でも記憶して決して間違えることはない。今では何も言わなくても最低限の以上の仕事をやってくれている。

「だ、だつてよう。アイツが真後ろに立った時の事を想像してみろよ。俺はまた後ろからグサツなんてことにならないか、そんな事も考えると俺は夜も午前中の授業も寝れなくなっちゃうんだから!!
この前なんて調理場で包丁持って後ろ立たれた時は慌てて俺、構えちまったよ」

「授業中は起きていてくださいよせめて。 後、黒羽さんはただ単にテルさんが落とした包丁を拾ってあげただけです。 落とした人間に問題があると思います」

とテルに冷静にこれまで自身の失態を説明する。しかし、ここまでテルが追い込まれているのは初めてではないだろうか。 単に強い敵以外でテルを追い込んだのは数えると言っても学校の授業とテスト位じゃないだろうか。

「そう言えばお前最近、焼き鳥とか食べてないんだってな」

「ああそうだよ。 なんでか知らんけど刺さってる気持ちがあるか分かっちゃまったら食えなくなっちゃったんだよ」

ちなみにテルが焼き鳥や何か串に刺さっている系の食べ物を食べられなくなった原因は最初の黒羽との立会の時に串刺しにされてしまったからだ。

「なんなんだよ。 串刺しとか、私たちにはまったくもって理解不能だ。 そんなに串ものが嫌いなら今日から砂肝とか鳥肉を用意してやるうか。 勿論串付きで」

「なんだそりやあ、嫌がらせか!」

「あー楽しい。 なんかこうやってテルいじってるって凄いが晴れる。 わっはっはっは!!」

ナギが嬢王のような高笑いを上げているのを見てハヤテは三千院家でのテルの位置が更に低くなったと確信したのだった。

「でも黒羽さん、物覚えがイイのはとてもいいことなんですけど」

マリアが頬に手を当てて次の台詞を言おうとしたときだった。

階段から大急ぎで一人の大男が現れる。 黒羽と同じ同居人である千里だ。

「おーい。 またしても小娘が倒れておるぞー」

「またか・・・」

と一同が千里に導かれて行くと黒羽の部屋の数歩前で前のめりで倒れている黒羽を発見した。

「物覚えがいいんですけど体力に問題がアリとは・・・」

苦笑いで言うハヤテ。 そう、何を隠そう黒羽はとても体力がな

い。仕事始めも十分に一度は貧血で倒れる事があった。突然とぶつ倒れるので何事か何度みんなは慌てただろうか。

この体力のなさは意外な事にナギよりない。この事実になぎは少なからずとも歓喜していたそうなの。

「まあ、これでもマシになった方だよな。十分が一時間になっただけでもかなりの進歩だ」

とテルが黒羽の近くまで歩み寄り、膝を落として黒羽の肩を揺らす。一瞬だけ唸った黒羽はゆっくりと目を開けた。

「申し訳ありません・・・また」

ふらつきながらも体を起こしたがやがて体制を崩したのでマリアが慌てて支えた。

「いいんですよ。体力がないのにここまで頑張ってる点は明らかにナギより素晴らしいですから」

「ま、マリア！ それはどういう意味だ！」

「そのままの意味ですよ」

とナギが顔を赤くして喚いている。テルが支えながら部屋のベッドまで連れていくと黒羽はあまりなれないのか戸惑いながらもベッドの中に入った。

「取り敢えず飯まで寝てなよ。今日は終わりなんだからよ」

「はい・・・」

「いや、お前年齢一緒なんだから別に敬語なんか使わなくても・・・」

とテルが言葉を続けようとしたときには既に黒羽は目を閉じて眠りについていた。恐ろしい速度だ。これではまるでのび太のようである。

「不思議な事に寝てる時は何故かお嬢様みたいな品格があるんだよな」

寝息を最小限にして静かに眠るその姿はまるで眠れる姫のようである。

体を武器にすることもなく手に包丁を持って調理する。

素早く地をかけていた足はこんなにも細い。

いつしか剣戟を交わしたその力負けしかけた腕は小さな袋の重さ

しか持つことができない。

改めて考えるとこんな少女が自分と血みどろの戦いを繰り広げていたかと思うとテルは信じられなかった。

○

「・・・ったく」

ため息ついて部屋を出ると何やら不快な視線がテルに突き刺さった。

「え、何？」

頭にハテナマークを浮かべるテルに対してマリアが手を上げて聞いた。

「時にテル君。 どうしてああいう時だけ普通に黒羽さんと会話できるか教えてくれませんか？」

「そうですよ。 なんて普段でアレが出来ないんですか」

「あー分かったぞ。 お前、弱ってる女の子には凄い強気で出れる奴なんだろ。 うわ、卑怯くさいな。 相手が倒れるのをわかってるからここぞとばかりに手助けしていい先輩アピールしてるよ」

三人はじつと目を細めてテルに向けて一言。

「鬼畜だナ」

「鬼畜です」

「鬼畜ですわ」

・・・なんて誤解を受けてしまったのだろうか。

とテルとしては自身では歴代一位になるくらいの衝撃だった。

なぜ自身がここまで追い込まれなければならぬのだろうか。 取り敢えず少しでも誤解を解くことからやっつけていこう。

「落ち着け。 お前からそんなゴミを見るような目で俺を見るな。 お

前らまで俺のストレスの種を増やしたいのか」

「じゃあ弁解の余地があるなら言ってみろよ」

とナギが挑発じみたように言うので腰に手を当ててテルは言った。

「あの状態の時だけ、何故か俺をストレスを感じさせるようなオーラが無くなるんだよ。なんか殺気とかじつと見られている感覚とか全部なくなるんだよ。だから俺はあんなにフレンドリーに近づけるわけだ」

「異議あり!! それは被告人が仕方ないという事で自己納得させてるだけである!! ホントは女のか、か、体が目当てなんだ!!」

「・・・もしそうだとしたら俺はとんでもない屑野郎だなおい!! っ
ていうかなんで逆転裁判!？」

めまいを起こしそうなくらいにテルの頭はパンク寸前だった。何を言っても自分が不利になるような状態にしかならない気がしたからだ。思わず体を壁にあずけて頭を抱えながらズルズルと床へと崩れ落ちる。もちろん意識はある。

しかし、次の瞬間にはマリアの口からテルの意識をブラックアウトさせるほどの衝撃発言が飛び出していた。

「ちゃんとしてくださいよ。これから黒羽さんには学校とかにも行かなくちゃならないんですし、その時お世話するのはテルくんの役目なんですから」

「・・・へ? ど、どういうことですかマリアさん」

マリアの発した一言にテルは目を丸くした。聞捨てならない。崩れていた体を一気に立ち上がらせて改めて聞く。それに対してマリアは笑顔で言った。

「そりゃあ、同じ年齢なんですし彼女も教育を受ける権利があります。

まだ青春を謳歌できる年齢なんですから学校いかなきゃ損ですよ」
「いやいやいや! そういうことじゃなくて!! なんでアイツのお世話係が俺なんですか!! 俺以外にも優秀なたらし・・・もとい、執事がいるじゃないですか!!」

テルの言葉にハヤテがピクツと眉を動かしたが感情を表さないようにハヤテは頬を掻きながら苦笑いで答える。

「そりゃあ僕はナギお嬢様の執事ですからねえ」

「この卑怯者オ!!」

「という訳で後少しして私がOKだと判断したら彼女は学校に行つて

もらいます。 本人も承諾してくれてますし・・・全部計算された結果ですよ」

・・・マリアさん。 俺のストレスのことなんて計算外なんじゃないですか。

テルの悲痛な叫びはどうやら届かない。 彼のストレスはこれからも増え続けていく一方なのだろう。

第94話く教室内の支配者（失望）く

本日は晴天なり。

校門から校舎へと続く一本道を多くの生徒が歩いていった。一人で歩く者、他人数で歩く者。ここ白皇学院に通う生徒たちは全員がお金持ちの家柄や政治家の子という現代社会において大きなアドバンテージを持つ人間ばかりが集まる。

「おはようハヤテ君」

ライトピンクの長髪をたなびかせた少女は執事服で水色の髪の少年に駆け寄っていた。水色の少年は振り向きざまの笑顔で明るく返す。

「おはようございます。ヒナギクさん」

「おーっす会長」

「ようヒナギク・・・」

ハヤテと言う少年に続くように声をかけたのは隣に並んでいた同じ執事服の少年とまだ成長途中の背の金髪ツインテールの少女。だが二人とも欠伸をしながらの挨拶なのでまったく爽やかさを感じない。

「どうしたの二人とも。朝からそんな眠そうな顔して・・・まあた夜ふかしかしらハヤテ君？」

ハヤテは苦笑いで肩をすくめた。

「まあ、そんなところですかね。でもお嬢様はともかく、テルさんは違うと思いますけど」

「そうなの？ テル君、今どんな気分？」

そう言ってヒナギクはテルの顔を見た。憔悴しきった顔で目の下にクマが出来ており、焦点もあっていない。テルは不気味な笑みを浮かべながら顔を向けた。

「あー。太陽が眩しい、なんか痛い痛い、目に思いつきりレモンの汁ぶっかけられてそのまま天に召されちまいそうな気分・・・ネ口とパトラッシュの気持ち分かるかもな」

「フルーツの果汁で死ねるなんて随分とまた特殊な性質を持つてるわ

ねアナタ」

「ヒナギクさん、そういうことではないです」

苦笑いでハヤテが突っ込んでヒナギクはこほんと咳を一つ。

「で？ 実際のところは？」

「えーっと。 まあ、ストレスってやつですかね」

ストレス？ その四文字を浮かべてヒナギクは考える。 あの無鉄砲お気楽バカ単純人間にストレスで悩まされたりするのだろうか。 常にその四文字とは無縁なように見える。

「うーん。 見たところかなり重症っぽいけど原因はなんなの？」

ヒナギクのその問いにハヤテは眉を潜めた。 それはヒナギクから見たら言うのを躊躇っているように見えた。

「じ、実はこれには結構深い深い、それはもうエーゲ海なみに深い事情がありますよ。 実際にヒナギクさんも見ればわかるはずですよ。

今日のホームルームにも理由が分かりますから。 あと、決して取り乱したりしてはいけませんよ。 政宗を出したりしてもダメですからね」

「それは何？ なんかのフリ？ 私にノリを理解しろと？」

とハヤテはそれだけ言って話を終えた。 多少はぶらかされたところもあるがテルの現在の状態を見るにヒナギクは判断する。

・・・結構厄介な状況にまた巻き込まれているようね。

ヒナギクが考察している間にもテルは千鳥足でゆらゆらと揺れながら歩いている。 精神的にタフなこの男がここまで追い詰められているのだけと壮大な理由があるに違いない。

「分かったわ。 でも体の方はちゃんとしなきゃダメよ。 ま、今日 はあまり五月蠅くならないから静かに授業が出来そうだけど」

と、ヒナギクは両手を広げて笑う。 いつも寝ているためテルは基本無害だが、五月蠅いときは本当に五月蠅い。 この間も教室にて、テルの席はナギの後ろにあるわけだがプリントを配布するときナギが意図的にテルに届かないようにしてテルとナギが口論。 『なんじゃコレ！ 俺いじめられてんのか!? 結構新鮮！ サブリミナル☆ザ・イジメの真っ最中!? ストップ・ザ・イジメ!!』などと発狂し

ながらナギの髪をヤシの木へアーにしていたため一時期授業が中止になった。

その時は政宗でテルを成敗したが。
「ちーっすー!」

直後、テルの背中を爽やかな笑顔で飛び蹴りする男子生徒がいた。フラフラのテルは顔面から地面にダイブ。見事地面にキスをかましたのであった。

「いやあ、登校前に間に合ってよかったー。 牧村先生のロボットがなかなか手ごわくてなあ、データ収集に時間かかっちゃった」

「木原さん。 おはようございます」

挨拶をしてきたハヤテに木原は親指を構えて「おう」と。そしてその爽やかな背後で一人の男が死神にもふさわしい顔で立っていた。

「木イイイイイ原くうううん!!」

「おう、朝からテンション高いなオイ。 って、なんで右手に鉄パイプ持ってるの？ オイ、早まるな！ ギャー！ 振り回すなってー!」

両手を振って窮地を脱しようとしたテルだがそんなのお構いなしにテルは血走った目で木原を追い回し始めた。 なんだかんだ二人は仲良しであるのだろうか。

「朝から呆れたものだよ。 というか、木原君のあの牧村さんの実験ってまだ続いてたのね・・・」

「ええ。 なんでもこれが入学と、住居確保の条件だとか・・・」

ヒナギクの言葉にハヤテが頷くように言う。 木原がこの白皇学院に入学していく条件として、学年主任の牧村詩織が自身の実験の手伝いをするというのが提案だ。

「でもできれば牧村先生にも抑えてもらいたいんだけどね。 あのロボットの出す被害って結構デカイのよ？ 敷地が焼き払われたりするわ、樹林の何本かはへし折られたりしてるから費用でももうかなりかかってるんだから」

ヒナギクの「費用」という言葉にハヤテが不思議そうに尋ねる。

ヒナギクは少し考え込んで答えた。

「聞いた話だけど・・・たしか、倍にしたらハヤテ君の借金くらいには

なるらしいわよ?」

その言わずとも莫大な額にハヤテは開いた口が塞がらなかった。しかしそれよりも。

・・・今日のホームルームで木原さんもどういう反応するのかな。

○

「・・・はじめまして、黒羽 舞夜です」

騒がしかった教室ないの雰囲気が一気に沈静化した。教卓の前に立ち、自己紹介をする白皇学院の制服を身に纏った黒羽 舞夜の一言にクラスの一同は見事に注目をモノにしたのだ。さながら目の前に神や天使が現れたかのようなだった。

ざわ・・・ざわ。

なんだろう。 凄いい、ぶたれたい・・・!!

黒髪ロングの美少女だとツ!? クールビューティ! 是非とも我が嫁にツ!!

無表情だけどイイわね! 嫌いじゃないわツ!!

ちらほらと聞こえてくるのは男子の痛いとも捉えられる妄想、ひとり言の数々。しかし、なかには女子の言葉も聞き取れた。男女から高評価を得ていることには驚きである。

「黒羽さんは海外から仕事の都合で日本にきました。実はとても体が弱いので皆さん、帰国子女だからって盛り上がるのは大概にしろよー、特に男子は変に話しかけて不安になるような状態にさせんなー? もしそうになったらあんたらのテスト難しくすっから」

・・・横暴だ。 権力の横暴だ。

既に何人かの先生には黒羽の虚弱体質を本人の方から伝えてある。雪路のこの発言は黒羽の体調を気遣ったことだろう。

・・・さて他のメンツの反応は。

テルが辺りを見渡していると隣には口をあんどりさせている木原の姿があった。

「なあ、なあなあ。俺って夢見てんのかな？　なんか俺の元パートナー、兼トラウマ女が目の前で自己紹介していて、今日から同じクラスになるって話を聞いたんだけど」

「全てこれが事実だぜ木原くん。　コレ、結構複雑な事情があるからこれが終わったら色々ちよつと付き合ってもらうぜ」

思わずテルと同じく机に突っ伏した状態になる木原。　その木原が少しだけ顔を傾けてこちらに口を開いて続けた。

「それよりもいいのか？」

「あん？　何が」

「会長が刀構えてるぞ」

「は？」

テルが視線をヒナギクの方へ向けたとき、そこにいたヒナギクは木刀政宗を構えたヒナギクが立ち上がっていた。

○

思えばこの状況は至極当然のことだった。　前回ヒナギクが黒羽と顔を合わせたのはナギを誘拐されたその日。　禍々しくもその腕からの武器を構えてこちらに襲いかかっている場面を見ているため。　彼女が黒羽に対してどんな印象を抱いているかは簡単なことである。

仮に言わせるならヒナギクは多分テルが知る限りはシスター・フォルテシアに次ぐ戦闘狂だ。　話し合いが無理なら実力行使、それがダメなら実力行使。　しかも生徒会長の立場上、彼女は一般生徒を守ろうとする。　ならばこのあとの展開は予想がつく。　早く止めなければこの教室が惨劇に見舞われることになるだろう。

・・・なんてって彼氏になるならヒナギクより強くなきゃいけないらしいからな。　その基準はどうなのかと思うけどな。

「えーっと、ヒナ？　どうしたの木刀何か出して。　緊張してる転校生のために生徒会長としてなんか木刀を使った一発芸でもやってくれるのかしら？」

ここで雪路が何か突破口開いてくれた。少し死に急ぐことになるかもしれないがこれに乗るしかない。

「さすがだぜ会長。ここで一発面白いこと頼むよ。なんか凄い固まった空気をとにかくなんでもいいから和らげてくれ。うん、アンタ人間の鏡だ」

「え？ い、いや・・・私は別にそんな・・・」

雪路の煽りに乗ったテルが死を覚悟でヒナギクを更に煽った。真剣な表情だったヒナギクは面を食らうが辺は既にヒナギクが何か面白い事をするのだろうかという期待の眼差しが向けられている。

・・・なんかもうやるしかない雰囲気じゃない！ ハヤテ君だって見てるのに！！

だが、ヒナギクは意を決した。ここは何かやるしかない。

深く深呼吸をする。そして閉じていた目を開いて大衆を前にしてなるべく低い声で唱えた。

「時は200X年、世界は核の炎に包まれた——！！」

頷いて、

「どうも、やっくんです」

肩に政宗を担いだヒナギクは滑った。

手にチョークを持っていたヒナギクの実の姉、桂 雪路は手にもっていた生徒手帳を地面へと落とす。先生に黙って隠れながらPSPを手にしていた三千院ナギは何事もなかったかのように視線を画面へと戻した。

ヒナギクに対して恋心を抱いていた東宮は体を固まらせた。

テルは静まり返った場で突如立ち上がり引きつった笑顔を浮かべて——

「おおいクラスでバイキング行こうぜ、バイキング!!」

「うわああああああああああああああああ!!」

まるで蒸気機関車のごとく湯気を発したヒナギクはドアを音を立

てるくらいに開けて、両手を隠しながらその場を走りながら逃げていくのだった。

○

漠然となった教室のその後はどうしてもヒナギクが教室に戻ってこなかったのでホームルームがそのまま続けられた。聞けば、ヒナギクは生徒会室で一人で鍵を掛けて引きこもっているらしい。

「ま、ヒナギクにはちよつと犠牲になってもらった。うん。ああするしかなかった。ヒナギクは犠牲になったのだよ。ひとりの少女の命の、その犠牲にな」

「テルさん、僕は多分このあとのテルさんの身が心配です」

と、ハヤテが涙目でこちらを見る。テルは言うなとハヤテの肩を叩いて深く項垂れた。

「でも、まあ会長には俺から話すよりはハヤテが話したほうがいいな。

うん、黒羽の事は頼んだぞ」

テルの言葉にハヤテが軽く頷く。この黒羽が学校に来ている理由を一番に理解していかなければならないのはヒナギクだ。この誤解が解けなければ黒羽は多分ヒナギクに襲われかねない。

「でも、まさか記憶喪失だとは・・・たまげたなあ」

目の前にいる木原は理由を聞かされた今でも腕を組んでその理由が信じられないかのようだった。

「だって少し前に俺、アイツに後ろからグサリされてんだぜ？ そんなアイツが記憶喪失、虚弱体質でこの学校の転校生だって？ お前のストレスの原因が分かった気がするけどな」

「おお、分かってくれたか。お前も少しすればわかるぜ、アイツに背中を取られた時のフラッシュバックが」

二人はうんうん、と頷いている。お互いあの黒羽にぶつ刺された身だ。その感覚を男同士で共有するのはどうかと思うが。

「そう言えば俺さつき黒羽に俺の事を覚えてかなくなあ〜って目の前を通り過ぎたら華麗にスルーされた。なんかこっちは覚えてるのに

向こうが忘れてるってなんか悲しいな」

「ああ、小学校での友達が中学ではバラバラになって高校で再開したときによくあるパターンだな。　たいていそういう状況になると相手がスゲー切れる」

「そんな高校生のあるあるネタはいいですから。最初の授業に入りますよ」

そして時間は経ち現在昼休み。　周りが特定の友達同士で机をくつつけたりカフェテリアで赴いて昼ご飯を食べようとしていた。

「さて、飯どうする？」

背伸びをしたテルにハヤテが笑みを浮かべて口を開く。

「いつも通りでカフェとか、庭のほうでいいんじゃないでしょうか？

黒羽さんも誘いますか？」

「まあ、待てよ。　今頃アイツも他の女子から色々と誘いを受けて……」

と、視線を黒羽の方に向けた時にテルはその光景に目を止める。

意外にも黒羽の席の周りには誰もおあらず、本人は未だに机から動こうとしていなかった。

「マジかよ」

「意外ですね。　休み時間には結構いろんな人から話しかけられていたんですけど……」

ハヤテの言うとおりで、二人は授業の休み時間の合間の黒羽に並ぶその女子と男子の列を思い出していた。　「どこに住んでるの？」や「好きな食べ物とかは？」、「その髪って綺麗ね」などと定番の質問攻めをされていたが。

「ああー。　やっぱりこうなっちゃったか……」

と洩った声を出すのは木原だ。　テルがその真意を問い詰める。

「どういうことだよ？　竜児」

「どうもこうも。　アイツってどんな状況でも無表情じゃん。　俺と一緒に行動してた時も基本無口だし。　やっぱアイツから声をかけるとかしない限り今日は一人だな。　うちのクラスも転校生だから

変に氣を利効かせて誰も声かけねーし。フツー逆だろ」

あ。とテルは木原の答えに思うところがあつた。確かに、今では黒羽とは同じ仕事仲間になり、互いに手伝ったりしていた事で少しづつ話すことは出来ていたがそれでも未だに込にケーション不足な部分はある。しかも最初のころは言われたことだけをこなすだけで誰とも話そうともしなかった。それが少しでも良くなったのは一緒に居たマリアとかの御陰である。

せっかく質問をしても無表情で返してもらえないのは聞いてもらえていないのと同じだと思つたのだろうか。黒羽は初めての人間とはほとんど話すことが出来ない。ここは学校だ。いつものようにマリアは居ないし、テルやハヤテたちの席とはかなり離れている。

・・・登校初日から色々と問題が出てきたな。

——ちゃんとしてくださいよ。これから黒羽さんには学校とかにも行かなくちゃならないんですし、その時お世話するのはテルくんの役目なんですから

テルはふと、マリアの言葉を思い出し出していた。

ここで放つて置いたらいったどうなってしまうのか。一人というのは一見気楽だが実質、虚しいことに変わりない。誰も笑い合うことなく、話すことなく時間をただただ過ごすのは空虚な、無意味な時間を過ごしているのと同じだ。

もしそうなつてしまつたら彼女は、黒羽は耐えられるだろうか。誰も信頼できないこの孤独の中で、しっかりとやっていけるのだろうか。

・・・そりやあ不安だよなあマリアさんも。

物思いに耽る。自分もいつしか三千院家に巡り会うまで記憶を失っていた間は雇ってくれていた辰也を除けば一人だった。恩のような物を感じていて親同然と思つていたが、心のどこかで一人だと思つていた時期がある。

そんな辛い思いを抱いたまま学校生活を終えたくはない。いや、

終えさせたくない。テルは決断した。

「おい、いつも通りで外で食うぞ。確かテーブルでつかいのあったよな?」

「あ、はい。確か5、6人は軽く囲めるのはありますけど・・・」

よし。とテルは頷いて続けていった。

「なら、皆は先に行って待ってる。あと、生徒会三人組も呼んでおけ」

「あの人たちならヒナギクさんの所にいますが・・・ヒナギクさんも呼びますか?」

「多分来れないだろ。放置だ」

ハヤテが聴き終えて頷くとナギを連れて教室の外へと向かっていった。

だが、一人残っていた木原は何やらニヤニヤとしている。

「なんだよ」

睨むように視線を向けると木原はそっぽをむいて

「いや、何か相変わらずの馬鹿みてーなお人好しだということを再認識してた」

・・・放っておけ

と心の中でつぶやくとテルは黒羽の席まで近づいた。ぽつんとした黒羽は目の前まできたテルの姿に驚くことなく少ない動作で顔を挙げる。

「飯を食おう」

そう一言告げた。黒羽は首を少し傾げて、コクリと小さく頷いた。

黒羽は立ち上がり、二人はみんなが待つ庭へと向かうのであった。

第95話く昼食談義く

何度も言うようだがこの白皇学院はお金持ちの人間が数多く集まる学校である。徹底された教師による管理、徹底された警備システム。そして生徒たちを労わる為に数多くの娯楽要素がこの学校に設けられている。

このカフェテリアもその娯楽のひとつだ。

「つまりだ。この学校は一般市民の俺たちの金をつかってこんな贅沢をしてるってことになる。ていうか別にいらなくね？ カフェテリア。日本ってのはどうしていつもいらぬものばかり金かけるかねー」

大きなテーブルの椅子に座るとテルはペットボトルを取り出して一気に喇叭飲み。ペットボトルを口から離すとその身にしみる美味さに身を震わせた。

「クウ、やっぱり炭酸は眠っていた体をたたき起こしてくれる最高の万能薬だぜ」

「テル夫くん、喇叭飲みは汚いよ」

と、ちよつと苦笑いを浮かべた泉が席に二番目に座る。泉だけではない。生徒会の理沙や美希、ハヤテ、ナギ、木原、黒羽と多くのメンバーが席に座っている。

「ええじゃないの。それよりも生徒会長は？」

テルの問いに泉や他の生徒会メンバーは両手を上げて首を振った。

「全然だめだよー、生徒会室の鍵締めてさ、出てくる気なんてゼロゼロ」

『もう私これ以上辱めるうけるなんて耐えられない！人として生きていける気がしない！もう無理！死んでやる！』って言いってたな」

「完全に自暴自棄になってたからなーヒナ」

・・・うーん。やっぱり無茶ぶりなんて慣れてない人間にやらせるべきではないなア。

と心の中でテルは今更ながらもヒナギクにした自分の罪に気づい

たのだった。

「まあこの後ヒナによるテル君の惨殺ショーが始まるのだ。我々はマスクしてワインを片手に愉悦へと洒落込もうではないか、なあナギ君」

「お前ら未成年だろ」

とナギのツツコミを無視して理沙は一際大きなペットボトルを取り出した。

「2Lコーラだ。ワインとまではいかないがこれでテル君の悲劇を祝おう」

理沙は紙コップを全員に配り、コーラを順序よく注いでいく。そして全員が注ぎ終わったのを確認すると理沙は満面の笑でコップを片手に高らかに言った。

「では諸君、テルくんのわずかな人生と後で開催される地のフェスティバルのために、そして我々の愉悦の為にかんぱーい！」

「かんぱーい！」

「かんぱーい！」

「かんぱーい！」

「かんぱーい！」

「かんぱーい！」

「・・・」

「お前らノリ良すぎだろ！　なんで俺がそんなバッドエンディング迎えなきゃいけないんだ！　勝手に決めんなよ!!」

何ら違和感なく理沙のノリに合わせて一同。怒鳴るテルに理沙が冷静に答えた。

「いや、無理だろ絶対」

「うんうん、無理無理」

「今まさにテルくんの命を狙ってるかもしれないぞ？　時計塔から飛び落ちて上からグサツって・・・」

「なんだよそのFFのエアリスのバッドエンド！　そんなの死んでもゴメンだよ！・・・いや、でもそれなら俺は主人公じゃなくてヒロインになるのか？　補正とかある？」

テルの問いに黒羽を除いた一同は勿論それはないと口を揃えたのだった。

○

「でもさあ、テルくんってなんだかんだで道端で誰にも助けてもらえないまま死んでそうだよねえ」

皆がお弁当を口にいれ始めた直後、泉がこんな一言を本人の目の前で言い放った。

「なんだかんだでってなんだよ。具体的にどんな感じ?」

テルが泉に聞くとサンドイッチを弁当箱に置いて答える。

「夜○ 月みたいなの?」

「……俺は将来、とんでもない犯罪でも起こすのか瀬川よ。」

無論殺人ノートをもって新世界の神になるつもりは毛頭ないのがテルの考えだ。まず彼は新世界の神になるまえに借金を返済する必要がある。

「そういえばそんな設定ありましたね僕より微妙に少ない額の借金が」

「みんな結構忘れてたりするもんだよ。うん、俺なんて実はこの腕が義手だっということ忘れてたりしてないか?」

木原が腕を回すとカポッと肘から先の腕が取れた。

「のわ———!! 私たちはそんなの知らないイ! 今初めて知ったよ!」

「しかも腕の先はなんとサイ○ガン!」

「お前コ○ラかよお!? というか、人前でそんな簡単に見せびらかすなあ! ホラーにしか見えないだろうが!」

真夏のホラー映画のワンシーンに遭遇したかのように三人組は身を寄せ合った。後にテルにより諸事情によるものだと説明を入れておいた。

「そうツ! 夜中には忘れられてしまった設定とかがたくさんあるんだよ! 例えば、こんな!!」

『僕には一億五千万の借金があります』

「いやッ、忘れてませんから！　ただ話の中で全然取り上げられて無
いだけですから!!」

「実際に解決策も浮かばないままもう四月か・・・どうすんだよオイ」
「それはテル、お前にも言えることだぞ」

・かめはめ波が効かない天津飯

・ドラえもんが来た理由

・スタンドの射程距離

・サザエさんの家の二階

・CCの本名

・斬魄刀のデカさは霊庄のデカさ

・鳴滝が実はゾル大佐

・初期遊戯王はカードゲームはしない

・コナンⅡ新一

「ほらこんなにも!!」

「いや、いくらなんでも最後のは絶対みんな覚えてるでしょう!?!」

「いや、ハヤテ。そんなことはない。もう連載始まり彼ももう元
の姿と同じ年齢になるほどの時期が過ぎちまった。だから定期的
に新一がでないと、新一がコナンだつてこと忘れちゃう」

「だからたまに新一主体の話が出てきたりするんだよ・・・私もいい
か?」

「どうしたナギ」

「実は私、最初は咲夜と胸のサイズがほぼ一緒だった気がするん
だ・・・」

あーつと。この場に居た一同が頷いていた。

「まあ、アレは忘れられたというより成長の過程——な?」

「うん、ナギちゃん大ジョブだよ！　小さくたつて需要あるから！

私だつて小さいから!」

「嘘付けお前。　後、乙女はそんな事を平然と男子の前で言ったらい
けないぞ泉」

「そうだぞ。　私たちの評判が下がるじゃないか!」

「美希ちゃんも理沙ちゃんも酷い！」

・・・とは言っても

・・・ああ。

ジト目の美希は理沙と視線を合わせ、生唾を飲んだ。彼女らも氣付いているのだ。最近の泉の大幅な成長に。彼女らも氣

「では、私にもあるのでしょうか・・・そんな忘れられた設定が」

と一同が話題を馳せる中、黒羽が初めて声を出した。

「黒羽ちゃんの設定？ 今日初めてあったから私たちは分からないなー？」

「実はメガネをかけると凄い美人とか!？」

「オイ、メガネ！ メガネをここへ！」

理沙が両手を甲高く叩いて音を鳴らすとハヤテがどこから持ってきたのか、スクエア型の黒いメガネを取り出して黒羽に差し出した。

黒羽が受け取るとそのメガネを掛け、その姿に一同からは感嘆の聲が上がった。

「おおっ・・・！」

「知的っぽい・・・」

「頭よさそう・・・」

・・・まあ、実際頭いいんだけどな。

驚く三人組を見てテルは至って思うところはない。白皇学院の編入試験、筆記テストにおいて黒羽はわずか一週間のテスト勉強でその編入試験で満点をたたき出して入学しているのだ。

今はさほど目立ってはいないだろうが、これから先、彼女はテストでも学年トップのヒナギクに迫るのではないかというのがテルやハヤテたちの見解である。

「・・・では、私はメガネ系だということこれから自覚していればいいのですね。いい勉強になりました。これが俗に言うメガネ属性ですか」

「・・・お前、どこでそんな言葉を覚えたんだ」

「ナギ様のお部屋にありました『魔法少女ブリトニー』の漫画にメガネの事がよく書かれていたので」

「わ——っ！　なんで勝手に見ているのだ——！」

コーラを飲んでいたナギがむせるて顔を赤くしながら席から立ち上がった。黒羽は冷静に続ける。

「掃除中に中身を拝見させていただきました。世紀末的な時代背景に魔法少女はミスマッチな感じがしますが・・・」

淡々と語るのを聞いてナギは顔をテーブルに突っ伏した。よほど恥ずかしい内容だったのだろう。

・・・喋れてるじゃねえか。

テルはその光景を見て思う。屋敷では慣れている人間しか話をしていない黒羽が見知らぬ人との話に溶けんこんでいることにだ。木原が言っていたことは別にそこまで気にすることはなかったのではないか。

「あは☒　黒羽ちゃん三千院家のメイドさんなんだね？　お仕事は大変？」

「・・・」

と、テルがそう思っていたのも束の間。黒羽は泉の質問には無言だった。笑顔で首をかしげる泉に対し、黒羽は少し顔を俯かせている。

「あー、すまん泉。多分まだお前らとは慣れてないっていうーか、そういう感じなんだ。初めてのやつとはあまり話せないんだよ。悪気はないんだホント」

「いいよいいよー。私あまり気にしてないから☒」

助け舟を出したテルに泉は手を振って事情を理解したかのように見えたがそう言いながらも泉は少々残念そうだった。だが泉は本当の意味でいつものような笑顔で黒羽と向き合った。

「私は瀬川　泉だよ☒　こう見えても、委員長さんなのだ！　困ったときはヒナちゃんに相談する前にこの委員長さんにお任せあれだよ！」

「いやあ、さすがにお前だけじゃ相談してもなんも解決しないから」「そうだな。泉だけだと相談者も悩みをさらに悪化させていくことになるだろうから」

隣にいた美希と理沙がニヤリとした笑みを浮かべていた。黒羽が視線を二人に向けると二人は凶つたように自らを指さした。

「私は花菱 美希。生徒会のNo.3とは私のことよ、実は政治家の娘なのだ」

「隣の私は生徒会No.2朝風 理沙。実は陰陽師の家系・・・すまんウソだ。ただの巫女だ。我々を簡単に思い出したければこれだけは覚えておいて欲しい・・・我々は——」

そして三人は視線を同時に合わせると席から立ち上がり泉をセンターに、美希と理沙をサイドに展開させてポージングを取ってドヤ顔で言い放った。

「THE・生徒会!!」

ポーズを決めた三人組の背後には戦隊ヒーロの名乗りのごとく爆発の演出がかかっているように見えた。

「コイツら仲良過ぎね?」

「気にするなテル。同じタイプの人間が三人集まっただけのことだろう」

「・・・」

ずっとこちらの反応を伺っているのか、三人組はなかなかポーズを解かなかった。どうしてとかないのか。簡単だ。彼女らはこちらの反応を、返事を待っている。

すぐさま返したほうがいいのだろうか、なかなかどうしてか、良い返事が思いつかない。そうしているとコップを持っていたテルがこちらを見て言った。

「ホラ、こいつらだけ自己紹介させてどうすんだよ。相手だけっていうのはフェアじゃない。お前も・・・な?」

そう言われて黒羽は少しだけ息を吸うといつもとなんら表情を変えることなく、三人の方を向いてその口を開いた。

「黒羽 舞夜です。これから、宜しくお願いします瀬川さま、花菱さま、朝風さま」

その言葉に三人組は面食らったかのように驚いていた。

「おお、まさかクラスメイトに様付されたのは多分生まれて初めて

だ！」

「す、素晴らしく思った！ 特別に生徒会のNo.1の称号を与えよう！」

美希と理沙が目を輝かせていると泉は苦笑いで黒羽に笑いかけた。「そんなにかしこまらなくていいんだよ！ 普通に呼び捨てでもいいよ！ それが大メならほら、「さん」とかでも全然違和感ないからね？」

舞夜ちゃん」

「まい・・・やちゃん？」

泉の言葉に黒羽の言葉が一瞬だけ詰まる。周りの人間が見てわかるように動揺していたのは明らかだった。

「そうだよ。私たちは今日からフレンドなのだ——！！」

泉が黒羽の手をとり、優しく握って上下に振る。黒羽は腕が上下に揺れてなすがままに頭も揺らした。それを見ていた美希と理沙は隠れるように会話をする。

「き、キマシだな・・・」

「ああ、キマシだ。この小説はホモネタだけでは収まらずそつちにまで手を出しやがったか・・・」

「ちよつと二人とも！ わたしにそんな性癖はないからね！！」

と、恥ずかしそうにしている泉。反対に黒羽はまんざらでもなさそうであった。漸く、新しい一步を踏み出せた気がするとテルは思う。これで自分たちだけでなく、頼れる人間が増えたことを黒羽は実感したことだろう。

・・・実際こいつらだけじゃ滅茶苦茶不安だけどなあ。

「良かったなあオイ」

と木原が肘でテルの肩を小突く。

「滅茶苦茶心配だったんじゃねえのか？」

「うるせえんだよ機械族、磁石持つてきてぶっ壊してやろうか？ その義手」

睨みをお互いに利かせた所で昼休みの終了を告げる鐘が鳴った。

この鐘の音から数十分後には午後の授業が始まる。テルが弁当をしまい、黒羽に声をかけようとした時だ。すでにありがたい環境の変化

は起きていた。

「さて舞夜ちゃん、次は英語の授業だよー。早くいこいこー！」

「こら、マダムを独り占めするな泉」

「お前はもう既に生徒会N.O.1ではないのだから！」

三人組は弁当箱を素早く仕舞うと、黒羽の手を引いて校舎の中へと向かっていった。その姿を見てテルは若干の安堵の表情を浮かべる。

・・・ま、アイツらでも大丈夫か……しばらくしたらヒナギクとかにも協力してもらおうわけだし。

ふー、とため息を着いたテルは立ち上がる残った人数と共に校舎へと向かった。

彼らの波乱万丈な学園生活は今始まったばかり。

「ところでハヤテ」

「なんですかテルさん？」

「俺の視力が少しだけ下がったっていう設定はみんなに忘れられてないかな？」

「いや、ぶつちやけ書いてる人も最近思い出したんじゃないですかね？」

第96話く出会いの日には爆発をく

黒羽 舞夜が白皇学院に入学して次の日。 善立 テルは猫背で欠伸をだしながらひたすら歩いていた。

「あく、なんだって最近俺は眠いんだ」

手で口元を仰ぎながら溢れていた目からの涙を拭き取る。 ちなみにハヤテとナギは既に学校に向かつており、テルはある人物と一緒に登校中である。 その人物とは。

「テルさま、宜しければ今朝にマリア様がお作りになった特性ドリンクをお飲みになってはいかがでしょうか」

唯一、三千院の使用人のなかで制服を着て登校することを許されている黒羽 舞夜である。 彼女が制服を着て学校へ行っている理由は三千院家のメイドであるときは常にメイド服を来ているわけだが、それは三千院家の中で仕事している時だけであり、こうして学校へ行くときは普通の学生となるわけだ。

「・・・分かった。 もらう」

テルは魔法瓶を受け取り、蓋型コップに液体を注いでいく。 ここである違和感に気付いた。

・・・なんじゃこの白い液体。 それとなんか鼻の機能をぶっ壊しそうなこの臭いは……

「ええ。 マリアさんがテル様の為に眠気を完膚なきまでに破壊する秘薬とのことです。 どうやら授業中によく眠っていることを知られているようですね。 ちなみに、お残しは罰金だとか。」

「えー」
と体からにじみ出る嫌な汗が警告を告げているわけだが、マリアが作ったものであるならば残すことは出来ない。 マリアのことだ。 恐らく帰ったら目の前で監視していた黒羽にいろいろ聞いて事実を確かめるだろう。 捨てようものなら彼女の怒りを買うことは間違いない。

テルは生唾を飲み、意を決してその秘薬とやらを飲むことにした。 震える手つきを一気になくすために男らしく液体を口の中に含み、

胃の中へと注ぎ込む。

「……」

数秒後、飲み干したテルの顔からは何やらブツブツが現れ始めて次第に表情が青くなる。そして次の瞬間、大空へと向けて彼は叫んだ。

「マツズウウウウウウウウツ!!」

喉を両手で掴み彼は地面をのたうち回る。

「な、なんじゃこれ！ 秘薬って名前をしたただの毒物じゃねーのか!!」

「いいえ。ただ牛乳とくさやとにがりを混ぜた超高性能薬物です」

「なんつーモン混ぜてんだあ——!!」

……というかなんで俺こいつにこんな好き勝手されてんの？

憎たらしく残る苦味を感じながら、ふと疑問がよぎる。いつもこういったちよっかいを出してくるのはマリアとかの筈だ。だがどうしてだろうか、最近は黒羽がこういった事をしてきている。結構積極的。

「なあ、なんで最近俺にこういったちよっかい出してくるようになったちよったの？ この前たしかコーヒーにわざと塩五つくらい入れてから渡してたの俺は覚えてんだけど？ 調子とか乗っちゃってる感じなの？」

過去の事を掘り返してきたテルに対して黒羽は表情を崩すことなく、いつものように丁寧に対応した。

「いいえ、実は後から隠れてもう一つ追加しておきました。正確には六つです……と、そんな事はどうでもよいですね」

「隠されていた真実をさらっと流しやがったコイツ!!」

「これも実はマリアさんの提案であり学校に行く時はテル様が私の執事ということになっていきますので」

「それがこのちよっかいにどう繋がってんだ」

と、テルは目を細めて黒羽に問いかける。黒羽が白皇学院に通うのと同時にいくつか決められた事がある。その一つは、学校では黒

羽は三千院家のメイドではなくナギと同じお嬢様の扱いになる。もともとこれは体調を崩しがちな黒羽に対する必要な処置である。

そして二つ目はテルが黒羽の学校での面倒を見るといふことだ。簡単に言えば、学校では黒羽がお嬢様、テルは黒羽に仕える執事という関係に変化しているのだ。

勿論これはマリアが提案したことである。

「率直に申しますと私も最初はこの事には反論しました。しかし、主従関係をはっきりさせるために執事はもう雑巾のように扱き使ってもだいじょうぶですよ。とマリアさんが言うもので・・・」
「ま、マリアさんめ！ ふたり揃って俺をイジめるつもりだな！ っというか、お前俺の主状態だからこういう時くらい俺に敬語使うのは止めろよ、同年なんだから」

「いいえ、貴方は私の先輩であり、その先輩に敬意を払うのは当然のことです。そのほうが私にとってもテル様にとっても対等ではないかと。それにテル様のプライドを傷つけることもありませんし」

「いや、俺もう色々やられすぎてプライド砕け散ってるから」

対等と黒羽は言うが既にそのセリフはこちらに情けをかけまくっている。これでは既にテルのなけなしのプライドが粉々に砕かれているといったようなものだ。考えれば考えるほど惨めになってしまうテルである。

「ですがテル様がどうしてもということであれば、この主従関係をなくすように私が努力しますが・・・」

「努力って・・・何をやる気だよ」

「できれば私がマリアさんに一言申せば終わるでしょう。しかしそれではテル様がマリアさんに睨まれてしまいます。つまり、私が自力で問題を解決するように努力すればいいわけです。目指すは体力向上です」

心の中でテルが思うことは一つだ。

・・・解決にはかなりの時間が掛かるんじゃないのかなあ。

今はまだ明るみに出てはいないので白皇の生徒には知られていないだろうが、黒羽はかなり体が弱い。貧血で倒れることなんて毎日

のことであり、気付けば顔色が悪くなっている事が多い。ちなみにここに来るまでにかなり時間がかかっているのは黒羽が何度か体力が無くなつて休憩を挟んでいるからである。

そういう状態になるなら車で行かせろと言いたくなるのだが、これだけは何故か黒羽が拒否しているのだ。

・・・もしや気を使つてもらっているのか？

これは一つの予想だが。体が弱いことで今のように誰かの面倒になるなどの待遇は黒羽が望んでいることではないのかもしれない。

それが迷惑になつていと思つているのなら、自分で解決して他人に迷惑をできるだけ掛けないでおきたいという気持ちなのではないだろうか。

「はっ、じゃあしつかり体力がつくように俺もしつかりとサポートしなくちゃならねえじゃねえか。そこらでいきなり倒れられても困るし」

「少しだけ煽りを感じています。私ができるできないような物言いですね」

こちらを見据えた黒羽の反応を見てテルが更に笑った。

「まあ、怒んな。俺もお前の体力の無さは理解してるつもりだからよ。一応それでお前は気にしてるのかもしれないけど、こういうのは一人じゃなかなかできねえもんだからな。だから俺もできることなら無理なくサポートしてやろうと思っただけだ」

そう言つて鼻を鳴らすとテルを見ていた黒羽は目を丸くした。

予想外の返事だったのだろう。そして少しだけ考えると黒羽は一度目を閉じて数秒ほど置いてから目を開いてテルをその瞳に映した。

「では、早期解決のためにご協力をお願いします・・・後一つ質問よろしいですか？」

「ん？」

「わざわざ苦痛な面倒事を喜んで引き受けるテル様はかなりのMの気があるのですか？」

「んなもんねえよ!!」

通学路にてテルが大げさに腕を振つて黒羽の言葉を否定した。

それと同時に黒羽が何かに気づいたか、細い指で向こうを指す。そこにはテルの友人のひとりである木原竜児の姿があった。

「よう、木原くん。今日も朝から運氣が怖がって逃げていきそうな顔をしてるじゃないか」

気軽に声を掛けたテルだったが、これが本日の厄介事に巻き込まれるとは予想もなかった。

○

「うーん？」

頭の上に無機質なオノマトペを含めたクエスチョンマークが現れたように感じた。テルの冗談に木原が何も反応がなかったからである。

人違いかとテルが思っていたが後ろ姿は完璧に木原だ。ちよつと側面まで迫って顔を覗いてみたが何もいつもの木原竜児と変わらなかった。だが何故だろうか、ヤクザじみた顔の持ち主である彼が今はボーツとしておるような状態でいつものような覇気が感じられない。

「おーい」

「ん？ あれ、テル・・・か」

テルが肩を叩いてようやく木原がこちらの存在に気付いたが、変わらず反応は薄いものだった。

「なんだなんだア？ いつも以上にリアクションすくねえぞ？ そんなじゃヤクザの組長もつとまらんどー」

「お、おう・・・」

・・・なん、だと・・・。

「おかしいですねテル様。いつもなら『テメエ、俺がいつ次期組長になった!!』とテル様にピンポイントバリアパンチをお見舞いしてくるはずなのですが」

黒羽も木原の異変には気づいたようだ。いつもならやられっぱなしの木原ではないのだが、ここまで異常な様子を見せつけられてし

まうと拍子抜けというよりも何かあったのではないかと不安である。
だからこそ彼は思う。

「これはなんかあったと考えるべきだなあオイ」

○

「何イ？ ロリコン童児の元気がない？」

「そうなんだよ我が主」

教室にてテルの報告を受けていたのは先に学校に着いていたナギだった。朝のHR前ともあるがそれまで時間が空いているため席の空白はまばらだ。

「たしかに、木原さん朝から窓の外眺めてため息ばかりついてますよ。完全に上の空ですね」

ナギの後ろにたつようにハヤテが窓際に座る木原に視線を映した。肘について力ない瞳で童児は青空を見つめる。

先程からテルも教室に入るまで話しかけていたのだがどんなに話題を振っても「おう」、「そうだな」としか答えてくれない。

「あの木原くんがあそこまで上の空になるなんて・・・」

「会長、というと？」

ヒナギクの言葉の意味を聞いたのはテルだ。ヒナギクは続けて言う。

「意外なことに木原くんって学院での奉仕活動とかにかなり協力的なのよ。朝の時にもやってるんだけどね毎日。それで頑張るわねってこの前声をかけたらあの笑顔で」

『こんないい所がゴミとかで汚れちゃうってのは、地球に悪い。』

それに、汚いところがキレイになる瞬間ってのは爽快だ。掃除LO

VE！ 大清掃LOVE！ 俺はこの学院のゴミを処理しまくるのだ！』

「っていうほど掃除が好きなのに、その掃除好きの木原くんが朝の奉

仕をすつぽかすなんて・・・これは異常事態だわ!!」

拳を握って震わせるヒナギクに一同は木原に改めて視線を送る。
相変わらず上の空だが。

「そういえば木原さんってポイ捨て嫌いでしたね」

「ああ。私を誘拐したときなんて缶を投げたらもの凄い形相でポイ捨て阻止してきたからな」

「アイツは料理もできるし、小遣い管理もできる。あの顔を除けば普通にモテるお料理系男子だ」

テルの語った木原の性格にハヤテたちはふーんと納得した。確かに財布の中身をいつも確認したりしていたし、守銭奴とまではいかないが性格的にもマメなのは分かった。

「取り敢えず話を戻すよ? なぜアイツがあんなになっているかさ・・・」

テルの合図で一同はお互いを見るように視線を戻す。

「そういえば俺この前、アイツの財布から五百円借りると偽って勝手に七百円借りてたんだつた。アレがばれたかな?」

「テルさん、それ普通に犯罪沙汰ですから。今すぐ謝るべきです」

「一応もう返したんだぞ! 650円ほど! それに事前に連絡してあるからこれはあまりアイツの鬱状態には関係ない!」

勝手に竜児を鬱状態と決め付けるのはどうかと思つたハヤテだったが今度はナギが何かに気づいたかのように口を開いた。

「そういえば・・・」

「お嬢様? なにか思い当たるフシとか?」

「おお、昼休みにあいつを購買部に行かせてメロンパンを毎日に行かせていたからかな」

「ぱ、パシリじゃねえか!! お前、こいつがいるのに他人に頼んでどうすんだよ! こいつの意味がないだろうが!」

「だって、あいついつもあの人混む購買部で無傷で素早く戻ってくるから・・・ハヤテが目が届かないときはちよつと頼ろうかと・・・」

わいわいと言い合うテルとナギをよそに全く頼ってもらつていなかったハヤテは肩を落として負の感情を吹き出していた。

「んー、思い当たる節はいっぱいだけど」

「やっぱりこれは・・・」

「恋じゃないかな☆」

いつの間にか会話に参加していた生徒会三人組の最後の台詞を放った泉にテルは眉を潜めた。

「いやいや委員長。それはないって」

テルの言葉に他のナギやハヤテもうんうんと頷く。泉は両手を組んで探偵のように悟った顔で続ける。

「いや、これは間違いなく恋だよ。これは絶対。コーラにメントスを放り込むと有り得ないくらい吹き出すくらい確実にこれは恋だよ・・・ね、ヒナちゃん!」

「ええ!? このタイミングで!?!・・・そうね」

最終的にはヒナギクに丸投げされてヒナギクは慌てて口裏を合わせるかのように言った。

「まあ、その可能性もなきにしも有らずかしら?」

平然を装って言ってみたものだが若干のおかしさには皆も気づいたらしい。しかめっ面でナギが突っかかってきた。

「・・・なんだヒナギク、お前そういう経験あるのか?」

「え?」

いきなりナギが放った言葉が核心をついてきたのでそんな驚いた反応をしてしまった。完全に油断していた。やはり女の勘というのは恐ろしいものだ。と同姓ながらも思う。

「そ、そんな訳あるもんですか! ハイ、この話は終わり!! もうすぐHR始まるから散って散って!」

少しばかり動揺しているのが丸分かりという位の声でヒナギクは両手を叩きながら言った。強引に閉廷されたこの会議に疑問を抱く者は少なからずともいたが丁度担任の雪路が来たので結果オーライだ。

・・・しかし、木原くんがまさか。

もしかしたらと思うと同じ境遇にあっていた自分としては捨て置ける問題ではない。あの頃は自分も何も見えてなかった時もある

し、授業もなんとかやり過ごしていたが遂には夢にまで出てきた。

先程のナギの問いに逃げたのは現在進行系で自分がそういう状況に陥っているからであり、うまい説明でその場を逃れられる自信がなかったからだ。

・・・でも勘違いってこともあるし、それでも今の状況は放っては置けないわね

ならばとヒナギクは思う。生徒会長として助けなければならぬいと。

○

「ぼおーっと」

のほほんとした口調で木原は空を見るのを止めてひたすら黒板を眺めていた。今は世界史の授業。雪路が普段のだらけっぷりの姿とは正反対の教師としての勤めを果たしているところを見るとまともな授業だ。少なくとも今のところは。

・・・なんでこうなつちまつてんだろうなあ。

頭の中ではいくつもの処理が行われている。目の前の雪路の授業をノートに書く思考と鬱の気分の原因を探る思考。人間の脳は一度に複数の事を処理できるような超人間のような事は出来ない。よって彼の脳は数日前から無理な思考処理によって疲労している。最近はロクに寝れてもいない、御陰で今日は初めてボランテニアに遅刻した。

環境管理の人々には後でお詫びをしなければならないと思う。

「はあ」

と予期せずため息をついている自分がいる。今まで、17年生きていて多分初めての感覚だ。どんなに体とかを鍛えていても人はそういった一つの出来事で簡単に崩れてしまうのがよくわかる。

ああ、おかしい。風邪とか引いたのか。いや、いつもならもう

とつくに治ってるはずだ。でもいつもより長引いているかもしれない。と自らの身を案ずるが程なくして、んなわけねえだろと自分にツツコミを入れる。

こんな時間が長く続くことは目に見えていた。墮落と鬱の間にいるような状態から抜け出すためにはねるのが一番。

まぶたを閉じて、顔を机に突っ伏して教科書でしっかり顔を隠したら自分の世界へとダイブする。今は少しでもこの気分から逃れたいという一心だった。

・・・やっぱりの時の事が忘れられないからだろうか。

視界が薄暗くなっていきながら木原はその思いを一度封印して眠りについたのであった。

○

蓋を開けてみれば時間が流れるのは早いものでもう既に放課後であった。生徒たちはもう既に帰り、部活に行く生徒たちが見られる。その中で木原だけは未だに机に座ったままで空に浮かぶ夕日を眺めていた。

「おーい、竜児。お前帰んないの？」

陽気に声をかけてきたのはテルだった。テルの隣には黒羽がおり、ハヤテやナギは教室のドアの付近で立っていた。

「俺はもうちょい残ってるわー。先に帰んな」

手を振ってそう言うのと、そうか。とテルは納得して頷く。だがすぐに振り返ろうとはしなかった。十秒ほどたっただろうかこちらが不思議に思ったときにテルはこちらに一言告げた。

「俺、よくわかんねえけどよ。なんかあつたら言えよ」

「・・・おう」

「随分と短いですね。普通にこういったら良いじゃないですか。」

『心配している』と、私が代わりにお伝えしましょうか。ええ、それはもう簡潔に、これ以上ないくらいに簡潔にお伝えしますよ」

「いらんわ」

そう吐き捨てるテルは黙ってその教室を出て行くのだ。木原

は改めて思う。俺は心配されていて仲間迷惑をかけているのだと。なら早くこの状況を打開しなければならぬ。

だがどうやって？

そんな事を考えているときだった。

「木原くん……」

考え事を長くしていたためか声をかけられていたことに木原は気づいていなかった。気づいた方向にふと顔を上げて木原は目を丸くした。

そこには思いつめた顔でヒナギクが立っていたのだから。

○

……と、まあ一人になったのを見計らって声をかけたわけだけど。緊張するわね……ってなんで緊張？

同じ言葉を自らに繰り返すヒナギクだがそれはこの二人のいるシチュエーションだった。夕日の放課後、男女が二人つきりでの場面はまるで告白前の男女のよう。

いやいや、とヒナギクは首を振って否定する。これは悩める生徒の悩みを少しだけ聞くだけであり、いわば生徒会長としての義務だ。

そう自分を納得させてヒナギクは話を切り出す。できるだけさりげなく。

「最近なんか悩んでるみたいだけどどうかしたの？」

よし。と心の中でガッツポーズ。取り敢えずあまり動揺しないように出来た。相手の反応はどうだろうか。

「悩み……か？ いや、これと違って別に」

「嘘言いなさい嘘を。今朝からぼーっとして何考えてるかわかんないって皆で話してたところなんだから」

「マジか。気づかなかった」

……結構騒いでたはずなのに気づかないなんてこれは、大きな訳がありそうね

頭を掻きながらうなづいている木原を見てヒナギクは本題に再び戻した。

「私は生徒会長として一人の生徒の負担を減らす手助けとかしておきたいと思っっているの。他意は別にないのよ?」

こほん、と咳をひとつ入れて述べた言葉に木原も少しだけ黙るとため息を吐いた後にようやく重い口を開く。

「たいした事じゃないんだけどなあ・・・なんかこう、色んな事に手が着かないで食欲が全然進まないんだよ」

本題に入るかと思いきや少しだけ遠回りしている内容だ。

「いつもなら走るランニングコース10キロもなんかぼーっとしてる間に30キロ走ってたし・・・」

・・・三十キロって、もはや普通の男子高校生の行うランニングコースじゃないわね。

このままでは対した内容も聞かされないのではないかとヒナギクが思っていた時だ。

「こうなってきたのもあの時からなんだよなあ」

不意に放った木原の一言にヒナギクの興味が一気に注がれる。

○

それはどうやらここ数日の話らしく。不幸なことに財布を落としていた木原は校舎内を探していた訳だが。顔の御陰で誰も手を貸そうしてくれないし、テルたちも先に帰っていて欲しいと頼んでいたため一人で探していたのだ。

だが、そんな彼の財布を見つけてくれた女性がいたらしい。

『これってもしかして君の財布なのか?』

少しだけクールっぽい印象を見せた少女は今まで誰としても近づこうとしなかった木原に何も臆することなく近づいてきたのだ。

『気をつけるといいさ。ここってかなり平和なところだけど財布をそのまま貰うっていう曲がった考え持った人もいるから・・・それと』

少女はもう彼の顔を見ようとはせず振り返ると少し笑みを含んだ様子でこう言った。

『これだけじゃ運命は始まらない』

その時木原は確実に口の形をへの形にしただろう。それくらいのもう然とする発言が少女からはあったのだ。その発言をした少女もしまったと咳をして言葉を濁してその場を去っていったのだ。

○

「それって……」

ヒナギクはその先の言葉を口にせずとも分かっていた。その状況からこの状態になっているということはだ。だが、まだ決め手にはなっていない。ならばとヒナギクは意を決して聞くことにした。

「今でもその人のこと、覚えてる？」

「ああ、覚えてるとも。うん、最近じゃなんか夢の中にも出てきた……もしかしてコレってさ」

話を聞いていたヒナギクも話していた木原もお互いにその結論を自分で辿りつこうとしていた。そしてヒナギクは思う。この人も同じだ。同じなんだと。だとすれば、いったい誰がという疑問にまたたどり着いた。

……クール口調だつて言つてたわね。もしかして三年生の唯子さんとか？ 美希はクールとは程遠いけど……まずあの三人を候補からまっ先に外すべきよね。

と、あれこれ考察しているときに気づいた。これでは自分が他人の恋愛を面白がっているのと同じなのではないかと。

それは明らかに相手を貶すといった行為だ。今自分は、と改めて考える。なんのために彼に放課後に話しかけているのかを。

……私がこの場面でやらなきゃいけないこと。それは……
「その、想いに対してもすぐに答えを出さなくてもいいと思う、から。でも相談したいことがあったらいつでも……私じゃなくてもテルくんとかハヤテくんがいるから」

「……ハヤテはいいとしてテルに相談することには抵抗があるな」

と机から立ち上がった時だ。

「おっと、ヒナ。取り込み中のところ済まなかったな・・・この前の予算案の件なんだが」

「あら、ハル子。大丈夫よ？ 今終わったところだから」

入ってきたのはこの白皇学院の生徒会書記を任されている春風千桜であった。これから生徒会の会議とかがあることをヒナギクは完全に忘れていた。同じクラスということもあるとこうして教えてくれるのでとても助かる。

「じゃあ木原くん、私これから生徒会で会議ある・・・から」

とゆつくりと木原の顔を見ていくうちにヒナギクの言語スピードは失速していった。なぜなら彼の、木原の顔からは笑が消え失せて、目は大きく見開き、体は全身が震えている。

「・・・かつ、・・・あ、なっ・・・」

「お、この前の。あれからちゃんと財布は大事にしてるか？」

その問いかけに、一瞬だけ木原の体が跳ね上がる。その瞬間をヒナギクは見逃さなかった。

「ん？ どうした？ 私の顔に何かついてるか？」

不思議そうに木原を見つめる千桜。その二人のやり取りを見てヒナギクは感じた。意外、どうしようもなく言葉も出ないこの状況を啞然と呼ぶのだと。

「いや、おう。だ、大丈夫だ。うん、何もついてないから大丈夫」「そ、そうか。それよりも君はさっきから何をしているんだ？」

千桜の目先にいる木原は何やら荷物をまとめて手提げのカバンを小学校のランドセルのように担ぐと大きく窓を開けて。

「脱出!!」

突如身一つを床のない空間へと投げ出したのだった。

「・・・ヒナ。今のは」

何が起きたのかが未だに理解できない千桜だったが口調はいつものように冷静だった。下を見るとうまいこと着地した木原が猛ダッシュで校門へと向かっているのが見えた。

「え、え・・・」

これまでの一連の流れ、もとい彼のオーバーな反応を見て、ヒナギクは確信した。だがそれでも信じられないと言った疑問が今更ながら頭の中に流れ込んできて体が僅かに震え出す。

「さん、はい」

「ええええええええええええええええええええええ!!?」

千桜の謎の合図に合わせてヒナギクのあげた一声は夕日の白皇学院に響いていくのだった。

「大きく響いたな。ちなみに思わず合図送っちゃったけど何に對しての「えー!」だったの?」

「し、知らない!私も分からない! それよりも行くわよハル子! 会議始まっちゃうでしょ!?!」

頭の中でもう一人の自分が大慌てでこの状況に對処できず走り回ってるようだ。ヒナギクは残った理性でその場をやり過ごして二人で生徒会室へと向かう。

・・・っていうか同じクラスだったのに気づかなかったんかい!!

こうして一人の男の春が始まるのであった。

第97話くすれ違いならぬ、誤解の場く

——朝。 明るい日差しが差し込むこの台所でベーコンが香ばしく炙られている音が響く。 ここは、白皇学院学年主任の牧村詩織の自宅兼、研究室である。 居間とキッチンがつながっており、キッチンのすぐ向こうには十畳位の間があるが、資料やらパソコンの機器で溢れているのが見える。

ここだけではない。 実はこの家の家主である牧村の部屋や廊下にもちよつとした機器や資料で溢れている。 しかもこの家には地下があり、大掛かりな研究の時はそこを使うのだ。

「・・・はあ」

そんな90%が研究室と化しているこのラボでため息が聞こえた。 今年特別扱いで高校生活を送っているこの男、木原竜児である。

フライパンを振って良く焦げ目をつけたところであらかじめにかしていた卵を流し込む。 前日のスーパーでは卵が破格の値段だったのをふんだんに使っている。

「ふあゝ おあよう、木原くん・・・」

今のソファにて女性が起き上がった。 ズレたメガネにボサボサの寝癖をつけた女性は寝ぼけた表情で伸びをした。

「牧村先生、おはようございます。 また夜遅くまで研究ですか？ ちゃんと眠らないと体壊しますよ？」

木原がそう言うのと伸びをしていた牧村はソファから立ち上がりカーテンをうとうとした手つきで開いた。

「いやー、エイトの新しいパーツが出来そうで仕事のペース忘れちゃっててね。 あ、今日の朝は何かしら？ イタリア風？ 中華風？」

「そういうのを朝からはちよつと・・・卵まだ余ってたんで今日はベーコンエッグとパンですよ」

わお。 と牧村はキッチンから見えた皿に乗せられた綺麗な料理に思わず声を漏らした。

「しっかし、木原くんはホントに料理上手ね。 私の朝の食事がこ

ここまで変化するとは思わなかったわ。学生卒業後はなんやかんやで一人でご飯も用意する時間もなかったからパン一枚で会社出勤なんてよくやってたわね〜」

「そんな生活続けてよく体を壊しませんでしたね・・・よつと」

木原が操作したのはIH化されたキッチンの一部にあるボタンを押すことだ。その瞬間、IH特有の黒色の天板にできていた細長い穴から鈴のような音が鳴ると勢い良く、焦げ目のついた食パンが飛び出してきたのだ。

「私2枚でいいわよ。バターとか用意する？」

「ああ、別にいいですから。顔洗ったり、学校に行く支度してきてもいいですよ。あと、コーヒも淹れておくんで」

「本当に色々悪いわね〜 でもありがとう。そうさせてもらおうわ」
朗らかな笑みを浮かべた牧村は手を振って部屋を出て行った。

と、ここで木原はまたしてもひとつボタンを押すと今度は本来魚を調理する場所から音と共に一杯のコーヒーが出現。もはやこの家では当たり前になったかの光景に木原は動じることなく取り出してテーブルに料理と一緒に運んでいく。

「・・・やはり天才か」

既に慣れた光景といっても時々彼女が稀に見る天才だということのを思い知らされる。彼女、牧村詩織にとつて研究とは生きることなのだろうか。手当たり次第に家の家具を魔改造することが癖になっている。主に研究のコンセプトは「ボタン一つで老後も安心」だったらしいのだが、先程のIHには不審者撃退用に催涙ガスや機銃などが飛び出してくるボタンも搭載されている。どこでベクトルを間違ったのだろうか。

「それではいただきます」

「いただきます」

暫くして牧村が戻ってきたので二人は朝食を取ることにした。

テーブルに向かい合って作られた朝食を口へと運んでいく。

「それにしても牧村先生は気にならないんですか？」

「ん？ 何が？」

突然の質問に牧村は首を傾げた。

「いや、なんとなくですけど・・・男子生徒が牧村先生のところまで住み込みで研究の手伝いをするっていうのは、何か不健全な物を感じてるんですけど。も、もちろん！ そんな事は一度も思ったこともないですけど・・・せ、先生としてはどうなんでしょうか？」

「んー・・・急に言われても。そりやダメだけど、でも学院も特例処置で認めてくれることだし、それに何よりも木原くん事は信頼してるのつもりなんだけどね？」

「そ、それは俺が顔の割にヘタレといってるのと変わりませんよ先生・・・」

違う違う。と牧村は持っていたコーヒートをテーブルに戻した。

「そういうことじゃなくてね？ 私は木原くんは真面目な性格だつて理解してるつもりよ。それに顔の事で気にするのは良くないわ。

最初は戸惑っていたけど、だけどもね？」

ひと呼吸を置くと牧村は笑顔を向けて言った。

「木原くんはテルくんの友達なんですよ？ だから私、直感でわかったのよ。この生徒は悪い人では絶対ないって」

「先生・・・」

思わず顔を隠したくなった。それほど自分は感動している。

まさかテルたち以外にも自分を理解してくれていた人間がちゃんと言ったことに。

「・・・」

すると不意に先日にも自分を理解していた人間とであっていたことに気づく。自分のこの顔に恐ることなく近づいて来てくれた一人の少女の事を。またしてもぼーっと気分だけがその日にちに巻き戻ってしまう。別のことに気を取られていたためか、パンにバターを塗るはずが。

「あれ？ 木原くん。パンに醤油かけちゃってどうしたの？」

「うげっ・・・」

気づいたときにはもう遅く、木原は和と洋のコラボレーションされ

た醤油味のパンを加えていたのだった。

○ 新学期を迎えた白皇学院は始業式に用意されていた豪華な装飾もなくなっていた。既に通常授業も始まっており、大きな問題も起きずいたって平穏である。

「あ、舞夜ちゃん！おっはよー！」

黒羽舞夜が教室に入ると一人の少女が笑顔で迎えてきた。このクラスの委員長こと、瀬川泉だ。

「おはようございます。 泉さん」

えらく無表情の黒羽がそう返し、自身の席に静かに座った。カバンを取っ手に掛けているとその間にいつの間にもこちらにきたのか顔を上げると泉がいた。

「どうしたんですか。 泉さん」

そう聞くと泉は少し苦笑いをしながら自身のカバンから慣れた手つきでノートを取り出した。そして申し訳なさそうにこちらに両手を合わせて頭を深々と下げて言ったのだ。

「宿題をみせてくださいー！」

「却下です」

「コンマ一秒で即答されちゃったよ！ なんで!?!」

涙目の泉の問いに黒羽は口調を変えることなく理由を述べる。

「ヒナギクさんに宿題を写すなどの類のお願いは一切聞かなくて良いと言われています。 その時は断固拒否しても私が許すと」

「……お、おのれヒナちゃん！ こんなところにまで既に手を打つてあるとは!!」

われらが生徒会長は不成功を簡単には許してはくれない。最近黒羽がヒナギクと同じくらいに頭が良いことが明るみになってきたので厳しいヒナギクとは逆の黒羽に宿題を見せてもらおうというのが泉達の作戦だったが既に手が回っていた。

「こ、これじゃあ私またあの先生に怒られちゃうよ〜！ 連続でサボったらあの先生鬼みたいに当ててくるから嫌なんだよ〜!!」

だったら最初からやれば良いのではないかと心の中で黒羽が思うがそれで済んでいるならヒナギクも苦労はしないだろう。それでも泉が涙目でこちらを見つめてきている。黒羽は仕方ないと心の中だけでつぶやくと一度間を置いてから泉に尋ねた。

「・・・その授業はなん限目からですか？」

「五限からだけど・・・え？見せてくれるの？」

黒羽の言葉に泉の表情が雲のなくなった青空のごとく晴れ渡る。黒羽は首を振って答える。

「いいえ。写すことはさせません。約束は約束なので・・・ですが」
黒羽は首をかしげている泉に続ける。

「そこまで時間があるのでしたら、私が解説しながら教えましょう。勉強というのは自分で解かないと意味がありませんから」

「んー、私だけじゃなくて美希ちゃんたちもいるんだけど・・・」

「でしたら、皆さんで一緒に。休み時間と昼休みをうまく使っていけば直ぐに終わるはずですから」

と、平然と言う黒羽に泉は小さく笑った。

「どうしました？」

「いやいや、別になんでもないよ。でも、ありがとね舞夜ちゃん！」

満面の笑みを向けた泉は小さくコクリと頷いた。すると泉の両脇から人が生えるように現れる。美希と理沙だ。

「朝からゆりゆりな展開を見せつけてんじゃないよオ!!」

「そうだそうだ! あざとい化身め! こうしてくれる!!」

「あひやひやは! ちょよ、ちょつと止めてよ二人ともオ! くすぐつたいから!」

両脇に現れた二人は泉にしがみついて泉の体を擦り始めたのだ。

泉が耐えられず笑い声を上げるが、擦り犯人の一人である美希はあつことに気付く。

「そういうえば、今日はテルくんがいないが・・・」

「あ、ホントだね。いつもなら一緒に登校してきてるのに」

美希に言われたことに泉も気づいた。それを聞いてかいつも一緒にいる黒羽が思い出したかのように答える。

「テル様なら校門の方で木原様に呼ばれていましたので今はいません」

「ほう。あの木原くんがか、何用だ？」

理沙の問いに黒羽は不動のまま答えた。

「分かりません。ただ、人気のないところで話がしたい、と言っていました」

その瞬間。三人の動きが一斉に止まった。そして遠くでそれを耳にしたハヤテやナギもこちらに強烈な視線を向ける。

「ど、どういうことですか！ 黒羽さん！」

「あ、あのバカがどうしたって!？」

ハヤテとナギに続くように今度は美希と理沙が食いかかる。

「え？ つまりは男の木原くんがテルくんを人気のないところに呼び出した・・・話がある。これはつまり、そういう流れかッ!!」

「強面男にぐーたら執事!! なんて恐ろしいカップリングなんだ!!」

腐女子の歓喜!! 薄い本が更に加速的に厚くなる!!」

「私が申しますに、そういう事はないかと。それよりも、あなたがたは同じ男性が二人つきりになっただけでその発想にいたりますね。ということ、皆さんかなりの腐った脳をお持ちのようで・・・このクラスはホモ思考が多いのでしょうか」

少しだけ冷めた視線を全員に向けると一同はこほんと咳をしてお互い向き合う。そしてナギが腕を組んで真剣な表情で言い放った。

「これは・・・何としても確認せねば!!」

○

「——と、ナギ様が申ししていましたので実際に付いて来てみれば、二人が来たのは学院の裏側ですね」

HRが始まる20分くらい前に、黒羽たちはテルたちの跡を追ってみたところで一旦隠れて二人の様子を伺っていた。

「ああ、ハヤテ。私たちは一体どうした顔で今日一日を過ごしていけばいいんだろうか」

「いや、僕もちよつと驚きましたけど。今考えてみれば、テルさんがそんなことになるわけがないと思うんですが」

「こ、これは男の子同士の行き過ぎた友情の予感ッ!？」

「落ち着け泉！ オイ美希、カメラ回ってるか？ 我が動画研究部としてこの奇跡動画は絶対に録画せねば」

「理沙よ。こちらは完璧だ。これより録画ボタンを押させてもらう」

何故か草むらに隠れている人数が明らかに多過ぎることは黒羽はあまり驚いてはいなかった。しかし、たかだか男二人が話し合うだけでこれだけ騒がれてしまうのは些か大事にすぎだろうか。

「皆様。少しばかり静かにして欲しいのですが。たかが男同士の話にこれだけ興味があるとは皆様もの好きにも程がありますね」

淡々と述べる黒羽に泉がにやけながら指を振って否定する。

「ちゅちゅち。私思うにだよ舞夜ちゃん、最近の木原君のぼーっとしてる原因はつまり恋なのだよー!」

「なるほど。では、その相手がみなさんはテルさんだと」

そうだと、と。泉は首を縦に降った。

「・・・ふう」

「うわっ！ 凄いゴミを見る目でため息つかれたよ！ 怖いよ舞夜ちゃん!!」

騒ぐほか数名を放っておいて、黒羽は数メートル先の二人の会話に注目。無論、それは黒羽だけでなく他の数名も行っていることだが。

○

「・・・なるほど。話を聞いて分かった、お前の面倒くさい説明を聞くからに？ お前はどうかやら？ クラスの女の子が好きになってしまったと?」

「ああ、そうだよ。って、さつきからなんで壁にパンチしてるの
前」

木原は親密になってこちらの話を聞いてくれているテルに少しだけ恐怖を感じている。それは目の前の男が何やら不機嫌そうな顔で壁を殴っていたからである。

「なにつて壁殴り代行的な」

殺気を込めながらテルは続ける。

「それで？ 俺にどうしてもらいたいわけ？」

「いや・・・その」

面倒臭そうにテルがそう聞いたとき、木原の顔つきが少しだけ固まったのがわかった。

「このモヤモヤした部分を完璧に終わらせるためにはどうすればいいんだ？ 俺昨日から胸の部分が痛いことになって寝不足気味だ！」

ついでに朝食のパンに醤油をかけるという失態まで起こした！

・・・そんなに一度に言わなくても

心の中でテルが思う。目が完全に見開いてしまっている相当の意識っぷりだ。しかし、木原の思った答えをテルは返せそうにない。何しろテルもまたテルでこう言った話にはまったくもって縁がないのだ。

「落ち着け馬鹿。話す相手まず間違ってるだろ常識的に考えて。」

俺そういう恋バナにはまったくもって縁がないんだぞ？ あるって言うっても漫画のシーンとかでしか分かんない訳で、お前の期待してるアドバイスを俺はできそうにない・・・」

「知ってる」

「ああ、そう、知ってる・・・って、あああ!? ただ俺に自慢しに来ただけか

この野郎!」

まるで犬が威嚇するようにテルが木原を睨みつけた。今にでも襲いかかってくるような狂犬のようだ。

「分かったけど。・・・お前にしか言えなかった」

だがその思いつめた表情の木原の言葉にテルは睨むのをやめた。

「まだ俺、顔の事で周りに警戒されてるみたいなんだ。女子に関しては深く考えなくても・・・身近なヤツでもハヤテとナギは間違っ

た意見をもらいそうだし、会長とはあんま話したことないし、黒羽は論外だし、三人組は話したらなんかネタにされそうだし・・・信用できそうな奴って、なんかお前くらいしかないんだわ」

確かに、テルから見ても木原の周囲の風当たりは当初より良くなったものの、完全になくなったわけではない。木原が気にするほど身近なハヤテたちも適応してきたのがかなり良かった。その御陰で少しづつ周りの評価も変わりつつある。

「いや、そりゃ頼られることに関してはこっちも嬉しいけどよ。あまり気にすることねえよ。お前の評価だって最近じゃ少しづつ変わってきてんだぜ？ この前たしかあの三馬鹿達と外でゲートボードで遊んでたじゃんか」

他人の噂に皆が染まりやすいのはよくある事だ。だから木原に對して厳しい考えを持っているクラスメイトはそのハヤテの話を知っていないだけの連中だろう。ただ当の本人がこう言った話になると結構懐疑的な性格なのでこう言った変化には気づいていないのだ。

「・・・まあお前がそこまで言うんだ。俺もなんとかアドバイスしてやりたいのは山々だが、いかんせん時間というものが無い。だから放課後にジジイのラーメン屋で続きは話そう・・・俺もなんとか仕事までの時間までは空いてるからな、ああ、その難題に付き合っただけでやる」とも

「ありがとな。・・・はあ、また俺はあの苦しさに耐えなきゃならないのか」

・・・クソツ、楽しく青春してるこいつマジで殴りてえ……!!

密かに拳を強く握っている自分がある。本来ならちよつとにやけて喜ばしいことなのだが自分がそういった経験がまだ無い為、新しい体験をしているテルが非常に羨ましい。

二人は鐘の音が鳴る五分前になると教室へと早足で戻っていった。

「き、聞いてたか理沙・・・！」

「あ、ああ！ 遠いからちよつと聞こえづらかったけど確かに聞こえた！ 木原くんから『このモヤモヤをどうしたらいい？』と！」

木原たちが居なくなつた茂みでは隠れていた美希たちが騒いでいた。

「そ、それにテル君も言つてたよね！ 『付き合つてやる』つて！」

「これは同意したのか!? つまりは二人はフォーリンラブ!？」

先程の一部始終を見ていたために隠れていた女子たちの思考は酷く腐つていた。 ついには泉やナギまでもがその煽りを受けてしまった。

「皆さん、少し落ち着きましょう。 私にはただ木原様がテル様に何か相談をしているだけのよう聞こえました」

「そうです。 黒羽さんの言うとおりです。 二人に限つてそんなことあるわけないじゃないですか。 こんな禁断の愛みたいにな・・・」

黒羽に合わせるかのようにハヤテも周りを諫めるように言葉を放つた。 どうやら冷静なのはこの二人だけらしい。

「禁断は禁断でも、好きだつて気持ちには変わりはないッ！」

美希が珍しく熱弁を振るつている。 思い当たる節でもあるのだろうか。

「しかし、これはうまいこと編集すれば拾えた音だけでも素敵動画が出来上がるぞ・・・さつそくニコ動にでもUPして・・・」

「ネットにあがつた動画は回収しにくいことを知っていますか？ 個人情報漏洩させることは重犯罪になるのでは」

黒羽が美希たちにそう言つた行為をさせないために釘を打つが、興奮状態のためか、聞く耳を持たない。 騒いでいる三人からは新しい淫夢動画シリーズやら、ガチムチネタが流行るなどの単語が聞き取れた。

・・・結論から申すと、皆さん大変腐ってますね

それから鐘の音が鳴つて、一同が血相を変えながら教室に駆け込んだのは言うまでもない。

そして時間は経って昼休み。

「アレ？ 朝撮ってたあの動画がなくなってるぞ？」

「おいおいどうしたんだ美希。 バッテリー切れてたのとか気づかなかったとか？」

「いや、違うんだ理沙。 バッテリーはちゃんと満タんだつたんだが・・・おつかしいなあ、撮影終了したら勝手に保存ささるはずなんだけど・・・これじゃあ動画投稿もできないな」

○

時間というのはあつという間に過ぎるもので、放課後になった。

いつもとは違うルートで银杏商店街の道を歩いているのはテルと黒羽と木原だ。

・・・美希さんたちが撮っていた動画は削除することはできませんでした
がさて……

昼休み、黒羽がカメラの動画を削除することになんら難しいことはなかった。 三人娘は外の動画研究部でまったりしたいと出て行つたきり机の中にカメラを置き忘れていったのを黒羽は見逃すことはなかった。

それにその時は教室には誰もいなかったため、誰も彼女の削除行為を見ていたクラスメイトはいない。 上の階のガラスが割れる音がしたので恐らく三年生の千里と唯子の喧嘩を皆が見に行っていたためだろう。

「んじや、俺これからこいつとちよつと用事あるから。 お前先に帰っててもらえないか？ 仕事までには戻るからよ」

ちようど、ラーメン辰屋という店の前にきたところ三人は立ち止まった。 黒羽は思う。 ここで二人は朝の話の続きをするという

訳なのだ。

「それは私が介入しては話にくいことですか」

「一緒について来るってことか？　ダメだな。　こればかりは、男同士ではサシで話し合いたいこととかがあるもんなんだよ」

・・・しかし、本当に泉さんたちの言うとおりでテルさまに同性愛癖があったとしたらで私はどうするべきなのでしょう。　本来なら、ここでテル様についていくことも一つの手でもあるかもしれませんが、あつさり否定されてしまいました。

黒羽は考える。　彼女にとって彼がそう言った性癖を持っていたとしても彼女はどうか対処していいか分からない。　どうこれから接するとかの問題ではなく、普通に興味がないのだ。　少なくとも彼女の知っている彼は『そういう』事をするようには思えない。

たまにマリアとかと話をしているときは雰囲気が変わるくらいだから、彼がその手の人間でないことは明らかだ。

だが可能性という事を考えて、それは自分が知っている部分でのテルだ。　出会ってから数日で彼の全てを理解したわけではない。

三千院家の同居人であるハヤテたちも同じで互いに隠されている秘密もあつたりするのだ。

・・・興味とかがあるわけではないのですが。

他人の事を知らない自分はその人のことを知らなければならぬのではないか。　だが、こうして否定をもらったことで彼女は彼の言葉に従うことにする。

これらのことを踏まえて、黒羽は言う。

「テル様は男同士の行き過ぎた友情を信じますか」

○

告げた一言に、二人は目を点にしてお互いを見合った。

「なんか凄い勘違いしてるみたいだぞテル」

「そうだな。　うん、凄いぶっ飛ばしたい気分だけど・・・なあ、こいつにだけは後で話をしても大丈夫か？　結構口は硬いと思うから」

ものの数秒、二人は話し合つて何かを決めると黒羽に向かつてテルは口を開いた。

「取り敢えず、俺はそういうことには興味はないけど。行き過ぎる友情か・・・まあ、あるんじゃないかね？ どこぞの誰かさんが『ホモと友情は紙一重』つて言葉を考えたくらいだからな」

難しい顔で答えた彼に黒羽は少し俯くと顔を再び上げて

「私の回答に答えを頂きました。 それではこれで失礼します」

「・・・お、おう」

お辞儀をした黒羽を見て戸惑いながらも彼はそう返事した。二人に背を向けて黒羽はその場をあとにする。

「なんか勝手に納得してたみたいだけど。 あれ絶対勘違いしてるよね」

「ああ、手遅れになる前に手は打っておこう」

二人はやるせないように笑みを浮かべると辰屋ののれんをくぐつていったのだった。

○

「まあ、女の話に俺もあんまアドバイスはできない。 いや、むしろできるところがない」

「そうだな」

ラーメン辰屋のテーブルに座り二人が注文した料理が来るのを待っているあいだにも話は始まっていた。 両手を組んで二人は話を進める。

「そこで、俺の漫画での知識とかをうまく活かそうと思ったわけだが、ここには運良くも長く生きながらえてる妖怪ラーメンジジイにアドバイスをもらおう」

「誰が妖怪だゴラッ！」

不意にテルの後方に老人が現れて、制裁の鉄拳をテルにお見舞いした。 店主である辰也次郎は未だに健在だ。

辰也はお盆に載せていた二つのラーメンを二人の前に並べる。

香ばしい匂いが鼻をつつく。 高級な食材などを使わず時代の流れに左右されない職人の業だ。

「俺なんかよりずっと先輩の方から話を聞いたほうがいいだろう。つーわけで、爺さんご教授を」

「お願いします」

と、二人が頼み込むと辰也が手を顎に当てて、そうだな、とつぶやく。

「あんちゃんよお、本当にその子の事が好きなのかア?」

「・・・分からないですけど。多分そうだと思います」

「なんだよジジイ。 勿体ぶってんじゃねえよ。奥さんいたのにそういうこととか分かんねえんじやねえだろうな! アンタ図書室にいる文系の学生の委員長を体育会系のノリで口説いてたと思ってたのによお!!」

隣のアホは突っ走っ立てたため辰也がげんこつを一発。

「馬鹿なこと言ってんじゃねえよ。 ハツはなあ、俺がちやんと自分から口説いたんだ! 俺が文系で、アイツが体育系だったけどな!!」
それは意外。と木原が思ったところで、辰也が腰に手を当てて一息をつく。

「まあ俺がしたことは一つだな。 出来るだけ相手と多く時間をつくったりしたな、無理にでも。 例えばアイツが朝にゴミ拾いしてるのを耳にしたらさぞかしランニングしてたのを装って一緒にゴミ拾いに参加したりな」

「せこいな」

「うるせえよ。 文系の俺じゃこういう考えしか浮かばなかったんだよ」

そうだ。と何か思い出したかのように辰也は手を叩いた。

「もう一つ、女つてのは強い人間について行きたくなるもんだ」

納得したように辰也は続ける。

「昔ハツのことを好きな奴が俺の他にもう一人いてな、バリバリ体育系のヤツで野球部のエースだったんだ。 そいつとサシで殴り合いを

して勝ったんだよ。それを機に俺ら二人は付き合い始めたんだ。努力したぜえ、勝つためによお、ボクシング部の練習を重ねて家に帰ったら枕に穴ができるまでシャドー、ランニングで体力作りまでやったなあ・・・だからあんちゃんも腕っ節は鍛えておいて損はないぜ・・・ってオイ、何してんだ」

「いや、もう充分話は聞かせてもらったんで。これ以上話聞いと結婚までの過程とかそのあとのノロケ系の話が出てきそうで、だから今日はこれで退散させてもらいます。ごちそうさまでした」

「お、オイ！こっからがいい話なんだって！卒業式の日にな・・・」話をまったく終わらせる気がないので木原とテルはお金を置いてお辞儀をすると二人はそそくさにその場をあとにしていった。

○

その後はテルともそれぞれの帰路について木原が一人で歩いてた。一応、聞くことは聞くことができたと思っただか、今日はこれまでにしておこうということだった。

・・・腕っ節か。自信はあるんだけどな……。

先程の辰也の言葉を思い出す。自分もこの数年間、師であり、親でも百合子とテルと修行を重ねてその後も格闘技などに身を費やしてきたのだからそこらへんのゴロツキには負けはしないつもりはある。

実際に辰也の当時のようにそんな展開はあるかどうかは分からないが、ぜひとも試してみたいものだ。しかし、それよりも気になることがある。

・・・アイツがこれまでに協力してくれるとはな……。

テルは初め話半分で聞いていたのかと思っただか、こうしてちゃんと時間をとって対策を考えてくれる辺り、真面目に話を聞いてくれた。少なからずとも感謝をしなければならぬ。恐らく、これから先は多少は相談相手になるかもしれないのだから。

「・・・まあ、後はホモ疑惑をテルにうまく説明させるとして——」
「何ですか、あなたたちは？」

と突き当たり角を曲がろうとした時だった。壁の向こう、何やら女性の声が聞こえたのだ。壁に張り付き、恐る恐る角を覗き込むとそこには一人の少女の前に三人の男たちが対峙するという光景が広がっていた。

「・・・あ」

木原はその光景よりもまずその少女に最初に目がいった。その男どもに絡まれていた少女が春風千桜だったからである。

○

春風千桜は思う。自分は不幸な人間だと。

きっかけは些細なことだった。豆粒みたいに極小粒なきっかけ。バイトの帰りに歩いていたら三人組の冴えない男の肩に体をぶつけてしまったこと。

「こつちだつて謝ってるじゃないですか。わぎわぎこうやって通せんぼして時間をかけるのはなんでですか？」

否は認める。だがそれは向こうも同じだ。それにこちらは前方を見ていたのに対して向こうは明らかに意図的にぶつけてきたのがわかる。普通に考えれば圧倒的に三人組の方が否は大きい。

「いやあ、そんなこといってもよオー。コイツがすんげエ肩いてえつて言つてんじやんかよオ。だからさあ友達としてはサア、ちよつと気持ちこもつてない謝罪だけじゃちよつと済まされないうて言うかア？」

「い、イテエ！ 半端ないよオー！ ちよ、チヨー痛えーよオ!!」

「ああ、これ折れてるんじやねエ——!? やっぱりタダで済まされないうて——!!」

・・・コイツら滅茶苦茶だろ!!

千桜は心の中で怒りを覚える。やり口にしてももつとマシンな方

法を思いつかないだろうか。昭和の時代遅れの不良どもの常套手段。テンプレ通りのご都合主義、角を曲がったらヒロインとぶつかるくらいのお約束、心の中では確実に危険な状況なのにベタすぎてどこかつまらなそうにしている自分がいた。

「制服見ると、キミ白皇の生徒だネエ！　ずっと勉強ばつかやってつまんなくないでしょ？　ちょっと遊びに行こうぜエ——！」

・・・話の論点がズレ過ぎだろ。怪我した肩はどうなった。それとお前らその不良っぷりJ O J Oの不良気取ってんのか!!　ふざけるのは顔だけにしろ!!

心の中で行われるツツコミの嵐。　たまに漫画に影響されてこういった行動を起こす輩がいるが常識的に考えてただの迷惑だということを理解していない。

「それに君さア、めつちや『遊び』知らない顔してんよオ。　あんなただの糞真面目な学校で何が楽しいのかねエ？　ガリ勉くんたち一緒にいてさあ、ちゃんと青春っていうの？　つまんない人？　楽しんでるのかねエ——!？」

・・・あ、凄いぶつとばしたくなかった。　確かに勉強主体の学校だからそういうふうに見られるかもしれないけどさあ。

千桜は思う。　単に『学業重視する学校』なだけでそこに通う生徒は普通の生徒だ。　常に落第しそうな生徒会の三人娘、完璧無欠だけど高所恐怖症の生徒会長、何をしでかすかわからない腹黒な副会長、仕事よりも酒好きな女教師、ガンプラ教師、世界有数の金持ち令嬢とその不幸執事となんかメイドの趣味に偏りのあるアホな執事。

個性あつて別に彼らが言うほどつまんない人間などではない。

彼らの発言は千桜の親しい人物たち全員を一方的な決め付けで馬鹿にしたのだ。　怒りがわかないならそいつは頭の感情の司る器官がイカれてるのだと思う。

「いいからこっちに來いってんだよオ——!!」

男の一人がこちらの腕をつかもうと手を伸ばす。　こうなったら柄にもなく大声を叫ぶか、それとも携帯電話を使って警察を呼ぶか、と考えてた時だった。

「ンンツ?なんだお前はア?」

手を伸ばしていた男の腕が横から掴まれていた腕によって動きを止められていた。

「・・・なんかついカチんと来ちまった。自分の事はともかく意味もなく一方的に、知らない奴に俺の親しい奴が馬鹿にされんのはどうしようもなく腹がたつちまう」

「な、なんだアこの野郎はア!? なんでお面なんて被ってんだア?」

「いやあ、多分お前らびつくりすると思うし・・・」

・・・思い切つて出てきたけどバレてないかなあ。朝、牧村先生に渡された試作のお面カバンに入ってたから使ってみただけだ。

お面を被って勇んだ姿をしているのは木原だった。

「き、気持ちワリイ——! お、俺様ンに逆らうヤツわよオ」

その瞬間、腕を掴まれていた男が腕を振って払う。すぐさま体制を整えると、男は薄汚い笑みを浮かべて襲いかかってきた。

「ゼツテエ許せネエんだぜエ——!!」

男は木原に向かって、オーバーとも言えるスイングで蹴りを前へと繰り出した。目指すはその顎。顎に食らわせて倒して、一気にのしかかりマウントを取る。いたって自然、『いつもの流れ』。

「・・・およう?」

だが、男は奇つ怪な状況に見舞われることになる。男の蹴りは空振りに終わった。しまったと思いつつ、大きく後ろに体をのけぞる。無様にも地面に体をぶつけるだろう。

・・・アアツ、しまったア——!! 空ぶつたら地面に倒れるウ——!!」

と、思っていたのだが。

「・・・」

男の体は地面に倒れず、なぜか蹴りに行く前の直立の姿勢になっていたのだ。

「????」

何が起こったかわからない。頭の中で処理が追いつかない状態の時に目の前の木原がニヤリと笑った。

「ごんのオ〜」

もう一度、と。蹴りを繰り出す。今度は間合いを計算してるし、外すことはない。今度こそやつを地面に這わしてやる。

だが、またしても空ぶり・・・

またしても男は後ろに倒れず蹴る前の状態になっていた。

その後、何度同じことをしたかわからない。蹴っては直立の繰り返し。やがて蹴る余力もなくなったか男は汗だくの状態になっていた。

「ゼエ、ゼエ、ゼエ！ な、何をしたんだよオお前はよオ〜〜〜!!」

「お、お前・・・分かんないのか」

震えた声で取り巻きの一人が口を開いた。

「・・・られてんだよ」

「あ?」

小さくて聞こえづらかったが今度のははっきりと言った。

「投げられてんだよ! 一回転してんだよ!!」

「ハア?」

そんなことあるものか、と木原の方を向く。木原はため息をついた。

「ウン、そのとおり。 重心移動と合気の合わせ技みたいな奴でね。

風車見たくにクルツと一回転してんのお宅・・・その証拠にホラ」

木原が言ったとたん男の視界が揺らぐ。激しく回された御陰

で体に遅れて酔が回ってきたのだ。白目を剥いて男は大の字に倒れる。

「あ、兄貴イ!」

「ち、畜生! 覚えてろよオロロ〜〜〜ン!!」

お決まりの安い台詞を吐いて男たちは去っていくのだった。

「ふう・・・」

「あ、あの・・・」

一息ついたその矢先、千桜から声をかけられた。振り返ってみると

ちよつとだけ啞然としているみたいで。

「君ってグラップラーなの？」

「はい？」

「いや、間違えた。 助けてくれて有難う」

素直にお礼を言われたことに木原は内心ホツとする。 お面のおかげだろうか、内面が割れていたらここまでお礼は言われなかっただろう。

「人間言われたら限界な部分つてのがあるからさ。 さすがに俺もあそこまで好き勝手に言われたら黙つてられなかった」

「そうだな。 私も言いたいことを言ってもらえて凄いきりして気分だよ」

と、微笑みかけたところで木原は心臓の鼓動が一際大きく波打つのを感じた。

「見たところ白皇の制服だけど、君みたいな人がいたもんだな。 格闘技の部活動なんて白皇にあったかな？」

「い、いや・・・これは個人でやってることです」

思わず敬語になってしまったことにしまったと思う木原。 いけない。 とんでもないほどに自分は上がってしまったている。

「そんなことよりも、顔はみせてくれないのか？ ちゃんとお礼を言いたい。 なんとってテンプレ展開から助けてくれた恩人だからな」

と、手を伸ばして来た時に木原は思わず身を引いてしまった。 反射的にだがそれが拒否反応だと悟られる前に木原はその場を一気に駆け抜ける。

「あ、ま、待ってくれ!!」

「ま、待てない！ 今日これでエ！ さようならア!!」

叫びながら帰る木原の姿はあつという間に見えなくなった。 一人残されて誰も居なくなつたその場に千桜は佇む。

「じ、実に不思議な体験だった・・・」

人生のTOPに数えられる出来事ではないか。 不良に絡まれ、謎の覆面少年に助けられるヒロイン。 どこかの漫画で見たシチュエー

シヨン。心のなかではベタだと思いつつも。

「実際に体験すると凄いなあ・・・」

顔を隠したあの男とはまた会えるだろうか。そんなことを思っていた千桜だった。

「ん？これは・・・」

その場に落ちていた手帳を拾い上げる。生徒手帳だ。しかも白皇の。先程の少年が落としていったものだろうか。手にとった手帳を広げて中を確認して彼女はあの仮面の少年の正体を知ってしまうのである。

第98話く山の空気は美味しい、山で吸えば一段と美味くなるつてよ〜

木原がたつぷりラヴコメしてる一方で、三千院家で途方もない借金を返済するために働いているテル。今は屋敷内での掃除に身を費やしているが、この掃除も数ヶ月でなかなか様になってきたと思う今日この頃。

「そういえば、もうすぐ白皇で高尾山ハイキングがあるそうじゃないですか」

ナギの夕食も終わり使用人たちが夕食を取る中、マリアが呟いた。一つのテーブルを囲んでいる四人の少年少女たちは一旦食べていたものを飲み込んだ。

「たしか来週だったような・・・今日その連絡もりました。お嬢様がずっと嫌そうな顔してましたけど」

「そりゃあナギに山登りなんてアレですよ。光の玉なしにボスに挑むくらいの無理ゲーつてやつですよ」

「マラソン大会の時はすごく頑張っていたんですけどねえ・・・あれから一回も走つてるところなんて見たこともありませんし」

ハヤテの言葉にマリアが頷いた。ナギと言ったら体力なしの代名詞。マラソン大会で多少培われた体力もあれからまったく練習をしていないので元の体力に戻ってしまっている。

「まあ、何事も続けなきゃ意味がないってことだつて。それにしても・・・山かあ」

「どうしたんですかテル君。山という単語にそんな懐かしの表情をするなんて」

遠くを見るようなテルの顔にマリアが問うた。テルはさらに乗っているプチトマトを皿に一つ運びながら答える。

「マリアさん。俺にとって山っていうのはガキの頃に過ごした場所、つまりは庭みたいなものなんですよ。東京に来てから山とか行く機会がないからこのイベントの話を聞いたらガラにもなくはしや

いじやいました。ええ、修学旅行前の前日みたいに」

・・・そういえばテルくんは幼少期を山で過ごししていたんですね。木原くんとかお師匠さんと一緒に……

下田での温泉旅行の後、そこまで詳しくは知らないがテルと木原の話は少なからずとも耳にしていた。師匠兼、母親の百合子と流れ者であった木原と一緒に体を鍛えながら過ごししていた時期があったという。

「それとなんとですね。今回は三年生も一緒に行くんですよ高尾山！」

「そうなんですか？」

マリアの問いにハヤテは首を縦に振った。そしてハヤテの横にいるテルに目をやると明らかにため息をついて嫌そうな顔をしていた。

「テル君は何やら不満そうですね……」

「いいじゃないですかテルさん。千里さんとか唯子さんも一緒にくるっただけですよ？」

いやーだつてさ。とテルは続ける。

「三年でしつてる奴らつてあの人たちだけだろ。お前、あの二人以外に知ってるか？ 三年の顔」

ハヤテは当然の如く首を横に振る。どう考えても知っている上級生の顔は今考えても唯子と千里くらいだけだ。

「俺、知ってる同い年の奴らと一緒に行くのはよくわかるけど。なんでいっこ上の人達と、しかも顔殆ど知らない人らと仲良さそうに団体行動しなければならぬのかよくわからん」

「テルくんって団体行動苦手そうですね……」

「人見知りなんですよ」

かなり違和感のあるセリフだとハヤテは思う。あまり深く考えることはないが。と、マリアの隣の黒羽が箸を止めると静かに口を開いた。

「では、テルさままで人見知りなら私は一体どんな人見知りなのでしょう。知らない人と顔を合わせると口も聞けなくなるこのダメ人間。

救いの手は一体どこに……」

「え!?黒羽さん、自虐に走っちゃったよ! いや、ゴメン! 貴方に比べれば雀の涙みたいなくだらなない悩みでしたスイマセン!」

そうですとも、と黒羽は続ける。

「高々ゴミ粒のような悩みにテル様という人は・・・しかし、他人をこうして罵倒している私もまた問題のある人間です。このイベントに参加して心と体を鍛えさせていただきます」

一同は動きを止めた。様子が変わったのを見て不思議そうに黒羽が首を傾げていると前のテルが引きつった顔で聞いてきた。

「え、お前・・・来るの? 高尾山」

「はい。健全な肉体は健全な精神を宿すと聞いています」

「いやいや、そんなスポーツ論を聴いてるわけじゃないんだよ俺は。

え? 高尾山で何するか分かってんの? 山登りだよ? 学校の登校とはレベルが違うんだよ」

人差し指で黒羽を指してテルは厳格な表情で言い放った。

「無理! お前に登山は無理!絶対どこかで迷子になる!」

「テル君。人を指差すのはやめなさい。でも黒羽さん、高尾山ハイキングには本当に行くつもりなんですか?」

「ええ。私もいつまでもお守りしてもらっているばかりいては三千年家のメイドとしての名折れです。そろそろナギ様と同じ運動レベルでは正直シャレにならないと思いましたが」

この場にナギがいたら食事中でも構わず怒鳴り散らしてきそうな発言にテルは冷や汗をかいた。本当に執事と主との食事が別で良かったと思つたテルたちである。

しかし、テルはこの発言に思うところがあつたのは確かだろう。

それは最近になり黒羽とテルの仮主従関係がテルにとって負担になつていのではないかと黒羽が思っていたからだ。

もしかしたら、黒羽はこちらの負担をなくすように自分の殻をなんとか破ろうと、限界を超えようとしているのかもしれない。そのための今回のチャレンジだろう。

・・・そう考えると、無理に止めさせるのもなあ。

と考えてしまう。

「そうですねえ、高尾山自体がそんな無理もない登山ですから危険は特にないと思いますけど・・・黒羽さんの場合だとちゃんとバックアップをしておかないと本当に死んじゃいますからね」

「マリアの言葉をわかっているとしても言いたいのか、悟った顔で黒羽は言う。」

「ご心配なく。今回はテル様たちの助け無しでもこの高尾山ハイキング、やり遂げてみせます」

「何故かいつもの無表情なのだが、内なる闘志というものが、熱くなっているものがその時マリアには見えたという。」

——そして迎えた高尾山ハイキング当日。

「いいかあお前らあ！ 山つてのは怖いんだよ！ 山舐めてつと死ぬぞ！ そんな事もわからないお前らは腐ったみかんだ！」

高尾山のハイキング最初の集合場所、一番下の広場に響く女教師の声。間違えることはないだろう。桂 雪路の声であった。

「例え頑丈な男であつても武道やって体を鍛えた男女であつても、山舐めたら死ぬんだからね!! そんなで死んだらあたしの給料に関わつてくるとかそんなこと考えてないんだからね!？」

「あの先生、生徒の命を金勘定にかけてるぜ。なんて奴だ」

「いつものことじゃないですかテルさん。そんなことよりも他の生徒さんたちがアウトドアな服装なのに執事のみなさんはこんな場所でも執事服を着ていることに違和感はないんですか？」

「下田でもそうだったじゃん。 とういか、俺より長く執事服着てる奴がそれを言うか」

ため息をついて辺りを見回してみるとクラスの人間の他にやはり知らない顔の生徒が混ざっている恐らくあそこでまとまっている集団が三年生なのだろう。

「とういか雪路、お前登山で、しかも山舐めんなって言うっておきながらなんでミニスカ、ハイヒールなんだ？ お前が舐めてるだろ、山を」

「そうだよ」

「ハイヒールのヒール部分へし折るぞ！」

「黙らっしやい！ 女つてのはねえ、二十代後半になると人前ではイケてない服を着ちやいけないっていうルールがあんのよ！」

三人組のしてきを上手いこと大人の事情で躲す雪路。明らかに一人だけ抜け出ていた。その前によくほかの先生止めなかったな、とテルは思うばかりである。

さらに後ろの方ではナギと黒羽がなにやら向かい合って何か話していた。

「ナギ様。できれば私はナギ様と同レベルの運動レベルから脱するために今日勝負を申し出たいと思います」

「ほほーう。最近までロクに自力で登校できなかった奴が私に勝てると思うか？ いいだろう！ その勝負、乗ってやる！ ここで逃げたら女が廃るのだ！」

何やら女子ふたりは勝手に決戦の火蓋を切っていた。すると隣にいたハヤテが突然呟いた。

「心配ですか？」

「あ？」

「黒羽さんですよ」

「なんで？」と、聞く前にハヤテは言うのだ。

「最終的にマリアさんがお願いするまでテルさんは昨日、黒羽さんが行くのをなんだかんだ反対してましたね」

「へっ、別にだな。行くのは構わねえけど、目の前で色々ヤバイことになるのは俺はやなんだよ。それだったら行かせないほうがいいじゃないかって思っただけだ。賛成したのも、俺らが陰ながらサポートするっていうアイツにはいつてない条件があるからだぞ」

「なるほど、だからこのバッグには余分にタオルとか水分が入ってるわけですか」

「・・・お前、趣味悪い。死ね」

「ええ!? そこまで言わなくても良いじゃないですか!!」

出発前にテルはマリアから黒羽をサポートするように頼まれていた。出来るだけ影ながらのサポートと言っておきながら渡される

モノは特になしで、どういうサポートするかはこちらが考えるしかなかった。

取り敢えず揃えたのは水とタオル、そしてロープに救急グッズに発炎筒。その他もろもろ、ちなみにこれらの物品は三千院家の書庫の『最高！山は心の友』に書かれていたものである。ここには色々あるらしい。

「はいお前らア！ 集団で行動しろよな！ どんどん行けよオ！ 気をつけてなア！」

準備が整ったのか、雪路大声で合図を送ると纏まった人の集団が各自で動き出した。ここからは各自で勝手に山頂を目指せとのことだろう。

「やれやれ、漸く出発か。そろそろ行こうぜ、どこかの二人のせいでトラブルになる前にな」

「それは私たち二人のことでしょうか」

黒羽が聞き捨てならなかったのか、細めた視線をこちらに向けてくる。珍しく霸氣的な物を感じるがそれほどまでに気に食わなかったのだろう。真面目に答えるのは新たな波紋を呼ぶのも面倒なのでテルは適当に答える。

「お、お前いつもの黒服よりこういうスポーティな服装でも充分似合うじゃん。あと髪型、動きやすいようにポニテにしてるのな」

「はい、それほどまでに私の今日に掛ける意気込みは十分だと・・・って、なに話を逸らしてるんですかへし折りますよその鼻を」

「H A H A H A。冗談はこれくらいにしてそろそろ行くぜ皆の衆。山の空気は美味い、山で吸えば一段と美味くなるってよ」

黒羽が冷静と同時に恐怖を感じるセリフを吐いたが苦笑いで誤魔化す。それを見て黒羽は視線を外して

「.....」

無表情で小さく、溜息らしきものをついていた。それは本当に気づくか気づかないか微妙なラインだったが。

新学期早々の学校行事、高尾山ハイキングが今始まるのであった。

第99話くなぜ山に登りたがるのか。山があるからじゃないの？く

『目の前の山に登りたまえ。山は君の全ての疑問に答えてくれるだろう』 ラインポルトⅡメスナー

高尾山ハイキングは快晴の下、生徒誰ひとりかけることなく行われた。二年、三年の生徒が混ざっているせいかグループで行動する生徒の数は多い。

この高尾山、説明で補足すると標高は600mほど、さほど危険はなく小学生の遠足などの場所で多く利用されている場所でもある。つまりは小学生程度でも登りきれてしまうというとても簡単な登山なのだ。

「嘘だッ!! こんなにキツイんだぞ!!」

山道にてナギは涙目にしながら叫んでいた。息を肩でしている足の動きはまさに二十四時間テレビの終わり頃、スタジオに歩きながらやってくる疲れ果てたランナーの如し。

「それにハヤテはさつきから全然荷物とか持つてくれないし!」

「いやだってそれはマリアさんが・・・」

と、その場にいたハヤテは思わず自身の頬を掻いた。それは朝、学校へと出発しようとした時にマリアに言われたことであり、最近ナギを甘やかしているのではないかと問われたことだった。これ以上の体力の低下や不健康は避けたいところ、だから強硬策としてこの登山は自力でやり遂げてもらいたいと手作り弁当を渡されたのだった。

・・・あの手作り弁当は今もお嬢様のリュックの中。これを頂上で食べさせることにマリアさんには何か意味がありそうですけど・・・。「くそうマリアめ、余計なことを・・・」

ナギが肩を落として悪態をつくがこれはマリアからの風を思っ

のことだ。よほどナギのことを心配しているのだろう。

彼女にとってはその山登りとは地獄のようなものに思えるのだろう。そんな地獄とは打って変わって。

「ウーン、やっぱ久しぶりの山は最高だなあ。登山は人間が生み出した文化の極みだよ」

「本当によう、修行あの時代を思い出すぜえ・・・見ろよテル、俺の全身が酸素不足なこの過酷な環境に適応しようと素晴らしい汗をかいているぜ！」

活気に満ちた表情の二人がいた。テルと木原である。

「おうおう、やるかあ？修行時代に先生とやったツーマンセル」

「アレ？先生がつけた鈴を72時間以内に取り上げるって富士の樹海でやったやつだったよなあ確か。結局一度も取れなかったっけ・・・どこの忍者漫画ですか。」

心の中で突っ込んだハヤテに構うことなく、二人は異常なテンションだ。まるで修学旅行真っ最中の小学生のようだ。

「そうか、お前ら二人とも山育ちだったんだよなあ。故郷に帰ってきて楽しそうな気分だな。いいゾ、そのまま山の妖精として消えていってもいいんだぞ？」

「楽しそうで？ オイオイ、馬鹿言っちゃいけないえよ」

心無いナギの言葉を二人は笑って受け止めた。言葉の意味にナギは首を傾げたがやがて木原が答えた。

「72時間中は自給自足、火を起こす道具とかナイフすら持たせてもらえないサバイバルも含めたゲーム。夜はなんか知らないけど金縛りにかかって半透明の女男が闊歩する光景が・・・夜のガッツさんの気持ちが良い分かったぜ」

「でもさっきは楽しそうにしてたじゃない」

クラスメイトの、同じグループの泉が言うとテルと木原の表情は歪んだ笑みへと変わった。

「あの時はこれくらい無理して笑ってないと正気保っていられなかった」

「思えばナイフとか刃物とかを持たせなかったのは自殺をさせないた

めだったかもな。富士樹海はまじで自殺の名所だから」

引きつった笑みと同時にあの目を思い出す二人の足は確かに震えていた。それほどまでに刻み込まれたトラウマなのだろう。

「お前ら二人のそんな事はどうでもいいのだ。体力馬鹿の二人は私のことなどまったくわからないではないかこの馬鹿者め!!」

「体力云々、まずはお前は何か一つをやりきって見せろよ」

「う、五月蠅い！　だが体力に関しては絶対にコイツらよりはあると思うぞ!!」

・・・コイツら？

と数十メートル後ろの方に目を移すと一人の男が倒れふしていた。もう一人の少女は膝に手をつけている。

クラスメイトである黒羽と東宮だ。

「こ、こいつは！　もはやいつ登場したのかも読者に忘れられてしまっていたクラスの東なんとかくん!」

「あ、東宮だ・・・」

転がっていた骸がムクリと起き上がる。疲労のためか顔色が悪い。

「あ、あの・・・東宮さん、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫なわけないだろ。こんなの・・・の、野々原——、野々原あ」

と、東宮が読んでいるのはこの男の執事であった野々原 楓。ハ

ヤテとは剣道にて死闘を繰り広げた仲であり、執事としての腕も優秀だったがその彼は既に白皇を卒業して執事留学のためにイギリスにて絶賛勉強中。呼んでも来るわけがない。

「まったく、これだから金持ちの坊ちゃんは・・・」

そんな彼を嘲笑うように執事がまた一人。瀬川家の執事であり、泉の兄である瀬川 虎徹だ。

以外にも彼もまたテルたちのクラスメイトだったりする。

「虎徹さん、なぜあなたがこんな所に？」

鋭い視線を向くハヤテにこてつは鼻で笑って答えてみせた。

「愚問だな綾崎。同じクラスで、同じ班の仲間じゃないか」

「ホモは黙って山を下って帰って、どうぞ」

冷たいな。とハヤテの言葉を躲しながら笑う虎徹。言うべきでもないがこのメンツは異常なまでに濃い。

○

「……」

一人膝に手を当てていた黒羽は一言も喋らず無言であった。体調に問題はない。食事も欠かさず、装備にぬかりはない、だがしかし、圧倒的な体力的問題が彼女に立ちはだかっていたのだ。

「おい、大丈夫かよ」

呼吸を整えている中、声と共に足元に見慣れた靴があつた。見上げなくても声だけでわかる。テルだ。

「……まだ三合目も登っていません。これくらいで根をあげるように見えましたか？」

「いや、充分根を上げてるように見えるけど。すんごい脚動きづらそうだけど」

と、テルから見ても足が震えているのが見て取れたのだろう。こちらは無表情を貫き通していたのだが体は正直のようだ。

「まだやれます」

「そうか……」

声の強弱も変えず、いつも通りの言葉でテルは納得したようだった。しかしすぐに

「汗、めっちゃ出てるからよ。ちゃんと拭いたり、水飲んどけよ」

「はい……」

黒羽は汗を拭くより先にリュックのサイドポケットに差し込んでおいたペットボトルを取り出した。キャップに手を掛けるがなかなか力が入らずキャップは回らない。

「ん……」

突然と、黒羽の目の前に開けられたペットボトルが差し出された。キャップも開けられない自分を見たテルが見かねて差し出したのだろう。

「……」

だが、これを黒羽が受け取ることはなかった。その前に黒羽が渾身の力を込めてキャップを開けたからだ。

「・・・リュックくらいなら持ってやるか?」

水を喉に流し込むこちらにテルは聞いてきた。このリュックだけ任せようかと考えてみたが、ふと前の方でナギが自分のリュックを持っているのを見て考えが変わる。

・・・私より小さなナギ様もリュックを持っているのに、何を甘えたことを言おうとしていたのでしょうか、私は。

「結構です。 ナギ様との勝負は同等の立場で行いたいので・・・」

「お、お前・・・まだ勝負のこと言ってるのかよ。 別にいいんじゃないか、特に何かをかけているわけでもないのによ」

困惑気味のテルに黒羽は歩きだした。目の前にいるハヤテは苦笑いだ。この苦笑いは恐らく後ろのテルに向けられているものだろう。

○

「いやあ、残念でしたね」

先程のやり取りを見ていたハヤテはこちらに苦笑いを向けていた。

テルはペットボトルの水を軽く口にふくんで喉へと流し込む。

「けっ、まさか俺もここまで頑なに拒まれるとは思わなかったよ。

俺の心にも傷が付いちやうぜ、ホント」

「でも舞夜ちゃんもナギちゃんもやる気出して歩き出したみたいだしいいんじゃないの?」

泉は少し先で二人して肩を並べながら歩いているナギと黒羽の姿を見つめて小さく笑を浮かべていた。

「いや、多分アイツ絶対このままだとぶっ倒れるぞ。 アイツ自分とナギとの運動レベルが同じだって言ってるけど登校途中に途中休憩挟んでる時点でナギより体力ないから」

「え、そうなの?」

「ま、所詮は自己申告ですよね」

ハヤテもうんうん、と頷いていたその時だった。

「ち、近道だ……」

一番後ろで突っ立っていた東宮が震え声で呟いた。そして。

「こんな山道登ってられるか!! 僕は近道をゆく!!」

意を決した東宮は指定されていた山道から大きく外れて木々の中へと駆け込んでいく。明らかに班行動を乱す動きだ。

「お、おい! 今のセリフはどう考えてもフラグだろ!!」

「あ、ああ! まるで某探偵漫画で殺人事件が起きたあと『こんな危険なところに一緒にいられるか! 俺は自分の部屋で寝る!』って言うくらいのフラグだあ!!」

「そんなこと言ってる場合ですか!! 早く追いかけないと!!」

とハヤテが行っている間に東宮の姿は見えなくなっていた。いくら高尾山と言っても山は山だ。どこかには崖みたいに足を踏み外すようなところもあるだろう。闇雲に突っ込んでいったら危険だ。

「いかん! ハヤテ、これでは班行動が乱れる! 早く連れ戻すのだ!

私はここで休んでいるから!」

「わ、分かりましたお嬢様!!」

「おい、待て! 俺も行くぞ!!」

「俺も!」

「ちよ、ちよっと! 皆勝手に動きすぎ!」

虎徹に続いて木原も飛び出していくのを泉が状況が変わっていくのを眺めている中、テルだけが行くことを渋っているのが目に入った。さつきから頭を掻いている仕草を見せている。

……心配なのかな? 舞夜ちゃんのこと。

黒羽の諸事情はそれなりにテル達から聞いていた。体が弱くて、結構な頻度で倒れているのを知っているのだ。その黒羽の面倒などを任されているのはテルだ。だからだろうか、行きたくても行くことができない状況にもどかしさを感じているのは。

・・・テル夫くんだけに苦勞かけさせる訳にはいかないかな？
いつも誰かに助けられてる自分だからこそ言える。　こういう時は誰かの役に立ちたいのだと。　そう思い、テルの肩に泉は手を置いた。

「舞夜ちゃんのことなら私たちが見てるから。　任せてよ！　でもあっちに行ったら次の展開が読める状態だけどそれでもいいんならね」

「・・・だけだよ」

「どうした、少年」

と踏ん切りがつかないテルのところへひと組の男女の姿があった。後ろの方から現れたのは三年の奈津美　唯子と乙葉　千里だ。

「アンタ・・・それにバカ王子。　なんでこんな所に」

テルの問いには千里が答えた。

「なに、山を制覇する男は将来世界を制すると聞いたものでな。　こうして王である俺は単独で歩いていたわけだが・・・」

「安心しろ。　コイツは迷子だ」

「貴様ア！　違うと言っているだろうが!!」

拳を握って叫ぶ千里をよそにテルが唯子に聞いた。

「そうなのか？」

「ああ、いつも通りマイペースで歩いていたら見事このザマらしくてな。　私はこの可哀想な男を少しでも居心地のいい君たちの班に入れてあげようと自分の班を抜けて来た訳だが・・・ま、コイツはそれ以外でも自分のグループでハブられてるから無理もないか」

「俺はハブられてはいない!!適当なことを言うなア!!」

今度は顔を真っ赤にして言い張っていた。班行動が苦手なこの男に関して唯子の言うことが真実なのは確かだろう。　上級生が来て急に数が増えたためかそれを見て泉が言う。

「テル君、上級生にここは任せて一緒に追いかけてった方がいいんじゃない？」

泉に言われ、テルは腕を組む。

・・・確かに、バカ王子はともかく、この唯子先輩ならちゃんと引率を任せても大丈夫だろうけど。

「泉、俺はここを動かない。俺はマリアさんからちゃんと言わんと黒羽の面倒を見ろって言われてんだよ。ここで仕事放棄しようもんなら俺は間違いなく執事失格だ」

「素直に心配だからって言えばいいのにな・・・」

と唯子は聞こえないように呟いた。となりではかろうじて聞こえていた千里がわざとらしく鼻を鳴らした。

「なんだバカ王子。妬いているのか？ お前もやっぱこっちだったか、やっぱホモと友情って紙一重だよな」

「俺は断じてホモではない！ それといつから俺とこいつに友情なんて出来た!!」

「そうだそうだ!! こんなやつと友情作るくらいなら二週間の命しかないセミとひと夏の友情を作るわ!!」

二人が鬼気迫る表情でにらみ合う。片方が動くものなら今すぐにも喧嘩が起こりそうな状態だった。

「あー、ちよつといいかテル」

その二人に水を差すようにナギが手をあげた。なんだと問う前にナギが口を開いた。 なんだと問う前

「黒羽のことは・・・すまんが手遅れだ」

え？とその場にいた全員が目を点にしてつぶやいていた。テルが慌てて辺りを見渡すと目に見えるだけでも泉、ナギ、唯子、千里と明らかに一人足りない。

「アイツも生ける伝説のフラグマスターだったか・・・」

「マジかよオオオオオオオ!!」

テルの絶望に近い叫びが高尾山一帯に響いた。

○

「なんと。あの黒羽嬢が行方不明に・・・」

「そうなんですよ唯子先輩。それでテル君もさつきから結構アレな状態なんですよね」

泉が言う先には頭を抱えてうずくまっている姿があった。

「ナンテコツタ・・・コレデナニカアツタラマリアサンニコロサレル・・・」

呪文のようにカタコトをつぶやくテルは目の焦点があっていない。完全に我を見失っている。

「重症のようだな。 さて、こんな事をしているよりも彼女を探すために何か考えた方が良くはないのだろうか」

腕を組んでいる唯子に泉が苦笑いで答えた。

「うーんと、そうなんですけど。 ここで私たちまで探しに行ったらそれでこそ次の展開は読めるフラグですし・・・なんとかしたいんですけど」

「アレ？ 瀬川さんたちじゃない。 どうしたのこんなところで」

策浮かばず状態の一向に声がかけられる。 その声をかけてきた方を向くとそこには担任の雪路の姿があった。 泉はこれまでの事情を説明することにしたのであった。

○

「うーん。 ややこしい事になってきたわね・・・」

「というど？」

テルが言うと雪路は頭を掻きながら答えた。

「迷子の連絡はあなたたちだけじゃないのよ。 同じクラスの伊澄さんとかも迷子らしいのよ。 まったく高尾山くらいで何迷子になるんだか・・・山舐めてるからこうなるのよ」

一番舐めてるのはお前だけだな。 と雪路以外の人間が突っ込んだのは言うまでもない。

「でもまあ彼らなら迷子になって何があっても・・・」

「先生」

「どうしたの唯子さん、というか三年生のあなたがなんでこんな所にいるの？」

「それはさておいて、このままでは先生の立場がまた危うくなるかと・・・例えば、今度は副担任降格どころじゃなくて責任問われて免職とか」

「すぐに探しに行かなくちゃ!!」

切り替え速ッ。 驚愕の表情の一同とは打って変わって熱意に満ちあふれた教師の顔になっている雪路がそこにいた。

「ここは奥の手を使うしかないわね・・・」

と、雪路は立ち止まったかと思うと遠くの空に大声を放った。

「ヒナの恥ずかしい過去その1——!! あれはヒナが10歳の時——」

そこから先のセリフが語られる事はなかった。 何故なら雪路が台詞を言い終わる前に山を下るように猛ダッシュでこちらで向かってきたヒナギクが雪路の頭にゴールデンパンチを食らわせたからだった。

「やまびこに乗せて何言おうとしたのかしらお姉ちゃん」

「まさかやまびこよりも早いとはねヒナ」

完璧な身体能力を持つ生徒会長のスペックはやはり計り知れない。

「え? 綾崎くんたちが遭難?」

「そうなんですよヒナ」

「そうなんです」

「お前ら緊張感ねえな。 冗談抜きで、マジで」

こちらとら内心は人生かかるほどにプレッシャーを感じてるというのにこいつらと来たら。 と能気な理沙と美希に苛立つテルだったがそうやって苛立っていて状況が変わるわけがない。

むしろ、こいつらのペースがある御陰で変に慌てたりしないのだ。

ほんの少しだけ感謝はしている。

「じゃあ『私たち』は迷子になったみんなを探してくるからヒナ、唯子さん、この子達の面倒は頼んだわよ!」

「え?」

「なんで俺ら?」

雪路の両の手に掴まれていたのはきよとんとした顔のテルと泉だった。 雪路はお構いなく二人の生徒の重さを気にすることなく力づくで茂みの中へと進んでいく。

「例えこの先が複数のフラグに満ち溢れていようとも・・・私は生徒を

守る!! 決して邪な考えなどない!!」

「絶対あるだろ! 生徒よりも確実に自分の立場と給料のこと考えるだろ!!」

「うわーん! ユキちゃん引つ張らないでー!!」

やがて三人の姿が茂みの中に完全に消えるとそれを見送ったヒナギクは唯子と目を合わせた。

「どうします?」

「どうもするものにも・・・先生の言うとおりにするしかないんじゃないかな? これ以上メンバーが欠けるのは流石に避けたいからな」

確かに。と唯子の言う正論にヒナギクは小さく頷いた。今ここにいる集団だけでもいろいろなグルーヴのメンバー集まっている。

美希や理沙、千桜や千里も合わせると七人だ。

自分も行こうかと思ったがヒナギクは直感的に、流れ的に次は自分が迷子になる気がしたので悟り以降とはしなかった。

今では正しい判断だ。と思っていると山道の看板を見ていた美希と理沙その看板の文字を読み上げて言った。

「終わったな・・・」

「ここ、熊出るらしいな」

『熊出没注意!!』と赤い字で書かれた看板を見てヒナギクは、少しだけ行かなかったのを後悔したのであった。何があっても姉とともに危険な事態に遭遇しても自分なら対処できるからだ。

そしてやっぱり。

「ミイラ取りがミイラになるって言葉知ってるかしら?」

「見事にフラグを回収したなオイ」

「(っ)ど(っ)ー?」

ものの数分、救助隊は迷子になってしまったのでした。

第100話〜100話記念なんてなかったんや!!〜

『もし五十歳まで生きて山を登り続けることができるのなら、俺は下界での人生がどんなに不幸であってもいいよ』 〓 奥山章

第100話〜100話記念なんてなかったんや!!〜

『先日、某都内で巨大なアナコンダが逃げ出すという事件がありました。このアナコンダを飼育していた男性が実は巨大グマも飼育していたことと、そのクマが逃げ出していたという事件が分かりました。

このクマはとても凶暴でまだ発見は———』

お昼下がり、三千院家邸のソファアールにて座りテレビを見ていたマリアはこれほどまでに物騒と言えるだろうかというニュースを見ていた。

「まあ怖いですねタマ、シラヌイ」

「ニヤ?」

「にゃ〜ん」

小さい黒猫の疑問とも言える鳴き声に続きその黒猫に背を乗られている白い規格外を超越した猫のような物体はあくびするように答えた。マリアは小さく笑うトリモコンを手に取り、テレビの電源を落とす。

「ま、逃げ出したクマが偶然高尾山とかに逃げ込んで偶然ばったり出会ったりしてなぜか襲われるなんて運の悪いことに訊かないですよね〜」

そう言っつてマリアは仕事へと戻って行くのであった。

○

「困ったなあ・・・」

「困りましたねえ・・・」

ほの暗い洞窟の中でハヤテたちは悩んでいた。

「あのさあ、なんでこんなことになってるのさ？」

木原が突如として突き出されたこの状況に疑問を感じずには居られない。そう、目の前の。

「シャ———!!」

洞窟の入口にてこちらを威嚇している巨大なクマの存在にだ。

「いや、俺に言われてもなあ」

「そうだよ!! なんか訳のわからないうちにお前ら三人が来て、そこからいきなりギャグマンガのように巨大グマが現れたからこんな小さな洞窟に逃げ込んだんじゃないか!!」

「誰のせいでこうなったと思ってる」

「い、いてえーよ! しかも硬ッ、お前のチョップなんか思ってたのよりめっちゃ痛いんだけど!!」

虎徹に続いて東宮が泣きそうな声をあげた。その東を木原がチョップで軽く頭を叩く。義手による左手のチョップは少しばかり硬い腕により痛みが強い。

「ま、そんなことより・・・だ。これからどうするよ、クマはあの馬鹿デカイ図体のせいでこの小さい穴には入ってこれない。んで、この洞窟は特に広くもなく、奥に出口があるわけでもない・・・」

虎徹の言うとおりで、クマはその巨体ゆえに腕だけをこちらに伸ばしているだけであった。幸い、こちらに届くまでの奥行のなさではないのでで下手に動かなければその手にかかることはないだろう。

しかし、同時に出口もないので逃げ場のない状況だということもわかってる。木原は頭を抱えた。

・・・アイツなら、黒羽なら。こんな壁でもドリルでぶち壊してくれるんだろうけどなあ。

と、壁を突き破って助けに来る黒羽を想像してみたが残念なことに、彼女の能力である『黒曜』はある日を堺にまったく使えなくなってしまう。というより、当の黒羽は記憶喪失により自分がそんな

力を使えることも忘れてしまっている。今ではただの女の子なのだ。

「それよりも綾崎、お前のクマに襲われた時の怪我は大丈夫か？」

「一応、応急処置はしたんで大丈夫かと……ただ、血とかが流れちゃって結構辛いです。いつものように思いつきり動けません」

虎徹の問いに、ハヤテは頭に巻かれた包帯をさすった。クマと最初に遭遇したとき、いの一番に狙われた東宮をかばってハヤテがその時に負った傷だ。虎徹と竜児が協力して逃げていたが、追い詰められてこの洞窟に逃げ込んだのだ。

「そうか……だったら無理に動かない方がいいかもな。いつでも俺が包帯変えてやるよ。ほら、もうちが滲んでるじゃないか。脱ぐうじゃないか、ホラ、服も」

「なんで服まで脱がなきゃならないんですか」

言い寄る虎徹にハヤテは寒気を感じた。虎徹は怪しい笑みを浮かべている。

「ふふ、この傷ついた綾崎なら！俺は普段の力でも十分に征服できるぞ！この密閉空間で一生夫婦生活をしてもいいゾ綾崎イ——！！」

ルパンダイブよろしく、飛び上がった虎鉄はその直後、顔面に強烈な衝撃を覚えた。木原が右回し蹴りが決まり、虎鉄は奥の方まで蹴り飛ばされる。

「まったく、洞窟のなかでなにやってんだか。やっぱりお前らホモじゃないか」

「だからホモじゃないですから!!」

少年の悩みは未だに解決することはない。

○

「くそう……この山登りが終わったらこの山を平野にしてやる。絶対だ」

上へと伸びている山道をひたすら歩いているナギは汗を流しながらそう呟いていた。

「まったくだ。我々インドアガールズにこんなレクリエーションという名の拷問を強いるとは・・・」

「うう・・・一体この山登りに何があるっていうだ」

同じく今はかけている生徒会三人組の内、美希と理沙もナギと同意見のようだ。常に引きこもったり、楽なことばかりで体力をつけるようなアクティブな事柄に縁のない彼女たちにとってはそうかもしれない。

だが、その疲れきった三人とは関係なしにヒナギクは言うのだ。

「もう、山登りっていうのは沢山のあふれる自然に心洗われたり、草木や花、川の流れに耳をすませたりして心を豊かにするものでしょ？」
「なんだその悟りを開いたような発言は!! お前は仙人になったつもりかあ!!」

「そうだよ(便乗)。そんなに山登りしたいんならヒナたちは先に行けばいいじゃないか!!」

「あつそ。じゃあ貴方たちが遭難しても搜索願は出さないようお願いしておくわ」

「スンマセン、マジで勘弁してください」

しれっとしたヒナギクの言葉に理沙と美希は土下座で態度を改めた。

「ま、これを機にもう少しスポーツとかにも興味をもってみてはどうかかなナギ君」

「奈津美先輩。私はそんな出来た人間じゃない。そんな簡単に実行できるものなら人間は地球に絶望してコロニーなんて落としたりなんかしない」

笑みを浮かべた唯子に対してナギは目を細めながら返した。その光景を見ていた千里は鼻を鳴らす。

「まったくもって貧弱貧弱ウ！ そんな事で俺に任せようとは片腹痛いわー!」

「筋肉バカに言われるともの凄いムカつくなー。ていうかお前自分の班に戻れよ」

ナギの言葉に突然と千里が押し黙った。不思議そうにナギが様

子を伺っているとそれを唯子がクスクスと笑いながら答える。

「ナギ君、少し事情を汲み取ってくれないか。このアホ王子は自分の班に居場所がないのだ」

「う、うるさい！ 余計なこと言うな奈津美！」

顔を羞恥で真っ赤にした千里を無視して唯子はまだ続ける。

「ふっふーん。ではこれはどういうことだろうか、お前の同じ班である直江くんはこの高尾山のパンフを直接渡せばいいのにわざわざ私に渡してくれと頼んだぞ。まだあるな、お前が先頭を歩いている時に同じ班の彼らはお前との距離を最低でも7・8mくらいは空けて歩いていたらな・・・後は——」

「うおおおおお!! やめろおおおお!!」

頭を抱えた千里を絶叫が山で文字通り木霊した。唯子はその様子を見てけらけらと笑うのであった。相変わらず千里を弄ることに関してはお手の物である。

○

・・・しかしまあ、新学期早々のクラスで綾崎くんたちと一緒にクラスになったからどうなるかと思っただが。

白皇学院生徒会書記である春風千桜は心の中で安堵のため息をついていた。理由は自分のやっているバイトの職業柄のことである。

今年になってから始めた咲夜のメイドのバイト。それから数ヶ月なんの音沙汰もなく業務に励めていたのだが、新学期になり同じクラスでハヤテやテル、ヒナギクたちとも会う機会が増えてきた。自分の正体がバレそうにならないように気を張っていたのだが周りの雰囲気も相まってかバレることもなかった。

・・・ただ単に私の考えすぎだったか。しよせん、お金持ちの天才少女と私では住む世界が違うわけだ。きつとクラスが変われば顔も名前も思い出せない存在になるんだろうな。

この人と私のあいだには何も。

隣で不機嫌そうに歩くナギを千桜は自分の自意識過剰さを心から

疎ましく思う。それを踏まえて自分はどこかで誰かとのつながりを望んでいたのではないかと。

「くっそく、ヒナギクのやつめ……まったく汗をかいていない。あれだけ山を登っているのに」

ふと、先頭を元気に歩くヒナギクに対してナギが呟いた。確かにペースもあまり落ちることなくヒナギクは登り続けていた。所詮一キロもない高尾山だからヒナギクにとってはさほど脅威に値しないのだろうか。

そして千桜はそんな生徒会長に敬意を評していつもの癖が出てしまうのだ。

「まったく、『連邦のモバイルスーツは化け物かー』って感じですよね」「へ？」

一瞬、こちらの呟きにナギが表情を固まらせてからこちらの顔を見る。慌てて自分の犯した失態に気づいた千桜はナギにこちらの顔を見られる前にナギの視線から顔を背ける。

「じーっ……」

「……え、えーっと。アウト？ セーフ？ アウアウ？ セフセフ？」

冷静に装っていたが千桜の頭の中は激しく混乱していた。ここですいつもの通りに当たり障りのない台詞を言えば良かったが、つい癖で人気アニメの台詞をあててしまった。

「あ、あの……」

「あー！ 見て見て！ 野生の狸だ！」

遠くで理沙が声をあげる。そこにいたのは小さな狸だった。

「うおー！ 本物の狸だ！ ほんぽーほんぽーだ！」

「あらやだかわいい！」

美希もヒナギクもナギも突如現れた自然のマスコットに目を奪われている。千桜は思った。危機はさったのだと。

「ふー……」

『助かった』なんて思っているのかな？ 春風くん」

背後からの声に千桜は身を震わせた。 そうだ。 一番油断してはいけなかった。 ヒナギクも動物に夢中になっている中、この人物だけは、奈津美 唯子だけはこちらの異変に気づいていたのだ。

多分先程のセリフから自分の隠していることはもうバレてしまっているだろう。 千桜は開き直って聞いた。

「・・・結構鋭いんですね。もしかして昔のアニメとかにも興味があつたりするんですか唯子さん」

「はは、なに。 私もたしなむ程度にだがな。 ま、それよりも君はなかなか隙だらけで面白いな」

クスリと笑った唯子は続けて言い放った。

「最近のガ○ダムは戦いの状況に応じて最適な武器を勝手に作り出してくれるようだな。 あれはどうなんだ？」

「AGEはそうですね、三部作なんで全部通して見てみないと評価がわからないっていうか・・・でも見ごたえのあるヒロインがユリンくらいしかないというか・・・って、何誘導してるんですか!!」

「はっはっは！ やっぱり君は隙だらけだぞ・・・」

千桜は菌を食いしばった。 この唯子にはどうやっても勝てる気がしない。 この人の前では嘘をつくことは難しい。 この感覚はどこか似ている。

「君はもう少し人生楽しみながらやっていったほうがいいぞ。 簡単に言えば、もっと自分をオープンにしてみたらどうだ・・・例えば、誰にも知られていない笑顔振りまくメイドの姿とか・・・」

・・・あー、わかった。 この人、愛歌さんに似ているんだ。

口元で浮かべた黒い笑いが、自身の同じクラスの女子に激しく似ていた。 そしてこういった類の内容は絶対に忘れない。 忘れないようにちゃんとメモしたりするのだ。

・・・くっ！ そのネタを使って一体どうしようって言うんだ！まさかそれで私にエロイことするつもりなのか！ エロ同人みたいに！

気が動転していてまともな思考ができていないのは分かっている。 だがこの次の唯子の判断で彼女の、春風 千桜の学校生活は天から

地獄へと変わってしまうほどの影響力を持っていた。

喉の唾を飲み込んで唯子の言葉を待つ。すると、唯子はこちらの身構えた姿勢を見て、また小さく笑った。

「フッフ・・・安心するといい、この話を他人に口外するつもりはないよ。私がそんなゲスな事をするように見えたのかな？」

・・・思いつきやりやうな雰囲気出してみましたよ。

心の中で突っ込んでみて、千桜は様子を伺う。だが、内心で他人にバラすようなことはしないらしいのでホットはしていた。まだ油断はできないのだが。

「ふむ。 そうだな、君も彼氏とか作って見たらどうだ？」

「な！ なんでもいいきなりそんな話題になるんですか！」

「学生なら花だろ。 彼氏とかなら自分の秘密とかも隠す必要はないだろうからな。 君には少なくとも一人二人は理解者は必要だ」

こちらの反応を楽しむように言葉を紡ぐ唯子は続けて言う。

「それに君はその話で結構ストレスを溜め込んでると聞いたのでな？」

先輩ながらアドバイスをさせてもらったというわけだが・・・

「ちなみに・・・その情報はもしかして」

「もちろん、愛歌くんから聞いたわけだが」

・・・やっぱりあの人にバラすんじゃないか！

心の中で千桜は悲嘆にくれる。 いつしかの咲夜の誕生パーティーだったか、メイドとして付き添いできていたその場に同じクラスの愛歌がその場にいたわけだが、メイド姿を一瞬で看破されてしまい正体がバレてしまったのがある意味悲劇の始まりだ。

「えーっと、ちなみに唯子さんは千里さんとは友達じゃ・・・」

「ん？ 何を言うかと思ったら当然・・・」

唯子は満面の笑で続けていった。

「友達なわけがないだろう」

「ですよー」

当然と言ったら当然の答えに千桜も力なく笑った。

「私がアイツに声をかけているのは皆が私に押し付けるからだ。 そして奴を止められるのも私しか居ないのだ。 使命感とかそういういた

ものも沸かない。そして挙げ句の果てにはアイツが年下と触れ合わせて自分の現実と向き合って泣き崩れてくれるのを見てみたいとも思っている・・・こんな奴が友達と呼べるのかな？」

「友達よりも悪魔ですよ貴方は」

高らかに言い放つ唯子に千桜は遂に口に出して突っ込んだ。

○

熊に襲われている主人公や、順調に登山を続けているナギ達とは別の場所で一人の少女は歩いていた。

アウトドア装備に動きやすいように髪を縛ってポニーテールにしたその少女は疲れを浮かべた表情で空を見上げる

「はてさて……………どうしたものでしょうか」

少女、黒羽 舞夜は迷子になっていた。

……………いつの間にかテル様達とはぐれてしまった。

周りを見ても他の登山者も見当たらない。今まさに自分は誰にも手助けを求められない状態にある。

……………携帯電話でもあれば連絡を入れる事が出来るのですが。マリアさんの言う通りに素直に買っていれば。

一般に学生達が持っている携帯電話を持っていない事の不便さを黒羽は嘆いた。

マリアから早く買うように言われていたが、携帯のパンフレットを見た時にあまりの多さに決める事が出来なかったのだ。

……………天気が崩れる事はなさそうですが、こういった状況はあまり

動く事をしてはいけない気がします。

脇道にそれて一本の木を見つけると側に荷物を置き、地面へと腰を下ろす。

疲れていたなのでこの小休憩は有難い。

・・・砂漠を渡る覚悟で水を保存してた筈が、もう無いとは。取り出したペットボトルに水が無いのを見て、バックの中に入ろう。ゴミをそこらに捨てるような精神は持ち合わせていない。

・・・あ。

ふと動きが止まる。理由はバッグの中にあつたもう一本のペットボトルだ。中はまだある。キャップも切られていない。

・・・入れた覚えのない。誰かが？

歩いている途中に誰かにいれられたのだと推測する。

・・・気を利かせて入れそうなのはマリアさんか、ハヤテ様か。もしくは……。

一瞬だけテルを浮かべたがその可能性は薄い、と黒羽は考える。

・・・だってあの人は。

「そこで、何をしているんですか」

手元のペットボトルに視線を向けていた時、冷ややかな声が聞こえた。その声を聞いた時に、何故か体の筋肉が一瞬だけ固まるのを感じる。恐怖を少しだけ思い出させるようなこの感覚はなんだろうか。

威圧感のある瞳を向けていた少女、鷺ノ宮 伊澄が目の前に現れ

た。

第101話 く熊に死んだふりは効かないく

『山は歩かれているか』 冠松次郎

「鷺ノ宮さん……」

黒羽は目の前の少女は出会うのは二回目だ。

……最初は確か、土手の道で。

テルに背負われていた時に出会ったのを思い出したが、あの時の自分は途中で気を失ってしまったのだ。

何故気を失っていたのかは覚えていない。あの後には目が覚めたら三千院家にいたし、テルに聞いても疲れてたから、と聞かされた。

だから黒羽が伊澄と出会うのは二回目の筈なのだが。

「どうしたんですか?」

「貴方と会うのは二回目くらいになりますが、私はそれ以上に会ってる気がしてならないのですが……」

「記憶にある事が事実では? 貴女が二回しか私に会ったことしか記憶に無いのなら、その通りなのでしょう」

と、キツイ口調で話を一方的に切られてしまった。先ほど感じた違和感。二回程度会ったくらいではない。それはまるで。

……まるでもつと前にも会っているような。

そんな感覚。 実際 to そんな記憶などは無い。 今頭で思い出せ

る記憶は殆ど無いのだ。この人物をあまり知らなくて当然だ。と、黒羽は心で自分に言い聞かせる。

そして、伊澄が不意に口を開いた。

「屋敷での生活はどうです？ 慣れましたか？」

「そうですね。お仕事の方はまだまだですが、前ほど困らないほどに生活できるようになりました」

「そうですか・・・」

「・・・」

「・・・」

伊澄の言葉で二人に間が生まれた。表情は変わりなく、それでいて何を考えているかが分からない。

そしてこの間で黒羽は一つの疑問を得た。

「・・・何故か私を睨んでるように感じますが、それは気のせいでしょうか」

「気のせいですよ・・・それよりまた質問になりますが、今の屋敷での生活は楽しいですか？」

スッと笑みを向けた問いかけに黒羽は手に持っているペットボトルに視線を移した。

「楽しい・・・という感覚が、私にはよく分かりません・・・高揚するとか、気持ちが高ぶるとか。屋敷に来て、私でも分かった事が一つだけあります」

視線をそのままにして黒羽は続けた。

「私は皆さんのような『感情』と言う物が無いのではないかと。テル様やハヤテ様達の騒ぎなどをいつも見ている筈なのに、『うるさい』とも『やかましい』とも、そして『面白い』と感ずることがないのです」
感情なしの人形のように。と黒羽は自分で思う。実は自分は人形なのではないのかと、寝ている間は何も夢を見ない。朝が来れば起き、働き、学校へ行き、授業を受け、帰る。自分に関することが何も分からないまま一日が終わり、また朝が来る。そんな機械的な日々が続いている。

「こんな私は空虚な人間でしょうか」

「こんな私は空虚な人間でしょうか」

目の前の少女の言葉に、伊澄は混乱していた。

・・・本当にこの人は私の知っている危害を加える危険な敵ではないの？

かつて、仮りにも自分とテルを助けた敵の発言とは思えないような弱々しさ。脆さ。普通の間人が持つていそうな人間としての弱い部分をこの少女は見せている。

・・・だけでも、私は認める事をしてはいけない。この人の事を。もしこれでテルの言うことに従ってしまったら、テルがもしこの少女にやられてしまった時に自分までもがやられてしまう。冷静に確実に対処できるように自分が監視を続けてなくてはいけない。そのため認めるということをしてはいけない。

・・・違う。そんな理由じゃない。そんな立派な理由ではない。以前、テルとこの少女が一緒にいるという図式で自分は怒りを覚えた。それは今も変わらない。理由は簡単で、自分がこの少女の事を認めることはテルと一緒にいるという事を認めてしまうということだ。

テルがいつか自分から遠いところへ離れてしまうのではないか、心が離れてしまうのではないか、この少女に取られてしまうのではないか。

「私からは何も言えませんね。ですが、あえて言わせてもらおうなら自分で空虚だと思っている人は一生空虚な人間のままだと思います」
「では、鷺ノ宮さんがそう仰るのなら私は空虚な人間なのでしょうか。ええ、そうなのでしょね」

・・・この人の考えがまるで分からない。分かりたくもありません

んが。

「・・・私はこれで失礼させていただきます。　あまりテル様には迷惑を掛けすぎないように」

「その事で、聞きたいことがあります」

「なんででしょうか？」

立ち去ろうとする伊澄を止めるように黒羽は聞く。　黒羽が伊澄に聞く、テルのこと。

「私はあの人に、色々と迷惑をかけているのかもしれない。　仕事を始めた頃はよく貧血になって倒れたのを看病してくれたり、嫌な事でありながらも私とわざわざ登下校してくれています。　私は、テル様に嫌われているのでしょうか」

「・・・」

数秒ほど、伊澄の体は硬直した。　そして胸の奥で怒りのような感情がこみ上げてくるのを感じて、直ぐに黒羽から背を向けた。

・・・こ、この人は、常にテル様とそんな良い思いを、しかも、私と同じ呼び方。

聞きたくはなかった。　自分が知らない彼女が知っているテルの話など。　気付けば、またあの時と同じことを考えている。　土手で出会った頃のどす黒い感情に支配された時と同じ。

「それぐらい、自分で聞いてみては？　テル様なら、正直に答えてくれると思いますよ？」

背を向けたままでの返答をして、伊澄はそのままその場を去る。　少し足の歩が速い気がするがそんな事はどうでもよかった。　このままこの場に残っていたら自分が手を出してしまいそうだったからだ。

黒羽の姿が見えなくなったところで、歩むのをやめて伊澄は自分の右手を見た。　いつ握ったのか知らないが、その手にはいつもの妖怪退治のために使う札があったのだ。

・・・あのままあの場所にいたらどうなっていたか、感情の制御もできず、嫉妬にまみれた行動に出るところだったのでしょうか、私は・・・最低ですね。

息を落ち着かせて、俯いて、手にある札をしまう。　そして同時に

周りから数十枚ほどの同じ札が伊澄の元に集まった。

・・・妖気探知用の札を私たちを囲むように張り巡らせていたのに、全く反応が無かった。やはりあの人はシロ。でも、私の中で何か引つ掛かります。あれほどの力を持つ者がどうしてあそこまでの状態になったのか。

恐らく、原因は自分との最後の戦闘によるものだ。記憶喪失も、能力使用不可も受けたダメージが原因で失われてしまったのだろう。

・・・ですが、私の中での引つかかりは、そういう物ではない。

憑き物がなくなった？ 人格そのものが入れ替わったような。まさか、アレが本来の人格なのだとすれば。そして、黒曜とは。

一対一の話をしても謎は深まる結果に終わってしまった。前を向いて、伊澄は歩くのを再開する。

・・・調べてみる必要がありますね。場合によっては、あの人を消さなくてはならないかもしれませんが。

○

「そうだアこんな危険な状況を脱出するエクセレントな方法を今思いついたア！誰か囨になつてくれない？」

洞窟の中、木原の発言に三人の視線が突き刺さった。木原はこちらに向かつてきそうな三人を慌てて手で制す。

「いやいや、冗談だつて冗談。ブラックジョーク」

「こんな状況でとんでもないジョークを言い出しますね。木原さんからその身を差し出してみましようか」

「囨だど!? お前、それで綾崎に何かあったらどうするつもりだ！

いや、それなら俺も一緒に囨になればいいのか？ そうすれば綾崎が死んでも俺も一緒になつて死ねば熊のお腹の中で一緒だし！」

ハヤテと虎鉄が顛かみに血管を浮き出させている他所で東宮は下を向いてしやがみこんでいた。

「なんでお前らそんな余裕あるんだよ。普通ならもつと怖がるだろ。」

「いや、コイツら普通じゃないし」

変な組織に所属していた片腕義手のお前が言うか。と、ハヤテと虎鉄は同時に突っ込んだ。

「野々原、野々原」

「なあ、アイツの言ってる『野々原』って誰？」

「東宮さんの執事ですよ。白皇卒業しちゃって、今はイギリスに留学してるんです。いつも困ったときは野々原さん頼りでしたからね」

ハヤテの答えに木原は唸る。どうりでさつきから情けない声を上げてると思えば、この男はどうやらこういった厳しい状況に一人で立ち向かったことがないのだろう。だが野々原という男も東宮が成長することを信じて、イギリスに旅立ったのではないのだろうか。

・・・まあ、心配だったらわざわざ留学なんてしないよな。その野々原って人も、ただ甘くしてたわけじゃないんだよな。

執事なら留学を止めてその場に残るだろう。だがそれをしなかったのは自身の主の見たことのない強い姿を見せて欲しいからだ。

自分が帰ってきた時に。

「いつまでも野々原野々原って言ってるんじゃないよ。ここで泣いてたって意味がないだろう？」

「だって、だって！ 僕にはお前らのような身体能力持ってる訳じゃないんだぞー！」

東宮の予想通りの返しに木原はため息をついた。どうりでテルからも『ヘタレ宮』と呼ばれていることだけはある。

「そんなん知るか。それに別に身体能力つけなくたっていいんだから。ただビビらない度胸を身につけろって言いたいんだよ」

「じゃ、じゃあ僕は今すぐあの熊に向かって勝負挑んでくればいいのか！」

ノンノンノン、と木原が指を振って東宮に答えてみせる。

「お前、食われるの解ってて口あけてる恐竜の中突っ込んでいくのか？ 違うだろく？ 度胸つてのを身につけるにはデカイ山場を潜るのが一番だけど、その場の空気に呑まれない、逆にこの空気を支配してイヤる位の気概でいるってのも手だ」

「イメージ湧かないなあ」

「じゃあこうしよう」

と木原が両手を広げる。この空間を示すようにしているのだらう。

「ここでお前と、お前の好きな人が一緒にいる。目の前にはあの熊が、お前らを喰おうと必死に入っつてこようとするんだ」

「ぼ、僕と桂さんがツ!!」

・・・こいつ、さらつと自爆してるけど、まあいいか。

妄想で顔を赤くしてる東宮を無視して話を続ける。

「んで、隣で震える女がいるわけじゃん東宮くん。『怖いよ、どうしよう!』なんて震えてる女にお前が『大丈夫さ。落ち着いて、助けは必ず来るよ』的なこと言おうとさあ、どうよ」

「どうって・・・」

東宮は頭の中で空想世界を繰り広げた。

『東宮くん、どうしよう・・・私、怖い』

『はは、桂さん。大丈夫ですよ。僕がついてる、それに助けだって必ずくるよ。何があっても桂さんは僕が守るさ!』

『東宮くん・・・!』

『桂さん!』

頭の中での展開に目が蕩けてきている東宮を見て木原が首をかしげるが現実に戻ってきた東宮が目を輝かせて言った。

「最高じゃないか!」

「だろ?」

「まあまずヒナギクさんに限ってそんなことありえないかもしれませんけどねえ・・・」

「俺も同感だ。あの負けずきらいがそんな簡単に男の前で『こわい』とか言わなさそうだからな」

とハヤテと虎鉄も同意見だったがあの夢を見る瞳を見て察したのか。

「幻想を壊すような事はやめよう……」

「ええ、せめて夢の中だけでも……ヒーローに」

「だったら僕はビビらないで今からお前らの囿になるぜ！」

「いや、その理屈はおかしい」

東宮以外の三人が同時に息を合わせて言った。 どうしてそんな結論に至ったか真意を知りたいと木原が思っていると東宮が勝手に喋りだした。

「だってそういう度胸を身につけるにはデカイ山場をくぐり抜けるのが手っ取り早いんだろ？ 僕はすぐにでも桂さんと付き合いたいんだよ！」

……確かにそう言ったけど。 自ら死に行けとは言っていない。

と、既に東宮が熊の腕と洞窟の出口の合間を縫って勢い良く外に飛び出していった。

転がるように体を丸めて立ち上がって熊を睨むと堂々とした表情で言い放った。

「さあこの熊野郎！ 僕を追いかけてきなよ！ そのまま谷に沈めて……」

テンションが一気に下がっていくように東宮の口からセリフが続くことはなくなった。 彼は面と向かって殺意むき出しの獣の目を見たことがなかったのだ。

「……あ、ああ……！」

簡単に言えば足が竦んでしまったのである。

「畜生！ やっぱりあいつヘタレじゃねーか！」

「ああもう！ 誰のせいでもうなっと思ってるんですか!!」

三人が洞窟から一斉に飛び出していたが熊の動きは以外に早く、その巨大な腕を高く振り上げていた。 その爪は、目の前の獲物である東宮に向けて一直線。

「うわあああああああ！ 死ぬ———!!」

「そう言ってる奴に限ってなかなか死なねえのさ」

爪が東宮にかかるよりも早く、その場を駆け抜ける黒い物体があった。黒い物体は熊の爪に衝突し、クマは腕を引っ込める形で距離を取る。熊の横に突き刺さっていたのは一本の鉄パイプであった。さらに。

「人の生徒に手エ出すんじゃねえ獣がア!!」

怒鳴り声と共に現れた一人の女性はその熊の後頭部に不意打ちの蹴りを打ち込む。駆け抜けた重い衝撃はその巨軀を大きく揺らした。

「あ、あれは・・・テル!」

「それに先生も!!」

木原とハヤテの目の先には爪を弾いた時に投げた鉄パイプを拾うテルの姿と、ハイヒールからシューズへと履き替えた雪路の姿がそこにあつた。

「ハヤテ絡みになるとこんなトラブルにしか遭わねえよなあ。俺に安息の日々はないのか!」

「東宮くん! どこかに隠れて、隙あらば遠くまで逃げなさい! ここは私たちが」

と、雪路がファイティングポーズをとって熊と向き合う。東宮と違って、熊のプレッシャーに呑まれる事はない。

「なんとかするから・・・」

雪路とテルを加えた五人は熊を睨むように囲んでいた。そしてテルが遠くの木原にむけて鉄パイプを振ってみせる。

「おう竜児、あのヘタレ宮がいる手前で本気だせなかつたろ! 今なら本気出せるぞ!」

「そうだな。それじゃ久しぶりにやるとするかア・・・デカイ相手だけど始めようぜえ」

「ゲヘヘヘヘ・・・熊狩りじゃあ」

「なんかコイツらガチで熊に勝つつもりでいるぞ」

「でも不思議と負ける気はしないんですが・・・要は気合ですかね?」
「じゃあ、それくらいの気合に私たちもなるか!!」

虎鉄、ハヤテ、雪路もおかしなテンションに触れて乗せられたか不気味な笑いを浮かべて。

「熊狩りじゃあ・・・!!」

「??」

いつの間に熊は四方八方からどす黒い殺意に囲まれていた。

第102話く冬眠しない熊を穴持たずというく

「なあ?」

「ん?」

「熊の肉って美味しいのか? 普通の肉とは違ってどんな味がするんだ?」

目の前の大熊を見上げながら聞いてくる虎鉄にテルがうーんと唸ってから答えた。

「確か先生が言ってた話だとかかなりマズイって話だなア。 熊肉ってかなり生臭くて普通の犬が嗅いだらその臭いで食えないって言うってた」

「マタギと一緒に狩猟すると気に連れてる熊犬って最初に熊の肉を食うことから訓練はじめるらしぞ」

木原がうんちくを語り、随分と博識なようだと、ハヤテは口をへの字にする。自然に囲まれた環境で育った二人にとってはこういった知識は豊富なのだろうか。

「どーでもいいけどさあ、ぶっちゃけコイツに勝つ算段あるの木原くん?」

うんちくを聞いている一同に対して雪路が木原に聞くと、木原は自信有りと言った表情で腕を組む。

「先生、確かに熊ってのは全身が筋肉の塊で普通の人間が戦っても勝ち目なんてありません。 ボクサーがパンチで熊を殴っても絶対に勝てません。 銃を持ったりしていない限り、霊長類がコイツに勝つ方法はないでしょう」

けど、と木原は続けた。

「熊に急所があります。 それは眉間です」

「いや、ドヤ顔で決めてるところですけどソレ漫画の話じゃ・・・」

ハヤテが突っ込んでいるところで痺れを切らした熊が突如、腕を上げて襲ってきた。

「き、きたわよー!」

雪路が慌てながらも声を出して、全員がその場から飛び退く。 一

番先に狙われたのは木原だった。

爪が真つ直ぐ木原をめがけて伸びるが木原は数歩下がりその爪は先程まで木原がいた場所に突き刺さった。

今度は木原が下がったところから一気に地面を蹴り、下がっている熊の頭めがけて右手を振りかざした。

「ドラアッー！」

鋼鉄の義手による拳の一撃は熊の頭から鈍い音を発した。そのまま後方へととんぼ返りして距離を取る。

『ガウ・・・』

「き、効いてないんじゃない？」

熊は頭を摩ってなんともダメージを受けていない。ハヤテは希望が少し見えたのだが、一瞬で絶望へと変わる・・・だが。

テルが既に動いていた。

動くテルを見て、熊が再び爪をテルに向けて大きく振った。横殴りのように振られた腕はテルを横から引き裂こうとするがテルは宙へと飛び、爪のすれ違いざまにパイプを合わせて打ち込む。

『ガアウー！』

空を切った爪を再び構えて今度は斜めに腕を振り下ろした。テルは力の流れに逆らわず、少ししやがんで爪がテルの背を通り過ぎる瞬間に全身をバネのように捻り、爪にまた鉄パイプを打ち込んだ。

そして次の瞬間。

『ガアッ!?!』

熊が自分の身に起きた事に驚愕した。いつの間にか、熊の右手の爪が一本だけ折られていたのだから。

そしてテルはこの一瞬の隙を見逃さず、後ろから熊の背を駆け上がり飛び上がるとその巨大な頭に鉄パイプを振り下ろした。

「脳天ツ!!」

熊の眉間に鉄パイプが炸裂するとまたしても鈍い音。そしてその一撃で熊の巨軀がとうとう揺れたのだ。

「や、やるじゃ〜ん！ 二人とも凄いじゃない！ もうあんたらだけでやっちゃいなさいよ〜」

「いや、ダメです」

雪路の半笑いに木原が首を振ると一撃離脱したテルが戻ってきた。「やっぱデカさが問題だよなあ・・・急所で一番筋肉が薄いところを突いたけど、あそこの部分バツチリ筋肉で覆われてんだよね」

「スンマセン、デカいこと言っつて申し訳ありません。もう終わりです」

「いや、急にネガティブになられても困るんですけど!? 前回の良い雰囲気はどこいったんですか!?! 熊狩るんじゃないやなかったんですか!?!」

怒鳴るハヤテの問いにテルが頭を掻きながら答えた。

「やっぱり熊狩るのは犬の役目だよ。十万匹くらいの犬の軍団連れてくればコイツに勝てんじゃない? ハヤテ、連れてきてよ」

「そんな回転しながら突っ込んで熊の首をぶっ飛ばす犬、全国探してもいませんから!!」

「どうしよう、俺の鉄パイプも軽く曲がっちゃったし、どうしようかなあ?」

爪の攻撃を受け流していた鉄パイプが軽く曲がっていることに嘆いているテルを見てハヤテは頭を抱えた。だが、少しだけ頭を冷やして考えてみると一つ閃が走る。

「そうだ・・・効果は少しだけあったんだったら、四人で同時にあの額に打ち込めば・・・」

「けど、そんな隙簡単に作れなくね? 俺らだって躲して当てての戦法で精一杯なんだからさ・・・せめて動きが止まってくればなあ」

熊が鈍重な生物だと考えられているようだが実際は機敏な生き物だ。あの熊は巨大なだけ当てやすいのは確かだがそれでもスピードは段違い。テルや木原たちも慣れていなければ避けきれなかっただろう。

その時だ。

「おいー」

目の前の熊に悪戦苦闘している四人はその声を発した方へと振り返った。

「熊は動く物に気を取られるんじゃないか?」

巨大肉を抱えた東宮がそこには立っていた。

○

・・・こんな役、やだ！

東宮は己の置かれてある状況を激しくそう思う。　思えば不向きなアウトドア行事に参加した時点で今日の運勢は決まっていたのではないか。

何か仮病とかで休んでればこんな事にはならなかったのではないか。

いつもならフォローしてくれる野々原もいない。　行く理由はどこにもない。　だが来てしまったのはなぜか。

・・・野々原に認められるような男になりたい！

彼がいなくなった日に別れ際に言われたあの一言を思い出すとうしても今の自分が許せなかった。　彼にフォローを任せきりで逃げ出しているような自分が。

野々原がいない東宮は考えた。　また逃げ出してもいいのかと。

「東宮くん！　無茶ですよ！　それは勇気とかじゃないですから！　ただの蛮勇ですから！」

・・・綾崎だつて、俺の事をかばって怪我したのにまだ戦おうとしてる。

「ヘタレ宮、ハヤテの言う通りだ。　さっきまで腰が抜けてたお前に何ができる」

・・・木原、僕はもうビビってないぜ？　いつまでもカッコつかないこととしてられないさ・・・嘘、まだビビってます。

飛び入り参加したテルや雪路先生もあの巨大な物から僕を守ろうとしている。　いつまでも影に隠れてていいのか？　確かにこの役は嫌だ。　下手をすれば自分の命だつて危ない・・・だが。

「誰かがやらなきゃならないんだろ？」

そう不敵な笑みを作って言ってみたものの足はまだ震えてる。

無理してるのが丸分かりだ。　なにせ今まで逃げ続けてきたせいで逃げ腰が癖になつてしまっている。

・・・僕はこいつらを助けるんだ！

いつまでも守られることを野々原は絶対に望んではない。ならやることは一つだ。

「そおーらクマ公！ 僕について来い！」

テルたちの止めが入る前に自ら動く。足が震えてることをこれ以上悟られる訳にはいかない。

・・・案の定追つて来やがった。そんなに人の肉が欲しいのか？

昔野々原に聞いたことがある。人の肉を食べてしまったが最後、その熊は頻繁に人を襲うようになるのだと。

「だけどー！」

手に持っている巨大肉をチラつさせると、熊が視線を泳がせているのが分かった。どうやら腹が相当減っているせいかこの餌に美味く食いついてきそうである。

・・・僕が上手く谷のほうまで誘導して、谷底に投げた肉に反応してくれれば！

『ガアアアアア!!』

「のわあー！ー！ー！」

身を転がして迫っていた爪を東宮は躲していた。これは予測でもなんでもなく、声にビビってから体が回避運動に移っていたため、タイミングよく躲すことができたのだ。

「へタレ宮！ 無茶するなア！」

・・・五月蠅い、僕に指図するな。今、僕はやっているんだ。

強い男になるために。

足を動かして、土まみれになりながらも、目的地まで走る。そして遂に谷底が近づいてきた。

・・・やった、あと少しでッ！

その瞬間、東宮は自分の体が無意識のうちに浮いていたことに気づいた。数十センチほど地面から離れて体は数秒もせず地面へ落ち、転がる。

「・・・えっ？」

一瞬だけ頭が真っ白になって、振り返ると小さな石が。ああ、

引っ掛けたのか。 転んだのだ。

『グルルルル!!』

獲物を漸く追い詰めた熊の目の色が変わり、その巨大な牙をちらつかせた。

・・・絶対絶命？

まさに言葉の通りだ。 目的を達成できないままこのまま終わるのか。 目の前の熊が爪を振り上げた。

「東宮ア——ッ!!」

遠くでテルの叫びがゆっくりと聞こえるのを東宮は感じた。 足は動かない、ならば体を転がしてでもと試みることもなくただ地面から一センチも動けずにいた。

・・・野々原！ 助けて野々原！

まただ。 最終的にやっぱり自分はここでも野々原を頼ってしまおう。 絶対に来ないこの状況でもだ。

『私が手を引っ張っていては・・・坊ちゃんはいつまでも・・・』

残した彼の言葉が過る。 それと同時に、熊の爪が東宮に向かって振り下ろされた。

その時だった。

一発の銃声が響いたのは。

○

「なに?」

突如として鳴り響いた銃声をテルは聞いた。 東宮を襲おうとした熊の腕は止まっている。 よく見ると熊の肩から血がたれている。

・・・音が近い!

その音の出処が自分らの真後ろだったと感じたテルは即座に振り返った。 そこには一人の人がいた。

全身を黒のライダースーツを来てフルフェイスのヘルメットを装

着したバイクに跨る人物がいたのだ。

「え……誰？」

雪路が目を点にした。他の皆も突然の状況の変化についていけない。

だが。

「テルさん！」

「ああ！ 熊の動きが止まったッ！」

ハヤテの呼びかけに呼応するように、テル達が一斉に熊に走り出す。しかし、ここで動きを止めていた熊が背後に感じた殺気に振り返った。

だが、ここで引くわけには行かない。東宮が決死の覚悟で作り出したチャンスだ。他の三人も余裕はない。ここで決めねばと、不敵な笑みだが覚悟を決めている。

「いくぞー！」

木原が言い放ち五人が地を蹴り

「こんな状況だけでも！」

虎鉄が笑い五人が構えて

「ピンチはチャンス！」

雪路が拳を握って

「これ勝機ッ！」

ハヤテが何かを見切り

「一発デカイの喰らいやがれエエエ!!」

テルが叫ぶのと同時に、五人の渾身の一撃が熊の眉間に炸裂した。

『ゴルウウウウ!!』

鈍い音ともに熊の巨体が吹き飛び、地面へと叩きつけられる。そして同時に地面が割れる音。

「なっ！ 地盤がもろくなつてやがった!!」

「テルさん！ このままじゃ東宮くんがッ!!」

熊の近くにいた東宮は地盤の崩落に巻き込まれていた。このままでは命が助からない。

「うわああああああ!!」

東宮の体は宙に浮き、重力に従って真下へと落ちていくのを感じた。熊とのやり取りを回避したと思っただらこれだ。

・・・僕は、僕はまだ！

死にたくない。好きな人もできないで生涯を終えたくない。落ちていく中、東宮は手を伸ばす。

「・・・ッー」

伸ばした手を誰かが掴んだ。

・・・野々原？

その掴んだ手の主を東宮は確認する。

「東宮さん・・・大した、勇気でしたよ」

「まったく、でもお前、最高に輝いてたぜ」

ハヤテだった。そして、ハヤテだけではない。ハヤテの後ろにはテルが、テルの後ろには木原が、木原の後ろには雪路が体を掴んで人間ロープとなって東宮を支えていた。

・・・野々原、僕・・・ちよつとは強くはなれたかもしれない。

○

「た、助かった」

東宮を引き上げて一同が地面に尻餅をついた。

「なんで高尾山に来てまで命の危険に関わらなきゃならないのよ！しかもお金がもらえるわけでもないのに!!」

「なんつー教師だ」

テルのジト目が雪路に突き刺さったのが聞いたのか雪路が手を振った。

「ウソウソ。アンタら大事な生徒だからね、担任のアタシが簡単に生徒放り出せるわけじゃないの」

「珍しくまともな事を聞いた気がする」

「僕もです虎徹さん」

「アンタら、あたしをどんな目で見てたのよ！」

先程の緊張感がなくなり、難所を乗り越えて一同は和んでいたのだ

が、テルがさきほどのライダースーツの人物を思い出して辺りを見渡す。

すると、バイクに跨った男が今まさにエンジンを駆けていた。

「お、おい！ アンター！」

「……」

テルの声に反応して人物はテルの方を見た。顔はフルフェイスのため分からないが、体つきからして男だろう。

「礼を言いたいんだ！ ありがとな！」

何も喋らないことに不気味さを感じたがテルは礼を言う。ライダースーツの人物は顔を正面に向けるとアクセルを握り、バイクを走らた。

「お、おい！」

重い音ともにバイクはテルが駆け寄る前に去って行ってしまった。

テルはその後ろ姿が消えるまで視線を動かさなかった。

「な、なんだったんだアイツは？」

「さあ？ ライダースーツ着たマタギじゃないの？」

そんなマタギいるか。と心の中でテルは突っ込んだ。

「ともあれ、あの人物のおかげで東宮が助かったのは事実だ。感謝しなくちやな」

「でも誰だったんでしよう。フルフェイスヘルメットでしたし、なんでわざわざ顔を隠すようなことを？」

虎鉄の言葉にハヤテが考える。そもそもこんな山に、しかも熊の存在を察したように用意されたあの装備。ただものではないのは丸分かりだ。

「まあ謎ではあるが、そろそろ山頂に行こうぜ。俺たち、色々あったせいで結構時間ロスってるからなあ」

「そうですね。急ぎましよう」

テル促してハヤテが頷くと一同は山頂目指して進みだした。

「山だあああああ!!」

「頂上だあああああ!!」

「着いたあああああ!!」

一方その頃、ヒナギクたちと共に行動していたナギ達は山頂に到着していた。山頂から眺める景色から叫んでいるのは千里、花菱、そして理沙である。

「いやあ、何事もなく終わって良かったな千桜くん」

「体力ありますね唯子さん。私はもう疲れましたよ」

山頂で笑顔を崩さない唯子に対して千桜は肩で息をしていた。

他の生徒たちも次々と山頂に到着している。一、二年が集まるところもかなり狭くなるなど感じた。

「そりゃあ基礎体力作りはしてるからな・・・それよりも、テルくんたちはまだ到着していないようだが」

「そうですね。まあ雪路先生とかいれば問題ないと思いますけど・・・あ、来た」

と、千桜は歩いてくる木原たちを見て少々首をかしげてみせた。

何故かあちこちに怪我をしている人がいたり、ボロボロの人間がいたからだ。

「えーつと、最初に聞いてもいいか？　なんで綾崎くんは包帯巻いてるの？　あと東宮君がキミをを掴んで離さないのは？」

「えーつと、これには色々と深い事情というか・・・」

とほほ、とハヤテは頭に手をやり困った顔。そこに、ナギが駆け寄ってきた。

「おーい、ハヤテ！　なんだお前、無事——じゃなかったな」

ナギがハヤテの様子を一目見て、察した。恐らくこれはまたとんでもないトラブルに巻き込まれたのだろうと。

「まあ、ちよつと襲ったり、襲われたりですね・・・」

「ふーん・・・!!」

その時、ハヤテの袖を掴んで離さない東宮を見てナギに電撃走る。

なぜハヤテと東宮が二人でこんな状態になっているのか。しかも東宮の方を見ると少しだけ涙目だ。そしてハヤテの先程の言葉、これらを元にナギが連想させる腐のイメージはまさにこれしかない。「お、襲ったのかッ!? 襲われたのかッ!?」

「え?」

訳が分からない二人をよそに、顔を真っ赤にしたナギは慌てて二人の間に入って離れさせる。

「は、離れるのだッ そんなッ リアルでダメなのだッ 男同士で：：そんなッ!!」

「あー、なにやってんだか」

その光景を眺めていた木原はため息をつく。先ほどの熊との戦いとは違ってこの緩い雰囲気ギャップに安堵したのだろうか。

・・・あー、こんなじゃただ野郎と野蛮人とハードな山登りに来ただけだったよ。なんもなかった! せめて、せめて春風と一緒の班が・・・。

ほとぼしる青春を駆け抜ける一ページを妄想していた時だった。

「木原くん」

「あー、なになに。サイコガン持ちのプロフェッサー木原はここですよ・・・って春風エエエ!」

目の前に現れた千桜に対して木原は体を震わせて叫んだ。大声に対してか、千桜の方も引いてしまいうくらいに驚く。

「び、びっくりした・・・ どうしたんですか、その化物を見たようなりアクションは」

「あ、ああ。いやあ、さつき巨大熊と戦ってきたせいかどうかどうにもまだ気を張っちゃっててさ」

・・・うわ、俺キモ。なに言ってんの。

笑いながら言ってみる冗談にしては冗談で受けられる境界線をかなりオーバーしている気がして木原は内心青ざめた。きつと嘲笑した返事がくるのだと。

「えっ。もしかして眉間ひたすら狙って倒したパターン?」

・・・えつ。なんか食いついてきたよ。なんで？

急に目の色を変えてネタに食いついた千桜を見て木原は困惑。少しだけ様子を見ることに。

「ま、まあ4，5発殴って弱ったところを谷底に落としてきた」

「・・・熊の眉間って本当に弱点だったのか。やはり鷹村さんは間違ってたかった」

・・・急に自分の世界に入り込んだけど。どうするよ。

一人でブツブツと言い始めてる千桜に木原は思う。この今の雰囲気と普段の千桜の雰囲気はギャップが激しい。口調の変化もだ。

「あつ、そうだ」

唐突に千桜がポケットから取り出したものがあつた。小さな手帳だ。だがその生徒手帳は自分の顔写真が貼ってあつた。

「あ、それは！」

「この前落としましたね？ あんな仮面つけてきて証拠を残していくとは・・・結構ドジなんですか？」

・・・しまった。完璧な演出をしていたと思っていたのに、これじゃ全て台無しだ！

「でも、恩人に対して言う言葉ではないですね。改めて言います。

あの時は、どうも」

「あ、ああ」

こちらにあまり言わせたくないのか。流れるような手順で千桜は頭を下げた。困惑の度合いが大きくなるが、千桜はまたしても目の色を変える。

「ところで、やっぱり君はリアルグラップレーかな？」

「えっ？」

「百人組手とか、大猿相手に命懸けの死闘とか繰り広げてきたのか、君は」

「えっ？」

「実はゴキブリの動きを参考にした必殺技があるとか・・・ハッ!!」

と、気づいたように口を慌てて抑えて千桜はひと呼吸を奥。そしていつものような落ち着いた表情を取り戻して言った。

「ま、まあスポーツは男子の嗜みと聞いていますか。あ、ちなみにさつき
言っていた事は忘れてくださいいね？」

「あ、ああ。わかったよ、うん」

少々威圧じみた言葉に木原が頷く。とはいえ、思わぬ幸運に心の中
で神にこの瞬間を感謝している自分がいた。そして千桜はあるこ
とに気付いたか、辺りを見渡して木原に聞いた。

「えーっと、君の相棒がいないけどどこにいったんですか？」

「え？ ああ、テルのこと？ なんか途中で一言残して別行動してる」

「別行動？ なんでまた」

千桜の問いに木原は両手を組み、首を傾げ、テルがまだいるであろ
う方角を向いて答えた。

「んー、『俺の仕事しに行くわ』っていったな、そう言えば」

第103話 教えて欲しいこと

「高いところから落ちる人間は惨めだ。しかし、高いところまで登れない人間はもつと惨めだ」 〓 中嶋正宏

黒羽は自分の足取りが確実に重くなっていることに気づいた。

数十分ほど前だろうか、前へ運んでいる足が思うように動かなくなってきた。言わずともわかる・・・疲労だ。

・・・ペース配分は十分に配慮してきたはずですが。

やはりもともと体力が少なのが原因だろうか。思えば、体力なしの自分がここまで来れたことすらまず奇跡に近い。いつもなら山の半分も行かずにダウンしていたことだろう。

・・・いつの間にバッグの中に入っていたペットボトルとか、冷えピタのおかげでしょうね。

自分の首あたりに貼り付けている冷えピタがまだ冷たさを保っているのを確認しながら黒羽は上を見た。ここまでするのに時間がかかったが、頂上まではもう少しのはずだ。

・・・頂上についたら、何しようか。

そんな事を考えていた。最初に浮かんだこととはやはり山でヤッホーだが、自分はそんなことをする気力はここを歩いている時点で既がない。登り始めた時はやってみたいと思っていたが。

疲れてしまうとやる気が失せてしまうというのは自分がまだまだ心が弱いということだろうか。

・・・やはり色んな人に報告、でしょうか。　まずは誰に？　同じ班、たしか生徒会の皆とか、瀬川さん？

生徒会三人組は色々やらかすのが日常茶飯事だが、無事に山頂に辿り着けているだろうかと小さく気になっている黒羽だ。

だが彼女は知らないだろう。　瀬川が雪路に連れられて山頂を登るどころの事態では無くなっていることを。

・・・では、身内に報告していくしかありませんね。　ナギ様にはここまで来れたことを認めてもらわなくては。　一応勝負は特に条件を決めていないということ、イーブンということでしょうか。

そうして歩いているうちにふと、テルの事を考えて足を止めた。理由は少し前に休んでいた時に、自らが発想したことだ。

『自分はテルに嫌われているのではないか』

貧血などで倒れているうち、最初は仕方ないと考えていたのが最近になってテルに迷惑をかけているのではないかと思つたのだ。　学校に行くのにも一苦勞、体育の時間は見学になることが多い。

そんな時に保健室に誘導や教師との話をつけてくれる事をテルはいつもやっている。　たまにハヤテがやることもあるが、それはテルの比ではない。

黒羽はハヤテから聞いたことがある。　テルは結構面倒くさがり屋だと。　あの屋敷に来た時にハヤテが執事の仕事を完璧にこなしていたから、テルも完璧なものだと思つていたがそうでもなかった。　むしろマリアやナギの評価を聞くときひどい時がある。

だから今も自分の仕事を覚えるのでも手一杯なのだ。　そんな時に自分の面倒を任されたのだ。　あのテルの性格上、面倒くさくない訳がない。

自分は確実にテルの重みになっている。そして、そうなることを黒羽は良しとしない。

だから今回、宣言した。この山登りを成功させたらテルを自分のお守役から解放すると。もし成功させたらどれだけ喜ぶだろうか。両手をあげて奇声で山頂で叫ぶテルの姿が簡単に浮かんだ。

・・・直接聞いてみてもいいだろうか。

その休んでいるときに、伊澄から言われたことだ。聞いてみればいい、テルなら答えてくれる。確かに直接聞き出すというのは簡単だ。だが、その行為を自分で行うことに引け目を感じている。

何故だろうか。理由は分からない。だが、この山登りを終えてテルを解放すればそれで終わる。そうすれば聞く必要もないし、接点も減れば、少なくともこれ以上嫌われる事は無いだろう。

そんな事を考えてた時だった。

「おっ、まだこんなところで歩いてたのかよお前」

「・・・」

目の前にテルがやってきた。

○

「山頂まであと200もないくらいだな。どうだ調子は」

いきなり現れたテルに黒羽は言葉が出なかった。彼女を悩ませていた渦中の人物テルが目の前にいきなり現れて、すぐさま声を出せるわけが無い。だが、無言でいるということは印象が悪い。黒羽は何か、と搾り出すように声を出した。

「二応、大丈夫ではありませんが」

「お、そうか？　なんか汗も結構掻いてるからちやんと水飲めよ……つて、なんか最初もこんなやり取りしたな」

頭を掻いたテルに黒羽は言われて額の汗を拭った。　考え事をしていたから気づかなかったのか。

「……」

「ん？　どうしたんだよ」

横で腕を頭の後ろで組んでいるテルを見て黒羽は聞いた。

「止めないんですか。　最初に荷物を持つとした時のように」

神妙な顔で聞く黒羽に、テルは目を数度見開いて聞き返した。

「え？　なに、持って欲しかったの？」

「そうではありません。　どうして最初はそうしようとしたのに、今はそうしないのかと聞いているんです」

「あー、それな……」

静かに聞く黒羽に対してテルは意図を理解したのか少しだけ視線を上へ向けて言った。

「最初はどーかと思ったんだけど。　お前がこの山登るのさ、不安だったんだよな俺。　監督不行き届きでマリアさんに怒られるのも嫌だったしな。　だから必要なら、手伝うのもそうだし無理に止める事もやろうかとおもったんだけどさ」

頭の後ろに回していた手を解いて、テルは参ったようにその手を少しだけ上にあげた。

「お前、ここまで来ちやっただもん。　なんも言われなくてもさ」

テルは手を下ろして続けた。

「登山家みてーな目してそこまで一人でやりてえならそのまま一人でやり遂げさせてやりてえなって思っちまったわけよ俺。　迷子になったのはマジ誤算、想定外だけど」

ははっ、と笑っていたテルを見てか、黒羽は少しだけ落ち着いた。

その言葉の意味が、完全にこちらを見捨てたりといったものではないと分かったからだ。

「んで、いつの間にか頂上に来ちまったぜ」

「展開がとても早いんですね。感動の欠片もありません」

200mという距離は長いようであつという間であつた。一人で歩いてきた時間よりもずっと短く感じられる。話していると時間が早く過ぎ去るといふのはこのことだろうか。

「まあ俺来るの二回目なんだけどね。俺も感動しねえわこりやあ」
「そうですか・・・でも」

と、黒羽は景色を見る。風が吹き、汗が冷やさされて感じる心地良さ。そして下の景色を見て、自分がここまで来たという事実がある。

「達成感・・・らしきものはあります」

「そうか、じゃあついでにひとつ聞いていいか？」

「なんででしょうか」

黒羽がテルと目を合わせると、同時に風が止んだ。

「なんで、そんな息つまるような方に進んでんの？」

能天気な彼が時たまに見せる真剣な顔で彼は言った。

「俺はさ、悪くないと思うのよね。ナギみたいな生活さ」

黒羽の顔を伺いつつ、テルは言葉を作り続ける。

「いい飯食えて、なんでも手に入って、側にはハヤテみてえなスゲエ執事がいる。何不自由ない暮らしてさ、俺結構憧れてたのよ。世話されたりする生活に・・・結局、世話する側になっちまったけどな」

テルは伸びをすると、飛び降り防止用の手すりに肘をかけた。だが数秒、会話は突然止まってしまふ。見兼ねた黒羽が横を見ながら言った。

「結局何が言いたいのですか？」

「え？ 分かんない？」

「殴つてもいいですか？」

右拳をグーの形にしているのを見てかテルが慌てた。拳を解く

とテルが苦笑いで言う。

「こういう機会、なかなかねえんだぜ？」

「はあ・・・」

「お前、普通三千院家って言ったら練馬60%敷地の富豪。そこで何不自由ない暮らしが許されてるのはそこに住んでる令嬢、ナギのはずだけど、お前はアイツと同じみたいなの・・・羨ましいよ。普通の一般人がだぜ？」

黒羽はそれを聞いて言っただけでやった。

「私はそれを良しとしません」

口調を静かにしたまま彼女は続ける。

「最初は良くても、何度も倒れたりしてる内に、分かっていきました。これが『普通ではない』ということに。それがいつまでも良くない事を快く思っていない人々がいるのは事実です。知ってます」

少なくとも、目の前にいるこの男はそうではないのか。と黒羽はテルを見た。その本人は、困ったそうに頭を掻いていた。

「・・・」

「前にもいったはずですよ。貴方をこの無駄な主従関係から解放する」と

それを聞いたテルが『はあ』、とため息をついた。

「やっぱりそれか・・・」

テルと黒羽を結んでいる主従関係に、黒羽は以前良く思っていたいなかったのをテルは知っている。登校途中で話した時の事を未だに引きずっていたのだ。

「ここに来る間にも考えさせられました。長い道を歩いていると人は物思いにふけるのですね」

だから、と、黒羽は言う。今日、心の中で躊躇っていたこの問いを。

「聞きますテル様・・・貴方は私の事が嫌いですか？」

○
夕日が傾き始めている。テルは目の前にいる少女の言葉に少なからずの動揺を受けていた。

彼女は続ける。己の心を打ち明けるように。

「貴方は私を嫌っているのではないでしょうか。ええ、そのはずですよ。こんな手の掛かる女を毎日世話していて、面倒に、そして嫌いにならないわけがありません。教えてくれませんか」

「そうかい、じゃあハッキリ言っただけでやる」

彼は不機嫌に目を釣り上げて言ったのだ。

「だいつきらいだ」

○
……やっぱりそうだったのですか。

と、黒羽は思う。聞いた所で自分がどう思うのか、考えたのだが何も感じなかった。思っていたことが本当だったただけだ。ただ、何かが失われた感覚を除いては。

「なら——」

「この仕事」

自分の言葉を紡ぐ前に発せられたテルの言葉に彼女の動きが止まった。

「朝5〜6時起き、身なりを整えて掃除洗濯料理学校授業帰宅、三千院家ペットたちに餌やり、仕事、課題。せつかく頑張っても周りが凄すぎて評価はいつも下の下！ 報われない努力！ 俺のイライラ募るばかり！ 嫌いだよこの仕事!!」

「あのおう、聞いているのは仕事の事ではなく、私個人の事なんですが……」

質問と大きく違う答えに、黒羽が改めて聞きなおす。すると彼はこちらを向き直した。

「なんでお前のごと嫌いにならなきゃいけないの？」
逆に聞き返された。

「それは・・・いつも仕事に追われているのに私の世話まで任されて、その落ち度をマリアさんに怒られていましたから。その原因は私です。嫌いにならない訳がありません」
「いや、それ俺の落ち度じゃん。いくら仕事に不満持つてるからって、俺は他人にその落ち度の原因を押し付けるつもりはねえよ」
それに。と間を置いてテルは言った。

「人間的要素で、お前を嫌いになる要素ねえじゃん。そうか、つまりお前アレか！俺の目は節穴だと思ってたろ！人を見る目はある方だと自負してるつもりだからな！ただ見せ場がないだけだからな！」

「・・・」

黒羽は思う。自身が一番問いたい事を、彼に問い。それで彼の答えが拒絶ならば、それはそれでどうでも良かった。ただ受け入れるだけでいいのだから。

だが、彼の問いは自身の予想をしていた答えとは裏腹のもので、それならそれとただ受け入れるだけだった。

・・・良かった、と思っている。何故だ。

理由は分からない。明確になった筈なのに、まだ分からない。知らないならばどうするか？知らなければならぬ・・・それは。

「教えてくれませんか・・・」

「え？何を？」

目の前の男に聞けば分かるだろうか。

○

「自分が空虚な人間か・・・だって？」

「はっ」

黒羽はテルに明かした。自分が考えていた己に対する疑問。他人と同じく笑ったり、泣いたり、そういう人間らしい事が出来ないことも。

「う〜ん・・・そりゃあなあ」

テルは腕を組んで考え始めた。この問をしたときに、なぜこの男にしたのか。最初は見ず知らずの他人、今は同じ仕事仲間で同級生。話すことには自然なのだが、それならヒナギクでもハヤテでもいいかもしれない。この男を選んだのか？

・・・期待をしているからなのか。

自分の望む答えが彼なのだとしたら、と黒羽は考えた。果たして彼の言葉は自身の問いに答えを出すものなのか。

「じゃあ聞くけど」

テルは聞いた。

「お前は感情つて必要だと思う？」

「人を形成する上で必要なのは？」

黒羽の返しにうーんと、テルは唸った。両手を広げてテルは言う。「俺はいらねーんじゃねえかなって思うんだけど。だって『辛い』って感じたらへこむじゃん。楽しんでたら後で悲しさ倍じゃん。

怒ってたら喧嘩になるじゃん・・・そんな感情でいちいち左右されて立ち止まってたら時間の無駄だと思わね？ だからさ」

言う。それがあたかも真実なのではないかという表情で。

「感情つて必要ねえんじゃね？ 邪魔じゃね？」

「そうなの・・・ですか」

言葉を、意味をまとめる。テルの言うとおり、感情で行動を左右されてしまっていては『ダメなのだろう』。だったら無感情のまま、今まで通りのまま、あるがままを受け入れていけばいい。

機械のまま動ければ楽だろう。苦痛な事をされても流してしまえばいいだろう。関わりを持たなければ余計なことに巻き込まれる事は無いだろう。

今までそう思ってきたのならそれを続ければいい。空虚のままでもいい、追加で私に感情は必要ない。

・・・それでいいのだろうか？

心のどこかでふと生まれた新たな疑問。

「あなたは私に感情が必要だと思いますか？」

「俺じゃねえ、お前だ」

謎の返し。初めて、テルがわからなくなる。この『問い方』ではダメか。と考えていたが。

待て。なぜ、自分は『問い方』のことばかり考えているのか。

自身の思考の方向にストップをかける。こうすれば良いのか、どうすれば答えが得られるか考えていては永遠にその答えは見つからない。

考えろ、自分で考えて見つけろ。さつきテルは言った。俺ではなく、お前だと。この言葉の意味。話を1からまとめ直す。一番最初の自分の行動理由。

自分はなぜテルとの関係性を早くなくそうと思ったのか。

・・・自身の自立のためか。

違う。考えろ。

・・・それが彼の為になると思ったか。

違う。近いが、もつと根底にあるもの。そして黒羽は思い出したのは、一番最初にテルに質問したときの事、『自分の事が嫌いか』という問いにテルが答えた時に自分が感じた違和感。

・・・私がこれ以上嫌われたくないと思ったから。

世話を掛けて、彼の迷惑になるなり、不満を溜めていく彼を見て、これ以上嫌われたくないと思っただから。

彼だけではなく、他のみんなにも。

「そうか——」

漸く出た。

「誰かが離れていくのが怖かった……. のですね」

最初は仕事でやっていてもいつしか痺れを切らして放り投げてしまっただろう。執事以外の、今は笑顔で接している泉たちでさえ、最後は離れていくのではないか。これが嫌だったのだ。怖いというのは悲しい感情だ。自分が初めてここに負の感情があつたのだと理解する。

自分はちゃんと、感情を欲していた。

「しかし、悲しい負の感情しかないのであれば他の感情は……?」

「だつたらさ、黒羽よう」

自身の気持ちと向き合っている、それでも悩む彼女に、テルは言った。

「悲しいってことは嬉しいってことと同じ意味だつて考えてみね?」

「それは新しいMの思考ですか?」

「違つて。確かに言葉の通りに捉えれば悲しい事が楽しいみたい
な事に聞こえてくるけど! つてそうじゃねえ!」

と自分にツツコミを掛けてテルは続けた。

「俺が昔に親亡くした時な。あ、俺を産んでくれた本当の親は別に
いてその人たちももう死んでるんだけど、今は飛行機事故でなくした
方の話な」

「ええ。わかっています。さつさと続けてください」

ひどい。と小さく呟いて再開。

「その人死んだときな、『もうどうでもいいや』つて思ってたんだよ。
友達もどっか行っちゃまって一人になってさ……. んで、何も残つてな
いまま歩いてたら『死のうか』つて思ったわけ、でもいざ死のうかなつ
て思つてもなかなか死ねなくてな」

それは本来人間が持つ正しい感情だ。負の感情が間違っている
とは限らない。

「その人がいたらこう俺を殴つて言ってくれてるんだらうなつて、俺
が死のうとしてる横に無理やりその人がいるつて想像しただけでな。

逆らっていいこうかなって思ったらここまで来てた」
だからさ。とテルは言った。

「お前のそれも同じだよ。俺との主従関係も流れのままに世話されるのが、流れるままに生きるのが嫌だったから、今までの自分に、感情がないと思ってる自分に『逆らって』みたんだ」

テルの後ろの奥の方。そこから既に到着した生徒たちの談笑が聞こえてくる。

「みんな同じだ。負の感情に浸り続けないで、逆らってる。千里とかハヤテとかマジで分かりやすいよな。会社潰れて、親も消えてもなんだかんだここまで人生捨てずに生きてる。お前も、形としては俺の為に、嫌な事を振り払おうとして臨んだ今日の山登りがあるんだ。だからお前はちゃんと負の感情だけじゃなくて、正の感情も持ってるんだよ・・・それに気付く『きっかけ』がないだけだ」

テルは再び笑って言った。
「見つけていいこうぜ、そのきっかけってヤツ。俺だけじゃなくても、みんなだな」

この人は、かなり波乱な道を歩んできてるのだと黒羽は思う。だがここまで逆らった分、心が強いのだ。

「私は今日で、自分がかなりめんどうくさい女だという事を自覚しました。それでも貴方は私との関係を望みますか？」

黒羽の澄んだ瞳がテルを真っ直ぐに見つめると、テルは体を山の景色の方を向き、顔はこちらを見て言った。

「人って、悩んだりそれでめんどうくさい位がちょうどいいと思わね？」

「テル様——」
「あー、あとソレ」

唐突に指を差されて黒羽は喋るのを中断。

「『様』とかもうやめね？ お前伊澄とかと俺の呼び方同じだから被ってるの！俺が勝手に決めてることだけでこれは皆には言ってるねえんだけど」

と、テルは自身の頭に手をやり彼は言った。

「あの屋敷にいる皆、俺は家族みてえなもんだと思つてんだ。あ、言うなよこれ。ナギとかに言つたら俺絶対バカにされっから」

「ではなんと呼べばいいのですか?」

「は? 普通にテルでいいだろ。そのほうが俺も気が楽だからさ」

黒羽は登山の途中で会つた伊澄の事を考えて、何故か分らないがさらに彼女から警戒されるのではないかと一瞬考えて目を泳がせた。

「————分かりました。それではこれから、宜しくお願いします。す……テル」

「俺だけじゃなくて、皆も……かな」

とテルが首で奥を示すと、同じ班だったナギや、ハヤテ達がやつてきた。生徒から水を奪い大量のペットボトルを抱えた雪路もいた。

「ほーらアンタたち、そろそろ集合の時間よ」

「生徒から水奪つて何してんだアンタ」

「水分補給よ。熊との戦いでかなり消耗しちゃったからねー、ビールだったら良かったんだけど」

彼女にとってビールが回復剤らしい。そんな生徒からの強奪行為を見かねてか雪路は即座にヒナギクに粛清されたのだった。

「もう……お姉ちゃんつたら。黒羽さん、大丈夫? 何もされてない?」

「オイ会長。なんで俺が手出した前提になつてんだ?」

「ええ大丈夫ですよヒナギクさん。出されてもちゃんと拒否りました」

「ちよつと! こんな時に悪ノリすんな————!!」

「数々のテルの手助けを悉く受け付けなかった事を言っているのですか?」

「あー、もうめんどくせ————!!」

投げ出したかのように叫んでどっかに行つていると今度はナギが。

「ふっふっふ、勝負は私の勝ちのようだな黒羽!」

「ナギ様。この勝負、そもそもどうすれば勝ちなのか細かく決めていませんでした。ですのでこの勝負、ノーカンです」

「な、お前! 地下労働所ハンチョーみたいな言い訳を……つてまあ

その通りだしな。取り敢えず帰ったらスマブラな」

「スマ、ブラですか？」

「し、知らないなら私が教えてやるから！」

腕を組んで照れ隠しに上を向いているナギだが、背が低いためその様子はまるわかりである。

そしてその一方で。

「あ、綾崎い——！！」

「ちよ、やめてくださいよ本当に！！」

「嫌だ！ お前の事が好きだったんだよ！！」

「殴りますよ本当に！」

と迫真のホモ展開を見せつける輩や。

「グラップラーとして、ゴキブリダツシュとかやって見せてくれないか？」

「いや、体液体化させるのはちよつと・・・」

偶然のラツキーに出会った輩の面々が騒いでいる。

「なんか、せつかく清々しい風景なのに騒がしいったらありやしないわね」

この光景を見てヒナギクが呟くと、隣にいた雪路は笑っていた。

「いいんじゃない？ これから一年・・・面白おかしく過ごすメンバーなんだから」

皆が、これからの事を思い、笑みを浮かべていた。そしてテルが一人手をあげて。

「よーしっ。これから帰ったら親睦会やろうぜ！ 親睦会！ 場所はマックで」

「なんでマックなんですか。もつとマシな場所ないんですか？」

「馬鹿、オメッ、知らねえのかよ。今マックで無料券貰えるキャンペーンやってんだぜ！ ポテト塩抜きとか無理にセットメニュー頼んで無料券貰おうぜ！」

「む？ たしかそれは二時までのやつじゃないのか？」

「細かいこたあいいんだよ！ 学校とかなんかの行事の帰り道寄って

く所つつたらマツクかゲーセンだろうが！ 行くぞお！」

ハヤテや唯子などの意見をものともせず右手を大きく突き上げて他の皆が流れのままに突き上げた。

「勿論今回は皆さんはお金を出さなくても結構です。全てはテルのおごりで」

「ちよ、ふざけんな！ 俺今月色々買すぎてキビしーんだよ！」

「やったー！」

その場にいた雪路を含める全員が歓喜の声を挙げる。なぜ教師も参加しようとしているのか突っ込んではいけない。

こうして白皇の様々な始まりを描いた高尾山ハイキングは終わりを告げたのである・・・そして。

「アレ？ そういえば泉は？」

「ん・・・あ、忘れてきちやった」

「オチもってったあ!!」

高尾山には今日もどこかで一人取り残された少女のすすり泣く声が響くのであった。

第104話くお騒がせ小人、再度現るく

人間には見えない所で守られている。それは親の保護の元だったり、友人たちの暖かい目、教師たちの個人生徒へのサポートだったりする。

また人間には守護霊という非科学的な物も存在するが、形はそれぞれ人を護る役目を担っていたりする。

今回は大切な人を見守る者のおはなし。

「おいナギ！ いいかげんにしろ！」

三千院家、とある一室にてテルの怒号が響いた。ソファにどっかりと座るナギがその言葉に眉を少しだけ吊り上げる。

「なんだ。テル、何か不満か？」

「おお不満だとも！」

テルは右手に握ってるモノを突き出した。それはゲーム機。ゲーム機の画面を指差して彼は言う。

「ポケモンバトルで使うのは種族値600は禁止っていうのが今回のルールだったな！　なんで俺の初手がベトベトンでお前の初手がメタグロスなんだ！」

「残念だったなあ・・・トリックだよ」

ドヤ顔で言うナギに対しテルはソファの後ろからナギの両肩を掴み。

「ふんぬー！」

「ぬわあああああああ!!」

思いつきり揺らしてやった。

「もう、山登り終わった次の日だっていうのに元気な二人ですね」
「テルさんはともかく、お嬢様はのあの叫びはただの筋肉痛からじゃ……」

小さなテーブルを囲んでオセロをしているのはマリアとハヤテ。
マリアが黒の石を手にもつと、盤面に打ち出した。

「普段から運動していないからこうなるんですよ。ま、白皇の生徒たちも大半がこういう感じで使い物にならなくなっちゃいますから安息日があるんですよ」

「でも病気になったり、筋肉痛になったり、仮病になったりと……お嬢様も大変ですね」

「う、うるさい！ 助けるハヤにやあああああ!!」

「ははは！ 参ったカナギ、これに懲りたらもうルールを破るんじゃないぞ」

「うう……くそうテルめ……ってオイ、お前の手持ち見たら最初のベトベトン以外伝説ポケモンじゃないか！」

「し、しまった！ ダブルトリック失敗！」

「うおおおおお！ 貴様ア！ この試合は無効だああああ!!」

「あー、お前電源切るな！ 俺のDS訳あり中古だから変なことすると……ぎゃあああフリーズしたああああ!!」

ある意味で微笑ましい光景のだが、やっていることは本当にガキ臭い。

「つとまあ……元気でいいんじゃないですか。そつとしておきましよう。あつ、隅もらいです」

「そうですね、なんだかんだいいレベルの対戦相手はテルさんで十分ですし」

手を休めることなく二人は打ち続けていく。マリアの番になったときマリアは思い出したかのように打つのをやめた。

「そうだテルくん。そろそろ黒羽さんの様子を見てきてはくれませんか？」

「え？ まだ寝てるんじゃないんですか？」

ゲーム機の電源を入れたり消したりしてるテルがその動作をやめた。

「でももう11時ですよ。お腹も空いてると思いますし、何か食べないと体に悪いですから」

へーい、と軽い返事をしてテルは立ち上がるとナギを見ていった。

「いいか、ナギ。次の試合のパーティちゃんルール守って決めとけよ。次は俺が勝つから」

「いや、それよりもお前そのDS動くのか？」

「まだ動かん。でもいざとなったらぶつ叩いて直す。今までもそうやるたびに動いてきたからな」

「昭和じゃあるまいし・・・」

とテルが扉を開けて部屋から出ていくのを見てナギはソファに横になった。ゲーム機の電源を改めて入れ直す。

「いやー良かったですねナギ。ハヤテ君以外の遊ぶ相手ができて」

「何を言うか。ただの暇つぶしだ。勘違いするな」

「ツンデレ乙・・・っと」

笑顔で盤面に打ち込んで相手のハヤテはたははと、苦笑いで息を漏らした。盤面は一面真っ黒。マリアの完封がちである。

○

テルは装飾された三千院家の廊下を歩いていた。

「ほんと、コレ動かねーのかな。やっぱ訳あり中古なんて買うんじゃないかったな。ソフト付きで398なんて信用できねえな・・・もつと給料貰えればなあ、新品で買えるのに」

右手のゲーム機をいじりながら未だにウンともスンとも動かないのを見てため息を漏らす。

元々低月給の身だ。しかし、今ある借金をすっかり返済していくために自身の執事の給料から引かれていき、手元に残るのは大体8000円程度。

だが文句は言っていない。　ハヤテは5000円だ。

「こんな叶わない夢を言ってる場合じゃなかった。　さつきと仕事仕事……ん？」

ふと足を止める。　その理由は一本みちの廊下というこの空間。　四方八方から突き刺さる視線を感じた。

……なんじゃコレ。　半端ない殺気が。

誰かが後ろから刃物を持って襲ってくるのではないかと危機感を覚えたテルは思わず辺りを見回すが、物音をひとつ立たない無音の間。　さすがに考え過ぎか、と警戒を少しだけ解除して一歩踏み出した。

その時だった。

——　ぷつん。

「え？」

テルは確かに張り詰めた弦が切れた音がした。　するとテルの真下の床が揺れ動く、次の瞬間には真上へと吹き飛ばされたのだった。

テルは勢い良く真上の天井へと激突する。

「がっ」

頭から天井についたテルは重力の作用で地面へ落下。　大の字に着くと床下でさらに何か動く音がした。

「何が……起きたの？」

次の仕掛けの発動の音であろうとテルは推測した。　だが、またしても間が空き、待つことしかできない。

わかる。　これは手馴れた者の犯行であると。

……でもこのやり口、どこかで。

思い当たる節があったのか、考え込んでいたときだった。　少しだけ糸を引き絞るような音を聞いたのだ。　テルが振り返ると同時に、はじける音と共に何かがちらに飛来してくる。

咄嗟の判断でテルは右手をかざす。　飛来してきた物体はテルの右手に持っていたゲーム機を貫き、破壊音とともに矢は眼前で停止する。

「デiiiiiiエエエエエス!!」

こちらに飛来してき方向を見ると、いつの間にか椅子の上に乗せられたボウガンが置かれていた。床に向かつてボウガンからは糸が垂れており、こちらが起動のスイッチを押すと発射される仕組みになっていたのだろう。

「なんという事を・・・俺の少ない給料で購入したDSを」

悲しみと怒りの二つの感情がせめぎ合い、テルは地面に手と両膝を着いた。だが、視線を低くしたことで奥の曲がり角でかすかに何か影が動いた事に気付いた。

・・・今のは？

立ち上がり、一瞬で隠れた影を追う。こんな大規模な暗殺セットを出してきたのだ。ただ済ますわけには行かない。道を曲がると数個ほど部屋の扉があったが、その中で半開きのドアがあった。

だがそこは。

「なんで俺の部屋？」

自分の部屋の前でテルは立ち止まる。なぜ相手がこの部屋に逃げ込んだのか分からないが、このまま放っておく訳にはいかない。

・・・自分の部屋に入るのがこんなにも怖いものだとは思わななだわ。

ドアノブを回し、テルは意を決して部屋へ突入した。

「誰だ・・・」

入った直後に辺りを見渡してみるのが誰もいない。だが油断してはいけない。下手して動いてしまえばまたトラップ発動の仕掛けにハマることになる。

ここは動かないほうが得策か、と考えていたときテルは部屋の奥で小さな物音に反応した。そこはいつも自分が座っている机だ。

その机の椅子の下に小さな黒い物体が見える。

それを見て、テルは驚愕した。

「・・・コイツは!?!」

その椅子のしたで倒れ伏していた物体は、あの黒羽の使い魔のような存在、チビハネだった。

・・・黒羽の相棒だった奴だよなコイツ。　　ってことはさっきのトラップはこいつの仕業だな。

以前にもやられたことがあるテルは即座にこのチビハネが犯人であることを確信する。　だが目の前にいたチビハネがなぜ自分の部屋で倒れているのかが不自然でならなかった。

「まさか・・・罠か？」

そう考えると、うかつに動けない。　下手したら今度は槍が飛んできて可笑しくもない。　前回は粉塵爆発まで起こされたのを思い出す。

だが目の前にいる犯人は酷くボロボロで、息があるのか分からない状態だ。　威勢が良いあのチビハネがここまで弱っているように見えるのは気のせいかな。

ただ命を狙いにきたわけではないなら、何か理由があるはずだ。その身を傷つけてでもしなくてはならない理由が。

「ええいクソ。　どうにでもなりやがれ」

と我慢できなくなったかテルが一步踏み出した瞬間、テルは真上からの撃の奇襲に激痛で頭を抱える羽目になったのだ。

○

小さな自分は夢を見ていた。　自身のマスターを失い、ひたすら歩き続けていた夢を。

川から上がった後も、ひたすら歩き続けた。　泥をかぶりながらも巨大な生物に襲われかけた時も、ずっと歩き続けてきた。

やがて止まっている車に乗り込んで移動していると見慣れた場所に出た。　以前黒羽が木原と共に活動してた時に住んでいた場所、東京。

この場所に来た時に、あの男の事を思い出した。　敵ではあるが、マスターを知っているか？　少ない人間はあの男しかいない。　敵

であるあの男に頼ってしまふのはどうかと思ったが、足は自然とその男のいる場所へと向かっていった。

何日間かかったろう。何度も道に迷ったし、体に力も入らなくなつて何度も倒れた。この経験を元にわかつたことがある。自分は何も食べなくてもいい体だと思つていたが、一週間以上は無理らしい。

ゴキブリは頭をはねても死なないが、空腹では死なないらしいというのを聞いたことがある。ならば、自分はゴキブリの生命力があるのではないか。

目がぼやけてきた時にチビハネはたどり着いた。あの男がいる屋敷へ。ただ一つの、『奴なら何とかしてくれるのではないかという淡い希望』の元。

○

『マスター……どこ、ですか?』

意識を取り戻したチビハネが目を開く。小さい体を起こすと、自分は何か大きな影に隠れている事が分かった。なんだ、と上を見上げると……。

「よう」

二つの眼球がこちらを見下ろしていた。

「……」

「あー、やっぱりお前か。ねえちょっと見てくれよこの哀れなDSの姿をよう。もうウンともスンともいわなくなつちまったよ。どうしてくれんだよオイ」

目を数度見開いて確認する。あの男だ。壊れたゲーム機をテールは不機嫌そうにちらつかせてくる。

『いつの間にか、気絶してしまつていたとは……早く、マスターの場

所を聴かなければ』

「ん？ 毎度のことと思うけど、お前一体なんて俺に話しかけてるの？ やー、しか聞こえないんだけど」

こちらに聞き耳を立てるテルを見てチビハネは思った。自分の言葉は主である黒羽しか分からない。それ以外は全く通じないのだ。このままでは黒羽の居場所を聞き出すことができない。

「・・・なんで泣いてんの？」

目の前のチビハネが小さくうつむくを見ると、床には小さな水滴が落ちていた。テルの声に反応して、顔をあげたチビハネは自分が泣いていることに漸く気付いたか、慌てて顔を拭う。

悔しい。と心の中で呟く。ここまで来ておいて、自分は使い魔として主を助けることもできないのかと。

「なんか、困り・・・事、なのか？」

ただ泣きじやくるチビハネを見て、テルは腕を組んで考えた。箱ティッシュを持ってきて一枚取り出し、溢れ出る水滴を拭き取る。

「お前が泣くなんて結構ヤベー事起きたんだろうな。ちよつと待ってろ」

と、テルが机ので引き出しからひとつの箱を取り出した。縦長の箱から新しく封を切って、中から丸い円盤をチビハネに渡した。

「くっ！ ナギの所からくすねておいたクッキーをここで開けることになるとはな！」

自分と同じくらいのクッキーを渡されて両手に取る。クッキー部分のざらりとした感触、そしてバナエツセンスの甘い香りはチビハネの空腹な胃袋を一気に刺激した。

震えながらその一部に噛み付く。染み込んだ甘味にチビハネがまた泣き出した。

『うゝまぁ・・・』

「お、オイ！ 泣くまで美味かったのか!? く、クソ、もうやらねえぞ！ それ一枚で手を打ってくれ！」

箱を背後に隠すが目の前で一瞬で平らげたチビハネがこちらを見つめる。

「おい、やめろ」

『……』

「そんな目でみんなって」

『……』

「マジでやめろって」

『……』

なぜこういう時だけ、意思疎通が出来てしまうのか。

「もういいや……」

ちくしょう。とそう吐き捨ててテルは目の前の生物に、背後に隠していた箱を差し出したのだった。

いざとなったらまたナギの所から取ってくるまでである。失敗しなければの話だが。

○

その頃ハヤテたちのいる一室では。

「ハヤテ、お前……耐久エアームドは私の怒りを倍増させるぞ?」

「お嬢様も、催眠ゲンガーはちよつと……」

ゲーム機を手にお互い睨み合うハヤテとナギの姿があった。

「珍しくお互いがゲームで熱くなってますね……二人とも、クッキーでも食べませんか? いいの買ったんですよ?」

マリアが上手いこと仲裁に入ったとき、ハヤテがこちらを見て言う。

「あ、多分そのクッキーないと思いますよ。今頃テルさんのお腹の中に」

「……どういことですか?」

笑顔で硬直したマリアにハヤテがビクツと小さく震えた。

「け、結構テルさん台所からお菓子くすねてくこと多いんですよねー」

糖分補給だーって無理な理由ですけど……」

恐る恐る述べるハヤテにマリアはその天使のような笑顔を崩さず

手元から手帳を取り出してペンを走らせる。

「ふーん・・・じゃあまた給料から引いときましようねー」

大きな赤い字でマイナスの値を書かれた手帳をパターンとしめたのだった。

○

そんな所得低下が起きていることは露知らず、テルの部屋。クツキーを全て食い尽くしたチビハネ、そしてそれをふてくされたように椅子に座っているテルがいる訳だが。

「結局お前、何しに来たんだよ」

『あつ、そうだったです』

クツキーにとらわれていたか、当初の目的を思い出したチビハネは立ち上がる。すると大きく手を振り始めた。

「・・・何を言ってるのかさっぱり分かんね」

『くそそう・・・』

腕を組んで方法を考えるのを見て、テルは思う。何はともあれ、気持ちは落ち着いたようだ、と。あそこまで泣かれてはこちらも敵だろうとも、放っておくことは出来ない。あちらの言葉が通じない以上、何があったか、をこちらも察する必要がある。

すると、チビハネが動いた。

自分を指差して。

「わたしの？」

と、ここでチビハネの顔が明るくなる。ジェスチャーでうまく伝えられたらと思っていたが上手くいきそうだ。チビハネとしては黒羽の特徴を示せるだけ示せばいい。

『ええーと、ま、マスターの特徴・・・』

あれこれ考えて咄嗟に出たのが、自分の胸の前を両手で山を作った。それを見たテルの反応は。

「胸は小さい？」

『死ねッ このド変態ッ！』

「うおっ!?　なんかスゲー批難された!　ちよ、怒るなって!　間違ったのか?　確かにおまえペツタンコだけど!」

『言うなあ!』

顔を真っ赤にして叫ぶ。確かに身体的特徴ではあるが、相手には自分の悩みを打ち明けたかのような状態になっていた。

ならば、とチビハネは続ける。先ほどと同じく自分を指した。

「私の?」

そしてチビハネは何かないかと辺りを探して、側にあつた耳かきと爪楊枝を見つけてそれを両の手に取り、振り回した。だが、ただ振り回すのではなく、黒羽がいつしか使っていたように剣で斬りつけるように、槍で突き刺すように。

「おおっ?」

テルの反応に確かな手応え、これならいけるはずとテルの回答を待つ。

「うーん、なんだっけ．．私の」

焦らすな。と爪楊枝と耳かき棒を振り回しているとハツとしたようにテルが口を開いた。

「北風は勇者バイキングを作った、だ!」

『ふざけんなテメエ!』

怒号を飛ばすと同時に、持っていた爪楊枝をへし折った。チビハ

ネは再度トライ。

「私の．．．」

今度は黒羽の特徴である冷静さを表現するために、できるだけ無表情になつてみせた。

「おおっ!」

さらに先ほど使っていた耳かき棒と半分になつた爪楊枝をもつ。

「おおおおっ!」

反応が濃くなったのを見て期待感が高まる。そして先ほどと同じように動き出した。役者並みの演技力だとチビハネは笑う．．だが。

「私の特技は無口でDV！」

『特技になるかボケエエ！』

半分になった爪楊枝をまたしても折ると、その場に投げ捨てた。こうなればヤケだ。目を光らせる。

・・・何がなんでもマスターを表現してやるです！

そこから三十分に及ぶジエスチャー大会が行われたが、どれもこれもハズレとなり、テルにチビハネの思いが届くことはなかった。

『・・・』

体を大の字にしてその場に倒れこむ。辺りには今まで使い続けていた小道具の数々が散らばっていた。

「あー、あんま気落ちすんな？俺もなんか分かったら・・・」

と、小道具を片付けているとチビハネが顔を起こした。またしても目一杯に涙を浮かべている。

『い、嫌だあ・・・』

「・・・」

『もうっ・・・マスターに、会えないなんて、い、嫌だあ！』
テルの服の袖を掴む。

『絶対っ、生きてる・・・！私が消えてないんだからっ！』

「お前・・・」

『助けてよ・・・助けてっ・・・え？』

チビハネは自分の体が浮いたのを感じた。だが目を開けて、自分がテルの手に乗せられているのだと気付く。部屋を出て急ぎ足でどこかに歩きだした。

「っっっだ」

たどり着いたのはある部屋。テルがドアをノックして何も反応がないのを確認してドアを静かに開ける。

『……って……?』

テルと同じ広さの部屋だが圧倒的に置かれているものが少ないのが分かった。元々装飾と、必要最低限の物が置かれているくらいの部屋。

チビハネの目線の先に、ベッドがある。テルが静かに近づいていき、ベッドの側にきたところで黒羽は声を漏らした。

『あ……』

そのベッドの上に居たのはあの日以来、長く探していた人物。

『マスター!』

「しーっ」

と、テルが指を立ててチビハネに言い聞かせる。

「昨日結構ハードな運動して疲れてんだ。まだ寝かせてくれ」

チビハネはまだ眠っている黒羽の顔を覗く。あの顔だ。お姫様のように、寝息を立てずに静かに眠っている。

チビハネはテルを見た。なぜ彼はここに来ることが出来たのか。テルがこちらの視線に気付いたか、チビハネをベッドの横にある小さな棚に置いて言った。

「なんでわかったかって顔してるな? 俺にもよく分かんね。でもお前の顔見たら、なんとなくコイツの事なんじゃないかなって思った。色々混み合った事情で、今コイツを保護してるって言えばいいのか?」

『……』

「今記憶とか、色々失ってる。俺のことも忘れてたし、多分お前のごとも……って、聞いているか?」

『聞いているです』

頼って良かった。とチビハネは思う。どこかで、自分は諦めていた。あの日、黒羽と分かれてからの日々で最初はあった確信は時間とともに薄れていった。だが、この男は希望を与えてくれた。小さな自分に生きる希望を。こうしてまた黒羽と巡り合わせてくれたのだから。

だからチビハネは言う。涙を拭いてテルを見て。

『ありがとう』

満面の笑みを見て、テルは思わず頭を掻きながら目を逸した。こういう時に素直に返せばいいのだろうかと思っていた時だ。目の前の黒羽が小さく動く。

・・・ヤバイ。

と咄嗟にテルはチビハネに向かって人さし指を立てた。その意味は『静かに、動くな』だ。

「・・・んあ。 どうしたんですか、テル」

「お、おう。 おはよう、いやもう昼近いから『おそよう』か？ マリアさんがもうそろそろ起こしてこいだってよ」

はあ。と眠そうに目をこすっている黒羽を見てチビハネが息を呑んだ。

「その人形・・・」

『はうっ！』

直立不動のポーズをとっているチビハネに目が写ったかチビハネの体にも緊張が走る。 それを見てかテルが慌ててフオローに入った。

「あー、お前に結構似てるだろ？ 結構よくできてるだろコレ？ ねんどろいどっぽいだろ？」

「・・・っぽい？」

「ぽいじゃなかった。 ねんどろいどだ。 うん、ねんどろいど。 あんま気にしなくていい」

と汗が流れ出すテルを見ていて不審に思ったか、黒羽がチビハネに手を伸ばした。 顔を洩らせたテルだがもう既に手にはチビハネが握られている。

ぷにぷに、と顔をつついたり、頭を撫でたりして。

『ま、マスター、ちよつと触りすぎですって・・・んっ、くすぐったいですう』

と半ば今のチビハネにとって反則技を使う黒羽がチビハネをまた

棚の上に置き、テルを見て言った。

「なるほど分かりました。私に似せた人形を作ってあれこれとコスプレプレイを楽しむのがテルの趣味だったのですね・・・」

「もの凄い誤解だからやめてくれ！俺が作ったんじゃない！クラスの又吉くんが」

「ああ、これでテルの事をまた知ってしまったようです。なかなか知らない方がいい事だったんでしようが・・・」

蔑んだ視線を向けられてテルが一步引く。登山が終わってから容赦がなくなつたなとテルは実感していた。

「まあさておき、そろそろ起きなくてはならないようですね。私はこれから着替えますのでこのまま残るようでしたら法的な措置の元にテルを抹殺する用意ができています。さあ出て行つてください考える猶予はありません、さあさあ」

無表情なのはさておき、言っている事がとんでもないのでテルは人形をとってすぐさま部屋を飛び出した。

「意外に元気だったなアイツ・・・筋肉痛じゃねえのか？」

ナギであの状態なのだが、ただ痛みを顔に出さないだけなのか。それとも疲れが抜けるのが早いのか。

右手を見てまだチビハネがポーズをとっていたままだだったので。

「ああ、もういいぞ。頑張ったな、フリーズ溶けてよーし」

『ぷはー。まじ死ぬかと思っただーです』

顔を汗を拭ってチビハネが座り込む。バレないように演技をするのはなかなか体力を使うらしい。

「なあ、お前。ここで暮らしてくんねえか？」

『へ？』

唐突なテルの言葉に黒羽が面食らった。

「俺いまさ、アイツの面倒を引き受けてるわけなんだけど。その手伝いみたいなやってみね？飯とかはまあ用意するし、寝るとこ

ろも用意してやる。 お前だってアイツの事が心配でここまで来たんじゃないのか？」

その通りだ。と首をチビハネは縦に振る。

「だったらお互いここは一時休戦だ。 お前の主が記憶戻ったら、またドンパチやらかしてもいいし。 いいなら首を縦に振ってくれ」

もつともそんな展開はやめてほしいところではあるが。とテルは思う。

チビハネはそれを聞いていて考えた。 まだ主とともに居れる。

あの時守れなかつた主を今度は自分が守るのだと。

チビハネは首を縦に振った。

「よし。 第二サポーターの誕生だ」

『にひひ・・・です』

お互いにニヤリと笑い。ここに新たな三千院家の住民が増えた。人ではないのでこれはペット類に入るのだろうか。そして笑っているチビハネを見てテルが思うことは。

・・・いつか黒羽がああなった事がこいつから聞ければいいんだけどな。

謎を解決するためにコイツに文字の読み書きを教えようか。そんな事を考えていたテルだった。

第105話く三千院家、女たちの夜く

時刻は九時、夜の三千院家。幼稚園の良い子たちはもう布団とかに入って寝ているのではないだろうか。

寝る子は育ち、健やかに過ごせる。だがこの屋敷、三千院家はまだ明るい。

「ナギく、どこですか？」

眠らない住人その1、マリア。彼女は仕事の都合上、まだ寝ることが出来ない人物だ。主であるナギを探しているようである。しかし彼女もある程度仕事を終わらせて、パジャマ姿である。

やがてマリアは一室にたどり着くとドアを開けて、中に二人の人物がいるのを確認して中に入った。

「こうなったらウインガルの支援、騎士王アルフレッドでお前のドラゴニックオーバーロードカイザーバーミリオンをアタック！」

「ゲット、ヒールトリガー」

「ぬわあああああ！ 負けたあああ!!」

あたりにカードが散らばる。小さな人物は大の字に床に倒れられて叫んでいた。

そこに居たのはナギと黒羽だった。二人ともパジャマ姿でいるが、まだ髪の毛から湯気が出ているところを見ると風呂上がりらしい。

「私がドライヤー取りに行ってる間にどこに行っただと思ったら、こんな所でカードゲームですか」

「おおマリア聞いてくれ！黒羽にヴァンガード教えて勝負してみたんだ！するとどうだ！」

「ええ、さっきのやり取りを見てみると見事にボロ負けしたみたいですね」

そうなんだ。とナギは悔しそうに話す。

「黒羽のやつ、とてつもなく運がいいぞだ！一回目の勝負の時にツインドライブで二枚ともクリティカルトリガーもらって負けてしまったのだ！こんなことって有り得るのか！」

「・・・専門知識を言われても、わかる人にしかわからない話ですね」

苦笑いでデッキをまとめるマリアを見て黒羽が手伝い始めた。

「すみません。 なかなかお嬢様の望む良い勝負が出来なくて・・・」
「別に気にすることありませんよ。 ゲームとかでは負けるということも
こうなんです。 それよりすごいですね、初めてのカードゲームでこんな
短期間で勝てるものなんですか？」

聞かれた問いに黒羽はカードを手に広げた。

「不思議といい手が来るんです。 困った時に自分のターンになると
その状況を打開する手とかが来るもので・・・」

「そう言えばこの前の大富豪も凄かったですね。 ほとんど初手の革命
とかで上がってましたね」

「うーん。 何か幸運の女神に見守られている奴なのかな、お前」

この幸運を少しでも誰かさんに分けてやりたいものだとなぎは
思ったのだった。 カードを集めてひとまとめにしたマリアはデッキ
をテーブルの上に乗せる。

「さて、では始めましょうか」

「えー、別に良いではないか。 これ時間かかるしー」

ナギがめんどくさそうに言うとなぎは人差指を使ってナギを諫
めた。

「いけません。 日頃の髪の毛のケアはちゃんとしないと。 風呂上
りならなおのこと」

そう言うとなぎはドライヤー手に取り、二人に向けて構える。

ナギは渋々同意したのだった。

○

黒羽は椅子に座り、マリアがその後ろからドライヤーを当てるとい
うものだ。 室内ではドライヤーの吹く風が黒羽の髪を乾かしている。

「マリアく、まだか？ やっぱり長いから明日でいいか？」

「ダメです。 二人とも髪の毛長いんですからちゃんと乾かしておか
ないとすぐ傷んじゃうんですよ？ しかも、まだ一分くらいしか経っ
てません」

片手で黒羽の髪を持ちながらドライヤーを当てていく。

「ふう、しかし黒羽さんもナギと同じくらいの髪の毛の長さ・・・凄いですね」

「あの、大変でしたら明日にでも髪を切りましょうか？」

後ろを振り向いた黒羽をマリアは両手で優しく手を添えて前を向かせた。

「別にそういうことを言ったわけじゃないんですよ？　ただ羨ましいと思って」

「羨ましい・・・ですか？」

「そうですよ。髪が長い女性ってやっぱり魅力的じゃないですか☒」

「ほう、ならマリアは私はこの長い髪と普段の魅力がプラスされてるわけだから超魅力的だな！」

ナギが勝ち誇ったかのような笑みを浮かべているとマリアはドレイヤーのスイッチを切った。

「普段もつとしっかりとしてくれるようになればですけど。　せめて

休日は午前中には起きてくるようにしてください」

と、痛いところを突かれたようでナギは喋るのをやめる。　黒羽が前を向きながら聞いた。

「マリアさん、さっきの続きをお願いします」

「そうですね。私の髪の毛の長さって結構中途半端じゃないですか？　あと、大抵のヒロインって結構髪が長い人が多いんですよー」

「確かに、ナギ様部屋にある漫画を見ると結構髪の毛の長い子多いですね・・・金髪の」

「ええ、金髪の」

「な、なんだお前ら！　別に私は自分と同じ髪とかのヒロインがいる漫画集めて越に浸っているわけではないんだぞー！」

顔を真っ赤にして言うナギを無視して黒羽はマリアに言った。

「私と思うに、マリアさんは今の状態でも十分に魅力的な人だと思います」

「あらありがとう☒　でも黒羽さん、ここに来る前は髪の手入れとかは？」

「特に・・・してきた覚えがないんですが」

まあ、とマリアが後ろで声を上げる。

「それはいけませんよ。髪は女の命です！　こうやってドライヤーを当てる角度を変えるだけでも結構変わるんですから」

「そうなんですか？」

「ええ。基本は上から下に向けてです。それと、ツヤとかを出したいんだったら温風の後に冷風を当てたりするんですよ」

と、黒羽は空いていた片手で自身の髪が少しだけ乱れていた手で直そうとすると。

「あ、ダメですよ。手櫛は髪を傷める原因になっちゃいますから。ちゃんと櫛使ってあげないと」

「あ、はい。気を付けます」

「うーん。マリアって凄いな。　そんじよそこらへんのお母さんよりお母さんだ」

隣で待っているナギが腕を組みながら言うのとマリアがクスリと笑みを浮かべて言った。

「ふふ、どう言う意味かしらナギ？　詳しく聞かせてくださいな」

○

「そう言えば黒羽さん、最近テルくんともだいぶ仲良くなったんじゃないですか？」

とマリアは髪を乾かし終え、近くのソファに座っている黒羽に聞いた。今は順番が変わってナギの髪を乾かしている。

「そうでしょうか」

「そうですよ。　前までテルくんの事、様づけだったのに今は呼び捨てになってるじゃないですか。ハイキングに行ってからそうなってビックリしましたよ」

黒羽は視線をマリアに向けて膝の上では手を組んでいた。

「どうやら私と伊澄様の呼び方が被っているようなので止めてほしいと。　どうせなら呼び捨ての方がいいらしいのでこうなりました」

他に理由はもう一つあるのだが、これを言わないのが彼との約束である。　律儀に守る黒羽だった。

それを見たマリアは笑みを浮かべる。

そしてナギが少し視線をあげて。

「まあ最近の伊澄、何故か知らんが負のオーラが溜まってるからな。そう呼び方が被ったからってアイツが切れたりするわけないだろうけどな・・・あ、あとな」

「はい？」

言葉を途中で止めたナギがその場で両手の人差指を当てていた。

「わ、私のことも『様』づけしなくてもいいんだぞ。ここに在る限りは皆家族みたいなものだからな！」

『ここに在る皆、家族だと思ってるんだ』

ふと、高尾山でのテルの言葉が脳裏を過ぎった。

「ふふ、嬉しいですわナギ。じゃあ手始めに『ナギちゃん』というのはどうでしょうか」

「や、やめろー！ 恥ずかしい！ 普通にナギでいい！」

と慌ててマリアの手から逃れるナギ。黒羽は少し考えてからナギを見て口を開いた。

「ナギちゃん」

「う、うわあやめろって！」

「ナギちゃん」

「ちゃん、じゃなくてナギでいいってば！」

「ナギちゃん」

「マリアまで悪乗りするな！」

いつの間にか悪乗りしていたマリアをナギが怒鳴ると、マリアは小さく笑った。ナギは座っている黒羽をじっと見て顔をだんだんと赤くさせていく。

「・・・コイツに言われるとなんか恥ずかしいんだよなあ」

「あつれ〜？ ナギがデレてますよ？」

「デレてない！ 決してデレてないのだ！」

遂には恥ずかしすぎて両膝を抱えるナギ。そしてそれを面白が

るように黒羽が言う。

「ナギちゃん」

「・・・もう、好きにしてくれ」

ぐったりと頭をたれてナギはそれを受け入れたのだった。

「・・・」

黒羽は考える。この屋敷の人々はなぜこうも他人に優しいのか。勿論、ここにいる人だけが優しいという訳ではない。だが一緒に生活して間近に見ている自分にとってはその優しさが普通以上に感じてしまう。

ましてや、ここにいる人々は血の繋がりが無い人ばかり。

だが、彼女は言った。家族、と。

自分は思ってもいいのだろうか、この人たちの事を家族と。今までそう疑ってしまうのは恐らく自分がテルに対して同じことを思っていたように

『この人たちからも嫌われていないだろうか』

そんな事を考えていたからだ。だがハイキングで、自分はテルを信じることにした。テルが思っていた事をナギが言われなくてもその口に出せたのは本心からではないのか。

少なくとも、ナギの言葉を聞いたときに自分はテルに言われた時と同じ気持ちになった。良かったと、それに今付け加えるなら。

『嬉しい』

そんな言葉が浮かんだ。

「はい、終わりましたよナギ、そろそろ寝たほうがいいんじゃないかしら？」

ドライヤーをしまい、頭を撫でるマリアにナギがニヤリと赤い顔のまま笑いながら言った。

「そうはいかない。今日はなんか恥ずかしすぎて頭に血が上ってしばらく眠られない気分だ。だから少しだけ夜を楽しませてもらう

ぞ」

と黒羽を見て。

「と、ところでだ黒羽。お前はインターネットに興味とかはあるか？」

「ネットですか。やったことがないのであまり興味は・・・」

「そ、そうか。実はこれからニコ生で私の好きなアニメが流れるんだが暇だったら一緒に観ないか？」

もじもじとしてる様子を見て、黒羽は少し遅れて頷いた。

「そうですね。ナギちゃんの趣味とかを把握しておくことも、メイドとしての役目なのでしょう・・・教えてください」

「そ、そうか。なら話は早いな！ さっそく私の部屋で一緒に見るのだ！」

「これから、二人ともあまり夜遅くまで起きてるんじゃないやありませんよ」

困り顔で言うマリアに黒羽が冷静な顔で親指を立てて言った。

「大丈夫ですマリアさん。私も三千院家のメイド、物事の分別をわきまえて行動します。ハマりさえしなければ私はそのアニメが終わり次第、ナギちゃんを寝させますので」

「ぞ、そうですか？ なら、お願いしますね？」

と黒羽の硬い意志を見てかマリアは納得して部屋を出る。あのしつかりものの黒羽が言うのだから間違いないのだと。

しかし次の日、ナギと黒羽は二人して午後を目覚めたのだった。

第106話　夜の世直しはアイスを求めて

「ハーヤーテー、アーイースー」

夜、ソファにて寛いでいたナギが指で天井を指してこう言うのは簡単に言えば今、ナギが欲しいものだ。

「ハイ、お嬢様」

このどんな唐突なお題も難なく反応するのはハヤテだ。急いで台所に向かい冷蔵庫の中にあるであろう買い置きしておいたアイスを取りに行く。

暫くして台所に着くと、ハヤテは目の前にある冷蔵庫を開ける。

アイスを保存している冷凍庫の中には様々な高級食材があった。

「うわっ、松阪牛が冷凍されてる。しかも一ヶ月前のだ・・・テルさんだな」

恐らく、買ってきた肉をテルが勝手に冷凍庫に入れたのだろう。

たしか一ヶ月前にテルに高い肉を階建してきてほしいと頼んだら松坂牛をどこからか仕入れてきたのを思い出した。だが結局その日にナギが麺とか食べたいと言ったもんで肉料理はお流れになってしまった。その時だろうか。

「後で他にもありそうだけどあとにしよう。まずはアイスだ・・・アレ？」

と食材をどかしたりしてアイスを探すがない。

「おつかしいなあ。結構大きめなのだからわかり易いんだけど」

「何がだ」

「あ、テルさん。ここにあったアイスって知りませんか？」

真後ろからの声をテルと認識したハヤテはアイスの事を聞いてみた。後ろのテルはうーんと唸って。

「んー、わからん。どんなヤツ？」

「大きい箱に入ってるヤツですよ。結構まだ量が残ってて、バニラにキャラメルが混じってる珍しいアイスで――」

とハヤテが振り返ってその目に写った光景に全身を硬直させた。

イスに座るテルの目の前には開け放たれた冷気を放つ箱。そしてそれに大きなスプーンでそれを口に運ぶテルの姿がそこにあった。「偶然にもこのアイスもお前の探してるアイスと同じやつのような。でもこれは多分別もんだよ。俺がいうから間違いない。確かにそこにあつたけど」

「あ、アウト！ テルさん、それアウト——！！」

シャウトしたハヤテはテルからアイスの箱を取り上げ、中を見た。これがまだ残っているなら安堵の息が出たが、中にはナギが食べられる最低限の量も残っていないかったのだ。

「はあ・・・残ってない」

「あー、スマン。ハヤテ、俺も遠慮しようかと思っただけだな？あまりにも美味そうだからつい・・・な？」

「な？ じゃないですよ！ 今お嬢様が即効でアイス欲しがってるんです！ これじゃあ機嫌悪くなっちゃうじゃないですか！！」

「こういう時はなハヤテ、落ち着け。落ち着いて素数を数えろ2, 4, 8, 10, 12, 14」

「それ偶数ですから!!」

声を荒げたハヤテにテルは即、椅子に正座で座り直した。アイスは量を見越してこのひと箱しか買っていない。ハヤテは最悪の状況に頭を抱えた。

「おーい、ハヤテエ、ちょっと来てくれエ」

「あ、ハイただいま！」

と、テルを叱る暇もなくハヤテはすぐさま台所から去っていった。誰も居なくなつたのを確認すると、テルは正座の姿勢を解き、背もたれに寄っかかり天井を向かって大きな息を吐いて、項垂れた。

「あー。だから俺のせいじゃねーっつーの、どうしてもあのチビハネが食いてーって言うもんだからよお。ちょっとだけあげようと思ったら全部食っちゃったんだからよー」

「アイスは？」

「いやーそれが・・・」

ナギのいる部屋に戻ったハヤテは顔を引きつらせて、息を飲む。

「あ、アイスは実はなくて」

「アイスは？」

「もうなくなってます・・・」

「あ・い・す？」

「お、お嬢様？ さつきからなんで同じことしか言ってくれないんですか？」

勿論、ハヤテには理由が分かっていた。 ナギは今、とてつもなくアイスが食べたいのだ。 欲しいと言ったら欲しいのだ。 それがダメになったとしてもダメなのだ。 地球が減んで食糧難になった状態でも同じことを言うだろう。

そして顔を曇らせたナギがソファから立ち上がってハヤテを指差して言った。

「無かったらさっさと買ってこんかア!!」

「ええ——!?」

「驚く暇があるならさっさとお前買ってこーい！ 私は食べると言つたものは今日中に食べないと気がすまないのだ！ 嫌なのだ！」

「は、はい——!」

ツインテールを逆立たせてナギが鬼のように怒った。 ハヤテはナギに急かされるままにすぐさまナギの部屋から飛び出した。 そしてその場から離れるとナギが扉から顔をひよつと出して。

「ハーゲンダッツ買ってこいよな！ ラムレーズンのヤツ！ あと二三個ほど別にハヤテチョイスで!!」

とナギは言い終えると勢いよく扉を閉めたのを見て、ハヤテは即ダッシュで主人のお使いをこなすのであった。

○

「こんな夜遅くに買い出しなんて・・・これ絶対テルさんのせいだ」
夜に一人で道を歩くハヤテはこの原因となった人物を頭に思い浮かべる。なぜこうも自分が行かなければならないのか。すべての原因はテルにあるのに。

「たしかにあの時お嬢さまの剣幕に慌てて出てったからテルさんを呼ぶ暇もなかったけど・・・」

・・・それにしても最近テルさんのつまみ食いが多い気がするのは気のせいかな？

思い出してみれば、最近のテルの生活には奇行が目立つ。高尾山ハイキング以来、冷蔵庫のものを今まで以上に勝手に部屋に持ち出すようになったし、コンビニでは必要以上に菓子類を買っているのを見た。本人は勉強時に必要な糖分と言っていたが。

「もしかしたらペットでも飼ってるのかもしれない。でももしたら別に隠すことしなくてもいいのに、この屋敷は余るほど広いから、お嬢さまが気に入りさえすれば大丈夫だと思うんだけどな・・・」

今度帰ったら少し問い詰めてみよう。多分笑って躲かれそうだが、そしたら部屋を捜査してでも秘密を暴いてやらなくてはならない。

そんなことを想いながら道を進んでいると、小さな公園が目に入った。その公園を見て足が止まったハヤテ。

「この公園から僕のすべてが始まった・・・なんてテロップが入るんだろうな、ゲームとか漫画なら」

借金取りから逃げているときに、パーティーを抜け出していたナギにであった場所、『負け犬公園』だ。

思えばここからすべての始まり。この後マリアに出会い、三千院家に招かれて、ナギの執事をやることになり、ナギの幼馴染や、テルとの出会い。様々なことがあった。

テロ、誘拐、ロボとの決戦、ひな祭り、ダンジョン、高尾山。どれも命を懸けなければならなかった。今でも現実味が湧かない。

だが、どんなに命がけになろうとも、迷惑な事態に巻き込まれても、不思議とそこにイヤだという感情はあまりなかった。　楽しい、まだ続けと、そう願っていたくらいだ。

・・・僕だけこんな思いをしていいのか？

『ハヤテ・・・私とあなたは・・・ずっと一緒よ』

ふと、過去の記憶が脳裏を過り、ハヤテは頭を振る。

「はは、そうだ。　何を幸せ気分でいたんだ僕は・・・」

自分が犯した罪は決して忘れられるものではない。　あの日の過ちはいつまでも心に残るのだ。　この罪をいつか償う時が来るだろうか。

もし償う時が来たら、その時自分は。

「ふっふっふっふ・・・」

「ん？」

その公園の方から聞こえた小さな笑い声にハヤテは聞こえてきた方に目をやった。

「ふっふっふっふっふ・・・」

その声はさつきよりも大きくなり、声の主はベンチにて腕を組んで座っていた。　ハヤテは目を凝らしてその声の主を見た。

「何をそんな所で立ち止まっているのだハヤテくん」

「ゆ、唯子さん？」

ベンチに腕を、足を組んで座っていたのは上級生である奈津美　唯子だった。

「いやいや、こんなところでバッタリ会ってしまうなんて奇遇じゃないか。　ハヤテくん」

「えーっと、唯子さん。　こんなところで何してるんですか？」

ハヤテの問いに唯子は自分の横に置いてあったおでん缶を手に取り、蓋を開けた。

「私は夜徘徊するのが好きなんだ。　君はなんだ？　夜の街に繰り出

して女と遊ぶのかな？　止めておけ、そういうのは二十歳を過ぎてからだ」

「誤解を生むようなこと言わないでください!!」

声を荒げたハヤテを見て唯子はクスリと笑った。

「冗談だよ。　察するに、お嬢さまのお使いとか…かな？」

「ええ、すごいですね。　簡単に当てられるとは思いませんでした」

「君がここを通る時っていうのは大抵お嬢さまのご機嫌取りに何かを買いに行ってるのだと、そう思ってたな」

ふーんと思っているとある疑問にハヤテは気づいた。

「ということは、結構な頻度でここに居るんですか？」

「いや、ほぼ毎日だ」

と唯子はおでん缶からアツアツの大根を取り出す。

『負け犬公園』、ここほど面白い場所は無いと思つてな…こんな話を知ってるか？」

そう言つて唯子は大根を一口食べたところでそれを中に戻し、ベンチに置いた。

この公園にある一人の男が訪れた。　その男は有名大学を卒業後、大手銀行の社員として働いていたが突如としてやった覚えのない横領の疑惑をかけられてその会社の首を切られた。　自分の事件の真相を追っているうちに一文無しになり、哀れにもエリートからホームレスになった。　そんな男がこの公園で一夜過ごそうとやって来たわけだ。

「なんか闇社会の陰謀に巻き込まれた男の話ですね」

「ここで問題だ。この男が一日過ごしてこの公園から出てこの町から去つていった。　どうなったと思う？」

「え？　一文無しのホームレスですからね…盗みとかやって今は刑務所とか？」

ふむ。と頷くと唯子は続けた。

「これには正解は二通り用意されてるんだよハヤテくん、一つはさつき君が言ったのと、もう一つは思いがけない幸運を拾い上げてのし上

「がった・・・かだ」

「はあ・・・？」

と、ハヤテは曖昧な受け答えをした。なぜここで答えが二通りの答えを用意したのか。と悩んでると唯子はさらに続ける。

「私が言いたいののはだな。この公園に来た者は必ず人生でGOODかBADの道のどちらかの道に進むのだよ。不思議なことに、あのゲ○ツもこの公園で一夜過ごしてのし上がったとか」

「ええ!? ゲイツってここに来たんですか!？」

「まあそこらへんは嘘だけど。だが良いことばかりじゃなくて、最悪な方向に進んでしまうこともあるようだ。例えば・・・誘拐とか」

ギクリ。と心の中でハヤテは焦った。確かに、自分はあの日ここで狂言誘拐を実行しようとした。もし自分があそこで本気で狂言誘拐を成功させていたとして、今の生活はあり得るだろうか。そもそも、ここであのナギと出会えなければ、今ごろハヤテはどこぞで野たれ死んでいた可能性がある。

「私はこう考えている。確かにここでは『最高』と『最悪』の二択を迫られるが、どちらに進むかは、自分次第だと・・・」

一呼吸の間を置いた唯子は髪をかき上げて言った。

「だから君も・・・ここまで来たんだろう?」

鋭い目つきとなった唯子から感じた真剣さにハヤテは耳を傾ける。さきほどのお茶らけた態度とは違った態度だ。

「ちなみにさっきのホームレスになった男の話の続きだが。別の街で空から金が降ってきてそれを元手に今じゃ超有名な金貸し会社を立ち上げたらしいぞ」

「なんかどこかで聞いたことのある話なんですすがそれは・・・」

深く聞こうと思ったが、ハヤテはやめた。それよりも、ハヤテは他に聞かなければならないことが一つあったからだ。

「唯子さん、一つ聞いて良いですか?」

「ふふ。なんだ? 言っておくが、これからデートしてもいいですか?と聞かれても私は受ける気は——」

「どうしてまだ制服なんですか？」

唯子の台詞を言い終える前に放ったハヤテの一言に唯子が動きをピタリと止めた。

「最初は気にしてなかったけど、もう十時です。普通なら私服とかに着替えて一枚何か羽織ってから外出だつてするのに、唯子さんは学校からの状態そのままだ。ベンチ横にあるカバンが何よりの証拠」言葉を紡いでいくと共に、唯子の表情が険しくなる。ハヤテは意を決して聞いた。

「今日はまだ、家に帰ってないんですか？ 家で、何かあつたんですか？」

「……」

ハヤテの問いに唯子は押し黙った。表情を見る限り、ハヤテは何かとんでもない地雷を踏んだと。

これは殴られるパターンだ。

まず唯子がベンチから立ち上がる。そして下を向いたまま、ゆっくりとこちらに寄ってきて。

「あ、あの……」

次の瞬間。

「えっ？」

ぽふつ。と、柔らかな感触をハヤテは自身の胸部から感じた。

「ちよ、ちよちよちよつと唯子さん!？」

ハヤテは慌てた。なぜなら、こちらに歩み寄ってきた唯子が何をしてくるかと身構えていたらハヤテの胸に頭を当てて抱きついてきたからだ。

第107話　風呂上りのアイスはなかなか美味しい

・・・なぜ、こんな事になった!?

頭の中で疑惑が渦巻いている。ハヤテは感じていた。これはもはや不幸の前兆なのではないかと、たぶんこれはドッキリでそこら辺に生徒会のメンバーが隠れてドッキリカメラとかの看板を持ってくると思っていたが、それも無い・・・だがそれよりも。

・・・ゆ、唯子さんってこんなにいい匂いするんだッ。

丁度ハヤテの顔からしたのは顔を隠した唯子の頭があり、そこからは女性としての男たちを魅了する匂いにハヤテの心臓がさらに脈を早くした。これでは血圧が上がりすぎて意識を失ってしまいそうだ。

「ゆ、唯子さん・・・あの」

目の前にある肩に手を置こうとした時だ。自分の胸に頭を預けている唯子が小さく揺れた。

「ふふふ・・・」

「えっ？」

目を丸くしたハヤテだが、唯子は顔を伏せたままハヤテからそっと離れて顔をあげると

「はっはっはっはー!」

高らかに笑っていた。ハヤテはこれに啞然とするばかりである。

「ははっ、本当に面白いな君は。心臓の音には驚いたなく、なにか病気を発症したのかと思ったぞ」

「・・・」

数秒ほど沈黙して。

「ええ——!?!」

「なんだなんだ。そのあからさまなリアクションは。『先輩のめったに見られないか弱い乙女姿を見てラッキー、ついでに俺の手籠にしてやろうと思ったのに残念だ』といった顔は」

「勝手に想像しないでください!!」

ほっほっほ、とお嬢様のような手つきで嘲笑う唯子。ハヤテはそ

の真実に大きく肩を落とす。

「なに、ちよつとからかつて見たくなくなってみたくなくなっただけだよ。君ほどの男なら色んな女性に迫られて場慣れしてると思っただけだが、意外に純粋な反応でビックリしたぞ」

「多分ほとんどの人がこういう反応すると思うんですけど！」

その反応も面白いと思っただか唯子は笑うのをやめない。ここま
で来るとタチの悪いイタズラじゃないのか。

「さて、私がここにいる理由を君は知りたがっている訳だが。君は
そこまで私のプライベートを詮索したいのか？ 嫌われるぞ、しつこ
い男は・・・」

薄ら寒さを覚えるほどの鋭い視線にハヤテはたじろぐ。これは
一種の警告ではないかと、ハヤテの直感が訴えた。

「だが・・・」

急に顔の緊張を崩した唯子が髪を掻揚げた。そして元々座つて
いたベンチに腰掛けると足を組む。

「面白いものを見れたことだし、理由を特別に答えてやろうではない
か・・・君はここら辺で近所迷惑を働いている不良たちを知っている
か？」

不良という単語に、ハヤテが唸る。唯子はその間にもいつの間に
バッグの中から板チョコを取り出して袋から取り出す。

「奴らが働いている迷惑行為はピンポンダッシュ。ただのピンポン
ダッシュではないぞ？ ターゲットにした家に二十四時間張り付け
て三時間ごとに鳴らす極悪奴らだ」

「それは凄く小さい規模で悪さしてる不良ですね。しかも三時間つ
て・・・その人たちも夜も頑張つて鳴らしてるんですね」

「私はこう夜出歩くのが好きなわけだが、ある日奴らの犯行現場を目
撃したわけだ・・・これだ」

と、唯子は携帯の画面を見せるとそこには家の前で呼び鈴ボタンを
押そうとしている学生服を来た人物が立っていた。

「白皇と同じ進学校の大聖高校だな。頭いい連中が馬鹿なこととして
るぞお笑いだな」

パタンと携帯をたたみポケットにしまう。

「白皇と同じで、政治家の子供やら大手企業の社長の息子なんてザラだ。白皇とタメを張ろうと必死なんだろうが生徒の質で差が出てるわけだ」

「ハツキリ言いますね」

「まあこれも一部の生徒なわけだがその学校からはあまりいい噂を聞かないな。ま、ここまで言えば君もわかるだろう？　ちよつとした世直しだ」

無茶な。とハヤテは思う。確かにこの時間なら張り込めばその犯人を見つけることもできるが、この近辺の家は多い。探すことをしても見つけることはできないのではないか。

「結構骨の折れる仕事ですよこれ」

「そんな事ない。犯人をここに来るように仕向けたからな・・・おつと噂をすれば」

ハヤテが振り向くと、そこには5人の男がいた。中の男一人が口を開く。

「なあ、アンタか？　俺らの事知ってるの」

男はガムを噛んでるようで口が喋っている間も不自然な動きをしている。対して唯子は凜として答えた。

「そうだとも犯罪者諸君。私が君らを呼んだのだ」

犯罪？と唯子のフレーズに耳を疑うような声を出したのは端の男だ。

「俺らただ間違つてピンポンしちゃっただけだよな？」

「そうそう。自分の家だと勘違いしちゃつてさ」

「それに犯罪ってほどのことじゃないでしょ」

各々が呑気に笑いながら述べる。これにもハヤテは少々腹が立ってきた。しかし、その横で唯子はいつものように冷静で表情を変えない。

「はあ、お前ら本当に進学校に通っているのか？」

「あん？」

犯人である男がこちらを睨む。唯子はため息をついて続ける。

「お前らがやっていることはもはや『子供のイタズラ』では済まないレベルまでできてるのだぞ?」

そして唯子はポケットから手帳を取り出し広げて男たちに向けて言った。

「お前らが犯行に及んだところに住んでた二丁目の山仲さんはピンポンの音が原因で不眠症になってしまった

。体調を崩して今は病院で治療を受けている。そして四丁目の田中さんはこちらでも眠れなくなり、大好きな芋ようかんが食べれなくなっている・・・これは立派な傷害罪だぞ? 軽く裁判にかけられるくらいだ」

裁判と聞いた時か、ようやく男たちの顔に焦りが見えた。だが、リーダー格の男が笑みを崩さない。

「だけど俺らはまだ未成年だ。その程度の事、法が守ってくれるんだぜ?」

「まだ分らないか? その場は守ってくれても、お前らのこれからの経歴に一生モノの傷がつくんだぞ? 就職とか進学とかでどれくらい影響するのかな?」

ついでにと、唯子がポケットからデジタルカメラを取り出して彼らに見せつけた。

「このとおり、動画もあるので証拠は充分。人は本人たちの嘘の証言と、不特定でもリアルな情報をどっちを欲するか・・・頭の良いお前らなら分かるはずだが」

「・・・ッ!」

突然、唯子に向かってリーダーが手を伸ばしてきた。伸ばされた手を唯子はひらりと躲す。躲された男は焦りの表情を初めて見せた。

「そいつを寄越せ!」

「おお、そいつは出来ない相談だな。人間焦ると簡単な判断も出来ないものなのかな?」

その言葉を聞いてか、相手の男たちの顔は殺気立った顔立ちになった。ここまで言われて、行き下がる器ではないらしい。

「それだったら力づくだ！」

「何をされても問題ないだろ！」

ニヤリと薄気味悪い笑を浮かべて男たちは近くに落ちていた木材を手にとった。

「さてさて、綾崎くん。私はどうやら大変な状況に陥ってしまったているようだ」

「言われなくても分かりますよ」

ははっ。と軽く流していると目の前の男が木材を片手に突っ込んできた。勢いのままに木材を唯子の頭に縦に振り下ろす。

空を切った木材はそのまま地面に落ちた。硬い地面に硬い木材をぶつけたことにより、手がしびれてしまったのだろう。

「ふん。行動力は認めるにしても、それに見合う論理観は全くないな。まったくいいところ育ちのド三流はこれだから困る」

唯子が一瞬の内に目の前に木材を落とした男に詰め寄った瞬間。男は全面からパンチをくらったように真後ろにブツ倒れた。

「なっ！ 何をした？」

慌てるリーダーに唯子が手をパンパン、と叩いて答えた。

「ただの合気道だ。 習えば小学生でもお前らのような男で簡単に後ろに倒せる技だぞ。 まあ私のは少々早すぎて見えなかったか、勢いがつきすぎてお前の仲間が失神してしまったが」

「なんでそんなモンを白皇のお嬢様が身につけてんだよ!!」

「ふふ・乙女の嗜みというやつだ」

とんでもない嗜みを持った乙女がいたものですね。とハヤテが内心で呟くと唯子はどこからか持ってきたのか、手に竹刀を握ってひと振り。

「ぬわー！」

あっという間に二人の男が倒された。 残りの三人は角材を構えるが怯えているのか、足がすくんで見える。

「ふん、最近の男子は鍛え方がなっていないッ」

目の前の男がガードするために構えている角材を唯子は角材ごとへし折った。

「え？なんで？」

「ふん！」

啞然とする男に唯子が容赦なく一閃を見舞う。残り一人になった男は仲間が居なくなつたのを見て完全に怖気づいてしまった。

「貴様ら、いいところに通つてる癖にこんな親に迷惑をかける事してていいのか？」

「う、うるせー！俺だつて好きであんなメンドくさいところに通つてるんじゃねえ！」

リーダー格の男が声を荒げた。

「変に親に期待されて！無駄な勉強させられて、用意されたレールの上を歩く！将来は親の家業を継ぐだあ！俺の意見もまともに聞く気もねえ！親が気にしてるのは世間体だけだ！自分のお株が守りつつ、上がっていくことしか考えてねえ！」

「少なくとも、自分にはここまでする意味があるといいたいわけか？」

地面に向けて竹刀を叩いた。甲高い乾いた音が響く。

「くだらんな。期待されてるだけまだマシではないのか？お前も男だろう。親に一度たりとも逆らわないで、弱音を吐くな。立ち向かつてみる、逆境を跳ね除けてみる、用意されたレールくらい自分で書き換えてみる」

「うおおおお！！」

男が声をあげて角材を持ち、唯子に突っ込んできた。だが、唯子は相手に手加減をすることなく竹刀を一閃。

パシンという音とともに男の体がガクンと崩れ落ちた。

「ふう・・・終わった終わった」

「も、貰ったーーーー！！」

気を抜いた唯子の背後に、先ほど倒れていた男がいた。最初に倒れていた男がいま意識を取り戻したのだろう。武器も何も持たずに唯子に襲いかかる。

「唯子さん！」

言葉とともに真横から割って入ってきたのはハヤテだった。後ろから襲いかかってきた男に割り込みハイキックを食らわせて男を撃沈させる。

「不意打ちで女性に手を上げるとは……」

「ふむ。流石は三千院家の執事……優秀だなどつかの誰かさんと違って」

恐らくどつかの誰かさんとはテルのことだろうか。唯子は髪をかきあげると地面に置いてあったバッグを手に取るとハヤテに向けて言った。

「これで世直しは完了だ。 さっさとずらかろうじやないか綾崎くん」

と、ぐいつとハヤテの腕が引つ張られる。唯子がハヤテの腕を掴んでいたのだ。

「え？ちよ、ちよつと唯子さん？」

「はっつはっつはっは！」

慌てるハヤテを軽快な笑いととも唯子はその場をあとにしたのだった。

○

「……ここが唯子さんの家ですか？」

手を引かれながら走って数十分。ハヤテが来たのは奈津美と表札のある家だった。

「そうだと。 これでも普通の家よりは大きい、が君の家に比べれば小さい方かな」

「いえ、そうじゃなくて……家の敷地内に剣道場が……」

ハヤテが見た唯子の家の敷地内には家のすぐ隣に大きな建物があつた。

「まあ、昔はよくやっていたものだったがな、父の教えはなかなか厳しくて何度か私も泣かされたりした」

「へえ、唯子さんの強さはお父さんのおかげでもあるんですね」
懐かしむように唯子は言うが急に顔の表情が険しくなった。

「確かに強くなれたことは感謝している。だがその一方で父は過度な期待を私に寄せていた・・・将来道場を継がせようとしていたらしい。父は結構有名な師範だったからな」

と、少しだけ笑みを零して続ける。

「尊敬もしていたし、さつきも言ったとおり感謝していた。実際このまま親の言われた通りに道場を継いでいくのも悪くないと思っただき・・・だが」

その場からでも見える道場を見つめている表情をハヤテは見た。

どこか寂しげで、悲しそうで、怒りを感じる、そんな表情を。

「私が腕を怪我して、二度と竹刀が握れなくなったのを聞いて父がなんと云ったか教えてやろうか？」

「いえ、別に——」

「剣を握れなくなったお前になんの価値があるんだッ」

聞いてはいけないことだと思っただが拒否をする前に唯子と言いつ放った。

「ははっ、久しぶりに怒りが湧いたよ・・・いや、殺意かな？ とにかくドス黒いモノだったな。そのまま親に殴りかかってしまった。

今では愉快的な笑い話だ」

愉快的な笑い話・・・と彼女は言っているが、ハヤテはその裏の意味を探る。あの冷静で気ままに誰にも流されないような奈津美。唯子が親に遅い掛かるといふ意味は、その計り知れない激情の大きさ。ハヤテがその怒りの大きさを知る術はない。一体どれほどの怒りだったのだろうか。

「それ以来かな・・・私と父はまともな会話をしていない。ま、お互いに目も合わせないで無視してるのだからおあいこだ」

「そんな話って・・・無いですよ」

「無くなつてないものか。所詮、親は子を金の成る木だとか自分のブランドを磨くことにしか興味がない。利用して自分らの利益にな

るなら子だつてりようする大人もいる……君だつて同じ経験はあるはずだから分かるはずだろ？」

冷徹なその視線で射抜かれて、ハヤテは口を閉ざしてしまふ。自分も親に利用されて、利用され尽くされて終いには多額の借金を押し付けられて捨てられてしまった。一存に否定は出来ない。

「まあ私もアレで堅苦しい日々から解放されて今の生活が出来ている。親との関係は変わらず最悪だが、悪くはないと思つているよ」
そう言ふと、唯子は突然飛び上がり門の塀に飛び乗つた。

「さて、今日はここまでだ。付き合わせてしまつて悪かつたな……」
「唯子さん」

とハヤテが塀の上にいる唯子に呼び止めた。

「唯子さんがとても複雑な状況で暮らしているのは分かりました……でも、今日みたいな無茶だけは控えて欲しいんです」

「何故だ？」

見下ろす視線をものともせずハヤテは言つた。

「唯子さんの身はたった一つですから……替えは効かないたった一つの物ですから。それに唯子さんに何かあつたら皆さんが悲しみます。ヒナギクさんとか」

その言葉に唯子は数秒ほど言葉を失う。今までこのような事を言つてくれた人がいただろうか。

「ふふっ……」

思わず笑が零れて、唯子は砕けた表情で言う。

「まったく、君はそういう言葉を誰構わず言うから要らぬ誤解を受けるのだ」

「え!? あ、あの、誤解つて……」

「まあいいよ。素敵な言葉をありがとうハヤテ君。また……明日な」

塀の上から屋根の上へと更に飛び上がる。剣道ができなくてもその有り余つた身体能力を活かす方法はないのだろうかとハヤテは思つたが、今の彼女は今の現状で満足しているのなら無理にその日常

を壊す必要はない。

だがどこか心の片隅で思っていた。

・・・これで、いいのか？

良いはずはない。 どうにかしてあげたいとは思う。 だがどうしようもなかった。 このまま父と娘の距離が離れたままののだろうか。

「寒いな・・・早く帰らないと」

屋敷へと繋がる道を探し、コンビニでアイスを買って帰ろう。 その途中でハヤテは考える。

大切な人と心が離れたまま、一生会えなくなってしまうたらどうなってしまおうのだろう。

言い合った後に仲直り出来るのなら一時的な別れもいいだろう。 だが、その相手と仲直りする機会すら失ってしまった時に訪れるのは何か自分は知っている。 それは『後悔』だ。

改めて自分の罪を再認識する。 そのことを考えただけでただでさえ冷たい風が更に冷たくなるのをハヤテは感じた。

○

「ただいま戻りました」

扉を開けて中に入るとソファに踏ん反りかえってるナギの姿があった。 ハヤテが帰ってくるのを確認すると体を起こしてこちらを向き合う。

「遅い！」

立ち上がって一気にその距離を詰める。 そんな彼女の顔は怒りで満ちていた。

「すみません。 お嬢様、 ちょっとトラブルに巻き込まれました・・・」

「言い訳はいいのだ・・・ちよつとお前、許して欲しいならこのソファに座れ」

「え、なんで？」

いいから、と強くまた言われてハヤテはソファに座らされる。 ハヤテが座ると隣にナギもちよこんと座ってきた。

「あ、あの・・・お嬢様」

恐る恐る聞くがナギは聞くふりも見せず、ハヤテが買ってきたハーゲンダッツの蓋を開けていく。

「こ、これにはホント深いわけが——っん!?」

口に感じた冷気にハヤテが小さく反応を見せた。ただ冷たいのではなく、甘さも兼ねたその味はハヤテの口に広がる。

「まあなんだ？　せっかくお前が買ってきてくれたのだ。ちゃんと食べるし、それだけで拗ねたりはしない。それに・・・ちよつと反省してるんだ」

ハヤテの口に突っ込んでいたスプーンを一旦取り出すとナギは視線を落とした。

「こんな夜に買わせに行かせたこと。　たまに思うのだ。　自分は時々、行き過ぎた振る舞いをしてはいないか・・・って。　このまま続けたらどこかで後悔するようなことになってしまいうんじやないかって」

膝の上にアイスを置いてナギは続ける。

「お前は・・・できれば私の側から離れないで欲しいから。　変な話だな、まるで絆を無理につなぎ止める様な哀れな行為だ。　お前もそう思うだろ？」

と、全てを聞いた上でハヤテは首を振った。

「僕もたまにあるんで、それを哀れだとか、変だとか思ったりはしませんよ」

「ふーん。　それってどうせ他の女たちのことでだろ？」

「いやいや、なんでいつもそっちに繋げようとするんですか？」

ある意味的を得ているようなものだが。とハヤテは苦笑する。

それを見てかナギも笑みを浮かべた。

「ま、いいや。　それよりも、私にはしつかりお使いをしてきた従者に褒美を与えなければならぬ」

「・・・？」

とナギの顔を見てハヤテが気付く。　少しだけだが視線を逸しているナギの顔は朱を帯びていた。

「だ、だからだな・・・私が食べさせてやるよ、うん」

「え、ええ!?! そんな、勿体無いですよお嬢様!」

「ええい! つべこべ言わずに喰えよ! じゃあ私が全部喰うぞ! いいのか!?!」

元々、それはナギの為に買ってきたものである。だから全部食べられようとハヤテはどうということはない。だがそれではナギの怒りを引き出すトリガーになりかねないと直感で悟ったハヤテは。

「わ、分かりました。で、では・・・」

「う、うむ」

戸惑いながらもスプーンでアイスを掬い、ハヤテの口に運ぶ。ア
イスを飲み込んで味わっているとナギが聞いてきた。

「う、美味しいか?」

「え、ええ」

「そ、そうか・・・えへへ」

向けられたナギの笑顔の眩しさにハヤテは思った。この自分に向けられている笑顔がなくなるような事があつては決してならないと。

せめてこの笑顔だけは守らなければ、と。

「おやおや、二人はイチヤイチャ気分ですよ。　　どうい事ですかね
黒羽さん」

「そうですね。　しかしテル、貴方は何やら不満そうな顔をしています。　ハヤテさんやナギちゃんがいチャイチャしてるのを見て嫉妬しているのですか?　　やっぱりホモじゃないですか」

ハヤテとナギが驚き、声のする方へ顔を向けるとそこにはテルと黒羽の姿があった。

「ちよ、ホモじゃねーし。　嫉妬じゃねーし。　　適当なこと言うなし」

「返しがとってもガキっぽいですねありがとうございます。　さてさて二人とも遠慮せず続けてください。　　ここの室温がまだ上がるようであれば私たちはいいところでお暇させていただきますので」

言われ続けて黙っていられなかったか、ナギが声をあげた。

「お、お前ら！ おちよくりに来たのか!？」

「とんでもない。なんかアイスの匂いがしたからこれから菓子パーでも開くかと思って、どうせなら皆でやろうかと思ってさ」

とテルがビニール袋から色々とお菓子をとり出す。ポップコーンやらチョコ、スナツクの類が入っていた。

「もう少ししたらマリアさんも来るぞ。ちよつとだけなら良いって言うってたしな」

「そ、そうか・・・な、なら仕方ない。皆で少し遊ぶか。ハヤテ、残りのアイスは明日食べよう」

「は、はいお嬢様」

渡されたアイスを持ち、ハヤテが部屋を出ようとする。テルがトランプやらボードゲームをどっかから持ち出してきたか床に広げている。

・・・今、僕がやるべきことは。

それは決して過去の罪をあれこれ考える必要はないだろう。今、必要なこと。この日常を守ることではないだろうか。

彼女を取り巻くその日常だけは、守り通そう。

ハヤテは笑顔のしたで決意を固めてその部屋を後にした。

第108話　王は人の心がわからない、的なく

「そろそろ働きたいと思うのだ」

朝の三千院家、朝食が並んでいるテーブルについていた千里がそう言ったのを聞いて、場の空気が固まった。

「ハヤテ、ちよつとこのコーヒー苦すぎないか？」

「あ、そうですかお嬢様。　ちよつと待つてください、今お砂糖持ってきますので」

ナギがちよつときこちない動きでカップを手に取り、ハヤテがその中に角砂糖を一つ淹れる。　千里は片方の眉を釣り上げて、震える手を抑えながらも一度。

「そろそろ働きたいと思うのだ」

「あらナギ？　ダメですよパンくずを零しちや。　黒羽さん、ナプキンを」

マリアが黒羽から受け取ったナプキンでナギの口の周りを拭き取る。　千里は尻が椅子から5センチほど離れた所で動きを止めると肩を震わせながら静かにまた椅子に座る。

「そろそろ・・・働きたいと・・・ッ」

「うん？　なんか筋肉モリモリ、マツチヨマンの変態が重要な事でも言ってるのか？　分かる黒羽さん？」

「いえ分かりません。　私の耳の鼓膜はちよつと遠くのウドの大木さんが発している言葉を捉えることができているようです。　あ、木が喋るなんて現実的に考えてありえませんでした」

「貴様ら人の話を聞けエエ!!」

テーブルを激しく叩いたウドの大木の叫びが屋敷内に響き渡った。

第106話　王は人の心がわからない、的なく

「働きたいって・・・なんでいきなりそんな狂言じみたことを言うんだよ王様」

食事後、ある程度収まりがつき場所を外に移して話は続けられた。　千里とナギはテーブルにつき、小さなバスケットにフランスパンと

ジャム、紅茶が置かれている。千里が紅茶を一口含むと背もたれに背を預けた。

「そろそろ俺の会社を取り戻そうと思う」

「まーた何訳わからんこと言ってるんだか・・・そもそも、お前の会社じゃねえだろ」

腕を組んだ状態でテルが言うと千里が鼻を軽く鳴らして続けた。

「いずれ俺が継ぐハズだった会社だから俺の会社だ。俺の会社だから取り戻す事は当然のことだ」

「別に誰かに奪われたワケでもないのにか？」

「確かに表向きでは・・・だ。どうも今回の会社の倒産騒ぎ、俺は納得していない」

「とうとう？」

マリアが聞くと千里は側に寄ってきた自身のペット、ヘラクレスにパンをひと切れ渡す。

「あの完璧主義の権化とも言える父上が経営で失敗なんて事は有り得ない。元々他人に任せるのは信用ならないからほとんど会社の大まかな方針は父上が行っていた。だからこそここまで高い地位を築くことが出来た」

紅茶をカップの中で揺らして千里は言う。

「どうも、この倒産。何か裏を感じてならない・・・直感だが。だからこそ、俺が今やらねばならんのだ」

決意に満ちた表情。それに返ってきた仲間たちの言葉は。

「そうかそうか。うん、勝手にやっつけていくれ」

「仕事の辛さに発狂して街中で犯罪を起こすのは勘弁して欲しいです」

「なあハヤテ、これ以外の紅茶持ってきてくれないか？」

意外に冷ややかなものだった。

「オイ貴様ら。俺の話聞いていたのか？」

「ええ聞いてましたよ。別に会社を立ち上げたりするのは勝手にです。どうぞお好きにしてください・・・で、私たちにどうしろと？」

笑顔でそう言ってきたのはマリアだ。マリアはその笑顔で続け

る。

「大体、会社を立ち上げるのに何年かかると思ってるんですか。普通の人も下手したら10年くらいかかるものですよ。独立するんですか？ それに元手は？ お金の工面はできるんですか？ 経営も勉強しておかないといけませんよ？」

「……」

迫られて無言になる千里。この反応を見る限りで何も考えなしに行動を移そうとしていたということが分かる。

「やっぱり何も考えてなかったか」

「う、五月蠅い！ 俺はやると言ったらやるのだ！」

じゃあ。とハヤテが千里に一つ聞く。

「千里さん。会社を作るに当たって必要なことってなんだと思いますか？」

「なんだ？」

手札から速攻魔法を発動するくらいの速さで言う千里にハヤテがふう、と息をついて口を開いた。

「お金です。さつきマリアさんも言ったとおり、会社を作るには立ち上げるための資金が必要です。今では昔ほどお金がかからないといっても手続きやらで結局は100万というお金があったとしてもすぐになくなってしまいうでしょう。そうですね……大体1000万くらいないと始まらないんじゃないですか？」

「それくらいなら俺の口座に……」

「今千里さんの口座って凍結されてるんですよね？ つまり千里さん、貴方は資金がゼロなんです！」

ビシッとハヤテに指を差されて千里は自身の今の状況がかなりヤバイ状態だということに気付くが見栄を張って鼻を鳴らす。

「ふ、フンッ！ そんなもの、俺が金を稼げばいいはずだ！」

「そうですね……では千里さん、どうすればお金を稼げると思えますか？」

ジト目で続けるハヤテに千里が一瞬首を傾げて答えた。

「む？ FXで資金を投資して元手を増やす」

これを聞いたマリアとテルが頭を抱えた。

「ま、まさかこの状況でナギと同じ思考を持つ人物がこの世に二人といるとは……」

「なんとというダメ人間ッ！」

「お、お前ら！ 主を馬鹿にするなア——！！」

「千里さん。 今まで働いた経験は？」

「無論、ない。 今まではFXの金と親の仕送りで生活してきたからな」

先程の朝食では物足りなかったのかパンにジャムを塗って千里は口に運んでいく。 この男、食欲だけは別格だ。

「そうですか。 だったら……直接学んでもらうしかありませんね。

働くということを、その体に、ね」

「ハヤテ君、男性相手にその言い回しはちよつとアレでは……」

「なんですかこれは。 ハヤテさんもやっぱりホモだったんじゃないですかやだー」

「マリアさんなんてこと言うんですか！ 黒羽さんもジト目と棒読みのダブルコンボでありもしないこと言わないでください」

「そしてさりげなく『も』って言われているのは俺のことなのか？ 俺ホモじゃねえし！勘違いすんなし！」

木原とのホモ疑惑をそう言えば野放しにしていたなとテルは思い出したのだった。

「何が何だか分からんが、俺はやるぞ！ さあハヤテ。 俺に働くということを教えろ！ 俺の体に教えてくれ！」

この男は、さっきの会話の流れとか聴いてるのに自分で言っている言葉がわかっていないのか。 一同がそう感じながらもかくして、乙葉千里のハヤテによる「働く」というレクチャーが始まるのであった。

○

思い立ったらすぐ行動、という概念の男だった千里はさっそく外に出ることになり、一同は小さな街の喫茶店に集まっていた。

「なんでここに来たんですか？」

席に着いたマリアが辺りを見回しながらハヤテに聞く。ハヤテは人差指を立てながら答えた。

「バイト未経験者がやる定番と言ったら飲食店ですよ飲食店！ やっぱり最初はこういう小さな所で始めてくのが手っ取り早いと思っただんです」

「悪かったわね。 こんな小さな場所で」

とカウンターの方から一人の女性調の男が出てきた。この人物がこの喫茶店『どんぐり』のマスターである。

「あ、いやその・別に小さいからってどうってことはないですよ。」

ホラこの店は静かであり人も来ないからひと目も気にせず寛げるじゃないですか」

「ハヤテ、多分フオローになってない」

慌てて答えるハヤテにテルが静かに突っ込んだ。

「というかココってナギ達が働いている所だよな？ いいのか？」

「ああ、別にいいのよ。 丁度高校生のバイト探してたところだし・：ボスの別の店の店長任されてるのよ私。 それでこの店も色々大変だね？ ヒナギクちゃんとかナギちゃんの他にもひとり欲しいと思っていたのよ」

軽く笑って答えるマスターにテルは安心する。 このマスターは口調が女っぽいのが多少アレだが人格は保証できる。 だが問題は千里だ。 今までこう言った働くという行為をしてこなかった男がこの場所に適応することが出来るのか。

と、考えていると向こうのドアが開いて人が二人ほど入ってきた。

二人だ。 男女である。

「ちよつとキツイぞこの服は・・・」

ウェイターの服装になった千里がやってきたのを見てテルたちが意外にも様になっていことに驚いていた。 カウンターのマスターは申し訳なきように腕を組む。

「あらごめんなさい。 今店にあるサイズの服がそれしかないの。 テストに合格したら丁度いいサイズ注文しておくわ」

「テスト？」

と、マスターの言葉に疑問が浮かんだが千里の眉が吊り上がった。マスターが頷いて続ける。

「ええ。 やっぱり基本的な事が出来ないことにはお店側としては困るわ。 簡単なことだから安心して頂戴」

笑顔で言って千里が鼻を鳴らす。 やる気はどうやらあるようだがその一方で先程からの不安は増えていった。

「うーん、大丈夫かな？」

「はつきり言っていきなり接客というのは難しいかと思えます。 客と喧嘩するのが目に見えますね」

「アレ？ 黒羽さん、なんでアナタまでウエイトレスの格好してるのー？」

いつの間にか店の制服を着ている黒羽がいることにテルは目を丸くしている。

「せっかくなので私もやらせていただきました。 と、言うのも嘘でマリアさんが積極的に人気を取りに行けど・・・これで私の人気もうなぎ登りという奴でしょうか」

「どうって言われてもな・・・普段メイドの仕事とかしてるのにここで似たような仕事やって人気って出るのかな？」

「ともあれ、テスト行おうわよ。 そろそろ常連の暇人が来るから接客術がどれくらいのものか見させてもらうわ・・・そうね、黒羽ちゃん、だっけ？ 一番手は貴方をお願いするわよ？」

「はい、宜しくお願いします」

マスターにお辞儀をした黒羽がカウンターに向かう。 マスターが言ったとおりに程なくして店の扉が開いて呼び鈴鳴った。

入ってきたのは二十代前半の男。 片手にハローワークの本を持ってそのまま席へと座る。

「マスターの言うとおり、見た目通り暇人がやってきたよ。 下手したら一日中暇人の大人が」

とテル。

「まあカフェですることって言ったら大抵くつろいだり漫画書いたり

原稿あげたり就職本読むくらいですからね」

とハヤテ。

「いきなりハードルが高い相手がきましたね」

「なんでですか？ そう難しそうな相手には見えませんが」

マリアの言葉にテルが首を傾げた。マリアが何かスイツチ入ったように表情を変える。

「ああいう人って結構内心焦ってたりするんですよ。 次の就職どこだーとか、もうお金なくて生活できないとか、そんな悩みを抱えてる人がいたりするんです。 飲食店の接客というのはお客様をどれだけ『大切にする』かの他にどれだけ『気遣える』かですよ！」

「どこでそんな知識を・・・」

専門家のような説明をするマリアに他の三人が息を飲む。するとカウンターの黒羽が動いた。足取りは軽く、真っ直ぐに座っている客の所に辿り着く。

「いらっしやいませ。 ご注文は」

「次の求人は・・・ブツブツ・・・」

「お客様・・・ご注文は」

「俺は一体どうすれば・・・」

男は黒羽の言葉が耳に入ってきていないのか、ただひたすら座ってから本を開いて何やらブツブツ呟いていた。

「あー、アレは結構メンドクさいパターンのお客様ですよ」

「知っているんのかマリア!？」

黒羽がいる場所とは少し離れた席で座っていたマリアとナギがその様子を確認していた。

「就活捗っていない社会人って就活の事で頭がいっぱいになってしまふんですよ。 多忙期っていうのかしら・・・あの人、言いにくいですけど前の仕事場が合わなくて勢いでやめちやったタイプの人じゃないでしょうか」

「やめて自由になった方がいいがやりたいことが見つからない・・・みたいな?。」

テルの言葉にマリアが小さく頷いた。

「親とかにもいろいろと言われると切羽詰ってきますからね。取り敢えずで就いた仕事じゃあまり長続きしませんし、そういうの繰り返しで余裕がないんでしょうね」

「つまりこの状況で黒羽にとつてマズイのは？」

テルが聞いてマリアはコーヒーをテーブルに置いた。ナギはシュガースティックをまた一本追加してコーヒーの中に注いでいる。「ええ、新人バイトにありがちな『対処法が分からない』でしょう。」

この場合無理に聞く事はできませんがそれだとお客様が『俺はこんな簡単な応対も出来なかったのか』というただでさえ就活で追い込まれてるあの人をさらに追い詰めることになってしまいます」

「そういう・・・ものなんでしょうか」

「さて、ここで黒羽さんがどう対応するのか・・・見物ですよ」

と一同はその対応を見るために口を閉じることにした。

そして黒羽に動きがあった。そのまま注文を取らず、カウンターに向かっていく。

○

喫茶店で座っている男は本に掲載された就職に関する情報を見ながら今までの事を思い出していた。

「これで12社目・・・一次選考は通っても面接で落とされた。なんでだ？」

男は思い出す。元々不慣れな職場ではあったが自分は友人関係に疎く、まともな友人を作れないでいた。そもそも親に紹介されて何も下調べもなしでその職に就いたためだろうか。

特に思い入れのある職でもなかったため、辞職するときには無表情で上司に届けを出した。

それからはひたすら就活。朝起きたらネットカフェに向かい今の自分の興味のありそうな仕事を片っ端から探していき、エントリーが通ったらスーツを着て選考へ。

落ちたらまたネットカフェに向かい仕事探しの繰り返し。そして落ち続けて終わらない就活を初めて早二年。実家の両親に報告するのも嫌になってきた。

・・・やりたいことがないって辛いなア。

否、正確にはやりたいことはある。だが世間一般的にはその職業は他人から見たら相当博打のものだ。

男はただ周りの目が怖かったのである。だからこそ親の進める仕事に入り、やりたくないことを続けてきたが上司との衝突がきっかけでやめることになったのである。

・・・マジで死にてエ。　つーか俺、なんで生きてんの？

そもそも今まで自殺ということを考えなかった事こそ奇跡に近い。時々、ゲームのリセットボタンのように人生のリセットボタンがないだろうかと考えたことがあった。

・・・死ぬなら、どうせなら周りに迷惑をかけない方がいいよな。

首つりは一番困るらしいし。

ハハッ、と昼の喫茶店で何を考えているのかと自嘲していた時だ。

「失礼します」

横を向くと少女の店員がテーブルの上にコーヒーカップを置いた。

「あ、あの・・・まだ注文は」

「すみません。　お悩みを抱えてそうだったので、こちらで勝手に出させていただきました」

少女は静かに、ただ静かに告げた。　不思議な雰囲気を持つ人だと視線を向けていると、少女が口を開く。

「どうかなさいましたか？」

「い、いや・・・ほんとに良いんですか？　このコーヒー」

「構いません。　それに焦った時や、悩んだりするときはまずはコーヒーを一杯です。　人の悩みと言うのは、コーヒーを一杯飲んでる間に心の中で解決するものです・・・問題は」

振り返った少女は静かで落ち着いた状態を崩さずに言った。

「あとは、それを実行できるかどうか・・・ではないでしょうか」

そう言って少女はカウンターに戻っていった。ふとコーヒーカップの皿に添えられていた小さな紙があった。

男はそれを開く。

・・・これって。

男の時間が止まった気がした。その紙は求人票だ。ただの求人ではない。

漫画家のアシスタントの求人だったのだ。

男は思い出す。自分がやりたかったことを。体裁を取り繕う前の自分が、初めて邪念なしで本気で目指していたのは何だったかを。

コーヒーを飲み込んで、苦みとともに涙が出た。ふと、先ほどの彼女の言葉を思い出す。

『あとはそれを実行できるかどうか』

男は立ち上がるとすぐにカウンターに向かった。少女に向かって頭を下げる。

「ありがとうございます」

顔を上げた男は目を真っ赤にしながら続けた。

「俺、ホントは漫画家を目指したかったんです！でもあんな博打やめろって言われて、失敗するのが怖くて・・・でも今日、あなたのおかげでまた昔の夢を自分のやりたかったことを思い出せました！もう逃げません！」

再度頭を下げて男は言った。

「あ、あの・・・それで会計なんですけど。俺、今財布忘れちゃって・・・」

「そうですか・・・」

ポケットに手を突っ込んだ時に、最後の最後にミスをしたと思った。だが少女は目を閉じてそのまま男に告げる。

「なら、貴方が漫画家になり夢を叶えた時の、『出世払い』ということで結構です」

「あ、ありがとうございます！お、俺！頑張ります！」

少女の言葉に希望を見出した男は満面の笑みと涙を浮かべながら店を出て行った。

後に彼が某週刊誌で連載してプロの漫画家になるのはまだ先の話である。

○

「か、カツケエエエ！ カツケエツスツ黒羽さん！」

喫茶どんぐりにて歓声が沸きあがった。

「まさか一杯のコーヒーで人の人生を変えてしまうとは……」
とマリア。

「いや、でもお店的には困るんじゃないのか？ 品を出してお金を取らないのは……」

とナギ。

「まあ、漫画的にアリではないかと……」
とハヤテ。

『さつすがマスター！ ウェイトレス姿もさることながら相手の悩みを解決するその姿に感激ですッ！』

え？と、突如聞こえた知らない声に一同が耳を疑った。皆がテルを見るとテルが何やら慌ててポケットに何かを押し込んでいる。

「え？ ちょっとテルくん、今何か聞こえませんでしたか……『やー』って」

「い、いえ？ 何も聞こえませんでしたよ？ 気のせいじゃないですか？」

……このチビ！ 黙ってろって言っただろうが！

マリアの問いに目を逸らしながら、テルは手でポケットの中にいるチビハネの頭を掴んでいた。

客が帰っていったのを見て、マスターが目を輝かせて駆け寄る。

「合格ッ！ 合格よ黒羽ちゃん！ もう一発採用！ どう？ ウチで本格的に働いてみない？」

「その話ですが、お断りさせていただきます」

「ええー？ どうして？」

驚くマスターに黒羽がこう告げたのだ。

「私の場合、三千院家のメイドで働いているのでこれ以上労働力を増やす必要がありません・・・給料もそれなりなので」

確かにそうだ！ とマスター以外の人物がそう思ったのだった。

「じゃあ次はあなたの番ね。 見せてもらおうわよ千里くん」

「任せておけ」

マスターがそう言うのと千里は鼻を鳴らしてやる気に満ちた表情で言い放った。

「見せてやろう・・・王者の接客をッ！」

不敵な笑いを浮かべている千里を見て、ここにいる一同はこう感じざるを得なかっただろう。

・・・これは何のフラグですか？

第109話　王は人の心が分からない、けど

前回のあらすじ。自身の会社復活の為に働きたいととうとうボケが回ったかのような発言から始まった千里のアルバイト雇用テスト。目の前で華麗な手本を見せた黒羽の接客。そして次に、本命の千里の接客が始まるのだった！

カラン。と扉が開き、客が来たと知らせるベルが響いた。皆は固唾を飲んで見守るばかりである。

「入ってきたのは今度は普通の男性ですね。ちよつと安心しました」

メニューで顔を隠しながらやってきた客を確認するマリア。まだメニューなどは決まっていないのか、これは店側に迷惑ではないだろうか

「まだまだ油断できませんよ。俺はいつだってテーブルが飛んでもいいように鉄パイプを側に置いておきますから」

隣にいたテルがコーヒーを一口すする。テルのすぐ側の壁にはテルの愛刀・撃鉄くんが立て掛けられていた。

「私もだ。いつでもあの客がこちらに飛んできてもいいように私はハヤテの腕を掴んで離さない」

ジト目で冷静に分析するナギはハヤテの腕を掴んでいた。「何が始まるんです?」

まるで臨戦態勢のような構えの一同を見て思ったかハヤテが聞くと、テルが持っていたコーヒーを置いて口を開いた。

「大惨事大戦だ」

「いらつしやいませえ！」

千里が背筋を伸ばして、声を張った。一瞬客が声の大きさに千里の方を向くが元気がいい店員なんだと理解して、窓際のテーブルに席を取る。

「なかなか掴みとしてはいいんじゃないですか？」

ハヤテが千里の最初の入りを見て、少しだが安心した表情。だが他の三人はまだ緊張の色が見えていた。テルが険しい表情で言った。

「まだだ。問題はこれからだ」

視線を戻す。大柄な男が客のいるテーブルの横で睨みを利かせて立っていた。

「あー、お客さんめっちゃ怖がつてるぞ。さっきからメニューと王様に目線が行ったり来たりしてる」

「見た目がアレなこともあつてガンを飛ばされると勘違いしてるんじゃないですか？」

「あれで本人はいたって真面目に取り組んでることを知ってしまうと悲しいよな・・・」

三人が眺めている間にも状況は変化する。千里が注文をしない客に痺れを切らしたか、行動を起こした。

「どうした。遠慮することはないぞ、どんどん頼んでもよい。俺が許す」

「え？ あ、じゃあ・・・」

ぽかーんとした顔でいた客の男性は目を数度瞬きしてメニューを慌てて見る。そして決まったのか、メニュー表を閉じた。

「アメリカンコーヒートオムライス、サラダとドレッシング、それとデザートでショートケーキ、あと砂糖とミルクも」

「・・・・・・・・・・」

「ん？」

千里が硬直していると不思議そうに店員が首を傾げた。だがその姿を観察していたテルたちは見逃さなかった。千里の体が小刻みに震えていたのを。

そして遂に。

「貴様ア！」

「は、はいい!？」

千里はあろうことか、客に向かって叫んでいた。

「一度に大量に言われて、理解できるものかッ！ 俺を愚弄する気か！」

「い、いや、遠慮するなって言ったのはそつちじゃ・・・」

「もういい！ 貴様の食べる物はこの俺が決める！ これとこれと・・・これだ！ いいな！」

客の方も黙っていられなかったか、この千里の暴挙に立ち上がった。

「おい！ お前どういうつもりだ！ こっちは客だぞ!？」

「客だと!? この俺の前で料理を食べられる事を光栄に思え！ ましてやこの俺がお前にその料理を運んでやるというのだぞ！ いい気になるな客の分際で！」

もう限界だと、言わんばかりに客の男が千里の胸ぐらを掴む。すると千里も相手の胸ぐらを掴んだ。体格の差もあってか、千里が簡単に男の客を持ち上げる。

「成敗してくれる！」

「何やってんだテメエはアアア!!」

怒号とともに振り返った千里の顔に、テルの飛び蹴りが炸裂した。

「ゴフウツ！」

千里の手から客の男が離されて、そのまま床を転がる。一発お見舞いしたテルは着地を決めると千里の側に走ってそのまま千里の首を後ろから腕を使ってフィニッシュホールドを掛ける。

「お客に手エだしてんじゃねーよ！ お客様はかあみ様だア！」

「ぐぐ・・・離せ善立！ こいつはこの俺が・・・！」

「ち、畜生！こんな店、二度と来るかあ——！！」

千里とテルが組合っている間に客の男は怒りの形相で店を出て行った。

その客が帰っていった所で、場にひときわ高い音が響いた。音に反応して取っ組み合いを止めてその方を見ると、どんぐりのマスターが笛を鳴らしていた。

「はいそこまでよお二人さん。千里くんも、もう結果は分かるわよね？」

「・・・」

押し黙る千里にマスターが続けた。

「お客に対して上から目線の注文はNGよ。さっきテルちゃんが言ったように、お客様は神様。私たちはお客あつての商売なのよ。」

そのお客様に暴力を振るうなんて、あつてはならないことなの」

最後に顔を引き締めたマスターは一人の社会を知るものとして、千里へ告げた。

「あなたには、相手を気遣う心を知る事が大切そうね」

○

「・・・」

「あー、まあ気にすんなって。王様」

道中、テルと千里は店をあとにして次の場所へと向かっていた。

マリアやハヤテ、ナギや黒羽の面々は既に屋敷へと帰っている。本

来なら、ここで一旦終了して後日改めて次のバイト先を探しにいきたいところだったが、千里がまだ続けると聞かないのでテルが残った。「俺も飲食店業ではかなり迷惑掛けてたつて。いつも最高のラーメンを作ってる筈なのに食中毒者が日毎に量産されていくという事件が起きてだな」

どう考えても事件原因が彼にあるのはご存知の通り。

「あー、王様?」

笑い話のハズだったが、千里がノーリアクションである。マスターに言われて不合格になったのがそんなに効いたのか。

・・・王様っていうのも堂々としてるからこれくらいでへこたれるヤツじゃないと思っただけど、意外にもセンチなのか?と思っていた時だった。

「まだだ・・・」

「へ?」

「まだだと言ったのだ!」

いきなり街中で千里が叫んだ。

「この俺が、簡単に折れてなるものか!　これが宿命と言うならば、甘んじて俺は受けよう!　拒む者、望まぬ者、俺は全てを従えて見せる!　ついて来い善立!　俺の覇道は始まったばかりだ!」

「お、おう・・・」

熱い闘志を宿した瞳にテルはそう頷くしか無かった。

○

かくして、千里のアルバイト探しはテルと共に続行。数々のアルバイトを回っていった。

「あーっ！ お店の勝手に食べちゃダメでしょ！」
「いいだろう一つくらい。これくらい許容できなければ大器を成す事はできませんぞ」

あるときはコンビニのアルバイト。

「ちよつと！ なんてただのティッシュ配りなのにノルマ達成できてないの!?! ゼロじゃん!?!」

「知らん！ 誰も受け取ってくれんだ！」

あるときは街頭でティッシュ配り。

「お、王様！ 流れてくる出来損ないのパンだけを弾けばいいんだって!!」

「五月蠅い！ こんなもの、俺から見ても加賀美がいつも焼くパン以下の出来損ないだ!!」

あるときは某有名パン製造工場でのライン作業。

「あらお兄さん。 いい体してるね。 どう？ いいお仕事あるよ・・・30分で、5万。 どう?」

「おお、なんて素晴らしいバイトだ！」

「そつち行くな馬鹿野郎オオ！ お前はこの小説R指定に変更させたのかアアア!!」

あるときは街での怪しいキャッチ・・・これは全力で阻止しました。

以下、彼が挑戦した仕事は数知れず。 結果は誰もが見ても全戦全敗。

「はあ〜」

「……」

そして現在。 テルと千里は負け犬公園でその体を休めていた。

「あれから一件もかすりもしねえな……王様、元気？ まだ息してるう？」

「お、おう……なんとかな」

この世の終わりのような顔をしている千里はベンチで地面のしたばかりを見つめている。 片手に持っていた缶コーヒーが小さく揺れていた。

「てゆうか、王様。 接客業見てて思ったけど、仕事の内容覚える大変か？ 一応白皇の成績は上のクラスだろ？」

「確かにそうではあるが……この分野で学校の成績は関係ないのだと、俺は初めて知った」

「……なんとなく分かってたけど。 とんでもなくブキツチヨな奴だよなあ。」

バイト先ではまず第一に仕事を覚えなくてはならない。 飲食店なら店のメニューを全て覚え、客の要望に応える、不測の事態に対応するなど、一通りこなせるようになることが重要だ。

頭が良くても、要領が悪ければそれは使えないのと同等と言われたりすることが有るのでこういったバイト先では学校の成績は全く関係ないのだ。

「思えば難しい事の連続だ。 その中で初めて分かった事がある……俺は多分、人と話すのが苦手なのだ」

「いや、それはあるだろうけど。 多分一般論的な物が欠けてるんだと思うけど……俺も人のこと言えないけど」

接客業などは最早その仕事に慣れるしかないのだろうが、千里の場合は接客などの仕事は向かないタイプなのだろう。

「もつとお前のそのガタイを活かせるような仕事があればな。少なくとも、体力だけはあるんだし・・・新聞配達とか・・・」

「・・・ふう」

・・・あつれえく。なんか凄い沈んでるんだけど。俺からすればとてもやりづらい感じなんですけど。ため息とつかないでくれよ。

「俺はなぜこんなところにいるのだ・・・今頃俺は乙葉家の社長のイスに座って・・・」

・・・Oh、あまりのショックに現実逃避をしてる。どうすればいいよ。俺になにか知恵を教えてください。

自分でこういう時に何も出来ないことが、もどかしいものだと、テルは思った。自身も接客などのバイトをしていて色々とあつてこの執事という仕事をしている。難しく、周りから出来ない人だと言われても、自身の背負った借金の事を考えると今更やめる訳にはいかないのだ。

自分の事を考えればまだ仕事を選べる千里は良い方なのかもしれない。だが、この男にとつてただの小遣い稼ぎをするためのバイトではない。その先に見据えているのは社会を大きく揺るがすような巨大な夢だ。

「今日はもう・・・やめにすつか」

「そうだな・・・」

コーヒーを全て飲みつくして二人は立ち上がる。もう日も暮れてきた。次の日にまた出直すとしようとした時だった。

「おつきくん、ちよつとお金だしてくれないい？」

目線の先には一人の老人が数人の男に囲まれていた。 囲まれている老人は焦った表情で逃げようとしていたが、自分より大きな若い男が行く所に立ちはだかる。

「あ、あの。 どいてくれませんか？ そ、そろそろ仕事に戻らなきゃならないんで……」

「いやいや、俺らにお金渡すのが最初の仕事でしょ？」

ニヤニヤと笑いながら言う男達。 それを見ていたテルと千里が当然黙っていらられるはずがなく。

「まだ居るのかよあんな世紀末的セリフ言いながら恐喝する奴ら……」
「……おのれ下種がッ」

一歩踏み出していたのは、千里だった。 テルよりも早く、動き出した千里はもはや直感というべきほどの反応であった。

囲んでいる男ひとりの背中に千里の手が掛かる。 気付いた男がすぐさま振り返ると、千里が腕を振り上げていた。

「え？」

「この下種野郎おおおお!!」

怒号と共に突き出されたその拳は真っ直ぐにその男の顔面に直撃して、男が派手に宙を舞った。

「な、なんだこの男は!?!」

一人の男が一歩引いて驚いていると、千里が男たちを睨みつけた。
「二人のぐゝ老人に、大人数でかかるとは何事かッ これはもはや弱者のすること。 そんなことも分からん奴等にはこの王である俺が直々に成敗してくれるッ」

……ヤバイ。 ここでアイツが暴れたりしたら。

と咄嗟にテルがポケットから携帯を取り出した。 携帯を掲げながら大声で今にも乱闘が起こりそうな現場に向かってテルは叫ぶ。

「はい皆さん。今僕警察呼びましたア。将来気にしてビビってる人がいたらそっごく逃げてくださーい。居座ってたらお前ら殺されちゃうよー！ さっさとイ行け馬鹿どもオ！」

「ま、マジかよ！ 逃げる逃げる！」

テルの言葉を聞いてか、その場にいた男たちは殴り飛ばされた男を抱えると一目散にその場を走り去っていった。

「善立ッ 余計なことをするな！」

鬼の形相で今度は千里がこちらを見た。テルが電池切れの携帯をポケットにしまう。

「余計なことって・・・お前、あそこで本格的にやりあっていたら俺らが通報されたぞ。お前ひとり殴り倒してたから結構アウトかもしれねえけど。これから会社立ち上げる男が、警察にお世話になりましたって経歴作ったらダメだろ？」

「・・・だが、俺はどうしても許せなかつたのだ！あれは卑劣だ。勝負もすることもなければ、ただ甚振るだけの行為！ 王はそれを見逃すことはできんッ！」

拳を震わせて千里は言う。この時、テルは思った。この男は、どこまでも真っ直ぐな心を持った男なのだ。

「ああ、二人とも、ここで喧嘩はしないでください。私が不注意だったんです・・・」

テルと千里の間に割って入ったのは先程襲われた老人だ。

「おお、ご老体。お怪我はないか？」

「この通りです。ありがとうございます」

老人は両腕を掲げて、元気そうに力こぶを笑顔で作ってみせた。千里は目を背けて腕を組む。

「ふ、ふん・・・くだらん。礼などいらん。王としての責務を果たし

たまでだ」

「・・・いい所、持ってんじやんかよ。王様・・・」
常人なら普通に声を出して止めることも難しい。だが、この男は後先考えず突っかかって行った。

王としての責務だとか、そんな物ではなく、ただ単に本人が言っていた通り、ただ許せなかったのだ。その勇気を千里は自覚してはいないだろうが、紛れもなく誰よりも誇れるものである。

“王は人の心が分からない。けど、王は人の心の事を考えている”。

○

場所は変わり、ここは愛沢邸。愛沢家のお嬢様こと、愛沢 咲夜は居間にて寛いでいた。主に彼女のくつろぎと言えは。

「ぶわっはっはっはっは！ やっぱおもろいなあ〜」

お笑い番組の鑑賞であるが。彼女にとって、笑いというのは生活に欠かせないものであり、これを無くそうものなら自分を失ってしまうほどの大切なものである。

そんな彼女にとって日頃のお笑い番組をチェックすることは最早日課なのだ。

「お嬢様。ナギお嬢様からお電話が来ていますが・・・」

檜の扉が開かれて入ってきたのはこの愛沢家に使えている執事、巻田と国枝だ。

「ん〜？ なんやつて？」

液晶テレビの音量を下げて、咲夜が二人に問いかけた。 問いかけには国枝が答えた。

「面白いものが今日Amazonから届いたと…仰っております」

「ほー！ 面白い物かつ！ それで詰まんなかったら許さんでナギ。

飛びつかん訳にはいかんなあ」

にひひ。と笑みを浮かべるとその様子を見てか巻田が聞いた。

「では、すぐ支度なさいますか？」

「せやな。 ナギのことだからネットの動画見て影響されたもんでも手に入れたんやろ。 すぐ行くで」

と、昨夜が立ち上がる咲夜に巻田と国枝がきらりと笑みを浮かべた。

「で、では！ 我々も参ります！ 二人で参ります！ 巻田と国枝が参ります！」

「あー、別に今回は二人ともこなくてええで？」

その言葉を聞いた瞬間、巻田と国枝は身を固まらせた。 まるで石化の魔法でも掛けられたかのように。

笑いながら咲夜は続ける。

「ナギに行くついでや、ウチの新入りを紹介しとかないといかんしなあ。 だから今回は来んでもええや」

「そ、そんなお嬢様に何かあったら…!!」

石化状態から解放されたか、巻田が言うと咲夜はまたしても笑いながら言うのだ。

「大丈夫や。 アイツ、二人よりも強いから」

「がはっ!!」

「あべしっ!!」

物理的な攻撃ではないが、二人は見えないダメージを喰らい、床へと倒れ込んだ。 すると、櫛の扉がまた開き、入ってくる人物がいた。

巻田や国枝と同じ執事服の男は倒れている二人を一瞬見て何か

あつたのかと推測したが深く考えないようにした。

「おお！ ちょうどエエ所におけるやないか。 今まで何してたんや？」

男に気付いた咲夜はその男の肩をバシバシと叩くと少々困った表情で男は答えた。

「なに、別にいつも通りさ。 掃除洗濯、その他雑務をこなしてたぐら이다・・・」

「そつかそつか！ この仕事に随分なれてきたようやな。 そこで伸びてる二人も舌を巻いてたで」

咲夜の言葉に男は小さく笑みを浮かべた。

「それは嬉しいことだが、あいにく私は二人からは少々嫌われてるみたいだがね」

「気にせんでええんや。 その内収まるやろ。 ちよつとしたジェラシーみたいなもんかもしれないな・・・あ、そろそろ出掛けようと思ってたんや。 ナギン家いくんで宜しくな」

三千院家という名を聞いて、男の肩が動いた。 一瞬だけの反応に咲夜は気づかない。 するとコクリと頷いた。

「了解した我が主殿。 初めての人に紹介されてしまうのは些か緊張してしまうな」

「はっはっは！ そんなめつちや落ち着いてる風にしてる奴が言うセリフか!!」

バシんツ。 と一際強い力で男の肩を叩くと少々強かったか、男の顔が歪んだ。

「むぐっ・・・君は少しツツコミにおいても加減というのを知るべきだと思ふのだが・・・」

「気にしない気にしない！ さあ行くで新入り！」

意気揚々としている咲夜を見て、男は肩を抑えていた手を下ろして小さく呟いた。

「やれやれ・・・困ったご主人様だ」

第三章 裏か表か

第110話くテル、バトルドームをするく

「で？ 結局、王様は一日かけたにもかかわらずアルバイト先を見つめる事ができなかったと？」

三千院家邸。 相変わらずソファにてぐったりと横になってP S Pを弄っている主、三千院 ナギは椅子に座りコーヒーを飲む千里にだるそうに言った。

「だまれだまれ！ 周りの奴が俺に合わせないのが悪い！ 俺の力を理解していない社会が悪いのだ！」

今日というこの一日を使い、三千院家の一同はこの家に潜む居候、乙葉 千里のアルバイトを探す手伝いをした訳だが、結果は全滅。無駄骨という言葉が似合うほどの一日であった。

「たくよお、せつかくいい感じで締めて終わらせたのにそんな言い訳かましてるようじゃいつまで経っても夢叶えられないぜ？」

側でテルが疲れた感じで肩を回しながら言った。

「まあ今日一日で分かったと思いますが、千里様に接客業は向かないということですよ。 ジョブチェンジしましょう。 大手企業の社長という役職には貴方は務まりません。 あ、ジョブチェンジするどころか、チェンジする職がありませんね。 人生チェンジでどうでしょう？」

「あー！ 黒羽さん、これ以上千里さんのライフを削るのはやめてください！」

ハヤテが黒羽を止めるが、当の千里はコーヒーカップを口につけたまま体を硬直させていた。 よく見ると腕がプルプルと震えている。 よほど悔しかったのだろう。

「なあ黒羽、男つてのは・・・夢を見る生き物なんだよ」

流し目でそう黒羽に言ったテルを見て彼女はため息をつきながら言った。

「・・・ふう、で？ 満足ですかテル」

「や、やめて！ 『何言っちゃってんの？』みたいな 『満足げに言える立場ですか？』みたいな目で俺をみないでエエエ!!」

と、そんなやり取りを見ていてハヤテが一つ疑問を浮かべてテルに尋ねる。

「そう言えば、テルさん。 一つ聞きたいことがあるんですけど・・・」

「ん？ なんだよ」

黒羽にいじめられて出ていた涙を拭うテルにハヤテが怪訝な表情で言った。

「テルさんに、夢ってあるんですか？」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

誰もが静寂にその返事を待つわけだがどうの本人が中々喋ろうとはしなかった。 やがてハヤテが

「あっ・・・」

何かを察したように口元を隠した。

「だ、大丈夫ですよテルくん。 夢のない人って、アレじゃないですか！ 自由人って感じで！ 他人のルールに支配されない雲のような人じゃないですか！」

事情を理解したマリアが苦笑いを浮かべてテルのフォローに回る。

流石はマリアだ。 どんな時でも一流の対応をしてくれる。 だがしかし、その隣の人は。

「でも、それってダメ人間の典型的なパターン・・・」

「わー！ 黒羽さーん！」

黒羽に関しては、フォローを入れるどころか、ひび割れたガラスハートをハンマーで砕くという所業をやったのけた。

「お、俺だって好きで夢がないわけじゃないんやい！」

「な、泣かないでくださいよ」

「じゃあさ！ お前、お前は夢とかあるのかよ！」
涙目になったテルがハヤテを指差した。

「えーっと・・・特に・・・」

「お前は!？」

と今度はナギを指差す。

「私の生活を一生邪魔されない最高の豪邸に住みたい」

「もう住んでるだろうが!」

それ見たことか。とテルが両手を広げた。

「ほれ見ろ！ 俺たちの年頃の奴らが確かな夢なんて持つてるわけがないんだよ!」

「私たちに話を振るどころか、無視してしてしまうのはどうしてですかねえ・・・」

「やつちやいませんか？ マリアさん。 ほらこんな所に三節棍が・・・」
後ろの方で、話を振られるのを待っていたマリアと黒羽がただならぬ殺気を放っていたのは言うまでもないが。

○

「つて、くだらない夢談義してる場合じゃなかった。 咲夜はまだか?」

PSPを上に掲げて、ナギは足をばたつかせた。 咲夜の家には先程連絡を入れて早三十分である。 いつもの咲夜ならこの時間帯にはやってくるはずだ。

その言葉に合わせるように、玄関の方でチャイムが鳴り響いた。
噂通り、咲夜が来たのだろう。

「流石咲夜だな。 通しておいてくれ」

「お前、一応幼馴染なんだから自分から迎えに行けよ」

えー、と言った表情でナギは顔を渋らせた。

「いいじゃん。 いつも窓を蹴破って登場してお前に被害が加わるよりはマシだろー」

と、ハヤテがうんうんと頷いているのが後ろで見える。 どうやら

こう言った事が過去にはあったようだ。

コンコン。

部屋の扉をノックする音がした。部屋と玄関の距離が近いという事もあってかここにたどり着くのも早かったらしい。

「アレ？ もうきちゃったよ。どうする？ こちらから開けるべき？」

とテル。

「え？ でもいつもの咲夜さんなら簡単に入ってくると思うんですけど」

とハヤテ。

確かに、いつもの咲夜なら快活に扉を開けて近くにいたテルに飛び蹴りをお見舞いするレベルだろう。だが今回はなぜかまだ入ってこない。そればかりか。

コンコン。

「これは一体・・・？」

「まさかコレは？」

「知っているのか黒羽!？」

冷静に分析する黒羽に対してテルが声をあげた。

「こちらがノックしたらこちらが必ず開けて迎えなければならぬという高貴なる者の高貴な振る舞い、ノブレス・オブリージの象徴たる暗黙のルール・・・！」

コンコン。

「えー、ようは咲夜さんはこちらが開けるまでずっとノックし続けるというわけですね」

「なんかこつちが無視し続けて、ずっと扉の向こうでノックし続ける
咲夜を想像するとなんかシニールというか、かわいそうだな」

マリアとテルが未だにノックされてる扉を見つめるが、まだ入って
くる気配はない。これは完全にこちらが考えてるとおりにこちら
が開けない限りずっと叩き続けるつもりだ。

「よし、ハヤテ。 出番だ。 ラツキースケベであるお前の力を活か
す時が来たぞ」

テルがハヤテの肩を叩く、が。 当のハヤテはどういう理由で自分
なのか理解ができないためテルに聞き返す。

「ど、どういう意味ですか？」

コンコンツ。

「考えてみる。 この先、起こりうる展開を、まずお前が扉を開けよう
とする！ すると同時に扉が開く！ 咲夜が入ってくる！ お前が
開けようと伸ばした手が咲夜の胸にスーパータッチ！ ナギがキレ
る！ 女性陣からは暴虐の嵐！ そんな分かっている地獄に俺がわ
ざわざ行く必要はない！ だからお前が行け！」

コンコンコンコンツ！

「なんですかその超理論は！ しかもなんで僕が咲夜さんを触って他
の人たちから特に理由のない暴力を受けなければならぬんですか
！」

コココココココンツ！

「オイ！ そろそろ我慢の限界だって言ってるからさっさと行けえ
！」

「そんな無茶苦茶なあああ!!」

背中を押され、半強制的な力のせいでハヤテが前のめりになる。咄
嗟に右腕を突き出すハヤテだったが、何の因果か本当に扉が開いてし
まう。

・・・だ、だめだー！

ぼん。

「う……ん？」

まずハヤテが疑問に感じたのは、突き出したであろう右手の感触。むにゅ、という柔らかい感触のはずだが、なぜか板のようなハリのある硬さがあったからだ。

「えーつと……」

次に上を見上げてハヤテは顔を青くする。見上げてしまう時点で相手は咲夜ではない。

「ふむ。随分と手荒な歓迎だな綾崎 ハヤテ。やはりそのうっかりラツキースケベは噂通りだと言ったところか……」

ハヤテの目に入ってきたのは白髪で少しだけ肌の黒い西洋風の顔をした男だった。

○

「で？ 咲夜、これがお前の言ってたもう一人入ってきた使用人なのか？」

ソファにどっかりと背を預けているナギは相席に座ってる咲夜に尋ねた。

「せや。なかなか男前な使用人やろ？ ほれ、お前から自己紹介せい！」

「ぐほっ！」

と、咲夜に背を叩かれて前に一歩出る。男は咳払いをして口を開いた。

「はじめまして……私の名前は白銀 拓斗（しろがね たくと）だ。

訳あつて愛沢家に厄介になつてる。これから宜しく頼む」
小さく笑みを浮かべた白銀と名乗った男は、硬そうな雰囲気があつたが、どこか涼しげな面影を持っていた。

「と、言つてみたが初対面の人と話をするというのは些か緊張するものだな・・・」

「ハハッ！そんな涼しげに自己紹介しておいて今更なに言うтонねん！」

「がはっ！」

背後からのハリセンが白銀の頭部に甲高い音を立てて直撃する。

「なんかこのやり取りを見てると、この人の苦勞がわかる気がする・・・」

「全くだ。体がいくつあつても足りないな」

ハヤテとテルが同時に頷いてみせた。

「それでナギ、お前が言つていた面白いモノつてなんや。ソファアで寝そべつてないでさっさと出さんかい！」

白銀を叩いてみせたハリセンをしまうと咲夜はナギに要件を述べる。白銀も思い出したかのように手を叩く。

「おお、そうだったな！おいテル、あれをこつちへ」

寝そべっていたナギが態勢を起こすと指でパチンと鳴らすとテルがめんどくささそうに「へいへい」と言いながら箱を咲夜の目の前に持ってきた。

「ん？この箱なんや？」

「フッフッフッフ・・・これこそがこの私がネットでわざわざ探して購入した至高の物品！今大人だったら絶対一度はやつてみたかった

と言える対戦ゲーム・・・その名も！」

勢い良くナギが箱を開けると、そこには菱形の盤面があった。菱形の角の部分にはハンドルが四つ、盤面には風車やベル等の役物がいくつも設置されている。

「バ○ルドオーム!!」

「.....」

咲夜が目点を点にして見つめる。

「バトル○オーム！」

「.....」

咲夜がハヤテに視線を送るが合わせてもらえなかった。

「ツ○ダオリジナルかカラー！」

「.....」

「3Dアクションゲームツ！」

「.....」

「超！エキサイティング!!」

「.....」

「バトルドオ」

「もう、ええんや、ナギ.....」

そつとナギの肩に手を置いた咲夜だった。

「な、なぜだ！ お前だって知っているだろう!! あの金曜日の青い狸のアニメのCMでお茶の間を震撼させたあのおもちやだぞ!？」

「ナギィ.....これ、いったいいつの物なんや。何年も前のおもちやや.....ウチらももうそんな歳やあらへん」

そして咲夜はバ○ルドームのトリガー部分を握る。哀れみな目でナギを見ながら、彼女はトリガーを引いた。

「それにな、ナギ。これ、見てみい。トリガー引いてもな、球が出ないねん。エキサイティング、できないねん.....あと、トリガー.....戻らないねん」

咲夜が手を離すと握っていたトリガーの部分が、戻らずに引いたま

まになっていた。

「う、嘘だッ！ 絶対、エキサイトできるって！ えなりが・・・」
「アレな、えなりやないねん・・・」

○

「見事に轟沈しましたね・・・」

三千院家は今、静寂に包まれていた。

「チョウ、エキサイティン・・・」

全ての使用人たちの向ける視線の先には虚ろな目でカチカチとレバーを引くナギの姿があった。

当然だが、レバーを引いてもボールは出てこない。

「とんでもないハズレ玩具を買ったものだ。まあ、俺の嗜好にはまったく合わない玩具であったが」

腕を組んでいた千里がどつかりとソファに座り出す。しかし、この絶望の淵を体験している人物は風だけではなかった。

「ボールヲアイテノゴールニシユウウ・・・」

「まさか、テルさんまであのおもちやに期待していたとは・・・」

ナギと一緒に、球が出てこないトリガーを動かしていたのはテルだった。二人とも夢を打ち砕かれたようで、二つの瞳には影が見える。

「まあ、あれだけ当時熱狂していたのであれば今の子供たちが欲しがってしまっても可笑しくはないですね」

マリアに続いて、ハヤテたちもうんうんと頷いてみせる。だが、昔見ていたあの有名なレトロゲーがこんな出来だったとは二人は思わなかったのだろう。

「しかし、いつもの咲夜さんならどんな場面でもツツコミを交えて対応するのに、なぜか素の反応でしたね」

あー。とハヤテの問いに、咲夜が答えた。

「ウチもアレ買った時があつてな。ナギと一緒にテレビで影響受けて買ったのは良かったものの、いざ始める時には球は出ない、トリガー戻らない、無理に動かしたら外れる。流石のウチもナギに見せる前に倉庫行きや」

「この世界は残酷なんですね・・・」
「せやな」

*『勿論、これは一部の例であつて普通にこのおもちゃでは遊ぶことはできません』

「まあ、せっかくこつちに來たわけやしなあ・・・白銀」

「我が主、どうした」

咲夜の呼びかけに白銀が応じる。

「アレ、なんとかできるか？」

「ふむ。 そうだな・・・この場所に、ここよりも広い場所はあるだろうか？」

口元に手を当てて、バトルドームの盤面を見ながら彼は聞いた。

「ええ、ここより一つ大きい部屋が地下にはありますが・・・大体国立競技場くらいの」

「さりげなくとんでもない敷地が地下にあることを言わないでください」

「マリアのとんでも発言にテルが突っ込むと、白銀がよしつと頷き一同に言う。」

「できれば三時間ほど時間をくれないか。あと、手伝える人間を何人か貸して欲しい」

「何をするんですか？」

ハヤテが問うと、彼は不敵な笑みを浮かべてこう答えた。

「作るのさ。 誰もが楽しめる、夢をみせてくれるバトルドームを」

三時間後、白銀を除く一同は彼が指定した時間に来るよう言われた部屋に足を運んでいた。

「白銀さん、一体何者なんですか？」

ハヤテが廊下を歩く中、咲夜に尋ねる。　咲夜は少しだけ悩んで一言。

「まさしく謎の執事やな、なんでもできる」

「ほう、ちなみにこの男とアイツではどっちが有能だ？」

ナギがテルを指差すと咲夜は躊躇いもなく、

「そりや断然、白銀や」

言った。

「気持ち悪いやつだと思うけどね俺は。　なんかキザ野郎の匂いと、ホモの匂いがぶんぶんするんだよなあ・・・そう思うだろハヤテ」

「テルさん。そんなこと言っているからいつまで経っても執事として上達しないんですよ、ちよつとは白銀さんを見習ったらどうですか？」

「まったくだ。　あの執事とお前を交換できるんなら即交換するぞ？」

ハヤテに続いてナギのラッシュユが襲いかかる。

・・・なんで俺はさつきからアイツと比べられてるの？　ついさつき知り合ったばかりの人になんでこんなに比べられなきゃならないの？　イジメ？　イジメなのか!？」

テルは内心で不満を漏らす。　確かにいきなり現れた人間と自分を比べられて批判を食らってしまったら溜まったものではない。

「まあまあ、一応はテルくんだって頑張ってるんですから。　ちよつとずつ上達もしてますし・・・料理以外は」

・・・あああ、マリアさん。　やはり貴方は天使だ。

テルは涙を浮かべながら感謝する。一流のメイドたる者、容姿も完璧ならフオローも完璧であった。

「おっと・・・着いたな。　ここがアイツが呼んでいた部屋か」

話をしている間に、一行は目的地の部屋の前に着いたようだ。咲夜が扉を開けて、全員が中へと入っていく。

辺りは、真っ暗だった。

「なんや？　なんも見えへんやないか・・・おい白銀エ！　まさかまだ出来てないんかあー!？」

「お待ちせしたな主よ！」

咲夜の呼びかけを待っていたかのように、暗闇にスポットライトの光が一つ点いた。　スポットライトの先に映し出されたのはマイクを持った白銀だ。

「そして三千院家の主よ。　見るがいい！　完成された夢の世界をツ！」

白銀の合図と同時に手を上げると、天井に設置されていたであろうライトが一斉に点灯された。　その光の眩しさに一同が目を瞑る。

「うお！　まぶしっ・・・ってなんじゃこりやあ!？」

テルが次に目を開けたとき、そこには巨大な盤面が広がっていた。

中央が小さな山のように盛り上がっており、その上には四本の小さな足から出来た大きなボールが入った箱。　そして盤面には釘や

風車、ベルなどが設置されている、どれも巨大だ。　10mくらいはあるのではないだろうか。　そして極めつけは一番奥に設置されている羽役物、全部で四つある。

「ま、まさかこれは・・・!？」

ナギが輝きを取り戻した表情で白銀のいる上を見た。　白銀がいる場所は、出口と向かいにある一番奥の羽役物の上に設置されている鉄柱だ。

「そう！　超巨大バトルドームだ！」

マイクを握る手の小指を立てた白銀が言い放った。

「盤面の面積は国立競技場と同じくらい。　ボールの大きさは20m、役物は全て鉄製、四人同時プレイ可能！　三千院家と愛沢家、そ

してSONYの技術を全て結集してできた究極のアドベンチャー！」
「やっぱりこの敷地の広さは現実味が薄れますね・・・」

「ダメだ・・・突っ込んだら負けなんだハヤテ」

ハヤテとテルが目の前超巨大バトルドームを見つめながら、二人は現実を受け入れた。

「いやあ、さすがは三千院家と愛沢家のスペシャリスト達、この広い敷地にこの巨大施設を設置するために三時間で仕上げしてくれるとは恐れ入った。感謝の極み・・・」

盤面の外の観客席では、数百人に及ぶ三千院家の技術者と労働服を愛沢家のSP達がマッスルポーリングを決めていた。辺りを見回して何かに気付いた咲夜が白銀に聞いた。

「ところで白銀、これどうやって動かすんや？」

「よくぞ聞いてくれた我が主。四つの羽役物の付近にエレベータが設置されている。人数が合わないので、一つの場所に二人ずつ入って行ってくれ。二人以上のスペースは保証されている」

「よっしゃ！ なかなかの出来やないかい！ 行くでナギ！」

「おう！ ボールを相手のゴールにシュートだ！」

咲夜とナギが同時に駆け出す。先ほどとは打って変わったテンションに三千院家の使用人たちも安堵の表情を浮かべた。

「いやーお嬢が笑顔になって良かった。それよりですねマリアさん、せっかくなんで俺とペアにでも・・・」

とテルがいち早くマリアを誘おうとした瞬間、彼の体は凄まじい腕力で引つ張られた。慌てて振り向くと、テルを掴んでいた人物は千里だった。

「ちよっ！ お前、なんてことをしやがる！」

「行くぞ！ 王を決める究極の戦いがそこにはある!!」

「ふざけんな！ お前までガキのような目してんじやねえよおおお!!」

強引に、そして楽しそうに鼻息を荒くした千里に無残にも、テルは引きづられていった。

「うーん、それじゃあ二人でペアを組みますか、ハヤテ君☒」

「えっ、あ、ハイ！」

・・・テルさん、すみません。

恨めしそうにこちらを睨むテルに申し訳ないと思いつつも二人はエレベーターに向かっていくのだった。

「ふむ。 全員揃ったようだな・・・」

各エリアの鉄柱の上に、全員が現れて白銀は再びマイクをとった。

「ではこれより、ビッグバトルドーム・アルティメットバトル in 三千年院家を開催する！」

第111話くテル、バトルドームで負けるく

「ビッグバトルドーム、アルティメットバトル？」

一同が白銀の言葉に呼応するように首を傾げると、白銀が嬉々とした表情で続けるのだ。

「そう！ 今しがた、チームとなった二人でこのドームを動かすのだ！ まず使用方法を説明しよう」

そう言うとき白銀は手すり付近に設置されているコントローラーを握りボタンを一つ押した。押したと同時に白銀の付近にある羽役物が大きく作動する。

「おおっ！ なんてダイナミックな作り！」

「無論、連打をすることにより羽役物の高速可動が可能だ！」

目を輝かせるナギに対し、説明するように白金は続ける。

「この盤面はひたすら広い。一人で二つの羽役物を動かすよりもう一人のペアで一つずつコントローラーをもって連携を取りながら役物を動かしてボールを弾いた方が良いのだ」

「なるほど、コントローラーが二つあるのはそのためだったんですね」
ハヤテも感心してコントローラーを手取る。見た目はW〇iについているヌンチャクにボタンをつけたようなものだ。しかし、ここまでの手間を掛けて三時間なのだからこの白銀という男、底が知れない。

「では最後にルールだ。従来の通りに中央に設置されている籠から大量のボールが落ちてくる。それを羽役物で弾いて相手のゴールにボールを入れていく。制限時間以内に誰がポイントを多く取れるかで勝負は決まる君たちにはそれぞれ持ちポイントがあり、最初は100ポイントだ・・・ゲームは三分後だ、皆、心して待つといい！」

白銀の真後ろに設置された巨大液晶から残りの時間がカウントダウンされた。あの時間がゼロになったとき、決戦の火蓋が下ろされる。

ナギ・咲夜チーム

「ナギ、ここは幼馴染同士の最強タッグで蹴散らすで！」

「ああ咲夜！ 高橋名人ばりの連打技術をあいつらに見せてやるのだ！」

ハヤテ・マリアチーム

「さあマリアさん、楽しんでいきましょう——」

「ハヤテ君、無闇に連打して隙ができないようにお願いします。あと、タイミングを見計らって、障害物に当てながら軌道をずらしていきましょう」

「あ、あれ・・・マリアさん、ガチなんですか？」

「ええ、ガチですが・・・何か？」

テル・千里チーム

「王様、俺が左のコントローラー持つから！」

「いや、俺が左だ！ 貴様は黙って右をもて！」

「なんでそんなに左にこだわるわけエ!? お前あれだろ！ 右か左か選べって言われたら取り敢えず左選ぶタイプだろ！ お前は右！ 俺は左！」

「いや、お前が右だ！俺が左！」

相変わらず噛み合わないチームである。

白銀・黒羽チーム

「では黒羽お嬢、分からない所は私に聞いてくれ」

「分かりました。でも、さっきの手順でいいのでしょうか」

「ああ、これさえ行っていれば上手いこと勝てるだろう」

「ついでに私、センスとか体力がないので・・・」

「ご安心を、弱点を補い、勝利に導くのも執事の役目・・・ついでに、最後の方では素敵な余興も用意してある。楽しみにしているとい

「・・・？」

『バアトオルウ、開始イツ!』

カウントがゼロとなった瞬間、某世紀末アニメのナレーションの声と同時に究極の戦いが今始まった。

「うおおおおお!!」

「なんじゃこりゃああ!!」

千里とテルが見たのは巨大ボール達が波のように襲い掛かってくる地獄の光景だった。

前の視界を覆い尽くすのではないだろうかという玉の大群が様々な角度から襲い掛かってくる。羽役物の性能が良いためか、ある程度返すことができるものの数が数だ。こぼれたボールは防ぎようがなく中に入ってしまう。

「こ、コイツはタイミングがシビアだぜ! ただ連打すればいいってもんじゃねえ! 無限軌道から繰り出される玉に一つ一つタイミングを合わせて弾かないと球がどんどん入っていつちまう!」

「おい善立! さつきからボールがこっちに集中してきていないか!!」

何かの異変に気付いたのか、千里の言葉にテルがボールを弾きながら辺りを中止する。よく見ると、ほかのチームのポイントは減ってはおらず、微動だにしない。

「おい、まさか狙われてるのか!？」

「ば、馬鹿な! こんな広い所でピンポイントに俺たちを狙うことってできるのかよ!？」

『いやあ、それが以外とできるものでな』

突如、正面の巨大液晶にナギの顔が映し出される。

『上手いことに障害物となるベルとか風車があるだろ? ある一定のタイミングでそこに打ち込むと決められた方向に球が行く仕組みに

なっている。上手く利用すれば誰かを狙い撃ちすることなんて造作もない』

「ば、馬鹿！ そんなどうやってお前わかったんだよ！」

液晶に向かって叫ぶテルにナギは表情を変えず淡々と言った。

『そりゃ計算すればできるだろ』

・・・忘れてた。こいつそう言えば一応頭良かったんだ！

となるとだが、残りのチームはどう対応しているのか。だが、そんな考えもすぐ失せてしまった。なぜなら向こうのチームには。

「ま、マリアさん・・・テルさんばかり狙うのは」なんでなんですか？」「いやですねーハヤテ君、ここで私たちがターゲットを変えたらそれは空気読めないKYってやつですよ？流れのままに、あくまで流れのままにですわ☒」

天才的、なおかつ遊びに本気な最強メイド。

「白銀さん、この調子で宜しいですか？」

「完璧だ。こういった作業は君に任せて正解だった。寸分の狂いもない。なあに、君のようなハンデがいればこれくらいの戦術は用いても問題ないさ」

制作陣ことセコ執事たちがいるのだ。これでは計算されて狙い撃ちされても仕方がない。

「だ、だとしても・・・この仕打ちはあんまりだアアアアア!!」

まるで炎を操る古代人が腕を破壊された時のような顔でテルは叫んだ。この世に神などいるわけがない。いるのは敵、全方位、敵のみ。

「王様！ お前も一応白皇の生徒だろ！ あいつら見たく角度計算して反撃してくれよ！」

このまま負けてなるものか。とテルは最後の望みを千里に託した。帝王学を自ら学び、白皇学院に通う彼ならこの絶望的状况を打破できるはずだと・・・だが。

「.....」

黙り込んだ千里にテルは額に汗を浮かべている彼を見て伺った。

「王様・・・まさか、こういう計算は苦手?」

「うおおおおおおお!!!」

まるで何も聞こえなかったかのように千里はひたすらボタンを連打。だがその連打も虚しく、数の暴力によりみるみるポイントが減らされていく。

「チクシヨー! 脳筋でチームなんて組むんじゃなかったア! こうなったのも全てあの白銀とか、いや、俺に敵対する全ての勢力のせいだア!」

テルは自分たちのチームの残りの得点が既に半分になっているのを見て、覚悟を決めたようにコントローラーを手放した。

「おい! 善立、なぜコントローラーを破棄する! 勝利まで破棄する気か!？」

傍から見れば、敗北を受け入れるようだと思うのは当然だ。だが、テルはゆつくりと振り返る。そこにはいつもの悪い笑みを浮かべた彼の顔があった。

「馬鹿言っちゃいけないよ。頭が悪くても俺らには俺らのやり方がある! ついでに、向こうがワルなら・・・俺たちはその上を行くワルになる」

そう言いながら彼はポケットに手を入れてもう片方のコントローラーを千里へ手渡した。

「貴様ら全員、駆逐してやる！」

○

・・・最初にテルくん達を狙撃しちやったのは少しかわいそうでしたか。

向こうで反撃の狼煙を上げていることも知らないマリア。ゲーム開始早々に偶然とは言え、テルのチームを袋叩きにする結果となったことには少々心が痛んだ。

・・・残り時間を考えると、そろそろ別のチームから攻撃が来そうですが。

マリアがそう懸念していた時だ。不意に目の前にボールが飛んできた。一発ではない。数は三発。その全てが羽役物をすり抜けてゴールへと入った。

「なっ・・・！」

「これは一体どこから・・・？」

マリアとハヤテは自分たちの点数が初めて減少したのを確認し、再び視線を前へと向けた。よく見ると以前ボールはテルたちのチームに集中しているが、同時に大量のボールがほ散乱していた。

・・・向かったボールが殆ど返されている、一体これはどうやって？羽役物だけじゃあの数ほ捌ききれない！

「ま、まさか!？」

ハヤテが何かに気付いたようにテルたちのチームへと視線を向けた。そこにはなんと

「どおおりやああ!!」

向かってくるボールを鉄パイプで打ち返しているテルの姿があった。

「そう、真にこのゲームを制する方法・・・それは、俺自身が羽役物になることだったんだ」

「どういうことだ？」

千里が険しい顔で聞いてくるがテルは鼻で笑って次々と来るボールを愛刀撃鉄で打ち返していく。

テルが弾いたボールが他のチームが放つ射線に入り、その射線を通るボールがお互いに弾き合った結果、全てのボールを邪魔してランダムに散乱するようになったのだ。

「ふむ・・・身を使って遊びにあそこまでするか。噂通りと言ったところか」

「まったく・・・」

遠くで果敢にもボールを弾き飛ばしていくテルを見据えて、コントローラーを作動させながら白銀は呟く。

隣にいる黒羽も呆れたような口調で言うのだ。

「負けず嫌いのとこう言った小さな事でムキになるのは相変わらずです。袋叩きは嫌だったのでしようね」

「とうとう?..」

「以前、スマブラでファルコン三体和オリマーでテルを袋たたきにしたものですから。流石に二回目は耐えられないでしょうね。煽り耐性低いですから」

「言ってくれるねえ・・・とはいえ、反撃されるとは思わなかったな」
少しだけ、白銀は驚いていた。よく見ると、テルの弾き方はちや

んと反撃に転じているものであった。弾いたボールで場を攪乱させ、自分らだけでなく全体へと攻撃する。そしてボールを叩きつけるように弾くことで大きくバウンドしたボールは羽役物の上を超えてゴールへとシュートされていく。

「くおらあ！ テル、それは卑怯だろ！」

「そこまでする必要あるんかこのボケェ!!」

液晶画面にナギと咲夜が怒りを露にして映りだした。今にも画面から飛び出てきそうである。

「勝てばいいんだア!! 今は悪魔が微笑む時代なんだぜエ!!」

しかし、この執事は外道。勝つためならどんな手段でも使って勝とうとするまる世紀末漫画、羅漢撃の使い手の如く彼は高らかに笑うのであった。

そんなやり取りも束の間、テルが止めとばかりにナギたちの方へ最後のボールをシュートさせた。その瞬間、脱落を知らせる激しいブザー音が鳴り響く。

「やったぞ善立！ 反撃成功だ！」

劣勢から一気に巻き返すことで顔をしかめていた千里も声量が変わる。彼もひたすら連打を行ってテルのこぼしたボールをうまく弾いてくれた。

「まだまだだぜ王様、こんな支配じゃ生温い、ぬるいぬるい、ぬるすぎるッ！ 次はマリアさん達だ！今からでも十分逆転可能だぜ！」

二人が次の狙いをマリアたちに絞ろうとした瞬間、二人の動きが止まった。突如として脱落を告げるブザーが鳴り響いたからだ。

「な、なんだ!？」

慌ててテルが確認すると、そこにはポイントをゼロにされ、脱落してしまっただマリアとハヤテチームの姿があった。

「くっ、いつの間にかこちらを狙い撃ちしていたとは……」

コントローラーを置き、不覚をとってしまったという表情のマリ

ア。その視線の先には白銀と黒羽チームだ。
「フツ、戦いは柔軟な思考をもつて当たるべし。この状況を作るために狙いを変えさせてもらったよマリアさん。そしてありがとう黒羽嬢、君の正確な計算の元、手ごわいマリアさん達を倒すことができた」

小さく笑みを浮かべて白銀は呟く。そして横の黒羽に対し最大限の感謝を述べると彼女はいつもの表情でコントローラを動かしながら彼の顔を見る。

「いえ、朝飯前だ・・・とでも言っておきましょうか。これでマリアさんに一つだけ上手いこと勝てる要素が見つかったのではないかと、私の自信へと繋がります」

「そ、そうか・・・よほど日頃劣等感を感じるようなことがあったのか。

ま、この状況を作り出せたのは好都合、黒羽嬢」

と、彼はコントローラーを黒羽に渡す。

「・・・？」

突然の事に訳が分からず、ただ渡されたままにコントローラーを受け取る黒羽に構わず白銀は続ける。

「私は確か言ったな、『素敵な余興をお見せしよう』と」

ニヤリと笑った彼はすぐさま視線をテルたちへと戻して液晶画面を駆使して言った。

『テル、と言ったか・・・一騎打ちという結果になってしまったが、ここで一つ提案がある』

○

「提案？」

目の前の液晶画面に映し出された白銀を見据えたテルに、白銀は続けた。

『最後にただ時間を持って余してただ打ち合うのではつまらない。だからこうしよう、負けた者は勝った者の命令をなんでも聞くというのはどうだろうか?』

「はっ?」

少し威圧感を込めた一言に対し、彼はその表情を崩さず続けた。

「なに、そこまで酷い事はしない。三千院家と愛沢家が双方納得できる無理のないレベルの命令だ」

・・・何を企んでる?

明らかに無理ある命令を出すのが丸分かりだ。ほぼ直感だが、テルの野性的直感は結構当たる。当然、その本能に従い、彼は断るはずであった。

「悪いが野郎の誘いに乗るつもりは——」

「いいのか? いつまでも私に見せ付けられていて」

その一言が耳に刺さり、テルの言葉が区切られた。

「ここで一つ勝てる要素を見つけておかないと、これから私が来るたびに常に比べられると思うが?」

いいのかい?と悟らせるようなその笑みを見て、テルは口元を引きつらせる笑みを浮かべていた。

「いいぜえ? 別に見せ付けられるのなんともねーしい? でもこれ一応勝負だからあ? アンタがどうしてもつて言うから仕方なくだしっ?」

・・・煽り耐性低いな。

と自らの提示した条件に乗ってくれたのを感謝するとともにテルの煽り耐性の低さに呆れる白銀だった。

『では最後の決戦をしよう・・・と、その前に我々に少しハンデをくれ

ないか?』

「ハンデ?」

『ああ、君はどうやらあまり必要のない要素の戦闘できる執事らしいから、そういう力技ができるのだろうが、こちらは生憎そういうのができないのでね、ちよつとした戦術を使わせてもらってもいいだろうか?』

・・・戦術だと?

テルは考える。今までに制作した本人による攻略法を駆使して点を削ってきたのに、ここで加えて戦術を用いる必要があるのだろうか。本来なら深く考えるべきだったが。

「いいぜ」

彼は心境は先程の白金の挑発で冷静な判断をくだせていなかった。簡単にもその案を通してしまう。

「いいのか善立?」

睨むように、千里がこちらに訪ねるがテルはへらつと笑って返した。

「構わねえよ。こっちが勝てばそれでいいんだから」

『では、了承を得た。これより最終決戦を行う』

○

「フウ——ツ」

液晶画面から白銀は姿を消した後で小さく、そして長く息を吐いた。

・・・上手いこと、ここまで持って来れた。私にとって、この先を左右する一つのポイントが・・・ここだ。

目を閉じて、意識を集中させる。一瞬、失敗という不安が肩の動きを鈍くした。力が入っているからだろうか。

「白銀さん、何やら肩に力が入っていると見受けられます」

こちらを気にかける……とは程遠い黒羽の無機質な声が聞こえ、彼は反応する。

「所詮、遊びなんですから。楽しまなければ損損……あの野蛮人には少しお灸を据えてやらなければなりません」

「……」

ふと、白銀は我に返った。一瞬、自身が作り上げた天井を見上げて迷いを捨てるべく息を吸い、吐く。目の前の少女に気づかれないようにだ。

「いやあ、勝負事にはどうやら弱いらしくて……威勢良く啖呵を切ったのは良いものの、一瞬緊張していたようだ……」

先程の緊張をそよ風と感じるかのように、彼は本来の落ち着きを取り戻した。やれることはやっておかなくてはならない。今は目の前の事に集中するのだ。

「では黒羽嬢、これをつけてくれ」

「……これは、耳あて？」

黒羽に渡されたのは黒の耳あてであった。

「ただの耳あてではない。これはイヤーマフといい、耳あてと耳栓もできる物だ。軍隊の射撃訓練などでよく使われているらしい……ちよつとこれから必要になるからつけ——」

「……？」

既に黒羽はイヤーマフを説明される前に装着。なので、白銀の言葉は彼女にはまったく届いていない。理解できないといった表情である。

「まあ、いいだろう」

「おーい！ まだかよー！」

と、準備が整ったと同時に遠くでテルが叫んでいた。やれやれこれだから血の気の多い奴は困る。と内心で苛立ちを抑えながら平静

を装いつつ、彼らと向き合う。

「いいだろう。ならば、ここからは私の全力の戦術を・・・お見せしよう！」

ゴンツ。

と、鈍い音と共に黒の細長い筒が白銀の足元に現れる。筒からさらに一本の物体を取り出し、テルはそれを確認して絶句した。

「オイイイイ！」

「どうした？」

「どうしたもこうしたもあるかア！　なんでそんな物騒な銃持ってきてんだよオ!!？」

筒から取り出された黒い物体、それは長く、そしてごつい形状をした銃であった。一方の持ち主である白銀は何食わぬ顔でそれを組み立てると、こちらに向けて構えてみせた。

「これが我々の戦術、もといタクティクスだ」

「タクティクス（物理）じゃねえか!!」

テルから容赦ないツツコミが入るが、彼は物ともしない。

「君だつて了承したはずだ。　大丈夫だ、射撃の腕には自身がある」

・・・そういう問題じゃねえって。

心の中で再びツツこんで見えるものの、白銀にまんまとハマられたとテルは悟った。　そうしている間にもゲームが再開され、止まっていた時間が動き出す。

ならば、とテルは動いた。　先手必勝、相手のポイントは削りきれてないし、時間を考えると攻撃に時間を費やしたほうが良い。

「ボールを相手のゴールにシュウウウウ!!」

向かってきたボールの一つを撃鉄で打ち返す。　盤面を転がっていた幾つかのボールにも当たり、反射を繰り返して三つのボールが奇

跡的に白銀達の方へと向かっていく。

「おお、三つ揃ってなんとやら・・・上手いこと捌くとするか」

だがこの三つの軌道、バラバラなのでそれでこそピンポイントに射撃をしなければ捌くどころかヘタをすれば点を取られることになる。

・・・鈍っていなければ問題ないのだが。

と銃を握った感触がマッチしたのを見て、彼は確信した。直感的にいけると。

迫ってくるボールを冷静な瞳で捉えると彼は持っていたケロベロスを構えて狙いを定める。そして一瞬ほど考えたあと引き金に指を掛けて

「では」

第一射。狙ったのは三つのうち右側のボール、掠めるように端に当たってボールの軌道を変更。

「次」

第二射。次は一番手前のボールを狙い、当てて、軌道をずらして後ろのボールへと当てさせた。こうした結果、すべてのボールはゴールへまっすぐ向かうことはなく羽役物の可動のみで十分対処可能となった。

「いやあ、無茶苦茶だよ。何アレ？コマンドー？」

呆気にとられているテルの目の前にボールがやってくる。これをまた同じく打ち返したのだが。

「なっ!？」

ボールを弾いたのにすぐその後ろからもう一つのボールが現れる。タイミングを狂わされたこともあり、ボールはテルを下敷きにしてゴールへとシユート。

「なんだこの軌道ッ!？」

千里も羽役物で弾こうとしたが、ちょうど二つの羽役物の間にある絶対の死角に球が入ってしまったため、為すすべがなかった。

それからというものの、ボールは真っ直ぐにピンポイントでその羽根物の死角を目掛けて飛んでくる。確率はどれくらいのものだろうかと、殆どの人間が疑念を抱いていた。そう、白銀を除いて。

・・・良好だ。

目の前の光景を見て、手応えを感じながら、彼はそう思う。今テールが苦戦しているこの軌道は全て偶然ではない。全て、白銀による精密射撃が可能にしていた。

一つのボールの軌道を変えて他のボールへとぶつけて相手のゴールの中央へ向かわせる。傍から見ればイカれてると思っても仕方がない。だが、他の役物の特性、跳ね具合など全て計算に入れた射撃が彼、白銀 拓斗にはできる。

・・・だが、彼もしぶとい。

そうやって彼はテルを見据える。先程から大量失点しているものの、相変わらず来るボールは零しはあるものの打ち返している。まだ諦めていないようだ。

・・・まだあんな目をしている。

逆転可能だ、まだこれから、終わっていない。そんな意思が滲んで出るような瞳だ。

「チッ」

忌々しそうにそう舌打ちをして彼は最後の仕上げに入る。何も抵抗出来ないくらいに一瞬で決める。そう決めて彼は銃を構え、狙撃した。

「ぬおおおおお！なんじゃこりゃあああああ！」

軌道をずらし、ゴールへと確実に入るように調整されたボールを数珠つなぎになるのではないかという位に一直線になったボールがテ

ルたちへと迫る。

その数十。一つでも弾こうとテルが撃鉄をぶつけるがその一瞬で後ろのボールがぶつかり合って威力が増大し、一気にテルを押し込む。これを入れられたら、テルたちは終わりだ。

・・・落ちろ、落ちたな。

連結されたこの力に抗う術など存在しないと、勝利を確信した白銀だったがそれは予想外の結果をもたらす。

「おおおおおおおおお!!」

叫びとともに彼は耐えていた。力の限り、鉄パイプで受け、その二本の脚でその勢いを殺している。やがてボールは勢いを完全に殺し、力なくすべてのボールが辺りに転がった。

・・・なんて奴だ。力技だけでなんとかできるものか？数個だけ弾くだけならまだしも。やはり、潜在能力だけは馬鹿にできないようだしすが・・・。

と最後に出かけたその一言を胸にしまった。今は全ての筋書きを揃えて進めることが大切だ。

「王様！　まだやれる余力はあるだろうな？　こんなんで負けたら王族の名に傷が付くぞ！」

「そんな小さな猫に引つ搔かれたような傷ごとき、いくら付けられても効かぬわ！　貴様こそ、この程度で根をあげた訳ではないだろうな」

「当然よ・・・なら」

行くぜ。　とテルと千里が勢い良く構えた瞬間。

ブツ———!!。

甲高いサイレンに、二人は身を固めた。　いや、二人だけではない。その場にいた全員が唾然としただろう。

「ちよ、え？　アレ？」

鳴り響いたのは、制限時間が無くなったという事を知らせる・・・
試合終了のサイレンだった。遠くでその瞬間が確認できたことを
理解した白銀は静かにケロベロスを構えていたのを下ろし、安堵し
た。

「点差は圧倒的・・・とまではいかないな。我々もいつのまにか29
ポイントしか無かったとは。いやあ、君たちも頑張ったよ残り8ポ
イントじゃないか。うん、踏ん張った踏ん張った」

うんうん、と両腕を組んで頷いている白銀など気にも止めずサイレ
ンが鳴ってからずっとフリーズの状態を貫いていたテルだったが遂
にそのフリーズを解いた。状況を確認し、夢か現実かの区別をしつか
り脳内で行い、頬を抓っても、変化しない点数と遠くでナギが咲夜と
一緒に『YOU LOSE』という画用紙を掲げていたのを書くにし、
これは現実なんだと受け入れて、彼は絶叫した。

第112話〜テル、愛沢家で執事になる〜

世の中には勝ち組と負け組と厳しくもそう仕分けられてしまう人間がいる。商売競争、スポーツ、学業、クラスでモテたかモテないか。彼女いるかいないか。リア充か非リア充か。挙げていけばキリがないのでここでは割愛させていただきます。

「どうか……この恨みを」

泣きすぎるような声。地に落ち、負け犬の烙印を与えられた人々の恨みは木の根よりも深い。

「それで……こんやはどのどいつをやってくれと、おっしやるんでえ？」

だがそんな晴らせぬ恨みを晴らす希望は確かにある。それはあどけない声だったが、負け犬の烙印を与えられた男に希望を見出すには十分だった。男はその小さな少年少女たちに土下座をし、恨みつらみを低い声で言うのだ。

「ああ……ほぼ私の部屋で勝手に居候を繰り返しているその筋肉モリモリのマツチョマン変態、ええそうです。あのバカ面で馬面でパセリが大っ嫌いだと駄駄を捏ねる、悪徳高利貸の千里でございます」

懐、もといポケットに手を入れて目の前に差し出された物は100円均一の酢昆布。これは依頼料だ。金で幸せが買えずとも、酢昆布で恨みは晴らしてくれる。まったく、いい時代になったものだ。

「あくどくこうりかしかねのもうじゃ、ぱせりきらいなきんにくせんり！ おいのちちようだいいたす！」

持っていた刀を表現するであろう新聞紙を筒状に丸めたものを目の前にいる大男の膝めがけて叩く。虫も殺せないのではないかと思われるその威力にどうリアクションをとったらいいか分からない大男こと千里はヘルプを求めるごとく土下座している男が明らかに『空気読めよ』と言っているのが分かったので。

「あ、あひいー ヤラレタでござーる」

大男は似合わないような素っ頓狂な声を上げて大の字に倒れ込んだ。

「おめえさんのうらみ・・・はらしてやったぜ」

悪徳商売人を成敗した少年少女たちは新聞紙を無い鞘に納刀するように一連の動作の後に依頼料で得た酢昆布を口に含みながら締めとなる決め台詞を言うのだ。

「テル兄いー、酢昆布とかもう飽きたよー」

「ちつがーう!! なんで酢昆布ウ? カットカットー!!」

両の手を叩いてテルが全ての動作を止めさせた。同時に倒れていた千里も起き上がる。

「咲夜ブラザーズ、なんであそこで酢昆布って言ったの? 『世の中こうも悪い奴らが多くちやキリがねえな』 でしょう。 あそこで決めておかないと中村主水じゃないよ!」

だって。と不満げに呟くのはおかつぱ頭で良く見ると咲夜に似ている少女だ。

「練習に付き合っただけだからさあ、もう少しマシなものなかつたんかいな。 ケーキとかクッキーとか・・・なあ朝斗」

「日向・・・正直、口の中が酸っぱくて辛い・・・甘いのがええねん」

隣で言うのは同じく咲夜と似た黒髪の少年だ。 ため息一つついて日向が千里に呟く。

「あくあ、筋肉の兄ちゃんももう少しマシな演技してくれたらなあ、これじゃ大根の方がマシな演技するよってくらいや」

「その例えはあってんのか? あってないやろ!」

キレのあるツツコミがハリセンとともに日向に炸裂する。 流石

は咲夜の家族と言ったところだろうか。

「よし、それじゃあ気を取り直して次は仕事人名物『いつもの堀から華麗な暗殺』やってみよう」

おー。二人が同時に同意した時だった。

「ウチの兄妹になに教えてんのやああああ!!」

「アツ——!!」

顔面に突き刺さるのは新聞紙ブレードではなく、竹刀だ。竹が織り成した甲高い音とともにテルが大きく仰反る。

「い、いてえ！ いてえよ咲夜！ 何も本気で叩くことないだろお！ 傷心の俺に何てことをツ 今の時代、メンタルケアがいかに大事なのかつ 分かってないなあ!？」

顔を抑えて本気の涙目で訴えるテルだったが咲夜は竹刀を振るう手を一旦止める。

「あん？ そんなん知らん、豆腐メンタルならそのまま崩れてしまえ。

その先は知らんで、鋼メンタルじゃないテルが悪いんや」

一蔑された。もはやこの世に神も仏もない。テルは痛感したように膝をつく。

「というか、なんで今更仕事人？ なんか趣味がオツサン臭くなってきたなあ」

「こ、この野郎！ 仕事人馬鹿にするなよ！ 中村主水最高だろうが！ セコイとか嫁姑にいびられて情けないとか言うな！ 最強の剣豪なんだぞ！ そうだろお前たち！」

テルが朝斗と日向に同意を求めるが。

「どつちかっていうと花屋の政がええな」

「ウチは組紐屋の竜やで」

朝斗と日向の趣向の違いにテルは一瞬ぐらつくが再び平静を取り戻す。

「ど、どうや…ワイの洗脳でこいつ等はもう仕事人の虜やで」(ニツコリ)

「さりげなく関西弁使うなや全くもって気持ち悪い。 だいたいなあ……」

と、話を切り替えて咲夜はあたりに散らばった新聞紙をまとめながら言った。

「そんなんやから屋敷追い出されたとちゃうん？」
ピシッ。

と何かが砕ける音、そして。

「ぶばアアアッ!!」

「うおっ、ギャグ補正のかかった血を吐いたッ!!」

「ああああああああああああ!!」

吐血。そのまま床を転がりまわる。見ているのが辛くなるほど転がり始めた。

「やっぱあの日から大分可笑しくなってるなあ・・・頭が」

「うむ・・・俺でも分かるぞ。あの壊れっぷりは」

「チャウネンチャウネン！ オイダサレタンヤナイネン!!」

床を回るのは飽き足らず、壁まで転がり始めたテルは天井に到達したとたん落下し、真下にあったツボに頭から入った後、動けなくなっているところを朝斗と日向に竹刀やハリセンで襲われ始めた。

咲夜と千里はちょうど二日前の三千院家邸で行われたゲーム大会後のやり取りを思い出していた。

○

「二ヶ月間の執事交換？」

三千院邸で行われていたゲーム大会。白銀はゲームで負けたら勝ったチームの言う事をなんでも聞くという条件を出した。そのゲームでテルたちのチームは惜しいところで負けてしまった為、白銀の条件を飲まなければならなかった。

その条件がこれである。

「実は、我が主とは以前から提案していたことだったのだ。私は執事という職を始めてから、まだ日は浅い。別の場所で経験を積むことも、いい修行になると思ったのだ」

それに、と白銀は付け加えて言う。

「君も確か執事を始めてまだ3ヶ月弱と聞いた。慣れた環境で実力を上げていくより、短期間の別の環境で研修を積むことが良いスキルアップに繋がるといいう、君にとつても悪くない条件だと思うのだが？」

嫌味たらしく言う彼の言葉に一瞬憤りを感じたテルだったが大勢の事前、こらえた上で白銀に待ったを掛けた。

「一方的に決めちゃあいかなでしょ！ そつちの関西お嬢さんが納得してもこちらの三千院家のお嬢様はそう簡単に俺を手放せるはずがないのッ!!」

「おう、いいぞ交換しても」

「そうだよなあお嬢。俺を簡単に——え？ 手放すの？ マジで？ ワツツ？ ホワイ？」

「交換成立だ」

とナギと白銀が納得したように互いに互いに握手をしていた。 いやいや、とテルは割って入る。

「お前ら、なんでそんな簡単にポケモン交換みたいな感じでトレードしちゃうの!!? 俺はレアポケだよ！ どれくらいレアポケかって言ったらエンテイ的な感じだよ！」

「あー、炎の牙しか使えないならエンテイいらんわ。 鳴き声しか覚えてないからなお前」

ぶつちやけ。とナギはテルに言い放った。

「私はハヤテとマリアと黒羽さえいてくれれば後は別にいい・・・なぜならお前より断然有能だからだ」

・・・あー言つちやったよ。最近立場的に俺ここにいる意味あるっ

て？ 感じてたけど口には出さなかったのにコイツ言っちゃったよ。絶対に気にしないようにしてたのにコイツ言っちゃったよ。

「ああ、そうだ。千里には何もいいのか？」

「お、そうだった」

ナギに聞かれて思い出しかのように手を叩いた銀は今度は千里に言うのだ。

「君にはそうだな。この一ヶ月以内で新しい家を見つけてもらおう。多方だが君の事情は知っている・・・だがこのニートに似たような生活、君にはあまり良くない」

「に、ニートだどっ!? 貴様、言葉を慎め！」

「いや、ニートじゃん」

と間にテルがツツコミと更に白銀は続けた。

「勿論、無礼を承知だ。だから君には更に提案がある。これは後で君と話し合って決めたいのだ。これを聞けば君は納得せざるを得ないだろう」

話が円滑に進んでいくこの状況に、全ての人は何も違和感を感じていなかった。この状況をただひとりこの白銀 拓斗が作り出し、白銀 拓斗がこの世界を回している。そう言っても過言ではない。だからこそこの空間では何も反論できない。

・・・ここは一旦従ったほうが良さそうだな。

この場所で反論しても、ただ周りから要らない反感を買ってしまうと考えたからだ。不覚にも「逃げる」という選択肢を本能で選んでしまったテルは心底ダメージを負った。肉体的にはない、精神的にだ。

こうして、一ヶ月間の交換条件が成立してテルが愛沢家に移ることになって二日がたったわけなのだが。ここでテルが受けていたショックというのは三千院家にいられなくなったということではなく

「ああああー！ー！ー！！ マリアさん！ マリアさんに会えないー
いいいいいいいい！！！」

そちらの方がよっぽどショックだったようだ。

「なんで反論しなかったんだ俺の馬鹿野郎！」

「五月蠅いわこの馬鹿者が！！」

咲夜と千里の蹴りが確実にテルにクリーンヒットして、漸くテルの暴走が止まる。だが直様に、ノーダメージのようにむくりと起き上がるとすぐ反論。

「だったらさあ、お前らだって、お前らだってなあ！ そういう体験してみろよ！ 俺がいつも何を思ってた安らいでいたと思ってるの？ どうやってナギとかの色々なイビリを耐えしのできた思ってるの？ あの人の笑顔でその日のエネルギー補充してきたからだっつーの！ それが無くなった職場なんて地獄に仏もない！ 砂漠にオアシスなんてない！ 広がるのはただ荒んだ地平のみ！」

ここまで聞いていると少しばかりオーバーな感があるが、若干引き気味になるが同情をしたくはなる。だが、この二日間でそれでも咲夜には絶対に一つ許してはいけない要素がこの男にはあることを知っていた。

「なあ、そんなんだったらさあ、ここで何もしないで、ただ二日間引きこもってる生活してても・・・許されるだろ！！」

ドゴツ。

次の瞬間、咲夜の拳がグーでテルの頬をえぐった。拳を払ってテルを一瞥しながら小さく息を吐いて

「アカンやろ」

冷徹にも、ド直球に告げたその一言に頬を抑えながらテルは頭を下げながら

「ハイ」

と機械的に返すのであった。

○

「流石に、二日間さぼりっぱなしはダメやろ。 なんのために執事になつたん？ なんのための研修なん？」

正座。 座布団もない、ただの床でひとり惨めになりながらテルは正座し、説教を受けていた。 愛沢家に移ってからというものの複雑な要素からシヨックで執事の仕事もせず二日間ニート同然の生活をしていたのである。

「いや、もう・・・心入れ替えて頑張るんで許してください、ハイ」

・・・本当に執事今まで出来てたんかいな。 これから先が思いやられるわ。

はあく、というため息も何度吐いたことか咲夜は軽く後頭部を軽く搔いた。

「もうちよつとなあ、シヤキツとせなあかんで？ あつちに残してきたマリアさんとかの為に前にもお前はここで色々身に付けていかなあかんのや。 そうやろ？」

「・・・」

テルは脳内で考えた。 もし一ヶ月後に自身が以前とは打って変わってハヤテやマリアも凌駕する完璧な執事として帰ってきたその後の事を。

○

・・・もし朝食の段階でだ。

「おおっ！ テルの料理がハヤテのよりも完璧に上手い！ ハヤテも見習うのだ！」

「ああっ！ テルさんの料理には僕はもう敵いません！ 今まで生意気言ってスミマセンでした！」

・・・掃除の段階なら？

「まあテルくん！ いつの間にそんな技量を？ もうこの屋敷には貴方が絶対に必要です。今まで酷いこと言ってきてスミマセン、今の貴方になら私は素直になれる・・・抱いて！」

・・・そして極めつけはあの乱射魔だ。白銀だっけ？

「ブビ、スミマセンでしたブビ。君がこんなに実力をつけていたなんて知らなかったブビ、身の程を知らない私を許して欲しいブヒィ」

『三千院家最強の執事テル！ 誰もが憧れるいい男！』

○

妄想終了。

「TAGITTEKITA（滾ってきた）!!」

「うおっ、ビックリした」

突如として噴火した火山、いやこれはテルのやる気の火柱である。

なぜかそんな風に見えた咲夜だ。

「そうだとも。ここで俺は誰もが憧れる最強の執事になるのよ！

決してその後のマリアさんとのイチヤイチャ目的じゃなくて、あのキザ野郎を見返すためにもここで挫けてちゃいけねえぜ！」

・・・もうすでに本能がダダ漏れなんやが、朝斗と日向が来て最初

すぐに懐いてもうた。あの二人は白銀でも色々と懐くまで時間がかかったから、そこが決定的な違いなんか？

ただ、あの兄妹にとつてテルがおもちやのような、遊びやすい人間であるという点もあるだろう。それでもああも二日連続でわざわざ遊びに行ったりはしない。

・・・ちよつとだけ楽しみやな。コイツといえる一ヶ月が。

密かにそんな事を考えていた咲夜だった。

「そう言えば千里はん、なんでこっちにいるんや？ 新しい家探すと
言われても別に三千院家邸からは離れなくても良かったんやろ？」

「うむ。実はこの男の方に届け物があったのだ。三千院家から
だ」

「なに？」

とすぐさま反応したのはテルだ。先ほどとは打って変わって目は輝きに満ち溢れている。

「俺を心配したマリアさんが頑張っている俺に差し入れ!? ほれ見ろ
い、俺はこんなにもマリアさんに愛されてたんだぜウホホイ!!」
「なんでさつきからマリアさん限定なん。鬱陶しいからやめて
やー」

咲夜が顔を近づけてくるテルを手で押しつける。かなりウザイらしい。

「届けるように言われたのは・・・この写真だ」

と、取り出したのは数枚の写真だ。

「な、なんじゃこりゃああああ!!」

某刑事ドラマの死に際のごとき叫びをテルはあげた。そこに写っていたのは。

『白銀さんの三千院家招待パーティ』

普段使わないパーティ用のテーブルでテルもあまり食べたことのない豪華な食事をする白銀と三千院家一同が写っている写真が一枚

目に。

『白銀さんの記念すべき仕事初日』

彼の仕事ぶりを記録したであろう三角巾にエプロン姿の白銀の写真が数枚。被写体の白銀はとても楽しそうである。

『使用人たちで記念撮影』

白銀を中央にハヤテやマリア、黒羽と他一名を含めた写真が、そこにはあった。

「あー・・・」

と、気まずそうに頬を掻くのは咲夜だ。

「あんま気にせんとええんちゃう？ 向こうは向こうで楽しそうやし、こっちはこっちで楽しくやればええんや。アイツは言葉巧みに色んな事をやってのけるからんあ」

両手両膝を地に着いたテルは小さくポツリと呟き出す。

「お、俺の時は・・・歓迎パーティーなんてなくて、あんな豪華なケーキなんて無かったのにメザシの定食だったのに・・・!!」

彼は続ける。

「あんな楽しそうに仕事したことないのに・・・!!!」

悲しみと怒りの混ざり合った複雑な感情がなんか溢れてきた。

「ていうかつ そもそも三千院家で写真なんて一枚も撮った事なかったしいイイイイツ!!!」

ちなみに。と千里[!]が付け加える。

「まあ言わなくてもわかかってるだろうが、これを送れと言ってきたのは・・・」

「白銀エ 拓斗オオ・・・」

彼が言わずともテルには分かっていたらしい。目を血走らせて、

大きく野生の動物の如く彼は吠え出した。

「おいおい、テル落ち着いてや。初号機の暴走状態見たくなくなつとる

で?」

「中身は見るなど言われていた・・・まさかこんな物だったとは」

「気にしたらあかんで王様。これでちよつとは対抗意識で燃えるやろ・・・にしても」

・・・まるでテルを貶めていくようなこのやり方。白銀、お前一体なにを考えとんねん。

咲夜は白銀の行動に一抹の不安を感じながら、目の前でサードインパクト寸前の初号機を抑えに入るのであった。

「なんでこうなってるのお!?! マリアさーん! ママー、パパー! 助けてー! もうイヤー!」

これから先、彼の執事生活にどんな波乱が待っていることやら。

第113話くテル、寂しい夜に天使を見るく

誰もが、楽しいことばかりできて一週間を過ごせたらと思う。そんな願望が存在する。どんな仕事でも、遊びでも、学校の授業でも、取り敢えず何でも楽しめれば、辛いと感ずることがなければどれほど生きることが楽しいことか。

だが、人生そう簡単に上手くはいかない。

「テルくん、いつまでそこで油売ってるんですか？ 次の行動に移ってください」

「・・・あーい」

冷ややかな声に、テルは拭いていた花瓶を定位置に置きながら濁点の入った返事。

「さて、今日で一週間となるわけですが。執事研修の成果がまったくもって出てないですね」

ミニスカメイド服に身を包んだ愛沢家のメイドこと、ハルは彼の出来の悪さに最早呆れる一方であった。ひきこもり生活を脱したのは良かったものの、それで執事の仕事がうまくなるわけがない。

働き始め当初は凄い量だった。失敗の量が。敷地内で迷子になるわ、料理を勝手にして自爆するわ、咲夜の弟たちである朝斗と日向と一緒になって職務怠慢をする始末。

「ちくししよう。ハルさん、俺を厨房に行かせてくれ。料理なら、料理なら俺は天下取れる気がするんだ！」

「どの口がッー！」

ハルの右手が伸び、テルの顔面を鷲掴みにした。

「言うのですかねえ？ テルクん・・・昨日、貴方が勝手に料理した物を食べた愛沢家の使用人たちが原因不明の体調不良で二週間の入院をする羽目になりました。この大惨事を引き起こしておきながらまだそんな事を言えますか？」

「いやあ、隠し味にハチミツ入れたつもりがですね？ 黄色の接着剤

が入ってしまった」

・・・どうすればハチミツと接着剤を間違えるんですか。

三千院家でも同じような失敗をしていたのかと思うと、ハルは今更ながらこの男と衣食住を共にしてきた三千院家の使用人たちに同情を抱くのであった。

「お、おったおった・・・二人とも、何しとんねん」

制服に着替えた咲夜が二人を見つけ、声を掛ける。

「おお、咲夜。もう学校か？」

「せや。アンタも支度せなアカンやろ？」

「お、そうだった。というわけでハルさん、残りの仕事は帰ってから行いますんで」

今まで持っていた掃除道具を雑にもポイツと投げたテルは映画のマスクのごとき動きでその場を去っていく。残ったハルや咲夜の前には風だけが残るのであった。

拳を震わせて怒りの声を小さくしながらハルは咲夜に聞いた。

「・・・いいんですか咲夜さん。このままあの男をここまで置いても」

「ん、そんな事言ってもなあ。研修はまだ残ってるしなあ、向こうは向こうで楽しくやっているようだけどな」

「楽しいとは？」

ハルが首を傾げた。

「ん？ 白銀に煽られたのが効いたんやろうなあ、あれから働くようになったし、一ヶ月したらあの白銀を倒せる執事になってマリアさんに抱きしめてもらいたいらしいんや」

え？ とハルが疑問を浮かべた。

「マリアさん、あの男を抱きしめますかね？」

「いやー、無理やろ。ぶっ飛ばされるのがオチやで」
ないない、と言わんばかりに手を振る咲夜に相槌を打つようにハルも苦笑を浮かべた。

「んじや、ウチも学校行ってくるさかい、ハルさんも気を付けてや」
「はい・・・お気を付けて」

深くお辞儀をして、咲夜は学校へと向かう。ナギたちとは違う学校の生徒の為、制服が違うのだ。

「ふう・・・」

愛沢家のメイドから白皇学院生徒会書記である春風千桜に戻った彼女は考える。それは執事研修にやってきた善立 テルという男。正直、自身も最近雇われだした者であっても、百歩譲つてみたとしてあの男の執事としての能力は

・・・もはや壊滅的だよなあ。

ここ数日で彼が発生させた失敗の数々、その全ては目に余るものがある。

・・・やはり白銀さんと比べてしまうのはあまり良くないものだろうか。

どうしても交換条件で三千院家に行った白銀の働き振りをテルと比べてしまう。白銀は初めてなのか、という程に初日から仕事に適応していた。咲夜や他の使用人たちもテルと違って絶対の信頼を寄せている。

だが、誰だつて比べられてしまうのは嫌だ。

自身が努力をしても、実力を比べられてその評価を殺されてしまつてはヤル気もなくなってしまうだろう。

千桜も、自身が書記というキャラと愛沢家のメイドのキャラを比べられて評価を受けてしまうことは嫌だからだ。

だから、彼女は極力テルには白銀と比較するような発言はしないようにしている。一つの気遣いであった。

「というか私も早く学校へ行かないと」

○

——白皇学院。

「いやあ、それにしても白銀の働き振りは凄かったぞー」

教室内。　テルの机付近でナギが笑みを浮かべながら話すのは勿論、ここ最近では定番となりつつある白銀の話題であった。

「爪の垢を煎じてお前にも飲ませてあげたいくらいだ。　アイツ料理もできるんだってな」

「おうナギ、わざとらしく俺に聞こえるようにアイツの話するのやめろや。　朝から色々言われすぎてこちとらストレス溜まってんだよ」
机に伏していたテルが体を少しだけ起こす。　ここ最近での三千元家から聞いている情報はほとんどが白銀の仕事ぶりでいっぱいであった。

「いやあー参ったなあ、マリアも驚いていたぞ。　アレが噂の天才ってやつだと」

「なあにい」

完全に覚醒したテルがナギと向き合う。　なぜか彼は般若のような顔をしていた。

「マリアさんとイチヤイチャだとお!?　あの野郎許さねえ！」

落ち着け。　と言わんばかりにナギの目潰しが決まってテルは敢え無く轟沈する。　目潰しは危険なので良い子は真似しないでね。

「お前・・・帰ったら覚えてろよ」

目を抑えるテルにナギが嘲笑で返した。

「ははは！　何を覚えてろって言うのだ？　お前の評判は聞いているぞテル。　愛沢家でも相当なやらかしっぷりだそうだなサクから聞いたぞ」

「お、おのれあのおしやべり関西人ツ!!」

「まあ、一ヶ月もあると流石に長いですねこの研修」

と、二人の気をうまく静めるように会話に入ってきたのはハヤテだ。

「何事も卒なくこなしてプラスアルファをもやってのける。あの人は仕事人の鏡ですね。料理の腕に多少の自信は僕もあつたんですけど、あの人は本当に凄いですよ」

へえ。とテルはニヤリと笑みを浮かべて言った。

「つまり俺とどっこいどっこいか」

「いや、その発想は可笑しい」

真横で話を聞いていた木原がツツコんだ。

「お、木原君。なんか俺凄く久しぶりに見た気がするんだけど気のせいかな?」

「ああ気のせいだ。ちよつと時間が空きすぎてそう感じてきてるだけだ。それよりもだ、テル・・・マズイぞ」

「あー?なーにーが?」

顔をしかめている木原にテルは大きく伸びをして答え、頭を掻きながら木原は続ける。

「お前、このままだとその白銀っていう奴に今のポジション取られるぞ」

○

「なん・・・だど?」

某剣術漫画よろしく、劇画タッチへと変貌したテルが反応を見せる。これだけの反応を見る限り、この手の話題にはナーバスになつてるかもしれない。

「今仕事してる愛沢家でも全く成長が見られず、三千院家に戻ったらまた失敗の繰り返しだ。つまりどう言うことか分かるか？」

「どういうことだってばよ」

真面目に聞け。と、木原の義手による鉄拳がテルの頭部に炸裂。

「暴力反対！ 労働者イジメ、良くない！」

「並の労働者位の労働力持つてんのか？ まあ続けるけど要するにだ・・・信頼よ」

どこから持つてきたか、紙とペンを用意した木原は達筆でその二文字を書いた。

「話を聞く限りだと、お前はとんでもなく普段から失敗を繰り返して少なからずとも他の使用人たちに迷惑を掛けている・・・OK？」

「それは・・・NOだろ！ 俺はこれほどまでに三千院家に貢献をツ」

「あーはいはい、OKね・・・そのお前がいなくなって、そこに有能な白銀がやって来た。今までと違って出来が良いから使用人たちも全体に好印象だ・・・するとどうなる？ それまで居たお前はなんだつたんだ？という話よ」

更にと木原は続ける。

「職場の中で『使えなくて』、『成長も見込めない』、挙げ句の果てには『職務怠慢』・・・そんな事をするやつとお前は一緒に仕事をしたいと思うかな？ そのうち、虎徹みたいな扱いにされちまうぞ」

ちょうど離れた場所ではいつものように求婚をしていた虎徹がハヤテに無情のマツハキックを炸裂させている光景があった。あのような扱いをされるなどテルは死んでもゴメンである。

「なんてことだ・・・俺はそんな扱いになったら次第に『男に蹴られて興奮する変態』のレッテルを貼られてしまうじゃないかッ」

・・・お前、そろそろ馬鹿のスイッチを切れよ。

呆れたように頭を抱えた木原は釘を刺すようにテルに言った。

「だからこの一ヶ月、お前は死ぬ気でやるしかねえんだ。帰ったら居場所がなくなってますたらじゃあ話にならんだろ」

「死ぬ気でやれねえ・・・誰かの熱い抱擁があればできるかもしれないなあ」

「それでしたら・・・」

と、またしても割ってはいる声。その主は黒羽だ。

「おつ、なんだ黒羽さん。もしかしてこの僕に熱い抱擁でも？」

くるりと身を椅子の上で回転させたテルだったが黒羽はいつもの無表情で返すのだ。

「ふっ・・・冗談を。テルに抱きつかれるくらいなら猿山の猿に抱きつかれた方がマシです。どちらにしても銃で射殺しますが」

「物騒なことというようになったな！それでも一応ヒロインですか？」

「とまあ、冗談はこれくらいにして虎徹様がテルに抱きつきたいらしいですよ」

視線をゆっくりと横に向けるとそこには目をまるでザクのように赤く光らせた虎徹が息を切らしながらこちらを見ていた。

「ファッ!」

「善立エ・・・綾崎を抱きしめても文句が言えないように練習させろオ!!」

「ちよつと何言ってるか分かんねエエ!!」

虎徹のルパンダイブを回避したテルは堪らず教室から飛び出し、虎徹もテルを獲物を追いかけるライオンの如く教室を飛び出した。

「あいつら・・・始業前だつて分かつてるのか？」

馬鹿だなア、と心の中で続けてナギは机に戻ろうとすると

「ナギちゃん」

黒羽に呼び止められた。

「どうした？ 気分でも悪いのか？」

いつもの体調不良ではないかと気を遣うナギだったが、黒羽は首を振る。

「その・・・今回の執事研修、ナギちゃんは賛成でしたか？」

聞きづらそうに言う黒羽にナギは少し唖ってから応える。

「まあ、テルに実力が伴わなかったのは確かだから・・・白銀の言うことも一理あったからなあ」

実際の所、あのゲームが行われた場所で白銀が勝手に何を言い出すのかと一瞬憤りを感じたナギであった。だが、ある意味彼の言うとおりでここでしたっけとやっていけるようになるチャンスなんじゃないかと思う。

「もしこれから先、アイツが一人でどっか行く時にさ。どこかで働くんだったら少しでも身につけるべきなんじゃないかなと思ってる」

・・・あと、アイツが屋敷を出ていくことになってもう一人誰かがついて行っちゃいそうなんだよなあ。

誰かが死ぬわけじゃない。だけでも誰かが自分の周りから消えてしまうのではないか。そんな事を、一瞬ナギは考えた。

「でもまあ、面白半分ってのもあるけどなあここだけの話」

ナギは笑ってそう言った。たまに自身の主のノリがよく分からなくなる黒羽である。

「私たちはアイツがちゃんと戻って来るってのは分かっている。だからあんまり心配するなよ」

「心配はしてません・・・でも」

「でも？」

「暇です」

ガクツと肩を落としたナギだった。もう少し面白みはないものだろうかと思っていたナギだったが、すぐにあることを思いつく。

「それだったら黒羽、私にいい考えがある」

○

——愛沢家。

「あー、疲れた——」

学校も終わり、愛沢家である程度の仕事をこなしながら漸くテルは自室のベッドに倒れこんだ。愛沢家で用意された部屋だが、いくらかテルの手が加えられている。その証拠に、枕やDVD、その他の物品は最低限持つてきた。

「なーんかさんざんな一日だったなあ、ホモに追いかけるわ、仕事はあいも変わらずちよつとしたことで失敗するうー、マジで向いてないのな俺」

仰向けになってテルは考える。以前から自身に執事としての素質がないのは分かっていて。それでも経験値が1とかでも三ヶ月で少しはレベルアップしてればいいなど思っていたが、現実是非常である。改めて現実を叩きつけられた気分だ。

「そう言えば三千院家の屋敷にチビハネ置いて来ちゃった。いや連れてきても五月蠅いだけだからいいんだけど」

最近、独り言が多い。病んでいる証拠だろうか。だとしたらこれは追い詰められている。誰にだ？ わかりきっている。白銀だ。……んー、やっぱりなんか怪しい。なんも確証もないんだけど。少なからずとも怪しい要素は、なぜテルをわざわざ追い出すようにしたのか。もし白銀が三千院家の遺産を狙っているような人物だと考えて、邪魔な障害はハヤテのはずだ。

だがこれらはあくまで白銀を完全に『悪』と仮定しての話だ。今

全て勘で物事を考えている自分にはどうすることも出来ない。

——このままだとポジション取られるぞ。

木原の言葉を考えてみると、その可能性は無きにしも非ず。先日
の送りつけてきた写真やハヤテたちの話を聞いたら三千院家内で白
銀の評価は鰻のぼりだ。三千院家内で何が起こっているかテルに
は何も分からない。

・・・バルトあたりにちよつと調べてもらうかな・・・というより
も。

「なんで誰も心配してくれねえーんだよオオオ！ もう一週間だよ
なア！ 励ましのメールとか来ないのかよオオオ!!」

誰もいない自室で悲しみを訴えるが、誰も聞いてはいない。ただ
ひたすらに虚しい。と、考えていると。

☒〜☒。

音がした。

「け、携帯ッ」

聞きなれた着信音、仕事人のテーマを耳にするのはいつぶりだろう
か。一週間前に迷惑メールで来たのが最後だろう。

「お、お嬢!」

画面を確認するとそこにはナギの名前が表示されていた。最近
メールなどしていなかったから久し振りに心が軽くなる。

「な、なんだよ。アイツ結構可愛いところあるじゃねえか。 さす
がヒロイン、俺を心配して」

ボタンを押して、内容を確認する。

『テルへ、まどマギと仕事人のDVD入れ替わったままだぞ どうし
てくれる!!』

「知るかアアアア!! んな事聞いてくるなあ！ あ、でも考えたら
俺がこつちに持ってきたDVDにまどマギ混ぜてるって事なの

か・・・ってそこじゃねえ!!」

更に下にスクロールすると最後に一言。

『PS, ゴキブリが2、3匹いたからお前の部屋に投げといた』

「やめろオ!! それただの嫌がらせじゃん!! とうか始末しろよ!!
繁殖されたらたまったもんじゃねえからマジでやめてエエエ!!」

今に自分の部屋が黒のゴキブリによって真つ黒に占拠されていた
ら溜まったものではない。むしろそのまま人類の危機に発展するだ
ろう。

⊠〜⊠

続け様に着信音が鳴る。今度は誰だ、と画面を確認。

「ま、マリアさん!!」

さっきの絶望へ真つ逆さまからのいきなり急上昇する彼は思わず
画面を二度見した。

・・・やっぱり出来る人はニートお嬢様とは違う。 ああ、マリア
さん、貴方は天使だ。

最早顔面がヘブン状態を迎えている。 誰かが見ていたら確実に
ドン引きされると思ったテルは素早くその中身を確認する。

『テルくんへ。 カーテンをシャヤってするスライドする小さなアレ
が見つからないんですが知りませんか?』

「マリアさ——ん! すんごいどうでもいい、すんごいどうで
もいいよオ!! 知らないから! カーテンのあの部分のヤツでしょ
!! すっごい懐かしいネタ使ってるけどそんなことよりも俺の事心
配してくれエエエ!!」

と、お約束のようにナギと同じくスクロールする部分が。

『P.S. テルくんの部屋にコケを撒いておきました。 そろそろキノコ出てきそうです』

「ちよつとヤメてエエエ!!? ゴキブリも一緒にいるんでしょ!? それやっちやダメエ!! 人型のゴキブリとかできちやうからヤメてエエエ!!」

どうしよう。と、テルは想像する。 一ヶ月後、自室の扉を開けた瞬間に出てくる人型の、そして真っ黒でマツチヨで口癖が『じようじ』のあの生物たちの姿を想像し、吐き気から口を思わず覆う。

⊠〜⊠

・・・流的に最後は、やっぱりハヤテか。

もうすでに心の方が瀕死状態なのだが、テルとしては藁にもすがる気持ちで最後の望みに掛ける。

「もう、ホモとかなんでも言われてもいいので、まともな・・・まともなメールをくれッ!!」

絶望からの救済。 その一心で彼はメールを開封した。

『応援メールかと思ったか? オレだよ』

「まさ に 外 道ウウウ——ッ!!」

画面いっぱいに現れた某チャンネルの赤ん坊のコピペを見た瞬間。テルは携帯をベッドの上に叩きつけた。

「もうこいつ等、おちよくる事しかしてこねえのはいんですけど。三連激なんですけど。 ジェットストリームアタックなんですけど ここまで俺って嫌われてたっけ?」

それを誰もいないこの場所で問うのはどうかと思った自分だったが、確かにこれまでの自分の行いではこの仕打ちに値するものだった

か。

・・・充分あるわ。

自身の罪の意識を自覚したところで納得したテルだったが、それでもつい最近の仕打ちからテルには精神的にもダメージがある。いや、これまでよく持った方だったかもしれない。

・・・飯食ってないけど、寝よう。

忙しくて、夜食も学校の宿題も終わってないけど、寝よう。もうすでに彼の精神と肉体は限界だった。

現実から色々と逃げたくて、何もかも忘れたくて、ベッドに執事服のまま倒れこむ。

「ウツダー」

カタコトで目を閉じて、彼は眠りにつこうとする。だが、明日になれば今日のような出来事がループして起こるのだと思うと、『もう明日なんてこなければいい』と考えていた。

だがその時だ。熟睡モードに入ろうとしたテルだったが、ふと窓から小さく物音が聞こえる。コツ、コツ、と何かをぶつけている音だ。

「誰だこのやろー」

ゆっくりと起き上がり、念の為に壁に立て掛けていた撃鉄を取り出した。夜を狙ってやってきた盗人の可能性があるからだ。

身長に近づいて撃鉄で窓を開ける。恐る恐る、顔を出すとそこには一人の少女が立っていた。

「・・・」

小さい鍋を両手で持ち、サイドバッグを肩に掛けた黒羽がそこに立っていた。

「あんれー、俺の目がおかしくなっていないんならなんでこんな所に黒羽さんがいるのー」

「……」

目をこすりながら問うテルを無視して黒羽は鍋をテルに持たせ、窓を飛び越えてテルの部屋へと侵入する。

「ちよつと黒羽さーん。質問に答えてー、このままだと普通に不法侵入だよー」

と、ここで黒羽持っていたサイドバッグを下ろしてテルの持っている鍋に向けて床に置くようにと指でジェスチャーを促す。

……え、何コレ。モノボケ大会か、何か？

指示されるがまま、鍋を置いて黒羽と向き合った瞬間だった。

テルの頬に強烈な平手打ちが飛んだ。

「いっ！！」

それはもう、無造作に、無駄のない動作でぶたれている間に時間を忘れてしまうほどの奇妙な感覚に襲われたビンタだった。

勢いで地面に尻餅をついたテルだったがすぐ見上げるとそこには無表情でこちらを見下ろす黒羽の姿が。テルは一瞬思い出した。この構図は以前黒羽が持っていた、変態的な能力を持っていた時代の黒羽に近いものを感じた。

やがて沈黙を破り、黒羽が口を開く。

「どうです？ 元気になりましたか？」

「元氣!?…なんで元氣!?… といふかなんで殴ったの!？」

頭の中で色々混乱しているテルだったが、黒羽は開いていた窓を閉めるついでに言うのである。

「はあ、ナギちゃんか『男子を元氣づけるには一発殴らなきゃ』と、言っておりますので実行しました」

…あのお嬢様、なんて事教えやがる。しかし、なんだ。ちよつとショックがデカくて涙目になっちゃまった。

思えば一日中精神と肉体を削るような仕打ちを受けて眠ろうとしたその矢先、突然の訪問とマジビンタをくらったのだ。こんなのを一日に食らったら誰だって挫ける。

いつものようにツツコミを入れていくのが普通なのだが、そんな気ももはや無くなりかけているのか返事が大きいため息になってしまふ。

「随分とお疲れのようで」

短く言う黒羽を見て、テルは内心しまったと思った。返答能力にですら影響を及ぼすほど、気持ちに余裕がないらしい。

「どうしたんだ。ま、まさか…お前も俺をおちよくるためにわざわざここに足を運んできたというのか!!」

「相当参っているようですね…頭の方が」

ジト目でこちらを見るあたり、本気で呆れているようだ。そう言うとうと黒羽は持ってきた鍋をテルの机の上に置いた。

「私の推測ですが、テルは夜食は？」

「へ? いや、ただだけど…」

思わず身構えていたテルだったが予想外の問いに思わず目を点に

する。黒羽は何も言わずに鍋の蓋を開けると、そこから何とも言えない空腹のテルの鼻を刺激する匂いが。

「こ、これは・・・料理？」

最早料理であるかも懐疑的になっていたテルに黒羽はサイドバツグから取り出したお玉をテルの顔面を前に寸止めさせた。

「もはや、これが料理であることすらもカレーであることすらも分からない位に認識能力が壊滅的にイカれてしまったのですね・・・悲しいばかりです。せつかく作って持ってきたのに」

悲しみと哀れみで詰まった瞳で見てきた黒羽の言葉にテルは耳を疑う。

「え、作ったの？ 誰が？」

そう聞かれ、黒羽はゆっくりと自身を指差した。

「俺の為に・・・？」

その問は一瞬だけ間を置いたが程なくして、その首を小さく落とし、落とした。

「・・・」

無言になった二人の沈黙がしばらく続いた。部屋はカレーの匂いで満たされつつある。空腹とカレーのダブルの刺激が合わさってテルは磨り減っていた精神状態から目の前の黒羽の姿が輝いているように見えた。

深呼吸をし、テルが遂に沈黙を破る。いつになく真剣な表情で、

彼は祈るかのように言うのだ。

「天使……すみませんが、抱きしめてもよろしいでしょうか」

返事は当然のように本日二度目の無表情で強烈なビンタだった。

○

一方その頃、鷺ノ宮家。

「はっ……!」

「どうしたんや伊澄さん？」

伊澄の部屋で泊まりに来ている咲夜が伊澄の異変にいち早く気付く。伊澄はほどなくして震えながら口元を袖口で覆いだした。

「咲夜……臭うわ……」

「臭うって……何が？」

と、伊澄の表情を見て咲夜は背筋に凍るものを感じる。伊澄の目が笑っていないなかったのである。いつもおっとりな性格なので何を考えているか分からなかったが、その瞳の中に明確な殺意のような物を感じた。

身を震わせながら、目の笑っていない伊澄が口を覆ったままその言葉の口にする。

「どこからか発せられている、それも結構近くで……ラブコメ臭がツツツ」

「そ、そうかあゝ」

伊澄の反応を見て、咲夜は苦笑いで返した。そして心の中で状況を推測する。

・・・テル、なんかやったんかな。ま、まさかホンマにマリアさんに抱きついたとか!?

その行為は全く別人でしかも未遂に終わっている事に気づかなかったが、今の伊澄の様子から明日の学校でのテルの身を案じる咲夜だった。

もうちよつとだけ続く。

〜これまでの登場人物たち、まとめ〜その1

善立 テル

16歳、三千院家で働く前はラーメン辰屋で働いていた。料理が店の経営にダメージを与えてきたため、ラーメン屋から追い出され、犯罪を試みるも道中で出会ったマリアに諭され（勝手に）誘拐されていたナギを助けてハヤテの申し出から三千院家で執事として働くこととなった。作品の初期では記憶はなく、戦闘に巻き込まれても全く歯が立たなかったが、クルージング編にてソフィアから受けたトンファーにより過去の剣術を習っていた記憶を思い出す。これにより戦闘もこなせるようになり戦闘の描写が増えた。料理は壊滅的に下手だが本人はそうとは思っておらず、一度ハヤテが毒見をした時にハヤテを気絶させた。伊豆・下田編にて記憶を取り戻し、自身の両親や母親代わりに育ててくれた神崎百合子がもう既にこの世にいないことを知り、誰も肉親のいないこの世界で新しい人生を新たに始めて行くと誓った。最近では執事の職務怠慢が続き、仲間や使用人たちからことごとくいびられている。現在、執事研修にて愛沢家で働いている。

好物はマリアが作るものならなんでもいいらしい。

誕生日は6月24日

木原 竜児

掃除大好き、勿体無いお化けの16歳。テルとは同じ道場にて鍛錬を積み、釜の飯を食った仲。神崎百合子が事故死した後、テルとは別々に生活することになったがある時に東京で再会。だが謎の声に操られ、テルをバットで気絶したあと海へと沈める。自責の念からテルの十字架を背負っていたがひよんなことからテルが生きていることを確認し悪役側になった自分には今更引けないと相对することになる。下田編以降、仲間となり、テルたちと同じ白皇学院へと入学が決まった。現在は学年主任となった牧村詩織の自宅にて住み込みで家事全般を手伝いながら暮らしている。そのせいで介

護用ロボットのエイトから様々な嫉妬を受けている。家事全般をこなせ、主夫力が高いが顔の人相から白皇で不良と認識されていたが、今は落ち着いているもよう。

。好きな女性の前ではキョドる。白皇で会った春風千桜に一目惚れをしたようだ。母親は既に他界しているが、父親は健在。父親は現在強さを求めて世界を旅しているとか。

好物は鰻。

誕生日は7月13日

乙葉 千里

17歳。白皇学院の生徒で親の会社、乙葉グループの御曹司で次期社長『だった』人。白皇学院三年生。父から教わった帝王学を元に自身を『王』と呼ぶことが多いがたいいの人はスルーする。

唯我独尊を形にした人間で基本自分中心で考えていた。奈津美 唯子とは犬猿の仲で事あるごとに喧嘩をおっぱじめながら校舎を破壊することがあるため、ヒナギクを困らせる人物。筋肉バカであり、マラソン編では山車に乗せた伊澄を一人で運んだり、執事クエスト編ではその力を遺憾なく発揮していた。会社が倒産して行き場を失ってからは三千院家にてニート同然の暮らしをしていた。本人は早く会社を助けるためにどうにかしたいと思っている様子。現在は白銀ひ提供された情報を条件に新しい家を探している。

好物はカップヌードル

誕生日は9月9日

奈津美 唯子

白皇学院3年生の17歳。白皇の人間なら誰でも知っており、その人望はヒナギクと同じくらい。性格はSっぽく、お姉さんっぽいので姉御と呼ぶ人も。なんでも楽しいことを前提で行動することが多く、それゆえにトラブルに自分から突っ込んでいく。ヒナギクが入学した当初は剣道部の部長だった。県大会での優勝候補だったが右手首の怪我を押して練習、そしてヒナギクとの練習試合での事

故で試合には出れず、剣道部も退部してしまった。左でも竹刀を振るう事ができるが、全盛期の頃に比べると劣る。右での突きは一回しか使えないが、その速さはテルが身を震わせる程。家では剣道や親との決め事を色々と投げ出した事から両親とは不仲な模様。千里とは喧嘩をよくする仲で、最近破産して独り身となった千里をいくらか心配している？描写があつたが今後どうなるかは未定。

まだ作中で本気でキレたことがない人。

好物はあんかけ蕎麦」

誕生日は10月7日

黒羽 舞夜

17歳。テルたちの前に現れたハヤテの意思を狙う少女、初期は謎の能力『黒曜』を操りテルたちの敵として登場していた。その実力は体調不良であつたが伊澄とテルを圧倒した。性格は無口で感情が存在しないのではないのかと思わせる程に無表情。だが、料理の腕は一流であり木原と手を組んでいた時は彼に手作りのカレーを馳走し、その舌を唸らせた。冷徹でたとえ仲間であつても容赦なく手に掛けようとする殺人マシンではあつたが伊豆・下田編後、負傷したまま全快状態の伊澄に決闘を挑まれる。能力も次第に通用しなくなり、最後は伊澄の渾身の術からチビハネを逃すべく身代わりとなつて術を受け、濁流へと吞まれ死んだ・・・かのように見えたがその後、テルが河川敷に流れ着いているのを発見。能力と記憶を失つた彼女は三千院家の使用人として暮らすこととなつた。以前のような身体能力はどこへ行つたか思うくらいに病弱になり、仕事や授業中に保健室送りになることが多い。白皇学院では瀬川泉と仲が良いらしい。最近では以前ほどしゃべれるようになり、マリアの影響もあつてか毒舌となつてテルへの特に理由なき暴力の原因となつている。好物、特になし。

誕生日は不明。

チビハネ

性別は女らしい。ヒナ祭り祭り編の最終局面付近で黒羽の作り出したショットガンが暴発したことによって生まれた黒羽のミニチュア版。小さく、同じ『能力』は使えないが偵察や潜入などで力を発揮する。

主である黒羽だけがチビハネの声を理解することができ、それ以外の人が聞いても「ヤー」としか認識されない。

大きさを除けばそっくりだが、性格は黒羽とは違い明るく、活発でよく喋る。主である黒羽の事をマスターと呼び、よく懐いていた。下田編以降、黒羽を探す旅をしていたがボロボロの身で三千院家に辿り着き、黒羽と再会。事情と現在の状況をテルから教えてもらい、以降はテルと協力関係になる。

好物は甘いもの。

バルト

27歳のロシア人男性。一話にて、ナギを誘拐したグループの一味に入っていた。クルージング編にてソフィア・シャフルナースが彼の上司だと分かるが物語の終盤、味方もろとも爆弾で吹っ飛ばすという暴挙に絶望し、命を絶とうと考えたがテルに一言申されて改心。以降はテルもお世話になったラーメン辰屋で働くことになった。日本文化に入り浸っているようで日本語をマスターし、メタルギアを前作やり込んでいる。スパイ検定というのも合格しており、見合の時のサキ相手に場つなぎとしての話題に出していた。組織が散り散りになった今でも一人になったソフィアが暴走しかねないか監視も含めて心配はしているようである。

好物はもずく。

ラーメン屋で働きながらも近辺での情報収集を行い、テルに情報を一応提供するようになっている。

誕生日 12月1日

白銀 拓斗

第三章から現れた白髪の男。年齢は25歳……らしいがサバを

読んでいる可能性がある。咲夜が森の中で傷ついた姿で倒れているところを発見。治療をしてもらいその恩を返す為に愛沢家の執事になった・・・が、何か別の思惑があるようである。三千院家でテルを追い出すようにバトルドーム大会を仕組んだり、移動後のテルに嫌がらせを仕掛けたりとなぜそこまでしているかは未だ不明。特技は精密射撃。どこからか色々な銃を取り出しては正確に狙い撃てる技量があるがどこで身につけたか不明。咲夜が評価するほど口が巧く、その話術である程度の場の空気を支配することが出来る。話術とその執事としての能力も評価され、愛沢家と三千院家での評価は鰻のぼりだとか。好物は辛明太子。

誕生日は6月24日。

神崎百合子

年齢は40歳。テルに剣術を教え、親代わりとなっていた女性。テルの両親が亡くなった後に赤子のテルを引き取ったがどういった経緯で引き取るようになったか不明。過去による負傷から子供を産むことが出来ない体であったため、テルを本気の息子だと思いうようになっていった。剣術も去ることながら身体能力も凄まじく、40歳で50kgの重りを背負い標高3000Mの山をランニングしながら帰り、その道中に巨大猪を素手で仕留めるという文体だけで捉えてもどう考えてもチートである。ただそんな彼女は病気にかかり、衰弱していく。テルと木原が15歳となった年に実家の伊豆へと向かう途中の飛行機事故でたったひとりの犠牲者となりその命を落とした(乗客は百合子を除いて全員無事であった)。百合子の死後もその生き方や信念はテルへとしっかり受け継がれており記憶喪失や重大な局面では百合子の教えがテルを救う場面が多かった。超がつくほどの家電アレルギーであり、電気屋に入るだけで全身から汗が出るほどに家電が嫌い。触ったら最後、その家電は使用不能となるため、電気屋から破壊神と呼ばれた。

現在は・・・もとい死後はナギの母親である、ゆつきゆん（紫子）と
一緒に仲良くやっているようだ。
好物は肉。

誕生日は5月15日

第114話〜テル、心理カウンセリングを受ける〜

——鷺ノ宮家。

「ら、ラブコメ臭って……いったいどこでそんなことが起きてるんや？ 伊澄さん」

全身から負のオーラを滾らせている伊澄に恐る恐る言葉を作った咲夜、目の前の伊澄は死神になるのかと思わせるほど目が虚ろになっている。これでは誰かを殺しかねない勢いだ。

その伊澄が口を開く。 ゆらゆらと体を動かして、襖を動かして空の月を見て言うのだ。

「そうですね……具体的に言うと、夜中に男が女性を自分の部屋に引き入れて、傷心の男に漬け込んでカレーなどを馳走し、好感度アップを図るというイベントが発生している気がするのです……しかも、咲夜の家で」

「ええー……」

もうそうなたったら原因は一つしかないだろう。明らかにテルだ。

そうに違いない。テルほどではないが直感を働かせて確信した咲夜は自身の使命を感じた。ここで伊澄を絶対に家に行かせてはならないと。

「伊澄さん……カバデイせんか？」

真剣な表情で、咲夜は伊澄の前に立って……構えた。

「咲夜……これから戦いの時、修羅場ですよ？ 何を言ってるんですか？」

目を虚ろにした伊澄が問いかける。この時点でもう既に咲夜は気持ちで負けそうであった。目がもはや、妖怪退治の時の目だ。

一か八か、咲夜は自己犠牲の名の元に賭けに出た。

「知つとるか伊澄さん。ヒロインちゅーのはカバデイが上手くならないと修羅場を繰り広げてはいけないっていうのがこの世界に存在

するんや」

「ツツツ!?!」

その時、伊澄に電流走る。まあ、そんなルール存在しないんですけど。

「そうなのですかッ!?!」

「そうや」

動揺を隠せない伊澄に咲夜が心の中でガツツポーズを構えながら頷いた。今だけは彼女の天然さとおっとりした性格に感謝せねばなるまい。

「修羅場っていうのはな? 崇高で、神聖な戦いの場や。それは1万年と2千年前から神と人間の間で結ばれた神々の約束ッ」

・・・あかん、これじゃ丸つきし中二病や。知らない人に見られたら引かれてまう。これで伊澄さん釣れるかなー。

自分で自分を貶め、こんな姿を他の誰かに見られなくて良かったと思いつつながら対象の伊澄を見ると。

「咲夜・・・勝負ですツツ!!」

・・・釣れた。

それはもう、釣りキチ三平もびつくりの。かつぱエビせんのようなしよぼい餌で鯛を釣ったような気分だった。

・・・た、頼むでテル。ウチが早くこの場を押さえている間に、早くイベントを——ツ」

咲夜が身を賭して悪鬼羅刹を押しさえ込んでいるその一方で愛沢家のテルたちはというと。

「はい、あーん」

「あーん……つてアツアツアツウイ!! アツアツスプーンが頬に当たってるって!!」

仲良く黒羽からカレーを食べさせられているイベント進行中とのことだったが、それでもなさそうで。

「だいたいなんでさつきから口の中に入らないんだ。これで同じ事三回目だ! 食わせる気あるのか?」

「チツ」

「え、舌打ちした? 今舌打ちしたよね!! そんなに面倒だったの?」
猛然とツツコミをするテルに黒羽は持っていたスプーンをナプキンの上に置いた。

「だったら自分ひとりで食べたらいじやないですか。あんたの為に別に作ってきたわけじゃないのにこんな仕打ちを受けるなんてー
あんたなんて死ねばいいんだからー」

「それ絶対ナギから教えてもらったセリフだろ。超棒読みだからわかりやすいぞ」

「ばれたか、と黒羽はその無表情のまま両手を上げてびっくりした様子で。

「流石ですね、洞察力が猿から犬辺りになりましたか。執事研修の成果はあったようですね」

「うん、褒められてるのが貶されてるのか良く分からない状態だ!」

「ま、そんな事は気にせず。と黒羽は持ってきたサイドバックから透明な一つの冷凍保存容器を取り出すと、大きなまる皿によそい、ルーを掛けてテルへと差し出した。

「さあさあ食べて食べてご覧なさい。貴方はあまりの美味しさに身を狂わせ、喉をかきむしりながら疑心暗鬼に囚われた状態で死んでい

くのです」

「俺はよく死ぬハメになるカメラマンかなにか？」

と、渡された皿を受け取りスプーンを構えるテルだが、見た目はどう見ても普通のカレーライス。レトルト商品の裏に書かれているメニューを見たら、誰でも作れそうなシンプルな物だ。

安らぐようなルーの香りから自然とスプーンの運びも緩やかになり、口へと含むのに全く抵抗がなかった。少しばかり咀嚼して食材たちを感じ取る。人参、玉ねぎ、牛肉、じゃが芋どれも平凡的な定番とも呼べる者たち。喉から胃へと飲み込んだとき、自然とこの言葉が出た。

「うめえ」

平凡的な物を予想していたが、それ以上に美味かった。これは下手をすれば、ハヤテやマリアに匹敵するほどの腕前を持っているのではないだろうか。

「ふふ、そうでしょう。それにしてもリアクションが薄いですね。いつもだったら口に入れたら全裸になって屋敷中を駆け回るのに。リアクションとツツコミだけが取り柄のテルが、リアクションをサボったらもうそれはテルじゃありません。『テルっぽい何か』です」

無表情で容赦なく言う黒羽を見て、本当にこの女がヒロインでいいのだろうかと考えるテルだった。

「いやいや、サボったのは確かだけど全裸はやったことねえよ？もち芸じゃねえからな？　まあそれよりもこれ、マジで上手い・・・本当にひとりで作ったのか？」

2, 3口また食べてのコメントに黒羽が頷く。

「どうやら、私は過去にカレーを作ったようです。料理をつくらうとした時にカレーが真っ先に浮かび、レシピや隠し味、煮込みの時間などが感覚で分かったので私はこれからお料理上手キャラで通していきたいと思います」

恐らく、能力が使えていた時代に黒羽が作ったりしていたものなのだろうか。それでなくても全般的に料理はできるようなので、カ

レーだけが作れるとは考えにくい。

「さてさて、ところでテル。 疲れとやらはブツ飛びましたか？」

まるで本題を話すかのように切り替えて、黒羽が言うのとテルは含んでいた物を一旦飲み込んでから口を開いた。

「ま、まあ7割方回復したかな。 もう少し貰うぜ」

と、若干誤魔化すようにお玉を取ろうとした時だ。 そのテルの手を黒羽が片手で掴まれ、二人の動きが停止した。

「……」

「……なんだ」

それはいつもの無表情で感情を感じさせないいつもの黒羽だったが、テルの手を掴んでいる力が強い。

口では何も言わずとも「待て」と言っているように。

「珍しいですね」

黒羽が先に口を開いた。 手をゆっくりと離して、彼女は続ける。

「テルが私に嘘をつくのは」

「おいおい、俺が嘘つきなのは今に始まったことじゃないでしょうが」
今更何を言うかと思つたテルだが、黒羽は首を小さく横に振って更に続けて言った。

「自分を誤魔化すような、無理に意地を張るような嘘をテルは今ついていると、私は推測できます……大抵、こういった理由なのかもまるで、自分の首を締める……そんな感じですよ。」

○

……なんてこつたバレテラ。

と、舌打ちしてテルは黙り込んだ。 珍しく、的確に物を言ってきたと思う。

そうだとも、と彼は心の中で忌々しく黒羽の問いに答えた。自分は、善立 テルは辛い時など逆境に陥ったとき、他者にそれが知られないように自然と馬鹿をやって誤魔化そうとする。

いつもそうしてきたのは誰にもバレてなかったし、その度に逆境を乗り越えてきたこともあつたからだ。だから、これが『自分がそうすることで自己を保つ、正当化された唯一の生き方』なのだ、納得してやってきていた。

「ふう……」

睨まれている、という訳でもないが先程からこちらをじーっと見ている黒羽に対し、これ以上の隠し事などは意味のないことだと理解する。

「ああーそうだよ。ここ最近ずっと白銀の奴と比べられてて、周りからもキツク言われてて、それでへこんでましたー！」

と、少し声を抑えながらもヤケクソ気味にテルは言う。自分もそこまで頑固な訳ではない。だが、自分の事を見透かされているようなその物言いは聞いているこちらとしてはあまり気分の良いものではないのだ。

「結構最初からわかってたことだ。自分は執事に向いてないって、ハヤテとかマリアさんとかの見た目も何がなんだかわからんし、身に付いたのは結局は雑務だ。それでもそこでしか暮らしていくことが出来ない。なら、しがみつくしかないじゃねえか。それなのに……白銀は俺と同じ境遇なのに咲夜の方でもナギの方でも評判高いし……学校でも似た感じだ。あいつらの激励だって分かっても別の方向で考えちまう」

随分と感情的に喋ってるなあ、と自分の事をこうも他人に話すのに珍しくも違和感を感じている。とてもメンドくさい男だなと改めて思ってしまうが彼の今の心境だ。

「時々考えることがある。ある日、戻ってきた時には俺の場所には

別の違う『誰か』が俺を演じて、居場所がいつの間にかなくなってるんじゃないか……って、なんてセンチになってんだチクショオ!!」

テルは頭を抱えて、体を伸ばして床を転がった。相当恥ずしいものだと、自分の頭が熱くなるのを感じる。傍から見たらまるで心理カウンセリングだ。

「ふーむ」

では、と黒羽が充分に煮詰まったカレーを見つめる。少しばかりお玉でかき混ぜて彼女は言った。

「テルはスーパー主人公になりたいのですか？」

「はい？」

目を細めて聞いてきたテルに対して黒羽は続ける。

「ほら、よく色々な漫画とかノベル系にあるじゃないですか。基本チートで物語の内容を全部無視して自分の思い通りに事を進めるああいう感じの。そして極めつけにはハーレム作りが得意っていう……つまりテルは俗物系主人公にキャラチェンジしたいんですね。ですが世の中は上手くいきません、どんなに頑張ってもカエルが跳ねても、月には届かない訳で」

「ちよ、ストップ。色々な人たちに喧嘩売ってるから黒羽さんやメて！」

は？と、今度は黒羽から否定の声。

「何を言ってるんですか。まるで私がチート系転生物が嫌いみたいな草ですね。私は好きですよ？この作品の主人公より、見るだけでずつと爽快感があるので」

さつきから途轍もなくメタ発言が目立つのだが、と内心で汗をかきながらテルは身を起こす。よく考えてみると黒羽には自分のペースを狂わされてばかりだ。

「ではカウンセラーの黒羽さん。俺はどうしたらいいんですか是非ともご教授願いたいものですう……!!」

ぜひ、と笑顔で眉間に皺を寄せて言うテルだが黒羽は、いいでしょ

うと、頷いたが。

「と、言おうと思いましたが、以前テルにこういう時は自分で考えろと言われたのを思い出しました。 という訳でその小さき脳の英知を結集して、考えてください」

「デスヨネー」

大体分かってはいたことだ。 前回の山登りでの問答の一件の事をここで引張ってくる辺り、結構根に持っていたのだろう。 だが、いつか仕返しされるんじゃないかなとテルは考えていた。

・・・悪戯感覚でコイツを怒らせたらやばいだろうな！。

そうしたら最後に、地の果てまで追いかけてきて恨みを晴らしに来るのだろう。 仕事人よりタチが悪いかもしれない。

「ですが、これだけは言っておきます」

と、悲嘆にくれるテルに黒羽は表情を変えずに、いつもの口調で言うのだ。

「貴方はまだとても頭がそこら辺に落ちてる石のように硬いので、答えを出すまでカタツムリが移動するくらい時間が掛かるかもしれません。 ですが、私が考えて答えを出せたように貴方にも——テルにだって出来るはずですよ」

だから、と黒羽は付け加えてからテルの目を見た。

「貴方が帰るまで、貴方の居場所は・・・私が守りましょう」

・・・いつからこう言う事言う子になっちゃったかなあ？

頭を掻きながら思わず合わさった目を逸らしてテルは考える。

目の前の少女はこんなにも説得力のある台詞を言える少女だったろうか。

正直な話、心が軽くなった。

言葉が多くて、毒舌だったとしても、その裏にはどこか優しさで溢れている。

「分かった」

目を閉じて、息を吐きながら彼は拳を握って自身の胸の前に置いた。

「待ってろよお前、絶対に答えを出してやるからな。後でお前の事、泣かしてやるからな」

その宣言に動じることなく、そうですかと満足したように立ち上がると窓の外をみた。愛沢家の門の前に、一台のリムジンが止まっている。おそらく迎えが来たのだろう。

「ゆっくりしようと思いましたが、どうやら迎えが来てしまったようです。鍋や他の容器は後で洗ってから返すようにして下さい・・・では、これで」

と窓際から去ろうとした時だ。

「待てい」

いつの間にか皿のカレーを平らげていたテルが口についたカレーを拭いて言った。

「送る」

○

黒羽を窓から降ろして、二人は車が置いてある門へと向かった。テルが携帯の画面を確認すると9時をとくに過ぎており、帰りが遅いのを心配しとマリアかハヤテが迎えを寄越したのだろうと推測。

「さしずめ、あの場所に立ってるのはクラウドス執事長かな？」

テルがリムジンの横に立っている人物が最近執事長室でも見かけなくなった男だと予想する。その問いを聞いて黒羽は思い出したように、あつ、と言うのだ。

「そう言えば、クラウドス執事長は一昨日の夜に三千院家の本家に向かって2週間ほど戻らないようです」

それはまた急な、とここでテルが感じた。嫌な方の予感だ。勿論これは直感であり、車の横に立つのが三千院家のSPだとそう願わずにはいられないテルだが。

「お帰りなさいませ・・・と言いたいところだが、少し夜遊びが過ぎるぞ黒羽嬢」

こういう時は決まって悪い事の方が当たってしまうことが多い。

「白銀さん、すみません」

小さく頭を下げたのを見て白銀は安堵のようなため息をつく。

「ナギお嬢様も心配していたぞ。モンハンの協力プレイは君がいないとダメらしいな」

「はい。ナギ様は火山ステージにクールドリンクを持っていくのを忘れることがあるので、誰かが一緒に行かないと気付かないので」

そうか、と車の後部座席のドアを開ける。

「では、早く帰らないと大変だな。あの様子だと、またディアブロスの突進に正面から突っ込んでいきそうだ」

と、黒羽を誘導させて彼女が座席に腰を下ろしたのを見て扉を閉める前に白銀は言った。

「ちよつと待っていてくれ。彼と話がしたい」

「・・・」

一瞬、間を開けていた黒羽だったが、小さく頷いた後で白銀がドアを閉める。そのまま振り返って、彼はテルと向き合った。

○

「さて、研修の方はどうかな？ 善立 テル」

「おお、おかげさまで。きちよーな体験をさせてもらってるよ。

そちらはとても楽しそうですね」

ん？ と心当たりがあつたのか白銀はテルの問いに余裕の笑みで答える。

「ああ、写真を見たのかな？ いい写真だろう。そっちの方でも一応あつたのだろう？ 主は一応お前の事を気には掛けているからな」

「ああ、うん。カルシウム辺りは気にかけてたかも。メザシ定食だったから」

先週に食べた悲しみの目指し定食の味を思い出しながらテルは目を細めて遠くを見る。やっぱイケメン執事は優遇されるのかな、などと思いつながら。

「ふむ。私の方では随分と充実した執事生活を送ることができています。お互いに頑張ることだな、それぞれの主に迷惑をかけないようにな」

余計なお世話だ、とテルは心の中で悪態をついた。

「まあ、暇でも貰えて三千院家に来ることがあつたらぜひ上がつていくがいい。研修中であつてもそれくらいは許されるだろう。たまには主に顔でも見せてやれ——そうだ」

言い忘れていた事があつた、と白銀がゆつくりと振り返つて余裕の笑みで言うのだ。

「今日の彼女の行動を『勘違い』なんてするな。あくまでこれはナギお嬢様の気まぐれであり、その行動へと移した彼女の『お遊び』みたいなものだからな」

「お前・・・知つてたのか？」

「いやいや、と白銀はわざとらしく言葉を作つて言う。

「たまたまだな。ふと夕食を持つていことしたところ、厨房からいい匂いがしたものでな。見たら可愛らしくエプロンを着て、一生懸命に作っていたのだ。乙女ゴコロをすっかり理解してやった配慮のつもりだよ」

「へえ・・・覗きなんて趣味悪いぜオツサン」

「私は25。まだオツサンと言われる道理はない・・・もしかして、もう既に手遅れだったのかな？」

小さく笑つて言う彼に、テルは二つほどの違和感があつた。一つは、なぜ黒羽の行動をピンポイントにテルの行動を抑制するよう警告したのか。もし、勘違いでそうなったとして、何か不都合でもあるのだろうか。

もう一つは、口で言い表せない物だった。頭の中で一瞬熱くなつたかと思つたら、今度はいつの間にか両の拳が握られている。どうしたものか、と考えていたときふと、黒羽の言葉を思い出す。

——貴方が帰るまで、貴方の居場所は・・・私が守りましょう・・・ああ、なるほど。

拳の形を解き、テルは納得して心の内で続ける。

・・・俺は怒ってんのか

それもそうだ、とテルは息を吐く。仮りにもし冷やかしたったり、さつきまでの行動に黒羽が他意を持っていなくても、自分を一瞬でも救った彼女の行動が『お遊び』と称されたのが堪らなく気に入らなかつたのだ。

だから彼は反抗してみたのだ。あえて子供っぽく、幼稚を装つて。

「もし、俺がアイツに『勘違い』しちゃったらどうなるのかな？ もしかして、嫉妬した白銀サンが俺を殺しに来るのかなあ？」

はっはっは、とテルが下☒た笑みを浮かべると、向こうの白銀は優雅に笑って見せ、その上でこちらを見る。

「やれやれ、お前のその頭はどうなってるのかメスで切り裂いて見てみたいものだ・・・」

いいか、と白銀が顔を手で抑えながら言った。

「私は『忠告』しているのではない『命令』しているのだ」

その瞬間、場の空気が一気に凍りついたのを感じ、穏やかな表情だったはずの白銀の顔がこちらとは違う笑になつていた。下品な笑い方ではない。それは悪い言い方をすれば、完全にワルそのものの顔だった。

言葉には不思議な力があると聞いた事があるが、全てオカルトの範囲内で済ませてきたテルだったが、目の前のこの男はオカルトという

範囲では済まないかもしれない。全身が悪寒を感じると同時に彼に支配されていくのが理解できる。強く意識を保たなければ本当に乗っ取られるかもしれない。

だから彼は意識を持ち、迫り来る悪寒を打ち払う為に息を軽く吸って聞くのだ。

「なあ、二度聞きになるんだけどさあ。その命令とやら無視したらどんな特典がつくの？ ヒロインに後ろから包丁で刺されてB A D E N Dなんてゴメンだけどね」
はは、と今度は白銀が笑って答える。

「安心するがいい。お前は一切危害がない。未来永劫、お前はそのあっぱらばーの頭で人生を謳歌できるだろう」

だが、と彼は続けて言い放つ。

「だが、代わりに黒羽が死ぬことになるだろう」

「なツツツ!?!」

だからこそ、と驚愕するテルに白銀が背を向けた。

「彼女を守る為に私がいなければならぬ。そして、その為にはお前の存在が邪魔なのだ善立 テル」

背から発せられていたのは、感じたことのない殺気であった。経験のない殺気にあてられ身動きできない間に白銀が車に乗り、発射させてしまう。

さて、という前に体を動かして車の出た方向を見るがそれ以上追うような事はなかった。誰もいなくなった後で、彼は舌打ちをして不快を現す。

「黒羽が死ぬって・・・どういうことだ」

悪寒と殺気から解放されてフラフラになった体を一旦門の壁に預ける。やれ勘違いするなだと、やれ黒羽が死ぬだの。突然とトンデモな発言をカマしてくれる。

・・・こちらとしても、まだ動くには時間があるな。

今日で、彼の本性を垣間見る事ができたが、あれはほんの一部なのだろう。そして、これだけの情報で彼に仕掛けるのは愚の骨頂だ。味方も情報も圧倒的に少ないこの状況では何をしても、白銀に論破される結果しか浮かんでこない。

「・・・まったく、合わねえよなあこのスタイルは」

はーっ、とため息をついて項垂れる。彼は、白銀が動き出すまで情報を探しつつ、ひたすら『待つ』という選択をした。だがそれは彼のこれまでの行動方法とは大きく異なる。若干いらいらを感じながらも、彼は一つの事を思い出して、指を鳴らした。

「ああ、そだ。残ったカレー全部食うか」

○

「待たせて済まなかったな」

車を発車させてテルの姿が見えなくなったのを確認してから、白銀は黒羽にバックミラー腰に謝罪を述べた。適当に話をして撒いてくるはずが、予想よりも時間がかかってしまったのは誤算である。

後ろの席では黒羽が先程の謝罪に対して、いいえ、と言ったのを聞く。

「彼も相当頑張っているようだ。あと2週間と少ないがこれは大きな変化を遂げるやもしれん」

「……白銀さん」

ん？と黒羽が聞いてくるのを理解して白銀が一瞬だけ視線をミラーに移す。ミラーの中の黒羽がそのまま話を続けた。

「白銀さんはチート系主人公と泥臭い主人公のどっちが好きですか？」

突拍子もなく不思議なことを聞いてくるなあ、と思いながらも白銀は考える。さて、どう考えたものかと。

「何でも自分の思い通りにまかり通るのなら、私は『チート』を選ぶ。

楽して好きな物が手に入るならそれに越した事はないからな」

だが、現実はそのような上手くいかない物だ。もしそんな力が存在していたとしたら、世界は滅亡も迎えるはずだ。必ずしもその力を手にする人間が、正義を掲げた『善い人間』とは限らないからである。「時々、私もそんな力があつたら……夢の中だけでもあれば良かったのと思うことがあるんだがね？」

思うところがあつたのか、少しだけ車体が中央線に寄る。油断をしたせいだ。すぐさま軌道を修正して、乗り手の気分を害さないように車を走らせる。

「まあ、そんな事よりもこれから簡単には外出をしないことだ。君みたいな若い子が、夜中に外出するというのはとても危険な行為だ……分かるか？」

ふっ、何を言いますか、と黒羽は余裕そうな口調で

「それはそれで薄い本とやらがたくさん出来るので社会貢献できるかと」

「ぶふっ!!」

思わず飛び出した驚愕の一言に、さすがの白銀も動揺した。

「ど、どこでそんな知識を知ったア!？」

「我が主に、一瞬の隙ありません。乙女物からBL臭のするジャ

ンルまで、その手の知識はばっちりです。あとは唯一現れたことのないシヨタ属性だけです。ワタル様や他の男性陣ではその願いを叶えるのは難しいようです」

・・・あの主は一体この子に何を教えているんだ！

心の中で彼は今でもひとりで繰り返しているだろうソロゲームプレイをする主の姿を浮かべた。この黒羽に罪は無い。罪があるのはあまりにも時代の波を察知して金のあるままに好きなものに手を出す我が主が悪いのだと、勝手に自分で納得した。

「つたく、ハヤテの奴・・・いったい何やってたんだよ」

「・・・？」

と、黒羽がこちらを見てきたのをミラーで確認して、先程の独り言を咳で隠しながら彼は言った。

「君はもう少し、レディーとしての自覚を持ちたまえ」

「自覚？ ええ、自覚してますとも。これほどまでにレディーしてるヒロインがどこにいますか。安心してください。ヒロイン力もレディーとしての質も、薄い本一冊くらいじゃあ落ちやしませんから」

どこか優雅さを感じるそのセリフに白銀が肩を大きく落とした。

「ああ、もうダメだ。誰かツツコミを変わってくれ・・・」

○

一方、その頃の咲夜邸。ここでは熾烈な戦い（カバデイ）が繰り返され続けている。

「カバデイカバデイカバデイカバデイ」

「カバデイカバデイカバデイカバデイカバデイ」

・・・この戦いを制して、私がラブコメ臭を断ち切ってみせるッ
そう気迫を滾らせる伊澄だったが、相對する咲夜はというと。

・・・え、コレがオチなん？

ハイ、オチです。

第115話く千里、新居とアルバイト先を見つけるく

唐突な自己紹介（某世紀末救世主伝説のナレーションンボイスでお楽しみください）。

乙葉 千里、彼は白皇学院に通う17歳の少年である。 父親が経営する会社、乙葉グループの御曹司にして次期社長という誰もが羨む栄光のロードを彼は順調に登っていた・・・だが！

突如として父親の会社は倒産し音信不通に！ 千里は金も名誉も失い、路頭に迷う危機を迎えた！

一難去ってまた一難・・・三千院家に居を構える千里だったが、白銀の罰ゲームによりまた新しく新居を探さなければならない！ 己の力で、その道を開け千里ッ 王者の道は、お前の望む場所にあるウ！

○

夕日が沈みかけている。 学生たちがそれぞれ部活を始め、教師たちは顧問の活動、またはデスクワークに励み、ある者は俺そんなの関係ねえ、と言わんばかりに順風満帆な帰宅部ライフを送り自身のお小遣いの為にバイトをする生徒もいる。

バイトと言っても多々あり、コンビニ、飲食店、新聞配達など東京などの地方になれば腐る程ある訳だが、この建設現場にてひとりの大男が白い袋をもっては移動し、積む。 また戻って移動し、積むという動作を繰り返していた。

「ぬんー」

乙葉千里、その人である。 作業着姿に安全メット、手袋長靴を着こなした180を越える筋肉隆盛の男の姿は一端の作業員と比べてはるかに異質な物だ。

さて、ここで一つの疑問。なぜ、乙葉 千里がバイトをしているかという疑問が浮かんでくるだろう、それは少しだけ時間を遡ることになる。

——数日前、それは三千院家でバトルドーム対決が行われた直後だった。テルとペアを組んだ千里は白銀のチームに敗北をしまい、彼の提案した「何でも言う事を聞く」という罰ゲームを受け、一ヶ月以内に新しい新居を探さなければならなかった。

「貴様は確か言っていたな、この条件を呑む代わりに俺に関係のある情報を提供すると」

ゲーム直後、テルが執事研修で愛沢家に移ってから的事だ。いつまで経っても白銀が話して来ない。こちらの事を忘れているか、もしくは敢えて教えないようにしているのかもしれない。

どっちにしろ、自身の事だ。自ら行動するしかない、そう思って休憩中の彼に聞くと。

「ん？ ああ、すまない。本気で忘れていた」

特に驚いた表情もせず、申し訳ないといった気持ちも伝わらないうな普通のトーンで彼は言った。思わず千里はガクツと、後ろのソファに腰を落とす。

「まあそんな怒るな。誰にだって物を忘れることがある。君にはカルシウムが足りないかもな・・・今日の昼食は魚系の物が必要なかもしれない」

さて、と白銀は自ら注いだコーヒーカーップを持つ。どうやら話してくれるらしい。

「提供する情報は・・・君の父上に関してだ」

「なん・・・だと」

思わず違ったってしまう千里だったが、白銀が落ち着いて座るように促す。千里が座ってから言葉を作って、白銀は口を開く。

「会社が倒産してから行方を暗ましていた君の父だが、その父から君に伝言があるらしい」

なんだ？ と、息を飲む千里に銀は淡々と続けて答えた。

「真の王になれ——と」

それを聞いた千里は目を点にした。 どういう意味だ？ と頭で考えるが、皆目見当がつかない。 常に王を目指すように心がけ、その父上からもそういう類の言葉は聞かされていた。 ここでこの千里の父が示す「真の王」とは一体どういう意味なのか。

「そ、それだけなのか？」

千里の問いに、首を縦に振らずに言う。

「そうだ。 私だけしか知らないトップシークレットな情報だ。 私の考えになるが、君が真の王になることで父上は姿を現すのではないかな？」

まるでテルやナギ達がよく持っている漫画や、ゲームの内容のような展開だ。 と考える千里だが、微力なものだが手掛かりらしきものは手に入ったと前向きに考えなければならぬ。 そう思った千里が立ち上がって部屋を出ようとした時だ。

「おっと、すまん。 もう一つ言い忘れていたことがあった」

「貴様、忘れすぎだろ！」

良いツツコミだ。 と白銀が心の中で感心するが、これ以上怒らせるのも面倒なので手短かに伝えることにする。

「家を探すなら、良い所を紹介してやろう。 ちょうどその従業員が足りてなくて困っているらしい。 アルバイトという形になるが、事情を説明したら住み込みで空いているアパートの一室を貸してくれるそうだ」

と、白銀が懐から名刺を取り出して千里が受け取るとそこには「松田建築」と書かれていた。

「なに、決して騙している訳ではない。できれば君の力になってやりたい一心だ」

嘘をつけ、と白銀の笑みに対して千里が問い返した。

「善立を追い出すような真似をしておいて、俺が信じると思うか？なぜこんな事をする？」

「ふふ、なんのことだか・・・それよりも、君はこう立ち止まっている暇はないはずだ。藁にもすがるくらいに追い込まれているだろう？」

「くっ・・・」

名刺を握り締めて、今度こそ千里は白銀のいる部屋を後にした。

落ち着きを取り戻した部屋の中で白銀がコーヒーを片手に一息をついた。

「さすが王様。『相変わらず』勘の良さは侮れないな」

○

と、その後は白銀の紹介された場所で彼はアルバイトとして雇われることができた。まず、なんでアルバイトをしているかという疑問より、どうしてアルバイトが「できている」かという疑問を浮かべるが、以前失敗した接客と違い、力仕事を主とするこの場の方が、千里に向いているのだ。

週休2日、時給850円。夕方から夜まで行われる力仕事としてこの給料は低い。ましてや部屋を借りている身だ。家賃は安くともそれだけで賄えるのかと問われれば厳しいものがある。

むしろ、この類の仕事に高校生が参加出来るのかとか突っ込んだらいけないのかもしれない。

・・・新しい俺の場所。ここで父上の言う、真の王とやらを見つけないならいいのか。

回想を終えた千里は持っていた砂利の袋を指定の場所に積み上げて額の汗を拭う。まだまだ体力的に余裕があるがまだ仕事の内容を覚えるので精一杯だ。

既に三千院家からは荷物など持ち出し、新しいアパートに引っ越している。三千院家を出ていくときは呆気なく、ハヤテやマリアが応援はしてくれたがナギは興味全くなしといった感じで、おおうそうか、と棒読み全開だった。

・・・おのれ、見てろ三千院！ 絶対に俺はここで王として君臨してみせるッ

そして、新しい場所では新しい出会いというのがセオリーだが、思いがけない再会があった。

「おーい、新人」

遠くから小さな老人が歩いてくる。見た目は160あるかないか。白髪を生やし、若干腰を曲げた50代の老人だ。

「どうだい、慣れたかい？」

「社長」

そう言ってくる老人に千里はまずまずだ、といってタオルを手にする。この老人は以前、千里がアルバイトを探していた時に公園で不良に絡まれていた老人だ。その老人を千里が助けた訳だが、実はこの老人が紹介されたアルバイト先の社長だったのだ。最近は定年退職していく者や、入ってもすぐにやめる者が多かったので従業員には常に空きがあったのだ。学生を入れる事を社長はあまり気に入っていないかったが、千里の事情など、当時の恩を返す意味も含めて千里を雇うことにしたのである。

「タフな男が来てくれて助かったよ。慣れない内は怪我することが多いからな。分からなくなったら先輩の従業員や俺に言っとくれ」

「うむ。心得た、社長」

と、頷いて返した時だ。近くに砂利の山の後ろで社員の一人が携帯を片手に休憩していたのが見えた。それを見た社長は目の色を変えてその社員の近くに行き、

「何やつとんじゃああああ!!」

「げふっ!!」

ドロップキックをしたのだ。それはもう、綺麗な決まり方で昔プロレスでもやってたんじやないかというくらいの精度だった。

「休憩時間外に携帯弄るたア いい度胸してんじやねえか。お前今年入ってきた田中だな?」

まるでヤクザのようなならみ方で田中に詰め寄る社長。そうこの社長、普段はとても温厚なのだが仕事が絡むとまるで人格が変わり、誰もが恐る鬼となる。

「ん? なんだこの携帯は」

社長は田中が落とした携帯を拾い上げると画面を凝視する。携帯を取り上げられた田中は震え声で社長に笑顔で言うのだ。

「そ、それは僕の永遠のアイドル! モバマスの蘭子ちゃんです!」

ほう、と社長は眉をひそめてニツコリと笑った。田中も一瞬の豹変に釣られて完全に笑ったが次の瞬間。

「俺の永遠のモバマスアイドルは幸子だバカヤロオ! 幸子以外のモバマスプレイヤーは全て敵だああああ!!」

再び鬼の顔へと変貌し、持っていた携帯を叩き折る。この時代にモバマスがあったの? とか深く考えないのがお約束。

「オラア! さつさとテメエら持ち場に戻りやがれエ! モバマス班はさつさと鉄筋用意しろ! グリマス班は掘って掘って掘りまくれエー!」

社長の怒鳴り声で一齐に作業員たちが動き出す。それまで通常のペースだったが、彼の一声で一気に上がる。こうして見ると、ある

意味統制の取れている職場なのかもしれない。

「社長、俺はどっちに行けばいいのだ」

顔を引きつらせた千里が聞くと社長は鬼気迫る顔で言うのだ。

「お前はまだ決めるのは早い。だからワシからアイドルが何たるかをしっかり教えてやる・・・まずはこれだ！」

と、手渡されたのはアニメのDVD。それも一枚ではない、この大きさBOXだ。

「このアイマスをじっくり研究して、アイドルのなんたるかを見極めるのだ！それが仕事を極めるといふ真理へと繋がるッ」

仕事とは一体なんなのだろうか、と深く考えさせられた千里だった。

○

——白皇学院。

「うーん、なんか最近忘れているような・・・」

朝の教室にて自分の席に座って何かを考えているのは白皇学院の生徒会長、桂 ヒナギクその人である。

生徒会の仕事を朝の段階である程度片付けている途中だった。

最近、普通に学校生活を遅れていることは良いのだが、高尾山辺りから自身の頭の中で何かがつつかえている感覚があるのだ。

その感覚を引き摺り、夜の睡眠までに影響・・・とまではいかないものの今日まで気にしている辺り、そろそろイライラみたいなのが溜まってくるかもしれない。

「何かしら・・・」

「やあ会長。最近なんか元気ないなあ、携帯ゲームで間違って課金したことを悔やんでいるような顔だ」

「突然どうしたのテルくん。私、携帯ゲームなんてあまりやっては
いないのだけど・・・と言うよりも、最近、朝が早いわね・・・どう
いう風の吹き回し？」

ヒナギクの問いに、テルは、ふっ、と小さく笑って窓から見える景
色を眺めて言うのだ。どこかぼーつとして本当に景色を見ている
のかわからないくらいの視線の泳ぎ具合で

「会長、天国の生き方ってなんだと思う？」

「・・・テルくん、自殺なんて考えちゃダメよ。最近、仕事の環境が
変わって疲れてるのよね？あまり溜め込むと体に良くないわ」

「俺が自殺志願者みたいな言い方しないでくれよ、おう。確かに仕
事に疲れてるけど・・・天国つてのは、つまり個人が決めた場所に安
らぎがある場所こそ、天国と呼べるのではないかッ」

「え、ええ・・・」

ジト目のヒナギクに動じることなく、テルは続ける。

「最近俺の居た三千院家に白銀といういけ好かないホモ野郎がやって
きた」

「ホモかどうかはさておき、咲夜さんの家で執事してた人よね？ナ
ギから色々聞いているわ」

漸く反応したヒナギクにヒートアップしたか椅子から立ち上がり
彼は腕を振ってみせる。

「俺の今までの天国とはッ マリアさんが居た場所だった。だが、今
の職場はもはや地獄と化した！よほどのことがないくらい三千院
家には戻れない！ならばどうするか、新しい天国を見つければいい
！俺の新しい場所とは、この白皇学院よ！」

狂ったような笑みを浮かべたテルはその理由を述べていく。

「ここにいれば、絶対に白銀に会うことはナイッ つまりここは俺に
とつてのもっともストレスが掛かる事のない天国ッ アイツは俺を
邪魔することができない！我覇者なりッ そう思うだろ会長ッ!」

・・・ああ、この人どうしよう、早くなんとかしないと。

哀れみを見る目でヒナギクは彼を見た。目を虚ろにさせながら先程の内容を語るテルの姿は明らかに頭を病んでいるようにしか見えないのである。

「勉強したくない、仕事したくない、学校行きたくない、仕事したくない、学校行きたくない」

交互にその単語を言い続けるテルをもう見てられないかと思っただか、ヒナギクは周囲に誰もいないのを確認して木刀・政宗を取り出した。刃を逆に持ち替えて自分に向くようにしてテルの頭めがけ

「ふんッ」

気絶しない程度にぶん殴る。ぎえっ、と一瞬叫んだテルは頭を回した後、自分で頭を何度も叩いてまるで眠覚めたような表情で言うのだ。

「お、会長じゃん。おはよう、なんか頭がスゲー痛エんだけどなんでだ？」

「さ、さあ？ 寝ぼけてたんじゃなかしら・・・でもテルくん顔色が良いわよ。健康なのは相変わらずね」

「お、おう」

凶器として使用した政宗を背に隠して、ヒナギクは誤魔化した。テルもそれで納得したのだから万事解決である。

「そう言えば、最近黒羽さんと一緒には来ないのね」

「当たり前だ。愛沢家の仕事だってあるのにその都度、あっちの方まで戻ってたら時間ねえって。だから今は白銀が俺の代わりに面倒を見てるんだってさ」

「・・・？」

ムカつく野郎だ、と小さく吐き捨てながらテルは考える。実際の所、確認はしていないが昨日の夜に白銀がわざわざ迎えに来ていることから、全てテルが行っていた仕事は白銀が代わってやっているのだ

ろう。

自分が邪魔、と白銀は言った。今はまだこちらを襲ってくる事はないのだが、準備が整い次第行動に移すことが考えられる。テルの方はその行動を移す前に白銀を叩くことを考えていた。しかし、情報が少ない以上、こちらは動くことができないひたすら待つというスタイルだが。

だが、昨日は少しだが彼の腹の内を引きずり出すことが来たのではないかと考えていた。黒羽の事についての話題では彼の態度が一瞬変わったのをテルは感じ取っていた。

・・・もしかしたら黒羽が関係してるのかもなア

「お、テル夫くん。朝から早いじゃないか、おはよう」

白銀について憶測を立てていたテルに声を掛けてきたのは花菱美希だ。後ろにはいつも一緒にいる朝風理沙の姿もある。

「生徒会名物トリオの二人じゃないか。なんか久しぶりだなオイ」
「どうも最近忘れられてきた気がしたんだ」

「このスーパーメインヒロインズ無くして、この作品成り立つのか！
否、立たない！」

テンポ良く答えていく二人だがテルはこのいつも見る生徒会メンバーの中にいいinchよさんレッドである瀬川泉がないことに気付いた。

「そう言えば、泉はどうしたんだ？」

あれ？と美希と理沙も言われて気付いたか、視界の中で泉を探そうとするが当然見つからない。

「あ、多分私が忘れてたのって多分泉の事だわ。貴女たち、風邪とかだったらちゃんと泉に連絡とかしておきなさいよ？」

もちろんだ、と美希が腕を組む。

「我々はリーダーであるレッドを決して忘れてはしないッ それが

仲間というものだ！」

「その仲間がこの数日間いなかったことに気づかなかったお前らはもはや畜生のレベルじゃねーぞ」

「う、うるさいぞテル夫くんの癖に！　そういう君は、最近見事に新しいイケメン執事にさぞ複雑な気分を抱いているそうじゃないか」

「おお、私も聞いたぞ。　なんでもハヤ太くんを寝取られてしまった普段のモチベーションを保てないんだって？」

オイこら、とテルが先に反論しようとした時だ。　横で話を聞いていたヒナギクの様子がちよつとおかしい。ぐいつと理沙の前に詰め寄る言葉を震わせて問いかけた。

「ちよ、ちよつと理沙ッ　ね、寝取られて、どういう意味よツ!？」

ヒナギクの剣幕に押されて、理沙は思わず半歩下がるが一瞬だけ美希とアイコンタクトを取り、助けを求める。　美希は数度瞬きして合図を伝える。

——構わんど。　面白くしよう

と、ついでにと言った感じなのか、二人はテルへと合図を送る。

テルもお前誰だよってくらい乙女チックな瞬きを試みさせた。　無言で会話出来るのかどうかはさておき、似たような者同士では通じ合うこと訳ないのかもしれない。

恐らくヒナギクが動揺する言葉を頭の中で作り、理沙が口を開いた。

「そりゃあもう、使用人同士でそんな関係に発展してもおかしくないんじゃないかな？　虎鉄くんみたいな男もいるくらいだし」

「で、でも・・・ハヤテくんに限ってそんな」

まだ焦り足りないな、と判断した美希が更に揺さぶりを掛ける。

「いや、でもほら、ハヤ太くんってなんかその手の人達を呼び寄せる乙女オーラがすごいじゃん。　もしかしたら、人気のない所で二人は名前を呼び合って！」

「あわわわわ」

「あー、そう言えば結構前だったかな、三千院家でハヤテがメイド服着せられてた時に黒羽が言ってたな。『思わず、うひよひよひよ、つて言いながらぱいタッチしてまうほどに女性オーラが出てました。アレが女性だけでなく男性も引き寄せる魔性の類なのですね』つて」
「ま、まさか！　そんなの、有り得ないわ」

うむ、押しが弱い、と美希が再びテルにアイコンタクトを求める。

——決め手に欠ける。何か良いネタはないか。

——うーん。おつ、そうだ。

思い出したかのようにテルが瞬きの合図。一旦テルはヒナギクに、会長、と声を掛けてから時間をかけていうのだ。

「実は、俺ハヤテからホワイトデーでお菓子貰ってるんだ」

「フアツ!？」

これはヒナギクだけでなく、美希と理沙も驚きであった。詳しくは、この作品のホワイトデーのお話をご覧ください。

「ビックリした。公園を通りかかったらコマンドーの冒頭みたいに『待ってたんだ・・・』とか言いながら俺にクツキーを渡してきてなあ結構本気だったよ、ウン」

と、いくつかテルが脚色を加えている物があるが大体はこの通りである。流石に効いたのかヒナギクの口からは何か霊体のようなものが現れ始めて教室の辺りを彷徨っていた。

「オートメモゲンダイ、ミーテーテネー」

持ち歌歌いはじめちゃったよ、と、もはや生徒会長の面影がない。どうしたものか、とテルが考えていた時だった。

「イーナーズーマー」

遠くから聞こえる声に反応した時には目の前には靴の裏があった。

「キイイイツクツツ!!」

靴がテルの顔面をえぐり、規格外の力がテルの体を簡単に中に浮かせる。一回、二回、三回転と転がり窓を飛び越える。教室内は静まり返り、そこに居たのは赤い目をして今にも口から蒸気を吹いてきそうなハヤテだった。

「あー飲みすぎたアー……ってアレ？　善立くん、こんな所で何してるの？」

二日酔いで頭痛のする身を動かして出勤してきた桂　雪路は白皇学院の庭にてヤムチャのごとく寝転がっている少年を発見するのであった。

○

「いやあ、ハヤテ君。　流石に俺も度が過ぎたよ、悪かった謝る」

昼休みになり生徒たちが給食をとり始めた中、テルはハヤテに両の手を合わせて謝っていた。ハヤテは弁当を食べながら不機嫌そうな顔で

「もう、あの後ヒナギクさんの誤解を解くの大変だったんですからね？」

「いやあ、申し訳ない」

「右に同じく」

美希に続いて理沙も謝る……笑い顔だが。

あの後にはヒナギクの処理が大変で、こちらが何度も説明しても涙目

のヒナギクが机に突っ伏したままだ。朝も早く、生徒が少なかつたのが幸いしたか、なんとか時間ギリギリまでにヒナギクとの誤解を解くことに成功した。

「まあどうだろう。ここは購買のパン一つで手を打たないか？」

「ま、まあいいですよ。大惨事は避けられましたし……でもパンは二つです。これは譲れません」

意外にセコイな、と心の中で思いながらテルは了承した。弁当を掻き込んで飲み込み、購買へ向かおうと席を立った時だ。エビフライを食べていた黒羽が手を止めた。

「テル、今日は購買に行かない方がいい気がします」

へ？ と、意味を理解できないテルは彼女にその意味を問う。

「どういうこと？」

「そこは女の勘です。理解してください」

いや、無理だろ、とテルは考える。別に暗殺者が来るわけでもないのに、大げさだなと思いつつながら購買に行く意思を強めるのだ。

「いや、大丈夫だろ。それにこいつにちゃんと奢ってやらないと気がすまないって表情してるし……」

隣のハヤテを見て、黒羽も納得したか、仕方ないと言った表情で言った。

「分かりました。では、私にチョコドーナッツお願いします」

「お前、ちやつかり俺をパシリに使ってるなッ！」

○

「そう言えば、白皇の購買ってあんま行ったことなかったなあーいつも弁当で済ましてたからだけど」

テルは購買へと向かう道の途中、財布の中身を確認する。今は一人奢ることができるくらいの余裕はある。給料日までまだ先だが、学

生としては十分だろう。

「やつはお金持ちの学校ですからねー、それなりに良い物を使ってるんじゃないでしょうか」

テルの横を歩きながらハヤテが言った。　コイツめ、俺に高いのを買わせる気だな、とテルが再び財布を確認。

・・・一つ1000円とかするパンあったらどうするよ。

もはや今月に生きる希望はないなど、心の中で諦めながら歩いていた時だ。

「あ、テルさまー」

ふと間延びした声を掛けられた先に振り向くと、和服を着た少女、鷺ノ宮　伊澄の姿があった。

「おー、伊澄。　なんか凄い久しぶりだな」

「テルさん、今日そればっかしか言ってますね」

ふふ、とその二人のやりとりを見て伊澄が笑う。

「実はここ数日ブラジルでカーニバルを・・・」

ついに地球の裏側に行ったか、といつもの迷子っぷりに驚くテルたちだったが不法入国でお縄にいつもかからないのが不思議で仕方ない。　何かトリックでもあるのかと疑ってしまいうくらいだ。

「あらっ？」

と、伊澄がすんすん、と鼻を動かしている。　どうしたのかと疑問を浮かべたテルだったが伊澄が顔を上げてこちらに尋ねる。

「テル様、昨日はカレーを食べましたか？」

「ん？ああ、そうだ。　カレーだけど」

ほう、と伊澄は口元を袖で隠して更に尋ねる。　その時だろうか、テルだけが感じた背筋に凍るようなものが張り付いたのは。

「お一人で？」

なんだろう、とテルはここまで伊澄に質問攻めされたのは初めてだと思う前に、伊澄の表情を見る。　確認するとまるでブラックホール

かな？ と勘違いするくらいな暗黒な雰囲気醸し出していた。

・・・どこでそんなベイダー卿並みの威圧感を手に入れたんだ

どう言ったものかな、と発言内容に気お付けながら考えたときにテルは感じた。ここで黒羽の名を出してはいけないと。

何故かだったかは分からない。いつもの彼の直感だ。頭では理解できていない、だが心で理解できた・・・的な。だから彼はいつもの変わらない表情で言うのだ。

「ん？ 昨日は愛沢家で出た食事がカレーだったただけだぞ。俺はいつも仕事が終わるのが遅いからひとりで食うのだ」

「・・・」

数秒ほどだが伊澄は考えて、思い過ごしかしら、と聞こえないくらいに声を漏らしたが疑いが無かったのを確認していつものおっとりした表情になる。

「なら、良かったです。テル様も購買ですか？ なら一緒に行きましょう」

・・・お、ベイダー卿が天使になったぞ？

と、はつきりした変化にテルは安堵する。どうしてここで機転が効いたのか分からないが、テルとしては起こるはずだった惨劇を回避できたのではないかとそう思わずにはいられなかった。

「あれ？ 結局伊澄、どこいったの？」

ものの数分で伊澄は行方を暗ましてしまった。まさか学校の中にも迷子になってしまうとは、予想外のことである。

ともあれ、二人は購買部の場所にたどり着いたが、様子が変だ。購買部に集中する生徒の数が多し。初めてここに来たから普段がどうなのか分からないが、明らかに客である生徒たちの熱気が違った。

「しかもヤケに女性が多い。」

「なんだこの行列!？」

「よほど人気なんですかね?　なんか黄色い声援も聞こえますけど。きつと店員がギャルゲの主人公格にイケメンなんじゃないですかね。　ほら、あそこの奥にハチマキを巻いた人が見えますよ」

大群の一番後方の列なので、二人が確認できたのは店員のハチマキだけだ。　顔だけはもつと距離を縮めなければ分からない。

「ともあれ、先を急ぎましょう。　売り切れて買えなかったなんてオチはつけさせませんからね」

お前はどれだけ俺に買わせたいんだ、と心の中で呆れながらテルとハヤテは人の群衆に突っ込む。　道を進む途中、争っている生徒と、目を歓喜に震わせている女性とも居た。

誰がこの現象を引き起こしているのか、それはこの一番奥へ向かってみなければ分からない。

テルは気合と共に前へ前へと進み、遂に売り場の最も近い前線にたどり着く、そこに居た人物は。

「おう、二人とも。遅かったじゃないか」

ハチマキを頭に巻いて、パンを売りさばいていたのは白銀だった。

○

——今日は購買で行かないほうが良いと思います。

テルは、数分前に黒羽に言われた事を思い出して本当にここに来なければよかったと改めて思っていた。

目の前でパンを嬉々として売りさばいているこの男がテルにとつてもつとも苦手な男、白銀拓斗だったからだ。

「ちよっ、なんでお前がここにいるんだア!？」

生徒の波を掻き分けながらテルが白銀に尋ねる。すると白銀が小さく笑って言うのだ。

「白皇学院で購買部の場所を一つ設けてもらったのだ。アルバイト代も出るらしいのでな」

「白銀さん、お金に困ってるんですか？」

いや、と白銀は否定して続ける。

「給料の方は確かに足りていない。貯蓄はあまり出来ていないのでね。それよりも私は、パンを焼くのが大好きでね。それはもう、ジャムおじさん以上の腕前があると自負しているくらいさ。だからこれは私の腕を白皇学院でこの腕を提供してあげたいと思ったのだよ」

・・・お前それ絶対ウソだろツ

元氣百倍とかそんな現象が起きたら絶対変なモノ入ってるんだろ
うな、とそんな事を思いながらテルは前へと進んで置かれていたパンを数個取り、お金と一緒に白銀の前にあるテーブルの上に叩きつける。

「まったく、乱暴なやつだな。あと、百円ほど足りないぞ」

「キィ——ツ!!」

白銀に指摘されて、テルは財布からもう一枚取り出すとそれも机に叩きつけた。周りがこぞって騒ぎ立てているのでテルの行動が目立たないのだ。

「さあさあ、売り切れ間近だ！急がないと目当ての物がなくなるぞ諸君」

テルの行動を気にも止めず、白銀が手を大きく広げると一斉に歓声が高くなった。テルは生徒とは逆の方向に進みながら思う。これは

絶対に新手の嫌がらせだと。

・・・ふう、執事の片手間、パン屋をやるというのも悪くない。
不機嫌を露わにしたテルとは対照的に、白銀は上機嫌であった。

迫り来る大量の生徒達を順に捌きながら商品であるパンを提供していく。

・・・旅の途中で身につけた甲斐があったというものだ。

いつしか、旅をしていた時にジャムを片手に持っていた老人から教えてもらったパンの制作技術がここで役二立つとは思いもしなかった。その結果で、白皇学院の中に雇われ人として入ることができた。これは大きな収穫だ。

だが他にも収穫があった。

・・・やはり、人の「食」を通しての笑顔はいつ見ても良いものだ。

心の中で、自分の得てきた技術が多くの生徒たちを喜ばせているというのは悪い気がしない。だが自身の目的の為に、この生徒達を利用しているという事を考えていると少々罪悪感を感じるが。

「おじさーん、パンチョーだい！」

「こらこら、私はまだ25歳だ」

目を丸くした小さな少女がいる。一年生だろうか。白銀は手早くパンを袋に詰めて少女に渡すことにする。少女は友達であろうもう一人の少女にパンを見せながら報告するのだ。

「シャルナちゃんシャルナちゃん、見てくださいコレ！ カレーナンです！ シャルナちゃん、カレーが出たので何か一発芸をッ」

「文ちゃん、遠まわしにかすかだけど私がインド人だということも踏まえて、どう考えても馬鹿にしてるようにはしか見えないわ。それに私辛いものが嫌いな、張った倒すわよ」

なんと、まあ、と白銀は思う。

本当にここは平和だなあ、と。

第116話く王様、ひとり暮らしに苦しむく

——愛沢家、テルの部屋にて。

「よし、いけっ もう少しだ・・・おせっ おせっ！」

机に座り、何かと向き合っているテルが両手を握って何かを見守っている。

『ヤー ヤー』

その目先に存在しているのは、いつぞやに三千院家に転がり込んできた黒羽のミニバージョン、チビハネだ。両手で自分よりも大きなボールペンを持ち、必死に何かを書いている。

「さあ、いけっ！ 望めっ！ 欲望っ 渴望っ お前だったら何でもできる!!」

『ヤーッツツ』

ぎこちない動きで紙の上でボールペンを動かしながらチビハネは気合一閃、ペンを振るう。だが勢い余ってチビハネはすっ転んで紙が宙を舞ってしまふ。

「こ、これはツツ」

舞った紙を掴んだテルが手を震わした。そこにはとても崩れて汚かったが読める程度の文字が書かれていたのだ。

「できた——ツ!!」

『ヤ——ツ!!』

紙を投げ捨てて、テルとチビハネが歓喜の雄叫びを挙げる。『なただでここ』と書かれていた紙を拾い上げてもう一度眺めながらチビハネにテルは言うのだ。

「苦闘72時間ッ よくぞここまで成長したッ お前は遂に平仮名をマスターしたのだツツ」

『ヤーッ』

小さい体でガッツポーズを表しながら、チビハネは紙に再び何かを

書き込んで見せた。今度はさつきよりもマシな文体で

『やったぜ。』

と、書かれている。

「うん、うん。俺もお前に教えた甲斐があったってもんだ。これで伝えたいことがあったら俺にこうやって教えることができるからなア」

そう、全てはテルが提案して実行したこと。まず、なぜチビハネがテルのいる愛沢家へとやって来たのか。それは黒羽がテルにカレールを届けに来た時にバスケットの中に潜んでいたのだ。元々、チビハネの存在は一度見た黒羽だけだ。目撃情報が少ないだけに移動することは容易であった。

突然現れたチビハネにテルはこう思った。

—— そうだ。文字を教えよう。

もうなんか京都へ行こう的なノリでそんな計画を実行したのだが、これには理由があった。この先、白銀は黒羽やテルに対して何か行動を起こしてくるものだと考える。ならばその時のために、偵察した情報をテルに教えることができるようにその手段を得なければならぬ。黒羽の言葉は『ヤー』という言葉だけしか分からない、だが、書いた文字ならテルにも理解できる。

だが、この計画は前途多難を極めた。文字を教えようにもチビハネも結構めんどくさがり屋で難しいことは投げ出したり、持っていたペンでテルの手を刺して来たこともあった。

だが、その苦難を乗り越えたチビハネとテルは文字を教えあった仲間として熱い友情で結ばれたのだッ。

「おーおーおー！ コイツめえ、この前までは思いつきりペンをブツ刺していた可愛くねえ野郎だったくせにイ こんなに賢くなりやがってえ 子供が成長することに感動する親の気持ちがあつたぜ」
机の上で胸を張っているチビハネに人差し指で頭を撫でながらチビハネは更にペンを動かした。

『成し遂げたぜ。』

「全くだ！今日はお前の為にケーキでも何でも食わせてやるからなあ 嬉しいだろ？ ハヤテに10000円払って作らせた極上のショートケーキだ！ 腹が膨れるまで食いやがれ！」

どこからか持ってきたのか、机の下からワンホールのケーキを取り出してチビハネは目を輝かせる。しかし、ハヤテにとって素材料など制作費については大赤字なのは確かだ。

「あーお前は可愛いなあオイ！ お前と遂に対話が出来るときが来たんだよなあ 無理な争いを通さなくても互の言葉を伝えることができてるモノ、それは『文字』ッ それを得ることができたお前はもはや我が『生涯の友よ』ッ」

両手でチビハネを抱えていた時だ。不意に、テルのドアにノックが掛かる。だが、当然歓喜の悦に浸っている彼らにその音が聞こえるはずがない。

「テル——」

という、小さな声を聞いてテルは固まった。チビハネを両手に抱えたまま、ゆつくりと振り向く。そこに居たのはひとりの少女だった。

——顔を青ざめさせた咲夜が。

「テル・・・あのな？ ウチ、見てしまっくん」

「み、見たって、何を？」

テルは笑顔だが、明らかに挙動がおかしい。額からは汗があふれて足が震えている。咲夜もテルの顔を見てはいない。

「その、いくら話相手が居なかったからって・・・人形相手にするのはどう、なん？」

「いや、違——」

「すまん」

テルが誤解を解こうとしたとき、咲夜によって遮られた。

「ウチは知らなかったんや。ここまでこの研修がテルにとって辛い

ものだったなんて・・・そこまで心の方が疲れていたんか」

「話を――」

なんとかしようとするテルだが、ここでチビハネを通して誤解を解こうとしても、当のチビハネが完全に固まって人形モードに入っている。

「お前の身を預かる主として申し訳ない・・・今日はもう、休んでええんやで？　ハルさんとか国枝たちにも言っとくから・・・」

にっこりと笑った咲夜の表情は慈愛に満ちていた。だがその慈愛に溢れた笑顔が、今のテルには辛い。　地獄すら感じる。

「それから・・・」

と、そう言っただけで咲夜はゆっくりと砕けたような笑みで扉を開けて言うのだ。

「なんか辛いことがあつたら無理しなくてもええんや。　相談だったらほら、伊澄さんとか喜んで助けてくれるで？　話し相手だったら・・・いつでもウチがおるさかい」

手を振って部屋から出て行った咲夜を見送って数十秒。　部屋には静寂に包まれていた。

チビハネが誰もいなくなったのをいい事にすぐさまテルの手から抜け出して机の上にあるワンホールケーキにかぶりつく。

『ああゝ　たまらねえぜ。』

という感想が書かれた紙を投げて、そのままテルの顔に張り付く。テルは放心状態で口元を引きつらせながら呟いた。

「どんどん俺の株が落ちていく・・・たまげたなあ」

○

「まったく、咲夜のヤロー。　いらねえ誤解を作りやがって・・・」

翌日、白皇学院へ登校していた。　これまでの仕事に押された疲れ

などはない。むしろ、あの後本当に時間が取れて眠る暇が出来てしまったくらいだ。

「あの後はハルさんとか国枝とか色々な人たちから差し入れもらったな・・・殆ど栄養剤とか滋養系のものばかりだったけど」

ついでに言うとうと、殆どの使用人たちのテルを見る目が可哀想な捨て犬を見るような目であったそうだ。

『新しい特技が増えて良かったです。これも私のおかげですね、感謝するですよ?』

「何言ってるか分かんねえぞ。つか、なんで着いてきてんだお前」

執事服の胸ポケットから顔を出したチビハネにテルが問うが、相変わらず『やー』としか返せず。

「見つかったら面倒だから、あんま顔出してくるなよ。もし広いところ行きたかったらここら辺の庭で遊んどけ、広すぎるからあまり遠くに行くなよ?」

『言われなくても分かってます!』

『やー』という声と一緒にチビハネはポケットの中に潜り込んだ。

気づけばもう教室も目の前だ。テルは気を取り直して、昨日の苦い思い出を忘れようと扉を開けた。

「テルさん!」

扉を開けた瞬間、ナギやハヤテ、黒羽の面々が見えた途端にハヤテがこちらへ歩み寄り、肩を掴んできた。

「テルさん、正気に戻ってくださいっ 一ヶ月後にマリアさんに会うんでしょっ こんな所で心を壊しちゃダメです!!」

昨日の話を忘れていたかったのに、すぐさま思い出されたテルはハヤテの頭を鷲掴みして力強く握った。

「オイ、お前は人の傷口をえぐるのが趣味なのか? 趣味なんだろう?」
「テル・・・」

と、ハヤテが黙らせることはできたが今度はナギがこちらへやって来た、当然昨日の咲夜のような悲しそうな人を見るような目で。

「私も・ちよつとキツク言いすぎた部分があった。でもこれは一応お前の為を思っていたことだったんだ・・・まさかお前がそこまで追い込まれてたなんて」

「いや、俺は別に」

まさか、とナギは加えて言うのだ。

「人形と毎日会話しまくるといふ心を病んだ痛い人になっていたなんてッ」

お嬢さま、とハヤテが涙を流しているナギにハンカチを渡す。

「労働体制が悪いんです。決してお嬢様が悪いんじゃないんですよ。一人の若者の体力をいのように使って人形とお話してしまうほど追い込んで人として手遅れにしてしまうこの労働体制がッ」

・・・なんだろう。心配されて、いるような感じがするけどその一方で、圧倒的誤解から生まれているこの・・・。。。。屈辱感？

だから、とナギが涙を拭ってテルに言った。

「これからはお前がまつとうな人間に更生できるように三千院家を総動員させて治療をしていくつもりだ。さっそくだけど、三千院家御用達の病院に入院させたいからお前の保険証を用意してくれ」

「ああいいぜ。俺はこんな最高の主の元で働けて幸せ・・・なんて言うと思つたか馬鹿ッ！ 紙芝居みたいな速度で話を進めていくんじゃないやねえ——!!」

扉を強い力で閉めたテルは奇妙な冒険たちの主人公のように異質なポーズを取りながらハヤテたちを指差した。

「さっきから人を精神を病んだだの、やれ人形と話す趣味を身につけただの、有りもしない嘘をいつまでも喋ってんじゃないやねえ!! 俺はノーマルだッ 至って正常だッ」

背景に大きな効果音が付きそうな剣幕で怒鳴るテルに一同啞然。

すると、ナギの声と一緒にハヤテと黒羽が円陣を組み始めた。

「なあ、どう思う？」

出来るだけ周囲に聞こえる程度の小声で言うナギは他二名に問う。
するとハヤテが少ない動作で低く手を上げた。

「ここは変に刺激しないほうが宜しいかと。 咲夜さんが言っていた事がいつもの冗談だったって可能性もありますから」

「そうかあ？ 咲夜のヤツ、冗談の割には迫真の声だったぞ？ 『そろそろアイツ本当ヤバイねん。 人間ドックでもタミフル治療でもなんでも良いからアイツを助けてくれ』 って言ってたしな」

それでしたら、と今度は黒羽が小さく手をあげた。

「黙って見守るといふ方向でどうでしょう・・・それでも全面的に信用しないという方向で。 今後の展開的に、テルは必ずボロを出すはずです。 その時に我々が証拠を抑えて、突きつけてやれば合法的でも本人も言い逃れできない状態にしてから病院送りにできます。

何も無かったら万事オールオッケーということだ」

了解した、という合図をするように首を縦に小さく動かして一同は円陣を解いた。

「いやあ、僕も大丈夫だと思ってきましたよ？ テルさんはタフですから、咲夜さんも人が悪いですわねー」

「うむ。 私は信じておったぞ 一度もお前を疑ったことなどない」

「同じく」

「なんつー棒読みだ貴様らッ」

あからさまな演技のかかったやり取りに違和感を感じずにはいられなかったテルだが、とり合えず場は収まったというべきだろう。

落ち着くべく、自身の席に座ってこう思うのである。

・・・そういえば、王様新しくバイトとアパート見つけたって話だけど、どうしてんだらうな。

○

白皇学院の三年教室はいつにもなく静寂に包まれている。 静寂

といつてもまだ朝という事もあり、生徒自体が少ない。それに登校している生徒も皆、三年生の為か真面目な者は教科書やノート、参考書、問題集を積んで朝から勉強に励んでいる者もいるのだ。

だが、この教室の生徒たちが静寂を保ったまま勉強などに励めているのはある事が原因であつた。

「ゆ、唯子さん見てください。千里くんが机に突っ伏して居眠りをしていますよ」

「うむ。熊が冬眠するかの如く、ぐっすりだ。このまま永遠に眠っていてもraithたいものだが」

と、教室に入った途端にその異様な光景を見た唯子とその書記が淡々とその状況を述べた。

「まあいつもこの時間帯から二人とも喧嘩始めますからねー。その喧騒で生徒が今日のように勉強できなくなる事が多くて苦情を貰っていたわけなんですけど」

乙葉千里と奈津美唯子は簡単に説明すると『犬猿の仲』だ。顔を合わせればどこでも喧嘩を始め、窓を割るなり壁に穴を開けたりと全校で有名だ。

「というか、唯子さんもそろそろ『こういつた遊び』も控えたほうがいいですよ。内申に絶対響きますって」

何を今更、と唯子は書記の言葉に不敵に笑う。

「自由奔放に生きてこそその学園生活。この馬鹿騒ぎを起こしたくらいで人生損するならそれまでの人生だったって訳だ。私は楽しさを奪われるのが最も忌み嫌うものだからな」

「え？ 千里さんとの喧嘩が楽しいという意味で？」

書記が考えるその唯子の発言の意味は千里と結子の関係が変化のことだろう。最初は本気で苦手だった相手を拳と拳で語るうちに恋に落ちてしまったとか、漫画なら充分ありえる話に一人期待する書記だが。

「うむ楽しいぞ。この男をどうやって犬のように躡てやるか出来るのか。私の足元にひれ伏して、その頭を踏んづける姿を早く実現させたいと考えると・・・もう楽しくてシヨウガナイツ」

「うわー、と書記は目を輝かせている唯子に口元を引きつらせる。・・・なんでこの表情はすごい乙女なんだろう。」

と、乙女なのか女王になりたいのか分からなくなる唯子だ。今だって既にバッグから色々物をも木の棒やらマジックペンなど取り出して、喧嘩売る気満々である。

「どうだ書記くん。君の隠れたSっ気を見込んで鞭を渡そうと思う。これでアイツの背中を叩いてやるといい。ちなみに鞭の先端は叩いた時の衝撃はマツハを超えるそうだ」

「わーなにそれ楽しそう・・・って何言わせる気ですか！唯子さん一人でやってください。私まで喧嘩の対象に巻き込まれるのは嫌です」

両手をばってんにして拒否反応を見せた書記に対して唯子はやれやれと言った表情で了解したのか、持っていた鞭をぽいっとゴミ箱に。

「では、小手調べに猫じゃらしで」

「彼は猫ですか？」

書記のツツコミをスルーし、唯子はニヤニヤとしながら左手に持った猫じゃらしを千里の顔付近へと近づけていく。

最初は無難に頭だ。ここなら髪の毛が邪魔になって直接猫じゃらしのくすぐりを感じとる事はない。

次はちよつと場所を変えて首だ。ここはさつきよりも肌が見えているので敏感な人ならすぐ気付く。

「・・・」

「おっ？」

案の定、一瞬だけ巨体が動いた。

ならば次は耳だ、と千里の前に立った唯子はひっそりと猫じやらしを耳へと近づける。先端が耳に触れた、その時だった。

「あっ・・・」

と、書記の声ポツリと出る。

「なんのつもりだ？」

顔を伏したまま、千里が言うと唯子も黙らずに言った。

「それはごっちの台詞だ・・・手を離さないか」

唯子の猫じやらしを持つ腕を掴んでいるのは千里の大きな手だった。しっかりと掴まれたことにより、唯子は動かすことができな
い。だがそんな事は問題ではない。そのような事は、彼女にとつてはどうでも良いことなのだ。

「俺は今、休息中だ。見逃してやるからどこかへ行け」

問題なのは、彼が圧倒的に拒否の言葉をこちらに向けて発していることだ。いつもなら直様に立ち上がって拳一つでも向けてくるものだが、その気配もない。

「嫌だと言ったらどうする？」

試しに煽ってみても

「・・・勝手にすればいい」

流されてしまう。こんな態度を取られては、別の意味で唯子の苛立ちが頂点を迎えるだろう。誰もがこの教室がまた戦場になることを予想していた。

だが、それが現実になることはなかった。彼女は見たのである。

「分かった・・・」

彼の、千里の目元についていた隈と疲れきった表情を。

「ふん」

と、納得した唯子を開放すべく、千里が彼女の手を話したその時だった。

「ふんッ」

「ごっ!! な、何をするか貴様ア!!」

唯子の気合と共に何か振り下ろされ、思い一撃が千里に打ち下ろされる。耐えられなかったか千里が起き上がると唯子はこちらに背を向けたまま言うのだ。

「ふふ、お前は知らないかもしれないが、もうHRが始まるのだぞ？それともお前は自称王を名乗っておきながら、HRも寝たまま起きないという中学生並みの失態を起こして王様（笑）に拍車をかける気か？」

「クッ・・・!!」

歯を食いしばる音が聞こえて、千里はぐつと抑える。ちょうど、扉が開いて担任の教師、薫が入ってきた。タイミング的にも良いと思っただのか怒る千里を後にして唯子は席に戻っていく。

「ん？ 奈津美、なんでお前六法全書なんて朝から持つてるんだ？」

片手に持っていた六法全書に気付いた薫が聞くが、唯子は笑顔で。

「はい先生、ちよつと馬鹿を殴ってきました」

「六法で人を殴ってはいけません」

薫が軽く注意した後でHRが開始される。完全に目が覚めた千里は息を軽く吐いて頭をさすった。

「なんなのだ一体・・・」

理不尽、とも呼べた行為だったがその裏に正当な理由が存在していたことに、千里は唯子のいつもとは違う対応に一つの『違和感』を覚えていたのであった。

○

時間は経ち、放課後。千里は建設のアルバイトの為に家へと急いで帰っていた。

三千院家から遠く離れることになってしまったが、学校との距離が前の家より近いため、通行の便ではこちらの方が良いように思える。

アルバイトは5時からだが、現場に行く前に制服は家に置いてある

ので一度帰宅する。

・・・これは、本当に家なのか？

家の目の前に着いて、千里は何度も考えてしまう。 というのも、今まで住んできた場所が豪邸だっただけに、目の前に存在するオンボロアパートはどうしても家と認識できないのだ。

家賃三万、六畳一間が彼の新しい家だった。

・・・ここは、犬小屋だ！ まだペットのヘラクロスの犬小屋のほうがマシなくらいだ！

東京にてこの値段はもはや破格の値段で都市伝説もので、しかも一人が暮らすには充分な所だが彼にとつてこのオンボロアパートは通り道にある家の小さな犬小屋にいるような気分なのだろう。

千里の部屋は二階にあった。 一応このアパートにも人は住んではいるのだが、いつも居るのかどうかもわからないほど静かなので色々な意味で不気味だ。

鉄の階段を上って虚しく響いていく足音が虚しい。 大理石の床を歩いていた自分が出していた音と大分違う。

「急がねば・・・」

ドアノブを捻って、中へと入る。 薄暗く、若干湿った匂いが鼻をついてきた。 日当たりが確保されてるのが唯一の救いなのだが、まさかの畳だ。 フローリングではないのがこの格安の値段だろうか。

ともかくも、靴を脱いで壁に掛けている作業服に手に取る。 カバンを置いて着替えに入ろうとした時にふと考えることがあった。

・・・本当にこの選択は正しいのだろうか？

白銀に言われるがままに従ったままでだが、無理に従う必要はなかったはずだ。 いつものように自分のやりたいようにしてあの三千院家にとどまることだって出来たはずなのだ。

それでもやはり、父親の情報を聞いて彼が黙っていられるはずが無

かった。この選択がいずれ父親と自分を結ぶ唯一の架け橋だとしたらどんな条件でも受ける覚悟だったはずだ。

蓋を開けてみたらどうだったのだろうか。それを考えた途端、千里は目の前が薄暗くなるのを感じてか頭を左右に振った。

「い、いかん！ 惑うな！」

立ち止まっただけはいけない、と自身に言い聞かせる。残された場所はここしかないのだと彼は作業着に着替えると急いで家を出た。

○

連日の肉体労働は、明らかに千里の身体に疲労を与えていた。基本建設現場のアルバイトでさほど大きな仕事を任される事はないが石材や重量物を扱う仕事は多い。おまけに単純作業なこともあり、いくら肉体を鍛えていた千里でも同じ繰り返しで終わりそうもないような作業には精神的に辛いものがある。

おまけに。

「はあ、はあ・・・」

「どうした？ 新入りイ、へばったかい？」

息を切らし、汗を拭っていたときだ。隣で自分よりもガタイの良い作業着の従業員が横を通っていく。千里が砂袋を同時に3つ持っているのに対してこの男は砂袋を6つだ。

・・・なんて筋肉なんだ!!

どこかで格闘とかやっていたのかと聞かれても仕方がないという見事な鍛えこまれた肉体だった。その姿をストリートファイターをやっていた人間が見たならば確実にザンギエフというような容姿だ。

「お前もなかなかのボディをしているが、この残義 衛府(ぎんぎ・え

ふ)のマッスルにはかなわないようだなア。　そんなんじやここでやっつけていけないぜ?」

と、砂袋が肩からずり落ちそうになって慌ててバランスを取ると千里を見てに爽やかなスマイルを送りながら去っていった。

「ま、負けてたまるか・・・ぬお——!!」

気合を入れてその足を進めていく。　今まで自身も肉体を鍛えていた為、力には絶対的な自身があつた。　だがそれもこの場所に来て思い知らされた事がある。

・・・俺よりも筋肉のある男がいるなんて。

井の中の蛙、という言葉を初めて千里は理解した。『頭』ではなく『心』でだ。　日本国内でも、自分よりも力だけで秀でている者はいなのだ。　それだけではない。

「ほっほっほっほ」

砂袋を降ろして、次の砂袋を持ち上げようとした時だ。　自分が大きな3つ持ち上げようとすると重さから手間取るのに、明らかに自分より小柄な男が砂袋を軽々と三つ持ち上げて走っていくのだ。

・・・俺はこの男よりも劣るといふのかッ

屈辱だ、と千里は心の底から歯を食いしばった。　どんなにもがこうとしても、足掻いたとしても、ここでは全てが並程度の結果しかもたらさないという事が。

この程度で自分の会社を復活させることなど出来るのか?　ここにいる者たち全員よりも劣る自分が。

劣等感が千里を包んでいく。

「テメエら!　作業中に携帯弄ってるんじやねえぞ!　死にたいやつは迷惑かけずに死ね!　グリマスいじってる奴はもつと死ね!」

ソーシャルゲームに変な入れ込みをしている社長の櫛が飛び、千里は正気に戻される。溜まっていた唾を一気に飲み込んで彼は足をとにかく動かした。

「クソッ!!」

明らかに苛立ちを隠せないまま、力任せにだ。

○

「.....」

アルバイトが終わり、漸く自宅へと戻った時は最初の勢いも失っていた。重くなった足を動かしながらドアを開けて、靴を脱ぐと倒れるように千里は畳の上で大の字になる。

そして真上の電気をつけることもなく、彼は振り返るのだ。己が
いかに未熟な存在だったか。

常に己が強きものと、そういう自覚の元、行動をしてきた。学院内で誰も逆らおうとしない態度を当然のこととしてきた。ほかにもいざこざがあれば鍛えた力で対応して乗り越えてきた。

だが、その自身の肉体もこの場所ではたかが知れている存在だ。学院内でだってそうだ。己のその新年に基づいた行動は他の生徒たちから見れば心底『どうでもいい』と言っていたのだろう。

・・・所詮は俺は王の器でなかった、のか？
決して言葉にしない言葉を胸のうちに秘めて彼は思う。だがそう思うのも当然だろう。

自分は何でもできると思っていた。

自分だけは特別、その大勢とは違う。

ましてや、己の描いた未来を疑った事などはない。

今はダメでも、いつかは自分の思い通りになると思っていたのだ・・・現実を知るまでは。

・・・こんな俺に、一体なんの価値があるというのだ。口に出さなければ出さないほど、頭の中で弱気な言葉が浮かんでくる。

よそう、とすぐに千里は明日の事を考えた。どんなに悲観にくれていたとしても、学校という日常はいやでもやって来る。夜食のことは頭には入っていなかった。

楽な姿勢をしていた為か、否応なしに眠気が襲ってきた。鉛のように重い体が畳の下へ下へと沈んでいく感覚だ。不思議と嫌な感じはしない。むしろ心地がいいみたいだ。

少しでも現実から離れるために、彼は少しの間に夢を見ることにする。

○

「これは、夢か？」

微睡みの中で、千里は夢を見た。どこかで見たような家と、全体的に見覚えのある人たち。

これは乙葉家の実家だった。

「千里よ」

目の前にいるのは父だ。スーツを着こなして、若干自己主張をしているヒゲがトレードマークの、千里の父だ。

「なんだ、父上よ」

「本当の王とは、なんだろうな」

突如として現れた父は、そう千里に問う。千里は押し黙った。

「分からんか・・・」

どこか残念そうに言う父は、千里に対して背を向けた。

「さて、父よ。俺からも聞きたいことがある」

去ろうとする父に、千里が問う形で止めた。夢の中であろうと、曖昧なことだろうと構わない。言えることは言っておいた方が良いのではないだろうか。

「俺は、俺はただの人なのか？ 父を探すべく、そして王になる為に色々やってきた。なんでも出来ると思っていたのは俺だけで、特殊な人間なんかじゃない。その他大勢の一人なのか？」

両の手のひらを見つめる。ひどく、汚れた手だ。以前の自分からは想像できないほどの汚さ。

こんな手を人々の上に立つ、王はしているのだろうか。違う、と千里は思う。

・・・これは、庶民の手だ。

「そうだなあ」

と、目の前の父が千里の問いに腕を組んだ。

「人にとって、王は何を求められるか・・・」

「は？」

「お前はちと、頭の方が硬い。視点を360。くらい変えてこの意味を考えてみる」

そう言った父の体がだんだんと霞んでくる。夢の終わりが近づいたのだろうか、周りの視界もぼやけてくる。全ての情景が、遠くへと飲まれていくようだ。

「ま、待て父よ！ 結局視点を変えても360。だと同じ結果に！」

「頑張れ息子よ。フォー스는お前と共にある」

意味不可解な文句を残して、親指を立てていた父の姿を千里は夢の中でその目に焼き付けることになった。

「父イイイイイッ!!」

○

「ハッ!？」

夢の世界から現実へと引き戻された瞬間、千里は目を開いた時に消えていた電気が点いている事に気が付いた。

…父よ、さっきのはどう言う意味だ。頭が硬いとは一体……。

寝汗がべつとりとたれているのにも気付く。夢の中で問われた事を真剣に考えるべきなのか疑問に思うが、千里はここであることに気付く。

「な、なんだこの匂いはッ」

一畳六間に広がる芳醇な鼻をつつく香り。元は台所からだ。千里が身を起こして台所へと向かうと、そこには煮こまれた鍋があった。

「これは、キムチ鍋か？　だ、だが汁だけで具がないのどういうことだ？」

突如として現れた具がないキムチ鍋に戸惑っていた時だ。玄関のドアが突然として開いた。

「おつ、空いてんじやーん。王様ー鍋食いに来たぜー」

入ってきたのは両手にコンビニの袋を抱えたテルだ。その後ろには木原やワタルの姿も見られる。

「あー、いい匂いっすわ。キムチのええ香りがするー王様、勝手に座るよ」

「ちよ、善立ー貴様ら何をしに来たッ!？」

コンビニ袋を置いて畳に座ったテルに千里が尋ねるがテルは平然といった感じで。

「何言ってるんだよ王様、鍋だぜ鍋。そこに鍋があつたらみんなで鍋パするしかねえじゃん。男同士で慎ましく、派手に鍋をつつこうぜ！」

「今日は牧村先生が飲み会で夜食を作る手間がなくなっただんで」と木原。

「ウチもサキの奴が友達に連れられて飲みに連れてかれて朝に帰るってさ」

とワタル。

「おい、おいおいおい。ワタル、またサキさんと喧嘩かあ？」

「ちげーよ。今回は知り合いの就職活動について一日中愚痴を聞かされるからってという理由をもらってるんだよこっちは」

・・・どういうことだ？

本当にそれだ。鍋パーティーなんて千里は言った覚えなんてないし、もちろん、企画しようと思ったことなど一度もない。それなのに、千里の部屋にはいつのまにか汁の入った鍋が用意されていた。いったい誰が。

「取り敢えず作ろうぜ鍋。ん？ さすが王様、鍋の汁まで作ってたじゃん、連絡通りだな。台所借りるぜー」

連絡？、と木原の気になる単語に千里が反応した。だがその意味を聞く前にテルが立ち上がってしまいタイミングを逃してしまう。

「しようがないなあ、木原くんだけじゃ不安だからこの四ツ星レベルのテルさんが手伝って——」

「ほら善立、ジュース買い忘れてたぞ。買ってこいよ・・・五分な」
「あつさりしてるけどなんてドライな対応するんだワタルツ！ 酷い！」

と言いながらもテルは財布片手に部屋を飛び出していった。

なにがなんだか、と千里は状況を理解できないままただ、時間が経過するのを眺めることしかできなかった。

木原が手馴れた包丁さばきで野菜や肉を切り、ワタルがちやぶ台を出して皿を並べていき、テルはひとりでルービツクキューブをして遊んでいる。

次第に匂いも先程のものとは大きく変わり、多くの野菜が混ざり合った香りも漂ってきた。

「さて、そろそろ始めるか」

「おう、センキューー ワタル」

鍋を持った木原がゆつくりとちやぶ台の真ん中に鍋を置く。蓋を開けると、紅く色を染めた野菜たちが燃えるようなキムチ独特の匂いと一緒によく煮立っていた。

四人の男たちは鍋を囲んで、あまりの鍋の出来に喉を唸らせる。

「よ、よし、お前ら・・・食っていいぞ」

「な、なんだよテル、遠慮しなくていいんだぞ？ とつてもうまそうじゃないか」

「アレ、じゃあ二人が食べないんなら俺先に食べるぞ？ ノリよくタイミング大事にして俺から行くぞ？」

数秒の沈黙、千里を除いた三人はコンマ数秒のアイコンタクトの合図を確認した次の瞬間。

「ヒヤッハーツ!!」

三人が一斉に鍋に箸を突っ込んだ。小さなお椀に汁と具材をたらふく乗せるとそれを一気に箸で掴んで、口の中へと放り込む。そして三人はそれぞれの具材を飲み込んで目を見開いた。

「この白菜がッ」

「この豚肉がッ」

「何よりこのキムチ汁がッ」

ウマイッ、とまたしても仲のいい奴等のごとくそう叫んだ。一人

この異常な雰囲気に取り残された千里は漸く視界の情報を脳へと伝達することができて漸く

「クツキングパパやってるんじゃないッ」

突っ込んだのだった。

「なんだよ王様ー、ノリ悪いな。俺たちもイキナリ入ってきて悪いと思つてたけどよー。飯つて一緒に食べるのが大事なんだぜ。

それに王様が鍋やるつて聞いたもんだからさー」

「テルが珍しくまともなことを言うとな俺は不安なんだが」

酷い話だが、テルがまともな理屈をこねた言葉を言うとはこれから三千院家の人たちが聞いたら驚くだろうなと思つた木原である。

「ちよ、ちよつと待て！俺は今日の夜、鍋をするつもりなんてなかったぞー！」

このままでは埒があかないと思つたか、箸を置いて千里は言った。すると三人は、え？、と困惑した様子で

「で、でもよお、俺ら奈津美先輩からの連絡で『バカ王子が鍋パするか集まれ』って聞いたから、具材は

俺らで用意して汁とかはあの馬鹿が用意するからって言つてたし」

と、ワタル。

「俺はあの青空レストランがここだからナナ様に会えると連絡を聞いて」

とテル。

「なんでだよ」

と木原。

・・・な、なぜアイツが。

朝からの事を考えれば奈津美の行動は意味不明だ。と、増える謎

に頭を抱えなくなった千里だが、ここでテルが気付いたように彼に尋ねた。

「そう言えば王様、ちゃんと飯食ってんのか？」

「ん？ どうしてだ」

「冷蔵庫の中、勝手に覗いちまったんだけど、驚く程に食物なくてよー。大食いだから常に空の状態なのか？」

勝手にのぞくな、と千里は内心でテルに突っ込みながら彼の問いについて考える。アルバイトが日給制だった事もあり、日銭が稼げるので食費自体は対して困らない。だが生憎、千里は料理ができないのだ。

一人暮らしの難点である料理。それが出来ないのなら簡単だ。解決の方法は、一人暮らしの御用達、コンビニである。今日までの食費は殆どコンビニの弁当で済ませていた。

「殆どはコンビニだが」

「ファッ!? お前三食とも自炊しないでコンビニ済ませてるのかよ!!」

なるほどー、と何を納得したか分からないが後ろの二人も頷いている。更にテルは続いているのだ。

「栄養偏るぞ。大丈夫なのかよ」

「正直な話、最近食欲がなくてな」

「なんか悩みか？」

と、問う辺りがこの男の無神経さなのだろう。もちろん、原因は肉体労働のバイトと学業、さらに偏った食生活のせいだ。個人の生活に口を出されるのは困るものだが、これはいい機会なのかもしれないと千里は思う。

・・・聞いてみるべきか、この男達に。

「実はな」

千里はさつきまで見ていた夢で言われた父の言葉について、聞くことにしたのだ。

○

「民が王に求めることおー?」
「そうだ」

テルが千里の問いに箸を置いて考える。千里がこの男に問をかけたのはどうしてなのか分からない。ただ、この男なら望める答えを出してもらえないのではないかと、そう思ったのだ。

「増税撤廃かな?」

「お前に聞いた俺がバカだった」

当然か、と予想はしていたがここまでのはずれな答えを出すとは流石に千里もため息をつく。

「ちよつ、お前あからさまに絶望したみたいなため息つくなよ!

えーつと、ちよつと待てよ? 今真面目に考えるから」

どこぞのとんちを使う坊主のように頭を指で撫で回しながらテルが考える。そのあとすぐに横にいる木原たちを見て言うのだ。

「どういうこつちや?」

「いや、俺らに振るなよ」

隣でうんうん、とワタルも頷く。

「王様が100人もいたらその王様に求めらる事だつて100通りだろうけど」

「そうなの、か。 なら俺が求められることはなんだ?」

「ちよーつと待った王様、なに勝手に亡命しようとしてるんだよ。

いつも通りにお前の好きなようにやるんじゃないのか?」

手を突き出して千里の言葉を遮ったのはテルだった。確かに他人に答えを求めさせて納得するのは千里のやり方ではない。亡命と呼ばれても仕方がないか。

「だが、それでは通用しないのだと俺は知ったのだ……無力なのだ」

○

握っていた拳を千里はまた強く膝の上で握る。

「俺には出来ない事などないと、思っていた。少しでも本気を出せば、俺の道は誰にも阻まれない。思い通りのままにできるのだと」

だが、結局それは自身の思い違いで、自惚れとも取れる脆い物で。

「俺は王の器に足る存在ではないか、なら俺の存在意義とはなんだ？」

そんなことばかりを最近考えるのだ」

口調はいつものままでもその姿にはどこかに陰りがあるのだとテルたちは感じ取っていた。あのどこまでも凶太く、プライドの塊だった千里が、弱気になっている。それだけでも衝撃的なのだ。

「うーん、大体わかったけどよ」

と、ここでテルが口を開いた。

「なら、この問題は自分で答えを見つけなつきやダメだと思っぜ王様」
コップを片手に彼は続ける。

「誰かに求めた答えを自分に当てはめたら、それはもう自分の意志じゃない。誰かのコピーだ。そんなの絶対俺やだな。どんな結果を未来で良い悪い展開をを招いたとしても……だ」

と、言った後に彼はジュースを飲み干した。

「ワタル、どう思うよ。将来再建を目指している者としての意見は」
テルに言われ、ワタルは部屋の天井を眺める。

「俺も今はサキと一緒にあの店を切り盛りしてるけど、絶対についてく
らい決めてることがあるんだ」

「む？　なんだ？」

首を傾げて千里が聞く。

「あの店を売らないってことだ」

いつになく、真剣な表情で彼は言う。

「俺たちにとってあの場所は始まりの場所なんだ。必ずあの場所から進出して、もう一度輝くためにな。だからあの店はどんな金積まれても手放す気もねえよ。これは俺があの場所で暮らし始めてから決めた男としての信念だ！　揺るがねえぜ！」

それに、とワタルは付け加える。

「もし、いつでも誰かが戻ってきてもいいような『居場所』の為に必要だしな・・・ん？」

違和感に気付いたかワタルを見ると、ワタルの肩を千里が手を乗せていたのが分かった。千里はそのまま立ち上がるとワタルも同時に持ち上げて

「お前は強い、感服したぞ橘ア！　同じ債権を目指すものとして、その志に敬意をツ」

「お、そ、そうか」

不気味な浮遊感に襲われながらもワタルは平然を装ってそう答えるのだ。千里は直立姿勢のままワタルを高い高いするように持つと高らかに言うのだ。

「俺は決めたぞ。決してこの先、王の道を極めるために、ただひたすらに足掻くことをツ　だがいずれは、服従させてみせる！　共に競おうぞ橘ッ！」

千里の覇気を込めたその剣幕にワタルは完全に圧倒され、お、おう、としか言えなかった。

・・・いやあ、思わぬ話で火が点いたなあ。

テルは苦笑いを浮かべるが状況が千里にとって好転したのは確かだろう。今はまだ逆境なのは確かだが、彼自身が小さな変化を始めている。そんな気がするのだ。

ならば、短い間でも同じ屋敷にいた者として自分ができることは決まっている。

「そうと決めたのなら話は早いぜツ 王様、私に良い考えがある。もしかしたらこれが、王様の答えに近づく大きなヒントかもしれないぞ」

「な、なんだそれはツ 言うのだ善立ツ」

ワタルを床に手放した途端、千里は今度、テルの頭を両手で掴んで持ち上げた。だが、テルはその強烈な

握力に動じることなく、ニヤリと笑みを浮かべて言うのだ。

「お前を栄光へのロードへと導く作戦・・・その名も、『王様、新春ありがとうキャンペーン』だツ!!」

第117話「一筆啓上」正体が見えたく

「おはようございますッ 雪路先生！」
「ツツツ!？」

明朝白皇学院に珍しくも早朝出勤してきた桂雪路は校門で生徒に挨拶をされて驚愕した。普通ならば、生徒が教師に朝の挨拶をするのはなんら不思議ではない。では、なぜこの桂雪路は驚愕しているのか。

それは、挨拶をしてきた生徒があ乙葉千里だったからだ。

「お勤めご苦労様ですッ」
しかも角45度の綺麗なお辞儀付きで。雪路は堪らず声をあげた。

「ちよ、ちよつと千里くんどうしたの!? 極貧生活に耐えられなくなて頭おかしくなったの!? それとも南半球にいつてきて風邪でもひいちゃったの!？」

雪路のその問いに、千里は上体を起こして、とんでもない、と続けた。

「常にご享受いただいている雪路先生には感謝してもしたりません。俺は至って正常でありますッ どうぞお気になさらず、健康体で出勤なさってくださいいッ」

と、千里は手元から紙パックの飲料のヨーグルトを取り出すと雪路に両手で差し出した。

「え、なぜヨーグルト」

「乳製品は体に効くと加賀美が言っておりました。今日も一日に栄光あれッ」

「お、おう・・・」

軽く手を上げてそう言って雪路は千里に背を向けると猛然と校舎に向かつてダツシユした。

○

「ねえちよつとツ！ 聞きたいことがあるんだけどツ!!」

妹であるヒナギクを凌ぐであろう身体能力をもつ雪路はダツシユして一分ほとして、二年の教室の扉を開いた。

「あつ、やべえジエンガ崩れた…先生、まだ来る時間じゃないでしょう、なにやってんだ」

息を荒げた雪路の視線の先にはやはりというか、善立 テルが木原竜児がいた。なぜか教室に殆どいない中、ジエンガをしながら。

「まずジエンガのことに突っ込みたいけど聞いてくれる？ 私今日ついに摩訶不思議アドベンチャーに出くわしたの」

「どうしたんだ先生、七つの龍の玉でも見つけたのかい？ だったら俺にくれよ。 昨日から寝不足でちよつと寝不足を治したいんだ」

・・・お前はそんなことに願いを使うつもりか。

とテルに内心で雪路は突っ込むが、それよりも話を続ける。

「千里くんが、敬語を使って私に挨拶をしたのツツ!!」

息を整えた雪路の放った一言に二人は、ふーん、と再びジエンガを積み始めた。

「そうかそうか」

「なら、作戦は大成功だな・・・やったぜ」

綺麗なタワーを積み上げた二人はまたしても勝手にジエンガバトルを再開。テルが先行だったのか、真ん中のブロックを丁寧に引き抜いていく。

「聞けエこの不良生徒どもオ——！！」

「ああ!!」

「俺たちのジエンガがつ！ 希望の塔がッ 何してくれるんだ先生ッ」

「黙りなさいッ」

ジエンガに対して非情の正拳突きをかまされ、二人の悲しみの緋弾に対して雪路は怒鳴って対応した。

「千里くんがあんな風になったのって絶対あなたたちのせいでしょう！ 教えなさいッ いったいどんな薬盛ったのッ!?!」

「薬を盛るなんてとんでもない。これは俺たちの作戦なのさ、なあ木原くん」

「おうよ、と隣にいたりユウジは散らばったジエンガを拾い集めながら言った。

「作戦って・・・なによ」

雪路の問いに、テルが薄らわらいを浮かべて立ち上がった。

「まあ、あれだ。彼は、強く望んだんだよ先生。王様たる器になるために、一体どうすればいいか俺たちは昨日、必死に考えたんだ・・・お互いに鍋をつつきながらな」

・・・とても必死さを感じられない回想ね。

雪路に構わず、テルと竜児は続ける。

「そしてたどり着いたもつとも合理的な方法はッ！ 朝に登校してくる全校生徒に敬語で挨拶をするという方法だったのだ！」

「強面高身長の彼が朝に大きな声で挨拶をしてくれるッッ 白皇学院

の女子たちはこんなシチュエーションを待っていたのかもしれないッ そう考えたのは橘ワタルだとも。だが、それよりも人に感謝、挨拶という人間の正しい一步を踏み出すことが今の彼には必要なのだと、そう考えた！」

「いや、絶対あんたら面白半分で作ってるでしょ」

傍から見てみれば、一体どんな罰ゲームであろうか。今頃朝の挨拶なんて適当に廊下で会ったら挨拶をするくらいなのにと、雪路がジト目でこちらを見てくるのに対してテルはとんでもない、と手を振って返した。

「これは、王様も同意してくれたんだぜ」

「千里くんが？」

「そうだとも先生、アイツ貧乏になっちまって会社立て直さなきゃって必死になってき、ちよつとでも自分変えてえんだとよ。俺にできないことが皆に出来てるなら、そこから始めなきゃいけねえのかなって」

確かに、と雪路は思った。これまで廊下で千里と会ったとしてもその時は大抵同じクラスの唯子と喧嘩をしている時だったり、喧嘩をしていない時だったとしても普通に通り過ぎていくだけだっただろう。

やったこともないことをいきなりやる。千里には信念と同時に行動力も備わっていたのだ。

「まあ、だから時間かかるかもしれないねえけどさ。変な目で見たりしないでくれよ先生、アイツ意外にセンチなところあるからさ、応援してやろうぜ」

親指をグツと立ててテルに言われ、雪路は息を吐いた。それは落胆を現すものではなく、安堵を示したものである。

・・・良かった、別に変にからかわれてたわけじゃなかったのね。

この二人に限ってそんな事はないかもしれないと思った雪路ではあるが、学校という集団生活の場では真面目な気質の人間を利用して

面白おかしく動かすことを楽しむ人間というのは存在するのは事実だ。

白皇ではあまりそんなことは今のところ話は上がらないがないとも限らない。一教師として、そういったことは監視しなければならぬが、今回のことは大丈夫だろう。

「なら、私も協力するわよ」

え？ と、テルと竜児は首を傾げた。雪路は腕を組んでしようがないと言った表情でいうのだ。

「あんたたちだけだと馬鹿な方向に転ぶ確率高いわけだから、少しばかり知恵を授けてやっても」

「いや結構です」

「同じく」

こちら。と、雪路は二人の頭を鷲掴みして動きを止めた。

「いや、だって先生上手く成功したら報酬をせがんで来そうじゃないですかー」

「こう言った類で桂先生が絡んできたら気をつけろってヒナギクに言われてるんですよ」

・・・くそうヒナめツ！ 人が真面目にやろうとしている時に変な手を回しおって！

内心でそう悪態をついたが、雪路は大きく咳をして気を取り直したか二人に指差して言い放つ。

「そうじゃないわっ！ 私は一教師として一人の生徒をサポートするって言ってるのよ！」

おおっ、と目の前の二人から感嘆のセリフが漏れた。しかし、その直後には

「おい、明日雪降るってよ」

「ああ、先生がまともなこと言い出したら雪が降る、はつきりわかんかね」

・・・こいつらあ！

真面目に答えた自分が情けないといったくらいに恥ずかしさを感じた雪路はこの気持ちを発散すべく、その矛先を積み上げられているジエンガへと向けた。

「授業に関係ないものを持ち込んだら没収よ！」

「そんな先生！」

「俺たちの希望の塔をッ！」

即座にジエンガを箱に詰めて必死に箱を渡すまいと構えるテルに雪路は問答無用で箱を取り上げるのであった。

「教師を馬鹿にするからこうなるのよッ」

こうして、奇妙な三人組による千里応援隊が誕生したのである。

○

そして時は変わり、日が沈んだ頃の鷺ノ宮邸。

学校を終えた咲夜はその足で鷺宮邸に足を運んでいた。大きな檜のテーブルで囲んでいる二人は優雅にお茶などを飲んで、リラックスマードだ。

だが、ただ単にお茶を飲み、遊びに家に来たというわけではない。

咲夜や伊澄にとって重要な話をするために咲夜はここに来たのだ。

「伊澄さん、それで結局のところどうなんや？」

湯呑を静かに置いた咲夜が話を切り出した。伊澄も湯呑を置いて対応するのだが、おっとりの性格が出たのか、当初の話し合いの目的を忘れてしまったようだ。

「どう、って……ああ、前にやったカバデイのことね咲夜。私、あれから練習して結構レベルを上げたのよ。勝負よ咲夜」

「ちよつと待たんかーい！ まだカバデイの話引つ張ってんのかい!? もうええねん！ カバデイはもうええやで伊澄さん！」

以前、咲夜が伊澄をテルの元に行かせない為に提案していた「修羅場を起こすにはカバデイを制す」というのを律儀に守っていたらしい。その日のカバデイ勝負は咲夜が全勝したわけだが。

「この前は咲夜に完敗したけど、今なら負ける気がしないわ。あれから練習を重ねて息止め時間を3秒ほど更新したのよ」

「あんま、変わってないやんけ……」

呆れたような声で咲夜は肩を落とす。というよりも、そこまでカバデイをマスターして修羅場を展開したいのだろうか。

「それより、本題に戻すで伊澄さん。話というのは、もちろん……白銀の事や」

「まあ……察しはついていたけど」

嘘をつくな嘘を。と額に皺を寄せる咲夜はしようもないことだと考えて続ける。

「巻田と国枝に頼んでアイツの情報を調べてみたんやけど、奇妙な点があつてな……」

「奇妙な点？」

伊澄が首を傾げた。

「経歴が不明なところが多すぎるんよ。ここで執事職をやるのは確か初めてのはずなのに、まるで前職だったかのような手際の良さや」「なら咲夜、愛沢家で働く前は一体どんな仕事を？」

「んー。某出版社でアシスタントやってたって聞いたから、その出

版社に問い合わせてみたんや。一応、その出版社で白銀拓斗というアシスタントはいたらしいんやけどな」
「けど?」

伊澄に聞かれて咲夜の表情が曇った。

「そこにいた白銀拓斗っていうのは40歳の独身で、2ヶ月まえにもう病気で亡くなってるんや」

「・・・つまり、今三千院家にいる白銀拓斗は・・・偽名ってことかしら」

伊澄の問いに、咲夜は渋々首を縦に振った。

「いよいよわからなくなってきたで。アイツがナギの遺産目当てで執事研修を持ちかけたのなら、別にテルを追い出す必要はないはずや」

「そうね。テル様を追い出すのは、三千院家の遺産を相続するハヤテ様を「倒す」という条件とはまた違ってくるものね」

伊澄は目の前で頭を掻きながら、テーブルに顔を突っ伏してる咲夜を見て小さく笑った。

「・・・なんや、伊澄さん」

「いいえ、ただテル様のことになると咲夜も必死になるのね、と思つて」

「なーーーーアホな!」

即座に咲夜は立ち上がった。

「テルのことを気にしてるわけやあらへんからなア! いくら今一緒に愛沢家で働いてるからつて変な感情なんてないんや! フリーザがいいやつになるくらい有り得へんのや!!」

「はいはいそうですね」

棒読みとわかってしまうくらいのわざとらしさに咲夜は顔を真っ赤にして今にも噛み付いてしまいそうな勢いだっただがペースに載せられるのも癪だと考えたのか、落ち着いてから話を元に戻す。

「今のところ、全然動きを見せないのが不思議なくらいや。伊澄さんから見ても、アイツ（白銀）はどうや? なんか変な感じはしないん

か？」

そうですね、と伊澄は袖で口元を隠した。

「私その人を初めて見たのは白皇の昼休みなのですが、有名なレインボーパンを買いそびれたのを無理に頼んで配送してもうのがきつかけでした」

買ったんか、あのパンを。

「私を感じたのは――」

と咲夜は感想を聞いてみたかったのだが、その前に伊澄が口を開いた。

「あの人からは『この世ならざる存在の力』を感じます・・・とても強い意志も」

その言葉を聞いた咲夜は目を点にして、やがてこう答えた。

「幽霊？」

「いいえ、ちゃんと生きています。ですが、5割ほどしか生命の波動を感じません・・・」

・・・生命の波動って数値化できるんやな、光の巫女ってスゲー。

「なんなんやろ。あいつってどっかのゲームに出てくるサーヴァントなのかな」

「確かになんとなく、弓矢を持つ人に似てますよね」

咲夜は改めて考えてみる。白銀拓斗という名を語る男について。

彼は本当に悪人なのだろうか、と。

伊澄は言った。彼は意志の強い人間だと。実際彼は決めたことに対しては徹底して取り組むし、その姿勢に惹かれて短期間で周囲の人間の信頼を勝ち取った。それでも驕ることなくストイックとまではいなくても、日々精進を心がけている。

一時期、咲夜は風邪を引いた。巻田も国枝も居なかった中、白銀がお粥を作ってくれたことがある。その日はずっとつきつきりで看病をしてくれて、容態が落ち着いたら後は、話し相手にもなってくれた。決して、悪人ではないのかもしれない。

白銀がこんなことを言っていたことを思い出す。初対面にも関わらずハリセンツツコミを行った時、彼は笑ってこういったのだ。

——まったく、こうしていると昔の仲間を思い出してしまう。

その時、友人の名前は口にしていなかったが、どんな人物かと言えば、自分と同じような関西ツツコミ系のキャラだったらしい。どうにも、もう亡くなったとか。

「咲夜」

回想にふけている中、現実に戻したのは伊澄の一言だった。

ハッと我に返り、伊澄を見ると彼女は自分の方ではなく、開いていた戸の向こうに佇む影を見つめていた。

「どうやら、向こうから来てくれたみたいよ」

え、と声を上げる間もなく伊澄と同じ視線を追う。そこにはビニール袋を抱えた白銀の姿があった。

「いやあ我が主殿、そして伊澄お嬢・・・レインボーパンを届けに来たぞ」

○

「発注ミスで一つ余分に作ってしまった。ちょうどいい、主も一緒に食べるか？ お前にレインボー」

悠々とやって来たその男は、笑顔を浮かべてパンの入っているであろうビニール袋を咲夜に手渡した。中からはまだ焼きたてなのか、芳醇な香りが漂ってくる。

「ありがとうございますシロナーガさん」

「人の名前を間違えるのはなかなか失礼だと思うぞ・ ・ ・ それじゃなんか私は蛇みたいじゃないか」

「待て白銀」

ガクツと肩を落とす白銀に対して咲夜は待ちきれずに口を開いた。

「なにしにきたんや。 わざわざここに来んでも、こんな夜に届ける必要なんて何もなかったはずや」

咲夜の問いに、白銀は小さく鼻で笑った。

「ふふ、いやあ、そろそろ感づかれると思ったのでね。 心配してきてみれば我が主はまだつかみきれてないみたいだ」
「……」

「『鷲宮の光の巫女』はどちらかという気づいているんじゃないのか」

「……」

伊澄はだんまりだ。 代わりに咲夜が問う。

「なんでお前が伊澄さんの秘密を知ってるのやツツ」

「情報ありきの世界だ。 裏の者なら知らない者はいない・ ・ ・」

肩をすくめて彼は不敵に笑う。 だが、ここで黙り込んでいた伊澄が口を開いた。

「……正確には、最初から知っていたのでは？」

「……流石だ」

続け様に伊澄の問いが飛ぶ。

「どうしてテル様にこのような仕打ちを？」

「そうや、ナギの遺産目当てか？ そっちならテルじゃなくて、ハヤテの方を狙わんと意味ないで!？」

三千院家の遺産？ とその言葉に彼は首を振る。

「私は別に遺産には興味はないよ。 お金なんて今の私にはなんの価値にもなりはしない」

白銀は二人を見据えると、どこか信念を込めた瞳で二人に言った。

「私の目的は、善立 テルの抹殺——」

彼が『抹殺』の二文字を口にしたその瞬間だった。 咲夜も目を疑っただろう。

一秒とも満たないその間で、白銀は伊澄の右手から放つ青白い光に包まれたのだ。それは人一人を丸呑みするくらいの太さで、周りの物すらも衝撃で吹き飛ばしていく。

妖怪に対してまさに一撃必殺とも呼べる靈力の塊を伊澄はあろうことか白銀に放っていた。

「な、なにしてんねん伊澄さん！」

「なになって・・・テル様に害をなす妖怪退治を」

素っ頓狂な顔でそう語る伊澄の目はどこか狂気を孕んでいた。

それに動じるのは今のこの状況では良くないことだと理解した咲夜は

「一般人！ あれ生身の人間ッ！ ノーマルヒューマン！ 至近距離で八葉の力を使ったら——」

「私が・・・どうかしたのかな？」

煙の中からの声に、二人は思わず身を固めた。 その視界が晴れたそこには。

「なかなか、力のある術だ。 ちなみに、私はこのとおり、人間だ。決して妖怪なんかじゃあないよ」

無傷の白銀が立っていた。

「うそ、そんな・・・一体どうやって」

有り得ない。伊澄は率直にその言葉を作った。今まで力が通しなかった相手は後にも先にもあの能力を使用できていた黒羽舞夜、ただひとりである。

「白銀・・・アンタ、一体」

「咲夜、下がっていて・・・この人はツツ!!」

額に汗を浮かべながら、伊澄は目の前の思わぬ強敵から咲夜を守る為に前へと踏み出す。

「目的は・・・なんなのですか」

「・・・私はもう準備は完了した。彼を仕留めるシナリオはもう出来上がっている」

そう言って白銀は悲痛な表情で語りかけるのだ。

「俺は・・・助けられなかった人間』を『この時代』で、『この手で』助けたいだけなんだ」

『この時代で』・・・？ 白銀、アンタ・・・まさか」

伊澄も、咲夜も二人して同時に考えたことだろう。多分、これは正解なのだろう、はなまるで100点がついてしまうくらいなの。だがそれは先に口を開いた白銀の言葉によって遮られた。

「伊澄、咲夜・・・悪イんだけど、お前らの協力が必要だ。ここまです知られちゃった以上、お前らは俺の駒になって働いてもらうぜ」

ニヤリと、どこかで見た覚えのある笑みを白銀が浮かべた瞬間、一際大きな光が放たれた。

第118話くハヤテ、昔話をさせられるく

三千院家の執事、綾崎ハヤテは真夜中の0時を過ぎているというのに未だに起きていた。月の光が部屋へ差込み、小さく風が窓を揺らす音が響く中で彼は部屋にて問題集とにらめっこだ。

「・・・ねむい」

頭で考えるより、口が勝手に喋ったような感覚だった。これが直感だというのだろうかとかとハヤテは再び問題を見据える。

さてさて、完璧超人でもあるこの執事がなぜにこんなに疲れていたか。理由はいつものごとくお嬢さまであるナギ絡みによるものである。

——そろそろ季節だ、ウナギを食べたい！

全てはこの一言から始まったと言っている。

季節もなにもまだ四月だというのに何故かナギはウナギを食いたいとせがんできた。いつもの無茶のようだが今回は桁が違った。

「まさか浜名湖に行かされるなんて・・・」

ちょうどテレビにて、なぜかウナギの話題が上がっていたのがいけなかった。元気になるだの、発育がよくなるだのとそういった謳い文句にナギが釣られるのはよくあることだ。

ソファにて眼を輝かせたナギがハヤテを見て、「ハヤテ、お前に採集クエストに行ってもらおう」と言われた時点でせつかくの日曜日が潰れると確信した。

とはいえ主の依頼、クエスト報酬はまともに払ってもらえないだろうが命令とあらば動くのが執事だ。その日の朝食後大事な仕事の為に彼は出陣するのだが、問題が発生する。

『大型台風接近のお知らせ、水のあるところに行くとは死にます』

なぜに来た台風よ。こんな時期はずれになぜきた。そしてなぜ今なのか、ハヤテは心底、自分の運のなさを呪った。

特に、浜名湖辺りに行く人は要注意というキャスターの言葉に身を震わせたのは間違いはない。そのニュースを聞いて我が主は

『あなたなら、できるわ』

お世辞にも似てるとは言えないセイラ・マスが肩に手を置いて、屈託のない笑顔で言った。

だから彼は行った！

降りしきる豪雨の中、自転車で浜名湖に！しかし現場、まるで激流！ダイダロスのうねりのような水が暴れる浜名湖、入れば99%は『死』あるのみ！

『激流を制するは静水』・・・世紀末兄弟の次兄がそんな事を言っていた事を思い出して彼は飛び込むのだ。我が主の笑顔の為に。

とまあ、こんな事もあって彼は夕方に帰ってきたばかりなのだ。

疲れているのは当然なのである。

・・・でもまあ、お嬢様が喜んでいたのなら、いつか。

ペンを走らせて、彼は釣り上げた（手で掴んだ）10M近くある巨大ウナギを見た屋敷でのナギの笑顔を思い出す。隣に居たマリアや黒羽も驚愕していた。

しまいに白銀からは。

『さてはお前、石仮面でも被ったか』

と言われる始末。

一応、その功績を称えられて夕方以降はお暇をいただくことが出来たのだが、彼は白皇学院の生徒、成績は常にギリギリだ。こんな時でも予習復習は欠かせない。寝る時間も惜しいくらいに、いつもは思っていたのだが流石に10Mのウナギとの格闘は流石に応えたのか眠気が加速していく。

「こんな時は・・・なんか飲み物」

取り敢えず口に何かを、と求めてやって来たのはキッチンだ。よくナギに朝食後に出しているコーヒーを作るためのコーヒーメーカーを起動させて自分のコーヒーを作り出す。

夜中、誰もいないキッチンで挽いたコーヒーの匂いが鼻腔を刺激する。これだけでも充分眠気が覚めるくらいだ。

だが、飲むことに越した事はないのでハヤテは自分のカップにコーヒーを注ぎ、一口。彼が淹れたのはキリマンジャロ、実に風味な味だと彼は浸りながら窓の外を見る。

ほんとに午前中台風だったのかなと疑うほどに静かとなった庭だ。といっても風の影響はちよつとあつたのか屋敷のマリアの家庭菜園がある場所には全体を囲うような防風ネット。

『もう！ テルくんとか男性がいないからかなり大変だったんですよ！』

帰ったあと、泥だらけのマリアがそう愚痴つていたのを聞いた。白銀はどうやら所要で屋敷にいなかったらしい。

SPにでも頼めばよかったんじゃ、という突っ込みは禁止だ。

「……アレ？ 黒羽さん？」

その家庭菜園付近を目を凝らしてみると、カーデイガンを纏った黒羽が上を向いて立っていたのをハヤテは確認する。

……なんであんなところに。

と、ハヤテは目を数度見開いて考える。黒羽の行動はある意味、突発的だ。その行動は同じ同居人となった今でもあまり分からないのが現実である。

ハヤテはカップをもう一つ取り出した。

○

「どうも、黒羽さん」

「あら、ハヤテ様」

夜の庭にて一人佇んでいる黒羽に、コーヒーカップを持ったハヤテが現れた。

「どうしたんですか？ こんな真夜中に一人で」

「まあ・・・ちよつと涼みに」

ハヤテに差し出されたコーヒーカップを受け取ると、黒羽は小さいその手でコーヒカップの温度を感じ取る。結構熱めだ。

「一応聞きますが、ハヤテ様は今まで何を・・・今日はもう非番にしてもらったのでは？」

「ええ。でも日夜白皇の学力についていくために、予習復習はかせません！あと四時間は勉強するつもりです！」

「・・・」

黒羽は考える。この少年はたしかあと四時間は勉強すると言った。

現在は夜中の0時だ。ここから四時間勉強したとしてももう朝の4時だし、そこから寝て起きるとなるとこの少年はいつ寝ているかと気になる。

「ハヤテ様、起床時間は？」

「僕はいつも五時と決めています。朝の食事の準備もあるので」

「絶対いつか死ぬと思いますが」

無機質な突っ込みが返ってきてハヤテは、たはは、と頭を搔く。

「台風が過ぎても今日の夜は冷えます。もう戻ってはどうぞでしょうか、黒羽さんの体が心配です」

「ふむ、それもそうですね」

と、彼女はコーヒーを口にする。それから数十秒ほどしても黒羽は動かない。どうやらまだ屋敷に戻るつもりはないらしい。

「あ、あのう・・・黒羽さん？」

こんな時、テルが居てくれたらと心底思うハヤテだった。目の前の黒羽舞夜は完璧超人であるハヤテが唯一意図を汲むことが出来ない人物である。

しかし、なぜだが彼女の行動をテルは上手いこと理解できるらしく、彼女の教育係をテルに任されているのはこの日を堺に適任だと思

うようになつたハヤテだった。

暫くしてか、黒羽が唐突に口を開く。

「ハヤテさま、突然ですがナウでヤングな話をしてください」

「唐突ですね」

冷静に答えるハヤテに黒羽が空を見たまま続ける。

「どうにも私はハヤテ様が淹れたコーヒーのカフェインが強すぎるせいで眠れなくなってしまいました。私が眠くなるような状態になるまでナウでヤングなお話をお願いします」

「つまり、眠気を誘うようなつまらない話をしろと？」

「いいえ、それでは聞き手が損します。できれば興味をそそられるお話で・・・そう言えば子守唄ってハヤテ様の言うように実はつまらない歌なのかもしれませんね。つまらないから人が眠るように、お母さんが抱っこして『ねーんねーんころーりよ』というあのフレーズを聞いた赤ん坊は『あーもうツマンネえ、もうねるしかねえ』と眠っているに違いません・・・というわけで」

彼女はハヤテに向かい合って言うのだ。

「ハヤテさまの恋話的な物を何か一つお願いします」

「なんも脈絡もない状態でお題を頂戴しちゃいましたよ僕ッ！ 不意打ちですよ！ カエルパンチ並みの不意打ちですよ!!」

「とつとと始めてください」

「終いには罵倒されてる!?!」

○

「ここまで聞いていてなんですが、ハヤテさまは彼女がいたんですか？」

「え、まあ・・・一応」

え、とそのハヤテの言葉に黒羽が珍しく口をぽかんと開けていた。
「なんとということでしょう。　ハヤテ様の毒牙にかかったかわいそうな少女がまた一人」

「人を毒蛇見たく言わないでください・・・ちゃんと正式にお付き合いしたお人です」

ほう、と黒羽が無表情ながらもその声のトーンを変化させる。　食いついたか、と悟ったハヤテはどこから話すべきか模索して漸く口を開く。

「まあ、出会いが衝撃的だったんでよく覚えてますよ。　よく僕を叱ってくれて、色々と教えてくれました」

主に『男は常に甲斐性を持って！』ということだったのだが。

「なかなか意味深なお話です。　それで、キスは何回していたのですか？」

思わずハヤテは吹き出した。

「どうしたんですか。　コーヒーいきなり吹き出して」

「いや、あまり黒羽さんが言わなそうなフレーズが出てきてビックリしちゃって」

「なかなか失礼な言葉ですね。　その様子だと経験済みとは・・・頻度的には、朝起きて、隙についてももういつかい、そして何か約束したと同時にもう一回とかで計で三回以上でしょうか」

「・・・」

ハヤテは思わず目をそらす。　この人、もしかしてあの場所でその現場を見ていたのか？　と。

「男は皆狼だとアリスの歌の歌詞にありましたが、ハヤテ様も同類、野

獣の類でしたか。もしその頻度で行っていたらテルなら壁パン、私ならその現場にダイナマイトを投げ込みます」

なんと物騒な、と彼女の言い方にハヤテは息を飲む。　テルとこの少女なら本当にやりかねないかもしれない。

「とまあ、冗談はよしとして・・・今はそのお方は？」

「え・・・」

と口ごもったハヤテに黒羽は無表情ながらもそのハヤテの顔から予想する。

・・・あまり触れてはならない話題でしたか。

先程とは打って変わった表情で、少しだけ下を向いている彼は明らかに何か大きな『後悔』というものを感じさせる。　それほどまでに衝撃的なものだったのだろう。

いくらギャグで話を進行させても、相手の傷口を抉るような事をしってしまったことを

黒羽は恥じた。

「申し訳ありません。失言でした」

「い、いえ・・・黒羽さんが謝ることじゃないですよ？」

表情では精一杯で作って見せていた笑顔だったが、この間にもハヤテの脳内では思い出すにはあまりにも悲惨な結末を迎えた自分の初恋物語を思い出していた。

いつまでも一緒だと思っていた。　世界が終わっても永遠に一緒なのだ。

——ハヤテ、あなたと私はずっと一緒よ？

彼女の傍に居られるだけで、幸せだった。彼女の笑顔が見られるというだけでもこの身を犠牲にしても守りたい人と思える程に。

将来、若気の至というべきか結婚の約束までした時、『証』である指輪を送りあったその時、だれも自分たちの幸せな瞬間を疑わなかった。

—— お前なんかここから……いなくなっちゃえばいいんだ
—— ツ!!

どこで拗れたのだろう。気づけば自分は彼女に剣を向けていて、憎しみの感情とも呼べる物を、彼女にぶつけていた。

そこからは、あまり覚えていない。ひたすら逃げるように、その場を走り去ったのだけは覚えている。

だが同時に、それは彼女と二度と会えないという事を表していた。

「ハヤテ様」

不意に現実へと引きも出されてハヤテは意識を覚醒させる。いつものように無表情なのだが、声色がどこか気にかけているような黒羽がこちらを見ていた。

「もうこのお話はやめにしましょう。ハヤテ様も戻って今日はしっかり寝てください」

これ以上、ほじくり返すのをやめようと黒羽は判断したのだろう。

深く問いたださないと彼女の判断は確かに正しい、だが。

「待ってくださいー！」

思わず声の出で、ハヤテは驚く。呼び止められた黒羽はゆっくりと屋敷へと向けていた足をこちらへと向けた。

「聞きたいことがあつて……」

ハヤテは自分に問う。こんな事を相談する事ではない。ましてや事情を知らない他人に対して。だが彼は何故か問わずにいらなかった。

どうしてだろうか、長年自分でも出されなかった答えを彼女が出してくれるかもしれないと思っていたからだ。

「罪を犯した人間は、どうしたらその罪を許してもらえるんでしょう」

自分でも馬鹿な問い方だったと心で笑ってしまった。だが目の前の少女は手に持ったコーヒー水面を眺めて淡々と答える。

「……もし罪を犯したら、必ず罰が来るのでしょ。今だけのうとうと生きてられる……それはまだ『罰』を受ける日ではないということです。罪に対しての報いは必ずきますから。許されるならそのあとでしよう」

当然だ、とハヤテは思う。どこに意外な答えを期待していたのだろうか。自分でもいくらか結論は出ていたはずだ。己が一方的に悪いと考えていたあの状況だ、その報いを受ける日は必ず来るのだと。

「そう、今の私のように……私は許されたわけではありませんが」

と突然と黒羽が口にしたのを聞いてハヤテは耳を疑った。

「黒羽さんは・・・一体なにを」

そのハヤテの問いに黒羽は首を振ってみせた。

「分かりません・・・ですが、私には記憶がありません。ならば、この状況が一番の『報い』の姿なのかも」

意味深に語る彼女はコーヒートの水面から視線をハヤテの方へと向け直した。

「実は、私ウソをついてました。涼みに来たのでなくて、ちよつとしたことなんです。最近、二つほど、私は夢を見ます・・・私の記憶の片鱗なのでしょうか」

空を見上げている。別に何かを探すのではなく、そこにどこか思い入れがあるよう。

「私は、空を飛んでいました。この練馬区・・・いや、この場所だけじゃない空を自分で飛んでいた、というか」

思わず、ハヤテの背筋に緊張が走った。その記憶は、嫌でも彼に刻まれた敵であったときの黒羽舞夜の記憶だ。

「その中で、私はたくさんの人を傷つけてきた」

・・・まさか、記憶がツ!?

戻っていたのだとしたら、危険だ。今すぐにも石を奪いに来るともかもしれないと考えたのだが、もし記憶を取り戻していたら、こんな所でハヤテと悠長に会話などしてはいないだろう。

不完全な記憶なのだろうか、とハヤテは推測する。

「もう一つ見たのは・・・人を殺してしまった夢です」
「ッ!？」

淡々と答えて見せた黒羽はゆっくりと自身の手を見つめる。ハヤテは驚いていた。その両腕が、小さく震えていたのだから。

「ここではない『別の場所』。青空の下、白い建物と綺麗な海が見える場所でした・・・まだ幼い私は、その時出会った親切な人を、その手に掛けてしまったのです」

まるで絵本の内容を語るような口調で彼女はその夢の内容を語った。

・・・子供の頃に、一体何が？

同時にハヤテは思うのだ。この黒羽の言う記憶は自分やテルが知っているものとはまた違う黒羽の記憶なのだ。

・・・もしかすると、あの黒曜っていう不思議な力が関係しているのかも。

以前の黒羽が使用していた謎の力、黒曜。伊澄の八葉の力を一度は上回ったその力は記憶を失うと同時にその力が目覚める事になかった。

ハヤテは仮定する。もしその黒曜の能力が、彼女の記憶を封印やら、制御やらしていたのだとしたら。充分にタイミングとしては考えられる。

だがそれは、なぜあの力を使ってまで彼女の記憶を弄る必要があったのかという、疑問を新たに出現させていた。

「これは呪いなのかもしれません。夢であつたとしても、その私が手を掛けてしまったあの人の、これまで私が傷つけてきてしまった人たちからの」

黒羽は夢の一端を思い出す。空を飛び、翼を広げ、無機質な表情とは別の殺気を帯びた自分が色々な人をこの手で傷つけてきた事を。全ての顔はぼやけて見えない。なんと都合の良いものだろうか。・・・顔がわかれば、謝れるのに。

だが、謝つたとしても許してはもらえらるとは限らない。これはハヤテと似た『後悔』というやつなのだろうか。

「黒羽さん」

こちらを心配そうな目で見ていたハヤテが口を開いた。

「黒羽さんの昔の事は、僕にはわかりませんが・・・意外と謝ればすんなり許してくれる人もいるかもしれませんよ」

少なくとも、テルや木原はそこまで彼女を憎んではないはずだ。憎んでいなければ同じ通うことも、同じ職場で働くという事も向こうから拒否したことだろう。

黒羽と会話している時のテルは、昔のことなどなにも気にしていないといった感じだ。単にどうでもよいと思っているのだろうか、それが彼の良いところでもある。

「思い出してから、考えましょう。もしかしたら、それはまったく違う別物で、本当に夢が生み出した幻なのかもしれない・・・それで気を落とす事はしないでいいんですから」

「.....」

そうですか、と無言のあとに黒羽が呟いた。

「なるほど、こうやって知らぬ間に女性を籠絡するというわけですね」
「いや、なんで一気に切り替えできるんです？ シリアスからギャグ
へと」

「まあハヤテさまの恋話からある程度シリアス始まったのでちよつと修正効かせないとまずいかなーとか思いながら私もいつの間にかシリアス語ってるっていう、ミイラ取りがミイラになるとはこの事で・・・つまりハヤテ様に全責任があるのでは」

・・・一方的なこじつけだ。

はたまた迷惑な話だが、いつもの調子に戻ってもらっただけでもよしとしよう。 そう思ったハヤテだった。

ハヤテは空をまた見上げる。 あの時、酷い別れ方をした幼い少女の姿を思い浮かべながら。

・・・あれから十年、貴方はどこで、一体何をしていますか？

もし、出会えたのなら、あの時の罪を彼女は許してもらえらるだろう
か、と。

「時にハヤテさま、風のお話で聞きましたが・・・ヒナギクさんとイチヤ
ラブデートで映画を見にいくと聞きましたが」

「イチヤラブデート!? 誤解です！ 嘘です！ やましいことなんて
一つもないんですよ黒羽さん!?!」

「なるほど、つまり遊びと」
「それも語弊を産みます!!」

第119話「一筆啓上」監視「が見えたく」

桂 ヒナギクは、超有名高校である白皇学院の頂点に立つ生徒会長である。その担任教師である桂雪路の妹なのかという程の完全無欠のハイスペック超人だ。

・・・しかし、どうしてこうなった。

そう思うのは無理がない。彼女がいるこの場所は、千葉県にて有名な某おとぎの国、別名「魔法の国」である。ベンチに腰掛けているヒナギクが空を見上げていた時だ。遠くから全ての元凶とも呼ぶべき男がジュースを二つ程を持ってやって来た。

「ヒナギクさん、ジュース買ってきました。どうぞ」

同じクラス、綾崎ハヤテその人である。

「あ、どうも」

小さく会釈してその缶ジュースを受け取ると、その冷たさを感じながら彼女はこうなるに至った経緯を最初から思い出す。全ての始まりは、バイト先の西沢歩の一言から始まったような物だ。



「え？ 私がハヤテくんの事を嫌ってる？」

「え？ 違うの？」

喫茶店『どんぐり』にて、同じシフトに入ったヒナギクとハヤテと同じ高校に居た西沢歩。彼女達が口になっている話題はお互いが想っている意中の相手、綾崎ハヤテについてだ。

歩はきよとんとした表情で掃除中のブラシの手を止める。

「なんでもハヤテくんが言うには、〃これ以上ヒナギクさんに嫌われるのは良くないと思うんですよ〃——って」

「ちよっと！ それどういうことよ!!」

ヒナギクとしては、本当にいらぬ誤解が生まれていたというものだ。そう言えば、とヒナギクは思い出す。ここ最近のハヤテは自分と会話する時は基本まず謝罪から入っていたような気がする。

「ですよねえー、ハヤテ君の事、スキって言っていましたしねえー」

「わ——！　ちよつと歩！　そんな事をこんな所で堂々と言っちゃダメでしょー!!」

「いいじゃないですか、マスターはもう帰っちゃいましたし、お店も今日は終わりで、シフト上は今日に至り私たちしかいないんですから」

確かに、彼女たちのトークを阻む邪魔者はいない。だからと言って、も、そうやって声に出されてしまうというのはヒナギクにとっては恥ずかしいこと限りのないのだ。

下田の温泉辺りからだろうか、些細な事から会話するようになり、お互いの意中の相手と同じだと知ってから、どうも彼女にペースを握られているような気がしてならないヒナギクである。

「そんな勘違いが生まれてしまっって事は……一体どんな事が二人のいる学校で起きているのかな？」

「し、知らないわよ！　大体、私だっってこんな勘違いが起きるような問題を起こしてなんか——」

悪戯っぽい笑みを浮かべる歩にヒナギクは頬を染めて視線をそらす形で、考える。こうなることになったハヤテに関するこれまでの自分の振る舞いを。

——もおー！　ハヤテくんのバカア——!!

ある時はマラソン大会の橋の上で。

——こんなこと、いまさら何の意味もないから。おやすみ。

ある時は勉強を教えてる時に。

——ずいぶんうつかりものの執事さんね!!

怒りに身を任せて政宗を振るったヒナ祭り祭りの深夜、時計塔にて。

「……………うわ」

手で口を抑える。別に吐き気がきたという訳ではないのだ。ただ単に、おもいつきし自分のせいだということが確定しているのが分かったのだ、またしても恥ずかしくなっただけなのだ。

「ありすぎて、どれが原因か分からないわ」

「わお」

相対している友人、歩もその様子を見る限り、かなりドン引きしてしまっている。思い返してみれば、自分がハヤテから見たら冷たい人間だと思わせる場面は多かった。

だが、殆どの場面では必ずと言っていいほどシリアスな感情や生徒会長としての無駄に高いプライドが関係している時である。彼女はまったく気づいていないのだが。

「でもそれはあれ……………だよ。スキな男の子をいじめたくなるっていう。テルくん風に言わせれば、“ちよっと男子ー、やめなよ”っていう委員長キャラをガキ大将が“うっせー来んなよブス!!”っていう気をひかせる為の」

「例えがおかしいわよ例えがツ!! それに、私は小学生の男子かツ!!」
猛然と突っ込んで、ヒナギクは深呼吸をして心を落ち着かせる。歩が気を聞かせたか何も言わずに水の入ったコップを持ってきた。受け取ったヒナギクは一気に呑み干しながら持ち前の頭脳で作戦を考える。

……………とにかく、この勘違いをどうにかしないとツ!!

流石に意中の相手に、自分が嫌いだという勘違いがあつては一生思いを伝えることが出来ない。むしろ、ハヤテの中でヒナギクの認識はバイオレンスな生徒会長、または大神涼子のような渾名をつけられる羽目になる。

そんな不明極まりない恋の終わり方は、ヒナギクにとって不本意であり、白皇学院生徒会長としてのプライドが許さない。そう、絶対に許さないのである。

「でも、たまになら・・・ハヤテくんに優しく接してあげるのも必要なんじゃないかな」

「歩・・・」

空になったコップを受け取った歩から屈託のない笑顔とともに、自身の背中を押された気がした。頑張れよ、とそういう彼女にとって、自分の意中の相手の事を何も気にしないようなこの素振りには、アレだ。ナギ風に言わせてもらおうなら、

・・・王者の風格、イヤ、まさしく“正妻の余裕” ツツ

そこまで余裕を見せつける様に、彼女は内なる闘争心を燃やす。ハヤテの誤解も解く事も大事だが、この目の前にいる歩を少しでも焦らせてやりたいと思ったのも事実だ。

——なぜなら、西沢歩はヒナギクの友人であり、恋のライバルなのだから。

「決めたわ歩ツツ」

「え、え!?! 何かなツ!?!」

握っていたモップをまた力強く握り締めてヒナギクは確固たる意志を歩に見せつける。握力でモップがきしみ出すその緊張感が歩の背筋を立てさせた。

「私は今日から・・・“心優しい女”になるツ!!」

「ひ、ヒナさん・・・モツプが」

「あ・・・」

歩に言われて、ヒナギクは自身の手にあつたモツプがいつの間にか真つ二つにへし折られている事に漸く気づいたのだった。



そこから、ヒナギクの優しさ倍増計画が始まった。だがそれが、苦難の道のりだということを誰が予想できたであろうか。

彼女は決めていた。ハヤテに優しくするのであれば、他の人たちにも同じ対応をしていくことから始めるべきだと。要は慣れであると。

まず第一に決めていたのは“笑顔で接する”という事だ。

——たとえお気に入りのカップを生徒会三人組に割られても。

「ケガはない？ダメよ、こんな所で暴れたりしたら」

「ヒナ・・・怒ってないのか？」

「ぜんぜん、怒って無いわよ」

目を輝かせて彼女は笑顔で何もかも許し、

——飲みすぎて給料を使い果たしている姉がいても

「わー！ゴメンねヒナ！次からは計画的に使うから!!」

「もおく、しょうがないわねえ」

まるで慈母の如き眼差しで彼女たちを包み込み、

——教室で騒ぐ問題児たちが居ても

「72という数字は、一部の女子にとっては屈辱的な言葉だ。しかしこれは我々にとっては貴重なステータス、萌えるポイント・・・そう思わないか会長」

「テルくん、壁に背を向けて・・・そのまま立っていないさい。できれば授業中も」

「おお、生徒会長が武力行使しないぞ！いつものように竹刀で切り刻まないぞ!!」

最低限に“笑顔”だけは貫き通した。

・・・完璧ね。

その二文字に、越に浸るかもしれない甘美なその響きにヒナギクは誰も居なくなつた生徒会室にて優雅にコーヒーを一口。今の自分なら、どんな障害がやってきてもキレずに平常心でなおかつ笑顔で全ての物事に対応することが出来る。絶対的な自信がヒナギクにあった。

そんな事を思いながら生徒会長としての激務に身を費やしていた最中、天球の間の扉が開き一人の生徒が入ってくる。綾崎ハヤテだった。

「ヒナギクさん!!」

「え、ええ!!? どうしたのハヤテ君!」

不意打ち、まさしくその言葉通りにハヤテがこの場に現れた事にヒナギクは動揺を隠せずにいた。彼の顔は珍しくも真剣であり、その表情に思わず胸を躍らせたヒナギクである。

やがて彼は右手に握っていた何かをこちらに見せてきて言った。

「僕と一緒に・・・この映画を見に行きませんかツツ」

「・・・はっ。」

そう目を疑うような言葉を発したのには理由がある。彼の握るその二枚の紙は映画のチケットだ。だがその映画のチケットに描かれているのは小学生が見るような動物系の映画であった。

「ばっ!! バカ!! 高校生にもなって誰がそんな子供じみた映画を・・・ ツツ!!」

思わず、ヒナギクが言葉を切る。少し頭を冷やして考えてみれば、この自身の発言こそが冷たい態度でこれが原因で嫌われると思われるのではないかと。

せっかくの努力が、このままでは水の泡だ。ただでさえ誤解を生み易い者同士だ、これ以上話をこじらせてしまう原因を作らないほうが良い。

ならば、この申し出は受けなければならない。ヒナギクは覚悟を決めた。

「わ、わ〜!!」

両手を組んでにこりと若干硬めの笑顔を浮かべて、

「う・・・うれしいなあ〜 私その映画ずっと前から観に行きたかったのぉ〜」

輝かしい背景がいかにも喜んでいるということを演出させてくれることに賭けながら彼女は精一杯そうハヤテに答えて見せた。一方のハヤテはその不自然な笑顔を見て、若干恐怖心を抱いていたワケだが。

・・・私がどれくらい素晴らしい女か、貴方に見せてあげるわ!!



というのが、これまでの回想だ。彼女は差し出されたそのジュースを口につけて小さくハヤテに気づかれないように溜息をつく。

「しかしまあ、映画は残念だったわ。動物系の話だったのはまだよかったけど・・・よりによつてあのネズミとイタチが戦う冒険アニメ

だったなんて」

対するハヤテもあの映画の内容には苦笑せざるを得なかった。

「ほんとですね。どうしてチケットとは違う映画が流れ始めたんでしょうか・・・しかもガ●バの冒険とは」

そう、最初こそ映画の内容は猫の世界を旅するファンタジー系の映画だった。ヒナギクもそれに見入っていて、これかrなお展開にさぞ心を躍らせていたことだろう。

だが、猫がジャンプしたその瞬間、猫の胴体を真つ二つに分断。何が起こったかと思ったらどうやらフィルムが破けたとのこと。その後流れてきた映画がまさかのガ●バの冒険だった。

見た目は子供向けの絵のこのアニメ。その内容は、主人公を追ってくるイタチがホラーレベルで描かれており、それはお茶の間が見事に大泣きする事で有名なアニメだったのである。

気になる人は、一度見てもらえるとすぐ分かる。あのイタチはマジで怖い。

そんなこんなで、デート台無しの結果を迎えてしまったと思っていたヒナギクが憂いてた所、突然ハヤテが口を開いた。

——ヒナギクさん、これから一緒に海を見に行きませんか？

キメ顔でそう言った彼は、戸惑うヒナギクを連れて電車という電車を乗り継いだ。その先に辿りついた場所が

この千葉県某所の遊園地だったのだ。

・・・やっぱり執事なのよね、ハヤテ君って。

チケットなどもさり気なく奢ってもらっているので、彼のエスコート力はこういう時は郡を抜いているといってもよい。一体これほどの能力はどうやって養ったのか、その源に疑問を抱いたヒナギクだっ

た。

夕方となったこの時間帯でも、この遊園地は年中大盛況。人は賑わいい、家族で、友達で、リア充で、老後の楽しみとしてやって来る定番のスポットだ。

・・・なにかおかしい。

だが、その夢の国の雰囲気を味わうヒナギクが脳裏にこびりついている異様な違和感を感じていた。本当に些細なことではないのだが、放っておいては色々危険な何かを。

「ヒナギクさん・・・」

隣に居たハヤテも、その違和感に気付いたようで額に汗を浮かべた彼はくまなく周囲を警戒するように見渡した。

「やっぱり、ハヤテ君も気付いた？ 奇遇ね、私もよ」

この違和感を言葉で表すとすれば、こうだ。

——監視されている。

獲物を探す目つきでヒナギクも辺りを見渡す。ヒナギクやハヤテも真剣に索敵に力を注げば、隠れている邪魔者など、一瞬で見つける事が可能なものだが、向こうは手練のようだ。その実力は今索敵中のハヤテとヒナギクもその存在が“気のせいではないか”と思わせるのだから油断ならない。

ヒナギクとハヤテは、同時に内心で呟いてみせる。それは口に出さなくとも、見事に丸かぶりする内容だった。

・・・誰かが、いるツツ!!

その警戒態勢に入った二人を自販機の影から黒光りする双眼鏡で見つめる人物がいる。

「リア充・・・発見」

無機質な声で呟いて双眼鏡を下ろし、露にしたその人物は、黒羽舞夜その人だった。

——陰謀渦巻く魔法の遊園地、ここに開演。

第120話「一筆啓上」仕掛けが見えたく

桂ヒナギクのご機嫌を取る為に映画を見に来ていた綾崎ハヤテ。しかし、いつの間にか二人は某有名な遊園地へとデートのようによつて来ていた。白皇学院の生徒会長とどこの馬の骨かも分からない幸薄そうな少年とではデートというにも不釣り合いなこの構図。

しかし、そんな蜜の滴るほどの面白そうなネタに飛びつかない者は居ない。かくいう黒羽舞夜も、この白皇の治安を揺るがしかねないスキャンダルに乗じてこの場所にやつて来た者の一人だ。

「しかし唯子さんも人が悪い。私達で二人のイチャラブデートを撮影してきてほしいだなんて」

漆黒のカメラを片手に、黒羽は自販機の影に隠れながら椅子にて休憩を取るハヤテとヒナギクを見据えて淡々と独り言を呟いていた。元々これは先輩である奈津美唯子に依頼されたことだったのである。

さつきも言ったようにこの構図は白皇の生徒内でのヒナギクの立場を揺るがしかねないものだ。下手をすれば、ハヤテの立場も男子的と女子的からの批判は当然危ういものとなるだろう。

勿論、二人を監視するのにはひとりでは色々と大変だろうと唯子も助っ人を手配してくれたというのだが、

「キヤツホオオオオウ！ 見ろよ木原、水しぶきヤベーって！ 濡れる濡れる！ 執事服マジで濡れる!!」

「うわスゲー！ 写真、写真できてるぞテル！ お前最後写真取られる瞬間、眼つぶってンぞ！ 女子か？ 女子なのか？」

見事なまでに、任務そつちのけで遊園地を満喫していた。呆れを含んだため息を二人に気付かれないように吐きながら、黒羽はベンチ

にてアトラクションで撮影された写真を見ているテルと木原に状況の報告を兼ねて近づき、

「なに見事にアトラクション満喫してるんですかお二人は」

「おお、黒羽。 なに、今しがたあの『水しぶき山』行ってきたんだがよ。 見ろよこれ、スゲーよ。 最後のコース、着水する瞬間写真撮ってくれるんだぜ」

まるで少年のように目を輝かせるテルが不機嫌そうな黒羽を気にも留めずに先ほどの写真を見せつけてきた。

「まるで小学生のような幼稚さをこの私に見せつけてくれますね。それはなにか、今後この私にそれをネタに虐めてくれと言っているのですか」

続けて黒羽は言う。 今度は養豚場の豚を見るような目で二人を一瞥しながら彼女は冷ややかな口調で、

「いい加減夢から覚めたらどうですか。 所詮マスコットの中にはむさい手ぬぐいを頭に巻いたオツサンと、落ちているゴミを“夢の欠片”と言ってファンタジー感を無理に演出させる虚構の世界なんですから。 貴方たちは現実を見るべきです」

「ヤメろオ！ お前は遊園地に恨みでもあるのかッ!？」

と木原。 便乗するように今度はテルが

「そうだそうだ！ 俺たちはなあ、東京出てくるまでは山で暮してたんだよ！ 分かるか山!? マウンテン！ 型月作品名物YAMA育ち！遊ぶ場所なんざメイときつきが宜しくやってる森の中でどんぐり探しまくってるんだよ！ 夢の国より野生の国なんだよ！ 憧れちゃうのはしょうがないだろ!!」

と、十七の少年が涙を流しながらこちらへ反論している様は何とも言えぬ状態だ。 事実、テルと木原は本当に山育ちなのでこういうた場所は本当に憧れと言ったものを抱いているのだろう。

「まあ私は基本興味が無いので困りませんが、貴方たちは大変ですね。

一度そんな残念思考に染まってみたいものです」

うるせえ、と黒羽の罵倒を一言で返したテルが彼女に聞く。

「アイツらはどうだったんだ？」

「ええ、まあ簡単に言うんですけど。　ハヤテさまはいつも通り、ヒナギクさんは乙女プラグイン全開と言った感じで」

それを聞いた二人は今度はさつきとは違った羨ましいやら怒りやらが混ざった涙を流している。

「壁が足りねエ！　代用品は無いのか木原ッ」

「ダメだッ　持ってきていた叩き割り練習用の瓦が底を尽いちまったッ」

「生徒会長の胸を借りたらどうでしょう。　文字通り、“壁”ですよ」

お前は死にてーのかッ!?!、と木原とテルの同時突っ込みで一旦三人は落ち着きを取り戻すことにする。

「ぶっちゃけあの人の言うとおりに盗撮する必要ないじゃんかよ黒羽」

「ほう、それはなぜですかテル。　この私より頭が悪い貴方の意見で、どうぞ私を納得させてください」

目を細めて黒羽が言うと、あまりの威圧感でテルが喉を鳴らした。

お、おう、と彼は続けて言うとおざとらしく咳払いをして見せて、

「だってよお、こういうつて勝手に撮影したら二人は困るもんじゃねの？　それにハヤテは会長のご機嫌をなんとかするつて為にここに連れてきてんだから。　他意はないのは分かってんだろお前も」

それはそうだ、と黒羽は思う。　唯子からも、この撮影についての裏事情はある程度理由は聞いている。　それを承知の上でこちらに唯子は頼んできたのだからド畜生以外の何物ではないが。

「適当に報告すればいいんだよ。　ただ二人して遊んでた、それ以上の事はなかった。　写真もこうやってる俺らの写真をあのドSお嬢様に送りつけてやる」

「そんなことをすれば唯子さんからデストロイされそうなのですが気のせいでしょうか」

安心しろ、と黒羽の不安そうな問いに木原が答えた。

「アイツらの学園生活には変えられないでしょ。　ねえテルくん、俺たちもいろいろあつたじゃないか」

「いろいろ・・・?」

首を傾げている黒羽を見て、テルがまずそうに思ったのか木原の肩を掴んで一度二人は黒羽に対して背を向ける。　テルは片方の手で自身の頭を掻きながら小声で、

「黒羽もだいたい関わってることだろうがソレは。　記憶を思い出させるような話はするなよ」

「す、すまん」

と、二人は再度前を向く。　木原は不器用にも咳払いを数度して見せてから言った。

「まあ、とにかくだ。　男女間のいざこざというのは、その個人だけでなく大多数の人々に計り知れない影響をもたらすのだ」

胸を張って言う木原に黒羽は手をぽん、と叩くと納得したように頷いて見せた。

「なるほど、痴情のもつれ・・・というヤツですね」

「あつれー?　俺なんか間違い誘発させるようなこと言った?」

「諦める木原くん。　この女はナギのせいで毒舌やネタに走る女になっちまったんだ・・・屋敷に来たときはまだ何色にも染まっていないう女だったのに」

テルが言うとおりで、黒羽が最初の屋敷で働き始めていた時はまだネタのネの字も知らない病弱な無垢な・・・それでこそロシアの荒熊さんが言うとおりで、乙女だったのだ。

しかし、ナギがパソコンで動画サイトを見せたり、漫画を見せ始めた頃だろうか、宿題を見せて欲しいとテルが黒羽に尋ねた時だ。彼女はいつもの無表情でこちらを見ながら、

——ググレカス。

そう言ってきたのだからテルはびつくり。　それからナギによる魔改造は進み、彼女の部屋にはパソコンが設置されていることから時

間の合間にそっちの勉強も進んでいるのだろう。

「テルの言う分も理解できました。ですが、私はどうすればいいのでしょうか。あまりこういった騒がしところは初めてなので・・・」
その黒羽が困ったようにカメラを下す。スクープ撮影の依頼を全力で全うしようとしていたからか目的がなくなった途端、これからの行動に迷いを持っているようだ。

「じゃあさ」

テルが黒羽の持っていたカメラを優しい力で手に取って言った。

「俺らも遊ぼうぜ」

カメラを起動させて、目の前の黒羽にピントを合わせるとタイミン
グも聞かずにシャッター音を鳴らした。

「屋敷での仕事とか忘れてさ。学校の事とかも、明日の事とかも、色んな縛り事から離れてさ、楽しむことだけ考えて過ごすのもいいじゃねえか。遊ぶことに時給は発生しねえけど、もっと大事なものができるかもしれねえからさ」

「先を考えない行動ですね・・・しかし、よいのですか？」

「なにが？」

と、すつとぼけたような表情をしたテルに眉をぴくり、と動かした黒羽が言う。

「これでは私達がデートしてるようですが」

「何言ってるんだ。この木なんの木、木原君がいるじゃない：アレ？」

笑顔で向けたその先、いた筈の木原竜児の姿はそこに居なかった。辺りを見渡してみるが、この大勢がいる遊園地だ。探せという方が無理である。

「そう言えばアイツ、熊のドウさんの森に行きたいって言ってたからな。もしかしたら一人でそっちに行ってるのかも」

呆けているテルに暫くしてか黒羽がため息を混じらせて口を開いた。

「この状況、私はマリアさんに申し訳なく思います」

「え？　なんでマリアさん？」

「なんでって・・・理由を言わなきゃダメなのでしょうか」

「え？」

マジですか、と一連のやり取りに今度こそ呆れた黒羽は数秒ほど首を傾げているテルを見つめて、彼に背を向けると離れていくように歩き出した。

「オイオイ、どこ行く気だよ」

すると黒羽はピタリと足を止めて振り返ることもなく、彼女は告げる。

「トイレです。　付いてくるなら堂々とどうぞ。　その際はしっかりと法的手続きを踏んで、次からは法廷でお会いすることになるのでそれを承知なのでしたら」

「んなこと誰がするかよッ!!　早く戻って来いよ、ここで待ってっから」

「・・・はい」

僅かにテルの方を見ようと顔を動かしたが、すぐに正面へと向きなおして黒羽が歩き出していく。　すぐに人混みの中へと入っていた。　その様子に不安を抱いていたテルは腕を組んでベンチへと腰を掛けて唸る。

「・・・分かん」

事情はどうであれ、固意地の彼女をうまく遊びに誘うことまでは良かった、だがそこから何かがおかしい、どうしてあの場面で黒羽の口からマリアの名前が出てきているのか、テルには理解できていなかった。

そこから程なくして行方をくらましていた木原が戻ってきた。　彼は熊のドウさんの人形を片手に笑みを浮かべながらスキップしているのだがベンチに座っているテルを見て黒羽が居ないことに気付く。

「なぜお前が一人なんだッ!!」

「いや、トイレに行くって黒羽が言うもんでな……ここからトイレまで結構近い場所にあるから一人で行かせた。お前はドウさんとの触れ合いを満喫してきたようだな」

まあそうだが、と不機嫌そうなテルにそう答えた木原はさほど気にする素振りも見せず隣のベンチに座る。

暫くして、木原の口が開かれる。

「んで、教えろよテル。白銀が何企んでんのかよ」

空を見上げた木原は唐突にその話題を出す。黒羽が不在と言うこともあり彼はここで聞くことにしたのでろうか。テルは手を組んで真つ直ぐと今も尚絶えない人混みを見つめて言った。

「なんでも、これから先の出来事になるかもしれないけど……黒羽が死ぬことになるらしい」

「マジかよ」

木原に頷いてテルは続ける。

「俺もいろいろと聞いてみたがアイツは隙がない。伊澄と咲夜にも頼んでみたけど成果はナシ……畜生、戯言だと斬って捨てればそれまでの話なんだが、アイツの言う事はどうも気になるんだよなあ」

と、調査の依頼をしていた咲夜と伊澄の顔が浮かぶ。そう言えば最近学校に顔を出さないようになっていたのをテルは思い出す。咲夜に関してはここ二日間、伊澄の家に泊まり込んでいる。愛沢家の屋敷でも会ってはいない。

なんにせよ、手詰まり状態なのには変わりがない。

「ただ一つ分かってることは……俺はアイツが気に入くわねエ」

吐き捨てるように言うテル。その瞳にはこれまでの仕打ちに対する怒りとはまた別の感情が込められていた。

そこまでして自身を貶めるように動くのはなぜなのか、そしてそれが最終的に黒羽の死とどうつながっているのか。

そんな事は関係はない。テルが気に食わない理由は、テルが感じ取った白銀の目だ。まるでこちらの心を見透かしたような物言いもそうだが、白銀拓斗の瞳はどこか死んでいる。何かに諦めてしまっ

ているような瞳だった。上っ面だけの仮面をかぶっているのが、テルが感じた白銀拓斗である。

「お前そういうヤツ嫌いだもんな、基本よ。自分の正反対の相手とか」

「おうともさ。文句あつか」

睨むような視線を横目で木原に送ると、彼は両手を自身の後頭部へと回して“ない”というジェスチャーを送った。

「お硬い思考だよな、んな事いってるとマリアさんに愛想つかれっぞ」
上を向いたまま発せられたその単語にテルが頭を掻いた。

「お、お前までマリアさんの名前を・・・なんでだ」
いやなんであって、と木原が当然のようにその名を口にした意味を語る。

「お前のマリアさん好きは周囲に知られてるぞオイ。あの人がどうなのか知らねえけど、お前はそういうことじゃないのかよ」

その意味を理解したテルは目を点にしていたが暫くして慌てて口を開く。

「違うぞ。コレは“憧れ”だ。決して恋心ではない！」

彼はそういうのだが、目を回して、無理している感があるためか説得力に欠けるのは丸分かりだ。だが使用人の上司として、彼がそう思ってしまうのは仕方ないことなのかもしれない。

ならば、と木原が質問を変える。

「マリアさんのことは尊敬している？」

「イエス」

「マリアさんと居ると緊張する？」

「イエス」

「マリアさんの写真は何枚所持してる？」

「屋敷に一枚」

「マリアさんに踏まれたい？」

「もちろんさ」

——ダメだコイツ、早く何とかしないと。

内心でそう決断を下すとともに、この変態執事に目を付けられているマリアに対して同情しなくなつた木原だつた。だが彼が出した答えの中にはその本心が現れている答えが幾つかあつただろう。本人がまだ本格的に自覚していないだけなのかもしれない。

「時間の問題か・・・」

「時間って?」

木原のつぶやきにテルが怪訝そうな表情で尋ねると彼はキメ顔で頷きながら、

「ああ!」

意味がわからない返答をした。簡単に言うとは誤魔化したのである。と、これ以上話が脱却しない内に木原が話題を変えようとしたがここであることに気付く。

「黒羽・・・遅くね?」

たしかに、とテルが彼女が消えていった先の人混みを見据えて小さく頷く。黒羽がここから離れて、そろそろ十分が経過しようとしていた。

「女子には色々あるんだ・・・もう少し待つてみようぜ」

「そうだな」

とお互いが納得した訳だが、そこから三十分。

「ハイ迷子! もう絶対迷子! 言わなきゃ回避できると思つてたけど迷子フラグ完全に回収しちゃつたよ!」

「携帯も繋がらねえぞオイ! もうハヤテ達どころの騒ぎじゃねえツ 無駄に広いこの場所で迷子とか見事なトラブルメーカーだなアイツ!」

最初からフラグが立ち始めてきたのは理解していた二人だったが口に出さなかつたのは言うまでもない。伊澄のように一瞬で外国に行かないだけまだマシと言えるだろう。

だが懸念すべきは別にある。屋敷にやって来た当初に比べては成長していた体力面だがまだ不安なモノはあるのだ。この場所は広く、人も多いこともあってか初めて来た人にとっては疲れる場所だ。

「ただでさえ体力にはまだ不安があるんだ。倒れちまったら大変だぜ。急いで探しに行くぞ——」

テルがそう言って立ち上がった時だった。全身が感じた違和感と共に、筋肉が硬直する。

——動けない。

実際何かがテルを拘束しているのではなく、動こうと思えば動けるが、違和感があまりにも肌を通して寒気として伝わった為か、身体の動きが止まったのだ。

「木原、今何時だっけ？」

二人が空を見上げて、同じ事を思った矢先にテルが問う。木原もその間に返すように一度時計を見た。

「三時だ。オイオイオイオイ……どうしてもう夜になってんだ？」

見上げた空は既に夕の刻を過ぎていた。だがその目に映る夜の世界はあまりにも異質である。

星はただ一つもなく、上がるのは不気味な真紅の月のみ。その月に照らされた遊園地は朱に染められていた。

「なんか、やべエ感じがするな……客は誰も気付いてねえのか？」

視線を配り、この異様な光景を大多数いる客が誰ひとり気にしている様子はなかった。これではまるで木原とテルだけがその異常に気づいているような。

だがその予想は直ぐに裏切られる事になる。ひとりの客が虚ろな瞳とともに木原とテルを見たのだ。しかしその様を見て、二人は目を数度見開く事になる。

——こちらを向いた客のひとりは首を一回転させてこちらを見ていたのだ。

「いま明らかに首一周したような」

「あとゴキゴキ音鳴ったよな。それと皆、目がイっちゃってるけど、体に寄生獣でも飼ってるのかな？」

見渡す限り、二人の視界に入る客の全てが白目を向いて、関節をあらぬ方向へと曲げてこちらに迫る様はどこかのゾンビゲームを連想させる。

「あーつと、スミマセン。俺達、ちよつと聞きたいことあるんだけど、別に噛んだりしないよね？ ウイルス撒き散らしたりしないよね？ 捕食と称して顔面開いたりしないよね？」

引きつった笑顔でそう尋ねるテルに、言葉を持ち合わせていなかったか、客の一人がその右手を前に翳すとある変化が起きた。客の右腕がぐねぐねと動き始めて、生々しい骨が碎ける音と共にその姿を変えていったのだ。

『オ、オオオ・・・』

「え、マジかよ・・・」

青ざめる表情のテル。なぜなら、客の右腕が一本の斧へとなっていたからだ。

「おいテル！ 他の客もみろ！」

木原の声に気づいた時には他の客達も各々が武器を作り出していた。ある者は剣だったり、槍だったり、ハンマーだったりと兎に角殺る気は満々のようである。

「・・・」

変化した遊園地、殺意に満ちた客。この状況を理解するにはどれくらいの時間がかかるだろうか、だが一つだけ理解出来る事がテルにはある。

「また面倒な事に巻き込まれちゃったってワケだ」

「どうする・・・テル」

周囲との距離を図りながら木原が構える。ここで一発おっぱじめても良いという考えなのだろう。だがテルは不敵にも笑って、「安心しろよ、こういう時どうすればいいか知ってるかオイ」

横目で木原を見るが、彼は理由が分からないのか首をかしげたままだ。ゆつくりと前を向いたテルは迫り来る集団に背を向けてひと呼吸の後、

「逃げるんだよオ——!! どけえ! 野次馬共オ!」

「うおおおおおおお! やっぱりそう来たかああああ!!」

大声で叫びながら、二人は全速力で走り出す。殺意を持った客を踏み、蹴ったりするなど掻き分けて、一目散に駆け抜けていった。

テルと木原が去って行くのを殺意を持っている客達の群れの中で一人堂々と闊歩する人がいる。客達はその者は対象外なのか、そのまま気にすることなく辺りをうろつくばかりだ。

「ふむ。邪魔者が入ったか・・・あの男だけを引きずり込めれば良かったのだが」

黒の外套に身を包んだ男は腕を組んで、今なお走り続けるテルの背中を見つめる。その状況に舌打ちをしつつも後で小さく笑って見せた。

「だが関係ない。ここでお前を殺せばいいだけの話だ・・・さて、外の方は無事に住んでいるのだろうか、心配だ」

・・・黒羽の様子は伊澄が監視をすると言っていたのだが、果たして彼女に務まるのだろうか。まあ、彼女も光の巫女だ。下手な行動はしないだろう。

白銀拓斗は不気味に光る真紅の月を眺めながらも一抹の不安を感じるのであった。



「……………」

その一方で、地獄の遊園地を二人が走っていることは露知らず、青空が広がるその遊園地内で黒羽舞夜は無表情ながらも緊張を含めたように身を固まらせて、ある人物と邂逅を果たしていた。

……なぜこの人がここに？

纏っている雰囲気から事情をよく知らない一般の客でさえも、その場所をワザと避けているようにも見えるそこにいるのは一人の和服を着た少女だった。

彼女が微笑んで、ゆつくりと、おしとやかな口調で言ったのだ。

「ごきげんよう、黒羽さん」

冷気のような物を感じて固まる黒羽にそう告げた少女、鷺ノ宮 伊澄の姿がそこにあつた。

第122話〈Nice boat〉

男には誰しもが持つ夢がある。大きくとも、小さくとも願いを叶えるために人間は努力をするのだが、男という種に関しての夢の追い方は途轍もなく貪欲な物だ。妄信的な程に、その身を費やしてでも願いを叶えようとするのだ。

「さて、仮初の身体であつてもまだ持つてくれているようだ。存外、十年間の世界への旅は無駄では無かつたという訳か」

白銀拓斗もまた“ある夢”を追い続ける者だつた。小さな島国を飛び出してその夢を叶える為に世界を回っていた彼は数々の苦難をその身に刻んでいく。旅をすれば芸が身につくといつたところか、この現在展開している結界も旅先で身につけてしまった物だ。

・・・どうにもコントロールの方が怪しくなつてきている。やはり俺自身の魔力が減つてきているからか。　　やは

歩く道端にうろついている自身の魔力で作つた異形の者達は全てが術者である白銀に従っている訳ではなく、従順な個体も居れば、各々で争いを始める身勝手な個体もいた。

元々魔力の素質が低い人間がこのような大規模な結界を使用してゐるのだ。魔術師でも伊澄のような特異な体質でもないのだから直ぐに貯蔵されている魔力が底を尽きるのは時間の問題である。

現在テルたちを襲つているこの異形の者達は全て、白銀の魔力で動かされている。その魔力を放つ白銀は電波塔のようなものだ。その電波塔である白銀の魔力が無くなれば操つている者達の動きはさっきのように個別の意思を持って動き出すだろう。“人を食い殺す”という衝動を抱えたまま。

・・・だがこの戦いが終われば、全てが上手くいく。　　全身全霊を掛けてこの手を使用するのもアリだろう。

余裕の笑みを浮かべた白銀が足を止める。　　ふと、見つめている右手を動かすとその動作に合わせてその手から一瞬だけ灰が舞つた。

同時に、目眩と頭痛が身体を襲いこの身体がもう時間が少なくなっているのだという現状に目を細める。

「……持ってあと」一ヶ月「いや、」三週間「……か。 充分だ」

全てを投げ打つてでも、この身が減ぶことになろうとも彼には成し遂げたい「夢」というものがあつた。しかしそれは旅先で「悲願」となり、絶望に打ちしがれて尚、前に進んだ結果、彼の想いは「誰からも理解されなかつた」。

……いや、一人だけ……。

空を見上げた先は不気味な真紅の月。今の自分には美しくも感じるその月に、ある人物の声が昨日聞いたかのような身近な物として思い出される。

——いつまでも、貴方を待ちます。 ええ、待ちますとも……絶対に帰ってきてください。

悲しみを孕んだその微笑みを彼女にさせてしまった事を悔やんで白銀は思う。「約束は守れなかつた」と。そして胸から取り出した小さなロケットを取り出してソレを握り締めて彼は呟く。

「君には迷惑を掛けた。だがこれで終わりだ。全てが終われば、やり直しとともに君も自由になれる」



「……」

一方で現実世界。赤い月なんてなんのその、物騒なこととは無縁なこの道を黒羽舞夜は歩いている。同じ学校に通う生徒、鷺ノ宮伊澄とともに。

「具合でも悪いのですか？ 黒羽さん」

「いいえ」

突如として現れた彼女は、不機嫌そうな顔を見せることなくこちらを気遣うようにそう問いかける。黒羽はいつもの無表情でやり過ぐすが、前回の高尾山での出来事があるだけに如何せん微妙な雰囲気だった。

はつきり言つて、黒羽が抱いた伊澄に対する第一印象というものは高尾山のハイキング以降、何も変わっていない。善立 テルの周りを自分がうろついているのが余程気に食わないのか、ハイキング中ばかり会った際も噛み付きつぷりは凄まじいものだった。

それは黒羽が恐怖というものを感じるほどに、だ。

「そうでしょうか、でもそれもテル様のところに案内出来れば解決です・・・この場所から近くにテル様がいるはずですから」

どう言う訳か、高尾山の頃よりも毒気が抜けたかのような穏やかな口調でこちらを気遣う物だ。態度というものは百八十度変わったかのような、そんな感じだ。

今は迷子の黒羽を伊澄がテルの元へと案内する途中だ。これが絶対にもイラ取りがミイラ取りになるというフラグだと気づくものは誰もいないだろう。

「ちなみに、この近くにテルが居るといっはどういつた根拠でしようか、伊澄さん」

足の動きを止めることなく、常に一定のリズムの二人。問われた伊澄はこちらに聞こえるか聞こえないかの微妙に、

「いつの間にか呼び捨てになつてますね、名前」

小さく笑って見せた。それが今の黒羽にとってはそれが真つ黒な何かという感情を感じてしまう。だがここでたじろいてしまうのは相手に隙を見せるという事だ。まるで小規模な戦いが始まっているかのような緊張感に黒羽は冷静に言葉を選びながら答える。

「ええ、私は以前と変わらず」様”で良かったのですがテル自身が許可してくれたもので」

こうして冷静に答えるのは、自身の弱みを見せない為だ。 “今の” 鷲ノ宮伊澄は前回に会った時よりも危険なのだと思いで感じ取る。隙を見せようものなら一気に潰れ込んできそうな気がしたのだ。今の自身の答えは間違っていないはずだ・・・だが。

「テルさまが・・・許可、した？」

「あ・・・」

先程まで続いていた歩みを止めるとともに、とぎれとぎれの言葉を伊澄が発している。同じくその後ろで黒羽も止まるが、彼女の肩が上下しているのを見て心配になったが伊澄はまたしても小さく笑って、

「は、はは・・・え、ええ・・・大丈夫ですよ。 あ、テル様から電話です」

平然を装うようなその様を見せられて気にするというのが無理がある。そして今度は先ほどの言葉でスイッチが入ったかのように彼女の瞳から光が消えていた。はつきり言って普通じゃない、伊澄の状態をそう取った理由としては今彼女が耳元に当てている携帯電話だ。

・・・呼び出し音が何も鳴っていないような、それと通話のスイッチも押していないのになぜ電話を？あと、伊澄様は機械に弱かったはずでは。

先ほど自然に取り出したかのように見えた携帯電話、だが黒羽の目に映ったものが真実とするならば、彼女は携帯の通話ボタンを押す素

振りもしなければ、しかも耳に当てているその携帯の場所は本来なら逆の場所だ。

「もしもし、テル様？　今黒羽さんを見つけました。　今どちらに？」

瞳の色調が明らかに黒くなっている。同時にテルと連絡をとっている振り。

・・・これが「空鍋」ならぬ、「空電話」ですか……病んでる系女子のいい勉強になりました。

新たな知識を得れた事にひとつの収穫を感じた黒羽。このまま彼女を観察して更なる知識を高めたいところだが、これ以上の介入は自殺行為のような気がするので辞めよう、とそう思った時である。

急に伊澄が歩き出した。　黒羽を振り返って見せた伊澄は目を伏せたままこちらに表情を悟らせないように続ける。

「テル様はこちらにいるようです。　良かったですね、もう少しで会えますよ」

「そうですか」

お互いに頷いて見せてから黒羽も無表情で歩き始める。　それからは先ほどのやり取り以外は目立って会話は無かった。

最初は伊澄から話題を振っていたのだが、黒羽の話に対しては必ず、同じトーンで

「ええ」

としか帰ってこない。　そこには全く感情が込められていなかった。　無機質で、人形と会話をするかのようなその声室に黒羽は違和感を通り越し、それは冷や汗となって現れ始める。

やがて、二人が辿りついたのは人気の少なくなったアトラクションの裏通りだった。

「……」

壁と壁が狭くなり、そこにはもう人氣が少ないのではなく、完全に人が“いない”。細い道では黒羽と伊澄の二人しかないのだ。

「……テルはどこにも居ませんが、これは迷子というやつでは？」

細道も行き止まりになり黒羽がそう言った時だ。黒羽は気付いた。それは目の前が無機質な白い壁しかないということ。

「……それはありませんよ。間違いなんてないんですから」

いつの間にか黒羽を導くために前にいた伊澄が真後ろにいるということに。

「ねえ黒羽さん、ヒーローはどこにいますか？」

薄ら笑いは伊澄の物だ。不意を突かれたその間に黒羽は心を落ち着かせて答えることにする。

「ナギちゃんの答えで言えば、ヒーローとは二種類あり、広義の中でのヒーローはテレビの中に……狭義のヒーローは各々の心の中というところでしょうか」

「……」

問に対しての返答が的を得ていたのか、数秒ほどの間の後で伊澄が言う。

「そうですね」

口調からは微笑むかのような柔らかさだが、今の黒羽にとっては氣味が悪いといっても差し支えないほどの違和感だ。その違和感を加速させるように伊澄は続ける。

「私にとってのヒーローはテル様でした」

「……」

今度は寒気のようなものが背中に伝わる。一歩ずつこちらに歩み寄ってきているのを足元に撒かれていた砂利が教えてくれる。距離としては4、5メートルと言ったところか。

「ピンチの時は必ず現れる。どこかのピンポン星のヒーローのように、三回心の中で唱える事もなければ、頼んでもいないのに勝手にやって来る……あの人はそんなヒーローです」

まるで昔の事を懐かしむような物だった。それほどまでに彼女はテルの事を想っているのだろう。そんな感情が黒羽には感じられる。それ以前に、彼女がテルと一緒にいるときの顔はまさしくソレだ。

「ですが、そのヒーローはとてもお人好しなので自分を殺しに来た敵を助けたりする事もしばしば。私がいくら言ってもいう事を聞きません」

「困ったものです。それでしたら、私が今日にでも鉄拳制裁で軟弱なヒーローを変えてあげましょう」

「ふふ、暴力は行けませんよ。誰だって痛いことは嫌なんです」
一歩一歩その足を近づけている伊澄の足が突然止まった。だが黒羽はまだ振り向かない。最新の注意を払って様子を見ているという事もあるが、威圧感が背中に伝わり、それが黒羽を振り向かせるということをさせないでいた。

「最近、テル様の周りを変な虫が飛んでるんです」

「ほう、それは私のことでしょうか」

トーンを変えずに返した黒羽に対して伊澄が背後で“ふふふ……”と、

「助けてもらった分際で尚且つ情けで護られている貴方に、私は言っても良いでしょうか。私は貴方が気に食わないのです」

伊澄は続ける。

「気づいたらあの人の傍に貴方が居る・・・その光景は私にとって地獄だったのです」

背後に居る伊澄の顔を今は容易に想像できた。圧倒的優位な状況で後ろに立つ彼女は、どす黒い感情を溢れ出させ、半月のような笑みを浮かべていることだろう。

・・・なんともめんどくさい事に巻き込まれたか。私は巻き込まれ系の展開はあまり好きではないというのに。

どこぞのテンプレ展開と似た自身の境遇に小さく溜息をつく。彼女がその展開を嫌う理由は、否応なしに自分の予定を無視してトラブルへと突入するというその理不尽さにあった。

伊澄の言い分はこういう事だろう、自分があまりにもテルと一緒に居たものだから早いとこ離れる、と。嫉妬心前回は良いのだが、もう現在は嫉妬を通り越して、殺気へとなりかけていることに彼女は気づいているだろうか。

・・・私にとっても別段気になる問題ではないというのに。

黒羽にとって、テルの存在は MARIA から命じられた通りに自分の面倒を見てくれる主従関係と言うものだ。その関係は今現在も変わっていないし、唯一変化があったとすれば高尾山で彼を呼び捨てをするようになったくらいか。だがこれもテルからの提案で自分はそれに乗っただけである。

決して彼にとつての特別になろうとしたわけではない。そのへんを勘違いしないでいただきたいものだ。

素直に誤解を解こう、と黒羽は決意する。

「・・・私は別にテルを伊澄様と同じ“そういった感情”を抱いて見ている訳ではありません」

「違うのでしょうか」

「無縁です・・・確かに何度も倒れた私を休憩室に連れて行く為と称して“お姫様だっこ”してはいますが、今では殆ど見られません。現に、そんなことにすらときめかないのが私です。残念ですが、そういった感情とは、恋愛感情とは全くもって無縁——」

きつぱりと、黒羽はそう言うて見せる。そこからまた少しだけ間が空いたので伊澄が何かを考えているようだ。なんにせよ、事情はこうして話したのだから理解してくれるはずだとそう思っていたのだが、

「嘘ばっかり」

黒羽のセリフを途中で斬って捨てるかのように本格的に邪悪な威圧感が黒羽へと返って来た。この威圧感には流石の黒羽も身震いを感ぜられるずにはいられない。

「嘘ばっかり」

踏み込んで生まれる砂利の音が妙に乾いている。一層に強大な冷気とともに、

「嘘ばっかり!」

それは黒羽を追い詰める。伊澄が纏っていたのは怒りではなく、ただただ単純な“殺意”。

「・・・ッ!」

その殺意は普通の人間でも一瞬で気付けるほどの物だった。ただ自分ひとりだけに向けられているその殺意へと反応する為に黒羽が振り向いた時だ。その時には既に数十センチの近くまで伊澄が入り込んできており、どす黒い感情を象徴したかのようにその右手には“ある物”が握られていた。

次の瞬間、軽い“とんつ”といった弱々しい、歩き際にぶつかったかのような衝突。だがそれは衝突というよりも、まるで伊澄が黒羽に対してもたれかけけるような態勢だった。

「あ」

ふと漏らした一言とともに、黒羽の体が大きく揺れて後方へと倒れ込んだ。大の字になって青空を見上げる黒羽の身体はピクリとも動こうとはしない。

「・・・ふ」

完全に人形のように動かなくなった様子を見ていた伊澄が笑みを作った。それはまさしく、勝ち誇ったかのような、これまでの全て溜め込んでいたその“感情”をちゃんと相手にぶつける事が出来たことによる恍惚の表情。目的を達成できた彼女は肩を数度震わせて、

「あははは」

枯れたような声で笑った。

「終わった・・・！ これで、全部・・・！」

“白の巫女”とは思えないかのような禍々しい瘴気が伊澄の体から溢れ始めた。倒れて動けない黒羽を見下ろしながら彼女はまるでどこぞの吸血鬼の旦那のような笑みを浮かべて言う。

「もうこれで・・・私の“モノ”だ。 “お前の”じゃあない・・・っ
！ 誰のものでもない、私のっ！」

高らかに狂気を孕んだ声が響く。 自身の手で顔を隠しながらも
その狂声は人がいないその場に響くのだった。

無残に黒羽の腹部に突き刺さった包丁のことなど、気にとどめない
まま。

●

一方、白銀の展開した結界の遊園地内。 そんな超ヤンデレ劇場が
現実世界で展開されていることなど露知らずの男たちが居た。善立
テルと木原竜児である。彼らはこの世界に存在している謎の寄生
獣もどきの人間に追われ、遊園地内を走り回っていたのだ。

「——ツツ!？」

アトラクションの森の中に身を隠していたテルが何かを感じ取っ
たかのように隠れるために伏せていた顔をあげる。同じ逃亡者の木
原が“おい”と制するように彼の頭を掴んだ。

「今動いたら見つかるだろ。もう少しここで待ってようぜ・・・」

言われた事の重大さを理解したか、小さく頷いてテルが身を屈める。アトラクションの中にも寄生獣もどきの人間たちは存在しており、まるでぼうゾンビゲーの如く周囲を警戒している。

「・・・」

「どうした、何か気になることでもあったか？」

余程考えている顔だったのだろうか、氣遣われたその一言にテルが頭を掻いてまた頷く。

「なんか、俺の知らないところでNice boatな展開が・・・」

「怖いこと言うなよ。どこかで“あのBGM”が流れてきそうじゃねえか。考えない方が身のためだぜ」

「お、そうだな」

木原の言葉に疑問を残すことなく、テルは納得したようだ。実際、彼らがこんなところで逃走劇を繰り広げている今まさに、現実世界の遊園地ではどこぞの人気のない通りで“あの音楽”が流れるような展開になっているわけだが、そんなことなどこの馬鹿二人はまったく知る由もなかった。

「ん？」

二人が隙を見て移動を試みようとした時だ、出口付近まで来たテルがある人物の姿を見つける。

「おいおい、あれって・・・」

視線の先にいる人物の姿に気づいたのか木原も同じくその姿には見覚えがあったようだ。テルは首を傾げながらその名を呟いてみせる。

「ンッンー？ あれっでもしかして・・・咲夜？」

第123話く緑の亀を蹴り上げろく

「ふふふ……」

現実世界、遊園地の路地裏。恍惚の表情を浮かべている一人の少女が居た。鷺ノ宮伊澄である。

「これでテル様は……」

私のモノだ。と、その言葉を浮かべただけでまた笑いがこみ上げてきた。その姿には普段冷静に振舞うおしとやかな、ましてや光の巫女としての姿は全く見られない。

「……………」

見下げる先にあるのは黒羽の倒れた身体。腹部に突き刺さっている包丁は、先ほど自分が突き刺したものだ。

——この女が、テル様を苦しめた。

過去に、戦いを通して伊澄が黒羽から感じ取ったものは何も無かった。まるで機械のように、何かの命令を受けて、ただただ動いているだけの存在。一度は倒し、彼女を二度と見ることはないと思っただ。だが彼女は戻ってきた。記憶喪失になってやって来たのだ。しかも、テルの住んでいるナギの屋敷である。

時間が経って、テルを見れば、必ず隣に黒羽が居る。それがどれほど伊澄の心を傷めさせていったか。一度は彼女を庇うテルの言葉に従い、彼女の存在を認めようと努力した。だが、命のやり取りを、ましてや想い人を傷つけた相手を仲間認めろというのは無理な話である。前までは妖怪退治も咲夜も含めて一緒に行っていたのに、最近はめつきり数が減ってしまった。それは紛れもなく、彼女のせいだ。彼女が、黒羽舞夜がテルの時間を奪っている、そう感じた。

奪われたのは、テルだけではない。それは三千院家の幼馴染、ナギ

もだった。以前、彼女の話題が彼女から出た時だ、ナギは黒羽についてこう語っていたのを思いだす。

——黒羽は確かに不安の塊だ。だが、あの儂さは昔の母のような放っておけないような、そんな感じがするのだ。

嘘だ。と即座に自分は否定したかったが、諦めた。それはナギを苦しめてしまうことに繋がるかもしれないからだ。それゆえに、自分はこの考えてしまったのだ。 “テルもナギも黒羽が全部奪っていったのだ”と。大切な人を奪われたことにより生まれたどす黒い感情は吐き出されることなく、溜め込まれる。 13歳の少女の精神を病ませるには充分だった。

「ですがこの不安ともおさらば、白銀様には感謝しなければ・・・」
ゆつくりとその場を去ろうとした時、伊澄の動きが止まり、くるんと踵が返される。無表情で彼女は再び、倒れている黒羽の元へ歩き出した。

「あらあら私としたことが・・・」

特に足元をふらつかせる事なく、まっすぐと黒羽の場所へたどり着くと突き刺さっていた包丁を軽く引き抜いた。

「うっかりしてました」

凶器の回収もそうだが、もう一つやり残したことがあったと、伊澄は思いだす。包丁を手にしたまま、黒羽の頭の横に場所を変えて膝を折って座り込んだ。そして黒羽の首を掴み、狂気の滲ませた笑顔で言うのだ。

「首を切り落とさなきゃ」

●

場所は変わり、異空間に放り込まれたテルと木原は自身を襲ってくる寄生獣モドキから逃げている最中、

「な、なんで咲夜がこんな所に・・・？」

後ろ姿を確認したテルはそそくさに草陰を利用しながら後ろを向いている咲夜に近づいていく。少しの物音でも立てようものなら周りの怪人たちは必ずと言ってもいいほどこちらを見つけて、襲いかかってくるだろう。

「ってか何で俺たちはコソコソとほふく前進してるわけ？」

「ばっかヤローおめえ、気配消して近づく方法っていったらコレしかねえだろうが！ダンボールがあれば尚良しだったが、流石に異空間に持ってこれるほどテルさんは万能ではないのよ」

まるでどこかのビッグボスの如くほふく前進を繰り返してやつと1メートルほどの距離まで近づいた時にテルは思う。本当に、なぜこの場所に咲夜が居たのか。周りの怪人たちに襲われず、中央にどんと構えているその姿はまるで指揮を採っているかのようだ。

「ま、まさかアイツも寄生獣モドキに・・・」

「んなワケねえーだろ。仮にも原作ヒロインだぞ。そんな奴が顔くぱあ、なんてやってみろよ・・・この作品終わるわ」

不安が募らせる木原とテル。咲夜はこちらに気付いていないのかまだ周囲を見渡して仁王立ちで立ったままだ。

「さて、どうコンタクトを取ったらいいものか、バレないようにやんないとな……」

「それなんだけだよテル……」

なんとかして目の前の咲夜と連絡を取る方法はないものか、と思考を巡らせていた時だ。隣で伏していた木原がテルの肩を小突いてきた。なんだ、と思ったテルがその横に視線を向けると木原は半笑いで口を動かして、

「もう囲まれてるってだよ」

目を点にしたテルが周囲をぐるりと顔を回して見たときには数十の寄生獣もどきがこちらを囲むように存在していた。口元を刃に変形させたり、右腕をカギ爪で尖らせ、金属同士の擦れる嫌な音が360度から聞こえてくる。

「あー……」

テルは何か悟ったかのように空を見上げて呟いた。

「やっぱダンボールがないと無理か」

「そういう問題じゃねえだろうがよッ」

「フハハハッハ——！ ホントバカやなあテルは！」

突然として、先程から前を向いていた咲夜が嗤い声を上げながらこちらへ振り向いてきた。

「最初っからあんたらの動きは園内の監視カメラと同調してるウチのスマフォで筒抜けや！」

高笑いをしながら咲夜は続ける。

「ついでに言うと、この怪物寄生獣モドキはウチの命令には絶対服従や。ウチが命令権を持っている限り、自身が襲われるつちゅー愚かなオチは絶対つかんからな」

「マジかよ．．．！　たくさんの寄生獣モドキに襲われるっていう咲夜の薄い本ネタができる予定だったのに！！　大友もがっくりだよ！！」

「お前はボケることしかできねえのかッ！！」

真剣な顔で語られる台詞の内容のギャップに呆れた木原がテルの頭を最大に叩いた。この男には絶対にシリアスならない防御結界が常に発動でもしてるのだろうか。

「だがッ！！」

唐突にテルが謎のポーズととも腕を組、こちらのやり取りを見て高笑いする咲夜を指差した。

「今のやり取りで分かったが．．．『お前』、本当の愛沢咲夜ではないなッ！！」

「な、なんだって？　それは本当かい!？」

どこかの馬のオルフェノクのような反応を見せる木原にテルが小さく笑いながら続け、言い放つ。

「俺たちの小さなギャグやらボケに突っ込みを入れたい．．．それは俺達の知っている愛沢咲夜じゃあねエ——ッ！」

「た、たしかにそうだ．．．お前何モンだア——ッ！！」

そう、彼らが知っている愛沢咲夜とはお笑い芸人、もといエンタメお嬢さま。笑うことに死ぬほどの危険があっても名の通り身を張ってでも笑いを取りに行くダチョウクラブリスペクト精神を持った人物だ。その彼女が

小さなギャグやボケに何も反応を見せないというのは天地がひっ

くり返つても絶対にない。

「……………」

凶星だったのだろうか、咲夜の姿をした人物は黙っていたがやがて小さく震えるように笑い出し、高らかに腕を上げて叫んだ。

『その通りだ人間ッ』

片手で顔の片方を隠した彼女の瞳の色が赤に変わると同時に纏っていた霧囲気も一変した。

「な、なんだこのプレッシャー!?!」

風など吹いてはいないはずなのに周囲に衝撃が走り、木々が揺れている。電気のようなもの肌パチパチと威圧するかのように発せられている。まるでどこかの魔王のようだ。

『我はこの娘の身体を乗っ取った別の存在よッ　いいか、忠告しておくぞ！　意識は別とは言え、この身体はお主らが知っている『愛沢咲夜』のモノ！　傷つければどうなるか——』

「くっ……………！　姑息な手を……………!!　どうするテル!!」

打つ手なしか、と言われれば確かにそうである。相手が言っていることが本当だとしたら、こちらは無闇に咲夜の身体へと攻撃することとは出来ない。ゲームやらアニメでよく見られる設定といえればそれまでだが、実際にその手段を用いられるとこれほどまでに面倒な相手だ。

その間を隣の相棒に投げた木原だったが彼は次の瞬間、衝撃の光景を目の当たりにする。

「オラアアアアアッ!!」

「ギヤアアアアアアアッ!!」

偽物の咲夜が説明を言い切る前にテルの飛び蹴りが咲夜の顔面に直撃させるその姿を。

『えっ……ちよっ！　なんで……ぼふお！』

盛大に地面へと倒れた咲夜が唾然と戦意を喪失中にも関わらずまるで流れるかのような動きでテルは偽咲夜へとスリーパーホールドを決めていた。

「あー？　どうせこの娘の身体がうんたらかんたらで俺達にエロい事する気だろうか」

『誰がするかッ！　需要ねえだろうがそんなもんッ!!　だいたい話聞いてなかったか!?　この身体はこの娘の身体なんだぞ?』

「そ、そうだぜテル！　このお嬢ちゃんの身体は本物なんだ!!」

「ダイジョーブダイジョーブ、大抵この作品の九割はギャグで流すから。ドッキリドクター見てみるよ、博士トラックに跳ねられてるのに次のカットでは『あーマジ死ぬかと思った』で済まされてるから。

あんな感じで」

「あつ、なるほど」

『お前も納得すんなア——!!』

これが咲夜本人だったら一体どんな悲惨な状態になっていただろうか。肉体だけは本物なだけの相手に対して、この男たちは本当に容赦がない。

『い、いたいっ！　マジ、マジやめて!!』

涙目で頭を抑える偽咲夜の頭に二人の片手に持っていたハリセンが嵐のように叩きつけられている。まるで一方的にいじめられているかのようなシーンだ。　いや、実際そうなのだが。

「あゝ、たまらねえぜ」

「お前、絶対私怨含めてるだろ」

いやあ？　と、木原に問われてもテルは嬉々としてハリセンを振り上げて続けるのだ。

「そんなアことないからねえ！　研修始まってからのこいつのギャグをその名の通り身体を張って受けてた事なんて全然気にしてないからねエ——ッ!!」

目が澱んでいる。これは完全に仕返し目的でやっている感じがあ
る。問答無用にハリセンを相手に振るうテルを見て、そう確信した木
原だった。

「ちよ、調子に乗るな——ツツ!!」

一喝。その叫びとともに両腕を思いっきり振り払われたと同時に
テルと木原の身体が吹き飛ばされる。突如として強烈な突風が
吹いたかのような衝撃に二人は驚きながらも無事着地をすると、

「やるねェ」

不敵に笑って見せるのだ。それはテルだけでなく向こうで先ほど
まで涙ぐんでいた偽咲夜も同じで、まるで遊びは終わったかのように
雰囲気を変える。

『余興はここまでだ。人間風情が・・・私の真の姿を見せてやる!!』

偽咲夜が両腕を開いて見せると、今まで何故か呆然としていた寄生
獣モドキ達がスライムのように溶け始め、テルや木原たちを無視して
一斉に偽咲夜の方に集まていった。

『ハアアアアッ！ バリアルフォーゼエエエ!!』

ヒロインがやってはいけないようなゲスな顔芸を披露した咲夜が
一層に叫ぶとテルたちの視界を覆わんばかりに光の柱が天に向かっ
てそそり立っている。光の柱の周囲の雲がまるで暗雲の如く立ち
込め、ゲームで魔王が降臨するかのようになり、稲妻が駆け巡っていた。

『ハッハッハッハ——!! 我の真の姿を見たかッ 恐れ慄きのたま
うがいいッ』

サウンドウエーブをかけたかのような鈍い声、そして地響きを鳴ら
すかのような一歩と共に偽咲夜が現れる。だが、その姿はまさしく、

ヒトではなく、別の物だった。

——その姿、まるで……………。

「●ツパじゃねーかツ!？」

テルが指を差して突っ込んだ。隣にいた木原も、あー、と頷きながら、

「クツ●だ」

視線の先、呆然と立ち尽くす二人の前には某配管工のゲーム世界のラスボスが目の前に体現していた。緑のトゲ甲羅、巨大な四肢や身体の色合いなど正しくあの亀だ。

『どうだ見たかア！ 我の姿をツ 恐怖なる魔王の姿をツ』

全身から溢れ出る力を誇示するかのように一mほどの拳を握ってみせるがテルと木原は、

「ピエロの飛行船に乗ってないから結構最初のほうか？ アレ？ どうだっけ」

「いやでも最初のマリオのラスボスってたしかドンキーだったような」

「しらねーよ、取り敢えず木原！ クリ●ーか緑甲羅もってこい、あいつの頭にぶち込もう」

「いや、それよりも溶岩に落とすことが一番いいのかもしれない！」
『……………』

全くもって聞く耳を持っていなかった。無視されていた偽咲夜は怒りを覚えて、

『コツチヲミロオオオオツ!!』

怒号とともに、拳を振り上げては二人目掛けて地面へと振り下ろす。巨大な拳が地面へとめり込んで盛大に音が物語るその威力は、クレーターを出現させるほど。テルと木原もその攻撃には流石に危険を察知したのか、お互い瞬間的に飛び跳ねて距離をとって難を逃れる。

「だからア！ 俺あん時いつたじゃん！ ヨツ●ーは乗り捨てるものだって！ ああやんないと手に入らない鍵とあるんだぞお前ツ それをお前、失敗して残機マイナスと●ツシー失った昔の事わざわざ思い出してんじゃねえよ!!」

「テル！ お前にはアイツの叫びが聞こえなかったのか!? 主人にジャンプ台として乗り捨てられて、谷底へと消えていく小さな命の悲しい叫びがツ!!」

『嫌がらせかつ 揃いも揃って我をいじめるのかツ！ 無視はいけな いんだぞ!!』

偽咲夜の突っ込みによく気付いたか、テルと木原がこちらを向く。二人は偽咲夜を見上げながら、

「うるせえな！ こっちは正しい”でっっていう”の使い方だ議論してんだよ！ 鈍重は黙ってる！」

「あの世界はなア！ 何かを踏み台にしなければアイテムを得られない悲しい世界なんだよツ！ ●コノコも、ク●ボーも、ボ●兵も！ ラグビー野郎も！ 全員が踏み台なんだよ！」

『知るかボケエエエエエエ!!』

轟、と偽咲夜の口から一杯に光るものが見えた次の瞬間、テルたちに向かって灼熱の炎が吐き出された。火炎放射器のように吐き出される炎は、帯を焼き尽くし、辺り一帯が灼熱の地獄と化した。先ほどから無視され続けていた為、怒りで我を忘れてしまったか、標的

の二人には全く当たっていない。その様子を見て、テルが一言。

「……火種の無い環境でこれほどの火遁を操るとは……やはり天才か」

「ボケてる場合じゃないだろ。そろそろ洒落にならなくなってきた」

偽咲夜の撒く炎は勢いを強め、テルたちをこの場所から逃さんとはかりに囲んでしまっていた。炎に囲まれているからか、気温の上昇が半端じゃなく、テルと木原もその身に尋常じゃないほどの汗を流して現在の状況の悪さを今更ながら理解する。

だが、どうする。と冷静に木原は分析する。敵は仮にも某ゲームにてラスボスを張っていた魔王。しかも咲夜の身体は本物なのだ。偽咲夜の身体を傷つけて、本物の咲夜の身体が傷つかないという完璧な保証はない。状況は猶猶苛烈だ。その意図を横にいるテルは理解しているだろうか。その確認を踏まえて、彼に視線を送ると彼は一瞬こちらを見た後にゆっくりと前を向きながら、

「安心しろ」

炎の渦に巻かれているこの場面で、彼はそう言ったのだ。

「アイツは絶対に助け出してやる。一応、今は俺のご主人様だからな」

指をポキポキと鳴らすと彼は木原の肩を掴んでニツコリと笑った。

「だからよお木原くん、ちよつと犠牲になつてくんない?」

へ? という間抜けな言葉を発する間もなく、木原の視点がぐるんと変わる。いつの間にか、木原の身は炎とは無縁の空中へと投げ出されていた。本当に一瞬だった。背負投の要領でテルが背を向け

た瞬間、超常的な力が働いたのか、偽咲夜の頭上を超えるほどに高く、彼の身は空を舞っていたのだ。

「なせば大抵なんとかなる！　あとは自力で何とかしろ！」

「そんな無茶なツ!!」

360度の視界の変化に目を回しながらもテルの声をなんとか拾って、そう叫ぶ。だが、長く彼と行動をともししていたからか、なんとなくその狙いは分かる。空中で受身をとって、偽咲夜の頭上に視線を落とすと落下と共に、その右足を振り上げた。

『何をする気だツ!?!』

「これから落ちるツ!!」

頭上を取られた偽咲夜が上を見上げるが既に木原は落下のスピードを利用して、こちらへ足を振り下ろしたのを見て防御を構える。構えた巨大な二の腕に木原の遠心力を最大限に活かした踵落としが炸裂するが、巨大な身体故に、衝撃は完全に防がれて逆に木原が弾き飛ばされた。

『効かぬわッ』

ウエイトを最大に活かしたこの防御。崩せる物はそうそう居ない。この防御を突破できる存在とは、某配管工のパンチくらいだろうか。

『……ッ!?!』

勝利を確信した偽咲夜が見たのは木原の不敵な笑だった。何かしらの策はあったのかもしれないが、奴の一撃はモノともせず、こちらには立っている。何を笑うことがあるのだろうか。

「ナイスだ木原ツ!!」

「おおッ！　テメー後でパピコ奢れよな！」

なんだ、と偽咲夜の大きな瞳が声のする方へと向けられた時だ。

小さな男がいた。何重にも梵字の書かれた札を巻きつけた、鉄パイプを構えた一人の男が偽咲夜の目の前に立っていたのだ。不敵に笑った男、善立。テルは牙突の構えで偽咲夜の土手っ腹目掛け、

「光になれえええええええええ!!」

思いつきり突き刺さした。

『GYAAAAAAAAAAAA!!』

獣のような叫びは偽咲夜のモノだった。激痛なのか、別のものなかは分からないが、拳程の光が無数に偽咲夜の体内から放出され、量が多くなるごとにその身は一層光を増し、やがて。

ぼんつ、という小さな爆発音と煙の中から人影らしきものが見えたのをテルは見逃さない。丁度落下地点にあつたためか、その落下スピードを覚悟した上で彼は身構える。そして次の瞬間。

「ぶはっ!」

落下してきた人物をその両手に受け取るために膝をクッションにすべく曲げてみたが、勢いが付き過ぎたためかテルは尻餅をついていた。自身の痛みも束の間、受け止めた人物が無事なのを確認するために、その人の顔の頬を軽く叩いてみせる。

「おーい咲夜ア　咲夜ア!　西から登ったお日様が東に沈んでるぞ!」

「んなワケあるかア!　ボケも大概にせんかあいいいい!!」

盛大な突っ込みとともに咲夜が目を覚ますのを見てか、テルは内心でほっと胸をなでおろしていた。目覚めた早々にこれほどキレのいい突っ込みを見せれるならば大丈夫だろう。

はつきり言つて賭けに近いモノだった。咲夜をテルが攻撃するというこの手段は。木原が偽咲夜の動きを完全に止めるための囷になったが、“ただテルの攻撃を当てる”為の囷ではない。恐らく、偽咲夜は物理的な攻撃は全く効かないだろう。なぜなら、咲夜の中に入っていた物は憑依して咲夜を操っていたことから、霊体的な存在だとテルは推測した。霊体という言葉聞いて、テルはひとつだけ思い出したことがある。それはヒナ祭り祭りの時だ。あの時、バーサーカー期の黒羽と戦っていた時、テルはボムという男？と出会ったことだ。

そのボムというのは過去にリア充を妬むが故に生まれた怨霊で、テルが殴つても投げても倒すことは出来なかった。チビハネの機転で、ボムは成仏したのだがこの出来事をヒントにテルはある事を考えた。自身が持っている伊澄の札。これが霊的力を阻害するというのであれば、霊体的な相手には有効なのではないかと。結果、今回の事で札を巻いた状態なら霊的な相手は除霊できるということが分かった。なので咲夜本体にはダメージは行かないのである。

わかりやすく説明すると、『玄米ブレード』的な感じだ。

「そんだけ騒げれば大丈夫そうだな。おい咲夜、一体何があつた」

そう問われた咲夜が唸る。 ややあつてから、

「・・・そうやテル。 お前さんに話さなきゃいけないことがあるんやが、その前に・・・」

「ん？」

首を捻るテルに対して咲夜が顔を背けた。 真横から見える咲夜の顔が若干熱を帯びているように赤くしながら彼女は今度は身を捻つてもどかしそうに、

「ちよ、ちよつとな・・・？ 恥ずかしいから、その・・・降ろしてほしいねんけど」

「お、すまん」

と、先程までからずつと咲夜をお姫様抱っこしていた事に気づいたテルがゆつくりと咲夜を地面へと下ろす。その身が離れるときに若干名残惜しそうにこちらを見ていたのは気のせいだろうか、とそんな事を思いながら咲夜の準備が整うまで待つことにする。

「あーもう、テルのせいで調子狂わされっぱなしやわ」

まだ恥ずかしさから頬を染めていた咲夜が頭を掻きな眩いている。深呼吸をついたり、なんとか落ち着いたようだ。

「俺から質問、この状況作った犯人は誰だコノヤロー」

テルが事の発端を咲夜に聞く。この一日は途中で劇的に変化を遂げた。楽しい遊園地めぐりから地獄の寄生獣ランドへ無理やり飛ばされ、命まで狙われている。この状況はもはや普通ではない。咲夜は重々しく口を開いて言った。

「・・・白銀や」

「・・・」

その名に、テルが腕を組んで押し黙った。その後ろに居た木原は訳がわからないと言った表情で咲夜に尋ねる。

「なんで白銀が・・・？」

「理由はよくわからん。ただ、アイツが狙ってるのはテル、お前の命や」

物騒なモノだ、とテルは薄く笑ってみせる。以前から中々隙を見せなかった訳だが、ここにきてようやく本性を見せてきたらしい。

「アイツ・・・魔法使いかなんかなのか？」

「ウチらも分からん。伊澄さんもウチも白銀の魔法みたいな光を浴びてから何がなんだか・・・ウチ、何かしたか？」

覚えていないのか、とテルと木原が目を数度見開く。やがてテルが小さく口を動かして言葉を作る。

「……クツ●になつてたぞ」

「なんでや！ つてコントやつてる場合やない！ ようく聞いておけ、テル。アイツの正体や」

「ん？ なんだよ咲夜、もったいぶつてないで早く教えろよ」

無駄に引っ張っているように見えたのだろうか、いつもの調子でテルが言うが、咲夜は深刻な表情で俯かせた。

「……うっさいな、ウチだつてな、受け止めようにも受け止めきれない事実っちゅーもんがあるねん……」

辛い表情のまま咲夜は俯いていた顔を上げて、テルに言うのだ。

「白銀はな……未来から来たテル、お前自身や」

第124話くその面（ツラ）を叩きに行くく

誰しもが、頭のどこかで疑念と言うものを抱いて生きている。綾崎ハヤテも今日この遊園地内で小さな疑念を持つ者の一人だ。

・・・さて、ヒナギクさんをちゃんとリードできているだろうか。

別に他意があつたという訳ではないこのイベント。生徒会の三人組の提案から始まった二人っきりの遊園地来訪。目的は、ヒナギクの機嫌を直してもらうためにあるのだ。数々の無礼というものを積み重ねてきた自分に責任がある。それにちゃんと対応してこそ一流の執事というもの。

「大宇宙山、水しぶき山・・・とにかく高いところはNGだからなあ」

桂ヒナギクは高所恐怖症だ。それはいまだに解決していない完璧生徒会長である彼女の唯一の弱点である。だがそれを差し引いても彼女は強い。武力、知力にとってもその気高さを失わない。ソレを見て誰もが憧れるのは当然だ。

「ハヤテくん・・・」

「え・・・？」

隣でオレンジジュースを飲んでいたはずのヒナギクがこちらの服を掴んでいたことに気付いて、ハヤテは現実へと戻ってくる。オレンジジュースの入ったカップに挿してあるストローを啜っているヒナギクの顔は周囲を警戒しながらこちらを見た。

「なんか、変な感じがしない・・・？」

変な感じ、とは。ハヤテが首を傾げて考えてみる。この遊園地に

てただの執事である自分と白皇学院の生徒会長という釣り合わない二人組がいるというこの状況の事を言っているのか。

「たしかに、なんとなくそんな感じが……」

「でしょ」

こくん、と頷いて見せるヒナギクに対してハヤテはの心境は複雑だ。やはりこちらの考えがどうやら当たっていたようで彼女も自分とのデートに不満を持っていたのなら、それを口に出されたのは内心ではショックである。

……やはりヒナギクさんは僕の事をキラッて……。

暗い考えに顔を背けようとした時だ。

「正宗が反応してるわ……この遊園地内、私たちの知らない所で何かが起きてるって」

「何か……？」

いつのまにかヒナギクの右手に握られていた正宗が小さく震えているのがハヤテの目には見て取れた。つまり、ヒナギクが感じていた先ほどの台詞の真意は、別にこちらと一緒にいることに対しての不満ではなかったのだと知りハヤテは安堵する。

「どうしたの、安心してるような顔して？」

「い、いえ……なんでもないですよ」

「そ、そう……」

小さく笑って見せ、今度はヒナギクが顔を逸らしていた。別に変な顔をしていたわけではないのに、ちよつと頬を赤らめた理由はなぜだろうか、とハヤテが思考する間もなくヒナギクが再びこちらと向か

い合う。

「とにかく！ こういったときは伊澄さん関連の妖怪的なものよ！
本当は伊澄さんが居ればいいけど、彼女が最近学校に来てないからこ
こは私達で解決しなきゃ」

確かに、最近伊澄は学校へ顔を出してないことをハヤテ達は知って
いた。しかし、神出鬼没の彼女の事だからうっかりカンボジアまで迷
子になっているか、この遊園地に迷子になっているかどちらかだ。

・・・あれ？ どっちも迷子のケース？

「さあハヤテくん！ 行くわよ！」

「わ、ちょっと待ってくださいよヒナギクさん!!」

猛然とダッシュで走り出したヒナギクをハヤテは追いかける。

ヒナギクの正義感の強さに押されて止む無しだが、正宗などが関連し
ていることからあながち間違いではないのかもしれない。

・・・たしかにどこかおかしいような。

ふと周囲を見回しても、どこも変わらない。ただの遊園地、客も
建物もどこか怪しいといったものは見当たらない。だがその裏、自
分の目には見えない場所からピリピリと微弱ながらも電気のような
ものが自分の肌を感じられる。注意していなければ気づかないレ
ベルであるが。

——何かがある。

そう感じたハヤテは確信も持てないが、その疑念を頼りにヒナギク
の後を追うのであった。

ちなみに、数分後に正宗という木刀を片手にもって走るヒナギクが警備員に拘束されかけの言うまでもない。

○

「白銀が・・・未来の俺？」

「せや」

咲夜の口から放たれたその言葉に全員が耳を疑った。白銀拓斗とは仮の名で、本当の名前は善立テル。

「未来からやってきたアイツは何かしら目的があつてテルを亡き者にしようとしてるらしい」

「どこの某弓兵の英霊だよ！」

というか、と木原が頭を搔く。

「見た目変わりすぎねエ？」

「たしかに」

「筋肉モリモリ、マッチョマンの変態だ」

自分で言っていて恥ずかしくないのかテル、と誰もが思ったのは内緒だ。どこぞの大佐ほどではないが、体格がデカくなったのは驚きである。

「あの死んだ魚の目が・・・」
キリッとしたものに。

「変哲もない黒い髪の毛が・・・」

ミステリアスを匂わせる白髪に。

「未来の俺は相当修行でも積んだのだろう・・・山籠もりとか百人組手でもしたんじゃないか？」

「いや、山籠もりだけで済むレベルの変化じゃないだろう・・・もはや別人のレベルやで」

咲夜も一番最初にその正体を知った時は正直信じられなかった。信憑性もまったくもって薄い。だがそれを信じてしまうのは、伊澄の家で彼が放った一言。

——頼む伊澄、咲夜・・・ちよつとだけ俺に力を貸してくんね？

あの時の口調は、白銀拓斗ではなく善立テルの面影が確かにあった。その一言が彼を善立テルだと言わしめる理由である。

「・・・目的ってなんなんだろうな。　ってテルどうしたよ？」

木原の隣で座っていたテルがいつのまにか立ち上がっている。

「こういうのは、本人に聞くのが一番だ」

執事服についた砂を払い、ポケットに手を突っ込んで小さな黒い棒を引きずり出す。

「行くんやな。　白銀のところに・・・」

咲夜はある程度察しているとはいえ、テルに白銀の場所には行つて欲しくはないというのが咲夜の意見だ。　なにせ、相手は伊澄を上回る力を持っている。

伊澄の秘術、八葉の力をもってしても彼を打ち破ることはできなかった。　一瞬にて謎の魔法のような能力まで身に着けていてこの

剣士馬鹿がどういった経緯で魔法使いになってしまったのかは全く持って謎である。

だが、そんな得体のしれない相手であってもテルは行くのだろう。いや、いかざるを得ないのだろう。なぜなら、あの男が、白銀拓斗が善立テルならばこの状況を作り出している人物が自分なら、この相対は決して避けられない物だからだ。

「あのバカが変な考え持ってたらお前がぶちのめしてこいっ！ テル！」

景気よく笑って咲夜は言う。 対してテルは平成仮面ライダーばりのサムズアツプだ。

「木原、咲夜を頼むぞ」

鉄パイプを目いっぱいまで伸ばし、振り返らずそう告げたテルはゆっくりと前へ歩き出した。 木原もそれを止めることなく、

「まかせろよ、この戦闘のプロに。 これでようやく暴れられる」

指の関節をポキポキと鳴らすのであった。

○

・・・アイツの狙い、か。

木原と咲夜たちから分かれたテルの心境は複雑だ。 未来の自分が、何故かこの過去にやってきている。 そして自分を殺そうとしている。

・・・心当たりは。

ある。 咲夜たちは知らないのは無理もないが、咲夜邸に執事研修

で白銀と対話した時だ。

——黒羽が死ぬことになる。

黒羽の死。それが白銀拓斗、未来の善立。テルが未来で目にした真実。その死を未然に防ぐために彼がこの時代にやってきているという考えは何となく予想がつく。

だが、なぜ、どうして自分が死ななければならないのか、理解が出来なかった。

この時代の善立テルが死ぬことによって、黒羽舞夜の死を回避できるといふのはいったいどういうことだろうか。考えることは難しい、それくらいなら気を紛らわす事を含めて、体を動かした方がいい。他にも問いただしたい事がいくつもある。なぜ、彼は・・・自分はあぁなってしまったのか。

「一体どうして・・・」

見た目が変わるのはいい。声も、仕草も、口調も、だがどこか心が諦めたようにいる理由はなんだ。恐らくこの時代のテルは知る必要がある。

諦めない事が自身のポリシーだ。一度交わした約束は何がなんでも必ず守る。安請け合いはあまりしない。自身を育てた神崎百合子の剣術から学んだ己の意志を貫き通すこと。彼女が死んだ後も、記憶を失った後でも、それを手放したことはなかった。だが、未来のテルは違う。己の道しるべとも呼ぶべきその心を手放した、まるで別人。

・・・一発二発じゃきかねえぞ。多分タコ殴りだ。

『ダアオツ』

テルの行く手を阻むかのように現れる異形の怪物達。顔面が花のように開き、牙とナイフのような腕を携えた彼らは一斉にテルへと向かってきた。凶器がこちらの体を狙っているのは容易に分かる。彼らはこちらの命を狩る事しか頭にない、いわば獣のような存在。

……お前はそっちにいるのか。

目の前の怪物たちはここを通さんとはかりに溢れ出してきた。その光景を見て直感的にテルは感じ取る。この方角に白銀拓斗がいるのだと。

『アアアアツ!!』

正面に一体目を見据えると距離数メートルまで迫る怪物の刃がテルを襲う。もちろん、それを態と食らう程テルは馬鹿ではない。

「邪魔ア」

刃が首を掻き切らんとするその変則的な動きに動じることなく、鉄パイプで叩き伏せていく。怪物たちの力が常人の腕力ではないことをその鉄パイプから伝わる痺れから確かめながら、テルの足はそのまま止まることなく怪物たちの目の前まで迫るとその無防備な首根を掴み、

「邪魔邪魔邪魔邪魔アアアアア!!」

怪物が叫ぶまもなくその体を地面へと叩き伏せると隙も与えず後ろで構えている怪物の群れに視線を移して狂人のような笑みを浮かべて突進していく。悪鬼の集団を物ともせず駆け抜けていくその姿はまるで嵐の如く、彼は目的地を目指すのだ。

「む……………」

遊園地の中央地点にある噴水の縁石に腰掛けている白銀が不意に目を細めた。自身と魔力で繋がっている部下の交信がぷつりと切れたからだ。

「咲夜の霊圧が……………消えた？」

いや、これは咲夜であって咲夜のものではない。咲夜の肉体を借りて乗り移っていた者の霊が消え去ったのだろう。この遊園地にいる異形の怪物たちは白銀の魔力によって生み出されているものだが、咲夜と伊澄には特別に自身の魔力で生成した人格をそれぞれ定着させている。こうすることで彼女たちを操ることは勿論異常事態を察知した時には魔力が切れるなどしてこちらにその有無を知らせるように細工をしておいたのだ。

その魔力が消えたということは、

「やはりこの程度では倒されないか、善立 テル」

結界内でテルが暴れているのは確認済み、ならばこちらが放った刺客程度では彼を死に追いやることなどはできないだろう。

……………咲夜が解放されたとなれば、こちらの正体も奴に知られていることになるだろう。

今ここに居る男、白銀拓斗が未来の善立テルであるということ。己自身が過去の自分を殺そうとしていることを。その真実を知り、過去の己が何を想うのか見物であるが今はその余裕はあまりない。今の咲夜との交信が途絶えた事で、真実を知ったテルがこちらを血眼になつて探すはずだ。

——その時こそ、決着をつける。

懐から取り出したのは禍々しい紋様が走る黒い一本の棒。自身にとつても思い入れのある武器がここまで変貌を遂げたのはいつからだっただろうか。

———命が尽きるその日まで、君には永遠の呪いを授けよう……黒曜の祝福を。

そうだ。あの日だった。

世界の果てとも呼べる場所で、尽きることのない時、現世の理から隔絶された黄金の花畑が一面に覆われたその場所で、自身は永遠の呪いを受けた。それはどんな強力な霊媒師、巫女の力を持って解呪することができなかつた破滅の呪い。どこかのゲームのように呪いを受けたこの武器は自身から離れることなく今日この日まで共にあり続けた。

……この世界に来ることができたのは最後のチャンスだ。何もかも『なかつたこと』にして本来、『あるべき流れ』でこの世界は進まなければならない。

だがその本来あるはずの流れを自分が変えてしまった。自分の不都合なものはすべて捻じ曲げてその通りにしようとする我儘だった。それが招いた悲劇を彼は知っている。

「さあ来い、今日この場所で『善立 テル』は死ぬのだ。何もかも終わらせてやる」

空を見上げれば赤い月が。頬には寒いそよ風が吹いて、白銀拓斗を嗤っていた。

○

「ああ……早く首を斬らなくちゃ」

表の世界。遊園地の人気のない場所では今まさに悲劇のワン

シーンが生まれようとしていた。

鷲ノ宮伊澄が見据える先には大の字に倒れ伏した一人の少女、黒羽舞夜の姿。腹部に突き刺さった包丁を目線に納めた伊澄がゆっくりと倒れている黒羽に近づいていく。

……どこかの悪の帝王が言っていたように、『気絶しているフリ』をしているかもしれません。以前全力で相対した時も、私は倒した気でいたがために彼女を生きながらえさせるチャンスを与えてしまった。

悔やまれる己の甘さ。だが、今の伊澄にはその甘さはない。流石に首を切断されれば、理不尽な生命体でも死んではくれるだろう。

……いいことを思いつきました。この首を観覧車に乗せるというのはどうでしょう。

観覧車の客席に首がぽつんと置いてある、そんなグロテスクな光景を浮かべて、シユールだ、と笑みを浮かべた伊澄。とうとう黒羽に突き刺さっている包丁を引き抜き手にとって振り上げる。

狙うは憎き敵の首。力任せに振り下ろして、それでもだめならノコギリでも使うべきか、そんな事を考えていた時だった。

「あれ？　なんで――」

その時、伊澄の持っている包丁に違和感。それは少女の腹部に柄まで突き刺さったはずの包丁に『血が全くついていない』という事実。

「――おのれっ!!」

慌てて視線を黒羽へと戻した瞬間、薄らと開眼したその眼。黒羽の意識の覚醒に伊澄の対応が遅れてしまった。

……まだ生きてたか!

急造な動作で再び包丁を黒羽に目がけて振り下ろす。だが、『来ると分かっている攻撃』ただ黙ってやられる黒羽ではない。予想で

きる攻撃は簡単だ。 躲すことも、掴むことも出来る。

「むっ……」

「!?!」

だが黒羽が選択したのは掴むことでもなければ躲すことでもない。

伊澄の細い手首を掴み、覆いかぶさる勢いを利用して真後ろに投げ飛ばす事だった。

「ぎゃっ!!」

和服のままだったため空中での受け身や、地面への着地などできたものではない。 もろに背中を打ち付けて、ボールのように転がった。

「く……こんなっ!!」

だが投げ飛ばされた痛みよりも、伊澄は怒りによって立ち上がっていた。

「どうして私が生きているか、疑問のようで」

服についている土を払っている黒羽へ、当たり前だ、と言わんばかりに睨みを利かせると同時に包丁を構えてみせる。 だが、今度はそれに動じることなく黒羽は腕が自身の服を少しだけまくって見せる。

その隙間から一冊の本が地面へと落ちた。

「ナギちゃんから頂いたジャンプが、私を守ってくれたのです」

「……」

全くお笑いだ、と伊澄は肩をすくめる。 腹部にジャンプを仕込んでいる女など一体どこにいるのだろうか。 伊澄は無表情のまま、

「どこまで私を馬鹿にするのでしょうか」

怒気の籠った台詞に黒羽も無表情だ。

「馬鹿にしているのはあなたの方です。 私も三千院家のメイドがそう簡単に殺されると思ったら、大間違いです———そうですね」

静かに両腕を前に出すようにファイティングポーズをとった黒羽は続けて言い放つ。

「骨の二、三本は覚悟してもらいましょう」

その言い放った台詞には虚勢は全く持つて感じられなかった。相手を威圧して黙らせるブラフでも、逃げるために意識を逸らす口上ではない、純粹な破壊を目的とした殺意。

まるで相手を断絶するために研ぎ澄まされた刃物。伊澄は黒羽舞夜からそれを感じ取る。その殺意に一瞬だが吞まれかけている。恐れたというべきか、思わず自分の左足が一步下がっていたのを見たゆえに理解できること。

「殺さなきや」

もはや一刻の猶予も許されない。

「私が・・・テル様を守らなきや」

こんな危険な女がテルの傍にいることは許されない。許されて良い筈がない。

大丈夫、妖怪退治はお手のものだ。常日頃、己が繰り返してきたとするパターンの秘術をあの女にすべてぶちまければいい。冷酷無慈悲に、圧倒的力を持って。

・・・速攻ッ!!

伊澄は三枚の札を取り出して、黒羽舞夜に投げつけた。この札は妖怪など異形な者にしか効果が出ないが、今放った札には自身の霊力が練りこまれている。特別性のこの札は相手に張り付けば、自身の任意のタイミングで爆発できる、いわば起爆札のようなものだ。

妖怪はもちろん、生身の人間にも効果があり人間が食らえば骨折などまだ優しい、確実に四肢のどれかは吹き飛ぶ。

数秒後には札が黒羽の体のどこか、もしくはは地面に突き刺さり爆風で彼女を吹き飛ばせる、はずであった。

「たあっ!!」

風が吹いたかと思えば、それは剣閃。瞬く間に伊澄の放った札はすべて両断されている。まるで刃物で両断されたかのような状態

だ。否、それは比喩ではない。まさしく刃物、といってもその得物は日本刀などではなく、木刀なのだ。

「……まったく」

起爆のタイミングも失い、効力を失った札が地面へと落ちることに動揺することなく、むしろ立て続けに起こる無駄な変化に呆れを感じたかのような伊澄の溜息。

霊力を持った札を両断したその希有な木刀を自分は知っている。もちろんだとも、それは自分が与えた物だ。その与えた相手ですえも。

「伊澄さん！ これは一体どういうことッ!？」

白皇学院生徒会長こと、桂ヒナギク……その人物他ならない。

第125く筋肉式和解術く

喧騒の中、黒羽舞夜はただ一人だけ思考を巡らせていた。

「伊澄さん、これはいったいどういうことなのか説明してくれないかしら」

相對するのは白皇学院の生徒会長、剣道部部長の桂ヒナギクが木刀・正宗を構えている。目の前の伊澄もそれには不敵な笑みを維持したまま微動だにしない。

だがそんなことよりもだ。そんな殺気立った空間で黒羽は考える。自身を狙ってきた伊澄よりも、偶然現れたのかも分からないヒナギクの登場よりも、“自分自身の事”についてだ。

……恐らく、誰も気づいていないでしょうが。

黒羽の視線の先は自身の身を伊澄の凶器である包丁から守ってくれた一冊の穴の空いたジャンプが落ちている。だが、このジャンプを見て黒羽はあることに気付いた。

……包丁は雑誌を明らかに貫通していた。

そう、ジャンプの雑誌の厚さではカバーできないほどの長さを有していたのが伊澄が持っていた凶器の包丁だ。それを今日の前で持っている伊澄のを見てもその長さは雑誌程度の厚さだけでは守りきれないほどの長さなのは明らかである。ましてや、柄まで深く刺さったのが自身が倒れる瞬間に確認できたのだ。常人なら、間違なく死んでいる。

だが、蓋を開けてみれば黒羽は死ななかつた。それどころか腹部から出血は愚か、切り傷すらも存在していない。

感覚はあつた。自身の体内、肉と言う組織を鉄の異物が容赦なく斬り進んで侵入してくる感覚。気味の悪い冷たさがリアルでその感覚はいまだに忘れられない。

……多分、私は変なのでしょう。

冷静に分析して、その一言で済ませてしまったがおおよそは正解なのだろう。刺されても死なない人間など、“変”と言わずしてなんなのか。

……彼女が私をテルから遠ざける理由が分かった気がする。

以前の高尾山から彼女のテルに対しての反応はてっきり、ただの嫉妬なのではないかと思っていた。だが、自身に起きたこの現象を見て自分は、黒羽舞夜が常人には危険視される、そういう存在なのだ。

——ただ大切な者を守るために、伊澄も必死だったのだ。

……では私は……この身体は何なの。

記憶をたどり、探ろうとしてもそこは真つ暗な部屋の中。見渡しても灯りは見えず、自分の姿も見えない。ただただ空虚で自分では理解できない“黒羽舞夜”が現れて、自分を混乱させていく。謎だけが深まるばかり、得体の知れない不安が残った。

○

桂ヒナギクはこの状況でいくつか確認しなければならぬ事がある。木刀を構えていまだに斬りかからないのはその質問を伊澄にしてからでも遅くはないからだ。

「どうして彼女を……黒羽さんを襲うの？ 貴女、一体何をしようとしてるか分かってる？」

視線で牽制するヒナギクに対して、特に構えることなく脱力した伊

澄はいつもの無表情で、

「ええ」

そう答えた。続けて伊澄の周りに現れたのは光の球。すべてが伊澄の霊力が込められた球体であり、威力は先ほど投げつけた起爆札の倍である。

「生徒会長さん、この人はテル様の為に死ななきやいけない人なんです」

「どうして?」

「・・・」

そう問うヒナギクに一瞬だが伊澄の表情が曇る。忌々しそうに逸らしていた視線を黒羽へと戻す。

「この人が・・・テル様を不幸にしてみましたから」

「そっか」

妙に納得してしまったヒナギクである。もちろん、その理由で黒羽が死んでいいという納得ではなく。

「・・・やっぱテル君が原因かッ!!」

ある程度伊澄のテルに対する態度は察していて理解できていたのだが、彼女が黒羽に執着する理由はやはりあの男が原因なのだ。

「・・・最近テル君、黒羽さんと一緒に居ること多かったからかしら。」

軽い疎遠、というか嫉妬のオーバーロード。だが何もケアをしなかったテルにもかなり責任がある。まああの朴念仁は伊澄の好意については全く持って気づいていないためにそういう所に気が回らないのだろう。ダメな男だ。

「でもね伊澄さん。それは黒羽さんを傷つける理由にしてはダメよ」

「どうして？」

どうして、と聞かれてもと道理的な観点から説明するのは今のヒナギクには難しい。いつもの伊澄なら常識的に考えてこの自身の行動を否定できるが、今は頭のネジが外れてしまっている。

……嫉妬心で私が歩を傷つけたりする、そんな事になったらどうなるか。

もしそうになったら、友達としても付き合いはできなくなるだろう。だがそれよりも確実に言えることがあるのが。

「……ハヤテくんが傷つく、かぁ」

「え？」

こちらの小声に反応した伊澄がそんな声を出すと、ヒナギクは目の前で攻撃態勢に入っている伊澄を見据える。

「ねえ伊澄さん、もし黒羽さんが死んでしまったら、一番傷つくのはテルくんなのよ」

「なぜですか？ この人が居なくなれば、テル様は幸せになれるのに」

恐ろしいことを言う。これが光の巫女の言うことか。

「テルくんにとって黒羽さんは主よ。 主の死は使用人にとっては悲しいことよ……ましてや傷つけた相手が貴女だって知ったらテル君は——」

この言葉を言うか、言うまいか。 と、ヒナギクの中で二つの選択肢が迫る。勢いで言おうとしたらダメだ。この言葉は確実に伊澄をバーサクモードへと変化させるかもしれない禁句なのだ。慎重に言葉を選ばなければならない。

そう思っていた時だった。

「テルは貴女を嫌いになりますよ」

思わずヒナギクに振り返った先、その言葉を発していたのはヒナギクではなく、黒羽だった。

一瞬で、場の空気が凍りついた気がしたヒナギクだった。今の伊澄に対して火に油を注ぐような言葉を、黒羽が発したのだから。

「え、ええ?」

目の前の伊澄が無機質な顔でそんな声を漏らしていた。ちよつと混乱しているらしいが、黒羽はまだ続ける。

「ええ、失望しますよ確実に。あの朴念仁でロクデナシボーイは今まで信頼してきた貴女が犯人・・・火サスばりの断崖絶壁で薄ら笑いを浮かべながら正体を明かす貴女の姿が容易に想像できます」

「ちよつ! ストップ! スト——ツツプ!!」

慌ててヒナギクが止めに入ったが黒羽は不満そうに顔をしかめる。

「何を止めるのですヒナギクさん。敵は戦意喪失気味です。相手の精神を攻撃するのはスポーツ、カードゲームの世界では常識なのです。ほら、伊澄さんを見てください。今にもポツキのような儂い音と共に心が折れそうです」

「あああああ——ツツ!!」

突然の大声に二人が反応したその先には、両手で頭を抱える伊澄の姿がそこにあった。

「私が嫌われるの? テル様に? いや、いやよ・・・絶対いや・・・イヤイヤイヤイヤイヤ」

「作戦成功です」

グツジョブと言わんばかりに親指を立てる黒羽。この女は鬼か、と思つたヒナギクである。

「戦意喪失させるどころか、発狂させちゃったわよ。これ無事に事が済んだあと後遺症とか残らないか不安なレベルだわ」

「そこらへんはテルに丸ごとポイするのでご安心を」

彼なら上手くやってくれるはずです、と頷く黒羽だがヒナギクは逆

にそっちの方が危険なのは、と思っていた。

「でもまだ安心できないわ。伊澄さんが立ち上がったわよ」

殺気を感じた二人の視線の先には立ち上がり、怒りの涙を流しながら光の球を今にも放とうとする伊澄の姿があった。

「消えてなくなれッ！ 何もかもッ!!」

「伊澄さんッ！ 落ち着いてッ!!」

「テル様なら私を受け入れてくれるはずッ！ だからみんな消えてくださいッ！」

まずい、完全にヤンデレを超越した何かになった。とヒナギクはこの状況で唾を飲む。

「正宗でもやれるかどうか・・・」

思わず握った木刀を見るが、伊澄と戦うのは初めてだ。力量も不思議。パワーを使える伊澄の方が上と言ってもいいだろう。この時こそ、ハヤテがいれば戦闘は楽になるのだが。

「まったく、ハヤテくんはどこに行ったのやら」

その場に居ない人物を口にしてもやって来ることもないので、愚痴を零してから改めてヒナギクは伊澄と向き合う。せめぎ合う霊力と剣圧が火花を散らしていた。

「ヒナギクさん」

「どうしたの黒羽さん。危ないから貴女は下がってなきや・・・」
前方から目線を逸らすことなくヒナギクは指示を出すすが、黒羽は二人の発する威圧感に動じることなくその言葉を放つ。

「私にいい考えがあります」

「いい考え？」

「はい、私は幽霊とかオカルトとかそういった類の事はあまり信じていませんでした……ですが目の前の伊澄さんを見て、そういった非現実的な物を信用せざるを得ません。それを踏まえて言いますが、伊澄さんは操られているのでは？」

「……………」

適応力の速さに驚いているヒナギクだった。常人なれば、この殺されかけている状況で冷静な考察などできる訳がない筈である。自身も一度幽霊やらゾンビと戦ったことがあるからこそ冷静にできるのであって、前例なしで立ち会ったら間違いないくパニックになるだろう。

「どうしてそう思うの？」

「なんでって……あの頭の上見れば」

と、黒羽が指す先を見てヒナギクは目を数度見開いた。いつの間にか伊澄の頭上には何か人の形をした何かが浮いているのだ。しかも一つではない。

『まことくんまことくんまことくんまことくん…………』

『ゆつきーゆつきーゆつきーゆつきー』

『さとしくんさとしくんさとしくんさとしくん…………』

『カイくんカイくんカイくんカイくん…………』

『柱間ア…………』

なんかどこかで聞いたことある台詞を放つキャラたちが伊澄の頭上で一人を除いて陰鬱眩いていた。

「あ、あれは…………!!」

「知っているのですかヒナギクさん？」

「あれは数々の修羅場を生み出し、視聴者にヤンデレの称号与えられ

てきたヒロインたちッ!!」

「一人オッサンが混じってる気がするんですが」

病んでいないことにならないだろうが如何せん、明らかにヒロインの枠から外れてる人もいることにヒナギクは疑問を持たないらしい。恐らく、生徒会長として突っ込んだら負けなのだろう。

「私の予想が正しければ、あのヤンデレキャラ達の怨霊によって伊澄さんの日頃のストレスが爆発してしまってあのバーサク状態に」

「物凄い超速理解に助かります。では、どう解決すれば良いかほとんどお分かりになってる事でしょう」

首を小さく振って、ヒナギクは頷いた。

「あのヒロインたちをどうにかすれば・・・」

妖怪や幽霊の類は成仏、除霊で片が付くものだ。だが相手はあの伊澄であるということ忘れてはならない。

「大人しくして伊澄さん!!」

正宗を居合斬りの要領で構えて踏み込みから加速。一気に間合いを詰めて伊澄の頭上にいる怨霊たちへ狙いを定める。最速最大の一撃が確実に怨霊たちに放たれるはずだった。

「——ッ!!」

しかし、伊澄がそれを阻む。荒れ狂うような勢いで光の球がヒナギク目がけて乱射された。当たればただでは済まない靈力を秘めた光弾だ。その危険性を踏まえて迫りくる光弾を斬り捨てて一度後ろへ下がる。

「…………厄介ね」

今更ながらヒナギクは、伊澄の実力を思い知ることになった。これまで妖怪退治などでは心強い味方が敵になるということがこれほど手ごわい敵になるとは。

「ヒナギクさん、まだ話は終わってはいません」

「え？」

長引く戦いを予想して気を引き締めようとした時、後ろの黒羽の言葉が聞こえた。

「いい手があると云ったでしょう」

「……」

表情に起伏が無いから気づかなかったがこの時の黒羽の台詞はどこかテルの影響を受けているのだと感じた。

「ああ……ダメよ黒羽さん、簡単にあの馬鹿執事に毒されちゃ」
思わず目の前で攻撃態勢に入っている伊澄に背を向けて黒羽の肩を掴んだヒナギクだった。

「何を言ってるのか分かりませんが……ここから先、私が伊澄さんの隙を作りますので、そこを狙ってくださいませんか？」

なかなか危険なことを言う。それを許すほどヒナギクは愚かではない。

「ダメよ。そんなの私が許すと思う？」

「……元はと言えば、私が原因。ケジメくらいは私に着けさせてください」

「な、なんか漢らしいセリフね。本当に大丈夫なの？」

心配そうに言うヒナギクだが黒羽は声のトーンを落とすことなく、頷いて見せる。

「絶対安全。ええ、石橋を叩いて渡るくらい心配するだけ無駄なことです」

「えええ……」

自信満々に言うからにはそれほどの策があるのだろうと、ヒナギクは考察するがそれでも不安は拭い切れない。

だからヒナギクは保険を掛けることにした。

「合図だけ出して。あと、危険だと思ったら私が問答無用で乱入す

るから……OK？」

「OK」

どこかの洋風映画の男のような返しにヒナギクはため息をついてその提案に了承することにした。

だが、ここで引き留めなかったことが後にヒナギクを後悔させる原因となる。

○

最初に仕掛けたのは作戦を提案した黒羽だった。眼前の伊澄は靈力を光弾へと変化させてこちらにいつでも攻撃できる状態だ。

その猛獣の支配するエリアに堂々と無防備で黒羽は足を踏み入れ、伊澄の前へと出た。

「ほう——」

「黒羽さん！ 危険すぎわ!!」

小さく伊澄が笑い、黒羽の後ろではヒナギクが待機している。

「自ら殺され手に来たのですか？」

恐怖で頭がおかしくなったのか、と伊澄が言う。黒羽は肩を竦めた。

「御冗談を。 やられっ放しは私の望むところではありません。

しっかりとやり返さなくては」

ガラにもなく肩を回す黒羽はヒナギクの注意も聞かずに前進。

「倍返しです」

次第に伊澄との距離を縮めていく。正気か、と敵である伊澄もそう感じた。

「ならば、消し炭一つ残らせないで葬って——」

向かってくるのは格好的。この距離で外すことはまずない。

既にヒナギクの救援が駆けつけられる最低距離を既にオーバーして

いる。

ならば、確実に殺れる。そう確信した時だった。

「そんなちやちな力を使って私を殺すことが……そんなに楽しいのですか」

「……いま、なんと？」

放ちかけた光弾の操作を止めさせるほどの唐突な言葉に伊澄が目を細める。

「まるで自分より小さな虫を捻りつぶして王様気分を味わう子供のようです。今の貴女は」

「ツツツ!!」

胸を刺す彼女の言葉に、伊澄の思考が乱れる。だがこれは挑発だ。こちらを油断させる敵の策なのだ。乗ってはいけない、それは分かっているはずだ。

「来てみなさい、伊澄さん。楽に殺しちやつまらないでしょう」

「はは、ご冗談を。そんな安い挑発に……」

対して効果など無いように、こちらは冷静に手を軽く振って黒羽の言葉に耳など貸さない。そう装ったつもりだ。

「ジャンプだつて無くなった。貴女でも勝てる」

「ツツツ!!」

直後、伊澄に電流が走る。そうだ、今の黒羽には窮地を救った守護神、ジャンプというのは存在しないのだ。

「包丁を突きたてて……もがき苦しむ私の姿を見たくはないのか」
あの白い肌を貫通して、泣き叫びながら息絶えていく黒羽の姿を想像する。それだけ全身の血が沸騰しそうなくらいに、伊澄は興奮した。

「来いよ伊澄……怖いのか」

「貴女を……殺してやる!!」

一歩踏み出して、お互いに距離を縮めていく。この虫けらのような命、自身の力を使うまでもない。

「そうだ……来いよ伊澄、霊力なんて捨てて……掛かって来

い！」

「へへっ……そうだ、そうよ。 貴女なんか怖くない……貴女なんか怖くないッ!!」

言語能力を失わせて狂気に走るその姿はまさしく修羅。包丁を再び構えた時には周囲を守るように回っていた光の球は消え去つていった。

「野郎ぶっころしてやらああああ!!」

まるでどこかの洋風映画のむさいオッサンたちのラストバトルを見るようだつたと、後にヒナギクは記憶している。それを自然な流れと勘違いするくらいにその時のヒナギクは思考が麻痺していたのだろう。

「ッ!! しまった——ッ!!」

危うく流れに飲まれてかけて、正常な思考にヒナギクは戻る。だが気づいた時には、伊澄と黒羽の距離は一メートル弱。もちろん伊澄は包丁を平突きで突っ込んできているし、黒羽に関しては避ける素振りも見せない。

——ケジメくらい着けさせてください。

「まさか黒羽さんッ!!」

一瞬、脳裏で数分前のやり取りを思い出す。あの後から、黒羽の行動は伊澄を挑発して黒羽に直接攻撃させるように仕向けていた。その理解不能な行動を今ヒナギクは理解してしまった。

「相討ち狙いッ!?!」

やりかねない。冷静に対処してしまう彼女だからこそ、命が失われるのであっても平気で差し出しかねない。配慮が足りなかった、とヒナギクは思う。彼女の考えを捻じ曲げてでも、ヒナギク自身が前に出

なければならなかった。

「お願いッ 間に合って!!」

自身の使命を桂ヒナギクは思い出す。生徒会長だ。学園の生徒会長、つまり生徒の安全は守らなければならない。教師がすべきことだが自身の直感では現職の教師たち以上の正義感を帯びているのだ。だから、目の前で危険な目に逢っている生徒を見過ごす事などヒナギクには耐えられない。

「——ッッ!!」

場に滞在する空気を切り裂くようにヒナギクが加速した時、彼女は黒羽の右手から見えた带状の何かをその目に捉えた。

……あれは伊澄さんの札!?

梵字がしっかりと刻まれているその札は何枚もの札を縁結びのように結んで長い帯のようになっていた。それを黒羽はボクサーの拳を固めるボックスづくりの要領で巻きつけていたのだ。

確かに、使われた後の札でも除霊本来の能力を持っているならば、伊澄の悪霊を倒すことはできるかもしれない。その可能性はある。むしろ、かなり高い確率で成功するだろう。

「ダメよ黒羽さんッ!!」

だがヒナギクは思い出す。過去に伊澄の札をそう使い、ロクな目に遭っていなかったテルの事を。テルが札関連で戦闘をしたときは次の日は必ず死にそうな顔をしているのだ。ゴキブリ並の生命力を持つテルなら疲労程度で済むかもしれない。

しかし使用するの是一般人の黒羽だ。何が起きるか分かったものではない。その行為への危険性を叫んだヒナギクだったが、止められなかった。

次の瞬間、雷が弾けたような轟音と光と共にヒナギクの視界は奪われた。

○

——同時刻。

「……これは」

場所はテルたちが閉じ込められている結界内。白銀が立ち止まって自身の身に起きた違和感を口にする。

「伊澄の霊圧が……消えた？」

第126話 後始末を任されたのは伊澄

鷲ノ宮伊澄は揺さぶられたかのような小さな衝撃に薄目を開けていた。

「——!! ——!!」

音が聞こえる。それは人の声だ。頭の中は激しい耳鳴りによつてその人物の声が入り込んで入ってない。目の前の人物の姿を確認すべく、その重たい眼を開くと。

「伊澄さん、大丈夫?」

「せ、生徒会長さん……あう!!」

目の前にヒナギクの顔に驚いて、顔を上げた時に後頭部に固い何かがあつた。慌てて背を見て、自分が壁を背にして座っていたのを知る。勢い余つて壁に頭を打ち付けたのだ。

「……あ」

頭を打つたのと同時に痛みを感じながら伊澄は思い出していた。確か自分は自分の家で咲夜とともに居て、遊んでいた。そこへ白銀拓斗がやって来た。

——自身が未来から来た善立 テルだという事を言い放つて。

「いったい何が……」

自身の身に起こった事を探ろうとそれ以降の事を思い出そうにも、そこから先はぼやけていて全く思い出せず、歯がゆい気持ちから頭を押さえる。

「伊澄さん……悪霊に憑りつかれていたのよ。黒羽さんを襲い始めて、私も巻き込まれたのだけどもう大丈夫よ。悪霊は退治したから……」

「悪霊……?」

説明してくれるヒナギクの言葉を聞き、口を開いていた自身の頬に違和感を感じた。その部分だけ何故か熱を持っていた。軽くは

たかれたかのように腫れ上がっている。

だがその痛みよりも自分のもう一つの違和感に気付いていた。

「どうしたの？」

ヒナギクがその自分の様子を見て不審に思っただけ聞いていた。思わず目を伏せがちになったが伊澄は思いのまま口にした。

「なぜだか、頭の中でもややもやしていた物がなくなったっていうか……スッキリしたっていうか……なぜでしょう」

ああー、と遠い景色を見るようにヒナギクは語った。

「ヤンデレの悪霊を追い払ったと同時に伊澄さんの溜まっていたストレスも追い払えたのかもしれないわね……」

「さすが生徒会長さん……ありがとうございます」

光の巫女が悪霊に憑りつかれてしまうなど大失態だ、と自分の弱い心を戒める。周りには数々の地面やら壁を抉った後があることから相当自分は力を使用したに違いない。その危険な自分を救ってくれたヒナギクに伊澄は感謝の言葉を贈った。

「……お礼はあの娘に言ってあげた方がいいわよ」

「えっ？」

と、ヒナギクは視線をちよつとだけ逸らしそれにつられるように自分もその先を追うと、そこには少女が向かってきていた。それを見て、落ち着いていたバイタルの数値が一気に跳ね上がるのを感じる。「ヒナギクさん、そこら辺の自販機でブラックコーヒーキャプチャーしてきました。水分補給にどうぞ」

「黒羽さん、普通に水でいいから」

左手の缶コーヒーを受け取ったヒナギクがこちらにそれを渡してくる。それを受け取って、起きている状況を理解できぬままその缶コーヒーがホットであったのでその温かさを感じていた。

「え……と」

何を話したら良いか分からない、宿敵の筈だ。黒羽が記憶を失っている今では向こうは何も知らないのだが、こちらは忘れてはいない。彼女がテルにしたことを考えた途端、自分の中で黒い何かが湧きあがってくるのを感じた。

「伊澄さん、そんな睨んじゃ……」

こちらの目つきが相当マズイものになっていたのだろう、ヒナギクが慌てて視線を向ける。

「……私が嫌われていても仕方のないことです。ヒナギクさん」

目を閉じて、黒羽はそう言う。彼女が続けてこちらを見る。

「この人は、テルを守るために」そうした。操られていても、その想いは同じです。そして私は、その対象となる危険な存在であることを理解しているつもりです」

その言葉に驚いたヒナギクが身を固くしたのを伊澄は見る。焦りを感じてる者の顔であった。

「そんなこと、ないわよ……」

「ならヒナギクさん、私の事を……知っている事があるなら、全て話してください」

「それは……」

言葉を失ったヒナギクを見て黒羽は“やっぱり”という顔で息を吐く。ヒナギクが口を止めたのは黒羽が敵であった時の出来事は一切話さないようにとテルから釘を押されていたからだということ。伊澄は知っている。

「答えられないでしょう……ですが、いいのです。知らない方が良いこともあるでしょうから」

無表情を装っていても、どこか悲しい雰囲気を纏っている黒羽にヒナギクは何も言えなかった。納得してしまっている彼女を見たら、尚更だ。

記憶を思い出しているようには思えない。思い出したらもつと

別のアクションが起きる筈だ。それもなく、ただ冷静に語る黒羽を見て、伊澄は考察する。彼女は、自分には得体の知れない何かがあることを察してしまったのだろう。

「……ッ!! 黒羽さん、その手ツツ!!」

ヒナギクの悲鳴のような声に、伊澄が彼女の手を見る。今までは表情しか見ていなかったが今見ると、黒羽の手から赤い滴が地面へと垂れていた。

「……何も、ないです」

「なにが」何も」よ!! ちよつと見せなさい!!」

慌てて後ろに隠した右手をヒナギクが掴んだ瞬間だ。黒羽の顔

が歪む。明らかに「痛み」に対しての反応。

「!!」

晒されたその手を目にしたヒナギクは絶句した。やがて息を呑んで怒りに似た様に肩を震わせ、

「何もくないじゃないツツ」

真っ赤な血で染まっている黒羽の手にヒナギクは叫んだ。

○

黒羽舞夜はもう隠し通すことはできないこの怪我をいまだにどうやってギャグでカモフラージュするかという思考を巡らせていた。

「……さてどうしたものか。」

正直、半分ノリでやってしまった作戦だけに、リスクのことなどは全く考えていなかった。まさか伊澄を殴った後、その衝撃でこちらの腕が傷を負ってしまうとは。

ざっくり言ってしまうえば、右手の傷は裂傷だ。伊澄を頬に全力

グーパンした瞬間、右手に強烈な衝撃を感じた。札の秘められたパワーに右手が耐えきれなくて弾けたのだろうか、と推測する。

「実は私、未来から来たターミネーターです。この手、実は人工皮膚で出来ていて皮を剥ぐと金属の骨組みが出てきます」

と、血が溢れている皮膚の割れ目に手をかけてみるとヒナギクが慌てて飛んできた。

「ギャ———!! やめて———!! 痛いコトしないでエ———!!」

自分が別にやられるわけではないのだから、と思った黒羽だがヒナギクは優しい。多分、自分よりも他人が痛い思いをする事が耐えられないのだろう。歩いているだけでもかなり辛い状況だ。

「まったく、冗談が通じない相手で困ります」

「びよ、病院！ レッツゴーホスピタルツ！ 急患よ！ ああ黒羽さん、葱を首に巻かないと!!」

「葱を首に巻くのは風邪をひいた時くらいです。落ち着きましたよ、ヒナギクさん」

慌てふためいている生徒会長ヒナギクの姿はなかなか見られないレアなものだから写真か動画に収めたいがこの手ではどうしようもない。正直、腕を動かすのも億劫になるくらいだ。歩いているときの空気抵抗を感じるだけでも激痛だ。

「やっぱ生身で伊澄さんの札を使うのは無理があったのよ！ そこはやっぱ身体を張るテルくんじゃなきゃ!」

本当にどうしたもののか、と黒羽が悩んだ時だった。

「あ、ああ……」

小さく呻く声が聞こえ、視線を移すとそこには涙目の伊澄の姿があった。

○

ある程度、この冷静な状態の頭で察しはついた。ヒナギクと黒羽の会話のやり取りの少ない状況や、自身が置かれていた状況からしてそれは可能だ。

だが、あまりにも痛烈な真実だから、自身は受け入れがたい。

……私が操られて、二人を襲って、あの人が……私を止めるためにあんな怪我を。

鷲ノ宮の退魔の札を使用したのを知って、背筋が凍る。普段の妖怪退治でも使用しているがその威力は遠くから札を投げている自分でさえも取扱いに気を付けなければと思わされる威力だ。

それをテルのように武器に付着させて殴るならともかく、彼女は生身の手で行ったのだ。武器を媒介にすることで術者へかかる負担を和らげるのだが、その媒介手段もなければそのリスクは全て黒羽の身体に集中する。危険じゃないはずがない。頬の痛みの理由を理解して、また伊澄は言葉を失った。

……どうして、どうして私なんかを。

助けたのか。その疑念が頭を過る。

高尾山から、黒羽に自分はキツイ当たり方をしてきてしまっていた。彼女を人とすら見ず、テルを傷つけた化け物、妖怪と同じ類の存在だと決めていた。こちらとしては逆に恨まれても仕方がない筈だ。助けられる動議など無い、筈なのに。

彼女は、黒羽舞夜は右手を犠牲にしてまで自分を元に戻してくれただ。もし助けた後だとしても、また自分がこれまでのようにキツイ接し方をするかもしれないというのになだ。

「……ごめん、な、さい」

やっと口にした言葉がそれだ。もつと他に言う言葉があるはずだと分かっているのに、それしか口にすることができない。

術式八葉は誰かを守るための力にすると過去の反省から自分は学んで今日を生きてきた。自分勝手な力の振る舞いは、自分の大切な人でさえも本人の意思に関係なく傷つけてしまうからだ。

だが、自分はまた同じ過ちを繰り返してしまった。悔しさと後悔に伊澄は涙を流す。

「ごめんなさい……」

本当にそれしか言えない。目を覆って、思う。自分は最低な人間だと。光の巫女の資格など、人を守る資格など無いのだと。

暫くして、重苦しい雰囲気が続く中目を伏せていた自分のもとに歩み寄る足音が聞こえる。数歩ほど歩いたと思うと、伊澄の頭に手が乗つけられた。

「伊澄さん」

その声を聴いて、ヒナギクではなく黒羽であることを確信した時、自身の身体がビクツ、と跳ねる。今までの仕打ちを考えて、無事に済むとは考えられない。

殴られても、文句は言えない。罵声を浴びせられても受け入れるしかない。そう思っていた。

「大丈夫」

優しい声が聞こえた。

「私は……大丈夫だから」

安心させてくれるような声に、一瞬だけ心が軽くなるのを感じるが自責の念がすぐにこちらの感情を支配する。

だが、その支配から守るかのようには、黒羽はこちらの頭を撫で始めた。

「全てはテルを、貴女が大切な人を守ろうとして行ってきた事。そ

の想いは間違っていないはずです」
撫でるのを続けて、彼女は言う。

「痛みがあった筈です。失うということに……私も、貴女やテルたちのお蔭でそれを知ることが出来ました。それに、私もお返しとばかりに貴女をぶん殴りました。お相子ですよ」

「許してくれるのですか……?」

「許すも何も……」

顔を上げて見た黒羽の顔はいつものように静かで凜としていた。そのままの状態を維持したまま彼女は言う。

「悪いのは全てテルです」
「……」

唐突なその言葉に伊澄は硬直した。

「こんな可愛い子を悩ませる原因を作った諸悪の根源はあの男です。まったく、とんでもないクソ野郎ですね。橋の上に呼び出して突き落としたくらい気分ですよ」

隣でこちらの光景を見ていたヒナギクも目を点にしている。真顔の黒羽には冗談を言っているようには見えない。

「どうでしょうヒナギクさん、伊澄さん。女子たちで社会的にテルを抹殺する会でも作りませんか。ゆっくりと彼の精神をいたぶって、ヒロインズの重要性を理解させてやるのです。そうですね、手始めに下駄箱と机の中に粗大ごみを詰め込んで、トイレ中は上から冷水、お弁当箱にはカエルを乗っけてやって、机と椅子を教室の窓から投げ捨てて“おヌシの席ねーから”と言い放ってやりましょう……これがレベル」

「マックスッ！ 初回からレベルマックスのハードさですけど黒羽さん!!」

ヒナギクが見事なツツコミを披露してくれている。

「ですが、テル様を貶めようならこの私が……」

「そうです、その意気です。そのくらい頑固な方が貴女らしい」

煽っているのか、元気づけているのか分からないが先ほどよりも気持ち的には大分マシになった気分だ。

「余計なお世話です・・・手を」

「・・・？」

言われるがままに差し出してきた黒羽の右手を痛めないように慎重にとると青白い光がその手に降り注いでいく。伊澄の霊力を使用した治療術だ。

「・・・ホイミ？」

首を傾げる黒羽。自分の手の傷がみるみる塞がっていくのをみれば、驚くのは無理はないだろう。こっちとしてはホイミよりも、ベホマクラスの回復呪文だと思うが。

すると目上の黒羽が一息ついて、こちらに対して小声で言った。

「・・・私が”私で無くなった時”は、どうぞ私を殺してください」

その一言に、耳を疑った。

「その時はテルの指示も聞かず、貴女の判断で。今日のように、直接包丁でぶつさしてきても構いません」

「・・・え、私そんな事をしてたの。」

突然の事実横からぶん殴られたかのような衝撃を感じる。

よもや、そんな蛮行を彼女に対して行っていたとは。今更だが罪の意識が増した。

「ですが、その間にも・・・出来ればこれまでの事などは考えず、貴女と・・・伊澄さんの事を知れば、と」

少し途切れ途切れになるも言い終えたその言葉に考える。若干気恥ずかしさを感じた気がしたが、

「・・・お知り合い、またはお友達になろうという事でしようか。」

呆れた、というのが率直な感想だった。自分を殺そうとした相手を許した挙句、何故に友達になろうなどと言うだろうか。しかもその条件を呑んで友達になった上で問題が起きたら始末を頼むと来た

もんだ。

……ナギの漫画の展開で言うならば、闇落ちした敵を倒すのは真の友と呼べるべき相手。

要は“アイツを倒すのはこの俺”、というどこぞの超惑星の王子のツンデレ的台詞だが。そこまでこちらを信用するのはなぜだろうか。

「なぜ、私にその役を？ 信用に値する人物でしょうか」

思った事をそのまま口にした。すると黒羽は、

「値します」

言い切った。

「テルが信頼している貴女なら」

それだけで信じてしまうのもまた変な話だ。目の前の相手が憎き宿敵ならば、周りのことなど目も暮れない行動へと走る。それは今回の事で分かったはずだ。

「勝手ですよ」

しかし、目線の先。黒羽の顔は覚悟を決めている顔だ。多分、自分やヒナギクがどう言っても考えを曲げる人ではないだろう。頑固な人だ。

「任せてください。その時は——ちゃんと役目を果たしますから」

「ありがとうございます」

本当に感謝を表すように頭を下げた彼女の決意に揺るぎは無いらしい。

……彼女の事を、ちゃんと知らなくては。

心の内を、自分がしっかりと理解しなくてはならない。思い込みだけでの理解では、黒羽舞夜の良い部分はまったく曇って見えなくなる

からだ。だが、出来るのだろうか、と同時に自問自答する。

……多分これからもこの人はテル様と。

一緒に居るのだろう。主と、それに仕える主として、世話係として。いつまでかは分からない。当然、永遠というそんな物は無い筈だ。だが、テルが高校に在学中はその主従関係は続く。

その光景を見て、また嫌な気持ちが湧くのを自分は抑えられるのだろうか。

第127話 集まる人々

黒羽と伊澄の修羅場が終了していた同時刻。テルは鉄パイプを怪物達相手に振るっていた。前に現れた怪物達を薙ぎ払っては進み戦闘、撃破進軍、戦闘、この繰り返しである。ハッキリ言って、先ほどからエンカウント率がハードレベルだ。

「ふんッ!!」

最後の一体であろうか、その敵を斬り伏せたところで辺りを見渡したところ存在している敵はいなかったのを確認してテルは安堵の息を吐く。

「……………やってられねえぜ。このままじゃ先にこっちがダウンしちまうよ。」

正直、このまま殴りながらの進行となるとこちらの体力が持たない所だ。早く目的の男の場所へと辿り着かなければならない。

小さな風が吹いたのを感じた。戦闘続きで汗が滲んでいた額に当てられて、ちようどヒヤリとした感覚が癒しにも似た感覚をテルへと与える。

「やっぱりこっちで合ってたんだな」

風が吹く先の方向から滲み出す気配が、テルにそう告げる。未来のテルはこの先に居るのだと。この風も、テルを目的地まで誘うかのように体を吸い込むかのようなのである。

「……………むむっ!」

休む間もなく、その先へ進もうとした時だ。背後で感じる気配がその足を止めさせた。先ほどの生き残りが居たのか、新しくやってきた怪物の可能性を考え、テルは鉄パイプを握り、タイミングを計った。

狙うは頭。足音の大ききさでどれくらいの距離が相手にいるのか、テルには感覚で分かる。それはまったくズレたことはない。

自分の特技でもあったが、師匠である神崎百合子は“ビツクリが効かない相手だからツマらないわね”とあまり褒めてはくれなかった。

・・・あれ、でもなんかこの足音。

変だ、とテルは思う。　迫りくる足音に違和感を感じたのだ。　重量感を持った生物の足音とは遠い、何か。　例えるなら日曜日のサザエさんでタラちゃんを見ていると嫌でも聞こえてくるあの耳に残る足音のようだ。

だが関係ない。　必殺あるのみ、目的必殺、サーチ&デストロイ。　油断を装って、脱力した直立姿勢から最速の一撃を見舞うべく一気に反転。　怪物の頭部にその鉄パイプが炸裂する、

『ヤー—————ツツ!!』

筈だった。

「んあ?」

振り下ろしかけていた鉄パイプを止めたのは、的が圧倒的に小さすぎて、尚且つそれが知っている物体だったからだ。

『ヤヤヤヤヤ————ツ!!』

「え、チビハネお前何してんの?」

眼下に現れたのはねんどろいどサイズの人形のような物体、黒羽の小さな分身ことチビハネだ。　涙目で震えている所をみると攻撃される事にかなり恐怖を感じてしまっていたらしい。

ひよい、とつまみ上げた。　相変わらず軽い、だがしかし、

『ヤァァァァアツツ!!』

「ギヤァァァァ!!　噛むなツ!!　鼻を噛むなアツツ!!」

このチビハネ、見た目によらず凶暴である。　“ヤー”としか発することが出来ないが、ふざけんなよ、という意味だろうか万力並みの力で鼻を噛みつかれた。

力任せに引き剥がして、チビハネはいまだに怒り露わに唸っている。涙目を浮かべながら話を聞くことにする。

「んで？　なんで家でお留守番中のお前がこんな所にいるんだア？　まあマスターである黒羽を追ってきたのかもしれないねえが」

と、チビハネは地面に降り立つと両手を上げて叫ぶ。

『やーっ!!』

どうやら正解らしい。　ナイスコミュニケーション。

「どうやってここに？」

その問いに、チビハネは少し頭を抱える。　困り顔は意外に可愛い。

『やー!!』

すると今度は手を使って円を描いて見せた。　その動作の後、描いた円を駆け抜けて、辺りを見渡して変顔、その状態で歩き回って、今度は走り出して、テルを指差した。

「えーつと……」

動作だけで意味を探らなければならぬこの光景はもはや言葉を通わすことが出来ないチビハネとテルの間では必要不可欠だ。　最初はどこぞの四八（仮）並みのムリゲーだ、と鬱になりかけていたテルだった。　今は違う。　その成果を見せつける時が来た。

「穴を通り抜けたら、知らない場所に来たので、うろついてたら、寄生獣モドキに遭遇。　逃げ回ってたら俺を見つけた」―――これでどうだ！」

『……ッッ!!』

まるで神を見たかのような表情だった。　目を輝かせてチビハネは歓喜の雄たけびと共に飛び上がる。

「やったぜ」

パーフェクトコミュニケーション。　地獄のような試練を乗り切ってきた甲斐があったというものだ。

「お前も来るか？　これから未来のオレに会いに行くんだ」

『……』

その時のチビハネの表情は凄いいものだった。まるで“え？お前何言っちゃってんの？”かのような確実にこちらの心を抉る顔である。

……仕方がない。全く持って事情を知らないのだから、仕方ない。重要だから二回言う訳だけど。やばっ、オレ、泣きそう。これでは自分が痛い事言ってるみたいではないかと軽く自己嫌悪に陥りそうだ。

「そーいえばお前、追われてたって言ってたけど、そいつらってちゃんと撒いたのか？」

『や』

まるで、“あっ……”と言わんばかりの詰まったかのような声にテルも思わず、

「あっ……」

分かっていても、出てしまった言葉だ。察つてすぐ、テルの視線がチビハネの来たであろう道へと移される。

『グルルル……』

先ほどテルが薙ぎ倒してきた数の倍はあるであろう怪物達の群れが牙を光らせていた。テルとチビハネは無言を維持した後、軽やかに反転して、

「キエエエエエエエエエツツ!!」

『ヤア————ツツ!』

意味合い的には多分同じことを言っているだろう、二人？は奇声を上げながら走り出した。

「ふむふむ、なるほどなるほど。つまり白銀拓斗さんは未来からやって来たテルなのですね」

「えーっと、まずどこから突っ込めば良いのやら。今私、リアルな世界に居るのよね？間違ってもバックトゥザフューチャーの世界になんて居ないわよね？」

現状確認。伊澄は自身が囚われ、洗脳されるまでの経緯をヒナギクたちに打ち明けることとなった。もちろん、黒羽はともかく、ヒナギクは半信半疑だ。いまから信じろというのが無理というものである。

「まあまずそのまえに……ハヤテくん？」

「はい」

ヒナギクは地面を見ると、そこに居たのは土下座しているハヤテがいた。ヒナギクは正宗を構えて直立不動のまま歪んだ笑みを浮かべる。

「さて、どこに行ってたのかしら。この非常事態の中」

「くっ……!! 危険な状況を感じ取った僕は助けになれればと、武器を探しに向かっていました!!」

「遅いわよ!! 黒羽さんとか怪我しちやってるのよ! もう事後よ事後!!」

ハヤテに対しての怒号はいつみても凄まじい。伊澄と黒羽はそう思った。

「まあまあヒナギクさん。私の手も、もう治りましたし……結果オーライですよ」

「……」

と、黒羽は先ほどまで血を流していた手をヒナギクの前に翳す。

伊澄の治療により殆どの傷は塞がっていたのだ。主人公ながらこの体たらくを慈悲深い心で許してくれる黒羽をハヤテは天使と思っただかもしれない、だがしかし。

「主人公がタイトルの通り、メツチャ速くやって来るのかと思ったらまさかの再登場までかかった話数はなんと三話だったなんて事は私には気にしません」

「ぐはッ!!」

「容赦ないわね、黒羽さん！　まるでプロボクサーが弱点をボディブローで抉るかのようだわ！　でもハヤテくん、話を聞いてほしいわかったでしょ？」

「ええ」

とハヤテは土下座の姿勢から立ち上がった。

「白銀さんは実は未来からやって来た某英霊の如く、過去を改竄するためにこの時代のテルさんを亡き者にしようにして、同時に黒羽さんが辿るであろう死の未来を変えようとしているってことですよね」

「そうよ、とヒナギクが相槌を打つ。」

「でも疑問だわ。未来のテルくんがこの時代で自分を殺す意味って何かしら？」

「どういう意味ですか？　生徒会長さん」

伊澄の疑問に、ヒナギクはうーん、と唸って答えた。

「タイムパラドクスってというのがあって、色んな説があるけど、下手をすると未来のテルくんも消えちゃうかもしれないってことよ」

タイムパラドクスというのは未来と過去の矛盾であるが、この場合はテルが過去の自分を殺した場合、未来のテルは存在できなくなるということだ。

「それにテルさんの消失と黒羽さんの死との関係も引つ掛ります。

過去に戻るなら、黒羽さんがそう言った死の瞬間にまで戻って、黒羽

さんを救い出せばいいのに」

敢えてそれをしないというのは、何かしら理由があるのだろうか。自分を殺さなければいけない大事な理由が。情報が少なすぎる上、推測するには至らないが故に一同は行動を起こすことにした。

「未来テルくんに会いに行くわよ」

ヒナギクが気を引き締めた表情で言う。

「未来で何が起きたのかは気になるところではあるけれど、テルくんが危ないっていうんだったら助けなきやじゃない？」

「ツンデレた」

「ツンデレましたね」

「ツンデレじゃないツツ!!」

一同の茶化しを一喝し、ヒナギクは咳払いをして見たのは明後日の方向だ。気恥ずかしい顔を悟られないようにそうしているのだろうが。

「あ、あのね？ テルくん、ああ見えてもクラスの男子勢の盛り上げ役でもあるのよ。ウザいつてくらいにね」

「ええ、ヒナギクさんが調子乗ったテルさんにヒテンミツルギスタイルを食らわせる光景は最早白皇の名物になりつつあります」

「確かに私やりすぎちゃってるときあるけどさ、あの馬鹿さ加減つてのがさ、クラスに必要な物だっていうこと！」

転入した最初の頃はあまりハヤテ以外の者とは関わりを持っていなかったが、マラソン大会、ヒナ祭り祭り、高尾山とクラスとの関わりが増えて言った事もあり、自然と他の生徒とも打ち解けるようになっていった。勤勉で真面目な生徒が集うこの白皇で、授業中に寝たり、朝のホームルーム前にジェンガをやる男だ。明らかに異質な存在だ。

だけど、クラスの者たちは彼を貶めようとはしない。雪路に怒られようが、ヒナギクに殴られようが、馬鹿で、のんきだけど、自然と憎めないような奴。それがテルである。

テルの持ち味でもあったあのテンションが自然とクラス全体を活性化させている事をヒナギクは知っているので、今テルがクラスから消えた時の事を考えるとクラスの中で大切なピースが欠けてしまうかのような、そんな気がしてならないのだ。

勿論、度が過ぎたこともあったのでその都度ヒナギク自身が制裁を加えて納めている訳だが。

「結局はヒナギクさんがデレているということだ」

「だーかーらー!!」

黒羽の締めには即座に反応したヒナギクの悲鳴にも似た声が響いた。

○

「で？ 伊澄さん、どうすれば未来テルくんの場所に行けるのかしら」

「生徒会長さん。 恐らくですが、その人はこの遊園地内に居ます。

多分テル様も……ただこの空間とは違った場所に、ですが」

「別の場所？」

ハヤテの問いに、伊澄が頷くと彼女はゆっくりと視線を動かして何もない空間を見つめた。

「境界が張られています。 この遊園地全体を包み込むような……

規模が大きいですね、境界というか、異空間というか」

「なら、この境界を壊すなんてどうでしょうか」

黒羽の言葉に、伊澄が首を振った。

「この境界……かなり強力な術式で組まれています。 私の力を持つ

ても、穴を一瞬開けるのが精いっぱい」

「ならそれでいいじゃないですか」

黒羽の言葉に、一同耳を傾ける。

「開けた穴の中に入って、テルに会いに行きましょう。 そして中に入って、未来テルにSEKKYOUしてこのバカ騒動を終わらせるん

です」

キョトンとした表情になったのは言うまでもないだろう。それではまさに殴り込みのようなものだ。その判断には伊澄は納得できなかつたようである。

「待つてください。入れても、帰れる保証はどこにもありませんよ。中がどういう状況なのかもわかりませんし」

「なら、一人でも行きます。私としても未来のテルから聞きたい事があるので……さ、伊澄さん、この空間に風穴でも」

「あ、あのうヒナギクさん」

「ハヤテくん……ええ、私も同じことを考えてたわ……もう駄目よ、思考がテルくんっぽくなってる」

基本、黒羽は「決めたら絶対やる」人間だ。その意思の強さは危険を承知で伊澄をぶん殴った姿を見れば十分理解できることである。頑固な面も相まって、突っ走りっぷりに拍車が掛かっている。後先も考えていないで行動する姿はテルのようであった。

「分かつたわよ黒羽さん」

ヒナギクの言葉に黒羽が振り返った。ヒナギクの様子はやれ仕方なし、と言ったものだ。

「私も付いていくわ。黒羽さん放っておいたらまた無茶しかねないんだもの」

「無茶ですか……」

ふむ、と黒羽は何か考えるような仕草で一瞬を置いた。

「私はあまり無茶をしない冷静な女だということを自負しております」

「どうがよ」

即効でヒナギクが突っ込んでいた。自分の事などを理解できていないようである。

黒羽の両の肩にヒナギクが優しく手を置いた。

「痛いのは誰だってイヤよ。 見ている人も同じくらい痛い思いをすることだってあるんだから」

不意に力が籠められる。 あの時の一瞬の判断の遅れが、黒羽を怪我させる要因となったのは事実だ。 生徒会長である自分がそんな遅れをとってしまったことは恥ずべきことである。 だがヒナギクは誰かが傷ついている姿を見たくはないのだ。

「でもまあ、ここには伊澄さんとハヤテくんもいるのよ？ RPG系ゲームで言えば、序盤で職業勇者が三人もいるようなものだから」
「ついでにバーサーカーも付いてます……」

「なにか言った、ハヤテくん？」

「イエエ、ナニモ」

まったく、と言った表情でヒナギクがため息をつく。 こういった時、集団を自ら引っ張るリーダーシップ力こそが白皇の生徒会長の証なのだろう。

「それで？ 黒羽さん、納得してくれたかしら？」

「……はい」

黒羽は顔色を変えていない、しかし、ヒナギクから見て先ほどよりは焦りを感じさせてはいなかった。 若干ながら綻んだかのようにも見える。

結界の中にはテルが命を狙われており、それが自身に関連しているとなれば黙ってはいられない。 恐らく、それが焦りを生み出していたのだろう。

「じゃ、伊澄さんお願いできるかしら？ ハヤテくんも、不在だった分はしっかりと働いてもらうわよ」

正宗を振るって、ヒナギクは指示を飛ばす。 指示を受けた二人は微妙な表情で前に出るとそれぞれ不満を呟いた。

「何もそこまで引っ張ることないじゃないですか」

「生徒会長さん……今日は人使いが荒いです」

普通に声に出していたら聞こえる距離なので本当に聞こえないくらいのの小声で二人は前進。だが結界をこじ開ける役は伊澄なので、自然と先頭に立つのは彼女である。

「八葉六式——」

本来の使い方である札を数枚取り出して、空間に六芒星を描くと光の粒が周囲に出現し、徐々に収束していく。

「撃破滅却ッ!!」

右手を突きだした瞬間、収束して膨大な靈力を蓄えた極太レーザーが何もない空間へ放たれる。本来なら何もない空間を走るレーザーだが、突如壁にぶつかつたようにその進行が止まった。

「結界を一部破壊させますッ 合図をしたら、皆さん突入の準備をッ」

極太レーザーの威力は凄まじく、すぐにその見えない空間にガラスのひび割れのような亀裂が走り出した。一気に伊澄が押し切ると、軽快な音と共に人一人分が入れそうなくらいの穴が空間に空いたのだ。

「.....アレ」

誰しもが突入の事を考えている中、黒羽だけは別の事が頭に浮かんでいた。

——あの光を、私はどこかで.....。

見たことがある。実際に見るのはコレが始めたの筈なのに、何度か見たかのような既視感。見てるだけでもあの特技を食らえばタダでは済まないのが分かるが、自分はその威力を直に体験したかのような身震いをしている。目の前の一瞬の出来事がきっかけなのか自身の頭に走る小さな痛みに思わず、頭を押さえた。

「黒羽さん？ 行くけど、準備は大丈夫？」

黒羽の一步の歩幅を置いていたヒナギクがこちらに呼びかける。黒羽以外は既に穴の中へと入っていたらしく、自分とヒナギクだけ

が遅れていた。

「……………大丈夫です。行きます」

……………私の死の真相を知る必要がある。死なない私が、どうやって死ぬのかを。

不安を感じさせぬよう、ヒナギクにはいつもの抑揚のない声で伝えた。未来のテルに会いに行こうと言ったのは自分なのだ、と自身に言い聞かせる。不安な要素はいまだ多い。正直、自身に起きている事を理解しようとしただけで、頭がどうにかなりそうなのだ。

だから黒羽は伊澄に自分の命の始末をお願いしたのだろう。変貌した後で、頼むことができる自信がないからだ。だが、未来のテルを中心にして動くことで自身に関するヒントが得られるかもしれない。それが良いことなのか、悪いことなのかも含めて、初めて自分は前進できるだろう。

その為に、黒羽はテルたちがいる空間へと一歩踏み出した。

○

「……………」
「……………」

ヒナギクとハヤテは無言のまま、地面に突っ立っていた。

眺めはほとんど自分たちが先ほどまで居た遊園地とは同じだ。しかし、園内の空は青空とはかけ離れてどんよりと薄暗く、月も真っ赤で気味の悪い空間だった。

だからこそ、この結界を作った白銀拓斗もとい、未来の善立テルが異質な存在であるということを決定づける要素である。二人は確信していたそれと同時、

『ガオオンッ!!』

命のやり取りも覚悟しなければならぬ危険がいっぱいあるのだ
ということも。

「ハヤテくん、私達．．．やっぱり来るんじゃないかもね」
「ええ、まったくですよ」

目の前を覆い尽くさんばかりに溢れていたのは、首から下まで人間の
身体の化け物たちだった。頭部は触手やら安っぽい目の触覚が
生えたその姿を見て二人は眩く。

「ここは彼岸島？」

『キッツシヤア!!』

惜しい、とでも言うように怪物たちは両手をバツテンにさせてさも
不正解を二人に伝えた。なかなかエンターテイナーな怪物達であ
る。

「これはダメなやつよ．．．きつと未来のテル君も吸血鬼のウイル
スにやられてこんな蛮行を犯したんだわ」

「だから違うと思います」

黒羽が後ろで突っ込んでいるが、その間にも怪物達は増え続けてい
る。頭部から露出している牙やら爪がガチガチと鳴り合わさつて
殺気を滲み出しているが、それを物ともしないように伊澄が冷静に息
を吐いた。

「私の式神と同じような能力でしょう。自身の霊力、または魔力で
遠隔操作できる分身を複数放っている．．．未来のテル様も、相当
マジカルな能力をお持ちのようです」

「いやあ、感心している場合は．．．」

「．．．」

「伊澄さん？」

伊澄の表情が曇っていたことを見逃さなかったハヤテが尋ねた。
それに伊澄も目を細めて、

「ですが．．．制御が上手くいっていないようで」

その言葉を表すかのように、術者の力で制御されているのであれば個の動きは無い筈だ。しかし目の前の怪物たちはこちらを見ている者も居れば、集まらず木に登る者、端っここで寝る者、喧嘩するものもいる。

「あ、あそこでトランプしてるのも居ますよ」

「麻雀やってる奴もいるわ」

「二人とも、気を抜かないでください。ちゃんと殺意をもってこちらを襲ってくる者もいます」

状況を分析する伊澄だが、一つの心配事があった。遠隔操作で分身を操り続ける為には自身の霊力が必要不可欠。それがなくなってしまうと残った式神たちは残存する霊力で勝手に行動を始める。これが起きてしまう場合、

「……分身に供給できる“力”が足りないか、術者の生命が危険な状態になっているということ。」

なぜそこまで敵の術に詳しいかと言うと、先ほどのハヤテ達に説明したとおり、全てこの分身の過程は伊澄が使用している式神と同じ要素を持っているのだ。

だからこそ分かる。その術の発動過程や、弱点なども。それを未来のテルが知っているということは、

「私が、未来でテル様に教えた？」

断言は出来ない。だがもしそうなのだとしたら、彼が持つ力は自身と同じと判断できる。この結界を維持して、分身を作るという荒業は、いわば自身の身が焼き切れてしまうくらいの力を消費するからだ。

「ハヤテ様、生徒会長さん。辿り着かなければなりません、未来のテル様の元へ」

知らなければならぬ。なぜ、彼がこの力を使えるようになったのか。また、それを自分が止める事もできなかったのかも。

「当然よー」

正宗を振るうヒナギクが向かってくる怪物達を切払った。

「せっかくの遊園地！　台無しにしてくれた礼をしてやるんだからツ
!!」

ヒナギクの突撃に、ハヤテも応じるように前へと飛び出す。その両手に抱えられたのは丸太だ。

「え、ハヤテくんはなんで丸太なの!？」

「何言ってるんですか！　丸太は怪物達に効く最強の武器ですよ！」

それはどこかの島の吸血鬼限定の話だ、とかヒナギクは内心で突っ込んだが、彼が丸太を一突きするたびに化け物たちは煙を立てて消滅していく。ただ単に丸太を一人で振り回すハヤテが強すぎるだけかもしれないが。

「みなさん！　丸太を持ちましたか!!」

お前くらいしか持てねえよ、と全員が思ったのは言うまでもない。背後では伊澄も札を飛ばしては前線のヒナギクたちを援護している。だが、それも不要なくらい、前線の二人は強い。まるで本田忠勝と呂布奉遷、最強の戦闘力を持った武将が場を制圧しているかのようだ。

「まだ減らない!!」

怪物の群れを切り崩しても切り崩しても、その間を埋めるかのよう
に次々と怪物は湧いてくる。キリがない状態だった。

伊澄の霊力と言うのも無限ではない。先ほど壁に穴を空ける為に大きな霊力を消費させた。時間が長引けば長引くほど、数が少ないこちらの戦いは不利になっていくものである。

「二人とも下がってください！　ここは私が一気に——っ!!」
伊澄は戦況を打開すべく、一気に大技を放って場を殲滅しようと札を取り出した。目の前集中して敵が集まっているのは恐らく、その向こうに主がいるからだ。遠隔能力が落ちてきているといっても、その式神たちの使命は彼らの自覚していない所で働いている作用なのかもしれない。

「術式八葉……」

だから最悪前方を吹き飛ばせば道が開ける。その隙に前へと進む強行突破策しかないかと踏んだのだが。その準備として札を宙へと放り、霊力を集中させる。雷轟が響き、大地を揺らす伊澄の大技が放たれようとした時だ。

「そこまでする必要はないぞ、伊澄」

怪物達の群れの向こうからハッキリと聞こえた声に伊澄の術が止まった。その一言を聞いて、怪物たちが道を作るかのように身を端へと寄せていく。

群れが道を開けたその先には、西洋風の男が黒い外套を纏って立っていた。

「やあ皆の衆」

白銀拓斗、もとい未来の善立　テルである。

「できれば何もせず、聞いてもらいたいことがある。そして、聞くだけではなく、ぜひとも”承諾”してもらいたい」

悠然と歩を前へと進める彼は纏いつく殺気に怯むことはなかった。周りの怪物達も、まるで機械のように動きを止めている。これが白銀拓斗が怪物達を操っている主なのだという証拠だからだろうか。

「黒羽嬢をこちらに渡して欲しい、そしてこの時代の俺を殺すための

手助けだ」

くこれから先の未来く EX. 01

寒空を切り裂く轟音とともに鉄の固まりがゆっくりと地上に降り立っていく。それは一機だけではない。降り立ったと思えば次の飛行機が目的地へと移動するために滑走路へと移動していくのが見える。だがこんな光景は空港なら日常茶飯事の光景だ。別段と不思議なことはない。

「・・・あー」

飛行機を降り、粗方チェックアウトを済ませたベレー帽を被った男は空港の自動ドアから数歩ほど歩いた所で何か思い出すようにそう呟いた。

時間带的にも四時前だというのにかなり薄暗くなってきた。男は思い出した。自分が居た国では日本とはかなり時差が違ったのだと。

長いこと別の国で暮らしていると自分が本当に住んでいた国のこと等も忘れてしまっているとはなんとも情けない話だ、と男はゆっくりと視線を前に戻し、凍てつく風が身を震わせる中歩き出した。

「カムバック・・・ジャパン」

特に意味なく腕を振り上げた男、善立 テルは久し振りに日本に戻ってきていた。

●

ここ数年、テルは日本を離れて生きていた。特に職業などを気にせず、その日その日をなんとか食いつないで風が吹くままに身を任せるとような一人旅だった。世界一周・・・とまでは行かなかつたが、半週くらいは出来たのではないかという自己達成感がある。

世間はクリスマス色に染まっており、歩く道にはこれでもかと言わんばかりにサンタのパネルと装飾の凝ったツリーが並べられている。勿論、クリスマスという日に対応した特別な男女の一組もちらほらと見られた。それを見るだけで、心底から湧き上がるような炎を感じるのは気のせいだろうか。

——リア充爆発しろ。

という、今日も真の聖夜を迎えられない一部の男女たちの嘆きが聞こえた気がした。

「おや、おやおやおや」

周囲がお祭り騒ぎで賑わっているその道をダルそうにテルが歩いていた時だ。三人の女性とすれ違った際、テルの背後で先ほどのような聞き覚えのある声に思わず振り向いた。

「・・・ん?」

「む?　むむむむむむむ?」

「はりやりや?」

それぞれがこちらを睨むかのように唸っているを見て、テルは困惑する。コートを着ているだけなのか、よく分からないが、なんとなく、自身と同じ年齢のような気がするがそれは真ん中にいた紫色の髪の女性の一言によってその疑問は解決されるのだ。

「もしかして・・・テル夫くん?」

目を数度ぱちくりさせた女性に、付き添う者も同じような声を出してこちらを凝視して見せ、まるで時間が停止したかのような静かさは

テルが困惑するには十分な間であった。

「はぁ・・・」

ため息をついてテルは心を落ち着かせる。そうだとも、ここは自分が育った国である日本だ。“彼女たち”が存在していて当たり前前の場所なのだ。

——生徒会の三人組、瀬川泉、花菱美希、朝風理沙。どれもよく見知った人物たちだ。

○

テルが歩いて数分のある場所に半ば強引に連れて行かれた場所がある。居酒屋『まつどすねいく』という場所だ。時期が時期であつてかそれなりに混んでいるのか駐車スペースはほとんど埋まっている。最初は入れないんじゃないかと危うんだテルだったが、入口付近の席が奇跡的に空いていた。

簡単に“乾杯”と告げた一同がそれぞれの飲み物を手に取って飲み始める。数十秒もしない間に、ビールを持った生徒会三人組の元ブール、花菱美希がビールを持って呟いた。

「しかしまぁ、何年ぶりになるんだろか、テル夫くんよ」

「そうだなぁ・・・五年くらいだろうか。今年でオレ、二十二になつたし」

無理に断る理由もなく、テルは答える。五年、日数換算1825日。こうしてしまえば随分と小さな数字だと思うが、

「みんな心配してたんだよー、連絡しても全然繋がらないしさー。夜空のお星さまが落ちる時、そろそろどつかでぼろ雑巾のように野たれ死んでるかもしれないってなってたんだよ」

向かいの席にいた、いいんちよさん元レツドこと、瀬川泉は五年たつてもほんわかかな口調は変わらず、だがにぱつと笑みを浮かべながら持っているのは芋焼酎。ビールすつ飛ばして焼酎に行くとはなかなか攻める奴だ。

「泉、チューハイでも良かったのにお前と言う奴は……またカウンター破壊する気か？」

「はう」

レモンサワーを片手に元ブラックこと、理沙が泉の頭を軽く叩いた。“カウンター破壊”という理沙の発言に疑問を感じたテルだったが流すことにする。決して良いお話ではない筈だからだ。

「おっ」

美希のテーブル付近に置かれていたスマートフォンが振動したのを見た持ち主の美希がそれを手に取りだすと、慣れた手つきで何か動作をしている。それを見ていたテルが羨ましそうに見ながら、

「いいなスマホ」

「なんだ？ テル夫くんはまだガラケーか。今時ガラケーなんて時代遅れだぞ」

「うるせえな、このガラケーを折りたたむ動作がいいんだろうがッ」

わざわざスマホ勢の三人の前で黒のガラケーを見せつけてみせるがそれだけでいかに虚しいかが分かったテルだった。彼は若干顔を赤らめている間に美希がスマホの操作を終えて懐に仕舞ってから言った。

「ヒナもうちよいでくるってよ」

その単語に、ビールを飲んでいたテルの全体の動きが停止した。すぐさまテルがグラスを置くと恐る恐る美希に尋ねる。

「え？ 何、ヒナギクくるの？」

「そうだよー、アイツ今ちよつと卒論で立て込んでてさー」

“卒論”という単語に、テルが思考を巡らせて一つの答えを導く。だが疑問を持ったままで三人に言った言葉は、

「え、お前ら大学生なの？ キャンパス？」

「そうだとも」

無いとも言い切れない胸を理沙が張って、続くように泉と美希がグラスを掲げる。

「我々は元・生徒会メンバーは！」

「私立白皇学院大学の四年生だ！」

嘘だろ、とテルは続けた。

「お前ら裏口入学使ったのかッ!!」

次の瞬間、んなわけねえだろっ！ という突っ込みが返ってきたのは言うまでもない。

「ちなみにヒナも同じだ。 もっともアイツはいろいろと忙しい身分だが」

「剣道で最近金メダルとってたよー。 もうなんだろうね」
「ありゃ抜刀齋の領域だったな。 テレビで見てた時、明らかに剣圧で火花見えてたもんな」

三人組の躲す会話をビールを飲みながら聞いていたテルが部屋の

隅に置いてあつた新聞の記事にある項目に括目する。

—— 『桂ヒナギク、圧倒的強さで今年もアジア制覇』

という笑顔でデカデカとプリントされた太文字が語るに、高校での完璧超人っぷりが卒業後さらに磨きが掛かり、大学の剣道部は一年から世界大会に出場するという偉業をやつてのけたらしい。それでいて学業も両立するさまに一時期、“桂ヒナギクは本当に人間なのか”という疑問が世界レベルで話題になったほどだ。そしてあの見た目のレベルも相まつてか最近ではCMの方にも出るようになったとか。

「本人、口では“めんどくさい”って言ってるけど満更でもなさそうなのかな」

飲み干したグラスを揺らして、美希がメニューを取り出した。

「ま、こっちはヒナと居られる時間がだいぶ減つてしまつて残念な訳だが」

「お前ら基本いつも一緒だったもんな」

そうだとも、と美希は指でメニューのドリンク名を指しながら続ける。

「だがこれから先、就職先までも一緒になれない。いままでヒナだけに頼つて生きるのがどれくらいアイツにとつて負担だったのかが私たちは高校卒業してから分かつたつもりだ」

「へえ」

先ほどの美希のようにグラスを手で揺らしながらテルは頷く。

“こいつらも、いつのまにか大人になったのか”と。

考えてみれば、もう大学の四年生だ。卒論の事もあれば、就職活動と忙しい身分ではあるのだろう。五年という年月がテルにとつて長いのか短いのかよくわからないが、彼女たちにとつては劇的な変化を起こすほどの、そして、大切な期間だったに違いない。

それを見て、自分はどうなのか、と思うテルであつた。

「まあ我々は卒論をほとんどヒナに任せてここに居るワケだが」
「ちよつと、俺の感動返せよー」

卒論は計画的に。

第128話く白銀拓斗は人間を辞めたようですく

男が世界の果てに得た物は、ある意味一つの答えだった。それは、自身の我を通して尚、変えられない運命というものがあるということである。

まさしく己の人生がそういうものだったと理解することは簡単だった。自分が犯した“過ち”の後で、己が身を持って味わったからだ。

その過ちを清算、または償うというのだろうか、その為に男が取った行動は世界の果てまで旅をすることだ。勿論、気ままな風来坊気取りで一人旅を希望していたのだが、どこぞの関西人の付き人がおせっかいを働かせて、学業を放棄する一歩手前までして付いてきた。何をする事もなければ、何かを成し遂げるのだという目的のある旅でもない。ただ男は少しでも、“この救われた命”を、与えられた“呪い”を有効活用する為に、世界を渡り歩くことを考えたのだ。

与えられた“命”と“呪い” 後者は人間を超越した力である。それを持つてしまえば、自然と欲というものが生まれた。

—— どうしてこんなものが手に入ってしまった。

身に着けた“呪い”とはその名に相応しく、己の身に不幸を及ぼした。とにかく、ロクな想い出はない。

東西南北、あらゆる地方へ飛んで行つては、数々の国の諸事情に巻き込まれていく。時には命のやり取りまでも強いられる旅路。

戦火、飢饉、病魔、政治。あらゆる要素がこちらの命を奪いにやってくるが、自身は死ぬことはなかった。

—— 否、“死ぬ”ことはできなかつた”。

与えられた運命から逃さぬように、永遠の螺旋階段を上り続けさせるように、自身は命を落とすことはできなかつた。

道中、何度死のうかと思つた事だろう。正直、嫌な物を見すぎた。そのせいだろうか、髪の毛は精神的な原因により白髪へ、眼の網膜は強力な爆弾の熱風により焼かれ、全身の肌の色は強力な紫外線を受けて変貌した。

——そして、何より心が圧倒的に擦り減っていた。

嫌な物とは、数えきれないほどもある。それはかつての学友たちの死も含まれている。それは自身が原因であるということも。最初は心が痛かった。身が引き裂かれるかのような痛みだ。

だが、人間とは“慣れ”という非常に無慈悲な機能を持っている。死ぬ者を見すぎた結果、自身は傷による痛みすらも、心の痛みすらも感じなくなってしまうた。

男は自身の笑顔にさえ、今はしつかり、心の底から笑えているという確信も持てないほど、人間的な機能を失っていた。

男を追っていた敵は抽象的にいうと、“世界”だった。組織的な物でもない。ただ自分を取り巻くその“世界”が己を全力で排除しにかかってきた。

自分は死なないが、周りはそうではない。自分の身代わりになるように、自分に関わって来た殆どの人間が死んでいくのは見るにも、聞くにも堪えない、だがもうそれも殆ど感じない。

ある日、どこかの崖の上で快晴の元、景色を眺めていた時、ふと思つた。

——どうして、こうなってしまったツツ!!

答えなどは明白だ。口に出さずとも分かっている。

全ては“あの日”、己が導き出した選択がこの絶望した未来を作り

出したのだ。

明日なんて来なければよい、こんな結末は絶対にあつてはならない。

悲痛な叫びと共に、崖から身を投げた。 どうせ死ぬことはないのに無駄なことをする、と男は思っただろう。

——だが無駄ではなかった。

気づけば、そこは自然生い茂る林の中。 印象的だったのは目の前に冷たくなっている人間が居たということだ。

外傷は全く持っていない。 死んだ理由は持病の悪化だろうか。

死体はそのまま放置していた。 自分がいるその国では日常茶飯事な光景だ。 せいぜい祈つてやるぐらいが精いっぱい、それ以上そこに留まる事は、その国では“死”を意味するからだ。

速やかに林を駆け、驚愕したことがある。 平らなコンクリートの感触に一瞬躓きかけて、いつの間に市街地へと出たのかと思った男が見たものは。

——かつて男が暮らしていた国、日本だった。

第128話　白銀拓斗は人間を辞めていたようです

○

桂ヒナギクは、忽然と姿を現した白銀拓斗に正宗を構えなおしていた。

「そんな要求、私たちが素直に聞くだけでも思ってるのかしら？」

「無論、聞き入れてもらえない条件なのは分かっているつもりだ。

だが時間が惜しい……最悪、黒羽嬢だけ渡してもらえればそれでよい」

白銀はうつすらと笑って、淡々と説明をするがこれを聞いてヒナギクは全く持ってこれが未来のテルだという実感が湧かない。あまりにも、現在と未来とで性格がかけ離れているからだ。

「だが、恐れ入ったよ。まさか、伊澄と咲夜の術が解けることになるとはな。おかげで味方はこれで私だけだ……」

自嘲気味にそう言って、白銀は殺意など全く見せない状態だった。それは自然体というものである。だが徹底的に隙というものがなくしているからか、こちらが全く踏み込むタイミングがつかめなかった。

「ヒナギクさん、この人……」

「ええ、読めないのは相変わらずだけど、ここまで強そうに見えるなんて思わなかったわ」

隣のハヤテもその異常性は察知しているようだ。嫌な汗を通して伝える事は、こちらが隙を見せたら物の数秒、殺されるのではないかと言うもの。

だが、ここで怖気づくのは相手の思うつぼであろう。今は後ろの伊澄が援護してくれるが、霊力の消耗からか息が若干荒い。黒羽を護るには逃げるという選択肢を虚無の彼方へ葬り去り、相手を逆に仕留めるくらいの器量で挑まなければならない。

現在、ヒナギクたちが置かれている状況はそういった不利な状況である。

策を練るしかない、そう思っていた矢先のことだ。

「ではこちらから行くとしよう……!!」

白銀拓斗は単身で、怪物達を使うこともなくこちらへ飛び込んできたのだ。丸腰、何か武器を携帯しているようには見えない。

慌ててヒナギクも前へ出ようとした時、自身の真横を駆け抜けていく一人の男が居た。

「ハヤテくんツ!!」

綾崎ハヤテが丸太を持って白銀拓斗へと迫っていた。

○

白銀拓斗が前へ飛び出すために身を屈める動作を見た綾崎ハヤテは、一つの動作を生み出していた。

それは単純に“前へ出る”ことである。

……標的は出来れば、こちらに絞らせてください。

そう思う理由はただ一つ、ヒナギクや伊澄、黒羽への被害を考えたためだった。それはハヤテの執事としての性だろうか、常に誰か大切な人を護るといふ事を念頭に活動するハヤテにとっては自然な行動かもしれない。

狙うのは相手の機動力。丸太を構えて、視線は白銀の脚へと定められていた。初速は圧倒的にこちらが上だ。それ故に威力が桁違いである。最悪、足場だけでも破壊して逃げ場を一つに絞らせる。そこを仕留める、これがハヤテの狙いだった。

「手ぬるいのではないのか、ハヤテ」

だが丸太を突き出す瞬間、ハヤテは不敵な笑みを浮かべた白銀を見た。

○

突き出された丸太の一撃はその大地を深く抉った。地面のコンクリートは丸太が突き刺さるといふより、“割る”と言った印象が強く、水面を真上から叩いたかの如く、空中にコンクリートの破片が飛び散った。

ハヤテは外した事にさほど疑問は持たなかった。彼ほどの身体能力の異常性は分かっていたのでこれくらいできて驚かない。それよりもすぐに目で白銀の姿を追う、がその行く先は空中である。

ドンピシャ、前へ出て白銀を迎撃する際にハヤテが描いていた理想の展開。空中ならば逃げ場は絞られる。体中にジェットパックでも付いていない限り、その体制からの回避は困難だ。

「眠っててくださいいよツツ!!」

足を大地に根付くように構えて丸太の先を宙に浮かぶ白銀へと向ける。ここでも狙うのは急所ではなく、腹部だ。タフな男だとは知っている。だからこそ、全力でやらなければならない。だがその行動に迷いなど無かった。ハヤテにとつての友人たちが狙われているのだ。今はハヤテは顔では冷静を装っていても、内心では怒っているのだ。

咲夜や伊澄を利用してこの時代のテルの暗殺を謀るといふ卑劣な手段、今のテルからでは考えられないようなこの変貌。その領域に至った理由は何故なのか。何がそこまで、彼を変えてしまったのか。

その真実を知るために、ハヤテは丸太を白銀へと打ち出した。さながら初代ガンダムのラストシーンでジオングを撃ち落とすかのようなラストショット。

「ふう」

またしても、白銀は笑う。直後に、ハヤテは自身の目では信じられない物を見た。

「やはりお前は、一番強敵な男だ」

空中の何も無い空間を蹴り、丸太を回避したのだ。

○

「空中だけに私を逃せば仕留められると思ったか？ 残念、それでは猿も仕留められないぞ。せいぜい倒せてカエルくらいだ」

鮮やかにハヤテの背後へと着地を決めた白銀は余裕たつぷりにこちらへと挑発した。だが、その前にハヤテは先ほどの一瞬の出来事をビデオテープでリプレイするかの如く思い返し、一言。

「テルさん、いつからロックマンになったんです？」

まさに、秘密のパーツを手に入れた岩男のような二段ジャンプだった。最初は、ただ宙に浮いているだけだった。だが、確かに白銀は空中に足を着いて“着地”をし、そこから力強く蹴って丸太を躲したのである。

「こんな空間とか式神を扱えるようになってるんだ。 “ 空気を魔力で固定した足場 ” を作る事くらい造作もないと思え」

ロックマンかと思ったら、実はダンテだった。と、ハヤテは苦笑いで応じた。魔力って凄いい、その内ロックバスターとかもできるのではないか。

「だが、これもなかなか難しい。空間を固定する際に座標と体積の計算をミスって私の脚を固定してしまうという珍事になりえるのだ」
自嘲気味に言うのは、体験談があるのからか。今度は本気で笑いかけたハヤテである。

「……だが、私の考えは誤りがあった。流石だハヤテ、私は挟

まれてしまったぞ」

白銀の余裕綽綽といった表情の背後に立つのは正宗を持って再び突進してきたヒナギクだった。

「ハヤテくん、構わず脚を狙って！ 私は頭を叩くからッ!!」

○

桂ヒナギクの、頭を叩くという表現には若干語弊がある。ハヤテが足を封じる為の攻撃に対して、ヒナギクの頭を狙うという目的は叩くというより、叩き斬るという殺気を持ったものだった。

どこぞのゲームの岩男のような二段ジャンプからその異質な強さを感じ取ったヒナギクは、ハヤテ一人では危険な存在だという事を理解したうえで行動を起こしている。

丁度白銀の真後ろに陣取っていたことが幸いし、こちらはハヤテと挟撃という形で、そのタイミングを合わせる。

「私を無視して盛り上がらないでくれるかしら」

最大のポイントは戦闘職であるにも関わらず、全く持って蚊帳の外だったということだ。ハヤテの独断で一対一を持ち出されたのはまだ善しとしよう。だが、別の捉え方をすれば女性だけをハブにするというものだ。ヒナギクはそれが許せなかったのである。

「まったくもって恐れいる。 実に力強い、君らしい攻めだ」

「褒めてくれてありがとう」

「皮肉で言ってるのだがな」

眼前の白銀はハヤテを無視してヒナギクの方へと視線を移した。それを見て、白銀の後方のハヤテはここぞとばかりに距離を詰める。

丸太を構えたハヤテが凶ったかのように挟撃を仕掛ける。それを見て、合わせないヒナギクではない。だが、ただ二人で同時に仕掛けてはお互いの攻撃を食らうという馬鹿らしいほどのリスクがあ

る。それを考えると、闇雲に突っ込むわけにはいかないのだ。

だが、ヒナギクのパートナーであるハヤテは恐らくテレパスなどでも体得してるかもしれないほどに、“こういった”場面だけは他人の思考を読むことができる。ぶっつけ本番でもその無理難題をやつてのけてくれるほどにだ。

そのやり取りは既に始まっている。

○

「テルさんッ」

ハヤテの合図と言える言葉に白銀の肩が震えた。その狙いが分かっているのか、ハヤテが突き出した強烈な丸太による突きを後ろを確認することもなく。

「まだ甘いのだ」

躲す。今度は最低限の、こちらの腰の高さまでジャンプしてだ。だがハヤテは今度こそ、と取った行動は全身を大きく捻って力任せにフルスイング。これで軌道修正を行い、白銀を狙いに行く。

だが、これもまだ足りない。今度は謎の二段ジャンプだ。その正体は魔力で空気を固めて見えない足場を使ってジャンプさせるというものだ。どこのファンタジー世界の設定だ。

空高く逃げた白銀は地面のハヤテを見てあざ笑った。距離にして数十メートル以上。丸太を抱えたハヤテでは届かないだろう。だが空の白銀に対してハヤテが見せたのは不敵な笑みだった。

「ハヤテくんッ！ 上出来よッ!!」

眼下から響いた声はヒナギクのもの。宙に浮いた白銀へと迫っているその姿はほぼ一メートルと距離はない。

「驚いた……」

やはり、ハヤテとヒナギクは対を成すほどの強敵であるということ

は理解できている。それは過去の記憶からでも十分に警戒すべきものだ。だが予想以上に、と言った所だろう。

「私の作った足場を利用してここまで跳躍をツツ」

思い返せば、挟撃と言う手段に入った時にハヤテが最初にこちらに呼びかけて攻撃してきたかの意味がようやく理解できた。

もう一度こちらに注意を惹かせるためだ。そして、同じように白銀を空へと逃がす。同じパターンだと油断させるように、白銀はまんまと嵌った。

そして数十メートルほど跳躍して見せた白銀の作り出した魔力の脚場を利用して、ヒナギクはこちらに迫ったのだ。正直、この魔力の足場は術者にすらその姿を認識できない。最初扱うにしても場所が分からず、崖を渡ろうとした時は何度か足を踏み外していた。

慣れるのにも相当時間がかかるというのに、ヒナギクはそれを物ともせず一度で見えない足場を認識して、それを利用した。もつとも恐れるべきことは、この展開をお互いが予想していたということだろう。

「……やはり天才か。」

「ぜええええええつ!!」

気合十分、その迫力とともに突き出される正宗は白銀の頭部を確かに目指していた。それを食らえば、こちらは死にはしないが、ただでは済まない。

「……やはり、」オレ「はお前と戦えて良かったぞ。ヒナギク！」

思わずわざわざ変えた口調が、当時のものに戻ってしまう程に、この時代に来て初めて昂ぶるものを感じた白銀はまたしても笑みを浮かべて見せた。

くこれから先の未来く EX・02

テルたちが居酒屋で飲み始めて30分だろうか、それくらいの時間が経過していた。客足は一向に衰えないようで、むしろこれからだと言わんばかりに客が入ってきて、飲み始めていた。酒は進み、日本でのちよつとした出来事と、泉たちの大学生活を話し合いながらまた時間が進んでいく。

「すいませーん」

「はーい！ 今いきまーす！」

次の飲み物を頼もうとテルが手を上げる。向こうからやってきた店員が元気に声を上げてやって来た。

「お待たせしました！ ご注文は——ってテルくん!？」

こちらの顔を確認すると同時に、目の前の女性が慌てふためくと持っていたメモ帳を落としていた。その反応を見せられたテルが首を傾げながら目の前の女性を凝視。しかし、どうしても思い出せない。

「ん？ えーつと、アレ、誰だっけ？」

「え？」

女性はぼかんとした表情だ。

「んー？ なんか高校の時に小動物の名前をしたような女が一人いたような……」

「それハムスター！ ハムスターだよテル君！ って違う！ 私だよ私！ 西沢 歩!!」

一人でノリ突っ込みをやったのけた歩に言われて、テルが完全に思いついた。

「おお！ なんだハム子じゃないか!!」

「違う！ テルくんそれ絶対違うキャラ！ 違う漫画の序盤のキャラ！」

そこからは西沢歩が落ち着くまで約五分。

「ビックリしたよ、まさかこの場所でテルくんに出会うとは……幻術にでも掛かったのかと」

なんて言い草だ、とテルが言うより先に隣で夢心地にテーブルに伏していた泉が手を上げた。

「すいませーん！ テキーラ！ テキーラタソお願い歩ちゃん！」

「もう、泉ちゃん。 飲みすぎだよ、また金魚鉢頭に被りたいの？」

「だからこの店で一体何があったんだよ！」

突っ込まずにはいられなくなったテルが堪らずそう叫ぶ。この居酒屋での泉はかなり有名人として通っているらしい。

「お前も大学生？」

うん、とテルの問いに歩は頷いた。

「ヒナさん達とは別の大学だけだね。 この居酒屋は私のバイト先だよ」

「我々も歩くんとは一年の頃から良く会う中でな。 ヒナと泉を飲み誘う時は必ず彼女がシフトに入っている日になっている。 ビール一杯無料にしてくれるからな」

「マジか」

「嘘っ！ そんなサービス一回もしたことないからね！ テルくん信じちゃだめだよ!!」

慌てる歩を見ながら悪しき笑みを浮かべる美希は得意げにジンジャーハイを口にすると歩の肩を叩いて見せた。

「いやあ、歩く人は相変わらず面白い。言うこと成す事が大抵普通なのだがな」

褒めてるのだろうか、けなしているのだろうか、よくわからないテルだった。

○

恐らく、その場に居合わせた美希たちが確実に思っている事だっただろう。それは口を閉ざしているテルでも分かっていることである。この五年間の自分のことなど。 どうして彼女らがそれを聞いてこないのかはテルには分からない。

まったく音信不通だったという訳ではない。旅の途中、おせっかない“付き人”のせいで日本の方には情報は伝わっており、自分が元氣だということは知られているのだ。

「なあ、お前ら高校の時のクラスメイトの事、ちゃんと覚えてつか？」「何をいまさら」

「もちろんだとも」

こちらの言葉に美希と理沙が鼻で笑って答えた。高校を卒業したといってもまだ五年ほど前の話だ。美希がクラスの一部の人間の話が始める。

「えーつとまず誰から言えばいいか……まずは東宮だ」

「ああ、あのヒナギクのおっかけの」

ぶつちやけそこくらいしか記憶にない。

「そうだ。現在も追っかけを継続中だよ。大学の剣道部の男子部員の下から数えた方がいくらかの實力しかないから毎日泣いてるらしい」

思わず吹き出しそうになったテルだ。しかし、大学まで根気よくヒナギクを追い続けているというのはまさに一途。単に恋は盲目なのかもしれないが、彼の恋が実る事を切実に願うばかりである。

「あと虎鉄くんだけど……」

次に陽気な口調で泉が口を開いた。焼き鳥の皮串を手にとって生ビールと一緒に口へと運ぶ。

「お前そろそろストップしとけよ、また週刊誌噛みちぎるぞ」

理沙の言葉に、もう何が起きても不思議じゃない。そう感じてきたテルだった。

「んで？ 虎鉄がなんだって？」

そうそう、と泉がビールを一気飲みしてから彼女は一息つく。

「……女の子になったの」

「ファッツ!?!」

「ウソウソ、ウソでーす！ テル夫くんったら引つかかっているうー!」

あんぐりと開けていた口を閉じて、けらけらと笑っている泉に初めて殺意というものを抱いた。酒のテンションとはどの国であつてもめんどくさい。美希がやれやれと言った顔で代わりに説明する。

「アイツもいまだにハヤ太くんの追っかけだ。大学に来てまで、彼もいい迷惑だろう。最近でも大学の噴水前に十字架磔の姿で晒されている事がデフォルトと化している」

「ラブアタックいつもしてるからねえ虎鉄くん。お前の事が好きだったんだよ!!」っていつも言ってるの。大胆な告白は女の子の特権だからね!!」

「泉、それは違うと思う」

今度は声にして突っ込んだ。そうしなければ自分は気が済まないだろう。次に口を開いたのは理沙だ。

「伊澄くんも大学で茶道部だ。時々我々も菓子を食べに行っている。相変わらずテレポートが得意でな、この前は学園祭中にカンボジアに行ってたらしいぞ」

迷子癖はいつもの事なのだ、と不安を通り越して逆に安心してしまった。

「そうだそうだ、ナギさんとハヤ太くんだが・・・聞いているか？」
無論、と小さく頷いて見せる。こちらとしても情報を知らないわけではないのだ。

自堕落で引きニート同然の三千院家ナギは大学ではなんと。

まだ引きニートだった。

「いやあ・・・我々もたまげたなあ、まさかあの年齢になっていまだに引きニート気質だとは」

「大抵ああいうキャラって数年くらい経ったら大人っぽくなるだろうよ。それが王道だろうよ未来を想定したハヤテ系の小説はさあ・・・まさかの変化ナシッ!!」

・・・おう、メタい発言はやメろ。

と美希と理沙の強い口調にテルも苦笑い。

「講義中は見事なPSPの画面ガン見、授業は大学の講義の構造上一番上の窓際の座席でガンスルー、ニコニコ動画の上級者、VIPPER・・・と、いつもヒナの手を焼いている・・・それでも大学の欠席回数も限界だが、ちゃんと来るのはやっぱりハヤ太くんがしっかりしてるからだろうな」

三千院家の遺産相続問題と言うのはまだ三千院帝が駄々をこねて延長勝負というのを持ち込んで未だに続いているらしい。メール

などではよくハヤテの方から日本の情報が送られてくるのだが、その文面にはひっそりとだが日々の仕事に対しての愚痴のような物が感じられる。彼も苦労しているのだろう。

・・・さつさと結婚してしまえい、あの馬鹿野郎ども。

と、泉に対抗心を持ってビールを口にする。自分が思っている通りである二人の関係は全く進展していない、かのようにも見える。

だが、実際は違う。二人の関係はこの数年で劇的に変わっていたのだ。

基本の部分は変わらわない。鈍い天然ジゴロハヤテとツンデレお嬢さまナギの部分は。

去年あたりのクリスマスだろうか、とある国に滞在中でハヤテから連絡を貰ったのを思い出す。それはナギへのプレゼントの相談だった。

○

『お嬢さまのプレゼントってどうすればいいでしょう』

いや知らねーよ。いつも女子に振る舞ってた通りにチョコでもなんでもやればいいじゃねえか。

去年のクリスマス、たしか国際電話に出ていた自分が眠いのを理由にそう一言告げて電話を切ろうとした時だ。

『でも、それだけじゃ・・・今のお嬢様に対する気持ちが伝わりません』

どこか苦しそうな口調にだが、電源を切る動作を止めるには当然の意味ありげな台詞にもう一度携帯を耳に当てる。

『最近、お嬢さまを見ていると落ち着かなくて・・・ざわつくつていうか、後期の手乗りタイガーを見ているような』

ロリコンかな？ と茶化そうとしたが、ため息が聞こえてきて流石に気を使った。真面目に聞いてみる。

「お前エ、そりゃいつからだよ。早く言えよ、三秒以内に言わないと切るぞ」

『そんな唐突な』

「ま、言わなくても分かってたさ。お前のメール、結構愚痴多いけど、楽しそうな感じがしたからな」

『……』

沈黙する電話。だが、それを自分は肯定と受け取る。

『なんでですかね。 ミコノス島から帰って、テルさんが居なくなつて……いっぱい色んな事があつたんですよ。 屋敷追い出されたり、コミケでたり……兄に会つたり』

もちろん、それは知っている。旅の途中も咲夜を通して日本の情報は教えてもらっているのだ。特に、自分が世話になった三千院家に関しての情報は最初に伝えてもらえるようにしている。

……お前のメイドコスの写真はどの世界でも高くついたぞ。心の中で感謝だ。

『お嬢さま、何回か挫折しそうになって、でも最後は自分の意志で前に進むようになったんです。ガラにもないんですが、こう思っちゃったんです。 カッコいいなって』

男であるハヤテがそう思ったのだから、多分その時のナギの前向きな姿勢は余程印象に残っていたのだろう。自墮落で世話の焼く子供、あのナギが自分の力でやり遂げる為に立ち上がったその姿を見て、ハヤテはさぞ嬉しかったことだろう。

「ふーん」

実際、電話越しのテルでさえも言葉に反してあまりにも嬉しくて小躍りしたくなる気分だった。

つまり、だ。 とテルは推測する。 綾崎ハヤテは、心の底から三千院ナギに惚れたのだ。

「まずは最初に飯を食う」

『テルさん?』

「何でもいいからプレゼントを渡して、そして雪が降る中、ライトアツプされたなんか良さげな所で景色を見ながら」俺とお前で便座カバー」と言いながら愛を囁き合う」

『冗談じゃないんですか?』

ふふ、残念だったなハヤテ。 俺はこんな時はあまり冗談は言わないのだ。 受話器越しにだが、ニヤニヤしながらハヤテの現在の幸せにちよつと嫉妬する。だが今ぐらいは祝って、後押しぐらいはしてやろう。

「愛は囁かなくてもいい。 ただ二人でどこか行って、いっぱい色んな事話してみな。 今の事とか、これからの事とか。 そうすれば、お互いどうしたいのかが」ちよつと」くらい分かってくるからよ」

『ちよつとくらいしか分からないんですか?』

ああそうだ、と自慢げそうにテルは言う。

「ちよつと話しただけで女の全部が分かると思うなよ? 女つてのはブラックボックスだ。 パンドラの箱だ。 理解したつもりで接していたらどうなると思う?」

『どうなるんです?』

「真冬のテムズ河に突き落とされる。 しかもパンツ一丁、簀巻きにされてだ」

『あつ……』

聞く内容に覚えがあつたのか、察したハヤテは深く言及しなかつた。 今でもこの事を思い出すと、全身から鳥肌が立つ。

ともあれ、

「もういいんじゃないか。 気づいている事に、見て見ぬフリして誤魔化すのはさ」

今のハヤテを行動させるにはもう少し背中を押す必要があった。二人はお互いの気持ちに気付いている筈である。だがナギはツンデレ具合から、ハヤテは過去の罪の念から自身の気持ちを前に出すことが苦手だった。

「素直になれハヤテ。自分の今の気持ちに嘘をつくなよ？ お前は多分、お前が思ってる以上にソイツの事を大切に思ってるさ」

「テルさん……」

言いたいことだけ、言ったこちらに対してハヤテが何かを言いかける。こちらは長く話をするのはあちらの決心を揺るがすだけだと考えたテルは受話器越しに、まだ寝癖が出来ている頭を掻きながら、「元気でやんなよ元同僚」

最後に優しく告げて、電話を切ることにした。

○

あれから一年くらいが経つ、とテルは感慨にふけていた。今年になって何も連絡がなかったのが寂しいが、爆砕したかいの意味で爆発したかのどちらかだ。良い方に転がっていることを願うテルである。

「見よ！ 胡蝶の舞!!」

こちらが回想をしている間に、完全に泉は出来上がってしまった。彼女のテーブルの周りは空いたグラスで埋め尽くされており、飲み放題にしたことを最善の判断だったと思うばかりである。

「泉、そろそろいい加減にしないとまた展示用の水槽の中に突っ込むぞ?。」

「ふいー、ちよつと風にあたってくる。 席外すわ」

もはや突っ込むことは放棄している。こちらも少々酔っている事もあってか、テルは外へと向かった。

なんだかんだで、かつての学友たちとこうして酒を飲みかわし、ワ

イワイ騒ぐのは悪くない事である。このまま楽しい思い出を抱いたまま、この店を離れていくのも悪くはない。本来なら、この場所に寄る予定はなかった。

——ただせめて、今年はその人の元気な姿を見ようと思っただのだ。

冷気に煽られて、息を吸って吐くと先ほどの酔いが若干覚めたか、視界が安定していく。後ろからはいまだに泉たちのどんちゃん騒ぎを窺わせる景氣の良い声が聞こえていた。

「いくか」

荷物はどんちゃん騒ぎをしている間に持ってきた。案外バレないものである。バックれるというのは気が引けるが彼女たちなら許してくれるだろう、そう思っ先を行こうとした時だ。

脚が見えた。酔いと寒さの影響で身を屈めていたからか、最初に映ったのが他人の脚だ。ブーツ、コート、腰辺り、やけに薄い胸部そして見えてしまったピンクの長髪に嫌な予感を察知したがその予感の中したようで。

「久しぶりね、テル君」

真冬の寒空の下、こちらの鼻先に木刀・正宗を突きつけた桂ヒナギクは殺気を込めた笑顔でそう言った。

第129話く変貌したその男く

時は遡る事、数時間前。東京都内某所、東京都を一望できる高層ビルの窓際のテーブルにて、四人の女が集っていた。その内の一人であるハヤテの主、三千院ナギはPSPを起動させながら、この会食に付き合わされることになった者たちに問いかける。

「どうしてハヤテを借りたいのだ？」

隣では、ウエイトレスが客商売の鏡ともいえる接客テンプレスマイルでこちらのテーブルにあるグラスに注がれた。中身は年齢的にもお酒はノーなので、ジュースである。

「うーん、一言で言えば、地雷撤去かな？ マインスイーパー的な」

ナギをこの会食に連れ出したうちの一人、生徒会メンバーの花菱美希も同じくバックからPSPを起動させる。一応食事をするところなのだが、みんな遊ぶ気満々だ。

「またなんかハヤテに変な事させる気だろう。知っているぞ、動画研究部にはハヤテのいかがわしいシーンを集めた動画が眠っているということお」

依然、動画研究部に誘われていたハヤテが一日だけその身を預けたことがあった。しかしその日の夕方、何故かぼろ雑巾のようになったハヤテが返ってきたのである。彼はなんともないと言った感じだったが、これだったらテルを身代わりにしてやった方がよかったと思っただくらいだ。

そのくらいからか、この先輩たちが考える事は常に良からぬことなのではないのかと思っていたナギである。

「別に心配しなくていいさ。なんにしても、地雷を撤去するには爆発させるのが一番さ」

「そうそう」

美希の言葉に乗っかるように理沙が頷いていた。彼女も同じく赤色のPSPを起動させて、

「彼が返ってくるまで、このファミレスで我々が君の相手をさせてもらうのだ」

よし、集会所到着。と、お互いが画面の中に集結する。某ハンティングゲームの続編で、オンライン機能を用いれば、同じゲームを持っている者同士でゲームができるというものだ。

画面内ではナギのツインテの金髪少女が大剣を装備、生徒会メンバーは何故か豚の頭と怪鳥の頭を装備しただけで、後はインナー装備だけだった。

「狩りを舐めてないですか先輩方」

ちよつと頭を搔いてそう言ったナギだが、二人は親指を立てている。分かってくれ、と言わんばかりに笑顔だが、その意図は全く分からない。

「あのー、ちよつとその点に聞きたいことがあるんだけど……」

その会話にこれまで介入してこなかった女がいる。ヒナギクの姉、桂雪路だ。美希たちが言う、ファミレスであろうこの広大な空間を見回して雪路は息を呑む。

「ここは都内でも五本指に入る超高級レストランでは……」

「ああ、だからファミレスだろ？」

金銭感覚の違いを、雪路は感じたのだろう。お金もちの思考と言うのは全く持って理解できない。真昼間からキャビアやらフォアグラなどの珍味が堪能できるこの場所をどうすればファミレスと言えるのだろうか。

「多分あの席の皿にある黒い粒って多分キャビアでしょ？ うわお、お子様ランチに飛驒牛!？」

じゅるり、ごくくん。とどこかの飯を楽しむアニメのような顔に思わず涎が垂れる。凡人にとっては夢のような空間かも知れないが、ここをファミレス感覚で週利用するには、多分雪路の給料なんて霞むくらいの金額が必要なはずである。

「お客様……お飲み物をお持ちしました」

どこかのカードゲームアニメでバイクと合体しそうな顔をした執事服の男が飲み物を置いていく。その男は颯爽と雪路の隣でメニュー表を取り出して見せた。

「お嬢さま方にはいつもお世話になっております……先生もワインなどでもいかがですか」

「……」

と、メニュー表を見た雪路の顔が固まった。ずらっと映し出される商品名の数々。百種類以上はあるのではないか。

次に気になったのは値段。ゼロが二つほど多くない？ といった現象が下の商品に行けばいくほど増えていくのである。

こんなものを年下に、しかも学園の生徒に奢ってもらうなど、流石にマズイと思ったか桂雪路は、

「あ……み、水をもう一杯いいですか？」

「かしこまりました」

雪路は思う。これは大人として、正しくあるべき姿なのだと、決して値段にビビったとかではないのだと。

○

「……なッ！」

闇の遊園地、白銀が作り出した結界内でヒナギクは呆気にとられたようにその目を大きく開いた。

確かにこちらの正宗による我突は白銀の頭部へと向けられていた筈だ。それは距離的にも、ジャンプした後の跳躍を計算に入れたうえで、確実に直撃するものである。

そのはずなのに。

「どうして剣が空中で止まっているか、と？ 簡単な話だ」

眼前の白銀からまたしても笑みがこちらに帰ってくる。ヒナギクが突き出した正宗は白銀の頭部に届くことなく、その刀身をの先を額十センチの幅を開けて完全に停止させていた。

動かない。まるで、強力な腕によってガツチリ固定されているように微動だにしない。

「言っただろう。空間を固定して足場を作れると……その足場は防御にだって使える訳だ」

そう言つて、白銀はちよんちよん、突いたのは正宗の中腹の部分だ。

「この座標に、空間を固定してお前の正宗を止めた……いや、実に危なかった」

「くっ………！」

強引にその拘束を振り解こうとして、ヒナギクの両腕に力が入る。

当然だ、こちらがダメージを負ったわけではないのだから、まだ勝負は付いていないはずなのである。

「残念だが、勝負と言うのはどうの昔に着いている」

まるでこちらの頭を見透かしたかのような返答にヒナギクはまたしても疑問を浮かべる。それでも白銀は、まだ分かっていないのか、鈍い奴だと言わんばかりに肩を竦めると。

「下を見てみればいい」

「下つて……あ」

恐らくヒナギクは気づいていなかったのだろう。分泌されるアドレナリンと、ひたすら上を目指していたという行動が、自分が今どういう場所にいるのかと言うことを忘れさせていた。

地上から約三十メートル。白銀を追っていたヒナギクはようやくその失態を悟ったが時すでに遅し。

「わたし……高いトコ、ダメ」

桂ヒナギクは高所恐怖症だった。

○

戦闘終了。そう心の中で告げた白銀は深く息を着いていた。

だがしかし、目の前から鋭い視線を感じる。それは、年相応に可愛いというものではあるのだが、明らかにヒナギクは殺気を発していた。

「安心したまえ、私の力で君の足場は確保されている」

現に、ヒナギクは重力の作用で下に落下することはなかった。正宗は固定されて動かないままなら、ヒナギクは宙吊りになっている筈である。

だから白銀は親切にも、ヒナギクの足元に正座をして座れるくらいの空間の固定を行い、彼女が落ちないように施した。そう、全ては親切な行いゆえである。

「何が足場よ!!」

怒号が返ってきた。

「下が透けてるじゃない! 私動けないじゃない! この変態! 痴漢! 馬鹿執事!! アナタもハヤテくんと同じで見た目は二ヘラつて笑ってるけど中身はタチの悪い最悪な人間よ!!」

「マラソン大会の事を根に持っていたか・・・そこまでにしておいてやれ。下でハヤテが泣いているぞ」

と、視線を下に移して腕で顔を覆っていたハヤテを白銀は見てもった。やはり、いつの時代でもこの男は不運極まりない。

「はっはっは! しかし、実に気分がいい。罪滅ぼしと言ってはアレだが、未来のお前の事をちよつとだけ教えてやろう」

「み、未来・・・?」

涙目でぺたん、と固定された足場に崩れたヒナギクは白銀からその続きを聞く。

「桂ヒナギク胸部徹底的強化失敗!」つていう新聞の見出しがあったな、大胸筋強化トレーニングマシンのサンプルをやらされていた

お前だったけど、一か月経つても全然変わらなかつたってテレビでネタにされてたぞ」

桂ヒナギクは、未来では超有名人だ。美人に箔がつき、剣道も世界レベルを圧倒する存在となり、その姿はお茶の間などにも取り上げられている。

「いやああああああ!!!」

ヒナギクは絶叫した。未来での自分がこのまま同じスタイルで、不変を貫いているということを知ったのだから。

「しかも成果を聞くときのお前のインタビューの映像、〃これからこれから、まだまだ私には先があるから〃 ってカンペ無視して涙目で言ってたぞ。俺、面白くてまだ録画してるから」

「やめてエ!! それ以上言わないでエ!!」

メンタルというメンタルを削られたヒナギクはやっぱりテルはテルだったというのを認識することになっただろう。未来のテルである白銀としては高校時代に制裁を食らわされていた時期の仕返しできたと言った所だろうか。

「……やり過ぎたかもしれんがな!!」

だが後には引けない物で、ここまでやってしまったらあとはどうにでもなれというもの。覚悟して、次の行動へと移ろうとする白銀だったがその前に。

「色々馬鹿をやらかして悪かったな」

「え?」

涙目だったヒナギクがこちらに反応する。時間が惜しいから、白

銀は言葉をできるだけ、簡単にして言った。

「俺、もうすぐ消えっから。迷惑掛けたことも皆忘れるだろうけど、その前に言っとくぜ」

息をついて、言う。変な顔はしてないだろうか。

「こんな形だけど、勝負出来て良かった……じゃあな会長!!」

○

そう言って離れ落ちていく白銀を空中のヒナギクは見ていた。

去り際の一瞬だけ、彼が元の善立　テルに戻っていたのを。

——俺、もうすぐ消えっから。

その意味は図らずとも、文字通り、この世界から消えるということだろうか。

やはり、最初から善立　テルなどこの世界から存在しなかったことにするというのが目的なのだろうか、ヒナギクは考える。

「どうして、テルくんあんな顔を……?」

だからこそ、分からなかった。白銀が、未来のテルがこの時代で自分を殺す意味を。

どうして去り際に、いつもの学校で見る笑顔をしていたのかを。

「テルさん！　待ってください!!」

下は怖くて見れないヒナギクが音声を頼りに現状を理解しようとする。

「ハヤテ、今動けばヒナギクは落ちるぞ。　私がアイツの足場を維持させてやっているのだ。　私を追うようなら、私は容赦なく術を解除して、ヒナギクを落とす」

今、恐ろしいことを聞いた気がしたが、これも少しおかしい。　なぜこちらを拘束したままにさせておくのか。

怪我ひとつだけでもさせれば、こちらが白銀を追うことは出来なくなる上に、戦力を削ることだってできる。　だが、怪我也させなければ、その場に拘束させるだけでなにもしない。

「もしかして……最初からそのつもり?」

ハヤテが無言になっているというのは下界を見渡せないヒナギクには分からないが、ハヤテもこちらが気になって動いていないはず

だ。

これも、ハヤテを縛る強引な手段だが、ハヤテは怪我をしない。誰も傷ついてはいないのだ。伊澄も操られていたが、命を奪われるような事はされていない。

もしかすると、根っからの性格は変わっていないのかもしれないと、ヒナギクは思ってしまった。

○

「できれば、派手な事をする前に片を付けたいと思っっているんだが……」

「……」

赤い月が見下ろした地上で、向かい合う者がいる。白銀と伊澄だ。

伊澄の見据える後方、ハヤテはやはり、動けないでいた。一部始終を見ていたからだいたい分かる事ではあるが、空中に固定されているヒナギクがいつ落ちてくるか分からない為に、その場で待機しなければならぬ。

「式神の制御、結界の形成……貴方の身体はどうなっているのですか」

辺りを見渡すように、伊澄は問う。常人の者が扱うには、膨大な力を消費する術の数々。伊澄でも、この膨大な霊力を使用すれば、すぐさま枯渇状態になって、身体に異常を来す筈だ。

「貴方は……生きてるのですか？」

「……」

その問いに、白銀はやや間を空けてから答えた。

「生きている。私が死ぬ時は何か成し遂げられなくなった時だ……」

だから、と白銀は組んでいた腕を解く。開戦の合図だと二人が間

合いを詰める。

「お前相手に手加減はできる自信はない。それに、君と違って私はもともと魔力を多く持っていない……長引けば長引くほど、私の方が不利になる」

その懐から何か、邪悪な気配を感じ取った伊澄が思わず息を呑む。まるで冷気そのものが自身に張り付くような寒さだった。

殺されるかもしれない、と正直に恐怖した。その証拠に、いつの間にか戦闘用の札を取り出して、白銀に向けている。

「くう……」

だが、今までの疲労のツケもあってか、霊力の消費による頭痛が来た。いくらなんでも燃費が悪すぎではないかと思う。

このままではまずい。思考を研ぎ澄ませて戦術を練る事も出来なければ、今の霊力で目の前のマジカルな白銀を相手にするには命の危険がある。

どうしたものか、と伊澄が半歩引いた時だった。

「何をしているのですか……!!」

思わず、声を荒げて伊澄は言う。見つめる先は、伊澄の正面に背を向けて立った人物に向けてだ。

「そこで勝負は中断といきましょう。白銀さん、私がタオルを投げます」

黒羽舞夜が、伊澄よりも前に出たのだ。

○

まさしく冷静な判断だという自負を、黒羽舞夜は感じていた。

今日の前で繰り広げられる戦闘。黒羽から見て、伊澄と白銀の戦闘で伊澄の不利は圧倒的な物である。単騎でガチのハヤテとヒナギクを躲してきたのだから、その戦闘力は相当高いものである。

ましてや伊澄に関しては、あまり詳しくはないが、マジカルな力の

使い過ぎで相当疲労しているようであった。彼女自身気づいていないかもしれないが、肩で息をしているのはその証拠だろう。

「なぜ戦いを止めるのか、その疑問についてはある程度分かっているでしょう」

後ろをチラリと見て、鋭い伊澄の視線が背筋を射抜いてきた。先ほど、和解イベントを経た二人とは思えないようなギクシヤクした関係。

「このままでは伊澄さん、貴女は負けます。ええ、圧倒的に。どのくらい圧倒的かというと、リングの上で“まっくのうちっ”コールがかかる位にボコボコにされるでしょう」

比喩としては強引かもしれないがこれくらい強めに言っておかなければ、この頑固者はまだ突つかかっていくだろう。その前に、自分が止めなければならない。黒羽はそう感じていた。

「では、大人しくこちらに来てくれるというのだな？」

首一つ縦に振って、白銀は息を小さく吐いた。それは安堵に似たようなものだった。

「ま、待ちなさいッ」

それを黙ってみてられないのが伊澄であることを黒羽はまだ理解が浅かった。彼女は決めたら梃子でも動かない。それ故に、既に戦闘態勢に入っている。霊力を絞り出そうとしているのか、苦悶の表情で札を宙へと放っていく。

だが、宙に浮遊していた札は白銀が腕を振り下ろした瞬間、全ての札は真上から何かしらの物体がのしかかったかのように地面へと“押しつぶされて”いた。

「この術は……私の知らない物です、未来のテル様はこれを一体どうで？」

「力の根源はキミのものと至って同じものだ。キミは霊力で行われているが、こちらは魔力。それだけの違いだ」

そう言われて、伊澄が目にしたのは白銀が取り出したその黒い棒を

見て、その異質な存在感を感じ取った。鮮やかな模様が走った黒い棒だ。だがこれは伊澄にとつては見覚えのあるものである。

「キミがくれた撃鉄君だ。もうキミの知っている撃鉄君ではないがね」

禍々しいオーラを放つテルの相棒撃鉄君。もともとは鷲ノ宮家の妖怪退治に用いられる近接戦闘武器。光の巫女を近接時の攻撃手段として用いられるはずだったが、生憎伊澄には向かなかつた為、在庫処分も兼ねてテルに送られた逸品だ。

「もはや、これも一つの“生き物”だ。そして私を縛る呪いの産物であり、全ての元凶で、私が未来で得た“真実”だ」

その意味を理解する術を伊澄たちは持ち合わせていないだろう。

これが、未来でテルを変えてしまった元凶なのだろうか。

「済まないな伊澄……一応暴れられたら困るので、ちよつとした拘束はさせてもらう」

腕を翳して、下げた瞬間。伊澄の身体が動かなくなった。なんとか動かそうと身をよじるが、まるで何かに固定されて、その一切の動きを封じられているようである。

「関節部分を固定させてもらう。暫くしたら解けるから安心しろ……それに」

と、二人の視線がある一点に絞られた。それは白銀の腕。変哲もない腕だ。

だがその黒い外套の裾からは少しずつだが砂のようなものが零れ落ちて言っている。まるで身が崩れていくのを物語っているかのように。

「私には、時間が無いのだ」

伊澄がこれを見て、何を感じ取ったか分かる事ではないが黒羽はチンパンカンパンだ。だから突拍子もなく、

「イマジンのな」

「多分違うと思います」

伊澄がしつかりと反応して突っ込むのを見て、白銀が今度は深いため息を吐いた。それは呆れたというものであるのは確かだろう。

「やはり……貴方は」

「それ以上はダメだぞ伊澄」

先を言おうとした伊澄を制するように、白銀は身を翻して伊澄に背を向けた。

「私は、私の意志でこの場所に立っている。これまでの行動も、これからの行動も、全てが私の意志だ」

「考え直しませんか？ この時代では、私も居ます。ハヤテさまや、咲夜、頼れる人が……」

彼を止める為に放った伊澄の言葉に、すまない、と続けて白銀は一言。

「もはや止まれぬ」

そう告げた白銀は黒羽の手を掴んで、動くことのできない三人を置いて去っていくのだった。

第130話く邂逅する過去と未来く

「……マズイッ！」

綾崎ハヤテは自分の身に迫る危険に冷や汗を感じていた。

白銀拓斗が消え去った後、先ほどから動きを完全に停止させていた怪物達がゆっくりと動き出したのだ。殺意むき出しの爪と牙を金切り合わせてハヤテ達に群がるその様はまさしくデンジャーそのもの。

しかし、ハヤテ達は動けない理由があった。一つは拘束されている伊澄とハヤテの頭上に居座る

「ひ、羊が一匹……二匹、三匹」

「ヒナギクさーん！ 大丈夫ですかー！」

先ほどからこうして呼びかけているがこちらに帰ってくる反応はない。漏れている言葉から察するに、羊を数えることで現実から逃避しているのだろう。

しかし、いずれ空中での足場は消えると未来のテルこと、白銀は言っていた。だから、ハヤテは落ちてくるであろうヒナギクをキヤツチしなければならぬ。

だがここでハヤテはもう一度思考を巡らせる。拘束されて動けない伊澄、空中で戦意喪失中のヒナギク、そして動けない自分自身。周りには殺気丸出しの怪物達。

「あれ……これってもう詰んでるような」

将棋なら王手飛車取り、チェスならチェックメイトと宣言できるくらいにハヤテ達の敗北は決定していた。

『シャアアアアツツ!!』

「ちよつと待ってー！ ウエイトツ！ ウエイトツ!!」

怪物達は聞く耳も持たんと言ったように一斉にハヤテに跳びかか

る。 どうして敢えてハヤテから狙われるのか、恐らく自身の不幸体質で集中的に狙われるようになったのだろう。

「も、もう無理……」

迫りくる牙と爪にハヤテが死を覚悟した瞬間だった。いつまでも襲ってこず、触れられもしない怪物達が一斉にはじけ飛んだのだ。

「アイエエエエエエツツ!!」

奇声が木霊し、それと同時に風のような勢いで一人の男が怪物達の頭部を粉碎していく様がハヤテには確認できた。

「間に合ったッ! 第三部完ッ!!」

右手に義手、その手でサムズアップを掲げた男はなんと木原竜児だった。

「木原さん!!」

「やけに騒がしいと思つて急いで来たらやつぱりお前らだったかッ!

何がどうなってるッ!!

現状を確認しながらも、木原は闘争の意志を解除してはいない。

常に周囲を見渡しているかのように周りから迫る怪物たちに応戦していく。

だが、自称格闘家である彼に隙はない。彼を中心にして打倒された怪物で溢れてしまうくらいに、木原竜児の戦闘力は常軌を逸していた。敵を千切っては投げ、千切っては投げるその様は赤子の手を捻るようである。それくらいに余裕だ。

「木原さん、実は——」

ハヤテは先ほどの木原の問いに答える為に、簡単に説明する。

「黒羽さんが白銀さんに連れ去られましたッ!」

「ああん!? なんです!」

蹴りを怪物の頭部に叩き込んで撃沈させた木原の声にハヤテは続けて言う。

「ここは大丈夫です！ 白銀さんを追ってくださいッ！」

「そういう訳にもいかんのやハヤテ！」

倒れている残骸を避けるようにこちらにやって来たのは最近学校に来なかった咲夜だった。ハヤテは相手が本物の咲夜なのかを確認する必要がある。

「咲夜さん!? 殺されたんじゃない?！」

「残念だったな、トリックだよ……ってんな事言ってる場合かア

——ッ!!」

「ぶべえ——!!」

まるで流れるかのようにハヤテの腹部に咲夜のとび蹴りが決まったのを見てハヤテは確信する。これは間違いなく本物の愛沢咲夜なのだ。

「敵が湧いてきやがる。 数も桁違いだ……その状況でお前らを置いていけねエ——って会長はどこだ!? お前らが来てるんならアイツも居るだろ!！」

「……」

ハヤテは首を数度だけ角度を上げて木原に上を向くように促した。木原は視線の先にいる空中で動けなくなっているヒナギクを見つけると。

「ドラゴンボールなら日常的な光景だけど、アイツいつからサイヤ人になったの?！」

「おう、伊澄さんがパントマイムやってる人みたく固まってどうしたんや?！」

「さ、咲夜……冗談を言うのはそこまでにして」

カオスになりつつあるこの状況でハヤテは頭を搔いて木原の方を向いた。

「えーっと、取り敢えずなんとかしてもらえますか、この状況」

周りで便りになりそうなのが実際は木原だけだ。ハヤテは懇願するしかない。対する木原は特に抵抗といったものは無い、むしろ喜ぶように木原は構える。

「任された、別に……アレを全部倒してしまっても構わんだろ？」
唐突な死亡フラグを言い放った彼は湧き出てくる怪物達に単騎で挑むのだった。もちろん、突進時の掛け声はというと、

「アイエエエエエツ!!」

これであつた。木原の単騎による戦闘が始まり、吹き飛ばされていく怪物達を見ながら、ハヤテは思い、口にする言葉があつた。

「となると……やっぱり黒羽さんを助ける事が出来る人つて」
この状況で白銀に向かうことができる人物を浮かべてハヤテは祈るしかなかった。しかし、彼がこの場所で事情を全て知った上でまだ生きているのなら、おのずと白銀の場所へと向かっている筈である。

まるで運命、とハヤテは思う。決して出会うことのない未来と過去の人物。その対決は決して不可避な物であり、それを止める術などは存在しない。仕組まれた戦いのように、物語が進んでいくようだ。

「テルさん、黒羽さんを頼みますよ」

喧騒の最中、どこにいるか分からない執事の事を呟きながらハヤテは両手を広げて空中からヒナギクがいつでも落下しても対応できるように構えるのであつた。

○

空が異変を起こしていた。肌にまとわりつくかのような冷たい風が吹き始め、暗雲が立ち込め、今にも落雷が起きそうなくらいな変化を起こしている。木々は吹き荒れる風に身をしならせ始め、とに

かく落ち着かない、不安定といった状態だ。

「この遊園地の中心……でしうか」

赤レンガで出来た噴水のある場所に黒羽舞夜と白銀拓斗はやって来ていた。ハヤテ達や伊澄から白銀から手を引かせる為に自らを犠牲にした訳だが、一つだけ懸念することがある。

……待機していた怪物達の事を忘れていました。うっかりです。

周りにいた怪物達が黒羽たちが消えた後に残ったハヤテ達を襲わない保証はない。それを確認することを忘れていた黒羽だった。

「安心したまえ、ハヤテ達なら大丈夫だ。今、とんでもなくおせっかいな奴ら」がハヤテ達と合流した。死ぬことはまず無い」

こちらの不安をくみ取ったかのような白銀の言葉に一瞬胸を撫で下ろした黒羽である。

「どうして私の考えている事が分かったのですか？ NTならぬ、エックスラウンダーの力でもお持ちで？」

なあに、と彼は小さく笑って噴水の縁石に腰を掛ける。

「君の表情は腐るほど見てきたつもりでね、ある程度は読み取れるようになったものさ」

と言っている彼の表情には焦燥という二文字を表すかのように額から汗が出ていた。肩で息をするその様は先ほどハヤテ達を圧倒したような勢いを感じさせないほどに衰えている、そう感じた黒羽だった。

「どこか具合が悪そうですね。お腹でも下しましたか」

もっと気の利いた言葉を掛けられなかったのかと自身を戒めるが白銀は構わないと言ったように小さく笑い、

「難しい話じゃない」

続けて彼は右手を見る、それはつい先ほど目の当たりにしたである

う彼の身体から溢れ出る砂。

「私の存在が消えかけているのだ」

彼はそう言った。

○

白銀拓斗は自分の身に起こっているこの事象を分かりやすく説明することにした。それくらいの余裕はまだあるはずであるからである。

「もともと、私がこの世界に来た時点でこの現象は起きていた。そうだな、この世界に来たのが一か月ほど前だろうか」

痛みというものは感じない。だが、足元が浮足立つような感覚に襲われてはまた地面に叩きつけられるという状態はひどく気持ち悪いと言いつつ表される。

「私が先ほどハヤテ達に振るつたこの力は無限ではない。使い続けられれば、いずれ枯渇してしまう」

「燃料切れと同じものでしょうか」
その通りだ、と首を縦に振って見せる。

「休めば回復するのだが、この過去ではその力はあまり補充されない。それは何故かと言うとこの時代では回復するための媒体の力が弱すぎるからだ」

「媒体？」

「植物が水を糧にしてエネルギーを得るように、私も“あるもの”を糧に力を補充している」

そのある物とは、と一瞬その言葉を言うのをためらった。これを言えば、間違いなく批判を食らうのは間違いはない。だが、彼女は知らなければならぬのだ。

未来の善立 テルが、未来では一体どういう存在なのか。息を吸

い、伊を決して彼は言う。

「私は回復の媒体としているのは……」 “人の死”だ」

○

なんとも忌々しい力なのだろうか、と今更ながら白銀は舌打ちをした。

「簡単に言えば、人が死ぬことによつて私の力は補充されるということだ。それは数が多ければ多いほど回復する」

淡々と述べるが恐ろしいものである。

「この時代では、人があまり死なない……だが、未来の世界では人が多く死ぬのだ」

「今でも紛争が起きて、少なからずとも日々死者が出ているような気がしますが」

「それとは比べ物にならない。いいかよく聞け——これより数十年後、資源の取り合いで戦争が起きるのだ」

「戦争？」

「そうだ。それは普段我々が使っている“水”を取り合うための戦争だ……そのせいで多くの人が死ぬことになる」

自身が見てきた未来は、黒羽に説明した通りだった。今よりも資源を浪費した為に、地下資源に眠る水脈を争って世界ではその水を奪い合うための戦争が各地で勃発。旅先でテルが巻き込まれたいざこぎもすべてはこの水を巡る戦争によるものだった。

「ペットボトル程度の水が数千円となつてな、これじゃあお湯を沸かしてカップ麺も楽に食えん」

「えーっと、一つ質問よろしいでしょうか」

「なんだ？」

「ジト目で手を上げている黒羽にその目を向けると彼女はその手を下して、

「貴方は何歳です?」

「それを聞くのか?」

「たしか前は二十五だとか言っていましたけど、絶対その話を聞く限りだと貴方の言っている年齢が嘘のように聞こえてまして・・・ええ、ハッキリ言えばサバ読んでるでしょう」

「何を言う。私はまだまだぴちぴちの二十代だ。大人になってもいまだに駄菓子の味が忘れられない、カルメ焼き大好き人間さ」

「うわ、ガキくさ」

・・・ストレートだなあ。

もう少し、こう、オブラートに包むことはしないものか、この女は。と傷心するがそれは考えるだけ無駄なものだ。目の前の少女、黒羽舞夜とは非常に超ド級の毒舌で、突きこめる場所を見つけたらメリケンサックでボディブローするくらいにえげつない少女だからだ。

「あとその喋り方、率直に申しますと結構キモいです。 “私”、“俺” とか結構あやふやになってるのでちゃんと統一してください」

なので、追加攻撃もお手の物。 たまらず白銀は苦笑いしてしまう。 なにもそこまで指摘しなくてもいいではないか、と。

「ホラ、その、口調が変わってしまったのは・・・血沸き肉躍る戦いの中で闇の中に葬った昔の若い時の自分が姿を見せる的な演出・・・分かるか?」

「なるほど、要は厨二全快——」

「やめろオー!」

やはりこの女は悪魔だ、鬼だ。とどこぞのソーシャルゲームの事務員の如き恐ろしさを過去に戻ってまで退官することになるとは、と白銀は実感する。

「フフ・・・リアクションを見る限り、中身はテルですね、貴方は」
表情を崩さずにそう言っ、彼女も白銀の隣に腰を掛ける。

ふと横顔を見て、凜としたその佇まい、その姿は過去の自分が何度

でも見てそれが人形のようなだと勘違いしたのを思い出す。ナギとは違って、静かな場所で一人ひっそりと暮らす国を追われた貴族。そのイメージが浮かんでいた。

「あの……」

そんな事を考えていたからか彼女の言葉に遅れた反応をすると彼女は数秒ほど明けてから、こちらを向かず、ただ下を向いて口を開いていた。

「私を救う事に、意味なんてあるのでしょいか」

○

「伊澄さんから聞きました。テルを殺す事が、未来で起こる私の死を回避することができると」

操られていた伊澄から聞いた事が本当なのかどうかは黒羽には分からなかった。途中まで半信半疑で、この人物が未来のテルなのかどうでさえ、疑っていたくらいだ。

だがその疑念を吹き飛ばしていったのは彼と先ほどの会話でのやりとりや、怪物達の攻撃を中断させたりしたのを見て中身がテルだということ黒羽は確信したのだ。

「この時代であの善立、テルを殺すということ……それはつまり、未来の貴方を殺すという事」

簡単に言えば、存在を消す。それと同義。ヒナギクが言っていたように、過去の己が消えるという事は、未来の白銀の存在が無かったことになるのだ。

「己の存在を消してまで、私の命を救う……そんな価値が、この私にはあるのでしょうか」

なぜそんな事を聞くのかと、そう思うのは黒羽の中にある己に対する一つの推測だ。

「私は……バケモノです」

言おうとした時に口が動かなくなっただが、なんとか言うことができた。しかし、自分自身を怪物と認めるといふのは意外にも精神的に

来るものがある。

しかし、伊澄との戦いで自身の目が目にしたものを回復や魔法、そんなものを抜きにして説明するならどうというキーワードが浮かんでくるだろうか。 どう考えても己が人の枠から外れた領域にいると考える以外に他はない。

「.....」

白銀は黙っていた。 だが、黒羽にとってはなんとしても問いただしておきたいものなのだ。 なぜなら、未来の彼ならば、この時代で一部の人間が隠している自身の秘密を知っている筈である。 過去も、そして未来の事も。

「いつ頃気づいた？」

返ってくるのは先ほどの自身の言葉を肯定するものだ。 だがそれに動じず、黒羽は返す。

「つい先ほど。 ここを訪れる前に.....」

そうか、と白銀が予想外と言った表情の後に目を伏して言う。

「すまない」

「謝るのは、何故です」

「君には事情を何も知らせないまま、事を終わらせるつもりだったからな」

「ここに私達が居たのに、よくバレないと思いましたがね。 その浅はかさも、まさしくテルです」

こちらのちよつとした罵倒に、白銀は小さくため息をつく。 悪態をつくことをしないのはもはや何回も経験したからだろうか。

「だが.....何を知りたい」

そう切り返してきた白銀に、黒羽の鼓動が脈打つのが感じたが、怖気づくことなく、彼に言う。

「私に関すること、全てです。 記憶を失う前の事も、私の存在している意味も」

初めて、口調が強くなったのを感じてか黒羽は目を閉じてから心を

落ち着かせる。緊張を振り払おうとしたのだろうか。己がまだ心が弱いことを悟った。

対する白銀は腕を組んだままだ。なにか考え込むように目を閉じたままだが、やがて覚悟を決めたように口を開いた。

「……後悔するぞ」

「貴方が消える前に、知る事が出来なくなることが一番の後悔になります……それに」

間を開けて、言う。

「いつまでも、逃げていてはいられません」

強く、意志を持って告げたのはこの先、聞いた内容に自分が心を折られないように自身を鼓舞するためだ。どんなえげつない過去、未来の内容にも動じない覚悟を持つ必要があった。

「ふう……分かったよ」

その覚悟が伝わったのか、白銀は肩を竦める。やれやれといった表情で組んでいた足を外すと上半身を屈めて、両肘を自身の脚に立て手を組んだ。

「ただ、これだけは覚えていて欲しい……これを聞いて、どう思っている、どう動くかは、君次第だ」

そう言つて、白銀拓斗は語りだした。『過去』、『未来』に関わる黒羽舞夜の全てを。

○

その全てを理解させるに時間が掛かると踏んだ白銀がとつたのはいかに要点を押さえて、彼女に伝えるという事だった。こちらとしては時間がない上に、これからこの時代の善立 テルを始末しなければ

ばならない。それを考えての判断だった。

少しだけ不安である。 マイナスなイメージしか伝えられていないかどうか。 これからの彼女の行く末を暗くしてしまうだけではないかと案じた白銀だったが、

「なるほど、 壮大な…… お話ですね」

「意外だ…… 正気を保っていられるのか」

「フツでしたら、無理でしょう。 でも、未来のテルが言うのなら…… 本当の事なのだと、理解できます」

彼女は空を見た。 釣られて見上げたその空には赤い月がある。

妖しく光るその月を見て、 黒羽は質素に、いつもの口調で言う。

「やはり私は…… 皆とは、 “違う” のですね」

「黒羽……」

口調こそ、いつもの黒羽だろう、だが、善立テルの頃に彼女の執事を担当していた己だからこそ、今の彼女の心情を理解できる。 彼女は今、己の事実には驚愕し、その境遇に絶望しかけているのだと。

今更、嘘だとも言うことは出来ない。 白銀が口にした内容は、全てが現実。 そして、己が変えられなかった未来なのだ。

「不思議な力を使える貴方なら…… 記憶の方を元に戻すことも出来ますか？」

「黒羽…… これ以上は、ダメだ」

心に傷を負った上になお、追い打ちをかけるような事を、自分はお出来ない。

確かに、白銀の持つ力を使えば、彼女の記憶を取り戻させる手助けくらいはできるだろう、だがそれをすれば確実に言える事がある。

「お前の心が、壊れてしまう」

「受け入れるつもりではありません。 耐えられればですが」

……そこまでしなくても、いいんだよ！

なぜ、頑なに意気地を張ろうとしているのか。無理なら無理と言えればいい。だが、黒羽舞夜はそうすることをしない。彼女は身を削って、自身を知る事で、前に進もうとしているのだ。そのためには力強い、誰の言葉にも揺るぐことのない覚悟というものが必要である。

彼女は、既にそれを体現したような存在だったと、白銀は思い知る事となった。

……そんな彼女に『救われた』から、今の俺がいるのか。

ならば、と白銀も覚悟を決めた。彼女の覚悟に答えるかのよう
に、縁石から立ちあがって、黒羽の正面に立って見せる。

「……ちよつと強引なやり方かもしれん。頭痛がするだろうよ、暫くな」

「構いません」

そう言った黒羽の頭に、白銀は右の掌を被せるように乗せた。目を閉じて、自身の力を集中させる。

人間の記憶が失われた時に戻るのはちよつとしたきっかけが原因だ。自身に関連する物を見る事が出来たら何でもよい。結果、それが連鎖して、枝木のように広がっている記憶を呼び起こす要因となる。

これから白銀が行う事はそれに似たような事だ。魔力を直接流し込むことによって、記憶の大部分となつている脳の神経を呼び起こす。

「あぐッ！」

一瞬だけ、弾けた様に手が光ると黒羽の表情が苦痛に歪んだ。これは痛みを伴う激痛の筈だが、彼女は眉を動かしたただけだ。大の

大人でさえ泣き叫ぶであろう痛みに完全に耐えきっている。

「……はあ、はあ」

「すぐには戻らない……だが、その時は何かしら体に反応が出る筈だ。命に別状はないし、安心してほしい……」

そう告げ、息を切らす彼女の頭を知らずのうちに白銀は撫でていた。

「痛いのを……よく頑張った」

辛い事をさせてしまったと、白銀に罪悪感が生まれる。こうやって苦しませるために、自分は未来から過去に来たのではないのだと。

……俺は、本当は……俺が見たかったのは。

そう思い、黒羽の頭から手を離そうとした瞬間だった。

「おい」

横から聞こえた声には、確かに殺気が込められていた。それと同じに、黒羽の頭に伸ばしている自身の腕が何者かに『掴まれて』いるのを、白銀拓斗は認識する。

酷く、力強い握り方だった。腕の肉を潰して、骨も砕かんと込められたその握力、自分はそれに見覚えがある。いや、もはやその名を問うことも馬鹿らしく思えてならない。

「その手を離せ」

殺気が一層濃くなった瞬間だった。人が放つものとは到底思えない動の気に当てられた白銀が腕を振り払い距離を取ろうとしたその刹那である。最早避ける事かなわぬ剛腕が、白銀の頬を抉り、己の身を数メートル先まで吹き飛ばしていた。

「俺の主（あるじ）に障るな、元・俺」

殴った拳を振った執事服の男、善立　テルはそう言った。

第131話く過去を消そうとする未来く

真つ暗な部屋の中で鳴り響く音がある。カタカタと音を立てるそれはパソコンのキーボードを打ち込んでいく時の音だ。

「んー、やっぱり駄目でしょうか」

いざ決戦が始まるという最中、そんなことも知らぬ三千院家。それぞれの使用人たちは、各々が役目を果たすべくこの屋敷で仕事をしている真つ最中だった。マリアもその一人である。

今マリアは特別な事務仕事の途中だった。この部屋は少々特別で、屋敷のごく少数の者しか知らない秘密の場所である。あのハヤテでさえ、この場所は知られていない。

「パソコンの画面見すぎたせいでしょうか、ちよつと目がしばしばします……」

周りのカーテンを全て締めて日差しもシャットアウトして、パソコンの画面を見ているのが原因なのは明白だろう、と目尻に手をやって少しばかり刺激を与えてあげた。

目の疲労は老化の証、というのをテレビでやっていたのを思い出して気落ちしかけたが、目的を思い出して再び画面へと視線を戻す。

この部屋の使用用途は、主に情報収集の為である。三千院家に敵対する勢力と組織の情報を世界中からかき集めるための設備がこの部屋には設置されている。確かこの周りにある器具だけでも億単位の金額が掛かっている筈だ。

……ハヤテくんが知ったら気絶しますね、ええ、絶対に。

ハヤテが泡を吹いて倒れる様が容易に目に浮かぶマリアだった。金銭に関しては人一倍に敏感な彼ならば予想がつくものである。

マリアがこの部屋にて情報収取を行う理由は、ある事を調べ上げる

為だった。

「白銀さんの情報がまったく出てきませんね」

三千院家と愛沢家の間で一定の期間に設けられた執事交換研修。テルと入れ替わりにやって来た白銀拓斗について、マリアは調査中であつたのだ。

執事としての出来栄は最高クラスだ。ハヤテや自身、本家の執事たちとも同等の実力を持つ彼は申し分ない。この研修が終わっても、手本としていきたいとも思っている。

だがその一方で。

「やっぱり何か怪しいんですよねー」

キーボードに文字を打ち込んで、ファイルを開く。数百以上はあるであろう男性の写真が羅列されていた。これは東京都の練馬区に住む男性のリストだ。その中から白銀拓斗という人物と一致する写真をクリックして、画像を検閲。

マリアが調べて疑問に思ったことは、この白銀拓斗という人物の顔はこちらにて執事研修をしている長身、白髪の男性とはかけ離れた脂のつた中年男性の写真だった。

明らかに別人である。

……しかも三千院家の総力を挙げても、どこから来たのかも分からない人。

最初は日本語の上手い他国のスパイ、もしくは暗殺者なのかと思つていた。三千院家のデータベースにて調べ上げられる物は調べた筈だ。

だが、それでも白銀拓斗と名乗る白髪の男がどこから来たのかをマリアは分からない。もちろん、総力というのは本家にも捜査の依頼をしている訳だが、三千院 帝（さんぜんいん みかど）から数時間前に連絡をもらい、

『ぜんぜんダメじゃ。ワケワカメ、それよりマリアよワシの新しいアイドルモノの二次創作小説見て貰えんか？ タイトルは“モブライブ!!”とあって——』

と、捜査の依頼とは全く別の事を口走り始めたのでマリアはしたたかにその電話を切った。

「テルくんを狙ったかのように追い出すようなやり方……別に悪い人には見えないんですけど」

基本的に善人には見えたマリアだが、執事交換を促すまでの流れと、直後のテルへの仕打ちなどはマリアもナギや咲夜を通して把握している。明らかに茶化すにしてはやりすぎだ。それを見過ごせないのである。

……ええ、別に他意はないのです。同じ職場の同僚として、ですからね。

小さくため息をつく。進む見込みのない捜査をしていてはこちらが本来こなすべき仕事もこなせなくなってしまう。いったん切り上げて、元の仕事に戻ろうとパソコンをスリープ状態にした時だった。

『ニャー』

「あら、シラヌイ」

出口の扉の隙間からの猫の声に気付いたマリアが電気を手元にあつたりモコンのボタンを操作して、部屋のカーテンを動かした。外はもう夕方である。それでも数時間ぶりに見た外の光は真つ暗な部屋に閉じこもっていたマリアの目には十分な刺激を与えていた。

『ニャ』

ふと足元を見ると、シラヌイがちよこんと座っている。尻尾を振って、愛らしくそう鳴いたのを見て、マリアは聞いてみた。

「どうしたの？ お腹でも空いた？」

そう言っつてシラヌイを抱き上げた。毛並はいつも黒羽がブラッシングしているらしく、丁寧にされていたからか、艶のある綺麗な毛並

であった。マリアがシラヌイを両手で抱えて高く持ち上げる。その図を簡単に説明するなら高い高いをするようだ。

「シラヌイ、私実はどうしても暇なんですよ」

『ニヤン』

どうした？ というニュアンスで受け取ったマリアは続けていく。

「今日はテルくんもナギも遅くなるって言ってましたし……」

『ニヤ』

「怪しい白銀さんも休暇貰っていないし……」

『ニヤ……』

「クラウドさんはいるかどうか分からないし……」

『ニヤ……』

「やっぱテルくんとかいないと、三千院家はフィーバーしませんね」

……私は猫相手に何を愚痴ってるんでしょうか。

自身が猫相手に恥ずかしいことを喋っている事に、今更ながら気づいた気恥ずかしさからシラヌイから目を逸らす。

『ニヤ……』

「やっぱり……シラヌイも寂しいの？」

問いに答えるように、シラヌイからの返事はある。シラヌイはテルを気に入っていて、彼の頭を見ては乗っかろうと、何度もよじ登ろうとしている。子猫なので、テルの頭に自力で上がる事ができないのを見て、いつもテルが仕方なくその頭の上にシラヌイを載せる光景はいつ見ても面白い。単に、テルが遊ばれているだけなのだ。

……あと一か月かぁ……長いですねえ、ホントに長い。

研修が始まって二週間、あと半分は残っている。最初はいつも通り仕事していればどうと言うこともない日数である。一か月が長いと思った事はこれが多分初めてではないだろうか。

「シラヌイ、そろそろご飯でも食べますか？ 今日クロマグロの缶

詰ですよ」

『にやにや!!』

好物の名が出たのを聞いて、歓喜にの鳴き声をシラヌイがあげたのを聞いて、他のペットたちの事を思い出す。どうせなら、全員に食べさせてあげなければ、と。

「よいしょ、と」

シラヌイの身を抱き寄せて、マリアが振り返った先には夕日。もうすぐこの夕日も暮れて、夜になる。いつも通り仕事をしていれば、また日は変わるのだ。これがあと残すところ14回くらいか。

「早く帰って来ないかな」

『ニャ〜』

マリアはひたすら待つのである。この三千院家に帰ってくる人の事を。

○

場所は戻り、白銀拓斗の結界内。白銀拓斗を殴り飛ばした善立テルはその拳を解くと、即座に横で息を切らしている黒羽へと駆け寄った。

「大丈夫か? おい」

「テ、ル・・・?」

うつつらうつつらと瞼が上下に動いている。息も若干荒いし、体力の消耗が見られる。そのせいか、瞳の方に力がない。

「ヒデエツラだ・・・こりやあと20分で死ぬな。オロC買って

こようか? 元気ハツラツしようぜ」

「・・・チツ」

「舌打ち・・・だけ、だど?」

本来の黒羽ならここで舌打ちに加えて無言の手刀が繰り出されるほどのツツコミを披露してくれるはずだ。だが、今回はそのキレが

まったく感じられない。それほどまでに余裕がないというのか。舌打ちだけでも十分傷つく要素ではあるのだが。

「無事ここまでたどり着くとは、大した奴だ」

視線を元に戻すと、先ほど殴り飛ばした白銀が起き上がっていた。口元を切ったのか、そこから流血が見られる。だが、それもあまり気にしていなかったのか軽く拭うだけであとはいつものように小さく肩を竦めていた。

「おかしいな、さっきので仕留めた筈だったんだけど」

「なに、頑丈なのが取り柄だな。未熟なお前の技など効かん」

余裕そうに喋るその様に眉間に皺が寄り、腹の底で業、と燃え上がる物を感じた。

「そーかそーか、だったらもつとヤベーのくれてやるよ。さっきの俺、全然全力じゃねーから」

「笑わせる。言っておくが、俺もさっきは本気じゃなかったぞ」

ほう、とテルと白銀は歪んだ笑みを浮かべて、

「俺は五割だった」

「私は三割」

「いや二割五分ッ」

「.....」

途中、黒羽から、お前ら自演乙やってないでいい加減に話進めろよ、という痛々しいものを見るような視線がこちらに送られているのだとお互いが理解して、つまらないメンチの切り合いをここでいったん終了させる。

「答えろよ未来の俺。なんでコイツを助ける為に俺を殺す必要があるんだ」

「答えてあげよう過去の俺」

間髪いれずに白銀からの返答がくる。彼は済ました表情で距離を縮める為にこちらへ歩み出した。

「お前が消える事で、救えなかった者を救える未来へと向かう事ができる.....私が下した未来への選択は、間違ったものだったッ」

「なに——ツツ!？」

気づいたときには、既にテルの目の前に白銀はいた。瞬間移動、そんな事を思わせるかのような現象について今は考える余地はない。

今考える事は、白銀の攻撃をどう躲すかだろうかだ。

繰り出されたのは、意外にも手刀。貫手の構えでこちらの身体目がけて、打ち込んできている。冷静にするように、鉄パイプで迎撃を試みる。流石に生身の腕に鉄パイプを当てられれば痛いのが向こうの方だろう、そう思っていた時期が、テルにはあった。

丁寧に狙ったのは突き出された中指の腹の部分、このままいけば白銀の指はあらぬ方向へと曲がるだろう。無謀とも呼べる攻撃方法に何か裏を感じさせるがテルはこのままいく事に何も疑問を持たない。

鉄パイプを一気に振り下ろしたその直後だ。テルは信じられない物をその目で見た。

「——は？」

テルは驚愕した。間違いなく聞いたのは、金属音。鉄パイプで殴っているこちらが生み出したのではなく、明らかに殴られた白銀の手の方から聞こえた重々しい金属音。その証拠に、反動で途轍もなく固い物体を叩いたときに感じる手の痺れがテルを襲う。

「鉄で出来てんのかお前はッ!？」

「よく言われる」

距離を取ろうとバックステップで下がるテルに対して白銀は追撃の手を緩めない。もちろん、追撃の手段は手刀。今度は両手でテルをしつこく狙う。

「おおッ!!」

脚を止めてしまったのが失策だった。本来なら構わず躲しきるために下がる事が必要だったが、立ち止まったことで白銀の攻撃の嵐

を受けるという状況に陥ってしまふ。

当然、鉄パイプでその手刀を捌いていくが一撃一撃が凄まじく重く、鉄パイプを持つこちらが一発一発の衝撃に武器を落としてしまひそうであつた。

殺傷能力の差は歴然である。白銀の貫手がこちらの頬を掠めただけで皮膚が引き裂かれ、出血する。もはや既に刀の領域である。

「功夫（クンフー）が足りないな」

それだけの単語だけで済ませるのは説明不足な気がするが、悠長にしている場合ではない。白銀の手刀による戦法は鉄パイプと言う長物の武器よりも接近戦向きな物である。テルも近距離だが、白銀のはリーチが短い分小回りが利くのでテルよりも手数の方を多さを生かせる超接近戦に特化したものだ。

「なら、その腕を叩き折るまでよッ」

攻めに転じて、手首の部分に横水平に鉄パイプを振りぬいて見せるが白銀は避けるどころか微動だにせず、

「フンッ」

鼻息一つと共に、片腕でその一撃を受け止めて見せた。

「弱い……」

何か害虫を噛み潰したかのように口元をゆがめると、いつの間にか構えられていた白銀の拳がテルの腹部を目がけて突き出されていた。貫手ではない、拳を作っているのが殺傷能力はないかもしれないが鉄パイプを素手で受け止める強靱な腕だ。それを食らうのはマズイ。

避けなければ、そう回避を試みたテルが背後に感じた違和感。

「あり？」

後方へ飛ぶことで拳を避けようとしたのだが、まるで壁があるかのようにそれ以上、後ろに下がる事が出来ない。ゆえに、回避することもままならず避ける事が出来たであろう白銀の拳を

「ぎっ……!!」

食らう。鉄パイプを受け止める事が出来る強固な腕が生み出すボディブローをまともに。しかも腕を捻って溝尾の部分に捻じ込んでくるあたりがタチの悪さか。

突き刺さった拳を引き抜くと、にい、と笑みを浮かべた白銀がテルから距離を取っている。挑発しているのか、痛みを感じるよりもその行動に怒りが湧く。

「て、テメエ・・・なんで」

攻めるのを止めた、と言おうとした時だ。白銀の離れたその真意をテルは身を持って知る事になる。直後、胃から食道、喉へと競り上がってくる異物に気付いたとき、咄嗟に口を押えようとしたが最早手遅れだった。

吐いた。

口から噴出した物をは全てこの遊園地内で胃の中に入れてきたものである。焼きそば、ポップコーン、チキン、なんか甘そうなドーナツ。空腹だったのを理由に暴食したのが裏目に出てしまった。

「おええ・・・」

吐いた後の妙な感覚があった。頭の中がボーっとして、目の前が霞む感覚。風邪を引いたときなど、体調が悪い時の嘔吐の後と同じだ。

今回は激痛も相俟って思わず膝を地面についでいる。吐瀉物との距離が近づいた為にテルの鼻に自身のグロテスクな元・食べ物臭が襲いかかる。とてつもなく臭い。

「情けない男だ」

白銀の一言の直後、放心状態同然のテルの顔面を強烈な痛みが襲った。白銀の足裏によるヤクザキックが炸裂したのである。受け身も取る事もままならず、残りカスとなった吐瀉物を辺りにまき散らしてテルが地面へと横たわりるのは必然。

「いかに未熟だったかが分かる」

そして、追撃もまた必然。

「過去の俺がいかに弱かったか」

横たわるテルの視線、ちょうど目の前に白銀の足が見えた。彼はこちらの空に向かっていている肩の部分を足で押すようにして、テルの身体を仰向けにした。

「脆弱ッ」

顔面へと突き刺さる右足。 ストンピングという奴だろうか、曖昧な思考しか出来ないのも吐いた後だからかもしれない。

「貧弱ッ」

白銀の足が顔に踏み込まれるたびに、こちらの顔面の骨全体が軋む。 全力で踏みつけられているのだ。 しかも相手はブーツだ。破壊力は計り知れない。

以前テルが呼んでいた格闘漫画にこんな事が掛かれていた。 横たわっている大人に全体重をかけて顔面を踏みつけてれば、小学生でも勝つことができるらしい。

「かつ・・・へっ」

テルが激痛を感じながらも心得ていたのはこの状況でも最低限の怪我を回避することだった。

顔面を強打されるなどで一番恐れられる負傷は間違って自身の舌を噛み切らないことだ。 下手すれば残った舌が丸まって気道を塞ぎ窒息死なんてよくある事らしい。

それを防ぐようにして歯と歯を噛み合わせて舌をできるだけ歯の付近に置かないように喉奥まで引っ込ませていた。 だが、それだけではちゃんとした対応が出来ている訳ではない。 こうして踏まれている間は確実にダメージが身体に刻み込まれているのだ。

……か、体が動かねエ。

溝尾への一撃とゲロというコンボは予想以上にテルの体力を奪っていた。指一本動かせない等訳ではない。だが、今まさに与えられているスタンピングのダメージが蓄積されているのだ。

「まだやるかい？」

もう顔面の攻撃は止み、今は足の裏全体がテルの顔面を圧迫している。見事に踏みにじられている状態だ。途中、足を動かしている。なのでそのたびに靴の固い部分が顔にグリグリと押し込まれている。

正直、痛いとかそういうのを表現する範疇のものではない。今の白銀の言葉すら遠く聞こえ、視界も顔が腫れあがっている為か、よく見えない。

「そうか」

何を勝手に納得したのか、白銀の足が持ち上がる。すると、何かやけに禍々しい棒状の何かを取り出した。恐らく最後のトドメでもしようというのか、そういう意図は簡単に分かる。

「お前が諦めてくれるなら助かる。こうすれば黒羽も、未来で悲惨に会う人たちが多く救われるのだ」

そういうものなのか？ と考えてしまうのは、ダメージの深さから来るマイナスな思考ゆえのものだろうか。

自分が死ぬことで“未来が救われる”その言葉を聞いたとき、未来の自分は一体、どんな絶望を背負ってきたのだろうか。

黒羽が死ぬだけでは終わらなかったのがテルの未来だ。目の前の男は身が裂けそうなほどの苦痛を背負い、抗うが為に未来を超えてきた。そして今、過去の自分を殺してまで未来の結末を変えようと

している。

この時テルは思ってしまった。今の自分が敵わない程の、未来の自分が見た未来が、己の犠牲一つで救われるなら、安い物なのではないのか、と。

そうしたら、妙に納得してしまった。そうすれば少なくとも、黒羽だけは助かる事が分かっているのだから。だから、抵抗する気も自然と無くなって体が死を受け入れようとし始める。

逆手に持ったその棒が狙いをこちらに付けたのが分かったが、全く避けようという気がしないのも、そのせいだろうか。

「覚悟」

何かが振り下ろされてくるのがぼんやりと見える。全体がスローモーションだ。だが、それが途轍もなく殺気を持っているのを感じたゆえに分かった。あれを食らえば、確実にこちらは死ぬ。

だが、痛みなど無い筈だ。それを感じる事も出来ないほどに感覚というものは麻痺している。多分、もう既に刺さっているのかもしれない、そんなギャグを考えていられるくらいにテルは冷静だった。

まだか？ と、眼を完全に閉じていたテルは死の瞬間と言うのをひたすら待っていたわけだが、ソレはどうやら一向に訪れていない。心臓は動いているし、痛みも感じている辺りはまだ自分が完全に生きてるということを教えてくれていた。

身を起こそうとする、が、やはり体は動かなかった。だが今回の動かないは“違う”。痛みによって動かないではなく、上から何かが乗っかっている為に動かすことが出来ない。

疑問に思ったテルの眼が、現状を確認すべく薄目で開かれた。同

時に、痛みでやられていた全身の筋肉が機能して、テルを覚醒させていく。

眼が認識したのは人が居たということだ。白銀ではない、別の誰か。

「何をしてるか、分かっているか」

「……分かってます」

己の耳が覚醒して聞いた言葉は白銀の物だ。テルは、完全に覚醒した視界で目の前にいる人物を見て、驚愕する。

「でも私は、この人を死なせたくはありません」

黒羽舞夜がテルを覆いかぶさるようにして白銀のトドメを阻止していたのだ。

第132話く未来に立ち向かう過去く

殺意の決着、男の目的を達成しかけた白銀拓斗が残念そうにため息をついたのは目の前で黒羽舞夜がテルを庇ったからだだった。

もちろん、過去の己自身を葬るための一撃はしつかりと黒羽の鼻先で寸止めされている。手が狂うということは一切ないのはこれまで培ってきた鍛錬の賜か。

「できれば、どいてくれれば助かる」

「イヤデス」

困ったな、と言うのが率直な感想だ。このままでは黒羽は実力を行使しない限りテルから離れようとはしないだろう。構わずテルにトドメを刺そうものなら、彼女は我が身を盾にしても受け止めるに違いない。黒羽舞夜とはそういう少女だ。

「未来の自分を殺す元凶だ。そんな奴、放っておいたところで何の意味がある」

「意味、ですか」

「そうだ、と白銀は続ける。

「コイツが居なくなれば、お前は変わらずこの場所に、日本でハヤテやナギたちと一緒に暮らしていける……お前が消えるのはホントこの一か月先の出来事なんだ。今選択を誤ればツ 同じことの繰り返しだ！ また白銀拓斗が生まれて、惨劇の世界がやって来るツ」だから白銀は決意したのだ。この時代の過去の自分を亡き者にするのだと。

「俺が強さを求めたのは、誰かが幸福であって欲しかったからだ。

そんな叶うはずもない理想を追いかけて走り抜けた先で見た未来は少数を犠牲に多数を救う命を秤にかけることだった！」

脳裏に焼き付いていた記憶が今でも蘇る。

自分が炎に包まれた時、一緒に居た小さな命は瞬く間に灰になった。

自分が銃弾の嵐に晒されていた時、隣にいた老婆は蜂の巣の如く打倒された。

自分は飢えを知らない。しかし、周りは皆飢餓に苦しんで死んでいった。

「結局は最後に俺が生き残る。何千何万という犠牲の上に俺は五体満足だ。理不尽だろ？ 死んでいった奴らも、幸せに生きたいって願ってた筈なんだよ」

胸が熱くなるのを感じて、一瞬目を閉じて冷静になった。再び開眼し、棒状の武器を握りなおす。

「俺が居なくなれば、善立 テルが消えてなくなればそんな悲劇もない世界になるんだ。 “大切な人” を護る事が出来る……だから俺は、過去の俺を葬る」

「分かりました」

黒羽が肩を竦め、ため息をついたのをみてこちらの意中を察してくれたと思っただか思わず白銀は安堵する。だがしかし、彼女はその後で言い放つ。

「貴方、嘘をついていますね」

○

黒羽のその放たれた一言に、確実に白銀は動きを停止させていた。黒羽には分かる、彼は確実に動揺しているということ。

「嘘とは……?」

「実はコレをさっき拾いまして……」

黒羽がポケットから取り出して、見せたのは黒色のロケットだ。

それを見て白銀がハッと余っている左腕で自身の胸のあたりを摩っていた。落としたことに気付いていなかったらしい。

「そうか、最初殴られたときに」

テルと勝負する前に殴り飛ばされた時だろうか、その弾みで落としてしまったのだろう。黒羽はそのロケットを翳して続ける。

「貴方は言いました。 “ 未来の世界を救う ” という一方で “ 大切な人を護る事ができる ” とも」

その言葉を聞いた時に黒羽は違和感を感じていた。 それは勿論、このロケットの存在があったからこそ抱くことができた疑問。

「ちなみにプライバシーなんて関係ないので、中身は確認させていたできました」

「そう、か」

「.....」

今は閉じられているそのロケットを一瞥した後で黒羽はそれを白銀に差し出した。

「お返しします」

「ありがとう」

素直に礼を言う白銀はロケットを受け取ると内心ほっとしたようにゆっくりと肩を上下させていた。 中身を見た黒羽だからこそ分かるが、彼にとって最大級に大事な物だったのだ。

「コレを見た時に私は、貴方が結局はテルなのだともた理解しました」
「どういう意味だ」

「貴方は “ 世界を救う ” とか、 “ 未来を変える ” とかそんな大それたことを実行する男じゃない..... 貴方の行動の理念は決まっています」

“ 大切な何かを護る ” という大きな道標があるのだったと黒羽は理解する。 世界とか、大多数を対象に彼は行動を起こさない。 彼が動くのは自分の中で “ かけがえのない大切な存在 ” を護りたいと思ったときだ。

だから黒羽は白銀の言動の矛盾に気づくことができた。 未来を変え、世界を救う大規模な物ではなく、その目的はごく少数、いや、 “ たった一人 ” に向けられているという事に。

「でも、それは..... 私ではないのでしょうか」

少しだけ、胸に刺さる物がある。多分、落胆とか、そういう負の感情なのだろうか。だが、それは覚悟していたはずである。彼の持っていたロケットの中身を見た時から。

黒羽がその対象にならないのは明らかだ。何故なら、自分はテルと“そういう感情”を抱かれることもないまま死んでしまったのだ。

フラグ建設の失敗に終わったまま、後悔の文字を刻ませる結果となったその未来のテルは“ある一人の女性”と結ばれる。それが、このロケットの写真の人物。その人物は間違いなく暗い心のテルを照らした光だったかもしれない。

「心を救われたこともあったでしょう。お互い、約束したこともあったでしょう。いつか命尽きるその日まで、永遠の愛を誓い合おう、みたいな」

「……別に、お前を蔑にしようと思ったわけじゃない。これは本当だ」

黒羽の予想がいくらの中したためか、白銀は申し訳なきように視線を逸らして言う。ロケットを握っている右手がギュつとまた強く握りこまれた。

「だが、それでも俺のやる事は変わらないことは……尚更分かつたんじゃないのか?」

「でも、他に道はありませんか? この時代のテルと、一緒にその道を探す方法とか——」

「時間はないんだ。言っただはずだ」

白銀の身体が少し揺れた時だ。全身から少量の砂が零れ落ちていくのを黒羽は見た。先ほどは袖から流れる程度だったのが、全身へと広がっている。これは即ち、白銀の言葉通りなら彼がこの時代に居られるのはどれくらいだろうか。

「もって、一か月……いや、もっと早いかも知れない。もともと、燃費の悪い身体だったからな……下手をすれば、この戦いが終わると同時に俺は消えてしまうかも」

「でも、この時代でテルを殺して……未来が本当に変わるかどうか」「たしかにな」

小さく白銀は笑って見せる。

過程の話に過ぎるかもしれないが、この時代のテルと未来のテルとはまるで別次元という考えも無くはない。その場合、この時代でテルが消えても未来が回避されるという可能性は100%ではないのだ。「だが、“この世界”では確実に無駄な理想を追いかける善立　テルは存在しなくなるだろう。最悪、それが達成できれば俺は満足するのだ……さあ」

どいてもらう、と言わんばかりの鋭い視線が黒羽を突き刺す。恐怖とはあまり無縁の黒羽の身が震えて、思考も一瞬だけ停止するほどの威圧感。

その一瞬を白銀は容赦なく突いてくる。黒羽の思考が働きかけた時既に、白銀の腕が黒羽の肩に掛けられていた。半ば強引に彼女を退かそうとする腕の力に黒羽は耐えられるわけもなく、テルの姿を庇う事が出来なくなってしまった。

「だ……だめっ!」

力いっぱい抵抗を試みるも、大の男の力に黒羽が叶う筈がない、片腕一本で押さえつけられ身動きすることができない。テルもテルでまったく起きる気配がないのか、いまだに倒れたままだ。

「終わらせるぞ過去と未来を」

○

「やっと、やっとだ」

白銀拓斗は過去の己が死ぬという事実を前に、酷く冷静であった。

心臓の高鳴りも、妙に体温が高まるということも無ければ表情が変化することもなく、油断と言うものを感じさせない。

長い旅が終わる。思えば、ギリシヤで起きた怪事件からの日々を思い出す。呪いを受けた日から、白銀は周りに災厄を振りまく存在だった。まるで火種のように戦火が拡大し、それを治めて尚、戦いが彼を話すことは無い。

次第にその呪いは彼の知る者たちも影響を及ぼしていった。もちろん、己の最愛の人物でさえその対象となったのだ。

だがそれも、後悔と無念だらけだった彼の人生にようやく終わりを告げる時が来たのだ。棒状の武器を掲げる。狙いは心臓だ、外すことは無い。

——彼女を救うことが出来る、それだけで俺は。

幸せになれるのだ、と己の武器をテルの心臓へと振り下ろす。横の黒羽は完全に押さえつけられていて、全く動けない状態だ。だが彼女の悲痛な表情に動揺することもなく、計画最終段階の一撃を叩き込んで彼の旅は終わる、

「——なにッ!?!」

筈だった。その結末を認めないかの如く、白銀の目の前に黒い風が吹き荒れたのだ。危険を察した白銀が前方に武器を翳したほぼ同時に激突する何かがある。

「撃鉄……ッ!?!」

テルをノックアウトしたと同時に手放されていた撃鉄が主を守るべく現れたかのように白銀の行動を阻んでいた。だがただの鉄パイプの撃鉄に、ヒナギクの正宗のような便利な機能は無い。

これは明らかに、投擲されたものだ。白銀はその方向を即確認して、先ずはその人物から片付けるといふ展開を浮かべていたが、それは実行されることは無かった。

「…………お前」

思考停止したかのように全身が硬直した後で、そう呟く先に彼が見たのは身長は十センチ程度。

『やー』

ドヤ顔のチビハネだった。

「そりや、いる筈だよな」

思えば、三千院家に研修でやって来てから全く出くわさないなど思っていたので突然の再会に反応してしまうのは当然なのだが、今の白銀にとってチビハネはまた別の意味のある再会だ。

白銀は知っている。この小さな異形、黒羽の姿をミニチュア化したチビハネの正体を。自身の辿った未来を見てきたからこそ得る事が出来た真実のせい、目の前のチビハネの存在は今の白銀にとっては小さくもとても大きな存在だった。

…………たしかとんでもないパワーを持つてたっけ、アイツ。身なりからは想像も出来ないパワーを有していたのを白銀は知っている。それは何度も身を持って思い知らされた。鉄パイプを投擲したのもチビハネで間違いないだろう。

そしてこの時、白銀は完全に油断していた。投擲してきたチビハネに気を取られている間に。

「ラウンド2ウウウ…………!!」

殺気を感じ、下へと視線を移す時にその重大さを気付いたときは既に遅し。闘志の炎を燃やしたテルが再び立ち上がっていた。

起きられるはずもないと確信していたことが、油断。腐つても目の前の男は過去の己だ。並外れた耐久力をもっており、生命力はゴキブリ並だった。

弾いた撃鉄を起き上がると同時にソレを掴み取ったテルの動きに、

白銀も素早く対応する、しかし油断を突かれたせいもあって完全に遅れていた。

「チィー！」

咄嗟に白銀は判断した。片腕で押さえていた黒羽を自身から離れさせるように突き飛ばしたのだ。被害をうけなくさせる為である。黒羽が地面に倒れこみ、彼女の安全を確保できたがこちらの防御を捨てた事により容赦ないテルの一撃が直撃する。

冷たい鉄の感触が一瞬した後、重々しい音と衝撃が右頬を駆け抜ける。それをまともに食らい、ダメージは免れられない。だが、最小にするべく白銀がとつたのは体を最大限に捻り、重心を後方へと倒しつつ軽く跳ねる。所謂、“受け身”だ。

頭を揺らされて、視界は一瞬揺らぐが顔を振ってすぐに回復したのを見ると受け身は成功、標的であるテルを視線に置き、相手が追撃をしてくれないというのを確認した上で口から垂れている血を拭う。

「驚いた。まだそのような動きが出来るとは」

鉄パイプの威力は自身の力の受け流しによる作用でいくらか殺す事ができた。半減とはいかずとも、一撃でノックアウトというのを避けただけでも善しとして白銀は立ち上がる。

その一方でこちらを打ち飛ばした過去の存在のテルが鉄パイプを肩に担いで首を鳴らしていた。

「俺、復活」

○

「でかしたぞチビハネ、これが終わったらショートケーキ奢ってやる」
『イッ エアアア!!』

ガッツポーズで叫ぶ言葉はいつもの『やー』というものとは言い難

いものだった。多分報酬に対して歓喜のあまり声がそう聞こえてしまっているのかもしれないが。

「女を突き飛ばせるたア紳士のすることじゃないな。見ろよ、打ちどころ悪かったからか気絶してんぞ」

白銀のいる地点から数メートル先に倒れ伏した黒羽の姿がある。肩が上下しているのが確認できたから大事には至っていないだろう。多分頭を打ったせいだ。

「おいおい、そうせざる負えない状況にしたのは紛れもなくお前だぞ。責任はお前にある」

「いや、結局お前って俺だから、つまり責任はお前じゃん……ん？」
「俺はお前だけどお前じゃなくて、俺は俺で……」

「お、俺が俺で……オレオレオ!？」
「お前はさつきから何を言っているんだ」

呆れたような表情の白銀の視線がテルに刺さる。もちろん何を言っているのは本人のテルですら分かっていない。だが、本当の意味で頭がおかしくなりそうなくらいに混乱しているのだ。

「つて、話を逸らすなこの野郎」

「自分で招いた事だろうが」

未来自分からの的確なツツコミに言い返せないのが腹立たしい。調子が狂うのを確かに感じながら(狂わせたのは自業自得)、テルは口を開く。

「ケリつける前に、聞いときたい」

鉄パイプで軽く地面を小突いて間を取りながら問う。

「未来のお前の行いで助けようとした奴……皆死んでいったのか？」
最初に見た白銀の瞳はまさしく「諦め」た目であった。未来の世界に絶望し、大切な者を護れずに、成し遂げたいことも出来なくて、ただ後悔を得て心を摩耗させていったというのがこれまでの白銀との会話でテルが予想したもの。

「お前は……色んなものを失ったようにも見える」

対して白銀は思うことがあったのか、やや間を開けて一言。

「いや、そうでもないな」

遠くを見るように紡がれた言葉に、白銀は続ける。

「こんなになって、意地を張り続けてきて……何人かを犠牲にして、多くを救ってきたことはあったさ。でも、俺が望んだのはホント、皆誰も悪も正義も関係なく救う事だったんだ」

誰もが笑って、幸せそうに生きていける事こそがテルの望んでいた結果、そして理想だった。だが自分の掲げた正義とその手段が矛盾していたから、その世界を消そうと思ったのだろう。自分の存在すらもなかったことにしてまでだ。

未来の自分、善立テルが見た世界は確かに彼が曰く希望も何も無い世界だったかもしれない。その時代がこの先の自分の誤った選択で生まれてしまう世界だとしたらそれを未然に防ぐためにこの時代で過去の自分を殺すのは一つの手段だ。

「誰かの犠牲の上に成り立った世界なんて、悲しすぎるだけだろ。」

しかも己の意のままに足を進めて、結果黒羽が死んで——俺が得たのは変な力だ。でも結局、それも意味がなかった。世界を変えられるんじゃないかと思ったださ。それが結局はもつと世界を悪化させるくらいひどくなるかも知らずに使用してな」

白銀は自分が許せないのだろう。過去に自分と同じ心で進んでいた彼の、軽率とも考えられるその選択。それを誤り、護るべきものを護れず、歯車が狂ってしまった世界を産んだことに対して後悔しているのだ。

「だから俺は、俺自身を消す。怪物を生み出すその前に、何も護れないまま後悔する前に！」

構えた白銀の武器が妖しく輝きを放つ。まるで相手の命を吸い取るかのような光に遠くでチビハネが震えている。

「———そうか」

その理由を聞いて、テルは小さく頷いてみせてから静かに口を開い

た。

「それじゃあ、俺達はやっぱり別人だ」

「なに？」

静けさを纏ったその体に、白銀が苦虫を噛み潰した表情をする。

「俺は後悔はしないぞ。　どんな道に進んじまったとしても、そこが天国でも地獄の世界だろうと——後悔だけは絶対にしない」

鉄パイプを握っていた手に再び力が籠められ、決意に溢れたその視線が白銀に向けられる。

まるで真つ赤な炎。　鋼鉄の意志と鋼のような強さを感じた。

「未来の俺が見つけれられなかった世界を、俺が見つける。　俺はお前が成し遂げられなかった事を成し遂げてみせる。　護りてえモンはこの手で救ってみせる。　誰一人見捨てたりなんてしねえ」

「それが都合のいい理想論だ！　いい加減気付けッ!!」

「——かもな、俺の我儘かもしれねえ。　だけど、自分(テメエ)の性根ひん曲げてまで俺は生きていたくねえ

。　だから俺は絶対に、お前の事は認めない」

流れるような、音を感じさせない動作でテルが鉄パイプを構えた。その構えに、一瞬たりとも白銀は隙を見出すことが出来ない。

「お前が俺の未来なら、その全てを陵駕して、その存在を叩き落としてやるよ」

二人が同時に駆け出す。それは同時に未来と過去の、最後の戦いの始まりであった。

第133話く闘いが終わるといふ事は、勝敗がついた
といふことだく

「おい、ハヤテ。 それって嘘じゃねエよな」

『……………』

遠い未来のある日、テルは日本からの国際電話を受け取っていた。
真夜中である。

これは、善立 テルが白銀拓斗になる以前の事だ。

「冗談って、言ってくれなきゃよ……………俺はイヤだぜ？」

『……………』

電話の相手のハヤテは無言のままだが、時折震えるような息遣いが
聞こえてくる。 これだけでも彼が嘘を言っているようには聞こえ
なかった。

きつと季節外れのエイプリルフルでも、ドツキリとかでもなく真
実なのだろう。 そう思った。

『……………あの人は』

重々しくもついに、ハヤテの口が受話器を通して開かれる。

『ほんと、ここ最近まで元気だったんです。 家庭菜園の水やりとか
仕事も、率なくこなすのはいつも通りで……………でも数日前に倒れ
てから、今は家庭菜園もいつもの屋敷での仕事も出来ないほどに弱っ
ています』

「医者は……………なんて？」

テルの口からはあまり言いたくはなかった質問だ。 もしこの質
問に対する答えをハヤテが持っていたら、彼女の最悪な状況を耳にし
てしまうかもしれない。 だがもしも、何事もなかったあの過労などで
済むような話かもしれないと心の底で期待していたのだ。

『……原因が全く分からないの一点張りです。お嬢さまも手を尽くして世界中からお抱えの医者を探していましたがそれでもだめで……分かっていている事は衰弱が激しくて、このまま続くようであれば――』

その先の言葉を言おうとする前に受話器から喉を鳴らす音がテルの耳には聞こえた。言いづらい物なのだろう。戸惑っているようにも聞こえる。当然だろう、この話はテルにとっては苦痛以外の何物でもない、それを友人に効かせることをハヤテはしたくないのだ。「……いえよ、ハヤテ」

だが、そんな事をして今ある現状が進展する筈もない。心が摩耗してしまう前にテルはハヤテに対してその内容を教えてもらうように促した。

『……持って一ヶ月、と』

一瞬の眩暈と共に、テルの視界が歪んだ。慌てて足場を確認して倒れないように踏みとどまった後で喉に何か詰まったように息が出来なくなつた。

思考も止まる。瞬きも止まって、まるで血の流れも止まったかのように悪寒が駆け抜けていく。死んだも同然のような状態だ。

『帰ってきてください……テルさん』

呆然とするテルに対して、ハヤテが続ける。

『今でもあの人は、テルさんの事を待っていますよ……こういう時に駆けつけるのが、テルさんの役目じゃないんですか？』

ハヤテの言葉をテルはちゃんと聞いていたが、頭には全然入ってきいていなかった。耳から反対の耳へと言葉が流れて言っつて、反応する術をテルは失っている。それほどに動揺していた。

「ちよつと、待ってろ」

『ま、待つって悠長な！ 時間が少ないって——』

怒号にも似たようなハヤテの話が途中なものも構わずテルは受話器を音がたつ位に荒々しく置いた。

電話から手を離して直後に訪れるのは沈黙。弱風が窓をカタカタと鳴らす音が耳障りに聞こえる。

「なんでだよ」

壁を頭で軽く突いて、膝から崩れ落ちる。呆然としていた状態から現実へと帰ってきたテルであったが現実を受け入れるにはあまりにも唐突過ぎる、その悲劇。

「なんでマリアさんが……ッ!!」

未来のテルが過去へと飛ばされる二週間程前の出来事だ。

○

紅い月の下、広場にて金属音がぶつかり合う音が響いていた。その発生源は二人の男の剣戟だ。

片方、鉄パイプを持つ男、善立 テル。もう片方は異形な黒い棒を持った白銀拓斗。

二つとも、もともとは同じ名前の撃鉄と言う名の武器だった。

白銀が持つ撃鉄は今とは異様な形へと変わっており、ギリシヤの旅行以降から今までずっとこの姿となっている。自分に不思議な力が宿り、人間の枠を超えるような動きをし始めたのもちようどその頃だ。

同時に、世界がおかしな方向へと向かい始めたこともあり、白銀は

この変貌した撃鉄が自身が受けた呪いの象徴であると推測した。実際の所は、どうなのか知る由もないが。

そして、己の意地を突き通す為に、二人は武器を振るう。

金属音が二、三度鳴り響いて、お互いの武器が交じり合い二人の距離が一気に縮まりそのまま保たれる。テルと白銀は鏝迫り合いの状態になった。

「オイオイ未来の俺様よお、下手すると年下状態の俺に力負けすんじゃないのかい？」

不敵な笑みを浮かべた男、テルが力任せに足を踏み込んで白銀を押し返そうと必死だ。対して白銀はテルのこの怪力に驚愕するばかりだ。

「貴様、その力を一体どうやって……」

白銀には年齢など、鍛錬を重ねていたこともあり純粋な力勝負では負ける事は無いと思っていた。しかし実際はどうだ。均衡を保つのが精いっぱい、一瞬でも気を抜くとテルの方に流れが持つてかれてしまうという予断を許せない状態だ。

「なるほど」

仕掛けはすぐに分かった。テルの持つ撃鉄という鉄パイプには先ほどまでには無かった札が張られていた。

「伊澄の札の効力か!!」

その気合と共に、テルを押し返して体制を立て直す。深追いをしとこないテルに対して白銀は悠々と構えなおした。

光の巫女である鷲ノ宮伊澄の札は霊や異形なものに対して絶大な効果を発揮する。テルが霊や、敵対してた当時の黒羽と戦うことが出来たのは彼女の札があつてこそだ。

白銀の身体はもう人間と言う枠から外れてしまっている。ギリシヤで受けた呪いが馴染み過ぎたせいか、身体そのものが変化を起こしてしまった。

目の前でテルの攻撃がこちらに通用してしまっているからこそ分かる。札は異形以外には効果を示さない、つまりは白銀の身体が異形という枠に収まっているという証拠だ。

「だからこそ分かるぞ、その愚かな戦い方の弱点がな」
「黙ってなつて!!」

白銀の言葉を斬り捨てるかの如く、テルが前進。迷うことなくその改造された鉄パイプを振るう。

だが、それを白銀は受け止めようとはしなかった。ひたすらテルの攻撃を回避することに専念したのである。

「んなあろツ!!」

だが、効果があると分かっている攻め手をテルが止める理由はない。追撃をかけて白銀に迫るが白銀は常に冷静で、武器を交えるどころか先ほど変わらずひたすら避け続けるだけだ。

「そろそろキツくなってきたんじゃないか?」

見透かすように、白銀が笑う。その視線の先には片膝を突き、肩で息をするテルが居た。

過去の自分が使用していた戦法、たしかにこれは霊や異形相手には必殺の戦法だ。

だが、この伊澄の札は通常の人間が使用すれば使用者への負担が増える。札を重ねて使用すれば効果は増えるが、その分負担も倍増する。

今テルが鉄パイプに張っている札は全てで五枚。伊豆下田で黒羽と戦った三枚貼りよりも二枚多い。当然、タフな男でもその負担は隠せなかったようだ。

「……まだだ!!」

それでも、意地という奴だろうかテルは戦意を喪失することなく白銀へと向かう。だが、白銀にとつて今のテルの疲労した後の動作は最初の頃よりも遥かに見切りやすい。

「読みやすいぞ、先ほどよりも!!」

突き出された鉄パイプの先を真上から自身の武器で打撃して撃鉄を地面へと叩きつける。反動でテルの体制が前のめりになった所、喉を目かけてのラリアットが炸裂。

「その程度のドーピングで俺を超えられると思ったか!!」

腕を振り切つて、テルの全身をコンクリートへと叩きつけてテルの全身が大きく跳ねた。トドメを刺さんとばかりにテルの頭部へと白銀が追撃を図る。だが、転んでもただでは起きないのがこの男、テルだ。

「……コイツ、いつの間につ！」

左の服を掴まれていたの気づくが、その頃にはテルが白銀の眼前へと迫っていた。そのまま繰り出されたのは石頭による頭突き。

「ぐう……!!」

鈍い骨と骨との衝突音とともに白銀とテル、両者の身体が揺れる。数歩ともヨレヨレと下がった白銀が同じ体制で頭を押さええているテルを見据えた。

「……おかしい。奴は俺よりも弱い筈だ。」

不意を突かれて、嘔吐という醜悪な姿をさらして、スタンピングで圧倒されたのが過去の自分だ。それ以前の肉弾戦も白銀は圧倒的な実力差を見せつけている。今の流れなら伊澄の札の効力を差し引いても白銀が負けるリスクはゼロに等しい。

・・・なぜ追いつかれようとしている!?”

再びお互いが肉薄し、剣戟が繰り広げられる。だがその中で白銀が感じ取った先ほどにはない違和感。

それは明らかにテルの手数を防ぎきれなくなっていたことだ。数刻前では有り得なかった筈である。

・・・限界の筈だ。

伊澄の札の効果とダメージで肉体の負担は限界を超えている筈だ。常人ならば等の昔にぶつ倒れている筈である。だが、目の前のテルは死に体とは思えない程に冴え切った太刀筋を見せていた。

こちらの技術を吸収するかのように白銀の太刀筋を見極めては躲し、時には受け止めて隙を見つけては的確に反撃して見せてきた。

未来の技術を見て、体感したテルの急成長というべきか。

だがこの成長は、白銀の勘に障る物だ。

「その領域はッ！ お前が否定するべきものじゃないのか善立 テルッッ!!」

本来なら、何十年も後で己が身に着ける筈の領域。血を流し、痛みを味わい、茨の道を歩むかの如く苦行を乗り越えて辿り着いた”武人”としての境地。

だが、それは”過ち”を起こした己の末路。悲劇の世界の象徴だ。

未来を否定したならば、この領域にこの男が辿りついてはいけない。それでこそ白銀と同じになってしまう。そう思い、彼は叫んだのだ。

「そうじゃない」

対するテルは小さく、静かにそう答えた。

○

剣戟を交わす中でテルへと伝わっていくものがあつた。白銀の用いている太刀筋は未来の己が生み出したものなのだろうが、根本的には違う。元は己の師、神崎百合子の剣術が基本となっている。だからこそ、過去である自分へと流用できる。

打ち込まれ、撃鉄で受け止めていく度に感じるその一撃の重量は相当鍛えこまれている。これが未来の自分が辿り着く領域なのだ と理解した。まるで使い古していた刀を再び打ち直すかのように、テルは未来の自分から基本とその戦術をその目に納める。

足の踏込も、打ち込みの角度も、振りぬき方も、手首の使い方、全身の捻りも、全てを身に着けるべくテルはその一挙一動を肌で感じ、急成長を遂げていた。

「俺はただ」

息を整えて、撃鉄を構え直して未来の自分を睨んだ。

「俺自身に負けたくないだけだ」

他人に負けるのはまだいいかもしれない。自分よりも実力があつて、自分が全力を出したならその結果に満足は出来る。だが、目の前の男は自分自身だ。

白銀拓斗は、絶望して未来を諦めてしまった自分自身だ。ここで負けを認めてしまうなら、テルは自分自身の今ある意志も、願いも、全てが否定されてしまう。

「俺は”追いつく”んじゃない。””追い抜く”んだ。見てろよ、俺は必ず未来のお前を超えてみせる」

未来を変えるなら、この男が辿り着いた領域よりもその先で己を見

失わずに強くなる。

「決して諦めねえし、そんな未来になんてさせねえ、俺は俺自身を裏切らねえ、拾えるものはこの手で拾ってやるッ」

「傲慢だッッッ!!!」

「だからッッッ!!!」

互いの気合一閃。突風が吹き荒れた様に周りの木々が揺れ出して、その後に地面を転がった黒の先端。

テルの一閃は白銀の武器を叩き折っていた。

「さっさと元の世界にイ、引き返しやがれエエエ!!!」

武器を折られ、呆然としていた白銀の腹部にテルの鉄パイプの一撃が打ち込まれた。

第134話く笑わないアイツに、笑顔を……

白銀拓斗は負けた。

己の全てを賭け、未来を救うために過去の己を亡き者にするために、彼は闘いを挑んだ。圧倒的な武力を誇る故に負ける事など想定はしていなかった。

だが、弱い頃の己は自身を上回るスピードでこちらを圧倒し、終いには白銀の武器を押し折ってこちらの腹に必殺の突きを食らわせたのだ。

「……ああ」

全身を貫くような衝撃が走り、身体全体が振動する。だが、無様に吹き飛ばされるといふことはしなかった。膝を着いて、脱力したように両腕をだらんと垂らして嘔うような風が白銀に負けを実感させた。

「……」
「オレ」の勝ちだ」

息を切らしながら、立ってるのがやっとであろう過去の己が言う。そうだと、彼の勝ちだ。そして、

「ああ、そして……」
「私の」敗北だ」

顔を上げて、過去の己ではなく、遠くを見つめるように呟く。そう自分に言い聞かせながら。

……もう、終わりだな。

敗北を認めた直後、全身から力が抜けていく感覚に襲われた。眠気のようなものも感じてきている。きっと、残存する魔力が底を着いてこの肉体をこの世界に居座らせることが出来なくなってきたのだろう。

自然と、敗北を喫した後だというのに心の内は晴れやかであった。この場所が薄暗いことが残念だが、その心の内の空は青い空が晴れ渡るかのような清々しきである。

悔しいものではある。手加減もせず、全力で自分と戦い負けたのだから。目的も達成できなかった筈なのに、何故自分は満足しているのだろうか。

——俺は絶対に諦めねエ。

恐らく、この言葉を聞き最後の勝負に挑む途中でこう思ったのだろう。恐らく、これが敗北へと繋がったはずだ。

この男なら・・・この善立 テルならば安心して未来を託せるだろう、と。

決して折れない不屈の闘志を宿していたその瞳に自分は未来の自分には無い物を過去の自分に感じた。それがこれがやはらこの世界が自分が居た世界とは全く違うIFの世界だからとか、未来から自分が来た影響で得た強さだとかはこの際、どうでもよい。

では、白銀拓斗としての自分の人生はこの世界での事は全く持つて無収穫だったのだろうか。

未来は変わらない。つまり、未来で病に倒れているマリアも救う望みが完全に断たれてしまったという訳だ。

客観的に言えば、この戦いで得られる結果は自分にとって全くと言っていいほど無意味だったはずだ。

だが、何も無収穫だったわけではない。この世界で、白銀は過去の自分から得た物。それは決して諦めずに自分で前へと進む強い意志を思い出させたのだ。

その思いがあるだけで、もう一度自分は前を向いて歩いていける。
そんな気がした。

そして、思った、彼女……自分の事を待っているかもしれない
人のいる世界に帰りたい、と。

○

「お前……消えるのか？」

「そうかもな、ただこの現象がどういふものなのか分からん。普通
に死ぬのか、それとも元の場所に戻るのか」

「元の場所に、戻ればいいな」

「そうだな、俺もそれがいい」

暫くすれば勝手に消えるだろうが微妙な時間が出来てしまっている
のが残念だ。だが、こちらはこれ以上何かを出来るような状態でも
ないので、ただ黙って消える瞬間を待つことにする。

だが、白銀は思い出す。自分の魔力が完全に消えたというこの事
態の重大さに。それは、彼が操っていた使い魔たちの事だ。

『キシヤアアア!!』

「なッ！　こいつらいつのまに!!」

茂みより数匹の現れたのはテルたちを襲っていた顔が寄生獣のよ
うに変形した異形の生物たちだった。数が少なく、5、6匹だった
がこの状態でのテルたちを含めて相手にするのはキツイ状況だ。

「オイ、お前が呼び出したんだろ。　なんとかしろよ」

予想していた通り、隣でテルがそう言うのに対して白銀は腹部を押
さえて、首を振った。

「悪いがそれは無理だ。　どこぞの誰かさんのせいで魔力が底を尽い
て、術者としての能力が無くなりかけている為か、完全にコントロ
ールが出来なくなった。　要約して言うぞ？　お前がなんとしろ」

「チクショウ、こつちだつてギリギリだつつのに!!」

伊澄の札を使用していたテルにとつては指一本を動かすのも相当疲労を感じる筈だ。だがやらねばならない。やらねば、こちらが殺されてしまう。ましてやいまだに後ろで気絶してる黒羽が心配だ。一応側にはチビハネが警護している訳だが。

『やー……』

気絶している主を護る為にファイティングポーズを取っているが正直頼りない。

そうこう考えているのも構わずに異形の怪物達がこちらへ迫ってきた。一斉に飛びかかりテルを鋭利な鉤爪やら牙が襲いかかる。

「クソツたれめ!」

そう吐き捨てながら撃鉄を真正面から向かってくる一匹の脳天へと振り下ろして見せた。一撃にしてその身を爆ぜさせて、その怪物は消滅する。

続いて二匹、三匹と仕留めてみせるもそれ以上からは体が動くことを許さなかった。全身が鉛のようにテルの動作を制限させ、その結果ラストの一匹をテルの横を抜けて走り去っていく。

「しまった!」

狙いは恐らく、後方にいる二人だろう。テルには勝てないことを悟ったのだろうか、後ろで一番仕留めやすい標的を優先して狙いだしたのだ。

「オイッ! 黒羽を連れて早く逃げろ!!」

「逃げらる状態なら、とつくに逃げてるッ」

それが出来ないほどに、白銀の状態は良くない。一人だけ逃がすことは可能だ。それは勿論、白銀自体であり黒羽を見捨ててたつた一人だけ生き延びる事だけは可能なのだ。それくらいの行動力は残っている。当然そんな方法を取る事は絶対がないが。

『ギエエエエエツッ』

白銀は、異形の姿の怪物が自身ではなく黒羽に狙いが言っている事

に気付くことが出来た。一番無防備な相手から狙う事にしよう事だろう。

当然、このまま何もしないままであれば問答無用であるの怪物は女であろうと構わなくその刃で黒羽を手に掛けるだろう。

『や———!!』

震えながらチビハネが叫んでいる。“多分助けて”という意味だろう。

なら、と白銀は動き出す。勿論、テルと同様白銀の身体も限界に近い。ダメージによるものか、全身が動けと信号を送っても震えるように動くので精いっぱいだ。

だが、それでも諦める訳にも、もう何かを見捨てようとも思わない。この時点で白銀が取るべき行動は一つだった。

○

「……ん」

微睡の中から目を覚ました黒羽が感じたのは頭痛だった。気づけば自身は地面に倒れている。どうしてそうなっていたのかその経緯を考察し始める為に、これまでの出来事を思い出した。

たしか、復活したテルとの戦いに巻き込まれまいと白銀に突き飛ばされるまでは覚えている。つまり、自分は彼に突き飛ばされた直後に頭を打って気絶したという事だろう。

コンクリの地面に頭を打つというのはあまりお奨めするものではないと、黒羽は直に体験して頷いて見せた。今度はそうなる原因を作ったテルに仕返しとして実験してやろうと思っている。

ならば、そうなる原因となった男たちの戦いはどうなった、と黒羽が周囲を見渡した時だ。

ふと、地面を見る。そこには赤い水のようなものがあつた。ドロドロとした液体が自身の前に広がっている。最悪服などには着いてはいないがあと起きるのが遅れたらもう少しで付着したところだった。

だが、それよりも気になったことがある。この血が一体“誰の”かということだ。唐突な出来事ゆえに動揺した黒羽がゆつくりと視線を上げた時、その人物を見て目を見開いた。

「……………え」

視線の先には、異形の爪に貫かれた白銀拓斗の姿があったのだ。

○

「ぐううううううう………ツツツ!!」

余っていたであろう逃走用の余力を使い、一步を踏み出して怪物の前に立ち塞がり、その身を使い怪物の爪を受け止めた。

「オイッ、お前!!」

テルから見ても今の白銀はの身体は異形の爪で身体を貫かれている。完全に腹部と背中と穴を貫通していたのだ。

「は、早くッ！ ソイツを超越せッッ」

肉を完全に断たれながらも、白銀は腹筋と片腕だけで怪物の腕を締め上げては完全に自由を奪っていた。

その最中にテルに向けて白銀が手を伸ばす。

それが何を意味しているのか直感で理解したテルは舌打ちしながらも、持っている撃鉄を振りかぶり、

「分かってらア!!」

白銀に向けて放り投げた。縦回転するその鉄棒をしつかりと柄の部分から掴み取ると気合を込めて、異形の脳天へと突き刺した。

『ギヤアアアアアッッ』

苦痛を現した叫びを上げながら、怪物が消滅していく。塵となつて完全に消失したのを見て、白銀とテルは一気に脱力して膝を着いた。

ふらふらとしながらも、テルが白銀の方へと近づいていき、彼の姿

を見たときテルは自身の歯を食い縛った。

「ふ、．．．そんな目で見るなよ」

自嘲気味に笑って見せた白銀の腹部からは血が止まることなく地面へと流れていた。既に血だまりになっており、誰がどう見ても致命傷だと思ふほどの。絶対に助からない程の出血量だと。

「俺が納得がいくようにやった結果だからな、後悔は．．．ない」
『やー．．．』

その白銀に守られたチビハネが震えるように白銀の顔を見つめる。それは神妙な顔つきであり、彼の身体を心配しているようだった。

「なんだ、心配しているのか。はは、参ったな．．．俺はお前の主人を虐めたから嫌われてると思つてたんだが」

「．．．．．どうして」

『．．．．!!』

後ろで目を覚ましていた黒羽の声を聴いたチビハネの身体が一気に硬直する。身を固まらせた理由は恐らく主である黒羽に自身の正体を知られないようにするためだろう。正直、もう手遅れかもしれないが。

「どうして、私を．．．助けたんですか」

詰るような口調で、そう言う黒羽は震えながら自身の胸の服の一部を掴んだ。

「庇わなければ．．．貴方は助かったかもしれないのに」

そう、白銀が黒羽を見捨てて逃げる事に徹すれば彼だけは助かるかもしれないなかったのだ。対して白銀は息を途切れ途切れの息を整えて言葉を作る。

「言つただろう。君の事を蔑ろにしようと思つていたわけではないと．．．俺は、君を守る．．．その言葉に偽りはない」

「そ、それでも．．．っ」

「黒羽．．．」

テルが目を見開いて驚愕したのは黒羽の表情だった。テルが見

たのは、黒羽の頬を伝う液体、それは涙だ。

この涙には見覚えがある。伊豆下田でテルと黒羽が戦い、謎空間にて辿り着いたテルはそこで初めて黒羽が涙を流しているのを見たのだ。

テルにとつては二回目である。

「貴方には……帰らなきゃいけない、場所が。ちやつと会わなきゃいけない人が、いるんじゃない……私なんかの為に、こんな怪我までする必要なんて……」

悲痛な表情の彼女を見た白銀が思う所があるのか、視線を下げる。気を遣わせてしまった事を申し訳なく思っているのだろう。だが、すぐに顔を上げて、黒羽の頭に手を置く。

「何を言ってるんだ。俺は、無敵なんだぜ？ お前に二、三度、刺されても生きるんだ。これくらいじゃまだくたばりはしないさ……」

置いていた手を離して、白銀が息をつく。もう目に見えるくらいに、自身の身体が透過し始めていた。全身から光がゆつくりと空へと上がっていき、それと同時に透過も進んでいる。白銀の消失が近い。

「実は、お前に頼みがある」

白銀が唐突に告げたその言葉に黒羽も伏していた顔を上げた。

「俺が、この世界に来た目的が……もう一つあるんだ」

実は、とテルが続ける。

「俺、お前が笑う事もないまま死別した事になってるんだ……だから、お前の笑った顔だけ、見たことないんだよ。いつも、無表情で変化のない顔と泣いたときの顔しか頭にないんだ」

「え……？」

だから、と白銀が言う。刺された致命傷の血など気にしないかのような砕けた笑みを黒羽に向けて。

「俺が消える前に、笑ってくんねエかなって」

泣いている相手に、無茶な難題だと思う。だが、自分は未来を変える目的以外で黒羽に笑顔を取り戻させる目的も確かに存在してい

た。今際になつて何だが、これが一番自分にとって大事な物だったということも思い出したらしい。

黒羽は笑えるだろうか。今まで、テルにも、他の誰にさえも感情を露わにしない少女だ。ましてや笑みを向ける相手は自身が原因で重傷を負った人物、白銀だ。後悔の気持ちで押しつぶされそうな相手に笑みなど送れるのだろうか。

だが、

「……貴方は、やっぱりテルですね」

テルも、白銀も目を疑った。黒羽は笑っていたのだ。

「こんなもので宜しかったら……正直、上手にできているか分かりません。今までやったことがなかったので……」

満面の笑みというものではない。涙が一層勢いを増して流れて、顔はぐしゃぐしゃだ。それでもいつもの気品のある、凜とした美しさを崩さない。しかしそれはどこか温かく優しく、相手の心を解すような微笑みだった。

「大丈夫、最高の笑顔だ……ありがとう」

満たされるような笑みを浮かべて、白銀の身体が光へと変化していく。体が完全にその形を維持できなくなってしまったためだろう。

「俺にはなんかねえの？」

場違い坊主のテルがそう言うのと、彼は軽く鼻で笑って見せた。

「お前に感謝の言葉は必要ないだろう……だが、せめて言うなら、お前は“お前の中にある意志”を絶対に見失うな」

白銀は真剣な表情でテルを見て続けた。

「この先、“どんな事が”起きてもお前はお前の中にある大事な物を絶対に見失うな……それが出来れば、これから“最後の大勝負”も必ず勝てる……お前なら、俺のような未来に導くことは無い筈だ」

最後に彼は一言告げる。それは完全に姿が消えてしまった後で

その場にとどまるような声ではあったがテルにはしっかりと聞こえていた。

『黒羽を頼むぞ』

「……任せろよ」

未来から願いを受け取ったテルであった。

第135話くテル・ザ・リング、執事の帰還く

小鳥囀る明朝に善立　テルは目を覚ます。　重い瞼を擦りながら身を起こしてベッドから降りるとヨロヨロとした足取りで窓際まで行き、カーテンを開けた。

「おー……………」

刺しこまれる朝日に丁度良い刺激を感じながらテルは大きく伸びをする。　するとベッドの枕の傍で小さい物体が動いた。

『やー……………』

カーテンの開く音と、日の光に当てられてチビハネが目を覚ます。チビハネも大きく伸びをして欠伸をすると、数秒ほどボーっとしてからこちらを見て目をパチパチとさせて言うのだ。

『やー』

結局、何を言っているのか分からないが、“おはよう”という解釈で良いのだろう。　だが、にやりと笑ったテルは面白半分でその発言を曲解してみせる。

“ゆうべはおたのしみでしたね”

間髪入れずに目覚まし時計が顔面へと直撃した。　寝起きと言うのに見事なツツコミスキルである。

昨日、テルは一か月の執事研修の全てを修了した。　なので、今日テルを迎える朝は愛沢家で迎える最後の朝なのである。

○

「テル、忘れ物とかないな？」

「ああ」

荷造りをしているテルの後ろでは腰に手を当てて、ハリセンを手に

持った咲夜が居た。なぜこんなところに咲夜がいるのか、という突っ込みはせずにテルは淡々と部屋を綺麗に片づけては私物を纏めていく。

「PSPとかGBとか置いてつても遅いかな？　ちゃんと確認せな」

「ああ」

「洗濯物、まだ畳んでないやん。さっさと取り込んでキャリアにいれんと」

「ああ」

「伝説って?」

「ああ!」

「ふんツ」

予測可能回避不可能な展開と言った感じでテルの脳天に咲夜のハリセンがお見舞いされたのだ。甲高いハリセンの音にテルが痛みを耐えながら唸る。

「なんでだよ!　なんで最終日までこんな扱いされなきゃいけないだ!!　追い出したいのか!　一刻も早く俺を追い出したいのか!!」

「五月蠅い!　家に帰るまでが執事研修や。　氣い抜いてたらアカシ」

「引率の先生かよ」

不満を愚痴りながらもテルはひとまずキャリアケースの中身を整理して、言われた通りに洗濯物など私物などを全部まとめるとスッキリと何もなくなつた部屋を一望した。

「いやあ長かった長かった。　ようやく・・・ウウ、ようやく解放される!!」

「泣くほどかいな」

辛い日々の事を思い出して執事服の袖で顔を隠すテルに咲夜は呆れて、腕を組んだ。

すると、背後の扉を開けて入ってくる者たちがいる。 咲夜の兄
妹、日向と朝斗である。

「テル兄い、もう帰るんか？」

「もう少し一緒に居たかったんやけどな」

「お、お前たち！ そこまで俺の事を・・・!!」

余りの感動に涙を隠せないテルの肩が震える。 だが、彼らを抱き
しめてやろう、というテルの純粹な気持ちが次の瞬間叩き割られるこ
とになる。

「テル兄いが帰ったらウチの対戦ゲーのレート上げの相手いなくなっ
てまうやん」

と朝斗。

「PSのデジモンで便利くん出すタイミング分かるのテルだけやん、
居なくなると困るねん」

と日向。

南無阿弥陀仏。 心の中で諸行無常とテルは唱えた。 この兄弟、
テルを私利私欲のための道具としか見ていなかったようである。

「くそう、くそう！ 俺の愛沢家でのストレスの三割を担いやがって
！ もう来ないぞこんな家！」

「え？ 来ないんか？」

「テル兄い・・・」

まるで捨てられた子猫のような甘い目をする朝斗と日向にテルは
目を背けて回避しようにもその顔を一度でも見てしまえば抵抗でき
なくなってしまう。

「く、くやしい！ でも可愛いから許しちゃう！」

と二人の頭を撫でまわすテルに咲夜は冷徹な視線を送りながら思
うのである。

・・・コイツちよろいわ。

馬鹿正直と言うものは不便な物だ、と咲夜はこの時だけ同情したのだ。

「まあ、長いようで短かった一ヶ月でしたが……」

「おお、ハルさん」

愛沢家の専属ミニスカメイドことハルがいつの間にか咲夜の隣にいた。

「二人はテルくんと遊んでいる間、どうやら退屈しなかったようです。

お笑い番組を見ている以外であんなに楽しそうにしている二人は私、見た事ありませんでしたから。

面倒見が良いという点に関しては、彼の長所なのかもしれない……そのほかは壊滅的ですが」

まったくだ、と咲夜とハルは同じくして肩を竦めてみせる。和気

藹々としているテルに咲夜は手を二、三度叩いて意識を向けさせた。

「んじゃ、行くかテル。送ってくだ」

咲夜のテルに対するこの配慮は一か月間の研修を終えて疲れているであろうテルへの優しい配慮だった。外に行けば巻田と国枝が車を用意しているのが容易に予想できる。

「いや、俺は歩いて帰るよ」

テルは意外にもこの咲夜の申し出を受け取らなかった。きよとん、とした咲夜を余所に隣のハルがテルに問う。

「テルくん、咲夜さんの御好意をそのように無碍になさつては……得体の知れぬ天罰が下りますよ。主に私がこれから三千院家とか鷲ノ宮家に掛け合つて“テルが咲夜さんに無礼を働いた”と一言告げれば、ええ。

どうなるかお分かりでしょうね？」

「あんれ？俺今脅されてる？脅されてるのコレ」

後半の内容だけではどうにも他人にいらぬ曲解した解釈を与えてしまう。そうなれば、確実にテルの執事生活よりも人間としての生活

の危機であった。

「ありがたいと思ってる……実際こつから車で帰った方が楽だからな。でもここから三千院家に帰るまで、考えたいことがあってさ」「考え事？」

首を傾げた咲夜が見たのは、一瞬だけのぞかせたテルの表情だった。小さく笑っている彼の顔はどこか思いつめたようなものがあり、それを垣間見た咲夜に小さな不安を抱かせた。

「執事研修……結構、嫌だったりしたんかテル？」

頭を軽く、咲夜は掻きながら困り顔をしていた。

「確かにキツイ事いっぱいあったかもしれないけど、それで執事辞めるなんて……ウチは嫌やからな」

「おいおい、なんで俺がこれから職失する流になってるんだ」

困り顔のテルの裾を咲夜に掴まれたテル自身、この研修はかなりキツイものであったのは確かだろう。

いつもの三千院家とは違い勝手が効かないし、愛沢家の狂犬ことハルがテルのサボリを見逃さない。そして何より、テルの癒し担当マリアがいないのだ。

だが、たったそれだけでこの仕事を辞めるという理由にはテルにとってはあり得ないのである。

「いや確かにキツイもんではあったけど、いつもと違う場所で仕事するってのは中々いい経験になるもんだな、と俺自身この研修には感謝してるくらいだ。俺ぜってー今回の研修で掃除と料理レベル20、30くらいは上がった気がするから」

「おかしいですね。私はレベル20、30以上上がっている人が卵焼きをエメラルド色にする筈がないような……」

その光景を思い出して口の端を吊り上げていたハルの突っ込みに密かにダメージを受けたのは言うまでもないだろう。だが、それを無視するように、咲夜の額を人差し指で小突く。

「とにかくだ。この職離れたら俺の生活がままならなくなっちゃう……辞めように辞めねえのよ。」

だから俺はそう簡単にどつかにはいけねえの」

「せやかてテル……」

「おう、ツンデレかな？ 心配してくれてんのかな？」

ニヤニヤとした表情を浮かべてテルの人差し指が咲夜の頬を突かれて、それをウザがった咲夜が顔を若干赤くさせてその手を払う。

「てい、てい、てい、てい！ ツンデレ！ ツンデレ！」

「つ、ツンデレ言うなし！ さっさと行けこのスカポントン！」

「おう、そうさせてもらうぜ。 また機会があったらお邪魔するからよ」

ハリセンで無双乱舞をお見舞いしてくる咲夜を交わして、テルは愛沢邸を後にするのだった。 姿が見えなくなったところで咲夜は腕を組み、顔を膨らませて、

「ウチがどんな気かも知れんで……呑気な奴やな！」

道端に転がっていた小石を咲夜は蹴とばした。

○

愛沢家から徒歩十分程歩いた所からバスを乗り継いでいく形でテルは帰路についた。 乗車券を取って席を探そうと見渡した時に予想してた通りに人が居なかった為、さほど席を探すのには困らない。 選び放題であった。

クツションの効いていない固めの感触を手で確かめながらテルが座ったのは一番後ろの窓際。 この場所が一番彼にとっては落ち着くポジションである。

バスが動き出して、景色がスライドしていくのを眺め、ぼーっとした瞳のテルは考える事がある。

それは勿論、執事研修よりも優先して考えなければいけない事であった。

——遊園地で起きた未来の自分自身、白銀拓斗との戦いのそ

の後についてである。

白銀拓斗、未来から来た善立　テルを撃破した後の経緯を簡単に説明すると訳が分からないくらいに丸く収まる結果となつてしまった。というのも、白銀が消えた直後にハヤテやヒナギク、伊澄や咲夜も白銀拓斗の事を覚えてもいなかったのだ。

ハヤテは遊園地でデート中に空から落下したヒナギクをキャッチしていたことになつて、寄生獣モドキを征伐してた木原はアイエエエ！と叫びながら暴れまわる不審者として夢の国の憲兵に連れて行かれていた。

伊澄と咲夜も最初は疑問を持っていたがテルが暫くした後様子を見に行つたときにはメリーゴーランドで遊んでいた。

だが、テルと黒羽は白銀拓斗の事を覚えている。彼の正体から、目的に至る全てを知っているし、忘れてもしない。この違いはどういう事だろうか。

記憶を覚えている者同士、一度だけ黒羽とその事について聞いてみたが、黒羽は首を小さく傾げており協議してみた結果、一番身近にいた人物だからではないか、という結論に至つた。正直、全く納得していないし問題の解決をしていない。

———どんな事が起きてもお前はお前の中にある大事な物を絶対に見失うな

未来のテルが最後に言っていた言葉。それが意味するものを今のテルは知る由もない。戦闘なんかせずに黙つてこれから何が起こるとか聞いておくべきだったと今更ながら後悔するのであった。

だが、未来の彼が言うのであれば近い内に大きな出来事が発生するのは間違いないのは確かだ。その時の為の言葉なのだろうか、または別の意図を持ったものなのだろうか。結局これもまったく分からず、その時が来るのを待つしかない。

・・・それでも。

それでもだ、と。テルは心の中で二度続ける。未来のテルが見た絶望した世界へと進んだりほしくない、と。

そして、必ず黒羽を死の危険から守り切って見せる、と。そのために未来の自分を否定して、打ち勝ち、約束したのだ。

男と男の約束を違えるつもりはテルには毛頭なかったのである。

○

バスを降り、まだ若干寒さを持った風に身を震わせながらテルは商店街を進んでいく。賑わう商店街を通るのもテルにとっては久しぶりである。丁度この付近にはラーメン屋があり、中では暴君シスターが大盛りをせがまれるバルトとそれにイラつく辰屋次郎の姿が容易に想像できた。

勿論、素通りせずに入って昼食を取ろうと思っていたテルであったが生憎、自身が抱えている問題に集中すべくその場を後にしたのであった。

『やー』

執事服のポケットに収まっていたチビハネがのそつ、と顔を出した。

「ん？ どしたのお前」

『やー、やー』

少々不機嫌そうな顔で両手を振っているチビハネのジエスチャ―は恐らくこうであろう。

「お腹すいた？」

『やー』

コクリ、と顔を動かしてこちらを睨むチビハネの頭をテルは人差し

指で撫でて諫める。

「ちーっと我慢してろお、家帰ればお前の大好きなクッキーが俺の部屋に残ってた筈だから」

「……ん？　そう言えば俺の部屋のことだ。マリアさんがなんか言っただろうか。」

ポケットにいるチビハネが両手を上げて嬉々としている様を見るやテルは頭の中で何か引つかかる物を感じた訳だが、きつと気のせいであろうと深く考えず進むことにしたのである。

その時であった。

「どーん」

「お!?!」

突如背中を押されたのである。　突き飛ばしにしては威力は抑え目でテルの足が二、三步ほど前に出たがその程度の威力だ。　押されて前のめりになった姿勢を戻しながら振り返ったテルは思わず頭を掻きながらポケットのチビハネを奥へと押し込んで隠す。

「お帰りなさい……テル君」

テルの様子を見て笑ったマリアがそう言った。

○

「油断しましたねテル君、今あの背中を押された瞬間、私がヒットマンだったら確実にテル君は死んでましたよ」

　買った物袋を後ろに回してこちらを下から眺めるようにマリアは悪戯ばい笑みを浮かべていた。　テルは小さく肩を竦めて手を伸ばす。

それは簡単言うって買った物袋を持ちましょう、というサインだ。

「優しいですねー、何も出ませんよーお給金せがんでもダメですからねー」

「棒読みなのはなぜなのでしょう？」

二人して小さく笑ってマリアは最初こそは自分が持つ、と言っていたがここで引いたら男が廃る、と考えたテルが再三申し出た結果、マリアの意志を折る事に成功し、買い物袋を持つことに成功したのである。

「研修、お疲れ様でした」

「あ、いえ・・・まあ一カ月なんて俺にかかればチョロイもんです」

頭をいまだに掻きつづけているこの男の内心はと言うと、

・・・一カ月ぶりのマリアさん！ マリアさんツツツ！！

一か月ぶりにその目にするマリアの姿にどこかの緑のマスクを被った男の心臓が飛び出さんとする勢いであった。だがその哀れな姿を表に見せることなく冷静を装ってテルは続ける。

「咲夜からも聞いていたでしょう。俺の華麗なる活躍ぶり」

その言葉を聞いてマリアが、ええ、と頷いて見せた。

「勿論ですよ。初日から何日か引きこもってニートになってたとか、あとテル君が来てから愛沢家の壺とか絵画が総額300万くらい無くなっていったとか・・・なんか不思議ですねー泥棒でも入ったんでしょうか」

「た、多分・・・キッドカルパンあたりがやってくれたんですよ。

ええ、俺は知らない、知らないシラナイ、ボクジャーナイボクジャーナイ」

「いやですねえ・・・誰もテル君が犯人だなんて一言も言っていないじゃないですか」

意味ありげな視線を送るマリアにテルは今まさに心臓を握られて

いる気分である。 生殺与奪はいま彼女の手にあった。

「でも咲夜さんが言っていましたよ。 レベルが2、3くらいは上がったんじゃないかって」

「え、それだけですか?」

笑顔で頷かれ、他人の評価とは自分が思っていたより残酷だったと知ったテルであった。 だが、落ち込むよりも早くテルの前をマリアが歩いて続ける。

「でも今まで以上の働きをこれから屋敷で見せてくれるんですよね?」

あの三千院家で」

マリアが視線を逸らして手を組んだ。

「ほら、やっぱり職場っていうのは通い慣れた場所でないよ……ハヤテくんもナギも黒羽さんも、皆さん一カ月テル君が居なくて寂しそうでしたよ?」

「へー……」

「ゴ、ゴホン……それにですね」

偶然起きたかのように見せかけたワザとらしい咳の後マリアがまたしても視線を逸らしていた。 だが今度はその表情にもテルは着目している。 ジト目でこちらに視線を合わせない彼女の顔は少しばかりか紅潮しており、いうなれば恥ずかしそうであったのだ。 その状態でマリアは言う。

「私だって……待ってたんですから」

「……」

ちら見、その一瞬で再び視線逸らしたマリアは前を向いて歩き出す。 だが、その姿を見るやテルにはある感情がその脳内を駆け巡っていたのであった。

正直、ハヤテやナギ、黒羽がこちらの事を心配していたとか言うのは天地がひっくり返っても無いだろう、“日常系アニメが突然とエンディング直前で実はゾンビが出てくるホラーアニメでした!”とい

うぐらいの詐欺と言っても良い。

三千院家に帰ったらハヤテとかをどうとつちめてやろうか、とかそんな冗談を全く考えられないほどにその時のマリアは。

——超絶可愛かったのだ。

そう例えるなら、動画サイトなら迷わずキーボードを操り赤文字で“ぶひいひいひい!!”とコメントを永遠と打ち続けるくらいにテルは内心発狂しそうなものである。

「お、おお………」

ここまでマリアに心配されていたとはその事実を知れただけでもテルは最高に幸せだろう。今日まで生きてきた甲斐があつたといつても過言でもない。

「と、ところで……マリアさん？」

「ええ？　なんででしょうかテルくん」

二人が話題をそつと逸らす。このままでは赤面が屋敷まで続くことになってしまう。嫌でもこのほんわか気分を脱する必要があるが。

だが、これはテルが確認しておきたいことでもある。

「俺が執事研修に行ってる間、俺の代わりに三千院家に厄介になつた白銀拓斗っていう男を……知りませんか？」

「え………」

そう言われて、マリアは熱が冷めた様に首を傾げて少し考え込む。心当たりでもあるのではないかとテルが心配したその直後、マリアの口が開かれて。

「ん、誰ですかねえ……執事研修中はパン屋さんが何回か屋敷に来たくらいで、それ以外はいつもと変わらない人達が居たのですが」
きっぱり、そう告げられた。

「でもテルくんが一カ月いない間……確かに何か違和感があつたよ
うな……何か”おかしい”ような、テルくんの代わりに誰かが

いて……私、お茶をいつもより一つ多めに作ったりとかありまして……」

それはマリアがあまりやらかさないミスだ。 普段完璧超人マリアが病んでも居ない限りはそんなミスは起きないはずである。つまり、だ。

——白銀拓斗は確かに居て、テルとの戦い後、この世界から完全に存在を消した、と言う事だろうか。

過去のテルが未来の彼の結末について、知る事は出来ない。だが、こちらの過去が勝ってしまった今となっては未来の彼の世界を変え手段と言うのは無くなってしまった。 その上、この世界での痕跡も何一つ忘れられて、誰一人として彼の事を記憶している者はいない。これでは、あんまりではないか。

「マリアさん、今度お茶とか間違つて一つ余分に出しちゃった時は俺にください。 全部俺が片付けますんで」

「え、はい……テル君がそう仰るなら」

正直、この上なく面倒な事だとテルは思う。 だが、これは彼を負かして、その存在を否定し、尚且つ彼の存在を覚えている者の果たすべき義務なのではないのかとも思ったのだ。

「それじゃあ、早く屋敷に帰りましょう。 皆さんも待つてるんですから」

こちらの意図するところではなく、マリアの手がテルの手を掴んだ。 目の前にもう屋敷が見えていたからであろう、そのままテルはマリアと手を繋ぎ、三千院家へと引つ張られていく。

手を繋いでいるマリアがこの上なく楽しそうな顔をしていたので、テルは抵抗する気は起きなかった。 もともと、抵抗する気もないのだが。

空を見上げて、テルはその彼方に願う。今はどこかにいるか分からない、未来の己に対して。

—— 未来の俺、今度は未来を捨てないで、護るものは護り通せよ。俺は絶対、お前が見た結末にたどり着かねエからな。

過去と未来、一つの節目が着いた今、暫くは安息の日々を得ることが出来るだろう。テルは日常に戻り、世界は……その普遍の日々は回り続けていく。だが、彼だけはまだ知らなかったのだ。

『世界の変革』がもう既に始まりかけていたということに。

〈FIN?〉

—— エピローグ ——

一カ月という長い期間を経て、ようやく居城に帰還したテルはスキップし、嬉々とした表情で自身の部屋の前に立っていた。

「い、一カ月ぶりの俺の部屋だ……」

『やー』

「いいかチビ。クッキーは中にあるが鮮度が分からん。最悪、賞味

期限切れてたら俺が今日買ってきたラムレーズンやるからそれで我慢な」

『ヤー！』

「それにしても、扉の向こう・・・誰か隠れてんのか？　なんか変な声ができるんだけど」

奇妙な音はなにやら背筋に冷ややかな汗を感じさせた。泥棒とか、変態とかそんな半端な物ではない、もっと別の何かがいると、テルに伝わったのである。

意を決して、ドアノブを捻る。ゆっくりと開けて目に飛び込んできたのはまず“黒”という事だった。

不思議でならなかっただろう、昼間だというのにカーテンも閉じている訳でもないのに、なぜか部屋は黒く薄暗かったのだ。

だが、その正体がただの暗闇ではなく、ある生物の身体の色だというのが分かったのは斜め四十五度に視線を上げたからだ。

『じょっじょっ・・・』

テルを見下げる筋肉質の黒光した物体。頭部には二本の触覚、そしてつぶらな瞳。

———どこかの漫画で見たことある宇宙ゴキブリだ。

そう言えば、とマリアは思い出したことがある。以前研修中にメールでマリアとナギが送ってきた内容の事だ。

『オマエの部屋にゴキブリを2, 3匹放っておいた』

と書いたナギ。

『テル君の部屋にコケを置いておきました』
と書いていたのはマリア。

つまり、二人の偶然かワザとなのか分からない行為が見事にマッチして、あのゴキブリが誕生してしまった。

『じょうじ』

『じょうじ』

『じょうじ』

『じょうじ』

『じょうじ』

「アイエエエエエエ!!?」

『ヤーーーーー!!!』

一匹見かけたら100匹はいると思え、その教訓を今一度この身に思い知らされることとなったテルであった。

『ジョウジツ!!』

～FIN～

く男の旅が終わる時く

END 1

全身を打ち付けるような衝撃と共に、男が目を覚ます。覚醒した意識で辺りを仰向けに倒れた状態で見渡す。

「ここは……」

穏やかな風、静かな木々の揺れ方、日の光。男の脳内にすべてが懐かしいという感覚があった。より状況を理解すべく、身を起こそうとした男が顔をしかめる。

「傷は……このままなのか」

腹部からの激痛のサイン。腹痛とかではなく、物理的に起こったこの痛みのは正体は腹部に空いていた穴。

記憶が確かであれば、男は闘いの最中で大事な者を護るべくその身を挺して護り通した。この傷はその時にできたものである。

「正直……キツいな」

溢れ出る血はまだ止まっておらず、手で押さえようにも隙間から流れて行ってしまう始末。出血量が多ければ多いほど感覚は麻痺して、昼間のような温かい時間帯でも寒気すら感じてくる。

それでも、身を起こして男は歩き出す。一步一步が殺人的な痛みだが、それをかみ殺して進んでいく。その理由は男がいるこの場所は見覚えがあり、それを確認する為にはその先に進む必要があったからだ。

「そうか、俺は戻ってきていたんだな」

茂みを抜けて広い場所へと出た。整備されたような芝、多種多様な花のある花壇。金持ちが住みそうな庭園。

そして極めつけはデカイ邸宅。真正面からその邸宅を眺めて男は悟った。ここは自分がもともといた世界、未来の世界なのだ。

白銀拓斗を名乗っていた男、善立テルはもともと自分が働いていた日本の三千院ナギの邸宅へと戻ってきていた。

○

「どういう神の悪戯だろうか、と思った。」

過去の自分に敗北を喫し、死亡するほどの重傷を負ってそのまま死ぬかと思ったら自分がもともといた世界に戻ってきていた。

しかもよりにもよって三千院家だ。別の国でそのままバツクレようと思っていたというのに、予想外の出来事にテルも肩を竦める。

「……いや、どつちにしろ。」

逃げる事は叶わないだろう。そう思ったのは、自身の傷からでる出血量。ワープとかそういうイベント終わったら傷が全快するという都合のいい設定を期待していたがどうやらそうもいかなかったらしい、現実是非情である。

この状態で手当てしても、間に合うかどうか分からない。それくらいに、体力の消耗が激しい。残された時間が限られているという中で、彼は確かめなければならぬ人が居る。

「……マリ、アさん」

この時代のマリアは病にかかって倒れている。世界中の名医を集めても治すことは出来ず、彼女の寿命はハヤテの話は一月だ。

テルが過去へと跳ばされるまでに二週間かかっている。

そこから過去で一月くらい滞在した。現在、テルにとってマリアの状態を知るための手がかりは存在しない。一月しか持たないという状態から、回復したか。もしくは、既にこの世から居なくなってしまうのか。

それでも、彼は行かなくてはならなかった。死ぬほどの思いをして、絶望の色合いが凄まじく濃い結末しか待っているかもしれないのに、何故か。

それは絶望して摩心が耗した善立。テルが、ただ一人この世で愛した女性だから。

だから、彼女に会うために、傷が開き、悪化するのを承知で彼は歩

を進める。彼女の存在が確認できるだけで精いっぱいだが、それだけでもいい。最悪、墓前に手を合わせる事となつたとしても、そこで果てる事になるなら本望だ。

『よう、遅かったじゃねエか』

邸宅へと足を進めるテルに、のっそりと巨体を揺らして現れる者がいた。人ではなく、動物だ。

「お、おまえ……もしかしてタマか？」

『なんだよ、暫く見ねえ間にエライ変わりようだな』

テルには見覚えがある。白い毛並にと鋭い歯。三千院ナギからはれつきとした猫として認識されて買われていた温室育ちのトラ。タマである。

『お前……その怪我』

タマがテルの姿を見て、眼を見開いた。その傷を確認する。腹部から背中にかけて貫かれたかのような穴。そこから溢れて出して、止まる事を知らない血。

同時にタマは悟ってしまった。この男の先を、行きつく最後の結末を。

『来いよ。あのメイドの場所に行きてエんだろ』

「な、なんで……」

タマは背を向けて舌打ちをして続けた。体制は首を少し動かして顔だけを向けるように、

『気まぐれだよ……ほら、さつきと立て。案内してやつから』

「相変わらず口の減らねエトラなこと……」

精一杯の苦笑いで足を動かしたテルだが、踏み込んだ瞬間に膝が抜けるような感覚。そのまま芝の上に両膝を地面につけてしまった。限界が近い。

力を籠めて立とうとすれば、傷口から血の量が増えてテルの力を奪う。正直、動くのもままならない状態だった。

だが次の瞬間。テルの身体がゆっくりと持ち上げられた。タマがテルの襟首を啜えて大きくテルの身体を揺らす。振り子の要領で高く振られたと思った時、テルはトラの背中に乗せられていた。

タマはテルを乗せたまま、ゆっくりと、テルを労わるように歩き出す。

「タマ……」

『何があったかは聞かねエ……聞いたところでおれっちには理解できねえだろうからな』

タマのももとの体重とテルの体重も合わさっているからだろうか、タマが踏み出す一步一步、草木が沈んでいるのがテルには分かった。その証拠に、タマの足跡がくつきりと確認できたのだ。

「でつかくなつたなあタマ、お前の背中に乗るのが何気に俺の夢だったんだ」

『へ、そいつは嬉しいぜ。感謝しな、今日だけはシーフードピザ一枚で手を打ってやるからよ』

図体がデカイ割にセコイのは変わっていないな、とテルはタマの背中小さく笑った。

「なあ、タマ……お前がさつき言ってたのって」

『ああ、そうだ。お前の想像してる通りだ……』

タマの向かう先には三千院ナギの大きな屋敷が見える。かつてテルが働いていた職場だ。そこを目指しながらタマは言う。

『あのメイドは元気だぜ』

○

テルとタマが向かったのは屋敷の端っこに位置する一室。そこだけ窓が開け放たれていて、風によってカーテンが外へと靡いてい

た。

テルとタマは窓から数メートル離れた木の陰からその一室を覗き込む。中からは声が聞こえる。もちろん、聞き覚えのある声だ。

いた。

栗色の髪を下して、メイド服を着た女性。全体的に痩せた印象を見せているがそれでも健康的な笑顔を見せている彼女は間違いなくマリアだった。

『一週間くらい前だ』

座り込んだタマが尻尾を揺らす。

『医者も匙を投げた後、急に容態が回復してな。医者も“奇跡”だの、“ファンタステイック”だの言ってたぜ。あんなに苦しんでいたのに今じゃ元の仕事に復帰できるくらいに元気になった』

それと、とタマは続ける。

『なんかあちこちで変な事が起きててな。お嬢のテレビ見ると、各地で起きてた地域紛争が終息し始めたんだよ。不景気で物騒な世の中からやっと解放されるらしい。おれっちも最近の一食はツナ缶二個だけだったからな』

空を見上げたテルはその瞳ではるか遠くを眺める。どこか平和で、安心するような雰囲気を感じたのは何もこのこの空間だけではなかったのだと。

『解放、か……今まで呪いでも掛けられてたみたいな感じだなアおい』

タマの一言に、テルは思う所があった。それは自身が過去にギリシヤで受けた呪いの事だ。

全てはあの日から始まったように、テルを取り巻く者たちへの不幸も、あの日から始まっていた。撃鉄は姿を変えて、自分が行く全ての地では争いが起き、多くの命が流れる。

そこでテルは考える。今日まで続いていたこの異常な世界の出来事は全て自分自身が振りまいていた災厄なのだと。だが、これではまるで……。

「病原体だな」

しかも治療法も抗体もない。相手がなんだろうと問答無用に侵食していくタチの悪い病原体。都合の良い解釈なのかもしれないが不思議としつくりくるものをテルは感じた。もしくはこれは呪いなのだ。

もし、この世界が平和へと向かい始めた要因はテルの思う所では二つある。それは過去に向かった時、過去の己に姿の変わった撃鉄を破壊された事だ。

病原体がああ撃鉄だったのなら、その撃鉄を破壊されたことにより、呪いは無くなった、と考えるのが妥当だろう。

だが、そうでない場合。それはテル自身が呪いになってしまったということを考えてとき、前者の撃鉄が破壊されてしまってもその呪いは続いていた可能性がある。しかし、今のテルはこの通り死に体だ。呪いを持つ宿主が死にかけている為にその効力が失われつつあるのだという考えもあながち間違いではないだろう。

どっちにしろ、今となってはどっちが真実かどうなのか分かりもしないが。

「でも……」

不意に視線を窓の先から見えるマリアを見る。今は絵画の額縁を綺麗に拭いている最中だろう。テルはそれを見て世界が平和になったとか、傷の痛みとかもどうでもいいくらいに、心の中で呟く。
……綺麗だなあ。

今死ぬかもしれない状態の男が浮かべるものとは思えない言葉だ。だが、彼女の姿を見ているだけでテルは安心し、救われるような気持ちになるのだ。

背が少しだけ伸び、髪の毛の長さはそのままだ。いつものハーファッツの髪型をしていないのはもしかしたら気分を変えているのかも知れない。少しやせ気味なのはまだ本調子ではないのだろう。それでも仕事に復帰する彼女はまさしく仕事人としての鏡だ。

彼女の一挙一動に懐かしさと同時に見とれているテルだった。今のマリアは体調こそ戻ってはいないにしろ、とても幸せそうである。

すると、奥の扉が開く。入ってきたのはナギだ。身長は高校の時より少し伸び、若干大人びた雰囲気纏っている。右手に持っているのはPSP。

なにやら談笑している。不機嫌そうになにやらマリアに要求しているがマリアは笑っていて、それを見てナギがそっぽを向いていた。さしずめはパーティープレイを手伝えと言うナギの要求をマリアが掃除中だからまだ無理、と断った所だろうか。

「これで良かったのかもしれないな」

『あん?..』

思わずこぼれていた一言にタマが唖る。だがテルはタマに対しては口頭で答えず、心の中で思った。こういう世界があったのではないかと。

ハヤテ、ナギ、マリアの枠組みの中に善立　テルがいない三千院家という世界がどこかにあったはずだ。それはこんなトラブルとは無縁な血で血を見るような世界ではなく、バカみたいに笑って泣いて終われる世界。ハヤテもナギもマリアもそれぞれの道を見つけて歩き始める、そこにはテルを含まないで進む、そういった道が。

このままテルがマリアと会わずに、この場から去ればマリアを不幸にすることは無いだろう。こんな姿を見せてもただ自分が死ぬという事実を突き付けてしまう。下手をすればトラウマものだ。

……案外覚えてないかもね。

そう思うのはこの変わり果てた姿だろう。ストレスやら紛争に巻き込まれたこともあり、いつの間にか白髪で体格も変わってしまった。高校の時と比べれば“誰だお前”と綺麗なツツコミが返ってくるに違いない。

最悪、不審者扱いでこの身体にさらにオーバーキルを施される可能性もあった。銃殺は勘弁願いたいものである。そうなるくらいならこの場から顔を出さずに逃げて、人知れずに死んでいくのが良いだろう。

そして身元不明の男性が発見される、ニュースになるが誰も分らない、その間に三千院家の人たちもテルを知っている知人たちも朝食のパンをかじりながら、“こわいねえ”とか関心などゼロといった感じでスルーされるのだ。

いつだったか瀬川 泉が言っていた“テル夫くんは人知れずゴミ捨て場に倒れるように死んでそうだね”と。

まさかその通りになるとはテル自身も思っても居なかった。あの予言女め、来世では崇つてやるぞ、とテルは苦笑いしながらその身を行動に移す。

『オマエ、どこ行く気だよ』

その場所から移動しようとした時だタマが呼び止める。

『会っていかねえのかよ。帰って来たつてのに……』

タマも、テルのこの身体がいかに危険な状態なのかは承知だ。今ここでマリアに会ってやらなければ、彼女も、テル自身も一生後悔するだろう、と。

だがテルはタマの頭の上に手を置いて、首を振る。その目はこう言っていたのだ。

“これでいい”、と。

テルは人知れずこのまま朽ち果てていくことを選んだのだ。その覚悟、タマは野生の勘から感じ取る。この男は一度こうだと言い始めたら何が何でもやり通そうとする男だ。それは猛獣であるタマでさえもさえぎる事は出来ない。

「あばよタマ、あんまり過ぎんなよ骨付き肉は一日一本な」

それが、テルとタマの別れの言葉だった。タマはおぼつかない足元で去っていく彼の背中を見送る事しか出来なかったのだ。

だが、タマには彼にしか出来ない使命がこの時生まれ、それを成す為に走り出した。

○

相変わらずこの屋敷は広いな、とテルは身に染みる疲労感から屋敷の広さを再確認していた。

タマと別れた数百メートル。

丁度屋敷から離れて、上手く人気のない場所へと歩いていく。失血もだいぶ落ち着いてきたが流した量が多いのでこのまま処置を怠れば死は免れないだろう。そうなる前に、屋敷を出ていく必要があった。

「あれ・・・！」

木の根に足を捕られ前のめりに倒れこむ。油断した、とテルが起き上がるうとしたが。

「まづいな」

上体を起こすことが出来ない。全身に力が入らない。どんよりと瞼が落ちてきて、今にも眠ってしまいそうなくらいの睡魔が襲ってくる。

……いかん、いかにぞ。この屋敷を出るまでは死ぬわけにはいかんのだ。

なんとか顔を振って眠気を打倒すると両腕を動かして這うような形で身体を動かすことに成功した。だが、この動きも連続では続かない。わずかずつでも前に進むために、テルは休憩を取る事にした。

「よい、しよつと……」

近くの木に這うように近づき、根本辺りで仰向けになってから、両腕の力だけで少しずつ、姿勢を変えて五分後には木に背中を預けるような態勢になった。

限界だな、と足も手も動かな様にテルが舌打ちをした。もともとオーバーキル状態の身体に鞭を打ってここまで動かしたのだ。そのツケが今来たのだろうか。

もうどこに行こうとか、逃げようとか、そういう気力も起きない。完全にテルは死が訪れるのを待つだけになってしまった。

「そーいや、ハヤテは何してんだ？　こういう時は駆けつけるもんじゃないのかよう、主人公」

以前、執事として生活してた時だ。ナギが危機になりハヤテの名を呼ぶと彼は即座に駆けつけて彼女の危機を救った。さながら、疾風（はやて）のように。

今思えば、完全な超人枠にあった彼をテルが羨ましいと思った事は何度かあった。彼のように気が効いたり、有能であれば自分自身はどれくらい楽に居られただろうか。

羨ましいと思ってはいたが、彼に対しては嫉妬したことは無かった。それは彼がテルにとって数少ない友だったからだ。もち

ろん、木原の事も忘れてはいないが高校以外で同じ執事という職を持つ者同士、辛いことも楽しいことも共有してきた仲だったからこそテルはハヤテを友と思っていたのかもしれない。

そんな彼がこの状況で颯爽と現れてくれるのではないかと、テルは内心期待してしまう。だが、現実と言うのは常に思い通りにいかないように出ており、ハヤテがテルの前に現れることは無かった。

「遅いじゃないか・・・ハヤテ」

瞼の裏で、テルの眼の前にはハヤテが居る。勿論、本物ではない。今際のテルが思い浮かべている妄想に過ぎない。

「お前が来るまで、生きているつもりだったのに・・・間に合わないじゃないか」

一息ついて、小さく笑う。

「疾風（はやて）という大層な渾名に、傷がつくだろう・・・」

その時である。ふとテルの耳に届いた小さな音。これは地面の草を踏んだような音だ。

誰かが近くに来ている。その歩を進めて、こちらへと距離を詰めて来ていたのだ。

誰だろう。恐らく、ハヤテかもしくははこの屋敷を警備しているS Pだろう。だとしたら不審者として屋敷の方へと連絡が行ってしまうかもしれない。だが、これから黙って消えようとするテルはそれを善しとしない。

「すまないが、俺をこのまま放っておいてくれないか。これから俺は“死ぬ”のではなく“死んでいく”・・・その過程を結構楽しんでる所なんだ・・・」

邪魔しないでほしい、と謎の人物に告げようとした時だ。テルの頬に何かが添われる。それは目を瞑っていてもすぐに“手”だと

いうことが分かった。すべすべとしたような肌障りに、これが女性の物だとテルは驚きを隠せない。

まさか。

「お帰りなさい……テルくん」

耳を疑い、眼を見開いたテルはその人物を前にして再び目を数度見開いて見せた。

マリアが、目の前に居たのだ。

「久しぶりに帰って来たと思ったたらこんな怪我して……どつかで転んだんですか」

「俺の事、分かるんですか……」

見た目がまるつきり変わってしまった事にマリアは優しく微笑んで返す。

「そりゃあ、ビックリしましたけど。雰囲気で一発ですよ……どこからどう見ても、私の知ってるテルくんです」

そう言うマリアの背後、数メートル先に白い獣、タマの姿がある。恐らく、タマがマリアをこちらまで誘導したのだろう。余計なことをしてくれたものだ。

「私……この前まで命の危機に直面していた身だったんです。ハヤテくんもナギも皆が悲しんで、どうしようもなくなった時に見た夢があるんです。」

テルくんが頑張つて私を助けようとした事を……もちろん、夢の話だから今どんな内容なのかも曖昧ですけど、きつとテルくんがどこかで身体を張ったんだろうなって」

「……」

テルは思う。結果的に、過去へと飛び、自分を無かった存在にし

て、黒羽も救うという未来のテルの目的は果たすことは出来なかった。だが最終的にマリアを、愛しき者を救うことが出来たことはテルの本懐なのではないだろうか。

だったら、後悔することは無いだろう。むしろ、自分のやって来たことを誇ってもよい。進んできた道を間違っていたと過去の己に言われてきたばかりだ。テルは自分の人生に答えを得る事が出来たのだろう。

最後に取り戻した己の信念が……この場所までたどり着いた事が、この結末に導いたのではないか。

「ありがとう」

小さく呟き、マリアが首を傾げる。テルは霞む視線で言葉を紡ぐ。

「マリアさん、眠いのでちよつとだけ寝させてください。大丈夫、一時間だけですから……そんで、眠りに入る前に言わせてください」
以前はこの言葉を言いそびれて別れてしまったが、どうにか最後に言い切る事が出来そうだと、テルはマリアに微笑み、顔を近づけて彼女の耳元で囁く。

「紡がれた言葉を聞いたマリアはその瞳から一筋の涙を流して、テルを抱きしめた。」

「私もです……私もそうです！　ずっとそうだったんです……！　だから……だから!!」

遠くから数人の人物が走りこんできている。ハヤテやナギ、見知った者たちも居た。ここにたどり着くまで数十秒と掛からないだろう。

テルが気を失っているのか、そうでないのかを今のマリアに判断する冷静さはない。ぐったりとしたその様はマリアを一層不安にさせる。

しかし、マリアが目の前で抱きしめている男はこの上なく、穏やか

な顔だったのだ。

なあ、と薄れていく意識の中でテルは問う。それは未来を打ち負かした過去の己に対してだ。

——過去の俺よう、お前はお前で、こんな場所に来るんじゃないぞ……お前なら、未来を越えたお前なら、この結末を変えられる……そう、信じてる。

一人の苦心と絶望に満ちた男の旅は長い年月を掛けて、今まさに終わりを告げる。男の求めた物とは違う結果が待っていたが男はその事実に関心なく、その荷物を下ろすことが出来た。

その後、男の行き先を知る者は誰も居ない。

〈 F I N 〉

第136話〜一夜だけの小さきユメ〜①

音が聞こえる。それは誰かの寝息による音だ。

三千院家の数百ある部屋でも数少ない個人の一室、机の上に置かれている問題集を前に善立 テルがうつらうつらと頭を揺らしてた。

白銀拓斗事件が解決して間もなく、テルが三千院家に戻ったが特にこれと言った変化はない、部屋に帰ったら宇宙ゴキブリが居て対処に困ったとか、そういうのを除けばいつもの平和的な日常である。未来を打ち破り、悲しき宿命を変えてみせると彼は決意した。

だが、未来を打ち破った男には白皇学院の土、日を含んだ大量の宿題が立ち塞がっていた。一カ月の執事研修があつたせいかわ彼の勉強はまったく進んでいない。提出は明日、もはや徹夜で仕上げるしかあるまいと彼は宿題を現在絶賛消化中なのだが研修や学校生活などの疲労がたまっていた為か、開始して早五分で睡魔にやられてしまったのだ。

「アイエエエエ・・・」

涎を垂らしながら前後に頭を揺らし、脳内では一体どんな夢を見ているか全く不明だ。刻一刻と時間と言うのは削られている、時間は有限なのだが。

『やー』

だがそんなときの為に彼が用意した監視役が鉛筆を用いて猛威を見せる。小さな物体は前後に揺れるテルの額目がけてタイミング良くその鉛筆を突き刺した。

ぐさりと明らかに深々と突き刺さったその鉛筆に動きを止めたテル。全身の筋肉が硬直して変な汗を垂らし始めたと思つた次の瞬間。

「ギツ!?」——「アイエエエエエエエ!!」

激痛を感じ始めたテルがその痛みを声に乗せて叫んだ。

「ナンデ? エンピツ? ナンデエ!」

意識を覚醒させたテルの額には突き刺さった鉛筆が、テルは目下
その痛みを与えた恐るべき犯人の姿を捉える。

「チビハネ」

『やー』

テルの呼びかけに元気よく手を上げて返すがテルは手を手刀の形
にすると、

「やりすぎ」

『やー……』

虫も殺せないような弱さでチビハネの頭に叩き込んだ。

「お前鉛筆人に向けて刺しこんじゃダメでしょう。ホレ、見ろよお
前に刺されたこの跡……エイジャの赤石はめ込めるよコレ。究
極完全生物になれるんだぜオレ」

先ほどの仕返しとばかりに持っていた鉛筆を逆さにしてチビハネ
の頬にグリグリと押し込んで見せる。それに不満を感じたチビハ
ネがその鉛筆を押しのとけると、

『やー！』

叫んだ。端から聞いたらどう聞いても「やー」という単語。

このチビハネと出会ってからというもの、殆どの会話はコレだ。最
初はこの生物の言葉をジェスチャーを用いていたが今となっては。

「お前が寝たら起こせって言ったんだろ」だと？ ああ、そうさ。
だけでもっとやり方があったはずさ。

鳴かぬなら泣くまで待とうホトトギス、そんなやり方も知らん
か」

この通り、翻訳機能でも仕込んでるのではないかいうくらいに理解
できている。この二人の関係はいわば「ツーと言えばカー」状態
だ。

『やー』

「なにい？」泣かぬなら突き刺し、焼き喰えほととぎす」だとオ？

なんて恐ろしい奴だ。第六天魔王もビックリするぜコレ」

と、やり取りは最小限にしてテルは問題集に取り掛かる、が眠気が

中途半端で覚まさせられたせいかわ頭が回らずに問題を解く作業の筆がペンで白紙のノートに突いて点を無数に作り出す作業と化す。勉強と言うのは一朝一夕で身につくものではなく、地道な勤勉が生み出すという事をマリアから聞いたことがある。これを思い出すと真面目に授業聞いとけば良かったと今更ながら後悔したテルだった。

「今度はどうした」

数十個ほどの黒点が白紙のノートに生み出された時にテルは気づく。MONOの消しゴムにちよこんと座ったチビハネがなにやら怪訝そうな表情をしていたのを。作業を止めて、その真意をテルは尋ねたのだが、

『……』

「いや、流石にダンマリだとなんも分からねえんだけど」

エスパーでもない限り、テルが言葉を発しないチビハネの真意を見抜くという事は不可能なのだが、なぜかチビハネは話したげらない。何か触れにくい話題なのだろうか。

「なんだ、飴玉欲しいのか？ 三個欲しいのか？ いやしんぼめ」

『……』

「無反応ですかチビハネさん」

首をぷいっと振るだけで何も会話が生まれない。バッドコミュニケーションケースだ。

白銀拓斗、未来のテルの事件が終わってからこういう風にこちらを眺めてはだんまり、というパターンが増えてきたような気がするの。気のせいだろうか。

気分が悪い、という訳でもなさそうだ。若干、ボーっとしているようにも見えるのだが。

「チビハネちゃん、俺ちよつと眠いから五分だけ寝かせてねー」

そう言って机に突っ伏すように姿勢を倒す。勿論これはチビハネを煽るためにやっているの、本当に寝る訳ではない。

『……』

「あ、アレ……？ おかしいな、本当に寝るよー」

『……』

「え？ いいの？ マジで寝るよ？ 俺が赤点とつたら起こさなかったお前に責任があるからおやつとか無くなるけどいいの？」

『……』

「いつとくけどな、仮眠だからな！ 寝るっていつでも実は起きてっから！ 目閉じてるけど実は寝てないから！」

——数分後。

「(っ)おお……」

誰もが想像できた展開だろうが、テルは見事にそのまま撃沈してしまった。

○

「(っ)お……」

時計の針が一定のリズムで秒針を動かす音にセツションするようにテルの寝息が部屋にまた響き始める。ノートを広げたその上に頬を突いているテルを消しゴムをイス替わりにしていたチビハネはゆっくりと立ち上がった。

『ふう……』

小さくため息をつく。ただ寝息を吐くだけのマシーンと化したテルを眺めてはその頬に思いつき蹴りを当ててやろうかと思いが頭の中で浮かんでいる。そうすればまたチョップを食らうのは見えている未来である。

チビハネがテルの口元へと移動する。それは彼の顔面を蹴ろう

という荒業を実行するのではなく、彼の口元から垂れている一筋の透明な液体を確認するためだった。

『うっわぁ……まじ汚ねえデス』

間近で見ればこれほど汚いものはないとチビハネは断言する。勿論それはテルの涎であり、宿題であるはずのノートにもその液体は垂れて一点のシミを生み出していたのだった。ドン引きするのは当たり前である。

『コイツ……後で後悔しないデスカ？ これじゃ問題解くことも出来ないでしょうに』

ノートに垂れた唾液がシャーペンで書いた文字列に付着して黒く滲み出してきている。テルが一度寝返りを打てば、ノートの文字にある滲みは広範囲にわたり、その文字は形を維持できなくなるだろう。

『コイツが宿題が出来ていないと知ったら、あの担任も黙っちゃいませんね……デス』

と言っている傍から。

「ぬうん」

『うわ』

チビハネの倍はある大きさを持つテルの頭部がぐるん、と動いてしまった。勿論、垂れていた涎を自身の頬になすりつけて滲みは倍増。先ほどまで多少ながら消化していた問題の答えはなんと記入されているか分からなくなった。

そんな破滅的エンディングの分岐を選択してしまった事を知らないこの男は、汚い寝息に足して笑みを浮かべてしまっている。そんなに夢見心地がいいのだろうか。

『しようがないデスねえ……』

小さくまたため息をつくとき、チビハネの後方に置かれていたティッシュ箱へと向かった。箱をよじ登り、箱の隙間からその一部を晒している一枚の先端を取ろうとする。勿論、人のサイズだったらティッシュを抜き取るというのは造作もない。だが生憎チビハネ

はサイズが小さい為、そう簡単にはいかないのだ。

足場をしっかりと固定して、首を絞めるように紙と紙を纏めるとそこからロープを手繰り寄せるようにティツシュを取り出した。なかなか苦勞がかかるのである。

『さて……』

再び現場もとい、テルの眼前へと戻ったチビハネ。仕方ないといった表情で両手で目いっぱい広げたティツシュでテルの口に付着している唾液を吹き始める。

『うわー、こつちの手までヤヴァイことになりそうデス』

ティツシュを当てた瞬間一瞬でしみこむ唾液に嫌悪感のようなものを感じながらもチビハネは辞める事をしなかった。普通ならば、テルが起きるまで放っておくし、自らの手で彼の世話を焼くなどということ自体しなかった筈である。

チビハネがこの行動へと至った理由はテルに対するある疑念が元となっていた。

——この男は何か悩んでいたりはしていないだろうか。

執事研修が終わり、数日くらいからかテルの様子がおかしいのをチビハネは感じ取っていた。こちらが呼びかけている時はいい。至って普通で、いつものテルである。いつものように、バカやりながら受け答えしてくれる。

だが、ふと彼を見た時は窓辺で授業を上空にしながら、どこか遠くを見ている。その時の彼は決まって辛そうな、悩みを抱えていそうな雰囲気醸し出していた。

『コイツ、いつも何考えてるデス』

チビハネはそれだけを知りたい。なぜこの男がそこまでさせているのか、あわよくばそれを自分が解決できれば良いとも考えていた。彼とはマスターである黒羽舞夜を護るための共同戦線を引いている間柄だ。いわば戦友。仲間の危機を解決することは必要なことだ。

だからここ最近はこちらから色々と聞き出そうとチビハネはアク

はないと考えて、面倒くさそうにテルがいる机の後ろの壁に掛けている時計を見る事にした。

「ん？」

ここで異変に気付く。確かに時計はあった。それは確かに時計である。三千院家にテルが厄介になってからこの部屋でお世話になっているアンティークタイプの壁時計。ブラウンカラーで数字が英語だからという理由でテルはその時計が気に入っていた。その時計だが、

「……時計、あんな位置にあったっけ？」

普段テルが見ている時計の位置が違う。何が違うかと言えば、高さだ。いつもなら首をちよいと上げるとか、視線を動かすだけで確認できるはずの時計が今はしっかりと首を上げないと確認できない高さにあるのだ。

「ああ、まだ俺寝ぼけてるのかい、ていうか頭スゲー重たい。ダメダメだ、まだ宿題終わってねえっつーの早く起きろ」

何故か重量感のある頭を振りつつ、意識を覚醒させるために足の肉をつまんで見せた。だが、覚醒した状態で確認した現状がテルの疑念を加速させる。

まず自分がいる場所。テルは先ほどまで椅子に座っていたはずだ。だが、今は椅子にすら座っておらず、今いる場所は平たんな板の上だ。

「文字……？」

足元にあつたのは文字であった。だが、明らかにその文字の大きさは自分の身が埋まる程の大きさである。同時に、テルが立っているのはノート用の紙の部分だと理解できたのは文字を発見したことが大きい。

よく辺りを見れば、あり得ないデカさの鉛筆と消しゴムが転がって

いるし、消しカスのデカさなんて見ていて気持ち悪いものだった。手のひらサイズのひじきがそこらへんに転がっている気がしたからである。

「つまり、ここは俺が寝てた机の上？」

結論にたどり着くまで約五分と十二秒。だが、これは常人にしては早い方ではないかとテルは自分勝手に推測する。異人、未来人と戦うという日常を過ごしていたからこそ冷静に対処することが出来たのではないかと言うのが理由だ。そして普段より大きく見える物、そして自分が今までいた場所から推測して最終的な結論。

「俺ってば小さくなったのか、なるほど……これは夢だな」

今見ている光景がこれまでのようなぶっ飛んだ日常だとしてもこれはあり得ないことだ。自分が小さくなるという事なんてありえない。だからテルは勝手に断言する、これは夢だと。

だが、ある物がテルの眼に映ったのだ。

「すい……すい……」

とテルの近くで誰かが眠っている。すい、というメルヘンな寝息を立てながら横になっている姿にテルは見覚えがあった。それは黒羽だ。

「黒羽がいる……ということとは、またなにかしらの。まさか、白銀が言っていた俺が最後に戦う相手？」

テルが最後に戦う相手、それは黒羽の命を狙う者。その類ならば、こういう不思議空間を作り出すことも造作もないかも知れない。何故なら、己自身が未来で魔法を使っていたのなら、物体のサイズを変えてしまう魔法を使うくらい造作もないだろう。

ならば、と気を引き締めるべくテルの警戒レベルが変わる。まずは黒羽の安全を確認するべく、彼女の頬を軽く叩いては起こすことに

した。

「ん、んう……?」

むくり、と身を起こした黒羽の様子を見てテルはひっかるモノを感じた。 常時凜々しさを保つ彼女は寝起きでも気品さを感じさせるものだが、この黒羽はまるで別物のような反応だ。

まず、なんか形が目が付いた。 まるでどこかのねんどろいどのごとく体系が丸いし、肩が無くて頭部がデカイ。それだとちよつと気色悪い表現なので、ここではデフォルメと呼ぶことにする。

「なにしやがるです……チョコ、チョコ寄越せです。 甘い物なら何でもいいです」

本来なら絶対に黒羽が口にしないような言動。 本物かどうかを疑うのだが、きつと事態を読み込めていないからか、動揺しているのだろう。 そうなれば、いつものギャグよりのノリで黒羽の調子を取り戻してやろうという作戦に出る。

「黒羽!!」

「ふあい?」

瞼をこする彼女の肩を掴んで軽くゆすりながらテルは続ける。

「なぜ黒羽がここに!?! 逃げたのか!?! 自力で脱出を!?!」

どこかの次元からやってきた不審者の如く詰めよるテルを見ていれば、いやでも黒羽はクールな様子で毒を吐くはずだ。 “ ああ、もう貴方は手に負えない程に頭がイカれてしまったのですね ” とか、 “ これから使用人同士の食事では私と向き合うのではなく、床下でタマと向かい合いながら食べてください ” とテルの心に傷を負う事現実だが己の身一つで彼女の調子が戻るならばそれも良しとテルは考えたのである。

「黒羽!!」

「ふん!!」

だが再度その名を呼んだ時、返ってきたのはテルの予想を斜め上でいく黒羽の腹パンであった。

「ぐう!?!」

ボクサーの如き重い拳がテルの腹部に突き刺さる。なんと
ことだ、これほどまでに黒羽は力をつけてしまったのか、とテルが驚
嘆していた時だった。見事なボディイーを食らわせた黒羽が静かに
口を開く。

「私は……マスターではない、デス」

“マスターではない”その言葉が意味するものをテルは瞬時に理
解した。その喋り方はまさしく、黒羽ではなくチビハネのものであ
ると。そして同時に本当に自分が小さくなってしまった事を真に
認識させられてしまったのだった。

——小さき者同士の奇妙な、そして一夜限りの冒険が始まる
のである。

第137話〜一夜だけの小さきユメ〜②

誰もが寝静まり、時計の秒針だけが刻む一室に一つの打撲音が響き渡った。チビハネの拳がテルの腹部にめり込んでいたのである。

「ぐふうー！」

強烈な痛みと共に膝から崩れ落ちたテル。相手がチビハネだと理解した時、彼女のパンチ力にテルは絶句した。このパワーはまるで戦闘時の、敵として戦っていた時の黒羽舞夜並であると。

「ちよ、チビ……話を聞け——」

「ダメエ、何者です！」

一瞬の刹那、チビハネの強烈な張り手がテルの顔面を捉えた。同時に、そのまま顔面を掴まれてテルは後頭部から机に叩きつけられてしまい、こちらの話を聞いてもらえない。

「なんかアイツそっくりな野郎ですが怪しいのでデリートするデス！
オラオラオラオラアアア!!」

それどころか、即座にテルの腹部に跨ってマウントを取るとダメー
ジで動けないテルに対して容赦ない拳の連打を浴びせる。一発一
発がとにかく強烈かつ的確で気を抜くと一瞬で魂を刈り取られそう
である。

「コヒュー、コヒュー……」

マウント取られ、ボクサーの前のサンドバッグの如くチビハネに殴
打されたテルは既にボロ雑巾に等しい状態であった。顔が腫れて、
瞼が塞がりかけているのか見上げるチビハネの姿が霞んで見える。

「ん？」

ふと、振り上げていた右腕が止まる。今その一撃をかまされたら
間違はなく昇天されることが予測できたから、テルにとっては一時的
なものであれど、助かったと言えるだろう。

直後、チビハネの両腕がテルの顔面に伸びると、殴打で膨らんだ頬

を驚掴みしてまるで餅でも捏ねるかのようにつ張り始めた。

「なんかどっかで見たような……」

何を迷う必要があるのか、目の前にいるのは“どっかで見たような”なんて既視感を得るところか、紛う事なき本人なのだ。チビハネは今更ながら気づいたように眉をひそめて、

「まさか、お前テルです?」

「今更気づいたのか! あんだけサンドバッグのように人の顔殴打しといてもつと分かりづらくなってるのに!」

「おお、このツツコミカ、まさしくテルです! いや、待てよ。もしかしたら同化されたシリコン生命体が化けてるかもしれないデス」

「俺を突っ込み力で判断するな。あと、別に俺は珪素系男子でもなんでもない」

あちやー、とバツが悪そうにチビハネは視線を逸らしている。白々しい、どうせなら開き直って罵倒してほしいくらいだと思っている。素直に反省をしている事だし、このまま寛大な精神で水に流してあげるべきではないか。

「でも顔が変形したテルが悪いんです! 判りやすく、胸のあたりに『てる』って名前のカードでもぶら下げておけば良かったんです!」
「人が良心でお前の罪を許してやろうとした矢先に開き直りやがった! 確かに、俺も俺自身の姿をいまだに疑っている訳だがな!」

普通に考えてみれば、人が小さくなるなんて、青い耳ナシのネコ型ロボットの世界に出てきそうなものだ。ガリバートンネルとかスモールライトとか。非現実的、つまり夢の可能性が高いのである。

「いや……」

独り言のようにそう呟いて、テルは冷静に考える。これまで体験してきた事は全て通常の人にとっては信じられない、非現実に溢れた現象だった。繰り返されてきたその非現実は最早テルにとっては現実と同じものである。ならば、今日の前に自身に起きている現象から目を背けずに見つめ、解決策を思考するのが大切なのではないか。

「そうと決まればチビハネ、これまでの状況を的確に推理しようと思
うんだが協力してくれ——」

そうやってチビハネに提案しようとしたテルの眼の前には頭に三
角巾を巻いてビニール袋を手持っているチビハネの姿があった。

「お前は一体何をしようとしているんだ」

「掃除です！」

無い胸を張るように、チビハネはエツヘンと腰に手を当てている。
そんな事を唐突に言われても意図は全く理解できないわけなのだ
が。

「その脳ミソが理解出来てなさそうなので説明させてもらうん
です
が……お前の部屋、汚いです」

テルは辺りをぐるりと見渡してキョトン、さながら漫画のキャラク
ターのように頭上にクエスチョンマークを浮かべるかのごとく首を
傾げた。

「何言ってるんだよチビ。俺はこう見えても綺麗好きだ。白皇学院
で俺ほど清潔感に満ち溢れた男はいないと断言してもいい。特に
自分の部屋は仕事以上に大事にしてる。週に一度は部屋が綺麗にな
るように祈ってるしな」

「なんで祈る必要があるです。ちなみに誰に祈ってるです？」

「掃除の神だ」

「スゲー馬鹿な答え方してるって気付いてるですか。とにかくそこ
まで綺麗好きならば、掃除のマエストロと自称するならば、いつも菓
子の袋とか、脱ぎ捨てた執事服とか消しカスとかが散乱してるのはな
んでです？」

何故それを知っているのかと問われて視線を逸らしたテルだが、こ
のチビハネはテルの部屋に居座り続けている同居人、そんな惨状を見
ていても不思議はない。

「たしかにお前がこれまで見てきた物は真実だろうなチビ。だけ
ど、実際俺の祈りは通じている……次の日になれば散らかってい
た部屋はとつても綺麗に元通りになっている事も見ている筈だ」

一時期、白皇学院の勉強と三千院家の仕事の両立が難しくなり、疲

労からミイラ男になったテルは自身の部屋を掃除する暇がなく、ゴミが散乱していた時期があった。ハードなスケジュール故、致し方ない犠牲。だが常人ならば確実に片づけなきゃいけないだろ思うレベルの問題であったのは間違いない。

だが、いつからだろうか。次第にゴミが減っていく現象は発生し、10日辺り過ぎた辺りには綺麗さっぱりとなっていたのである。神の思し召しか、とさえテルは考えている。

「……………」

対してのチビハネだが、反応が薄い。どれくらい薄いのかというと完全ならジト目で、「コイツマジで終わってシナ」と思わせる見下しっぷりである。あとは呆れたため息をついた。

「もういいです。基本テルは妄言の塊なのでですから、実際実際の部屋凄くまだ汚いですから、今から掃除するです」

「え、いいじゃんよ。一日経てば掃除の女神による元通り現象が……………」

「たまに女神とやらに休んでもらうです。これを機に、テルも自分の部屋を掃除することを覚えやがれです」

チビハネはそう言うのと、手に持っていたビニール袋を翻して机の端から勢いよく飛び出す。重力でチビハネの身が落下していく過程で持っていたビニール袋が広がって膨らみ落下の速度は減少し、パラシュートの役目を果たしたのだった。

「さっさと手伝えバカヤロー！」

緩やかな着地を決めてそう叫ぶチビハネ。テルとしては何故そこまでしてこの部屋の掃除をさせたがるのかが不明だ。確かにだしなく、身の回りの整理整頓が出来ない姿を見ていれば、もっとしつかりしろ、と言いたくなるもの普通なのだが。

「やれやれ」

仕方なく、しょうがない、と思つてテルも掃除を手伝うことにしたのだ。

「ふぬぬ……………」

と、掃除を始めた数分後。

テルはゴミ箱の下敷きになっていた。もう何が起きたのか、その経緯を簡単に説明しなければならぬ。

始まった掃除は至極簡単なものである。散らばったゴミ屑をチビハネが用意していたビニール袋に入れて、溜まってはそれをゴミ箱に入れていくというものである。いつもよりはゴミの数が少ないとチビハネが言っていたので早く終わったのは良いが、今度はそのゴミ箱を動かして元の位置に戻さなくてはならなかった。

机の横に置いてあったのがベッドの場所まで移動していたのでそこまでの移動だ。ここでテルが一人でゴミ箱を持つのだが、いつもの、人間大のテルの大きさなら小指でも持つことはできる。ここに大きな誤算があった。体が小さくなったことで力そのものが小さくなったテルは自分より遥かに大きいゴミ箱を持つことが出来なかったのである。結果、箱に入れていたビニール袋たちは再び床に散乱し、テルはゴミはこの下敷きになってしまったのだ。

「インガオーホー」

「う、うるせえ……」

下敷きになり動けないことをいいことにチビハネはテルの失態にご満悦の様子。体が小さくなった途端に今までできていたことが出来なくなるといふ老後の悲しみを若くして知ってしまったテルであった。動かそうにも、ゴミ箱は意外に重く、こちらが潰れるかもしれないギリギリの状態。

「助けてほしいデスか？」

そんな危機的状况を知って尚、この悪魔はニヒルな笑みを浮かべてやって来るのだ。チビハネは。

「お、俺は屈しないぞ！ 悪魔の囁きなんて……」

「今潰れて果てるか、媚を売ってでも生き残るか選べです」

「俺は借りを作るわけには……」

コイツに、チビハネに借りを作るわけにはいかない。この場所で

借りを作ったら、後で何を請求されるか分かったものではないからだ。最悪ビスケット一年分とか、ハーゲンダッツチョコクッキー―味を一年分とかテルの財布にダイレクトに破壊しかねない要求をしてくるに違いない。そう考えた時、要求を呑むわけにはいかないのだ。「……頑固デス。そこまで借りを作られたくないデスカ」

呆れたようにしゃがみながらこちらを見おろしていたチビハネは立ち上がるとゴミ箱の一部を掴むと、

「ひょい」

言葉の通りに、今までテルがどかすことも出来ていなかったゴミ箱を軽々と持ち上げたのである。特にキツイといった表情も浮かべず事もなく、そのゴミ箱を地面へと置くと小さくため息をついただけであった。

「実力の差はここまで出るのデス。 お前のルガーランスがチマチマ敵を刺して倒すのに対して、私のはメガ粒子砲レベルで敵を消し飛ばせるくらいの性能の差があるのデス」

「そのルガーランスの使い方は間違っているとだけ言っておこう!!」

最近のルガーランスはマジカルステッキにもなるらしいですね。

閑話休題。

「また散らばっちゃったか」

「また片づけるまでです……と、その前に」

辺りを見渡し、何かに気付いたチビハネが床に落ちていた何かを拾い上げた。 なんの変哲もない赤ペンだ。 今のテルたちから見たら身の丈以上の長さを持つものであるのだが。

「あれ、コレどっかで見たことあるぞ」

テルはこの赤ペンに見覚えがあった。 そう、これは数日前に無くして探す事すらも諦めていた赤ペンだ。 インクの出と使いやすさから無くした時は相当ショックだったのを覚えている。

「なんと面妖な……てつきり学校で落としたのだと」

「実際ここにあるんだからお前の管理不足だと、私は突っ込んでみ

るのデスが・・・これ、たしかいつも机の白いペン立に置いてたデス」

「お、おう」

なぜ知ってる。と戸惑いを感じるテルを余所に、チビハネは机の上に存在するであろうペン立目がけてその赤ペンをワインドアップで投げ放った。あくまで適当に投げているのでペン立に直接収まるはずはないのだが、投げた直後、とても聞きなれていたペン立に何かが入る音が聞こえたので恐らく命中したのだろう。

だが、チビハネの行動はこれで終わりではなかった。

「このティッシュ箱はベッドの枕隣・・・昆虫大図鑑は本棚の一番下の右から三列目、文房具関連は机の右手にある引き出し・・・あと世界史の資料とか」

「なんて奴だ・・・」

善立テルという部屋の主よりも部屋の内情に詳しく、てきぱきと掃除、整理整頓に励む姿にいつもの天然の姿は感じられない。この時だけはまるで別人のように、年上のような頼りがいのある存在であった。

「どうすりや居候のお前がこんなに覚えられるんだよ」

思わず、感嘆の意味の言葉にチビハネが作業を辞めた。丁度手に持っていたオセロの一枚を両の手で持ってはそれを見つめて、言うのだ。

「そりや毎日同じ部屋に居ますからねエ。見たくもない物を見せられていたというか・・・あと、私の周りが汚いと居心地が悪いデスから」

え？　と思わず出たチビハネの言葉に、テルは疑いながらも、驚きながらも聞くのだ。

「・・・お前がやってたのか!?　俺の部屋の掃除!?!」

「・・・ふん」

ぷいっ、とジト目でこちらを一瞬見てから顔を逸らしたチビハネにテルは頭を掻く。自分の日頃の行いを反省しながら、綺麗になりつつ

ある部屋を見渡しながら。

「すまん」

掃除の女神など、得体の知れない物体の存在を信じていたが実際はこんな小さな、自分よりも小さな存在が身の回りの世話を焼いてくれていたことに罪悪感を持たずにはいられないテルだった。しかもチビハネは何も頼まれたのではなく、自分自身の意志で行っている。頼まれていない他人の部屋を掃除する事は極めて掃除が好きな人間でなければ出来ない事なのに。

「ありがとう・・・お前、スゲエじゃんよ」

感謝しなければならぬ。この場所を綺麗に保っていてくれた事に対して。もちろん、全力でだ。この先ハーゲンダッツでもビスケットでも分割ながら、一年分は出してもいい覚悟ではある。

「い、一応・・・居候、デスから」

オセロを抱きかかえると照れくさそうにチビハネは言った。その後で、彼女は言う。

「もし、本当に申し訳ないと思っっているなら・・・お願いがあるデス」

「なんだ」

そら来た、とテルは身構えた。言え、こちらはもとより一年分の褒美を保証する覚悟だ。何が来ても怖くない。そう思っていたのだが。

「お前、私に助けてほしい事って・・・ねーですか」

第138話〜一夜だけの小さきユメ〜③

予想もしていなかったチビハネの問いにテルは身が固まっていた。なぜチビハネがこちらが何か隠し事をしているのかという事に感づいていたのか。

「執事研修が終わってすぐデス。 お前の顔色、なんか良くねーです。話しかけてもどこか上の空で」

「そりゃ・・・疲れてるからさ」

視線を逸らしながらそう言ったのはチビハネの顔が険しくこちらを見ていたからだ。

「違うデスよ。あれは疲れてる顔じゃない・・・よく分からないですが、お前のあの辛そうな顔を見ると、こっちまで辛くなるです！」

そんな顔をしていたのか、とテルはチビハネに言われて初めて気づいたのだった。理由はただ一つだろう。執事研修は無事に何事もなく愛沢家で行われたが、それは事実のようで事実ではなく。

テルが知っている執事研修とは遥か未来からやって来た己自身との闘い、未来から告げられた自身の結末と、黒羽舞夜の死の危機。それを未来のテルを前にして超えてみせると言った手前、口にせずともその重大さにプレッシャーを感じていたのかもしれない。

だが、全てはテルだけが知っている事実。テル以外の人間はこの時の騒動も、未来のテルがやって来ていたことすらも知らないのだ。その記憶は、未来のテルが消えると同時に遥か彼方へと消えていったのだ。その得體も知れない事実をチビハネに語ったとして、すんなりと信じて貰えるだろうか。

「ある奴と約束したんだ」

だからテルは考えて発言する。相手が混乱せず、なるべく理解を得られそう得られない微妙なら線引きをした会話を。

「お前はお前の信念を、俺は俺の信念を貫けて感じて遠くへ行っち

まった奴がいてさ。そいつの手前、大口叩いたせいか、無理に気張つちまつてたのが顔に出てただけだよ。実際は大したことねエ問題よ」

未来の事を話す。つまり、黒羽舞夜が近い内に命の危険ある事を教えるという事だ。チビハネとは黒羽を共に監視するという協力関係にあるわけだがチビハネは主人を護るためなら命を惜しまないだろう。そんな犠牲の上で黒羽を助ける訳にはいかない。最悪犠牲になるのは己自身だけで良いのだ。

そう思つた矢先だ。

「隠すなデスー！」

テルの胸元を掴んだチビハネがそう叫んでいた。

「お前はいつもそうやってはぐらかしてっ！へらへらしやがってっ！一人だけなんか背負い込みやがって！やっど、やっど言葉が通じていっばい話せるんだって思つてたのに……!!」

肩を小刻みに震わせているチビハネはテルの胸倉を掴み、崩れ落ちそうな姿勢であつた。顔をこそ見えない物の、その声色から泣いているのだというのが分かる。

「決めたじゃないですかあ……」

ぽつりと、チビハネ続ける。

「私達はマスターを守るために協力してるんじゃないですか……」
「お前……」

「なんとなく、多分だけど、マスターが関係してるんだってわかるです。執事研修でもなにか私の知らない事を知つてお前が悩んでるんだっていうのも」

けど、と続けて言う。

「そんな悩んでるお前を見てても、ただ辛いだけです。耐えられないです……!! お前がどこかに行きそうで、知らないお前になろうとして、怖いんです！」

——— “知らない俺”

テルは一つの考えにたどり着く。過去の、テルが本来知っている本

当の執事研修で現れた未来のテルもこうやって黒羽の危機を一人で誰にも話すこともなく解決しようとしていたのではないか。その選択故、間違った選択ではなかったにしても、まったく別人のテルへと変わってしまったのではないか。

「すまねえチビ」

「ふえ・・・」

ならば、今の自分自身も同じだ。チビハネの一言が無ければ善立テルは白銀拓斗への道を辿る所だったかもしれない。

「お前のお蔭で変に悩んだり、どうしたらいいとか何をすればいいかなんて考えたりするのは俺一人だと無理だよなって思ったわ。それに、俺達は同盟関係だったな」

「・・・」

顔を伏せてから初めてその表情を見せたチビハネの泣き顔はどこかキョトンとしている感じで、正反対にテルはどこか晴れやかな感じだ。

「その時が来たら、必ずお前に連絡する。その時は一緒にアイツを護ってくれ」

また隠すかのようになってしまったか、と顔をしかめたが、チビハネは納得したのか分からないが、涙にまみれていた顔を拭いて、

「お、お前も護ってやるデス！」

少しだけ頬を紅くさせて言った。

「私がお前の側に居てやるデス！ 例えこの身体が無くなっても！世界のどこかでお前が取り残されても、誰も信じてくれなくて一人になっても！ 私がそこにいるデス！」

縁起でもないフラグだな、と眉を潜めたテルだが今の言葉は簡単に言うとはプロポーズの何物でもないだが、そのことにチビハネは何物でもないのだが。

——だが、頼もしい。

それだけで、嬉しかったのだ。希望の光が差し込んだようだったのだ。

ラックスしたのか心地が良い状態。多分現実の顔はだらしのない寝顔だろう。このまま一生寝ていたいくらいだった。

○

———深い眠りの中で少年は一つの夢を見る。身に覚えのない、知らない誰かの記憶だろうか。

飛び込んできたのは、青い空だ。微弱な風と程よい日の光を感じるこの空を“誰か”が見上げている。もちろん、善立テルではない。自分にはこのような記憶はない筈である。道行く人々、辺りに建っている家屋は見覚えのない物ばかり。近くに東京タワーが見えるから、東京なのだろう。

その中で、この空を見回した中で、テルはある事に疑問を抱かずにはいられなかった。

何故———

何故、自分は道路で横たわりながら空を見上げているのだろうか。

何故、周りに人がぞろぞろと集まってきているのだろうか。

何故、車が原型をとどめない悲惨な姿で電信柱にぶつかっているのか。

何故、腕と足が曲がってはいけない方向に曲がって、自分は赤い液体の池に沈んでいるのか。

———分からない。

テルは何も、痛みも感じない。これは己自身に起きた現象ではないことは確かだ。だからこそ、この身に起きている状況を冷静に分析することが出来る。この身体から流れて、地面に池のように広がっているのは多分、血だろう。普通なら出血死レベルの。

腕と脚は骨折しているだろう。肉が抉られて出血と同時に痛々しく腫れ上がっている。手術が必要だ。車は恐らく、信号無視かよそ見とか、居眠りとか車がこんな状況になる理由などはいくらでもある。

これらから推測するに、ここで横たわっている人物は車に撥ねられてしまった人なのだろう。となれば、周りにいる群衆はただの野次馬だ。サイレンの音が近くなっている救急車を誰かが呼んだのだろう。だが、これほどの出血で果たして間に合うのだろうか、恐らくだが、間に合わないだろうとテルは直感的に感じた。自分の身体じゃないはずなのに、命の鼓動が小さくなっていくのを感じたからだ。

『———そんな……!!』

そんな時だ。こちらに対して悲痛な表情を浮かべながら一人の男が駆け込んできた。どこか中世的で眼鏡をかけていたその男は若干の白髪があった。

『分かるか……俺だ。お父さんだぞ』

酷く取り乱しているのか、体を震わせているこの者の父親を名乗る人物に対して、こちらは何も言わない。いや、正しくは言う事が出来ないのだ。

『もうすぐ救急車がくる……そうすれば、きっと助かるから。元気になったらまた、遊ぼう———』

涙を垂らしながら、血の池に沈んだこちらの身体を掬うように抱きしめて男は耳元で囁くように言った。

『朝霞———』

そう呟いた時、この者の、朝霞という人の視線が動いてある物を捉えた。車のサイドミラーだ。事故の衝撃で一部が壊れたのがこちらの近くに跳んできていたのだろう。その目で鏡を覗き込んでその姿を確認する。

顔立ちは幼い少女だった。年齢は5、6歳程だろうか。白い肌に、黒く艶のある長い髪。これを見てテルが一番に浮かべた人物がい

た。それは紛れもなく、

——黒羽。

今の黒羽を小さくしたら、こんな感じなのだろうと思えるくらいに彼女に似た少女が映し出されていた。だが、テルの知っているのは黒羽舞夜であり、朝霞という名前は全く知らない。ならば、これが同一であることは無いのだ。

その筈なのに、何か不思議な違和感を感じる。ただ見た目が似ているだけだというのに。

○

「……夢」

辺りを見回してテルがつぶやいた一言。それは目に映っている場所が自分の部屋だということに気付いたからだ。時計の針は夜の3時過ぎを示している。ハヤテはまだ勉強しているのだろうか。

『スヤア……』

ふと右の腕を見てもみるとこちらの腕を枕にするようにぐつすりと眠っていた。だらしくも涎を垂らしていたので普段ならたたき起こしてやりたいところだが流石に可哀想だと思ったか暫く放置することにした。

「夢だよな」

しっかりと整理整頓されている部屋を見てテルが言うのは決してチビハネとの掃除の事ではなく、その後に見た少女の夢だ。黒羽にも似た少女、知らない朝霞と言う名前。

実は舞夜は偽名で朝霞が本名だったとか、実は朝霞の生まれ変わりで性格が逆転したクローンが舞夜だとか、そんなSFチックな展開を考えてみたものの寝ぼけているせいか、そんなの絶対おかしいよと勝手に自己解決して見たりしたのだった。

「朝の仕事まで時間あるから・・・寝ようか——」

そのまま机に突っ伏しようとした時だ。テルはある物を目撃する。それは黒くページ一面が滲んでいた“やっていたはず”の宿題だ。確か問題を解くのに宿題を出された日からやっていたから当てた時間を計算すると半日くらいは掛かったはずだ。その問題を、もう一度解く。当てられる時間は出勤までの一時間半程度。

テルが導き出した行動は一つだった。

「・・・寝るか」

全てを諦めて今ある疑問と問題を放り投げたテルは机に突っ伏すように崩れ落ちたのだった。

第139話く終わりの始まりく①

——君は知るだろう……決して抗えぬ事が出来ない運命が存在していることを。命を懸ける約束など巨大な運命の中では小さく、無力なものなのだということを。

——先の未来と戻らない過去が、紡ぎ出していくこの先の物語。一人の少女の暗い闇夜を切り開き、その先の未来を掴みとる……それが彼を、犠牲へと駆り立てた。

く生徒会室、天球の間く

「……………どうしたの？ 黒羽さん」

原稿用紙にペン先を走らせていた黒羽舞夜のペンが停止したのは白皇学院の生徒会長、桂ヒナギクによって呼び止められたからだ。た。

「どうしたの、というの？ ヒナギクさん」

「いや、急にどこかのケイ素系ポエムおじさんのような語りの文章が用紙に書いてあったから……」

ヒナギクが注視したのは原稿用紙に書かれた黒羽の奇妙な語りであつた。

「たかだが生徒会の勧誘ガイドの文章なのに、そんな不吉な語りで始まったら誰かいないかそうじゃない。入会希望者が人じゃなくて金色のケイ素体だったらどうするのよ」

「そうになったらヒナギクさんに対話してもらいましょう。木刀正宗

で平和的解決を図るのもありです」

もはや最強戦力であるヒナギクが武器を持つというだけで平和的な対話とは程遠いものを感じるのと言うまでもない。

さて、簡単にこの状況を説明すると桂ヒナギクは今年の生徒会に所属希望する新一年生に配るパンフを生徒会メンバーで作成する予定ではあったのだが、三人組は補修で現在、姉である桂雪路と一緒に居残り。頼みの綱の千春も急用の為、生徒会を休むことに。

そうなればヒナギクが一人でやらなければならぬ。別に一人でやる事自体、難しいことではないが気が重いのは確かだ。そんな時に事情をどこかから聞きつけて黒羽がやって来てこう言ったのだ。

『ほほう、ヒナギクさんお困りのようですね。こんな私で良ければお手伝いをいたしましょう、さあ私を生徒会室まで連れて行くのです』

後半に何故命令されることになったのか疑問ではあったのか、そしてヒナギクが断ろうとしたのだが黒羽が食い下がって来たのでヒナギクは彼女の申し出を受け入れるしかなかったのである。

「ちなみに、この原稿用紙は私が遊んでいただけのもので。完成した物は既にこちらに」

あるんかい。と、差し出された4〜5枚の用紙を出してきたのを見ると同時に、全てがまともな内容であったので感心していた。黒羽はヒナギクと同じくらい成績が優秀だ。以前から白皇の二年の中では桂ヒナギクと黒羽舞夜ではどちらが頭が良いとか、人気があるのかと今ホットな話題となっているが、定期テストはまだ先だし、どちらが人気だとかと言うのもヒナギク本人にとってはどうでも良い話である。

「内容も新入生に向けて分かりやすく要点を纏めて書かれているから文句の言いようが無いわ、流石黒羽さんね。これならあまり訂正いらさないわ」

ガイドの一番上に書いている“超絶美少女、桂ヒナギクの名の下に集え!!”という煽り文句だけは取り敢えず訂正しておくとして、ヒナ

ギクは予想以上の仕上がりになり安堵していた。生徒会三人娘とヒナギクで取り組む仕事では基本ヒナギクが大部分の仕事を担っており、仕事の配分は8:2とあまりにも効率が悪い。だが黒羽との作業では明らかに程よく分けられて、圧倒的な時間効率で仕事を進めることが出来た。

「仲間がいるって、本当に素晴らしいことなのね……やば、わたしったら泣きそう」

これまでの負担が一気に減ったことを実感で出来たせいとか、ヒナギクは仲間という存在の大切さを改めて知った。一人でやるよりも、やはり皆で物事に取り組んだ方が良いものだ。

「喜んでいただけ、私としては満足です。この前のお礼もしたかったですから」

放たれた黒羽の言葉に違和感。

「ん？ 私が黒羽さんにお礼をされるようなこと……あったかしら」「遊園地とか」

記憶を遡ってみたものの、ここ最近の記憶で遊園地と言えば、あのハヤテとのデートで向かった遊園地だろうか。気前よくエスコートされていた立場だったがハヤテの電車を貸すことになってしまうという最悪のオチで終わったあの日だ。だがそこで黒羽や他の白皇の生徒がいた事実は無かった筈だ。

疑問に残る表情をしているとその様子を見てか、黒羽が目を細めて言った。

「……いえ、忘れてください、私の間違いでした。ヒナギクさんは廊下でバナナの皮で滑った私を王子様式お姫様抱っこで助けてくれたのでしたね」

「そんなことも無かったのだけれど」

と、先ほどの黒羽の何かを確認するかのようない問いに引っかかる物を感じながら、考え込むようにソファに座り込む。だが、そんなヒナギクが座る目の前のテーブルにティーカップに注がれたコーヒが差し出された。

「あら、このコーヒーは・・・」

「ああ、勝手に淹れさせて頂きました。屋敷での仕事のせいかな、こういうのをやりたくなくなってしまっただけ」

ああ、そう言えばこの人は一応使用人なのね、とヒナギクがそう思ったのは彼女、黒羽舞夜が一般人から見たらとても給仕をするような人間には見えなかったからだ。彼女の風格はお子様のお姫様とは大きく違い、気品に溢れて、どこか消えそうな儂さと朽ちる事のない優雅さを併せ持ったお嬢さまというポジションが似合うのである。

コーヒーを一口して、独特のkokと匂いを堪能しながら肩から力を抜いて、ヒナギクは脱力するようにソファの背もたれに身を預ける。今日まで忙しく気を張っていたのだがこのコーヒーを飲んで無理にでも力を抜かせてくれるような、魔法をかけられるような、そんな感じた。

「うわあ、油断したら一気に寝ちゃいそう・・・」

「別に寝ても良いのです。今は放課後で、ヒナギクさんは大量の生徒会の仕事を全うしていたのですから。ただその後私が写真をとって校内にばら撒くとしても許していただきたいですがね」

「絶対寝ない!! ミンミン打破!リポD!! モンスター! 数々の栄養ドリンクを飲んでその醜態だけは回避するわ!!」

生徒会長である自分が、まずそれ以前に寝顔が校内にばら撒かれるなど羞恥プレイの何物でもない。見た目によらずなかなか鬼畜な考えをしていると思ったヒナギクである。

でも、とヒナギクは心の中で呟いてその先の言葉を口にする。

「楽しそうね、黒羽さん」

「たのし、そう・・・ですか」

飲み終わったカップを片付けようとする動作がピタリと止まる。不意を突かれたような、キョトンとした顔の彼女は再びカップを手取るとなにか考え込むようにまた動きを止めた。

「ん?」

数秒ほどの間を空け、ヒナギクがそう唸った時に立ち呆けていた黒

羽がカップをテーブルに置いて自身もソファへと座り込んだのだ。いつもの無表情とは違うどこか不安を感じているような表情で彼女は一言。

「そうでしょうか」

「すごい間があったことに突っ込むべきなのだけれど……まあそうね、転校初日より絶対楽しそうにしていると思うわ」

黒羽舞夜が白皇学院にやって来た当初、ヒナギクの彼女に対する評価はあまり良いものではなかった。ナギを攫い、テルが苦戦を強いられるほどの冷酷無慈悲な戦闘マシンが記憶喪失でやって来た等と信じられなかった為テルには内緒で怪しい動きを見せようものなら自身が正宗を駆使して対処するつもりでいたほどだ。

だが、体育の授業を欠席したり、実際に目の前で倒れたりする光景を見たりしていくうちにその話を信じざるを得なかった。あとは彼女の一応主であるナギがあまり恐怖を感じず、むしろ仲良く接している事が黒羽を危険人物であるという考えを無くさせたのだ。

「私は……実感があまり持てません。今でもクラスの事はよく分からなくて……口数は増えたと思いますが、友人は……」

……それは私すら友人に入っていないという意味ですか黒羽さん。

ダウン気味に喋る黒羽に内心ちよつと傷ついたヒナギクだった。どうやら黒羽は自分自身の変化にあまり気づく事が出来ていないようである。それが実感できていないから、自信を持っていないのだろう。

席が隣だという事もあって黒羽とは授業、お昼、移動などで顔を合わせる事が生徒会三人組よりも多い。だからこそ、黒羽の魅力に気づく事が出来る。

黒い長髪に透き通るような白い肌。 絵に描いたような黒髪美人で成績も優秀、ちよつとしたミスティアスさを持つ高嶺の花のような存在。

以前自分が入学当初にであった金髪の少女、天王洲アテネ、彼女に近いものを感じた。 威厳とか、高貴さとかではなく儂さとかキャラとか、不思議系オーラいっぱい。 だがそれだけではヒナギクは惹かれない。

「泉がこの前言ってたわ。 “ 舞夜ちゃんがね、お昼のお弁当のおかず交換でウィンナーくれたの！ 前は交換してくれなかったんだよ！ ” って」

いつもはテルや生徒会の三人組に毒を吐く黒羽の心の中にはちゃんと優しさがある。 当初ではあまり見られなかった他人と多く関わりを持つとうと必死に努力しているのをヒナギクは知っているのだ。「・・・あれは私の苦手な辛い系のウィンナーだったので仕方なく泉さんに差し上げただけのことです。 ええ、そうですとも。 他意はありません」

そして、こうやってちよつと照れくさくなると意固地になって否定するのも彼女の魅力の一つだ。

「ふふ・・・」

黒羽が小さくそう呟いたのを見て、ヒナギクは目を疑った。 黒羽はそのまま続ける。

「実は今週の日曜日に泉さんたちとショッピングに行こうと誘われてまして・・・いつもメイド服か白皇の服しかみたことないから、洋服を皆で買おうと言ってまして」

いつもは無表情で戸惑いなどの表情しか見せたことが無かった黒羽が、

「私服は黒の洋服があるから別にいいって言ったのに、“ それじゃ女の子らしくないよー、もつと可愛いを着ようよ!! ” って言うんです

よ、あんまりじゃありません？」

笑っていたのだ。

「ヒナギクさん？」

「え？ あ、ああ、うん！ 聞いてる！」

思わず呆気にとられてたのは言うまでもないだろう、ヒナギクにとってもその黒羽の笑顔と言うのは初めて見る物だし、なによりも年相応にとっても可愛らしいものだったからだ。男子生徒だったら確実に今の笑顔で堕ちている、ヒナギクがもし男だったら確実にそうなっている自信がある。

・・・こんなの不意打ちだわ。

ヒナギクの中で黒羽の魅力がまた一つ追加された。

○

「不思議なことですよ、ヒナギクさん。私、笑えるんだって分かったんです」

一息つくかと思いきや、黒羽の言葉にヒナギクは彼女の顔を見る。笑顔、ではないが穏やかな表情で目線は黒羽自身の膝辺りだろうか、彼女の指は組まれていた。

「素敵なことよ。黒羽さ——」

「これは」

続きを言おうとしたヒナギクの台詞を黒羽が遮った。そして次には影を落とすように声色を低くし、

「私の為に命を懸けてくれた人が最後にくれた“願い”だから」

彼女の意味深な言葉にヒナギクは戸惑いを覚える。命を懸けてくれた人の最後の願い、それが叶ったから、黒羽が笑顔を取り戻すことが出来た。それはまだどこかにある夢のようなお話で、黒羽が変に誤魔化しているかもしれないとさえ思った。

「ヒナギクさん」

静かな口調で彼女は続ける。小さくお辞儀をしながら、

「楽しかったです。今まで、ありがとうございました」
「どうしたのよ。お別れでもするみたいじゃない」
「……そろそろ私も帰ります。屋敷からのメールで“今日は手伝いが多いから早く来てくれ”ってマリアさんが、迎えの車ももう来てららしいですから」

苦笑して彼女はソファから離れるとヒナギクに向けて小さく笑みを浮かべて言うのだ。

「また、明日」

その笑みはどこか悲しきがあり、見ているこっちが不安になるようなものだった。この時の感覚をヒナギクは一度体験している。

彼女の本当の両親が居なくなった時のと同じものだ。

「え、いや。待って黒羽さん——」

今呼び止めなければ、彼女がどこかへ知らない所へ行ってしまうのではないか、そんな気がしてヒナギクは思わず呼び止めようとした。だが、その時には既にエレベーターの扉は閉まっており、ヒナギクも追いかけてようとしたが。

「え、ウソ……なに、コレ」

視界が揺れる。疲れ目の時のように辺りを銀の光が点滅する世界に見舞われ、ヒナギクは追いかけてようとした足を止めてしまった。

だがその現象は一時的な物で数秒経つとすぐに安定した視界がヒナギクの眼に入ってきた。

「何だったのかしら、今のは……私、疲れてるのかな」

と、眉間を指で押ししたりして見て思い出したことがあった。自分は今日は新一年生のパンフレットを作成して働き詰めだったのだと。

小さくため息をついてヒナギクは資料を纏めだす。自分が書いたものと、なにやら書いた覚えのない文章があるが一心不乱に仕事を終わらせようとした自分が書いたのだろうと一人で納得する。

そしてヒナギクはパンフレットをクリップで止めるとテーブルに置かれていたカップを、飲み干されて空となった二つのカップを見て

首を傾げた。

「私、誰とコーヒー飲んでたんだっけ……？」

ヒナギクのの問いに誰も答える者はおらず、ただ天球の間の時計の針が静かに音を刻んでいた。

第140話く終わりの始まりく②

善立　テルは非常に困惑している。

突然だが、親睦を深めるには？　というテーマでここは皆さんに聞きたいと思う。　ある者は答えるのだ

――遊ぶ。

たしかに、休日や空いた時間を利用して外で遊んだり、ゲームなどすることは親睦を深めるにはもってこいである。

――食事をする。

たしかに、学校の昼休みなら弁当のおかずを交換したり、女子ならカフェに行ったり、男子なら夏は焼肉、冬はコタツの上で鍋を食べる……これは一般的では無いかもしれないが。

まあ長い前置きはこれくらいにして、今は白皇学院の昼休み、湖が見える穴場とも呼べるカフェテーブルでは2人の少女が向かい合うようにして座っている。

「とても良い……紅茶ですね、黒羽さん」

「……ええ、同じ意見ですよ、伊澄さん」

鷺ノ宮　伊澄と黒羽舞夜がお昼ご飯を一緒に食べているのである。驚くことに、サシで。

○

一般人からすれば特に何も問題はないだろう。　白皇の女子生徒がカフェのテーブルを囲って食事をするなど、この学校では日常茶飯事であり、見慣れた光景である。

だが、特別な事情をテルは知っている。　黒羽が記憶をなくす前――、つまりまだ敵対していた頃、伊澄と黒羽は死闘を繰り広げた間柄だった。　一度目は伊澄が体調不良から敗北を喫したが、テルの知らぬ間に伊澄はリベンジしたらしく、その時は伊澄が勝利したらしい。

が、その後に記憶を無くして川で流れていたのを発見したテルが屋敷まで運んでいる途中で伊澄と鉢合わせしたのだが、伊澄は黒羽に襲

いかかろうとした。

もう全力で。それこそ、アレは確実に人を殺る気マンマンであった。記憶を失い、ほぼ無抵抗な状態の彼女をそこまでする必要はないと止めたが、伊澄の方は納得していないようで、それからというもの、校内でこの二人が会う時などは監視をするようにしていた。

・・・近くのゴミ箱とか天井に隠れて監視してきた甲斐があったというもんだ。

我ながら自分を褒めたいと思っている。勿論、その後は一部生徒からの報告でヒナギクに政宗によるヒテンミツルギスタイルをお見舞いされることになっていたのだが。

兎に角、現状は何が起きても可笑しくない。下手に黒羽が口を滑らし、得意の煽りを発動するならば、包丁持った伊澄が刺し殺しに来るかもしれない。

何故かそんなイメージが浮かんだ矢先である。

「ちなみに、どうして私と昼ご飯を食べようと誘ったのですか？ 伊澄さん」

気まずい雰囲気の中、テルより先に核心を突くセリフを放ったのは黒羽だった。

○

「なにか含みを感じる言い方ですが・・・」

「例えば、この紅茶、ひそかに毒でも仕込んでいるのでは」

「そんな暗殺しませんよー」

伊澄としてはこの上なく遺憾である。そのような言われ、確かに身に覚えがあったかもしれないが、以前の自分とは違う。たしかに以前の自分は彼女に対して、敵意を、または嫉妬と殺意を抱いていた。だが、その憎しみをぶつけても自分の大切な者が傷ついてしまうということに伊澄は気づかされる。

——誰にかに教わったというそんな違和感を感じながら。

「ただ、私はこうしてあなたとお茶をしたかっただけです」

「ほう？ この殺され系ヒロインの私と？」

最後の意味を理解しかねるが、伊澄として嘘偽りなく、ただ黒羽とお昼を一緒にしたかっただけなのだ。

伊澄は思い出す。これまでの自分の彼女に対する行いを。冷静となった今、私怨にとらわれて彼女に対しては過度にアクションを起こしていたと。

いつかわからないが、伊澄はどこかで彼女に救われ、何かを頼まれた気がしたのだ。まったくもって記憶にはないのだが。頭のどこかでそんな思いを巡らせる。

思いを巡らせ、考え抜いた結果、相手を全く知らないまま一方的に敵意をぶつけるのはあまりにもフェアではない、そう思ったのだ。もちろん、そんなことを正直に話すことは絶対にしたくないので――

「テル様がしつかりと仕事しているかちゃん把握したかったのだからあれ、俺にとばかりが来てる？」

「マリアさんからも一応、学校内でのテル様の仕事っぷりを気にされていたので」

「どこまで信用がないんだ俺は!!」

くそう！ と肩を落とすテルをよそに、黒羽はふむふむ、と頷いた。そして普段通り起伏のない表情で言うのだ。

「お見せしますか？」

「見せる？」

ええ、と黒羽はそういうとまだ淹れたての紅茶を受け皿といっしょに手に取り、

「テル、そこに跪きなさい」

「フアツ!？」

「いいからいいから」

まるで豚を見つめるかのような瞳で完全にキャラを作ってる黒羽の威圧感に押されたテルが黒羽の真横、その腰辺りの付近まで身を屈

めるとテルの頭に先ほど手に取っていたカップを静かに置いた。

「黒羽さん、なにしてんの」

「テル、その姿勢から中身を零さないように立ち上がりなさい」

何がなんだかわからないといった表情のテルは零さないように立ち上がる。そして黒羽から次のオーダーがよこされた。

「次はそのままY字バランスです。さん、ハイ」

「何させる気だアア!!」

「その後は盆傘持つて毬でも転がしながら水平バランスでもやつてもらいますから」

俺は執事なのか大道芸人なのかどっちだ。と問いたくなつたテルであつた。

「な、なんて・・・」

その光景を見た伊澄、拳を震わせて言う——。もちろん、心の中のだ。

——羨ましいことをツツ。

自身の想い人であるテルをああもこう無碍にも扱うことができる、それが黒羽舞夜の特権。もし入れ替わりが出来るのなら、この女を八葉の力を持つてその席を手に入れたいほどであつた。

——毎日、あの人の隣に居れたなら・・・。

先ほどのような、他愛のないことで盛り上がったりが出来るれば、自分はどんなに幸せだろうか。黒羽から良いように扱われているテルは一見怒つて呆れているように見えるが、その反面どこか慣れて、楽しそうにしているのだろうか、そんな日々をこの人は毎日過ごせているのだろうかと考えただけで、伊澄の胸は少しだけキュツと締め付けられるような痛みがあつた。

その様子を見て、ある程度は察していたのか黒羽がテルをいつのまにか手にしていた盆傘でつつくのをやめ、

「さて、捨て犬のような瞳をして今にも泣きだしそうな伊澄さんにちよつとした提案をします」

言うのだ。

「この時間だけ、テルをお貸ししましょう。一時間くらいかもしれないませんが、だいたい350円くらいで」

「俺を新作のDVDみたいな金額で売り出すな」

「お手軽に誰でも扱えます」

「なおのこと酷い!!」

そのやり取りを余所に、伊澄の顔は戸惑いを隠せない。

「な、なぜ・・・そのような」

黒羽はこちらを一瞥して、口を開く。

「・・・気まぐれ、です。ただの」

明らかな謎の間があったことに違和感しか感じない伊澄であるが、その本心は量ることが出来なかった。

でも、と黒羽は立ち上がって呟く。

「その代わり、”約束”は忘れないでください、果たしてください」

“約束”・・・その単語を聞いて、脳裏を駆け巡る何かがあった伊澄。だが、それはすぐにでも靄がかかったようにかき消され、意識の奥底へと追いやられていった。

「信頼していますからね、伊澄さん」

小さく笑みを浮かべた黒羽はその場を後にする。数メートル離れたところで一旦立ち止まると、こちらを振り返り、

「ちなみにテル、伊澄さんに手を出したら白皇学院の校舎、時計塔の前面、男女トイレの隅隅までも赤文字でロリコン変態執事テルと書かれたビラを貼りつけてやりますから」

「俺の人權はどこ行ったよ!？」

「知らないのですか? そんなモノ、毎日パンの耳サイズに千切ってそこら辺の蟻に運ばせてあげましたよ。もうほとんどありません」と、黒羽はいつもの冷めた表情でさらりと毒を吐くと、息をついて

二人に人差し指を向けて言うのだ。

「テル、貴方は伊澄さんの指示以外では動いてはいけませんからね、絶対、絶対にだ」

何故最後は絶対を誇張するのか、良くわからないテルだったが、考えただけ無駄だろうと、頭を掻いた。

こうして、テルの絶対特権を手にした征服者・伊澄と服従者・テルがその場に残ったのである。

第141話 終りの始まり ③

三千院家の長大な廊下を渡る、一つの光があった。

「……各機械室点検、異常なし、と」

仕事着であるメイド服が懐中電灯一つを持っている。

三千院家のメイド、黒羽舞夜は仕事終わりの屋敷に異常が無いかの点検業務に勤しんでいた。

「相変わらずこの屋敷は広い、ですね」

この屋敷に来てもう一カ月以上経つというのに、いまだに屋敷の内
部構造は知り切れていない。地下浴場、廃止になった巨大サウナ
ルーム、巨大釣り堀施設、ナギ専用ゲームセンターと、本当に個人
の家なのかと疑いたくなってくる。

（地下には、たしかグラップラー達も集まる闘技場があるとか、ない
か）

噂である。だが、この屋敷での生活を体験してしまうと、その考
えに対して否定的になれないのはここでの暮らしが長くなったせい
だろうか。

機械室や火の元となる部屋などの重要な部屋の扉を開けて、異常が
無いか確認するという点検作業を一通り終えたところで黒羽は懐中
電灯を消した。黒羽の視線の先に、外へと繋がる扉が空いていた。

扉を開き、外を見る。目の前には噴水があり、側には一つだ
けの長椅子が置かれているだけであった。

三千院家の噴水、といっても、この屋敷で数十ある中の一つだ。

その中でもこの噴水は割と小さい方である。

「……休みますか」

点検は終わっている。本来であれば、仕事も終えている黒羽はす
ぐに部屋に戻って寝てもいい時間帯だ。

そうしなかったのは、ただの気分なのか、それとも――。

長椅子に腰を掛ける。腰を落ち着かせて黒羽は夜空を見た。月が見え、星が見える。ごく当たり前の風景。

夜風は一切なく、黒羽の長髪を揺らすことは無い。耳を澄ましても、虫の音すら聞こえないというこの状況は酷く妙であるが、黒羽はこの静寂に包まれた空間が嫌いではなかった。

静かな空間は、心を落ち着かせてくれる。

静かな空間は、自分に安らぎを与えてくれる。

静寂に身を任せ、溶け込んでいく。頭の中を空っぽにして、うつすらと目を開けるくらいにしなから意識を外へと放り投げるような感覚。

(・・・あ、眠る——)

その一歩手前、幽体離脱を成し遂げようとした時だ。左側に気配を感じた黒羽が目をぱちつ、と開く。

「よお」

男の声と共に、黒羽の鼻腔を刺激するものがあつた。それがコーヒーの香りだと気付くのに、時間はかからない。

「おっひさー」

善立テルがコーヒーカップ片手に手を振っていた。

○

「いや、マジで久しぶりなんだよな・・・お前もそう思わない?」

テルは噴水の前まで歩み寄ると、石段の部分を摩りだした。黒羽はその様子を見て、

「久しぶり・・・それは、だいたい去年の冬一月、”これから更新速度が遅くなるんで”、

という保険の元、ダラダラと他の作品に浮気したどこかの作者のせいで感想欄に執筆状況の心配までされたこと、再登場まで約一年以上

かかった作者に対する皮肉と捉えていいでしょうか」

「いや、ちげーよツ!? 流石に一年くらいリアルに待たせたのはあるよ? でも誰もそこまで言ってるねーよ!?

文句タラタラだけど!? ……ってガチでメタイ話するの止め

てよ オ黒羽サン!!」

「鬱系勇者シリーズにグラップラーをミックスさせるといいうやべー闇鍋作品」

「やめろオー!」

じゃなくて、とテルが気を取り直して。

「俺が言ってるのはこの場所だっつーの。」

「ここ、俺が屋敷の修繕頼まれて、初めて成功した場所なのよ」

テルが摩る石段には少しだけ粗いセメントによる修繕の跡が見られた。

「セメントが辺りに散ってて見た目が悪すぎる、肝心の修正した場所の削りが甘すぎて座ったら刺さりそうなくらい不出来……」

「やめて……それ以上言わないで」

「よくナギ様が許しましたね」

修繕の状況は、一流のプロが見たら「これ、ちゃんと補修したの?」

「というレベルなのと、苦情の電話を入れて訴えれば、絶対勝てるんじゃないか、というレベル。それを見た屋敷の主、ナギが良く許したものである、と黒羽は思った。」

テルは頭を掻いて、

「いやー、ダイナマイトを使うという俺の斬新な発想によって修繕されたこの噴水を、ナギも手放すのは惜しいとおもったんじゃねえか?」

「あなた馬鹿ですか」

「即効でぶった切られた!」

当然だ、と黒羽は心の内で思う。何故この男は、創るといいう前提を飛び越して、というか逆行させて、破壊する、という行動が先に出てきてしまうのか。

「破壊と創造は表裏一体、とでも？」

「……」

無言は肯定を意味する。ガチでその考えだったのか、と黒羽は呆れた。

「ふう……」

「ため息つくなし！ 俺だって頑張ったんだぞオ！ 超スローペースだったけど、ちゃんと設計図作って頑張ったんだぞオ！ マリアさんだって褒めてくれたんだぞ！……苦笑いだったけど」

「あの人、一応女神属性ですし」

怒るという事すらも貴重と言われるあのマリアを苦笑いさせるとか、この男の底が知れない。

「んで、お前は何してんの」

唐突に、テルに聞かれる。黒羽は暫く月を見ながら、

「……ぼーっと、してました」

彼に対しては、特に端的な理由であっても、取り繕う必要はないのである。

「へえ……そう」

コーヒーを一口、息をゆつくりと吐いた。暫くして、黒羽の方から、

「ちなみに、あのお昼休みの伊澄さんとは？ 幼女を襲うなんてこと

してませんよね」

「ぶっふおっ！」

二口目のコーヒーを口に行っている所に繰り出された黒羽の問いに、テルが盛大にコーヒーを吹きだした。

「その反応……察するに、テルは強引に年下の女の子に手を出す、変態屑野郎に……」

「してねーからッ！」

「まあ、世の中には女の子と廊下でぶつかってスカートの中に顔を突っ込むジャンプの主人公とか、

女の子とドキドキするシチュエーションになると

ヒスって強くなるラノベの主人公がいるくらいですし・・・テルもそれくらいのを満たしていかないよ」

「俺何処まで夢特性をふんだんに詰め込んだ主人公になればいいの？」

「そういうのはハヤテにやらせておけば」

「ハヤテ様はある程度条件満たしてますし、その気になれば女性キャラにもなれますし・・・パーフェクトです」

ヒナ祭りしかり、そういう状況に遭遇するたびに死んだ魚の目をしたハヤテが屋敷に帰ってくるんだが・・・隣れなりハヤテ、とテルは彼の天性の不幸を嘆く。

「まあ、あの後ただ伊澄の横で突っ立てただけだったんだが」

「・・・ふむ、それで？」

「アイツ、顔をスゲー真っ赤にさせててさ。向こうから喋ろうにも口を金魚みたいにパクパクさせて・・・それで昼休みが終わった」

ふむ、と黒羽は少し考えて、

「ちなみに、なんで伊澄さんがそうなったのか原因はわかります？」

「え、顔真っ赤だったし・・・ああ、おでこ触ったらメツチャ熱かったからな・・・風邪か!!」

「お前、死ねば？」

「ついに“お前”呼ばわりされたツツ!」

凄いなチュラルに恋する少女の額を触るとか、その反応を見て何も察することができていないあたり、この男――

「・・・まるで成長していない」

(まあ、ちよつとした仕返し、出来たので良しとしますか)

伊澄がテルに好意を抱いているのは知っている。これまでの自身が起こした件の清算も兼ねて、伊澄をテルと一緒にする機会を与えたのだが、まるで進展もなかった。

しかし、黒羽にとっては伊澄にご褒美を与えるだけでなく、今まで物理的に色々あったので、その仕返しも少しできたとも思っている。

「もう少し、テルは人の心を読む力を身につけましょう」

「それアドバイスなの？ 俺にエスパーになれと？」

「サイコパスになつてください」

「犯罪者目指すの？ ナンデ!？」

「似てませんか？ エスパーとサイコパスって」

「二文字しか合ってねーよ!!」

この男は、あまりにも鈍感すぎる。そんな事では、これから先、女性トラブルを多く引き起こす事だろう。

身近な例で例えるなら、虎鉄みたいな……あ、これホモ展開だ、やっぱなしで、と胸の内で秘めておく。

「ちなみに、知ってるか？ ゴールデンウィーク中、なんか海外旅行行くみたいだぞ」

「ほう。場所は？」

そう聞く黒羽の手にはカップが追加されていた。テルに作らせ、少し熱かったので冷ましている最中である。

「んーん、なんでも海が見える場所みたいだ」

「あまりにも情報が少なすぎませんかね」

ちやんと話を聞いていたのか、と疑いたくなるレベルの内容だ。

海が有名な海外スポットなど探せばどれだけあるだろうか。

メジャー、ローカル、隠しなどの数をファイリングしてたら多分人を殴殺できるくらいの厚さで出来るんじゃないかと思う。

「冗談冗談、たしか……巫女がどうか、巫女巫女ナースとか……」

ギャグを言うには少々古すぎるな、と黒羽は思いながら、思考する。するとテルの一言をヒントにある場所が浮かんだ。

「もしや……ミコノス島では？」

おお、とテルが思い出したかのように両の手を叩く。まさしくそれだ、と言った感じで。

「……スゲーよ、黒羽は」

「私にオルフェンズを強要するのはやめて貰えませんか」

話が逸れ始めてきているな、と思う黒羽だった。

「まあ、三千院家程の金持ちであればゴールドデンウィークという長期休暇を利用して、特級コースの

海外旅行に出かける事も造作もないでしょう」

使用人である自分らにはあまり関係のない話だ。そう思っているように見えたのだろうか、テルが笑っていた。

「何嗤ってるんですか・・・こわ」

「なんとだな、黒羽。今回の旅行、俺達も行けるんだってよ」

は？ と、黒羽が首を傾げる

「俺達」とは・・・」

決まってるじゃねえか、とテルは続け、

「俺に黒羽に、ハヤテやマリアさん、あと執事長のクラ・・・なんとかさん・・・」

「クラウドだッ」と屋敷のどこかでそんな突っ込みが聞こえた気がした。

「屋敷は残ってるSPに任せるらしいから、メイドと執事、ご主人様一同で海外旅行が楽しめるぞ。」

さしあたって、お前に問題がある。パスポート、お前持ってないだろ」

「・・・まあ、持っていませんが」

黒羽がこの場所に居るのは、真昼間に河で打ち上げられていたのをテルに拾われたからだ。

当時の黒羽は自分の事を覚えておらず、故に身分を証明するものなどはどこにもないわけで、つまり、海外旅行に行くために必要なパスポートが無いのだ。

「だから今度マリアさんがお前のパスポート作るからその手続きやるらしいぞ。良かったな」

「・・・」

「あん？　なんだよ、急に無言になりやがって」

「それは・・・」

黒羽の胸を締め付ける物がある。　ゴールデンウィークの時期をこの日から逆算するにして、3週間とないくらいか。

——多分、その頃には私はもう。

正確には、その時期を迎える前に、の方が正しいのだろうか。　自分の頭の回転の良さを呪う。　自

テルに見えないように、力なく笑った。

「旅行中は執事服もメイド服も着ないで自由にしていいってよ。せつかくだから、お前も羽くらのぼそーぜ・・・黒羽だけに」

変なギャグを使うな、と言いたかった。

「楽しみなのですね」

「そりやなあ」

と、テルは上機嫌だ。　それもその筈である。　ほぼ一般人であるテルにとって海外旅行など普通行けるものではない。

使用人であるテルたちはその屋敷で手配された交通手段で行ける事もあり、実質、旅費というものはほとんどないのだ。

なにより、この旅行ではマリアだっている。　彼の事を考えれば、この旅行はテルにとってまさにパラダイスと言ってもいいのではないか。

当然だろう、想っている相手と海外旅行というロマンス溢れる時間を過ごせるのだから。

「黒羽とも一緒に行けるからな」

その一言に、一瞬だけ固まって。

「……は？」

時間も止まったかのような感覚から脱し、黒羽から漸く発された言葉はそれだった。

テルは腕を組みながら、

「最近、お前は酷く疲れていると見える。分かるぞ……テルさんも、この仕事に早慣れて数か月……そんなベテランでも気疲れする事は多い。もちろん、お前だってそうだ」

さらにテルは続け、

「お前も漸くその領域になったってワケだ。つまり、ここで俺とお前は対等、イーブン、つまり職場で同じ悩みを持つ者同士となった訳だよ。」

これは完璧超人のハヤテには理解しえない事だ。こういう旅行は同じ境遇を持つ者たちと一緒にいく事で楽しみ倍増するってわけ」
両手を広げて、ドヤ顔で語るテルを見て、黒羽は心底呆れる。今の発言は後の説明が入れられなければ、完全にソツチ系の発言だ。
(そういう台詞を吐く相手はまず私じゃないでしょうに)

だが、一瞬残念だと思ったのは何故だろうか。と、考えていた矢先にテルが口を開く。

「それに——あるヤツと約束したんだ」

いつものような軽い口調、だけどそこにはどこか重みがあった。

「……とにかくだ。連れて行く以上、お前も全力で楽しみやがれ

！俺も手伝う！」

不器用に、気恥ずかしそうに、そういうテルを見て黒羽は思う。

未来の約束。あの遊園地で交わした、未来のテルとの約束。

男と男の約束を彼は覚えていたのだ。

律儀に守ろうとする辺りが、彼らしいというのか。それを誤魔化

そうとして、誤魔化しきれていないのも、彼らしい。

だが、そんな彼を不器用でも、完全にヒーローになれない彼を黒羽は嫌いになれなかった。

そんな彼だからこそ、信頼に足る人物なのだ、と。

「——テル」

だから、頼ってしまおう。せつかく、心を押し殺して、黙っていようと思っていたのに。

「質問があるんですが・・・」

「なんだよ。なんでも言ってみろって、テルさん、可能な限りなら神対応して見せっから」

呼吸を整えて、唾をのみ込み、胸に手を置く。そして——

「もし間もなく、私が消えちゃったりしたら・・・どうしますっ？」
力なく笑いながら、黒羽はそう言った。

第142話く終わりの始まりく④

——少年は知るだろう。告げられた真実が残酷なものであったことに。

全ては決められていたレールの如く、取り決められていたということを。

——避けられない運命、それを変える為に足掻いた男の前に立ちほだかるソレはあまりにも強大すぎたと。

く終わりの始まりく④

「……居なくなる、だど？ どういう意味だ、黒羽」

「……」

ギヤグ寄りだった雰囲気黒羽の一言で一変する。

正直、後悔している。彼に、この自身の今後の事を話すことを。

洗いざらい、この時を境に、黒羽はテルに向けて、言うのだ。

「私……記憶が戻りました」

「……」

何も答えない、いや、答えられないのだろう。

恐らく、これはテル自身も予けんしていたことだ。

過去のテル、白銀拓斗によって黒羽の記憶が徐々に蘇る魔法をかけて貰っていた。

その魔法の効果は彼がこの世界から姿を消しても継続して力を発揮しており、黒羽が夢を見る際には、蘇った記憶が、その日の夢として現れる。

かつて異形の力をその身に宿し、目的のためには手段を厭わなかった自分自身の姿。

三千院家に敵対し、これまで世話をしてくれた人々に刃を向け、テルに関しては大怪我を負わせるほどの罪を犯した。

だから、黒羽は今こそ理解できる。なぜ、伊澄が今日これまで自身にあれほどの敵意を向けていたのか。

だれだって、好きな相手が目の前で串刺しにされる、その元凶がともに暮らしているとすれば、堪ったものではない。

「私自身が生まれた意味も——。今まで、何をしてきたとか、これから何が起きるのか——」

夢の時間のような、そんな感じだった。これまでの、屋敷での生活、白皇学院での生活。

空虚だった自分が得た、日常。気兼ねなく談笑に付き合ってくれる友人たち。

その全てが、徐々に崩れていくのをここ最近、黒羽自身は感じていたのだ。

自身が持っていた力全てをこの場で出すことは、今は出来ない。だが、このまま放っておけば、また自分は目的の為に行動し始めるだろう。

これまで愛おしいと感じていた人々を、またその手に懸ける行為など、もう黒羽自身はやりたくない。

——考えた故に彼女はテルに言う。

(だからこそ、彼に委ねる——)

今の自分は、能力を仕える、果たすべき使命がある、ということしか理解できていない。

その異形の力を行使することは出来ない。今のこの状態しかないのである。

「お願いします」

生殺与奪も含めた、黒羽舞夜はその全てをテルに委ねたのだ。

「決めてください……テル。私が、私でいられる内に」

時間が経てば、世界の变革が始まる事を黒羽は理解している。だが、まだ本格的に始まってはいない。

テルの覚悟を、黒羽は受け入れるつもりだった。

「なあ——」

テルが重々しく、口を開いた。

「お前がここから勝手に居なくなってしまう、それはお前の勝手だろう……だがそうなった場合、

誰が一番慌てると思う？」

「……」

「クラウドさんだ。屋敷の使用人全体の管理を任されている人だし、あの人は新人が辞めたのは執事長である自分の責任だと負い目を感じて、まるでメインキャラの如くストーリーにやたら絡んでくるだろう。」

でも今のアイツじゃ、読者にほとんど忘れ去られている上に原作のコミックの26巻以降でやっと喋り始める程度だ。

そうなれば、読者が寄ってたかって作者を責める」

どこのスタークだ。と内心で突っ込む黒羽を余所に、テルは続ける。

「次に……お前が居なくなつて困る人間がいる……誰だと思う」
「マリ——」

「俺だ。お前が居なくなつたとなつたら、お前の世話係を任されて
いる俺は負い目を感じて、一生マリアさんとナギから家畜を見るよう
な視線を送られ続ける毎日を送る事になる。」

「そうなれば寄つてたかつて白皇でヒナギクから正宗の物理的な”
あくうせつだん”を食らう羽目になる俺がいるんだ……理不尽だと
思わないか」

「はあ……」

どこぞのライダーキャラの構文よろしく、真剣にそう言うテルに黒
羽もため息をつく。聞いた自分が馬鹿だったのではないか。

だが、

「結局のところだ、黒羽」

彼は黒羽の肩を掴んだ。

「お前が居て、やつとここは三千院家なんだって俺は思つてんだよ。」

俺だけじゃない、それこそ、マリアさん、ハヤテ、ナギも……
お前に関わつたいろんな人たちだって、もうお前が居ない三千院家ここは考え
られねえんだって思つてんだ。白皇の生徒たちだって」

「あ……」

黒羽の胸がきゅつと、締まった気がした。

「居なくなる？ ふざけんなよ。俺の決めた約束を速攻で破棄させ
ようとする気か……冗談じゃない」

テルにとっては、未来の男との約束がある。

「俺はお前を守る——最後まで、だ。それだけは絶対だ」

「——テ、ル」

声が震える。上手く、彼の名前を言うことが出来ない。

「お前も分かっている筈だ。お前は、どうしたい……」

いつかの高尾山のハイキングでも、似たような事を聞かれた気がしたのを、思い出した。

誰か、周りに合わせて、他人に答えを求めめるのではなく、自分自身で答えを出す大切さがあるのだ。

「——たい」

振り絞って、その言葉と、意思を表す。

「いたい、よ……」

皆と。ハヤテとマリアとナギと、ヒナギクや泉、美希、理沙、雪路、竜児と、そして——テルと。

「でももう少ししたら……時間が経てば、みんな私を、忘れてしまいます」

「なんでそんな事がわかる」

「私の力がもどに戻ると同時に、この世界は書き換えられます……それが、迎いの合図……」

伊澄との大規模な戦闘後、黒羽の能力、“黒曜”は甚大なダメージを負った。それこそ、長期的な復旧を余儀なくされるほどに。

これまでの黒羽の能力は失ったのではなく、ただ力を取り戻すまで眠っていただけなのだ。

記憶が戻ったと同時に、自動修復を修了し、その機能を覚醒させる。黒羽舞夜という人物がここにいたという記録全てを消去し、書き換える。

それが、黒羽の持つ“黒曜”の自己防衛プログラムの一つ。

「許せんな……誰だ——」

彼は歯を軋ませながら、黒羽に言う。

(お前をそんな顔にさせるクソ野郎はどこ誰だ)

あの黒羽が、普段は感情を表に出さない彼女が涙を流している姿に、テルは怒りを覚える。

彼女の大切な日常を脅かす存在、それは恐らく、常人ではないのであろう。

「教えろ……そいつは——迎えに来るヤツつてのは」

それでも、彼は黒羽を護る。そのための執事だ。

「私の——」

次の言葉を紡ごうとした瞬間、黒羽の背後で蠢く影がある。

テルは目を疑う。まるで漫画に出てくるような黒い霧が立ち込め始めた。

感じたのは、邪悪。まるでこの世のすべての悪をテルは背筋に凍る物と同時に感じた。

黒い霧はあろうことか、一か所に集まり始める。風もなく、不気味に宙を漂うそれはまるで意思があるかのように動き始めた。

やがて、それは人のような姿を形成していく。

「——父です」

地面に足を着けた、黒く、人の形をした異形の者を、黒羽は父と言った。

第143話く終わりの始まりく⑤

地面から見上げる空と言うのは、自分を矮小なものだと思いださせるくらいに広いと、善立テルは思った。

「く、そ……がツツ」

激痛が節々に起き、自身の歯が割れんばかりに力を込めて身を起す。

同時に目線の先に据えるは黒の異形。

黒羽を連れて帰る為に迎えに来たその異形を、黒羽本人は父と呼んでいた。

「お、お前のパパさんよお……人外だったなんて聞いてねエンだけど」鉄パイプを杖代わりに立つが、それだけで精一杯だ。

向こうの異形から仕掛けてきたことで始まったこの戦闘。

テルはこの黒の異形に挑んでは、全て打ちかえされ、地面に叩きつけられている。

その数、五回。

『……』

黒羽が父と呼ぶその黒の異形は、よく見れば見るほど不気味な存在だった。

人の形をしているが、眼や口は見当たらず、一見すれば全身黒タイツ、ストリートファイターのラスボスとして出てきそうな外見だった。

「ウォーズマン……むしろ、ヴェノムみてーな——ツ!?!」

直後、テルに向けて迫りくるものがある。黒の異形の腕だ。

骨も無い軟体動物の如く軌道を惑わせ、高速で迫るソレは、無限軌道の槍。

当たれば死は免れないと悟ったテルが身を振る。

だが、避けられないものではない、テルにとってその攻撃は見慣れ

た物だ。

それは執事服を掠め、だが異形の爪は衣服だけでなく、その下の皮膚もまとめて引き裂いていく。

「——ツツ！ んなあろツツ!!」

苦痛に顔を歪めるも、テルは前へと踏み出す。

地面を蹴り、鉄パイプを構え、異形が伸ばした腕が元の場所に戻る前に決着をつける、その覚悟でテルは駆ける。

——とつたツツ

相手の腕が戻るよりも早く、距離を縮めたテルが狙うはその異形の頭部。

袈裟懸けに鉄パイプが振り下ろされ、それがこの戦いの決定打になるであろうと、テルは踏んでいた。

そんな淡い期待など、しない方が良かったかもしれないが。

「——へ？」

テルの口がまさしへの字になる。

振り下ろされた鉄パイプ、撃鉄の軌道は確かに異形の頭部を直撃するものだった。

だが実際はどうだろう。

鉄パイプは異形の頭部に届く前にその動きを止めてしまっている。

まるでその場に力場が発生しているように、頭部と鉄パイプの間に壁を挟んだかのように、

どんなにテルが力を込めて鉄パイプを押し込もうにも、強大な力に阻まれてはその一撃は届くことは無い。

黒羽がまだ敵だったところですら明確に目視できる黒の壁や腕を作って防御していたのに、

この異形は完全にエスパ―染みた事を技を披露してくる。

明らかに、この相手は規格外すぎるとテルの口の端が小さく上がる。

「ば、バリアなんぞ使いやがって——」

直後、異形の剛腕が振るわれる。

軟体の如き動きをした腕が、今度は丸太の如く太くなり、空気の壁を突破したような音と同時に拳がテルの顔面を直撃。

その威力、はテルに覚えがある。いつだったか、車に撥ねられた時のような衝撃、あれと同じだ。

二転三転して地面を転がるも揺れる視界を頭を振って立ち上がる。だが、頭を振ったことで地面にぼたり、と色濃く垂れたのは赤い滴。鼻の骨が折れ、粘着性を持ったテルの鼻血が溢れてきたのだ。

「テル……もういいです！ 逃げて！」
今にも泣きそうな、いや、もう泣いているだろう黒羽の声が耳に届く。

「うるせーよ」

当然の如く、テルはそれを否定する。

「この筋肉マンとかマーベルさんに喧嘩売ってるふぎけたデザインのカソ親父、これから叩き潰してやるんだからよ」
だから、

「心配すんな」

——黒羽を頼むぞ。

……分かつてる。

男と男が交わした過去と未来の約束。

テルはそれを不義にするつもりはない。

全身全霊を。

それでこそ差し違える程の勢いでテルは駆ける。

』

対する異形は無言。

だが、テルの動きに合わせるように鞭のようにしなる腕と、鋭利な

爪が迫る。

弾丸の速度など比ではない、先ほどまでより速度を上げた爪の二連撃をテルは躲せない。

「だったら」

だが、躲す必要はないのだ。

鉄パイプを肩に担ぎ、前かがみに倒れ込むようにして加速。一直線に目標を目指す。

爪がテルの肩を、脇を通り過ぎていく。

しかしそれは肉を確実に削ぎ落とし、執事服と共に三千院邸の芝を赤く染め上げる。

それでもテルは止まらない。止まるつもりもない。

彼はいつもそうだった。

愚直にまっすぐで、ここぞという時ほど捨て身に掛かる。

元々頑丈なのが取り柄でもあるし、幼少で鍛え、車に撥ねられても大丈夫だったという自負心が彼にはある。

だからこそ、これまで切り抜けてきた難所の数々。

故に、テルにはこれしかないのだ。

頑丈さと、捨て身と、剣術しか。

10を捨てて、1をもぎ取る。それがテルの戦い方だった。

「らああああああああっ!!!」

痛みをこらえるのではなく、声に出すようにして振り下ろした鉄パイプが異形の頭部直前で停止する。

バリバリとスパークが発生するように、せめぎ合いが生じ、その余波はテルの全身へとダメージとなって返ってくる。

・・・もう、一押しッッ

押し通る。否、押し通す。

力任せに前へと踏み出し、打ち込まれたその一撃がこれまで異形を護っていたであろう空間に変化を来した。

何も無い空間に、小さく、亀裂の入る音をテルは確かに聞いた。

『!?!?』

異形の表情は理解できなかったテルだったが、今の鉄壁の防御に亀裂が入った事実はここで初めて、異形の焦りを誘うことに成功したことにニヤリと、笑みを浮かべる。

……このまま、もう少しでツツ

打ち破れる。この堅牢な防御を。

そう確信し、亀裂が一際大きく広がった所で――、

『さすがは善立……あの男の息子か』

それは確かに男の声で発せられた一言であり、テルの気を完全に引かせるワードであり、熱くなっている身体に冷や水を急にぶっかけられるように。血の気が引いていくように。

秒数にして、1秒と満たないくらいか、異形が初めて口にした言葉を問う間もなく。

テルはいつのまにか、その異形の右腕で胸を貫かれていた。

○

血は鉄の味がするらしい。

どっかの漫画でそんなセリフがあったな、とテルは思い出す。

……全部イチゴ味だったらよかったのに。

口に一杯広がるそれは間違えることも無く、テルの血だ。

噴水の如く口から溢れ、頬から首筋を掛けて伝い、もう充分血の味は分かったからとと身体に訴えるも、それでも内側から溢れるのが止まらぬ血の濁流にむせ返りながら後ろへと倒れ込む。

ぶちゆり、と果物に刺さっていたナイフが抜けるような音に違和感を覚えながらテルは大の字で地面に倒れた。

……あー、ねえな。

虚ろな視界が空を見上げる。

震えるような手つきでテルが身体を、刺された胸を探るように手を置くと、ちようど溝尾あたりだろうか。

ない。

拳大ほどの大きさで、穿たれたその場所にあったはずの、

服が、

皮膚の感触が

肉の厚みが、

骨の硬さが、

存在しない。

物理的な喪失感から推測するに、異形の腕はテルの胸を背中を掛けて貫通させていたのだろう。

抜かれた異形の腕には今もテルの血が滴り、その真下の地面に赤い滴が地面を点で染める。

気づけば、テルの顔の真横に黒羽の姿がある。

先ほどまでの涙は無かったが、眼を見開き、歪な顔で肩を震わせていた。

まるで、見てはいけないモノを見てしまったような。

「——ツッ!!」

……なーに言っただよう、聞こえねえよ。あと揺らすな、色々と出ちやうから、内臓とか。

口を開き、こちらに問いかけてくる黒羽の言葉をテルはその耳で解することが出来ない。

反応がないから、今もこうして彼女はテルを揺らしている。だが、それは逆効果というものだ。

黒羽の視線の先はテルの腹部にあった。テル自身には分からないが、見下ろしている黒羽には見えているのだろう。穴の内側、肉の断片が、臓物が。

それと同時に、血が止まらない。

身体には切られてはいけない血管がいくつかあるらしい。それが見事にヒットしたのだろう。

押さえようにもそれが叶わない程に空いた穴から溢れる血。芝生のお蔭で分からないが、恐らく自分を浸すくらいの量が流れたのは間違いない。

「——ツッ!!」

……そんな顔スナって、お前に何回刺されてると思っただ。これくらい……アレ？

自分の現状に絶望しかけている少女を安心させるべく身体を動かそうとしたテルだったが、動かない。

指一本動かすことも叶わない。

代わりと言わんばかりに、開けっ放しの蛇口のような勢いで血が溢れだす。

テルの心臓のリズムが弱くなるのを感じる。

瞳も虚ろに、呼吸も小さくなってきた。

……死ぬの、え？ マジ、で。

朦朧とする意識、確実に迫る死にテルはこれと言って抗う術を持っていなかった。

何の為に約束をしたのか。

俺が死んだら、誰が黒羽を護るのだ。

そんな思考ばかりが、自分を顧みない思考を巡らせるだけで、死の瞬間がその身へ確実に訪れつつある。

その最中――、

「大丈夫です……私が」

首だけ動かすようにして、僅かに虚ろな視線が黒羽を捉えた。

「なんとか、しますから……」

無理して笑っていた。

決意したような表情で、黒羽はその場を離れると、テルを貫いた異形と向き合う。

何か会話をしているようだった。

テルは耳もついいには遠くなり、小さくなった黒羽たちの言葉を聞くのは難しい。

暫くして、異形がテル達から背を向けるようにして歩き出す。

何故に、とテルが答えを察する前に。
黒羽も異形を追いかけるようにして歩き出す。

そして察する。黒羽がさつき行っていた一連のやり取りは、テルを救うための交渉だったのだと。

……バカが！

火事場の馬鹿力か、全身を滾らせるように身体に力が戻る。

口と胸から赤い血を飛散させながら、絞るような声を出して、

「勝手に……いくな」

身を起す。

「消えんな」

がくがくと震える足に喝を入れ、

「俺の前からいなく、なるんじゃ……ねえ、よ」

立ち上がる。だが、それが限界だった。

一歩も踏み出すことが出来ない。

前へ、前へといつも進んでいた足が、鉛に巻きつけられたかの如く進むのを拒む。

ただただ、黒羽とテルの距離だけが開いていく。

去りゆく黒羽に伸ばしたテルの手が虚しく空を切ったその刹那で、

「――ごめんなさい」

何か諦めたような、悟ったような表情を浮かべた黒羽の一言を最後に、テルは意識を手放した。

エピソード：遠方のあなたへメッセージを

土砂降りの雨が降る。

漆黒の暗雲から落ちる雫は地へ向かって注がれる。

天からの恵みか、神からの試練なのか。

それは地面で横たわる一人の男を無情にも打ち付けていた。

「……」

善立テルは思考する。

自分にはまだ、やらなければならぬことがあるのだと。

たとえ身体が動けないほどの重傷を負っても、

明日のわが身の安全など保障できなくても、

男と男が交わした約束だけは、守らなければならないと。

「ぐ……ふう……」

顔だけ上げようとしたテルを激痛が襲う。

身体には地面が見えるほどの大穴が空いているのだ。

出血など、とうに抑えられるものではないし、放っておけば彼はこのまま息絶える。

それは確かなことだ。

意識が次第に薄れていく。

そのなかで、テルの中で何かが崩れていく音が聞こえる。

それは彼の大切なものが消えていくように。

頭の中から欠落していく『一人の少女』に関する記憶が変化していく。

まるで本来の記憶の光景を無理やり『書き換えられ』て、それがあたたかも自分のモノのように錯覚させるものだ。

何が起きているのかテルには理解できない。

だが、一つだけ言えること。

このまま何もしないでいたら、自分は黒羽舞夜のことを間違いないで忘れてしまうだろうということだ。

(……そうか、なんとなく)

分かった気がする。

とテルは致命傷で息も絶え絶えながらも小さく嗤った。

黒羽が無理して笑っていた意味が、

黒羽が自身の父に何を願ったのか。

(なんて奴だよ……こんなバカげたことが出来ちまうヤベエ奴が、黒羽のパパだなんて……シヨツカーのボスでも出来ねえぞこんなの)

『世界そのものを組み替える』。

漫画の世界の、しかもボスキャラの如き力を持った敵がいるなど、相手にしたテルは笑いしか出てこなかった。

そしてカウントダウンが始まる。

テルが意識を手放す、本格的なカウントダウンが。

意識を手放したら最後、テルは黒羽の事をもう思い出せない気がした。

しかし、なににもできない。

抗う術をテルは持たない。

伊澄ならばどうにか出来たかもしれないが、テルがこうなっているなど知る由もないだろう。

完敗だ。

完膚なきまでに、その絶対的な力の差に。

だけど、

「やれる、事は……やってやる…!!」

諦めが悪いのが彼の取り柄だ。

本来ならば、動かすこともつらいはずの手で自身のポケットを探るように突っ込むと、

震える手で自身の携帯を取り出した。

文面など、考えている時間はなかった。

ただ自身の思いを素直に、

文字が間違っていないかも確認しないまま文字をひたすら打ち込む。

「……いけ」

テル指が、乱れることのない動きでスマホの『送信』ボタンを押したその直後。

深い深い闇へと。

テルの意識は沼のような暗い底へと落ちていくのだった。

エピローグ：く遠方のあなたへメッセージをく

善立テルは起床する。

執事としての起床時間を30分ほど過ぎたのを時計で確認して飛び起きながら。

執事服へ着替え、

顔を洗い、

歯を磨き、

いざ三千院家のキッチンへ。

「おはよ——」

「テル君、1時間も遅刻した上に堂々とキッチンで私と顔を合わせようとする度胸を私は褒めるべきなのか叱るべきなのか……」

それじゃあ、私のマスキット銃でこれからテル君の後頭部に風穴を作り出すか、

両目の内の一つをこのステンレス製の錐でくり抜かれるのどつちがいいですか?」

キッチンの扉を開けた瞬間、

まるでロアナプラの戦闘メイドの如き赤い瞳を揺らしたマリアがマスキット銃と錐を構えてるのを見て神速の土下座をするのはいっものことだ。

メイド長である彼女からの詫言を朝一のご褒美……もとい、きつけとして受け取ったテルの仕事は続いていく。

「おいしい! 私のデザートに納豆とケチャップを掛けたヤツ誰だア!」

「お嬢、どこからどう見てもそれは至高のパフェ……」

「お前かアアア!!」

いつものように、主であるナギから自分が出した至高の料理を覚えてたてのスピニングボードキックで顔面と一緒に蹴り飛ばされ。

「あつ、やべ。宿題やるの忘れた……」

「えっ、あの宿題たしか朝一で回収するって言ってましたよ」

「マジ？お嬢、ハヤテ。俺の分を時間まで仕上げてくれ」

「お前が時間まで宿題を借りて頑張るといふ意志はないんだな、わかった」

いつものように、テルとナギとハヤテの3人で歩きながらテルが宿題を忘れて。

その通学路を歩く人数が3人だということに少し違和感を抱きながら。

「よーしーだーてーくーん？宿題忘れるのこれで何回目ー？最新話投稿するのに長期間置いたのこれで何回目ー？」

「桂先生、最新話の更新が遅れたのは作者が他の作品に現を抜かしたのと、

毎日夜遅くスマホで超次元テニスと美少女勇者ティフェンスゲームやってたからです」

「善立くんはなにしてたの？」

「歴戦王ネルギガンテをソロハンマーで攻略しました」

「よーし分かったこれから体罰行使すんぞー、異論はないなー」

いつものように、教室にて宿題を忘れたテルが担任の雪路に暴力という名の『補修』を与えられて。

だけど教室には何故か一つだけの空席があることに、誰も疑問を持たなかった。

ちなみにその補修で生徒会三人娘がセットなのもいつものこと。

「てーるーくーん？」

「なんだよ会長、姉妹そろって似たような口調で……オウムかなんか？」

「正座」

「まな板——」

「斬るわよ」

いつものように、生徒会室で木刀・正宗を手にしたヒナギクが雪路に怒られたテルを注意という名の説教で脅されながら正座させられて。

「桂先生に怒られたら、ヒナギクにも怒られる——何この確定の2コンボ。」

待ちガイルもびつくりな精度のコンボなんだけど」

口ごたえをすれば灰皿ソニックならぬカップ皿ソニックが飛んでくる。

出禁確定待ったなし。

「学校生活やつぱつまんねえんだけど、ハヤテ」

「テルさん、もう少し真面目に生きてみませんか？」

いつものように、テルのくだらない愚痴を同じ使用人仲間のハヤテがカフェテリアで聞いてそれを窘めて。

いつものように。
言い方を変えれば、様式美。

変わることはない、不変不動のもの。

予め決まっているかのような、まさに日常を謳歌する者たちの世界がここにある。

テルにとっては不都合に塗れた理不尽な日々こそが日常で、それこそが平和の象徴なのだ、彼は理解しているはずなのに。

何かが抜け落ちている気がしてならない。

思えば、自分の隣。

もしくは、このカフェテーブルに腰を掛けてるは自分とハヤテだけでなく、もう一人別の者がいた気がした。

どこかで脳を弄られていない限り、この記憶は本物のはずだ。
なのにテルの中にある意志はこの光景を、
平和な不変不動の日常を否定している。

『この日常は偽りで、お前が感じている平和は嘘で塗り固められたものだ』

そんなことを思っている自分が居た。

「なあハヤテ……」

「なんです?」

「俺たちがいるこの世界って……醜くないか?」

テルが意味深に口にした一言にハヤテは間を置き、

「どうしたんです、いきなり歴史の管理者の首領みたいなこと言いだして……」

「例えば、なんだが……なんか最近、物足りなく感じないか?」

まるで普段はそこにいたはずの奴がいない、とか」

そうですねえ、とハヤテは顎に手を置いて、

「そういえば僕たちの職場の長つて最近いないなーって気がして……名前なんでしたっけ、グラディウスさん？」

「いやちげえよ。アレだ、アレ。炎を操る魔術師の——」

イノケンティウスでもない、クラウスだ！しかもそれ人の名前じゃないし！

という突っ込みがどこからか聞こえた気がした。

「あ、でも僕……今日の朝、間違つて屋敷の空き部屋の方に入つて行つちやつたんですよ」

「……」

「オカシイですよね、何でか分からないんですけど誰もいないって分かつてるはずの部屋なのに、

人がいると思つて入つちやつたんですよ……」起きてますかー

“ っつて謎の挨拶までしちやつて”

「恥ずいなソレ……っつていうかもうホラーだろソレ。

お前の人生の積もりに積もった因果がホラーを呼び寄せたんだ。ちよつと魔界騎士呼んで来い」

どうにもふに落ちない違和感を感じ名ながらテルは三千院邸に帰宅した。

しかし、違和感を感じていたのはどうやらテルだけではなかったらしい。

「あら？私つたら、また……」

「どうしたんですマリアさん」

屋敷のキッチンにて首を傾げているマリアが居た。

テルが見ると、テーブルの上にカップに盛られたアイスがある。その数は4つ。

ナギはもう部屋で眠っているため、使用人はテルとマリアとハヤテの3人の筈だ。

明らかに一つ多い。

「最近変なんですよね、この前も知らない間に皆さんに出すコーヒーとかお茶を4つ用意してましたし……」

「疲れてるんですよマリアさん。」

俺がその余分に出した分、食べておくんで。もしまたやつちやつたら俺にください」

さらつと行われた今のやり取りにも、テルは違和感を覚えた。

どこかで同じやり取りをしたような、既視感……デジャヴというやつだ。

「そういえばナギが……」

マリアが呟いた。

「ナギが言ってたんですが……自分の部屋に知らないヴァンガードのデスクとニコ生視聴用に用意した椅子が何故か二つあるって……」

「デュエリストはよく一人で二つのデスクを操り一人でデュエルをするみたいですけど、椅子はよくわかりませんね、俺が片付けますか？」

「私もそうしますか？」って聞いたんですけど、そしたらナギが怒るんです……」
「ダメだっ！」って」

自分の思い通りにならないことにナギが怒るのはいつもの事だが、こうして真っ向からマリアに強く言ったりすることなど滅多にない。

「変ですねえ、奇々怪々です……メイド服も私のとは別のサイズのものも置いてあったりしますし……」

来週からミコノスに旅行だというのに、不吉です」

「……」

お祓いでもしましょうか、とマリアが嘆息を漏らす一方で、テルは皆が感じる違和感に疑問を抱きながら、余っていたアイスを食するのだった。

「えつと……バッグとパスポートはつと……」

テルの自室。

絨毯でしかれた8畳程度の部屋の床には物が散乱している。

キャリーバッグやらトートバッグ、しまいには麦わら帽子とアロハシャツなどの色柄のシャツが散乱している惨状。

テルは現在、来週から始まるゴールデンウィークの旅行へ行くための準備をしていた。

必要なものは持つてはいくがなるべくリュックの容量を圧迫しないコンパクトなモノが欲しい、と無い物ねだりをする。

「ふあ……こんなもんでいいだろう」

パスポートや何故か飛行機に乗るのに交通安全のお守り、

自分の武器である伸縮自在の鉄パイプなど一通り用意したテルは大きく伸びをした。

もう時計の針は十二時を超えている。

明日の学業と仕事に差し支えるのはよくない、と目を擦った時だ。

「……ん？」

不意に自身の机に視線が入り、その机の上に無造作に置かれていた『黒い石』があることに気付く。

咄嗟にその石を手にとって、

「どこかで拾ってきちやっただのかねえ……覚えはまったくないんだけど」

手にある黒い石は磨かれたかのように表面が黒光りしていた。

とても河川敷にあるようなフツの石ころとは思えないような異質さがある。

その良く分からない石を、

テルの主観からしたらただの石ころにしか見えないそれを、

「ま、いつか……寝よ寝よ」

捨てることもなければ、机に戻すことなく、
何故かバックの中にいれたのだった。

世界は回る。

回り続けていく。

誰かが定めたわけでもなく、当然の自然の摂理の如く地球というものは流転していく。

少年少女たちはそれぞれ残された違和感を持ちながらも特に深く考えることなく、

ただひたすら時は無情にも過ぎていくのであった。

そして1週間後――、

「お嬢様……お嬢様ああ!!」

何故かパスポートを紛失してしまった哀れな執事長クラウスが本当は自分が乗るはずだった飛行機を見て涙ながらハンカチを振る。

「ガングニールさん、お気の毒に……」

その光景を死んだ魚の瞳で座席の窓から眺めるテルは、

そんな職場の長を気の毒にも思いながら、機内にてアイマスクを着して早々に眠りにつくのだった。

こうして飛行機は飛び立っていくのである。

兼ねてから計画されていたゴールデンウィークの旅行先、ミコノス島へと。

——ミコノス島

真夏と言っても差支えがない照り付けるような暑さ、紺碧の空と海に挟まれた白一色の家並み。

白の家並みが作り出した路地の迷路は今日も子供たちが元気に駆け回る。

その光景は微笑ましい。

町の丘の上にはこの街では名物となっている『カト・ミリの風車』が風によって動き始めている。

そんな神秘さに包まれた異国の街で。

一人の少女が防波堤から佇み、生気に満ちた光を放つエーゲ海を眺めていた。

「……上手くいきましたか」

初めてこの場所に来たものが見れば、泣きはしないがその美しさに驚愕はする筈のエーゲ海を見つめる少女は静かにため息を漏らす。

黒羽舞夜がいつもとは違う、白地のワンピースを身に纏ってさざめく風にその長い黒髪を揺らしていた。

黒羽の父、彼に願ったこと。

それは、黒羽舞夜という少女の存在の消失。

日本にいた時の黒羽がいた痕跡を全て消すという、一種の情報操作だ。

今は世界の誰も黒羽舞夜という少女を認識出来ずにいる。

魔法のような、不思議な力で覆い隠されているようだった。

そんな人間離れた力を発揮する父は果たして人間なのだろうか。

「そんな事よりも……」

テルが無事に生きている。

それだけが、黒羽に安堵の笑みを浮かばせていた。

これ以上、自分のために彼が傷つくのは我慢できなかった。

彼には普通に、命を散らすような危険な生活を送るのではなく、ありきたりな、普通の人生を歩んでほしい。

それだけを祈った。

(出来ることなら、これを機にマリアさんとイチャついてデキちゃっ

てハッピーエンドになることを望む訳なんですが)

堅物で女心が分からないテルの事だ。

マリアにゾッコンなテルでも、理想通りのカップルになるにはかなり時間がかかるだろう。

(私も恋のキューピットとして応援したい訳ですが……もう、時間もありませんし)

自身の身体が淡く、白く光っていくのが見える。

時間が経てば、この黒羽の記憶と人格は封印されてしまうだろう。

それは、かつてテルたちと戦っていた時のように冷徹で、残忍な戦闘マシンの姿へ戻ることを意味していた。

黒羽の父が言うには、彼の『計画』を完成させるにはこの黒羽舞夜としての『記憶と人格』はとにかく邪魔らしい。

黒羽の身に起きているこの現象は、彼女の人格と別の人格を入れ替えている最中なのだとか。

そうなれば、例えこの先、テルと道端で出会うことがあっても、

テルは黒羽を思いも出せないし、黒羽も他人だと思って通り過ぎていく。

一瞬で赤の他人となることを余儀なくされる。

これまでの生活で培ってきた人間関係と努力が全てが水泡と化するのだ。

だが黒羽はそれでもいいと思った。

なにせ、最後に自分が大切だと思っ者を守ることが出来たのだから。

誰もが自分の事を忘れてしまっても、

自分がこれまで出会った人々にもう二度と出会うことが出来なくなつたとしても、

テルが生きていてくれている、それだけで黒羽は嬉しかったのだ。

だから後悔なんてない、そのはずなのに。

暑い日差しの下にいるにも関わらず体が震えているのは恐怖しているからか。

「覚悟を決めた行動だったのに、こうして心は助けを求めている……なんて、私はどこまでもわがままなのでしょうか」

自身の弱弱い心を吹っ切るように頭を振って、

自分がこれから消えていくその事実を無理にでも受け入れようとしたその矢先。

「……あつ」

手に持っていた携帯が震えた。

携帯の画面を見た黒羽の瞳が思わず見開かれる。

『新着メッセージ1件』

そのメッセージを開封して、

それを送ってきた人物の名前を見て、

最後まで確認を怠ったのか時間がなかったのか一文字だけ間違つたが件名を見て、黒羽は思わず震える声で呟いた。

「こんな時に字を間違えるなんて、あなたらしい……でも、本当に……信じていいんですね……?」

慣れ親しんだ少年の名と、
件名と、

数文字ほどの文面は、黒羽の諦めかけさせていた心をもう一度再起させる力があつた。

涙ながらに笑みを浮かべた少女は、膝を折り曲げて腕で抱え込むように蹲る。

「あなたは本当に……馬鹿な人、ですよ。だから、再度まで——
」

待つてますから、と。

黒羽は自身の意識が少しずつ薄れていくのを感じながらも、

完全に意識を手放す瞬間まで、胸に抱いた携帯を手放さないでいたのだった。

件名：まつてろ

本文：かならずそこにたどりつく

最終章〈call my name〉

第144話〈ミコノスにて、メイドさんは夢を見る〉

空があつた。

夜の空で、星が瞬く、漆黒の中に美しさを孕んだ空だ。

散りばめられた宝石の如く輝く星、海面に映る月。

夜風で揺れる波、さざめく音は耳に届けば聞いていて心地が良いものだ。

「これが夜のエーゲ海……素敵ですねえ」

窓辺に佇んだ少女、マリアが撫でる潮風に揺れる髪を抑えながら夜景を見てふと呟く。

仕事着であるメイド服から離れた白のワンピース姿の彼女は今は仕事を忘れバカンスの真つ最中だ。

「ええ、ミコノスについたら俺も一度は拝んでみたかったですよ。エーゲ海の夜景ってのをね」

そのすぐ傍でアンティーク椅子に腰かけた善立テルの姿がある。

三千院家の執事として、ゴールデンウィークを満喫するに至った彼もまたマリアたちと同じくバカンスを過ごしている身だ。

片手に持っていた酒……ではなく、オレンジジュースを人喰りして椅子から立ち上がったテルは窓辺に移動し、マリアと並んでエーゲ海を眺める。

男女がいて、二人きりのコテージ。

そして彩るような夜景、つまるところいい感じの雰囲気。

「ふふ、ゴールデンウィークの旅行の最終日にとってもいいものが見れ

た気がしますよ。ありがとうね、テル君」
「喜んでもらえたなら……良かった」

やんわりとした、夜なのに太陽を感じさせる笑みを浮かべてマリアは言う。

事実、この場所で『二人で会おう』と約束をして集ったマリアはテルがこういって事を提案してきたことに少なからずとも動揺はしている。

一年中死んだ魚のような目をしていて、仕事のうだつの上がらなさや料理が壊滅的に下手な部分もち、自身よりも他者を気にかけてすぎってしまうあまりに、他者からの好意に全く気付きもしない彼が一体どういう風の吹き回しなのか。

心臓はトクン、トクンと静かにだが一オクターブほど高い音を刻み、傍らに立つテルの顔を見ようとし、ふと視線が合ったために気恥ずかしさからマリアは目を伏せる。

身長がテルの方が高いために見上げ、一瞬だけ見ることが出来たテルの目は真つすぐに静かに揺れる海を眺めていた。

どこか遠くを見るようにしていて、ワザとこちらを見ないようしていることにマリアは気付きつつも、いつものようにテルの事を茶化せないでいた。

『夜で二人きり』という空間がそういつた余計な事を挟むことは無粋だと言わんばかりに二人の間にはただ時間が流れ、波の音だけが聞こえている。

無言ではあるものの、マリアはその空間に居心地の良さを感じる。一種の照れがあり、緊張していないと言えば嘘になるがマリアは、自身が惹かれた少年の隣で同じ瞬間を過ごすことが堪らなく幸せだった。

「マリアさん……」

このまま世界の時間がとまってくれればいいのに、と内心で思うマリア。

だからだろうか、テルが唐突に口を開いた事にマリアは不安を抱く。

彼の事だから『そろそろ時間が……』、『俺腹減ったんで会場戻ってタンドリーチキン食ってきますね』とか彼自身が作り出したナイス素敵な空間をブレイクする事など朝飯前。

このまま幸せなひと時が終わってしまう事を予感したマリアだったが、テルが身体をスツと寄せてきたことに思考を一時中断した、否、中段せざるを得なかった。

「え……テル君？」

互いの両肩が触れる程に密着し、マリアの反対側の肩に回されたテルの手はそのまま身体ごと抱き寄せていた。

男の胸板に触れた感触は少しだけごっごっして、普段から鍛えているのだろうか全体的に筋肉質なのだという事を初めて知った。

「俺……この旅行でずつと言おうとしていた事があつて」

「え？て、テル君、ちよ、と……え？え？え？え？え？え？」

向かい合うように抱きしめられたマリアとテルの距離が必然と近くなる。

力強くも、相手を労るような優しい抱擁ではあるが、たいしてマリアは脳内と実際に口にする言葉からに途轍もなくテンパっていた。

普段マリアが知っているテルからは想像もつかないような凜とした顔。

彼が真に成すべきことを決めた時、覚悟を決めた時にそういった顔をするにはあるが、それが自身に向けられた事など今までなかった。

「俺……マリアさんの事が」

「ふぁ……」

今までなかったからこそ、普段の彼を知るギャップがあるからこそ、マリアはテルのことを本能的に『かっこいい』と思ってしまう。目をぱちぱちと数度見開くマリアの胸は跳ねるように躍動し、顔は熱を持ったかのようにぼーっとする。

『今日は絶対に帰さない』、みたいなセリフを吐くガラではないにしろ、そんなクールさを帯びたテルに見つめられたマリアは自分がもう逃げられないという事を悟る。

徐々に近づいていく二人の顔。吐息が顔に架かる距離。

少年が自身を求める行為を必死に受け入れようとして幸福感を得ながら、マリアは瞳を閉じて、待つ。

そして互いの艶めしい唇が触れようとして――

「……………」

室内に眠りこけていたマリアは外から響く音と振動で目を覚ました。

窓際から見えるのは空港の滑走路。

徐々に近づいていく空港の景色が、マリアたちを乗せた自家用ジェット機がミコノス島に到着したことを知らせている。

「あ、マリアさんおはようございます。ミコノス島につきましたよ！」

アロハシャツを着ている綾崎ハヤテがそう告げる。

初めての海外旅行ということもあつてか、かなりウキウキ気分であつた。

隣ではアイマスクを被った三千院ナギが未だに座席シートの上で眠っていた。

室内を見回したマリアは携帯の画面を見て、時間を確認する。

少しだけ汗ばんだ額を拭って傍に置いていた飲みかけのオレンジジュースを飲み干す。

おしとやかなメイドたれと心に刻んでいた彼女からは想像もつかない所作のあとで、一息ついて心の中で呟く。

(夢オチって最悪の文化だと思いませんか?)

「あれ？マリアさん、どうしたんです？ 顔が赤いですよ……もしかして熱、とか？」

「ち、違います！断じて！夢に現を抜かしてたとか！なんて素敵とかロマンティックを感じていたわけでもなく——こ、コホン。

わ、私は大丈夫ですのでハヤテ君はナギを抱えて先に降りて行ってください。私はテル君を起こしてから行きます」

「え？え、はい、分かりました……それじゃあテルさんの事、よろしく
お願いします」

「ええ、おまかせを」

（よし、なんとか体裁は保った……！）

一体なんの体裁なのかは分からないが、マリアにとっては大事なモノなのだろう。

ハヤテがナギを抱きかかえて機内から降りていくのを見て、マリアは立ち上がると前の方の席で未だに目を覚まさず大きなイビキを掻いて眠っている少年の元へ。

「ぐお……おおお……」

「……」

先まで夢に出ていた少年、善立テルがシートにふんぞり返ったままだ。ナギと色違いのアイマスクをし、今回の旅行の為に仕入れたのだという耳栓をしている。

完全に眠ることに特化した形態と言ったところだろうか。実際に三千院家の自家用機がミコノスに降りるまでの衝撃や轟音を気にすることなく爆睡しているところを見るとかなり充実した睡眠をとることが出来ているようである。

（な、なぜ私はこの人を……）

好きになってしまったのだろう、と。

マリアは注意していなければ思わず口にしていただであろう想いを必死に胸の内に留めた。

意識し始めたのは……多分ホワイトデー辺りからだろうか。

使用人同士で彼から初めて日頃のお礼としてチョコを贈られて嬉

しくなり、来年は必ず返そうという約束をした。

『割とマジで期待してます』と言った少年の笑顔をマリアはよく覚えてる。

日々の仕事の中では大きな成果を上げられないテル。主人からの怒りを大きく買い、執事としては相応しくないとと言われる。

だが、そう罵られる裏でテルが必死に努力しようとしていたことも知っている。マリアの家庭菜園の手入れを手伝ったり、夜は密かにキッチンで料理の研究を行っていた。その度に劇物級の新作メニューが生まれ不評を買っていたが。

そして彼は仕事という括りを抜きにしてみるととてもコミュニケーション能力が高い。

男子生徒、女子生徒からの人としての評価はそれなりにあり、身体を張ったクラスの盛り上げ役ということもあってか男女問わずそれなりの評価があった。

ハヤテやナギの話聞くには、

『馬鹿だなあお前は』と言われても『嫌な奴』と言われたことがなく。

『うるさい奴だよなあ』と言われても『まあ楽しいからいつか』と皆が納得してしまう人と言う。

白皇学院でテルはそういう位置づけにいるらしい。

つい最近ヒナギクの事を『まな板だよ、すっごいまな板だよコレ！』と家庭科の調理実習でネタをやっていたら当人から激しい怒りを買い、チヨークスリーパーのダイレクトアタックを受けていた光景が話題を呼び、白皇学院内で生徒会長・桂ヒナギクのプロレス講座という記事まで発展して全校生徒を笑わせたほどだ。

他にも爆笑を誘って話題になった出来事があったらしい。

校舎内で缶蹴り大会とか。
女子生徒をゴミ箱に入って追跡していたりとか。
高尾山ではクマと戦って生還したとか。

話題に尽きない男だと、マリアは思う。

同時に、自分が白皇学院で学校生活を送っていた当時にテルのような少年がいてくれたら、と思う。

だって絶対に楽しいから。

白皇で勉強漬けになって生徒会長をするよりも、彼のようなハチャメチャで賑やかな存在がすぐ傍に居てくれたら退屈しないだろうから。

そして何より使用人同士ではなく、もっと近い『学生』として立場でテルと接することが出来るから。

「ふふ……楽しそうですね。想像したら尚のこと……」

生徒会長のマリアがだらしないテルを戒める。テルがそれに反抗して見せる。

授業で分からないところがあつたら放課後の時間を使ってでも面倒を見てあげる。

やる気も無さげに取り組むけど勉強の甲斐あつてなんとか点が取れるようになって。

なんやかんやで下校するタイミングが一緒になって、次第にそれが当たり前になっていく。

周りが『バカップルだ』の囃し立てたせいで少しだけ疎遠になって、でもすぐに元の関係になるけど互いに『特別』な想いを抱き始めて。

そんなあつたかもしれない学生生活を想像して瞬時にマリアは顔を赤らめた。

三千院家のメイド長として浮ついた気持ちが多くなってきた気がする。

こんな事ではだめだ。いかに仕事とは一切離れた旅行だとしても従者なのだということを自覚しなければ。

「ほーらテル君、ミコノス島につきましたよー」

「んう、うう……お」

若干ズレていたアイマスクを取るとテルの眠りに耽る顔が現れる。口を開き、目元がヒクヒクと引きつっている。これだけ目の前でマリアが声を掛けているのに目覚めないといのは凄まじい睡眠力であつた。

この男ならばハイジャックされたり、爆発事故が起きても気づかないまま眠ることが出来るのでは？とマリアは感心し、呆れてしまう。

「早く起きませんか、ハヤテ君たちも待ってますし——へ？」

次の瞬間、頬を抓ろうとして伸びた腕がテルの手に掴まれた。

そのままぐいっと引き寄せられたマリアは上体だけが前のめりになり、テルとの顔がすぐ真横までに近づく。

「ちよ、ちよつとテル君!?!」

(なにになになにこれ!?!え?テル君まさか起きてるの!?)

テルの寝息が間近で聞こえる、それほどに接近した距離。

さきほどまで打って変わった『すー、すー……』という寝息がマリアの耳に響くとなんとも言えない感覚がある。

「ぐう……んお……」

当の本人テルは寝ている。寝相が悪いというのは初めて知ったマリアである。

どこのT o L o v eるな展開だと内心で突っ込んだマリアだが、自然と顔を真横に向けたテルに焦りを覚えた。

(ちかいちかいちかいちか——っ!!)

顔同士が向き合い、無防備な少年の顔が露になる。

これでもまだ起きないのであれば、マリアは『このまま何かしても気づかずにやり過ごせるのではと』思ってしまう。

(こ、これは……チャンスなのでは?)

マリアが望むのは先ほどの夢の続き。

今なら誰もいない故に、その続きを自身で描くことが出来るのはマリアの一存だ。

しかし、自身の理性が寸でのところで冷静さを取り戻そうとする。

(い、いいえ! 最初がこんな形だなんてダメですよ! ちゃんとロマンチックなところで……あ、でも相手が寝ているのであればノーカン、ノーカンだって誰か言っていました……)

天使の顔をした悪魔と悪魔がマリアに行動せよと囁いている。

素直になれよ、と言う二人の内なるマリアはいずれも『ここで止める』という説得をしようとは考えても居なかったらしい。

マリアは周囲を見渡して、再度誰も来ないであろうことを確認した。

「て、テル君が悪いんですよ……」

どこかのピンク髪の魔法少女が眩きそうに眩かなさそうなセリフ

を口にする。

少年が悪いのだ。出番が少ないからフラグもべきべきにへし折ろうとしてくるくせにこうした時だけ強引にフラグを建築しようとしてくる。

そんな少年にドキツと心惹かれてしまうのは事実。だが、メイド長としてのプライドが簡単に屈する事を拒んでいた。仕事関係などを含めた立場では自身が上なのだという事を少年に教えてあげる必要がある。

これはおしおきだ。メイドによる教育的指導なのだ。

という、聡明なマリアの割には強引な建前を用意して彼女は行動する。

心臓をバクバクと鳴らしながらも頬を染めては、無防備な少年の顔に自らの顔を近づけようとして――

「マリアさーん、テルさーんお嬢様が早く来て欲しいって言ってますよ……ってマリアさん？」

先に降りたハヤテが二人を心配し、機内に戻ってきた矢先に彼が見た光景とは。

「いゝでででででっ!!まゝまゝマリアさんいゝだいいゝだ
いゝいゝいゝ!!」

口ツ、口割れるツ!!四つに割れちゃうツ!!」

「てーるーくーんー!はーやーく起きないと寄生獣みたく顔がパカってなっちやいますよー?」

「お、起きてる！起きてるから！だからプライヤー握る力を緩めて！このままじゃノリマキせんべえみたいな顔になっちゃうからストツプストツプツツ!!」

テルの口に二つのプライヤー工具を突っ込んで両の口端を掴まんだまま左右対称に引っ張るマリアとそれを受けて悶絶するテルの姿であった。

笑顔でテルの口を拡張させようと努めるマリアはまるで中世の拷問官を思わせる。

ええ……と口からそんな言葉を漏らしたハヤテはテルがまた、何かしらやらかしたのだらうと推測した。

「じゃあさっきまでの事、テル君は覚えています?」

「え、さっきまでの事って……一体……」

「はい、もうワンセット」

「理不尽ッ！　っーかセット制なのコレ……いだだだだだあッ!!!」

テルの絶叫がミコノスの空に木霊した。

マリアの行動をハヤテの寸での声掛けによって遮られたことがこの光景を生み出してしまったことなどテルとハヤテが気づかないまま。

物語は始まる。

世界は流転する。

流転する世界と同様に運命もまた流転する。

少年の『想い』によって、少女の『選択』によって。

ここは少年少女たちの織りなした物語の終着地点。

または未来を手に掴むための出発地点とも言えよう。

苦難の道を歩む少年を、少女は待ち続ける。

魔法の言葉は 名call 前 をmy 呼name で。

辛い時、迷った時、助けて欲しい時に眩き、叫べば——あな
たを救う風がきつと起きる。

これから始まるのはそんな物語だ。